

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 6711





申 德 興 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號

瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號

瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號

瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號

瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號

瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號

瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號

瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號

瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號 瑞 昌 號

瑞 昌 號

明治三十九年五月二十日印刷

明治三十九年五月二十五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

市島謙吉

編輯兼
發行者

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者
本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所
東京活版株式會社

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

此等文字，皆係古人遺蹟，不可不察。

追加

六百四十三頁下段ノ闕文後黒川氏本ニヨリ其本文ヲ發見スト雖是ヲ補フ能ハズ因リテ茲ニ之ヲ掲ケ

出雲國福田庄石見國久永庄三河國小野田庄播磨國網干庄美作國南庄一通依後覽注ニ左御自筆草字ニ也

出雲國福田庄石見國久永庄事任ニ申狀ニ所令成ニ御氣色ニ候也參川國小野田庄事先日相具神社仙口訴訟成敗内令成ニ下文ニ候不能ニ重沙汰ニ候歟播磨國網干渡并美作國南庄境事非ニ武(士之)所行ニ候仍不能ニ私之成敗ニ候也就中至子ニ網干渡ニ者爲ニ高雄領ニ上人文覺令至ニ沙汰ニ候歟此事已社寺之訴之左右只任ニ道理ニ可有御成敗ニ候也而若不_レ用_ニ宣下_ニ候事など候者隨_レ被_ニ仰下_ニ候可_レ加_ニ下知_ニ候也恐々謹言

文治二年

賴朝御判

十月一日

黑川眞道校
矢野南溟

享保八年癸卯初冬上旬

新松守桂翁
源忠義識

道ヲカ、ゲ出シ玉フモノナルベシ三社ノ神德疎ニ思
フベカラズ又垂加翁ノ後翁ノ志ヲ續キ翁ノ神儒ノ道
ヲ普ク説廣メ玉フハ予ガ師跡部光海君ニテ候也神道
ハ正親町從一位公通公ヨリ奧祕マデ悉ク授カリ玉フ
サレバ光海君ノ門人多ガ中ニ常陸國鹿嶋大宮司中臣
連定則定則ノ先祖ヲ尋メルニ武靈隨命神護景雲元年六月廿一日
常陸國鹿嶋ヲ出玉ヒ住所ヲ求ムトテ伊賀國名張郡ニ至リ
二月七日大和國安倍山ニ入同二年正月九日ニ三笠山ニ至リ玉リ其
時中臣連時風秀行ト云人武靈隨命ノ御供シテ時風ハ鹿ニノリテ秀行
ハ鶴ニ乘リテ飛來リ時風ハ三笠山ニ止マリ秀行ハ鹿島ヘカヘリシニ
其時武靈隨命秀行ニ燒粟一ツ賜リテ此粟ヲ古ルサトヘ持カヘリテ植
ニ彼燒粟神ノ教ノ如ク生出テ、茂リマサリケリ其處ヲ粟林ト云テイ
マニ鹿島神宮近キアタリニアリ夫ヨリ秀行ヲ燒粟ノ連ト云ケルトナ
ン定則ハ其秀行ノ的孫也又大宮司代々ノ慕ノ紋ニ鶴ノ丸ヲ付ルコト
ハ先祖秀行鶴ニノリテ供奉シ奉リシヨリ起レリトゾ古ノコト
ハ予レ鹿島ニ詣テ侍シ時太宮司定則ノ物語リニテ聞侍ル

垂加翁ノ道德ヲ尊ミ光海君ノ師恩ヲ報ヒンガ爲ニ宅
地ノ側ニ清淨之場ヲ撰ミ新ニ一社ヲ經營シテ去々年
辛五月垂加ノ靈社ト光海靈社ヲ勸請シテ相殿ニ鎮座
ナサシメ末代ニ至ルマデ月次ノ祭禮モ退轉ナキガ爲
社家二人小笛ヲ傳神ヲ定テ付置ヌ定則ノ誠有志又類ヒナキ
コトニコソ侍レ予モ今歲卯月ノ末兩靈社神拜ノ爲鹿
嶋ヘ詣テ侍リキ先ツ予ガ知ル處ノ古ヘヨリ神道段々
傳リ候大筋又今世ニ人モ知ル流義ノアラマシ右ノ通
リナリ

ナド云テ或ハ増補シ或ハ省畧シテ神代卷ヲ改正シテ
 神武卷トモニ三元卷ト號シテ板行セリ又宿禰流ト云
 神道アリ傳聞武内宿禰ハ景行天皇ヨリ仁德天皇マ
 テ六代ノ帝ニ仕ヘテ政務ヲ掌リ忠義ヲ盡シ壽算三百
 六十歳ニテ薨玉フ此長壽ニ基イテ此流ヲ學ヘハ其身
 ハ勿論子孫ニ至マテ不老不死也ト教故ニ此流ヲ學人
 又多シ又垂加翁ノ門人鴨縣主梨木左京三位祐之モ翁
 沒シ玉ヒテ後心邪ニ成テ新ニ神道ヲ取立大ニ師傳ヲ
 ソムキ各別ニ神代卷ヲ講談シテ門人多クアリシ也第
 一國常立尊ヨリ人體ノ神トシテ説初タリ委クハアラ
 ハシ難シ右ノ外ニモ種々ノ流義ヲ拵ヘ世ヲ誑カスノ
 族多ト云ヘドモ算ル暇アラズ抑我が垂加翁ノ神道ト
 申スハ翁元大儒ヲ以テ世ニ名ヲ鳴リ朱文公以來ノ經
 學ノ道統ヲ和國ニ於テ續給フコト會津正之公賓師ト
 シテ學ビ玉フ爰ニ於テ惟足翁ニ面會シテト部家ノ傳專
 ラ是ヲ授リ扱伊勢ニ於テ内宮ノ大宮司精長外宮ノ神
 主延佳ニ依テ伊勢神道ノ極秘ヲ傳ヘ夫ヨリ京都ニ於
 テ一條殿冬經公正親町殿實豐卿同公通卿土御門殿泰
 廣朝臣ヲ神道ノ門弟トシテ堂上方祕シ置給フ國記ヲ
 求メ又鴨縣主梨木三位祐之下御靈ノ神主出雲路民部

春原信直稻荷ノ神主太山兵衛等ヲモ門弟トシ其外洛
 中洛外ノ神職ニ便リテ一社々々ノ舊記ヲ搜シ就中舍
 人親王ノ御德ヲ慕ヒ藤森大明神ヲ尊崇シ玉ヒ神庫ニ
 傳ハル處ノ社記ヲ拜見アリテ弓兵政所記ヲ著述シ給
 ヒ伊勢ト部家ノ傳授ノ内附會龍説ノ疑キヲ除キ古傳
 ノ正シキ說ヲ撰ミ兩部習合ノ穢ヲ祓ヒ道ヲ神代ノ道
 ニ反シ今雜ナキ天人唯一ノ神道ト改メ給ヒ舍人親王
 以來和國ノ教ノ道統ヲモ續キ玉ヒ則存生ニシテ自神
 靈ヲ勸請有テ下御靈ノ末社猿田彥大神ノ相殿垂加靈
 社ト申テ年々祭禮モ怠慢ナク候

山崎家譜曰父君曰先君性正直有武志自少持古筆
 三社託宣一幅深護之朝夕誦之將拜覽必盥漱着
 道服袴一掛之吾等幼時觸之則叱之吾亦依先君命
 自幼誦之乃賜其古筆于嘉焉是ヲ以見レバ垂加
 翁祖君ヨリ代々三社ノ神ヲ深ク尊ミ玉フ也

同家譜曰嘉也元和四戊午冬十二月九日甲子亥時生小
 字長吉甫母君夢參比叡坂下兩社神拜子鳥居前時
 老翁折梅花一枝與之母君戴之納于左袖而
 孕焉是ヲ以テ考合スレハ三社ノ神ノ感應ニシテ母君
 靈夢ノ告有テ翁ノ如キ神代生レ玉ヘリ天人唯一ノ神

天照太神ヨリ以來帝王御代々傳ハル處ノ神道ヲ皇子
難波ノ親王ニ傳サセ給ヒ此親王ヨリ五代ノ孫左大臣
橘諸兄公^{葛城王ト申ス橘}聖武天皇ノ勝寶二年正月初テ
橘傳ハル諸兄公ヨリ二十九代ノ孫玉木兵庫正英丈^人
ニテ^テ格外ノ聖橘家神道ヲ相續セリ三喜流ハ三喜幼年ニ
護院村ニ住居橘家神道ヲ相續セリ三喜流ハ三喜幼年ニ
シテ駿州淺間ノ神主惣社氏志貴秦賢ニ仕ヘテト部家
ノ行事ヲ學ビ道ノアラマシヲ惣社氏ヨリ傳ヘテ其後
江戸ニ來自ラ一流ノ神道ヲ拵ヘテ世ニ流布ニヨリ三
喜ヨリ前關東ニ神道ヲ說者ナケレバ神道ト云モノハ
眞言天台兩宗ノ僧山伏ノ知ル處ト人々思フ處ヘ三喜
吉田ヨリ唯一宗源ノ大導師ト名付テ教テ曰神佛一致
ニシテ隔ナシ佛法ニテ極樂ト云ハ神道ニテ高天ガ原
佛法ニテ地獄ト云ハ神道ニテ根國也人死スレバ神ニ
ナルユヘニ神事ニ死穢ヲ忌ス只明テモ暮テモ阿麻豆
羅須臾賣於保牟賀彌ト此教私ニノベ不レ侍ルヨシ自
筆ニ誓文ヲ書テ板行シ門人其外世ノ人ニ配リ與フ又
思辨集ト云テ三喜ガ方ニテ祕スル書アリ委クハ彼書
ヲ見テ教方ヲ知ルベシ三喜身マカリ後眞弟ニテ殘レ
ル者ハ武州太宮簸川太明神ノ神主武笠丹波職ヲ子ニ
譲リ常ニ江戸ニ出テ門人ヲ進ム其外三喜門弟ヨリ傳

ベキ者ドモ一人一人ノ工夫次第ザマノ事ヲ拵ヘ
或ハ弓矢神道^{中臣祓ノ機鎌ノ語ニ本ト號ス鎌ヲ以テ神體}
トシテ行事ヲ勤ムルモアリ又白川殿流神道アリ是ハ
神田圖書ト云者本所ニ住テ專ラ祈禱ヲ勤テ世ニ徘徊
ス神代卷中臣祓ヲ說ト云ヘドモ此傳ヲ聞タル人ノ話
シヲ聞ニ心得ガタキコト多シ又山城國紀伊郡稻荷大
明神ノ祝羽倉齋宮ト云者是モ職ヲ弟ニ譲リ在江戸ト
シテ稻荷傳社ノ神道ト云テ是ヲ傳フ傳授ノ次第ハ稻
荷三社ノ傳ヲ初トシテ五社ノ傳ヲ中トシテ七社ノ傳
ヲ極メトスルコトゾ又神代ノ卷ヲ講ズルヲ本段ノ顯
ノ傳ト云本段計リヲヨム一書ヲ隱幽ノ傳ト云テ講セ
ズ深志ノ門弟ニハ一書ヲモ講シテ聞スルトゾ又中臣
祓ノ講釋ハスルト云ヘドモ神ヲ祭ルトキニ中臣祓ヲ
唱ヘズナゼトイヘバ此祓ハ中臣氏ノ祝詞ニシテ他姓
ノ人ノ讀ベキ様ナシ惣シテ神ヲ祭リ候ニハ其神ノ本
緣神德ヲアゲテ祝詞ヲツクリテ讀筭ナリ何ゾ他人ノ
祝詞ヲ我モノニシテ讀タリトテ神ノ納受アラシヤト
云ヘルトゾ^{羽倉氏ノ傳授ノ次第神田ノ}又横山當榮ト云者ア
リ神代ノ卷ノ古天地——生——其——焉ト云マデノ六十
五字ヲ衍文ナリト云テ省レ之其外ニモ衍文闕文錯簡

部次第二衰ヘテ今ハ姓氏モ斷絶シ漸ヤク齋部廣成ノ編メ爾古語拾遺齋部正道ノ著セル神代口訣其外梓ニ鑄タル遺書少々傳レル計リ也又天村雲命ノ苗裔ハ今ノ外宮ノ祠官度遇氏ノ族也内宮ノ祠官荒木田氏ノ族ハ天兒屋根命廿一世ノ孫天見通命ノ苗裔ナリ兩宮ノ祭主藤浪殿ハ大中臣ニテ清麿公^{神護景雲二年大ノ字ヲ賜リテ大中臣ト云トナリ}ノ苗裔也神職ノ面々家系正シテ神道正統伊勢ニ過ベカラズト云ヘドモ元弘建武ヨリ事起リ文祿年中ニ至ルマデ東西南北ノ國々皆戰國ノ衢ト成テ神領寺領ニ軍役ヲカケ其催促ニ應ゼザレバ領地ヲ沒收シ宮社寺塔ヲ燒亡シ神職僧徒ヲ殺伐セリ此時ニ至テ伊勢祠官ノ面々モ神宮捨テ山林浦嶋ニ身ヲヒソメ妻子ノ命ヲ續計也マシテ神學ノ沙汰ニ及バザリシニ元和ノ初ニ成リ天下一同ニ大平ノ御代ト治リ兩宮ノ神領モ御寄附アリ 神宮廿年ニ一度宛ノ御經營モ昔ノ如ク立歸リ年中ノ祭禮モ夫々執行レ祠官モ古郷ヘ立歸リ安堵ノ思イヲナスト云ヘドモ家々ニ傳ハル處ノ神籍モ戰國ノ時ニ亡失シ神學ニモ多年怠リヌレバ 神宮ノ道退轉シケル處ニ人王百十二代後西院ノ御宇ニ度遇神主從五位下出口信濃守延佳^{元延長ト號スト云ヘドモ時ノ帝ノ御名ヲ長仁ト申奉レバ長ヲ佳}

ニ改ト云人有延佳年來儒道ヲ好ミテ學ト云ヘドモ神宮ノ道ノ絶ナンコトヲ歎テ古ヨリ神庫ニ傳ハル處ノ祕書ヲ搜シ自學不斷ノ儒力ヲ合テ一篇ノ書ヲ著ス陽復記ト號ス此書辱モ天皇ノ散覽ニ備ハリ御稱美不レ斜シテ延佳ヲ從五位上^{後年有テ叙ニ從四位下}ニ叙シ玉フ時ニ延佳拜辭シテ曰我家代々五位ノ下ニシテ從五位ノ上ヲ經ズ先祖ノ位階ヲ超ナンコト恐アレバ勅免ヲ蒙リタキ由ヲ申シ上ル又勅詔アリテ延佳ガ申シ上ル處餘義ナク思召サル、問延佳亡父伊^脫ニモ從五位ノ上ヲ贈ラセ玉フサレバ延佳神忠ノ誠神明ニ感ジ又先祖位階卑フシテ我位階先祖ヨリ高ク昇ランコトヲ恐レテ辭スルハ至孝也故ニ如^レ此難^レ有詔命ヲ蒙リ我身ノミカハ亡父マデ家ニ例ナキ位階ニ昇ルコト皆神明ノ御加護也夫ヨリ延佳瑞穗抄神宮祕傳問答神道或問ヲ始メ數卷ノ神書ヲ著シ伊勢一國ニ限ラズ諸國ニ門人多ク出來テ今世ニ伊勢流ノ神道ト云ハ延佳ニ出タリ延佳ノ次男權太夫延經父ノ志ヲ繼テ神儒ノ學力ヲ盡シト云ヘドモ不幸短命ニシテ身マカリヌ又橘家ノ神道アリ是ハ人王三十一代敏達天皇ノ御宇ニ異端ノ說日々ニ成ニ起レリ帝神道ノ眞傳ヲ失ンコトヲ恐レ玉ヒテ

神道辨草

今年長月半月アカキ夜アル朋友ノ許ニ招レテ中臣祓ヲ講ジ侍ケルニ講釋畢テ後亭ノ曰是ヨリ先吉田家ノ神道者ノ此祓ヲ講釋スルヲ聞キ侍シニ今イマシノ讀給フコト、引合思フニ本文ノ唱ヘ段割ノ數講ジ玉フマデ異ナルコト多クシテ同事少シ

元神道ハ 天照太神春日大明神ノ御教ト承リ候ヘバ道ハ只一筋ニシテアルベキ事ニテ候イカナレバ異ナルコト多候ヤ其分ケ承リ度候予答曰仰ノ如ク神道ニ二教ノ筋ハナク候中臣祓モ我垂加翁ノ傳詳也重テ委ク說聞セ申ベク候明白ニハ難レ申候中臣祓ニ不レ限統テ神道ノ教古キ家々ノ傳ヲバ取失ヒ新ニ色々ノ流義ヲ立テ己ガ考工夫ヲナシ僞顯之品新說多候ヘバ不審ト思玉フモ斷リ也幸夜長キ折リナレバ古ヘヨリ神道段段傳リ候大筋又今世ニ人モ知リ候流義ノアラマシ語聞セ可レ申候

夫我神道者往昔 天照太神天兒屋根命天太玉命天村

雲命ヘ御直授アリ兒屋根命ノ苗裔ハ大織冠鎌足公ヘ傳ハル鎌足公故アリテ御子不比等公ハ唯一宗源神道ノ御傳ヘナク從父兄弟ノ意美麿ヲ婿トシテ神道ノ御傳授アリ其時大織冠意美麿ニ御附屬ノ御書曰

太祖神者掌ニ其解除之太諱辭ニ而宜レ俾_下以ニ太占之卜事ニ而奉_レ仕主ニ神道之宗源ニ也神雖_津集者_{又名天}我國之神寶也祖神之神體也以ニ傳神錄ニ附_津屬祭官意美麿ニ者慎而莫_レ怠矣

大化六年六月一日

中臣朝臣鎌子

意美麿ヨリ今ノ吉田マデ道統セリ又左兵衛佐卜部兼治ノ次男兼從_{豐國大明神ノ神主ト成テ蘇原ニ改ム子}思員從_{息員從ノ代ニ至テ願ニ依テ蘇原ニ改ム}道ニ器量アリテ卜部家道統ノ奧祕ヲ思惟シ玉フコト爰ニ吉川惟足翁兼從卿ノ門人ト成テ道ニ執心深ク尤學ブコト委ケレバ兼從卿其志ヲ感ジテ卜部家ノ秘傳皆惟足翁ヘ免シ授玉フト部正道ノ神道關東ヘ傳ハルコト惟足翁ヨリ起レリ會津中將正之公神道ヲ尊信シ惟足翁ヨリ此傳ヲ殘ラズ授リ玉イ其後惟足翁ノコト上聞ニ達シ召出サレ食祿地家ヲ賜ヒシ也又太玉神ノ苗裔ハ齋部家ニテ昔ハ朝家ノ輔佐トシテ卜部齋部ト左右ニ別レ政道ヲ執行ヒ祭祀勤メシムイカナル事ニヤ齋

窶憐○慙無告○簡而有○禮儉而無○吝勞而不○伐不○知
而無○悶焉游○其門○者自○諸侯大夫○以至○士商家○懷
德○倚○風莫○不○被○澤因○其教化○雖○未○能○面命○者
寄○書仰○誨可○謂近者○說遠者○來而○元文○五庚申○自○春罹
病○諸生○操○樂以○鍼艾○寢○蘇生○家族○門人○并躍○歡喜○焉而
有○二女○配○佐佐○木氏○自○夏臥○病先○於沒○日○四旬○餘
壯年而終焉○安崇○悼○之歎○之然○天命○所○賦而○殀壽○不○貳
也不○日集○諸生○講習○誘○之焉○然老○朽衰○體氣○屈復○初秋
上旬○病革○冒○身同○十四○日沒○嗟呼○可○惜焉○生○寬文○七丁
未年○冬十二月○朔○享年○七十○有四○歲同○十六○日葬○武府○北
駒籠○鄉吉○祥禪○寺境○中宗○寶珠○林○立○碑焉○末弟○平姓○太田
忠經○源姓○五十○嵐正○辰與○予議○欲○作○銘彫○碑陰○予同○
其志○而不○顧○先進○不○敢○辭而○書○之夫○惟師○恩莫○大
焉○禮曰○心喪○三年○可○思不○可○忘可○哀不○可○已也

平姓秋野信妙謹撰

乃末社止祝鎮奉止宮地於此地仁撰定本田氏安司之豆

根岸氏真共爾大己貴神少彥名神農御社仁准倍御神等

能天之御翳日之御翳止造利奉禮留石瑞御殿造立奉終

氏本社乃神司栗原氏正天津奇護言乎以言壽鎮白止今

年癸亥夏今月今日今時良辰奈禮波大久保彦八郎別源助等恭

御供仁從此奉事豆御神等於新殿惠振奉利鎮利定利給倍

止申須事濃由乎平介安介聞食止申須

天壤無窮四海泰平仁志

天皇朝廷寶位仁御座志

征夷大將軍武運長久彌高仁彌廣仁榮坐志常磐堅磐爾

奉仕百官天下乃萬民立榮氏此道於仰此流遠汲諸姓人

五十鈴川乃流止共仁末遠久三笠山農陰止共仁繁久昌倍

且崇障無久附祭留神能子孫八十屬幾從倍類僕此道乃

教乎受留人能領知乃民仁至留迄手長久足長久榮倍風雨

隨時五穀成就志諸乃災無久萬千種乃長秋止茂御代

仁夜守日護止守幸給惠止天津奇護言乎神賀仁賀豆言

壽鎮白須事濃由乎

天神地神別豆波本津社乃靈神未社神等諸共仁佐男鹿耳

振立聞食世止申須

辭別豆申佐久今供奉仁從此事倍申諸人參集留輩乃中爾

穢氣不淨不信懈怠乃過在止天津祝詞乃太祝詞於以天

祓清女奉禮波咎毛無久崇毛無久神直日大直日神止見直

開直志給比天守護幸倍賜倍止恐美恐美毛申須

寬保三年癸亥四月十六日 藤原基生員郡謹代撰

于時明和八年辛卯十二月二十五日

宮內守中親宴謹書寫

先師碑銘

源姓伴部氏安崇靈號曰八重垣靈社其先出自清和

末裔而常陽曰八田知家為常易小田城主也是小

田源氏之祖也知家五代孫曰山尾家時為常易多珂

郡伴部城主因稱伴部其後家族式微而家時六代孫

曰伴部三省仕豫易今張侍從源定房而辭官焉生

安崇於武易品川鄉焉自祖至安崇其系詳矣其為

人豪傑而好和漢學布德焉施仁焉性不覓仕宦

獨善其身寓居城西四谷之鄉而設學校從旦

至夕解經說傳五十有餘年其於神史也參考歷代

古訓廢墜開示深旨其於漢策也發揮洪範九疇

微解周易精蘊其於軍旅也極八陣之法然則鑠

梓編帙顯然明矣其齊家也有關雎麟趾之意其待

門弟溫潤而厲間雖遇變革不疾言遽色賑濟貧

八重垣大明神由祝詞

謹美々々惶美惶^美申須八重垣濃靈^波其先常陸國乃產也

水尾天皇乃裔小田乃城主之後姓波源伴部氏安崇先生之靈也瑞玉靈社波仕^二豫州今治城主源定房君^一有以耳辭官卒以寬文七年丁未十二月辛未朔生先生於江城之南品川鄉須爲兒好正直^{美嬉戲}示設禮容給布然後專潛心於朱子傳慕垂加靈社之風^比給布故禮友矢野佐藤兩丈年越不惑豆後謁見跡部光海翁^講三綱領給布光海君歎賞甚志於是初豆師吾翁^志天學給利吾翁^倍毛亦從光海君^比受垂加靈社之神傳尊信篤行毛不庸至與義莫不盡窮志垂加靈社能門人^爾不學神道者^爾知有僻見豆數論辨倍佐藤氏爾其要於告給布故仁直方悔往事文書乎送豆歎乎呈其書今猶存利正親町從一位白玉翁江府爾來利御座須時光海君請豆拜謁給布先生毛從比往豆與仁聞神道深祕於是吾國西土乃道益相發明仁志垂加靈社之正統豆天津兒屋根命五十八代乃

傳^{倍止}故天津神籬仁心於起志立天波兩部習合乃誤於除幾天津磐境仁胸落着賜^比天^波邇五十鈴之淵源利賀茂下上乃河流乎尋豆身乃垢乎清女藤森乃神祕乎極女八十萬乃粹乎搜利求女中臣三種能風水仁眼能霞乎拂賜^比常倍仁守

八幡大神乃遺教豆羽翼留仁以儒道志土金龍雷以貫言行幾恭敬豆安羅仁和^{布志}不流威豆不猛教人豆不倦學豆不厭德比如玉如鏡尊神敬祖廢佛關異劍如斷物爲學者所著述書數千百卷其名號不暇記中爾毛八陣蘊義止御統止波前賢毛所未發乃大祕也故禮八陣書乎獻

尊公在台命天深祕豆不博傳僅爾授三子給布且垂加靈社濃遺志乎繼豆正日本書紀訓點改魯魚據釋紀豆附帝王之系豆復藤森舊傳賜比亦考書於編豆題天號日本書紀卷返微先生此書能歸正古止難久無考書波何爾因豆學者讀止安乎可得哉如是大奈留功業坐天類希奈故仁傳受人親族朋友相共爾蒙恩賴是以信仰之日少宮乃祕訣乎以豆一而守渾沌之始一手自奉封利給布靈^波乎以豆寬保二年壬戌秋七月中元武藏國入間郡山口鄉北野邑^{物部天神}坂東天滿宮

ふこと返す／＼心を付て尊ぶべきことも異邦は皆
知力を以て取立たる國也此國は神力を以て成就す
る國也それゆへ力づくにていへば廣大なる國もあ
れど中々此國に敵することあたはず古來よりの玄
るし歴然たり國如此なるゆへ人も神人也書も神典
也道も神道也萬國の此國に及ばぬこと能く眼を付
べし

一祓祝詞の數もおびたゝ玄ふあれ共此内に中臣の祓
か第一也いかんとなれば高天原に神とゝましまし
ますを以て祓することゆへ根本盛大に玄て外の祓
の及ばぬ所也その高天原のといまします御神の勅
定を以て萬民治亂ともに祓をなすゆへ安泰無事に
して國家繁昌也八百萬の神々も皆此神の命令に従
ひ給ふ自ら祓することを玄らぬ者へは上より國所
へ教へて拂はしめ給ふ孝德天皇の卷にあらまし見
へ侍る其爲に大中臣の人祓をつかさどり給ふ天津
罪國津罪皆かくのごとし中にも教をしりみづから
身の上家の内まで祓することを知る人は實に神國
の神人に侍る諸惡をいまだ生ぜざるにはらひのけ
萬福を來しまねくこと皆祓の威德にて此國の道と

も教へ共中事也尤國家にても小家にても非常の變
有時は猶更改て祓を修行すべし

一名題を神道者といへば何もかも皆一つ事に覺ゆる
こと大なる世上のあやまり也陰陽師も神道といひ
たて世をまどはし民を玄ひ修驗道も神道といひた
て山伏も其内にあり邪術の者も神道といひたて又
は日蓮宗も神道といひたて是非混雜して正しから
ね共神道といはれて皆伊勢兩宮吉田白川其外名高
き大社の傳もひとつことに心得合點ゆかぬは神道
といふものはなどゝ心得るは是非もなき誤りに侍
る又神道の行事計を事とする人は神の道にはくら
しすべての道に正邪はあれども就中神道は
天照太神の御教なればよく／＼正道邪道僞作雜亂
を正してひとつ事と思ふべからず仍て伊勢五部の
書中にも巫覡の類を近くるなとありて禁戒し給ふ
是第一の心得に侍る恐れみ恐れみも申す

元文三年戊午七月二日

八重垣翁識之

本紀を漢字讀によめば皆神代よりの傳授の意にそむくゆへ和訓を主として讀めとの御事也。扱漢字の文は側に付置給ふと云漢字で和訓を埋め假名のかはりとし給へば漢文を用給ふにも少も御心なきにはあらず所々其意有こと也。それを出雲國の正神主などは佐田の社とやらんに在けるといひしが臼井氏が説を信じて後字よみに神代卷を取あつかふと云はわけもなき事也。世以漢字を尊ぶ世上ゆへに舍人親王漢字とても和訓の外はなしといふことを知らせん爲にあのごとくゑるし置給ふ根本の大事は和訓に有漢字にかゝはるまじき爲におのころ嶋を磯馭廬嶋と書せ給ひたるるひ有講習の力を用べき事に侍る

一 日本紀の内にて神代卷とて一二の卷を別に名付引分くるは後世の事なるべしと先輩の達人皆吟味ありたる事なり神代は七代ありてその七代は今日とてもかわることなし

一 日本の道はもと書物を以て傳へ來るにてはなし器を以て傳來らせ給ふ三種神器の御相傳を初め十種の寶などいふも皆器也その意ゆへに素盞鳴尊文字

を出雲國素鵝の河原にて作り初給ふも象形文字に作らせ給ふ忌部正通の神代口訣に申さるゝ神代の文字は象形也とは此事に侍る唯今神家によりて異國の靈符などを神代文字とて秘して書用るは皆誤也萬物の理は色形に備るものなれば文字詞も象形にてすむ筈のことに侍る象形につゞきては會意の文字出來る筈也神代十二支の文字は濫川家會意の祕傳文字と覺侍る片假名は吉備公和字も吉備公いろはは空海法師高野にて大工の望によりて無筆の大工も相紋に書よき字を製作してあたへ又武具の文字は近代楠正成朝臣作り初らるゝといふいづれも漢字の旁を象れりといへ共神代文字の風に似せて作られたりと云それゆへ靈符に似たるかたち一つもなし

一 人の頭頂の上は諸神衆會の所とて極めて尊き所に侍る正直の頭に神やどるといひ軍中にても胃の八幡座は軍神のやどらせ給ふ所に侍るもと頭のまかななるも大空の形に侍る常に頭の容を直くして神のやどらせ給ふをわするべからず

一 やつがれ野中の清水にいふごとく此國を神國とい

一神國の軍傳と云は其流儀さま／＼有といへ共本皆神軍より出たり漢軍より傳りたるにてはなし 仲哀天皇の時陳輪といふ者異國より來りて帝へ陳法八陣を傳へたりと小幡流にて云は誠に無稽の妄説に侍る仲哀帝には陳法の御傳なし神功皇后軍傳を得給ふ則神武帝よりの神軍なりその傳へを聖德太子得させ給ふ今太子流と云軍書に其説多く見え侍る其傳へ源家の歴々へ傳はり皆神軍の流れなり漢軍の説は大江の匡房朝臣博學にして殊に一たび橘家に養れ神軍の傳知り又江家へ立歸り漢軍の傳へをましへて源義家朝臣へ傳へられしより漢軍交り來る事なり然れば源家江家の軍法ともに皆もとは神軍にて漢軍にあらぬこと明白なり橘家の事はもとより申に不_レ及楠正成朝臣なども橘氏にてもと橘家神軍の家にてその上英才ゆへ奇功をなし給ふ

一神の事をさへ取あつかひ常々それを事とすれば別に神社參詣拜參にも不_レ及冥加を蒙ると覺へたがへたるは源尊氏などさやうに心得られ常に神書を寫し歌を讀が則冥加に叶道といへり是には心得の

有べき事に侍るいか程神書に目をさらし明暮歌道をすきたりとも祓を修行し正直を守らぬ人は神慮に叶ふまじ冥加正直の心よりする事は凡夫とても神慮に叶ひ侍る筈の事とこそ覺へ侍る神書博識にても祝詞祓の讀やう數々覺へたり共其分にて神慮にかなふべきとは覺へ侍らず尊氏の見も佛見にひとしく念佛修行も同じ筋ときこへ侍る

一諺に近づく神に罰あたると云は尤なる事なり近づくとはあしき祭りやうの事にて俗語にいふ神せゝりといふものなり我身一分の爲に神の道もまらず祭りやうも尋ねず此神を祭りて利益なきとてやめてあの神を祭りそれも思ふやうになきとて又心をかへあられぬ神を信じ正邪の分ちもしらで神事とて取あつかふものは神せゝりといふものにて必神罰あらですまぬもの也とにかくに正道を知る者正者にきゝて純一の誠心から祭りをもなすがよし神せゝりの人はすきと純一の誠なき人也

一舍人親王の假名日本紀と申書ありとはいへ共聞及たる計にて見侍らすてうど萬葉集のごとく漢字の音を借りてかなとして書給もの也と云此御心は日

給ふにてはなし此事に深々の祕有ことなり日月とて則君臣の御位に侍る

一國家天下の守りと云は武の道にあり日本の國の軍傳の初り日神天位を守り給ふ所に有軍令軍法の御傳へは神武天皇の御卷に見え侍るごとく此帝よりを初とす大星の祕傳といふも此卷に見へ侍る式の軍防令は漢軍と見合せて立給ふ神軍と漢軍とはその根本にかはり有漢軍は黃帝より初る黃帝の本文ありやなしや定かならずといへども風後の握機八陣は黃帝の勅を以て撰ばれ侍ると云なり此時は握機陣と申す誠に神聖の御力ならでは此陣法初てかやうに立難かるべし然れ共神軍大星と符合するの説は見え侍らず神軍の陣法は九重の城八咫の城四民の本陣悉く橘諸兄公傳へ置給ふもと孝德天皇傳へ來らせ給ふと云聖德太子古傳を繼給へり西土八陣の説兵鏡武備志等の書を初として本意をさとりて記したる書なし七書の太宗向對は唐の李靖と云臣下太宗との兵論なりといへ共實は宋の阮逸が偽書に侍る神軍の九重八咫四民と漢軍の握機八陣とは合符節たるが如しされ共渾軍よりは是をすま

んとしてはすまず神軍より悟れば漢の握機八陣も其機の妙曉ること有べし權謀術數は異端なり握機八陣は國家天下を守るの要樞に侍る神國を尊び神國を守護するの志あらば此陣法詳に講せずば有べからず

一西土にては唐の代に三十三家の兵家流有けれ共宋の代に吟味有て七書につゝめ侍る此七書をさへ熟講したる人希なり林道春翁の抄有といへ共精微は説置れす其後諸抄見へ侍れ共太宗向對の八陣詭説なることを知人なし江嶋爲信は奥州今治城の臣なるが七書に委しく七書非法と云ことを曉りて其門人に傳へ近耳抄と云抄を書いて領主へ是を上るやつがれいまだ弱冠に及ぬ時此人の免許を蒙るといへ共老年考索すれば太宗向對の誤はえらで過ぬるといふちゑるし心法と云も三略を尊び侍れば皆人力詐僞の俗心にて天地神明の正道にあらず龍尚舎が神武紀の抄の内に 神武天皇は軍配天道を守り給ふと云は獨歩の見識に覺へ侍る近年山鹿氏の八陣長沼氏の八陣佐久間氏の八陣皆見及たれ共爰に及ぶはなしと覺ゆ

かくに其身にはらへをせずして祈るは誠の祈にあらずと心得べし。玄かあれば一日片時も祈念と云事なくては神慮にそむく事に成はつる事に侍る

一神道にての修行と云は祓の事なり工夫と云も祓の事なり我心の及だけ祓を修行すれば心を天地に齊し想を風雲に乗と云神語のことく一念の和なく衣を千仞の岡にふるひ萬里の流にあらひ清流に口すすひで好茶の胸中をきよふするがごとし異國人の詩にも梧桐の月は懷中に向て照し楊柳の風は面上を拂て吹と作れるもその胸中ゆかしく覺え侍る

一神道にて知慧を披くの修行と云は菊理姫の修行と申侍り亦是泉津平坂の工夫と申侍る平坂より菊理姫は一段上の事に侍る至善なり菊理姫とは神靈の御名にて加賀國白山神社に鎮座まします菊理姫とはきくりと申事に侍る凡見る事聞事に付て心底に落付のでき決定するやうに物を見きく事なり平坂と云は半開半閉の間にてどちであらんと心の落付ぬ所に極嶮の場合一足の所にて巖谷へ落す平坂へ至り心の開く事なり披くれば心平に成ゆへ平かな

るの理りも有此平坂へは祓をなしつめて至る事なりそれはもろこしの文をよまんにもとより此國の文をよまんにも日用事に接り又は古今の物語人の評判をきかんにも皆此心得にて見きく事を申侍る菊理姫も平坂も共に伊弉諾尊の教へさせ給ふ事に侍る是も又祓也心のひらくるは大船のともし繩とさはなちへつなときはなちて大うみの原におしはなつことのごとくのはらへに侍る

一神道の大義の守りといふは君臣の道に在るなり天をいたいきふ萬代不易の道此國の萬國にすぐれたる天の神のうみのまゝにて君臣に少も變化なきが日本の日の本たる所に侍る父子から君臣の道といふ事はなし君臣から父子も立ことなり此事はやつがれ先年和漢問答に記し又は谷重遠土州の臣人にあたふるの一文に具なり垂加文集の附録にのせ置侍るよつて多毫に不及

一神道の道と云は日月を申奉る西土の道と云は大極を申奉る大極はもとより至極なれ共老佛にもまぎれもの有國土も日月のあらはれ給はんとて國土となり清濁分れ侍る事なり大極の爲に日月あらはれ

共に見よく心よく成侍る正直の人に有

窮は困窮なり
通は立身なり

神慮に叶はねば窮通共に醜恥がはしく終には公の罪人共なり天つ罪國つ罪をまぬがれがたし其憂へ

なきは正直の人に有異國にて過は易辭と云がこと

しいひわけのよ
く濟事なり

士農工商の四民ともに貴人の心にも

かわることなく上を犯し下を犯し咎と云咎罪と云罪なし人々神の一字をわすれねば吉凶禍福廣外ニ置など云やう成一己のみにとまり事なし儒道の教は一分を主とし佛見はわが正直をのけて人を助けんとす皆大道と申がたし能々神道の廣大成事仰ぎ尊ぶべし

一神の一字をわすれずと云に付ては祈り祈禱が重し祈といふに段々子細の有べき事也祓をして祈るをよしとす祓とは其身の罪咎を知りて改め清めさて其上を神力神助をいのり奉るを本とす中臣の祓の旨その通りなり天つ罪とは露ほども君とおやかたとをおろそかに思ふ心の出るは君とおや方とに敵對したるも同じ事にて天つ罪也國つ罪とは人をあしくまなし人のためあしきを知つゝ爲にあしき事をなし萬事妨をするは人を切ころしうちたおし人

の病をでかきするとひとつ事にて皆國つ罪なりまづかやうの心あらば祓すて、神を祈るべし又思はず放心の上にてあしかるわざをなしたるも天つ罪國つ罪なり何れも朝の霧夕の霧をあしたの風ゆふべの風の吹はらふ事のごとく祓ひすつべしかやうの放心もなきやうにと彌々神力を祈るべし世の人はらへと云事はせずしてたゞ手前の仕合よき事を祈るは祈りすなはち欲心なりいかで神感あらんや神力と云ものは至てつよきものにまします數萬人の力にてもうごかぬ事をうごかせ給ふは神力なり神助と云事も慥にこれあり思ひがけもなく神のみちびき給ひてよろしく引合給ふことなり遠近のたつきもえらぬ山中に

おほつがなくも呼子鳥哉

といふは人はなれたる山中にて何方へたよらん方もなく心まどふ所におや鳥の子の音をよぶごとくわれをこちへこよと呼みちびかせ給ふ事有易のふみに鳴ける鶴在陰と云も此筋也神感と云こととも有神徳と云事も有神の垂と云事も有神罰と云事ももとよりあり神罰を恐れ奉るべき事に侍るとに

一外の事におゐては儒書神書歌書等軍書まで昇平百年萬廢共起るの御代なれば興^レ廢繼^レ絶貴賤各其人有て反古の事多し然るに勅撰の初といひ日本書紀にまさる物はあらなくに慶長年中味岡三白板行せしめたるまゝにて百年を起て其まゝにて脱文錯簡誤字無訓の類あげてかぞへられぬものを沙汰する人のなきはいといふかしく覺へ侍る伊勢吉田白川藤波等の神家又は歌道儒道の人にも其人ありやなきやと今さらのやうにおどろき思ふ事なり

一古へ禁中にて日本紀の講を興行ありし事は諸記に見へ侍る所は宜陽殿などにて竟宴の禮までありしとかや愛成朝臣などは其講に預りし人也古へより今迄地下にて日本紀の講と云ふ事は不^ニ聞及^一日本紀の内一二の卷をば神代卷と名付て吉田の家にて萩原大納言殿吉川惟足翁へ望によりて講じ給ふと云それも吉田の家に數十年絶ぬるを萩原大納言殿起し給ふと云林道春翁も神代を講せられたりといへども傳なくして儒學の力にて推て一二の卷を講せられけると其講本にて見へ侍る道春翁の講とて書本にて有體に地下にては一二の卷の講は吉川

惟足翁いざなひ被^レ申會津左中將正之公の御望にて講じ申され其講本は惟足抄寫し本有伊勢にては出口信濃守延佳講じ初められ其講を山本廣足と云門人録して板に出し侍る垂加靈社は神武記迄を毎門人へ講じ給ふいと尊く覺へ侍る中臣の祓は世に講せし人は古へより多し是は六月晦日と十二月晦日との大祓なり中臣祓は元來朝廷講習の書にはあらず伊勢五部の書は出口延佳講じ初めらるゝと見へ侍る垂加靈社は伊勢大宮司精長より中臣祓の傳を受出口延佳と伊勢の書を吟味し給へり

一神道は修^レ己治^レ人の大道に侍る異國の聖人も人而無^レ信不^レ知^ニ其可^一と有又民無^レ信不^レ足^立共見へ侍る然れ共萬物の靈たる人なれば知力巧詐る知慧過て上古淳朴の風なければ上中下を欺き上をはかり中をはかり下をはかり邪知人欲やむ時なしそれゆへ忠も孝も仁も義も取うしなふは神の一字を目當とせぬ學問ゆへの事にて學ぶほど邪知の長する者多し神道は貴賤上下共にたゞ神慮に叶へと教へその神慮にかなふ人々の正直に有正直は信なり位に貴賤あり養に大小高下有といへ共其分に應じて窮通

一日本紀の板本世に一板のみ有其跋を見れば兩本有に似たり清原國賢朝臣の跋は 勅を受けて印行の樣に見へ侍る又小字の跋を見れば洛三白跋と有て共に慶長の年號にて其間十四五年の違と覺ゆ三白は味岡三白とて名有醫のかき侍る小字に跋せらるゝ事扱々感じ入侍る此書六史の冠頭なれば 天皇將軍家の御勢ならで地下の凡夫おし出して跋などすべき書にあらず此兩本有筈にて唯今三白跋の本のみにてあまつさへ脱文錯簡一枚として改正なくて讀つゝ侍らんやうなし此事數年京都江戸の物知りと云人に尋ね侍れどかつて知人なきこそいふかしけれ

一神道に面授口訣と云こと有 天照太神の御時より始り侍る高皇產靈尊より天兒屋根命太玉命へ神籬の道を面授口訣し給ふ是を後世にては傳と云其外傳と云こと皆面授口訣の事也西土の書にも書は不盡言言不盡意と云事有對君一夜話勝讀三十年書と云事も有たとへ心を盡す程に書たるとてもそれを讀たる計にては道を覺悟することはあたはず此事西土にては無之事にて面授口訣を得ざ

る人は言語聲氣の間にて道を覺悟すること也それ共に下地に骨折積累の人ならでは面授口訣にてもならぬ事に侍る曾子一貫の唯よほど近きこと也正親町一位白玉翁の御家に神道系圖の祕書有て卜部吉田ばかり相承口訣有のみにあらず 天皇攝關伊勢の祭主までこの口訣有事也といへども大職冠鎌足公より卜部へゆづり給る今は吉田一家の傳のやうになり侍る

一道の根本は伊勢の十二部の書の中にも五部の書に盡し侍る神代卷とても伊勢の書よりは後の事に侍る

一或曰神籬などは極祕と云侍とは申さずと左も有べし極重の事なれば詞遣もかわるべし扱神籬極祕とても伊勢兩宮の御鏡傳濟たる後にてなければ不通のこと也惣じて剪紙傳とて數返有て講談數遍濟たる人々は其卷々の次第に依て授る事なれども剪紙授りたるとて根から濟ものはなしたとへ切紙を受ずともとくと得心すれば獨濟事のみ多し風水草の内に其人に面授すれば心得るのみと有事深き旨と覺へ侍る

病後手習

やつがれ享保初年よりは江城の西郭外四谷の里に年久しく住なれ侍る

御簾笥町御先
手組崎氏ノ屋敷

ことし元文三年同郭

内二番町の南麴町近き所佐々木氏の屋敷へ居を移し

侍る今年七十二歳なれば老年の養の爲娘并孫なりけ

る人の屋敷なればかくはかりて五月九日庚申の日に

五月雨の晴間なれば移り住ゐし侍る思はずも同き十

三日甲子の朝より便血の大病にて諸醫を招き危急の

病次第に快し
數原通孝老

尾州君ノ御匙
官醫御側

宮崎玄養
土岐仙庵

麴町醫
四谷町醫

いづれも重き病とて藥服用せしに後は仙庵の藥にて

快成ける五十日を歷て全快すつら／＼次第を考るに

まづ九日に家移りして後大病急に出しゆへ娘の屋敷

といひ萬端養の手づかひよく病中も人參大補の内に

仙庵醫案にて十日計りすきと人參をやめて服藥せし

めらるればそろ／＼と快氣に趣けるも家どうじ水を

あみ神拜し神慮を窺ければ兩度迄仙庵宜しからんと

占方に示させ給ふ不思議の事に侍る其外思はずも諸

大夫士友の御惠にて手にも及ばぬ類達とやらんの人

肥前州松平忠根君勝田氏祿
原光寛君勝田野下州元田氏

參を惠賜り

此人參にて快然をえ侍ること逐一人力のなす所にあ

らず

戸田氏賢君
一柳直畏君

よりも人參の賜に預り皆神明の御蔭仰

ても餘有こと也依而日頃諸門人へ示すごとく萬事人

力のなす事にてはなし神力のみを仰くべきよし物語

りし侍る此老生いきたりとて世の爲人の爲ともなら

ねども年頃の大願にて日本紀の古板誤多ければ此書

は我等ごとき凡下手を添べき書ならねば公の御力を

添させ賜り改板して後世へ残したき望のみに侍る病

危き時辭世とて讀侍る歌に

天にのほりかへりことせぬ身にも猶

たゝやまとふみ仰く計ぞ

と詠り侍る去年の冬神道會の橋となんいふかな書

一卷あらはし官醫大八木氏の望梓行せしめられその

うへ 將軍家御腕近の衆へ便りて 臺覽に入給りか

つは御賞美の所も有けるとなんかやうの事にて冥加

に叶ひ此上日本紀の願成就せよかしと病後一入に思

るにより三十日の餘り筆をとらねば手習となん心得

かく記し侍る

シ垂加翁贈ニ檜崎正員ニ序曰生也自ニ天地ニ來死也魂遊ニ于天ニ魄降ニ于地ニ與ニ天地ニ化而更無ニ來處ニ更無ニ去處ニ此人物之始終造化之道也斯理也聖人於レ易備言レ之告ニ子路ニ之深語ニ宰我ニ之詳中庸發明之至矣盡矣復奚疑哉但輪廻之說行焉不ニ惟無學者被ニ誣惑ニ而讀レ書者亦不ニ能ニ明辨レ之可ニ慨嘆ニ耳コノ語言約ニシテ其理明白ナリ神儒合一ノ道理ニシテ佛ノ惑ヲ排ク格言ナリ

又問幽厲來テ常ニ佛法ヲ疎ニシ後生ヲ願ハザルニヨリテ死シテ極樂ヘ生レズ迷ヒテ如レ此經念佛シテ跡ヲ弔ヒ罪ヲ滅シ玉ハレト云願ノ如ク弔ヘバ則不レ來古ヨリ多キコトナリ然レバ佛法ノ道理ナキニ非ズ如何 答曰死セル者又形ヲ顯ハシ來ルヲ幽厲ト云是ハ死セル時一念ノ氣凝テ散ゼズシテ來ル者ナリ是ニヨリテ久クハナシ其凝タル氣其事ニ依テ散ズレバ來ラズ是ハ其人死ニ及ブ時我ハ常々佛法ヲ疎カニシ經念佛ヲ唱ヘザレバ死シテ地獄ニ陷ンヤ又狐狸トモ生レ替ンヤ悲キコトナリト思ヒノテ死スル故ニ其一念ノ氣直ニ凝テ散ゼズ幽厲ト成ヲ云コトナリ是ニ依テ經念佛シテ弔ヘバ凝タル氣散ズルハヅナリ日本ニテ

モ佛法渡ラヌ前ノ幽厲ハ如レ此ノコトナシ西土ニテモ後漢ノ明帝ヨリ前ニハ此事ナシ左傳ニアル申生太子ノ幽厲モ地獄極樂ノコトハ云ハズ是ヲ以テ知ベシ夢ニモ地獄極樂ノコトヲ見ル者アリ佛法ヲ聞テ常ニ惑フ故ナリ是同ジ佛法渡ラヌ前ノ夢ニハ和漢トモニ見ル者ナシ幽厲ヲ以テモ佛者ハ再生輪廻ヲ云愚ナルコトナリ禮記月令ニアル雀大水ニ入テ蜋トナル田鼠鶉トナルト云コトアリ又山ノイモノ饅ニナルト云コトアリ水銀ヲ燒ケバ朱ニナル朱ヲ燒ケバ白粉トナル蜂ガ虫ヲトラエテ似我ノトイヘバ蜂ニナルト云此類多シ是皆氣ノ變ナリ是ヲ釋迦ヤ達摩ガ見テ心ノ明ナラザルユエ理ヲ不レ知再生アリト見テ説タル者也懷胎ノ女猪ヤ猿ニ感ジテ生レシ子總身ニ右ノ毛生テ出タルコトアリ皆氣ノ變氣ノ感ナリ蒙求ニアル羊祜識環鮑靚記井ノコトモ氣ノヒバキ合タルコトナリ此類多シ推テ知ルベシ氣ニハ變アリ理ハ變ゼズ再生ト云コトハ決シテナキコト、知ルベキ者ナリ

寶永辛卯三月日

光海翁識

コトナシ馬ガ死シテ牛ヤ人ニ生レ出ル道理ハナキコ
トナリ此處古ヨリ和漢ニ達シタル博識ノ人惑ヘルハ
悲キコトナリ源親房卿神皇正統記ニ代降レルトテ自
ライヤシムベカラズ天地ノ始ハ今日ヲ始トスル理ア
リシカノミナラズ君モ臣モ神ヲサルコト遠カラズ常
ニ冥知見ヲカヘリミ神ノ本誓ヲ悟リテ正ニ居センコ
トヲ心ザシ邪無ンコトヲ思ヒ玉フベシトハ云ハレケ
レドモ本源ノ道理ニ暗クシテ神佛習合セラレケルハ
イト殘多キコトナリ倭姬世記曰天皇即位廿三年己未
二月倭姬命召_ニ集於宮人及物部八十氏等_ニ宣久神主部
物忌等諸聞玉_ニ吾久代_ニ太神_ニ託宣_{摩志萬志支}心神則天地之
本基身體則五行之化生_{利奈}肆元_ニ元入_ニ初元_ニ本_ニ本任_ニ
本心_ニ與神垂以_ニ祈禱_ニ爲_ニ先冥加以_ニ正直_ニ爲_ニ本利夫尊
レ天事_ニ地崇_ニ神敬_ニ祖則不_ニ絶_ニ宗廟_ニ經_ニ綸天業_ニ又屏_ニ
佛法息_ニ奉_ニ再_ニ拜神祇_ニ禮日月廻_ニ四洲_ニ雖_ニ照_ニ六合_ニ須
照_ニ正直頂_ニ止詔命明矣已專_ニ如在禮_ニ奉_ニ祈_ニ朝廷_{眞波}
天下泰平_{天志奈真}四民安然_{奈真}止布告託自退_ニ尾上山峰_ニ石隱
坐コレ倭姬命身マカリ玉フ時ニ至テ神道ノ根元大意
ヲ述ベ玉ヒ死生ノ道理マデヲ示シ玉ヒ後世佛法ニ惑
ヒテ神道ヲ取失ヒ我國ノ人ヲ殘ハンコトヲ悲ミ太神

ノ託宣ヲ告知ラセ玉フナリ誠ニ尊ベク仰テモ猶餘ア
リ日神此命ノ恩德一時モ不_レ可_レ忘モノナリ此神託ハ
垂加翁モ別シテ尊信シ玉ヒシナリ佛法ノ息ヲ屏ルト
云フコト古今人ノ疑アルコトナリ予ツ、シミ草トイ
ヘル書ヲ著シテ疑ナキコトヲ分明ニ記シタレバ今コ
コニ不_レ述_ニ或人問神道ニ渾沌ハ誠ナリト云ヒ儒道
ニモ誠ハ圓成底ノ物ト云大極圖○是ナリ然レバ佛法
ニ云輪廻ハ車ノ輪ノ如シト云ルト同ジコトナリクル
クルト廻ルハ出テハ歸リ歸リテハ又出ルナリ東ヨリ
出ル日西ニ入テ明朝又東ヘ出ルハ再生輪廻ニ非ス
ヤ答曰ソレハ大ニ理ノ取ソコナヒナリ此間卽再生
輪廻ノナキ所ナリ日東ニ出テ西ヘ入テ又東ヘ出ルハ
先ヘ_ノト廻ルナリコレ生々間斷ナキノ理ナリ歸ル
ト云ハ東ヨリ西ヘ廻リテ又本ノ日道ヲ取テ返シ東ヘ
行クガ歸ルト云フナリ九キ物ハヒタト先ヘ_ノト運
轉スルナリ天ノ形九キ故ニ日東ヨリ先ヘ_ノト廻ル
故ニ又東ヘ廻リ出ルナリ再生輪廻ハ先ヘ_ノト生々
セズ西ヨリ東ヘ出ルヲ再生ト云フハ理ノナキコトナ
リ此處ヨク_ノ得心アルベシ再生輪廻ノ處大切ノ惑
コレサヘハキト決スレバ神道ノ本源ヲ得習合ノ惑ナ

年ノ先萬里ノ遠トイヘドモ感通セズト云フコトナシ
 古歌

ハルカナルモロコシマテモユクモノハ

秋ノ子サメノ心ナリケリ

トヨメルヨク心ノ感通スル處ニ叶ヘリ同姓ハ其氣感
 ズ他姓ハ其氣異ナレバ感ゼズ祭テモ享ザルナリ然ド
 モ夫婦ハ交情ノ親キニ依テ其氣同姓ニ同ジクシテ感
 格スルナリ他人トイヘドモ常ニ交リノ親ミアリテ互
 ニ心ヲ同スルモノハ祭テモ感格スルナリ是ニ依テ天
 神地祇氏神ナドヲ祭ルモ神道ヲ尊信シテ齋戒シ誠ヲ
 イテ祭レバ其神靈感應シ玉ハズト云コトナシ身體亡
 ブトイヘドモ其神靈亡ビザルナリ空津彦ノ傳疑ベキ
 コトニ非ズ唯其筋々有テ感格スル也筋カハレバ感格
 ナシ萬物モ其筋々アリ開闢ノ始ヨリ生々シテヤマズ
 一モ筋ノカハルコトハナシ譬ヘバ松ノ木櫻花モ同ジ
 コトナリ松ノ木ニ櫻ノ花ハ不レ咲櫻ノ木ニ松ノ緑ハ
 生ゼズ萬代筋ハカハラヌナリ松木ニモ女松男松赤松
 アリ櫻ニモ一重八重紅白品々アリ是同姓他姓ト同ジ
 コトナリ是ヲ以テ禽獸魚蟲マデ推テ知ベシ古今ノ人
 幾億萬人死シ去テハ跡ヨリ生レ出テ今ニ絶ズ幾億萬

人アリテモ先祖ヨリ數千年ノ後今日マデ其子孫一氣
 ノ神靈ニシテ他ノ人トハ別ナリ譬ヘバ玉川ノ源ハ一
 ツニシテ其流レハ江戶中方々ヘ流レ出ルガ如シサ
 レドモ他ノ川水トハチガヒ玉川ト云流水ハ一氣ニシ
 テ神靈モ備テ萬代カハラヌナリ毎日ノ生々シテ流
 レ出レドモ水上ノ一水ガ根トナリテ居レバ神靈ハイ
 ツマデモ封シテ玉川ナリ此流レ四谷ヘナガレ赤坂ノ
 芝ノト云處ヘ出ル其四谷ノ水道赤坂ノ水道芝ノ水道
 ト云フガ子孫ノ名ノカハル如シ顔貌カダチハ替リテ
 モ一氣ノ神靈ハ貫テ居ルコトナリ天地開闢ノ始氣化
 ニテ一度生テ出タル元祖ハハヤ別ニ一氣ノ神靈ト成
 テ他ニ交ラズ相續來ル也サテ廣ク云ヘバ天地ノ神理
 晝夜死生一ニシテ川流ノ如ク生々化々シテ息コトナ
 シ前ノ天地ノ終リハ今ノ天地ノ始ナリ昨日ノ終リハ
 今朝ノ始トナル天氣日月ノ運行風ノ吹マデ昨日ニカ
 ハルコト無レドモ今日ハ新ニ生ジテ昨日ニハ非ズ先
 ヘ流ル、水ハ盡キテ跡ヨリ新ニ流ル、ナリ佛法ニ再
 生輪廻ヲ第一ノ根本トスレバ天地理氣ノ道理ヲ不
 レ知シテ造化ヲ離テ佛性トス此處神道儒道ト大ニ異
 ナル處ナリ筋カハラネバ松木ガ朽テ櫻木ニ生ズル

神道生死之說

夫我國水土清明ニシテ正直ノ神道開闢ノ始ヨリ傳ヘ來リ天人唯一ト云異邦ニ勝レタルコトナリ然ルニ佛法渡テヨリ後習合シテ此道明ニ知者稀ナルハ此道ノ本源ヲ窮メズ日少宮ノ祕傳ヲ受ズシテ悟知ラザル故ナリ垂加翁ノ伊勢儀式帳序曰原夫神之爲神初不有ニ此名此字ニ也其惟妙不測者爲ニ陰陽五行之主而萬物萬化莫不_レ由_レ此出_レ焉是故自然發_ニ於人聲_ニ然後有_ニ此名此字_ニ也又會津神社志序曰我倭封_ニ天地之神_ニ號_ニ天御中主尊_ニ舉_レ天以包_レ地御尊辭中即天地之中主即主宰之謂尊至貴之稱又曰天地之間唯理與_レ氣而神也者理之乘_レ氣而出入者ト此ヲ以テ考ヘ知ルベシ神ト云ハ理ノイキテアルヲ云乘_レ氣出入スルハ動靜ニシテイキテ動ク處ノ妙用ナリ理ハ氣ヲ離レズ又雜ラズシテ流行シ妙合シテ萬物ヲ化生ス神代卷ニ清陽者薄靡而爲_レ天重濁者淹滯而爲_レ地トアルモ上テ天トナルハ動ナリ下テ地トナルハ靜ナリ動ノ中ニ靜アリ靜

ノ中ニ動アリ互ニ其根トナル一氣分テ二トナル二分シテ一ナリは一ニシテ二ニシテ一ナリ垂加翁曰神道儒道共ニ一ニシテ二而一ト云フコトヲ萬事萬物ヘ推シテ考レハ可_レ疑コトナシ異端ハ是ヲ知ザルナリト常ニ教ヘ玉フト也垂加社語曰陽神上主_ニ天陰神下鎮_ニ地伊弉諾尊神功已_レ還_ニ於天_ニ伊弉冊尊生_ニ火神_ニ歸_ニ于地_ニ其義炳焉親房東家祕傳發_レ之コレ陽神陰神已上ノ崩御未生一理ヲ云ニ天人唯一生死ノ道ヲ說キ再生輪廻ノ理ナキコトヲ明ニシ玉フ人陰陽五行ノ氣妙合シテ形ヲナシ天御中主尊心ノ主トナリ玉ヒテ明ニ天御量言ヲ以テ萬事ニ應ジ玉フ死スル時ハ其散ル氣モ神靈モ天地ニ歸テ化シテ一ニナリ去ル處モナ_ニ來ル處モナシ_ニ日少宮ニ留ルノミサレドモ先祖ノ氣子孫ニ受繼血脉呼吸傳テ不_レ絶子孫齋戒シ誠ヲ以テ祭レハ神靈コ、ニ感格ス其神靈目ニモ見ヘズ手ニモトラレズ無聲無臭ナリトイヘ_ニ凡_ニ祭ル處ノ誠ニ依テ感格シテ享ルナリ譬ヘバ水晶ノ玉ヲ以テ日光ニ向ヒ下艾ヲ以受レバ忽移來テ艾燃ユ月光ニ向ヘバ水滴ルガ如シ誠ハ清明ナリ誠ナラザレバ清明ナラズ氣ノヒキテ感ズル處心ノ清明ニシテ通ズル處高天ノ上數千

會津神社之訓詞

豊芦原の中國天地と共にひらけ 國常立尊の七代の
後伊弉諾尊伊弉冊尊あれませる時偶生神俱生神くに
ぐに所々に跡たれますゆへに神國といへりしかは
あれど吳竹のよゝを隔つれば埋木のそれとなく先祖
をだにしらす舊社は田にすかれ神木は薪にくだかれ
まれゝ殘る社は浮屠にうばゝれあらゝぎの傍にけ
がされ有がごとく無がごとしかゝれば神明岩戸を戸
ざし神徳日々にかくれて邪道年々におこる掛まくも
賢き 延喜の御代に六十餘國に詔して絶たるを繼邪
正を正し都て三千百三十二座神名帳にゑるし置くゝ
といへどもそも又時をうかゝひ虛に乗て神國の道に
跨て兩部習合とかまへ親王攝家高名の其子うまごを
その門弟となし別當と稱し大社をむさぼり歷代の祠
官を僕のごとく權威を以て取ひしぎ官祿共にうばゝ
れぬれば吾道おのづからおとろふ吾國に生し人たれ
か是を歎かざらんや又にくまざらんや粵に陸奥會津

前太守源正之公神道を學給へること年ありまのあた
りに吾國の道絶ぬる事を悲しみ我領内の神社をだに
再興せんことを思ひ臣等友松氏興に命じて郡吏木村
忠右衛門忠成予門弟服部安休をしてひたをから國ま
ごとをり深山がくれの谷のくまゝ馬蹄も及ばぬ遠
近のたづきなき嶺の社まで霞をわけ雲に伏霧にまど
ひ雪にうづもれて式内式外の神社淫祠妖怪のたぐひ
迄委正してよしなき邪神を除てその地を其所々の社
領によせて永く大破を補なふ尤自國よりして天下に
及び再び本つ洲に歸らんこと其功立處にみつべし

寛文十一年辛亥

天兒屋根命五十四代嫡傳

相山隱士吉川惟足謹書

瓊德合看仁意明

窓前不拂草生々

衣膚濕徹玉山雨

唯在三天人一箇誠

正德壬辰仲秋月

源良顯敬述之

土津靈神正學記

會津源正之公信神儒之道殊仰我國之神聖重忠孝之大義屏異端改兩部習合之說焉異邦之儒道則所妙契詳其說焉信垂加先生而爲賓師與共商量勤學有年矣自編集三子傳心二程治教玉山講義附三錄梓行于世以導衆人著會津風土記神社志皆令先生作序跋焉弄會津八景令先生賦詩風雅之情可以見也行社倉法以惠民武備之用無闕矣關江城之政秀身以爲太平之治其志嗚呼深哉矣先生曰於神道則舍人親王以來之一人於儒道則蔡季通以來之一人也此言豈詔以賞之乎阿以欺人乎熟考神道則對舍人親王言之親王則中興之聖德也儒道則不對朱子而對蔡季通言之故神道之學勝儒學可以知也蓋才德亞先生者唯此源公而已矣號土津靈社沒後祭會津采地至今其神光歷々焉先生書土津靈神碑銘以其言行詳著之故自古於武門雖學文者多未聞如下如源公人也夫

源孝道之詩載于本朝風藻源賴義之文載于續文粹源高德之詩文載于太平記吉野拾遺源義輝義昭賴之晴信藤孝豐臣勝俊藤原政宗源義直之詩本朝一人一首載之然所學記誦詞章惑異端或主權謀或博雜更無有志於道學之人矣如橘正成有學才而忠義拔衆人故後村上天皇賞之祭以號南木明神宜哉然未見其詩文不考著作之全書則不知其學意於號多門兵衛則不免異端之惑垂水廣信尊朱子之書著嘉文亂記此說載于長濟草然不見其書則不知其學志也近來土佐家士小倉政義雖尊朱書有其志未全備前源光政信熊澤氏之王學水戶源光國雖信神儒博識英才而其著述世人知之未免博雜南部行信信山氏之疎學焉皆是雖有志不學神儒一致之正道嗚呼惜哉其他文學之武人不遑枚舉而未聞神儒一致之實學者也以之見之源公則可謂於武門貴家古今獨步也嗚呼稱土津靈社亦宜哉矣感發之餘賦詩以仰之

學得源公儒與神 武門才德出群倫

靈光永守土津社 功遺五書千歲真

雨中對窓前草誦玉山講義附錄憶仁意

やみ諫にしたがひ侍らんとて即道を従長へ附屬ありて汝時を待て吉田家へ返し傳へ死後にいたりても師命をはたしぬべし嗚呼我師命を遂さる事念なきわづなりととしてしきりに涙落しつ視吾堂かろふじて病おこたり例の相山の舊隠にまかりて休らひ侍るよのかなき事を思ひつけ侍りて

消あへぬ小笹の雪の玉ならて

はかなくたのむ世のならひかな

其年も暮春の比本所の野亭に籠りて花を詠侍りて

春にたにとふ人もなく埋れて

住もかひ有花のしら雪

道の時いたらざる事を歎き侍りて

神代よりふみ傳へても濱千鳥

甲斐もなきさにひとりなく也

元祿七年戊十一月十六日視吾堂春秋七十九歳にして神さり侍るいさゝめも病腦なく顔色常のごとし門人啼いさち悲しみ闇夜に燭をうしなふにことならずさてしもあらねば遺體を道義沼屋敷に葬め侍る則視吾堂靈社と名づけ侍る嗚呼靈社吾道の絶なんとする時に出て神海靈社に此をうけ繼て埋もれし道をひらき

て人に此をほどこして世のまよひをさとしぬ大なるかな理のさかんなる事神代にも耻べからずひかりを後世に照し神忠を萬世に建悲哉不祥の時に逢て卷て道をふとろにす愚かなりといへども時を得ものは名を世に施す賢なりといへども時を失ふ人は名を世に埋むされば古より君子も其世には埋もれて後の世に顯ることかやそも一郡一庄をしるよしせる人は徳不徳作法に顯れて世にいやりこなるべし埋もれましくして一郡一庄の祿にもあづからざる身は其徳かくれて顯はれざれば人又これを知るによしなし徳達の人は一國をうれば一庄こぞりて徳に服ふ一國をうれば一國こぞりて徳に服ふいでや誠の大にして又其微に及ぶ事幽谷の樵夫ももれすとかやされば天照太神とは號け奉る事大陽の光りにたとへて號けたてまつるものならし

るを禁裏炎上其外障と侍りて相傳残りぬるなん師命をはたさゝることいかばかり念なく常々歎き侍れど心にまかせぬ世の中いかむ共すべからずよりて道に

志厚き人々諫けらく師翁吉田へ道の相傳をとげ給はんと年來思ひこめられ侍れど時いたらず齡はやいやましに高く重ねおはしぬもしやはからざること出來侍らば道はたえ侍るべし誠に歎きわざなり幸に從長道に秀て師翁も常に賞感おはしぬ今師翁に替りて門人に教示をなし侍る唯道を從長へ傳へ道の絶て門人の心をもやすんじ給へとなん視吾堂答て曰親切なる諫にこそ侍れ神海靈社末期枕元にして申おかれ侍れば朝夕此事をのみ心に忘るゝ隙なくおもひわたり侍れどあやにくの世中心にまかせ侍らずかく星霜を経侍る師命をはたさず外へ道をのこすこと本意に叶はずまして從長たとへ秀たりとて吾子に侍る父子の親愛によりて傳へ侍るなどゝ世の有さまを知らぬ人の思はんこと塵をすへぬる心ちこそ兼て思はれ侍る先遅からじといひてうけあはずなりぬ各折にふれ事にしたがひしばゝ諫め侍れどうけいれず其中に堀田五郎左衛門河内守一輝はわかゝりしより道に志ふか

く眞實に侍る人なり一日とふらひ終日物語せし序に諫られしに折も有べしとうけあひなかりければ歸りてかくなん

天かゝみ空にかゝりて明らけき

きみか心は人もしるるらむ

親切なる志にこそと感じぬれどゆるし侍らず其後元祿三年五月視吾堂重き病にかゝりぬ道に志ある人々は驚きいぶかりきこえ醫師などの事何くれせちに心づかひ有けり又は日來の諫の事をいづれもつどひ相議り侍りて諫て曰兼てより道の事從長へ附屬あれかしと何れも此事を願まうし侍れどうけ給はず今病に臥おはせばもしや病おこたり給はずは吾國の大道此時に絶ぬべし神海靈社の遺言を常にせちに心につけてたまふ誠は靈社照し給ふべし從長へ道を傳へ置給はば此後吉田家に志ある人出來侍らば返傳授願はるべししかあれば死後にも遺言とけ給ふべし將道に心ざす門人の志もくしけ侍らずとあながちに誠をせめ詞を盡して諫侍れば視吾堂答らく老かゝめる身にも侍事ありて今までは人々の諫にももどき侍りき今年は起居もくるしく心もおとろへぬれば世間今はと思ひ

侍る吾國は忠を五倫の第一とし侍れば君道を人道の最上と教へ給ふがゆへに忠義を以て五倫の本とし侍る君の爲に親を捨るの道はあれども親の爲に君を捨るの道なし如斯く忠義を重する時は君臣の道正しくして臣として君をしのぎ犯さず君臣の道正しき時は人道をのづから序ありて乱れず今澆季にくだれる時といへども我國君臣の禮正しきは伊弉諾尊天照太神の御教戒の異國にすぐれたる所以なり又日用本として脩る所は敬の一字なり尤敬は儒にも整齊嚴肅などとも相見え侍れ共所作にかゝりて吾道のごとく其理幽遠深厚にたらず一生の學は此敬の一字に極り淺深の次第重々これ有て奥旨侍る一往は放散の氣をしづめゝて丹田に納むるをつゝしみると云日用心氣をしづめゝて行ひ物に應ずる時は事々物々の筋々明らかにして節にあたる猶重々口訣侍りて一往には述盡しがたしとなん正之卿甚おどろき信仰淺からず侍りき問答事多ければ皆事そぎ侍る夫より國郡の主道に志す人多く出來侍れば居住を江府に移して教をたれけり吉田家神海靈社の遺言のまにゝ返傳授の事を禁裏へ願上勅許有て所司代牧野佐渡守より關東へ聞

えあけられしに視吾堂を營中へめされ土屋古但馬守上意の旨を命ありて御暇并に御傳馬等を賜るよりて寛文十二年春正月下旬江府を出て都へのぼりぬ吉田へいたり神海靈社へまうでゝ讀て奉る

祈るなり吉田の山のさか木葉の

さかゆく影をときはかきはに

講談の前に拾遺に吉田兼敬神代卷講習なさしめ其後講談を始め隔日に讀侍る拾遺は講談の間日ごとにとぶら

ひ相傳の事うけられ侍る一日視吾堂むかし吉田へかよひしことを思ひ出て讀て拾遺へかくなん

むかしへやおとろか本をふみ分て

問こし道を又とはれぬる

拾遺さもこそと感賞ありぬ講談も竟宴にいたりぬれば寄國祝といふ題なり各和歌あり

視吾堂

神風になひかさらめや押なへて

吾すみまの國津民くさ

事畢侍ればかたみに名殘おしみて又近き年比にまうのぼりて殘なく傳へ侍らんとて別れ侍りぬ視吾堂年なみ高くなり行につけて返傳授再會にて悉く相濟侍

此し推古天皇以後異國の教盛に行はれ吾道おとろふるにしたがひ異域文國の風儀朝廷に移され武日にすたれ文日に盛にして詩歌管絃のあそびに勇義とろけ志やはらかなり行侍る將軍家の政武國の矩にかなひ天照太神の御掟に中り侍る天下將軍家の掌握に落る事自然のことはりに侍るとなん賴宣卿甚感賞ありてこよなふ崇敬おはしぬ一日賴宣卿かたらく東照宮仰けらく吾國は吾國の道を以て治まる教の有べかめり聞ならく本朝の道は吉田家へ傳へ來るといへり道を心得たる者を呼くだすべしとの仰ごとによりて神龍院とかやいひし人駿河へ下りしに開卷の時東照宮の書は無點なりしゆへ讀をとほせ給ふにさやかならず外の事へ轉じ一つ二つとはせ給ふ事侍りしに是も滯りてほどけずさるから重てきかせ侍らむとて講談におよばざりし汝に代侍らば道はひらけ侍るべし念なきわさに侍などなん賴宣卿量廣く英才秀達にして世に智能の名ある徒をば祿を厚ふして招きおはしぬ寔に良將に侍る折々まかりて講談し侍るに甚にたうとみ道にすゝみおはしぬものする事畢て山家へ歸りぬ萬治三年秋七月秋のあはれも常よりも心にふかく

夕風身にしみ胸うちさはぎ侍れば都のかたしきりにいぶかしくとみに旅行に赴きつとめて京につきぬ即吉田へいたり萩原先生の館へとぶらふ先生重き病にかゝり給ひぬよりて病の床を伺ふに先生曰我天年畢なんとすさるから明朝は使を山家へまだし此を告まゝく難掌等にのべきらえぬはからざるに上京あなる嗚呼浮橋なる哉とうめき給ひぬよりて末期の證明并吉田家賴置るゝ遺狀わたし給ひぬ此時滿九二八歳左衛門佐三十六歳御枕本に侍りて遺言承りき晝夜ま從員とひかしづき侍りしに八月十三日神さりおはしぬ吉田山に葬め社をいとなみ神海靈社となづけ侍る視吾堂涙にかきくれ侍りてかくなん

いとせめて今は神代のかたみ共

なからん君のかけをだにみん

何くれ事畢りて東へ下り侍りぬ其後會津左中將正之卿まみへられ侍る世に大儒英才の名あまねかりし問て曰神學は五倫を本とする所は儒も同じかるべし今日本として守る所は何れの理ぞや視吾堂答て曰五倫は人道の當然に侍れば五倫の名目は儒も同ふして其内前後に用ゐる替り侍る儒は孝を以て五倫の第一とし

得て天命なりと心の悦いふばかりなしいなむべからず視吾堂曰いみじき仰ごと心肝に銘じ泪押へがたふ侍るかくいやちこ仰ごとをうけ奉らざること寔にかしこみ奉る相山に隠れ居る身におほけなき吾國の道を任じ侍りて何によりて道の興るよすが侍らんと道は鎌倉山に埋れ絶むこそ神明の罪うるわざに侍る此仰ごとは幾度も辭びたてまつるべし先生いかりおもはてりして曰かくことはりを盡し侍るをさまで隠士はことはりのほどけざることにくそ又汝まかりて申べし今汝に道を傳へぬるとて山を出て世にかゝづらひ道を起されよとはあらず有ふるまゝに相山にかくれおはせよ天命あらば大人招かるべしさもなくばほろぼすべし是亡ふべき時なめりいなむべからずとなん要説此上はうけまつりたまへとしきりにいさめ聞ゆ視吾堂いなむに所なく隨ひまつりて道を附屬し侍る先生いみじう悦おはしぬ視吾堂まかりし時道は汝にて興りぬべし吾はやみぬとのたまひき歸さもよふす比富小路三位賴直卿馬のはなむけにかくならしたひ行ふるさとしやあかす共

なれし都の友はわするな

返し
忘れぬ都をさへに言の葉や

いとゝしのふの種をううらん

年を越て相山へ歸りけらし其後紀伊亞相賴宣卿道を傳へて相山に隠れ住ぬることをきゝてまみえまよくおぼす視吾堂にしたしき者侍るを相山へまだしてまねかる三度に及びて江府に出てまみへ侍る禮を厚くしてまみえおはしぬ信仰淺からず賴宣卿問て曰神道は本朝の道にして上代は此道を以て世を治められ侍るにや視吾堂答て曰しかり問て曰社人神を祭り所作を行ふを神道といへりしかあれば神學は所作を本とするにや答て曰神を祭り所作を行ふをば社人の神道と申侍る是を行法の神道共申侍る天下を治るをば理學の神道と申侍る更に行法を用ること侍らず理學の所作は武藝に侍る問て曰上代神學を以て世を治められし要目は何れの理ぞや答て曰武義を本として仁惠をほどこす是則天瓊矛の德なり瓊矛を以て道の體とし世を治るの本とし侍る是を以て治る時は武備上に盛にして仁惠民にしき平けく安けく四海靜謐に治まる神代伊弉諾天照太神より人代に至まで上代の政法如

翌の日吉田へまかりて萩原先生へまみへ侍りて例のこと物まなびにかよひぬ先生曰この度は旅店を吉田に移してのどかにおはせよとのたまひて吉田村のかたへなる松樂庵といへる庵室にやどりて日ごとにとふらひ侍る年くれ春立かへり野邊の若草もへ出いつしか花もさかりになる比正親町亞相實豐卿しばの戸をたゝひてしめやかにかたらひしに庭前のはなさかりなりければ亞相曰かゝるさかりなる花をみて一首は有べかめり花のおもはんこともむげにこそとそゝのかしすゝめられければかくなむ

しはの戸に花しさかすは白雲の

かゝる山邊に君を見ましや

亞相いとうめでゝ返しははしたなく侍らむとて
心ある花のあるしを花ゆへに

問てうれしきしはのかりいほ

先生曰汝近きほどに講習有べしとなむいまだ讀ほどの力侍らず憚入侍れども仰ごとに従ひ讀侍らむとてやがて開卷をとけり姉小路富小路風早大外記此人々は先生へしたしく侍れば講席へ出られ侍る講ごとに甚だ感賞おはしぬ一日視吾堂和歌をつらねて賢覽に

備ふ

置まよふ霜の下草ふみわけて

道あるかたに行かへるかな

滿座感吟やます其時先生外記種にかへりごとすべきよし仰ごとありよりて返しにかなくむ

今よりやかよふ心の色とみむ

庭のあさちにをける初しも

日數へて講習も竟りぬ先生多賀要説をまたしてきこえ給ふ汝に道を附屬すべし七十年來汝をまち侍るいなむべからず視吾堂驚きいなみて曰冥加の至り身にあまり有がたく侍るしかあれどかるき隱士の身におほけなき道になひ奉らんこと恐れ入侍る且は冥加に盡侍るべしといなみてうけず又重ていはくことはりむべなり我多年の間其人をもとむるに公武地下に道を任する人を得ず其器にあらざる人に道を殘さむはかへりて道を穢し殘る甲斐なきわざなり賢王賢將の代多かめるにかく本國の道として埋り果ぬるもかつは道の量なきにこそ吾は其人あらずばたゝまくなん思ひとりて年月をすぐるほどに老の浪高く重なるまゝに此一つ心にかゝりてすぐしぬ今思はず汝を

人あまたつとひて何くれ物語せし序に人の云けらく吉田の萩原こそ日本の道を代に傳へおはしけりとかや年たかくおはしぬ此人身まかりなばやまとの道は絶べしと聞ぬおしきことにやといへり視吾堂年來此事を心にかけぬるにいみじう聞出し侍るとうれしさたとしへなく相山へ歸りてやがて旅のよそほひを調へ京へのぼりけらし紫野大徳寺にしろ有て旅店に定め兼從先生へまみへまく其ゑにしを尋ね侍れど先生やゝ年たけ多病にして人にまみへ給はずと人のいふになむせんすべなし一日吉田の社へまうで心の願を祈り奉りてかくなん

神のみちしるへばかりにくれ羽鳥

あやしと人のなと思ふらむ

社人に近づき願くは序を以て兼從主へさゝげたまはれかし近き程に又まうでき侍らんとてかへりき四五日ばかり經て吉田へまかりて萩原先生の館へとぶらひしに童子に扶られてまみへたまふうるはしき仰ごとにより神代卷の日來ほどげざる事どもを粗尋侍るにほゝえみ給ひてほどき教へたまふ昔より多くの人にまみへぬるに汝ほど神書にくわしくわたりし人は

あらじと感聞したまふ吾年老多病にして人にまみへざれとも在京の間折々來ませよとねもごろにのたまふしばし侍りてしぞきぬ其後柴の扉の折々とぶらひしに吉田に四十年來講談絶ぬ今度汝の爲に神代之卷を讀べしとなん有難き御惠身にあまり侍るといふ近きほどに神代の開卷おはしぬ幽妙の意味をさとし一座の講ことに胸霧はれて日にすゝみぬ紫野へ歸りてひたぶるに心を書にひそめおもひをこらして夜もすがら机にむかひぬ年くれ春にもなればうらゝかに都おぼしてゑんにのどけしや花の比道にて雨に逢て

春雨はふらはふらなむぬるゝとも

よしや吉田の花の下かけ

日數重りて神代卷竟宴にいたりことぶきむべくしう儀式行はれ侍るおぼろげならぬ御惠海よりもふかし事竟て東へ歸らむとする比我稀なる年におよび身又多病なれば再會期がたし隠士の無力なる身に重て上京の事大儀に侍れど思ふ子細もあれば何とぞ近年のほどに上京あれかしとをゝろに泪もよほされけりかしこみうけたまはりてしぞきけらし翌年の秋七月にいたり又都へたび立日かずふるほどに京に至りぬ

神學承傳記

夫吾國は天地ひらけし始萬州に先だちてあらはれ世界に秀で勝れたる國なり此大八洲國開けぬる時伊弉諾尊伊弉冊尊氣化まし／＼俱生神耦生神多氣化まし／＼しに此神大徳の神明に坐ますゆへ國々こぞりて君とし崇め貴み命令をうけ給りぬ天命をうかいひ五倫の道を建給ひて萬民を教導給ふに君臣の道を以て五倫の本とたて給ひき又萬民の勇義を好む自然の風俗を觀たまひ勇義を以て政道の本とし仁惠を施して四海を治め給ふ是を天瓊矛の徳と云瓊矛は武器なり瓊は玉の名玉といふ謂也勇義ありて惠みを施す體は威ありて懷きしたがふて四海安靜に治る此理を御子天照太神に傳へ給ひて天下を治め給ひ天照太神に至りて瓊矛の徳を三種に述て三種の神器を傳へ給ひて事理を以て御孫瓊々杵尊へ傳へ給ひぬ是を以て代つたへて帝業の重器とあがめたまへり太神瓊々杵尊を日向國高千穗峯へ天降し百王萬代の帝祖と定め給

ふ時天兒屋命天太玉命を輔佐の神としたまひ八百萬神達供奉し給ひぬ天兒屋命有徳にましますゆへ政をゆだね且神學の道統を附屬まし／＼しにより兒屋命の子孫八十連續是を傳へて大織冠鎌足迄道の事理附屬有けり所謂事とは太占の大業神事をいふ理とは治世の君道政を云大織冠までは代々政事にあづかりて神事の職をかねてつかへ奉りおはしぬ神事は幽冥の神慮へ近づき奉りて神事へ通するゆへに尋常の人とり脩がたし大織冠入鹿大臣を誅伐の志を興したまふにより若本意をうけざらましかば我子孫根をたゝれんことを顧みしかあれば道の道統共にほろびんことをいたみて同姓の内其器を撰み中納言伊美麿吉田家元祖を養子として道の事理的々相承ありて吉田兼從先生迄天兒屋命より五十三代の道統におはし侍る視吾堂性閑雅にしてはやうより相州鎌倉山にのがれて相山の月に心をすまし四時の美景を樂み折にふれては和歌をつらねて思ひをのべり素より大和唐の文をよみてみぬよの人をともし侍るさるは我國の道に志ふかく侍りて年來心にかけてぬれど此をしる人なかりしにとみのことありて江府へ立出侍る比或人の館にて

ノ氣カラ地ノ質ヲ生ズルハ相生也地ノ質ヲ天ノ氣
カラヤブルハ相尅ナリ相剋ノ初リハ天ノ氣ノ木カ
ラ火ヲ生テジ質ノ土ヲヤフルガ初也火生レ土トウ
ラハラニナルハ剋也根本尊キハ末レ生ノ土也土金
ヲ以神道全體ヲ貫クコト感心アルベシ中五ノ數五
十鈴ニシテ日神ノ尊バセ玉フモコ、ノ意也惟足翁
ノ傳神道ノ大祕也

右惟足翁土德一篇人雖レ得ニ其傳ニ漢文難レ解故今和
解以具傳授者也

享保廿年乙卯九月

八重垣翁識

ナレドモ天ハ氣ユヘ早ク成就ス丁度泥水ヲ日向ニ
 ヲキテ見ルガ如シ泥水デサヘ半日モ一日モカ、ラ
 ネバカハキ切り堅マラズ地土ノ成就ニモ幾萬年ヲ
 ヘル筈也天ノ火氣十分ノ時地土モ成就スルコト也
 土地成就スルトソノ中ノ金カラ又水ヲ生ズ此水ハ
 開闢ノ時ノ滄海ノ水トカハルコトナシソレヨリ木
 火金水循環シテ生々ヤマズサレドモ是ハ質アル五
 行ユヘ限リアリテツキ亡ルコトアリ丁度人ノ形體
 老衰シ草木枯落スルモ同ジ火氣強ケレバ地土ヒロ
 ガリ地土ヒロガレバ海水カハキ海水カハケバ火ノ
 氣モ亦キエテヨリ所ナシ是ハ皆形ニツクモノハ皆
 如此コ、デ天ノ火ノ氣亡ルト見ヘタレドモ亡ルハ
 皆相剋也親ヲ尅セラレテモ子ガヒカヘテアルユヘ
 剋シ盡スコトナラズシテ又相生ズ總シテ形アルモ
 ノヲ剋シタホスハ形ナキ氣ザシノスルコト也人ノ
 丈夫ナル形モ風ヲヒキ熱ヲ生ジヤミタラル、ハ氣
 ガ來テ剋スル也相生ハアマツコトハリニテ理ノ字
 ヲ埋字ニ用フ相剋ハクニツコトハリニテ義ノ字ヲ
 埋字ニ用フ形ニ五行具レドモ形ト云ヘバ全體ガ土
 ナリ氣ニモ五行具レドモ全體ガ火也土ホド堅キモ

ノヲモ火デ亡スコト也生ズル時ハ木生レ火火生レ土
 トクレドモ剋スル時ハ木尅レ土水尅レ火トクルコト
 也是ガ相生相剋ノヤマヌワケニテ親ト子ノワケ也
 木ノ孫ハ土也火ハ木ノ子也木カラ土ヲ剋スレドモ
 土ノ子ノ金ガヒカヘテアルユヘ剋シ盡サズ助ルモ
 ノアルハ相生也外モ皆其ワケニテ夏ノ末カラ火剋
 レ金ト秋ノ金ヲ剋スレドモ火ノ子ノ土ヲ中ヘウチ
 コミテ六月祓ヲスレバ禍ナシ四季トモニ土用アル
 ヲヘ土德ノ本ナルコト知ベシ火レ剋金モ金ヲトロ
 カスホドノ火ニテモ水ハ金ノ子ユヘ火ニ燒盡サセ
 ズ水剋レ火モ火ニ水ガカハカサレカハキ切ルカト
 思ヘバ滄海ノ水カラ又水氣メグリカヘル
 サテ天火ガ水氣ニ亡サレントシテモ天火ハ君也臣
 下ニ地土アリテ土剋レ水ノ功ヲナスユヘツキセズ
 臣下ガ君ノアタヲフセグナリ土サ^{土ホカ}全ケレバ金ハ中
 ニアリ此金ハ天ヘノボルイキサシノ金也地ノ中ニ
 アル質ノ金ニテハナシ初ハ天ノ五行カラ天先成モ
 土ヨリ相生ジ其土ニハ金一體トナリテアリ後ニ地
 ノ五行ノ出來ルハ天ノ五行ノ火生レ土ニシテ又土
 ガ初リナリサテ天ノ氣地ノ質ト立タル上ニテハ天

未生土之傳

惟 足 翁

天地未_レ剖陰陽不_レ分渾沌溟滓含_レ牙其清陽者起升靡降而爲_レ天重濁者淹滯而爲_レ地於_レ是天地開闢焉

コ、ニ土アリコレヲ未生ノ土ト云コ、ノ場ニ何トテハヤ土ガアルゾト云ヘバ總シテ物ノ出來ントシテハ聚リ靜マラザレバ出來ズ何ガコレホドノ天地ノ出來ルコトユヘ此渾沌含_レ牙ノ内ニデツトアツマルモノアリソコガ土也アツマリタルモノアルユヘソレガ起升リソレガ淹滯テ天地ト開ケタル也人ノ日用デ云ヘバ何事ニヨラズ前ニシヅマリアツマル氣が無_レバ善キコトノ出ヌモ此分ケ也開ケテヨクナルモノハ開ケヌ前ニアツマル土德が無_レバナラヌモノ也ソフシマルトハヤ堅固丈夫ナル氣ノ出テクルハ金也此金モ未生ノ金ニテツヨキ氣ヲ云是未生ノ土生_レ金也其ツヨキ氣ヨリ水氣ノ潤出ル其潤ヒヨリハヤ浮ミ出ハエ出ルイキアルヲ未生ノ金生_レ水水生_レ木ト云サテ此上デ已生ノ木ノ氣トナル

コ、ガ已生ノ水生_レ木ニテ其已生ノ氣ノアタ、カナルヲ木ノ氣ノ春ト云ソノ春ノ氣カラシテアツキ火ノ氣ノ夏ヲ生ズサテアツク炎上ルモノハ上ル内ニ又土ノ氣ヲ生テ半上レバ半沉ムモノアリ火ヲタクニテモ知ルベシタクウチカラ灰トナリ土ノ體アリ是已生ノ火生_レ土也此土ノ氣ヲ土旺ノ土ト云テ土ノ中ニ光アリテ金ヲ生ズル土也コ、ハ秋ノ氣也土ヨリ光リヲウケテクルモノハ金也其金ノ氣ヨリ冬氣ヒヤ、カナル水ヲ生ズソノヒヤ、カニ潤フ内カラ又春ノ氣ヲ吹キ出シ已生ノ金生_レ水水生_レ木トナリ形ハ出來ネドモイキノ循環ヤマズ幾萬年モ氣ハカリテメクル内カラ已生ノ土地ガ出來テクル事也天先成トモアルハ此事也ソノ天ノ氣ノツヨク循環スル勢カラ土ガ土地トカタマリテ此土地ガ金ヲ生ミ金ガ水ヲ生ミ水ガ木ヲ生ミ木ガ火ヲ生ミテ形チアル土金水木火トナリテコレヲ形ノ五行トモ地ノ五行トモ云此土地モ萬年ヲ經テカタマルコト也サテ形チシタル五行ノ内デモ天ニ專ラ屬スルモアリ地ニ專ラ屬スルモアリ木ト火ハ天ニ屬シ金ト水ハ地ニ屬ス天ハ氣也地ハ質也天地一時ニ開クル様

爲_二親讐_一是於守_二金克_一木之義不_レ負獨立然火木子故
 金有_二親讐之義_一是以火克_レ金相克而地金蕩溶而爲_二火
 氣_一耳然水金子故火爲_二親讐_一是以水克_レ火相克而火氣
 消盡而爲_二水氣_一耳其克_レ火之水氣也者本開闢滄海水
 而所_レ樹_二燥於天之火氣_一雖_レ不_レ知_二其所_一在也然水氣
 回固有_レ時而如_レ有_二定數_一焉故於_二報_一讐之時_一水氣乃
 回來以消_二盡火氣_一而爲_二水氣_一耳蓋已生未_レ生一故天
 火爲_レ君地土爲_レ臣矣有_二君讐臣報_一讐之義_一是以土克
 水相克而爲_二土氣_一而已其克_レ水之土氣也者已生地土
 爲_二一氣_一所_レ克潰然喪_レ形以雖_レ不_レ知_二其所_一在也然土
 氣復固有_レ時而如有_二定數_一焉故於_二報_一讐之時_一土氣乃
 復來實報_レ讐而惟爲_二土氣_一而已此土氣之裏復自生_二
 君金_一矣此君金固君土包具者於_二是時_一五行相生復所_レ
 以始當_レ行之理真具_二于其中_一處所謂天地未_レ剖陰陽
 不_レ分渾沌溟滓而含_レ牙未_レ生之君土復處矣其唯一君
 土生_二具君金_一也者卽是未_レ生土也於戲未_レ生土也者其
 至矣

中嶋延守吾道を學事十とせ餘り螢雪の窓光空しから
 ず或時は雲霧をしのぎ西に東に行かふにも影のごと
 くにしたがひ寸陰を惜むつゐに精功のいさをしを積
 て其幽遠を探る抑相生幾度めぐり相尅各一度轉じて
 唯一の土にもとづく工夫且又理義をそなへ其意味誠
 に至れりむべ吾道のしるしとするにたらんかよりて
 いさゝか情をのぶる事しかり

延寶七年七月吉曜

天兒屋根命五十四代嫡傳

相山隱士惟足謹書

土德篇

天地未剖陰陽不分渾沌溟滓而含牙其清陽者起升靡降而爲天重濁者淹滯而爲地於是天地開闢焉蓋以五行相生之序言之則天地未剖陰陽不分渾沌溟滓而含牙者未生土也其未生土土生金相生而爲金氣其金氣金生水相生而爲水氣其水氣水生木相生而木氣發生焉春木故於春木氣始發生其所發之木氣木生火相生而火氣成焉夏火故於夏火氣炎上其所炎上之火氣不升不降所備其位於中處固中央之氣而遷夏火于秋金間火生土之時而五行相生之旺氣土也其五行相生之旺氣土土生金相生而金氣成焉秋金故於秋金氣始收斂其所收斂之金氣金生水相生而水氣成焉冬水故於冬水氣潤下其所潤下之水氣裏復具可發生之理於春木氣乃發生而天之五行相生循環歷幾日幾年之後自重濁者淹滯而爲地焉土生金故地土生金金生水故金生水水生木故自水木氣發生之迹木乃生木生火故木

中生火之理備焉於是地之五行生成又分天地以言之則天具木火地具金水故天之火氣有餘之跡地土自生焉歷幾日幾年之後地土成就焉地土既成就乃土中生金故水自生此水與開闢滄海水一天地雖異位水一而不貳也其天地所同之水水生木木氣發生木生火火生土土生金金生水相生而水復木氣發生而生生如無窮然有始則莫不有終也有質則莫不滅也是氣有限也是故天之火氣有餘之跡地土廣處地土廣處則海水隨乾及其極則海水竭海水竭則火氣無所託而自消盡徒爲陸而已譬如這燈火氣有餘而皿中素地多皿中素地多則膏油隨燥及其極則膏油竭膏油竭則火氣無所託而消盡矣其土窮水火竭一時而非有漸以也蓋水木火竭也乃天之所沒滅也然於地土金未喪也雖土金未喪也水木火既竭則五行相生之氣窮五行相生之氣既窮則所以五行相生之理亦自理矣於是五行相克始當行時而相克所以方行義既已至焉相克所以行之義與相生所以行之義理二而一一而二者故隨其義所無形體之一氣以下所有形體之土上木克土相克而地土潰然喪形矣其一氣雖克土未能溶土中金且金土子故木

き。日本の家廟のいにしへのごとくもあらざるは。祠官ならずとも。心あらん人のなげくべき事ならんか。問曰倭姫命は何れの皇女にてましますぞや

答曰倭姫世記に。倭姫皇女は。垂仁天皇第二女也。生而貌容甚麗。幼而聰明叡智。意貞潔通神明^{利倍}。故皇御孫尊乃爲御杖代^{豆奉}。頂^ニ太神^ニ。從^ニ美和之御諸宮^ニ。發給^ニ天願給國求奉^支と侍り。其後五十鈴川上に。内宮をしづめ奉り御在任百卅餘年ましゝき。事長ければ畧し侍る。又同記に。大足彥忍代別天皇廿年庚寅歲。倭姫命年既老耆不能仕。吾足^{止奴宣}。齋内親王仁仕奉物部八十氏人々定給^天十二司寮官等^{波奉}。移^ニ五百野皇女久須姫命。即春二月辛巳朔甲申。遣^ニ五百野皇女於^一皇太神乃御杖代^{天止志}。多氣宮造奉^天齋慎美令^支侍給^{利倍}伊勢齋宮群行始是也。爰倭姫命。宇治機殿乃磯宮坐給^奉。日神祀^{止無}倦焉といへり。或記には。多氣宮は。天長二年に始といへど。倭姫世記の説はかくのごとし。其後ほるかに御壽命を保たまひ。雄略天皇廿二年に。外宮を又御鎮坐したまひき。同世記に。至^ニ大泊瀬稚武天皇御宇^一自退薨云或記に雄略天皇即位廿三年己未歲。春二月倭姫命自退^ニ尾上山峯^ニ石隱坐^一といへり。

凡御壽命五百歲あまり歟。倭姫命の御事を。今の世人あまねくしり侍らぬも神道あきらかならぬゆへにや。二宮の神祕は大方此聖女より傳へたると見えた。り。おろそかにやはおもふべき。神道山のふかき理ありとは。御裳濯川の流の絶せぬ御代にてもしるべきことならん

々そのかみの。十が一にも及がたし。三百年來は。宮中にて。神事行ふ殿舎。又重々の御垣等も。いつとなくたえて。名のみなるもあり。又豐鋤入姫命より。七十五代相續きし齋王も。彥子内親王より御任しもなし。しかば齋宮の跡は。少き森の内に黒木の鳥居立たれど。あたりは民の栖となりて。彼黍離々たるありさまむなしく竹の都の名のみにまりてむかしをしたふあはれを催し。又離宮院。神服機殿。麻績機殿なども取立人なければ。其しるしばかりなり。又末社の遙拜所は寛永年中に。御再興あれど。其社の在所は。地領となりしより誰改むる事もなく。畑にすかれしやらん。野となりしやらん。慥に知人もまれなる多し。ことさら尊ぶべき。倭姫命の石隠れし給所の今神領の内なるさへ知人もすくなし又二月九日祈年の御祭の奉幣使も参向なければ。兩宮ともに御祭もたえてなく。春秋の祈年穀の奉幣使もたえ。六月の御祭。十二月の御祭の奉幣もたえて。今は御祭を禰宜等つとむるまでなり。是皆かならずなくてかなはぬ事なれど中絶しぬ。又大奉幣。臨時の奉幣と云事ありて年中には幾度も。王氏中臣。齋部。卜部の四姓の官人参向

せしに。近頃再興の。九月の御祭の例幣のみなり。又神官も名ばかりは殘。任する我人なきもあまたにて。大司。權大司。少司として三員ありし。宮司も。近代は大司一員なり。司中兄部。檢非違使。又神宮にも。官符權禰宜のたぐひ又郡司。神三郡惣追捕使。諸郷刀禰其外も品々ある事なれど。其役なければ。今はなし。たい祭主。大司正禰宜。權禰宜。物忌。玉串。大小内人のたぐひまでなり。又正權禰宜の位階は。天子御即位の賞に必一級を賜り。御祈の賞など打續の時は。一年二度も。位進みもて行故に。一禰宜は三位にのぼり。正權禰宜は四位まですゝみしかども。天正十五年に後陽成院の御代始の賞おこなひ給ひしより。惣位階賜る事も中絶せしかば。この頃は正權禰宜ともに。五位よりのぼる事もなし。又許多の神領なくなりしより。便なければ年中の神事の内にも。形ばかり取おこなふもあり。名のみなるもあり。我祠官なれば。神宮の古記反古など見る度に。宗廟のおとろへをなげく事。骨髓に入侍るしらすは中々。うかるまじ。何時か兩太神宮も。いにしへのさかへとなるべきぞや。さかへまじき所々は日に添て繁昌し。天下と共にさかゆべ

に依て。禰宜三人上洛し式日延引の事を。御とがめありける其後又式にたがひ康永二年十二月廿八日内宮正遷宮より。廿一年を式年のごとく用成ぬ。しかれども廿一年にさへたがふ事も。亦度々にて寛正三年十月廿七日内宮正遷宮ありしより。天正十三年十月十三日正遷宮まで百廿四年延引す。非例の甚事也。又外宮は永享六年式月式日正遷宮より永祿六年式月廿三日正遷宮まで。百三十年非常の延引也其後天正十三年十月十五日正遷宮ありしより。兩宮同年とはなれり。又假殿遷宮は。往古より式を用ずといへども。

兩宮同日の事はなければ遷御の先後を。あらそう事もなかりしに。永正十八年よりぞ。あらそひははじまりける。但兩宮遷御之先後は。叡慮にあるべき事なれば下として祠官の。とかく云べき事にてはなし。予も亦祠官なれど。權任の身ななれば。又兩宮の正員の上をも。是非すべき事ならねど。二宮の御爲に。人のそしりをかへり見ず。言に出し侍。凡むかしより。たがひにかたんとする心にて。何事につけてもあらそふは。黒心の至極なり。よく元本をかんがへなば。外宮の祠官は先祖の二宮を兼行ひし。そのかみの心を察

し。内宮を仰ぎ尊み。二宮一光の理を知て。偏執すべからず。又内宮の祠官も。外宮は天照太神の由て出たまふ尊神にて。殊に皇孫尊さへ。相殿にましませば。兩宮一致の思ひをなし。外宮をあふぎ尊ひ。兩宮の祠官は。水魚のおもひをなすべき事ならんに。尊神の威をあらそふ故。廣く世の人のまどひともなる事は。かの佛氏の宗々の互にあらそひをしるありさまに。あやかりけるかと。いとあさまし。

問曰。兩宮の榮も。いにしへより今は遙にまさりたりと云人あり。しかるをいにしへをしたふ事略其故を聞ん。

答曰。人ごとにかく云事なれど。今を知て。いにしへをしらぬは。夏の虫の氷を疑に似たり。それ兩太神宮も。尊氏の御時より。秀吉の御時まで。年月に添て衰微せしを。今の御時に。二見郷と前山をかへし賜り。又未社の遙拜所御再興あり。ことに聖武天皇の御宇より始めて。嘉暦年中迄百十余度ありし。公卿勅使の中絶せしをも。御興し有。其後は絶す九月の御祭の例幣あり。又近代は廿一年毎に造替御遷宮もあれば。尤兩太神宮のいにしへに立歸給ふべき端なれど。中

坐の時も。天村雲命の末孫。大佐々命。二所太神宮の大神主となり。それより猶代々二宮の神事を兼行しに。天武天皇即位元年に。太神主職を停て。兩宮に一人づゝ。禰宜を置給ひぬ。されども大佐々命の末孫。志巳夫は内宮の禰宜。兄虫は外宮の禰宜とし。伯父と姪と。二宮の神事を職りき。まかれど志巳夫に子なき故持統天皇の御宇に天見通命の十八世の孫。荒木田の野守を。禰宜に補し給ふより。内宮は荒木田の神主。外宮は度會の神主と別れ互に神徳の勝劣をあらそふ端出來りしに貞觀七年に。内宮の禰宜繼長。寶龜格文を考て。外宮の禰宜眞水にもまらせぬき出て。上奏せしかば。内宮は内階に叙し。外宮は同時に上奏せざる故に。まばらく外階に叙しぬ。其後は便を求て尊神の高卑を密奏せしにや。尊神には高下をつけ給ふ。御代もありしと見えたり。さればかくのごとく折にふれ。あらそふ事ありしに。永仁四年より。外宮の禰宜の解狀に。皇字を載べからず。載べきとの甚しきあらそひ出來てたがひに奏聞を経き。又元弘年中には。詔刀師職をあらそひ内宮より京へ申せしを。外宮より返答せし事もあり。其後又文明より延徳年中

迄。兩宮の神官合戦に及。中々あさましき事もありき。又永正十八年六月十三日。兩宮同日同夜の假殿御遷宮より。遷御の先後をあらそふ事出來りぬ。又天正十三年より造替御遷宮も。兩宮同年にあたれば。御遷宮の毎度前後のあらそひやむ事なし。それ正遷宮は天武天皇即位十四年九月十日勅定にて二十年を式年と定。九月を式月とし。十五日は外宮。十六日は内宮の式日に定り。持統天皇四年に。内宮正遷宮あり。同六年に。外宮正遷宮ありしより。兩宮たがひに式を守て違例もなし。爰に天平元年内宮正遷宮あり。和銅二年より廿一年なり。又天平四年外宮正遷宮あり。和同四年より廿二年にあたれり。非常の故ある時は。式にたがふ事ありといへども。兩宮ともに式年にたがふは。是始なり。又延暦四年式月十八日に内宮正遷宮あり。風雨の故なれども。式日たがひしは。是始なり。其後承元三年八月廿日に内宮正遷宮あり。式月たがひし事は是始となり。如此非常の故ある時は式を用ぬ事もありといへど。猶代々式を守りしに。又建長元年外宮正遷宮未作に依て。式日延引して。式月廿六日に遷御ありしに。叡慮おだやかならずして。兩年まで召

より。後に御鎮坐なり。對する時は内宮を日神と號し。外宮を月神と號す。月神と申奉るとて。月讀尊の御事にてはなし。國常立尊は一水の徳の神にてまします故に。内宮火徳の日神に對して。外宮水徳の月神と習事なり。月讀尊は。内宮にも外宮にも。別宮にましますば。惑べき事ならず猶ふかき習あり。或皇孫尊相殿にまします事を云らで。外宮は皇孫尊にてましますと云人あり。或は丹州奈具社の神を御饌都神といへば。外宮御氣津津神の尊號と相通る故に。水は御氣津の略語なる事をわきまへずして。外宮は奈具の社の天女と。同體の神にてましますなどいふやからもあり。奈具社の天女は外宮の酒殿の神にてまします。伴の子細は。其祠堂ならずして。あまねく人の。ゑるべき事ならねど。世人二宮を。偏頗しておもふ方もあれば。口外に出すものなり。天照者二宮之通稱。太神者大廟之本號とも。古記に傳れば。いよく偏頗すべからざる事歟。祠堂さへも。其故わきまへず。往々に其神の高卑をあらそふは二所尊神の御心に。かなひがたき事ならん。陰陽晝夜。兩眼兩手。何れを廢して可ならんや二宮一光の理。よく

わきまふべし。かたそぎの千木は内外にかはれども。ちかひは同じ伊勢の神垣と。福宜從三位朝棟のよめるにても。ゑるべき理なり。何れに付てもあらそひの起は。末にての事なれば。深く元本を探るべし。吾祭奉^レ仕之時先可^レ奉^レ祭止由氣太神^一との。内宮の御神託により。外宮の諸神事。參詣の次第などの先なるを見ては。外宮は國常立尊にて諸神の元なれば。内宮より過て尊き神にてましますと。おもふやからもあり。是甚僻事なり。諸神事參詣之前後にて。尊神の高卑は定めがたし。又内宮は天照太神にて。國土のあるじの始の尊神其上内宮の御神託により。外宮も御鎮坐なれば。内宮の神の尊きに。外宮の神の及べき事ならずと云やからもあり。愚なる了管なり。末代の凡夫の習といひながら。尊神に高卑を付て。これを上とし。かれを下とする事。言語道斷なり。抑二宮の祠堂。二所太神宮の高下をあらそふ其由來をたづぬるに。垂仁天皇の御宇に。度會神主の祖。天村雲命^{アマムラクモノミコト}の孫。大若子命^{オホニギヒコト}を大神主に補し給ひ荒木田神主の祖。天見通命^{アメミトスノミコト}の孫。伊呂比命^{イロハヒノミコト}の兒。宇太太采禰奈^{ウタタミナ}を。大物忌に定め給より。代々其職をつかさどりぬ其後外宮御鎮

答曰往古より異國の曆を用て臣たる國の。かの國法に_二たがはぬは。君を無するなれば。我執にして天の道にそむくものなり。我國は上代より。今の代に至るまで。異國の年號を載たる曆を。用たる例一度もなし。そのうへ神明の御託宣に。從人。本_三天地_二續_レ命。祀_三皇祖_二標_レ德。深_三其源根_二恭_三宗廟神_二。令_下朝_三四方之國_二觀_中天位之貴_上弘_二大業_一明_二天下_一よと侍をや。深味ふべし。我國法を本として。かの國の法にも考て斟酌し。時に隨て用ひば可ならんか。理は異國の理。我國の理とて。二つなければども。法は形にあらはれたるものなれば。差別あり。是我執に似たれども。公道なり。たとへば我親をたつとぶは。私に似たれども。人々たつとぶ道なれば。是私に似たる。公道ぞかし。此理は儒書にも見えたり。ことに神道のたつとぶところなり。

問曰和國の法も。古書なければ知がたし。都鄙共に神書古書祕する子細は。如何。答曰大方私意より起たる事ならん。但祕する事も。なくてかなはぬ故あり。たとへば兩太神宮にては。御神體奉仕記。心御柱記などの類他家に傳て其益なく。殉に一大事の故あれ

ば。其職ならぬ人に。深祕するは尤理なり。又中古より出たる書は。兩部習合の神書おほく。殊更無眼の者の所作の。却而世をまどはす書なれば。祕するも理なり。かの天下にあまねくすべき神書。殊に律令。格式。國史の類まで祕するは。甚邪なる事ならん。佛教は其書かくす事なく。あまねくする故に。天下に流布し。神國は佛國。國人は佛奴と變じぬ。是は和國の神書古書邪祕して。人しらぬ故ならずや。倭姫の屏_三佛法息_二との御誠も。今は用ぬ世となりぬ。それ我國の神道も。天竺までこそ流布せずとも。神國を變じて。佛國となすまでは。あまりなる事ならずや心あらん人はおもふべき事なり。

問曰。内宮は。日神。外宮は月神にてましますと云。云。云。からは外宮は月讀尊にてましますならんに。それを國常立尊と云いぶかしいかん。

答曰。此事深祕の其一なれども。祠官たがひに其神の德をあらそひ。世人も亦惑事なれば。略其子細を云べし。尊神御出生の次第をいへば。外宮は先にして國常立尊。内宮は後にして天照太神なり。又御鎮坐をいへば。内宮は先にして。外宮は内宮の御告に

ますといふは。いつはりなるか。答曰我國に佛法わ
たらぬ以前に。兩大神宮に御鎮坐なれば。御鎮坐のは
じめは。本地佛と云沙汰もなし。兩部習合より。佛と
は申出し附會したるものなり。むかし聖武天皇。東大
寺の大佛御建立の時。行基を勅使にて。伊勢太神宮に
いのりたまひしに神殿の御戸開て。太神神勅ありし
など。歸京して奏聞せられしを。聖武いかゞおぼし
けん。天平十四年十一月三日に。橘諸兄公を勅使とし
て。重て太神宮へつかはされしには何の神勅もなか
りしに。同十一日の夜。天皇の御夢に。太神宮は。本地
大日と。御覽ありしよりぞ。兩部習合は。はじまりけ
る。聖武天皇の御夢と。行基の聞れし神勅とのみに
て。諸兄公には。何の神勅も夢もなし。いとあやし。思
慮すべき事なり。聖武は佛法歸依の天皇にてましま
せばおもひねの御夢はあるべし。行基の聞れし神勅
はいぶかし。か様の事の。世に用ひらるゝにて。是非
非となり。非は是となり。神道もおとろふる事なり。
まどはさるゝ事なかれ。

問曰。佛法の流の幣も名利より出しと覺侍る。佛は名
利をいとひ捨給ふに。流をくむものゝ名利に溺て。兩

部習合など云事を。作出せると見えたり。名利は神道
にも。いとひ捨べき事歟。

答曰神道には。名利を捨す。名利を求めず。をのづか
らなる名利は。何ぞいとひすてん。但求るは。をのづ
からにてなければ。神道にそむくものなり。名利の欲
は捨て。名利は捨べき物にあらず。名は實の實なれ
ば。實と相應の名は神道にいとひ捨る事にてはなし。
但實もなくて虚名を好み求るは。甚しく神道にそむ
くものなり。神道は正直を本とす。實の名なりとも。
求るは名に心あればをのづからの名にあらず。まし
て虚名を求るは。黒心なり。則證據あり鏡を見て知べ
し利も亦求べき事にあらず求れば却て害あり。又い
とひ捨べきものならず。いとひ捨ては。人の生命たも
ちがたし。但凡夫は。心引方に落入ものなれば。名利
はいとひ捨る程に工夫せずば必ず名利にまよひて。
根國に没落すべし。名を好心にかへて。義を好み。利
を好む心にかへて。仁に好みなば。神道ならんかし。
問曰。名利を不_レ捨不_レ求ることはよりはきゝぬ但我執
は神道の取所にあらざらん。吾國法を尊て。異國の
法に去たがはじとは。是又我執ならんか。

み心得て。本心をわすれたる人は。余所の實を羨尊ぶに同じ。何の益なき事なり。其上神明の教にも。そむくものなり。よく工夫すべし。

問曰雄略帝の御宇に。倭姫命の屏佛法息と禁じ給にまかせて。今に兩太神宮に僧尼をいむとなれど。欽明帝の御宇に渡し佛法を。數十年以前に。いめよとの禁令信じかたき事なり。後人の筆跡なるべし。

答曰。日本紀には。神功皇后。應神天皇の御宇に。三韓と始て通じたと見へことさら神宮の古記には。開化天皇の御宇に。異國と通じたと見えなれば。漢土へ佛法の渡らぬ以前に。日本と漢と通ぜし事あきらかなり。其後後漢明帝の時。漢土に佛法渡たれば。日本へ佛法こそわたらねども。其名きこえたるならん。

問曰佛法をいむ子細如何。

答曰説々あまたあれど何を證據としがたし。只倭姫命。の禁誡にまかせていむ事なり。若むかしより。此禁誡を不用して僧尼をゆるしなば宗廟の古法は。かたばかりも。今にのこるまじ諸國の神社を見てしるべし。祠官は社僧の奴のごとなりて。神殿は變じて。佛殿となりぬ。二宮などにては言をさへ替て。あ

らゝぎと云て。いむ塔なるを諸社には立置て。神のいなきとも見えす。是我國の古法ならんや。未來をかいみ給ひ。屏佛法息よとの禁令。ありがたき事なり。なを未代も。彌此禁誡を。まもるべき事歟

問曰。佛法をいみ給ふは。あしき法なるか。

答曰。釋迦は天竺の聖人にてましますと聞ば。尊き法なるべし。但倭姫は。其法の源をいみたまふやらん。其法の流をいみたまふやらん。知がたし。中世より神道の名をかりて。兩部習合などゝし。神明をかすめて。我佛とする事は。佛法の流の幣なれば。それを未然にかんがみたまふ事もあるべし上代に生たりとも。其子細倭姫命に。問奉らずばしりがたし。まして今より知べきや。かやうの事は。人のあやしみをしらん事なれど此禁誡をかくし。僧尼に力をあはせん事は。冥の照監も。をそれあるものなれば。言に出し侍る。僧尼は佛の道を行じて有てよかし。神社にさへ入交て社僧などになれど。佛教にも侍るにや。いとあやし左物を右にうつすとはかやうの事なり深おもふべし。

問曰。しからは兩宮の御本地は。兩部の大日にてまし

じて。其理をさとりべし。問所のごとく。狐狸のしわざ。又人の僞もあまたある事なり。まよふべからず。問曰。まことに其理をしらば。神變奇特にもまよふべからず。しかれど其理をしる道は如何。

答曰。千早振神代には。人のこゝろもすなほなれば。觀天文。察地理してさとりしぞかし。世くだりて人正直ならざるにより。教といふ事出來しなり。しかれども我國の上代より。つたへし記録などは。蘇我の蝦夷が難にやけて亡ぬ。其以前應神。仁徳の御代にさへ。此國の教も末になりたるにや。百濟より王仁と云賢人わたりて教へ。又繼體帝の御宇には。五經に博士をひて。渡し事もあり況其教し書も國記も亡ぬれば。闇夜の如くなる世となりしかど又其かたはし聞つたへし事などしるしといめて。今にのこせり。しかれどむかしに立歸代ともならぬにて蝦夷が回祿以前の教には以の外おとりぬる事もしられぬ。其後我國の所々にありし學校もおとろへし折を得て。兩部習合の神道おこり。いよく其本を失て。神書は變じて。佛書となりしかば。神道も衰微して若存若亡。しかれども蝦夷が火をも經ずして上代よりの神

記。二所太神宮に残れり。されど是も亦。代々の禰宜神主。兩部習合にまどひて。かの言を取て。加筆の事のみ。半に過ぬれば信じがたき事有。但上代より傳たる事と佛語を用たる所とは。黑白別たる事なれば。其に付て熟讀し。工夫を用ひ。正直の教。任本心よとの教擧。一心之定準よとの教を。むねとして。聖經賢傳をも見て工夫し任本心正直ならんには其理あきらかならんか。

問曰。心は神明の舍なれば一心の外に神はなしといへば。祭などと云事も。無用の事。迷の者のする事也と云人あり。いかに。

答曰。一心の外に神なしとは。一心の理の外に異なる神はなしとの事なり。灯をさして。此火の外に火はなしと云たるに同じ。さりとていづかたにも。火なき事あらんや。此火にちがひ。又異なる火と云物はなきとなり。あしく心得て。宗廟社稷の神はなきものなり。祭禮もいたづら事なりなどいふやからは。一心の量をせばく見て。一向偏見のものなり。灯を見て。火と云ものは。是ばかりにて國土に火ともしたる所はあらじとおもふにひとし。又外に神ありとの

時。御神體。猛火の中より飛出給て。或は御前松樹の枝にかゝりまし。或は御前の黒山の頂にましましき。内宮は火徳の神にてましますといふ習ある事なるに。其ゑるし少もたがはず。又靈龜三年八月十六日洪水の時と。貞觀十五年八月十三日。洪水の時と。外宮の正殿のあたりを。水一丈さけて。井のごとくがちしかば御垣諸の殿舎は。顛倒せしかども。正殿は水さけし故に少も損せず。誠に外宮は水徳の神にてましますと習有。そのゑるし少もたがはず。又天仁二年には。外宮内宮共に。心御柱朽損じ顛倒し給ふに依て。明る天永元年に二所太神宮ともに。假殿御遷宮あり。大治元年には。内宮心御柱を覆ひ奉る御櫛を。鹿來て喰損じ。保延五年十月廿九日には。内宮古殿の心御柱朽損じて顛倒ましましき。是皆鳥羽崇徳の御心。神慮にたがひたまふ故にや。久安五年には。内宮心御柱を卷奉る布破損しぬ依て同六年に。あらためて。山口祭勤行して。心御柱を採替奉れり。されどやがて保元の乱出來ぬ。安元三年には外宮の心御柱を卷奉る布を鳥來てけがし奉りぬ。頼て壽永の大乱あり。文治六年四月十一日の未刻に。内宮

の心御柱朽損し。顛倒まし。けるを見付て。奏聞せしかば。同廿日に御卜あり。當年九月十六日に一度の式年式日なれば造替遷宮あるべけれども。すてをきがたき大事なる故に。先八月廿五日に假殿遷宮ありて。心御柱を立替奉りき。是も後鳥羽の御心。神慮にたがひたまふ故にや。其後承久の大乱ありき。元亨元年には。内宮心御柱を纏奉る布を。鼠喰損せし故假殿遷宮ありき。かれども程なく元弘。建武の大乱ありき。應仁年中には内宮心御柱ましまさざるの間禰宜等連署解狀を以て。二十餘度迄註進せしむといへども御驚もなかりしに。天下の大乱出來ぬ。其後も如此の奇瑞いくらともなくあり。抑心御柱と申奉るは。皇帝之命國家之固。神明之徳也といへり。中極の表。至て深祕の事なれば其子細。口外すべき事ならず人主の御心たがふ時は。大乱出來る物なるをかねて御つゝしみのため。心御柱の御示現ありがたく侍ぞや今とても奇特神變有。予が身に及でも見聞事もありしぞかし。但其神變奇特をのみ尊ぶは。神道のとる所にあらず。よく神道だに明にさとりたらんには。加様の事も。其理あきらかならんか。神を尊び。神道を身に行

神の後裔。又は祠官の祭は。凡人とは隔別なり。爰には神明の飛たまふ。かしこには。何の太明神の飛給しなど。云巫覡の妄言を信じ。國々所々に其神にあらざるを祭は非禮也。祈とは。或は主君父母の病腦などを。臣下忠誠の情を以いのり。又は孝子迫切の心を以祈ば。などか其誠を神も請たまはざらんや。或は天下國家。又身の上の災害を。いまだきざゝざるさきに神に詣て祈り又坐ながらも祈るは。なくてかなはぬ道理なり。我國のみにあらずもろこしにも。天子ならでは。天をば祭給はざれども庶人も天に祈にて。其理知べし

問曰祭と祈との分ある事は聞ぬ但祈て其ゑるしあるもあり。又何のゑるしなきもあるはいかに

答曰神の祈をうけたまふと。請たまはざるは其人の誠と不誠とにある事なり。誠に神に祈に。其ゑるしなきとおもふとも身にかへりて自の誠いまだいたらざるとおもふべしゆめく神を怨むる事なかれ。是神道也武王は聖人にてましませども。御病腦の時に。周公祈給ふぞかし末代の凡夫のをかせる過もなきものがほにて。神にいのる事もなく。心だに誠の道にか

なひなばいのらずとても。神やまもらんと云歌を。あしく心得て口にしき。誠の道にかなひたるかほなるは。甚僻事なり。誠の道にかなひたる人は。聖人なりからくしくおもふべからず。其上いのらずとても神やまもらん。ましていのらば。猶まもらんと云心詞の外にあるをや。

問曰。今の世に誠の道にかなひたる人はなからん。凡黒心の人のみなれば其祈は神もうけ給はじ。ゑかれど愚人の祈にも。まれくそのゑるしのあるはいかに。答曰聖人の祈は。金中の金のごとし。愚人の祈も。ゑばらく誠なるは。砂中の金なれば。砂こそとらざらめ金はとらざらんや。愚者の誠ならざる祈は。砂中の砂のごとくなれば。いかでか神のうけ給ん。

問曰。神に祈る道は聞ぬ。日本國の神社に不思議奇特のあるは。神のなし給ふ事か。又狐狸などのゑわざかはかりがたし。

答曰往古より。二宮のうちにても奇怪ありし事は。舊記のゑるす所其數あげて云がたし其中にも。殊にありがたく侍るは。寶龜十年八月五日の夜。丑刻。内宮回祿の時と。又延暦十年八月五日夜子刻内宮炎上の

の義をつとむるは。則神道なり。しかりとて民の義をつとむる計にて。神を疎にせよとにもあらず。宗廟社稷神は天下國家の尊ばでかなはざるところなり。よくわきまふべし

問曰。世間に何事とはしらねども。神道とてたうとく。おもふは。神祇の祭禮にたづさはる人の束帶し或は衣冠し手に笏をとり。玉串持などして。口には神語などとなふるをこそ。神道とおもふに。其外民の義をつとむるも。神道といふべきや。

答曰。玉串を持。神語唱る事等は。祭庭などの儀式。是も亦神道の一事にして。尤重しとする所なり。されど此事計を。神道と思ふは。天を管の穴より覗きたるに等し。管の穴より見たるも。天にてなきにはあらねど。そののみは餘りにせばき事也。それ神道と云は。人々日用の間にありて。一事として。神道あらずと云事なし。君神道を以。下にのぞきたまふ時は。仁君なり。臣神道を以。君につかへ奉るときは。忠臣也。父神道を以。子をやしなふ時は。慈父なり。子神道を以。父母につかふときは。孝子也。夫婦。兄弟。朋友の間も神道を以まじはる事ぞかし。其外飲食するにも神道

あり。手を舉るにも。足を舉るにも。神道あらずと云事なし。神書を讀て神名など覚え。拍_レ手祝詞などよむ計神道ならば。農圃醫卜の術よりは。猶せばき道なるべしかたじけなくも。天御中至尊。天照太神の。天の御量柱を。中國に立給てよりこのかた。時代により。用捨こそあらめ。予_レ今絶せぬ神道なれば。天地と無窮なるべきものなり。されば神の御誓にも。寶祚のつたはらん事天壤と無窮けんとの御言たがはずして。今上皇帝まで傳はりたまふ事。異國にも曾てそのためしなし。ありがたき事にあらずや。これにて神道の最上の道なる事はしるべし。

問曰。神道の廣大にして。最上の道なる事は聞ぬ。非_ニ其鬼_ニ而祭は謫なりと。孔子ものたまへり。しからは其神にあらずば。祭いの事も。あるまじき理にてあるべきか。

答曰。孔子のたまふごとく。其祭べき所の神ならずしてまつるは。へつらひなり。しかれど祭と祈と分別ある事ぞかし。伊勢兩太神宮にも。三姓の氏人として大中臣は祭主と。宮司に任じ。荒木田と度會は禰宜に補し。勅命によりてまつる。全く自分の祭にはあらず其

陽復記下

或問曰。子が云所の神道は。儒道の見解にしてかくいふや。儒の見解ならば用がたし。

答曰。しからず我祠堂なれば。神道に志ある事年久。しかれども傳るに其人なく。見に其書まれ也。近比故家に求。他邦に尋て。神書數卷を得て。是をうかいひ見て。ほい其理を得たる事かくのごとし其間に儒書のことを以。とほる事は彌神道をあかさんため又腐儒の僻見を破らんがためなり。我儒書のかたはしうかいひたるとて何の儒の見と云事あらんや。暗にかなふ所あらば。眞儒のとるべき事ならん。たとひ儒道の見解なりとも。神道にそむかずは何ぞいまんや。倭姫の禁令にも。屏_ニ佛法息_一とは侍れども。儒をさけよとの事はなし。其上今世神語は人の耳に遠く。又神書にとほしければ。事たらぬ事のみ多し其闕を補むには。佛語は禁令なれば用がたし。儒書の詞ならずして。何を用んや。殊更往古より。儒典をかりて神道をあかせし例あまたあるをや。たとへば。我國にも。異

國にも藥種はあれど。若我國の藥種すくなき時に。異國の藥種なりとて。用ぬは我執なり。我國の藥種すくなき時はかの國の藥種を用て。病をいやしてよ。但孔子の道の。神道にひとしからぬ所を。用よとはあらず。その人の心得によるべき事なり。制度文爲のちがひをさして。孔子の道と神道と。ちがひめありといはい。かはりあるべし制度文爲は異國にても。時代によりかはる事もまして其法を。我國に用るにをいてをや。異國には宗廟を祭に。牛羊のたぐひを専用ゆ。我國の宗廟には。牛。馬。猪。鹿。犬。豕。熊。猿。羚羊の類を。曾て不用してしかも甚いむ。かやうの法は。何ぞ我國法にしたがはざらんや。此等にて。萬制度にはかはりある事。可_ニ心得_一也

問曰。論語に。務_ニ民之義_一。敬_ニ鬼神_一而遠_レ之よと侍れば。我國の神道にも近づくは孔子の道にあらじ。孔子の道と神道とは。以の外ちがひありと覺侍る

答曰。敬_ニ鬼神_一而遠_レ之とは。鬼神になれちかづかずして尊敬せよと也。朝暮神事にまじはり。神に仕奉る祠官さへ。なれ不_レ近して。甚敬するぞかし。まして其職にあらざる人をや。但神道をさけよとはあらず民

てゆくも何ゆへぞや。神道と云名をだに知人もまれになり。書は故家にかたばかり残れど。我家のかざりとや云ふらん自も見ず。まして他にも見せず。虫や鼠の巢となりて朽る。かへれば三百年來次第々に神地も變じ。伊勢の國司と仰ぐ。北畠殿さへ。神領を押領せられしかば。爰もかしこも他より押領しき。それに又豊臣秀吉公の。神徳も重じ給はず。神郡をも檢地し給しかば。度會郡さへ半は他領となりぬ。二所太神宮領もそのかみは。度會。多氣。飯野ぞ。神三郡とて神地なりしを。代々の聖主御寄附ゆへ。員辨。三重。安濃。朝明。飯高の五郡も附しかば。神八郡と云。其外諸國にも。神戸。封戸。御厨。御園などありしに。今は度會一郡さへ。宮川をかざりて他領なり。是にて神威のおとろへもしられぬ。ざれど世中もしづまりければ。神の風も亦ますにや。久しく他の押領となりし二見の郷をも。寛永の比かへし給り。又正保四年には嘉暦年中より。斷絶せし。公郷勅使をも立給ひぬ。かく天下の御うやまひもまさば。日にそひなどか神道もおこらざらんや。神道さかんならんには。日本の榮も天壤と窮あるまじきなり。神道をうやまひて國

さかへ神道ををろそかにして。國をとろへたる事は。日本の舊記にしるす所つまびらかなれば。今更あらはすにおよばず。我祠堂なれば。かく神道をたうとくごとくしく云と。おもへるかたもこそあらめど。つくくと思慮すべし我國の宗廟。社稷の神を捨て。何の神を尊ばんや。異國の神をたうとみ。異國に力を合て。我國のかたぶかん事をねがうは夷狄の法きりしたんのたぐひならん。眞儒のとる所にあらじ。神道あきらかに。行れば。上一人より下萬民まで樂み。天地位し。萬物育せん。若此書を傍人見ば笑草の種ならんか。但世間の毀譽は。善惡にあらずと古人もいへば。よきとさへもそしらん。ましておろかなる筆の跡をや。偶此記をしるす。事。慶安庚寅の冬。一陽復りし月なれば。陽復記と名付ぬ猶餘意あれどもらし侍る一二の同志のもの學ぶ心得にもなれよかしと。おもふ心にひかれてなん

此書同志に與ふる所に。この頃初學者の儒書を見てあやまる所。又は儒を嫌ふ人の儒道は神道にそむくと云事。其外世の人の疑ふ事。かうくあるなどいへば重て問答を設て。左に附しぬ。

給ふはよく／＼心行べき事なり。いかにとなれば元本は左右前後の違もなく。をのづからなるものを末にて違事は出来るなり。儒も根本に歸れと教たり。まかりとて萬事を捨て。根本にかへれとはあらず。萬事の上に根本あり。心をつけて見るべし。學問とて。末にかゝりたるは迷ひなり。それをわきまへず。博學なりと心得たる學者もあり。博學は。聖人の教なれば。たうとき事なれど意得有事ぞかし赤子はその心誠一なる故に。無知の聖人なり。聖人はその心誠一なる故に。有知の赤子と也彼赤子の誠一の心をしうなはずして。聖經。賢傳を博學し。赤子の心のまゝにて。世を濟ぞ有知の赤子なるべきに。只博學とのみ心得。雜書までも。博く學びて人にはこるは。雜學にて博學には非ずまがひやすき事也。數萬卷の聖經。賢傳を學ぶとも一に眼をつけよ。一を忘れて書物のみに心を入るは。古人の云。書籍の間に有。蠹魚なるべし。但一とても形あるものに非ず。よく味ふべし。まことの博學は。百千萬と別て殊なるものを博くまんで。彼は一心の理と一致なる事を。心に味へ。行にあらはして。終には數へり。一になるを云也。一は百千

萬の體。百千萬は一の用なるに。又博學を嫌ひて。只一とのみ心得たる人もあり。是は百千萬は一の用なる事を。あらで萬事に違ものなり。ひろく學で一に歸する。是ぞ元々本本の心なるべき。かく云を若佛氏などもれ聞ば。南部習合の神道は。神宮にはむかしより甚嫌ふ事なるに。是は又儒と習合なると。そしらん。それはさもあれ。儒と習合の神道にはあらずをのづからかなひたる所は捨がたし。たとへば異國の金も我國の金も同じけれど異國のまんちうを金といはば同からず。似たる事はにたれどもちがひめ有べし心を虚にして味へて見よかし。兩部習合は強て合たる物なり。それを世の人さとりぬ故に。日本國の神社は次第々々佛氏のはからひとなれり。我二所太神宮計ぞ。倭姫命の。屏佛法息。再拜神祇せよと。のたまふ遺命にまかせ今に外院へならでは。僧尼の參詣をゆるさず。されど末代の事なれば。遺命にたかふ事のみ出来る。あまりいま／＼しき事なればしるさず。我神宮領も世々を経て。佛寺のみ盛になり。末社などは名のみ残て畑となり田にすかれけるにや。あとかたもなく。其所慥にしれる人なきも多し。かく成も

致齋して祭にあづかり。殊には六色の禁忌を守れとか。今とても神に仕る人の。心得る事なれば。委は記におよばず。但慎の一字こそ眼なれ。神に仕には。愼にかざる事也。日本武尊の。東夷征伐の時。よぎり道して伊勢太神宮に参り給ふに。倭姫命の天叢雲の劔をさづけ給ふ時の御言にも。愼て勿怠なごころとあり。神道に殊に。心得べき所なり。左物を不レ移レ右物不レ移レ左。左レ左右レ右。左返右廻事も萬事違事なくしてとは。左は陽。右は陰。左返右廻事も萬事陰陽の理に違事なくして。太神に奉仕とか。但左物右物といへるは。物のうへにていひ。左返右廻事とは身の上にての事にや。深き心もあるべし。今の時にも祭の庭にて玉串を取には。渡すものゝ左右の手を打ちがへ。左の手の玉串をば取人の左の手に渡し。右の手の玉ぐしをば取人の右の手に渡す。これは倭姫命の遺命を。今の世まで守なりと云。さもあるべし。されど此事とのみ心得るは餘にせば見なり倭姫の教は萬事違事なくしてと侍る。亥からば玉ぐしのみにもかぎらず。推してひろくいは。君は君の道を行ひて。人を憐み。臣は臣の道を行ひて。忠をつくして身を惜ず。父は父の道

をおこなひて。子をいつくしみ。子は子の道を行て。孝をつくし。夫は夫の道を行て婦に情あり。婦は婦の道を行て。夫に順ひて他に心もなく。兄は弟をあはれみ。弟は兄をうやまひ。朋友はまことを以て親み。其外行住坐臥のふるまひまで。あるべき事をするこそ。左の物を右にうつさず右の物を左にうつさぬと云べきに。君は萬民をあはれますして百姓をくるしめ。臣は不忠にして。君をかたぶけんとするは。是ぞ左の物を右に移し。右の物を左に移すならん。父子。夫婦。兄弟。朋友も亥か也。是は宇太采禰奈が。身の上の御教なれども。聖女の御言なれば萬事に通ず。此理をさとて。身にをこなはば。儒道とても。外に有べからず。聖人の教も。左物を左にし。右物を右にせよとの教なれば。更に別法なけんかく勤るを君子賢人と云つとめも化してをのづから。左の物を左にし。右の物を右にし萬事違事なきを聖人と云。かやうに深き御言を一事とのみ心得る。末代の人の心あさまし。かくつとむるは。太神に奉仕もの也。つとめも化してをのづからに成たらば。太神と一致の地位なるべきか。有がたき事にあらずや。元レ元本レ本故なりとの

ふて。終身悟る期もなし。かやうのものゝ人の師となりて教るを後の學者又わきまへずして。學問とは。かやうの事にてこそあらめと信ずる。是ぞ一盲引衆盲ならん。一心の定準とは。是心得がたき事也心は虚にして。何もなき物と計難し心得て。定準といふ事を人しりがたし。又あしく心得て。定準とは形ある物ぞと思ふは。愚なる人の心得なり。定準といふ。味はなめてしるべし。かやうの事を多くいはは是も萬言難説とやならん。其味は語り盡し難此一心之定準をよく。舉たらましかば。其しるしは配天命して、神氣をなめんとなり。即の字は。そのしるしの速なる事をのたまへり。配天命して。神氣をなむるは。神聖の地位なるべし。我德配天命して。至大至剛の神氣は。我固有の氣なる事を。嘗味て真知なる時は。天人一致の。地位ならんか。但一心の定準と云事を。しるばかりにて。舉すばいかでか如し此の地位にいたらん。舉の字に知行を兼たり。意味すべき事なり。かやうの神語。神宮の舊記に残るは。いともありがたき事ぞかし。此神語の中一字として儒の旨に。かなはずと云事なし。しかりとて儒書を以。神語と名付。偽て書

たるにてはなし。漢字をかりて。和國の神慮を。のべたるもの也。又倭姫世記と云書に。崇神天皇の。六十年に。大和國宇多秋志野宮に。天照太神を奉齋。四年ましゝき。そのときに。倭姫命太神の御杖代としてましけるが。宇太太采禰奈と云人に。をしへ給御言に云。無黒心。以丹心清潔齋慎左物不移右。右物不移左。左左右右。左返右廻事。萬事違事奈久志豆太神奉仕。元元本本故也とあり。是又有がたき御言也。きたなき心と云を黒心と書たるは。黒は水色。陰にして闇昧也。心は火にして。陽明なるに。却而陰闇にするは。黒心也。故にきたなき心と云。和語を。漢字をかりて。黒心と書たる也。きよき心といへる和語を。丹心と書たるは。心は火なれば色は赤し。赤は丹也。心の色をそのまゝに。一點のおはれもなきは。きよき心なり。黒心は不正直也。火の色の赤きを反せる。水の色の。黒となすは不正直也。如しきたなき心にて。神明には仕へ難し。玉清ければ日光やどる。日光やどるのみならず。日の本體の火を出す。神は正直の頂にやどるといへる言。則眼前に證據あり黒心の人は神に祈とも通じがたき理なり。齋慎とは。散齋

るべし。近く身にとりてはいはゞ。心まよひて外に走。本居を離て。陰惡の域に落入。是ぞ根國に沒落するならし。故に神記にも。任其本心。皆令得大道と云り。本心のまゝなるは聖人なり。孟子の求放心との教も。本心に任せよとぞ大賢の教。神記に。替所なく侍る。故齊情天地。乘想風雲。爲從道之本。爲守神之要とは。情は性の發にして喜。怒。哀。樂なり。情。天地に齊きは。發して節にあたる和なり。想は意の屬なり。意は心の發にして。しかも善惡にうつる物なれば。此想著する時は。心僻て闇迷ふ故に。物に執滞する事なくして。風雲に乗るごとく。意をもてとにや。昔唐に古き塚有しを。波斯國と云夷の國の人來て。かの塚を堀けるに。塚の中より。丸き玉のやうなる物。取出しぬ。その丸き物を剖て見ければ。中に山水ありて。青碧をかけるごとし。傍にちいさき女の靚粧して。屋のらんかんに寄かゝり。山水をながめてぞ有ける。不思議と云も餘なり。是はむかし山水を翫びて。執着したる婦人の心。凝たるとなり。あまり物に着する時は如此なる事ありとぞ。尤つゝしむべき事也。人は天の正氣を得て生ずる故に。終れば天上に歸

り。天御中主尊。天照太神の左右にあるは。よき人の事也。惡人は。心を天のまゝにせず。物に着する故に。彼婦人のごときの事もあるべし。さりとて佛氏の云やうに。人々あるべき事とも覺えず。但心滯るは。たとへば活ものを繩を持てつなぎたるが如し。心體人欲の繩につながれて。働がたき時は。物に應せず。應せぬは本心の用に非ず。心を死せたるならん。心死らば。身は人形のもの云ふことくなれば。故に想を乘。風雲て。心を活せよとぞ。活する時は。行住座立も。道にあらずと云事なく。神はもとより心の主なれば。去ずして。神明は我。われは神明全くへだても。なからんか。これを爲從道之本。爲守神之要と云り。ありがたき神語なり。將除萬言之雜說。而舉一心之定準とは。雜説は駁雜之説なり。一言二言の雜説にさへ。惑やすき事なるを。まして萬言之雜説の是を非とし。非を是とせば。いかでか心まよはざらんや。萬言の雜説は。耳に聞とも。心に聽ずして除去。一心之定準を舉よとぞ。殊に學者の。博學と云名をのみしりて。雜學なる事をわきまへず。諸子百家の雜説までも廣くまなぶひろくまなび。深く學へば。心いよ／＼まよ

さび塵を去べし。古はしらず近比の佛氏の中に。鏡にうつる影もまよひぞ。影もさるべしと。教る方も。有となん。僻事とぞ覺へ侍る。その故は。鏡のさびを去ては。萬像の影。をのづからうつる。いよく磨ば。いよくすなほに。影うつる物なり。さびをさるこそ修行ならめ。影をさらんとおもふは。是ぞまよひなるべき。さびを去は。大學の誠意の工夫。しかれども。鏡の本體平ならざればうつるかげゆがむもの也。其平ならざるを平にすれば。むかふ姿をそのまゝにうつす。此にて正心の工夫をすべし。正直といふも此事也。直計にて正なるはまれなり。但正ならざる直は。父の羊を攘るを。子のあらはしたるに同じからん。又倭姫皇女。神明の御託宣とて告給ふ御ことばにも。夫逆天則無道。逆天地。則無德而外。走本居。沒落根國。故齊情天地。乘想風雲。爲從道之本。爲守神之要。將除萬言之雜說。而舉一心之定準。卽配天命而嘗神氣と侍り。此神託こそありがたく。とふとく侍れ。そらおそろしき事ながら。凡慮を以て窺ひ申侍るに。逆天則無道とは。中庸にいへるごとく。天の命せし是を性といひ性にしたがふ是を道といひ道に修む

る是を教と云なれば。性も道も教も天より出たるものなり。教にさかへば則道にさかふ。道にさかへば則性にさかふ。性にさかへば。天に逆なり。天にさかはじとの修行は。教をつゝしみ。道を行じて。性のまゝにすべし。天にありては。元。亨利。貞人に在ては仁。義。禮。智かはる所もなし。信ありて。仁。義。禮。智を行ふ時は。天に不逆天して。有道の人とにや逆天地則無德とは。德は天より心に得たる理なり。是を明德といふ。載て捨る事なく。萬物を生長して成就するは。地の德なれば是を法則として。萬民生長すべき。仁德を行すべし。地の德にさかひて含弘の量もなく。心せはよくして物を絶ち捨。愛憐なきは。地にそむひて無德なり。仁は愛の理。心の德にして。義。禮。智も。仁にすべれば。仁心なきこと逆天地なれ。かくのごときの人を。有德の人といはんや。外走本居。沒落根國とは。本居は。人々固有の本心也。逆天逆天地の人は。迷ふが故に。心外に走て。沒落根國と也。根國とは。黃泉を指といふ。しからば地下をさすにや或云。根と。子と和訓通ず子は。北方陰闇の方なれば。北方をさすと。しかれば。兩說共に陰闇を指て云。猶深意あ

座以後。故ありて。外宮へうつし奉り。天手力雄命と萬幡豊秋津姬命を。左右の相殿とあがめ申皇太神宮と名付奉る今の内宮是なり。靈劔とは。天叢雲の劔の事也後に日本武尊の東夷征伐の時。子細有て。草薙の劔と名をあらため給ふ劔也。今は熱田太明神の御神體と。あかめ奉る。此三種の神寶は。智仁勇の三徳を表したると。ふるき傳あるにぞ。孔子の道は。我國の神道に。ひとしき道とおもはるゝ。或は玉は柔にとり劔は剛にとり。鏡は正直にとりて。柔剛正直の教に同じと。親房卿の作の東家秘傳といふ物などにはかかれたり。是もむかしより傳る所のあればなるべし。まかればかの洪範も。我神道にひとしき歟。此玉の柔なるごとく溫潤の仁徳を以て。天下の御政をきこしめせとぞ。曲妙といへるは。曲は不直なるを云直なる物は。つよくものにあたる故に曲とは云。しかれども邪曲ならざれば。妙とはいへるにや。又此鏡のごとく。分明なる正直の智を以て。山川海濱までも。看行し給は。下に遺賢もなく萬民其所を得べきとか。劔は又勇にとりて。剛なれば剛にして無慾に。とゝこはる所もなく。まかもをのづから威ありて。天下を平

げ。萬民を利益し給へとぞ。此三の物。一もかけては。天下治がたし。智仁勇の三徳の事は。中庸の書に侍れば。今更くだゝしき言をもてしるさず。道しる人に傳授すべき事なり。但智仁勇の三徳に表し。或は柔。剛。正直に取との。ふるき傳ある故に。しばらく。解する事。かくのごとし。たいそのまゝも。やすらかならん。此神勅こそ。有がたく侍れ。殊に天下の御あるじの御心に味給ふべき御事にや。又欽明帝の御宇に。二所太神宮の大神主飛鳥といひし人の。筆作の記に天御中主尊と申奉るは。虚而有靈一面無形と書るぞ有がたく覺侍る。朱子の明徳を註せるにも虚靈不昧而具三衆理應萬事と侍れば。神記のむねにひとしきにや。一面無形は。何れの物にか。應せざらん。神とは。鏡といふ和訓を。一字略せしなれば。かの明徳を鏡にたとへ侍るに。替所もなし。誰も。心をかゝみのごとくせば。吾心則天御中主尊。天照太神に同からんか。其上心は神明の舍といへば。もとより人の心中に。神はやどり。ましませどもくらましたる心は。舍の戸を閉たるがごとく。又鏡にさびうき。塵積りたるに同じ。急ぎ神明の舍の戸をひらき。鏡の

も云がたし。同姓をめとらぬ事などは。我國の古法には見あたり侍らねど。唐よりは。日本國は。同姓をめとらぬ國とあるしける。いかゞ聞傳るぞや。無實なる説なれども。いにしへは左様の人の。我國にも多かりけるにや。此事ふかき子細あるべし。我國にも昔より。藤氏を天子の御外戚に定り給ふなれば。いにしへはさも有けるにや。仁徳天皇の御妹を。后にそなへ給ふといふは。御妹を尊み皇后の尊號を授たまふまでなるを。記すものゝ。あしく心得て。夫婦となり給ふやうに書たるは。あやまりなり。御子なきにてあるべし。此誤を傳給ひ。敏達天皇も。御妹を皇后にそなへ給て。御子も産給ふと。或人のかたりし。さもあるべき事とぞ覺侍る。かやうの事は。いくらともなくあるべけれど。人のきかんとはいかりあれば。もらし侍る。抑堯舜の道の我國の神道に同じ子細あり。日本の宗廟伊勢太神宮に傳る古書の中。天口事書云。皇天盟宣久天皇如_ニ八坂瓊之勾_ニ爾久_ニ以_ニ曲妙_ニ天治_ニ御宇乃政_ニ免且如_ニ眞經津鏡_ニ爾久_ニ以_ニ分明_ニ看_ニ行山川海原_ニ支_ニ即提_ニ是靈劍_ニ且_ニ平_ニ天下_ニ天_ニ利_ニ萬民_ニ度言壽布とあり。是は皇孫尊。此土へ天下りたまはんとせし時。皇天の三種の

神寶を。授たまひしに添られし御言なり。深き故もあるらめど。聞傳へし計は。八坂瓊とは。八坂瓊の五百箇御統とて太神の御くしに。かけられし玉と云。八坂は玉の出し所の名。五百箇御統は。數の玉をつらぬきたるものとなり。其外も説々あまたあれど。一説はかくのごとし。但勾といへば其形まがれるにや。又玉のかたちの柔なるをいへるにや。只玉の事と心得てよ。眞經津鏡は。八咫の鏡の御事なり。此寶鏡を見まさん事。吾をみるがごとくすべしとの。神勅にまかせ。天照太神の御神體とあがめ奉り代々天皇と。御同殿にましゝけるに人皇十代崇神天皇の御宇に甚神威を畏れ給ひて。豐鋤入姫命を附奉て。大和國磯城に。神籬を立て。しばらく齋奉り給ひぬ。又内裏には。神鏡神劍の御影をうつして。とゞめ給ふ。内侍所寶劍と申奉るは是也。其後豐鋤入姫命。太神を戴奉り。所々を経給ひしかども。御年老たまふの故に。美和の御諸宮より。倭姫命を太神に附奉り給ひき。しかるに人皇十一代。垂仁天皇の御宇に。猶國々所々を経て。伊勢國。度會郡。五十鈴川上にしづめ奉りぬ。始は天兒屋根命。太玉命を。左右の相殿の神と申奉りしを外宮御鎮

じを生んとて。天照太神を生給ふ。天照太神御子の吾勝尊を。此國にくだしたまはんとおぼしけれど。又其御子皇孫瓊々杵尊生れ給ふにより瓊々杵尊を下し給ひ。それより三代鸕鷀草葺不合尊に至り給ひぬ。此三神は。易にをいては。内卦の三畫。伊弉諾より吾勝尊まで三代は。外卦の三畫を表せるならむ。外卦は上内卦は下なれば。乾の九四の或は躍て淵にありといふごとく。吾勝尊の此土にくだらんとて。くだり給はぬこそ。易道に少もちがふ處なけれと云人あり。誠にちがひはあるまじき事なれど。我國の神道に易道は同じと見るこそ。忠厚の道ならめ。易道に神道は同じきといふは。いかゞと思ひ侍る。かく神道儒道其旨一なれば。其道によりて脩する教の。かはる所はあるまじけれども異國と我國と。制度文爲はちがひめ有。それをわきまへず。古より我國になき。深衣をきる儒者など。近比はありと^二なん。此事大なる非義なり。異國にも夷狄の服をきるは。重きいましめぞかし。我國は皇孫尊。日向國に天下り給ひ。神武天皇大和國橿原に。都を立給ふより。百十一代の今に至り給まで。天照太神の御神孫。天子の御位にましますば。御制度を

おもんじ。吾國の律令格式等を本として。行ふべきとの心はなくして。異國の深衣を着るは。さもあるまじき事也。異國に生れたる邵康節の。今人不敢服古衣とて深衣を着られざるを。儒にあしくいふは。さもあるべし。それは異國にて異國のむかしをしたふを。きらふ。さもあるまじき事也。神國に生れたる人は。神代のむかしを思ひ。國法の古をしたふこそ儒道にも本意ならめ。近代儒を學ぶ人のかしらおろすは。佛氏を人の崇敬すれば。かの崇敬を羨たるに似たり。又深衣を着は。國俗にかはり。異服をきて。人のめを驚し。崇敬せられんとにや。心に深衣をきて。外はさらでも。あれよかし。但時代により。國法のゆるす事あらば。さもあるべし思ひやるに。かしらおろして深衣きたる姿。佛氏のいふ蝙蝠僧とやらんには。猶おとるべきかとあさまし。冠。昏。喪。祭の禮も。我國に^一たがひてよ。但末代にて。律。令。格。式等の書も。家々に邪祕し。他見をもゆるさぬ事なれば。ちらぬ故ともいはんか。されど格式等も。異國の法を考て。此國の古法に合て。定たると見えたれば。吾國の古法のみにあらず。今とても異國の禮を用るを。ひたすらあしきと

陽復記上

神風伊勢の國。百船度會の郡は。内外の神のしづまり給ふ地にして。四時の祭禮をこたらず。垂仁雄略のいにしへより。今の世にいたるまで。上一人下萬民神威をたふとばすと云事なし。さればにや自然に地とみ。民ゆだかにして。上代の流風餘韻たえず。予も祠官にむまれをなせば。かたじけなくも。神につかふるのひま。神宮の舊記を披見し。儒典のかたはしをうかがひて。一二の同志と。かたりなぐさみ。あかしくらせば。三十とせにもあまりぬ。弱冠より以前の事は忘れき。近比見し事。古老のかたりし事。又は祕記の中にも。心にむかふ事をかたばかり書といめ。漢語をかきてことほり。朋友のものまなぶたすけとす。抑我國のおこりを尋るに。太虛の中に。一つのものあり。形ち葦芽の萌出たるごとし。則化して神となる。國常立尊と申奉る又は天御中主尊とも名付奉る。この神を人皇二十二代。雄略天皇の御宇に。天照太神の御告に

よりて丹州眞井原より。勢州山田原にむかへしづめ奉り瓊々杵尊を東の相殿とし。天兒屋根命。太玉命も瓊々杵尊に添て西の相殿として。御同殿にましまし。豐受皇太神宮と名付奉る。今の外宮是也。此國常立尊より三代は一神つゝ化生し給のよし。日本紀に見え侍り。しかるを此三神は。易乾卦の奇爻を表して。かくしるすならんと云人あれど。さにはあらず。我國のむかしより語り傳たる事の。をのづから易にかなふ故に。神書を撰べる人の。易と附會したることばかり。日本の神聖の跡。唐の聖人の書に。符を合せたる事は。いかゞと思ふべけれど。天地自然の道の。かの國この國ちがひなき。是ぞ神道なるべき。其後又三代は。二神づゝ化生し給ふとなり。是を坤卦の耦爻の三書に表するならんと云此理は上にしるしぬ。國常立尊より第七代めにあたりて。伊弉諾尊。伊弉冊尊二神出生し給是を伊弉諾は乾卦三書成就。伊弉冊は坤卦三書成就にて。男女の體も定りぬるならんと云。をのづからかなふところ。深意あるものなり。此伊弉諾尊。伊弉冊尊夫婦となりて。此國をうみ。草木迄もうみ給と云。子細ありあらはしがたし。其後此國のある

之謂_レ知_レ之以_二大倭假名_一擢_二託宣之言_一謾書、

慶安庚寅正月日

ルヲ愚ナル人見テ牛ノマネヲシテ草ヲクラフ傍ノ人
問テ曰ク何ガ故シカスルヤト答テ曰ク草ヲハミシ牛
既ニ天上ス我是ヲウラヤムト傍人笑テ曰ク是邪見ノ
人ナリ野牛ノ天上ハ智人ノステシ衣アリシガ風ニ吹
レテ牛ノ足ニカ、リシ縁ナリ彼人縁ナクシテ然ラン
ヤカクノ如ク人皆コレ邪見ナリ思ヘ邪ナカラントイ
ヘルハ孔夫子ノ要言ナリ

雖レ爲ニ重服深厚トハ重服トハ父母ノ喪衣ナリ衣ヲ
重テキル故ニ重服ト云也又ハ藤衣トモ云緇衣トモ云
唐土ニハ唐ノ太宗皇帝ヨリ始ルナリ惣ジテ神ハ行觸
來觸トテ少シキ身ノケガレヲモ嫌玉フトイヘドモ慈
悲フカキ人ノ家ヘハ重服ノ折カラナリトモ影向アル
ベキトナリ慈ト者イツクシムトモメグムトモ讀ナリ
一切ノ人ヲ吾赤子ライツクシム如クニスルヲ云也悲
ト者カナシムト讀一切ノ人ノ上ニ悲シム事アレバヘ
ダテナク是ヲ悲ミテ我力ニテ悲ヲ止ル事アレバ夜ヲ
日ニツイデモ是ヲヤメント思フ心ヲ慈悲ト云ナリカ
クノ如クノ人ノ室ノ中ヘハ八百萬ノ神往ブレ來ブレ
ハサテヲキ重服ノ處ヘモ來リ玉ヒ影ノ形ニ隨フ如ク

ニ守リ玉ハントノ御託宣ナリ誠ニ仰テモ餘リアルハ
三社ノ御誓ヒナリ

本邦之基根ニ於自然也、物之自然也天下僉貴レ之、物
之造化也世未レ重レ之矣、夫吾國寶祖神靈三器皆出ニ於
天成也昌也、皇裔數世其統御之靈也、與ニ天壤之開
闢同、非ニ是國運出ニ自然者也、或有下戎夷之覬レ鼎
遠廢ニ闕於西邦一匹、近帝畿ニ也、天竺有ニ遺著城之簞
亂、夏周在ニ獫狁獯粥之厄、爲ニ國璽九鼎亦是爲ニ人工
也、我國一種系連綿邈無窮者、天造自然之器出レ所
致也、神有レ國以降不レ蒙ニ戎菴之攘奪者未レ有下如ニ
吾國ニ於純全也、開基之神傳器之靈筮ニ支不レ可ニ同レ日
而語ニ矣、今見ニ世人ニ多携ニ震旦風俗之文且蔑ニ神代
遺風之書、和風爲レ之陵夷神慮爲レ之損レ明職之此由
矣、粵松本氏語レ予曰、悲哉稟ニ生於神國ニ懸ニ望於異
邦、儻遇下子師欲レ問ニ神慮、僉曰神書披閱族蒙ニ冥慮之
怒成ニ衰貧之身ニ矣、愚昧暗然之謂乎、將爲ニ神慮逆憤
謂ニ乎、不レ然旨以ニ三之一ニ示レ之矣、予曰體哉子之間
乎、神書出レ言豈祕哉、惟和國縉素合ニ心馳ニ者、時索ニ
神書ニ使ニ人寫レ之讀レ之者、和光彌高神威彌堅乎、爲ニ

猶モ東國ノ神荒ク猛クシテ治マリガタシ爰ヲ以テ天
 兒屋根命健甕土命經津主命三神トモニ東國靜謐ノ爲
 ニ下向シ玉ヒケリ經津主命ハ下總國香取郡ニ至リ國
 神ヲ靜メ玉フ今香取明神ト云亦ハ齋主命トモ云也天兒屋根命健甕土命ノ
 二神ハ常陸國鹿嶋郡ニ下リ荒振神タチヲ靜メ一統シ
 玉ヒテ猶天下安全ノ爲ニ三神ナガラ東國ニ住玉ヘリ
 其後三笠山勸請ハ人王四十八代稱德天王ノ御宇神護
 景雲二年ニ鹿嶋ヨリ鹿ニ乘神ノ枝ヲ鞭トシ今ノ春日
 山ニ飛入玉ヒ帝都ヲ守護シ玉フモノナリ春日御詠訶
 曰ク鹿嶋ヨリカセキニ乗テ春日ナル三笠ノ山ニ浮雲
 ノ宮ト詠シ玉ヘリコレニヨツテ鹿ヲ以テ使者トスル
 ナリ一ノ宮ハ鹿嶋大明神二ノ宮ハ香取大明神三ノ宮
 ハ春日大明神四ノ宮ハ姫神天照太神其後人王五十代桓武
 天王ノ時都ヲ山州平安城ヘ遷シ給時大原ヘ春日ヲ勸
 請又大原ヨリ吉田ヘモ勸請スルナリ

十六

春日御託言

雖曳三千日注連トハ此神託ノ意人々神ニ祈誓ヲカケ
 テ宮ヲ造リ石ヲ疊ミ御注連ヲ引歩ヲ運ブ事千日萬日
 ニ及トイフトモ邪ノ願ヒヲ以テ祈ラバ其人ノ家ニハ
 到リ玉ハジナリ注連トハシメナハノ事ナリ凡ソ注連

繩ノ起リハ天照太神天ノ磐門ニ閉籠リ玉フ時思兼神
 ノ策ニテ太神岩戸ヲ少シ開キ出玉時手力雄命イダキ
 奉リテ戸ヲ閉テ繩ヲ引張テ是ヨリ岩戸ヘ歸入玉ヒソ
 トナリ此繩ヲ神書ニハ端出之繩ト申コレ則チシメナ
 ハノ事ナリ神ヲ引ト、メテ願ヒヲ滿給ヘト申事ノ繩
 ナリカクノ如ク千日萬日ノ間御注連ヲ引テ祈ルトモ
 邪見ノ人ノ家ニハ到ルマジキトナリ邪見ト者ヨコシ
 マニミルト讀ナリ正直ノ人々神ニ祈誓ヲスルニワヅ
 カニ一日ノ注連ヲ奉テ願ヲ滿ルヲ正直ノ人見テ邪
 ナル心ヲ以神ニ願ヲ懸ルニ百日ニモ滿ゼズ千日ニモ
 叶ハヌ事皆是我心ヨリナスワザナリ然ルヲバ却テ神
 ヲウラミナイガシロニ思ヒ人ニモ語ルモノ也昔愚姥
 アリ常ニ枇杷ヲカニスケリサネ大ニシテ食スル處スクナ
 キトテ悉クミバカリニ成ヤウニトテ神ニ祈ル事百日
 ニモ滿ゼズ千日ニモ叶ハズ還テ彼靈神ヲ嘲リ笑事ア
 リ是則チ不正直ノ祈リヲ枇杷ノ實ト云ナリ直ナ
 ル心ヲ以テ祈ラバ何ゾ石ヲ變ジテ金トナサバランヤ
 世ノ人或ハ食欲ノ爲或ハ噴嚏ヲ以テ祈ル前ニハ何ン
 ノ叶事カアランヤ佛家ニイハユル邪見トハ喩ベハ野
 中ニ牛アリ草ヲ食ヒシガ速カニ光リヲ放ツテ天ニ上

人ヨリ食物ヲ乞テ食スルニ武士ノ武威モ忠心モナクシテ心ヲ曲テ君ヲヘツラヒテ知行俸祿ヲ受人ノ物ヲ

モ道ナクシテムサボリ取集メタルヲ邪食ト云此食物ヲ受ンヨリハ鐵丸ヲ食セヨトナリ正食ハ道ニ當テ

取ヲ云ナリ無道ニシテ富ルハ犬豕ノ肥タルガ如シ是ヲ心穢ノ人ト云ナリ鐵丸事ハ佛家ニイロク沙汰アル

義ナリ今要ヲ取ニ右ノ如クナリ又水ウエシテモ盜泉ヲノマズトアリ其名トスル處不可ナレバナリ又琥

珀ハヨク塵ヲ取ドモ腐タル芥ヲバトラズ磁石ハヨク鐵ヲ吸ドモ曲レル針ヲバ吸ズトイヘリ情ナキモノサ

ヘカクノ如シ由ナキ物ヲ受ルハ還テ其身ノ害ニナル事思ハズンハアラジ雖座ニ銅燭トハ燭石ニ足タマ

ラズトテ燒石ノ上ニハ誰カ足ヲ上ンヤ縦ヒ銅盤ノ燒タル上ニハ座スト云トモ貪欲ノカキ人ノ座位ニ同座

スル事ナカレトナリ貪欲トハ口ニアデハヒ鼻ニカギ耳ニキ、目ニ見足ニフ身ニフル、ニ至ルマデ人ト

シテナクテハ叶ハザルモノナリ然レドモ欲多クシテ制スル事アタハズヲボル、時必ズ本心ヲ失フモノ也

心ヲ養フハ欲スクナキヨリ善ハナシト古語ニモアリ又熱クトモ惡木ノ陰ニ憩ムベカラズトアリ況ヤ心ア

ル人ノ心ケガレ濁リタル處ニ交ル事慎テモ慎シムベキモノナリ

十四 春日大明神之事

春日大明神ハ天兒屋根命大中臣氏ノ祖神ナリ皇孫尊日向國高千穗ノ峰ニ天クダリ玉フ時天ノ神ヨリ皇孫ニ三神ヲ副玉ヒテ天津日嗣國津日嗣ヲ守ラシメ給ヘリ其時春日ハ扶翼ノ臣ノ中ニモ大政官ニ當レリ地神ノ初ヨリ此國治リ兼タル處ヲ三神ヨリ平ゲ玉フ中ニ殊ニ天兒屋根命ハ皇孫ノ政ヲアヅカリ萬民ヲ安クシ玉フ事餘神ニ勝レリ是ニヨツテ春日大明神ト名クルモノナリ日天ハ四時ニワタツテ物ヲ照ス中ニ秋ノ日ハ陰分ニマケテ日アタ、カナラズ萬物初テカレシボム冬ノ日ハ猶陰分ノ極マル時ニシテ萬物生ジガタシ夏日ハ陽分ナリトイヘドモ又陽ノ極マル時ナレバ萬物又育スル事ナキ也コ、ニ春ノ日ハ寒ニアラズ熱ニアラズ此スナハチ中分ノ時節ナレバ萬物コトノク生ジテ國家萬黎トモニ安穩ノ時ナリ爰ヲ以テ春日ト號スルモノナリ明神ノ事ハ以前ニ念比ニ聞ヘタリ

十五 大和國三笠山勸請之事

皇孫尊天降給ヒテ日本恙ナク治マリタリトイヘドモ

タル方へ投レバ船ノメグリ干瀉ト成テ船ウゴク事ナケレバ自在ナラズ又味方ノ方ニハ海ヲ陸ニナシ陸ヲ海トナシ時ノ宜ニ隨テ自由自在ナラシメテ戰ヒ玉フ也此時神功皇后ハ王子御懷妊ナリ皇后一卷ノ軍書ヲ持玉ヘリ今ノ世ノ黃石公ガ三略ト云コレナリ軍ハダシキ時皇后コノ書ヲ燒テ灰ニシ吞玉ヒテ唱ヘテノ玉ハク王子胎内ニアリテ此書ヲシロシメセ我ハ空シクナルトモ王子ハ恙ナカルベシトナリ右此軍モ三箇年ノ間ナリ漸々軍モ勝チニ成テ皇后ハ筑前ニ歸リ玉フ時三笠ノ郡宇佐ノ里ニテ王子御誕生アリ其處ニ宮ヲ立ツル今ノ宇瀨ノ宮是ナリ始胎内ニテ軍書ノ灰ヲ吞玉フ故ニ御誕生ノ時一卷ノ書ヲ暗ニ書玉フト云々又御誕生ノ時八ノ幡產屋ノ上ニ掩フ故ニ八幡ト名ケ奉ル也然シヨリ以來猶以テ日本安全ニ治リテ高麗ヨリ毎年ニ日本へ御調物ヲ奉ル事八十艘ニ定マリタリ人王六十代ノ帝醍醐天皇ノ比マデ少々御調物奉ル也

十二 山城國鳩峯男山勸請之事

人王五十六代清和天王ノ御宇大安寺ノ行教和尚貞觀元年ノ夏九旬ノ間宇佐ノ宮ニ參籠アリテ晝ハ大乘經ヲ讀誦シ夜ハ祕密神咒ヲ誦テ法施ヲコタラズ九旬已

ニ滿ヌル時靈夢ノ告新ナリ八幡現ジテ告テ曰ク久ク法味ヲ受テ師ヲハナレザル事影ノ形ニ隨フガ如クナリ今師王城ニカヘリナバ我モ又隨テ行キ王城ノ側ラニ居ラント也行教都ニ歸リテ山崎ニツク東南ノ方男山鳩峯ノ上ヲ見ルニ大光明アリ此事ヲ以清和帝へ奏聞アル則チ橘朝臣ノ工部ニ勅シテ宇佐ノ神社ノ如クニ新殿ヲ造テ遷シ奉ラルト云々又弘法大師モ參籠アリテ靈驗ヲ蒙リ入唐求法ノ大願成就シ玉ヘリ惣ジテ八幡ハ中比マデ祈願ノ返答ヲ社ノ内ヨリアリ然レバ度々天子ヨリ勅ヲ下シ玉ヒテ少シノ事ニモ宇佐ノ宮ニ問玉フニヨリテ其後ハ返答トバマリタル也

菩薩ト者梵語ノ略ナリ具ニハ菩提薩埵ト云ナリ此方ニハ覺トモ智トモ云ナリ又薩埵ニ四ノ薩埵アリ一ニハ愚童薩埵是ハ三界ノ凡夫ヲ云ナリ意ハ一切ノ人ハ智恵ヲ備ヘザルハナケレドモ顯レザルハ愚ナル童ベノ火ヲ知ズシテ入ガ如シ二ニハ識薩埵コレハ二乘ヲ云三ニハ金薩埵コレハ菩薩ヲ云四ニハ智薩埵コレハ佛ヲ云ナリ委シキ意ハ明師ニ尋テ知ン者ナリ

十三 八幡御託言

雖レ食ニ鐵丸トハ食物ニ正食ト邪食トノ二アリ他

十一 八幡大菩薩之事

ハ日月ノ明ヲ神ノ頭ラニ戴クガ故ナリ天下ノ君臣モ亦カクノ如シ君王ヨリ潔キ政ヲ下シ玉フヲ臣下是ヲ戴キウケテ天下ノ人民ニ賦リアタフル者ナリ正直ト者タバシクスグト讀ナリ末代ニハ人ノ心モ正シク直ナル人ヲバ妬ミ惡ムハ是スナハチ不正直ノ人ノ心ヨリ出ルナリ西施ガ貌ヨカラズンバ東施何ゾ惡ンヤ然アレバトテ心ヲ曲テ邪ニイタサンヤ善人惡人ニ交ル時當座ハ石ニ米ノマジリ油ノ水ニ入タル如クナレドモ陰德アレバ必ズ陽報アルモノナレバ惡人モ正神アラハル、時ハ善人ナリト知テ親ミ近クモノナリ是ヲ終ニハ日月ノ憐ヲ蒙ムルトハ云ナリ一旦トハ二字ナガラシバラクト讀ナリ依怙ト者ヨリヨルト讀ナリ毛詩ニ特レ父怙レ母ト云語アリ今ノ世ノ正直ナル人ハ人ニウトミ遠ザケラレテ便リ力ヲ失フ事喻ヘバ父母ヲ失フ孤子ノ東西ニ吟テ力ヲ得ズ闇中ニ火ヲ失フガ如クナレトモ終ニ父母ニ巡リ合テタチマチニ日月ノ光リヲ見ルガ如ク今ノ正直者モ人ニウトミ去ラレテ一旦夜陰ニ入トイヘドモ日月明ヤスクシテ終ニ善人ト知ル、モノナリ皆コレ日月神明ノ德ヲ蒙ル也

八幡ハ人皇十三代仲哀天皇ノ皇子九州筑前國三笠ノ郡宇佐ノ里ニテ御誕生アリ母ハ人王十四代神功皇后ナリ仲哀ノ御宇ニ薩摩國天子ニ隨ハズ天皇コレヲ隨ヘントシ玉フ時天照太神春日大明神御託宣シテノ曰ク吾國ハ神國ナレバタトヒ責ズトモ終ニハ隨フベシ先是ヨリ西ニ寶ヲノ國トテアリ此則新羅百濟是ヲ對治高麗三韓也アルベシト云々時ニ天皇ソノ國何クトモ知玉ハズ海上ニ兵船ヲタバヨハシ終ニ長門國豐浦ニテ八月十五日ニ崩御シ玉フト也或說ニ神託ヲ用ヒ玉ハズ伊非諸伊非冊所生ノ國ヲ伐玉フ神罰ニ當テ崩御ナルト云其時仲哀ノ后神功皇后ハ龍馬ニノリテ虚空ヲ飛シテ豐前國池田ノ杉山ト云處ニ至リ玉ヒテ天ニ仰ギ祈リ給フ時四天王ハ八ノ白幡ヲ捧ゲテ天降リ玉フ今杉山ニ四天王ノ峯ト云ハ是ナリ此八ノ幡ノ上ニ小戸ノ瀬ヨリアラハレ玉フ三神現ジ給ヒテ三神ト者表筒男命新羅百濟高麗ノ三韓ニ向テ神軍シ玉フ事誠ニタメシスクナキ事ナリ猶三韓力ツヨキ時龍宮界ヨリ干珠滿珠ト云二ツノ玉ヲ捧ゲ奉ル滿珠ト云玉ハ敵方鹽ノ干瀉ニ有處ヘ投レバ皆悉ク鹽滿テ水ニヲボレテ自由ニハタラク事ナシ干珠ト云玉ハ滿タル鹽ニ船ヲ浮ベ

ク陰陽不測コレヲ神ト曰トナリ寶前次第作法記ニ曰ク陰陽ハ動靜ノ消息ナリトイヘリ動ハ進ニテ陽ナリ萬物ハ陽ニ向テ動キ進ムデ生長スル也陰ハ靜ニテ退ナリ萬物陰ニ至テ靜マリ退イテ朽凋ムナリ孟子ニイヘラク聖モ知ベカラズコレヲ神ト曰ト也安キ意ヲ以テ神ノ字ヲ知バ神ノ字ハ示篇ニ申ト書ナリ人々正直路ヲ以テ神ニ祈ルトキハ申ノ字ナリ暗ニ利生ヲアタヘ玉ヘルハ示ノ字ナリ

十 天照太神御託言

謀計ト者ハカリゴトカゾフルト讀ハカリゴト、ハ下地ノ我意ニハ僞テ上面ニハ眞ノ有サマヲナシテ人ヲ誑カス事ナリ世ノ中ニ倭人ナド、イフ是ナリカゾフルトハ喩ヘバ十アル物ヲ七ツ八ツニカゾヘ又二十三ナドニ計ル事ナリカクノ如クシテ人ノ目ヲスキテ僞リ計ヘテ商内ナドスル時ハ眼前ニ利ヲ得テ家モ富榮ヘ身モ煖カニナルハ眼ノ前ノ利潤然レドモスカレシ人當座ハ知ネドモ本心ノ時ハ知ルモノ也其時前ノ人ヲ恨ミ悲ム此コ、ロ彼ヌキシ人ノ方ヘ至リテ爵ヲアツルナリ世ノ中ノ人ノ心モ通力ヲソナヘテ有モノナリ運心神通ト云事アリ人モ夢中ニ千里ノ外ニ

行テ親シキ友ニモ逢テ過コシ今ノ事マデモ語リナグサミテ暫時ニ千里ノ程ヲカヘリ來ル事はミナ人ノ上ニソナヘタル運心神通ナリ亦世ノ人ノ中ニ奇特ナドヲアラハスハ明神ノ神通ナリ世ノ中ノ人ノ目ニモ見ヘズ奇瑞ナドノ有ハ神明ノ神通ナリカクノ如ク人々ニ通力神通アレバトテ商内ヲスルニ利倍ヲトルベカラズトニハアラズ喩ヘバ十錢ニ買シ物ヲバ十一錢十二錢ニ善ホドニ賣レバ人ヲ僞リ誑カスニモ非ズ人モ其分ハ許ス也十錢ノ物ヲ二十錢ニスレバイツハラルル人後ニ是ヲ知テ大ニ怒リ悲ム心神カノ人ニ酬テ必爵アタルナリ爵ニ神爵冥爵人爵アリ神爵ハホノカニ顯レテ當リ冥爵ハ知ズシテ當リ人爵ハ明カニ當ル五刑ナド是也慎テモ慎ムベキ者ナリ神明ト者惣ジテハ天地ノ神ヲサスナリ別シテハ人ニソナヘタル處ノ正直路ノ神ヲ神明トモ云ベシ又神明ト云明神ト云ニ少シキ異アリ明神ト者元神光リヲ和ゲ塵ニ同リテカリニ人ノ形チニ現レ萬民ヲダスケ給ヲ明神ト云ナリ明ハ日月ナリ日月ノ明ガ神ノ上ニアラハレ出ルヲ明神ト云ナリ日月ノ明ガ神ノ中ニ有テ形チニ顯ハレザルハ神明ナリ神明ハ君ニシテ日月ノ明ヲ下ニシ明神

タリ春日ハ亦社稷ノ神ニシテ皇孫ノ臣下ノ神ナリ又
八幡ハ天神地神ニテモ非ズ人王ニ下リテ第十五世ノ
神ナリ旁以不審ナキニ非ズ是ヲ答テ云ンモ神慮測難
シシカイヘドモ愚意推テ云ハ天照太神ハ地神ノ初メ
尤モ由緒アリ春日ハ社稷ノ神タリトイヘドモ皇孫
佐ノ神ニテ天下ヲ靜謐シ萬民ヲ安寧ナラシムル神ナ
レバ其由緒ナキニモ非ズ又八幡ハ誠ニ人皇ニ下リ十
五代ノ應神天皇ナリ剩ヘ皇太神宮ノ左リニ託宣ヲ安
ス左チ上トシ右チ下トスル事常ノ振舞ナリ是亦由緒ナキニアラズ八幡ハ天照
太神ノ分身タル瀬織津姫ノ再誕ナリコ、ニ人皇ノ世
統ニ至異國ヨリ日本ヲ攻ムルニ隨テ人皇十二三世ノ
比ハ日本既ニ異國ノ手ニ入ントス爰ヲ以テ瀬織津姫
カリニ現レテ神功皇后ノ腹ニ宿リ應神天皇ト生レ給
テ日本一統シ玉フ王ナレバ日神春日ノ託宣ニ並ベ奉
ン事何ノ子細アラシ哉委シキ旨ハ八幡託宣ノ下ニテ
聞ユベシ

九 天照皇太神宮

天照ト者日神ニテ天下ヲ照シ玉フ事平等也汚穢不淨
ノ處ヲモ照シ殘シ玉フ處ナシ尤モ和光同塵ノ意也白
虎通曰ク天ト者身ナリ天ノ言タル事ハ鎮ナリトアリ

然ラバ天ハ萬物ノ惣身ニシテ萬物ハ天ノ支節ナリ廣
雅ニ曰ク天ノ地ヲ去事二億一萬六千七百八十一里ナ
リ天ノ厚サ地ノ厚サト同ジ天ハ南北相サル一億
三萬三千五百七十里二十五步ナリ東西ハ四十步短キナ
リトアリ「照ト者明也ト字訓アリ日神天ニカバヤキ
テ萬像アキラカナリ又和訓ニハテラスト讀ナリ天萬
物ヲテラシテ萬物生成ス萬物ハ天ヲ父トシ地ヲ母ト
ス又照ハホムルニ名付ル事アリ孔子ノ昭ルナド云ナ
ルベシ「皇ト者スベラギトヨム皇ト者天子ノ名ナリ
又皇ハ大ナリトモ君ナリトモ匡ナリトモ字訓アリ前
漢ニ曰ク皇ハ君ナリ極テ尊ノ稱ナリ天子ノ父ナルガ
故ニ名ケテ皇トイフ預ジメ天下ヲ治メザルガ故ニ帝
トイハズトアリ又皇ノ字ハ白王ト書タリ白ハ明ナリ
トテ明王ト云意ミヘタリ上代ハ君モ君タル故天皇ト
書末代ノ今ハ天王ト書トイヘリ例セバミコト、云フ
ニ王臣ノ神ニ付テ尊命ノ字替ルガ如シ「太ト者ヲ、
シト讀ユヘニキヲモナク限リモナキ意ナリ日神ノ國
土ヲ照シ玉フ事何レノ地ヲ限リ何クノ國ヲ限リトモ
ナク照シ給フ意也「神ト者カミトモタマシヒトモ讀
ナリ陽氣ノ精ヲ神ト云陰氣ノ精ヲ靈ト云ナリ易ニ曰

知明メテ天下ヲ治メ玉フ。故ニ王ヲ貫三ト云貫三トハ三ヲ貫クト讀豎ノ點ハツラスク意ナリ萬物ヲシリ明ラムル義ナリ道一ヲ生ジ一二ヲ生ジ二三ヲ生ジ三萬物ヲ生ズルナレバ伊弉諾伊弉冊ノ二神國土ノ三ヲ生給ヒテヨリ以來萬物ソノ中ニ生ズルモノナリ

社ト者ヤシロト讀社ハ土地ノツカサナリ萬物ハ土地ノ上ニ生ジテ人ヲ養育ス其恩ツクシガタシ爰ヲ以テ天下ノ政ニモ土地ヲ祭ントテ五方ノ土ヲ取テ崇メ奉ラル中方ノ土ヲバ黃ナル紙ニツ、ミ東方ノ土ヲバ青キ紙ニツ、ミ南方ノ土ヲバ赤キ紙西ノ土ハ白キ紙北ハ黒キ紙ニ包ミテ一處ニ壇ヲ築テ上天子ヨリ下萬民ニ至ルマデ是ヲ崇メ奉ル一方ヨリ土一寸ヲ取四方ミナカクノ如ク取テ社壇封ズルナリ封ノ字ノ意篇ニ土ヲ重ネテ作リニ寸ノ字ヲ書尤知ヤスキ事ナリ其外大唐ノ法ニモ一國一縣ノ司官ヲ下サル、ニハ王城ノ四方ノ土ト禁中ノ土トヲ其方ノ色ノ紙ニ裹ミテ下サル國司知行ノ地ニ至リテ社ヲ建テ此土ヲ封ジテ祭禮ヲコタル事ナシ皆此謂ナリ又社ヲ立ルニ王侯ヨリ下ツ方皆法アリ王群姓ノ爲ニ社ヲ立ルヲ大社ト云大社ハ四至九町也王自ノ爲ニ社ヲ立ルヲ王社トイフ云諸侯百

姓ノタメニ社ヲ立ルヲ國社トイフ諸侯自ノ爲ニ社ヲ立ルヲ侯社トイフ大夫以下群ヲナシテ社ヲ立ルヲ置社ト云ナリ社ニ上中下アリ上社ハ九町四方ナリ中社ハ八町四方下社ハ四町四方ナリ託ト者ツクトモヨルトモ讀ナリ形チヲ顯サズシテ神ヲ人ニ寄物ニ附テ言葉ヲ寄ルヲ云ナリ意ロ尤トモ知ヤスキ也宣ト者ノブルト讀ナリ神聖物ニヨリテ言葉ヲ宣玉フナリ宣旨宣命宣下ハミナ大臣ヨリ下ル言葉ナリ今天照皇太神ノ託言ヲ宣ト云云事一端不審ナレドモ古語ニモ天子ノ宣室トアレバクルシカルマジキ歟又愚案日本ノ御主ノ始メハ天照太神タリトイヘドモ惡神ノサハリニヨツテ終ニ天降り御座サズ皇孫尊ニ至テ始メテ國土ヲ知食セバ高皇產靈ヲ始メ奉リ天照太神モロ共ニ天ノ御蔭日ノ御蔭トカクレ御座テ皇孫ノ朝廷ヲタスケ給ヘバ宣旨宣命ト取テモ苦布カルマジキ歟

八 諸神中ニ三神託宣之事

今此託宣諸神ノ中ニ天照太神八幡大菩薩春日大明神ノ三神取分テ子細アル哉否若子細ナクンバ如何但取分テ託宣アラバ天照太神高皇產靈尊皇孫ナド、コンアルベシ其上天照太神ハ地神第一ノ尊ニテ宗廟ノ神

ノシルシ處アルベシ急ギ尋テ遷シ奉レト則大和姫

三種ノ神器ヲ戴キ三種ノ神器ト者神璽寶劍內侍所コレナリ國々ヲ尋ネ行キ給

フニ伊勢國渡會郡沼木郷山田ガ原ニテ老翁ニ行合玉

ヒテ尋給フ老翁ハ猿田彦命神宮ニテハ興玉ノ社翁答テ曰ク我ハ是神代ヨ

リ天照太神ノ勅ヲ請テ御鎮座ヲ守ル事二百八萬歳ノ

間ナリ是ヨリ與五十鈴河上ニ有トテ道引ユク是今ノ

内宮ナリ此翁ノ鼻勝レテ長事五尺六寸有ト也今此國

ノ神事祭禮ノ時王ノ鼻トテ先前ニ鼻ノ長キ面ヲ着テ

通ル事ハ是神代ノ遺風ナリサテ皇女宇治ノ郷ニ至リ

見玉フニ天ノ逆針ニ五十ノ鈴チカカ懸テ立テ有シナリ

則此河ヲ五十鈴河ト云ナリ其ヨリハ皇女ハ立還リテ

同ク勢州鈴鹿ノ坂ニ宮ヲ造リテ朝夕ノ御供ヲ内宮ヘ

備ヘ給フニ往還ノ路ホド遠シトテ野ノ宮ヘ遷リ玉フ

今齋宮ト云是ナリ齋宮ハ四町四方ノ宮ナリ皇女ノ後モ代々天子ノ

姫宮一人野宮ニ遷リ太神宮ノ御仕ヘ有シナリ

六 外宮御鎮座由來之事

豐受皇太神宮ノ御鎮座ハ人王二十二代雄略天皇二十

一年冬十月一日ニ天照太神日本姫ニ夢ニ告玉ハク

天上ニテノ如クニ天ガ下ニテモ皇孫ト一處ニテ御供

ヲ受タキト也皇女則雄略天皇ニ奏聞アル其夜天皇ノ

御夢モ同キ事也ヨツテ其年外宮御造宮アリテ明年丹

波ノ與佐ノ宮ヲ出シ奉リテ大和國宇多ニ一宿アリ其

ヨリ伊賀國ニ二宿アリ伊勢ノ神戸ニ一宿同ク山邊ニ

一宿山邊トハ今ノ次ニ度會ノ平尾ニ三月ノ間御座ス平尾ノ宮是也

平尾ノ宮是ナリ同九月十六日ニ山田原ノ新殿ニ遷シ奉

ル也外宮ノ本宮ハ天御中主尊國常立尊ト同体異名也天神七代ノ祖神ナリ

治世ノ御神ハ皇孫瓊々杵尊ナリトイヘドモ相殿ニ御

座テ祖神ヲ崇奉リ給フ也サテ天兒屋根命天太玉命同

ク相殿ニ坐シテ皇孫ヲ輔佐シ玉フ也人王十一代垂仁

天皇内宮御鎮座ヨリ二十二代雄略天皇外宮御鎮座マ

デハ其年數四百十八年ナリ日本姫皇女其間存生ニ

シテ鈴鹿ノ宮ニ座セシナリ日本姫ノ壽命ハ七百歳

也云々

七 三社託宣題號之事

三ト者天地人ノ三才ナリ諸神ノ數多シトイヘドモ天

神地神人神ノ三才ノ神ノ外ニハアルベカラズ然ラバ

此御託宣ハアラユル神等ノ託宣トモ心得ベシ惣ジテ

三ノ字ハ神道ニ用ユル文字ナリ王ノ字ノ意ニテモ知

ヤスキモノナリ王ノ字ハ三ノ字ニ中ニ豎テ點ヲ打意

ハ天下ノ王タル君ハ天地人ノ三才ヲ胸ノ方寸ノ中ニ

ニハ天下ヲ譲リ玉フ月讀尊ニハ天ヲ譲リ玉フ素盞鳴尊ニハ根ノ國ヲ譲リ玉フ蛭子ニハ海ヲ譲リ玉フ此蛭子ハ生レ玉ヒテ三年ノ間足タチ給ハザレバ虛船ニ造籠テ海ノ事ヲシラスベシトテ流シ玉ヘバ攝津國ニ留リ玉フ今ノ西宮是ナリ亦素盞鳴尊ハ生ナガラニシテ荒ク猛キ神ニテ國ヲ行キ給ヘバ國ノ人煩ヒ死シ山ヲ行キ給ヘバ木ヲ朽シ海ヲ通り玉ヘバ波風ヲ動シカクノ如クニシテハ國土ヲ知スベキ神ニ非ズトテ根ノ國底ノ國ヘ拂ヒ給ヘドモ猶父母ノ神ノヲシヘニモ隨ヒ給ハズ動スレバ日神ノ住給フ宮ノ中ヘ入惡キ事ヲ而已ナシ玉フ惡事ノ色々神代卷ニ見タリ是ニ依テ日神ハ天ノ磐門ニ閉籠リ玉ヘバ國土ハ夜晝ノ別チモナク暗闇トゾ成ケル爰ニ八百萬ノ神ノ謀ニテ岩戸ノ前ニテ神樂ヲ拍子給フ舞姫ハ天ノ鈿女命祝言ハ春日大明神ナリ白幣青幣ハ天ノ太玉命持玉テ庭火ヲ燒謠ヒ舞給ヘバ天照太神ハ岩戸ヲ少シ開キテ見玉フ處ヲ信濃國ノ戸隱ノ明神ハ力ツヨキ神ニテ日神ヲイダキ出シ玉ヘリ其ヨリ素盞鳥命ヲバ髮ヲヌキ足手ノ爪ヲ切テ日神ヘ御佗言ヲ申シテ素盞鳴ヲバ追失ヒ給ケレドモ猶天下ヲ天照太神ヘ渡シ奉ラズ地神第二代ハ日神ノ御子正哉

吾勝々速日天穗耳尊ノ時モ素盞鳥ノ御子大己貴尊ナヲ天下ヲ渡シ給ハズ其御子事代主命ニ至ルマデ素盞鳴ノ子孫代々國土ノ主タリ然間天ノ神高皇產靈尊經津主命下總香取明神健甕土命常州鹿島大明神也詔シテ曰ク汝二神天クダリテ天ガ下ヲ靜メヨトナリ時ニ二神天降リ大己貴命ニ向ヒ給フ時劔ヲ逆サマニ立テ其キツサキニ腰ヲカケ猛キ姿ヲ顯シテ曰ク吾二神ハ天ノ神ノ使ナリ國土ノ御主ハ天照太神ノ子孫也急ギ渡シ奉ランヤト大己貴命答テ曰ク我スデニ子孫アツテ國土ヲ讓ル上ハ彼子孫事代主五十猛二人ノマヽナリトノ玉フ其時二神又始ノ如クイカメシキ形ニテ事代主命ニクハシク問玉ヘバ國土ヲ渡シ奉リ玉フ其時ニハヤ正哉吾勝尊ハ年行給テ其御子地神第三ノ尊天津彥々火瓊杵尊ニ至テ天下始テ渡リ玉フ是今ノ伊勢國外宮相殿ノ神ナリ

五 內宮御鎮座由來之事

伊勢內宮ハ天照太神ナリ仁王十一代垂仁天皇御宇冬十月甲子ノ日ニ丹波國與佐ノ宮ヨリ伊勢國渡會郡宇治郷五十鈴河ノ宮ニウツシ奉ル其由來ヲ尋ルニ垂仁天皇御姬宮大和姬ニ詔リシテ天ガ下ニ神明ノ御鎮座

也亦垂仁二十六年冬十一月新嘗會ノ夜新嘗會トハ十一月ノ中ノ朔日於ニ

禁中一始テ太神宮ヘ當年ノ米ヲ御供ニソナヘ玉フ祭リナリ其ヨリ天子ヘモ新米ヲ備フ此祭ナ又ハニヒナヘノ祭トモ云垂仁帝

神主物忌等八十氏ニ詔ノリシテ曰玉ハク吾ニ今夜太

神宮託宣シ玉フ也神主物忌等明カニ聞ベシ神代ノ人

ノ心ロハ正シクシテ直ナシ人皇ノ末ノ代ノ人ハ其心

黒鳥シテ其心安キ時ナシ然レバ則チ惡鬼邪神モ便力

ヲ得テ人ニ託シテ誑言ヲナサン然ラバ今ヨリ後永ク

善神ノ託ヲ止メン若時ニヨリテ人ニ告ルニハ形チナ

クシテ聲ヲアラハシ尤クヤケキコト驗言バヲアラハサント也此事

寶基本紀ニ具サニ見タリ然ラバ前ノ兩說ノ中ニハ池

水ニウカフ文字ノ說尤シカルベシ

三 上代御託宣神變之事

人皇十三代仲哀天皇御宇天照太神春日大明神虛空ニ

聲ヲアゲテ御神託アリ天皇是ヲ仰信シ玉ハザル過ニ

ヨツテ崩御アリシト也又聖武天皇伽藍建立ノ叡願御

坐トイヘドモ神國ノ遺風ナヲ恐レアリトテ行基菩薩

ニ勅シテソノ効驗ヲ伺ヒ玉フ爰ニ行基太神宮ニ參籠

アル七日ノ夜虛空ニ聲アツテ曰ク實相眞如ノ日輪ハ

照ニ生死長夜之闇一 本有常住ノ月輪ハ拂ニ無明煩惱之

雲一ト此御託宣ノ旨基公叡聞シ奉ル詔シテ曰ク句中

ノ意誠トニ神代ノ昔シ天照太神ハ素盞鳥尊ノ惡逆ニ

依テ六合常闇ニナルトイヘドモ終天ノ岩戸ヲ開テ長

夜ノ闇ヲ照シ天孫ハ八重ノ雲ヲ別テ天降リ玉フ時雲

霧アツクシテ重リシトキ被ヲナシ玉ヘバ雲霧タチマ

チニ晴タリ是無明ノ雲ヲ拂ニ非ヤ然トイヘトモ勅使

梵僧ニシテ句面佛法ニ似タリ是非ニ其告詳ナラズト

テ天平十四年十一月ニ重テ右大臣橘朝臣諸兄ニ仰

セテ諸兄ハ山城國井出ノ寺ヲ造リテ山吹ヲ植伊勢太神宮ノ勅

使タリ天平十四年十一月十五日ノ夜内宮三ノ鳥居ノ

前ニシテ御託宣サキノ如シ同キ夜天子ノ御前ニ天女

現ジ玉ヒテ光ヲ放テ宣ク此國ハ神國ナリ尤モ神ヲ敬

ベシ然ドモ日輪ハ大日ナリ信仰スベキト也其後始メ

テ御廳寺ヲ立玉フ今ノ東大寺是ナリ

四 天照太神國土請來之事

天照太神ハ地神五代ノ中ニ第一ノ神ナリ父母ハ天神

七代ノ終リ伊弉諾伊弉冊ノ尊ナリ然ニ二神天ノ逆鋒

ヲ以テ天ノ下ニ國アラムヤトテ探リ玉フニ鋒ノ滴リ

カタマリテ嶋トナル今ノ阿波路是ナリ二神此嶋ニ下

リテ先日本大八嶋ノ國ヲ生玉フ亦一女三男ヲ生玉フ

天照太神日月讀尊月素盞鳴尊蛭子尊是ナリ天照太神

三社託宣略抄

一 託宣起之事

今此三社ノ託宣ノ起リハ正應年中大和國奈良ノ京東大寺ノ東南院聖珍親王ノ御時庭前ノ池水ニ天照太神八幡大菩薩春日大明神三社ノ託宣ノ文字アキラカニ顯レタリト也此東南院池ノ事往昔ヨリ大蛇スミケリトテ住居ノ人年ヲコヘズ是ニ醍醐寺ノ聖寶尊師好ミテ此處ニ至リ住ス則チ鬼魅來テ聖寶ヲ爭ヒ拒事タビタビナリトイヘドモ聖寶ヲソレズシテ住ス或時聖寶茶ヲノミナガラ睡ル時大蛇梁木ニ登リテ寶ガ隙ヲ窺ヒ見ル寶眠リ覺テ茶椀ニ蛇ノ形チウツルヲ見テ仰テ是ヲ咒スタチマチニ大蛇シリゾヒテ二度來ル事ナシ其ヨリ聖寶ハ元興寺ノ願曉法師ニ隨テ三論宗ヲ習ヒ講ゼシ寺也然シヨリ以來惡鬼毒蛇此池ニ住事ナシ又此庭上池ノ傍ラニ大磐石アリ是ハコレ聖寶大峯ヨリ背ニ肩來テ今ニアリ人力ヲ以テ動スコトカタシ誠ニサマザマ子細アル池ナリ聖珍親王ハ尊圓ノ御舍弟也

人王九十一代伏見院ノ御宇ニ當ルナリ正應年中御託宣ノ比ヨリ今慶安年中マデハ其間三百五十余年バカリ也不思議ナル御託宣ナルガ故ニ天下悉ク此文字ヲ寫シ用ル者ナリ 一說ニハ日本ハ神國ニシテ唐土天竺ニモ勝レテ神變不思議ノ國ナリ上代ハ上下トモニ人モ正直正路ヲ面トシテ少シモユガミタル事ナシ然レドモ末ノ世ニクダリテ人ノ心モヨコシマニ曲ミ行ニヨツテ神慮ノ御惠モウスクナレル者ナリ是ニヨツテ三社ノ神ハ末ノ世ノ人ノ心ヲ正シク直クセン爲ニ吉田ノ神主ニノリウツリ給ヒテ心ヲ知ヤスク言葉ヲヤハラゲテ三社ノ神各ノ託宣シ玉フト也今都ノ吉田ノ森ノ峯ニ託宣ノ宮トテ有リトナリ右兩說ノ中ニ始ノ說ヲ以テヨシトスベキカ其子細ツギニ明カナリ

二 末世ノ御託宣人ニ不託事

人ニ乘ウツリ玉フ御託宣留マル事ハ人王十一代垂仁天皇ノ御息女大和姫ノ皇女御託宣ヨリ以來永ク止マリタリ天照皇太神大和姫ニ託シテ曰ク今ヨリ後ハ神託ヲ止ムト有シ時大中臣ノ祭主問テ曰ク若神託トバマリナバ末世ニハ神ノ御シルシハ有マジキカト其時答テノ玉ク末世ノ神ノ告ニハ夢ヲ以テ知シメント

三社託宣抄

天照皇太神宮

謀計雖_レ爲_二眼前利潤_一必當_二神明罰_一
正直雖_レ非_二一旦依怙終蒙_二日月憐_一

八幡大菩薩

雖_レ食_二鐵丸_一不_レ受_二心穢人物_一
雖_レ座_二銅燭_一不_レ到_二心濁人處_一

春日大明神

雖_レ曳_二千日注連_一不_レ到_二邪見家_一
雖_レ爲_二重服深厚_一可_レ赴_二慈悲室_一

一 御託宣起之事

二 末世御託宣人不託事

三 上代御託宣神變事

四 天照太神國土請來事

五 內宮御鎮座之事

六 外宮御鎮座之事

七 三社託宣題號事

八 諸神中三神託宣事

九 天照皇太神宮之事

十 天照太神御託宣事

十一 八幡大菩薩事

十二 山城國鳩峯勸請事

十三 八幡御託言事

十四 春日大明神事

十五 大和國三笠山勸請事

十六 春日御託言事

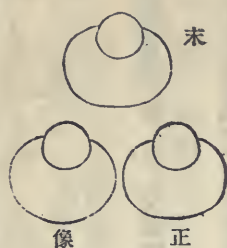
現是也觀音現身說法之山也此尊者應神天皇二十一代大祖也爲奉助大神之化尊早被示天童之妙體和之本山之光俱當山之月昔現于本山之時毛天童今現于當山之時天童明王之化延喜之年有行秀聖人云者行業年積効驗嚴重以神力之令然依神慮再拜見昔之天童顯現今日山靈體是也

當山三鉢靈水事

天平三年神託

鎮護國家正像末乃靈水奈利石乎爲體須水乎爲意須者

大寒不凍大旱不減勅使每參宮酌持之奉獻皇后寶祚延長之良藥敬神之人參詣之輩雖給一滴終潤三一世也



巡拜記云
弘六寸許餘
深四寸許餘

大菩薩令浮御影於此水之坐主水御奇之間下部

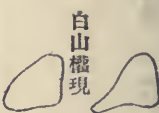
申云靈神之御影云々々朝廷守護之瑞相也大同四年神託

此峰住三世利益諸衆生現世成悉地後生成菩提

宇佐八幡宮緣起下

本云建武二年乙亥十一月三日書畢右筆

宇佐重榮



靈石之上擬奉造覆御殿之時天平二年庚午神託云

吾禮石體土顯流々已至未來惡世天久加其奈利此風爾當利此流乎吞靡牢者可滅罪障奈利勿造覆禮者

武內靈神事

懷中曆云景行天皇五十二年辛酉八月以紀武內宿禰始爲棟梁臣云々奉仕六代之帝謂景行天皇成務天皇仲哀天帝神功皇后應神天皇仁德天皇也

應神天皇御宇亦關白爲天下執柄歟壽三百八十餘歲後正衣冠壯束帶入美濃國幡山云因不破山不知令死所之間人尋行見之竹葉懸札其銘云

法藏比丘豈異人乎彌陀如來卽我身是已上本地法身或示王臣之位或現主伴之神一體分身之利生權現同時之垂迹如大神應作大神比義朝臣也御在所十町許下參詣登山之路有王子大岩腹有口奧有水號硯

石也

武內宿禰之昔爲執柄之臣註天下之政應神天皇之御靈顯大神之坐爲神眷之位註當山參詣之人數其硯石硯水也王子者武內變身歟

石清水社記云武內者大菩薩寶前通夜人數交名每夜註之坐云々

白山權現事

八幡大菩薩之大祖權現也

第四十二代文武天皇大寶元年辛丑泰澄和上又云古志小大德神融生人間飛空中

第四十四代元正天皇養老年中越前國與加賀國之境有高岩名白山有寶池湛綠水不常處已奇異也大師於此池澄心水誦念經咒奉備法味祈言定有佛神之居歟見色身之仰爰自洪波之心現大蛇之身大師言此是垂迹歟仰願可現本地其時阿彌陀如來色相耀波上次十一面觀世音菩薩光明徹水底然而言

我昔爲利日本國現天神第七代伊弉諾伊弉冊尊今住此峯欲利一切衆生云々

彌陀者陽神主本地也觀世音者陰神之本地也今白山權

汝下化衆生_二矣累世契約不_レ改當宮之守護殊新矣

右善神王事

高良玉垂大菩薩也

大帶姬靈行之昔異國降伏之刻地神第五代主鸛萱不葺
合尊現言我即明星天子之垂跡也有_二第三公子_一月天子
之應也奉_レ授_二付之_一爲_二大將軍_一可_レ被_レ遂_二敵州降伏之
本意也云々仍令_レ賞_二此公子_一被_レ授_二大臣官_一號_二藤大
臣連_一保_二大帶姬自_一龍宮城_一令_レ得_二乾滿兩珠_一於_二新羅
之海_一擬_レ令_二合戰_一之時爲_二此大臣之役_一被_レ上下兩願令
_レ降_二伏異國_一畢歸朝之後垂_二跡於神道_一顯_二名於後代_一
昔者征伐輔佐今者垂迹之助化也

八子神事

三十三箇之石爲_二御體_一和光同塵之驗爲_二堅固_一如_二位
田寺大菩薩神託_一者母堂之君產_二八王子_一之給故云_二八
幡_一_二已_一八幡一義也兩所善神王菩薩八子神示現年紀抄
者無_二所見_一耳

御許山石體權現事

應神天皇御靈行之昔處々御修行之所也昔_二欽明天皇_一
峰朝々令_レ放_二光明_一之間長門國之守遙見_レ之奏_二聞之_一
處卽爲_二勅使_一重々尋來之時令_レ住_二當山之麓_一大神朝

臣波知_二大神比_一其壽八百歲申_二子細_一之間攀登見_レ之處
如_二翁中_一金色鷹於_二三柱靈石之上_一令_二飛渡_一之光明也
當山之下名_二日足村_一者此光明如_二日足_一依_レ照_二此村_一
也歸參令_二奏聞_一之有_二叡感_一而問_二群臣_一而言此神山如
何可_レ名乎諸卿申云可_レ爲_二御計_一云々帝取_二此語_一可
_レ號_二御許山_一云々



武内



北辰



三



二

巡拜記云
高一丈五
尺廣一丈
五尺許



右善神王



左善神王

殿一舉

若宮 若姬 宇禮 久禮

四所權現御體者大神朝臣蘊磨同助雄奉造立之又御母龍神意猛之故預器杖之坐也方有神敵朝敵之時大菩薩仰此神隨輕重令放八目流鏑而已古老傳云禮殿之北昔有戶自然不淨之輩上下向之時忽有罰之故止此戶今在南方

西脇殿事

天兒屋根尊春日大明神御在所也天照太神之昔依素盞鳥尊之惡事被閉籠天磐戶之間天下常闇人間失度之時天兒屋根尊心賢計妙取天香山五百箇真櫛上枝著八坂瓊中枝著八咫鏡下枝著青和幣而祈申奏御神樂依人杖舞爰日神思食依何事喉遊哉少關磐戶令見出刻日光照耀人皆面白今人有感之時云面白者是也多力雄尊執御手奉引降中臣神忌部神引注連繩而申自今以後莫歸入矣日神相契天兒屋根尊而言於我子孫者必可爲中國主於卿子孫者可輔佐國家已上御神樂此時被始也人王代々之時其氏爲攝政神道明々之今者其靈令相副之坐神護之年示現于三笠山景雲年以後

造殿歟當山群鹿者此神之侍者也當社眷屬也

東脇殿之事

地神第五代鵜萱不葺合尊住吉大明神之御在所也大帶姬靈行之昔異國降伏御祈之時天降之坐依此神之戮力討彼國之凶賊不忘昔契約令副合之應迹之坐弘仁年以後造殿歟

北辰殿事

當山先住之神本地無双之誓也大菩薩御修行之時可令在所而奉守吾君之由令相語之間被領掌畢北斗七星之變作南州常住之刹生衆生之性者七星之種也機緣已厚于此界行度不移諸他方來於天宮已爲地主天降時代事非神者難知造舍事大菩薩御移當峯者神龜二年也其歲造舍歟

左善神王事

阿蘇大明神也

靈體三人爲兄弟令遊化十方自震旦歸日本之昔大兄留豐後國高知尾々々々明神是也次兄留肥後國阿蘇嶽々々々明神是也此明神告衆弟八幡而言汝早到花都利成十善帝王之子可遂百王守護之誓我留當峯奉見繼高知尾大明神利可助

杵御禮盤上御座具其上草座每夜丑時奉_レ舉_二御格子_一年分僧奉_レ備_二香華等四方_一大菩薩令_レ向_二西之坐_一搆也

私云御本尊如何御修法如何

天平十三年公家被_レ奉_二納金字法華經_一敏勝王經金造塔等_一御本尊者釋迦多寶歟御修法者法華法歟

同三年天祿王申神託

我加影波眞言加持乃闕伽水仁可_レ寫志御振鈴之音承保之比御前檢校神日奉_レ聞_レ之其後敬神人々間々奉_レ聞之云_二時代云_一人名_二不_二分明_一耳

若宮四所權現事

御靈行之時大帶姬遣_二方士於_一

志實大明神

龍宮城_一而言汝之

所_レ妊者女子也我之所_レ妊者男子也可_レ成_二夫婦_一被

渡_二乾珠滿珠_一者可_レ令_レ降_二伏異國_一云々早得_二兩顆_一被

誅_二三韓_一畢大帶姬契約已間八幡御生成長之時成_二

夫婦_一生_二四子_一之坐_二謂若宮若姬宇禮久禮也此時自_二

龍宮城_一被_レ獻_二黑色龍馬_一二疋_一今神馬毛是

第五十三代淳和天皇天長元年甲辰大神朝臣蘊麻呂母

酒井勝竹主女就_レ神而經_二七箇年_一又從八位下大神朝

臣眞守家有門主女託_レ之而宣

吾波菱形宮西方荒垣之外隱居神會若不_二顯申_一波汝家爾

入_二神氣_一物會其時吾喻爲土波可_レ告者

思忠經_レ年不_レ顯而後神氣入_二眞守之家_一陰陽師川邊

勝眞苗錄申云託宣之神向_二平陽陰師_一言

吾禮其命乎取利死_二平陽陰師_一言

未_レ經_二幾年_一陰陽師頓死然後門主依_二託宣_一告_二蘊麻

助雄等_一云

陰陽師不_レ用_二神之託宣_一而忽頓死汝不_レ見哉可_二早奉_一

治_二彼神_一云

蘊麻申云取_二人之命_一之給何大神宮之邊可_二顯申_一即

神託

汝之所_レ申頗有_レ道但大菩薩之大祭之後年月丑時吾靈

氣乎奉_二天勿_一令_レ告_二他人_一之年內爾靈氣顯不_レ狀可_レ見

志者又申須以_二何因緣乎_一他處多之中仁顯_二大菩薩宮邊

爾_一之給哉即神託

大菩薩爲_レ討_二隼人_一有_二行幸_一之時吾御伴爲_二將軍_一而

奉_レ仕業彼隼人等乎打還利坐之時彼將軍器械皆授_二吾

氣給畢奴因_レ玆爲_レ戰彼_二爾_一吾身老勞侍_二於門外_一爲_二立_一

天下太平國泰民安之心也是謂_二八字碑_一慰安願_二仁慕處也者

第五十五代文德天皇仁壽二年壬申十二月造宮使正六

位上藤原朝臣藤主典正六位上香山宿禰永貞奉_レ造_二齋

宮領一又本公田之外治田悉爲二不輸租田一偏一爲二神領國郡勿附證

應令入封於豐前豐後日向國封返抄事

右三所大菩薩御封千四百卅餘戶也而依二天平勝寶七歲二月十五日託宣以二八百餘戶一奉返公家即充二造宮造寺料一所遺封六百餘戶也追年三ヶ國司入封請二宮返抄勘會公文一其來已久若不請返抄國司者捏公文有無限神事永勿二牢籠一

應檢諸封鄉作田事

右封內之作田須國使不可入勘然而追年國宰精宮返抄勘備公事者檢知封田作否並損否田若有否之者任二先例一令國宰殞之令請宮返抄若用二穴酒鳥之人不可用是以清淨廉直之人宮使相共令行之已上三ヶ條在寛平四十九ヶ條宮符文一

被加年分僧二人事

第六十一代朱雀天皇御宇平將門承平之年率二十六萬人惡黨押領東國令伺二北關一藤井澄友天慶之曆以二一萬千人一乘二七百餘艘一充二滿西海道一打留上洛之船依之公家以二三歸五戒之力一令滅亡邪神可奉守二帝皇之由仰二天平神託一奉爲第二殿比咩大

神第三殿大帶姬御戒師被加二一人年分僧一官符云大政官符

應加二度豐前國八幡宮年分者二人一

右從三位守大納言兼右近衛大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣實賴宣奉勅件年分者宜加度者府宜承知於二豐前國彌勒寺一每年試度荷到奉行

右少辨正五位下兼內藏頭源朝臣右大史正六位上大窪宿禰

天慶三年八月廿七日

私云依二大菩薩御得戒之力一滅亡像末邪神奉延二天帝御命一者可依二氏人等讀經持戒一之由神託分明也若不讀經不持戒者尊神得戒不定也若然者不奉延二天帝御命一之由大罪如何況神道已御持戒也凡夫盡仰二神託一受戒哉

八幡大菩薩御行法事

第六十四代圓融院天祿元年庚午神託以二真言一「天淨道場乎愛以爲二和光之栖一」率者大同二年御受法之後帝王一十四代年序百六十餘年但施二自性壇之益一未顯二大悲壇之行一依二此神託一早令二奏聞一「夏九旬之間第一齋殿外殿西間莊方壇四方關伽香爐四角寶瓶立御鈴

傳教大師參宮講經時以神衣被進事

桓武天皇延曆廿三年大師承_二綸言_一入_レ唐參_二當宮_一令_二祈申_一渡_レ海在_レ唐求法如_レ願同廿四年婦朝之處雖有_二洋中之風波_一神力之故更無_二海上之煩事_一安穩着岸之後弘仁五年爲_レ遂_二渡海之願_一下_二向西國之時奉_二爲八幡大神_一於_二神宮寺_一自講_二八軸法華_一乃開講竟且神託

我禮不_レ聞_二法音_一_{志久曆_二歲月_一幸值_二遇和尙_一天仰}

聞_二聖教_一利兼又爲_レ我仁修_二種々功德_一須致_二誠隨喜_一須

何足_レ謝_二德_一矣苟有_二我所_一授法衣_一利者即託宜主自

開_二齋殿_一手捧_二紫衣_一御袈裟七條一帖奉_二上和尙_一大悲

力故垂_二納受_一是時宮司并禰宜祝等各嘆云元來不_レ見

不_レ聞如是奇事_一大神所_レ施法衣今在_二比叡山_一_{前唐院云々}

第二御殿之事

大帶姬_{人皇十五代神功皇后御靈}

第五十二代嵯峨天皇弘仁十一年神託

吾波神功皇后大帶姬奈_{利奉_二副_一天如_レ昔今毛同心可_レ利_一}

益衆生_{志者}

同十四年官荷云大宰府弘仁十四年癸卯四月十四日荷

傳可_レ新_二造八幡大菩薩宮大帶姬細殿式宇_一_{已上}

第十七代仁德天皇御靈事

平安城之邊平野社之神也所々記仁德天皇御靈者宇佐宮南樓上云々

私云如_二當時_一者無_二壯嚴無_一御體亦無_二祭禮_一是則

大道天然之剎生歟自性法身之理宮歟所以帝位之昔

憐_レ民之故於_二三年之間_一止_二萬民之役_一在_二高臺_一詠_二村里_一言高屋爾登天見禮波烟立津民農竈門波仁義波

飛爾氣利

於_二當宮_一者居_二高樓_一而顯_二覺月之昇_一上界之雲_一耀_二民

烟_上於_二彼社_一者在_二平地_一而表_二和光之同_一下界之塵_一照_二民

民烟_上也凡厥王者之政靈神之道重々生_二濟度方便_一也

高樓神居事依_二神託_一歟未_レ檢也

本云建武二年_{乙亥}十一月三日書畢右筆_{字佐重榮}

神領可_レ全事

神領可_レ全事

第五十九代宇多天皇寬平元年庚戌

神託後百三十五年

官荷

應_レ先_二大菩薩御領治田並桑蘭等_一事

右檢_二御託宣文_一傳_二天不勝寶七_一諸國有_二二種田_一租田地子

田皆有_二其員_一_{私略之}者託宣之旨就_二中自_一今以後爲_二先_一

宇佐八幡宮緣起下卷

小倉山歸坐事

光仁天皇寶龜十年己未神託

我禮前^幾坐須留此菱形宮^{仁志神}乃名始天顯禮位報博々高利是以願住^世此舊宮我着^{豆身}宵^鏡幾奉^守護朝廷及國家^{真奉者}

右大臣宣用^{神社祝}仰^{府令}作者云々府依^{荷旨}自^{寶龜}十一年庚申^{到天應元年辛酉}兩年之中菱形宮被^造之第五十代桓武天皇延曆元年壬戌自^{大尾社}如^{本奉}歸移^矣

御修正事

桓武天皇延曆六年丁卯神託

槌^鐘天諸僧入堂之時波堂乃後門爾跪天地爾候志入堂乃後波佛前乃露地爾敷^{坐具}天三ヶ夜乃間波奉^祈護天帝乎^{奉者}

彌勒寺御入堂事

同天皇同十二年癸酉神託

神我禮每日^{一夏}九旬彌勒寺^附入堂須有^{御尻懸石}利勿^人登^{禮者}

件石御堂正面之圖^{三丈}去古者傳云入^{地底}七尺自^{地涌出石云々}

驚^{此乃度靈告}依^{天平神託}一夏九旬每夜丑時奉^上御格子^{又開}西中門^{是則大菩薩御參堂之儀式}也此間御寺長講僧一人參宮奉^迎於神^{之儀式也}又三人官僧於^申^中之殿^讀法華懺法^唱大自在菩薩之寶號^矣年分僧於^{豆齋}奉^供香花^{又申時爲}申^{還御}同三僧等參^{御寺}行例時歸^{社壇}讀^{懺法}之後奉^下御格子^{入御之儀式也}

弘法大師參宮法樂時御受法事

桓武天皇延曆廿三年^{甲申}大師承^{綸言}被^{入唐}望^乘船之期^於高雄寺^爲仰^{玄應}被^致丹祈^{大菩薩}納^受心中^示現其前御居長^{三尺}三寸許僧形也着^香染御衣^以爾時奇異^爲末代効驗^{互延}利生御手^被寫^{護國御形}忝哉神筆之功已以勝^{生身妙體}奇哉能書之德永奉^留入空御影^{遂使在}唐施^{威求}法如^願大同二年丁亥歸朝爲^{報賽}參^{宮專}以^{所學法}義^奉備^{尊神}法樂令^{感密法有}御受法^矣

宇佐八幡宮緣起下卷

目錄

- | | |
|--------------|------------------------------------|
| 一 小倉山歸坐事 | 一 御修正事 |
| 一 彌勒寺御入堂事 | 一 弘法大師參宮事 <small>御受
法事</small> |
| 一 傳教大師參宮御神衣事 | |
| 一 第三御殿事 | 一 仁德天皇御靈事 |
| 一 神領可全事 | 一 被加年分僧二人事 |
| 一 大菩薩御行法事 | 一 若宮四所事 |
| 一 西脇殿事 | 一 東脇殿事 |
| 一 北辰殿 | 一 左善神王事 |
| 一 右善神王事 | 一 八子神事 |
| 一 石體權現事 | 一 武內神事 |
| 一 白山權現事 | 一 三鉢靈水事 |

神道之驗起於天皇叡慮起於法王信心而已

東大寺鎮守八幡宮者是時神宮也

御神領事

聖武太上天皇天平勝寶二年庚寅二月廿九日御奉寄帳如御筆狀者

捧上件物爲有勤行神事等遠限日月窮未來際敬納彼社爲神稅令法久住拔濟衆生天下太平人民快樂法界有情共成佛道渡誓其後代有無道之主邪賊之臣若犯用破障不令勤行佛神事者是人必得破辱十方三世諸佛菩薩等之罪當落大地獄永無出期若不犯觸致勤行者世々紹隆子孫共出塵域早登覺岸取大底細々御誓狀具御本歟類聚國史第五云二年天平勝寶二月戊子奉充一品八幡大神封八百戶前四百廿戶今加三百八十戶位田八十町已上此神願井進宮民三百十三人散在三國豐前豐後日向七郡內又女稱宜大神朝臣杜賣食封四十戶位田一百廿町主神田磨給外從五位下仍以祝神主可爲大宮司之由被勅定畢

今度御奉寄被治定三國七郡之條往古子細及于天聽歟神道令然歟大菩薩御靈行之昔五人同行相共爲

利益衆生佛法修行豐前國馬城峯之連峯豐後國六鄉山之連山靈瑞留所々依今而見古効驗已重々依古而見今奇特亦多々就中豐葦原之中底豐前國之本宮者天地相之山神王道交之宮也又人王第一神武天皇生年十四歲昇帝釋宮受執印鑑還來日向蘇於峯十五歲立皇太子冬十月率諸皇子自日向國住宇佐郡之時宇佐津彥宇佐津媛二人於宇佐河上造一柱騰宮依獻大饗恭賜珍寶天王自斯所趣諸國降伏荒振神達被鎮一天四海生年五十二歲御即位治天下春秋七十六年拔除賊徒一千一百二十頭目當郡令進發之坐也又日向之國者日本之表也地神第一第二兩代主猶還于天不降住地第三第四五三代一百七十九萬二之主山陵在日向國又若宮四所權現於斯國而所生撰定三國奉獻七郡立方以深以字誤字歟而已

有勅使登壇受戒

私云

忝哉年分爲御戒師又給神字爲其名而已

彌勒寺領事

正文可在寺務之許

聖武太上天皇天平感寶元年己丑六月廿三日御奉寄帳

如御筆狀者

捧上件物一切大小乘經律論等必爲轉讀講說遠限

日月窮未來際敬納彼寺永爲學分令法久住拔濟群類天下太平兆民快樂法界有情共成佛道

復誓其後代不道之主邪賤之臣若犯用破障不令勤行佛神事者是人必得十方三世諸佛菩薩等之罪當

落大地獄永元出期若不犯觸敬致勤行者世々累福紹隆子孫共出塵域早登覺岸取大底細々御

誓狀具御本歟

東大寺供養時大菩薩御上洛事

孝謙天皇天平勝寶元年己丑十一月十九日己丑於內裏七

歲童子神託

神吾禮向京波牟者

太上天皇同廿四日甲寅遣參議從四位上石川朝臣年

足十一月十九日按十一月以下六字符歟侍從々五位下藤原朝臣魚

名等以爲迎神使路次諸國差發兵士一百人以上

前後駢除又所歷之國禁斷殺生其從人供給不用

酒宴道路清拂不令汗穢矣神與禰宜大神朝臣杜

女同乘神與田麿乘神驛十二月又遣六衛舍人各

廿人奉迎八幡大神於平群郡是日入京即於宮南梨

原宮造新殿以爲神宮請僧四十口悔過七日丁亥

大神禰宜尼大神朝臣杜女其與紫色拜東大寺天皇太上

皇太后同亦行幸是日百官及諸氏人等咸會於寺

會僧五千禮佛讀經作大唐渤海吳樂五節舞久米舞

因奉大神一品比咩二品左大臣橘宿禰諸兄奉詔白

神曰

天皇我御命爾坐申賜土申久去辰年河內國大縣郡乃知識

寺爾坐盧舍那佛違禮奉久則朕毛欲奉造思止得不爲之

間爾豐前國宇佐郡爾坐廣幡乃八幡大神爾申賜勅久神

我天神地祇乎率伊左奈比天必成奉天事立不有銅湯

乎水土成我身遠草木土爾交豆障事無久奈佐牟土勅賜奈我

成奴禮歡美貴念食須然猶止事不得爲天恐家禮御冠

獻事乎恐美恐毛申賜久土申

尼社女授從四位下主神大神朝臣田麿從五位下已上

奉爲大菩薩法樂被行萬僧會之時天下太平之

文字現于鳳闕海內保全之瑞相見于佛庭佛法之効

聖武天皇彌有御感悅、又爲買同佛料之黃金、故遣使於大唐之間亦進朝使於當宮、被祈申往還平安之由、時神託

所求乃黃金波將仁出自此土、陪志使乎勿遣大唐禮者

同廿一年天平^丑黃金出^丑部内小田郡、正月陸奥守百濟敬福卽進九百兩、賞敬福、授從三位、皇帝感神驗、其上分三百二十兩、被奉神宮、一件勅使四月六日參宮奉進黃金、時大菩薩手自請取之、被納香爐宮、也又無水金佛像莊嚴難治之間被祈申之處自近江國比叡山之側、水金自然流出也、其上分又三升^{寺記云被三百兩}、獻同彌勒寺、奉納寶藏而已

大菩薩御受戒師度者事

聖武天皇同廿年天平戊子九月一日神託大神吾禮昔波第十六代乃帝王今波百王守護乃誓神先仁波獨率數萬之軍兵、志口氏隼人乎殺害氏大隅薩摩乎平計後仁波此等乃生類乎爲救爾三歸五戒授^{土思布}仍每年仁一人度者乎儲豆號^{三年分}豆吾加神乃名乎授計令祇候社氏氏人等仁法華最勝乎習志三歸五戒乎持世氏每月六齋日辰時仁三歸五戒乎傳受^{世歸}依三寶持戒乃力爾依氏後像

末乃邪神乎滅亡^志天帝乃御命乎守護奉^{其牟毛}者

依此神託被下官府云

太政官符 豐前國八幡神々戶人出家事右奉、今月廿三日勅一件神戶人每年一人宜令得度入^中彼國彌勒寺上

天平感寶元年六月廿三日

第四十六代孝謙天皇元年依神託被進度者官符云

太政官符太宰府

應令豐前國八幡戶人每年一人度者宜得度入^中彼國彌勒寺者

右彼太宰府去天平勝寶元年七月六日符僞被太政官去六月二十三日符、僞今月二十三日奉勅豐前國八幡戶人每年一人度者宜令得度入^中彼國彌勒寺符宜

承知准勅施行者符到奉行

參議從三位左大辨勘解由長官

藤原朝臣正五位下左大史周防權守惟宗朝臣

天平勝寶元年七月廿三日

日本國中勅定受戒者當宮爲根本、其後唐土楊州龍興寺鑒真和尚來朝天平勝寶六年東大寺被立戒壇、同七年十月太宰府觀世音寺被立戒壇、宇佐宮年分僧

聖武天皇同九年天平_丁四月七日神託

我禮當_レ來_二導師彌勒慈尊乎_一欲_レ崇布遷_二立伽藍奉_二安

慈尊_一利一夏九旬乃間每月奉_レ拜慈尊_一奉者依_二此神

託_一奏_二太政官_一同十年五月十五日從_二日足南元江_一

十三移來建_二立之_一今彌勒寺金堂等是也

聖武天皇十三年天平依_二大軍事_一馳遣_二勅使_一奉_レ進_二御

封廿戶御神寶及造寺度僧等_一矣

同十六年天平八月十四日爾爲_レ行_二放生會_一合出_二和間

濱_一之坐御行路次御寺後門順道也而虛空有_レ聲音

我加道場之邊口加可_レ通_二神輿_一幾御堂乃影_{阿耶}者御聲

自_二青天_一而降神語變而紫雲落爲_レ貽_二瑞相之不變_一成

石不_レ朽依顯_二神威之常住_一在_レ今知_レ古矣御影石者

是也御寺之東北之角柱去_二五丈三尺_一有_レ之此石長三

尺三寸廣一尺二寸入_レ底不_レ知_レ之每年七月十五日有

祭矣

同十八年天平御祈禱有_レ驗奉_レ進_二御位三位御封四百

戶水田五十町度僧五十口_一矣

東大寺成就菩薩神力事

聖武天皇廣利_二三界之生_一爲_レ興_二八宗之教_一欲_レ造_二大

伽藍并本尊_一行基菩薩爲_二勅使_一捧_二佛舍利一粒_一遣_二伊

勢太神宮而申志賜久若夫相_二叶神慮_一者必示_二其瑞奉

知_二垂迹之本_一地將_レ崇_二伽藍之本佛_一爰奉_レ勅於_二皇大

神宮之南門大杉本_一七日七夜祈念之處開_二神殿_一告曰

實相眞如之日輪破_二生死長夜之暗_一本有常住之月輪

拂_二無明煩惱之雲_一吾逢_二難_一遇之大願如_二暗夜得_一燈

稟_二難_一受之寶珠若_レ渡海得_レ船依_二其名福將_一理_二飯高

郡_一云_二行基菩薩拭_一感淚_二奉_一納佛舍利_一則奏_二神宣之

趣_一天皇大以_二歡悅_一雖_レ被_二思食立_一御願_二猶_一地未_二分

明_一已而

同天平十四年_壬十一月三日左大臣正三位橘宿禰諸兄

爲_二勅使_一重被_二祈申_一之處勅使歸參之夜天皇御靈夢

云

日輪大日如來本地盧舍那佛也衆生悟_二此理_一將_レ歸_二佛

法_一云_二卽現_一御體_二放_一光明_一矣

然間於_二御本尊_一者被_二治定_一畢於_二御願成就_一者以可

奉_レ憑_二宇佐_一之由天平十九年_丁遣_二勅使於_一當宮可

成_二就此願_一旨於_二大菩薩御前_一捧_二宣命_一令_二祈申_一之

時神勅

吾禮護_二國家_一留_古是禮猶志楯鋒_{乃古}唱_二率神祇_一且共_レ爾

爲_二知識_一且必奉_レ成_二皇帝之願養_一者

同五年^{癸酉}遷宮之時被^レ造^レ宮

同十三年^{辛巳}宮府云大菩薩并比咩大御神裝束奉^レ改^レ換之^二已上

長御驗御枕事

聖武天皇同五年^{天平癸酉}大神朝臣田麻呂思惟大御神有^二暫時化現之御體^一無^二未來尊崇之色^一余之父諸男朝臣先年於^二野仲大貞池^一奉行顯^二御枕^一爲^二神輿之御驗^一今我祈^二申長御驗^一欲^レ爲^二來際尊崇^一故致^レ信於^二本宮^一運^レ步於^二彼池^一難行苦行精進齋摧^二一心^一經^二百日^一之處大虛有^レ聲而宣

我昔此薦乎爲^二御枕^一豆發^二百王守護之誓願^一^志垂^二跡於神道^一流^レ以此薦備^二吾社之驗^一天致^二尊崇^一者可^レ施^二神德^一^{奈利者}

此是前之神勅之趣也忝哉非^二當爲^一百王守護之御誓兼又爲^二一天擁護之御驗^一守^二先例^一造^二新舍^一名^二之鵜羽屋田磨^一七箇日精進不^レ交^二人倫^一三ヶ月用意令^レ奉^レ畏^二莊御長徑^一任^二舊記^一而已

本迹御體如在事

宇佐八幡大神者往古如來法身薩埵也如^二諸社例^一不可^二定^一也以^二本迹御體之幽^一爲^二宗廟莊嚴之死^一者

精神不可^レ得^レ見但以^二生時之居^一立^二宮家象貌^一之耳已孝經云宗者尊也廟者貌也父母既歿宅非^二其靈^一於^二之祭祀謂^一之尊貌^一已故百王以^二當宮^一爲^二宗廟^一八幡以^二當社^一爲^二御體^一也

桓武天皇延曆二年神託云

我波以^二慈悲^一天爲^二體須寺務社務乃司有^二非法^一^其時者可^レ歸^二寂光土^一志我體者有毛也空毛以^二正道^一天爲^二體已上

有者垂迹示現令^レ奉^レ拜之廟社也空本地幽玄不^レ奉^レ見之報體也又有者衆生利益之應體十界暫時之形聲也又空者真空冥寂之靈神虛空同體之妙身皆正道也然以奉^レ顯^二御枕^一之屋號^二鵜羽屋^一之御枕者御體之料不^レ可^レ徒設^二也准望^一之而申^二御體^一歟御體之幽而奉^レ敬信^一之故被^レ致^二如在之祭^一僉蒙^二如意之益^一神服者奉^レ慕^一昔帝位之調進也御枕者奉^レ仰令^二靈託^一之御驗也依^レ之以^二微密^一爲^二御體^一或以^二宗廟^一爲^二御貌^一歟如^二春秋之說^一者大廟室懷心更作云々昔依^二破壞^一而臨時修理可^レ依^二神託^一而年限造營是乃百王孝道之所^レ顯八幡尊貌之可^レ全之故也寂光土者衆生之心底究竟之佛土也

同寺移來建立事

公家祈請於宇佐宮其禰宜辛島勝波豆米相率神軍行征彼國討平其敵大御神託宜曰

合戰之間多致殺生宜修放生會者諸國放生會始自此時矣

政事要略第廿三日 舊記云

養老四年豐前守宇努首男人將軍_{土志}大御神於奉請天

大隅日向兩國向拒隼人乎伐殺幾大神託宜

吾此隼人多殺津留報仁每年爾放生會奉仕_{留陪}依宇佐

宮託宣始_{流度}諸國放生會事云々

小倉山宮事

第一御殿

八幡大菩薩聖武天皇神龜元年_{甲子}立勅使被祈申云齋殿如何可奉造哉爾時神託我禮以大慈悲天爲寶以柔和忍辱天爲衣以諸法空天爲座須者

此神託者誦法華文之坐也

勅使歸參奏申此事豐前守男人椽從六位下藤井連毛人等奉勅小倉山奉造大神宮祝大神朝臣諸男同二年神龜乙丑正月廿七日自小山田社奉移神道令致祭祀豐前守進御戶代田貳町七反

造彌勒寺事

尊神小倉山御移之日何事歟之由奉仰之處神託神吾禮爲導未來惡世衆生爾以藥師彌勒二佛一天

爲我本尊須理趣分金剛般若光明眞言陀羅尼所念呂奈利者

神託之趣奏聞之處令達上聞勅使下向菱形宮之東方日足林之西被造御寺奉安佛像號彌勒禪院

初之別當法達和尚云々昔於彥山般若岩屋被行如意珠之時_{大長大寶年歟}仙翁來給而言被行出之者可給我

云々已被行出畢重々問答之後仙翁言我是八幡也垂

迹時宇佐郡可建彌勒寺可爲此寺別當之由依

御約束也同宮辰巳之方南元江林被造御堂奉安

本尊號樂師勝恩寺大神朝臣比義之建立云々

勅使參宮始事

聖武天皇天平二年大神朝臣田麻呂奉申顯神德同三年正月廿七日捧神服以下神寶參宮自爾以來三年一度有限矣

第二御殿事

比咩大神_{人皇第一神武天皇御母玉依姬之御息也}

聖武天皇同三年天平神託

我波比咩大神奈利大菩薩爾奉副天奉助化道_{率者}

小山田社部

十ヶ年靈龜第二
養老七神龜元二

元正天皇靈龜二年

辰

大朝神臣諸男辛島勝波豆米等小

倉山之坤小山田之林奉

造神殿令致祭祀

元正天皇養老三年

癸未

大隅日向兩國隼人等襲來擬打

傾日本國之間同四年

甲申

公家被祈申當宮之時神託

我禮行而可降伏志者

豐前守正六位上宇努首男人奉宮府令造進神與

之時白馬自然飛來令相副神與于今有神馬之是

也諸男朝臣彌信仰倩以何物爲御驗可奉乘神

興哉豐前國下毛郡野仲之勝境林間之寶池者大御神

修行之昔令涌出之水也參行彼所祈申此事之時

七月之天初午之日雲波滿池寄渚心中致誠之時雲

外有聲而宜

我禮昔此薦爲枕發百王守護之誓幾百王守護者可

降伏凶賊也者

依之奉薦此薦令造別屋

號御產屋

七日參籠或二七

心收口奉累御枕御長一尺許御徑三寸人爭相計神

令然也

私云彼職并御寸法有大神正氏子今不絕云々

御驗事重々有深心歟可尋之哉

字佐八幡宮緣起上卷

豐前守將軍奉請大御神禰宜辛島勝波豆米爲大御

神之御杖立御前行幸彼兩國三ヶ年之間七ヶ所之

城奴久良桑原神野牛屎志
曾利乃石城加牟比賣城令降伏給畢

同七年於彼國神託

我今坐須留小山田社波其地狹隘志我禮移菱形山其半

願給布者

大御神從彼兩國歸坐本社小山田林畢將軍男人椽

從六位下藤井連毛人依此異貴威力奉進之五煙神

戶又進御戶代田一町徑者等神力効驗之由奏聞公

家聖感無極禰宜給勳十等

放生會事

第四十五代聖武天皇神龜元年甲子神託我禮此隼人等多

久殺却須流報仁波年別爾二度放生會於奉仕世平者

又云

一萬度放生乃事畢眷屬引率志天淨刹爾送其半者大菩

薩宣此事行此會之坐四人同行法蓮華嚴體能廿五菩薩

等觀音勢至藥王藥上面々各々相互舞樂贖懸魚於網罟之中

救窮獸於弓矢之下此奇瑞及天聽天平勝寶二年庚

寅被獻左右舞樂畢每佛神事于今被行是也扶桑略

記第二云養老四年九月有征夷事大隅日向兩國亂逆

七百十七

郡本宮宇佐郡之三字天地人三義也玉篇云宇于甫切室也四方上下也

司馬季云宇者天能覆萬物一名之爲宇云宇即天也垂

象而明也佐子賀反亦輔佐之義佐即人也有貞臣之忠

矣郡求溫反君之邑也下字國也郡即地也宇佐宮之後者宮即

地也一人數慮通而成王字也道德經云普之得一者

昔往也元一天得一以清言天得一故能地得一以寧言地得一故

能安靜不動神得一以靈言神得一故能一即元氣者元謂天

地之始也氣謂萬物之命也皆受氣於天各得反生也

經文云一生二一與陽也二生三陰陽生和清濁之三生萬

物天地人共生萬物也宇佐郡三字各生萬物孔子云一

貫三云々王仲舒云三書而通其中謂之王云々橫三

點者天地人豎一點者神德之通橫豎通而王也或稱三通

三之君或稱得一之神依得一之神有通三之君

能通者神也所通者君也是王奉敬神々奉宇王之坐

別宮之地離宮神設雖有八幡之號不可有通三

之義也法依地而弘夫誠乎此言耳神誓地而住尤忝

乎當宮焉哉

日本書紀云

欽明天皇三十二年辛卯八幡大明神顯於筑紫矣義同

御社初事

鷹居瀨社五箇年和銅五六七年靈龜元二年

八幡大菩薩

第四十三代元明天皇和銅元年戊申豐前國宇佐郡內大河

流今號宇西岸有勝地東岸有松木變形瑞多化鷹

顯瑞渡瀨而遊此地飛空而居彼松是大御神之

御心荒畏坐也往還之養遠近之輩五人行即三人殺十人

行即五人殺于時大神比義又來與辛島勝乙目兩人

絕殺三ヶ年精進一千日至誠祈申和銅三年不顯其

體只以靈音夜來而言

我禮成靈神豆以後飛翔虛空流無栖息志其心荒此

是奉前顯大御神也自和銅三年庚戌迄同五年壬

子依神託以勅定令造神殿勤仕神事鷹居瀨

社也辛嶋勝乙目爲祝職同勝意布賣爲是稱宜乙目

之妹黑比賣采女并御戶代田貳反進之次辛島勝波豆

米爲禰宜矣

一云於夜來之告者對大神春麻呂之聽此者比義朝臣之子也云々

第四十四代元正天皇靈龜二年丙辰詔宣此所波路頭爾志

往還人乃無禮利尤此等無禮波甚惡志小山田乃林爾移住世平願給布者

崩御事

治天(下ノ字)四十二年庚午二月十五日春秋百十一歲
(落歟)御入滅葬三河內國志紀那惠我藻伏陵
元年庚寅相當晉主武帝泰始五年同元年如來滅後一千二百一十九年帝身爲凡爲聖御靈爲雲爲雨矣以今顧古崩御之後爲靈行現神道帝王一十三代夏曆三百廿二年之間本地法身和光同塵十界形聲十方示現爲不可思議者也

初顯神道坐事

第三十代欽明天皇御宇廿九年戊子筑紫豐前國宇佐郡菱形池之畔小倉山之邊有鍛冶之翁帶奇異之瑞爲一身現八頭人聞之爲實見五行則三人死十人行則五人死他人不_レ死於人故成恐怖無行人於是有大神比義者行而見之更無人但金色之鷹在林上致丹祈之誠問根本云誰之成變乎君之所爲歟忽化金色之鳩飛來居袂上爰知神變可利人中然聞此義斷五穀經三年之後同天皇三十二年辛卯二月十日癸卯捧幣傾首申若於爲神者可顯我前此語未說現三歲少兒於竹葉上而宣辛國乃城爾始天天降八流之幡吾者日本神土成禮一切衆生左毛右毛任心釋迦菩薩之化身一切衆生濟度七平土

念天神道土現留也我者是禮日本人皇第十六代譽田天皇廣幡八幡麻呂也我名於波曰護國靈驗威力神通大自在王菩薩布國々所々仁垂迹於神道留者斯後者大御神與比義常物語玉フ非余人之所聞即令奏聞畢雖有尊崇未被造社以比義任祝職公家有御願之時教比義爲神跡比義向神山捧幣帛奉神語申勅答夫比義者不知何國之人不辨誰家之子來于自然長生之道衡天山高出于靈威神妙之底氣宇淵深其形似仙翁其首戴靈帽莫人以測之世以名之大含玄冥之神只比凡靈之義或作岐字借聲不可直喚之故也故以大神可爲姓以比義可爲名之由有群議被勅定畢

大神之昔三國本朝靈行之間常隨給仕或表五百余歲之齒或爲八百餘歲之身今不詳出歿前後不辨冥助去來何測壽命長短爭知凡聖同異只以方便之義暫表各別色國々靈行處々靈瑞或依神託之文或依比義之語知往々之跡造所々之社而已

豐前國宇佐郡本宮事

八幡大菩薩御撰定難測者哉
私云大菩薩始者日向辛國城天降今者豐前國宇佐

宇佐八幡宮緣起上卷

帝位御事

八幡大菩薩者人王第十六代應神天皇御靈也御父第十四代仲哀天皇御母第十五代神功皇后也皇子在胎之昔仲哀天皇之時有熊襲之者不奉隨王命之間集群臣擬令討之處神託皇后而言勿憶熊襲之不隨有財寶國謂之新羅崇祭我之者不塗血於刀自降飯云天皇登高岡上遙見浪路有雲更无國天皇言何神欺朕耶神亦言

不信吾語者不可得之也但皇后所妊之皇子必可得其財國也云々國王不隨神教九年庚辰二月五日^{丁未}甚痛於櫓日宮崩御天下歎也^{辛巳}十月二日卅二歲御即位女帝之始也遣吉備臣祖鴨別被討熊襲國之間即奉隨矢命畢小山田邑造齋殿請曰所崇之神何神乎口聞其名及七日七夜答託伊勢國鈴幸宮也云々如法令祭奉隨神教爲得財國年爲女人之身令成男形着甲冑帶武具引具

軍兵則渡異國當產刀之期取一之石挾御腰祈言事竟歸之日於茲土可產云々其石于今在筑前國怡土郡路邊謂之鎮懷石矣往還之人下馬拜過天皇兼被尋御產所同國那珂郡有里名蚊田村有樹云槐木武內大臣申於樹名有子細彼樹神亦鬼神也賢人之精靈謂之鬼聖人之精靈謂之神然則賢王聖人御誕生之地彼定置畢又王子在胎內之時天神地祇奉授三韓之條誠神也妙也天皇打取三韓令歸吾國冬十二月被定置之御產所被造內裏同十四日^卯被懸御手於彼槐枝之時王子御誕生此時自龍宮城獻御初衣^{其長八尺等}其時八幡御襖八枚武內懷奉拜觀御穴生御襖^{其形如}其形如^{此云}是者天皇赴異國之時令假雄裝之刻依著於^阿令宵^{此云}而在胎內御腕上者也上古輶謂之褒武多故應神天皇亦申譽田天皇者是也生年四歲之時東宮七十一歲之時正月一日丁亥御即位御宇四十一年天下之政賞罰之道不思議爲事而已

釋迦如來之昔御誕生之時御母摩耶夫人四月八日入伽比羅城於藍毘尼國舉右御手口牽口無憂樹枝之時悉達太子御誕生矣彼不思議也此不思議也

宇佐八幡宮緣起上卷

目錄

- 一帝位御事
- 一初顯^三神道^一坐事
- 一御社初事^{瀬社事}
- 一放生會事
- 一造彌勒寺事
- 一第二御殿事
- 一本跡御體如在事
- 一東大寺成就大菩薩神力事
- 一大菩薩御受戒師度者事
- 一彌勒寺領事
- 一東大寺供養時大菩薩御上洛事
- 一御神領事
- 一崩御事
- 一豐前國^{宇佐郡}本宮事
- 一小山田社部
- 一小倉山宮事
- 一勅使參宮始事
- 一長御驗御枕事
- 一同寺移來造立事

君はいつもの浦めしの世や

此歌承久の後鳥羽院へ奉りける

いかにしてをはすて山の月よりも

読人不知

出雲の浦に照まさるらん

杵築に詣ける比素鷲の宮にて

此神のはしめてよめる言の葉を

細川玄旨

かそふる歌や手向成らん

發句

卯の花や神の井垣のいふかつら

玄旨

國造より所望にて

ほととぎす聲の行方や浦の波

玄旨

寛永の比六月廿一日隱岐院の陵へ勅使として水

無瀬氏成卿渡り給ひける時大社に詣給ひて

殊さらに此宮居をや仰かまし

今はあつまに神無月哉

そのかみや雲もけしきの空に見て

數さためけんやまとことの葉

寛永の比ある人八雲立の神詠三十一文字を句の

かしらに置人々に歌よませ大社に奉納し侍りけ

る一卷のうち

早春霞

巻頭

やはらくる霞のみをも紅の

東山長嘯

籓の川上に今や立らし

寄神祇祝

巻軸

おしなへて仰く心を敷嶋の

藤原爲景

道にへたてぬいつも八重垣

正徳壬辰三月大社上官千家正延來予之家請

神道之教依深志傳授之故問大社事跡出

一冊以述其意喜而寫之者也

四月 日

光海翁

いのちかあやな戀つゝあらむ

出雲國名所歌合

いつも山今宵の月のさやけきは

源兼經

雪のあしたの心地こそすれ

不老山

年経ても老せぬ山の松の風

作者不詳

幾萬代の數に吹らん

題不老山

鴈もまで同じ常世の春の月

宗養

素鷺川

万葉

眞菅よきそかの河原に鳴千鳥

まなし我せこわかこふらくは

夫木

萬代といはふ御祓は眞菅よき

後徳大寺

そかの河原の夕くれの空

新葉

眞菅よきそかの河風ふけぬとや

冷泉入道

まは鳴千鳥聲そさひしき

ぬれつゝやそかの河原の五月雨に 三條院讃岐

水のみかさの眞菅かるらむ

千鳥鳴そかの河風身に入て

頼阿

眞菅かた敷明す夜半哉

降そむるそかの河原の五月雨に

藤原隆祐

また水淺し眞菅からなん

今宵誰眞菅片敷あかすらん

後京極

そかの河原に千鳥鳴なり

出雲森

ちはやふるいつもの森に神酒居て

仲實

ねきそかけつるもみち散すな

出雲川

出雲の杵築の宮に詣て出雲川の邊にて讀る

いつも川ふるき湊を尋れは

寂然

はるかに傳ふ和歌の浦なみ

出雲川をこのみくつの數さへも

中務

見えこそわたれ夜半の月かけ

出雲浦

神のます出雲のうらにやく鹽の

後九條

煙ややかて八雲なるらん

川上の出雲の浦のいつもく

赤人

きませ我せこ絶すまつはた

たのみこし八雲の道も絶はてぬ

家隆

西百步水折而南百步間有菰蒲覆焉有鳧鷖棲焉其西幅員至數十百間閑曠遶魚殊宜中秋觀月所謂湊川在乙見川之南形勢似乙見廣袤過之其所謂鷺浦在社之北一里山勢四圍如環而北缺十一海潮自缺口入匯環中激澗可愛缺口有島適禦狂濤衝突環堵百餘釣漁採蘇若與世相忘所謂出雲浦在鶴山之西南西之岼巖錯出南之白砂浩渺而波恬焉則羅紋繡縠濤驚焉則鳴雷噴雪瞬息異態不可得而定一者所同也其所謂鹽搔島島嶼最東者而周匝皆石嵌空峭嶂對者虎鬬聳者鳥喙伏者龍蟠不可驟攀上有松四五株盤覆如蓋其次所謂門石島也突兀如覆釜次所謂佐々古島也列峙者十餘圭首筍苗藕折決連爭爲奇狀而蒹葭膠藕其間金光碧彩隨波見露次所謂枕島也島上有大石口鼻隱然如龍首正南向側有洞曰鰐淵洞穴深不可測次所謂屏風島也如張屏風前有石曰枕石狀如臥枕次所謂羹島也方頂四直上黃下正黑有奇趣次所謂盾島也勢如盾上有五葉松露根欹側如磬懸次所謂幕島也不假彫刻而畫有龜甲紋末嘗爲波濤所刊滅其所謂稻佐在鹽搔島之北卽大己貴命以廣

予授與

天皇之使之處地皆礪磤圓熟如彈子所謂雲見二俣在枕島屏風島之間所謂這田在盾島之西皆幽邃之地其所謂赤人塚在乙見川之北其西有村因塚得名曰赤塚村嗚呼梓築固已以大社一馳勝境之名而又山水景物之富如是則何必傷海涯窮鄉哉

素鷺宮

はるかなり幾世か雲に馴ぬらん

慈鎮

いつもの宮の千木の片そき

やはらくる光や雲に満ぬらん

寂然

雲に分入千木の片そき

此歌は大社に詣て見侍ければ雨雲たなびく山の中にて片そきのみえけるなんこのよの事と覺へざりけるによめると云々

八重垣の出雲の宮も神風に

したひ行てや千々のゑら雲

そさのをの君か御門のためとてや土御門内大臣

八雲のゑるし思ひ立けん

出雲山

ゑらまよ出雲の山の常盤なる

家持

在下大社與蛇山之間。延喜式風土記所謂出雲社者是而合祭素盞鳴尊稻田姬大己貴命三神。

按新古今集序所稱素鷲里者即此地而日隅宮經營之後冒杵築鄉名然亦未嘗移動素鷲社位所又按大原郡海潮鄉有須我社然延喜式不錄則不下是素盞尊詠八雲歌之地而非宮社可知矣。

杵築景境志

西至慕島北至鷺浦東至關屋南至湊川方二里大社巍然中居焉大社之外晉山可觀者四曰御崎山俗所謂龜山一名不老山一名八雲山曰鶴山遺跡可觀者一出雲浦列島可觀者八曰鹽搔島曰門石島曰佐々古島曰枕島曰屏風島曰褰島曰盾島曰幕島幽汀可觀者四曰稻佐曰雲見曰二俣曰這田古塚可見者一曰赤人塚其所謂御崎山在關屋之北出雲中最高峻者而望之若未開芙蓉盤道踐如利刃者數十回而上絕頂地平者方五六丈至此俯臨則隱伯備藝石諸山點綴寸碧出沒隱顯于野雲海氣之中幾一州偉觀所謂龜山在

社之東嶺勢穹隆而楷西出一小嶺如龜之昂首欲行而窺也所謂蛇山在社之北尾北首南亘聯半里蜿蜒成蛇行勢上有池冬夏水不乾涸雲氣翳勃常起其中觀者毛悚所謂鶴山在社之西一峯中聳夾以二嶺宛然若鶴而妙更在乎大雪變態之間其西嶠峯障巒聯綿復疊者不可具舉其所謂素鷲里事實詳于前其所謂出雲森在社之東百步岑鬱可避雨其所謂真名井在出雲森之東百步清澈音麗若瑠璃盤味極甘滑其所謂饌井在社之前側有二石如鷄卵其所謂能野川在龜山之西麓橋其上二橋之間兩涯多櫻桃橋北五十步有黃石水布其上璀璨如綺其北水伏榛莽六七百步有小潭寒冽如水潭北二百步巨石對立高丈餘水懸注其中殷々成甕中聲其所謂素鷲川在鶴山之東麓橋其上三橋之間小石平布水鏘然如鳴玉其下產菅其北水屈曲者四五百步其北爲飛瀑者三處皆高三四丈激波散沫閃々奪人目光天然驟雨過其上亂雲擁其下則飛瀑若掛在空中尤奇異側有大石如屋牀可容數人所謂乙見川在社之南六百餘步橋其上三最在東者曰乙見橋以橋側在乙見社得是名川亦冒其號橋

廿七日 御饌井神事國造 同日歲末神樂

晦日 大祓

○營造事實

齊明天皇五年秋七月庚寅命出雲國造修嚴之神宮
齊明天皇以前從天神之制法齊明天皇之時世々畧之
定正殿式後世以不法其制謂假殿

寬文七年丁未三月晦日遷宮將軍源家綱公賜鈞旨營造制依正殿式

建久元年官家下令督莊園課役營大社嘉祿三年復督課役營大社後柱爲蠹所蝕從迹讀之得十六字國司右衛門尉昌綱守護佐々木信濃前司泰清造之官家官人驚異爲發金穀新大社除莊園課役後人稱其文爲蠹符云

蠹符

居大煩物朕非素意若人歸德栖高木足

國造祕記曰神火者天地人三火之祭也所謂天火之祭者乃以三陽交泰之天火正月朔旦齋天神新嘗矣所謂地火祭者乃以一陽來復之地火

十一月中卯日於神魂社去符築十一里齋天神新嘗矣

神魂社與出雲熊野大神御同體也令義解所謂出雲國造齋神是也
延喜式風土記等所載雲州之大社者杵築熊野二社也未行新嘗祭之前國造不食新穀矣

所謂人火祭者父國造身退之時不經一晝夜其子速詣神魂社受嗣神火神骨矣

神火者天德日命相傳之靈物以此火有神嘗而後國造一生忌他火也

風土記曰出雲郡杵築鄉郡家西北二十八里六十步八風水臣津野命之國引給之後所造天下大神之宮將奉與諸皇神等參集宮所杵築故云寸付神龜三年改寸付爲杵築神書抄曰八十限天日隅宮者共謂出雲國杵築宮即大社也又曰出雲在乾方日之取入也夏至之日出於寅入於戌故以杵築爲日隅宮或書曰杵築大社者神社營作之始也凡無久於此社

大社說

謹按延喜式神名帳出雲郡及風土記歷舉社號冠以大字者杵築熊野兩社而已是可_レ以見上古所尊所重之實而六十餘州無遠近無_レ上下至巷談童謠不指_レ地而專稱大社則杵築一社而已矣蓋大己貴大神德如玉威如三千戈以贊成天地之化爾來千秋而萬歲王公武將莫不尊崇敬畏則其德固可稱以大字而營造殿閣構成門廊亦務盡宏麗傑偉雄大高峻之觀則專稱大社豈不_レ宜哉

素戔社事實

十五日 田樂今廢

五月

朔日 神樂

五日 御頭祭禮天正以後廢

同日 御飯供

六月

朔日 涼殿神事國造步行奉其祭

十五日 神樂

廿八日 涼殿神事國造步行奉其役

晦日 輪越神事

七月

朔日 御供

二日 舞樂元祿年時大守綱近卿寄附祿地於是設此日及八月五日舞樂

四日 身逃兩國造舍子外所謂身逃神事者此夜忌火職上官修深祕神事

五日 瓜剝御供是日國造捧今年稻穗瓜茄子等七種供大社

六日 相撲於大鳥居外

七日 祭禮此日曝寶器 晦日 相撲

八月

朔日 祭禮有千度詣曝寶器設音樂 三日 神樂

五日 舞樂 十日御供 十五日 神樂

秋分 阿式社神樂 秋分 御歲社神樂

九月

朔日 神樂 三日 湊社神樂

九日 御頭祭禮有舞天正以後廢

廿九日 湊社祭禮職之上官往掌其事獻御供及禮酒設神樂

十月

朔日 神樂 同日 祭杵那都岐

十一日 封地御供 十四日 出雲井社 神事

十五日 大御供祭諸神

十七日 御供 同日夜 神等去出神事

自十一日至十七日 爲神在齋國造及上官齋宿廳屋 例歌

舞不張樂器 宮庭不掃第宅不營不春相不

卷歌 務事 靜密 一日之間錦紋小蛇出 杵築海汀

號之龍蛇長尺余具二十社之紋龜甲

廿六日 夜神等去出神事

十一月

朔日 阿式社祭禮慶長以後廢

十七日 御饌井神事國造自祭

廿二日 神事神人等會集拜殿設魚膳宴禮酒

廿七日 神事同規式

十二月

朔日 神樂自十三日夜至十九日夜國造及上官齋宿廳舍

鍬二口 杵二箇 琴一張 箠一箇

御弓二張 矛八振 瑪瑙笛本朝鮮舊物而吉川廣家納

金雉銀雉雌雄 硯紫石 酒井忠直納

○祭禮年中行事

正月

元日大御供引進神馬

同日 命主社祭社是日國造及職方上官詣命主社

同日 鷲神社事 御供

二日 飛馬神社 自晦夜至此夜國造及上官齋宿廳舍

同日 年始神事

三日 飛馬神社 同日離宮神事國造及上官參詣

同日 雜宮神事

同日 御頭祭禮 天正以後廢

同日 阿式社祭禮 慶長以後廢

十一日 飛馬神社 同日吉書神事

同日 新始神事宮匠爲之 同日夜大神樂

同日 祭湊社

十二日 飛馬神社 自十日夜至此夜國造及上官齋宿廳舍

十三日 宮廻神事 同日奉幣神事設舞樂

同日 宮廻神事中古以來廢 同日祭稻佐社

十五日 粥御饌供進 同日御供 同日神樂

十八日 乙見社神事國造令上官祭之

廿八日 出雲社祭事設神樂獻御供及醴酒每月此日例設神樂

二月

朔日 千度詣 十五日 神樂

春分 阿式社神樂 春分 御歲社神樂

廿八日 神樂 自廿七日至晦三月會試樂

三月

朔日 祭禮 御頭入神馬大御供音樂舞流騎馬此外規式二日三日同今朝步射神事也

二日 祭禮 三日 祭禮今朝千度詣

右三日之祭禮有舞樂及結番相撲競馬花女文

明以後廢謹考神祇令二日一月齋爲大祀三日

齋爲中祀一日齋爲小祀

三日 齋爲中祀一日齋爲小祀

同日 阿式社祭禮慶長以後廢

十五日 神樂

四月

朔日 神樂

三日 祭杵那都岐

八日 神事神人等會集拜殿設魚膾宴醴酒

出雲大社記

本社即日隅宮是也祭三大己

客坐五神貴神一天井畫二八色雲一
味鉦高彦根山下照姬命 事代主命

御向社美穗津姬

筑紫社田心姬 湍津姬

天前社市杵島姬
阿摩乳

門神社二字東櫛磐間門命
西豐磐間門命

素鷲宮合祭素盞鳴尊 稻田姬命 大己貴命三神

氏社二字意字足奴命 二神國造先祖
宮向宿禰 天穗日命 國造屋敷祭之

三十八社

釜社稻倉魂神 杵那都岐有壇無社諸神築 祓社

涼殿有壇無社所載 命主社 出雲井社 乙見社

御歲社 大歲社 離宮 拜殿 門神 稻佐社 湊

社 鷲社抱齋守護神イナ
セハキノヨシ 拜殿 御供所 鳥居

阿式社祭味巨高
彦根命 拜殿

井厨屋宇事實

御手洗井六月朔日同廿八日

御饌井御供調 眞名井爲國造飲食
常用之水

供祭所御供在社左右 玉垣 樓門

觀祭樓 瑞籬 廻廊 八足門

水屋 拜殿門有神樂所北
左右有神拜所 火燒屋

廳舍 會所每月於此所
連歌修行 寶庫 書庫

神廐 荒垣

鳥居其中二基制以青銅其一基天正年大江輝元
卿納其一基寬文造當時大江綱廣卿逐例納

番所 雜庫

寶器品目

神劍一柄古二柄獻
柄於後醍醐天皇

後醍醐天皇綸旨

爲被用寶劍代舊神寶內有御劍者可奉渡

者綸旨如此悉々

三月十七日

左中將華押

杵築神主館

神鏡一面 御冠御裝束 盛以唐櫃

御具足一領緋織有二引兩之紋
東山義政公納

御具足一領緋織龍虎琵琶制以赤檀
緋織龍虎琵琶制以赤檀

金幣八振 劍三柄他猶有寶
今不悉載 楯二枚

勝地に於て堂社佛閣御建立勅會嚴重につとめ給へり
于時寛永十三年廿一年にあたりて家光公法令にまか
せ新に御宮并堂社佛閣金銀をちりばめ佛像經卷七寶
壯嚴の儀則人皆花藏世界日東に現するかと疑ふ然則
一心清淨の誠をぬきんで遷宮の化儀を催し給ふ其勅
會を拜し奉るに大臣攝家結跏趺座し百官宰相圍遶供
養す門跡院家退座一面題名僧衆隨力演說誠に是靈山
一會儼然未散此時なるをや香花灯燭茶菓珍膳蘋蘩溫
藻百味の清膳佛像經卷祭奠の微誠勝計べからず齊々
たる禪徒はともに經題をあげ陶々たる郷士互に行香
をたすく道儀譊然として緯已に鄭重也時成哉新樹陰
をならべ靈山の會場に廻す事を表す餘花追薰瑞花の
法界に翻る事を見る勅願の悉地景色賀之たまふもの
なり家光公仰云吾濁世の時に當て將軍の家に生れ公
武憤闘に携り廣く諸典をきかず要を取てこれを案ず
るに孝行に淺深あり果報に不同あり大舜象耕の孝感
花報をすぎず丁蘭刻木_多本地の果報を得ず餘これに
准す或傳云法令を以て祭祠の眞孝とすといへり若爾
今年諸法實相といへども中につき甚深の法を修すべ
しと云々各承て云堅義者は佛法の紹隆神明の法樂闍

浮第一の淨業也近年番ひ論義中絶す幸なるかな南都
北嶺の探題會合せり因茲俗諦常住を業として五問十
題に至まで家々の堅義法味細也山門探題大僧正天海
南都探題僧正空慶定て神明納受諸佛歡善したまはん
一人恭敬したまへば四衆歸伏す貴哉和光の利物現前
不現前の結縁の縑素十方界に遍滿して稱美讚歎して
いはく宿習なるかな我等受かたき人身を受あひかた
き佛法にあふ豈現世安穩後生善處の利益にあづから
ざらんや因茲家光公哀憐を垂てのたまはく神は敬に
よつて威をまし人は信を以て得益す故に東照大權現
因位の德を緣起に圖し末代に傳へ道俗是を聞して尊
重の思ひを發せば靈驗倍揭焉ならしめむ肆に忝も狩
野守信御下知を蒙り信敬の丹精朝暮數年無_三怠慢_一全
書功故に法眼繪所を下さるゝこれ以て御神德也

には三千三觀の窓に向ひ夕には山王の神道を觀す我願既滿し衆望またたりぬ 後陽成院の宸筆にも新田大相國家康公者好勇恢武天下之名士也加之研精於文學發志於經論而極諸宗奧秘拔而以定惟之則胸勵戒定惠之三業止觀圓頓漸之一念難行苦行累月累年云々僉曰若種姓高貴の家に生れては自在の威勢に誇て則恣に罪業を造り若貧窮下賤の身を受ては官位福祿を求て鎮に惡念をおこすといへり貴も賤も諸善を知るといへとも行ひがだきは道なり奇なるかな妙なるかな源君忝も前代末聞の觀を凝し還歸本理の成道を唱へ東照大權現とあらはれて廣く衆生を度し別しては家門繁昌にして氏族永くさかえむ守護神と成たまふ萬歲々々萬々歲ならくのみ委は眞名緣起の如し權現因位の御時常にのたまはく虎斑は見易く人斑は見がたし然といへども予知見する所あり嫡孫に至て家風彌吹興さむとのたまへり誠なるかな賢聖のみことのり三代征夷大將軍左大臣雖任相○暫患鷄退家光公幼しては眞敏を懷き長となつては神情にかなひ給ふ松風水月その情花に比するにたらず仙露明珠なむぞ能其朝潤にたくらべむ所以に大なる德行あり萬物資て行に

ならずといふ事なし今知源君の言語あたかも符契のごとし世尊眞因の鑒機に似たり巍々たるかな當寰天下をたもち給ふ事戰を以て戰を止るは戰といへも可なりいかにいはんや無爲にして各親其親各子其子君臣尊節海晏河清乎而今當君を仍見るに人におゐては親睦の情をなし給へども獅子嘯呻の勢を現するが如く貴賤頭を低る物におゐては柔和の語ありといへども象王爪牙の全を藏に似たり縑素掌をあはず僉いふ賢君その國に王たりし時は百姓四面鐵壁の室に居るが如く也しかのみならず最初好世依正の人主は動せずものいはず無爲にしてみづから化し自ら信し自なる當寰濁世の國民は善を勸め惡を懲ともよこしまなからん事を思はず賢君忝も賞を以てすれども欲に欲をかさぬ足ぬといふ事をしらす干戈止ことなしたとへば荷葉の雨をうけて鮮なり雨あまるときは池水に加するが如し且は奢侈又は濁世の所以なり而に家光公御在位年尙し慈惠のいたり息燭の及ところ異國猶睦しむ況親戚に至るをや國の煙塵を鎮め人の泰平をいたす一天曇なし豈宿植德本の聖君にあらずや前大相國勅號台德院殿源君御遺言にまかせ日光山の

色は仙女千尺の絹をかくるかと思ふ是三無差別にして眼前の景趣言語の盡す處にあらず或時は大日所變の不動尊まのあたり水上に化現し給ふ是を瞻是を仰く輩は利益巨多にして現當二世の安樂を得といへりまたこの御代は岩根の松の常石堅石の蔭ゆたかにて二あれの風のさわりも名残なく民の艸葉は心のまゝにさかゆく時の御めぐみにははるけき他の國までもなびきしたがひ奉りけるなるべし

此間
有繪

源君の仰に云く當家は 神武天皇より五十六代清和天皇第六の王子貞純親王の六孫王經基始て源の姓を賜り多田滿仲賴信賴義八幡太郎義家義國の嫡子義重新田の祖也次男義康足利是也惣じて源平兩家は寶車の兩輪の如く天下を輔佐し違逆を退治す其職にあたり保元平治の亂の時平家世を取て廿餘年壽永元曆のころ平家を追討し源氏日本惣追捕使征夷大將軍に任せらる其後同姓なりといへども新田足利確執す武勇に勝劣なしといへども聖運によつて足利世をとる中間に千變萬化すといへども時のよろしきに隨ふ所なり敢て其職にあらず我今將軍となり氏の長者となる且は先祖の素懷をとげ且は累代弓箭の耻を雪む宿

因の催す所天道のあたふる所なり情清和天皇の御即位を案するに惠亮なづきを碎しかば二帝位につく併法力也義貞山王權現に鬼切をさゝげて子孫の征夷將軍を祈る神慮感應有て予其職に昇る是神德也現在の願望すでに滿す豈後世をしらざらんや然ば則八萬の聖教に通達すといへども後世をしらざるは愚者也一文句章に不及といふとも後世を識知するは智者也肆に諸宗の知識をめすに雲の如くあつまり星の如く列なる源君内には諸宗の奥義をつたへ外には朝暮に論談決擇せしむ諸佛の化導を觀するに但本在因地未離我執時各別發願各修淨土各化衆生如是等業差別不同矣佛すでに因位の我執をはなれす我亦各執本習而入圓衆なれば太子は厭離穢土求淨土欣の思ひに乘して子孫をつがす我は現世安穩後生善處の文に依て家門を繁昌せむ造次にも思惟し顛沛にも觀察す有時我常在此娑婆世界說法教化の文に當て忽然として大悟し累劫の妄情已にはれたり重て思惟すらく若迷於根源則増上濫乎眞證若香流失緒則邪說混於大乘只恨らくは師傳なき事を故に諸宗にあふて是を尋ぬ時に山門碩學の中に相承あり山王神道是也と云々爰を以て朝

處に移したてまつりて後多寶塔婆一基を造立し塔中に釋迦多寶二佛並座して境智冥合の深義を顯し文珠普賢等の尊像を安置せらる邊壁には人天大會來集の説相を書くも全く卽事而眞のことわりを示者乎于時大僧正天海戒灌を神靈に授まゐらせ供養を無疆にまふけ香花を不退に期し神威を飾り佛庭をひらき奉る繙素往詣の嶮路は名別義圓の教位を表して四十二重につみ又名義俱圓の觀位に約して三十六段にたゞめり無量の功德不可稱計一たびも歩を輩運ぶは解脫の風扇て無明の雲をはらふ神德顯現して武運長久ならむこと豈疑をのこさむや

竊に日光山の舊記を考るに神護景雲元年夏四月勝道上人跋涉を企といへども山頂雪深く路さがしく雲霧雷鳴して登る事あたはず三七日を経て歸り給ふ天應元年に又先思を興し給ひしかどもいたることかなはざりしにより同二年佛像經卷を圖寫して天神地祇に祈り此度不到ば亦菩提にいたらじとちかひて深雪を踏分岩根を傳へからふじて到り着ぬ四壁を見るに山の狀或は龍の臥るが如く或は虎の踞るが如くにて棲息興あり加之平湖洋々として雲水蒼々たり蓋是靈

仙神龍の卜居なるべしと思ひて西南の隅に蝸菴を結びて禮懺を修ること三七日畢て終に宿望を達し故居に歸りぬ誠に勘功不淺者乎延暦三年かさねて高峯に昇り南湖のほとりにして一の小船を作りえて清波に棹さし頭をめぐらせば遠近の木だち一かたならぬ眺望也暮れば南岸に小船をよせて宿し明れば湖曲を漕行て遊覽しけるに或時は白蛇海上にうかび出又千手觀音形を現じ給ふさまの靈驗ありがたかりしことゝも也依之此勝地に伽藍をたて中禪寺と號し千手千眼丈六の尊容を安置し妙經一千部大般若經等を奉納せしめ靈窟を點じて一字の社壇をかまへ日光權現を祝ひ奉る又此鬼門に坑穴あり羅刹窟と名づくかの窟より大風起り國家を損ずること年に兩度なり爰をもて二荒の字を改て日光と號せしより風穩にして繙素安泰なりといへり

此間有繪

此山中に華嚴の瀧とて靈地あり青巒たかく聳え紅日はやく照すによりてかくいひけるにやありけん思惟おぼつかなし倩かの飛泉を見るに剛風頻にひゞき出れば霏々たる素雪半空よりこぼすがごとし碎ちる水の光は天龍萬顆の明珠捨るかとおやしみ落くる水の

典のつとめ退失有べからずとぞ定給ひける此間
有繪

同十八日には拜殿に於て御經供養あり御導師大僧正
 天海本山顯密の碩才末派諸寺の學者も悉く召具して
 是を行はる素より佛經の讚嘆いと尊く聞えしけふは
 台嶺の門跡残りなく梵場に列座し證明し給ふ翌日は
 御本地樂師堂の供養として法華曼荼羅供養を修せら
 る御導師咒願證誠の出仕以下大むね昨日にかはらず
 しかあれば兩日ともに大樹家光公御着座あり其行粧
 美々しく見ゆ大臣公卿もあまた着座なりそのほか殿
 上人花莖の役など勤られけり法會の儀式目驚くばか
 りにてとりぐにはへある御ことども也かゝる至孝此間
有繪
 の御めぐみをばたれかは天が下にしらざるべき
 近曾朝鮮の正使副使武州にきたりて大樹を拜し奉り
 やがて日光山に詣し社壇ををがみ蘭若をうやまふ信
 仰の色外にあらはれし剩境地の美景を賞して遊事し
 ばくせりかしこに到ては奇峯の色に目を驚かしこ
 こに憩ては飛泉の聲に耳を洗ふかれらが志のゆく處
 をのべむとにや數多の詩文を作りて大僧正の床下に
 投すその國風を見るもさすがにあはれなればかつが
 つこれをとゝむる物也

正使 白 麓

東武諸山望裡遙、日光周通獨茗曉、天開眞境挑
 金殿、洞劈仙源駕玉橋、鈴響却隨旗脚動、篆烟新
 惹雪花飄、地因人勝今方驗、功烈千秋未寂寥、

副使 東 溟

中天寺刹壓嶙峋、東照長留法像眞、白馬尙懸金
 鎖甲、紅雲全露玉宮神、千岑力鎖山河定、百戰
 功垂宇宙新、權現極知同一揆、宏圖寧復讓前人、

從事 青 丘

羣靈驚障海瀾、踰躡仙鳳立雲間、上頭杉檜
 傳千古、半腹雲烟隔九寰、對起士峯雄北固、
 抱回江戶鎮東關、却忘萬里歸途遠、又借肩
 輿訪此山、

かゝる時の仁德に懷ては諸蕃譯をかさねて來り今又
 營造し給ふ神祠佛閣もかぎりなくめでまどふまして
 此國にはかくただしき御政を今の世も末の世も大空
 の月の光とあふぎたてまつらむかし此間
有繪
 情當社奥院の地勢を望めば林樹蔭おほひ松杉風清し
 て萬岳衆峯凡境を絶せりされば久能寺より尊體を此

也三藏せんかたなくやすらひ給ふ折しも深沙王梧桐樹を斬て橋となし草を集て沙にしき駒を進めて打渡すその喜びは甚し猶沙漠を行過れば軍衆百隊沙磧の間にみち旌旗衆旆のかたをなし又諸の惡鬼奇狀の物前に向ひ後にめぐりて人を却すされば一心に觀音を念じ專此經を誦するに従ひて妖恠おのづから消殞し急難すみやかに除滅してつひに渡天の素願をとげ八宏に歷遊し玄理を究竟して多くの經論を將來し給ふ事ひとへに群生を利せぬむの爲なるべし

此間有繪

寛永丁丑夏のはじめ征夷大將軍家光公東照大權現の靈威をあがめられ城郭の内にもとよりありし神殿を猶孝敬の深きあまりに瑞籬の内外いま一しほの壯嚴をそへ造替あるべきにて其所を定給ふをりしもまな鶴二つがひ來りまばらくありて東の方にさるかくあやしく妙なる事を思ひて世に鳴騷人墨客おのゝ心心にやまともろこしのめでたきためしを考へてはめ奉る中にも大僧正天海の祭文の詞には神の御社を都巒の内院と號し佛の御寺を金剛淨刹と名づけ敬神を以て國の榮とし祭祀を以て國の法とすとかけり又宣帝世宗廟をまつれる日白鶴きたりて後庭に集りし瑞

を引て祝せしをばやがて内陣にぞ納置給ひけるされば靈神此鳥に駕し來て萬代不易の所をまめし大樹のことぶきは千年の後までもたも給はんことを告給ふかと世こそりてゑみさかえけると也

此間有繪

宗廟をまつる事はもうこしにもこれを專とせり殊更本朝は天照太神の御末にて皇孫降臨し給ひしよりこのかた八百萬の神たち國家をまづめまもり給ふ就中廿二所の神祠はおほやけの恭敬他にことなるにより大社にあがめおはします今此東照三所大權現も是にひとしくなぞらへ當社開基より廿一年にして寛永十三丙子造替の時至りて征夷大將軍家光公ひだのたくみに課て不日に成功をとぐ社壇の嚴飾は反宇金銀を鏤め柱扉丹青を盡して玉垣の外までも玲瓏くばかり也これによりて四月十日新造の御社に神體を遷御なし奉り掛まくもかしこき勅使をたてられて宣命をよみ官幣をさぐ散齋致齋の行儀も嚴重にして十七日神輿臨幸の期には社司以下の供奉人まで美つくし善つくせりさて家光公御社參有て神拜の御作法甚以神妙也人みづから安にあらす神の助によりてやすきわざなれば末代に及ても豐年凶年のけじめなく禮

おろちをはなちたまへば逆り横りて長橋となれりかのをしへにゑたがひ此橋にすゝみて速に向の岸に至れば大王も龍橋も共にかくれて見えずさてこの蛇背に山菅をえきたるより名づくるともいひ又は山菅生ずるによりてともいへり抑橋の功德を尋るに江河は旅の尤愁とする處也霜雪の寒きあしたには人馬ことさらになづみ風雨のはげしき夕には洪水ますゝみなぎる是をわたす善根誠に莫大也その外佛初利天安居の後金銀水精の橋を渡し又かの天台山の石梁をはじめわか朝には道昭法師の宇治橋行基菩薩の難波の橋何れも是衆生の利濟也殊に法橋といへるは生死の海をわたり涅槃の岸にいたらゑめむ事を本懷とすされば深沙大王の此處に化現し給ふ事ありがたき方便也今に至て社壇を橋のかたはらにかまへ佛法の守護神に崇め奉るもの也此間有繪

人大鈿の峯のいたゞきにのぼりて四方を望視に此山にあたりて五色の雲常に立おほへりかならず靈地ならんことをえりはるかにたづね行て山趾に至ぬれば一の大河あり岸頭石を疊み溪流漲落てわたらんことかたく進退歩を失ひ三寶を念じ祕咒をとなへつゝ祈精ふた心なかりしかば深沙大王出現して慰誘し給ふにより輒く龍橋を渡り嶮難を経歴して伽藍をたて佛像を安置し所願を遂給へり忝も桓武帝是を聞しめして叡感斜ならざるあまりに勅して上野講師に補任し給ふ苦修練行をかさね弘仁八年三月一日八十三歳にして禪定に入が如く入滅し畢此間有繪

玄卦三藏西域におもむき流沙にいたり給へば深沙大王瘦老の赤馬に乗來て云前途險惡に沙河阻遠なり鬼魅熱毒の風あらくして單獨の身いかで輒く行べきといさむれども三藏法師我々ばらく大乘求法の本意ありたとひ中途にして止ぬとも悔るに足ざるよし報ひしむ大王又云師必ゆかむとならば我馬に乗べし是既に十五度に及びて伊吾に往來すよく道える馬也とて三藏にあたへけりさてゆくゝ夜ふけ河のはとりに來りて見ればながれ緬にして兩岸の濶さ一丈あまり

此間有繪

此間有繪

を津の國阿威より談山に定慧和尚のわたり申されけるためしとかや神體を金輿に奉り大僧正天海みちびき給ひ北嶺高才の僧侶東園碩學の衆徒あひしたがひ武家の近習むねとのさぶらひ數輩警固し奉りて端麗しきよそほひ也こなたかなたの御旅所は新しく經營して夜々の御とまりには大僧正觀念を凝し給へば衆僧の勤行も嚴重なり殊に仙波大堂には日をかさねてとどまらせ給ひて一生入妙覺といふ論題を出し問答往復金玉をみがく大僧正もとより辨舌懸河をながして卽故初後不二と證判せられたれば限なき御功德と來集のともがら感涙を催しきかくて卯月四日には日光山坐禪院につかせ給ふ此程大僧正扈從の人々にそれ神は混沌のはじめをまもるがゆゑに生死の二の相をとり給はず六塵の境にまじはるはしばらく和光の御結縁也今かしこきおほやけの詔をくだし神號を東照大權現と授けまゝらせられおほきひとつの位を贈らせたまひぬ御門よりはじめて御家運は久堅の天ながくあらかねの地ひさしくして擁護しいまさんこと疑なしとしめされけり佛誕生の日は御廟塔に御定座あり十六日にぞ新造の御社には遷御なし奉りけ

此間
有繪

前大將軍大相國秀忠公もはら心ざしを抽て三業相應の白善を修し宿因内に薰じて無双の靈地を得知識外にたすけて清淨の堂社をたて東照大權現を祝ひ奉り年々の御忌辰には大相國秀忠公御社参ありて孝心をつくし給ふ威儀ことさらに儼然たりしかれば則堅固寂靜の梵閣は三世諸佛の依正眞際常恒の靈廟は十方如來の所栖也和光の恵日いよゝ祠上にかゝりき本地の秋月はるかに此閣をてらさむ起立の功德は子々孫々の徳風ひさしく意樹にあふぎ禮敬の得益は家々遠々の惠露あまねく心地をうるほす還歸本理の東照大權現は法性凝寂にして懇誠を感じてつひにあらはるゝのみ

此間
有繪

此橋を山菅といひ傳へたることはむかし勝道上人といへる沙門此河のほとりに來り渡るべきことたやすからずして蜘蛛悚慄す時に北岸より化人忽然として現來す其長丈餘かたち夜叉の如くにして左手を腰に安じ右手に青赤の二蛇を握り厲聲を出し告ていはく我は是深沙大王なりむかし玄奘三藏渡天の時も流沙の難を救ひき今又此河を渡しまゐらせむとて手裏の

は元よりも火宅の中ときくからに我此土安穩の妙文
いまはたありかたきこと也此後はいよ／＼四海八紘
一向に源君の御掌のうちにして風雨も時をたがへぬ
御代なりけり此間
有繪

元和第二の暦む月の十日あまり源君御不例の色あり
これによりて諸社の奉幣諸醫さま／＼救療し奉ると
いへども平安に就たまふべき御けしきもあらざりけ
れば行衛たのもしげなくぞ見えたまひける 主上か
くと聞食て驚なげかせたまひ御修法行せられ御祈の
卷數などまゐらせらる元よりの御心ざしなれば今度
家康を太政大臣に任せらるゝよし 勅使をたてられ
宣旨を下さるゝも猶あかず思食ながく一人に師範と
して四海に儀形たるつかさにしあれば後代の龜鏡に
もとやおぼしよりけむ勸慮のほどありがたき御事也
此間
有繪

穩後生善處の御本意を遂たまふぞありがたくおぼえ
侍るかくて御はふりのことは先當國久野寺にをさめ
一回の光景を送り時に神號の事奏聞を経て授賜るべ
きに於ては大織冠のためしをあふぎて日光山へ移す
べししからば神を當嶺に降して永く國家を擁護し子
孫を視そなはさん事たがふまじきよし御誓約有て元
和二年四月十七日七十五歳にて安然として薨御した
まひぬおほよそ髪をいたゞき齒を含たぐひ敢て悲歎
せざるはなし此間
有繪

久能寺は是行基菩薩の草創なりといへども四明天台
の末寺補陀洛山の聖容化緣年ふりたり梵音の潮さ
まじくして出現の月あきらか也 御遺言に任ておの
／＼供奉の行粧を刷ふ石窟に尊體ををさめたてまつ
れば大僧正天海その作法をつとめしめ有縁を此山に
導き卽身を法界にひらく觀念を修す心印諳に推はか
られていとたふとし爰に當寺の鎮守を尋れば摩多羅
神也日光の奥院亦同名同神なりかれをもてこれを思
ふに重ねて此地より日光へ移しまゐらすべき御兼言
も神慮不思議にぞ覺えし此間
有繪

抑元和三のとし尊體を日光山へ移し奉ること大織冠

叫で攻ければ士卒勦弩要害の處を守るといへども終に屈伏し内縁により頻に和順の義を乞れしかば堀築地を破却して無事に屬せしに當春又兵亂を起し京都を焼拂べき風聞有て洛中の上下蟻の如くに固り蠅の如くに散々依^レ之源君御憤ふかくして四月四日駿府を御立あり同十八日二條の御所に着せ給ふ將軍家は、大御所の命により江戸を出させ給ひて同廿一日伏見の城に入給ふつらく秀頼の不義を思ふに先年石田が謀叛のをりといひ去冬の暴逆といひ其罪輕からざるに今又斯るくわだてなれば再犯不容して大樹は五月三日に伏見をたしめ給ひ諸勢を六段に備らる其外小姓の精卒彼是都合廿萬騎にて其夜は角南にましましけり端午には大御所二條の城より近習の御勢一萬五千騎計にて出させ給ふ其外尾張宰相中將義直遠江宰相中將賴宣供奉せられて星田まで押出し給ふ大和口よりは、大和伊勢陸奥越後の軍兵推入ける尼ヶ崎西宮には播磨備前備中丹波丹後の人數隙なく陣をはる和泉紀伊國の勢は岸和田にゆらへて合戦の相圖をまつ大坂の軍勢は十五六萬騎とぞきこえし其中にも今度は十死一生に思定たる兵共命を輕じ義を重じ

て六日の早夙に道明寺若江矢尾口こなたかなたに打出箭鏃を飛し劔戟をまじへ面もふらず相戦ふはじめは勝利をえていさみしかども英雄の猛將先鋒として武藝を盡し攻ければ名をえたる勇士あまた討れて敵は機を失ふ終日數度の戦ひなれば死骸野徑にみち塞る敵方多く討れ暮に及て引退く翌朝七日には兩御所の仰により味方の御勢稻麻竹葦の如く旗の手を靡かし青屋口鷲嶋の方天王寺口へおしかゝり茶臼山にそなへたる敵陣を攻詰隨一の大將も匹夫の如くにおり立て父子兄弟にも先を爭ひつゝ義士あまた討死して終に敵をば追入けり此外方々に控へたる良將我おとらじと進ければみな城中へ攻入ける則城内に火懸りぬれば秀頼御母堂と諸共に山里にしてあくる八日に自殺せらる親暱の男女あまた軍後の御供してみな灰燼となりぬかゝるをりの勳功は一々姓名を顯し世の譽をも顯すべきをみじかき筆には及がたくや見ぬ周武漢高の忠臣も先哲史文にのせて末代にもつたへければ當時の才人も又しかるべし太閤萬國の人力を勞せしめ多年經營したまへる城郭金殿玉樓ことくく慶長廿年五月七日一片の煙とたちのぼりける三界

りといへどもおごることなく仁義を守り文道にも達し給へれば十目の視るところ十手の指ところにてかかるつかさ位にも昇り給ふなるべし同年三月廿五日御參内ありし時更に牛車の宣旨を蒙り給ふ此をりの行粧前驅扈從隨身雜色までも思ひ／＼の美麗をつくしければ洛中の男女衢にみちて手を額にあてゝぞ見たてまつりける殿上に昇給には月卿雲客昵近の外もなべての公達もいつき隨ひ奉るかしこき綸言を下し給ひいまはた君臣合體の御政道なれば萬國風靜にて八嶋の波治り樵歌牧笛の聲もやすくだのしめりとぞきこえし此間
有繪

駿城の西南に一の勝地あり志豆機山と名づく猗々たる緑竹枝をまじへ鬱々たる紅花色をそへてはたばりひろき錦を織出かとうたがふ誠に名におふ絶境也されば鶯花むなしく過しがたきをりふしなれば狂風いまだ起らざるに先だちて源君忽に高駕を廻らし給へば奉仕のともがら綾羅艷色袖をつらねて競きたる有様珍しき壯觀なり加之風雅の好士儒業の博達扈從してあひがたき聖君にあひえがたき花の時をえたることをよろこびて一吟一詠思ひ／＼の心ざしをのべ高

宴遊興を盡せりしかあれば遅々たる春の日もやゝ暮わたり殷々たる鐘の音もかすみてはのかなるをりしも傍なる庵室に誦經の聲するをいかなる文にやと尋おはしませば黃昏の偈に侍るとて此日已過命則衰滅如少水魚斯有何樂といとたふとく訓釋しけるをつら／＼きこしめしげにさにこそとふかく心肝に銘じてはじめて無上正眞の道心を發得してやがて還御おはしける翌日に至りて花下の御遊希代の勝事なりしことなど各申けるに源君のたまひしは大かた世の中に吟翫する花の色香は皆是輪回の業因にして出離の要路にあらずたゞ美花を見ても本尊を念じ冷風を聞ても無常を觀すべし爰をもて南樓の秋の月を望ても眞如の本宮に至ぬべく金谷の春の花を翫びてもまさに寂光の理土に還なむとすといへりとぞ此間
有繪濃州關が原の合戦に討勝たまひし時秀頼も生害に及べかりしを其まゝもとの名城にたすけおき給ひて若干の國郡を費し博愛を垂給ふしかるをいつしか源君の御厚恩を忘れ去年秋のころ諸牢人を大坂に抱置て逆謀を企らる此事都鄙に隠なければ駿府武州の兩御所進發有て五十萬騎の大勢にて城外の四面打圍み喚

天正十二年小牧に於て大利をえ翌年秀吉と源君和睦有て數年を経秀吉薨去の後程なく奥州會津の逆徒蜂起により源君かれを征伐の爲に慶長五年七月二日江戸の城に還座し給ふ然る處に石田の何某といへる佞臣有て幼少の秀頼を恣にはからひ天下をくつがへしはたしてはおのれ獨歩の思をなさんと國々の勇士をあひかたらひ源君に對し奉り奸謀を企てけり此事關東へきこえければ各僉議有て中納言秀忠卿は上野信濃の勢を引卒し東山道をのぼり給ふ東海道よりは今度下國せる諸大名に譜代の武將を相添て八月朔日數萬騎の軍兵をさしのぼせらる猛勢尾州に着して廿二日には大河をこえ新賀野の軍に討勝翌日岐阜を攻落し城主を取籠にしてこのよし注進申ければ源君聞し召て東國の惣大將として結城少將秀康を残しおき九月朔日進發し給ひ漸く美濃の國につかせ給ひて關ヶ原のうへ岡山に御陣所を定らる此威氣におそれて大垣に楯籠たる敵軍江左の佐和山をさし夜深く城中を出て同十五日に大勢關ヶ原に至り伊吹山をうしろにあてゝ陣を取先陣より此よし申上ければ近習外様の軍士を出して相戦しめ給ふ敵もおのゝ名をえたる

ものゝふなりといへども天性此君の武畧異國本朝にもすぐれ給へば強將の下に弱兵なくして四方八面に敵を追ちらし就中御息下野守忠吉は眞前に進み出返し合たる究竟の敵を斬すてあたりをはらひたる御振舞なり此外敵味方の名譽不可勝計そのかたはしをしるしといめんも中々なればもらしつ石田は今度の不義不忠により天罰を蒙りつひにかひなく生捕られ首を獄門にかけらる彼謀叛の與類或は降参し或は滅亡して六十餘州一時に治りぬ秀頼は少年なりといへどもかゝる兵亂の本基たる上は石田と共に討はたさるべきことなりとみな人いひしかども源君は舊好をおぼしめしてたすけ置給ひしこと誠ふかき御めぐみの至り也さて此度忠功の人々には郡國を宛行ひ差降し俸祿にあづかり時を踰ざる御はからひ誠に賞罰嚴重の事ども也此間有給

慶長八年二月十二日源家康公征夷大將軍の重任に補せられ右大臣に轉じ給ふ氏の長者として非學淳和兩院の別當を兼給ふこれたゞ一旦の勲慮にてはあるべからず元より累祖武將の御身なれば東夷西戎の亂逆をしづめ蒼生を利せしめられし勳功すでにおほいな

ば伍々の行列を備る士卒もなく只各心の欲する所に
ゑたがひてあるは東西につどひあるは南北に集りて
挑み戦ふことひねもすにやます爰に源君十歳の御時
見物の爲に出たまひて供奉のともがらにのたまひけ
るは多勢の所にてはいなみじ小勢の方にあるべしと
仰ありはたして大敵敗北しておはしますかた勝にな
れりされば此君は生知なりと皆人感嘆し希有の思を
なせり此間に
有繪

秀吉公天下を并呑の心ざし有て天正甲申の春尾州に
發向のよしきこえければ信雄一期の浮沉こゝに極り
源君の御扶助をたのみ給ひしかば故信長公のよしみを
思しめし戦場の勝負を論せずやがて應諾有て三月
上旬八千餘騎を卒して濱松を御立あり清洲の城に入
たまひ國中を見めぐりて急ぎ勇兵をつかはし羽黒に
陣取たる敵軍を追拂ひ小牧山に御動座あり秀吉は四
月八日羽翼の武士共三萬餘騎小幡岩崎へ推廻し岡崎
を心ざし馳向のよし聞し召て小牧にも究竟の軍兵共
を残し置前後六千餘騎にて打出させ給同翌日長久手
に於て合戦あり源君に隨ひ奉る強兵一騎當千の勵し
て敵の猛將あまた討取勝鬨をあげて即時に小幡へ入

給ふ是猶小城なればとて其夜小牧山へ移らせ給ふ秀
吉は樂田に歸り小松寺に本陣をはり用心きびしくゑ
て小牧山の近邊二重堀小口樂田に其勢八萬ばかり手
分をしつゝ合戦の用意あり數日を経て源君信雄を誘
引し軍勢一萬八千を十六手にわかち小牧山より打出
二重堀の東の野へ押出し備を立給へば二重堀の者共
はあはて色めきて小松寺へ加勢をこひけれども秀吉
宣ひけるは敵馬をいればゑづまりてあくまで敵の胴
勢かゝらば此方より詰べしとぞありしこれは二重堀
のものどもを餌兵になし兩將胴勢をみだしせめかゝ
らば大軍にて取籠討取べきとの計略なり源君ははや
く此事をえろしめし小牧山へ引とらる秀吉手を失ひ
て犬山の西南奈良高田村に士卒を残しおき五月朔日
七萬五千餘騎にて終に美濃へ退き給ふ源君は此たび
にかぎらず若年の御時より武勇世にすぐれたまひ江
州姉川に至りては朝倉が大軍を破り長篠に於て武田
にあたる時は甲軍忽に辟易す或時は隣國の名將とた
たかひ又は邊鄙の凶徒をえづめ數十ヶ度の合戦皆以
勝利を得給ふこと御智謀のいたす處也上古にも末代
にも有がたきためしなりと人みなほめ奉りけり

東照宮大權現緣起

傳聞いにしへ溟涬の蒼海に三輪の金光有て浮浪す天地ひらけ陰陽わかるゝに至て三輪の金光同く三光の神聖と成て其中に化生す此故に神國たり神世萬々人皇千々にいたり一刹利種系聯禪讓していまだかつて移革せず相胤も亦玄かなり閻浮界の裡豈かくの如く至治の域あらむやされば日域を根本として印度支那を枝葉とせる事良有^レ以哉 抑本朝帝皇の苗裔姓氏あまたにわかれし中にも第五十六代 水尾帝の御末の源氏はたけいきほひありて君を守り國を治るこゝと世に超過せりことさらに當家の祖神に祝ひたふとび給ふ東照大權現の名高き世のはまれは言説にも述がたく筆端にもつくしがたし今この本縁を顯すも巨海の一滴九牛が一毛のみならしそのかみ彼慈父贈大納言廣忠卿若君のなきことを歎き北の方もろともに參州煙巖山鳳來寺の醫王善逝に參詣ありて丹誠を凝し諸有願求悉令滿足の誓約を深くたのみ給ひ

き此間に
有繪

ある夜北のかたあらたなる靈夢を蒙りたまふ夫夢は六の玄な四のわかちありといへども瑞夢揭焉^{イヂ、ルグ}して御身も唯ならずおはしませばまさしき卜筮の者にとはせ給へば孕にいまするは宿植德本の男子十有二月にて平安に誕生あるべし是十二神將擁護の故なりと考へけり此間に
有繪

誠に占かた掌をさすが如く十二月月にあたり天文十一年壬寅十二月廿六日易産の紐をとき給ふ御骨法非常して乳母湯母備侍り養し奉り墓目の儀式基手のかけ物など調へつとめて三日五日の夜の祝ごとども本所はさらにもいはすこなたかなたの御養産不可^レ三勝計此君襁褓のうちより風姿岐嶷に幼して雄略義氣いましければ御家族の繁榮行末たのみ有て國人皆天壤ときはまりなからんことをねがひよろこびあへり此間に
有繪

或時邑里のわか人ども弓箭を携へ瓦礫を飛して因地といふわざをえけり此事何の年月にはじまり何の故事におこるといふ説をきかず元來の怨讐ならねば暫時の計策にまかす分々に下知を加ふる良將あらざれ

大僧都法印大和尚位覺深識之

右月能桂一卷(山王祭禮記一卷)延曆寺之藏本也依師命加書寫一校畢原本字形走草且依爲反古之裏間有難讀解者大概依本而闕任思得附朱字焉所謂山家要略記五卷山家要記淺略目錄二卷併此二卷都九卷全備日吉神社之由來者也

文政七年甲申秋九月十一日

氣吹廼屋垣内末松重恭花押

月能桂一卷平田家藏本を以て謄寫せしめ本集に收む

明治卅八年十二月

佐伯有義

らば是を書記して後の代にも傳へよかしと勧めたまふしかれどももとより愚の筆のあと殊に神わざの深きよしもわきまへ侍らねばいかでかこれを記し侍りなむといなめど強ていさめ給ふ事度かさなり侍ればいな船のいなとも辭しがたく且おふけなき神恩を謝し奉る一端ともなりねかしと思ひかへし侍りていささか目にさへぎり耳にふれ侍るわざどもをそこはかとなく書集めて彼僧都の几下に捧るもの也これ唯一時の責をふさぎ侍るのみなり敢て後の日に殘し置侍るべき物にはあらず一度貴覽を経ばはやくかいやり捨てまへと云事なかり

于時貞享の五とせ龍集戊辰五月の下の七日に聖眞子の宮奉仕綠樹軒松順伊勢園の草廬にして是を記し畢

凡日吉山王權現初夏中祭禮者曩時天智聖代大宮權現鎮座于波止土濃之靈地至_ニ于今_一一千餘回連綿不絕矣然從_ニ白鳳年中_一至_ニ延暦九年_一唯以_レ柳奉_レ祭_ニ之同十年辛未桓武天皇令_レ勅造神興_ニ二基_一謂大宮二宮二社耳渡_ニ御唐崎_一奉_レ祭_ニ之五十六代清和天皇貞觀七年卯月七日令_レ勅造聖眞子八王子客人此三神興_ニ七十四代

鳥羽院御宇天仁二年四月廿二日令_レ勅造十禪師神興_ニ同帝永久三年卯月廿一日重令_レ造_ニ三宮神興_一焉自爾已來代々聖主降_レ詔造_ニ替神興_一故七社靈耀赫々矣且六十四代圓融院御宇天元二年乙卯初夏自_ニ富津濱_一至_ニ于辛崎浦_一泛_ニ龍頭鶴首船_一伶人廿餘輩舞樂七十一代後三條院延久四年四月廿三日祭禮被_レ立_ニ官幣使_一八十四代順德院御宇建暦三年十一月十八日祭禮之日_{此時有_ニ故祭_一禮延引也}被_レ發遣勅使左近衛中將藤原資平朝臣爾來勅使無_ニ敢斷絕_一焉凡我山王祭禮之巍々堂々大都如_ニ斯呼興廢有_レ時行藏任_ニ運故元龜兵火一發已來寶殿神興成_ニ灰燼_一然天正聖朝神殿祭禮粗再興之_{余記_ニ此始末_一及_ニ當時祭時現行之次第_一以欲_ニ備_一廢忘未_レ果焉一日綠樹軒松順來_ニ于山房_一問_ニ我安_一茶話之次談及_ニ此事_一故宣_ニ余微志_一以勸_ニ記_一此事固辭之不_ニ敢止_一焉故令_レ錄_ニ此一卷_一以贈_ニ之余閱_ニ之則宛如_レ見_ニ掌菓_一矣於_ニ于_一茲宿望一時遂畢蓋是非_ニ遂_一我宿望抑亦可_レ爲_ニ後代之龜鏡_一乎故一唱三嘆之餘叨加_ニ一語_一以贈_ニ彼孫謀_一云爾}

貞享五年著雍執徐癸亥念八日

台嶺蘇陀峯雞足院住

着岸奉^レ上^ニ神輿^一三宮之船後殿一艘着岸上^レ之也凡
還御入^レ夜之故高挑灯二張宛各神輿之先持^レ之八條横
大路町筋家々焼^ニ庭燎^一也駕輿丁比叡辻村役送^レ之如
此二艘宛奉^レ上^ニ神輿^一來依^ニ爲比叡辻村駕輿丁人數
少分^一也每度以^ニ同人數^一八條之下迦羅陀山地藏堂迄
奉^レ昇^レ之從^レ此山谷ノ公人請^ニ取^一之三院其各其社仗
者院々奴僕昇^レ之各本社之假屋奉^レ入^レ之

一翌日已刻社家爲^レ賽於^ニ社々前^一旁拍子神歌坐^ニ大宮^一
拜殿^ニ賽次神莊嚴之具以下撤^レ之也

一賽之事廿ヶ年餘以前廊神子參^ニ大宮^一有^ニ歌物口^一

郭公深キ谷ヨリ出ニケリ外山ノスソニ聲ソ落クル

三 反

近年廊神子不參無^ニ其沙汰^一也

夫日吉山王權現卯月申の日の祭禮は往昔天智天皇の
御宇白鳳元年に我御神大津の八柳のかげより此山末
に迄づまりましますべきゆへ彼^{○ゆへ}彼[○]地所之誤[○]を相たまふ
とて田中の恒世の船に棹さしてさゝなみや志賀の唐
崎に御幸なりし時恒世船中にて粟の供御を奉りしよ
り毎歲此浦に神幸あるべしとの神勅より事はじまり

て一千餘年の今に至るまであめが下の大祀となり代
代の聖主いとも畏き詔を降し給ひて執行はせ給ふ世
にかくれなき神わざになむ侍るされば法印延全の
神代よりかはらぬ松もとしふりて御幸久しき志賀
のから崎と詠じたまひしは新拾遺集にえらばれ尊圓
親王の

久かたの天津日よしの神まつり月の桂もひかりそ
へけりとつらねたまひしは風雅集になむ入侍る玄か
れば代々の帝叡慮をかたぶけましゝていときら
きらしく執おこなはれし祭禮にて侍りしを去る元龜
のみだれに絶はて侍りぬる事いと口惜きわざなり玄
かはあれどいつしか和光のかげの照そひてふたゝび
神幸のあとたえぬわざとなり侍る事誠に七のやし
ろの御恵に四の海も靜なる故なるべしかくてやつが
れかく神職の身と生れ朝な夕なにあがめつかふまつ
る事年久しくなりにたれど限なき神恩を報じ奉るべ
きよしもなし爰に覺深大僧都閑話の折から祭禮の神
わざゑるし付たる物やあると尋ね問たまふに其わざ
記したる記見及侍らず但往日の事は辨へ侍らねど當
時の現行はおよそ見および聞傳へ侍りぬといへばさ

次宮仕一人令持幣於白丁二人下馬場七本柳乘役船一至唐崎也是則爲神馬還御祝言也七社宮仕三艘各番勤之都合小船八艘神馬之役船也往昔洪水之時神馬乘之例歟各立七社神號札一艘下八王子船由但早尾歟大宮役船社家乘之二宮役船宮仕乘之也

一神輿渡御已前桂枝一把三院其各其社宮仕其院々ノ

棧敷持參之

次七社宮仕持神劔下馬場歟手鉾持七人白丁各乘神輿船也

次持七社枕木追々下馬場皆載移神輿船

一神幸事惣合鳥居基并大橋東兩所振指麾此時指麾下自七社各公一人附之是則神輿神幸爲遲速

也大宮神輿昇出下指麾許次振指麾時昇出二宮已下次第如此也

一社廿人宛爲前驅仗者先行次各々神輿神幸其道筋出惣合鳥居經馬場二鳥居大鳥居行石占井在舊井方上明良自作道下神輿道兩社辻到七本柳奉乘船供奉警固之若徒同乘船從七本柳御船神幸先進次第唐崎之四五町許南留御船中央大宮左二

宮右聖眞子二宮北八王子聖眞子南客人八王子北三宮客人南十禪師但北十禪師南可爲三宮誤歟

神輿船各東向也七社神輿各供神酒奉幣祝言與粟津神供同時也各宮仕勤之

次粟津御供船湖上相對大宮船隔東方半町許指留次自粟津之幣帛載移小船持參大宮之船々人着

素襖袴掛赤色襷船漕樣故實有之由粟津村代代年寄役也大宮木守請取幣渡客人社宮仕々々取之

渡社家々々取之則奉幣祝言次御供船着素絹五

條僧向御船備御膳次第海落七五三四十九膳御

菓子神酒等也此間於御供之船中奏音樂樂名今日樂

人御供許ヨリ招請之令奏樂ナリ又御供船屋形之

上着猿面猿形者出三人爲猿遊戲此時宮仕小船

上唐崎南濱向神馬還御移祝言奉幣神馬別當持參御

幣七本七社次第渡之則神馬相副持參本社七社各

寶前牽神馬舍人二人令持轡以此幣社家賽也神

供々訖御供船莊之幣皆投入湖中打鐘口唱念佛

也其時神輿船擊太鼓則還御先進次第奉着比叡辻

村若宮之汀御船遲速有之時指留五社之船汀半町

許東也然後大宮船二宮之船先着岸二艘宛如次第

未尅宮仕三人柳宮參迎此內客人社宮仕一人奉幣祝言是每年同役也餘二人七社宮仕各番勤_レ仕之_二渡_一御柳大宮_二令_一供奉也

未下尅警固公人并下坂本比叡辻仗者皆着_レ鎧集_二來中

鳥居基_二撞_一生源寺鐘_二二度同午神事作法警固中以_二小

坂中役者_一柳宮遣_二七度半使_一是則大柳渡御之儀可_レ被_二相催_一之由也依_レ之柳渡御供奉次第先_二御幣_一持_二之

次宮仕三人着_二襖衣_一帶_二太刀_一_{召具白}次素襖五人_{列_二行_一}

次四宮神人木村左近着_二袴肩衣_一爲_二路次行列警衛_一也

次幸鉾持_レ之次大柳人夫等捧_レ持之_二次衣冠神人一人

乘馬_{指掛衣蓋也也是膳所五}次總角兒童一人着_二赤色裝束_一

乘馬_{所明神內各番出仕ス}次着_二布衣_一神人二人各乘馬_{一人天津町}

明神_{人ナリ然柳自ニ作道ニ入ニ二華表上馬場ニ經ニ早尾}

社前_{渡御至ニ}大宮社_{以_レ柳社東方遷置也}次於_二三院

棧敷前_{有ニ}獅子田樂之役人_{與ニ}卯神事_{同人也}獅子

舞田樂終先指麾次公人三院別當次六別當次十六谷公

人次三院本谷公人先年有_二出入_一故近年如_レ此次五人

年寄次法師次上坂本仗者次濱分仗者渡也著衣公人三

十人餘著_レ鎧公人百十人餘上坂本仗者八十人餘濱分

仗者六十人餘都合三百人計也次七社駕輿丁七百人加

増共千人可_レ有_レ之歟警固後續上先大宮神輿次第春日岡後昇出搦_二副轅_一此時比叡辻仗者列_二立大橋西_一拔_二刀劔_一警_二衛_一之_二敢_レ不_レ令_二人通路_一也然此間社家自_二大床下春日岡邊_一以_二笏拍子_一奏_二神歌_一是號_二春日祭_一上古俗人奏_二鳥向樂_一云々

一七社駕輿丁之事

大宮_{山中村}二宮_{八瀬里}聖真子_{千野}雄琴_{八王子}修學_{寺村}

一乘_{客人}高島_{穴太}十禪師_{上坂本}志賀_{三宮}下坂本

一申之尅神_{幸唐崎}供奉之次第

先神馬七疋_{各舍人}自_二惣合鳥居_一經_二一鳥居_一至_二于唐崎_一之五町許南濱有_二神號札板七本立所_一牽_二此所_一則

神馬之別當飼馬也_{今日神馬事下坂本町々爲_レ役調出}

次七社御鉾七基_{鉾持一本各}自_二惣合鳥居_一渡_二大鳥居傍_一

此所立_二御鉾_一但大宮御鉾下掛_二猿田彦面_一也神輿渡御

畢上八條町歸入各七社は依_レ爲_二還御之道筋_一歟

次持_二七社之太鼓_一下_二馬場_一皆載_二移神輿船_一

次七社之神子中之鳥居邊迄供奉

次社家二人供奉各衣冠騎馬_{召具笠持白}下_二馬場_一一人

者留_二大鳥居邊_一一人者七本柳乘_二役船_一至_二唐崎_一乘_二

移大宮神輿船_一是則爲_二神供祝言_一也

期谷々公人參集故賜酒者公人着鎧持太刀一列立庭上飲之三獻冷酒廻一反次引着蕤染小串也次酒二反順行然後公人前驅衆徒自馬場出仕各々入棧敷其門公人立列棧敷前警固之衆徒入棧敷畢公人退下三院棧敷皆垂簾各々有饗應行器赤飯酒肴等從之谷谷一年行事及當番役者役之凡三院兒棧敷入有之則公人前驅次小童子一人次兒作眉着長絹袴持柏扇乘法師肩法師白布一端掛肩其上乘兒法師者公人未衆過者云法次若大衆着白素絹次老僧徒行然兒從棧敷正面入之令坐上坐三院互樽核等祝儀有之其日棧敷饗應自兒許設之未剋自粟津御供船山門執行代江一通持參棧敷

御供船於唐崎令着岸候早々御神幸所仰候以上

四月十八日

執行代

粟津 御供本

同剋從座主宮幣使大宮參着々鈍色袍裳五條袈裟御幣七本持參禰宜兼出仕相待

同尅社家二人衣冠樹下生源寺自分之宅乘馬通政所之前

出馬場參候大宮其儀於樓門內西方下馬中古春

日岡邊下馬之由也五色之幣七本先持之是官幣之由備寶前也次社家皆政所之前通馬場出仕先排大宮寶前着坐微音祓讀之歎次社家取座主宮御幣七社神與移祝言畢皆昇坐大床次座主宮幣使大宮階三段昇時宮仕桂枝一把渡之則請取之退出今日上京之由

私云幣使持參事是可爲官幣使代歎爾者五色幣可備寶前筈也雖然用常幣也是誤歎右之幣共皆社家調進之由重可尋之也

次大宮御寶前牽神馬一疋祝言有之次神輿各莊桂枝宮仕調之

大禰今日午尅許大津四宮松本平野明神粟津五所社神人等供奉渡御神宮道在作大津町奉行所同心二人曳鐵棒先行同奉行所之家老二入并手代侍以下二十人許控後一對之長道具令持之從四宮大津町間供

奉到觀音寺町暫奉留禰於此所此間同町鍛冶着袴肩衣直幸鉾打搥治之爲舊例每年如此也治之訖則奉行所之侍飯去町代三人供奉禰到坂本蓋是不可令路次之間人夫等作爲放埒之事爲警誡也

神供棚之莊同政所御膳

洗米 載四方三膳 四方三膳

土器尺和布柿

御菓子 入緣高内一錢頭花煎餅 酒入錫壺御幣十本

但五本宛取分之

八階神子双方一人宛次下左右八乙女二人宛并居祇園宮仕御膳度々唱奉渡木守然乙女子次第取次之供内陣

次禰宜一老下階二度奉幣祝言退出訖次亥上尅警固之公人皆着鎧持松明群參中華表下立列二行凡生源寺撞鐘三度井上町八條町庄町一度集三方也小坂中役者回左右揃定十六谷公人然先立獅子役人獅子所從馬場間吹笛擊太鼓次田樂法師次警固公人皆捧持太刀舉聲參時集政所公人乍着鎧社二人宛持神輿先轡是云駕輿丁表張

次大政所於神輿御寶前獅子舞次田樂四社前次第然二宮之前而以舞納相圖公人呼勝滿々々四社駕輿丁揃歟一時勝滿答應其時自神輿於拜殿下急昇出鼠祠前迄神幸遲速先進次第也從鼠禿倉前如式法定次第列渡二宮橋上夜宮道經總社之前惣合鳥居入御大宮拜殿然七社神輿列立于一所所謂大宮中央二宮東聖眞子西八王子良角客人乾角十禪師

巽角三宮坤角也公人皆持松明警固前後政所四節後殿供奉然於惣合鳥居基挑灯高指上時大宮方四節一度上之是謂今夜祭禮無異相濟之標示歟今夜駕輿丁之事四社谷々駝人爲役相催也云例參有作法事依之餘谷々公人加勢之由也

次祭禮神供排四社寶殿各供内陣八王子三宮大宮内陣一所供之客人社下殿供之惣御供所調進之是則年中八箇之内其一也社家三老迄各奉幣祝言二申日已尅於坂本町々濱擲七社神輿方船所謂寄合船貳艘打渡船梁其上敷板々上四方精進竹四本曳注連高札各書神號立之七社同之然七本柳濱寄置御船也擲御船下坂本町々之役也

大宮酒井町二宮四屋町聖眞子石川町八王子柳町客人大道町十禪師比叡社三宮太閤町傳聞康保安和之頃龍頭鷁首之船泛湖水有神幸云々今衰廢可歎嗟之耳神馬船八艘同着此所是亦浦々之公役也

同申日當日大宮權現祭禮也早朝供七社御寶前神供并神寶等追々三院衆徒參詣拜賀法施神樂等也宮仕參候大床并七社神輿前

今日午剋計山門衆徒集三塔各々集來所及棧敷入之

挑灯侍以下同大宮方也今夜祭禮相濟歸下四節今無

其人其故護正院者矢嶋道節預勤之梶生坊者北谷教

王坊預勤之此二人大宮方各番也金輪院者上坂本年

寄中預勤之南岸院宮下宗伯預勤之此二人二宮方各

番也同尅警固渡訖次社家參候王子宮之傍四社之宮

仕候神與前次社家以下部云役人都同次二宮方宮

仕起座役人參二音呼之則參拜殿次奠茶所謂召大

宮本守本社御茶二音呼之則持參宮仕各取之奉供

四社神與戴小四方土器也次社家四人一度以笏祝言畢退出

召役人參二音即小比叡禰宜亦參候於二宮前祝言

訖退出然後禰宜一人衣冠着座王子宮外陣凡奠茶調

之事二宮十禪師之內宮仕三薦所役也御茶園所在井神町字云茶木

未御供早朝參座主宮申御加持之事即貫主宮垂

翠簾加持之其間件御供棚昇之回庭上三遍然即

持參左麓

一酉剋祇園社宮仕幸圓持參未御供於大政所之重之

棚莊柳曳注連御膳皆載之其儀

二宮洗米載四方

薄濃鏡一面疊紙紅筆一雙造雛一對

鳥形造物一

造花

右之分皆入緣高一

御札御幣卯杖長一間餘

八王子洗米載四方

十禪師同斷

三宮同斷神酒入錫壹

右之神供祇園社宮仕於拜殿前渡當社宮仕々々取

之各奉供神與次召役人參二音禰宜則昇拜殿

取笏四人一度祝言退下次召役人參二音則小比叡禰

宜參拜殿於二宮神與前奉幣退出則是持參祇園

幣也三尺許之札板入錦袋幣持副也但札板祇園持

歸也

札板之銘

日吉社

未日右方神人貞享五年

泉和元年四月日卯月十七日

未神供調進之所烏丸通五條坊門上町云山王町

二十ヶ年許以前迄從此所調進之今祇園幸圓領

也

一同剋燒政所篝火四社本守役也

同剋排大宮之寶殿社家宮仕參候次持參祇園調進

神事也先奉向八王子三宮神與於寶前移祝言有之次昇出神與兩宮先八王子次三宮也然下八王子坂神幸渡御二宮拜殿坂道依爲難所神與後更舒鈴繩二筋後扣之警固公人二宮方迄着鎧渡於于此脱具足登八王子駕與丁勤之人數同二月神與上時社家宮仕神人等供奉并兩宮木守燒篝火先持之於二宮拜殿供洗米於神與土器七膳是二宮々仕爲恒例役儀調進之木守神子宮仕次第取次奉供之此間社家並居二宮鐘打次社家一老行拜殿向南奉幣訖皆退出

一今日自七社寶殿取出神寶並神與御裝束莊嚴具等然五社各神與奉假御裝束是則依爲今日午神事也亦今日撤大政所御鉢鳥居代立精進竹二本立所七所也所謂唐崎鳥居跡二本下坂本兩社比叡辻若宮前同大鳥居跡同政所同馬場收納所辻同二宮橋北同今日各立之也凡七所何上古鳥居跡也比叡辻同村之年寄役兩社之神人中座土佐所役也

一同日唐崎社之一町許西南鳥居跡精進竹貳本立之曳注連但鳥居四十箇年許以前迄有之云々同所北精進竹七本宛南北七通合四十九本立之曳注連也古

老所傳是上古宿院之跡也此所奉移神與之由云々或小五月會時棧敷跡也云々不知一說何是耳立此竹之事等下坂本大門町大工町中嶋治郎左衛門大津神出町大工源左衛門各番相勤之着素襖所建之也

一未日五社神與奉御裝束大宮聖眞子客人神與直奉移大宮拜殿二宮方十禪師自假屋出之各奉向神與寶前掛輦八階也然而小比叡福宜參候移祝言小比叡福宜者福宜內四老也

今日未刻二宮方ヨリ遷幸政所之拜殿加八王子三宮四社神與也駕與丁之事相催四節之警固也太鼓持枕木同之但金輪院南岸院此二人各番ナリ今日卯神事是二宮祭禮也上古卯時行之故號卯神事連々成宵由申傳也今亥刻許行之今日申刻四節警固大宮方并政所方各三十人許皆帶甲冑而渡兩所神與前則退下其次第先立者素絹被五條袈裟帶太刀是則山徒之護正院相生坊金輪院南岸院四節之內二人宛各番每年勤之然一人宛留兩所神與前警固下部二人帶兵具相從也大宮方樓門外上長道具二筋并高挑灯二張立之侍以下十餘人并居此所也二宮方並居政所拜殿傍道具

例御供船嚴重着岸並諸役人參勤可爲御神忠候仍折紙如件

四月十一日

執行代判

粟津御供本

一右之通客人社宮仕爲役儀到兩所祝儀饗應有之自今日粟津定神供調進之當屋村之役人等相集調之然取往還賣人之分一之由

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候如恒例前日未之御供嚴重令調進可有參勤候仍而折紙如件

四月十一日

執行代判

主御供本

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候如恒例神輿御坐船嚴重令參勤候樣被相催者可爲御神忠候仍折紙如件

四月十一日

執行代判

辻江五左衛門殿

日吉祭禮來十八日以式日令執行候任恒例各嚴重參勤可爲御神忠之旨可被相催候仍折紙如件

四月十一日

執行代判

日吉社司中

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候如恒例精進竹調進可爲御神忠候仍而折紙如件

四月十一日

執行代判

大藪奉行中

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候任恒例駕輿丁嚴重參勤候樣念入可相催候仍而折紙如件

四月十一日

執行代

公人下輪中

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候任例駕輿丁嚴重令參勤候樣念入可相催候仍折紙如件

四月十一日

執行代判

下坂本年寄中

一今日丑日取替大政所之神繩同所立御鉾然亦曳注連於王子宮并拜殿是二宮十禪師之內宮仕三膳所役也

一四月當日祭禮以前午日申尅八王子祭禮也是云午

西方入社正面日隱内幸銚同入之也次社家下階於鐘打之下訖祝言畢退出然而先幸銚一基奉掛早尾大行事畫像則是先立持之次大松明榊前後持之大榊自樓門奉出次四宮并松本明神神人等乘馬供奉從馬場經作道下神輿道自下坂本渡御大津四宮若濱邊洪水之時者四ッ屋奉乘船供御也坂本大津道筋家々燒庭燎也今夜宮集會大官御供所頂戴神酒祝儀有之

四月祭禮以前丑日從山門獻上座主宮之一通

日吉祭禮來十八日以式日令執行候前日未御供并奉幣役者嚴重有參勤之樣被仰付者可爲御神忠之旨依衆議令申之由座主宮御前披露所仰候恐々謹言

貞享五年四月十一日

執行代判

菅谷大輔法印

座主宮 奏聞之一通

來十八日例のごとく日よしさいれいとりおこなひまいらせ候この御心え候て日ろうまいらせ候めでたくかし

勾當内侍とのへ

御 諱

女房奉書

文のやう日ろう申入まいらせ候來十八日日よしのさい禮取おこなはれ候よし御心えあらせられ候此よし心えられ候てざすの宮さま御下向に付それ故しんもんさまより仰入られ候との御事御もつとも思召候このよし心え候て御申入まいらせ候かし

御ちこの中

御日ろう

一丑日翌日從座主宮執行代御使者到來其口上菅谷大輔申云昨日書狀之趣日吉祭禮以式日被執行之旨座主宮御前遂披露候之處有御許容即日被經奏聞之間勅許相濟候此旨可被相心得候依之被遣使者由也

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候如恒例大榊被令調進嚴重參勤可相催者可爲御神忠候仍折紙如件

四月十一日

執行代判

大榊本

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候如恒

日吉祭禮記

大政所華表之跡曳神繩之事

正月十八日七社牛王二通并櫛十二枝掛之是二宮十禪師兩社宮仕之内三薦各番調進之惣而祭禮之儀式三薦勤仕之

年之祭禮始之事

二月二申日辰尅八王子三宮兩社神與各自假屋本社拜殿江奉移置之八王子駕輿丁者西谷無動寺飯室谷公人三宮駕輿丁者北谷東谷西塔北尾橫河谷内公人等舊例而勤之兩宮々仕相從參著本社是年之祭禮始ト云ナリ

直榊事

三月廿八日頃山門山内何處大榊立木有所直木伐榊直飯室道廣芝松迄出置也同月晦日早旦於廣芝備神酒於榊然榊調進當番宮仕祝言介持七社宮仕此所出御迎也人夫十人計捧持榊宮仕神子各供奉奉移大宮社東方大宮木守路次内橫大路迄擊太鼓也榊調進

之事五社之宮仕内三薦各番相勤之今日此所持參之幣四手神酒以下調進之同人役也二宮十禪師兩宮除之蓋午神事卯神事役儀有之故歟今日七社之御實前各榊二枝立之小社各同之也

祭禮事始

四月一日七社宮仕集會御供所有神事役儀等差定之祝儀但七社御供所各番也其宮三薦勤之

供備神供之事

四月三日酉尅於大宮下殿供神酒於廿一社然榊調進之宮仕祝言大宮寶前同備之也七社宮仕皆參候大宮下殿今日神酒一樽足打二膳土器廿一大豆壹升和布十把自執行代榊調進宮仕江被下之是則今夜神供用也

大榊爲御迎參着之事

同尅自天津四宮爲大榊御迎參着四宮生得神人一人松本平野大明神之神人一人各着布衣路次之間騎馬樓門之外下馬然着坐大宮拜殿正面次社家一老一人七社宮仕各着坐大床次客人社宮仕下大宮階坐拜殿與御迎之神人勸杯三度訖亦昇大床復坐次人夫等立松明捧持榊回大宮社之後從

月能桂

原本目錄無之今私加之

大政所華表之跡曳神繩事

年之祭禮始之事

直禰事

祭禮事始 供備神供事 大禰爲御迎參着之事

四月祭禮以前丑日從山門獻上 座主宮之一通附

座主宮 奏聞之一通并女房奉書事

執行代下行書

大禰本 御供船 未之御供 神輿御座 船 社司參勤 精進竹 駕輿丁二通

取替

大政所之神繩事

午日八王子祭禮之事 午日七社寶殿取出神寶事

午日鳥居跡立精進竹之事

未日五社神輿奉御裝束事 未日二宮祭禮之事

未御供之事 一未日未刻燒政所篝火事

同剋莊大宮神供事 二申日搦七社神輿船事

同日大宮祭禮之事 同日午剋山門衆徒集三塔事

未刻自粟津御供船差出一通

一未刻座主宮幣使參着事

大禰渡禰宮事

未下刻大禰渡御之事 七社駕輿丁之事
申刻神幸唐崎供奉之次第 粟津御供船之事
翌日巳刻撤神莊殿之具已下事

神宮御事抄所謂神宮御抄是也未詳作者頃閱ニ卜部氏藏本ニ先代舊事本紀卷第三與書曰文永七年六月十一日雨中天照太神御事抄出畢石上神御事抄畢兼文云々依レ之考彼石上神宮御事抄者文永七年卜部兼文述作歟斯益本文曰兼文案レ之爲據又曰伴文案レ之當ニ件文作ニ兼文ニ舊本有ニ謄寫之脫誤一檢ニ本書一而以ニ朱筆一訂ニ正之一云于レ時寶永元年歲次甲申孟夏初七書レ之又乙酉初春下ニ六一再校レ之

三枝益人今出川 一 友花押

安也人陽氣曰魂々運也言招離遊之運魂鎮身體之中府故曰鎮魂在女曰巫

神祇令曰中冬中寅日鎮魂祭集解云上卯之次寅也

仲冬十一月

貞觀儀式云鎮魂祭儀以安藝木綿二枚實於宮中進置神祇伯前御巫覆宇氣槽立其上以杵撞槽每一度畢伯結木綿說御巫舞訖次諸御巫猿女

舞

江次第卷十三鎮魂祭次第曰十一月鎮魂祭中寅有寅宮內省東第一間立櫓棚置祭物又倚付鈴賢

木其西安木槽置御巫衝宇氣

槽上神祇伯一人進結糸於葛宮

也死之緣也用糸自延喜式具見タリ

延喜式曰備前國赤坂郡石上布都之魂神社

新撰姓氏錄曰大鷦鷯諡仁德天皇御世達倭賀布都斯

神社於石上御布瑠高庭之地

神代卷曰素盞烏尊拔所帶十握劍斬蛇云々一書曰其

斷蛇劍號曰蛇之龜正此今在石上也一書曰素盞

烏尊斷蛇之劍今在吉備神部許也

古語拾遺云素盞烏神自天而降到於出雲國簸之川

上以天十握劍斬八岐大蛇天十握劍其名天羽羽

斬今在石上神宮

兼文案之蛇之龜正是素盞烏尊所持十握劍也一名天羽羽斬為神體以仁德天皇御世大和國石上布瑠村鎮座所謂石上神宮是也初在吉備神部許哉所謂備前國布都之魂神社是也

日本書紀第六曰垂仁天皇三十九年十月五十瓊敷命居於茅渟荒砥川上宮作劍一千口因名其劍謂川上部亦名曰裸伴藏于石上神宮也是後命五十瓊敷命倅主石上神宮之神寶八十七年二月丁亥朔辛卯五十瓊敷命謂妹大中姬曰我老也不能掌神寶自今以後必妹主焉大中姬命辭曰我手弱女人也何能登天神庫五十瓊敷命曰神庫雖高我能為神庫造梯豈煩登庫乎故諺曰神之神庫隨樹梯之此其緣也然遂大中姬命授物部十千根大連而令治故物部連等至子今治石上神寶是其緣也

右石上神宮御事抄者神宮齋主首物部連光由相傳之本也諸神記上

鳥所持十握劍也一名天羽切為神體云々古語拾遺

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

素盞烏天十握劍其名天羽斬今在石上觀此案之石上

石上神宮御事抄略曰石上神宮御抄

貞觀九年格曰得神祇官解一倭坐大和國山邊郡正一位勳六等石上神社一座

延喜神祇官式曰大和國山邊郡石上坐布留御魂神社一

名神大月次相登新嘗

舊事本紀曰建甕槌男神亦曰建布都神今坐常陸國鹿嶋

大神亦石上布都大神是也

崇神天孫本紀

又曰磯城瑞籬宮御宇天皇御世遷建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑則天祖授饒速日尊自天受來之

天璽瑞寶同共藏齋號曰石上大神

又曰天璽瑞寶所謂贏都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉

一死反玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比

禮一是也天神御祖敎詔曰若有痛處者令茲十種謂

一二三四五六七八九十一而布瑠部由良由良止布瑠部

如此爲之者死人反生矣是則所謂布瑠之言本矣

又曰神武天皇元年辛酉十一月丙子朔庚寅宇麻志麻治

命奉齋殿內於天璽瑞寶奉爲帝后崇鎮御魂祈

禱壽祚所謂御鎮魂祭自此而始矣其鎮魂祭日者猿女君等率百歌女舉其布瑠之言本而神樂歌儼尤其是其緣者也

古事記中卷曰天照太神高木命二柱之命以召建御雷神

而詔葦原中國者伊多玖佐夜藝帝阿理祁理云汝建御

雷神可降爾答曰僕雖不降專有下平其國之橫刀

可降是刀名云佐士布都神亦名云建布都神亦

名布都御魂此刀者坐石上神宮也○今按本書名云以下割注也

日本書紀卷三曰武甕雷神平國之劍號曰誦靈

件文案之武甕雷神平國之橫刀劍同號曰誦靈此云布都御魂

是即建布都大神之神體也以崇神天皇御世大倭國

後改山邊郡石上邑鎮座所謂石上神宮是也亦曰石上

振神宮

先師之說布都御魂者神代三劍其一也天羽羽斬亦然

又櫛玉饒速日尊自天受來之天璽瑞寶是即布留御魂

神之神體乎鎮魂祭之日神祇中臣持著鈴寶木及切木綿呼曰十種神名振之結木綿故名云布留御魂神歟

本書紀履中天皇紀曰倭石上振神宮又顯宗天皇紀曰石

上振之神相所謂石上振神之謂此以崇神天皇御世鎮

座

養老職員令曰神祇官伯一人掌鎮魂祭御巫事謂鎮

義解

之才。今度進退不_レ出_二臆見_一。又所_レ記偏閣下御說耳。仍
應_二賢意_一。不_レ能_二固辭_一。謾呈_二筆紙_一。獻之恐懼不_レ少者也。
左近權中將藤原定基判

自舞殿東邊_二着隨_二便宜_二西方者爲_二舞人參進之路_二間有煩故也又得_二實慮_二

次陪從羅_二列于中門前庭_二西面_二北上發_二歌笛聲_二次舞人進_二

駿河舞_二東上_二北面_二

次求子_二西上相對之舞圖_二歌了定基以下退出_二

次定基以下入_二休所_二以_二社司_二之後有_二更衣及供_二神饌_二

之儀_二云々此間時刻推移赤鳥停午又愁行列參_二上御社_二

其道東行_二頌向_二三四町更赴_二西又向_二北到_二流木社邊_二猶

北行到_二上御社_二於_二一鳥居_二下_二輿入_二休所_二以_二鳥居之內_二

其所_二垂_二次社司供_二神膳_二聞_二供畢之由_二定基着_二輕幄_二解

除_二其儀先洗手又無_二役人_二仍令_二隨身役之_二凡贖物以下如_二下社_二但

此社以_二氏人_二爲_二陰陽代_二先例此社用_二安家陰陽師_二定事也云々

次參_二進橋殿座_二各有_二揖_二（恐誤）_二

此殿或號_二舞殿_二其座向_二廊門_二斜敷_二之舊例對_二三片岡

山_二設_二之今度定基依_二有_二存旨_二改_二之_二此事內_二得_二實慮_二了然神

主職久稱_二先例_二不_二承引_二定基問云_二背_二本宮_二對_二三片

岡山_二其故如何其答唯存_二先例_二耳別無_二子細_二云々仍

定基略述_二所存_二即承伏了遂向_二廊門_二敷_二之_二其座斜也_二橋殿第二

間也、
敷_二之_二

次讀_二宣命_二其儀如_二讀畢後氣_二色_二子神主職久_二

神主參進定基授_二宣命_二置_二笏以_二右_二

此間內藏助捧_二幣立_二幣案於_二橋殿前庭_二入_二廊門_二授_二神主_二

件 宣命副_二幣物_二納_二神殿_二

小時神主歸出於_二三片岡社前石上_二申_二返祝詞_二拍手定基

應_二之次神主取_二葵持來_二插_二白木杖_二兼社司置_二幣案上_二後日氏人

雖_二之其後者件葵佳所_二懸_二於神殿御帳_二也納_二幣物_二而後即取_二件葵_二插

於_二社中_二返祝詞_二也久壽二年四月日記被_二載_二年持_二件杖_二申_二返祝

謂_二失禮_二歟_二然無_二桂定基問云_二桂如何神主答_二失念之

由_二命_二早速可_二持來_二之由_二神主歸_二參社頭_二更取_二之持

參了定基插_二冠_二始所_二插之_二起座停_二立土屋邊_二次引_二回神

馬_二三回畢定基令_二立_二胡床於土屋西軒下_二着_二之

次東遊_二二曲_二如_二下社_二歌舞_二事了歸洛_二舞人參_二（○陰恐誤從_二應從

檢非違使左馬寮使
自_二今出河邊_二分散

凡祭日有_二出立儀_二而有_二神館儀_二及_二還立事_二件饗祿

依_二無_二用脚_二一切不_二能_二設_二之加之每事略儀甚如

無_二威儀_二唯時勢令_二然歟更無_二餘儀_二暫開_二其端_二而

後世耳

夫溫_二故而知_二新者古今達道也此祭儀所載諸記延喜以

來既三變歟應仁大亂之後中絕二百餘歲方今與_二廢繼_二

絕彼延喜天曆盛時應永長祿衰代惣不_二合_二今日之儀_二

況無_二可_二見_二舊記之巨細到_二此時節_二之儀則實在_二閣下

御扶持_二定基拱_二手而勤_二之不_二然者何堪_二此大事_二哉然

當日之儀可_二令_二注進之由蒙_二嚴命雖_二非_二不_二顧_二鳥焉

る心也未_レ得心_レ雖_レ然不_レ及_三再往問答_一

抑朝野群載此 宣命作_三可有二字_一是又難_レ解尤

不審事也

讀了押_三合之_一小時祈念 宣命趣是嚴訓也更卷_レ之

過半卷_レ之後打_三懸左手_一卷了又取_三副笏_一二拜頗願

氣_三色于內藏助_一此間立_三更返_一授 宣命_一畢

次內藏助由久取_レ幣設案於中門授_三禰宜久祐縣主及祝代

河合社祝秀久縣主祝惟貞自去比小時禰宜歸出傳_三

神宣其儀

次祝代復座申_三返祝詞_一不_三拍手_一如何失念歟仍定基又不_三拍

手_一

愚昧記云仁安二年十月十五日今日於_三院被_レ立_三十

二社奉幣使_一今朝越後前司賴季過_三門前_一示云爲_三賀

茂幣使_一參仕而告文給_三一通_一如何答云一通所_レ給也

先參_三下社_一讀_三宣命_一了社司取_レ之書寫返_三授之_一次

參_三上社_一也

是賜_三宣命一通_一例據_三此說_一則近衛使於_三何處_一可

受候哉雖_レ勘_レ之先例未_三分明_一依_レ之密々於_三閑處_一

可_レ受之由得_三嚴命_一而仰_三內藏寮使_一畢然今度作進

次第准_三嘉保二年行幸儀_一內藏寮使持_三參於舞殿使

次將又直返_三與內藏助_一畢

中右記嘉保二年四月十五日今日賀茂行幸也上卿着

座內記奉_三宣命_一取_レ宮歸兩段再拜讀_三宣命_一又兩段

再拜宣命返_三給內記參_三上御社_一

按此儀甚不_レ穩彼嘉保之儀者上卿對_三內記_一也此

祭者以_三近衛中少將_一對_三內藏頭助_一其品大不_レ異

況舊例內藏頭參仕之時位次或在_三使次將之上_一件

時甚有_レ煩歟今日以_三殿上次將_一對_三地下諸大夫_一

猶用_三此儀_一雖_レ似_三無_レ煩內藏寮使何用_三上卿對_一

內記_一之禮_三乎殊不_三相似_一歟雖_レ然作進次第如_三此

儀_一難_レ改_レ之仍暫從_三此儀_一耳是趣又得_三賢慮_一畢

次祝代秀久縣主進_三葵桂_一持_三白木杖_一持_三參舞殿_一定基插_レ頭之其插

記_三左_一

久壽二年四月廿日台記賀茂祝持_三插_一葵桂_一之杖_三白木

進出跪_三橋北頭_一申_三還祝_一畢昇_三自_三東西北第一間_一

獻_レ之餘取_三葵桂_一先以_三葵入_三巾子_一次以_三桂插_一冠後

如_三物忌_一豫雖_レ放_三件所_一暫祝退歸

即起_三座降_三南階_一停_三立橋殿邊_一是非舊例隨

次馬寮使引_三回神馬_一三回

定基令_三手振立_一胡床於舞殿北階東掖件胡床着_レ之其路

差_二府生_一遺_二內藏寮_一受_二葵桂_一之文有_レ之仍知_レ不_レ向

是依陰神也 今日忘

昇階之進_二右足_一禮記曲禮云上_二東階_一則先_二右足_一上_二西階_一時_二則先_一左足_一今以_レ東易_レ南凡每級并_二立

仍起居升降皆揖之

宣命一可請三此事先例不二分明一密々
宣命一之由一嚴命一

次披二 宣命一
メ(本ノマ) 頗向^レ二右方^一 披^レ之押合前爾モチメクラ
 當^レ冠額一程披^レ之引下讀^レ之 讀^レ之

不發音抑此事近來東照宮奉使極高讀之甚不可然引助之處諸記注云微之音也但其聲甲乙之程儘不注之也然觀音寺大相國紀注云永享八祚年穀奉帑八幅使也被注三不出聲之由因之不出發音也云凡神社宣命讀之間不掩面少押下而讀之異於尋常儀是故實由

稱_レ前大納言實教卿說權大納言資熙卿談_レ之乃尋_ニ申
閣下_一之間舊記分明所見有_レ之哉旨被_レ尋_ニ仰權大納
言畢答_ニ申分明之由_一仍可_レ用_ニ此儀_一之旨有_レ仰也
頗敬屈讀_レ之

宣命詞云
用紅梅紙是賀茂社例也

天皇美皇申我御命爾坐掛畏岐加茂乃皇太神乃廟前爾恐美恐
度申給者久申久太神乃助給爾護給爾依氏天皇朝廷者平
久大坐氏食國乃天下無事久可有志爲氏奈常進無宇都乃
大幣乎從五位下行內藏助藤原朝臣由久爾令捧持天
走馬進免羅度恐美申給者久申

元祿七年四月十八日

右訓點尋ニ問大内記長量朝臣ニ處如レ此定基問云可レ有ニ字如何桂下答云天下事なくあれといへ

已上御前儀勘合右兩記加取捨而可用之由嚴訓也

抑舞後可被覽馬歟今日不騎馬仍無此儀又無舞人陪從已下被祿之事

次入閣所一掃頭葵桂其掃頭見社頭儀抑上古向內藏寮更云差府生公助遺內藏寮令受葵桂等當世無被寮仍自家密々用意之一

此間檢非違使及馬寮內藏等使整列渡馳道先看督長八人二行各具一次檢非違使四位二人右衛門尉貞弘宿禰左衛門尉弘光宿禰內藏寮史生捧之衛士二人次御幣從者同上

六人白丁一次御幣下御社料內藏寮史生捧之衛士二人從者同上次神馬白丁二人前行備次馬寮使左馬允源友清六位也次近衛

舞人先行從者如先次前驅二行次定基次隨身從者如先次內藏寮使白丁二人具之次久素禊二行之次從者如先次陪從從者如先次內藏寮

西宮記云近衛使參射場就內侍所受祿近代天皇御南殿御座在南庭中間立馬形御屏風二帖廣延御出

置御內侍出上卿昇着座延上他男女使馬手振次第渡主人不渡入白日內藏近衛衛府有馬寮宮之

男使命婦宮之使一團司等馬從渡舊例渡後歸度內廷喜天曆不歸渡侍取御劔天皇入御

如此記者渡之事似本儀歟但件時清涼殿御覽無之歟江家次第無南庭儀西宮又云或召近衛

使使居長橋歌人立東殿砌以下給御衣舞人給第布以此說見之者就內侍所受祿之日不召御前旨分明也然況西宮有主人不渡之文但此度因關白基命一渡馳道了

各經南殿前出東門去御所三十步而定基乘駕須乘馬又因關白命不乘之凡路道次東行到東河塘以西更

北行出今出川東頭渡鴨川預設橋參下御社到鳥居邊下與即入鳥居洗手

兼而社司設之輕輦南也臨期無役之人仍俄令隨身役之畢

着輕輦輦體無異設假屋三面垂簾東一方囊之其座東面數帖一枚座前有獻是陰陽代座也不着座之間不揖依假座也

次脩禊其儀陰陽代凡下社例用賀家陰陽師云々今度自社家相語行

此儀進贖物圖之略之陰陽代取大麻副祇付木申故也祇中臣定基先取解繩解之其儀半持笏以左手取解之二度解之也高天原讀上之時解之故實也云々

次取人形撫之次散々米被畢後陰陽代進大

麻一定基懸笏或取手歟今度不取之手令息之是一陰陽代取大麻退去更撤贖物一畢已上悉嚴訓也

其儀倭清取_レ盃土器進居_二座下方_一取_レ瓶_子相從之先受

酒飲_レ之更又受_レ酒授_レ之_之置_レ筯取_レ盃也

之置_二座右_一此間倭清退入

次頭左中辨尹隆朝臣取_二勅祿_一紅打御被_レ之其儀頭取_二祿_一拍_レ以爲_二祿

方待_レ之到_レ使前_レ取_レ直_レ之以_レ襟向_二定基取_レ祿懸_二左肩_一執_レ筯

起_レ座

其儀少居直_{前在_二衡重_一故也}先置_レ筯左手ヲアヲノケザ

マニアコメノエリノシタノ方ニサシ入テソレヲウ

クルガゴトクシテ右手ヲウツムケザマニスリテ取

テスグニ肩ニウケカケテ左手ニテスソノ方ヲオサ

ヘテ右手ニ取_レ筯起_レ座也

降_二段階_一跣出_二砌外_一四五尺許向_二御所方_一乾拜舞其

儀如_レ例

次退_二出於長橋外_一著_レ沓氣_二色于隨身_一第一者以_レ祿授

之乃令懸_レ肩畢

仁平元年十二月十一日_{使_二左少參_一內侍所_二申_一罷由_二}

次進_二弓場_一西殿發_二歌笛歌_一此間藏人垂_二庇御簾_一主

上出_二御畫御座_一頭朝隆朝臣奉_レ仰召_レ使々々進候_二

長橋代_{釣殿馬道北板上也}舞人陪從經_二馬道_一立_二釣殿_一

於_二東砌邊_一陪從發_二歌笛聲_一舞人於_二庭中_一舞_二求子_一

主殿官人曳_二此間賜_レ肴物_一細折腰衝重_二合殿上人五位二人

次朝隆朝臣勸_二盃_一藏人右衛門佐忠親_レ依_二警衛_一貢_二舞人陪

從退出之儀飭馬引馬_{引_二之自_二馬道_一引入_二一_一廻庭中_一}

之後自_二本路_一引出之間朝隆朝臣取_二御拍_一振衣着

使々取_レ之掛_二左肩_一進_二出砌外_一拜舞_{不着_二退_一出賜}

沓賜_二御拍於隨身_一先_二是出納給_一舞人陪從_二官人_一祿有差

治承二年十月卅日_{使_二右中將_一日將_二真通_一使參入舞人在_二使前_一陪從}

參入使進_二立弓場代_一西中門外北殿陪從發_二歌笛音_一藏人頭

左近中將定能朝臣奏_二事由_一即告_二召之由_一使垂_レ裾入

自_二中門北小戸_一候_二中門廊緣南妻_一擬_二長橋_一豫敷_二圓座

寄取_レ之次舞人入_レ自_二中門_一進_二前庭_一舞_二求子_一此間

賜_二肴物於使_一殿上五位二人役次頭中將定能朝臣勸_二盃_一

五位藏人基親取_二瓶子_一使飲畢置_二盃於前_一次頭中

將取_二勅祿_一紅打拍_二頭後開重御單被_レ出_一之出_レ自_二殿上之

戸懸_二使肩_一使左手取_二御衣_一右手持_レ筯下_二自_二緣南

妻_{不着_二進_一出砌_二四五尺許向_二御前方_一北拜舞如_二恒就_一右}

廻出_レ自_二初小戸_一着_レ沓_{令_二着_一也}賜_二祿於隨身_一上薦_二武重

子宗雅傳

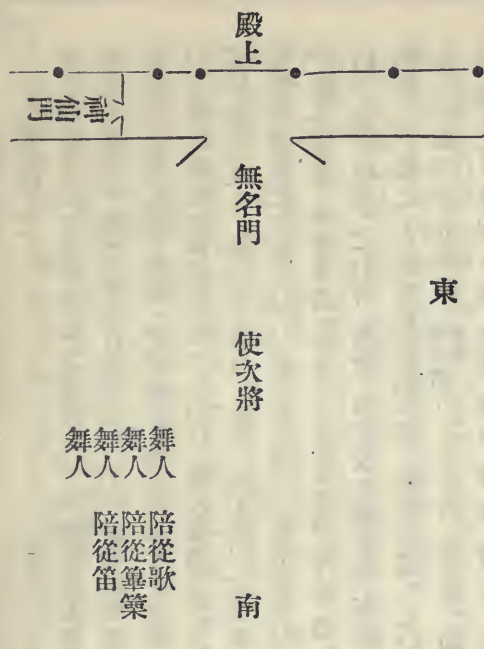
取給_レ之

代舞人陪從以下悉屬從

治承二年玉葉云自三條坊門西行到西洞院陣口一
即下馬布衣共人留此所云々如此記者布衣輩不
可入陣內事勿論也但今度依渡南庭悉召具
之了

弓場代列立儀圖之

使次將立無名門前一許丈舞人陪從各羅列使次將計陣座
壁第二注之程立舞人者當宣仁門陪從立舞人之
後也凡舞人以下列差退于西南今立之是嚴訓也



次陪從發歌笛一曲畢藏人右中辨俊清出逢定基
奏參社之由其儀一揖俊清歸參御所此間垂中殿御簾
以三大床子圓座敷之云々
天皇御簾中俊清歸出告召之由一定基答揖而參進直
昇長橋假階不揖
文永十年四月十五日吉續記云使左少將隆久參弓
場經賴出逢次歸出仰聞食之由次昇長橋
着圓座
其儀頗向乾着之向御所方也是今案也且得賢
慮畢又繆裾不揖是爲羽林例之由見薩戒記矣
先是隨身取沓退入了
次陪從發歌笛立長橋內北面西上
次舞人進庭中舞求子袒襦挿笏
次此間賜肴物衝重二合六位藏人二人役之
件肴物不立箸此事立哉否舊記不注之而江家次
第出立儀二獻之間無下箸之文到居粉熟下
箸之由注之又六條右大臣顯房公說云肴者以手取
之不用箸之由見世俗立要集已上御厨子所預以
此旨得賢慮而用此儀畢
次藏人辨俊清勸盃

胡床乍開之捧之

抑手振裝束仁平元年台記云紫褐衣以三村濃

糸爲括

朽葉末濃

袴青半臂同下襲濃蘇芳打衣青單白下袴冠細纒老懸

藁脰巾布帶凡稱紫褐者濃蘇芳也治承二年十月卅

日玉葉云紫褐其色蘇芳也云々仍以蘇芳極濃染之

偏如紫也又不指括之事見同記仍不指之袴者

見台

安元泰通見吉

治承顯家見山

舊例末濃也仁平隆長見台記等手振用朽葉末濃

治承二良通玉葉用青末濃

仍可朽葉之由有嚴命而尋求之處其難得剩

偶雖求出之古物殊見苦然間用蘇芳末濃之由

使少將

見治承四年山槐記基案用之更得賢慮而

用蘇芳袴畢如下襲惣難調出仍准隨身只用

單許又可着藥袋歟然其體不分明且爲唐

鞍之具由見治承玉葉不乘馬者無益歟之由存

之略之藁脰巾布帶等依不詳同省之畢凡今度

儀同用脚微々每事不具無力事也冠又插葵桂畢

小舍人童一人

先例六人也又省略玉葉云薄物萌木狩襖袴結紅葉付

之歟冬打薄歟冬柏黃單毛沓今度用薄物狩衣萌木

略柏只用單許毛沓其體不祥略之抑結紅葉事

先蹤不分明凡稱結花者當世如杉目扇以絲造

花形付之准此儀以赤絲作楓葉付之以紅

紙結髮根以同紙書物忌二字結副之持杉目

扇皆據玉葉

雜色八人

玉葉之裝束半蘇芳狩衣無裏袴濃打出柏黃柏青單衣

造菊白之今度柏單等略之

此外走童十二人執物舍人四人具之然延應二年

制符走童一切可停止之由載之見平又執物者

皆馬具也悉不具之或人難云每事省略之間童雜

色等風流不相應歟定基答云全不可然往古諒

闇年必止之治承五年吉記云依諒闇無風流

云々仍殊令付花等丁

次舞人陪從起座舞人直出門外陪從

次定基起座隨身乘駕陪從殿折

先例參內之時用車今度用轅

廻轅參內舞人先行召具素襖二人陪從

廻轅參內屬從從者同上向社頭之間騎馬也

前下與下公門過門之後更駕之赴闕至正親町

邊下與近來無立石步行入左衛門陣進立弓場

款冬衣青單蒲萄染奴袴藤原業清家勾當範綱蘇芳布

狩紫奴袴萌木衣紅單建久十年二月廿二日明月記

云於藤杜騎馬行列先幣和琴次前驅二人源長邦

八條院藤光資布衣牛靴例鞍平鞞左中辨馬長邦

乘光資乘白馬

次隨身四人

凡中將具四人一是定員也其裝束者細纓冠掛襷繪

褐押獅子丸左獅子右熊是又宜例也但件紋當世付

種々花又用金薄尋之處二條御幸之刻三寬永所用

之遺風遂以爲俗習然未知其據也又法隆寺舞

樂裝束之中有件物皆採色也雖古物猶不足

爲規模仍得實慮之處可引勘之由有仰而

賜舊記二卷御稷行幸服筋記乃考之以銀薄押獅子丸

舌口之中付朱砂之由見壽永元年信範卿記仍

用此儀了著蘇芳袴舊例多蘇芳末濃歟安元二年

左中將泰通朝臣見吉治承四年左少將基不見山所

相具隨身皆用末濃然件物俄難得之嚴訓云蘇

芳袴雖非末濃可無巨難也仍用之帶劔無見依

略得之靈胡籙指白羽矢舊例左用鷲羽但隨有用之也是自閣下一

拜借之又用紅單而不著下襲此事見仁平台

記一件記云取要

仁平元年十一月十五日春日祭使左少將隆長賴長公男隨身裝束獅

子蠻繪布袍二藍末濃狩袴濃打白衣下袴懸緒無布

帶冠老懸桌脛中淺沓野劔指尻鞞其樺卷鞭腰

右記不著下襲之由也仍略之又挿鞭事依

不勝馬無其儀矣又用絲鞋

手振二人

江家次第云手振十二人下薦四人持物鞭宮笏宮胡床

豹皮毯代外年々日記注十二人之由今度每事依

不具僅具二人是爲取物也其所持物所謂如鞭宮笏

宮爲乘馬也仍不令執之又毯代者其調法未

詳依嚴命略之胡床者常所用節會也以白

木造之上引革緒即位之時黑漆也打金銅金物見

圖豹皮者即位所用虎代也染帛畫豹毛指圖

豹皮持有兩說歟

一說仁治三年十月廿一日御稷行幸陽龍記云執物持樣事

豹懸左肩以尾方爲後

一說寬元四年十月廿四日御稷行幸同記云懸豹皮於扇

右按兩說手振所持之扇其體未詳仍以仁治

儀用之

用淺沓之儀甚不可然也此陪從裝束蠻繪袍關腋也其色繪九舊記注蠻繪之袍由不載其色青朽葉下襲紫未濃袴已下舞人以下裝束爲武家沙汰關白其說也凡摺袴人陪從共取此事臨時祭記求子之指細拔笏之丈有之仍命也地下輩猶准之歎定基答云誠以件儀難准之但出立間大將着座賜孟於舞人之時任府生一舞人取笏拜之說見江家次第雖歎之由命之

次授葵桂一各挿頭之

江家次第云往年參內之後到內藏寮者座懸葵山立儀然往古件寮在近衛世俗稱南堀川西今尋其所市麴比軒更無寸地又無可准之處仍得賢慮而密々授之其挿樣專如挿頭花以葵懸巾子以桂あげをの根をはなちて指之以桂末向左挿之江家次第抄云今案巾子の前あげをのちがひたる所に指之すきなければたぬしにさづくてづからさす上緒のさきにさすはひがこと也近代益々あげをのねをはなつなり

次定基出簾中外舞人陪從動座

按四等官各有其禮如太政官以大臣爲長官納言參議者次官辨少納言者判官外記史者主典也長官之後參之時次官以下動座次官後參之時判官以下

動座判官後參之時主典動座以之准之如近衛府以三大將爲長官中小將爲次官然者將監以下可有禮節也仍得賢慮之處尤可有其禮之由有仰也

小時前駟隨身等列立干前庭

前駟四人以布衣侍爲代各着狩衣指貫

凡祭使者必可乘馬也延喜近衛式云凡諸祭供走馬一者賀茂祭少將已上一人近衛十二人云々

如式文二者爲走馬使騎馬勿論事也此外勘諸家記乘車而參向社頭之例未見及之參內之時並翌日向神館也用車

嚴訓又如此然關白基可爲轅之由再三有命仍又得賢慮而從彼命爲之行粧既欲失祭體其故者隴馬副殊爲風流又手振舍等所持之物多以馬具也乘車日一物更無所用僅隨身雜色之外似無具之人甚冷然之嚴訓云無一人之前行之狀不便也春日祭使有具前駟例且治承二年春日祭使良通被具共諸大夫十七人其輩著狩襖狩衣等准之可具布衣四人云々仍召具之一

治承二年十月卅日玉葉云不能詳記只取其要共諸大夫十七人四位一人五位十人六位四人源國輔家勾當朽葉布狩衣濃打衣

爲中宮權亮勤仕賀茂祭其時着花橘下襲又云
四五月晴時著用之就此儀令閣下之處仰下
可著用之由件色表青朽葉裏青見胡曹抄紅單如
例

抑半臂可着然而近來嘗無着用之人且又時日甚
迫織縫難合期仍無力略之畢平絹袴裏紅打
胡書抄云非參議已下常所着也

巡方馬腦帶付魚袋

傍劍

次將裝束抄傍劍代云々件物不分明歟後成恩寺殿
下御說云傍劍代といふ劍あり名のみきゝて今にみ
ず云々且嚴訓云近衛使限此祭帶傍劍之由也仍
拜借之件御劍眞楯卿劍之寫也用紫綵平緒見次
將裝束抄

及

天明舞人陪從來集

舞人四人左近將監近茂同近詮同近家
將曹近曹陪從三人左近將監久富同近

方同狹近
業等云々各着座

舞人四面南上
陪從南面東上

舊例舞人十二名陪從中將時八人少將時六人以之

爲定員

見江家
次第

勤舊儀凡物節者限府生番長近

衛歟案北山抄云定物節者中少將相共於陣

座一定補先成符奏付殿上少將次中將執筆定書

番長以下々給將曹依召立稱唯進立再拜然而今
度令將監將曹勤之殆失先規但東遊事當世府生
以下之輩無知之人唯伶人狛多雨氏稱家傳彼
輩或任諸國受領或任四府尉志皆以五位也
仍被補物節之儀一切不及沙汰僅存近衛之
名分而被任將監將曹歟員數殊被減之舞人四
人陪從三人耳三人者所謂歌笛及箏築也和琴無之
凡件器者參向之間令捧之進列前然而東遊久
不發聲適舞樂之剋雖奏之也和琴嘗不彈之今
度左近將監久富出件譜而宰相中將公韶卿被試
之處甚依不分明遂以被略了但存古體雖可
携之不彈之者無詮仍令申閣下文畧之抑
舞人裝束事治承三年山槐記注退紅狩衣之由然者
布袍也如將監專不相應仍被用紅紗袍關腋
下裏者二藍平絹紅單青摺袴白平絹以山藍摺
帶傍劍殊以不可然歟但今度時日甚迫不及新
調所用子舞樂秦王散手之劍借用之仍無尻
鞘尤明年可有新調云々已上裝束武著絲鞋從
將監近家申云陪從着淺沓舞人用絲鞋之事如何殊乘馬之時有
煩云々定基若云臨時舞人必殿上人也然猶用絲鞋之由見四
宮記況地下舞人何不不着之乎乘馬有煩者用武藏證之故也如
唐鞍移鞍全雖不見其物如圖書證之調之其異措絲鞋

元祿七年加茂祭記

元祿七年四月十五日壬午天晴早旦沐浴潔齋立_レ札於門_一

凡潔齋事家々說不_レ同或入_レ月而齋或奉_レ仰之日卽齋也桃華閣下嚴訓云入_レ月始齋者同_二於大祀_一加茂祭者中祀也尤三日之齋可_レ然但自_二月始_一不_レ可_レ交_二僧尼之類_一矣花山院相國說云或自_二一日_一潔齋不_レ獻_二灌佛布施_一是全不_レ可_レ然之由故宇治左府被_レ命或自_下如_上前駐_一定_二潔齋_一或自_二御禊日_一齋我付_二宇治左府命_一自_二御禊日_一齋_之見_二仁安二年山槐記_一令_レ申_二此趣_一之處依_二家說_一自_二午日_一可_レ潔齋_之由有_レ仰仍自_二此日_一始_レ齋但自_二月始_一僧尼不_レ淨之輩避_レ之

加茂祭神事也僧尼并重輕服者不_レ淨輩不_レ可_二入來_一

右見_二應永卅二年薩戒記_一也
十七日甲申天晴今日掃_レ亭北西懸_二翠簾_一飭_二葵桂_一飭_レ葵事先規其樣不_二分別_一但必可_レ飭_レ之歟此日不_レ飭_レ之者重輕服之家也仍所々懸_レ之

觀應三年四月十八日園太曆云加茂社司獻_二葵如_一例家中可_レ飭_レ之由仰_二了女房重服實夏方輕服不_レ飭也_一

今日下上兩社幣物料送_二社司許_一明日未明命_下可_レ令_二奉幣_一之由是祈_二祭使之儀平安之由_一也

此事小野右大臣度々勤仕之時如_レ此件儀雖_レ爲_二上卿之儀_一敬神之故徑_二被跡_一者也

十八日乙酉天晴今日有_二賀茂祭再興事_一定基爲_二近衛使_一參_二向之_一仍曉天沐浴帶_二束帶_一

冠垂纓關白基命云賀茂祭必有_二警固_一須_二卷纓帶_一弓箭也嚴訓云件事雖_二兩說_一如_二次將裝束抄_一京極中納言定家卿也以_二垂纓_一爲_二正說_一以_レ帶_二弓箭_一爲_二或說_一且今年無_二警固_一警固事依_二國祭行_一之況上古警固中猶垂纓持_レ笏乎

關腋袍

次將裝束抄雖_レ無_二所見_一春日祭使及臨時祭使等着_レ之仍准_レ之

盧橘下襲

次將裝束抄云多以着_二皆練重_一又着_二例二藍_一然年々記多以注_下用_二藍_一之由_上既欲_二染之處_一今年彼花不_レ求_二得之_一仍引_二勘諸記_一之處飭抄云宰相中將通忠

右一冊者今度隨_二江戸寺社御奉行_{松本山城守殿御所}
望_二度々及_二吟味_一殊に神主保可權禰宜維久季通并
月奉行六役等連日參_二會_二于評議所_一所_二撰聚_一之予幸
爲_二執筆之役_一相_二加于座右_一之序申_二請社中之草案_一
令_二書寫_レ之別而令_二秘藏_一者也至_二神領之卷_一者猶
爲_二後覽_一下知之狀制札之案等少々令_レ書_レ之尤至_二
後年_一可_レ爲_二禁河_{一本ノ、云々}_一

延寶九_{辛酉}年八月吉辰

當社山林竹木并柴猥伐採事

右堅被_ニ停止_一訖若於_レ有_ニ違背之輩_一者速可_レ被_レ處_ニ嚴科_一之旨被_ニ仰下_一者也仍下知如_レ件

明曆二年三月日

佐渡守源判

天正十七年秀吉公御代御檢地以來當社御神領山林境內竹木諸役免除之御朱印被_ニ成下_一惣高貳千五百七拾貳石餘此內千六百四石五斗餘本鄉有_レ之五百六拾一石四斗余小山鄉在_レ之三百七十一石四斗中村鄉在_レ之三十四石六斗西賀茂河上鄉在_レ之都合貳千五百七拾貳石也天正御檢地之時境內六鄉過半減省訖雖_レ然御神事祭禮御修理等如_ニ古代_一於_レ今勤行之御代々御朱印頂載仕來候

當御代御朱印

當社領山城國愛宕郡西賀茂內參拾四石六斗上賀茂之內貳千五百三十七石四斗合貳千五百七拾貳石事并境內竹木諸役等免除但元和元年七月廿七日同三年七月廿一日兩先判旨進止永不_レ可_ニ相違_一者也仍如_レ件

寛文五年七月十一日

御朱印

上賀茂社家中

別御朱印頂戴仕輩

一高百拾壹石八斗餘上賀茂之內西賀茂之內在_レ之

御代々御朱印拜領 岡本宮內少輔

一高四拾壹石內拾六石西賀茂在_レ之廿五石丹州船井

郡觀音村在_レ之

御代々御朱印拜領 松下民部大輔

一高廿石丹州青戶村同土塩村在_レ之

御代々御朱印拜領 林主馬首

一高廿五石丹州土塩村在_レ之

御代々御朱印拜領 森左京權大夫

一高卅石播州室津在_レ之

大猷院樣御朱印頂載 鳥居大路大膳大夫

一高卅八石西賀茂河上鄉在_レ之

御代々御朱印拜領 岡本下野中大路甚助

右別御朱印拜領分

合貳百六拾五石八斗餘

都合貳千八百參拾七石八斗餘

右諸國御神領之舊記公武御代々御教書御下文等數百

通于_レ今雖_レ爲_ニ傳來_一其內少々記_レ之而一々不_レ能_ニ注

進_一者也

延寶八年三月廿二日

賀茂社家中上

右堅令_二停止_一畢若於_二違犯之輩_一者速可_レ處_二嚴科_一者也仍_レ下知如_レ件

御朱印

慶長五年九月十六日

是者東照權現様御朱印也云々

禁制

賀茂

一當軍勢濫妨狼藉事

一田畠立毛刈取事

一對_二百姓等_一非分申懸事

右條々堅令_二停止_一畢若違背族於_レ在_レ之者速可_レ被_レ處_二嚴科_一者也仍執達如_レ件

慶長十九年十月日

板倉伊賀守黑印

制札

上賀茂境內

當社山林竹木猥探事堅被_二停止_一訖若違輩於_レ有_レ之者速可_レ被_レ處_二嚴科_一之旨被_二仰下_一者也仍_レ下知如_レ件

慶長二十年六月日

伊賀守黑印

制札

貴布禰境內

當社山林竹木并柴猥伐取事堅被_二停止_一候若於_二違背之輩_一者速可_レ被_レ處_二嚴科_一之旨被_二仰下_一者也仍_レ下知如_レ件

慶長二十年六月日

伊賀守黑印

急度申遣候今度就_二洪水當社競馬之馬場崩候之處其

所々石從_二方々_一猥取散候由沙汰之限候堅申付可_レ被_二相留_一候猶使者申含候恐々謹言

板倉伊賀守勝重判

九月朔日

上賀茂惣中

定

一在々所々百姓訴訟事有_レ之者親子兄弟庄屋年寄之外奉行所へ不_レ可_レ來對_二地頭代官_一書_二起請文_一催_二多勢_一訴訟來事一切令_二停止_一也若背_二此旨_一輩有_レ之者當人之儀者不_レ及_レ申一同之百姓悉可_レ處_二罪科_一堅可_レ存_二其趣_一事

一山城國中山林^竹安木之根^樹を採取事任_二先規例_一彌令_二停止_一了此上於_二掘取_一者見_二相搦捕_一奉行所へ可_二申來_一若於_二見隱_一者其在々庄屋肝煎可_二曲事_一事

一鄉村水論之事以_二先規例_一兼日相定及田地湯水不_レ可_二申來_一但新儀用水之處有_レ之者不_レ覃_二相論_一奉行所へ可_二申來_一遣_二檢使_一隨_二其趣_一可_レ有_二裁許_一事

右所_二定置_一聊不_レ可有_二相違_一者也

元和八年八月廿日

上賀茂境內

周防守判

禁制

上賀茂境內

當社惣御中

賀茂社領境內六鄉并所々散在等事從_二先規_三社領之內爲_二守護使不入_一度々任_二御下知御朱印旨_一山林竹木人足非分課役以下如_二先々_一彌令_二停止_一者也仍如_レ件

天正十一年十一月廿二日

羽柴筑前守

秀吉

賀茂社惣中

國々當社領事年來任_二當知行旨_一彌不_レ可有_二相違_一之狀如_レ件

天正十一年十一月廿二日

賀茂社惣中

秀吉御判

賀茂社領境內六鄉并所々散々等事從_二先規_三社領之內爲_二守護使不入_一度々御下知被_レ帶_二御朱印_一殊

秀吉御折紙被_二遣上_一者山林竹木人足非分之課役以下

如_二先々_一令_二停止_一之狀如_レ件

天正十一年十一月廿三日

賀茂惣中

玄以判

賀茂惣中

賀茂社領南小野鄉一乘寺四_レ村之內在_レ之六拾七石九斗六升之事被_レ任_二先規之旨_一社納不_レ可有_二相違_一之狀如_レ件

天正十二

十二月六日

當社惣中

當社境內竹木事一切不可_二剪採_一若於_二違犯輩_一者速可_レ處_二嚴科_一者也仍如_レ件

天正十三

三月十日

賀茂社人中

秀吉公御判

當所之儀依_レ爲_二社家_一從_二先々_一寄宿御免除之上者今度河並御普請衆不_レ可有_二寄宿_一候押而何日と申候事候者急度可_レ承候也

民部卿御印

閏正月十一日

玄以判

賀茂惣中

山城國西賀茂之內參拾四石六斗土居內減分田畠替上山城內貳千五百三拾七石四斗木知殘分合貳千五百七拾二石事遣候訖可_二全社納_一候也

天正十九

九月十三日

秀吉公御朱印

上賀茂社家中

禁制

- 一 軍勢甲乙人等濫妨狼藉事
- 一 放火事
- 一 田畠作毛刈取事付竹木剪取事

賀茂雜掌御中

賀茂社領境內六郷井所々散在事任ニ知行之旨ニ彌全領知不_レ可_二相違_一之狀如_レ件

天正元
十二月 日

信 長御朱印

當所惣中

貴布禰山之儀先年從ニ市原野ニ雖ニ申懸被_レ遂ニ糺明ニ理運無_レ紛之上者此方へ誰々申來候共不_レ可_レ能ニ承引_一候如_二有來_一可_レ被_二仰付_一一段肝要候恐々謹言

天正九
十一月十七日

羽柴筑前守
秀 吉 御判

賀茂社中

賀茂社領能州咋郡內五ヶ村在之分井賀州金津庄拾ヶ村事如_二先々_一可_レ被_二相渡_一候分國中何も無_二相違_一申付之條如_レ此候恐々謹言

同元
十一月廿二日

羽筑 秀 吉

前田又左衛門殿 御宿所

賀茂社領境內六郷井所々散在等之事任ニ御朱印之旨ニ彌全御領知不_レ可_二有_一ニ相違_一之狀如_レ件

天正二
十二月廿一日

明智 光 秀判
村井 貞 勝判

當所惣御中

今度有來水之儀申付候處別而入精之事神妙候然者夏三月之間者可_二用拾_一候條無_二油斷_一彌其機遣肝要候從ニ波々伯部清六_一可_レ申候恐々謹言

十月四日

信 良判

賀茂社氏人衆中

禁制山城國上賀茂同貴布禰

一軍勢甲乙人乱妨狼籍事

一陣取放火事

一相懸矢錢兵糧米ニ事

右條々堅令ニ停止ニ訖若有ニ違犯之輩ニ者速可_レ處ニ嚴科ニ者也仍下知如_レ件

天正十年六月七日

日向守判

制札

天正十年十月日

三七郎判

此條當年軍勢之中行ニ付非分課役事

賀茂社領境內六郷井所々散在等事從ニ先々ニ三社領之內爲_二守護使不入_一度々御下知殊被_レ帶_二御朱印_一上者山林竹木井人足非分之課役等如_二先々_一不_レ可_レ有_二相違_一之狀如_レ件

天正十二年
三月廿七日

杉原七郎左衛門尉
家 次判

同
永祿四年七月廿八日

此文内竹木ノ下に刈田等矢錢
下に一切非分課役と有レ之也

義昭公御代
同十一年九月日

此文申ケ條に陣取放火付非分
課役事云々奥に仍執達如レ件

同年同月日右馬助三善判

此制札竹木の下に寄宿事終ケ
條に非分課役付刈取作毛事

前信濃守神宿禰判

當社領加賀國金澤庄事當知行之處國錯亂以來無沙汰
云々太以不レ可レ然所詮靜謐之上者爲ニ直務一令ニ領知一
可レ被抽ニ御祈禱丹誠一之由所レ被ニ仰下ニ也仍執達如
レ件

永祿十二年七月三日

右馬 助判

前信濃守判

賀茂社雜掌

禁制賀茂社領城州所々井境内

一當手軍勢甲乙人等狼籍事

一三社領内守護使之事

一山林竹木伐採付寄宿非分課役事

以上

右條々堅令ニ停止ニ訖若於ニ違犯之族一者速可レ處ニ嚴

科一者也仍如レ件

元龜元年九月日

左衛門督日下部朝臣判

元龜元年十月日

淺井備前守 長 政判

此文段奥一ケ條陣取放火寄宿非分課
役事云々右書之奥仍執達如レ件云々

貴布禰谷山限ニ南堀取明神一事去永祿六年以來市原野百

姓構ニ新儀一令ニ掠領一之旨就ニ訴申ニ百姓支申間雖レ及ニ

三問答ニ猶爲ニ御ニ糾一明淵底ニ被相ニ尋隣郷ニ被レ訪ニ右

筆方異見ニ訖然近郷所レ進之紙面披見之處賀茂社領分

明之上者不レ寄ニ本役未進有無ニ本所進止候哉所詮任ニ

領主意ニ改易之段古今通法趣各致ニ評判一言上之條早

退ニ被郷競望ニ彌可レ被ニ全領知一之由所レ被ニ仰下ニ也仍

執達如レ件

元龜二年七月廿六日

右馬 助判

前加賀守判

當社雜掌

表包ニ
賀茂社雜掌

前加賀守

貴布禰谷山之事市原野百姓等構ニ新儀ニ雖下及レ申事

被レ經ニ上裁一任ニ社家理連一之旨被レ成ニ御下知一之上者

彌可レ有ニ領知一之事簡要候恐々謹言

八月廿三日

丹波五郎左衛門 長 秀判

享祿二年十月廿一日

堯 運判
長 俊判

當所名主沙汰人中

山城國賀茂社領境內所々散在地等々任代々下知之

旨彌領掌不可有相違狀如件

萬松院殿御下知

享祿四年十月廿日

判

當社氏人中

禁制

一當手軍勢甲乙人濫妨狼籍事

一剪採竹木事

一相懸矢錢兵糧米事

右條々堅令停止訖若於違犯族者可處嚴科者

也仍如件

義晴公御時

天文十年十一月日

左京亮判

禁制賀茂社領所々井境內文言同前

天文十五年九月十四日 藥師寺與一元房判

禁制城州賀茂社領

井所々散在

一當手軍勢甲乙人等亂妨狼籍事

一爲先規任代々下知之旨守護使不入之處相懸

矢錢兵糧事

一伐採山林竹木事

右條々堅令停止訖若於違犯輩者速可處嚴

科者也仍下知如件

天文十五年九月日

河內守判

禁制城州賀茂社領并所々散在

文段同前

天文同年同月日

源

禁制賀茂社領所々境內

文段同前但中行々寄宿事三字替計也

同年同月日

玄蕃頭源判

當社領城州奈嶋鄉事往古以來爲競馬料無相違之處非分之族競望々々以外次第也早退其妨彌全

社納可被抽御祈禱丹誠之由所被仰下候也仍

執達如件

天文十六年二月十七日

左衛門尉判

對島守判

賀茂社祝殿

禁制賀茂社領境內

文段三ヶ條甲乙人狼籍竹木矢錢同前

同十六年六月廿五日

豐前守判

義輝公御時

天文十八年六月日

禁制札文段同前

河內守藤原朝臣判

同年同月日

文同前

筑前守判

作公文新三郎無謂押妨之條可止競望旨被成奉書訖如先々早可被全社納之由也仍執達如件

大永六年四月五日

元 兼判

當社正祝殿

禁制山城州賀茂社領境內所々散在事

一甲乙人等亂入狼藉之事

一先規不入守護使之事

一伐採山林竹木之事

右條々堅令停止訖萬一及違犯輩在之者可被

處嚴科者也

義晴公御代

大永七年二月 日

柳本 賢 治判

波多野 孫四郎判

貴布禰谷山限南梶取明神事去永祿六年以來市原野百姓構新儀令掠領之旨就訴申百姓支申間雖及三問答猶爲御糾明淵底被相尋隣鄉被訪訪右筆方異見訖然近鄉所進之紙面披見之處賀茂社領分明之上者不寄本役未進有無本所進止者哉所詮任領主意改易之段古今通法趣各致評判言上候條早退彼鄉競望彌可被全領知之由所被仰下候也

仍執達如件

元龜二年七月廿六日

右馬 助判

當社雜掌

前加賀守判

表包 賀茂社雜掌

前加賀守盛就

禁制賀茂境內并所々散在

(此全文次再出蓋衍)

一神田同往來年貢諸本役無沙汰事

一從先規爲高除諸役免除之處相掛半濟事

一伐採山林竹木之事

右條々堅令停止之訖若有違犯之輩者可處嚴

科者也仍下知如件

大永七年三月十七日

沙 彌判

同八年五月十九日筑前守源判制札文言如大永七年二月也仍略之

賀茂社境內六鄉河上鄉大宮鄉小山鄉中村鄉岡本鄉散在襟原二瀬庄幡枝庄在之小野鄉南北散在等事自往古社家當知行之處今度小山鄉有違亂之族云々以外次第也所詮此所々競望輩有之者速退其妨年貢諸公事物以下如先々嚴密可沙汰渡社家雜掌由所被仰出之狀如件

賀茂氏人中

就_二倭文庄御公用之儀_一重而山本殿御下候涯分申付京着五拾五貫文上申候仍御補任下給候誠以畏入候然者此内五百疋者御補任爲_二御禮_一運上申候相殘御公用可_レ致_二奔走_一候間山本殿御立歸可_レ有_二御申_一候尙委者被官中與_二三左衛門方_一より可_レ申候恐々謹言

永正十年十月廿八日

眞 久判

就_二御公用之儀_一預_二御札_一候委細令_二拜見_一候涯分奔走仕候而五千疋分運上申候此内三千疋者割符にて渡申候貳千疋者御上使山本殿と可_二申合_一由代官に申付候猶委細山本殿可_レ有_二御申_一候條令_二省畧_一候恐々謹言

十二月廿六日

眞 久判

畏言上候仍御上使山本與五郎殿并御書謹拜見仕候了就_二御公用之儀_一蒙_レ仰候則三千疋運上申候委曲之段猶以從_二代官_一可_レ有_二御申_一候此等之趣有_二御意得_一御披露肝要候恐惶謹言

九月十三日

會津庄 御百姓中判

就_二賀茂御社領讃岐國萬濃池之内競望申_一被_レ成_二下御補任_一候畏存候然者御公用之事者毎年四月中旬六貫

九百文將又十二月中仁五貫八百文分京着定社納可_レ申候萬一無沙汰申候者彼代官職之儀可_レ有_二御改替_一候其時一言之子細不可_レ申候仍爲_二後日_一請文之狀如_レ件

永正十七年四月十六日 栗野孫三郎景昌判

禁制賀茂社領境内六郷并所々散在
一當手甲乙人等亂妨狼籍事

一代_二採山林竹木_一事

一先規爲_二守護使不入之知處_一相_二懸半濟_一事

右條々堅令_二停止_一訖若違犯輩有_レ之者可_レ處_二嚴科_一者也仍下知如_レ件

永正十七年四月廿三日 右京太夫源朝臣判

城州賀茂社領境内所々散在事從_二往古_一軍勢甲乙人等亂入狼藉守護使不入相_二懸半濟_一之事任_二大心院殿御成敗之旨_一堅令_二停止者_一也有_二萬一違犯輩_一者可_レ被_レ處_二嚴科_一者也然者彌御祈禱精誠可_レ爲_二肝要_一候

永正十七年四月廿六日 三好筑前守之長判

賀茂惣中

賀茂社領泉州深日箱作庄事從_二往古_一爲_二諸役免除之地_一無_二相違_一社家知行之地深日公文鳥取彈正忠箱

右六郷同斷

河上大宮小山中村岡本小野等郷

名主沙汰人中

禁制城州賀茂領散在之事任ニ大心院殿御制札之旨ニ不

可_レ有_二相違_一之狀如_レ件

義登公御時

永正四年八月 日

元 治判

夢想

告

つの國米谷庄はもとく天皇御むさうのつげより御寄進

不沙汰

右大將よりとも御代下知せさせ給ひしより以來ず

いぶんの御神りやう也然に御くようぶさたのみぎり

後うだの院當社御さんろうの夜御夢になげき申させ

給へばすなはち勅使をたてられて庄内をたづねさぐ

りかたく仰つけられしより勅使庄とは申也こゝにき

向 押領

んねん一かうにわうりやうごんごだうだんのしだい

也所詮御屋形様へ子細を申あげちぎやうをまたくし

精 誠

て御いのりのせいをいよくいたさんがための

ごん上如_レ件

永正四年十一月 日

禁制城州賀茂社領境内所々

一軍勢甲乙人等亂妨狼藉之事

一伐ニ取竹木之事

一縣ニ課役之事

右條々於ニ違犯之輩ニ者可_レ處ニ罪科ニ者也仍下知如_レ件

同御時

永正五年四月三日

民部少輔判

神領能州賀茂庄之事國錯亂砌迄無ニ懈怠ニ社納申候不

相替先々可_レ致ニ取沙汰ニ候可_レ被_レ成ニ其心得ニ候恐々謹言

同七年三月十四日

義

元判

賀茂社中

態以ニ折帋ニ申候仍而賀茂領本役事如ニ先々ニ急度納所

肝要候神田之事者不_レ混ニ自餘ニ先年も長慶以ニ折紙ニ

被ニ仰付ニ候き今以前前之儀候堅社納專一候不_レ可_レ有

油斷ニ候於ニ難澁ニ者可_レ差ニ上催促ニ候恐々謹言

永正七年十月五日

三好日向守長逸判

大宮郷 小山郷 中村郷

南北小野郷

名主沙汰人中

法住院殿義澄御下知
城州賀茂社領境内所々散在等之事任ニ政元下知之旨ニ

全可_レ有_二領知_一者也恐々謹言

永正八年七月十九日

澄

元判

御祈禱之由被_レ仰出_一候云々

同九年六月廿八日丹波國由良庄事爲_二前納_一令_二知行_一可_レ致_二御祈禱_一之由可_レ被_レ下_二知彌久縣主_一之由被_レ仰出_一候也云々此內於_二貳千疋之土貢_一者可_レ被_レ付_二貴布禰兩官_一無_二懈怠_一可_レ致_二其沙汰_一若有_二不法之事_一者可_レ被_レ召放_一之由云々

同十二月七日賀茂正祝領之事名主計允申處有_レ理仍致_二其沙汰_一臨時課役可_レ被_レ止催促_一之由武家御下知之_一上者其趣可_レ被_レ存知_一候由可_レ申旨候恐惶謹言

十二月七日

賀茂祝殿

賀茂貞久申奈良社領賀茂田散在事度々被_レ成_二奉書_一之處茨木孫次郎押妨未休云々太以無_レ謂所詮就_二當社造營_一御下知之上者不日退_二彼妨_一可_レ被_レ全_二貞久所務_一若猶令_二難澁_一者一段可_レ有_二御成敗_一由所_レ被_レ仰下_一候也仍執達如_レ件

文明十年四月二日

大和前司判

同十五年九月十八日山國庄枝庄小鹽黒田郷民等就_二緩怠之儀_一可_レ止_二貴布禰之通路_一之由去月廿八日被_レ仰出_一畢今以令_二通路_一者依_レ不_レ塞_二其路_一歟堅可_レ被

加_二下知_一之由被_レ仰出_一候由可_レ申付_一候也恐惶謹言

九月十八日

親繼

賀茂神主殿

賀茂社領江州蒲生郡船木庄領家職_{賀茂庄事}

任_二當知行_一被_レ成_二奉書_一畢

早止_二押妨之族_一可_レ被_レ全_二所務_一之由被_レ仰出_一候也仍執達如_レ件

延德三年十一月廿二日

宗勝判

禁制

右當所山伐事堅可_レ停止若有_二違犯輩_一者可_レ處_二罪

科_一之狀如_レ件

善教公之御時

永享二年十二月七日

沙彌判

賀茂社領境內六郷并諸神田以下所々散在之事

爲_二三社領守護不入_一之處號_二半濟_一香西又六致_二無理之競望_一云々言語道斷之次第也不日退_二彼妨_一年貢諸公

容力

事物等如_二先々_一可_レ全社納_二若有_一押妨人_一許客之輩者可_レ被_レ加_二誅罰_一之由所_レ被_レ仰出_一候也

永正二年四月廿九日

元行判

長秀判

右宣旨可令下知給之狀如件

弘安十年四月九日

左京大夫信輔奉

謹上 土御門中納言殿

賀茂社領播磨國室御厨下司并公文職事室四郎朝兼致濫妨狼籍云々早停止彼違亂可令全社家之所務若有子細者可令注進申之狀依仰執達如件

建武三年十一月十八日

武藏守判

赤松入道殿

禁制

賀茂社領播磨國鹽屋庄

右於當所軍勢甲乙人等不可致濫妨狼籍若令違犯者可令處罪科之狀依仰下知如件

觀應元年十二月 日

武藏守

鹿苑院殿御判

播磨國室鹽屋丹波國山良庄本家職事知行不可有相違之狀如件

應永元年十一月廿四日

禁制

右當所山伐事堅可停止若有違犯輩者可令處罪科之狀如件

永享二年十二月七日

沙彌判

賀茂社領雜掌申備前國尾張保事被官人押領云々太不可然早止其妨沙汰付雜掌可被申左右之由所被仰下候也仍執達如件

嘉吉元年十二月三日

右京大夫判

賀茂社領若狹國宮川庄本家職事早任當知行之旨權禰宜益久致直務可令領知之狀如件

長祿二年五月十九日

右近衛大將源朝臣御判

此時者後光嚴院御宇也征夷大將軍義政公號慈照院殿之代也

賀茂社領和泉國稻作庄與淡輪庄堺山林浦等事爲社領數年當知行之處淡輪次郎左衛門尉違亂云々

早去應永七年十一月十四日守護下知狀分明之上者全所務可被遂神事無爲節之由所被仰下也仍執達如件

寬正五年十二月廿六日

大和守判

左衛門尉判

當社祝殿

文明八年十二月五日由山良庄公用之內每年千足被付貴布禰之禰宜祝兩官之由被定訖專神事可致

被_レ下_二關東御教書_一之間任_レ狀兩度令_二張行_一畢所詮如_二關東御教書并六波羅度々下知_一者可_レ尋_二決兩方子細_一之由也而參差于_レ今不_二事行_一之處今備_二次第證文_一雖_レ進_二社解_一不_レ遂_二一決_一者輒難_二下知_一歟然者早今月中兩方企_二參洛_一可_レ遂_二其節_一也其間相互止_二新儀之濫妨_一可_レ令_レ相_二待間注左右_一之狀如_レ件

嘉禎三年九月十五日

越後守判

駿河守判

宮河保地頭代

賀茂別雷社領石見國久永庄守護所_レ使_二入部_一并高野山流人雜事間事社解_{副具}如_レ此子細見_レ狀所詮如_二承元二年十月十五日關東御下知狀案_一者故右大將殿御時御寄進之後一向社家進止之地也停_二止守護所之沙汰_一於_二大番役_一者隨_二先例之勤_一可_レ有_二左右_一至于_二其外課役者可_レ令_二免除_一云々承元二年被_レ下_二御下知_一之後無_二毀破之狀_一歟任_二彼狀之趣_一且停_二止使者入部_一且可_レ免_二除流人雜事_一之狀如_レ件

寬元二年六月三日

相模守判

守護代

賀茂社雜掌申若狹國多島浦漁獵事

院宣_{副訴狀}遣之子細見_レ狀事實者其不_二穩便_一早停_二止其妨_一任_二先例_一可_レ致_二沙汰_一之由可_レ令_二下知_一也若又有_二殊由緒_一者可_レ令_二注申_一之狀依_レ仰執達如_レ件

建長四年十月廿八日

相模守判

陸奥守判

陸奥左近大夫將監殿

賀茂新宮社領遠江國濱松庄內岡部鄉雜掌忠茂申云當鄉地頭職事保歲依_レ致_二押領_一先度被_二仰下_一候處使節于_レ今難濫云々甚無_レ謂不日與山六郎相共遂_二入部_一沙汰居社司基久代_二於庄家_一可_レ致_レ執_二進請取狀_一使節尙以有_二緩怠_一者可_レ處_二罪科_一者也依_レ仰執達如_レ件

嘉曆元年十二月廿四日

沙彌判

高時入道宗鑑

田中三郎入道殿

献上

宣旨

賀茂別雷社神主正四位下賀茂縣主久世申請以_二寬治勅免神領等_一向後永停_二別相傳并別納儀_一可_レ令_二神供備_一事

仰依_レ請_二

自年來至今年四月供祭人等引網致漁之冢中也而自去五月三日始爲吉直魚獵押領彼河尻之間於其外河上之漁者雖數萬町更所無用也又雖有何處之未流往古供祭人等尋魚入之便水所致漁築也而日吉禰宜大藏權少輔成茂宿禰等奏狀併件河建保之比流比叡庄之條僅十餘年也云々然則其條縱雖爲建保之比已十餘年之間供祭人等無異議於比叡庄中致漁畢迄昨今始彼濫妨出來之條其理可然哉新儀無道可備賢察也吉直違背代々宣旨打畱當社供祭之條違勅之科尤以不輕之上當時綸言頻下和尚御坊又任道理不可有供祭妨由御請文及度々畢雖然吉直更不叙用彌乘勝企惡行供祭人等於來臨比叡庄中河邊者忽及喧嘩御厨辭事由可致訴訟之旨結構云々未會有之所行不可說之猛惡也仍不被召禁吉直者狼籍更不可斷歟夫公家忝以當社祭祀專爲日本第一之神事日供卽爲寬治勅願豈非朝廷無双之禮奠哉今忽依吉直新儀之濫妨既擬廢一百餘歲之供膳雷匪社家之愁歎爭無朝廷之僉議哉彼比叡庄濫妨者指無一紙勅言只今年五月三日始所巧出之猛惡也御厨漁

築者苟帶代々宣旨年來於比叡庄中漁進供祭之條顯然也是非之至尤在明察裁報之處偏仰憲政凡當御厨在無只期今度之裁報者也式數有限之御贊忽闕御厨之課役者社家廻何祕計可致無足辨備哉不被止吉直之濫妨者永可闕有例之神菜也尤依勅裁左右宜存日供之勤否也望請天裁早且任嘉應元曆宣旨狀且依近行友次之例被召禁吉直之身者永斷當時向後之牢籠奉祈萬歲千秋之御願者權中納言藤原朝臣家光宣奉勅依請者國宜承知依宣行之

貞永元年六月卅日

大史小槻宿禰判

少辨藤原朝臣判

賀茂別雷社領出雲國福田庄地頭職事右任今年八月十九日關東御下知狀可停止伊北又太郎時胤地頭職之狀如件

貞永元年十月廿七日

掃部助平判

駿河守平判

賀茂別雷社領若狹國宮河庄雜掌與卽國宮川保地頭相論大谷畠并矢代浦事就社家之訴訟天福以後度々加下知之處去年七月二十八日依保地頭之訴

庄者縱雖_レ非_二大西庄司之跡_一依_レ爲_二神主能久之領_一入_二沒收_一注文之條炳焉也然則停_二止社司濫訴_一可_レ令_二時胤爲_二福田庄地頭職_一云々已上略之如_レ狀者時胤追亡父之跡已蒙_二載許_一之間所_レ申聊雖_レ有_二其謂_一如_レ御家人連署狀者爲_二大西庄司跡_一之由不_レ申之只依_二神主能久之科_一被_二沒收_一之旨載_レ之當庄非_レ指_二能久之私領_一爲_二代々神領_一之間付_二社務_一令_レ知行_一之許也何依_二能久之罪科_一無_二左右_一可_レ被_レ沒收社領_一哉者早任_二右大將家御下文并先下知狀_一可_レ令_レ停_二止彼地頭職_一之狀依_二鎌倉殿仰_一下知如_レ件

貞永元年八月十九日

武藏守平朝臣

相模守平朝臣

(異本)武藏守平朝臣

相模守判

左辨官下

應_下任_二嘉應元曆_一 宣旨_一停_二止比叡庄民當時向後濫妨_一就_二賀茂社領當國安曇河御厨_一漁_中進全日別供菜料_上間事

右得_二彼社司等_一今月廿六日解狀_一稱重檢_二案内一件安曇河御厨者令_下漁_二河海之魚鱗_一備_中進朝夕之御贄_上所

無_レ退轉也寬治聖代被_下二官符_一以降神人五十二人入別引_二募國領公田三町_一以_二官物辨濟撰_一以_二雜事_一所漁_中進每日二度之御贄_一繼_二踵無_レ絕如_レ申_一忠宗朝臣者依_レ減_二寄人并神用等之員數_一日供忽闕乏社家經_二奏聞_一之處 宣_下延引之間國司俄卒去畢仍任_二天永_一々々兩度免狀等_一寄人五十二人神田百五拾六町無_二相違_一可_レ勤_二仕役_一之由忝被_二宣_下畢大治元年 宣旨是也其後如_二嘉應_一 宣旨者依_レ被_レ尋_下神事違例_一注_二申子細_一之刻安曇河流上者限_二滴水_一下者迄_二于河尻_一不可_レ有_二他人希望_一之由嚴制重以如_レ此宜_レ從_二停止_一云云如_二元曆_一 宣旨狀_一者件安曇河御厨漁_二河流_一冬所釣_二海浦_一也停_二止河上并善積庄及國中權門勢家庄園坊_一可_レ漁_中進賀茂日別供祭_一云々前格嚴制其文明然之間彼河新古餘流南北遠近之江海一向停_二止甲乙濫妨_一皆悉被_レ止他人希望_二畢仍船木北濱供菜人等可_二全漁進是則只以_二河內被定_一置供菜料之故其河縱雖_二流_一入何庄々_一任_二宣旨狀_一可_レ不_レ漁_中進日供御贄_一哉依_レ之或雖_レ有_二權門勢家之御領_一或雖_レ多_二山門日吉之庄園_一於_二河漁_一者更非_二其所之成敗_一只付_二流水_一併爲_二御厨之成敗_一者也但漁築者專以_二河尻_一爲_二本之間比叡庄中

相模守判

可_レ令_下早任_ニ右大將家御下文并先下知_一停_止伊北
又太郎時胤知行賀茂別雷社領出雲國福田庄地頭
職上之事

文言依_二後資法印江戶本_一不_レ載_レ之

右如_二社解_一者右大將家御時於_二當社_一領_一者被_レ奉_レ免_二

地頭職_二之後代々爲_一將軍家任_一累代之例無_一一所云々而承久逆亂之時不慮之外被_レ補_二地頭_一之間有_レ限年實更無_二進納_一之實無_レ止神事偏有_二闕乏_一之愁社家之悲歎何事加_レ之哉尤任_二本免_一欲_レ被_レ返付_一云々如_二時胤陳狀_一者件地頭職事依_二親父胤明之勳功_一度々所_レ給_二御下知狀_一也而承久之時始被_レ補_二地頭職_一之由載_二社解_一之條以外虛誕也文治二年依_二社家之訴訟_一可_レ停_二止宗遠并實法々師濫妨_一之旨見_二社家所_一進大將家御下知等_一仍前々社使之外別沙_二汰人知行_一之條勿論也就_二中名字相違_一之由社家訴訟之刻尋_二明實說_一安貞二年時胤給_二御下知狀_一畢如_二彼狀_一者縱雖_レ非_二大西庄司之跡_一依_レ爲_二神主能久之領_一入役收_二注文_一之條炳焉也停_二止社司之濫訴_一可_レ令_二胤明子息時胤爲_一地頭職_二之由被_レ載_一之此上不及_二陳狀_一之以_二地頭停止之狀_一備_二他人

可令早停止旁武士狼籍任先例勤仕神役事
右件所々者賀茂別雷社領也而近日面々武士寄事於
左右任自由企濫妨之間恒例臨時所役及闕如
云々早停止旁狼籍可令勤仕本役之狀如件以下

文治二年九月五日同上

右六郷之内賀茂社司申富野郷居住當社神人訴申地頭職事嘉禎四年十
一(越後守相摸守)下知狀右之也又奈島郷賀茂祠官等申當社領山城
國奈島郷事任文治御下文可爲社家進止之狀如件延慶二年七月
十三日前越前守云々此奈島郷下知狀正和三年九月廿一武藏守文保元七十
八陸奥守同二年十一月卅日平行長賀茂社雜掌宗親申狀之事又元曆二
年二月十四日倫篤基篤執達之狀雜掌申押領當郷申事書狀如件此早
令出對可被請
取本解狀一由候云々

私云此細字之分江戸公儀上分に不載也

下播磨國安志庄林田庄

可令早停止旁武士狼籍勤仕神役事

右件庄々御厨者賀茂別雷社領也而近日依面々有
限之神役及闕怠之旨以社家之申狀自院所被
仰下也於自今以後者早停止彼等之妨可令勤
仕神役若又有武士之押領外之狼籍一直可令經奏
聞之狀如件以下

文治二年九月五日賴朝御判

下周防國伊保庄竈戸關矢嶋柱嶋等住人

可早停止土肥實平妨并土人大野七郎遠正不當
從領家進止事

右件庄々者賀茂別雷社御領云々而土肥實平近日致
押領之上土人大野七郎遠正令滅亡庄内之由依
社司訴自院所被仰下也仍召問實平之處於
兵糧米者免除了況無押領之由所申也何物之謀計
乎兼又遠正令滅亡庄内之條甚以不屈也自今以後
停止彼等之濫行可從社家進止之狀如件以下

文治二年九月五日

下出雲國福田庄

○關文庄石見國久永庄三河國小
野田庄播磨國網子庄美作國南庄
文治二年十月朔日

丹波國私市庄務事

右如社解者公文胤行如地頭令張行之間社家
訴申子細之日追本公文跡可致沙汰之由嘉
祿三年十月廿五日成給下知狀畢而去年胤行任新
補之傍例可致分沙汰之由申給御教書重文
致非法云々者事實者甚不隱便早守嘉祿之成敗
本公文跡之外可停止新議之狀鎌倉殿仰下知如
件

寬喜四年四月十七日

武藏守判

若狹國 宮川庄 矢代浦

加賀國 金津庄

越中國 新保御厨

右肆拾貳箇所神領任ニ院應御下文ニ停ニ止方々狼籍武士等濫吹ニ如レ元可レ備ニ進神事用途ニ若不レ恐ニ神感ニ不レ用ニ院宣ニ慥可レ處ニ重科ニ之狀如レ件以下

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

庶苑院殿之御時右之趣不レ可レ有ニ相違ニ之旨御下知被ニ仰出ニ御判被ニ下畢

應永五年二月 日

管領神主豐久

奉行飯尾加賀入道

左辨官下ニ近江國

應レ停_下止河上并善積庄及國中權門勢家庄園妨_レ令

漁_ニ進賀茂別雷社領安曇河御厨日別供祭物ニ事

右得ニ被社去月日解狀ニ稱當社御厨等或爲ニ平家ニ被ニ

燒拂ニ或爲ニ源家ニ被ニ押領ニ皆悉不_レ叶ニ社役ニ之間供菜

不_レ令_レ通日別供菜併所_レ及ニ斷絶ニ也今僅所_レ憑近江安

曇河御厨計也而件御厨夏漁ニ河流ニ冬所_レ釣ニ海浦ニ也

近來爲ニ權門庄園等ニ依_レ致ニ制止ニ輒不_レ能ニ漁捕ニ日別課役更以難ニ合期ニ凡者當社供菜狩捕之地者不_レ顧ニ國中權門勢家庄々可_レ釣漁之由被_レ下ニ宣旨以來皆所ニ漁來ニ也然者絕無ニ前法ニ近年供菜御厨滅亡間隨ニ社家申狀ニ尤可_レ蒙ニ勅許ニ何況於ニ前格嚴制ニ哉早被_レ下ニ宣旨社ニ被_レ停_ニ止彼庄々妨_レ無_レ煩令_レ引_レ網欲_レ令_レ奉_レ備_ニ日別供祭_ニ者權大納言藤原朝臣忠親宣奉_レ勅者國宜_ニ承知依_レ宣行_ニ之

元曆元年十二月廿九日

小槻宿禰判

少辨平朝臣判

下ニ近江國安曇河御厨

可_レ令_下早停_ニ止定綱知行_ニ任_ニ先例_ニ勤_中仕神役_上事

右件御厨者賀茂別雷社領也而近日依_ニ彼定綱無道_ニ知行有_レ限神役及_ニ闕怠_ニ之旨以_ニ社家之申狀_ニ自_レ院

所_レ被_レ仰_下也於_ニ自今後_ニ者早可_レ停_ニ止定綱知行武

士之妨_ニ之外者直經_ニ奏聞_ニ可_レ令_レ蒙_ニ御裁定狀_ニ如

件以下

同日

文治二年九月五日賴朝御判

同日

下ニ山城國

森本郷

水主郷

富野郷

奈木郷

壽永二年十月十日

前右兵衛佐源朝臣判

院廳下_ニ備前國在廳官人等_一

可_レ早無_ニ事煩_一令_内連_上賀茂別雷社領

山田竹原等年貢米_事

右彼庄々御米者嚴重用途也云_ニ點定之船云_ニ水手之催_ニ不_レ准_ニ他所_一早停_ニ件等之課役_一止_ニ路次之狼籍_一合期可_レ令_ニ連上之狀仰如_レ件在廳官人庄官等宜_ニ承知_一不_レ可_ニ違失_一故下

壽永二年十一月四日

主典代織部正兼皇后宮大屬大江朝臣判

判官代右衛門權佐藤原朝臣判

別當中納言兼民部卿藤原朝臣判

大藏卿高階朝臣判

參議右大辨平朝臣判

同三年四月廿四日壬辰賀茂社領四十一ヶ所任_ニ院廳御下文_一可_レ止_ニ武家狼籍_一之由有_ニ其沙汰_一云々

下_ニ諸國_一

可_レ早任_ニ院廳御下文_一停_ニ止方々狼籍_一備_進神事用途賀茂別雷社御領庄園事

近江國 舟木庄 安曇河御厨

美濃國 脛長庄

尾張國 高畠庄 玉井庄

參河國 小野田庄

遠江國 比木庄 笠名郷 落居濱

丹波國 由良庄 私市庄

攝津國 米谷庄 貞觀_ノ勅_ニ津國河部郡山本郷藤野トアリ

播磨國 安志庄 林田庄 室鹽屋御厨

美作國 倭文庄 河内庄 便補保

備前國 山田庄 竹原庄

備後國 有福庄

伯耆國 星河庄 稻積庄

出雲國 福田庄

伊豫國 菊萬庄 佐方保

周防國 伊保庄 矢嶋 柱嶋 竈戸關

和泉國 深日 宮作庄 淡輪_イ 寛正_ノ訴狀_イ

淡路國 佐野庄_イ 生穗庄

紀伊國 紀伊濱御厨

阿波國 福田庄

能登國 土田庄_{原イ} 桃浦 賀茂庄_イ 羽咋_イ

是百王之通規曾非一時之自由仍任舊跡不敢改易
加以延曆寺領八瀬横尾西村田畠等代々國宰以租
稅宛_ニ禪院之燈分_ニ令_ニ住人勤_ニ彼寺之役_ニ者久作_ニ佛
地_ニ何爲_ニ神戶哉但除_ニ社素所_ニ知之神山採_ニ葵山之外
諸山者或是寺社領末之處或又公私相傳之地自歷年
紀難_ニ輒停止_ニ且置_ニ于戶田限_ニ田造畠等者社司領主
共檢_ニ公驗_ニ租分_ニ令_ニ納_ニ於社_ニ地子可_ニ免_ニ本主_ニ此外田
地官物官舍等類自今以後悉爲_ニ神領_ニ卽以_ニ其應_ニ輸物_ニ
永充_ニ恒例祭禮神殿雜舍料上下枝屬神社神館神宮寺
等修造及臨時巨細之料_ニ矣正二位行右近衛大將藤原
朝臣宣奉勅依_ニ件分宛者_ニ宜_ニ承知依_ニ宣行_ニ之符到奉行
右少辨正五位下兼行近江守源朝臣
正五位下行左大史兼播磨權介但波朝臣

寬仁二年十一月廿五日

此時禰宜茂忠祝茂延云々

社記云寬治三年十二月廿四日相定御神膳事申上之
同太田大明神之御膳事申_ニ之云々
同四年正月廿二日被_ニ下_ニ宣旨_ニ上下社長日御膳料被_ニ
奉_ニ寄庄々等左少辨藤原爲房左大史祐俊參向上下社
奉行之各社司等之膳羞_ニ之大外記清原定俊有_ニ託宣_ニ

事云々

或記云同四年三月廿六日以參議保實卿爲賀茂社
奉幣使始_ニ自_ニ今日_ニ調_ニ進神膳_ニ被_ニ令_ニ獻_ニ於大神_ニ之
寶前社司等有_ニ託宣_ニ之由依_ニ申_ニ之也云々

同年七月十三日賀茂御祖別雷二社被_ニ奉_ニ不輸田六百
餘町_ニ爲_ニ御供田_ニ近日依_ニ有_ニ夢想_ニ被_ニ供_ニ御膳_ニ也且
是神稅不足故又分_ニ置_ニ御厨於諸國_ニ云々

同七年五月八日賀茂託宣御馬飼事等諸卿定申江記云
神託事先例或用_ニ之賀茂御供是也或不_ニ用_ニ之者伊勢
友平被_ニ止_ニ神鏡_ニ事也云々

下賀茂神主重保所

可_ニ令_ニ早且任_ニ院宣狀_ニ且依_ニ先例_ニ無_ニ相違_ニ致_ニ其
沙汰_ニ當社御領等事

右一天之下誰人不_ニ奉_ニ仰_ニ神明之驗德_ニ四海之中何所
可相_ニ背

皇化之教旨因_ニ茲往昔放免之地其數繁多而平家誇_ニ
自權_ニ蔑_ニ如皇憲_ニ之間忽以滅亡其間近日於_ニ當御神
領_ニ者任_ニ先例_ニ可_ニ令_ニ致_ニ其沙汰_ニ之由雖_ニ被_ニ下_ニ院
宣_ニ不_ニ令_ニ承引_ニ之條甚以不當也於_ニ今者早且任_ニ院宣
狀_ニ且依_ニ先例_ニ可_ニ致_ニ其沙汰_ニ之狀如_ニ件故下

門_二諸卿列立左右大將進立_{左大將}先_{波階前}是左次將率_二御

與長等_二渡_二階前_二大將立定畢寄_二御與_二母后同興出

從_二西門_二經_二大宮一條大路并出雲道等_二午刻着_二給下

御社_二神祇官奉_二御麻_二有_二御祓事_二上下兩社御奉幣神

寶神馬舞樂以下如_レ例仍畧_レ之宣命

天皇我詔旨止掛畏岐賀茂皇太神乃廣前爾恐見_美恐毛賜

倍申久年來乃間令_二祈願_二給倍留事在利然毛驗久冥助相

通天其驗照然利恐由_二報賽_{世志}給_止所念行奈_奈故是以

吉日良辰選定天金銀乃御幣仁錦蓋飭劔平劔唐組之平

緒御弓御矢御梓御鏡并種々神寶音樂走馬東遊等遠相

並天唱進利行幸給布又前年爾愛宕郡一郡_{奈加}可_レ奉

寄之由遠令_二祈申_二給倍利而件郡內爾所在_{呂或帝王城}

都或明神領地是萬代相傳之處奈利曾非_二一人自由之

地_一爾仍南者皇城乃北乃大路乃同末遠限天東波郡界爾至

末天西波大宮乃東大路乃同末乎限天北波郡界仁至末天奉

寄給但此內爾有_二凌室藏氷之邑_一利是又百王之職事_奈

婆難_レ致_二一時改易_一之縱在_二神郡內_一止毛可_レ除_二此_一

邑_二之抑上下乃御社仁件郡乎平均仁奉_二分給倍之然而毛

田圃鄉邑乃數須忽以難_レ決之追以_二後日_一天各可_レ奉_二界

之皇太神此狀遠平久安久聞食天彌垂_二感應_二禮天天皇朝

廷乎寶位無_レ動久堅磐常磐仁夜守日守仁護幸倍奉給比

四海清平仁萬民安樂仁_天水旱飢疫乃難遠未兆仁拂退介

農圃蠶養之業連每年爾豐仁登_良之唐堯仁同_二德之漢文仁

比_レ名天叙慮乃冠念爾無_レ違久必然爾護惠奉給倍止恐見

恐_美申賜波久申

辭別天申賜_止波久申皇太后毛同久共仁參給倍利冥助不_レ空

須感應暗至天后闈之月長明爾母儀之風彌芳_之萬歲千秋

末天夜守日守爾護幸倍奉給_倍止恐見_見恐毛申賜_{波久}申

寬仁元年十一月

太政官符 民部省

應_レ以_二山城國愛宕郡捌箇鄉_一奉_レ寄_二賀茂大神宮_一事

四至_{東限延曆寺四至南限皇城北大路同末西限大宮東大路同末北限郡界}

御祖社肆箇鄉

蓼倉鄉 栗野鄉 上栗野鄉 出雲鄉

別雷社肆箇鄉

賀茂鄉 小野鄉 錦部鄉 大野鄉

右亥年十一月廿五日行_二幸彼社_一以_二件八鄉_一被_レ奉_レ寄

畢今商_二量便宜_一平_二均田圃_一所_レ定如_レ件

抑諸鄉所在神寺所領及齋王月料勅旨混沌_{ミツマユク}池埴川氷室篠

丁陵戶等田并左近衛府馬場修理職瓦屋其守丁使人皆

神領官符并代々手次證文等

聖武天皇天平二年十二月十四日奉_レ宛_二御戶代田壹町_一御戶代會神事始_二於此時_一云々次年中神事用途乏少之由依_レ申請_二加_三増_一一町云々

嵯峨天皇承和十一年十一月壬子鴨上下太神宮禰宜外從五位下賀茂縣主廣友等依_二申請_一被_レ下_二官符_一其符云

太政官

應_レ禁_二制汚穢鴨上下太神宮邊河上事_一

右得_二彼神宮禰宜外從五位下賀茂縣主廣友等解_一鴨川之流經_二神宮_一但欲_二清潔_一之豈敢汚穢而遊獵之徒就_二屠割事_一濫穢_二上流_一經_二融神社_一因_レ茲汚穢之祟屢出_二御卜_一雖_レ加_二禁制_一曾不_二忌避_一仍申送者大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣奉勅神明攸_レ祟不_レ可_レ不慎宜_二仰_一當國_二俾_上禁_二斷之_一若違_レ制犯者禁_二其身_一申上容隱不_レ申國郡司并禰宜祝等必處_二重科_一不_二會寬宥_一

承和十一年十一月四日

此官符被_レ下之以後社家并當國郡司等當_二川上北山村々里々令_一觸穢_二澗水流出之所_一加_二禁止之下知_一故

北芹生峠其邊靜原小野鄉等取_二奔牛馬猪鹿之死骨_一堅無_二葬_一埋人死骸_二之舊式_一不_二違犯_一而持_二越山頂水流之外地_一至_二今相守者_一也

太政官

應_レ令_二神戶百姓護_一鴨上下大神宮邊川原並野上事

四至

御祖社

東限_二寺田_一南限_二故參議左近衛大將大中臣朝臣諸魚宅地路末_一西限_二百姓宅并公田_一北限_二槐村下里南畔寺田_一東限_二路并百姓宅地_一南限_二道并百姓宅地_一公田_二西限_一鴨川_二北限_一梅原山_一

別雷社

右得_二山城國解_一併依_二太政官去十一月四日符_一仰_二愛宕郡司_一令_二禁_一護件社邊河_二而郡司解僭郡中條丁數少

無人_二差充_一望請以_レ在此郡_二神戶百姓_一分番令_二禁守_一若致_二汚穢_一永出_二神戶_一以_二公戶民_一相替補入者國加_二覆審_一取_レ陳有_二實謹請_一官裁_二者左大臣宣依_一請

承和十一年十二月廿日

清和天皇貞觀六年三月十四日以_二太皇太后宮職勅旨_一田攝津國河邊郡山本鄉巖野肆拾五町九段七十步被_二寄_一進于賀茂社_二米谷庄是也又_一

後一條院御宇被_レ寄_二山城國愛宕郡於賀茂上下神領_一事或記云寬仁元年十一月廿五日己未今日幸_二賀茂_一時

刻已_二出_一御南殿_二吉平朝臣奉_一反問_二御輿持_一立西中

本社 拾五石

神主

同 拾三石

正禰宜

同 拾三石

正祝

同 拾貳石

權禰宜

同 拾貳石

權祝

片岡社 拾貳石

禰宜

同 拾貳石

祝

貴布禰社 拾貳石

禰宜

同 拾貳石

祝

新宮社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

太田社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

若宮社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

奈良社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

澤田社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

氏神社 拾石

禰宜

同 拾石 祝

右合貳百參拾三石

高八石七斗三升貳合餘

梅辻備後

高八石七斗三升貳合餘

富野宮内

合拾七石四斗六升五合餘

都合貳百五十石四斗六升五合餘

以上

一社職料社家中以ニ相談ニ定免相年々等分可ニ收納ニ事

一社職料賣買之儀者不_レ及_レ言不_レ可_レ入_ニ質券_ニ事

一雖_レ爲_ニ親子兄弟_ニ向後以_ニ家領_ニ而別家江不_レ可_ニ分

散事

右之旨今度相定訖堅相_ニ守此旨_ニ不_レ可_ニ違背_ニ者也

寛文四_{甲辰}年六月廿一日

甲斐御印

河内同

大和同

美濃同

豐後同

城州賀茂

社家中

家中相談之上以相應之人一如先規一傳奏江致言上可任之事

一神前勤番之札如先例證文一社司之子共最初可書裁之事

一年中神事可爲如三有來一但斷絶之祭禮唯今爲三分興行於可相叶一者社家中以三相談一可取立之事

一貴布禰田之儀氏人押領之由社司雖申之氏人配分之證文有之上者可爲如三有來一但斷絶之祭禮唯今興行於可相叶一者社家中以三相談一可取立之事

一神山有之木於爲神用一者社家中以三相談一可伐之爲私一切不可伐取之但下刈者社司氏人共可刈之事

一每年葵進上之節向後者社司氏人自双方一人宛可致參上事

一賀茂中之儀向後者社司氏人從双方相定月行事萬事沙汰可仕事

一社家中專三神道一不存邪曲萬事守先例一不可企三新儀一事

右條々今度依三社司氏人相論一裁許了堅相守此旨

永不違犯者也

寛文四甲辰六月廿二日

甲斐御印

河内同

大和同

美濃同

豐後同

城州賀茂

社家中

覺

一氏人中惣納五十八石四斗八合六勺

是者累年氏人雖支配之往來田貴布禰田家領等有之候間今度取除候事

一社僧中惣納九十五石壹斗壹升七合

是者累年社僧雖支配之供田寺領等有之候條今度取除之候事

一柳芳軒海藏院竹林庵祖芳院四々寺領合九十六石九斗四升壹勺

是者社僧職無之而社領之内取來候間今度取放候事

右三合貳百五拾石四斗六升五合七勺

今度社職料新附之并社司之内家領無之兩方江配附之畢可存三其旨一委細目錄如左

社職料之覺

後山_一如_二先々_一自_二賀茂_一支配可_レ仕但貴布禰之神社於_レ有_二所用_一者社家中以_二相談_一可_レ伐_レ之爲_二私用_一一切不_レ可_レ伐_レ之山之物成於_レ有_レ之者右之社神用可_レ仕事

一從_二奧社之後山_一至_二芹生峠_一如_二有來_一賀茂江役米役錢を出_レ貴布禰之者支配可_レ仕但屋作用木等伐候時者賀茂江相斷可_レ受_二差圖_一事

一貴布禰之者共近年從_二吉田_一補任狀取之烏帽子狩衣著之儀不屈候自今以後停止之事

付貴布禰之者十人向後立烏帽子布之黃衣免許之但以_二賀茂小司_一相達神主出_二許狀_一之後可_レ著_レ之事

一貴布禰之者共相_二背先例_一依_レ不_レ隨_二賀茂_一先年賀茂社家中より板倉周防守江訴之處貴布禰之者共不屈令_二落着_一急及_二籠舍_一候畢然處近年違_二背先裁許_一之條其科不_レ輕候間亦令_二籠舍_一候事

右條々今度依_二賀茂貴布禰相訴_一糺明之上令_二裁許_一畢永可_レ守_二此旨_一若於_二違犯_一者可_レ爲_二曲事_一者也

寬文四年六月四日

甲斐御在判

河内同

大和同

賀茂御裁許狀之寫

賀茂社家中

豐後同

美濃同

覺

一御造營訴訟之儀社司江無_二相談_一氏人罷出候儀不屈候向後社司氏人以_二相談_一一同可_レ申上候事

一神事祭禮修理等入用之儀社司中古來雖_レ不_レ勤之向後者一同役儀可_レ勤仕事

一恒例御祈禱之儀可_レ爲_レ如_二有來_一但於_二森所_一正五九月御祈禱之節者自分可_レ相勤候事

一社一同臨時御祈禱之節卷數御被_二一社一同調之神主持參可_レ指上_一之事

一御朱印被_二成下_一候宛所社家中と有_レ之儀總而神社奉仕之輩上下共可_レ爲_二社家_一之條御朱印之儀社司氏人致_二相封_一御藏可_レ納置候事

一本社神主正禰宜祝權禰宜權祝并片岡貴布禰兩社之禰宜祝者相傳之社司松下森鳥居大路林梅辻富野并今度岡本宮内相加之以_二七家_一可_レ勤之新宮太田若宮奈良澤田氏神六社之禰宜祝者氏人十六流之内社

矢刀禰一人黃衣

供御所一人

小目代一人黃衣

小預一人

松行事二人

土器師深草石見五郎
樣器以上八人

神夫一人

大炊一人

山代一人

出納三人

五鄉圖師五人

六鄉小使六人

御馬先生一人

湯屋翁士二人

鍛冶二人

番匠四人長五人

槍物師一人

木守二人

觸使二人

神前所々下番四人

賀茂聖神寺看坊一人

貴布禰社每日參詣一人賀茂
社家也

貴布禰端社神子一人自賀茂
置之

同不動堂看坊一人

同奧社護摩堂看坊一人

同奧端下番二谷之者
共勤之

賀茂供僧廿一人

此外非衆但供入之時以神主補
任令初入之社例也

同中方三綱三人

承仕三人

專當四人

右貴布禰谷之在家人者六十餘人中自賀茂一奉

獻之神供辛櫃昇運之常々神庭掃除下番并小破之

御修理自賀茂勤之時夫役等勤之外於神役者從

昔勤之事無御座候然近年驕輩斷而不隨賀茂

下知故寛文四年忝被遂御裁斷双方以同御文
言御裁許狀被成下末社之舊法相立賀茂社家中
難有忝奉存御事御座候
其御裁許狀之御文言

覺

一貴布禰者從往古爲賀茂之攝社之由舊記相見

其上賀茂之社人致所持候證文歷然候上者彌如

先規可受賀茂之支配事

一貴布禰年中神事祭禮神供修理等從賀茂勤來之由

無紛候條彌可爲其通事

一從賀茂相勤神事祭禮之外貴布禰之者爲私不可

備神供事

一貴布禰社散錢幣物等從賀茂支配可仕事

一札牛王從賀茂沙汰之外貴布禰之者爲私不可

調出事

一從賀茂參向神事執行之時貴布禰之者共如先規

役儀等可勤之事

一貴布禰之神殿拜殿並從賀茂之番所江谷之者無

免許而不可濫昇事

一貴布禰谷山之儀南者限梶取明神北者限奧御前

右廿一宮之社司皆以勅宣を蒙り昔より次第轉任の社法にて最末氏神の社職には氏人より新輔せられ候將又社職領の田地も其社職に付て其職になり候へば其人所務いたし神役勤例候大方他國にて寄せられたる神領は社司の預り所納仕たると社記にみえて候然に諸國の社領落行候より社職をかけて神役勤儀難堪候へば年久しく末社の社司は闕職に成行候故代官と號して年ごとに五人づゝ氏人替り神前の役儀勤來りて候然に御當代寛文四年に社司氏人申分和睦仰付させられ忝も金八百五十兩拜領仕り社領の中に買得田有之候を買もどし社職料に被_レ付下_一并社中の諸職社司氏人評議をいたし双方立會月奉行を相定て平均に可_二相守_一之旨御裁許狀をなし被_レ下_一社一同ありがたき御再興と忝奉_レ悅萬歲を唱申御事候

氏人百四十人

社職に未_レ補候賀茂氏社司の子以下皆氏人と稱し候也

右百四十人之氏人者年齡次第往來田を帶し神事祭禮の神役等社司に相次て勤來り神前の結番晝夜怠懈なく勤申候此外幼年の社司の子以下無足の氏人數番御座候此氏人いづれも位階五位より四品になし被_レ下候當社祠官も氏人も或は京官八省の内或は受領等を

兼官拜任し來例口宣等社記に分明に御座候或御記に賀茂日吉の社家は諸大夫の一例とみえて候

諸役人

代官五人

忌子氏女二人

御服女郎同五人

贊殿別當一人

雅樂役一人

大宮郷司一人

中村郷司一人

田所奉行五人

目代一人

御服所一人

落田奉行一人

山奉行一人

山守五人

陰陽寮一人

以上社役今氏人中兼役也

伶人樂頭二人外七人

下役人下役人

口膳部一人青侍
下役人ナリ以下同
神人四十二人黄衣

精進頭五人

神子同八人

御妹女郎同一人

御前頭一人

河上郷司一人

小山郷司一人

岡本郷司一人

侍所々司一人

棚所一人

御馬別當一人

作所奉行一人

河奉行一人

收納奉行二人

河口繪師一人

平可_レ任_二民部大輔_一可_レ令_二宣下_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

五月三日

藏人左少辨殿

從五位下賀茂重秋宜_レ爲_二賀茂別雷社權祝_一從五位下賀茂重益宜_レ爲_二澤田社祝_一以上可_レ令_二宣下_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

六月二日

藏人左少辨殿

從五位上賀茂社權祝宜_レ轉_レ祝從五位下賀茂重賢宜_レ爲_二澤田社祝_一已上可_レ令_二宣下_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

六月十二日

藏人左少辨殿

此時節已後本社五宮之内大概無_二闕事_一云々末社之禰宜者隨_二時片岡貴布禰兩社_一一職宛有無之事不定也但位階事者社司氏人申來候神主職者三位如_二先例_一也逐一不_レ能_二注進_一候

當時社司二十一人

本社 神主從四位下岡本宮内少輔保可

禰宜從五位下松下民部大輔順久
祝 從四位下林 主馬首 重豐

權禰宜從四位上森右京權大夫維久

權祝從四位下大池大藏少輔重榮

片岡社 禰宜從五位下鳥居大路大膳大夫順平

祝 從四位下梅辻 主計 職久

貴布禰社禰宜從四位下富野左京大夫就久

祝 從五位下岡本新吉保喬

新宮社 禰宜從五位上藤木但馬守宣直

祝 正五位下藤木兵部少輔和久

太田社 禰宜從四位下西池備中守季周

祝 從四位下芝式部少輔清雄

若宮社 禰宜從四位下西池左兵衛尉氏德

祝 正五位下山本左京亮季村

奈良社 禰宜從四位下南大路大膳亮英顯

祝 從四位下梅陰大炊頭氏持

澤田社 禰宜正五位下山本三河守兼益

祝 正五位下岡本民部權大夫保家

氏神社 禰宜從五位上藤木主計允朝顯

祝 正五位下藤木刑部大輔佐直

貴布禰競馬會神事依ニ無足ニ辭ニ申當職ニ事已無ニ餘日ニ
時候間可レ爲ニ如何様ニ候哉爲ニ一社ニ可レ被レ致ニ無爲之
沙汰ニ之由可レ申旨候恐々謹言

五月十三日

親繼

賀茂神主殿

氏人中同可レ被ニ仰遣ニ候由也

正四位上賀茂貞久縣主宜レ任ニ左京大夫ニ可レ令ニ宣下ニ
給上之由被ニ仰下ニ候也謹言

五月廿三日

藏人辨殿

正四位下賀茂繼平宜レ叙ニ正四位上ニ可レ令ニ宣下ニ給上
之由被ニ仰下ニ候也謹言

十二月廿五日

親繼

藏人左少辨殿

氏人

鴨長久三河守

同長興美作守

賀茂成顯豐後守

可レ被レ遊レ遣ニ口宣案ニ候也

從五位下賀茂諸久可レ爲ニ新宮禰宜ニ可レ令ニ宣下ニ給上

之由被ニ仰下ニ候也

長享二年六月廿一日

藏人左少辨殿

正四位上賀茂貞久縣主宜レ叙ニ從三位ニ可レ令ニ宣下ニ
給上之由被ニ仰下ニ候也謹言

十二月十九日

藏人左少辨殿

正四位下賀茂棟久縣主宜レ叙ニ從三位ニ可レ令ニ宣下ニ
給上之由被ニ仰下ニ候也謹言

十二月十九日

藏人左少辨殿

此棟久は三位氏久神主の後胤にて後鳥羽法皇の尊影御宸筆など相傳
へけるを讓狀に永代つたへよと書て奥に一首よみおける歌
かくてよも絶はてしと頼む哉

君かゆかりの宿のしるしに

正四位上賀茂繼平縣主宜レ叙ニ從三位ニ可レ令ニ宣下ニ
給上之由被ニ宣下ニ候也謹言

同三年三月朔日

藏人左少辨殿

從五位下賀茂保平宜レ叙ニ從五位上ニ從五位上賀茂保

文明十二年賀茂權祝重則縣主可_レ被_レ止官職候可_レ令_二下知_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

九月十七日

親長

藏人辨殿

同十三年二月廿五日從四位下諸平縣主可_レ爲賀茂神

主_二之宣下也_一此諸平者明應之歌令之時被_レ入_二人數_一

賀茂社務職事及_二闕如_一者可_レ存知候由可_レ被_レ仰_二付繼平縣主_一之由被_二仰下_一候也謹言

十月廿四日

藏人辨殿

當社々務職事就_二辭退之儀_一被_レ仰_二正禰宜_一處是又堅辭申候猶重被_二仰出_一者可_レ辭_{當イ}官職_二之由申候間繼平禰宜可_レ還補_一之由被_二仰出_一候處是又猶雖_レ申_二故障之趣_一堅被_二仰下_一候就_二其神事_一已無餘日_二之上者可_レ被_レ致_二無爲之沙汰_一之由被_二仰出_一候旨也恐々謹言

十月廿七日

親繼判

賀茂一社御中

從四位上賀茂繼平縣主如_レ舊宜爲賀茂別雷社神主旨可_レ令_二宣下_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

十月廿七日

藏人辨殿

治部少輔重秋權祝事可_レ存知_二之由被_二仰出_一候處堅故障申候間就_二其先爲_一其代_二年始以下神事不_レ闕怠_一之樣可_レ存知_二之由被_二仰付_一了其旨可_レ令_二存知_一給_上之由可_レ申旨候恐々謹言

十二月廿五日

親長

賀茂神主殿

就_二權祝職闕_一可_レ拜_二重秋_一之由雖_レ被_二仰付_一難澁之由堅歎申候間被_二指置_一候處往來田下地可_レ勘落_二云々何樣之子細候哉以外之次第候不_レ可_レ致_二疎骨之沙汰_一之樣堅被_二仰出_一候旨可_レ申旨候恐々謹言

二月四日

親繼判

賀茂神主殿

貴布禰兩官申就_二計會_一辭_二退當職_一云々神事已遲々之處可_レ闕_二御祈禱_一之條右以不_レ可_レ然就_二中被_レ宛_二由良庄公用_一之處代官難澁云々年貢令_二無沙汰_一者彌久縣主以_二他足_一可_レ致_二其沙汰_一歟一社一同加_二談合_一云_二神事_一云_二御祈禱_一不_二御事闕_一樣可_レ被_レ致_二其沙汰_一之由可_レ申旨候恐々謹言

三月廿七日

親繼

らる此神主歌人也集に入事おほし新後撰集に述懐の心を

神山にその名をかけよ二葉章

三のくらゐのあとをたつねて

とよめるを入られる

或記云文明八年十二月廿四日正四位下賀茂繼平縣主宣_レ爲_二賀茂別雷社權禰宜_一正五位下賀茂重則如_レ元宜_レ爲_二同社權祝_一從四位上賀茂棟久縣主宜_レ爲_二片岡社禰宜_一從五位下賀茂諸平宜_レ爲_二同社祝_一從五位下賀茂諸久宜_レ爲_二貴布禰々宜_一以上可_レ令_二宣_一下_一給_上之由仰所候也謹言

十二月廿四日

藏人辨殿

文明十年四月四日賀茂社務職事貞久縣主可_二存知_一候由難_レ及_二再往之御問答_一諸神事領等就_二違亂_一堅歎申間未_レ定候然者今日氏神祭神事先爲_二一社加_二談合_一社司氏人等可_レ致_二無爲沙汰_一之由可_レ被_二下知_一之由被_二仰下_一候也謹言

四月四日

藏人辨殿

親長

賀茂別雷社權禰宜賀茂繼平縣主宣_レ轉_二任禰宜_一祠官等次第轉任事任_レ例可_二存知_一候由可_レ令_二下知_一候由被_二仰下_一候也謹言

四月七日

藏人辨殿

當社々官次第轉任事任_レ例可_レ被_二存知_一之由可_レ申候恐々謹言

四月十三日

賀茂神主殿

文明十二年二月廿九日記云

當社々務職事辭退候間被_レ仰_二正禰宜諸平縣主_一之處是又俄事難_レ叶_二之由堅歎申候此上一社一同加_二評議_一可_レ致_二無爲之沙汰_一候歟不_レ然者被_レ略_二神事_一歟各可_レ被_二存知_一候由被_二仰出_一候旨可_二申分_一候也恐々謹言

二月廿九日

親繼判

賀茂一社御中

正四位下賀茂夏久縣主如_レ舊宜_レ爲_二賀茂別雷社神主_一可_レ令_二宣_一下_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

八月廿四日

藏人辨殿

親長判

正五位下賀茂縣主遠久

可_レ爲_ニ貴布禰々宜_一

從五位上賀茂縣主景久

可_レ爲_ニ同祝_一

從五位上賀茂縣主能秀

可_レ爲_ニ太田禰宜_一

從五位下賀茂縣主久忠

可_レ爲_ニ同祝_一

從五位下賀茂縣主久道

可_レ爲_ニ若宮禰宜_一

從五位下賀茂縣主久宗

可_レ爲_ニ同祝_一

從五位下賀茂縣主康基

可_レ爲_ニ奈良禰宜_一

從六位上賀茂縣主忠久

可_レ爲_ニ同祝_一

藏人頭左京大夫平信輔奉

獻上

宣旨

賀茂社司轉任事

右宣旨獻上如_レ件

十二月二十一日

左京大夫信輔奉

久世神主者氏久之男也歌人多被_レ入_ニ勅撰之集和歌之中詠_ニ社頭花_一歌

神垣に咲そふ花をみてもまつ

風をさまれと世を祈るかな

同年十二月廿四日

宣旨

從五位下賀茂保光

宜_レ爲_ニ澤田禰宜_一

職事同前奉

獻上

宣旨

從五位下賀茂保光可_レ爲_ニ澤田禰宜_一事

右宣旨可_下令_下知_上給_上之狀如_レ件

十二月廿四日

職事同前奉

謹上 土御門中納言殿

同年十月十一日神主氏久從三位に叙せらる

是諸社の祠官上階のはじめ也云々此氏久歌人也集

に入たる歌多し

伏見院御宇正應六年二月廿二日井關經久神主に補せ

可レ轉ニ貴布禰々宣

從五位上賀茂縣主能季

可レ轉ニ貴布禰祝

從五位上賀茂縣主延平

可レ轉ニ太田禰宣

從五位上賀茂縣主遠久

可レ轉ニ太田祝

從五位下賀茂縣主主平

可レ轉ニ若宮禰宣

從五位下賀茂縣主景久

可レ轉ニ若宮祝

從五位下賀茂縣主久幸

可レ轉ニ奈良禰宣

從五位下賀茂縣主能兼

可レ轉ニ奈良祝

從五位下賀茂縣主久忠

可レ任ニ澤田禰宣爲字常事歟
任字不可然

後宇多院御宇弘安九年三月前神主氏久神主再任其宣

旨云

或記云

弘安九年三月十六日

宣旨

正四位上賀茂縣主氏久

如レ舊宣爲ニ賀茂別雷社神主

藏人頭治部卿平信輔奉

弘安九年六月十五日

宣旨

賀茂澤田社祝從五位下賀茂縣主重夏

可レ轉ニ別雷社權祝

從五位下賀茂縣主種久

可レ爲ニ澤田社祝

藏人頭右同人奉

弘安九年十二月廿一日

宣旨

正四位下賀茂縣主久世

可レ爲ニ賀茂別雷社神主

從四位上賀茂縣主久政

可レ爲ニ同禰宣

從五位上賀茂縣主經久

可レ爲ニ同權禰宣

正五位下賀茂縣主能季

可レ爲ニ片岡禰宣

正五位下賀茂縣主延平

可レ爲ニ同祝

興ある事ども有けり宮の女房内の女房いひかはしつゝ
ゝやさしき事どもおほく侍けり後朝に大納言宮の御
方の按察殿のもとへ

この春はけにふることぞ思出る

かはらぬ宿の雪をなかつて
昔みし庭の雪とは思はねと

たかためならぬ宿ぞ戀しき

白雪のふれはかひある世なれとも

昔よいかに忘れわひぬる

堀河殿いそのかみふりにし事を返事に

萬代も雪つもるへき雲の上に

たゝ思やれ秋の宮人

紅のうすやうにかきておなじ色のうすやうにてたて
ぶみして所の衆をつかひにて中宮の按察殿の局にさ
しおかせけるとぞ

後堀河院の御時嘉祿元年八月十九日に季保若宮禰宜
になさる後に片岡禰宜になり歌人にて御歌合にも秀
歌奉し故に禰宜になし給りぬといへり後土御門内大
臣のいまだ中納言なりし時賀茂社に參詣ありけるつ
いでに榊枝を折て歌講せられける後程へて賀茂季保

がもとによみておくり給し
ちはやふる神にたのみをかけ置し
榊の枝の折ぞわすれぬ

賀茂季保

返し
神垣にいのり置てし榊葉の

ときはかきはゝかけなひくまで

と續拾遺集に入られける此外神主禰宜貴布禰片岡
以下の社職の人々あまたもらしつ

龜山院御宇文永九年十月一日或記云賀茂社司事有

其沙汰一頭中將奉行也即於陣宣下藤中納言着二仗座

予同可ニ存知一之由職事相觸之間候ニ床子一頭中將出

陣宣下中略正五位下賀茂縣主某可爲ニ其社禰宜一仰

之後被レ下ニ折紙一書宿紙社司次第轉任也聊披見之微唯

懷中退又於ニ床子召ニ六位史盛廣先仰ニ第一之轉任之

仁^{如^上卿}仰詞之後下ニ折紙一上卿起座

正五位下賀茂縣主久世

可レ轉ニ片岡禰宜

正五位下賀茂縣主久政

可レ轉ニ片岡祝

正五位下賀茂縣主能重

時は御代々參候いたしあげ鞠露はらひをば先賀茂人
うけ給る事也依レ之御鞠會に飛鳥井難波御子左賀茂
人と舊記どもに有と云々

二條院御宇應保二年閏二月廿一日に政平太田社禰宜
より片岡祝になりて年ふるまゝによみける歌千載集
の神祇部に入られる

さりとともたのみそかくるゆふたすき

わかかた岡の神とおもへは

とよめりければ神の感じおぼしけるにや其後程なく
禰宜になりけるとなん此事千載集の詞書にみえた
りこの人も代々の集に入ける也

高倉院御宇治承元年九月廿八日藤本禰宜重保權禰宜
より神主に補らる歌人にて代々の勅撰に入たる也賀
茂社歌合とて人々すゝめて左右の歌人數多よめる其
内に源三位頼政平忠度など神前に參向あり俊成卿判
者にて勝負をわかち給へるに重保神主がうたに

すへらきの願を空にみて給へ

わけいかつちの神ならば神

とよめりしが勝に定まる後に千載集にぞ入られる
又元暦の比後番の歌合人々にすゝめし時 定家卿

忍へとやしらぬ昔の秋をへて

おなじかたみにのこる月影

とよみ給へるは秀歌にて人の口にある詠なり云々又
月詣集と名づけて十二月に部をわかつて集をえらび
ける人也

順德院御宇或記云承元五年閏正月二日のあした目も
おどろくばかり雪ふりつもりけるに九條大納言參内
せられて此雪は御覽すやとて人々いざなひて車よせ
に車さしよせて別當の三位かうのすけ以下内侍だち
引ぐしてやり出されけり中宮は后町よりいまだいら
せおはしまさねば中御門殿へやりよせて宮の女房一
車やりつゝけて大内右近馬場賀茂のかたざまへあく
がれゆかれけり大納言直衣にて騎馬せられたりけり
さらぬ人々も或は直衣或は束帶にて六位までもな
ひたりけり賀茂神主幸平狩装束して車のともにまい
れりむかしはかゝる雪には馬に鞍置まうけてこそ侍
しに今はかやうの事たえて侍つるにめづらしくやさ
しく候ものかなとてわかき氏人どもおなじく狩装束
して各鷹手にすゑてかんだちめのかたへ御供つかう
まつりて雪の中の鷹狩して御覽せさす道すがらいと

と號すと云々其後萬壽四年に安賴長曆元年に親經後冷泉院御宇永承二年五月十三日賀茂成眞を賀茂神主になさる是神主と號する初例なり云々

同御宇永承六年十二月十九日に成助權禰宜より神主に補す大池神主と號せり歌人にて代々の撰集に入られし歌多し其中に金葉集に入れる詞書に

賀茂成助に初てあひて物申けるついでにかは
らけとりてよめる
津守國基

きゝわたるみたらし川の水清み

底の心を今そみるへき

返し

住吉のまつかひありてけふよりは

成助

なにはのこともしらすはかりそ

とあり此事社記にいへるは住吉神主國基日比より神道の事歌道など望しにかつゝ傳はれる比かくよみておこせたりと云々此次の神主山本神主成經永保二年に補任す堀河院御宇寛治五年に安成正禰宜に補任せらる同寛治五年に重助禰宜になさる同年六月廿二日に成繼神主此時同七年に當社にて競馬はじまれり天仁二年十一月十九日に重助神主たり同時に從四位

下に拜叙しけり是則四品の初例たるべし次に成家權禰宜より保安二年三月三日補任せらる崇徳院御宇天承二年四月三日山本神主成平補任せられぬ鞠足無双なりし人也此次に成重保延二年四月十三日に貴布禰禰宜より神主に成重繼片岡禰宜より久安元年に神主になさる仁平二年十二月廿九日に貴布禰禰宜より保久神主に補任せらる同二年に重忠舍兄三人を超て神主になさる次に高倉院御宇に山本禰宜家平神主に勅許なりぬ此家平が館へ後白河院保元四年四月に賀茂社御幸なりし時人々鞠このみあひて雲わけみんとて度々行むかひいみじき由を申あはれければ聞しめしわたりて御覽あるに御供には按察使資賢大納言兼雅公卿殿上人あまた參り候じて叡覽ありけり雲分といふは昔の名也山本神主成平がもとにありけりと云々又安元御賀の時三位賴輔賀茂神主家平が家に行向て御賀の上鞠仕べき由勅定あり其間の子細訓説をかうぶるべしと云れければ家平云鞠は仕候へども御賀の鞠つかうまつる事家に候はねば故實申がたく候但常の老耄の人のあげまりの體にこそ候はめと申けり如此賀茂人蹴鞠堪能の輩おほくてうへの御まりある

社家 官位 諸司

舊事紀云神皇產靈尊兒天乃神玉命葛野鴨縣主等祖也
云々本朝月令云賀茂建角身命丹波神伊可古夜日賣を
娶りて玉依日賣玉依日子をうめり此玉依日子の神賀
茂縣主等が遠祖也云々

又新撰姓氏錄には賀茂縣主は神魂命孫建角身命孫也
と云々或書云神龜年中迦毛之字作賀茂也云々光仁天皇の御宇寶龜十一年四
月に山城國愛宕郡の人正六位上鴨禰宜眞髮部津守十
一人に賀茂縣主の姓を給ふとみえたり

桓武天皇の天應元年四月戊申の日賀茂神二社の禰宜
祝等始めて笏を把事を免せらるゝ由見えたり平城天
皇の御宇大同四年十一月戊戌の日外從五位下賀茂縣
主眞襲に従五位上を授らると云々古書には賀茂字と
鴨字を上下の社に通じて出せり新考後世上下社各別に書
來れり嵯峨天皇弘仁二年賀茂男床賀茂大神宮禰宜た
り此男床よりこなた社家の系譜歴名など明かに今に
傳り來れり悉是をあらはす能はずあらまし勅宣有し
社記の趣どもをかつゝ注進つかうまつり候
淳和天皇御宇天長元年四月甲午日祝部枚麻呂を以て
正一位勳一等鴨別雷大神の祝に補せらると云々又承

和仁壽貞觀にいたりて賀茂大神の禰宜賀茂縣主廣友
益雄門麿等外從五位下に叙らる

光孝天皇仁和二年賀茂縣主貞基をして別雷大神の禰
宜に補らる醍醐天皇御宇延喜十一年に忠實朱雀院御
宇天慶五年に在樹同六年六月廿六日に忠主權祝たる
を正禰宜に轉任せらる此後村上天皇天曆九年に在實
此在實禰宜の時社頭鳥居のほとりにて往古の錢七百
八十二文掘出し公家に奉る其錢の文和銅開珍萬年通
寶神開寶と三の文あり神祇陰陽寮をして是をうらな
はしめらる通用すべきやいなやの事又諸道の博士に
仰て勘へしめらると云々

同天皇天德二年六月五日に忠成禰宜に補らる圓融院
御宇天延二年に貴布禰々宜より忠賴當御神の禰宜に
轉補せらる歌人にて金葉集に入たり其詞書に和泉式
部が賀茂へまいりたりけるにわらうづにあしをくは
れて紙をまきたりけるをみて賀茂忠賴
ちはやふるかみをはあしにまくものか
と申かけけるに和泉式部かくぞつゝけゝる
これをそしものやしろとはいふ
一條院御宇寛弘七年に茂忠を禰宜になさる岡本禰宜

私市社 斷絶

日吉社 二尺三寸 高欄

舍屋方

祝詞屋 長五間 幅一間

同渡殿 四間半

同渡殿 六間半

御籍屋 八間半

忌子屋 三間

高倉 二間

直會所 五間

樓門 三間半

中門 一丈

日門 八尺八寸

西門 八尺八寸

細殿 五間 高欄

土屋 二間

御所屋 三間

同庫 三間

酒殿 七間

神馬屋 二間

林田社 二尺三寸五分 二尺一寸

鈴一社 四尺 三寸六寸 高欄

禰宜方御供所 五間

祝方御供所 五間

透廊 七間

幣殿 三間 (高欄) 4

神寶庫 三間

樂屋 二間

預部屋 三間 (但樂高欄) 4

廻廊 一八間

平重門 七尺

唐門 一丈五尺 (一本作一丈五寸)

裏門 八尺

橋殿 六間 (舞殿也) 4

樂所 三間

廳屋 十三間

贅殿 五間

廊下 八間

湯屋 五間

御物井 二間 四方

參籠屋 二間

一鳥居 一丈七尺付 非垣五十六尺本

奈良鳥居 一丈三尺 本

同下番所 二間

同下番所 二間半

板壁 二ヶ所

同食堂 七間半

聖神寺 五間 (緣高欄) 4

同門 八尺五寸

同看坊屋 五間

貴布禰舍屋

巫女屋 三間半 四方

同看坊屋 三間

同地藏堂 三間 (高欄) 4

同一鳥居 一丈五尺

與鳥居 一丈五尺 各井垣有之

橋 二ヶ所

下番所 一間 一端同

晬倉 二間

下番所 二間

二鳥居 一丈七尺付 非垣五十七尺本

太田鳥居 一丈三尺付 非垣十八尺本 (本二十一)

氏神鳥居 一丈五尺付 非垣十八尺本

橋十一ヶ所 内石橋三

御讀經所 五間 (緣高欄) 4

小經所 四間 (高欄) 4

同看坊屋 三間

神宮寺 五間 (高欄) 4

鐘樓 一間半 四方

同不動堂 三間 四方高欄

同與參籠屋 三間半

同門 三ヶ所

二鳥居 一丈六尺

結神鳥居 九尺

板壁

凡當社御造營者每度木造始立柱上棟遷宮等事依古
來之例有日時定之陣儀一宣旨使遷宮當日者公卿諸
司參向并有宣命奉幣等也

別雷皇太神宮

神殿八社末社次第

本宮表一丈九尺五寸
脇一丈三尺

權殿同
上

正一位

片岡大明神表九尺四寸五分
脇七尺五寸

同拜殿一間半

正一位勳一等

貴布禰大明神一丈一尺七寸五分
九尺七寸

同拜殿二間

同權殿六尺二寸五分
四尺八寸

同與社七尺五寸
六尺

同拜殿一間半

新宮大明神九尺四寸
七尺五寸

同拜殿一間半

太田大明神八尺六寸五分
七尺

同拜殿一間半

若宮大明神九尺三寸五分
七尺六寸

同拜殿一間

奈良大明神七尺三寸
五尺六寸

同拜殿一間

澤田大明神七尺三寸五分
五尺七寸

同拜殿一間半

氏神大明神五尺一寸
五尺五寸

同拜殿一間半

末社

棚尾社表二尺
脇一尺八寸 高欄

土師尾社二尺一寸五分

梶尾社二尺一寸五分
二尺

(二尺一寸五分 高欄)

山尾社同

藤尾社同

諏訪社同

岩本社二尺八寸
二尺五寸 高欄

山森社二尺七寸 三社相殿

半本社三寸五分

聖神寺

鎮守二尺七寸
二尺五寸

別宮社此社者鳥羽院御誕生之御
祈禱三造立云々近代斷絕

太田社末社

白鬚社表二尺一寸五分
脇二尺

福德社二尺八寸 高欄

印殿神主當職之間
奉安(散置里亭)

貴布禰社末社

梶取社表二尺七寸五分 高欄
脇二尺六寸

白石社二尺八寸

牛一社二尺六寸 (高欄)

山尾社近代
斷絕

任部社同

黑尾社斷絕

川尾社同

橋本社二尺八寸 高欄

梶田社同(高欄)

小森社斷絕今神東仁在誤字歟

同拜殿一間半

神宮寺

鎮守二尺二寸五分

百大夫社二尺八寸
二尺五寸

鎮守社二尺八寸五分

梅宮社二尺六寸五分
二尺四寸

白鬚社近代
斷絕

鈴鹿社二尺

惣社斷絕

吸葛社二尺五寸
二尺三寸五分

結神社二尺一寸五分

三月十三日可_レ奉_レ造之由奏聞則六月朔日本作始七月三日上棟八月十三日遷宮神主者成助也

堀河院康和五年三月十八日奏聞了七ヶ月之内奉造了

同年九月四日遷宮神主成繼云々

同御宇康和五年之後嘉承元年四月十二日燒亡同年七月二日上棟同廿六日遷宮云々

鳥羽院天永二年造營

崇德院御宇保延六年二月朔日本作始八月四日遷宮也

此時成重神主之中也

近衛院康治二年三月廿三日上棟同年八月四日遷宮去

保延之造營依_レ爲_二堀河材木_一被_二改造_一之云々

高倉院承安二年三月五日木造始六月十七日上棟八月十六日御遷宮是重忠神主之時也云々

同御宇治承三年三月廿日若宮四月七日太田造營

土御門院正治元年十二月廿五日遷宮資保神主

順德院御宇建保五年八月七日木造始十月二十九日上棟十二月十七日遷宮

龜山院弘長二年造營事起文永元年遷宮云々

後宇多院御宇弘安五年造營

後二條院嘉元三年八月七日遷宮神主經久

花園院應長元年正和元年舍屋修造云々

光明院貞和二年造營云々

崇光院應安三年後圓融院永和二年打覆

後小松院至德元年造營明德元年打覆

稱光院御宇應永三十二年造營正長二年造畢云々

後花園院永享七年末社造營

後土御門院文明年中燒亡之後造營

後奈良院弘治二年丙辰五月廿七日遷宮

造營記云天正十九年七月二日亥刻遷宮秀吉公依_二神主御願_一也

尊久奉_レ遷_二神體_一之時庭燎神前燈等消鎮御內陣欲_レ參

之時自_二南方_一大光物飛來入_二于神殿_一云々于_レ時勅使中

山亞和舞殿着座御驚懼之處社司申云嘉元之時光映_二于神前幕_一之由所見之由申之有_二御感心_一急可_レ有_二奏

聞_一候旨被_レ仰云々

寬永五年十二月廿四日亥刻本社遷宮

台德院大相國之御代本社并八社小社舍屋等皆造營

被_二仰付_一神寶神器社家諸司之裝束迄新調被_二仰付_一

了

延寶七年九月十六日戌刻遷宮神主保可本殿新造末社舍屋

等修造被_レ爲_二仰付_一之

延寶七年九月十六日戌刻遷宮神主保可本殿新造末社舍屋

等修造被_レ爲_二仰付_一之

神事有^二猿樂^一矢田觀世立合也云々也云々社司氏人を菅貫の輪に入奈良河邊にして麻人形など流しやる此日權大外記
康富貴布禰に參りてかの河邊にてよめる

御祓するきふねの川の瀬をはやみ

なかるゝ年そなかは過ぬる

寶徳元年八月廿三日祈年穀の奉幣中絶して侍りける
を武家執奏せられて興行あり賀茂奉幣使權中納言藤
原明豐刑部少輔大江朝臣俊宣そへ使也と云々同二年
五月九日祈雨奉幣を貴布禰社に奉らる宣命神馬など
例のごとし

後土御門院御宇文明八年十一月廿四日此比京城火災
の事あるによりて賀茂一社一同として懇祈をいたし
天下泰平國家安全の精誠を抽べきよし仰くだされて
社司氏人神前に參りて祈り奉る

文明十五年五月四日當年御重厄の御祈の事一社一同
丹祈をいたすべき由仰下さるゝ也

長享三年正月廿一日二星合公武御祈の事七ヶ日一社
一同として殊に精誠を抽奉るべきよし仰出さる室町
殿御教書おなじく到來云々

就三出馬祈禱之卷數并菓子一合房鞆二懸到來悅入候

尙惟任五郎左衛門可申候也

三月廿五日

賀茂社中

信長
御朱印

此表就三出馬祈禱之卷數并鞆二具

到來祝着候猶委細細并新介可申候也

三月廿九日

秀吉御朱印

賀茂惣中

右行幸御幸御祈の事官幣使并公家たゞ人まで當御
神を敬神ふかくてまさしく神の靈應おはせし事ど
ももらしがたくて所々に書つらねればくだしく候もの歟

造營

右官史記曰天武天皇六年二月丙子令山脊國營賀茂
神宮云々

或記曰賀茂造營粗勘例

冷泉院御宇安和元年賀茂社造營

一條院御宇正暦五年造營

後朱雀院御宇長暦元年造營

御冷泉院御宇康平三庚子年造營四月八日本作始六月

廿日上棟八月廿九日還宮也其後白河院御宇永保元年

拾 綱 僞 謀

になりてこれをすてば人いよ／＼^然ぎぼうをさきとし
て國たちまちにほろびうせんしかあらば正直の神何
をもちてかそのめいをつぎ其かたちをのこさんやわ
くは^光うのちかひ^誓おそくはむなしきにあるべし神も
し邪ねいをうけずば我^後ねいしんをもたず我ねしいん
をもたずば神^{又イ}また捨^{ナシイ}て給はんやいのる所わたくしなく
ば神かん座をたゝずしてそのしるしを見せ給へいの
る所もしわたくしまじはらば我とがをかうむらん事
いさゝかもいたむ所にあらすたゝ神に身をまかせま
つりてさらに身をわたくしにせず此心をあきらけく
か^鑑い^直み^正たまひてあやまる所なくばじやねい^後を萬里に
しりぞけてせい^直ちよくのみちをすゝめ治天のうむた^運
ちまちにひらけん大明神このじやう^狀をたひらけくや
すらけくきこしめして夜のまもり日のまもりにまも
りさいはいたまへとかしこみ／＼も申たまはくと申
此御祈願のおもむき神慮感應まし／＼てければ二た
ひ皇統をうけさせ給ひて帝運ながく萬歳をつがせ給
ふとなり

稱光院御宇應永八年五月五日に北山殿賀茂御參詣競
馬御見物あり

同九年十月廿三日賀茂社へ奉幣使勅使參議藤原隆信
副使左近衛將監藤原友清を立らると云々同廿五年十
月七日今日七社奉幣を發遣せらるゝによりて賀茂へ
中御門宰相定輔卿參向ありて幣を奉られ宣命を神前
にして讀あげらるゝと云々

後花園院御宇嘉吉二年十月十九日賀茂奉幣使を立ら
る權中納言正三位藤原兼郷副使越前守大江朝臣俊宣
云々

同三年五月九日貴布禰社祈雨の奉幣を奉らる從五位
上神祇權大副大中臣房宣を使として黒毛の御馬を引
そへ宣命よみたてまつらせらると云々

祈雨幣物事

五色絹一疋 生絹一疋 絲二約

綿二屯 木綿二斤 麻二斤

初二支 黒毛馬一疋 衛士二人

文安元年七月廿六日祈年穀奉幣なり賀茂社へ權中納

言源朝臣有定前越前守高階朝臣重頼を立らる

文安四年六月卅日今日賀茂御手代會神事也例年神前

花園院御宇正和四年五月廿一日貴布禰社奉幣使を立
らる止雨の御祈なりと云々此間禁裏仙洞産の穢混合
の事ありて七ヶ日の後なり貴布禰は賀茂の末社たる
の間三十ヶ日たるべき由これを申といへども公家の
法にまかせられ幣使を立られたるの趣或記にみえた
り此時仰られしは社家は社法を守へし公家は七ヶ日通路無憚法に任さると云々

後醍醐院御宇元亨四年四月十七日壬申行幸御代始な
るべし或記云後伏見院御位をすべらせ給ひて太上天
皇と申奉れる比皇子は東宮に立せ給ひしかども御即
位の事御沙汰あやふく思食ければ皇統正流の御紹運
をば昔より賀茂の御神擁護ましゝて神威あらたに
帝位につかせ給ふ先蹤を頼思召し御祈願ふかく歡慮
の誠を盡し申させ給ふ御告文を御手づから親ら宸筆
にあそばして當御神へこめまいらせられる其御告
文云

此間原本奥ノコトアリ

これ嘉暦三年としのついでつちのえたつ九月四日み
づのとのゐよき日のよき時太上天皇胤仁かけまくも
かしこき賀茂大明神のひろまへにかしこみくも申
たまはくそれ愚おろかなるせい性かへりみるといへども
天日嗣をうけて皇とうの正流にあたり東宮の立坊

のうむにいたるまですでに神の御めぐみにあづかる
としすでにせい人のよはひにおよぶせんその運天
のさづくる所その期いたれりしかあるを一はうみち
なきひけい秘計日ををいて色をそふむしんのかまへ神か
んさだめて照したまはんかこれししながら身のた
めしにして世をかたぶくるにあらずや天のしたは一
人のあめのしたにあらずあめのしたのあめのした也
ほしきまゝにじやねい登をもちて正ろをふさがんこと
神としてあにうけ給はんやそもく大明神の御めぐ
みを我身にたれ給ふ事この時にあたりてすいさう一
にあらず是をたのみあふぎたてまつるにさらにうむ
のおそれなしもとよりのことはりし自然せんのみちにゆ
づりて運を天にまかするゆゑにかならずこれを火きう
にいのらす此ころおのづからくはんたいに似たり
といへどもひだうよこしまのねんりきたとひつよく
とも神道いかでか邪をうけ正を捨んもしひだうの念
力つよきによりて正道をたのむ心くわんたいのとな

去年閏五月御産の御祈によりて院の御隨身等宿願を果し奉らんとて殊に賀茂上下の社には競馬五番あり幣帛以下奉らるゝと云々

同御宇康元々々年五月十四日又御幸ありて七日の御参籠あるべしと云々

同御宇正元元年四月廿七日二十二社に臨時の幣使立らる是天下の飢饉疫癘の御祈也云々

龜山院御宇弘長二年四月廿日行幸例のごとく御代始也同御宇文永三年四月十二日上皇御幸ありて上下の

社にして御神樂あり拍子は前源中納言笛は花山院中納言筆箒は實成朝臣和琴は親忠朝臣也下の社にては

三ヶ夜のよし社記にみえたり同四年四月一日兩院御幸ありて七ヶ日の御参籠のよしみえたり同五年正月

五日兩院御幸なされたるよし社記に見えたりその御比ほひ神館の雪のあしたしのびて御幸ありける後に

よみ侍りける賀茂氏久
神山の松も友とそおもふらん

ふらすはけふのみゆきまましや

とよみ侍りけるを後に續拾遺集の冬の歌に入られけると也

原本此同賀茂國興神社にコレ印あり一巻あり

後宇多院御宇弘安元年四月十九日當社行幸御代始例のごとし同九年二月廿五日賀茂別雷神社の神殿ひらかしめ給はざる事又同年中樹の顛倒の事につき宣旨ありて御卜の事行はれ御祈ありと云々

伏見院正應三年十二月八日賀茂行幸御代始例のごとし後伏見院の御宇正安四年六月後宇多院賀茂の御幸なりける時供奉にさふらはれける人々題をさぐりて歌つかうまつられけるに社頭天と云事を新千載神祇

天降る別雷の神代より

隆長

とよめるとなん又寄國祝と云事を續千載神祇

かたふかぬ速日の嶺に天くたり

と詠じたまひけるとなむあまたもらしつと詠じたまひけるとなむあまたもらしつ

後二條院御宇乾元二年七月廿九日法皇河上御幸上卿防城中納言也但此たびは社の常の神馬を引せらるゝ

のよしみえたり同御宇嘉元々々年十一月廿六日御幸あり御参籠ありて曉がた御かちにて御宮めぐりありし

と云々同二年正月廿日又御幸御宮めぐりの次第奈良さはだ片岡新宮より御前にまいらせ給ふ

せ給ひて公卿は鳥居の内南上西面に侍臣は鳥居の外
北上東面に列居し御隨身御前につらなり屈居して御
車の轅を鳥居の内に入て下御也侍臣前行公卿御扈從
につらなるさて内の鳥居を入せ給ひて細殿の御座に
着御南面にまします細殿の東階より舞殿の西南へ打
橋をかけて舞殿の北第二間に御拜の座をして同殿の
小庭に案をたてゝ金銀の御幣白妙の御幣を倚立る也
さて御拜の座にうつりおはします時是より先御手
水の事あり頭中
將御笏を獻す次院司の衆顯定卿金銀の御幣を取院司
の四位行家朝臣白妙の御幣をとる時に兩段御拜まし
ます院司金銀御幣をとり退下りて久繼神主をめす神
主西北の庭に參りこれを給はり神前にまいり御戸に
よせ奉る次に白妙の御幣は若宮貴布禰片岡太田各一
捧社司給はりて社頭に奉る神主まかり出てかへり祝
詞を申片岡の前よりすゝみて櫛をたてまつる杖にさ
しはさむ公卿是をとりて獻せらる此後細殿に入御な
りぬ毎度かへり祝詞のゝち入御あり若是よりさきに
入御なりぬれば細殿にまいりて櫛を獻す此間神主以
下祿を賜はる各大掛一領云々次神馬を引橋殿をめぐ
らす事三匝御隨身これを引社家請取て神前に引むけ

てしりぞく此間公卿東屋の座に着て舞樂あり頭中將
御所に參りて勸賞の事をうけ給り神主以下禰宜祝氏
人等一階を給ふ事をはりて還幸なりぬ同四年四月廿
九日上皇御幸内大臣以下供奉ありと云々同六月廿六
日祈雨の御幣を奉らる御使權大納言通忠卿まいり給
ふ但丹生貴布禰には殿上人を用らるゝのよしみえた
り

後深草院御宇建長二年三月十三日己卯軒廊の御卜あ
り賀茂別雷社御鎮ひらかせ給はざるによりて也姉小
路中納言顯朝卿以下御參有と云々

同三年四月十日御幸當社七ヶ日御參籠云々同年五月
五日幣使を立らる貴布禰殿上人使如く初但霖雨の御
祈云々同年六月五日賀茂社勅使をたてらる勅使參議
藤原朝臣公泰散位源朝臣仲氏散勅使也云々

同五年二月三日辛亥賀茂行幸供奉の人々大略八幡宮
のごとしと云々

同年八月廿一日丁卯賀茂一社奉幣の事ありと云々同
六年八月十九日上皇御幸あり同十月九日軒廊の御う
らあり賀茂の恠異によりて也云々同月廿八日又御幸
此儀又八幡のごとしと云々同七年二月廿一日大宮院

儒官をへざりければ直に拜任いかいと沙汰ありけり
重代稽古のものなりけれども引たつる人もなかりけ
るに忝も神恩をかうぶりて先途をとげてけるめでた
き程の者なりけりと云々

同四年四月七日又御幸同八月八日には奉幣使を立ら
る同十月五日當宮には神馬を相添て獻せらるゝと云
々但天變の御祈也と云々

順德院御宇建曆元年四月七日太上皇御幸三日の間御
參籠ありて御幣六本神主幸平に給ふのよしみえたり
同十二月四日又幣使を立らるゝ大嘗會延引の事によ
りて也同二年九月廿八日奉幣あり齋院まかでさせ給
ふのよしを告申さるゝなり同年十一月一日大嘗會を
あらため行はるゝよしの日時定の幣使なりと云々

同御宇建保元年三月十日程幸上卿公房正禰宜重政が
許へ花折てまいらすべき由仰ありければ賀茂重政
さくらはなけふのみゆきに咲そめて

やはよろつ代の春はかきらし

とよみて奉りければ

年をへてみゆきにかさせ春の花

たえぬ色かは神そしるらん

と御返しありける同年三月卅日又御幸ありて七日御
參籠云々

同三年六月十五日雨の御祈として幣使を立らる同八
月十六日上皇御幸ありなりける

同六年二月廿七日當社幣使を立らる同十二月廿日上
皇又御幸なりぬ

同御宇承久元年六月七日庚午幣使を立らる天下疫疾
の御祈謝なりと云々

同三年三月廿日行幸此御代二ヶ度行幸也同四月二日
丙辰幣使を立らる宣命等ありと云々

後堀河院御宇嘉祿元年十二月八日御代始行幸有四條
院御宇嘉禎三年十一月十一日戊午行幸御代始の例の
ごとし

後嵯峨院御宇寛元元年十二月五日御代始行幸有

同三年四月九日幣使を立らる但三合併天變の御祈の
ため也と云々

社記云寛元四年四月廿九日賀茂下上に御幸あり今日
未明に出御ありて秉燭の後還御なりぬ其次第先下社
にまいらせられ社頭の儀御拜例のごとしさて上の社
にむかはせらる路次の儀行幸のごとし外の鳥居に着

年の御幸は儀式にて神寶種々舞樂競馬御鞠歌合などの事有しを今度建久には略儀の御幸也と云々

此御門の比にやあらんある記云二條宰相雅經卿は賀茂大明神の利生によりて次第に昇進ありし人なりけり其初世間あさましくたえくにしてはかくしき家などもおはせざりければ花山院の釣殿に宿してそれより步行にてふるにも照にもたゞ賀茂へまいるをもてつとめとしてけり其比よまれたりける歌に

世の中に數ならぬ身の友千鳥

なきこそわたれかもの河原に

と此歌心の中ばかりに思ひつらねて世にちらしたる事もなかりけるに社司其名を忘ると云が夢に大明神われはなきこそわたれ數ならぬ身とよみたるものゝいとほしき也尋よとしめし給ひけりそれよりあまねく尋ければ此雅經のよみたる成けり此示現きゝていかばかり

彌信仰の心もふかゝりけん扱次第に成あがりて二位宰相迄のぼられ侍り是併大明神の利生也云々

土御門院元久元年十一月十三日辛未行幸御代始也同御宇元久二年三月十二日太上皇御幸同年六月五日河上行幸此時御馬十三疋社司に下さると云々又建久元

年三月十九日上皇御幸同年五月四日廿二社に奉幣使をたてらる但庖瘡の御祈によつて也同年六月廿二日軒廊の御卜ありて賀茂社奉幣使をたてらる齋院禮子の御不豫の事によりて也又承元元年三月七日上皇御幸橋殿をしつらひ御所として和歌の御會あり御題

海邊歸鴈 春雨 社頭 夜風也と云々

同年八月十三日又御幸同年九月七日幣使を立らるこれ又庖瘡の御祈とみえたり同年十二月十九日又御幸有て難々の御遊覽有時に神主幸平上鞠に候す此時の管絃に上皇御琵琶を遊ばさるゝの由日月府の合大御也社記にみえたり

同二年三月廿五日幣使を立らる三合の御愼によて也同年十一月十五日御幸同年六月十日又御幸ありて御神樂ありとみえたり或記云承元四年正月十六日大外記良業死たりけるに十六日の曉河内守繁雅が夢に賀茂の御前にて除目おこなはるゝけしきなりけるに小折紙に大外記中原師方とかきたりとみて夢さめにけりいそぎ此よしを師方に告たりければ多年つかうまつりたるしるしと覺えて忝も頼母敷もおぼへけるにやがてその夜大外記に成にけりさきに助教仲隆師高師季など競望しけるうへ師方は大監物にていまだ

上あり此間攝政職事をめして社司の賞の事を仰らる次御笏を撤せられ又神寶を撤するのち攝政休幕にまで給ふ北の鳥居の外東のわき也此間御神樂韓神など例のごとし次上卿社頭より歸參て暢の西を経て南の暢門の方に出きて職事をして御願平安遂ましますよしを申す聞食のよし仰らるゝ事例也次御前の西良坤の暢を撤して公卿の座をしき東西の西の頭中將をわきなり

をとり渡し給ひ主上下御ましゝ御帳の前にたゝせ給ふ時次將御輿を退れば鈴奏次名だいめんの事ありて御本殿に入御まします也次奉行職事をして行幸の行事の賞を仰らる

社司の賞 神主重保追可申請由也

自餘上下社司は社家の注進ある交名皆一階を給也と云々

北に馳ける社の方へ走する也次公卿座をたち給へば座を撤す次上卿奉行をして見參を奏せしむ御所の西の椽椽をへて持まいりて奏す杖にさせり攝政北の第一間の簾中にして覽し給ひて返し給はる奉行職事これを取てしぞき下れば公卿の祿をたまはりて事をはりぬとて還幸を催さる公卿御所の南の腋につらなり給へば上卿は北に立給ふ例也云々次御輿を寄奉り攝政簾中に候し給ふ二位中將御璽をとりて鳳輦の中に安じ給へば主上乘御なりぬ攝政たすけ乗せまいらせられ西の暢門より出御ましゝ鳥居の外より攝政車に乗せ給ひて御後陣よりまいらせ給ふ御輿深更に及て還入せ給ふ御輿をよせ内侍參向ありて中將殿御璽

社記云建久九年二月廿六日賀茂行幸あり奉行兼權左少辨長房朝臣也後白河院の例を以て諸事沙汰し調べきよし仰せらると云々先下社へ行幸なりて神前の儀をはりて上社へ向はせ給ふ例の如く南の鳥居より下御なりて細殿の御所に入せ給ひ舞殿に御拜の座をかまへてこゝに移り着せ給て上卿幣を奉られ兩段再拜おはしませば上卿たまはり傳へて社司に給はれば社司神前にたてまつり返り祝詞申畢れば細殿に入御神馬等を引めぐらす供御の御事は御破子云々御讀經所の屏の内に進物所を儲たり兼又殿の御所の東頭にかりやをかまへて上卿の座とせり此間に頭中將伊輔朝臣賞の事を承り仰らる神主資保正四位下に叙せらる又禰宜祝氏人等各一階を給へりと云々但去文治元

東西の暢門より入せられ下御なりて一本此間簾中平敷のおましに着せましますこゝに腋御膳御くだ物など

を御所の東庭の案上に置ければ此間以下二本之文大異而詳上卿頭

中將をして宣命の清書を奏せらるれば攝政殿中に入御覽をはりて返し給ふ次御手水の事ありて御拜の座

にうつり着せましますば御贖物二膳を供じ宮主御麻もて参り頭中將とり供じ奉りて先御祓の事あり上卿

南の暢門より入前庭を経て着座し給へば御馬一疋將監これを引次走馬三疋舞人は是を引御祓をはりぬれば

上卿御幣二捧を取て長に向ひ御拜兩段再拜おはしませば上卿幣を置て復座あり此間權中納言挿頭の花を

取り参り進みて御冠にさし奉らる次上卿社頭に参向有てかへり参り御願平安遂まします由奏し給へば聞

食の由を仰せらる此後神寶等を撤し公卿馬場の座に着舞人御馬を南より北に馳て事畢れば内侍かり幄の

左右に候じ主上其中央に立せまします御輿を寄奉りて上御社に向はせ給ふ其儀攝政參上ありて御簾を卷

て其北の簀子に候じ給ふ近衛中將まいりて御璽を御輿に入安せらるれば乗おはします攝政西鳥居の外に

して車に乗後陣に参り給ふ南鳥居の外にして各下馬あり御輿御所の西の暢門より入おはしまして北第三

間の御こしよせに昇居時に攝政殿西の簀子の邊より參上あり中將御輿寄の簾をかゝり御璽の宮を取て内

侍に授てしぞきて北方に候せらる次に主上下御ありて假幄の前に立給ふ中將輦戸を閉てしぞき下らるれ

ば次將御輿を退さりぬ攝政御簾中に參候あり次公卿西の暢外を経て公卿の座につく主上御平敷の座に着

せ給ふ件御座ばかり幄の前にあり此御所のかまへ北面なり第三間にかり幄をかまへ第二間に平敷を敷て

御座とす第一間に御拜の座を五重に装なり次攝政殿奉行の職事をめして神寶等を昇置さしめ給ふ東西行

にして南北あひならべり次に案を立て幣を倚たて神寶を取置なり下社は河合社をくはへて二社に奉らる

當社は一社なり次主上御手水女房これを奉る事初のごとし事畢て御拜の座に着おはしませば御笏を獻じ

御あが物を供す次に御麻を奉る次に宮主御麻を取て着座す上卿西の庭を経て着座次に神馬一疋走馬三疋

引たつる次に上卿御幣を取て立次に兩段再拜下社の事畢て上卿御幣を置て本座にかへらす直に社頭に參

の身となし給へと無二の信心を發し度々籠り念せられけるに或夜の夢に賀茂の御神より給ふと覺えて檳榔毛の車の來りて胎内にやどるとみえしがやがて懷妊ありて生給ひける邦綱卿にておはしければ福報人を超て繁榮なりしと云々

又云叡嶽の學徒幼年より智慮かしこく心ざし勇猛にして止觀の窓の雪に眼をさらし三諦の床の月に心あきらかなりといへども富報すくなくて濟度の道乏しかりければいでや毘沙門天に祈むとて鞍馬寺に參籠し又清水の觀世音に通夜して普門融通の福力を與へ給へと祈念ありしに觀音も多門天も福報を授なんことは賀茂大明神の御はからひなれば我らがまゝならずたゞ賀茂へまいり申べしと兩寺の本尊の告させ給ふにまかせ賀茂御社に參り七夜通夜して祈歎きければ七日滿じける曉宿屋に下向し暫まどろみける夢の中に汝もとより福報なき身なれどもあまりに祈歎き申も不便なれば大明神より給はるなりとて装束したる神人長櫃二合舁持きたりてあなかしこ此長櫃底まで取拂事なかれさもし侍らずば一期が内盡る事あらじと告げてさりぬ夢さめてみるに枕にありけり一櫃

にはしらげのよね入たり又一櫃には絹綿の類入みてたり難有拜しいたいきて是を自他の施用などに取つかふに盡ざりけりと云々

後鳥羽院文治二年十一月十四日賀茂行幸あり其儀あらゝ記之先上卿參内ありて奉行職事をして諸司以下催し仰せらる又舞人の行事をして舞人等を催さる主上御湯殿の事あり次上卿弓場殿にすゝみて宣命を奏せらる是よりさき宣命の草を攝政殿内覽の事例のごとし主上御總角御裝束などあそばし晝御座に着せ給ひ神寶を御覽せらる鏡宮金銀の御幣等なり次南殿に出御あり攝政御裾に候し給ひ内侍前後に候す頭中將右中將内侍に付て扶持せらる奉行の職事攝政の裾をとりて相從へり御帳の西の間にして御反問ありて御張の前に立せおはしませば次將わたり公卿つらなり立次に圍司の奏鈴の奏ありて御輿を寄奉る近衛中將御璽を取て御輿の中に納らるれば主上乘おはします路次の行列公卿殿上人舞人神寶神馬相つらなれる次第は略して記さすかくて西洞院より二條大宮土御門又西洞院一條出雲路河原を経て下の御社に着おはします堤の外にして上下各下馬あり御輿は御在所の

皇大神の靈驗あらなる事ども書たる記云皇太后宮大夫俊成卿若かりしより賀茂御神にふかく祈申されしは我和歌の道にかなひ子孫までに此道をつたへ世にほまれある助を乗加させ給へと祈り奉る志他事なしと年比參詣怠なかりしが殊に千日のあゆみをはこびて念じ申されければ願のごとく其名雲井に高くして嫡男定家卿は父に超て中納言に昇り孫爲家卿は大納言まで昇進ありしは歌道名譽ゆゑにして偏に當御神の感應なりとぞ申傳へし

又伊勢大輔といへる官女は一生の内に秀歌よませてたべと賀茂へ祈をかけ橋本社のもとにながるゝ水を硯水にして千首をよみて奉りければ千首大輔と呼ばれ世の人の口にある秀歌よみけると也

又云平清盛公いまだ淺官なりし時夢の告に賀茂御神より寶の山を賜ふとて金の寶山門に入がたき大きやかなる其上に藤花さきかゝりたり装束したる神官二人出來りこれは賀茂大明神より下さるゝなりといへるに今一人の云是は春日大明神の使にてしばらく清盛にあづけらるゝとありて夢はさめけり驚つゝしみていかなる冥助をかうつゝに得せしめ給ふべきとた

のもしく彌信仰あさからざりしに後に白河の准后と聞えしは清盛の妹女にて其比の殿下の北方に物せられしが其御領悉かの後室一期知行せらるべきよし仰られけるに過分の事なり辭退申べきにこそと思はれけれどもかの夢の御告に任て御請申され年久しく主のはからひなりしよりいつしか身の威勢龍に雲のしたがつごとく天の下のはからひをも心にまかされける事偏に神恩なりしと云々

又治承四年六月九日に京を攝津國福原へうつされて新都の事始ありしに卿相雲客衆議の上此所を定けるには一條より五條までありて五條以下は不足にて事行ざりければたゞもとの京へ移かへらるべしとて賀茂社へ其由の奉幣を立られ舊都にことごとくかへられけるに先里内裏を造進せらるべきよし衆議有て五條大納言邦綱卿に周防國を給はりて六月廿三日に事始して八月十日に上棟と定めらる彼大納言は大福長者におはしければ造立する事左右に及ばずといひあへるにやがて其事遂なりぬとなり此邦綱卿の富榮果報ゆゝしかりし事はそのかみ此卿の母あまり家貧しきを歎て賀茂の御社へまいり詣であはれ願くは福力

保安年中に左衛門大夫源康季年來賀茂御神を信じ頼奉りけるに或夜御戸開にまいりつるかひなく賀茂川の水おびたしく出て渡がたければ岸上に思ひやり奉りて居たりしが社司ども例のごとく御戸ひらき奉らんとするにさらに開かれさせ給はざりければ祠官いかにもせんすべなくて時うつり觀念し心をしづめ居たりける程に眠頻に催されて或社司の夢に康季が參くるをまたせ給ひてひらかぬよしを告給ひける驚覺て氏人をさしつかはし迎にければ康季岸の上に居けるをいざとてゐてまいりけるに其まゝ御戸ひらかれ給ひにけり康季かく神慮に叶ひける故にやさしもありがたき大夫尉に近康康綱以下四代までうちつゝきてなりなき此外季範季賴季實季國等六代までも此康季が子孫にて皆此昇進を遂たりけるは他家にありがたき事也

崇徳院天治二年十月廿七日御代始行幸あり同院御宇天承の比太上皇賀茂社御幸なりて御鞠ありしに賀茂成平縣主うけたまはりあげ鞠つかうまつりし時かくよめる

しめのうちのみゆきに袖をかさしつゝ

名をあげまりをけふしつるかな

保延五年五月一日祈雨の幣を貴布禰に奉らる其宣命は大内記儒門の博士など皆故障ありて作ることあたはざれば其時の上卿少内記相永か作代にして事行ひけるが必神感あるべきよし自讀し給ひけるにはたして三日雨おびたしく降たりけるとなん宣命はこと長ければもらしつ同年十月二日己酉行幸あり此御代すべて五度の行幸也

近衛院久安元年十二月四日甲辰御代始の行幸也此御代三ヶ度行幸なりける同御代に左少將藤原實重と云ける人年來賀茂社に詣てゝ藏人にならぬ事をなげき侍りけるを二千三百度にもあまりけるととき貴布禰にまうでゝはしらに書付ける

千載集
今まてになとしつむらんきふね川

かはかりはやき神をたのむに

かくて後なんほどなく藏人になり侍りけると云々

後白河院保元々々四月廿五日丙申賀茂社行幸あり二條院永暦元年正月廿七日壬申御代始賀茂行幸ありて此御代に五ヶ度行幸有ける

高倉院嘉應元年八月廿九日行幸此御代五ヶ度也賀茂

當神領寄進まし／＼ける比社家の申文を惟家辨に付て奏聞申事ありけるに詰り笑はれて他の辨につげられける間三ヶ日にあたりて惟家辨血を吐て卒去せり是は棚尾社の御前にけだかき人參らせ給ひて惟家辨勘當仕候はんと申御返事は何とも聞へず承り候番のものにまいれと召されければ褐衣冠にいちひたゝれたる人平胡籙負たりける參られたり惟家辨勘當仕れと仰あれば南に向て矢をはなせ給ひけるが惟家辨の胸にあたり苦痛の聲聞ゆ勘當仕さぶらふと申て出させ給ひ誰の參らせ給ひたるぞと尋ければ日吉のまいらせ給ひたるとありて後に夢は覺にけり是ぞ惟家辨の姑なにがしの局通夜せられける曉の夢なりけりかの局驚給ひ彌おそれ祈りをかけて願など立れけれども其日卒去せられけるとぞ

嘉承二年五月一日根合の事兼て催されて今日左右殿上人河原に向ひ祓して七社に幣を奉るとて幣使を差遣す賀茂一社に於ては金銀の御幣競馬十番奉ると云云今日左方仰によりて北の中門を渡り上皇御覽ありしは方々の面目也同月五日新院女房の根合也未刻東泉殿に參集せり左右勝負をあらそひけるに左方の勝

侍る慶申立願果し奉るとて同月九日に競馬を相具して賀茂に參詣あり女房の御車三輛乗尻等相つらなりける出立の儀上皇御覽あり其行列先金銀の御幣次乗尻十人舍人居飼等女房の車本院の侍等布衣を着し騎馬にて相具す二位宰相中將殿直衣をめさる殿上人兩貫首など皆束帶にてつらなれり所の衆瀧口等貫首の扈從として候せり其路洞院の大路より三條京極大炊御門朱雀を経て法成寺の東大路より先下の社に參る奉幣社司につれてまいらせ事畢て上御社に參詣ありて幣帛おなじく社司につけて奉り競馬などありて夜に入下向ありと云々其時女房のもとより殿上人の中に送る歌

たちならふ人やあらましちはやふる

我かたをか神なかりせば

返し

みかりしていのりしことのかひあれば

我かた岡の神をうれしき

鳥羽院天仁二年八月十六日戊子賀茂行幸御代始也此御宇にすべて六ヶ度行幸ありけり年月しるすに及ばずもらしつ

參詣し給ふ供奉四位四十八五位三十人六位三十人前をかると云々同年十月十一日に官幣を石清水賀茂へ奉らる同年十一月八日には石清水に行幸なりて同十二月十五日に賀茂行幸あり是より御代々の帝の恒例として御即位ありてはかならず兩社行幸とて石清水賀茂へまいらせ給ひ御幣寶物品々奉られ舞人走馬な

どの事ありける同二年四月廿二日戊申の日攝政の御參詣あり是則天下の庶務を攝給ふゆゑに御祈のため也云々永祚元年二月廿八日また攝政二條の第より當

社に詣給ふ内大臣以下參向あり殿上人を舞人として舞樂を奏し給ひ神だからしなくあぐるに及ばず四位二人五位八人供奉に具せられる正暦二年六月廿四日日をへて雨ふらざれば御祈の御てぐら奉らるゝ時黒雲山岳にくだりて雨ふりぬと云々同五年二月十七日祈年穀の幣使を奉らる又長保四年三月廿六日に當帝御祈願の事ありて行幸おはしましぬ

三條院長和二年兩社行幸あり

後一條院寛仁元年十一月廿五日御願によりて當社行幸あり同御代長元二年十二月三十日にも御願によりて當社行幸あり當帝の御母后は上東門院と申し奉る

此時御同車にて參らせ給ひ幣帛などを奉らせ給ふその時の齋院は選子内親王と申せしが齋の神館に立寄らせ給ふかと待せ給ひけるに紫野より還幸なりしあくるあしたに内親王よりよみてつかはされし御歌みゆきせしかもの河波かへるさに

たちやよるとて待あかしつる

萬壽三年八月廿八日賀茂社より言上あり神殿の前大なる檜樹一時に枯て一葉の青事なしと云々これによりて御卜の事ありて御幣使など奉らると云々

後朱雀院長暦元年八月十一日御代始の行幸あり又同三年八月十八日二十二社に官幣をめてらるゝとて當社并貴布禰へ勅幣まいらせらる後冷泉院永承二年四月廿三日御代始の行幸也又同御宇天喜四年十二月九日行幸同康平五年七月十三日御祈之行幸也

後三條院延久元年八月九日御代始行幸也

白河院承保二年四月廿三日御代始行幸あり

御叡願によりて今年以後毎年行幸なるべきよし宣命に申奉り給ふ是によりて當御代之行幸九々度なりし堀河院寛治二年四月廿八日御代始行幸也同嘉保二年四月十五日行幸又長治元年二月廿七日行幸同四年に

甘雨を祈りこひ走馬を奉らる朱雀院天慶五年四月廿九日に當社へ行幸あり是則神社行幸のはじめなり云云此帝は延喜帝の皇子にて承平の帝と申也然に此神前へ行幸なりける御願は平將門謀逆を企我身平親王と名乗親類眷屬を公卿殿上人となし下總國に都をかまへて官物を押領し西國には藤原純友朝敵となりて天下のさわぎなりし故に天皇御みづから叡慮の誠を盡し祈り給ひしに靈驗あらたに御夢の告ありしかば將門はたちまちに矢にあたりて誅伏せられ純友は生捕にせられ獄中に死して四海靜謐に萬民安堵のよろこびをなしければ此御祈願のいちじるき神恩を謝し給ふとて行幸なりさまざまの神寶みてぐら物など奉られて社の禰宜祝にも位階をなし給ひける

天德元年三月四日官幣を奉らる天變恠異によりての御祈り也同三年四月十七日には新錢を伊勢賀茂へ神祇官を使として奉らる兩社以下十一社に奉られけると云々村上天皇康保三年四月十三日賀茂社鳴動の事社家は是を奏す同時に内裏の宜陽殿鳴ければ公卿僉議ありて御慎重かるべしとて上七社に幣帛使を立らる當社の使は左大辨橘好古也神馬等を引立て神前にし

て宣命よみけるに老軀に託宣の事ありてますく使諸司恐れみ崇め奉りぬと云々同年八月廿一日九天雲おほひ霖雨月をわたりて晴る事なかりしかば諸社に使を立らるゝに賀茂貴布禰兩社に奉られける此時十六社の御祈といふ事始る貴布禰は當社の攝社たりといへども水徳の御神なれば雨の御祈は必ず官幣使を奉らる弘仁九年五日に貴布禰も大社の宣に預り給ふ圓融院天祿二年九月廿六日攝政右大臣賀茂御神に詣給ひて宿夜こもりましめて御祈りあり天延三年四月十四日丙辰内裏微穢ありて七月二日大祓行はれて賀茂御社へ幣帛を奉らる貞元元年四月廿五日辛酉賀茂祭に齋院いまだ社頭の本院に入せ給はざれば御供奉の事なし仍今日太政大臣堀河の第より賀茂參詣あり辨少納言供奉の事ありと云々

天元三年十月十日天下のますく泰平にして五穀豐年に萬民安く平けく守給へと御代の御祈として行幸なりおはしまし御みづから御幣奉らせ給ひ神馬寶物等例のごとしと云々

一條院永延元年五月廿一日雨の御祈に勅幣を貴布禰丹生に立らる使藏人なり今日右大臣爲光公賀茂社に

姫宮齋院に立たせ給ひしを選子内親王と申ける齋王にはいづれ、いまだ嫁し給はぬをそなへ給ふ事なり又さはる御事あればまかでさせ給ふを此齋院は神慮に感應おはしけるにや五十四年までいつきにておはしけるが世中の常ならずはかなき事をおぼしめして菩提心を發し給へども佛を神事にはばかり給ふ心を

おもへともいむとていはぬことなれば

そなたにむきて音をのみそなく

とよませ給へりけるとなん

行幸官幣御幸付祈願靈驗等

聖武皇帝神龜三年七月乙未使を遣し幣を賀茂神に奉らしむ云々桓武天皇延暦三年六月壬子參議近衛中將正四位上紀朝臣船守を遣して賀茂大神に幣を奉り遷都の由を告らるかくて此京繁昌し廿餘年をへて後同天皇延暦二十五年三月辛巳に崩御なりて同乙未の日山城國葛城郡宇多野を爲_ニ山陵_一其地西北兩山有火おのづから焚て日の光なし大井比叡小栗栖野等の山共焼烟灰四方に滿て京中晝昏し今上おほすらく山陵に定る地賀茂御神に近し疑らくは是御神の災火を致し

給ふらんか即詔して卜筮に決せしむ果して有神祟云々帝曰初山陵の地をうらなはしめし時筮は從ふといへども龜卜は從はざる也仍今災異頻に來れり不慎はあるべからずとて即御みづから賀茂神に禱祈し給ふ事嚴重なりしかば災火忽に消滅しぬと云々平城天皇御宇大同二年五月三日庚寅賀茂御祖神別雷神并正一位を授奉らる嵯峨天皇弘仁六年八月三日伊勢賀茂兩御神へ霖雨晴ざる御祈として幣使を奉らる同九年十月己未山城國貴布禰神祈雨の靈驗あらたなるによりて賽の神寶御幣使を奉られける同十年五月甲午幣を奉られて貴布禰社へ雨を祈り給ふ同御宇承和十年十一月丙申日參議左大辨從四位上男王を差遣し幣帛を賀茂神に奉られて國家の昌泰を祈り給ふ又御代々御即位あらんとては勅使を立られ官幣を奉られて此神國の天日嗣をうけつがせ給ふよしの宣命を告奉られける是を由の奉幣とぞ申める醍醐天皇延喜十六年六月十二日乙未石清水宮賀茂上下社に臨時の幣帛使を立られ左右馬寮十つらの御馬各五疋左右近衛各十人を奉られける延長二年五月七日乙卯丹生貴布禰幣使を定められ同八日に殿上人を丹生貴布禰に遣され

相つらなり次に膳部六人舍人二人荷領十人次に藏人所の陪從六人院女別當など御車のあとに並び従ふ次に公卿勅使一人齋院別當一人五位四人六位四人并御前をかる左右の近衛各二人左右の衛門各二人左右の火長各十人供奉し左右京の官人兵士を引率してむかへ奉る山城國司郡司どもを引て京極の大路に祇候しまいる辨一人太政官史生二人官掌一人供奉の諸司を引て御祓の所に參り其事をおこのふ齋院御幕の内に入せ給ひ河水に臨てはらし給ふ神祇官中臣御麻を奉り宮主祓祝詞をよむ事畢ぬれば勅使以下に饗膳

祿などたびさて御車をめぐらし初齋院に歸り入せ給ひければ御膳を供し御櫛をたつ此初齋院にして三年の御禊齋ましゝて其年の四月に始て賀茂紫野の野宮にうつり入せ給ふ也其儀先吉日をえらび又河原の御禊あり初齋の御禊の時のごとし但此度は御輿にめさる御輿のをさ十人輿丁四十人駕女十六人は御めのと二人女藏人六人女孺四人小女四人のる也女別當以下車にのる勅使大納言一人中納言一人參議二人四位五位四人内侍一人并外記史太政官の史生辨官の史生官掌其外神祇内藏縫殿陰陽大藏宮内大膳木工大炊

主殿掃部造酒主水左右の馬寮等の官省寮のつかさ共供奉しつらなり御祓ありて後饗膳などたび事畢ぬれば御輿をめぐらして紫野に入らせ給ふ宮にとまりて更に祿をたびけるさて毎年四月中酉日に賀茂兩社の祭に參らせ給ふと云々齋院につきたる官を長官次官判官とて此院に事をうけ給りつかふるにさし定置るゝ也齋院の御代々歌よみ給はぬはなしとぞ但有智子内親王は御ざえすぐれ給ひて大和もろこしの文の道にも通じ給へりしかば嵯峨天皇賀茂齋院に行幸なりし時齋院のつくり給ふ其詩云、

寂々幽莊迷水樹、仙輿一降一池塘、棲林孤鳥識

春澤、隱澗寒花見日光、泉聲近報初雷響、山色高

晴暮雨行、從此更知恩願渥、生涯何以答穹蒼、

この詩天皇歎美おはしまし世をへて人は是を吟賞し奉れり神齋を重じ給ふゆえに定例として御禁忌の事ども或文にも出せりもとより此國は神國なれば佛法僧の名をだに忌給ふことにして佛をばながといひ經を染紙塔をあらゝぎ僧を髮長尼をば女かみながといひ佛法には日に一度食するをときといひふれたるをかたそなへといひかへて詞をさへ憚給ふ村上天皇の

佳子内親王三品

後三條院第六皇女延久元年卜定母
贈皇太后茂子能信卿女實公成卿女

篤子内親王准三宮

同第七皇女同五年
卜定母同上

齊子内親王

三條院御孫承保元年卜定母
下野守政隆女春日齋院卜申

令子内親王

准三宮
白河院第八皇女寛治三年卜定母中
皇后宮實子後鳥羽院母代號三條大宮

禎子内親王

准三宮號土
同第九皇女康和
御門齋院元年卜定母同上

宮子内親王

鳥羽院(榮花系圖六)白河院
トアリ皇女天仁元年卜定
齋院

惛子内親王

大宮
堀河院第三皇女保安
四年卜定母康實王女

恂子内親王

鳥羽院皇女大治三(二)年
年卜定上西門院卜申

禧子内親王

堀河院第四皇女長承
元年卜定一品宮卜申

怡子内親王

號北
輔仁親王第三女長承二年卜定母大藏卿行
小路宗女後三條院孫四代ノ帝ニアヒテ廿七年

式子内親王

高倉宮
後白河院第十一皇女平治元年
卜定母從三位成子季成卿女

僖子内親王

二條院第二皇女嘉應元
年卜定母師元朝臣女

頌子内親王

鳥羽院皇女承安元
年六月廿八日卜定

範子内親王

號六
高倉院第五皇女治承二年
角宮卜定坊門院母成範卿女

禮子内親王准宮

後鳥羽院第十一皇女元久
元年卜定母内大臣信清女

齋王卜定事

或記云延長九年十二月廿五日^九殿下着陣諸卿同着召
神祇官^令卜定齋宮齋院^先召^二外記^一召^二紙硯^一書^二

内親王名^令外記密封^二召^三神祇大副與生朝臣^一賜^レ之
令^レト先令^レト伊勢齋王^二度不^レ合至^三于三度^一合也
令^レト賀茂齋王^一一度合也殿下令^レ持^二外記^一參上令^レ
奏^レ了召^二與生朝臣^一被^レ仰以^二惟子内親王^一定^二伊勢齋
王^一以^二婉子内親王^一定^二賀茂齋王^一之由卜定作法詳見^二
于家諸記^一仍略^レ之又社家之假字記に云賀茂の齋院は
天子御位につき給ふ後必先女親王をうらなひ定て勅
使をして女親王の御方へ告らるさて勅使卜部を具し
て御祓の具櫛に木綿付たるを彼女親王家の四面と御
門などに立させらる其祓の事に相從中臣忌部等に祿
物など下さる扱賀茂御神へ公卿勅使を立られ齋院定
り給ひて當大神宮にいつきつかへ奉らしめらる由
を告給ふ齋院の御禊といへるは賀茂川に行啓なりて
御祓ある事也其儀式は先二日以前に齋院別當陰陽寮
其外供奉の諸司を相具して河原にいたり其所を點し
定て奏聞す齋院御神事の御所を宮城の中便所に定め
られて是を初齋院といふ此院にいらせ給ふとて賀茂
河原へ御車にめしておもむかせ給ふ其行列走女十人
御車ぞひ十四人手振十人御よそほひ物の唐櫃御手水
の具入たる唐櫃各一合供膳雜器衣服祿物などの唐櫃

乎止賣內親王齡母老身乃安美有爾依豆令退出留代爾已上廿字以補時子女王乎卜食定豆進狀乎參議左大辨正四位下藤原朝臣愛發乎差使豆申給止波久申并奉幣云々

文德天皇嘉祥四年四月辛酉遣二使者一向賀茂神社奉祭但齋內親王未レ盈三齋限故不レ得行レ祭云々

文德天皇仁壽二年四月乙卯賀茂齋惠子內親王禊二於河濱一是日始入二紫野齋院一云々

光孝天皇元慶八年四月九日己亥以二皇女伊勢齋繁子賀茂齋穆子一并爲二內親王一同十一日辛丑遣二參議刑部卿正四位下兼行近江守忠貞王一向賀茂神社告下以不改二齋王并爲二內親王一之狀上廿一日辛亥繁子穆子兩

內親王各賜二絹五十疋木綿五十疋綿二百屯細布二十端商布三百段貞觀錢二十貫韓櫃二十合一云々此後御代々齋王省二畧之一土御門帝御宇禮子內親王後鳥羽元

久元年爲二齋院一至於此禮子內親王以上三十五代自是以後斷絕畢御敬神之道衰故也可レ歎々々

有智子內親王嵯峨天皇第八皇女弘仁元年卜定母后交野女王

時子內親王仁明天皇第九皇女天長八年卜定母貞主女

亮子內親王仁明天皇第十二皇女天長十年卜定母百濟氏

惠子內親王

文德天皇第八皇女嘉祥三年卜定母藤原列子（但被廢也其事說世莫知之）

述子內親王

文德天皇第五皇女天安元年卜定母同（惟喬親王）

儀子內親王

文德天皇第三皇女貞觀元年卜定母同（清和天皇）

敦子內親王

清和天皇第十皇女元慶元年二月十七日卜定

穆子內親王

光孝天皇第七皇女同六年卜定母參議正如王女醍醐妃有明母

直子內親王

惟彥親王女文德孫仁和五年卜定

君子內親王

宇多天皇第十皇女寬平五年卜定母女御橘義子

恭子內親王

醍醐天皇第十九皇女延喜三年卜定母更衣鮮子

宣子內親王

同第十八皇女延喜十五年卜定母舊鑿女

韶子內親王

同第廿九皇女同廿一年二月十五日卜定母女御利子

婉子內親王

三品朱雀院第二十三皇女承平二年卜定母同（恭子內親王）

尊子內親王

二品冷泉院第六皇女康保五年卜定母贈皇太后懷子伊尹公女冷泉院女御

選子內親王

號大齋院（村上天皇第五皇女天延三）上代（年卜定母中宮安子師輔公女）

馨子內親王

皇后後一條院第二皇女長元四年卜定母中宮威子道長公女後三條院后

娟子內親王

號莊（後朱雀院第三皇女長元九年卜定母陽明門院三條院皇女後堀河左大臣俊房公北方）

椛子內親王

號六條（同院第五皇女寬德三年卜定母中宮嬪子）

正子內親王

同第六皇女天喜六年卜定母女御進子賴宗公女

外陣具等

一 狛犬左右金銀

一 影狛 左右代々名譽之畫工被_レ令書之例也

一 御臺盤左右數絹

一 御八足左右

一 御高杯左右

一 高燈臺左右

一 銚子提福宜方祝方

一 丸盤同

已上權殿分同前

高倉等之祭具以下

一 大瓶十二口

一 御鉢八基

一 樂器 但裝束舞面等近代斷絶

一 唐櫃 二合赤漆白綾覆二ヶ神供昇料也

一 貴布禰祭供料辛櫃

赤塗八合末社神祭供同用之金物覆白綾

一 同社日供運櫃二合

赤塗覆白綾紋祭

一 大幡 五色平絹 十張

一 班幡 五色絹或布 十張

一 白幕布三十張

一 筋幕布十張 寛永五年に

一 御簾 大二百五十三間

一 疊 五百九十一帖半

一 長床四十八枚

一 傾宮料御簾錦緣

一 競馬裝束 冠太刀兩袖兩襦唐總(唐總)蛭尾(錦)袴(唐織)下襦下帷子指貫以上二十人前外裝束三人前

神道行事諸具

一 大壇赤塗 四面

一 高軾座 四座

一 脇机 八脚

一 高机 二脚

一 高燈臺 八本

一 太麻臺 二基

一 金高杯三十六

一 雲盤玉盤

一 打鳴 二口

一 太元八宮岐神

一 御鈴 四振

一 水器 二口

一 洗米器 二口

一 瓶子 二口

一 御田樂々器

一 木綿襷九人前笛手拍子鬘編木二ヶ鞆大鞆二ヶ

一 貴布禰芝田樂々器

一 斑笠 御鈴 明衣 チハヤ 已上十人前

一 太田社每月神樂々器

一 大鞆 手拍子 鞆 御鈴 明衣

右所_二注記_一之外片岡貴布禰端兩社新宮太田若宮奈良

澤田氏神八社之内陣神寶神服外陣神器以下悉不_レ能

レ記_レ之但神宮寺經所等之佛壇行法之佛具迄寛永之御

造營時悉新調被_レ爲_二仰付_一于_二今無_一朽損_二辱用_一來之

候仍今度朽損或紛失之分新造修補等被_二仰付_一難_レ有

奉_レ存御事御座候

齋院

嵯峨天皇御代天皇皇女有智子內親王弘仁元年卜定

淳和天皇天長八年十二月壬申替_二賀茂齋內親王_一其辭

曰天皇我御命爾坐掛畏皇大神爾申給波久皇大神乃阿禮

米納法也
社司衣冠

御燈

晦日本社儀祝未社各祝淨衣參勤但丹波國由其庄爲沙汰勤之云々近代斷絶

太田社御神樂

每月十日夜陰太田社之神子參向執行之

節分追儺祭

每年於御影像谷有具儀近代斷絶了

右每御神事社司廿一人諸役氏人忌子參向并陰陽祓奏樂等之儀有之又刀禰神人下人役同參勤了但此年中神事之内宴儀等少々斷絶其外二季御神樂并勅使參向之奉幣等百七十年餘斷絶了雖爲社家一同之沙汰祭禮神供甚簡略而勤行之次第粗注進之神寶神服祭器等

一 內陣之御靈寶

上古傳來不易之靈寶深祕之分等者不記之此外御造營之度々被新調奉納之分如左

一 御飭劍唐組平緒

一 御平劍錦袋

一 御弓錦袋

一 御矢鎗矢一双錦袋

一 御鉾二本

一 神服等辛櫃二合左右各蓋錦

一 御冠纓

一 御帶琢玉也(イ馬腦)紋袋

一 御笏

一 御扇檜扇

一 御袍夏冬

一 御直衣夏冬

一 御表袴

一 御指貫

一 御大袖夏冬

一 御小袖夏冬

一 御沓御草鞋

神器等辛櫃二合左右蓋錦

一 御飯窪器

一 御銚子金銀二枝

一 御盃金銀同臺

一 御泔器金銀臺

一 內陣飭具等

一 御濱床帳臺

一 四季御屏風代々名譽之書之

一 御机二脚

一 大瓶二口

一 小麻

一 龍鬚御平敷龍之繻綿緣裏緋

一 御厚疊繻綿緣

一 御壁代白綾紋葵

一 御簾錦緣金龜甲

一 御下襲裾夏冬

一 御大口

一 御單衣

一 御襪子

一 御打羽

一 金銀御箸同臺

一 提子金銀二口

一 御椀金輻輪角鹽

一 御櫛笥蒔繪

一 衝立障子四季繪

一 小八足螺鈿

一 大八脚御臺盤一牌

一 大幣二捧

一 御茵白錦中紋三巴

一 八重疊錦緣

一 御几帳赤浮線綾(三分一白色)紋桐篠蝶鳥

一 御幌綾緣紋

一 御帽額

四日

御葛蒲並御物事社司布衣但社主可有出仕

五日

已刻御戸開神供自左右調進之社司束帶其後於貴布福同官館饗膳以下經營之又十番之競馬勝負舞等有之但於馬場邊構領宮屋奉勸請神主着座束帶奏樂

六日

昨日競馬之乘尻廿人參詣于貴布福御物事有之

六月御戸代會

日不定但中古以來六月晦日福宜方御戸代會勤之

同月廿九日

小月者廿八日於二鳥居前夜陰有猿樂晦朔兩日於社家亭有饗膳歌舞之祝儀入夜御戸代會神事御戸開神供自祝方獻魚鳥其外境內之河魚等社司衣冠有名越祓之事

祝方御戸代會

七月朔日正祝沙汰也

翌日

晝遊勸盃等如之福宜方之儀

七月七日

五節供已刻御戸開內陣外陣御神供并河魚案等自左右獻進之樂人奏樂

八朔

獻八朔之御神供

二日

後宴御納禮社司布衣

同日

鞍馬僧侶於貴布福社前有施主經之事

九月八日

夜陰社司布衣着土屋於橋殿南庭有十番相撲內取之儀大宮小山岡兩鄉者右方小野岡本岡兩鄉者左方各饗膳但貴布福兩官沙汰之

九日

五節供已刻御戸開內陣外陣御神供自左右獻進之神前之儀事於細殿南庭十番之相撲并勝負之舞等有之舞近代斷絕了奏樂如三元日

十日

饗膳之儀有之但左方者中村鄉右方者河上鄉沙汰

玄猪

十月亥日御神供獻進當番社司衣冠參勤之

十月晦日

於貴布福兩官亭神供經營之儀露攝并預事等如四月之儀

同日

御田刈之神事權祝忌子社務代參向于御封田令神夫刈之

同日

十一月爲臨時祭神齋令陰陽大夫以忌竹立於社司之家々如三月晦日之儀

十一月朔日

貴布福臨時御神祭也神供內於貴布福兩官館

二日

於貴布福兩官館內肸食如四月

氏神祭

初申日儀式如之

御祓

初寅日戌刻御戸開奉祓清於內陣外陣但十一月朔日相當於卯日一時者十月晦日有此儀

同日

於廳屋社司氏人饗膳有之

相嘗會

初卯日也巳刻御戸開內陣外陣御神供自左右獻進但今日始當年新穀生茄子等供之自是神主忌子食新穀例也又祠官束帶自今日着冬裝束

翌日

後宴御納禮食薦座有之

御神樂

日不定如四月之儀近年斷絕了

臨時芝田樂

如卯月之儀

臨時祭

中西日巳刻御戸開內陣外陣御神供自左右調進之四月祭禮并臨時祭粗前記之奏樂如例

倚羅滅鬼

十二月日不定饗膳御服所之沙汰也

小祭

十二月廿八日大月者廿九日夜陰御戸開御神服并御神供御封米調進之御小庭與中門前一於兩所令神人算計御封

十五日 雞鳴刻御戸開神供自一方調進之
社司衣冠樂人奏物音如元日

同日 夜陰於印鑑前
爆竹之儀有之

十六日 步射神事社司束帶廿一宮之福宜祝前後立分
四十二射立儀式有之勸孟祿物沙汰之

十七日 神主參詣于貴布福
社有步射之儀

燃燈祭 正月下子日本社權祝井各祝方
布衣參向獻小松燃燈草等

節祭 二月日不定神戶
之一老沙汰之

土解祭 二月日不定御戸開神供自一方調進之社司衣冠今日
社務代權祝忌子參向子御戸代田而卜定苗代令時種
子(朱書近
代晦日也)

九日 貴布福祝詞師精進頭等
參向于彼社獻神供

三月二日 御物(御膳也)
事社司布衣

三日 五節供已刻御戸開神供桃花辛夷等自
左右調進之社司束帶樂人奏樂

四日 後宴直會食薦
座社司布衣

十日 徘徊花祭也但河上鄉岡本
鄉中村鄉之土民每年勤之

晦日 貴布福社神供經營
於兩官亭勤之

同日 露掃並預事二少
度饗膳行之

同日 來月爲御祭神齋今日令陰陽大夫於祠
官家々門々立忌竹禁僧尼重輕服穢人

四月朔日 貴布福御神祭御戸開爲兩官御沙汰御辛櫃海藻魚鳥
種菓種菜四十合調進之當時七合也簡略也神主奉幣

衣冠兩官自
今日夏束帶

二日 號昨食貴布福一方直會井
饗膳獻酒於廳屋行之
於貴布福兩官亭號
內昨食勸孟有之

同日 氏神社御祭 初申日也社司出仕五官衣冠以下之社司淨衣也舞人
十人騎馬參向子氏神社奉幣下向子小森社有
舞樂
之儀

中巳日 定齋院恒下事井奉園
御生所之儀有之

御稷 中平日戌刻御戸開內陣外陣御掃除御臺盤御入足等令
被清之今日獻夏神服奉替冬神服社司衣冠
御戸開獻葵桂並神
幸有御生所之儀

同日 國祭也又執柄殿下賀茂詣其次
第見于格式(自中古斷絕)

中申日 御祭也已刻御戸開神供自左右獻之祠官束帶但自今
日著夏服或御祓以後更衣云々奏樂如例乘馬五疋
薦座有之

中西日 後宴御納禮食
薦座有之

次日 日不定御戸開神供以下一向祝沙汰之社司衣冠五官各
於澤田社前奉幣權祝社務代忌子等參御封田而令爲
植早

植御祭 日不定御戸開神供以下一向祝沙汰之社司衣冠五官各
於澤田社前奉幣權祝社務代忌子等參御封田而令爲
植早

御神樂 日不定社司布衣但仁堀庄
領主必有出仕近年斷絕

芝田樂 日不定貴布福兩官代官井八乙女
等參勤于貴布福社執行之

五月朔日 御馬番立廿正足
汰馬退速內覽

三日 競馬乘散供祓有之令陰陽
大夫立忌竹禁僧尼穢人

えて候自餘の神事は貴布禰の兩度の祭に四月朔日神
 供の御から櫃七合に魚鳥神膳の御をなへ窪手一本葉
 腕にひら手に賀茂の供御所にて盛とゝのへ賀茂より
 昇運び毎年の祭今に絶る事なし此神事には賀茂より
 社司氏人ことくくまいりかつらかけ渡し歸路に市
 原野にて駒乗かへし祕歌を唱ふる社例あればかの所
 をかれの馬場と唱ふ歌連と書り此翌日には還立とて
 賀茂廳屋にてひもろぎとて社司氏人直會の事あり其
 外貴布禰の芝田樂と申事今に勤來りて候もことふり
 て八處女八人まいりまだら蓋を着しちはやの袖を翻
 し神歌を唱へてめでたき作法に勤來れり又止雨祈雨
 の事は昔より勅使を立られて祈雨には黒毛の神馬止
 雨の御祈には赤毛の駒を引立られて宣命を讀みてぐ
 らをさへ給ふ賀茂氏の貴布禰の社職かけたる祠官
 其外神主以下彼社に参りむかひて祈り奉る事なりか
 の雨乞によみける賀茂幸平が歌新古今集に入たり其
 詞書に社司ども貴布禰に参りて雨乞しけるついでに
 よめる

大御田のうるはふばかりせきかけて

井せきにおとせ川上の神

かやうの神事ども年中七十餘度今にその神前の式法
 絶事なしといへども神供など甚簡略ながら少分の社
 領ゆへとゝのへわづらふ御事ばかりに候然ども當皇
 太神宮第一の葵祭に勅使官幣の立申さゝる事のみ社
 家中年比の歎にて候へば天下の五穀成就の御祈は國
 家泰平の根本たる御祭の御再興に過べからず候と葵
 草の二葉にかけて年ごとに神にいのり君に願ひ奉る
 ばかりに候いづれの御方ざまにも此神國の古風をあ
 ふぎ興させ給はいなか御武運長久御子孫繁榮國家
 太平の神鑑を照し給はざらむや

年中御神事次第

正月朔日

五節供始已刻御戸開神供自左右調進社司束帶
 獻御齒固并壽香酒等樂人奏樂也四方拜有之

二日

福宜方節養饗膳酒肴引物神主沙
 汰於社家行之朱書今絶

三日

祝方節養正祝沙汰饗膳
 以下同前朱書絶

四日

祈始之儀有之朝御料與ミ夕御料之間也并神主參詣
 于御祖社之事又於社務館有古書初詣初等之儀

卯杖

初卯日卯杖御戸開
 獻卯杖社司衣冠

七日

雞鳴刻御戸開若菜獻供自一方調進之并白
 馬奏覽之儀有之社司衣冠樂人奏樂如元日

八日

田所始之儀有之五郷之田所各淨衣於社家御物事有之
 但十一日正大工機持來申云千町萬町の機奉渡云々

十四日

御棚會戌刻也兼日以三郷御結鎮錢沙汰之至今日同
 御棚六脚魚鳥種菜等調進之社司布衣於神庭奉幣

ても足そろへに出足遅ければ社法にまかせて如^レ此
なり御馬奉行立腹無^ニ是非^一云々又天正二年競馬には
信長公御祈願として廿疋の御馬を出し立らる此時御
召用の鞍皆具の飭あたらしく仰付られたるを賀茂社
人に乗初させよと太田又助と申せしを御奉行にて仰
くだされしを其御奉行社家にて語り給ひしは此御鐙
は攝州一谷を義經の落し給ける時の鐙なり又御鞍は
頼朝の御鞍なりしを相傳て越前の畠田<sup>○田一本
山に作る</sup>殿よ
り取置しを修飾など仰付られしを今日乗初に且は御
祈念と思召していまだ出來せしより召事なくて御馬
に具して引立らるゝと云々希代の名物とて社家中拜
見したる由社記にみえたり此等の例によりて秀吉太
閤の御時にも御馬出し立らる其外武家の御衆へ仰せ
られて廿疋ながら各おとらぬ逸物のはや馬ども出し
立らるされど馬の番立をば古をあらためずかの昔の
庄々の名どもを乗尻の廻文にも書きたりて今に此神
事のみ武家の御とりもちゆゑに御馬出候へば外の入
用は少分の社家僅づゝ分納る給田役田の領米に石打
米かけて都合二百三十石計競馬足汰兩口の雜用を例
年怠事なく勤來候葵祭臨時祭も神前の作法どもは神

供以下甚簡略ながら勤來申候又正月十四日御棚會と
申御神事は右に申如く後一條院の御代愛宕郡を賀茂
御神事領に御寄附せられしより今に河上郷<sup>賀茂
郷</sup>大
宮郷小山郷岡本郷^{錦部}中村郷小野郷等の御棚を白木
を以て新造いたし安曇河の大鯉大鮎と號して小鯉小
鮎をそなへ海魚も小魚干魚等を代とし雉の付鳥など
かの棚六脚に盛かざり毎年そなへ六捧の幣を奉り候
此曉の御戸開古より今に刻限を不^レ違つとめ來候此
御戸開の事を五條三位俊成卿の歌に

十日あまり四つといふ夜の御戸ひらき

ひらくる御代はかくそたのしき

此歌はかの卿通夜し給ひしに告給ふともいへり又家
隆卿も

神山の正月のなかは月さえて

鳥の初音に御戸ひらく也

此御神事の儀式のみ大を小にもちゐかへ候ても神供
以下かはる事なく勤來候はかの六郷の領知とも御檢
地より零落にて大野郷などは大かた大徳寺領になり
小山小野郷も他領になり行候へどもかつゝ今に社
納あるゆゑに其領に石打米をうちかけて絶ざるとみ

尉能行定平基政光頼頼業等大路を渡る御棧敷の前にしてはことに心づかひし侍ると云々

五月五日競馬は堀河院の御叡願にて五穀成就天下安全の御祝禱として寛治七年より始らる十番廿疋の馬料を寄られ例年に執行せしめらるかの武徳殿にてありし面影をうつされ勝負の樂を奏し神寶なども以前に渡る也乗尻は近衛司の左右にあらずふ事身をすてて勝負をきそひいどみしとぞみえくらべ馬の歌にとねり子かちかふる馬のあしうらに

心くらへのみえもする哉

又競馬右方のかちたるには狛の亂聲を奏するといへりかやうの式は競馬記にくはしければしるすにあたはざる儀也定家卿近衛の將たりし時乗給ふとて社に定家鞭とて今に傳へたり彼卿の歌に

埒のうちにくらぶる駒のかちまけは

のれるをのこの鞭のうらから

と讀給へるはしらすこと時にてや侍る此競馬料も壽永元暦の比社納なくなりて候つるを鎌倉右幕下の御くだし文東鑑に記されたるごとく神領五十餘ヶ所よせられし内に十番の馬所載て候一番は美作國倭文庄

の御馬二番は加賀國金津庄の御馬三番は播磨國安志庄四番は能登國土田庄の御馬五番は美濃國脛長庄是等の庄々此外何も廿疋の馬を其庄々よりぞ出したてける元亨の比競馬料運送なかりしを尊氏將軍の御時の下文にて他國の神領少々かへしよせられて諸神事簡略ながら社家の沙汰として無_三退轉_一勤來候武家の御所より御祈のため名馬など引たてられて度々御覽じありける事あり近代には天文廿一年五月五日義輝公渡御なされて御見物ありける其時さらに三番臨時の競馬あり乗尻も御馬も相應してすぐれたるを神事はてゝ走乗るよしみえたり其後信長公も御見物あり又後陽成院御即位あるべきみぎりいまだ親王御所と申奉りし御時御敬神のため競馬の日行啓ありて御覽の事あり永祿七年には公方の御願として廿疋の御馬引たて奉らる鞍皆具までいときら／＼しく目出たかりし見物也とぞ社記に見え候永祿十二年公方義昭公渡御御馬廿疋引立らる元龜元年の記云武家御所の御馬二十疋の内に荒馬三疋あり一番の左は倭文料馬社例の如く二番金津庄の料馬は八番へさがり一疋は九番へさがり一疋は十番に下る公方御寮の御馬と

位をすべらしめ給ひて次の帝にいづれかと議問給ひて帝徳にもかなひ給ふ聞えあればとて小松の帝いまだ式部卿親王と申てかすかなる體にておはせしを御位に迎つけ給へりしが三年ばかり御位にて其御子の末に王侍従と申に御讓位ありて宇多天皇と申是也神約のいちじるきを覺し出て臨時祭を奉られ御敬神の官幣年ごとに奉り給ふ事嚴重に詔を下し仰せられけるとぞかの霧立しことを

きりこめてかもの河原にまよひしや

けふの祭のはしめなるらん

と續古今集に關白左大臣良實公の詠にて侍りし此祭の發遣の高莊行かなる事葵祭に大概おなじ挿頭の花などぞ異なる兼日に試樂とて舞御覽などあり還立の禁中の式しるすもさらなり此祭の使にたちてのあしたにかざしの花にさして左大臣の北の方のもとにいひつかはしけるとて參議兼茂のむすめ兵衛といへる女官の歌に

ちはやふるかもの河邊の藤浪は

かけて忘るゝ時のなきかな

承久三年十一月廿四日臨時祭つかひに二度立て侍従

の宰相定家卿神主重保政一がもとへ送られし立かへり二たひかさす藤浪を

みたらし川に神やうけゝん

返し

神かきにふたゝひかさすふちのはな

雲のうへにそかけなひくらん

此祭に琴など數つらなりしをそのことなくなりぬとなげきて三位氏久の神主のよめる歌則新千載集に入られける其詞書に

當社の臨時祭に山城國のみこともちなどもなくて社の和琴をかり渡され侍ければみし世にもあらずすたれ行さまを思ひつゝけてよみ侍ける引かへてなり行世こそ悲しけれ

昔のことのしらへならねは

卯月の葵祭も壽永のさはぎより此比ほひ世の亂にて神事料も落行つれば祭も絶々なりしを鎌倉の大樹の御時公家に仰合せられて神領などもかへし寄られ神事も再興ありしとなん或記に云嘉禎四年四月十六日辛酉賀茂祭を將軍家御見物有けり勅使の出立出車騎馬のかざりまで例年に越て花美なり大樹の御家人延

の御神にまいらせ給ふ先幄の内に入らせ給ひ暫ありて社前の右なる殿に入おはしまし座し給ひて御拜祭儀祝詞の事をはればまかでさせ給ふ山城介東宮の御使中宮使馬寮の吏近衛使内藏吏各例のまゝに御幣物など捧たてまつらしめ毎度大かたは及夜のよし社記分明也御車にも葵をかけつらね使の雲客社司までも然也云々凡此葵の内侍を出し立給ふは中納言の息女を立しめらるゝ例にて此賞に依て除目などにも年給を恒例にまし給ふ事也云云此葵の出立前日朝廷にして天子出御なりて使などめして饗膳献酒の儀式ありて舞人舞樂を奏し奉る御試の舞樂なりとぞ申侍る還立とて祭使御所にかへり参りても音楽など儀式見物なりければ永久四年四月廿三日の還立の儀式御見物とて太上皇右大臣以下めしぐせられて内へ御幸なりけり連年の事也云々抑又當社臨時祭と申は人皇五代宇多天皇寛平元年十一月下酉日始めてまつり奉らる關白昭宣公の嫡男本院のおとゝ時^平其時は近衛中將なりしを勅使に差參せられ此時藤原敏行朝臣に仰られて和歌を奉らしめらる

古今集卷輔

ちはやふるかもの社の姫小松

よろつよふとも宮はかわらしと詠じて奉れり此祭の儀式官幣神寶神馬舞人以下四月の祭のごとくにて御代々恒ねとして奉らせ給ひける其次第等諸家の舊記歴然なればくはしく注進にあたはず但寛平の帝の始奉られし御事は此天皇いまだたゞ人にて王侍従と申せし冬の比賀茂河原に狩し行ひける時俄に天霧立滿て四方暗くなりて御神現形ましゝ告宣て我は是賀茂の神也當社に冬の祭なくて物うく覺るに臨時の祭を給はるべし此契約を申さんために現形し侍りぬと仰られければ答てのたまはく我に宣告給ひてもすべなき身に候へば帝へ申させ給へとありしかば思ふやうありて申也たがへ給ふましとて御形見へすあがらせ給ひしかば忽霧晴れわたれりけるに侍従の大君かたじけなく恐み給ひ奇靈の思ひをなしおはせしに其時の帝は清和第一の親王にて陽成院と申せし御代也九歳にして御即位なり御母後の御はらからにて昭宣公攝政し行ふ^{然に}此帝^帝歡心御物くるほしくて帝道にかなはせ給はぬ御事をのみ好せ給ひければ攝政を盡し諫させ給へども改隨給はざればたすけ佗せたまひて公卿衆議に及ぼし既に御

云也未の日或は申日諸衛府に警固の儀を仰られて陣を固て必ず警固の事ありたとひ依_レ有_二觸穢_一祭は停止ありとても猶警固有_二これは國祭あるの故也云々國祭は申中日也此日關白賀茂詣事あり幣帛神寶のからびつ雲客前驅につらなり卿相扈從あり其外舞人陪從官人おほく供奉しつらなりて參らせ給ふもとより當祭には葵桂を冠にかけ給ふ往昔神託の靈現なる御告ありしゆえ也云云殿下もこれをかざし給ひて乗車にて御參詣なり御琴持菅笠深沓をめしぐせらるゝ例なり社頭にて御奉幣あり葵桂を禰宜持參りて捧れば拜しかざし給ふ東遊求子するが舞など舞人奏して社づかさ神酒をまいらす三獻の御かはらけめぐる天祿年中謙徳公參らせ給ふこれや始なるかく執柄の詣給ふは國の高機を執つかさどらせ給ふ故に殊に當御神をあがめ奉り毎年詣給ふとぞこれ等のこと他社にことなる社例天下の御崇敬年中行事にも分明に候へば不_レ及_レ筆候中西日は祭の當日とて齋院まいらせ給ふ勅使院宮のみてぐら個參り給ふ其路の程の行列れるあらましの次第は先歩兵左右に各四十人騎兵左右に各六十人郡の司八人健兒各十人檢非違使十人史生さく

はん據各一人山城守一人或介次内藏寮の官幣次に中宮の御幣東宮の御幣次に宮主東宮の走馬中宮のはしり馬各二疋馬寮の走馬左右各六疋引つなる次に東宮の御使中宮の使馬寮の吏近衛使内藏寮吏次に園司中宮の女藏人内藏人中宮の命婦あひつらなる次に左右の衛門兵衛近衛各二人次に齋長官御輿駕與丁前後二十人御輿のをさ左右各五人女孺各十人_{はとりわら}執物十人次に腰輿供膳のからひつ三荷雜器の物二荷膳部六人次に陰陽寮漏刻次に騎女十二人童女四人院司二人唐櫃十荷_{神寶}藏人所の陪從六人次御車内侍車相つゝ_{近代後にあ}女別當車宣旨車女房の車_{童女是}馬寮の車_{り云々}相つらなれり齋王先下の社より詣給ふ暫社頭の小舎に留りましゝて御衣裳を清き服に差しあらためられて後腰輿にめして御社に入おはしますこれより輿長御こしを昇奉る凡賀茂兩社の式に神の御告ありしより社に詣る事も奉る幣物なども下社を先にせらるる例也伊勢の外宮より先にせらるゝがごとしと云々扱社より十許丈こなたにて下輿ましゝ歩行あり此道の程兩面をしゝ社の前左の殿に座し給ふ其作法はもらしつ事了て社外に出まして牛車に駕し給ひ上

神代のうらや今のみあれ野

是まで風雅集に入らる

祭禮

欽明帝

志貴嶋宮の御宇天皇の御世天下國舉て風吹雨零その時卜部伊吉若日子に勅してうらなはしめ給ふにすなはち卜して奏す賀茂の御神の崇なりと云々仍四月吉日を撰て馬に鈴をかけ人猪頭を蒙りて驅馳して以て祭祀をなしてよく禱祈せしめ給ふこれによりて五穀成就し天下豊年也乗馬こゝにはじまれりと云々又月令云祭日楓山の葵を挿頭す當日早朝に松尾社司等をして挿頭の料にたてまつらしむ内藏寮に參候す祭使すでに來楓葵を庭中に置詔戸申祭使等各かざして出たつ禰宜祝等祿物を賜ふ又馬を走す近衛一人と云々文武天皇二年三月辛巳山城國賀茂祭日會衆騎射を禁ず大寶二年四月庚子祭日徒衆會集執仗騎射する事を禁ず唯當國人不_レ在_二禁限_一云云元明天皇和銅四年四月乙未詔して祭日自今以後國司毎年親臨檢察焉云々山城の國司必出立事はより始めて後年絶事なし嵯峨天皇弘仁十年三月甲午勅して山城國愛宕郡賀茂御祖并別雷二神の祭よろしく中祀に准すべしと云々

凡祭祠に大祀中祀小祀の三のわちち有大祀は神齋一月天子御代始に一度の大嘗會是也中祀は三日賀茂祭の御神齋是也餘社の祭は悉小祀なれば一日の御齋也承和三年四月乙酉紫宸殿に出御ありて賀茂祭使等の鞍馬のかざり從者の容儀を閱覽まし_レて使等に賜_レ祿播磨守從四位下橘朝臣永名をかりに内藏頭として祭使に供せしむ云々當社の御祭は御代々の聖主殊に嚴重の御崇敬にて禁闕觸穢の年ならでは止事なく_レて勅使官脩御發遣の儀式天下の壯觀不_レ足_二勝言_一也其故いかにとなれば天八重雲分て天降給ひし天皇の御祖神なれば朝廷の御守りふかく鎮護國家の神德揭焉に御めくみの告なりし御ゆえなりと云々此神國の祭と稱するは賀茂葵祭の儀也諸社の祭といふには官人使として發遣あるも奉行職事上卿の仰をうけて檢校して行事なるを當祭の儀は天子出御ありて禁中へ祭使諸司内侍以下女官衛府の容儀神寶列立の次第にいたるまで必觀覽ありて參向あるおもき儀申もさなる御事也祭日は卯月中酉也然に和銅の帝の詔ありしより山城國司よろづ祭具不_レ足_二裁_一を檢校してかりにも輕忘_レある事なし祭以前僧尼重輕服人不可_二參内_一

る人は賀茂大神宮の御氏子也せめては年に一度參詣を
もいたし日に一たび北に向ひて祈念遙拜をもいたす
べき事也云々又天子御拜の事を公家の御記に賀茂
上下皆堂上にして御拜あり枕上の事鳥羽白河兩法皇
ことに北枕におはしますと云々賀茂と伊勢御神此神
國にして靈驗あらたなる大社におはします事はもろ
こしにも傳うけ給りて皇朝類苑と云書に書載せしは
日本は神國にて專神道を崇て祠廟多し伊州に太神あ
り山州に賀茂神まします三五歳の童子に託して祠廟
の事を降言すと云へり當御神の託宣おはしまし或は
夢に告させ給ふ事どもあげてかそへがたし神詠ども
の勅撰集に入たりけるは

神たのむ人いたつらになしはては

又雲分てのほるはかりそ

慈悲のめにくしと思ふ事そなき

とかあるものは猶あはれにて

鏡にも影みたらしの水の面に

うつるはかりの心とをしれ

これ又賀茂に詣ける人の夢にみえける

左兵衛督高遠といふ人賀茂に七日詣けるはての夢に

御社よりとてちはやきたる女の文を持てまへにきた
りけるをあけて見侍りければかく書て侍り
ゆふだすきかゝる袂はわすらはし

ゆたけにとけてあらんとをしれ

この後やがて大貳に成て侍りけるとなむ
頼もしなちかひたかへてもろ入の

待ためしにはなれをひかせん

此歌はある人賀茂大明神より歌を給けると夢
に見ておどろきてみれば白きうすやうにかゝ
せ給ひておかれたる御歌と申傳ける

又神縁に思ひよせたる詠歌ども多し

續拾遺

ちはやふる別雷の神しあれば

後京極攝政

をさまりにける天のした哉

神山の高根にかゝる白雲や

參議雅經

分し名残の雲のかよひち

天岩船を思よせし歌

神山に天の岩船こきよせて

三位賀茂氏久

つなきとめしも我君のため

御生所の舟つきといふを神主遠久がよめる

久方の天の岩船こきよせし

の主也口決云社は居也土者吐也土の生ずる所は口中物を吐がごとし稷は五穀の長たり土地より生ずる五穀を乳味として群生を養育せる仁慈敦厚の靈德廣大なるを社稷の神と申也云々 取要 又云社といふ字は示土とかかり土地より萬物を生ずる體無量にして名づけかたし就中五穀の諸靈をとり稷字萬理を攝して國土の主たる靈神なれば宗廟と云になすらへ對して社稷の神と申也云々

私記云國王中土に位し坐て黄色の御衣を着し給ふと也有二口傳云々

大江匡房卿記云賀茂神者日本國地主の神たりと云々畧之又或記云神山かも山同訓にして口傳あり往昔此御神降臨まします所岩根あり是を降臨石といふ其神山御生所云々 又云加毛の神日向の襲の峯に天降ましまし漸山背の岡田に遷り給ひ石川の狹見の小川を見巡し其清流をめまして御手を洗はせ給ふ故に御手洗川と號すといへり又天岩船を漕よせ神の現形ましましける其所を御生所といふ其御生所のわたりをみあれのとも神代の浦ともいひ船差の入江ともいへりやまとかも海にあらしの西吹は

いつれの浦に御舟つなかも

といへる歌は賀茂祭の午の日詠じとなへ侍るふる歌也云々

當皇大神宮の御事は書々説々おほしといへども昔よりつかうまつる氏の宮人だに心府に祕し來るなれば外より本地とて決しあらはせる社記もなきにこそとみえて候歟吉田の某諸社の神縁を注記せし中にも當宮の御事は不詳と載たり神祇の長官といふ吉田の家すら本縁の正儀は書々にまどひて候やらん然どもト部兼邦百首和歌を詠じて神道の事を注せしには國中に生るゝ人は賀茂の御神を氏神とこそいふべけれ然に其社の宮人をはじめ此境より上下は祇園の氏子といひ或は稻荷の氏子今宮御靈の氏子など云事更に本據なき事也それはうぶすなの神とこそ云つべけれ山城國の總社は賀茂大明神殊に帝都の鎮守也祇園は清和の御宇八幡も同じ貞觀年中稻荷は元明和銅に始れり賀茂の御事は上古よりの御事也世俗盲昧にしてかゝる事を申あへり淺ましき事也あを女房などの申あへるを上ざまの人も聞しめしてそれを本説に思召事歎しき事になんもとより山城國殊に愛宕郡に生る

山城國風土記云可茂を賀茂と稱するは日向國曾の峯に天降まします神賀茂建角身命是也神倭磐余彦の御前に立おはしまして大倭かづらき山の峯にやどりまし／＼かしこより漸うつり山城國岡田の賀茂にいたり給ひ山代河にしたがひて下りまし／＼葛野河とあふ所にいたりまし／＼て賀茂川を見巡してのたまはく狭小なれども然も石川清水ありとのたまひて名づけて石川瀬見小川といふ彼河上より上りまし／＼て久我の國の北山の基に定り坐すその時より賀茂と名づくといへり賀茂建角身命丹波國神野の神伊可古夜日女を娶りて子を生ます玉依日子次に玉依姫と名づく玉依姫石川瀬見小川にして川遊せし時に丹塗の矢河上より流くだる則とりて床の邊にさし置つひに孕て男子を生りひと成時外祖父建角身命八尋の屋を造り八戸扉をたて八腹の酒を醸して神集につとへて七日七夜樂遊して子に語りていはく汝か父と思はん人に此酒を飲ましめよ則盃を舉て天に向て祭をなし屋の薨を分穿て天に昇るいまし祖父の名によりて御名を可茂別雷尊と申すいはゆる丹ぬりの矢は乙訓郡の社に坐す火雷命也建角身命と丹波神伊可古夜日子

と玉依日賣三柱の御神は蓼倉里三井社に坐す三身之神坐故に三身社といひしを今漸に三井と云と云々此三井社は中賀茂の社にまします上件の説秦氏本系帳には秦氏女丹塗矢を感じて産生すといへり少異同儀たれば畧之

無題記云取要夫天照太神地神五代の住所は陰陽次第麗氣記云日本國八壽四萬歳の時淡路の三上嶽にあまくだり給ひ三十二大眷屬を引率して庚申の年より春秋を送り給ふ事五十五萬五千五百五十年の次に布倉宮にうつり給ひ丙申年より年月を送り五十六萬六千六百六十六年又八輪嶋に遷り戊申年より年月を送り五萬七千七百七十七年又八國嶽にうつり庚申年より年月を送り五十八萬八千八百八十八年又丹波國與謝郡にうつり給ひ年月を送り給ふ事六十一萬千百十年又已上外宮御神事也云々賀茂に約すれば上賀茂の御事也又云鷲大明神三所たりといへども實は是伊勢兩宮是也有二口傳云々日本紀神代秘決云地神五代は五形の神なり五形を以て地の宗廟とし天照太神を地神と申也云々賀茂は天の神にして社稷第一の神と申也口傳深祕なる故不書之社稷と云は是五穀の長精地神

賀茂注進雜記

當宮本縁 諸書之説

賀茂皇大神宮の本縁は昔より一社の深祕にて社家中にも信機にあらざれば淺略の儀を傳へて相承の奥儀をゆるし傳る事なし況や他授に及び外に傳る事あらず候へば今以あらはに筆舌に難述候しかはあれど社家の文書所見の趣あらまし要を摘て注進つかうまつり候此等の事は世間流布の書籍にも歴覽あるべく候歟或神書に云天地未分まろかれたる中に大もとの御神まします清るは天となり濁れるはくだりて地と成しより陰陽の兩神わかれましたて陽徳の御神は天の事をつかさどり陰徳の御神は國土をしろしめすといへり又云當社の託し給へる神詠に

ちはやぶるわけつち山に宮居して

天くたること神代よりさき

と託し給つると一本無託
以下六字みえたり同私記に賀茂御神

は陰徳にて男神伊勢は陽徳にてしかも女神に坐す天地陰陽兩神相對の御神徳靈驗いちじるくおはしまし

伊勢に内外賀茂に上下の兩社たせ給ふ深祕不可説の口決ども難筆相承の傳を受べしと云々

豐葦原ト定記云古に八十萬の神達を天高市に集給ひ神議に議り給ひて可遣神を神尋に尋出し奉り武雷の神と齋主の神とを降し給ひ千早振惡神を悉皆伏せまつろへて遂に報申す此後建角身命國々を見巡しおはしますにこゝに天鈿女命磐樟船を漕奉り尊を神代浦の浪靜なる磯まで送おはします仍天神より賜ひし三の神寶を以て此國の固とならせたまはんとて北山の麓に應化し百王を守り給ふ經津主武雷神も同此所に垂跡し給へりと云々

上宮太子記云平京深山なるを御覽じて宣はく國中の秀たる國日本の中心天下無双の勝地なり四神相應せり南は晴北は塞り佛閣皇居建立するに尤相應する也東に流水ありて福壽長遠のいはれをあらはす東西に長山遙に連れり諸方に靈神先立て此地を守護し給ふ我滅後百七十餘年ありて此所都なるへししかも北山の麓に月神の應化して百王を守り給へる靈神坐す即賀茂大明神の御事なり云々又同北山の高嶽に龍神常に止住し給ひ京城を守護す貴布禰大明神是也云々

賀茂注進雜記

目錄

- 第一 本綠 諸書說
- 第二 祭禮
- 第三 神寶祭器等
- 第四 齋院
- 第五 行幸官幣御幸 附祈願靈驗等
- 第六 造營
- 第七 社家 官位諸司
- 第八 神領

籍爲一家之書。或曰：「深祕。」或曰：「家傳。」甚以邪祕之。於是神國之教化陵夷。人非其人。異教之風義隆盛。道非其道。雖宗廟不尊。崇之雖社稷。以蔑如之。剩內宮祠官等時々及相論。文明延德之竺火神書悉焦土矣。痛哉。偶煨燼之餘。及管見之中。拾其祕傳。以設問答。筆之於書。以欲傳無窮矣。若夫舊事紀古事記日本紀等。則未聞其書義。何知其淵奧。唯以神宮相傳。故名神宮祕傳。問答以授三三子。必莫及廣覽云爾。

萬治三年三月二十三日

天牟羅雲命四十四世孫權禰宜從五位上度會神主延良

如キ文人ナク記シ留メヌ故也異朝本朝ノ文字ノ上ヲ
不_レ論神聖ノ上ヲ論セバ吾國ノ始ヨリ今ノ代マデモ
天照太神ノ御苗裔天位ヲ嗣セ給フハ神聖ノ德異國ヨ
リ遙ニ勝_レ給_ル驗ナラン歟如_レ此有ガタキ神國ナ
レバ龜ト八卦ノ數ナトモ異朝而已ナラズ本朝ニモ神
代ヨリ有テ用キ來ルト可_ニ心得龜ト八卦ナド云漢字
ハ異國ノ書來朝シテ以後ノ事ナリ神道モ易道モ自然
ニ從フ故ニ道理相叶事有リ殊ニ日本紀神代卷ナドニ
モ備_レ易漢字ニ顯シタル所アリ然リトテ易ヨリ出タ
ル神道ニハアラズ異朝ノ書ニ執シテ見ル故ニ周易ヲ
以テ日本ノ神道ヲ作り出シタル歟ナド、疑フ人有_レ
ド本朝ニ生タル人ノ意ナリ此ノ心ヨリ叛逆モ起也深
可_レ戒神道ハ日本ノ道也儒道ハ震且ノ道也佛道ハ天
竺ノ道也吾カ身ハ異國ノ人カ本朝ノ人カ身ヲ省ヨ如
_レ此了簡ノ上ニテ本朝ヲ主トシテ異國ノ聖賢ノ書ヲ
學ハ吾神道ノヨキ羽翼ナルベシ 問曰神道ニ二見ヲ
嫌フト云テ萬事ニ初一念ヲ用ル人アリ初一念ハ難念
ナク殊勝ノ心ナレド時ニヨリ楚忽ノ事モ可_レ有歟
答曰神道ニ二見ヲ嫌ハ楚忽ノノ初一念ヲ用ヨトノ事
ニハアラズ神道ニハ無ニ一見ニ至誠ヲ尊也二見トハ難

念ノ事アシク心得タル人ハ二見ヲ嫌フトテ楚忽ノ初
一念ヲ尊ブ也無ニ二見至誠ハ神道ノ極意ナリ二見ヲ嫌
フト云テ輕シク不_レ可_ニ意得能可_ニ工夫ニ二見ヲ不淨
トスル故ニ伊勢ニテ不淨ヲ祓除スル浦ヲ二見カ浦ト
云也同シ所ニ清渚ト云所有ルハ祓除シテ清淨ノ上ニ
テノ名ナルベシ二見浦ノ名義許多有レド疑シケレバ
云ニ不_レ足也 問曰天地ノ始ハ異國トテモ同ク然ラ
ン何ゾ國常立尊ヲ日本國ノミノ始祖トスルヤ小見ト
云ベキカ 答曰天地ノ始ハ異國本朝トテモ相違不
_レ可_レ有然レドモ吾國ノ神道ハ日本國ヲ主トスル故ニ
神書ノ說日本ニ限リタル如ク書タル也吾ガ國ノ元祖
國常立尊ヲ元氣化生ノ靈ニ配スル事ナレバ異國ト元
祖同ジ事ニハアラズ日本紀私記ニ日本ノ日月ト異國
ノ日月ト各別ノ由記シタルハ愚ナル様ナレドモ日月
ハ異國ト相違ナキトテモ配スル神ニ相違有ル故ナル
ベシ不然則私記ノ說ハ以_テ外ノ避見也日月ノ同キ事
ヲノミ知テ配スル神ハ各別ナル事ヲ不_レ知故ニ兩部
習合ハ起リタル也深ク思フベシ
本朝神聖之道被_レ混ニ異教ニ之後人不_レ知_レ爲_ニ天下國家
之道ニ誤以爲神祇宮人之法仍祠官職掌人等亦以_ニ神

太神御怒ヲ含デ天下ノ政ヲ聞食スヲ比喩シテ云タルカ此ノ事ハ口傳有ベシ能ク工夫ノ上ニテ道知ル人ニ問ベシ 問曰磐戸ノ前ニ懸シハ八咫鏡也咫ノ字ハ八寸ヲ云八寸ヅ、八ハ六尺四寸ナリ六尺四寸ナラバ延喜太神宮式ニ載ル御槌代ノ寸尺相違歟如何 答曰神鏡ノ御事ハ最極ノ祕事也但シ八咫鏡ト申奉ルトテ六尺四寸ト見ルハ誤也八者八花形ノ御鏡也咫ハ八寸ナレバ八花形ニシテ徑八寸ノ御鏡トナリ神鏡之御事ハ深々祕密口傳アリ殊更内宮外宮ノ御形ノ相違ハ憚多キ故ニ難言也 問曰神鏡ノ御事聞モ粟粒膚ニ生ズ明鏡ヲ御神體ニ用ヒ奉ルハ神ノ御心ヲ表シタリトモ云神トハ鏡ノ和訓ヲ中略シタリト也此ノ事如何 答曰明鏡ハ萬物ヲ照シテ一物ヲ不レ畜殊ニ正直ノ德ヲ備ヘタリ神ノ御心ト同キ故ニ神勅ニモ視ニ此寶鏡ニ當猶レ視レ吾ト宣ヘリ但シ他ニ不レ可レ求明鏡ノ上ニテ吾カ本心ヲ工夫シテ神ノ御心ト吾ガ心ト一致ニナルハ是神道ノ極意也 問曰神書ノ中ニ何ゾ八ノ數ヲ用ルヤ 答曰八ハ神道ノ愛スル數也其由ハ口傳有事ナルベシ但シ神代ヨリ太占ヲ以テ占合ト日本紀ニモ有リ龜ノ占モ有リ又鹿骨ヲ拔テト合シ事モ古事記

等ニ出タリ龜兆傳ト云神書ニモアリテ易道ト符合シ易ノ八卦ヲ以テ推シテ見レバ能合所モアリ其上神書ヲ漢字ト成ス故ニ日本紀ナドニハ周易ヲ合セテ云タル文書モ有リ心ヲ付テ可レ見所ニヨリ相違アレドモ大方ハ八卦ノ數歟 問曰異國ノ易道ヲ摸シタラバ神道ハ易道ヨリ出タタルカ答曰異國ノ易道モ人爲ニ出タル物ニ非ズ天文ヲ觀ジ地理ヲ察シテ始シ物ナリ本朝ノ神聖モ天地ノ理ヲ觀察シテ自然ノ理ニ從テ神道ヲモ教ヘ給フ也今トテモト合ハ自然ニ從フ也天文地理異國而已ニ有テ日本ニ有間敷哉喩ヘバ天地開闢ヨリ一度通路ナキ南蠻國ニモ衣食ヲ知リ殊ニ種々ノ器物ヲ持テ來朝ス此ノ衣食器物ヲ唐ヨリ南蠻ヘ教ヘタルニモ非ズ日本國ヨリ教ヘタルニモアラズマシテ南蠻ヨリ唐ヘモ日本國ヘモ不レ教其國々ニモ通明ノ人有テ自然ノ理ニ從事何ノ國モ不レ違コレノミナラズ禽獸マデモ異國本朝相違アリ或ハ木ニ巢リ懸或ハ穴ニ居テ其可レ食物ヲ食フ況ヤ日本ノ神聖異國ノ聖人ニ劣リ給フベキヤ但シ漢字ニ顯シタル書ノ上ニテ見レバ異朝ヨリ日本ハオトリタル様ナレドモ其レハ漢字ノ書ヲ日本ニテ學ビテモ吾國ノ書ナラネバ異國ノ

説ナレドモ今外宮ノ坤方ノ藤岡山麓ニアリ此ノ水ヲ
天孫瓊々杵尊御降臨ノ時持テ下リ給ベキヲ遺置給フ
故ニ度會氏ノ先祖天牟羅雲命又天上ニ登テ持下リ日
向國高千穗宮藤岡山ト云所ニ安置シケルヨリ此ノ界
ノ水モ清タルト也今モ此ノ水ニテ毎日朝夕ノ大御饌
ヲ炊備ヘ奉ル天上ヘ二度登リシ故ニ天牟羅雲命ヲ天
二上命ト名ヲ賜シ也丹州眞井原ヘ移シタレドモ雄略
天皇御宇ニ丹州ヨリ外宮ヘ御遷坐ノ時又伊勢ヘ移シ
給フ日向ニテ眞名井有シ所ヲ藤岡山ト云故ニ丹州ニ
テモ其所ヲ藤岡山ト名付今又伊勢ニテモ其在所ヲ藤
岡山ト云也此ノ眞名井ヲ忍鹽井トモ云忍穗耳尊ト云
御名モ忍鹽井ニ濯シ瓊ヨリ化生シ給フ故ナルベシ忘
井ト云所伊勢ニ有ト云傳テ其在所知ル人ナシ疑ラク
ハ天上ニ忘レ置給フ水ナレバ此ノ井ヲ云歟今ノ代ニ
兒ノ水ニムセタル時オシマツト唱テ咒フハ此ノ水ノ
事也天上ニテ神勅ニ忍水ト云テ咒ヘト有シ事御鎮座
本紀並ニ傳記等ニ有リマトミト五音通スル故ニ忍水
ヲオシマツト也此ノ水ニテ次タル御供ヲ頂戴スル輩
ハ必ズ壽ヲ保ト神書ノ説也 問曰瓊々杵尊ノ木德タ
ル證ハ如何 答曰忍穗耳尊ハ水德ナレハ水生木ト木

德ノ瓊々杵尊ヲ生ジ瓊瓊杵尊ハ木生火ト火德ノ火火
出見尊ヲ生ズ火々出見ハ火生土ト土德ノ彦波瀲武鸕
鷯草葺不合尊ヲ生ジ給也忍穗耳尊ヨリ葺不合尊マデ
水木火土ト相生事ハ世ニ流布ノ東家祕傳ナドニモ有
リ 問曰火々出見尊ノ海神ノ宮ニ至リ給トノ事其故
有リヤ 答曰異國ノ書ニモ孫思邈水府ニ行テ千金方
ヲ傳シ事有リ本朝ニテモ浦島ヲ常世郷ニ行ヌ此ノ類
ナルベシ但シ其指所モ有ル歟神代ニハ神變有シ事ナ
レバ左モアルベシ神書ノ如ク見テ可ナラン歟龍宮ハ
琉球ト音近シ琉球國ヲ云トノ説有レドモ古書ニ所見
ナシ 問曰素盞鳴尊ノ惡逆ノ故ニ天照太神天磐戸ヲ
閉給ヘバ國土常闇ト成シトハ指所有リヤ 答曰逆臣
ノ爲ニ犯サレ人君天下ノ御政ヲ聞食事無ハ天下常闇
ナルベシ又心上ニ取テ云ヘバ惡念起テ本心闇ハ日神
天磐戸ヲ閉給テ國土常闇ト成リシ也又日蝕ヲ云トノ
説アリ左モ有ベシ但シ神代ノ事跡比喩多ケレバ能察
スベシ磐戸ヲ閉給フハ人體ノ日神也世界常闇トナリ
シハ天ニ御坐ス日神磐戸ノ前ニ懸シ御鏡ハ地ニ御坐
ス日神也是等又天地人ヲ配合シテ云ヘリ神代ノ事跡
此等ヲ以テ類推スベシ是ハ素盞鳴尊惡逆ノ故ニ天照

卦ノ三畫ノ奇爻ニ比シタリ陰爻陽爻互ニ交テ三畫ノ後ニコソ三體ノ純男ハ有ベケレ三神ヲ其儘三畫ノ奇爻ニ比シテ純男トノ事其心如何 答曰此ノ説子モ不審ナリ知者ニ可レ問或曰日本紀ノ乾道獨化所以成ニ此純男ト云十字ハ後人ノ加筆ナラント予謂此三神ハ上中下ノ三氣ヲ云歟一氣生スレバ則上中下ノ氣アリ一物トシテ三無レ不レ備一息ニモ呼ト吸ト中トノ三アリ萬事萬物モ類推スベシ又泥土煮尊沙土煮尊大戸道尊大苦邊尊面足尊惶根尊此ノ六神二神ツ、耦シテ坤ノ三畫耦爻ニ比シタルト見ヘタレトモ予謂泥土煮尊大戸道尊面足尊ヲ乾ノ三畫ニ比シ沙土煮尊大苦邊尊惶根尊ヲ坤ノ三畫ニ比セバ其理可レ通歟其故ハ泥土煮尊大戸道尊面足尊ハ陽神也沙土煮尊大苦邊尊惶根尊ハ陰神也此六神ヅ、對シテ生ジ三陽三陰成就ノ上ニテコソ正陽德正陰德ノ伊弉諾伊弉冊尊モ現ジ給フナレ日本紀ニ上ノ三神ヲ乾ノ卦ニ比シ下ノ六神ヲ坤ノ卦ニ比シタルハ如何ト覺侍ル但シ出生ノ次第ナク上三神一度ニ出生シ下六神一度ニ出生ナラバ左モ可レ有歟有道ノ人ニ可レ正 問曰國常立尊ヨリ惶根尊マデ九神ヲ九ヶ月懷胎ニ取リ十ヶ月ニハ男歟女歟

其體顯ル、ヲ男ナレバ伊弉諾尊女ナレバ伊弉冊尊ト云ナラン歟其故ハ國常立尊ヨリ惶根尊マデハ形ヲ末レ現神ナリ此九神ハ懷胎ニシテ伊弉諾伊弉冊尊ハ男女ノ體ノ現レタル出胎ナルベキ歟如何 答曰此說理有リ天地人ノ始ル其形ハ違フトモ其理ハ不レ可レ違左モ可レ有 問曰天神七代地神五代トハ何タル故ゾヤ

答曰天照太神ヨリ天下ノ君ハ始リ給フナレバ其以前國常立尊ヨリ伊弉諾伊弉冊尊マデノ七代ヲ天神七代ト云天照太神ハ天下ノ君ノ始トシテ出見ナレバ其ヨリ以後五代ヲ地神五代ト云也 問曰天照太神ト素盞鳴尊ノ誓約ノ間ニ忍穗耳尊化生シ給フトハ天照太神ト素盞鳴尊ト夫婦ト成給フ歟 答曰天照太神ハ火德ノ神忍穗耳尊ハ水德ノ神也火ト水ハ尅ス素盞鳴尊ハ金德神ナレバ金生水ト水德ノ忍穗耳尊ヲ生給也人ノ世ニモ養子ヲスルニハ同性ノ中ニ子ノ列ヲ取ナレバ素盞鳴尊ノ御子ヲ養テ天照太神ノ御子トシ給ト神書ノ說萬代マデノ養子ノ法ナルベシ天照太神ノ御甥ヲ養子トシ君位ヲ傳ヘ給也 同曰忍穗耳尊ノ水德ノ證如何 答曰天真井ニ濯給フ瓊ヨリ生ジ給フ由日本紀ニ詳也其眞名井ハ丹州眞名井原ニ有リト齋部氏ノ

旺スル日五十四日ニシテ十八日不足也故ニ三歳マデ脚不_レ立ト云也 問曰蛭兒土德ノ神ナル時ハ木火金水德ノ神ハ何_レゾ 答曰稚日女尊ハ水德也大日女尊ハ火德也素盞鳥尊ハ金德也月夜見尊ハ水德也 問曰木火金水德ノ其證如何 答曰稚日女尊木德ノ證ハ金德ノ素盞鳴尊ノタメニ害セラレ給フ金尅木ノ故也木陽ハ稚ケレバ稚日女尊ト申也今按ニ紀伊國日前宮是ナラン歟古ヘハ木ノ國ト書ク弱浦アルモ稚日女木德ノ故ノ名ナルベシ玉津嶋明神ハ日前神也ト云祕說アリ然レドモ二所ニ御鎮坐不審也伊勢太神ノ荒魂ノ例ニテ見レバ玉津嶋明神ハ稚日女尊ノ荒魂歟猶可_レ考_レ之衣通姫ハ和歌ノ神ニシテ弱ノ字ノ和訓和歌ナレバ因テ後代ニ從祀スト云傳アリ但シ清輔カ囊草紙ニハ衣通姫ノ此所ヲ面白カリ給テ神ト現ジテ垂_レ跡ト書タリ天磐戸ノ前ニシテ初度ニ鑄給フ御鏡ハ小キ故ニ又鑄給フ御鏡伊勢太神ニシテ初度ノ御鏡ハ日前宮ノ由神書說詳也日神ヨリ前ノ御鏡ナレバ日前宮ト云也日ハ火也五行相生ノ時ハ火ノ前ハ木也木陽ハ稚ナル故ニ初稚ノ御鏡ヲ小シトハ云也出生ハ前ナレドモ稚キ故ニ稚日女尊ハ天照太神ノ妹トモ云也又大日

女尊火德ノ證ハ日神ト奉_レ申日ハ火ニシテ南方ノ君位ヲ主トリ御坐ス故ニ天下ノ君ノ始ト成給フ其上金德ノ素盞鳴尊ト御中惡キモ火尅金ノ故也又素盞鳴尊金德ノ證ハ殺伐ノ氣ヲ主リ人民ヲ夭折シ青山ヲ枯山ニシ山海ヲ鳴動シサナガラ秋ノ様ヲ神書ニモ記セリ西方申酉ノ方ヲ主リ給フ救ニ今ノ世ニ必ズ秋ニハ申酉ノ日大風吹テ素盞鳴尊ノ様有リ又月讀尊水德ノ證ハ月ハ水也大日女尊火德ナル時ハ月讀尊水德ナル事不_レ言可_レ知也 問曰右ノ五神五行ノ神ナラバ木神句_{ナチ}句_{ナチ}迺馳火神軻遇突智土神埴山姬金神金山彦水神罔象女ハ右ノ五神ノ別名歟 答曰稚日女大日靈尊等ノ五神ハ人體ノ神ノ德ヲ五行ニ配シテ云フ句々迺馳等ノヲ加ヘバ二女三男ト云ベシ一女三男ト云事ハ何タル說ゾヤ 答曰一女三男ト云事舊事紀古事記日本紀ニモ不_レ見マシテ神宮ノ古記ニモ無之疑ラクハ俗諺ナラン歟其上蛭兒ハ男體トモ女體トモ難_レ言是モ夷三郎ト云俗語有レバ男ト云ナルベシ但シ上古ノ證文有ル歟博覽ノ人ニ可問 問曰國常立尊國狹槌尊豐斟淳尊ノ三神ヲ日本紀ニハ純男ト記セリ純男ト云時ハ乾

テ今不^レ有^レ無味^レ意默シテ可^レ知 問曰舊事紀日本紀
ニ天照太神月讀尊素盞鳴尊生給事三所アリ異説カ但
シ故有歟 答曰日本紀ニテハ異説ニ似タレドモ舊事
紀ヲ見ベシ三處ノ出生故アリ伊弉諾尊御眼ヲ洗テ化
生ノ日神月神ハ天上ニ御坐ス日神月神也伊弉諾尊ハ
陽神ナレバ天ニ像リ日月ハ天ノ兩眼ナレバ御眼ヨリ
化生ト云白銅鏡ヲ左右^ニ御手ニ取テ化生ノ日神月神
ハ地ニ御坐ス日神月神也白銅ハ地ヨリ生スレバ也是
故ニ御靈形ニ鏡ヲ奉^レ崇歟伊弉諾伊弉冊尊夫婦トシ
テ胎生シ給フ天照太神月讀尊ハ人體ノ日神月神也天
地人ノ日神月神其德一ナル故ニ配合シテ祭ル也 問
曰然ラバ素盞素鳥尊モ御鼻ヲ洗テ化生ハ天ノ素盞鳴
尊又顧^{ミル}眄^{ミサカリ}之間ニ化生ハ地ノ素盞鳴尊又伊弉諾伊弉冊
尊ノ 答夫婦トシテ胎生シ給フハ人體ノ素盞鳴尊歟
曰然リ 問曰御鼻ヲ洗テ化生ヲ天ノ素盞鳴尊トシ顧
眄之間ニ化生ヲ地ノ素盞鳴尊トハ其儀如何 答曰殺
伐ノ金氣ノミナラズ物ヲ損スル不正ノ氣ハ天ノ素盞
鳴尊也鼻ハ兩眼ノ間ナレバ御鼻ヲ洗フト云鼻ハ主
ノ肺肺ハ金也素盞鳴尊ハ金德ノ故ニ御鼻ヲ洗テ化生
ト云御鼻ヲ洗テ化生ノ御名ヲ速佐須良姫ト申テ素盞

鳴尊ノ荒魂也又左右ノ御手ノ白銅鏡ヲ顧盼之間ニ化
生ヲ地ノ素盞鳥尊トハ白銅ハ地ニトリ顧盼之間ハ正
見ニシテ正見ニ非ズ故ニ地ノ素盞鳴尊ト申奉ル但シ
素盞鳴尊ノ和魂ノ表ハ劔ナルベシ子細アリ熱田宮ヲ
素盞鳴尊ト日本武尊ノ二神ニテ御坐トノ祕説モ其理
アル事カ 問曰人體ノ月讀尊ヲバ除テ天ト地ト月神
ヲ以テ豐受大神ニ配スル其義如何 答曰舊事紀日本
紀等ニハ人體ノ月讀尊ヲ主トシテ云フ故ニ月輪ヲモ
御鏡ヨリ化生ヲモ月讀尊ト云ヘドモ神宮ニテハ月讀
尊モ豐受大神ノ德ニヲサレ給フ故ニ水德ノ豐受大神
ヲ火德ノ天照太神ニ對シテ兩大神ヲ日神月神ト申セ
バ荒魂ヲモ和魂ヲモ日神月神ト申也必シモ不^レ可^レ執
一^ニ隨時義ヲ取ルベシ 問曰蛭兒三歲マデ脚不^レ立ト
ハ其故アリヤ 答曰蛭兒ハ土德ノ神ナリ土ハ專主ノ
方也四季ニモ寄旺シ春季九十日ノ内ヲ十八日土旺スシテ
脚立也木ハ春旺シ春季九十日ノ内ヲ十八日土旺ス火ハ
夏旺シ夏九十日ノ内ヲ十八日土旺ス金ハ秋旺シ秋九
十日ノ内ヲ十八日土旺ス水ハ冬旺シ冬九十日ノ内ヲ
十八日土旺ス四季ニ十八日ツ、土寄旺スレハ木火土
金水トモニ七十二日ヅ、旺スル也三季ニシテハ土ノ

吹戸主ノ神トモ申ス海水ノ氣ハ月ニ從フ故ニ中臣祓祝詞ニモ氣吹戸仁坐氣吹戸主ト云ヘリ 問曰荒魂トハ何ゾヤ 答曰荒魂ハ陽ニトリ和魂ハ陰ニトル天ニ御坐ス日月ハ天照太神ト豐受太神ノ荒魂ノ表也御神體ノ御鏡ハ和魂ノ表也荒ハ動也和ハ靜也荒魂トハ魂ヲ云ヒ和魂トハ魄ヲ云ナルベシ神功皇后紀ニモ和魂服ニ王身ニ而守ニ壽命ニ荒魂爲ニ先鋒ニ而導ニ師船トアルハ魄ハ止テ玉體ヲ守リ魂ハ先行テ師船ヲ導クトナルベシ 問曰荒魂ハ魂ニシテ陽ナラバ月神ハ陰ナルニ豐受太神ノ荒魂トハ如何 答曰月神ヲ日神ニ對スル時ハ月ハ陰ナレドモ地ニ御座ス水德ノ神ノ和魂ニ對スル時ハ天ニ御坐ス月神ハ陽ナル故ニ豐受太神ノ荒魂ト申也 問曰上古ニ多賀宮ノ内宮ニ御坐ノ時ハ和魂宮ト奉レ申タルト也然ラバ豐受太神荒魂ト云ハ相違ナリ如何 答曰多賀宮ハ豐受太神ノ荒魂ナレドモ陰德ノ月神ナル故ニ陽德ノ日神荒魂ノ宮ニ對シテ和魂ノ宮ト申シ内宮ノ五十鈴川上ニ荒魂宮ノ荒祭ト並テ御鎮座有シヲ神ノ誨ニ從テ外宮ヘ奉レ移テハ御號ヲ改メテ多賀宮ト奉レ申也 問曰荒祭ノ宮ハ日ノ神ニシテ又瀬織津姬トモ奉レ號伊弉諾尊ノ憶原ニテ

祓除ノ時左ノ御眼ヨリ化生シ給フ天照太神ノ荒魂ト也多賀宮ノ例ニテ見レバ荒祭宮ハ天ニ御坐ス日神也然ラバ内宮ノ本宮ハ天ニ御坐ス日神ニテ、ナシヤ 答曰本宮ハ日域ノ天子ノ始伊弉諾伊弉冊ノ御子人體ヲ受給天照皇太神ニテ御坐ス其德日輪ト齊キ故ニ大日靈尊ト奉レ申日ニ配シテ祭ル也又瀬織津姬ノ御名ハ祓除ノ時御眼ヲ水ニ洗テ化生ノ故ニ奉レ申ナルベシ神功皇后紀ニ曰神風伊勢國百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神名撞賢木嚴御魂天疎向津媛命トハ荒祭ノ宮ナルベシ同紀天照太神誨レ之曰我之荒魂不可近ニ皇居ニ當レ居ニ御心廣田國トアリ此二段ヲ引合セ見レバ廣田大明神モ荒祭宮ト同體ノ神ナルベシ 問曰然ラバ豐受太神モ天照太神ノ自テ出給フ神ナレバ人體ナルベシ人體ノ神ニシテ元氣ノ靈ニ配シテ祭ル歟 答曰然リ 問曰豐受太神モ人體トノ證文有リヤ 答曰日本紀一書曰便化ニ爲人一號ニ國常立尊ニ又御鎮座本紀云神人化生名號ニ天御中主神ニ是等證文也 問曰天地ノ始元氣化生ノ神人ニテ御坐セバ元氣ノ靈ニ配スル迄ニ不レ及事カ何ゾ配ニ元氣祭乎 答曰元氣ヨリ天地人始ル今日トテモ人生スルハ以ニ元氣ニ生ズ昔シ有

ハ御正體ニテ瓊々杵尊ハ高貴神ノ勅ニ依テ東相殿ニテ御坐也瓊々杵尊ニ添奉テ天兒屋根命天太玉命モ西相殿トシテ御同殿ニ御坐ス瓊々杵尊ノ荒魂ヲ天上^{アノホリ}玉杵尊ト申テ瓊々杵尊ト同ジ御船代ニ一座ニシテ御神體ノ御形ハ二體御坐ス此ヲ五神四坐ノ祕事ト云此ノ義ハ口外スルモソラ恐シケレド古記紛失故ニ祕傳ヲモ絶ベキ事淺間敷今サラ言ニ顯シ侍ル豐受太神トハ國常立尊一神ヲ申奉ル宮ノ字ヲ付テハ五神ヲ總テ外宮トモ豐受太神宮トモ度會宮トモ申奉也延喜式ニモ度會宮座豐受太神一座相殿神三座ト云ヘルハ是也 問曰五神四座ノ御事大方ノ神書ニハ不見難有說也東寶殿西寶殿コソ世ノ人モ東西ノ相殿ト思ニ御同殿ニ御坐ハ東西ノ寶殿ハ相殿ニテハナシヤ 答曰昔丹州ニテハ前社トモ申タルト本記ニアレバ世人ノ思フモ理ナレド相殿トハ御同殿ニ御坐ス故ニ奉レ申東西ノ寶殿ハ寶藏也延喜式ニハ財殿ト書寶基本記ニハ寶藏ト書テ勅幣ヲ被レ奉ノ時ハ錦綾等ハ東寶殿ニ奉納シ御馬鞍等ハ西寶殿ニ奉納ス其上御體在宮ヘ本宮ノ御正體ヲ假殿遷宮ノ事ハナシ東寶殿忌屋御氣殿等ヘハ假殿遷宮アリタルニテモ寶藏ナル事了簡スベ

シ 問曰外宮ヲ水德ノ神トハ何ノ故ゾヤ五行未生以前ノ國常立ヲ水德トハ不審也其上外宮ノ別宮多賀宮ヲ豐受太神ノ荒魂トハ是又何ノ故ゾヤ多賀宮ハ伊弉諾ノ櫛原ニシテ祓除ノ時右ノ御眼ヨリ化生シ給フ神ト云ヘリ然ラバ月讀尊也月讀尊ヲ豐受太神荒魂トハ水德ノ故ニ云ヤ殊ニ外宮ノ別宮ニモ月讀宮有リ多賀宮月讀尊ナラバ又別宮ニ月讀宮不レ可有如何 答曰是又深祕ニテ雖レ難レ顯諸人ノ惑ト成ル事ナレバ粗其由ヲ可レ申國常立尊ハ元氣化生ノ神ナレバ五行ヲ含タル御神ナレドモ五行ニハ水ヲ始トスル故ニ水德ノ神ト申也亦月ノ神ハ形ニ見レタル水德國常立尊ハ無形ニシテ含ミタル水德ノ神ニテ御坐スナリ伊弉諾尊ノ櫛原ニシテ祓除ノ時右ノ御眼ヨリ化生ノ神ヲ日本紀舊事紀等ニハ月讀尊ト記シタルト神宮相傳ノ古記ニハ此時化生ノ神ヲ月神トモ云ヒ豐受太神荒魂トモ云テ月讀尊トハ不レ記月讀ノ宮ニ奉レ崇ハ伊弉諾伊弉冊ノ夫婦トシテ生ジ給フ人體ノ月讀尊ノ御事也月神ト申ハ天ニ御座テハ豐受太神ノ荒魂ノ表也多賀宮ヘ參ル坂ヲ登ルニハ登天ノ心ヲ持ベシト古來相傳也荒祭宮ノ坂ヲ登ルニモ此心ヲ持ベキ事歟此ノ月神ハ氣

遷都ト見レバ神書ノ旨ニ叶ヒテ具ニ可レ無レ難此事ハ
深々口傳可レ有古記文ノ如ク可レ見古記ニモ無キ事跡
ヲ求テモ其詮無義也 問曰瓊々杵尊天上ヨリ降臨有
タルトノ神書ノ說ナレド天上ノ事跡半ニ過テ人間ノ
如シ是ノミナラズ伊弉諾伊弉冊尊ヨリ天照太神忍穗
耳尊迄モ其事跡人間ノ如キ事ノ有ルハ如何 答曰是
亦容易難レ顯事也然レドモ其ノ不審不晴時ハ神道ノ
障ナレバ一二ヲ可レ謂人體ヲ受給天照太神ノ盛德光輝
廣大ニシテ至ラヌ曲無レバ日々ニ拜シ奉ル故ニ於ニ
神書ニ日輪ノ德ト天照太神ノ德ヲ配分シテ云ヘバ人
間ノ事ノ如キ言モ有リ伊弉諾伊弉冊モ其德ヲ陰陽ニ
配分シ月讀尊モ其德ヲ月輪ニ配合スル故ニ人間ノ事
跡ノ如キ文言アリ天神七代地神五代ノ諸神ノ御名ヲ
今世迄傳タルダニ餘リニ年代久シケレバ疑ハシキ事
ゾカシ況ヤ其事跡悉ク有タル事ト云ンモ知者ノ取マ
ジキ事也又無レ事ト云バ不審可レ起凡神書ハ神名ノ上
ニテ能取レ義悟入有事トナリサノミ事跡ニ執スベカ
ラス又一向ニ廢スベカラズ 問曰日月ニ配ストノ事
其證如何 答曰古記ニモ伊勢兩宮ヲ云テ配日月ト有
リ又倭姬ノ世記ニ天照太神波日月止合レ明天宇內爾照

臨給利豐受太神波天地止齊レ德天國家乎守幸給利ト云
ヘリ 問曰日月ニ配ストノ其說左モ有ベシ又伊弉諾
伊弉冊モ陰陽ニ配セバ人體也人體ニシテ何ゾ山川草
木マデモ生ズルヤ 答曰陰陽ニ配スル故ニ人體ノ伊
弉諾伊弉冊ノ上ニテ陰陽造化ノ跡ヲ言タル也人體ノ
伊弉諾伊弉冊ノ山川草木マデモ産給フトノ事ニハ非
ズ是ニテ日月ニ配シタル事モ推レ類可レ知 問曰然ラ
バ神書ノ說悉ク僞ナルカ 答曰易ノ乾ノ卦ヲ天トシ
テ又父ニ比シ坤ノ卦ヲ地トシテ又母ニ喻タルガ如シ
其德ヲ比喩シテ而モ我が國ノ事物ノ權輿ヲ言テ殊ニ
勸善懲惡ノ言モ有リ深ク悟入スルトキハ凡夫トテモ
神人ト可レ成奧義有リ仰テ尊ベシ但シ用ル所ノ神書
ト其人ノ見解トニ可レ依事 問曰外宮ヲ宗廟社稷ノ
神ト云ハ國常立尊瓊々杵尊ヲ宗廟ト云ヒ天兒屋根命
相殿ニ御座ス故ニ社稷ト云ヒ合セテ宗廟社稷神ト申
奉ルトナリ如何 答曰神宮ニ相傳ノ大概ノ說如レ此
然モ此土地ハ元氣化生ノ國常立尊ヨリ始タレハ社ノ
神也又豐受太神トモ御氣津神トモ申セバ稷ノ神也増
テ國常立尊瓊々杵尊ハ宗廟ノ神ナル事無レ疑也 問
曰瓊々杵尊ノ外宮ニ御坐其說如何 答曰國常立尊

明理本源ノ神ニテ元氣ノ中ニ御座スト云事也日本紀云天地之中生ニ一物ニ狀如ニ葦牙ニ便化ニ爲神號ニ國常立尊ト云ヘリ國常立ハ元氣化生ノ神ナレバ化爲神ト云氣ヲ離レテ理無ケレバ天御中主神ト國常立尊ハ同體異名ニテ御座ストハ云ヘリ其後國土成就シテ豐葦原中國トモ又豐葦原瑞穗國トモ豐葦原千五百秋瑞穗國トモ云ヘリ五穀出生シテ瑞穗國ト成タル元氣化生ノ神ニテ御座ス故ニ國常立尊ヲ豐受皇太神ト申奉リ御氣津神ト奉_レ崇也若シ豐葦原中國ト云ヲ葦多キ國ト心得タル時ハ因以曰ニ豐受皇太神トノ名義難解事也又內宮ヲ太伯ノ御廟トノ事本朝ノ神書ニ無_レ之増テ異國ノ書ニモ無_レ之三讓ト云額內宮ニ有タリト云說アレド今世モ能書ハ額ヲ書神前ヘ奉納ス此ノ三讓ノ額何タル人ノ所爲ヲ不_レ知此額御鎮座ノ始ヨリ有テ禰宜神主今ニ相傳ストモ此三讓ノ二字ニテ推テ太伯ノ御廟ト云ンモ相違之事也況ンヤ後人ノ所爲ヲヤ又日本ヲ異國ヨリ姬氏國、稱スルモ日本ハ周太伯ノ御末姬姓ナレバ云トノ說有レド異國ヨリハ免モ謂ヘ角モ云ヘ本朝ニテハ昔モ太伯ノ御末トノ說ヲ禁制ト承ル如_レ此ノ說盛シニ行レバ日本モ異朝ニ可_レ傾故

ナルベシ殊更附會ノ兩部習合ヲ嫌ナガラ似合タル說有_トテ太伯ノ御廟トノ事モ習合ノ說ニ似タルベシ問曰太神宮ハ太伯ノ御廟ニテ無_トノ事其ノ理有_ト云ヘドモ瓊々杵尊ノ降臨モ日向ノ國ナリ處コソ多キニ今モ異國ノ船ノ著岸スル筑紫ヘ降臨ハ疑シク侍ル其上舊事紀ニ記ス供奉ノ諸神ニ船長梶取有モ海路ノ爲ナルベシ雲路ヲ降臨ニ何ノ儀アルベキ疑クハ海路ヲ歷テ異國ヨリ來臨カト覺ヘ侍ル 答曰瓊々杵尊筑紫日向ヘ降臨ハ猿田彥ノ教ニ依テ也人代ニモ都ヲ建ルニハ地ヲ相スル事有_リ況ヤ猿田彥ノ訓ナレバ日向國ヨリ始リテ我國萬々歲マデ王家相續スベキ地ニテコソ有_ツラメ又船長梶取有_リトテ異國ヨリ來臨トモ難_シ申事也饒速日尊モ天ノ磐船ニ乗テ河内ノ國ニ天降給_フ事有_リ此等必シモ今世ノ海上ノ船トモ見エズ此船長梶取ハ下界ニテ海上ヲ渡リ給ハバ其時ノ備ノ爲トテ供奉セシ事モ有ベシ神代ノ事ナレバ古記文ノ儘ニ天上ヨリ降臨ト見テ可也若シ天上ニ比シテ別ニ指ス國有_ラバ國常立尊ノ化生ノ國ナレバ豐葦原中國ノ内ニ其所可_レ有異國トハ見ベカラズ豐葦原中國ノ内ヨリ日向ノ國ヘ移リ給ヒテ神武天皇ニ至テ又大倭國ヘ

神宮祕傳問答

或問曰日本無雙ノ宗廟ノ御事ヲ卒爾ノ申事恐多ケレ
 ドモ外宮ハ后稷ノ御廟ナラン歟其故ハ内宮ハ大伯ノ
 御廟ト云傳有レバ大伯ノ自テ出給フ所ノ神ハ后稷也
 又外宮ヲ豐受太神宮ト申奉ルモ后稷ハ五穀ノ神ノ
 故ナルベシ舊事紀古事記日本紀其外ノ神書ニモ豐ハ
 豐饒ノ義字氣ト云ハ五穀ノ稱也其上御氣ト云モ食ノ
 事ト也然ルニ御氣津神ト申シ奉ルモ外宮ノ御事ニテ
 内宮ノ御氣モ外宮ニテ調備シテ毎日兩度外宮ノ御氣
 殿ニテ兩太神宮へ供進ス是等悉ク五穀ノ神ノ明徴也
 外宮ハ水德ノ神ナル故ニ御氣津神ト云水ハ御氣津ノ
 略語トノ神書ノ説モ疑ハシ又外宮ヲ宗廟社稷神ト申
 奉レバ彌后稷ノ御廟ナルベシ如何 答曰此ノ事ハ最
 極ノ神祕ニシテ書ニ顯ハシ難キ故代々ノ禰宜神主モ
 世間流布スベキ記ニハ豐受太神ハ水德ノ神也水ハ
 御氣津ノ略語ト記シタレド是ハ外宮ヲ保食神ニテ御
 座ト云輩有リ又丹州奈具社神豐字賀能賣命ヲ豐受太

神ニテ御座ト云人有レバ其難ヲ遁レン爲マデニ言テ
 最極ノ神祕ハ書ニ筆セヌ也去ドモ后稷ノ御廟トノ事
 猶以テ遁レ難キノ間其由ヲ云ベシ不信ノ輩ニハ必ズ
 口外スベカラズ豐受ト云ハ五穀豐饒ノ義勿論也御氣
 津ト云モ食ノ神ノ事也此ノ義ハ舊事紀古事記日本紀
 等ニ詳ナレバ水ハ御氣津ノ略語トハ本紀ノ説ナレド
 モ御氣津ノ御號ノ外ニ豐受ノ御名モ有リ又今ニ御氣
 殿ニテ毎日御氣供進スレバ水ハ御氣津ノ略語トモ難
 レ申是ハ神祕ヲ口外シ難キ故ノ異説ナルベシ抑モ外宮
 ハ天御中主神ニテ豐受太神ト申シ奉ル故ハ本紀ニ曰
 天地初發之時大海之中有二物一浮形如一葦牙一其中神
 人化生名號三天御中主神故號三豐葦原中國又因以曰
 豐受皇太神也云々大海之中ニ有二物一トハ水ヨリ始
 ル事ヲ云大虛之中ト云ガ如シ如ニ葦牙一ト云ヘバトテ
 葦牙ニハ非ズ如ノ字ヲ能ク味テ喻ナル事ヲ知ルベシ
 如ニ葦牙一トハ此ノ國ツヒニ瑞穗國ト成タル一氣ヲ後
 代ヨリ推源云タル也葦ハ水草ニテ繁榮スル物ナレバ
 行末五穀出生シテ瑞穗國ト成ベキ一氣ノ始ヲ喻テ
 云ヘリ豐葦原瑞穗國ト云トテ蘆花ノ事ニハ非ズ五穀
 ノ瑞穗也其中ニ神人化生名號三天御中主神一トハ天ノ

神宮祕傳問答序

古人曰苟非其人、道不虛行、焉神道亦然不識得神道、而豈其行神道乎夫仰觀之俯察之自及清陽薄靡重濁淹滯、已來雷一發而蟄蟲振霜一降而天地肅八區四隅無不與神之動靜氣之運用、實其玄微道體不次妙機誰其識得之乎一日醫生片岡氏某參余明窓懷神書兩局來欲鏤于梓以開淨凡余忽爾盥漱而後攤讀之則神宮祕傳問答同續祕傳問答之書也可謂夜光明月之珠也爲此書也割子纔而如泉之一滴如雲之膚寸雨于天下洽於六合何其不可乎有高明之人出於此世則得之心而行之身然則夫神道赫微而無涯際必矣雖漢倭懸隔冠帶異風神道兼儒風何其差別之乎余雖爲攝津之老儒退傳授伊勢之神風故爲之序茲嘉獎附夫醫生之手云爾

元祿第十一年戊寅夏五月梅雨降日

北水浪士惟中

同日如_二告知_一者今日可_レ爲_二祭禮_一之處官幣使無_二下
着_一

十一日 晴交替予番文二三子六八九

廿一日 晴交替予番文二三_{〇以下}
_{缺文}

寛文八_{戊申}年十二月十五日書寫校合畢

廿六日 晴潤月番帳權任加奉彼廻文云
享德元年

此間原本凡九行缺文

潤八月

一日 晴交替予左右板彌傾下^{○此間}予七御内ニ參拜

見ス覆板自^レ棟三尺計サガル番文三予六七八九十加

判上番權任以下裁^裁番文一

十一日 晴交替予番文一三予六八九十加判予之許

自^ニ昨日^一犬穢予ハ折節他所ニ居仍カ、ラス番文ニ中

番衆載^レ之

十七日 晴大橋朽損之間僧賢正并最祥法師等十方ヲ

令^ニ勸進^ニ可^ニ再興^ニ之由申仍被^レ成^ニ廳宣^ニ加判十人

廿一日 晴予之宿所自^ニ昨日^一犬產穢仍不參

九月

一日 晴交替予番文三予六八九十加判二神違例仍不

參

二日 雨造替遷宮遲引事注進解狀ヘ加署十人田宮寺

定使武泉代官方ヨリ殺害事ニ國方ヘ被^レ成^ニ解狀^ニ加

署十人

九日 晴菊花御饌二三予六八九十參如^レ常^ニ口^ニ雨

予夕參例幣可^レ爲^ニ式日^一之由三日祭主下知今日

此間原本凡十一行缺文

十八日 晴宮比矢乃籌神事其後荒祭々禮二三予六八

十九日 晴瀧祭神事三予六八九十參月讀宮神事九參

自^ニ長官^一

廿日 夕雨小朝熊宮祭禮予ハ父遠閑日仍自^ニ昨日^一退

出雖^レ然饗膳送預^ニ役所別儀芳志^一歟無^ニ膳饗^一

廿一日 晴潔齋不參祈訴請文加署

廿二日 晴瀧原并宮祭禮予參六神主去年於^ニ五座^一瀧

原ニ參彼任本衆巡番七ヶ御園自^ニ國方^一依^ニ違亂^一野原

ヨリ幣使米不^レ進如^レ此時ハ自^ニ長官^一雖^レ有^ニ下行^一無^ニ

其儀^一仍以^ニ私力^一參勤人夫白野副參替夫同^{ヨリ}參神

事如^レ當下向楠マテハ昨日人夫自^レ是打見郷人夫參遲

參^ニマテ追付參晝飯落着等下行餉河原饗^ニ口^一

廿四日 晴例幣可^レ爲^ニ廿六日^一之由下知等廻覽

廿五日 晴伊雜宮祭禮六參

同日風日祈宮祭禮二予八九十有^レ饗三神主分送^ニ進

里^ニ別儀歟

十月

一日 晴交替予番文三予六八九十加判御綿預

此間原本凡八行缺文

神宮二子六八九十東寶殿傾危間□□□□□マテニ
テ荷前御調ヲ外幣殿ニ納勸盃御遊八十參神事如レ常
幣馬六拜

十八日 晴宮比矢乃箒神事次荒祭宮神事二子六七八
九十從

十九日 晴瀧祭神事子六八九十參

同日雨月讀伊佐奈岐宮神事子一人參自長官自道大
雨神事如レ常彼宮新拜所饗今日始而沙汰サイ八種汁
酒三獻任心ケツコウス

□□ 小朝熊宮神事二三子六八九十從祝權長等不參

此間原本一行缺文

間彼役ヲ出納二人勤之酒肴無沙汰

廿一日 晴交替予番文二三子六七八九十加判

廿二日 雨瀧原祭禮十參十八新衆九ハ去々年於二十
座伊雜ニ參去年六月ハ爲七座九十禰宜依ニ未補

自長官代官ヲ被進九神主去々年伊雜宮被參任ニ被
本衆巡番可參伊雜之間新衆十神主瀧原ヘ參迎人
夫田口ヨリ來替夫不來之間質ヲ取之處當時七ケ御
蘭自國方進退武家ノ掟ヲハ不被□□不可用ト

テ追カケ取返之

廿五日 晴伊雜宮祭禮

此間原本凡八行缺文

十一日 晴交替予番文

廿一日 雨交替予番文二子六八加判

八月

一日 雨風政所師昌子之館ニ來雨風烈無廳舍可
有_レ神事如何哉之由伺先年雨時於_二殿_一被_レ行_レ之
於_二子今_一ハ一殿モナシ但長官ノ御館有_二維南_一時者御
神事於_二御館_一被_レ行先例也可爲_二其分_一山返答之處雨
風止畢仍於_二廳舍_一被_レ行交替物忌計參二子六加判時
分七參七八九十加判時分三神主參被_二加判_一御鹽湯神
事ハ鹽湯ニ不_レ合者不_レ從如_レ此祝事遲參ハ斟酌之法
也依_二本衆之請_一別無_二酒肴_一

三日 晴予申南職田事解狀之加署十人

氏榮申霜野御厨事同前

予申深田御蘭事牛庭御厨事 應宣

兩通九人被_二加判_一十神主ハ他行

十一日 晴交替六番文二三子六八九加判

廿一日 晴上ル雨交替予番文一二子六九十加判

八日 雨祈年祭可_ニ延引_一之由三日祭主下知今日

○以下
缺文

十一日 雨交替予番文予六九加判

此間原本凡十一行缺文

物忌方之自_ニ役所_一可_レ有_レ之事歟

十一日 晴交替予番文二三予六

廿一日 晴交替予番文予六八九十

廿八日 山宮神事六經興參予御初進_レ之

四月

一日 晴交替予番文三予六八九十加判

九日 晴氏神祭禮六參予之御初進_レ之

十一日 雨交替予番文二予六八九十加判

十四日 御筭神事二予六八九十從

廿一日 交替予番文二三予六八九十加判

五月

一日 晴交替予番文予六八九十加判

五日 晴菖蒲御饌二予六七八九十參_{三神主}遠間日酒肴送_レ館

無_ニ隔子
机_一故也

十一日 雨交替予參如_レ常番文二三六八九十加判予

之館ニ番文持參令_ニ遅々_一間番出納ニ膳號_ニ文字屋_一相

尋之處令_レ失_ニ念行政印_一訖之由申仍不_ニ加判_一出納ヲ
令_ニ折檻_一其後出納予之許_ニ來令_ニ退望_一

此間原本凡十一行缺文

阿婆羅氣ヤ島ハ七島ト申セドモ毛無カラニハ八島ナ

リエイヤ_ノ中刀禰ノ頭役

我君ノ御濱出ノ御座舟ノセ千代ト云鳥ノ舞アソブエ

イヤ_ノ

我君ノ命ヲコハバサバ石ノ巖ト成テ苦ノ生マデエ

イヤ_ノ

我君ノ御倉ノ山ニ鹽ノ滿如富コソ入マセエイヤ_ノ

各三度宛歌_レ之當年無_ニ此儀_一

夕與玉神業二予六七八九十從御神拜申六月御祭今月

十五日ノ今ノ時ヲ以與玉ノ廣前ニ奉太宮御贊并地祭

ノ物忌ノ奉御神酒御贊ヲ奉狀ヲ平ク安ク知食テ禰宜

神主内外物忌色々ノ式衆供奉ノ人々神事供奉ヲ調仕

シメ給エト畏ミ_ノ申如_レ此御巫申于_レ時一同ニ兩端

次第如_レ常御占神事同衆丙合次御巫權任ト申于_レ時

召立行高次禰宜神主内外物忌色々ノ式衆并國々ヨリ

マイル郡口神戸御蘭御厨ノ御シンニウ御贊ノ不淨口

口口口御占ニテ

饗膳送進所從分三膳送無^{不足}謂家子侍中間人數ヲ伺調
遣例也田邊氏神社參着之處祝不參饗料持參之百姓ニ
祭禮可^レ爲^ニ今日^一之由言付之旨雖^ニ預所申^ニ不^レ來之間
預所從^ニ山神^ニ遣處祝不^ニ存知^一之間他行畢仍以^ニ便
宜職掌^ニ行^ニ神事^ニ時分祝之自^ニ留守代官^ニ進雖^ニ然早行
畢傍官御初等祝取^ニ不^レ參之間無^ニ存知^一予之御初計
持參以^レ之行物忌尙重弘家參尙重衣冠一薦之代ス走
懸進氏神領百姓原平

此間原本凡十二行缺文

小朝熊宮神事三予六十從酒肴送^レ館服氣衆

十九日 晴瀧祭神事予六十參月讀伊佐奈岐宮神事六

參

廿一日 晴交替予番文一二三予六十加判

廿二日 晴瀧原祭禮巡番服氣仍自^ニ長官^ニ氏綱參

廿五日 晴風日祈宮祭禮二予六十參政所師昌詔刀兼

日^ニ用意氏仲神主^ニ預置之處置^ニ忘政所之許^ニ人遣
者可^レ及^ニ深更^ニ便宜之公文^ヲ雖^ニ相尋^ニ無^ニ器用仁^ニ間

予於^ニ廳舍^ニ書^レ之行^ニ神事^ニ

同日伊雜宮祭禮巡番服氣間自^ニ長官^ニ氏綱^ヲ被^レ進是
文詔刀同前氏綱俄奉書之行^ニ神事^ニ

廿六日 晴六經與外宮拜賀息男經房神主共奉
同日御所樣御法樂御會百首自^ニ長官^ニ承予奉幣

此間原本凡十五行欠文

加判之後皆加判退出時分長官

六日 晴公方御祈事十二月十九日御教書同廿三日祭

主下知卅日宮司告狀等廻覽則請文ニ加署

七日 晴新榮御膳二三予六八九十從

十一日 晴交替六番文三予六八九十加判

十五日 晴御竈木奉納神事二三予六八九十參無^ニ酒

肴^ニ七神主服氣間木^ヲ不^レ削不^レ合奉納由貴殿ノ軒^ニ

立置氏親神主犬穢之所^ニ居仍穢限以後奉納差出略之

水量三尺八寸予之許犬穢予他所^ニ居時分也仍^{○以下}恐缺文

十八日 晴田宮寺行頭役一二三

廿一日 小雨交替予番文予六八九十加判

二月

一日 晴交替六番文二三四予六九十加判歟山神事宮

司神宮二三予六八九十從一薦不參仍神宮勸益二薦參

宮司三薦參神事如^ニ例年^ニ

五日 晴祈年祭可^レ爲^ニ式日^一之由正月廿四日御教書

廿五日祭主狀□□

十一日 晴交替予番文予八加判神主ハ被ニ加灸ニ

廿一日 晴交替予番文予八加判

廿八日 晴經興轉任守房替五月十日口宣同日官施行

六月十一日祭主施行八月廿七日司奉行今日宮奉行加

判新禰宜經興五座加判則當宮拜賀氏久六ニ下守喜秀

守朝

九月

一日 交替予祈神主供奉番文予五六七八九加判

此間原本凡八行缺文

十六日

○此所缺文

同夜御饗宵曉瀧祭神事櫻宮神事無ニ酒肴ニ予ニ○此所缺文

十七日 晴神嘗祭例幣使有忠御其外内氏網四姓宮司神

宮二子五九二神主手扶五參御衣櫃達之東寶殿依傾危

之間錦綾ニ奉ニ納ニ西寶殿ニ予參又先度 錦綾自ニ外幣殿ニ奉ニ渡五反在三端令ニ紛失ニ歟不審勸盃

予五九御遊同前

十八日 荒祭宮神事宮比矢乃籌神事二子五九參

十九日 晴瀧祭神事二子五九參月讀伊佐奈岐宮神事

五參今一人末座可被參事也五ハ自ニ長官ニ參予ハ明

日父之遠忌日仍退出

廿日 晴小朝熊宮神事饗予料送預ニ別段芳志ニ也

廿一日 晴不參沐浴遲々

廿五日 伊雜宮祭禮六巡番服氣之間自ニ長官ニ仲氏

被ニ進

同日風日祈宮祭禮予五九從酒肴延引

十月

一日 晴交替二番文二子五八九加判御綿奉納五參予

分預

二日 雨氏興替滿元九月五日宣旨同日官狀八日祭主

施行今月一日宮司

加判件事既被ニ宣下

此間凡十一行缺文

十一日 晴夕雨交替六番文二三子六十加判神業神事

六

十二日 晴神業六參

十八日 晴田宮寺行無ニ一月行ニ之間今度二四子六七

勤頭

十九日 晴光用廳宣加判兩門氏寺領事野篠郷給主五

ヶ所方へ被ニ成ニ廳宣ニ加判

廿一日 交替六番文二子六九加判

廿五日 晴氏神々業予參預所三薦尙重共ニ乘馬上下

例一身田ヲ被ニ施行ニ云々

廿一日 晴交替三番文二子六加判

卅日 晴一氏興逝去經見執印 予五故障

此間原本十五行缺文

禰宜ト計書未補ハ禰宜ト計可レ書忌時神主字計可レ略
之歟不審

十五日 贊海神事二神主永昌經俊正秀守成永家氏倍

經房三代泰春泰俊忌服未補等代八人自ニ長官一同夕與

玉神事御占神事ニ參

十六日 晴御巫竈祓一二勤レ之河原祓二御稻檢知二

同神拜

十七日 五位貞重文安六年七月廿五日口宣同九月三

日祭主施行寶德二年二月廿四日司奉行今日宮奉行加

判 ○此間缺文歟

十六日 夜御饌神事等ニ參

十七日 月次祭幣使有忠御共內奏言外山崎宮司氏長神宮二

東寶殿傾危之間無ニ參昇ニ送文計讀進於ニ荷前御調者

外幣殿ニ被レ納勸盃幣使宮司兩所二神主一人勤レ之御

遊同前幣馬二預自ニ幣使一人當祭被レ從ニ諸神事之

條神宮由二神主許ハ在ニ御使二神主於ニ大庭ニ御禮被

申レ之

十八日 晴宮比矢乃等神事荒祭神事等二被ニ參

十九日 晴瀧祭宮神事月讀宮伊佐奈岐宮神事二神主

參勤

廿日 晴小朝熊宮神事ニ參在ニ酒子不レ預今朝館ニ不

レ參故歟

廿一日 交替一番文一二子加判

廿二日 晴瀧原

此間原本十二行缺文

一日 交替二番文二

四日 晴柏流神事ニ參予館雖ニ不參ニ恭饗送里難掌家

司弘家別儀芳志哉但自余皆如レ此也

十一日 晴交替二子不參

十六日晴ニ守朝轉任事五月□□□□□□□□同廿七日

官狀六月廿九日祭主施行今月十四日宮司施今日宮奉行守朝八座加

判

廿一日 雨予頭風氣仍不參

八月

一日 晴番文廳舍之儀如ニ例年一二子ハ於レ館加判二

八廳舍六七神主ハ番文以後ハ被ニ參レ館

三日 晴三子六參在酒肴^{大泉}石橋酒肴雖令□□□

□□無例之由返答玉串內物忌方在酒肴別役□□

五日 晴祈年祭幣使正四位下秀忠御手水役守成御共
^{外宮定久}宮司氏長神宮三子六幣馬七神主巡番遲々一時

余相待神事如恒但一殿儀式略之舊冬月次祭^テ被

行同衆也一殿酒肴勸盃幣使予宮司六神事如恒幣馬

八神主給伴神事任一次第一先可被行月次歟之由

於外宮被相尋之處月次被付行之間先爲祈年

祭之由間先祈年次月次仍當宮モ如此

十一日 晴交替予番文一三子六加判舊冬月次祭御饌

マテハ□被行畢相殘神事等今日被行三子參六□□

□月讀伊佐奈岐宮參先宮比矢乃等神事次荒□□宮神

事次瀧祭神事次月讀神事次小朝熊宮神事催促權長彼

宮祝兼日雖被相觸不參仍木綿麻等役出納勤之勸

盃出納之一薦酌由貴殿出納二薦依爲當番月讀宮

ニ參月讀宮祭禮ニハ每度由貴殿出納御鑑ヲ持參先例

也雖然當祭平奉納御鑑不^レ入之間略仍就便宜當番

二薦參次風日祈宮祭禮在御火祇承放家當祭役黑崎

□□□□可有催促之由也

十四日 晴五位行峯寶德二年十一月廿六日口宣同三

年二月廿一日祭主施行今月九日司奉行^{以下}

廿一日 晴交替予番文予六加判^{缺文}

廿七日 晴五位守時寶德二年^{此間}祭主施行三月廿

一〇以下^{缺文}

廿八日 晴五位泰延寶德二年^{此間}施行同三年^{以下}

廿九日 晴山宮木^{此間原本}在^{缺文}饗予之御初兼日祝

□□

四月

三日 晴氏神饗ノ心見官首長官ニ進^ニ飯一鉢鯛一懸二

瓶雖未^レ進^ニ任料^ニ御饗可^ニ沙汰^ニ之由被^ニ仰出^ニ仍沙

汰之然者可^レ爲^ニ預所職^ニ者也

四日 晴氏神祭禮^中三神主被^ニ參^ニ雖^レ被^ニ去年參^ニ巡

番予并六神主大穢依^レ之也

十一日 晴交替予番文二子六加判御祓水保神主享

十四日 晴御笠神事予一人參

十九日 晴八王子黃葉遊予參衣冠不^レ食^ニ魚鳥^ニ出納

三人荷用八人皆參馬自^ニ長官^ニ用意世木通自^ニ北宮御

前^ニ在^ニ下馬^ニ百文下行御初也自^ニ長官^ニ在^ニ饗清進菜八

種汁一清酒三獻出納荷用等皆預^ニ饗白酒^ニ巫舞三番檢

知下向伴祭二月八月也鄉料所依^ニ役人之訴訟^ニ延引任

廿一日 雨交替三番文予十加判

廿三日 晴一守房逝去永清執印依_ニ究老_ニ四神主正陳_ヲ給宮中_ニ被_レ遂

廿四日 晴一永清逝去氏與執印則被_レ參_ニ宮中_ニ予之館_ニ被_ニ祇候_ニ前宮家司弘咸御竈持參渡申之當家司兼親請_ニ取之_ニ奉_ニ安置_一

廿九日 晴先内々神拜長官予六衣冠家子氏綱布衣公文所行高布衣其外皆下姿南御門_{ヨリ}參_{内々間無_ニ自_レ西}退出遙拜等如_レ恒歸立在一獻_一

寶德三年_{辛未}正月番文番兼親長官先於_レ館被_ニ加

判_一

一日 小雨三子六參宮司者依_ニ禁忌_ニ不參神事如_レ恒在_レ饗料所未_ニ所納_ニ其近代雖_レ爲_ニ酒肴_ニ再興之館祝長官衣冠子良館_{代_ニ子良等參_ニ御館_ニ無_ニ外宮參_ニ里宿_ニ被_レ出吉書等如_レ恒政所師昌}

三日 卯杖神事物忌等參

七日 晴新菜御饌神事三子六參服新菜無_ニ通路_ニ間不_レ進

十一日 晴夕雨交替三番文一三子六加判宮司參六對面

十三日 大雨雪由貴殿出納水量木_{ハイ}今日奉_レ探爲_ニ定例_ニ之處深雪間不_レ叶之由申之如何樣_ニ廻_ニ思慮_ニ可_レ奉_レ探由下知食百_口

十五日 晴御竈木奉納神事三子六參在_ニ酒肴再興_ニ無_レ粥失念_口水量四尺九寸五分未補七八忌御竈木不_レ獻_レ之

廿一日 晴交替三番文一三子六加判

二月

一日 晴交替三番文一二三子六加判司對面六番禰宜流究老也鍬山神事宮司三子六在_ニ酒肴_ニ神事如_レ恒

九日 雨祈年祭延引事五日祭主狀今日宮司狀廻覽去年_{口口}祭祈年_ニ可_レ被_ニ付行_ニ之由在同_レ之

十一日 晴交替三番文三子六正殿葺堂額落則_{以下}

_{缺文}

同日神業神事六參

十二日 同神事六參

廿一日 晴交替予東寶殿傾寶以外也_{口口口口口口口口口口}間可_レ顛倒_ニ之條決定之由大物忌申問此旨_{口口口口口口}方_ニ被_レ觸扶木_ヲ以可_ニ修理_ニ之由返事_口

三月

一日 晴交替三番文一三子六七八加判祈年

役前
田殿
一日 晴交替予番文五予九十加判酒肴近年無沙汰津雲

十一日 晴予之許依爲御祓之會所不參

十四日 晴新糴米二斗五升沙汰當百姓病死仍減云々

五位八人分沙汰自余へ不進云々小河方ヨリ相傳六斗分四斗沙汰

十一日 晴交替予番文五予十加判

廿四日 盜人六郎之沒收地彌六郎買得事廳宣加判廿一日日付也

十一月

一日 晴 交替五番文予十五神主ハ交替依遲々退出

十一日 晴交替予番文予ハ神拜計出畢

廿一日 晴交替五番文五予十

十二月

一日 晴交替五番文五予九十加判

十一日 晴交替三番文五予十加判

十五日 晴興玉神事予八九十從御占神事同前召立行

高

十六日 晴御巫竈祓次河原御祓五予八九十御稻奉下

神拜同衆

同夜御饌予ハ頭風氣仍不參十一人參歟

十七日 晴官幣使下着昨日者北畠殿御陣依不被通由色々有御問答今日御通抑今度御陣者依致

緩怠去月廿九日原小神野篠蒔田邊被燒今月三日上洛中例懸橋邊被燒拂七日小俣被燒拂而山田

合力間山田ヲモ可有沙汰殘三千鄉濱邊爲可有沙汰御在陣仍如件

然禰宣等通陣中依爲觸穢不可有祭禮之由自神宮被申之雜人參宮中番禰宜祇御饌朝夕供進

之上者何限祭禮而可被押止之由雖被仰猶不可叶之由被申然者可爲七日穢歟有逗留而

可被遂行神事之由被仰其モ不可叶之由無謂被申之仍當宮御使神主被立永英外宮者如此當宮祭

禮可爲如何樣哉由被尋雖有觸穢之疑外宮朝夕御饌被備進之由承之間次第神事遂行去夜由貴

御饌マテ供進畢外宮不同之沙汰不得其意雖然外宮先立事無例之間可延引之由被申仍官幣外

宮被預上洛仍當宮退出了

十八日 晴私御膳惣祭禮不可准所謂爲私御饌之間供進之十參

論座確執猥雜希代新儀猥藉也仍弘盛予之許禮
來依弘憲出_レ手非弘盛之緩怠之由申之番文予十加
判

同夕一殿顛倒柱四本椽壁板等大略雜人盜取之間相
殘柱以下長官運送

九日 自_二已冠_一雨菊花御饌五予九十參

十一日 晴予夕參

十四日 拔穗神事十參

十五日 晴興玉神事予ハ依_レ咳病不參雖_レ然奉獻之
御占神事等如_レ常 八神主ハ昨日外祖母逝去仍御贊

以下被_レ納長官_一

十六日 晴御巫祓如_レ例河原御祓予ハ不參獻奉物御
稻奉下同前御贊七百御機食三百送_二子良館_一

例幣延引由十日御教書次第施行又十四日可_レ被_二發
遣_一之由十三日御教書以下廻覽予之點稻進道全檢撲

同夜御饌予ハ不參預直會_一

十七日 晴神宮神事如_レ常一五予九十昇殿東寶殿予
參尙前御調糸奉納七八日之大風傾危以外也輕_レ命

參者也九神主參錦綾之櫃_ヲ表葺相殘方_ニ奉_二昇寄_一勸

盃御遊十參

十八日 晴荒祭宮祭禮宮比矢乃籌神事等如_レ常予九
十參

同夜例幣五予九十從東寶殿予參西寶殿九參勸盃_ニ予
九十參_二神事_一如_レ常幣馬預一件神事前々日數雖_二相

違_二十七日令_二下着_一可_レ行_二一夜_一然者本宮神事可_レ爲_二
式日_一之由就_レ被_二仰下_一昨日御下着神宮此旨被_二相

觸_二之處遠所之予人等俄難_一參之由被_レ申外宮神事無
_レ之仍今夜被_レ行_レ之

十九日 晴瀧祭祭禮予九十參月讀伊佐奈岐宮祭禮十
參

廿日 晴小朝熊祭禮予ハ今日父遠閑日仍退出牛喰饗
予之分_ニ送_一館役所別儀歟每年如_レ此

廿一日 晴予ハ依_二潔齋沐浴遲々_一不參昨日饗膳召寄
祝_レ之

廿二日 晴瀧原祭禮六代經元參

廿五日 晴伊雜宮祭禮五代正秀參

同日 風日祈宮祭禮九十參祝承弘安酒肴送_レ館

廿八日 晴東寶殿忘火屋殿一殿伊雜宮等事注進解狀
如署

十月

四日歸着

廿五日 晴伊雜宮祭禮十代泰春參

同日風日祈宮祭禮五子九十從饗送進館服氣方不

進不審

晦日 晴輪越神事時分大雨指笠五子九十八神主服

於予之館被越櫓永保神主待清晨等同越皆出納一薦勤之

七月

一日 晴交替予番文五子九十加判

十一日 晴交替五番文五子九十加判

廿一日 雨予依雜熱不參

廿八日 晴大物忌父尙重任宮奉行加判

八月

一日 晴五子九十於廳舍加判如常無酒肴

三日 伊雜宮顛倒云々

八日 正殿盜入參歟之由職掌人等注進仍十神主物忌

等參拜見之處瑞籬板ヲ押破大床御金物等悉放取仍

糺明之處扇屋右衛門尉之子六郎男菖蒲男兄弟兩人逐

電畢件金賣手等捕之處六郎之妻女賣之由答彼女

召捕渡了六郎之家屋敷沒收檢斷今度彼跡得分在地三

六月廿日ヨリ百日後

分一刀禰三分一給之新儀也在地者假屋刀禰者在藁

屋時給之先例也或中門或妻戸在家者祭主殿之進退

道後方ヨリ計之下地者彼跡一段仁及者祭主殿進退不

足一段者神宮之計也是近代之儀也往古者雖不

足一段祭主進退外宮者當時毛如昔扇屋右衛門尉

者自兼六郎菖蒲等令勘當之間無相違歟

十一日 晴交替九番文子九十加判

廿一日 晴交替予番文子十加判盜人事注進解狀加署

廿三日 晴盜入六郎男於山田召捕之於宇治岡

邊誅頭如此者於神宮誅事新儀也自神宮渡道

後自道後渡守護誅之先例也但氏茂一禰宣代

盜人小法於神宮被誅畢神慮難測之由也

廿七日 雨夜大風自亥剋至卯剋東寶殿千木鏗木

覆左右板葺萱等吹落東方千木二枝殘瑞籬荒垣等悉顛

倒荒祭宮御垣同前宮中生木彼是百本計顛倒前九禰宜

館軒打破岩崎館打破九丈殿打破荒祭宮忌火屋敷打破

惣而禰宜權任職掌人等宿館悉吹破諸鄉迄隣國同前

人牛馬若干死云々

九月

一日 雨交替予於三廳舍前宮守物忌父弘憲同弘盛

無實子令養子改姓讓遺跡仍被補考先例氏助以經兼之孫士祖考申之間去嘉吉三年二月四日被補之處非經兼之子異姓孫爲士民之由自神宮被申祭主清忠卿之間依無其子細存知被申補畢尤不可然可被略之由被仰下之間不被引付之而去應永年中祭主通直卿兼春被申補畢件兼春雖爲異姓者依爲兼時之養子甥也繼荒木田姓叙爵畢經兼依無實子養氏助令繼遺跡上者云理運云先例何不被免之由就懇訴被免文安二年九月日被引付之畢於末代此可有據歟縱雖號養子或有實子之者自幼少之時被養不繼家者不可被用此儀之由被定置者也 有榮叙爵事以兼春氏助等之例祭主宗直卿被申補有興依無實子有榮之自產屋之內養令繼遺跡孫也此等以度々例尙重補任

十五日 晴贊海神事予清泰五代季滿一代正秀二代守博三代不被參館守成六代忌自泰秀十代泰俊四代守雄八代服間自長官氏卿九代鹿海海土鹽鯛六艘小濱海士大鯛四艘安波羅氣役人不參自余神歌神事等如例年同夕與玉宮神事予十參看二種清宮計進之無謂看三

種清宮後清酒一獻兩盃也精好之處役所未馴由中次御占神事同衆參召立行高

十六日 晴月次祭使事五月廿六日御教書今月九日祭主下知十四日宮司狀今日廻覽御巫祓後河原御祓予九十御稻奉下予參次神拜等予九十御贊獻之半損分

同夜御饌告來之間參候處夜明了宵曉櫻宮瀧祭宮神事等如例

十七日 晴尙重尙常替大物忌職望申解狀加判同夜月次祭幣使昌忠御共內宮住繁外宮口久宮司神宮子九十參賀殿子參齋御遊九十參神事如常幣馬八預

同夜西寶殿千木鯉木覆左右板天氣長閑落地上瑞籬板數一枚打破畢神事退出畢時分也

十八日 晴荒祭宮祭禮宮比矢乃箒神事予九十參

十九日 瀧祭宮祭禮五子九十參

月讀伊佐奈岐宮祭禮十參小朝熊宮祭禮五子九十參無酒看如何

十一日 晴交替予番文五子十加判四神主番文雖相待出納不持參無謂西寶殿事注進加署公武兩通

廿二日 雨瀧原並宮祭禮九神主代仲氏參下向大水廿

之由返答常秀一禰宜代ニ一度實久代ニ一度神宮ニ被
渡其例ヲ引被申其例以ニ別儀ニ被遣之由返答既前
祭主宗直卿代文安五年六月廿三日同六年五月三日一
社奉幣終無其沙汰ニ由雖被仰是非ニ不給者神事ヲ
可略之由被申之然者內宮計可被行之由被仰雖
然天下御祈禱處依ニ神宮新儀申其儀不可然之間
被遣馬又御劔ヲ可給之由被申此等段自ニ京都可
被仰之由被仰如此問答等依ニ繁多ニ神事遲々內宮
者此儀雖不被申被遣馬畢

四月

一日 晴交替五番文四五十予九十加判
二日 雨當宮工等召符去月廿八日奉書頭人開闔廿九
日祭主下知
十日 雨氏神事神事五神被參新預所尙重御食備進
十一日 晴予之許御祓會所仍夕神拜
十六日 晴三月廿七日祈謝宣旨今月七日祭主下知十
五日宮司狀廻覽則請文ニ加判
廿一日 雨交替予番文五十予十加判

五月

一日晴 交替五番文五十予九十加判

當年諸國口病倍増於當所者未雖無其儀且爲天
下祈且爲所於一殿一萬度御祓勤仕予之此行五十
九十權任俊尙直垂季滿同永保布衣公文所物忌不勤之
予之以ニ所從自ニ近所館ニ疊々借令敷之權任少々先
予之館ニ來臨仍館守進酒被爲羽館齋進酒一殿爾三
同前

三日 晴當宮參籠順者於山田一相留事公方可被
申之由館守等雖度々申不被成仍上目安之間
被成ニ解狀ニ畢加署

同日 天下病事祈事去月廿六日御教書廿七日祭主狀
今日宮司狀廻覽則請文加署

五日 大雨宮蒲御饌予九十參在酒肴
十一日 晴交替五番文五十予九十加判
廿一日 晴交替十番文五十予十加判

六月

一日 晴交替予番文四五十予九十加判
十一日 晴交替十番文予八十加判
十四日 晴尙重之五位寶德二年四月六日宣旨五月
三日祭主施行六月十二日宮司施行十三日宮奉行今日
加判件尙重叙爵事雖爲異姓者前大物忌父尙常依

宮司告狀廻覽 件祭主職事爲公武御沙汰宣下以前

四日參神祇官神事五日給官符

宣旨幣使秀忠朝臣下向之處祭主出於安濃津被施
行之云々

九日 祈年祭幣使從四位上秀忠御共內宮恒元
外宮雅主御手水

役守博
泰俊御鹽湯役人膝衝可給之由申惣官直御下

向御拜賀之時可有下行之由被仰仍參布一端敷役

人ハ一貫可給由申無謂宮司氏長神宮子九參神事

如例幣馬預予十神主加灸

十一日 晴交替五番文五子九加判地下靜謐爲祈禱

今日於一殿一万度御祓勤仕之五子九衣冠權任季

滿神主直垂物忌皆布衣皆疊敷

同日神業神事九參予饗初十

十二日 同神事九從

十六日 晴握御馬公家江可有注進之由以頭人

被仰下旨十三日祭主下知之間宮司狀等廻覽則注進

之解狀加署

十七日 晴田宮寺明日行物取役人來頭文加判予小頭

廿文權任十文宛遣之正月同前

廿一日 晴交替五番文五子加判

三月

一日 自日中雨降交替予北御門御鑲未被拵之

興里申之於一鳥居九神主行合此旨申弘家神主

申付處于今無沙汰無謂重堅可申付以他御鑲可

奉差堅之由九神主返答 番文五子九加判

三日 晴桃花御饌予九參在酒肴物忌方同前

十一日 雨予遲參番久政印以後仍不加判

廿一日 晴交替五番文五子十加判

同日 伊勢一社奉幣來廿三日可被發遣由今月十

日御教書十四日祭主下知廿日宮司狀

廿六日 晴山宮木目神事子參物忌宮守忠利祭鎮時

忠直垂六八神主依服氣御初不被進二三四五子御初

獻之神事如例祭中谷子歸參田宮寺參外宮神拜

廿七日 晴正信五位文安六年七月廿五日宣旨同九月

三日祭主施行寶德二年二月二日司奉行同廿一日宮

奉行加判

廿八日 雨一社奉幣使昌忠御共內泰俊
外口久御手水配膳祝

承史姓泰神宮子十從甚雨之間錦綾被預子良館神

事畢時分夜明了於外宮當祭幣馬御劔神宮不被

渡者神事不可行ト被申舊例引祭主爲得分

摘進處無其儀物忌無沙汰不信之儀也

十一日 晴自日中一番交替五番文四五予九十加判

十五日 晴御竈薪奉納神事告三度來之間予九十參

於廳舍數剋雖相待自參不被參之間余入石壺

着座後五神主被參告二度之不來仍遲參云々不

合御鹽湯而被從事新儀也殊更祝詞讀進之八神

主服氣御薪由貴殿軒立置之不削水量五尺

廿一日 晴交替五番文五予十加判

廿六日 晴荒祭宮御箭料所部田御厨事當十禰宜雜掌

就久次之申狀被成廳宣加判

廿七日 晴宇治山田確執事開通路可和睦之由上

使前祭主清忠卿當祭主依違例代舍弟房直朝臣今日

山田下着廿八日兩殿以使者使節奉行下着可

令和睦其間可止弓箭之由可被下知之之間相

副奉書被觸送長官仍被下知之廿九日兩殿御參

宮前惣官衣冠予之許奉入三四十神主祠官數輩

皆捶持參新殿直垂西米野亭奉入八九神主祠官數

輩被參云々九神主二瓶持參云々

祈年祭可爲式日由去月廿一日御教書廿五日祭主

下知今日宮司狀廻覽

二月

一日 晴交替五番文一五予八九十加判歟山神事宮司

參神宮一五予九十參在酒肴次第如例同上使奉

行兩人山田下着飯尾備中守殿布施民部丞殿

五日 晴奉行兩人前惣官新殿御故障宗直公廿日他界目代鉢

秋神主長官館來臨和睦事被仰一神主老體仍九神

主對面則地下被相觸之處可隨仰之由捧請文

上使或廿七日或一日雖有下着山田輩依兔角申

令遲々雖然開通路可令和睦之由御成敗之間

申事不被用仍

七日 晴於外宮一鳥居和睦前惣官衣冠兩奉行上下內

九神主衣冠外八十神主衣冠當所長三人屬屋衛門尉藤兵衛太郎紙屋六郎皆

白帳着山田長三人皆上下着自當所兩奉行五百

疋宛折紙進之祭主蒙御禮追而可申由也五日於

長官館上使被獻一獻太刀一宛被進之三方七

日和睦以後則上使四方同時上洛畢

同日北御門御鑠放執仍先古鑠被納置者也

八日 晴祭主職清忠卿補任五日宣下七日祭主施行廻

覽則請文加署

九日 晴祭主職事并祈年祭可爲式日之由事相副

之告知乎

十八日 晴栗野但馬經考神主檜垣大藏丞眞神主長官

被參自管領様御神馬御太刀去月被進之處號

無通路山田留置之間罷下開通路御馬内宮

可引進之由祭主方被仰出權少輔殿御下向後使

之由申被渡御馬御太刀管領様御書云

件御馬御太刀依地下憤歎小岐洲方留置某久爲御

祈禱師依何事有御改替蘭田方可被仰付之

由愁申處更非改替之儀内宮御師職事始而被憑仰

付旨被仰云々當長官子息守喜守秀神主兩人當管領

島山農以前御當職之時彼以御執奏令轉任仍朝夕

致御祈禱之由被聞食如此被仰付了

同日官幣者未被進之由也仍今日神宮神事行之束

帶清衣木綿等如常取神山向御鹽湯等參宮司不參間

彼神玉串進之予九十五串_{代物忌弘}物忌等參朝廷奉

祈荒祭遙拜等如常次宮比矢乃等神事其後荒祭宮祭

禮等如常衣冠予九十參

同夜私御饌十參預直會件御饌米下部不參間自長

官取替沙汰開通路者定可進歟

十九日 晴瀧祭宮祭禮五子十參

同日月讀伊佐奈岐宮祭禮十參

廿日 少雨小朝熊宮祭禮予十參酒肴送館

廿一日 晴交替五番文四五子十加判

廿二日 晴瀧原并宮祭禮雖爲巡番入服氣之間自

長官代官可被進之處依無通路略之幣使米

長官得分

廿五日 晴伊雜宮祭禮予代氏綱參如例

同日風祈宮祭禮五子九十從

卅日 雨月次祭可爲來廿六日之由廿二日御教書

廿五日祭主下知廿九日宮司告狀等今日廻覽

寶德二年_{庚午}正月

一日 天晴五子九十參宮司不參御饌遙拜等如常番

文一神主於彼館加判次於廳舍各加判次於一

殿白散無酒肴_{大井田數年退轉此}次神拜次館祝長官

無對面八神主服氣於館雖被相待番文不被送

之間退出依無通路外宮參無之二日内宮參同前

同夜月次祭依月水婦兩人出予不參五十參幣馬六

預

七日 晴若菜御饌五子九十參依通路事若菜不進

若菜御饌_{又自在八風}役所不參者於當所清淨菜可

廿六日 變異御祈請文加署

十一月

一日 晴交替五番文五予九加判

十一日 晴予神拜計退出番文ニ不_レ合神態神事十參

十二日 晴神態神事十參

十五日 晴兩宮間塞ニ通路ニ不_レ可_レ然早々可_レ開之由

依_二公方御成敗_一十日祭主殿下知十四日宮司告狀廻覽
則地下ニ被_二相觸_一仍捧ニ地下請文ニ長官請文ニ相副宮
司ニ被_レ遣_レ之

廿一日 晴交替十番文予十加判

十二月

一日 晴交替予番文五予九十加判

十一日 晴交替予番文五予九十加判

十三日 晴月次祭可_レ爲_二式日_一之由事今月二日御教

書五日祭主殿下知十一日宮司狀廻覽

同日宇治山田確執令_二和睦_一可_レ開ニ通路ニ之由被_二仰
出_一之旨去月廿九日祭主殿下知廻覽

十五日 晴與玉神態次御占神事召立行高予十參

十六日 晴御巫參竈祓勤仕之次河原御祓予九十參御
稻奉下予參次神拜等同衆共奉於_二祓所邊_一地下之年寄

等參爲_二世上怨劇_一御祈禱任_二先規_一於_二河原_一歟一殿

歟一同御祓御勤仕可_レ然歟之由申之此儀尤可_レ然當

祭禮中可_レ有_二勤行_一之旨内ニ被_レ定之處如_レ此勸申言

上神妙之由返答一二三_{老體}至極六_{中風}館仁毛_{不_レ被_レ參八服}

氣四五神主御館ニ以_二出納_一此由觸申四神主ハ老體

八十八歲參候難_レ叶之間於_レ館可_レ勤仕_一之由返答仍五

予九十玉串物忌等參_二河原_一風烈之間於_二一殿_{鋪疊}勤

仕之一萬度四神主六百度勤仕之由被_レ送_二一座_一擇_二其

外内人等少々勤仕在_レ之件御祓御祈禱長存號_二御禮_一

自_二地下_一百疋長官ニ持參爲_二鄉内惣別祈禱_一上者煩

依_レ不_レ可_レ然被_レ返_レ之

同夕御贊献之半損分

同夜御饌宵曉瀧祭神事櫻宮神事等如_レ例子九十從

十七日 晴昨日御祓禮分依_レ被_レ返令_レ用意酒肴_二長

官御館ニ進仍五予八九十玉串參會地下年寄等榮進之

以_二此次_一宇治山田確執通路事解狀并地下請文等之文

章被_レ疑_二禪定愍_一之加署

同夜月次祭可_レ爲_二式日_一由先日有_二告知_一其上有直朝

臣今日山田御下着之由有_二其沙汰_一然者兩宮神事可_レ

爲_二同夜_一之間終夜雖_レ奉_二待無_一參勤_一然者何無_二延引

里居

廿日 雨小朝熊宮神事饗牛喰促予雖爲憚同役所以別儀予之館送之

廿一日 雨潔齋等依遲々不參昨日饗今日行之

廿二日 雨瀧原祭禮參勤五神主巡番件幣使米野原卿役雖被相待不進之間俄用意難叶不被參此旨長官不被申之條無沙汰儀也幣使米人夫等不參候時

者自長官被沙汰之巡番也稱宜令參勤於後日幣使米者一倍人夫者一人分二百宛定使令催促進

長官先例也件米廿四日持參五神主許納而間後日

可被參歟之處人夫式日參候其上諸役人定式日神事執行歟之間不可參之由也役人等事者自長官

被下知者重可參勤人夫自長官雖可有沙汰歟不可被參之上者不能是非仍彼米三斗進長

官件郷予爲鎮家之間定使申付取進之件米五神主在之云々件幣使米遲參事可有紀明沙汰

廿五日 晴伊雜宮祭禮六代經貞參如例

同日風日祈宮祭禮四予九十參酒肴以下如例

十月

一日 晴交替五番文五予九十 御綿預

十一日 小雨交替九予之許爲御祓之會所仍未明令神拜退出

廿一日 晴月水婦出之間不參

廿七日 閏月番帳廻文上番自滿元迄全尙中番自行是迄全長下番自泰言迄經康末座略不審

閏十月

一日 雨交替五番文五予九十加判

十一日 晴交替五番文迄畫程雖相待一番公文所不參之由出納申之間退出其後尙常參云々宮司數廻相待云々

廿一日 晴交替五番文予十加判閏月番廻文仁波下番自參宮載之今日番仁波自定久注之

廿二日 晴變異御祈今月十四日御教書十五日祭主下知廿日宮司狀今日廻覽

廿五日 晴武田殿參宮外宮ヨリノ指南於一鳥居相留當宮指南參事大法也而外宮ヨリノ指南當人一人號

隨柄荷用破法可參云々當宮籠等留之仍令騷動之間自子良館宮守物忌父弘憲走出靜之處件弘憲麻績

ナ及傷ス仍乍兩人一殺害畢依之山田ヨリ止通路

反弓矢

神宮予九十參〇^一在寶德^{七月廿八日年}神事如^レ例但於^二錦綾^一者甚雨之間期^二神嘗祭次^一子良館^二被^レ置勸盃皆參

九月

一日 雨交替予番文予九十加判

荒祭宮巽方千木折御

九日 菊花御饌予八九十從詔刀予讀進一方御饌供進之土敷迄小濕損之間拜見之處御板敷漏畢御座危不^レ少

十日 小雨就^二外宮正殿動搖并同西寶殿千木折御事^一祈謝御祈事去月廿八日宣旨今月三日祭主告知十日宮司告狀等今日廻覽

十一日 雨交替予番文四予加判

同日伊雜神戶正領御贊當年不熟爲^レ申^レ損之百姓等數輩烈參在^レ狀彼狀備

同日一四予八九十自^二今日^一參籠

十四日 雨拔穗神事十參

十五日 雨興玉神事時分天晴之間神事例所^二六館^一雖^二不參^一奉物^二獻^一三神主守公儀不參之間不^レ獻四予

八九十參勤御占神事同前召立弘安

同日祈謝御祈請文^二加署

十六日 雨御巫祓次河原御祓一予八九十從一殿於^二酒肴以後^一手水者可^レ爲^二家司役^一之由初納申之於^二紙家司^一進手水於^レ河用^レ之雨儀者爲^二臨時^一之間番出納役之由下知仍出納勤^レ之惣而或者役人不^レ集或臨時皆出納勤^レ之諸神事同前御稻奉下予參八九十從神拜同前

御贊百姓等一同^二參三分一外不^レ可^レ進不^レ然者檢見^レ可^レ被^レ下之由申御贊損已無^レ謂之間不^レ可^レ有^二其儀^一之由色々問答畢〇由口損沙汰仍御饌三百五十宛獻^レ之子同次^二御機食三百御母良方^一遣^二三神主^一如^レ此諸沙汰略^レ之御贊以下^二長官^一被^レ納了

同夜雨御饌宵曉^レ瀧祭櫻宮神事無^二酒肴^一予八九十從十七日 例幣使清直御共^{外宮定泰}四姓宮司一予八九

十東寶殿予參祈年穀錦綾同奉納之送文行定讀進西寶殿八參御鞍奉納勸盃御遊予九十參八神主老母依^二達例^一退出

十八日 雨今日神事等予不參三神主內方違例依^二火急退出同夜三神主妻女他界仍三八故障

十九日 雨神事等不參明日カク父遠閑日仍昨日ノマ、

十八日 晴月次祭幣使清直御共同前手水祀承弘憲參神宮予八九十參御火祀承同前玉串內人役同前東寶殿予參錦綾荷前御調等奉納送文行定讀進對面予八九十勸盃幣使予宮司八同衆御遊參四所役人昨日參之處延引之間令逗留勤之但寒姓不參幣馬五神主預之神事如常

十九日 晴宮比矢乃帚神態次荒祭宮神事予八九十參

廿日 小雨瀧祭神事五予八九十參

同日月讀伊佐岐伊佐美宮神事十參

小朝熊神事予九十參說權長等不參之間出納等件役ヲ勤口神司殿顛制之間於一殿行之交替予番文四五

予八九十口等延引無余日時者同日阿摩多神事行

之時剋雖令相違可任例同次第又御膳延引之時

供進以後可有同夜祭禮モ右先例

廿二日 雨瀧原并宮祭禮十代泰春參勤大水

口口口 雨風日祈宮祭禮八九參於一殿行之洪水之

間役人等迄河端參饗膳等送館進予依難贊雖不參迄館參之間進之四五同館被參之間進之

同日伊雜宮祭禮九代仲氏參洪水之間朝熊越參仍亥

上剋計着役人等御膳供進時分云々神事如例但一瀨

被無之歟

廿九日 雨輪越神事無橋之間任例於一鳥居前可

被越之處俄被所邊懸橋於例所越之五予八九十

七月

一日 晴交替五番文一五予九十加判

四日 晴柏流神事予八九十詔刀予讀進在荒饗迄

館不被參衆皆被送云々

十一日 晴交替五番文一五予九十加判

廿一日 晴交替五番文五予九十加判

八月

一日 晴一神主於館被加判五予八九十於應

加判政所行定公文所番行高無酒肴

十一日 晴予之宿四季祓可爲會所之間自宵參神

拜計番文同前退出了

十九日 祈年穀奉幣之間可被發遣之由去月廿八

日御教書今月十一日祭主狀十七日宮司狀今日廻覽

廿一日 大雨交替十番文予十加判

口口口 晴祈年穀神事用道之處延引可爲廿三

日之由今月十七日御教書十九日祭主狀今日宮司狀

一同下剋廻覽祈年穀祭幣使清直共內守奉四姓宮司

守成三代自長官經貞四代氏卿九代

進 同夕興玉神事五予八九十次御占神事同前召立行高讀

十六日 大雨洪水館土依ニ水入ニ御巫竈祓西上剋次河
原御祓於ニ一殿一行之次神拜予八九十忌火屋殿令ニ破
壞ニ水入御竈崩之間御饌調備不レ叶仍今日無ニ御稻奉
下ニ風日祈宮橋落畢

十七日 晴依昨日洪水御贄等不進之并御器長不參其上忌火屋殿令破壞雨水入御竈崩畢於御贄御器等者自長官雖可有取替沙汰依調備不叶今夜御饌無供進仍今日祭禮可延引之由以神宮奉行之折紙觸送司中返事如此

折紙の趣委細披露申候の處則御幣使へ其分御申候處
御返事には月次祭就大水一明夜まで延引不_レ可_レ然候
間御談合候て今夜被_二執行_一候は_レ目出度候御せんな
どまいり候は_レでも御祭御入候例なく候哉無爲候今夜
御事成候は_レ可_レ然之由幣使より申され候又八社奉
幣事者いかやうにも候へ今夜にて候は_レ御心得ある
べく尙々月次祭をも今夜被_二執行_一候は_レ目出度候恐
々謹言

六月十七日

內宮奉行御中御返報

同日御稻奉下九十參

夜八社奉幣依_レ昨日_一昨日大水_ニ官幣不_レ奉_ニ越_ニ宮河_一
仍外宮神事等今夜被_レ行_ニ之子剋計參_ニ向當宮_一於_ニ二
鳥居_一任_ニ先例_一先可_レ行_ニ月次_一之由衛士申之昨日御贄
御器等不_レ進其上忌火屋殿水入御竈崩之間今夜御膳
調備何御饌以前可_レ被_レ行_ニ祭禮_一之由返答然者被_レ急_ニ
御膳_一可_レ爲_ニ供進以後_一之由重申之依_ニ御膳延引祭禮_一
延引常例也被_レ行_ニ同夜_一事無_ニ例_一之由被_レ返答_ニ猶色々_一
邪申事雖幣口也不_レ被_レ用者也仍八社奉幣計被_レ行_ニ
史姓參幣使清直_{幸外}御共內定_ニ手水爲_ニ祀承役_一之處山向勤
之神宮予八九十御火子之館_ニ來祇承弘家自_ニ廳舍_一
邊_ニ參玉串內人服氣也件役等弘家勤_ニ之依於_ニ錦綾_一者
明日被_レ期_ニ月次祭次_一子良館_ニ被_レ預置_一者也自余神
事如_レ常對面勸盃八九十
同御饌予者宿館_ニ歸着_ニ衣冠_一參八九十者衣冠之裝束ヲ
召寄於_ニ櫻宮邊_一着_ニ之參_ニ瀧祭神事_一畢櫻宮神態之時
分五神主被_レ參自之亂從

自幣使色々依被仰八日被遂神事內宮同前諸役人等或五里三里外居住或依不令清進合期於不參者相語便宜之職掌被行之畢幣代新儀也幣使清直宮司氏長神宮五子八參幣使勸盃子宮司八幣馬四預十日雨氏神祭禮八參子御初付進

十一日晴予之宿所御祓會所被借仍不參

十二日晴五位武元武次武正去月二日口宣四日祭主施行十六日宮司施行今月二日宮奉行今日加判祭主施行宮司施行三人一通也仍神宮同前

十七日晴自二十四日可致地震御祈之由事十二日御教書同日祭主下知十五日宮司狀今日廻覽則請文加判

廿一日雨交替番文迄晝程雖相待番奉行不參間退出

廿六日晴來廿七日可被發遣伊勢一社奉幣事十九日御教書廿二日祭主狀廿四日宮司今日廻覽

五月

一日晴交替番文一四五子八九十加判

三日雨一社奉幣九參幣使清直云々予自家中依二月水婦出不參

五日晴菖蒲御饌神事予八九十參子詔刀讀進

十一日晴交替番文五子九十加判

廿一日晴交替番文五子十加判

六月

一日天晴交替番文一五子九十加判

十一日晴交替番文四五子九十加判

十三日晴月次祭可爲式日之由五月廿日御教書

廿五日祭主下知今月八日宮司告狀等今日廻覽之

同日八社奉幣可被付行月次之由五月廿八日御教書

今月一日祭主下知同八日宮司告狀等同廻覽之

十五日雨贊海神態依大水宇治岡仁輪松尾ヨリ黑

瀬中濱仁出鹽合橋南解繩神事於行乘舟解繩役所舟漕等可

自長官被參神崎神事旁立等例所有被島之屋形一獻

而搔鹽取御饌之贊雖鹽引依水深海松尋取之

甚雨之間於饗於松下社拜殿調備之仍彼迄拜殿

步行鹿海之海士進鹽鯛小濱海士進饗廿獻件魚依

海荒二昨日之魚進之間令損不被用者也歸參舟

中阿婆羅氣役人不參自余神歌如例自鹽合南乘馬

先立御饌自鹿海細越松尾通於宇治岡戊剋計

歸參參衆予八十權任永保二代正秀五代經元六代守博一代

十二日 晴神態神事十從

廿一日 晴交替予番文五子八十加判

三月

一日 晴交替五番文一五子九十加判

三日 晴桃花御饌予八十參予詔刀讀進在酒肴物忌方同時

十一日 晴交替五番文四五子八九十加判

同日五位經康當年二月十三日口宣同廿一日祭主施行
今月二日宮司施行五月宮奉行加判件經康神宮引付
自宮司方以折紙長官申之間調次第被送之處
曾不申之由返答則應宣返答然問件折紙謀書也可
有糺明之由也

十四日 祈年穀奉幣來十四日可被發遣之由去月
廿七日御教書今月一日祭主狀十一日宮司狀今日廻覽
十五日 大雨風北御門御戶顛倒之由當番宮守物忌父
弘憲予之館注進^{予依當番}則令注進長官畢其後同物
忌父弘憲來依然風御鑢打立吹拔顛倒之間拵直奉
御戶納之由申之神妙之由返答其後被相觸司中
以鑄鍛冶奉直云々

廿一日 晴交替十番文予八十加判

廿二日 晴祈年祭可爲廿二日之由今月十五日御

教書十七日祭主狀廿一日宮司狀今日廻覽

祭主狀追而書先度告知祈年穀事延引重而被成御
教書者可告知之由在之

廿七日 晴山宮神事五被參

同祈年祭如告知者雖可有今日無幣使下向雖
然此儀無告知不審々々

四月

一日 予者依無所從不參 五位經雄去月二日口
宣四日祭主施行十六日宮司施行廿九日宮奉行加
日判

七日 晴祈年祭官幣使夜前下着神事可爲今日之
由及深更自司中觸送由自長官被觸之予者早
朝令經并參佛前又自家中一月水婦出畢條々於今
日者參勤不可叶之旨申之諸役人等被相觸之處
官幣日取延引之時者自京都被仰下<sup>○此間就次第
間文本々</sup>
下知存知其旨又有定日時者其段被不知
用意事每度例也仍不遂潔齋而可參乎神事者可
爲三二日以後由一同申之則此旨自長官宮司方
被觸送仍宮司幣使令申云々外宮又同前雖然

膳祇承於_二外宮_一者御手水役配膳重代俄之間於_二當宮_一者返其不及_二沙汰_一手水配膳等祇承之五位勤之畢大麻御鹽湯役人布一反下行之今日拜賀山口祭以前之間可_レ爲_二未明_一之由有_二沙汰_一之間曉着_二裝束_一之處夜明後被_レ參_二外宮_一御膳以御歟條々事多之間略_レ之

文安六年己正月

玉串以下皆參

一日 晴宮司神宮一五予八九十朝拜以後一神主退出於_レ館被_二加判_一其後五予八九十於_二廳舍_一加判自余迄_レ館_レ不_レ被_レ參之間無_二判形_一次一殿勸盃五次第神事如_レ例次神拜次館役如_レ常但一神主着_二直垂_一對面是始歟次外宮參一予八九十權任正秀_{前遣後政所永保神主代也}經元守博守成守春氏綱氏卿公文所侍兼親行定行高貞兼尙常弘案等供奉歸立之饗長官者高坏傍官者公卿臺權任者半臺也當年傍官_モ半臺是始也自余神事等如_レ例

三日 月次祭廿九日可_レ爲_二進_一發卅日_一之由去月廿八日祭主狀昨日二日宮司告狀今日廻覽

四日 晴去月月次祭延引今日被_レ行之件神事昨日三日被_レ告知_一之條事聊爾之間予者不參八十從幣馬預三神主

同日御所樣并大方殿依_二御重厄_一當年中可_レ致_二御祈

禱旨去年十二月廿五日御教書同廿九日祭主下知今日宮司告狀等廻覽祭主宮司狀_二年中每月可_レ進_二御祓_一之由在之此段雖_レ無_二御教書_一每月可_レ被_レ進之由也則請文_二加署五日付_一

七日 晴新菜御饌四五予八九十參

十一日 雨交替予番文四五予九十加判

十五日 晴粥御膳物忌等進之御竈木奉納五予八九十參五神主者遲參石壺着座之時分被_レ參然之間雖_レ不_レ被_レ合_二御鹽湯_一詔刀被_二讀進_一之條新儀也水量三尺九寸餘

廿一日 晴交替予番文予八十加判

二月

一日 晴交替十番文一五予八十加判二神主老老間當時依_レ不_レ被_レ參番司對面無_レ之

歟山神事宮司神宮一五予八九十玉串物忌_{内御巫山向權長刀禰祝諸役人等悉參山向二薦忌服之間自_二長官_一語沙汰自余神事如_レ例在_二酒肴_一不_レ足_二寶盆_一二羹一菓子計也}

九日 雨祈年祭延引此分雖_レ無_二告知_一官幣無_二下向_一

十一日 交替十番文予十加判神態神事十參

十一日 晴予依_レ無_三所從_二不參神熊神事十參

十二日 晴神熊神事十參召符請文加署

廿一日 晴交替五番文五子加判

十二月

一日 晴交替九番文四五子九十加判

同日窪田上聖事解狀ニ加署

十一日 晴交替九番文四五子九十加判

十四日 晴自_三十二日_一一七ヶ日可_レ始_レ行地震御祈_一

之旨今月九日御教書十日祭主下知昨日十三日宮司告

狀等廻覽則請文之解狀ニ加署日付十五日

十五日 雨興玉神態一殿予九十參次御占神事例所召

立行高讀進

十六日 晴御巫內人館竈祓後河原祓予八九十御稻奉

_レ下神拜等同前

同夜御饗宵曉瀧祭神事櫻宮神事等如_レ例櫻酒肴九月

延引今夜勤_レ之予八九十從

十七日 晴月次祭宮司神宮予八九十參如_レ常一殿八

十着勸盃八御遊八十雖_レ無_三延引之告知_一官幣無_三下

向_一

十八日 晴宮比矢乃波々岐神事荒祭神事等予八九十

參同夜私御膳九參

十九日 晴瀧祭神事予八十參月讀伊佐奈岐宮神事九

參

廿日 晴夕雨小朝熊宮神事予八九十參酒肴送_レ館依_二

損亡_一來六日不_レ可_レ有_二酒肴_一云云

廿一日 晴交替五番文四五子八十加判

廿二日 雨瀧原并宮祭禮予參見瀨川步渡七ヶ通下向

之處神原替夫不_レ立仍相_二催政所沙汰人等_一巡番夫之

許_二責入所從等令_二質納_一之間參畢渡野原瀨出橡原野

下向

廿五日 外宮造宮使明日廿六日外宮山口祭以前可_レ被_二

拜賀參宮_一之由告狀今夜到來仍早旦一廻覽山口祭可

_レ爲_二廿六日_一之由廿二日被定之夜_二入而御教書到來

之間如_レ此云云

同日伊雜宮祭禮八參

同日風日祈宮祭禮予六參外宮造宮使也御館參

廿六日 晴外宮造宮使清國拜賀參宮束帶神宮予十參

束帶皆疊御記奉行熙文渡_二官府宣旨政所行定_一冠衣請_二取

之次第如_二內宮造宮使拜賀_一也時但今度者不_三讀進_二渡

_レ予予披_二見之十同前如_二元返畢酒肴勸盃在_一疊予參配

同夜御饌宵曉瀧祭神事櫻宮等如_レ常但櫻酒肴無沙汰
予八九十從

十七日 晴神嘗祭幣使有直御共_{内定泰}手水役_{守成氏仲}四姓

參宮司氏長神宮一四五予八九十一神主之手扶_{九守秀}

東寶殿予參西寶殿八參送文行定讀進勸盃御遊予八九
十從神事次第如_レ例御階兼同被_ニ相觸_ニ宮司方御鯉木

以下大物等_ヲ取退御階_ヲ直畢雖_レ然御階無_ニ昇殿_ニ之間
物忌不參開_ニ北御門_計也

十八日 晴宮比矢乃幣并荒祭宮祭禮予八九十參

十九日 小雨瀧祭宮神事五予八九十月讀伊佐奈岐宮
神事十參

廿日 晴予父遠閑日也仍自_レ宵退出

廿一日 晴予今日潔齋遲之間不參又昨日牛喰饗予分

雖_レ爲_ニ指合日_ニ自_ニ役所_ニ以_ニ別儀_ニ送_ニ館之間今日行之
畢

同日先日禰宜召符之請文之解狀_ニ加署公武兩通也

廿二日 晴瀧原祭禮六巡番代經元神主參勤

廿五日 晴伊雜宮祭禮五巡番代正秀神主參勤同日風

日祈宮祭禮予八九十從在今在_ニ家酒肴_ニ

十月

一日 晴交替九番文予九十加判御綿預

七日 晴朝明郡十ヶ所就_ニ守護新儀_ニ一段錢課役事被_レ
成_ニ廳宣_ニ加判

十一日 晴交替四番文一四五予八九十加判

廿一日 晴交替予番文四予十加判

廿二日 晴美濃國東池田御厨籠米廳宣加判_{今月一日付也}

廿四日 晴禰宜重召符九月卅日御奉書同日御教書今

月二日官狀同廿日祭主狀今日宮司狀等廻覽

廿七日 晴召符請文加署

十一月

一日 晴交替五番文一四五予九十加判

同日氏神祭禮予參代官事既被_レ始上者可_レ爲_ニ其分_ニ歟
可有_ニ評定_ニ之由雖_レ被_レ定去四月不_レ及_ニ其儀_ニ神事如_レ

常大物忌父興_{里衣}尙常_上宮守物忌弘盛忠利地祭物
忌弘家弘次時忠等皆上下前々_ハ布衣近年如_レ此歟無_レ

謂乘馬稻半束飼飯小付酒三献茶役人用意於_レ饗者
送_ニ所從_ニ分五膳

五日 晴窪田上聖事廳宣加判

九日 晴重禰宜召符今月四日傳奏奉書同日職事御教

書同日官狀同六日祭主狀今日宮司狀則廻覽

同請文加署

八月

一日 晴於三廳舍行三番文吉書等一先一神主於三館加判其後廳舍四五子八九十加判

同日正見叙爵文安四年九月十一日口宣十二月十七日祭主施行當年七月五日司奉行廿六日宮奉行自余昨日被三加判予者依爲三昨日母遠閑日今日於三廳舍三加判二日 小雨重貞叙爵文安三年七月廿六日口宣七月廿七日祭主施行八月三日司奉行忠香當年七月卅日宮奉行加判

六日 晴變異御祈自三來五日一七ヶ日可三始三行變異御祈之由一日御教書二日祭主狀五日宮司狀六日請文加署

十日 晴成本叙爵文安三年十月十三日口宣同日祭主施行同十七日宮司施行文安五年七月廿六日宮奉行加判

十一日 晴交替九番文予九十加判

廿一日 晴交替五番文四五子八加判

廿三日 晴就三當宮假殿正遷宮等事可三被三尋三子細三在之宿老禰宜兩三人可有參洛之由事十三日傳奉

書奏狀同日職事御殿書十四日官狀十五日祭主狀廿二日宮司狀今日廻覽禰宜上口不可然之條々仍歲久無廻儀之由請文加署

九月

一日 晴交替九番文予九十加判

三日 晴美濃國開發御厨內宮役夫工米催促停止廳宣加判

九日 大雨水菊花御饌予八十參予於三瑞籬御門軒下詔刀讀進如三常東實殿下水流間令三蹲踞預三直會三長官自三昨日三

十一日 晴交替予番文四子加判一同參籠二三六不參犬產穢也

十四日 晴拔穗神事十參例幣可爲三式日一由三日御教書六日祭主狀十二日宮司狀廻覽

十五日 雨興玉神態予九十於三一殿三行之御占神事例所召立行定讀進

十六日 晴禰宜可三參洛三之由事重被三仰今月五日官狀十一日祭主下知今日宮司告狀等廻覽

同日御巫館竈被次河原被一四五子八九十參一四自三二鳥居三退出自余神拜御稻奉三下五參予八九十皆從

同日月讀伊佐奈岐宮神事雨儀殊更洪水間於一殿被
ノ行ノ之十參

廿日 雨小朝熊宮神事予九十從予詔刀讀進一殿無
酒肴一

同日月次祭并一社奉幣十八日可被發之由御教書等
廻覽

廿一日 雨交替九番文一四予八九十加判

廿二日 小雨瀧原并宮神事九巡番代仲氏參

廿三日 晴月次祭幣使有直御手水役 御共內宮住實宮外真口口

司氏長神宮四予八九十如常荒祭遙拜マテ一殿儀一社
奉幣ヲ期幣馬預二神主

同一社奉幣幣使宮司同前四姓參神宮予八九十從四神
主退出東寶殿御鑑雖可予給一八神主與奪仍八參勸

盃八九十參當祭幣馬每度祭主ニ被預之仍彼方者告申
之處今日被渡ニ御馬飼ニ雖然又祭主方者請取不被

渡ニ神宮銀鈔神宮之御渡事度々也先規不同今度無
其儀自余神事如レ常

廿五日 晴伊雜宮祭禮十番代仲氏參酒直悉令ニ沙汰
云云

同日風日祈宮神事四五予八九十今日饗事高依役一町去年

不熟之間可調進酒肴之由兼日ニ侘申去年下地無
相遣其上年先年不熟之時半饗ニ侘申自夫每年半饗ニ

沙汰無謂之處近年猶々減之間條々堅可有成敗之
由傍官中及御沙汰之處結句如此申條太無謂爲

酒肴者一圓可畧被仰何如此此間沙汰之送進館
廿八日 晴俊春叙爵文安五四月八日口宣五月廿七日

祭主施行六月十六日司奉行廿五日宮奉行加判

廿九日 晴假殿遷宮事注進解狀ニ加署

卅日 晴輪越神事一五予八九十

七月

一日 晴交替一番文一五予九十加判

四日 晴柏流神事予八九十無酒肴武饗杉山去年無
足云云

九日 晴春規叙爵文安五四月九日口宣五月七日祭主
施行七月四日司奉行七月七日宮奉行加判

十一日 雨交替九番文四五九十加判出納不來予之
館仍無予判一

廿一日 晴交替十番文五予十加判

廿四日 晴變異御祈事自來十日可始行之由七日
御教書八日祭主狀廿三日宮司狀ニ只今到着之間廻覽

十日 雨正殿千木北方二支落畢南方乍_レ折不_レ落

十一日 雨交替九番文予九十加判

同日守勝叙爵四月七日宣旨五月廿七日祭主施行今日

司奉行則宮奉行加判

十二日 雨氏規叙爵四月七日宣旨五月廿七日祭主施行

行六月十一日司奉行今日宮奉行加判同氏規權福宜

在_二加判_一

同日仲氏叙爵四月九日宣旨五月廿七日祭主施行今日

司奉行則宮奉行加判仲氏規仲氏規_ハ予之子也仲氏

權任子也宣下次第施行爲_二同時_一ハ禰宜子爲_二座上

先例也殊更仲氏_ハ宣下後日之處上_二被_二引付_一候條且

無_二故實_一且偏頗之儀也雖_下此段可_二支申_一歟氏規_ハ當

年僅二歲也仲氏既五十歲_ニ及間以_二憐愍_一之儀_レ畧_レ之

同日月次祭可_レ爲_二式日_一之由去月廿六日御教書同廿

八日祭主下知案今月十一日宮司告狀等廻覽同日神三

郡內可_レ被_レ止武家締_レ之由解狀加署祭主殿依_二御所

望_二被_レ成_レ之外宮同前

十五日 晴贊海神事予八十二代永昌六代經元一代守博

三代守成_{館ニ不參之}四代經貞五代氏卿_{三神主}九代仲氏_{件仲氏}

進也如_{此仁體神事ニ參}御膳裘ハ湯涌祝舟ヨリ持之

魚類不_レ喰之條無_レ謂

鹿海之海士鹽鯛六鰺進小濱海士鯛六鰺進御膳海松宮

無間色々相尋取之阿婆羅氣役人不參自余神事如_レ例

去月廿八日井毎日霖雨今日殊更天氣以外也定而可

爲_二大風洪水_一者可_レ爲_二神事_一如何_一哉危不_レ少之處天

俄晴畢令_二神慮然_一也舟中百歌無行依_レ闕發句十神主

同夕與玉神事御占神事四予八九十從召立弘安讀進氏

規始而合丙

十六日 雨御巫館竈祓次河原御祓一予九十次神拜次

御稻奉_下一神主_{新カ}自_二御稻_一退出自余次神拜

同夜雨御膳宵次瀧祭神事次櫻宮神事雨儀一殿次曉御

膳予八九十夜明丁

十七日 大雨月次祭幣使雖_レ無_二延引告知_一無_二下向_一宮

司參神宮予九十大物忌父與里不參二薦弘富_ヲ召宮守

物忌一薦服氣二薦弘盛_ヲ召地祭物忌一薦弘家_ヲ召東

寶殿_ニ予參送文行定讀進勸益予十神事如_レ常

同日就_二御經木事_一祈謝宣旨廻覽則捧_二請文_一

十八日 雨宮比矢乃等神事於_二第四御門下_一行_レ之次

荒祭宮神事予九十

同日主神司殿顛倒雜人少々取散相殘分長官被_レ取

十九日 雨瀧祭宮神事八九十參

變之儀可_レ爲_二如何樣_一哉此分可_レ申之由被_二誘引_一仍
二神主許參被_二申通_一由之處先度儀雖_レ爲_二勿論無_二家
子福宜_一間難儀之由返答就者以_二權神主_一可_レ被_二勤仕_一
瀧原并宮伊雜宮神事等以_二權任_一被_レ行之恐此御神其
儀何可_レ有_二子細_一哉之由被_レ申之雖_レ然於_二今度_一者無_二
余日_一皆々凝_二談合_一自_二來祭_一可_レ被_レ定事之由也
仍先五神主被_レ參畢予御初廿文

十一日 交替九番文一五子八九十加判

十四日 晴御笠神事予九十參詔刀等予讀進

十九日 晴變異御祈事御教書以下廻覽予今日加灸同

請文_二不_二加署_一

廿一日 晴依_二灸穢_一不_二參_一

五月

一日 雨依_レ灸不_二參_一

八日 雨宮司氏長補任四月九日宣旨同十七日官狀同

廿七日祭主施行今日宮司告狀等廻覽

同日變異御祈結願之事御教書以下廻覽請文加署

十一日 晴不_二參_一

十三日 晴自_二今日_一當番當時番代_レ不_レ被_レ差雖_レ不_二

口迄_レ館參

十七日 晴夜亥尅計_二正殿覆板鯉木悉落御階高欄等
被_二打摧_一畢千木者乍_レ折不_レ落雜人亂入御金物等放取
候間所_レ殘鯉木金物以上六長官_二被_レ取了件金物材木
等事古殿祭主得分也然者此等可_レ爲_二其分_一歟之由道
後政所方_二ヨリ長官_一被_レ申神宮_二取之先規也先應永兩
度假殿之時鯉木金物等經博一福宜被_レ取之畢之由返
答應永度經博被_レ取之事者若爲_二祭主通直代官_一被_レ取
歟每神爲_二御代官_一被_レ計申間不審之由重而被_レ申之其
儀爲_レ致_二支證分明_一者不_レ可_レ自專_二無_二其儀_一上者只神
宮計勿論之由返答又荒垣內顛倒木如_レ此物等宮司得
分之由宮司方_二雖_レ有_二沙汰_一不_レ及_レ迄_二催促_一儀顛倒
木得分之事勿論也如此金物材木等無_二其沙汰_一歟只
神宮計也

十八日 晴件鯉木等事急被_レ成_二假殿遷御_一可_レ被_レ奉_二
修理_一之由注進公武兩通宮司雜掌_上

廿日 晴予之灸今月愈候間參拜

廿一日 晴正殿ノ棟_二苫_上奉_レ覆宮司氏長沙汰之

六月

一日 晴交替九番文一五子九十加判宮司氏長拜賀十
神主對面

故實_二故不_レ及_レ開_二記錄_一西寶殿予參開_二閉御戶_一以前御遷宮之後西寶殿造_二進之_一仍本樣古物等此間外幣殿奉_二納置_一之間自_二彼殿_一奉_二出本樣儀式以後西寶殿_一奉_レ納件神事次第注_二別記_一申畢退出之時宮司供給雜事無沙汰之間本樣使宮司乘馬_ヲ質_二取仍不_レ可_レ有_二無沙汰_一之由退望然者拾貫文可_レ有_二沙汰_一之由申之馬_ヲ返候

十五日 晴御竈木奉納神事四予八九十從水量三尺五寸餘

廿一日 晴交替予番文予八十加判

二月日

一日 雨交替五番文一五予八九十加判鐵山神事一五予八九十從在_二酒肴_一神事時分雨晴宮司忠春去月廿八日逝去

八日 晴祈年祭可_レ爲_二式日_一由告知廻覽

九日 晴祈年祭予九十參幣使清直無_二宮司_一之間彼櫛玉串於_二石壺_一進_レ之予取_レ之大物忌_ヲ召渡自餘同神事如_レ常幣馬十預_レ之

十一日 晴交替九番文五予九加判

廿一日 雨交替十番文四予十加判

三月

一日 雨交替予番文四五予九十加判

瀧祭副物忌荒木田弘行補任廳宣加判去二月廿六日之日付也皆判

三日 晴桃花御饌予八九十從詔刀文予讀進在_二梅津役酒肴_一石橋分無沙汰仍憤_レ之玉串物忌方別役取勤_レ之

十一日 雨不參依造_二作子細_一

十七日 晴外宮造宮使職補任去月廿九日口宣并次第施行造宮使告狀等廻覽請文一神主狀也

廿一日 晴不參國方與_二長野方_一合戰頭等實見_二相交輩同宿之間自_二十七日_一迄_二廿三日_一七日間斟酌同山宮神態神事八順番俄違例仍物忌并彼宮役人等計參遂_二行神事_一畢予之御初廿文進之

四月

一日 晴交替九番文一四五予九十加判

五日 晴氏神祭禮五神主可_レ被_レ參之由自_二官首_一二神主被_レ命仍三日五神主予之許_二來臨此事既去去年二神主始而被_二定置_一事氏神山宮神事老體者以_二代官_一被_二勤仕_一畢然者二神主可_レ爲_二順番_一之處今又如_レ此腰之

內宮氏經日次記二

文安五年戊辰正月

一日 晴 一四五予八九十參一四朝拜ヨリ退出先一

神主於_レ館番文吉書等加判次於_二廳舍_一五予八九十加判次送二四加判次一殿司對勸盃五番文番貞兼次白散次酒肴次神拜次館祝吉書一衣冠五予八九十次外宮參同衆家子權任經元春俊守博經代政所後守成守春氏綱定久政所代氏卿公文所兼親行定代也行高貞兼弘安尙常等參神事如_二例年_一

四日 晴 去十二月次祭延引今日被_レ行之幣使高司權少補清直御共內宮定幸外宮 高司殿親父基親參勤之時者兩宮重代權任不_レ共仍異姓人勤是者故通直卿爲_二養子分_一歟仍無_二相違_一手水祝承役宮司忠春神宮予八九參勤八九參今日神事無_レ觸雖_レ然自_二道後政所方_一一日內々此由可_レ被_レ心得_レ被_レ申之仍參此事宮司告狀二日到來則番出納被_レ遣云然出納緩怠無_レ謂廿七日自_二公方_一被_レ仰出云幣馬九預

七日 晴夕雨新菜御饌四五予八九十參

十一日 晴交替予參番文一五予八九十加判

十三日 番參本樣使夜前下着彼下向事二日御教書七日宣旨同日祭主狀十二日宮司告狀夜半計到來仍今朝廻覽雖_レ可_レ爲_二神事_一今日之由申_レ兼日無_レ觸之間不

可_レ叶由_二返答日時可_レ爲_二今日_一之由被_レ仰下_二之處兼不_レ被_レ告知_一之條祭主無沙汰歟今日無_レ神事者令_二上洛_一此分可_二注進_一之由宮司方へ堅申之間司中ヨリ日內四ヶ度雖_レ觸送_二神宮無_レ兼觸_一上者曾無_レ承引_一雖_レ然諸役人等可_二參勤_一歟之由重而被_レ相觸處來十五日例式爲_二神事_一之間清進可_二合期_一於_二其以前_一者難_レ參之由申間此旨宮司方へ被_レ觸送_二仍本樣使等官長參_一結進歟奉行師昌_二五口志云云再三懇許之間然者少之役人者以_レ代明日可_二遂行_一旨返答

十四日 晴予九十束帶宮司忠春束帶公文所師昌行定弘安衣冠自餘布衣於_二一殿_一任_レ例可_レ讀_二進宣旨_一由催促之處宣旨宮司方へ渡_レ之由申宣旨神宮_二到來然者可_二返渡_一而有_二其例_一之由問答之處可_レ讀進無_レ仁體_一今度此儀_レ可_二以失_一由官使越前守氏里懇訴之間無_レ讀進次第_二參人神事如_レ例今度儀式計也本樣使等無_レ

廿二日 晴瀧原祭禮七巡番代經貞參

廿五日 晴風日祈宮祭禮予九十參祝承弘憲

同日晴伊雜宮祭禮予巡番代氏綱參神事如_レ常

里直會宵二盃朝三盃進之云云酒直并儲之饗等宵朝如

_レ前

寛文八_申年十二月十五日書寫校合畢

氏經日次記一卷以荒木田久老藏本令騰寫雖多魯魚豕
亥之誤以無類本不能校訂矣

明治丙午二月

佐伯有義

門ヲ開着座如_ニ本殿之時_ニ于_レ時二神主詔刀讀進今度者脱_レ沓先例也于_レ時一同兩端次下向件假殿者宮司以_ニ私力_一致_ニ沙汰_一重任御免之事申時此假殿可_レ致_ニ沙汰_一之由申定畢仍神宮ヲ奉_レ覽如此沙汰每事聊尔也御裝束者絹生御樋代覆ハ布御殿者無_ニ御鑲_一久留々計也御門ハ懸金計御垣ハ柴也如此每事雖爲_ニ聊尔_一既數年御顛倒之間且又此段依_ニ神慮_一歟被_レ遂_ニ行之_一仍不_レ及_ニ召立_一勤行之狀注進別紙在_ニ引付_一古殿二神主預_レ之六日 晴世上靜謐并神璽出現御祈事一日御教書三日祭主告狀今日宮司狀廻覽請文加署七日付又儼御馬奇特事依_レ有_ニ公方御沙汰_一自_ニ祭主殿_一被_レ尋仍注進十一日 晴交替一番文一二三五予九十加判十一日 晴交替予番文五予九十加判

十一月

一日 晴交替五番文三五予九十加判五日 晴氏神祭六參四巡番勸樂五辭退仍六參十一日 雨晴二日神態神事十參十三日 晴一社奉幣事廻覽十八日 一社奉幣使秀忠御共_{内氏綱外雅}御手水役永尙五予九十從_ニ東寶殿_一予參勸益予九十馬二足銀鈔二祭主

ニ被_レ留

廿一日 雨交替予東寶殿御戸本差相遣歟但御鑲御封無_ニ相違_一之由物忌申之狀此旨長官ニ申送_ニ番文_一予九十

十二月

一日 晴交替六番文六予九十加判十一日 交替予番文五予九十加判十五日 晴興玉神事宮予九十次御占召立行高十六日 晴御巫祓尺魚失念無_ニ用意_一代五文沙汰河原御被_ニ二五六予九十_一從次神拜二神主自_ニ御前_一御稻奉_レ下參十神主供奉自余神拜

同夜御膳宵曉瀧祭神事櫻宮神事在_ニ酒肴_一九月延引分神事等次第如_レ常予九十從

十七日 晴月次祭幣使秀忠御共_{内氏綱外雅}御手水役人_{永尙}一人

宮司氏長神宮二三予九十勸益御遊九十神事如_レ常

十八日 晴宮比矢乃箒神事次荒祭神事二五予九十從

同私御饌十參同曉瀧祭禮予九十

十九日 晴伊佐奈岐伊佐奈美神事十一人參

廿日 小朝熊宮神事五予九十從酒肴送_レ館

廿一日 晴交替二番文二三五六予九十加判

臨時者當祭神事可_レ爲_ニ以後_一之由被_レ仰仍次第如_レ例
三神主依_ニ老耄_一西寶殿御鎰_ヲ予_ニ被_レ渡但先送文計讀
進期臨時之幣物不_レ開_ニ御戶_一退出仍予_於例所_ニ御鎰

ヲ渡對面_ニ予九十勸盃王使_ニ幣使_一予宮司九御遊同衆
次自_ニ鳥居_一社奉幣_ニ參_ニ予九十南御門邊_ニテ清

衣_ヲ着予_於例所_ニ西寶殿_一御鎰_ヲ給參入_ニ神主東寶
殿_ノ御鎰_ヲ以前祭禮_{ヨリ}所持予_ニ被_ニ與奪_一仍予_ニ西寶殿

ノ御鎰_ヲ九神主_ニ渡東寶殿_ニ參今夜兩祭之錦綾并先度
子良館_ニ被_ニ預置_一錦綾被_レ納_レ之_ニ了九神主西寶殿_ニ參

御鞍_ヲ納_レ了勸盃予九十參

十八日 晴宮比矢乃需神事其後荒祭宮祭禮彼宮物忌
二薦不參仍出納彼役_ヲ勤就間本綿麻不_レ請俄奔_レ之一

二五九予九十

十九日 晴瀧祭神事予九從十神主酒肴時分參預_ニ酒

肴_ニ新儀也

廿日 予依_レ爲_ニ父遠閑日_一自_ニ十九日_一退出

廿一日 不參

廿二日 瀧原祭禮六巡番雖_レ然灸治

廿三日 晴祭主職清忠還補事廿日口宣廿一日祭主狀

廻覽則請文加署

廿五日 雨風日祈宮祭禮雨儀於_ニ一殿_一行_レ之一三予
九十從_ニ酒肴_一三神主酒肴自_ニ館被_レ請_一之由役所申_ニ之

仍三退出

同日伊雜宮祭禮五巡番代經貞參

同日月讀宮假殿遷宮可_レ遂行_レ之由雖_ニ宮司申_一依_ニ儀

式聊爾_ニ被_レ延_一九日十日司奉行廿日宮
奉行口宣以下不_レ副

十月 晴交替一番文一二三五六予九十加判重賴叙爵

宮奉行加判

同夜月讀宮假殿遷宮二五予九十宮司氏長皆束帶於_ニ

例所_ニ先手水彼宮使人勤_レ之宮司南神宮北南上東面次

大麻次御鹽湯同役先御神寶御樋代御裝束等也_居次

宮司神宮司鬘木綿同取_レ櫛歸_ニ本坐_一次神宮同前御前

參先神宮次宮司着座宮司參神宮西東上_レ時二神

主詔刀讀進先例不_レ脫_レ沓今度被_レ脫_レ之不審顛倒之御

殿之軒兼切開自_ニ其役人參昇在_ニ秉燭_一雖_レ無_ニ召立_一權

任數輩參_冠衣悉奉_レ渡_ニ御神寶_一給之所余便宜之職掌給

之所御體_ヲ奉_レ出神宮左宮司右蹲踞行御神宮前_陣警

宮司後陣在_ニ道敷_一假殿秉燭兼_テアリ神宮左宮司右_ニ蹲

踞奉_レ鎮_ニ御體於假殿_一御神寶等奉_ニ取納_一御戶_ヲ堅御

一日 晴於三廳舍一二三五六予九加判如例酒肴無沙汰

四日 晴新禰宜十神主七月七日口宣上卿萬里小
路大納言十八日

官施行同日祭主施行今月一日官奉行今日加判新十守喜加之

十日 晴石清水八幡宮惟異御祈事四日傳奏狀七日祭主下知今日宮司狀廻覽則請文之解狀加署

十一日 晴交替一番文一二三五六予九加判

廿一日 雨交替一番文一二予九十加判

廿五日 新十神主守喜外宮拜賀家子守秀守春公文所尙常供奉

九月

一日 三神主許犬產穢也彼從女令失念予之許入來間不參

七日 宗直祭主職補任事三日宣旨五日彼狀今日宮司狀廻覽八日請文加署

九日 菊花神事五予九十參無酒肴

十一日 晴交替二番文二五予九十加判自今日一同參籠

十三日 晴武秀武行五位六月十一日口宣八月三日祭

主施行十三日宮司施行今月十二日宮奉行加判十二日 晴又多氣郡前野御饌米催促廳宣如例

十四日 拔穗神事假殿事注進加署

十五日 晴興玉神事二三五予九十次御占神事召立行定

十六日 晴館祓次河原御祓一二五予九十參五神主ハ

二鳥居ヨリ退出自余神拜并御稻檢知等參但一神主

依老耄一御稻ヨリ退出仍皆令遙拜下向此儀始歟

四神主少依歡樂雖不參御贊納奉之御巫竈祓勤

之於御參代食等者不被獻之

同日一社奉幣明日神事以後可被行之由自幣使

以經考神主被告知神宮俄被仰出之間無御教

書之由也仍告狀モナシ號爲詔刀幣使位階名乘被

注送神嘗一社モ無詔刀宣命也然之處此儀不審

同夜御饌宵曉瀧祭神事櫻宮酒肴
延引神拜等如常予九十從

十七日 晴神嘗祭四姓參幣使秀直御共御宮永保
外真茂神宮一

二三五予九十參幣使御手水役可爲重代之由雖被

觸御家嫡計也仍祀承可勤之處山向勤了然間自神

宮幣使御禮被申被折檻祀承又當祭一社兩祭

之送文錦綾等一度渡之間自幣使衛士被折檻

申間ホンカ六被_レ出_レ之以_レ是進了如_レ此事令_レ遲之鷄鳴及二度而告來五子參南鳥居邊參候時分六被_レ參依御鹽湯ニ不相之間退出瀧祭神事ヨリ五モ被_レ從次第如_レ例

十七日 晴月次祭官幣延引宮司神宮子如_レ常自_レ神事時分ニ雨東寶殿子參勸益御返子下_レ御門下一

十八日 晴宮比矢乃帚神事荒祭宮神事一五子十參彼宮物忌新輔弘長二里合八幡宮怪異御祈事御教書次第施行等廻覽同請文加署

十九日 晴瀧祭神事六子十月讀神事十馬所從自長

廿日 晴小朝熊宮神事一五六子十酒肴送_レ館四神主雖_レ出_レ里送

廿一日 小雨交替一番文一二三五六子九十加判

廿二日 晴瀧原祭禮雖_レ爲_レ三十巡番去去年六神主參勤時三瀨依_レ留申其後三瀨度ハ雖_レ令退望無_レ參勤

依_レ神過難測自_レ長官守博神主被_レ參

廿五日 伊雜宮祭禮依_レ大水延引風日祈宮神事大水無_レ橋間於_レ一殿行_レ之予酒肴送_レ館

廿七日 伊雜宮九代俊尙參諸役人等式日夜夜半過待中處無_レ御參間奉_レ備_レ御膳神事ヲ遂行之由申不參

間神拜計也宵直會等催促之處其時令_レ用意畢之由申之不進件饗ハ參着以後米以下當方ニ請取役人ニ令_レ下行一備進之處如_レ此申之條無_レ謂幣使依_レ不_レ知_レ案内不_レ被_レ究問答一歟朝饗里直會酒直等如_レ前之云云件神事雖_レ爲_レ九神主巡番云急病云灸穢旁以自_レ長官可_レ被_レ進代官之處自專之條新儀也而同夜九經朝死去畢

七月

廿九日 晴輪越神事一二三五六子九氏久

一日 晴交替一番文一二五六子九加判

四日 晴柏流神事一二三六子九參酒肴送_レ館

十一日 晴交替一番文一二五六子加判

十六日 晴宮司氏長重任事七月七日宣旨同日口宣八

日官狀十日祭主施行十三日宮司狀等今日廻覽

廿一日 晴交替一番文一二三子九加判宮司不參依_レ未_レ拜賀一歟武家御壽福增長御祈事祭主狀宮司狀廻覽請文加署

廿二日 晴播磨國國分寺廳宣能登櫛比同櫛比二鄉上

分廳宣以上三通加判

八月

廿七日 晴一神主三位外宮拜賀裝束少々如元膝突アリ日笠^{以青絹被張之}被立與如木二本雜色四本其外白張數輩笠持以下在之二神主白張數輩直垂着中間二人^是舍人一人笠持以下六神主雜色一本白張數輩笠持等予雜色二本舍人一人笠持等十神主雜色一人白張二人權任清泰正秀經元守博守喜守秀守春永尙氏經氏高皆布衣直垂着中間二人宛公文行定行高弘正弘盛尙常等也先當宮神拜自南御門參西出遙拜如常自大庭乘馬橋上打渡出外宮手水神拜以下如元日一沓役清泰裾經元北宮參歸立以下如元日三獻畢時分白拍子等持參酒既雖令着座爲神事之間立座仍彼之宿三貫被遣刈田大夫自道御共仕於中屋邊被下酒

五月

一日 晴交替一番文一二三六予九十加判
五日 晴菖蒲神事一二三予十參如例在酒肴一八日 晴自酉下刻及子尅而館炎上大庭並木杉北端通之世古限北方館卅余宇悉燒失了此内一神主館在之自余無相達當時參籠人群集之間汚穢不淨相交歟其上下人等館住宮中之法犯間如此事

出來宮中殿舍有類火之危處俄風南ヨリ吹テ火止了火木有爾館預祓所籠號孫六則令逐電畢
十一日 晴交替二番文二六予加判
廿一日 雨交替予番文一人加判今日番過退出

六月

一日 晴依頭風不參
八日 荒祭宮物忌弘長補任宮奉行加判
十一日 交替二番文宮六予十加判
十四日 晴同館參
十五日 晴贊海神事予十俊尙九代經俊七代正秀六代守博一代經貞五代守春二代永尙三代氏綱四代參小濱海士大鯛四獻進鹽鯛四獻進神事如例
興玉御占神事三五六予十參召立行高
十六日 晴館祓次河原御祓一五予十參五二鳥居下向自余神拜御稻奉下等參
同夜内外物忌等予之館ニ來今夜御膳ハケヲ雖被誂不出來之間以代物可被下行可奉成御事之由自長官承之自余物ナキ時御事奉成事度々例也ハケノナキ事無例可奉進御膳歟之申間二三神主館ニ參此由可被申旨予意見仍二神主館ニ參此由

膳ニ 菜不_レ入自余如_レ例

十一日 晴交替一番文一二三四五六予九十加判司對面六御祓起座

十五日 晴御竈木奉納神事一二三五六予九十參水量三尺九寸

廿一日 晴交替一番文一二三予九加判

廿八日 晴當貞盛貞叙爵嘉吉二年十二月廿一日宣旨十二月六日祭主施行同三年正月十五日宮奉行之間加判

二月

一日 晴交替一番文一二三五六予九十加判鉏山神事同衆參如_レ常

九日 晴祈年祭一三予九十勸盃九十

十一日 晴三條殿御參宮仍予不參

廿一日 交替一番文一二三五予加判

廿七日 晴祈年穀奉幣二五予九十參錦綾東寶殿ニ不_レ被_レ納子良館被_レ預置ニ神主意見仍御門不_レ開_レ使宣命宮司無_レ詔刀_レ勸盃予王使九幣使十宮司

三月

一日 晴交替一番文一二予九加判

三日 晴桃花神事一二三五六予九十在_レ酒肴_レ物忌方

酒肴別役也今日無_レ沙汰_レ仍不_レ着殿_レ依無_レ勸盃役_レ當方酒肴一前被_レ下_レ二薦參一薦今日不參

十一日 雨依_レ頭風氣ニ不參

十二日 成行叙爵永享三年正七日宣旨同二月廿五日祭主施行嘉吉三年二月十日司奉行十一日宮奉行加判

十七日 晴番參握御馬事依_レ度々注進_レ今月五日被_レ牽進_レ荷用上分藤浪方預置奉_レ下_レ今日御厩ニ奉_レ入_レ件神

馬事十五日荷用京着又其間之飼料文引下_レ日ヤウ等之賃荷用沙汰雖_レ爲_レ先例_レ不_レ涯之間自_レ長官_レ下行

廿一日 晴交替一番文一二予九加判

山宮神事闕如

四月

一日 交替一番文一二三予九十加判

十一日 晴交替一番文一二五六予九十加判氏神祭三參彼宮祝死去仍御初取ニ不參之間予御初三神主所從

付進自余御初二薦取替沙汰云云依_レ一薦指合_レ二薦役等勤_レ之件神事役田等去年亂_レ無足仍去年十一月祭_レナ_レ今度預取以_レ私力_レ小付酒肴沙汰之無_レ心見_レ今日

祈謝宣旨廻覽

廿一日 晴交替一番文一二三五六予九十加判

柳_ニ之由被_レ申于_レ時司中侍申云依_ニ御遲參_ニ余及_ニ深更_ニ之間長官_ニ尋申候處神宮子被_レ參之由返答仍神事ヲ被_レ行由間在_ニ拍手_ニ而退出對面予十參宮司幣使ノ座ニ着_ニ三勸盃御遊同前

十八日 晴宮比矢乃籌神事其後荒祭宮神事五予十參同夜私御饌予參_ニ政所_ニ代行定御火以下館_ニ來次第如_レ例

十九日 晴瀧祭神事予九十參月讀伊佐奈岐神事十參長以下自_レ口

廿日 小朝熊神事一五予九十參酒肴送_レ館

廿一日 大雪腰立予踏_ニ分之_ニ雖_レ參樣々大宮計神拜別宮參不_レ叶而下向諸人參事不_レ叶番文一二三五六予九十加判

廿二日 瀧原神事雖_レ爲_ニ予巡番_ニ去年九月六神主被_レ參時三瀨方相留後退轉幣使不_レ進_レ之人夫不_レ來

廿五日 雨伊雜宮祭禮七代經貞參風日祈祭禮予九十參祀承弘富廳舍_ニ參御火同前雨儀於_ニ一殿_ニ行_レ之浪出御火祀承予之迄_レ館來伴神事雨儀時者末座禰宜一人役人等彼宮_ニ參詔刀讀進也近代無_ニ其儀_ニ

嘉吉三年癸亥正月

一日 晴一二三五六予九十玉串參_ニ政所_ニ代_ニ行定_ニ番文番貞兼一神主自_ニ廳舍_ニ退出仍宮司勸盃_ニ神拜館祝_ニ如_レ例_ニ一神主依_レ求_ニ上階_ニ拜賀外宮參延引予十山神北宮八王子以下令_ニ參直_ニ里_ニ出

七日 新榮御膳一二五予九十玉串權從_ニ御鹽役所_ニ不_レ參仍前々之殘自_ニ酒殿奉_ニ出用_ニ之杓今日ト十五日トハ_レ內三方ハ二柄宛也今日一柄宛被_レ下行_ニ惣而御膳供用被_レ減下行之間不足每度御膳如_レ此久由內外物忌一同申_レ之又箕役所五進之_ニハ長御得分三_ハ每年御下行仍於_ニ古箕_ニ者外物忌方下行之先規也於_ニ役所_ニ者雖_レ無退轉_ニ近年不_ニ下行_ニ之間子良館上館等之古箕借用古以_ニ人物_ニ御饌調進雖_レ有_ニ其恐_ニ就_ニ闕_ニ如_レ奉_ニ成御事由申之間於_レ杓者止而可_レ有_ニ沙汰_ニ之由下知之間參_レ了仍北御門被_レ參候處不開_ニ御門_ニ何樣候之由被_レ仰之處一薦興里申云每度二薦役也前一薦尙延此由_ニ申_ニ每度興里參_ニリ_ニ申_ニ二薦更無_ニ其儀_ニ弘富數年雖_レ爲_ニ二薦_ニ未_レ參必一薦役之由申_レ之一薦役之間番之物忌ヲ相語令開_レ之今日無_ニ其禮_ニ云云一薦不_レ爲_ニ自役_ニ之間不_レ及_ニ禮_ニ申問答不_レ休時移之間宮守物忌父弘憲臨時_ニ勤_ニ之_ニ今日新榮役所若榮御園國方神郡依_ニ知行不_ニ參_ニ仍今日御

宣同廿三日祭主施行九月十五日宮奉行今日加判

五日 月次祭六月延引分雖無兼日告知神嘗祭綾依不出來延引先六月分廿九日被成御教書卅日被發遣今日此趣自幣使以使者福宜中被仰仍二三五從予灸治相殘

十一日 晴交替一番文一二三予九十加判何幣可爲來十六日旨內々被仰出之由七日祭主狀今日宮司狀

廿一日 雨交替一番文一二三予九十加判同夜例幣使從四位上秀忠四姓參予九十從予名召始也予東寶殿參九神主參時依暗顛倒自予血^{ホノ}間西寶殿十參神事時分雨降不引裾西寶殿參昇時者引之勸盃皆參無御遊式日畢

十一月

一日交替一番文一二三五六予九十加判外宮盜人參昇

十一日 交替一番文一二五六予九十加判神態六參

十二日 同予饗

廿一日 交替一番文一二五予九十加判^{今月氏神祭禮初十文科所亂退}

轉仍無祭

十二月

一日 晴交替一番文一二五六予九十加判

假殿遷宮可爲近日之由有沙汰之間錦綾有濕損否事今日東寶殿在昇殿爲令實檢巨細可有注進之間自宵可被參之由傍官中被觸同宮司方被觸仍參北御門開二五六予十參二六今朝參之間昇殿斟酌云々然五神主可被開御戶處無故實之由被申仍予勤之手時五十被參拜見之處無濕損少々紛失歟有不足八段惣數百九十五端在之東西寶殿瑞籬御門表葺朽損居玉一果朽損

十一日 交替一番文一二五六予九十加判

十五日 晴館參御贊等納國崎長役御贊塵長五十自余各廿御鳥玉貫十連政所取之興玉神事二三五予九十從次御占神事同前召立行高讀進

十六日 晴河原御被一五六予九十御巫二薦服氣仍一薦兩役勤五九二鳥居ヨリ退出自余神拜御稻檢等參

同夜御饗宵曉瀧祭神事櫻宮神事在酒肴九日延引分予九十從

十七日 晴官幣延引宮司氏長神宮五予九千參次第如常三方櫛畢時分二神主雖不令御鹽湯版位着不待長方被行神事之條何樣哉之由可取直

廿日 酒肴予_モ預

廿二日 瀧原祭禮九神主巡番雖_ニ去年三瀬方煩落居_一

不參不審

廿五日 伊雜宮神事十巡番依_ニ指合_一自_ニ長官_一代官_ニ

被_レ進風日祈宮神事饗_ニ三神主雖_レ爲_ニ服氣_一送足先例也

先年三子十服氣時雖_ニ參館_一件饗不送之間先例雖_レ致_ニ

間答_ニ不沙汰仍今度予十不參_一

廿九日 輪越神事三子十致_ニ送館_一出納_ニ二薦越_レ之家

子_ニテ

七月

一日 交替一番文一二三五六子九十加判氏保叙爵宮

奉行加判

四日 柏流神事服氣間不參三神主爲_ニ服氣_一參館之間

苾饗催促之處無沙汰不審

十一日 晴去八日山田亂_ニ燒死者裁輩依_レ可_レ爲_レ穢

歟號_ニ交替一番文先一子加判自余如何_一

廿一日 晴交替一番文一二三五六子九十加判

八月

一日 神事如_レ例酒肴御沙汰番文吉書等致_ニ送館_一加

判一二三五六子九在判

十一日 番文一二三五六子九加判

九月

十一日 番文一二五子加判

十五日 予早旦館參納御贊不_レ獻

懸稻役田大畧在_ニ菊田邊_一當年國司依_ニ神郡發向無_レ之

仍面々以奔走被_レ懸_レ之予分有_ニ二見_一雖_レ無_ニ相違_一服

氣之間得分田邊御田當祭一石九斗三合入由也是又同

前下部_サへ不參之間自_ニ長官_一一石五斗下行御器不

_レ致_ニ沙汰_一之間同以代下行

十七日 神嘗祭官幣雖_レ令_ニ延引_一昇殿以下神宮儀如

_レ例

廿日 小朝熊神事饗延引

廿二日 瀧原神事依_ニ武家神郡發向_一不參

廿五日 伊雜宮神事六代正秀參同日風日祈宮神事酒

肴延引亂中間役所今在家之地子等不_レ致_ニ沙汰_一之由

兼日_ニ雜掌所_一佗申_一

十月

一日 交替一番文一二五子十加判予服氣過明等去月

廿日饗今日沙汰式日子雖_レ爲_ニ大裁闕日_一今沙汰之間

預_レ之廻饗氏榮分預今日御綿預氏卿叙爵六月六日口

十六日 田宮寺行物大頭百文沙汰

廿日 守雄叙爵宮奉行加判去十一月口宣同十日祭主

施行正月廿日宮司施行正月五日宮奉行不審

廿一日 晴交替一番文一二五予十加判

廿九日 變異御祈御教書次第施行廻覽

三月

一日 雨交替二番文一二予十加判

三日 晴桃花神事右酒肴物忌方別役二百文副物忌傳

之云々自ニ中尾方仁ニ取納無沙汰無レ謂雖レ然一薦勸盃

ニ余神妙間當方也

十一日 予一昨日九日加灸仍不參□□酒肴ヲ下給

十六日 變異御祈事御教書廻覽同請文今日加署

廿二日 變異御祈可レ給願事今月十五日祭主狀同廿

一日宮司狀今日廻覽祈年奉幣可爲來廿四日之申十一

日御教書十四日祭主狀廿一日宮司狀同前

廿九日祈年穀奉幣

四月一日不參

十一日 交替一番文一三五六予九十加判司對面六御

祓口起

十四日

御笠不參

廿一日 依レ無ニ所從ニ不參

五月

一日 晴交替一番文一二三五六予九十加判

五日 晴一二三五參

十一日 晴不參

廿一日 晴交替二番文一二五六予九十加判今日御神

田子雖ニ出仕服氣之間七折目時者別座敷ニ候

六月

一日 晴交替一番文一二五六予九十加判

十一日

十五日 館ニ參御贊海神事六九一代清泰二代守春三

四予十服氣之間自ニ長官ニ守博守成泰成泰俊被レ進五

代經俊七代經元七神主當病仍館ニモ不參然間御贊以

下モ長官ニ被レ納別宮以下代官モ自ニ長官ニ被レ進先規

ナリ然神慮有レ恐間被レ申請長官ニ每事如ニ平生時ニ御

占興玉神事一二五六九被レ參

十六日

十七日 官幣延引神宮如レ常

十九日 月讀伊佐奈岐宮神事自ニ長官ニ六末座九參十

神主ハ去二日舍弟他界仍四十服

一日 晴一二三五六九十從予ハ服氣一神主不着廳舍退出仍番文於館被加判其後連判次以奉行弘安出納等被送予之館又以下色々物加判宮司勸益事六神主可被參之由兼長官被仰又只今雖二神主被仰每度爲一座御役不可然之由六返答仍二神主勸益三神主酒肴以後退出自余例式神拜次長官祝二十六參三五九不參一神主着衣冠對面新儀又館吉書酒肴除人物被送服氣禰宜之館先規也今日無其儀自余神事如例外宮參延引上階拜賀未被參予分自散三十神下人請取傳之

予依服氣雖不參承及事等爲後注之

七日 晴新菜神事

九日 荒木田感忠同盛重叙爵去十二月三日司中狀今月五日宮奉行口宣案祭主雖不具數輩之上首皆被加判上ハ加判了同氏武行吉三月廿七日宮司狀今月四日宮奉行同前

十一日 晴交替一番文一二五六予十加加判

十三日 晴經繁叙爵永享十三年正月七日口宣二月廿五日祭主狀三月二日宮司狀嘉吉元年四月廿七日宮奉行加判定德口宣同前二月廿五日祭主狀三月九日宮司

狀嘉吉二年正月四日宮奉行加判

經定 嘉吉元年三月四日口宣同九日祭主狀同十六日宮司狀嘉吉二年正月四日宮奉行加判定盛了嘉吉元年十月六日口宣十六日祭主狀十一月十六日宮司狀十二月十一日宮奉行加判十七日加之

十五日 晴御竈木予之分服氣間不合奉納不削由貴殿脇立置也同服氣權任木不削無指出

廿一日 交替二番文一二三六予九十加判一神主被參館無沙汰非里故加判歟不審司對面九神主起御祓座

二月

一日 大雨大水交替二番文二五六予十加判嶽山神事同衆徒雨儀間物忌等酒肴於殿內御種等調進役人等於九丈殿勤之爲先例之處物忌可爲例所之由二神主成敗不審但神事時分晴之間例所云々予神事時分雖出里酒肴送里大夫營之彼芳志也

九日 祈年祭二十從五主神明日父遠閑日也仍不參九神主余茅住家今日他界仍不參自余如何幣馬四神主

預

十一日 交替一番文一六予十神態神事十參
十二日 同前

十一日 晴一昨日九日山田神人與神役人確執死人

百余人其內數輩燒死畢可爲村穢歟否未承定其

上忌人諸人相交問先今日斟酌此問自如何

十三日 晴今日予雖被差七番代山田事爲眼前觸

穢之間神拜斟酌三四七予十此儀同心

廿一日 晴交替一番文一二六予九加判

九月

一日晴 予妻女他界同廿日父他界仍神事參勤次第

不存知當祭御贄依爲忌被納長官但以別儀

拜領奉物等不獻官幣延引神宮如常

閏九月不參

十月

廿一日晴 交替一番文一五予加判予外院神拜布衣

十一月

一日晴 交替一番文一二三六予九加判假殿以下注進

加判

九日 雨氏神事九參予依服氣御初不獻

十一日 晴三日神態神六參予饗御初依服氣不獻

十八日 田宮寺行物小頭廿文沙汰同權任分沙汰

十九日 晴長官上階六日御教書同祭主狀廻覽

廿一日 長官當宮拜賀束帶

十二月

一日 晴交替一番文一二三五六予十加判

十一日 晴交替一番文一二三五六予九加判

十五日 晴參館初御贄不獻之御贄麋直會竈等公文

所取

十七日 晴官幣延引神宮如常

廿一日 晴番文一二三五六予加判

廿三日 晴長官上階宮奉行加判三位宮奉行無先規

不審

廿二日 晴瀧原祭禮七神主雖爲巡番違例館不

參間自長官可被進代官爲先例之處無其沙

汰但去九月六神主被參之時三瀬方松倉藤兵衛有

意根儀間彼者可奉取替之由申太神主押畱然之

間五々方令籌策無相違下向之事未落居歟云

彼云是無參勤

廿五日 晴伊雜宮祭禮予雖爲巡番服氣間長官

守成神主被遣

廿九日 晴經泰五位宮奉行去三月三日付今日加判

嘉吉二年壬戌正月

兩人參今日十神主不參間自長官予被語一人馬

所從等自長官給之在酒肴神事如例

廿日 雨小熊宮神事予九十參如例酒肴送館

廿一日 交替一番文一二三四五六予九十七神主依違例不參廿二社奉幣廿日可被發遣之由御教書次第施行等廻覽

廿二日 晴瀧原祭禮十參當祭幣使三十田口鄉役近年以代三百文送之處今日六ッ到來彼鄉定使號木下虛妄歟同鄉人夫二人進候處今度一人參件夫落着

定使役朝ハ自幣使被下歸參人夫打見二人又野原ヨリ一人道ヨリ替

廿五日 晴伊雜宮祭禮九參 同日風日祈宮祭禮一二五予從直會於祭庭行之十神主館參仍送饗

同夜廿二社奉幣使清國朝臣雖爲惣領非祭主恩秀忠朝臣依爲當祭主恩爲家督每度手水役參了

仍無今夜自餘如例二五予參東寶殿予參勸盃王使五幣使官司立渡兩役勤之二神退出常祭每事如祈年穀

廿九日 晴輪越神事一三予九如例五神主遲參仍以出納被送彼館被越

七月

一日 晴交替一番文一三五六予九加判二神主勸樂仍

番代五祀候

四日 晴柏流神事一二三五六予從件神事役人日祈依服氣不參然間權可參候處遲參仍御鹽湯役人幸爲衣冠向爲長裁相語彼件役勤次第畢於一殿苳饗

行之六神主退出仍苳饗送館

十一日 雨交替一番文一二予十加判

十七日 晴予番參候處正殿乾方瑞籬三十余枚顛倒

此由長官中畢官司修理間自長官被置宿直了

廿一日 小雨交替一番文一二三五七予九十加判司對

面當番九神主御被起座

廿九日 赤松調伏事御教書廻覽

八月

一日 晴一三五六予十參交替番文如元同十神主加

判時分九神主參仍先九神主加判其後十相殘處加判自

余館被送時分二神主參着仍加判四七館不參仍無

判酒肴無沙汰赤松調伏加署請文又外宮御池端犬

喰來人頭仍七日爲穢

內宮氏經日次記一

五百二十三

居退出與玉拜次荒祭拜開手兩端次櫻宮前ノ置石ニ着座東上北面無ニ鋪設ニ自ニ置石ニ北在ニ鋪設ニ一神主詔刀讀進諸神ニ御笠ヲ獻狀也歸着之時一同ニ兩端次酒殿拜同諸別宮拜次下向了今日御笠ノ菅自ニ內瀬兼日ニ進之處無沙汰之間自ニ長官在ニ奔走テ役人ニ下行然十五日內瀬ヨリ持參間折檻之處此御菅雨一滴ニモ不レ宛爲ニ先規ニ之處依ニ此間之霖雨ニ不レ得ニ參之由申事闕上例判無ニ下行ニ或十五文或十文

十七日 雨予番ニ參

廿一日 雨交替一番文一三四加判五六七予九十雖ニ

皆參ニ出納不レ取レ判之條無沙汰也

五月

一日 晴交替一番文一二三四五予九十加判

五日 晴菖蒲御膳自ニ宵館ニ參卯冠束帶如ニ元日ニ一

殿ノ背爲ニ列立ニ之處今日殿內ニ座列新儀也御膳次第

如ニ元日ニ但第四御門無ニ御鹽湯今日ハ茅卷菖蒲蒜山

芋名吉干魚以テ獻歟與玉拜荒祭拜兩端櫻宮拜由貴殿

酒殿同諸別宮拜次一殿酒肴長役勸盃陪膳如レ例一二

三七予十玉串内外物忌等着座三獻一同神拜

十一日 晴交替一予十依ニ參合ニ從ニ番文一二五六予九

十加判

十七日 晴予番ニ參

廿一日 大雨大水交替 番文一予九加判

六月

一日 晴交替二番文二三四五六予九十加判

十一日 雨交替一六予從ニ番文一五六予加判

十五日 雨贊海神事予十清泰六代定泰九代守成二代守

秀一代經貞五代永時三代經隆七代氏生四代等次第如レ例

同夕雨與玉神事一五予九十次御占神事召立弘安

十六日 雨御巫館被申次河原被一二予九十雨儀之間

於ニ一殿ニ行レ之在ニ鋪設ニ次第如ニ河原ノ手水番出納進

レ之次神拜自ニ御前ニ御稻檢知九神主次神拜自余御稻

之後神拜

同夜雨御膳宵曉瀧祭神事櫻宮神事予九十參

十七日 雨月次祭幣使秀忠正秀神事如レ例

予參二五予九十從ニ勸盃ニ御遊九十參予ハ假殿注進事

依レ爲ニ急事ニ退出幣馬三神主預

十八日 雨宮比矢乃帚神事荒祭神事予九十從

十九日 雨瀧祭神事予九十同日月讀伊佐奈岐伊佐奈

美宮神事往古ハ一同ニ參近長官ノ家子一人末座一人

石橋不着座。皆請歎此役所無沙汰ノ時ハ物忌不着座。仍一薦勸盃不參之。自ニ役所一薦ヲ語進先規也。近無沙汰之時當方ノ酒肴ヲ一前一薦被下勸盃ニ參畢。非ニ本儀。又今日陪膳ハ自ニ役所勤之爲ノ例之處可。爲ニ物忌之由依ニ二神主ノ成敗自ニ役所副ノ物忌ヲ語進。

十日 晴度異祈請文ニ加署

十一日 晴交替一番文一二五六七予九十加判

十七日 晴予自ニ今日當番祓候

廿一日 晴交替一番文一二三五予十加判

廿二日 晴上薦御局御參籠御神拜ニ北御門ヲ被開

自ニ十六日御參籠於ニ落合ニ御行水一千度一七日ニ被滿今日御退出

廿六日 雨公方御參宮瑞離御門ヲ被開ニ五六七予十衣冠自ニ北御門參一神主家ニ傳御祈禱料所在之然之間於ニ御與宿之際御被被進仍束帶直自ニ南御門被參御殿ノ西南上東面蹲踞三神主同祈禱料所在之於ニ一鳥居御被被進束帶依ニ爲ニ老體ニ内院ニ不參退出公方樣自ニ南鳥居御參前陣宮司束帶共侍一人南東ノ方蹲踞次御師束帶共布衣西方ニ蹲踞公方奉物ノ

金太刀ヲ所持次公方樣裾ヲ引テ御拜八度歎公卿殿上人大明近以下ハ皆御門ノ外祓候 同日今出川殿御參宮北ノ御門ヲ被開

廿七日 晴山宮神事九神主參巡番廿三日祝參神事可。爲ニ廿六日之由雖申之公方御參宮之由九神主被申今日行之予之初廿文遣祝巨細追而可注

四月

一日 晴交替一番文一二三五七予加判

六日 雨初申氏神事六參予之初廿文彼宮祝四來請取了

十一日 晴交替一番文二六予九加判一神館ニ乍祓候不ニ加判不審也

十四日 小雨御笠神事一七九參衣冠予自ニ青雖參館ニ依ニ違亂不參殿ニ參列役人等參櫻ノ宮ノ北ニ御櫛ヲ立并御笠ヲ付于時彼宮前置石列立東上西面在ニ御鹽湯ニ先御笠次當方于時日祈御櫛三本奉持先陣次笠縫御笠ヲ櫛ニ付奉持次禰宜自ニ南御門參テ石壺ニ着座役人八重疊ノ東ニ蹲踞一神主於ニ前石壺詔刀讀進于時役人御櫛御笠ヲ御門下ニ奉納一方ニ一本一方ニ二本宛歎一神主本座ニ歸着ノ時一同ニ手口自ニ西鳥

一同ニ着座幣使四姓東西上神宮西東上一薦玉串役勤仕之上者石壺ニ可ニ着座一由雖申之不_レ被_レ免于_レ時院部前ノ石壺ニ平伏于_レ時幣使後ノ石壺宣命讀進歸着之時二座ニ下王使一座ニ進于_レ時院部本座ニ歸着次櫛ヲ取事如_レ例□□次宮司神宮座立八重疊西_テ經_テ御内ニ參鑑取八重疊ノ於_ニ西際一東寶殿ノ御鑑_ヲ進二神主取_レ之持參御階ノ前ニ一同蹲踞東上次宮司瑞離御門ノ東ノ下參于_レ時神宮御前_ヲ拜於_ニ宮司前_ニ有_ニ一拜宛一御殿ノ東着座北上西面于_レ時宮司神宮ノ前_ヲ通北方ニ着座于_レ時二神主依_ニ窮囑一歎御鑑_ヲ五神主ニ與奪五不_レ知_ニ案内_一之由被_レ申仍七神主御鑑_ヲ取沓_ヲ穿_テ前_ヲ通東寶殿ノ御階ノ下ニ南向ニ立于_レ時鑑取御カキ_ヲ給宮司ニ封_ヲ取_ス其間七蹲踞封_ヲ取_テ七進七カキ_ヲ取据_ヲ引_テ大床ニ昇_{ソト}拜_ス于_レ時カキ_ヲ取忌刀_ヲ進取_之御鏢ノ封_ヲ切鑑取_ニ渡_ニ給_之一宮司ニ令_レ見東寶殿ノ御鏢ノ御封開ト申于_レ時御戶_ヲ開御カキ_ヲカキ_ヲ取_ニ渡次錦綾_ヲ取_テ御内ニ納御戶_ヲ閉于_レ時カキ_ヲ取御封忌刀_ヲ進取_之御鑑ニ付紙ノ餘_ヲ切_テ返退下シテ御階下ニ立于_レ時御カキ_ヲ封_ヲ付_テ進七神主取_レ之本座ニ歸着于_レ時一同ニ立座正殿ノ御階ノ前ニ蹲踞東上于_レ時宮司御門ノ下ニ

參于_レ時奉拜_テ退出シ八重疊西ニ列立南上東面宮司於_ニ彼前_ニ在_ニ一拜_一ヲ通共ノ侍以下八重疊ノ東_ヲ通于_レ時七御鑑_ヲカキ_ヲ取_ニ渡一同ニ石壺ニ歸着于_レ時カキ_ヲ取東寶殿ノ御鏢ノ御封納ト申于_レ時一同ニ在_ニ兩端_一ヲ退出荒祭遙拜等加_レ例次王使幣使宮司一殿ニ着于九十如_レ例淨衣木綿褌襦_ヲ脱爲_ニ勸盃一參之處如_ニ例幣時一机二前用意之南北ニ居_レ之北方先王使令_ニ着座一宮司南ニ着座幣使ノ御前無_レ之然間彼前一神主ノ館ニ爲_ニ催役一人長走其間予等殿ノ東相待之處及_ニ遲々一之間幣使退出仍皆退出畢此役者一神主令_ニ下行一人長調_ニ備_一之此事無沙汰何事哉之由自_ニ幣使一以_ニ正秀神主一神主方_ニ被_レ仰之處如_レ例役人ニ申付候之處無沙汰之條恐入候於_ニ向後者堅可_ニ申付_一之由返答_リ了

三日 晴桃花御膳二三五七予十從自_ニ北御門一參次第如_レ例預_ニ直會一ノ時桃花一葉宛進之時取_レ之笏ノ上ニ置少酒入_テ吞又二獻之時兩度少宛入_レ之_ヲ吞相殘花_ヲ令_ニ懷中一於_ニ家中一祝_レ之下向次第如_レ例一殿酒肴如_レ例大泉役初獻寒酒桃_ヲ入後二獻ハ暖_レ之本儀者初獻_ヲ暖後寒酒歎自_ニ今日一寒酒儀也又今日之酒肴玉串物忌以下酒肴別役所也當時副物忌沙汰之_二大夫二_一今日

馬上モ步行モ口ヲ打昨日ノ道遣所御社マテ如レ此昨日ノ在所ニ如ニ昨日ノ着座在ニ酒肴ニ長官ノ沙汰也今日ハ權長百文給調進之由申之勸盃配膳次第如ニ今朝ニ三獻也刀禰祝并荷用出納政所之所從以下之饗昨日延引今日沙汰之酒八升云箇云々由伊若榮神事ト號也刀禰祝未西上所從以下西亂座次田態先祝大豆次種テ蒔次權長田歌祝二人植役一人參間權長之所從一人勤之今日ノ藁等權長之沙汰也諸役人於ニ不參之饗以下一者權長預レ之於ニ無沙汰事一者權長勤レ之當神事每事權長觸催也此神事饗酒肴以下往古ハ繁多歟下向予前陣月讀宮在ニ下馬ニ神事無爲之由長官ニ申退出

十六日 晴田宮寺十八日行物當月頭役六七予百宛沙汰之

十七日 晴予番ニ參又十九日秀賴榮爵神宮施ニ判ヲ加

廿一日 雨番文一五予九加判交替事雖レ被レ觸五神主不知ニ案内ニ之由被レ申之間被レ觸予今宵處在ニ急用ニ出レ里了仍九參勤

三月

一日 晴交替一番文一二五予九十加判

同日祈年穀奉幣四姓參無ニ幣馬ニ二鳥居北東上ニ立神事次第如レ例於ニ其外一者注レ之先陣王使次幣使秀忠次院部次占部次宮司四姓ハ無ニ祀承ニ神宮二五七予九十從依レ爲ニ畫神事ニ雖ニ無ニ御火ニ余暗之間幣使參向神宮御火ヲ二鳥居被レ進次玉串行事所四姓東上手水先王使次幣使役人俊尙神主次院部次占部次宮司次鬘木綿先幣使彼役人玉串不參然之間任ニ近例ニ一薦可ニ參勤ニ之由ニ神主被レ申子時一薦與里爭可レ勤ニ玉串役ニ其上自役繁多之由申ニ神主玉串不參之時前一薦尙延每度參畢異儀何事哉之由被レ申其ハ不參之時每度可レ憑之由依ニ前玉串之語ニ參畢當玉串不參之時依レ語常祭物忌父時氏度々參勤之由一薦彼役上役也一薦參事爲ニ規模一者哉時氏不可レ參只一薦可レ參之由ニ神主成敗一膳ハ不レ爲レ役之間不可レ參之由申然者可レ被レ止ニ神事ニ之由ニ神主被レ申依レ之神事停滯可レ及ニ鷄鳴ニ歟之間於ニ先規一者追而可レ有ニ落居ニ先以ニ別儀一薦可レ成ニ御事ニ之由依ニ予之意見今夜玉串役悉一薦勤レ之幣使有ニ鬘木綿ニ而綿着之時一座ニ進仍王使二座ニ下次院部鬘木綿次送文ヲ進綾八端渡由ヲ申次宮司神宮櫛ヲ取テ御前ニ參事如レ例幣使四姓ヲ相待

被_レ退畢於津長手水役人祝紙權長于_レ時予取_レ笏政所
令用意津長皇神詔刀ヲ取讀進西向_{在鋪設}次北ニ向楊
田神社拜八度開手兩端次又西ニ向津長神社拜八度開
手兩端次同方拜四度開手在_之次又楊田神社拜四度
在開手一皆同座次着座南面蕙帳ノ搆座政所西東面權
長南北面各在鋪設刀禰祝東西上南面薦_ヲ敷予大饗_{ハテ}
ニ机菜八種_{四ハ簀}計一勸盃權長配膳祝次政所次權長
皆配膳祝次權長御箸ヲ申于_レ時一同喰_レ之次入一獻同
前次權長准_ヲ申于_レ時一端末座ヨリ机_ヲ上予之前權長
祝兩人シテ上之出納荷用請取之預_ニ此饗田一段尼田
坊ニ知行彼代官右衛門太郎調_ニ進之次酒肴海老差三
菓等在_レ之勸盃配膳同前今度ハ三獻也同火切_ヲ進_{七竈}
二柳_ニ結_{合之}火切ハ出納ニ令_{持下}火切酒肴刀禰祝等皆預
之酒田一段也岩井庸四郎沙汰之下向次津長前ノ出_{戸木}
河端ニ在手水以前役人于_レ時取_レ笏政所用意ノ八所ノ詔
刀ヲ讀進東向同拜八度開手兩端次西ニ向拜四度開手
一端次又東ニ向拜四度開手一端在鋪設前幣ヲ立
皆同座也次櫛爪ニ着座蕙帳ノ搆座南面政所西東面權
長南北面各在鋪設予大饗_{ハケ}居汁一菜八種內簀_{モリ}四
此饗所點手子良館送在_ニ復飯饗菜汁計同前同机ニ居

一同ニ一拜在ニ鋪設予引レ裾ヲ幣使前ニ着座テ一拜
設予宮司前同前于レ時御手水役人參後陪膳予盃ヲ
取以レ扇ヲ扇キ酒ヲ受テ進在ニ一端テ請取之聞食宮司
如レ此三獻同祀後二獻ハ無手本儀後二獻ハ非ニ勸盃ニ獻
先宮司ノ前テ上陪膳彼祀承也幣使陪膳ハ御手水二人
也仍御前兩人雖ノ昇レ之今日無ニ其儀予在ニ一拜テ引
レ裾本座ニ着九四前于レ時一同ニ一拜于レ時一同ニ起座
沓ニテ一拜退出祀承等迄ニ鳥居參神宮ハ以前退出御
火祀承迄館參了

十日 晴饗祝參饗御初ヲ催促米一舂紙一帖ノ由申歟
近六文三文思々也結句一向無沙汰在レ之予轉任ノ初ヨ
リ每度十文宛沙汰今日又如レ此

十一日 晴交替一如例番文一二六予加判

講座神事依ニ長官之語予參馬出納荷ヲ被レ送衣冠笏ヲ
紙ニ裹出納ニ令持政所前陣辻ノ世古ヨリ河原ニ出岩
井田神事河原ヲ通西迎院ノ前溝ニ出弘正寺之前ノ自
世古ノ堀町河出テ所ノ御社ニ參自馬下于レ時御手水彼
役人祝不參之間今日ノ役所進之號森右權長紙ヲ進于
レ時予笏ヲ取御前ニ參政所用意詔刀ヲ取履ヲ脱於ニ鋪
設立テ拜居テ拜シ詔刀ヲ讀進北讀畢居テ拜立テ拜次

御子社ノ拜八度北次大社ノ拜八度向開手兩端次西ニ
向拜四度次東ニ向拜四度皆同度也次着座南面講政所
西東面在鋪設權長南北面在鋪設並會口テ酒肴調進勸盃權
長陪膳祝依ニ祝不參役所森右衛門配膳次政所次權長
次御箸ヲ申于レ時手ヲ點次又ニ獻同前三獻畢テ自ニ末
座ニ机ヲ上于前權長ト兩人シテ上之預ニ荷用出納ノ今
日之役田有ニ御神田之上先年經博卿代井溝所損之
由依ニ訴訟ニ饗ニ五年被レ免酒肴沙汰之修理百人之人
足也其後去永享九年ニ所損訴訟之時被レ免ニ三年ノ酒
肴ニ沙汰又去年所損修理間自ニ當年ニ三ヶ年可レ爲ニ酒
肴ニ之由役所申之予之乘馬之其草稻之分稻束代十六
文荷用催促之處爲ニ酒肴ニ之時者不沙汰之由返答軒法
之儀也政所乘馬分三把之代十文同前又祝雖爲ニ廿四
人ノ今日一人モ不參此內十人計當長官ニ有歟先高依ニ
六反六人在レ之是等皆百姓等緩怠之由役人等申之
又今日十三人之刀禰廿四人之祝并予政所之所從以下
饗延引役所當長官知行號ニ由伊若菜ニ歟下向予前陣月
讀宮下馬アリ船橋之辻神事毛爲由長官ニ申畢
十二日 晴神態神事如昨日先饗土ノ二本櫻ノ本ノ通
津長參彼道雖爲ニ神事道鄉人依レ任雅意成昌仍彼垣

ヨリ一讀宛雖被進之今夜無此儀次宮司長氏祀承弘富神宮御火祀承一神主之館參之處不參仍二神主ノ館參二七予九束帶着清衣木綿褌襦ヲス彼麻自長官請之經中道玉串行事所皆參寄西ノ石壺東幣使西ハ宮司東ノ石壺神宮西上皆南面于時一拜官幣束方東居案道ヨリ南山向御手水用意于時幣使引ノ裾手水被役人泰俊冠衣此役人自長官以廻文一重代神主被差廻一番二人宛參勤懈怠之時自長官以家子神主被勤之然今夜一人無沙汰也但祭主家督外ハ無此儀次宮司手水役人山向次幣使鬘木綿在鋪設玉串櫛進之在二端次大物忌父興里冠衣送文ヲ一座進草履二神主取之披見火其間一薦下立東待披見後給之別宮官幣任付札各役人等渡兼祭也于時衛士幣馬ヲ御馬飼請取八重疊東列立次宮司執櫛山向追玉串執之進各一端自是直ニ南鳥居ノ前屏垣ノ際參神宮ヲ相待北面立子時二神主六神主在一拜引ノ裾鋪設先左ヲ跪次右ヲ跪玉串一拜シ笏ヲ腰指在一端左ノ櫛左取次右ヲ取又在二拜而右足ヨリ立テ直南鳥居參東上南面次々毎度如レ此石壺ヲモ毎度在二一拜宛尙進皆參畢

在二一拜宛而御前參引ノ裾於宮司前一拜宛在之第四御門下御鹽湯在之次宮司次幣使皆參寄一同石壺ニ着座東上于時大物忌詔刀ヲ使進使取之起座引ノ裾ヲ不穿御前於石壺讀進火歸着時玉串宮司ノ櫛取一座進二神主手櫛石壺置彼櫛取一端玉串歸着時大物忌興里ト召興里ヲ申テ參于時件櫛被渡給之奉納二神主以石壺置櫛取ヲ興里歸着之時宮守物忌父荒木田弘憲ト召弘憲ヲ申テ參于時自一座ヨリ末座マテ給奉納歸着時又玉串一座櫛進歸着時常祭物忌父荒木田時氏ト召時氏ヲ申參彼櫛給奉納歸着之時玉串所殘之櫛奉納此役皆草履不脫玉串歸着時一同踰踞有手兩端ヲ奉拜起座幣使次宮司南御門ヨリ退出神宮ハ物忌等之前在二一拜宛而西御門ヨリ退出荒祭宮遙拜所前北上西面立幣使彼前通時一同一拜宮司同前次彼遙拜所ノ石壺ニ脫ヲ沓中石壺ニ踰踞東上北面在二南端而拜下向幣使宮司背ヲ通神宮ハ此ノ石壺ヲ經テ物忌等之踰踞一拜幣使一殿ニ北ヨリ入テ東二間着座北方南面在鋪機兼居置在宮司南ヨリ入同間南北面同前予九於櫻宮前木綿ヲ取請衣ヲ脫ヲ東ノ間ヨリ入北上西面ニ着座テ

一日 小兩神事時分晴交替一番文一二五六七予九十
皆朝飯以後參加判事神拜司對面二鍬山神事役人等山
入之時分參衣冠經_ニ中通_一殿北ヨリ入テ着座東上一
二五六七予九十玉串正宮司衣冠東西面物忌西北上東
面一神主依_レ爲_ニ老體_一鋪設下_ニ疊_テ敷仍司中神宮皆敷
_レ之玉串物忌等鋪設計也酒肴祝部役簀盛二器盛二暖
物一菓子一膳副ノ物忌勸盃神宮一膳司中二薦寒酒先
宮司次神宮次々之勸盃玉串マテ皆一端宛次物忌陪膳
人長次石橋東上北面薦_テ敷此等荒祭瀧祭風日祈宮內
人物忌等也次御箸ヲ申受_ニ一獻_一今度ハ非_ニ勸盃_一玉串ヨ
リ酌替三獻畢テ末座ヨリ机ヲ出ス西方ヨリ各所從_レ請預
_レ之一座前東二間ヨリ出ス陪膳二人宮司前東二間ヨリ
出ス陪膳一人于_レ時石橋起座東方ニ薦_テ敷着座北上西
面于_レ時內物忌置石_ニ着座東上西面_ニ鋪設_石其東ニ御
巫等着刀禰宜祝植長以下ノ役人等外物忌ノ背_ニ着座
政所公文所一殿ノ末ノ壁ノ柱ノ本ヨリ東_ニ鋪設_テ敷着
座西上南面其前ニ子良母良着座_ニ鋪設_テ敷着座_ニ鋪設_テ敷着
役人調_レ之先御鍬二宛宮司ヨリ玉串マテ進_レ之_ニ居_折陪膳
山向二人次手鍬一宛木線葛_テ相副進_レ之次裏一宛進
之次又裏一宛進之次結簀進之次御種_テ九宛_小進_レ之

時_{山向祝言}和歌ヲ申ノ于_レ時口ニ五石四取_レ之一ノ裏ニ入_テ以_レ裏
結_レ之又御種_テ一度取入_テ進如_ニ以前_一取_レ之又一ノ裏
入_テ結_テ于_レ時御巫唯々ト申于_レ時手鍬ノ葛_テ取_テ冠ニ點
御巫ノ申事ニ隨_ニ以_ニ手鍬_一打_レ地次御巫御祓_テ申一同ニ
手兩端次山向打_レ田次大豆次蒔_レ種次山向西方ニ東向
ニ鍬_テ槌_テ乍_レ立御苗今日六十四日例年ニ勝太逞出來
座此由_ニ以_ニ宮政所_一時ノ長官_ハ可_ニ申上_一之由申政所之
前ニ蹲踞此由申政所長官ノ前ニ畏_テ此由申_テ時長官
宇治卿大小刀禰維東維西之祝土浪人浮人等ニ仰御曰
蕃植令_ニ合期_一下被_レ仰政所承本座ニ歸中刀禰ノ一薦_テ
召此由申刀禰此由觸_テ于_レ時植長歌_テ歌_テ植畢以前ノ鍬
裏等皆結合_{一ハ}持_レ之座_テ立_ニ一拜次裏_テ取東ノ間ヨリ南
ニ出先宮司次神宮於_ニ軒下_一裏各所從_ニ渡櫻宮前_一經
置石_テ通_テ中道ヨリ下向畢
此神事雨儀之時ハ役人等九丈殿田態一殿ノ內敷
九日 晴祈年祭幣馬二神主預_ニ巡番_一本儀現馬也然近
年五百文宛衛士沙汰仍巡番之禰宜馬_テ用意於_ニ一鳥
居_ニ渡_一之衛士等幣馬_テ引官幣_テ奉_レ持_ニ二鳥居參幣使_一
鳥居南宮司北于_レ時御鹽湯太麻在_テ先官幣次幣使_{閏秀}
祀承_弘今日依_レ爲_ニ畫神事無_ニ御火_一近代以_ニ別儀_一長官

備之間依_レ之與次又御殿ノ際ニ新造ノ館在_レ之云ニ在所ニ云_二土民ノ旁以不_レ可_レ然被_二免許_一大不_二伺申_一歟雖不審之由被_レ申敢無_二返答_一三神主依違例不_レ被_レ參自餘皆參大般若經事扇屋ノ館ニ安置之由風聞ノ間被_レ立_レ使之處廳里ニ出之由申之旨後日ニ長官ヨリ被_レ觸送_二此事何禰宜帳行_一不_レ然者法手舍ノ住呂ノ訴詔大何様可_レ散_二鬱憤_一之由於_二內々_一吐_二廣言_一之由風聞ノ時分彼扇屋之_二三男俄傳_一重病惱亂之間閉口畢又此病者云一日歲取ノ夜子良館ノ前僧拜ノ大楠洞ニ火燒之處洞ニ炎付不_レ得_レ消彼木元日ノ已尅計燒倒畢參宮貴賤式消肝式□□此等之有_レ咎歟旁以不思儀也

或カ 或カ

十五日 晴粥御膳物忌等參獻_レ之予朝飯以後館ニ參先松ノ神拜衣冠所從等ニ御竈木ヲ削荷ス長官木七十五本於_二由貴殿之前_一出納等調_レ之從八人荷_レ之自余五十五本宛各於_レ館調_レ之三人荷_レ之權任四十五本宛忌火屋殿ニ奉納指出_テ送_二權禰宜荒木田神主名乘_一荒祭宮遙拜所前ニ奉行着座彼指出等ニ合點

御竈木奉納之神事可_レ奉_レ調_二御木_一之由在_レ告人_長次裝束之告參于_レ時束帶次可_レ參之由告來于_レ時經_二中道_一廳舍ニ參集南間東上南面立_二御木十荷_一通畢次第第二東

ノ間ヨリ出_テ參御木等南之鳥居之脇ニ相待自_レ其禰宜前陣据_テ引於_二第四御門之下_一在_二御鹽湯ノ石壺_一着座于_レ時八重疊ノ東ヨリ南エ次第第二十人ノ御木奉_レ置子_レ時人長次第ニ悉數ヲ計八重疊ノ西ニ蹲踞_テ三千五百荷渡候ト申于_レ時一座執_二詔刀_一起座引_レ裾前々於_二石壺_一祝詞ヲ讀進本座ニ歸着之時一同ニ兩端于_レ時御木等ヲ忌火屋殿持參彼殿ノ壁ニ荷_テ解キ寄懸置次第不同次西御門ヨリ退出在_二與玉拜_一在_二荒祭拜_一兩端_ニ在_二櫻宮拜_一在_二酒殿拜_一同諸別宮末社拜自_レ是下向水量三尺八寸

十六日 晴十八日氏寺之行_二祈禱_一之物頭役三四五百宛沙_二汰之_一番衆六七予九十廿文宛沙_二汰之_一權任十文宛沙_二汰之_一正月二日十一日年中三ツ度行_二二門禰宜_一三三分年ニ一度頭役沙汰之_二二門ノ官首_一ヨリ每度頭文ヲ書彼等ノ以_二役人_一被_レ廻_レ之各名乘ニ加_二奉料足_一沙汰供僧遂行當月ハ送_二牛王_一十七日 自_二今日_一予番ニ參

廿一日 交替一番文一二五予十加判_{予十七日ヨ}番ニ祇候

二月

五日 晴卯杖神事物忌等參彼杖送^三館^三但今日ニ不
限每年初卯日

七日 晴卯尅新菜 御饌御内神事自^レ宵館ニ參一二五
六七予九衣冠一殿參集東上南面調^ニ御膳^一案内^ヲ申于
^レ時櫻宮ノ南^ヲ退^テ忌火屋殿ノ前ニ參東上北面ニ立于
^レ時御鹽湯先御膳次禰宜次北御内ヨリ御前ニ參禰宜前
陣御階ノ前ニ着座東上於^ニ御殿下^一三方御膳ヲ獻于^レ時
一神主詔刀ヲ讀進シ着座之時一同ニ一端三獻畢立^レ座
本殿ノ東ノ方ニ着座北上西面預ニ直會^ニ勸盃^一一薦陪膳
別等二獻畢^テ御箸ヲ申于^レ時彼飯ヲ汁ニ入喰^レ之次御前
ノ上雨儀之時ハ御前ノ儀御門ノ下預ニ直會^ニ事東實^一下
南間東上南面^{毎度御膳}退出荒祭遙拜東上^端與玉拜彼
御前忌火屋殿ノ後^ヲ進^テ櫻宮ヲ拜シ一殿ノ經ニ後酒殿
由貴殿ニ拜於^ニ此所^一思々ニ諸未社ヲ拜下向^了
十一日 晴交替一神主^{冠衣}先神拜豐受口ニ參時南ノ鳥
居ノ西方ニ物忌等^{布衣}御鎰ヲ持^テ祇候仍一拜又下向^了時
同前自^ニ與玉^一北御門ノ前ニ參屏垣ノ際蹲踞于^レ時三方
物忌等玉垣ノ東^ヲ經^テ參皆蹲踞于^レ時番ノ物忌北御内^ヲ
開參于^レ時一薦先御内^ヲ拜次一神主^ヲ一拜シ^テ御内ニ
參次第也如此參内院ヲ懇ニ拜見シ一同ニ退出一薦一

神主向異ナル事モ渡候又等申^{在相違時}御門ヲ閉^テ時一
拜次荒祭以下神拜一殿ニ三方物忌着座仍三間^ヲ一拜
宛シ^テ通供奉ノ禰宜同之次酒殿拜次廳舍東間ヨリ入^テ
鋪設ニ跪龜居南面于^レ時物忌等彼殿ノ前置石ノ際^ヲ一
同蹲踞于^レ時一薦番打渡侍申在^ニ一拜^一立座西間ヨリ
出此間供奉ノ禰宜廳舍外猶待御鎰^ヲハ子良奉^レ入殘物
忌等置石ノ南ニ蹲踞於^ニ彼前^一一拜風宮以下遂ニ神拜^一
下向^了此神事雖^ニ予不^ニ供奉^一爲^レ後記注之番文一二四
五六七予九十加判司對面六當番ノ禰宜也宮司ハ兼^テ
着座^{在鋪}設^ニ六着座一拜^{在鋪}設^ニ司北六南于^レ時番公文所番
文讀進西方^{在鋪}設^ニ染筆宮司ニ渡司執^レ之加判于^レ時執
之司中ノ奉行ニ渡于^レ時在^ニ一拜^一立座沓^ヲ着^テ一拜司
北ヨリ退出近日宮中館々ニ參籠ノ僧以下讀經ノ在^ニ沙
汰^一剩大般若安置之館在^レ之歟之由及^ニ沙汰^一之間今日
以^ニ御被^一會合之次一同ニ長官ノ館ニ參此由被^レ申一神
主曾無^レ存知^ニ忿可^レ求^レ觸之由返答次又荒祭宮忌火屋
殿在所^ヲ替結句石居角柱ニ新造之條以外事也宮司如
^レ此致^ニ沙汰^一有^ニ急可^レ被^レ仰之由^一被^レ申處宮司方ヨリ
條理料ニ三百足彼宮ノ物忌并瀧祭物忌等請取之如此
沙汰之由一神主返答瀧祭物忌等^モ於^ニ此在所^一御膳調

執_レ之加判行高執_レ之司中之奉行ニ渡次酒肴一神主不
 參之間ニ神主勸盃裾_ヲ引_テ彼前ノ鋪設_ニ着座シ_テ一
 拜配膳人長三獻畢_テ又_ニ拜裾_ヲ引_テ本座ニ歸着_子時
 一同ニ一拜一同ニ座ヲ立沓_テ穿_テ一拜宮司北ヨリ退出
 子_ノ時北方ニ鋪設_ヲ調東上着座物忌西北上東面_在鋪石
 橋東上北面席_ヲ敷荒祭御祭風日祈內人物忌等也_子時
 物忌等人長_ヲ召白散_ノ串紙_ヲ乞_ニ調之_ニ紙長役串_ハ由
 貴殿_ノ出納沙_ニ汰之_ニ政所公文等名_ヲ書政所之座西之
 二間之柱之本在_ニ鋪設_ニ次酒肴寒酒勸盃一薦配膳副_ノ
 物忌等也爲_ニ殿內之間_ニ玉串_ニ勸盃_ス次政所次物忌
 次石橋次一薦御箸_ヲ申又暖_ニ獻同前但今度_ハ一薦盃
_ヲ執_テ進然間玉串_ニ無_ニ勸盃_仍人長執_ニ銚子_ニ三獻畢
_テ自_ニ末座_机上各_ノ所從_ニ渡_出之_於一一座前_者兩人
 昇之東_ニ出_ス今日_ノ饗長役也一禰宜顯興行雖_然無_ニ
 料所者末代_ニハ定可_ニ退傳_條不_可然被_レ存大井田上
 分_ヲ所被_ニ定置_也然猶近代酒肴之時在_レ之但上分不
 法之時歟當代每年酒肴也_不可_レ然次白散_ヲ進先_ニ宛
 次一宛次神拜手水依_レ無_ニ役所_自長官用意無_ニ紙次長
 官_ノ館_ノ祝_ニ五六七子_十參乃神主_ハ依_ニ腹中違亂_自
 大庭枝_ニ歸然間祝_ヲ彼館_ニ可_レ被_レ送之處里_ニ被_レ出畢

服氣之時者除_ニ火物_被送法也御菓公卿也種々以_ニ珍
 物_三獻配膳_ハ公文所皆布衣次吉書政所進之_冠衣其後退
 出次外宮參一二六七子_十束帶家子權任經元守博守喜
 守秀守春永尙_布公文所兼親行定行高弘安_布家子前陣
 公文所後陣中強一神主與自余_ハ皆乘馬外宮於_ニ玉串
 行事所_ニ手水引_レ裾役人彼宮物忌二人_參衣時分_ニ子良
 館_ニ告知延引之時_ハ日時兼日_ニ被_ニ觸送_又於_ニ御
 池_用之家子以下_ハ皆每度於_ニ御池_用之次御前_ニ參
 於_ニ石壺_{神拜}在_手次高宮并諸別宮遙拜在手政所之指
 南_ニ隨次月讀伊佐奈岐宮_ニ參上岡_ノ道本宮一鳥居_ノ是
 於_ニ在所_ニ昏下馬於_ニ月讀宮前溝_先々_ハ在_ニ手水_當代
 無_ニ此儀_先月讀宮拜_引次伊佐奈岐宮拜_引次一元社_ヲ
 拜次所御社拜_向次楊田社拜宮下向長官於_レ里歸立_ノ在
_レ饗禰宜_ハ公卿長官高坏家子_ハ半公卿陪膳公文卿等也
 次吉書政所進_レ之前々_ハ長官計被_ニ加判_{今日}一同_ニ加
_レ之不審也政所經美依_ニ違例_{今日}代兼親參_{舍弟}外宮參
 之事中古_ハ一同_ニ參宇治岡邊_{ヨリ}家々_ニ歸一門二門不
 知_ノ時分_{ヨリ}或家子禰宜或近付_ノ禰宜計參然_テ經博卿
 歸立_ニ饗_ヲ用意彼代長官陪膳政所自余公文也當代無_ニ
 此儀_一

內宮氏經日次記一

永享十三年辛酉正月

一日 天晴卯尅東帶經ニ中道ニ殿乃北參集東上北面
 一二五六七子九十玉串殿內宮司氏長半夜越年也忌
 火殿乃前乃置石乃際仁三方御膳櫃ヲ昇居東上于ノ時
 參一拜宛置石上ニ東上北面御膳ニ向于ノ時白散分配
 一神主之持參也次役人御鹽湯ヲ獻先御膳次別宮御膳次禰宜于
 ノ時一同ニ裾ヲ引テ前陣一拜宛次御饌於ニ第四御內
 在ニ御鹽湯ニ八重疊ノ東ヲ經テ瑞離ノ御內ノ下ニ參上首
 半分ハ東ニ蹲踞沓ヲ脱北上西面下座半分ハ西北上東面
 御饌ヲ案ニ居于ノ時彼御門ノ軒ノ南着座東上御前ニ向
 于ノ時三方神酒ヲ獻一膳ノ子時一神主詔刀ヲ讀本座ニ
 歸テ一同ニ蹲踞シキ在ニ一端拜如此ニ獻畢テ退出於
 刀者一於ニ玉串御門下ニ預ニ直會ニ東上北面勸盃一膳諸
 度也
 神事一薦指合時ニ一膳參也配膳副物忌等也初獻ハ番
 次第勸盃皆在無ニ玉串ニ勸盃ニ獻畢一膳御箸ハ不ノ申ト
 申于ノ時一同懸ノ手次末座ヨリ撤ノ之玉串物忌勸盃ナシ

彼配膳駟使也次西御門ヨリ退出荒祭宮遙拜所之前ニ
 在ニ鋪設ニ北上西面ニ蹲踞于ノ時隨ニ政所之指南ニ其方
 方ヲ拜各開手一端宛次退出宮司一殿軒半ニ疊ヲ敷着座
 若彼座奧ニ入者憤之當年如ノ法彼於ノ前裾ヲ引出酒殿
 前政所廳舍着一神主依ニ老體退出彼殿打板腰壁破損
 之間自ニ長官ニ屏風疊ヲ用意其上ニ鋪設テ敷北間東上
 南面玉串鋪設計西東面政所鋪設南之二間北何番文吉
 書先長官ニ進次政所出納等ヲ召加御政印御倉ニ參御
 政印ノ箱ヲ奉ノ出廳舍ニ持參于ノ時公文所行高布衣番文
 吉書ヲ進先行高一拜次次ハ一拜シテ先番文ニ加判次吉
 書ニ加前々ハ吉ニ一通ニ加判二通ハ神主計加判之處當年
 二神主乍ニ四通ニ加判之間自余モ皆加之物忌等交替ニ
 參地祭南御門ヲ開一同內院拜見御門ヲ開テ御鑑ヲ廳
 舍前ノ置石ノ際ニ一同蹲踞北向一膳番打渡侍ト申テ退
 出宮司氏長神拜祀承公文所行迹布衣番文吉書判畢以ニ出
 納ニ三四神主之館雖被ノ送迄館モ不レ被ノ參之間無
 レ判於ニ廳舍ニ政所奉ニ捺印ニ役箱ヲ出納等ニ令レ持御倉
 ニ奉納歸着之時一同ニ立座一殿ニ參司對面在ニ鋪設ニ
 宮司北南面戸ノ東ノ脇神宮南東上北面着座シテ一拜次
 公文行高在鋪設番文ヲ讀進次筆ヲ染持參之于ノ時宮司

相可井內神田一町三斗代

朝明郡佐々良井神田二町上分二斗

一志神戶渡神田一町二段在蘇原御厨内但八段神田内三重郡少々在之

志摩國賀茂庄內字懸力神田一町二段稻四十餘束云々

箕曲郷勾庄料田九段之中大覺寺庄三段蓮臺寺庄六段

一諸島々

東船越御厨

大津國崎神戶

槌柄神戶

伊志賀御厨

大濱御厨

木本御厨

比志賀御厨

菅島御厨

錦御厨

土具御厨政所

坂手御厨

大吹御厨

大久田御厨

右注進如件

迫御厨

二見御厨

(片方御厨)

(伊介浮島御厨)

羽畔蛸御厨

濱賀利御厨

笛御厨

丹島御厨

泊浦御厨

和濱御厨

竈子御厨

南船越御厨

飯高郡大苗代御厨小松原

宇田御園瓜分一町餘也

兩三所一志太郎大夫文清口入

○此處
闕文

外宮神領目錄式冊以權禰宜延經神主之本書

寫出訖

寶永元年甲申四月廿四日

權禰宜從四位上荒木田神主武因

攝津國

中村御厨上分米三石

能登國

能登島御厨廿五石

備前國

長沼御厨上分米

一諸郷祭料

四石繼橋郷近年有名無實此
外上分米三石

一石伊蘇郷

二石田邊郷

六斗沼木郷

二石有爾郷

三石麻績郷

一石三宅郷

二石竹郷

一石四斗長田郷

一石兄國郷

一石神戸里

一諸郡祭料

廿八石飯高郡

十四石安東郡

十四石安西郡政所

廿四石朝明郡政所

一諸神戸祭料

六石飯高神戸政所

四石安濃神戸政所

四石河曲神戸

六石伊賀神戸

二石同新神戸

三石同新神戸

四石同新神戸

一渡神田等

安濃西郡字内田一町五斗代定五石

安東郡片田神田一町四斗代(定米四石)

楠神田一町五斗代定(米五石)

山室松山御厨神田一町三斗代定三石

莫太御厨内神田一町四斗代定四石

立野名寮神田一町所當三石六斗但閏
月之年者加進之

丹河御厨内神田一町二斗代定二斗

三重郡豐岡御厨神田一町五斗代定四石五斗

同郡柴田神田少々

廿四石三重郡

廿八石員辨郡

六石一志神戸

二石鈴鹿神戸

二石幸名神戸

二石尾張本神戸

四石三河本神戸

四石遠江本神戸

濱名神戸祭料八石政所

佐久目御園 勤同前

池田御厨三石

小板御厨三石

山口御厨六石

駿河國

大津御厨白布三十端 雜紙三百卅帖

大沼鮎澤御厨布六端

小楊津御厨三石 雜用米十七石云々

伊豆國

蒲屋御厨鐵五十勾

武藏國

七板御厨布二十五端

大河土御厨國絹卅疋御幣紙四百六十八帖

上野國

園田御厨布卅端

高山御厨布十端

下野國

築田御厨絹廿疋布十端

寒河御厨長日御幣紙三百六十帖雜紙但近年絹進之

安房國

東條御厨布五端 長日御幣紙三百六十帖口入所行長云々

下總國 相馬御厨布五十端

甲斐國

石禾御厨長日御幣紙(三百六十帖)

信濃國

長田御厨布三百端 神馬一疋

藤長御厨布五十端 長日御幣紙代布日別二丈矢原

御厨

但馬國

太多御厨絹三十疋 上品紙十二帖

田口御厨上品紙五十帖

加賀國

富永御厨米十石名吉五十侯領家二條東洞院角懸所

越前國

山本御厨絹六疋

泉北御厨米卅石 長日御幣紙

越中國

弘田御厨米十五石絹十五疋布十五端 □□□□□

綿百五十兩鮭十五侯長日御幣紙

本神戶神酒副布三端各三丈

○此處
關文

新神戶絹一疋內染端等同一

○此處
關文

瀨邊御厨

治開田絹十疋別領上分米
十石宮斗定糸三十兩

酒見御厨

千九垣內御園漆一筭

新溝御厨

御母板倉御厨上分御粃五石料田二丁口入料二石

立石御厨糸十兩

宅美御園

生部御園大豆少々五六斗歟

生栗御園大豆一石

伊福部御厨
草部御園大豆少々

野田御厨
秋吉御園油一升

笑生御厨
下生栗御園大豆一石

柿御園

海東新上分二貫文

高屋御厨 桑代糸廿勾

○此處
關文

瀨邊御厨 桑代糸廿勾

赤曳糸御油等

酒見御厨 桑代糸十勾

三河國

饗庭御厨九石

加後進祈禱
一石五斗
內於上分一石五斗者

薑御園六石六斗料田六十六丁段別一升
充但同本斗定大器也

吉田御園三石 菓子栗六籠

神谷御厨十石

菓子

蘇美御厨六石

生栗御園油一斗栗二石

伊良胡御厨三石干鯛三十俵

野依御厨三石

保柿濱田南御園一石五斗

又同濱田御園勤月次御幣紙十二帖

遠江國

刑部御厨三石

祝田御厨

小高御厨六石

美園御厨廿石

大墓御園八丈絹二疋 雜紙十帖 葛布一端

豐永御厨三石

大崎御園 雜紙九十帖

大谷御厨一石五斗内六月五斗九月五斗十二月五斗

岡本御園三斗内 ^{九イ} 六月三斗九月三斗十二月三斗

多度御園一石五斗内六月五斗九月五斗十二月五斗

縣御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

倉垣御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

麻生田御厨大豆五斗 ^{○此處 闕文}

阿下喜御厨十石 ^{○此處 闕文}

茂永御厨五斗

富津御厨六石 此外副米一石在之

宇賀御厨三石

大戸御園六斗

石河御厨六斗

御油御園上分米八斗 ^{料田四町段別二升歟 口入人維行神主}

桑名郡

富津御厨六石 此外副米一石

桑名郡多度御厨一石五斗

伊賀國

阿保神田三石 ^{口入料一石近代以上紙十帖進之} 内六月一石 ^{九月一石 十二月一石}

六太御園 六月芋 九月栗 十二月菓子

但此加進上分米一石近年進之

神戸神田上分白布十二段二丈并祭料造酒米代白布九段

若林御園上分米三石菓子 ^{幸歟}

比志岐御園白布六端六月芋(六束九月栗串柿)

六箇山内上河 ^{比奈知 瀧原}

大和國

宇陀神戸白布十八端内六月六端九月六端十二月六

端

此外先分三端 新上分五石云々

近江國

岸下御厨三石 ^{在御上分小貼六桶 此外口入料六桶 但神馬二疋代米二石 又雜用米二石在之}

福永御厨三石

佐々木御厨六石

柏木御厨三石 又新御厨一石

黑丸御厨段別上分 山室新御厨三石云々

美濃國

中河御厨二十五石 長絹十疋

小泉御厨 長絹二十疋

郡戸御厨御年貢

尾張國

田口御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

坂合部御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

金綱御園三石三斗内 六月^{一石}九月^{一石}十二月^{一石}

山田御厨一石

富田納所一石

月讀神田三斗

末永御厨二石

桑名神戶祭料二石

野田御厨上分一石六斗但田十八町所歟

小泉御厨上分五斗 元三石上分備進濟所也而口口茂福小泉御厨建長二年口口廿二日以前一禰宜行能定口入人件上分三石内以五斗者定上分二以三石五斗者可爲口入料云々

小向御厨一石内牢籠半分同前

員辨郡

高島御園三石内 六月一石(九十二月一石宛)

松尾御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

萩原御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

治田御厨三石内 但十石副米一石 六月一石九月一石十二月一石

大墓御園一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

留番御厨一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

和泉御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

河島御厨一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

穴太御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

星河御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

梅戸御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

深瀬御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

大泉御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

中河御厨一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

高柳御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

笠田御厨三石内 六月(一石九月一石十二月二石)

長深御厨三石内 六月一石 ○此處 闕文

饗庭御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

小中上御厨一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

斗

田中御園五斗内 六月一斗九月二斗十二月二斗

平田御園三斗内 六月一斗九月一斗十二月一斗

藁御園三斗内 六月一斗九月二斗

島田御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

小田中御園三斗内 六月一斗九月一斗十二月一斗

曾原御厨三石 此外新加 上分三斗 六月一石九月一石十二月一石

島富御厨一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

豐岡御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

庭田御厨四石^{加進分一石加之定} 六月二石九月二石十二月二石

櫻御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

延真神田五斗十二月進

稻田御厨三石内 六(九十二同)一石宛

永松神田三斗 (十二月進)

治田御厨三石内 六月一石九月一石十二月二石

多米御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

又多米新御厨六斗 六月二斗九月二斗十二月二斗

衣比原御厨六石内 六月二石九月二石十二月二石

垂水御園七斗内 六月一斗九月三斗十二月三斗

長澤御厨一石八斗内 六月六斗九月六斗十二月六斗

吉澤御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

曾井御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

大強原御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

縣御園三石

飯倉御園二石内 九月一石十二月一石

高柳御園一石内 六月五斗九月五斗

小山田御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

長尾御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

平田御厨一斗^{○此處闕文}

佐山御園三石^{○此處闕文}

高岡御園九斗内 六月三斗九月三斗十二月三斗

深溝御厨一石十二月勤之在御汕

寬御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

小泉御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

又小泉御厨一石五斗^{之御神酒外副米三升} 内六月五斗^{九月五斗十二月五斗}

小松御園

鹽濱御園蓋五斗

泉野御園三石

河田納所二斗

朝明郡

長松御厨五石^{但近年四石濟之} 内六月一石九月二石十二月二石

石

南富田御厨六石内 六月二石九月二石十二月二石

北富田御厨六石内 六月二石九月二石十二月二石

岩田御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

保々御園三石内 六(九十二)一石宛

長井御厨三石内 六月^{○此處闕文}

小嶋御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

廣瀬御園油三升菓子

莫太御園上分一石五斗內米一石麥五斗此外口入料同一石五斗被口入人行宜神主云々

濱田御園鹽二斗

又新濱田御園上分米一斗御費飛魚五連 禰宜維行口入所

鈴鹿郡

原御厨三石內 六月一石九月一石十二月二石

庄野御厨六斗段別 三升 六月三斗九月二斗十二月二斗

那越御園段別三升上分今爲高垣神田備進上分五斗

久賀御園五斗

和田御厨三石

菜若御厨壹町 長日御幣紙濟所四ヶ所神領內

河曲郡

河曲神田三石 近年號三柳新御厨 國文 菓子

山邊御厨一石三斗內白米 三斗 九月五斗十二月五斗

成高御厨六石

永藤御厨二石

須可崎御厨六石內 宮中饗料所 六月二石九月二石十二月二石

若松御厨五石內 六月二石九月一石五斗 十二月一石五斗

土師御園三石內 六月一石九月一石十二月一石

箕田永富御厨二石

井戸神田五斗

吉藤光富神田七段上分二石一斗

高垣神田五斗

高富御厨六石口入料六石

林崎御厨六石

三重郡

河嶋御園三石內 六月一石九月一石十二月一石

高角御厨(一石五斗六九十二御祭五斗宛)

飽良河御厨三石內 六月一石(九十二同)

松本御園三石內 六月一石九月一石十二月一石

日長御厨三石內 六月一石九月一石十二月一石

日長新御厨三石

遠保御厨三石內 六月一石九月一石十二月一石

栗原御厨三石 六月一石九月一石十二月一石

潤田御厨三石內 六月一石九月一石十二月一石

池底御厨三石內 六月一石九月一石十二月一石

采女御厨三石內 六月一石九月一石十二月一石

山田御厨三石內 六月一石九月一石十二月一石

志賀真御厨三石內 六月一石九月一石十二月一石

野田御園三斗

六月飛魚三百六十候九月御祭

長屋御園一斗五升

十二月進之

岩田御厨三石內

六月一石九月一石十二月一石

岩坪御厨九斗內

六月三斗九月三斗十二月三斗

建部御厨石五十(一石五斗但號栗原六九十二五斗宛)

下內田御厨(一石五斗內六九十二五斗宛)

宿祭部御厨三石

下見御園三斗

泉上御園三斗

小野林御園九斗內

六月三斗九月三斗十二月三斗

飯原御園三石內

六月一石九月一石十二月一石

荒倉御園三石內

六月一石九月一石十二月一石

松崎御園九斗五升

垂水御厨鹽九斗內

六月三斗九月三斗十二月三斗

燒出御厨鹽九斗內

六月三斗九月三斗十二月三斗

藤方御厨鹽六荷內

六月二荷九月二荷十二月二

豐野御園二斗此外級二斗

高志御園一斗九月

大繩御園三斗

長岡御厨二斗 三度御祭勤之

小松御園(一石九月五斗)

久松御園(一石九斗內六月五斗九月十二同前)

久松神田三町五段上分三石五斗段別二斗充勤之

但次久松御園田號久松神田歟之ハ有其沙汰爲無俊康友神主令知行々々可尋紀也

極樂寺御園六斗

新永松御厨上分二斗 禰宜維行口入所

平田御園上分米六斗 口入人同禰宜維行

縣御園

奄藝郡

大古會御厨三石內 六月一石九月一石十二月一石

朝明郡南富田替被付之

得田御厨五石

爲元御厨卅石

晝生御厨五石

小林御園粃一石

南黑田御厨三石 六月一石九月一石十二月一石

北黑田御厨粃一石(菓子)

若栗御園粃一石

成富御園三斗十二月

豐國野御園三斗

越智御厨二石五斗

一志郡

年魚御鯔六十六斤六兩祭料米ノ一十五石三斗八合升方

糲料七石在糲料八石分別三斗八升

嶋拔御厨鹽五石內六月三石九月一石十二月一石

八太御厨上分田五町所當二十五石此外雜掌二石五斗取之

小社御厨鹽三石內六月一石九月一石十二月一石

蘇原御厨米三石內六月米一石九月鹽米一石十二月米一石

大阿射賀御厨十三石凡絹十疋於上分三石者

六月一石 九月一石 十二月一石

小阿射賀御厨十三石凡絹十疋內於上分三石者

六月一石 九月一石 十二月一石

北黑野御厨十三石內於上分三石者

六月一石 九月一石 十二月一石

南黑野御厨(十三石內上分三石六九十二石宛)

木平御園一石

○此處闕文

稻木御園 荷前神田五斗

箱木御園鹽三石內六月一石九月一石十二月一石

都御園 六月麥一石二斗九月米一斗

又都御園 六月麥三斗九月米一斗

北高橋御園 六月麥一石五升九月米一斗

八太御園四斗

見長御園三斗

本見長御園 三度御祭菓子勤

一松御厨鹽九斗六月三斗九月三斗十二月三斗

大原御園 六月紙十二帖桶二柄三度御祭有勤

野田御園三石此外三坪一町料上分米一石在之

拜野御園米一石麥五斗

黑田御園米二斗

下牧御園(六月菓子九月米一斗十二月菓子)

西濱御園鹽二(駄二石歟)

利松名上分二石

西園御厨 四个所神領內 長日御幣紙濟所

常富御園

安濃郡

五百野御厨七石五斗內於上分三石者

六月一石九月一石十二月一石

六月三斗九月三斗十二月三斗

六月一石九月一石十二月一石

六月一石九月一石十二月一石

六月一石九月一石十二月一石

池上御園一石五斗內六月五斗九月五斗十二月五斗

深田御園(五斗)

片岡御園米一斗十二月御祭之時備進之

石取御園一貫文新加上分兩

熊倉御園(上分米三斗光香口入也)

泉御園

○此處
闕文

飯野郡

伊勢庭御園三斗

黑部御厨三石內六月一石九月一石十二

若菜御厨三石內六月一石九月一石十二月一石

櫛田河原御厨九斗內六月三斗九月三斗十二月三斗

飯野岡御園六月菓子九月^{米二斗}_{菓子等}十二月菓子

治田御園九斗內六月^{三斗}_{菓子}九月^{三斗}_{菓子}十二月菓子

萩尾御園九斗內六月^{三斗}_{菓子}九月^{三斗}_{菓子}十二月^{三斗}_{菓子}

鞭書御園三斗六月一斗九月一斗^{剛米}_{一斗}十二月一斗

佐福御園九斗內六月三斗九月三斗十二月三斗

二升御園一斗十二月進之

神山御園新開上分九斗七斗光香申之

堺御園神稅麥三斗^{此外口入料麥三斗在之歟}
^{口入人前一福宜行能云々}

飯高郡

光用御厨(三石 六月一石 後同斷)

勾御厨 (六月 二石 九十二同)

莫太御厨三石內 六月一石九月一石十二月一石

梅田御厨一石五斗內六月五斗九月五斗十二月五斗

臼井御厨一石五斗內六月五斗九月五斗十二月五斗

忠近御園三石內 六月一石九月一石十二月一石

粥見御園綿二十兩

松山御厨六石^{此外新上分三石}

五箇山御園綿十兩絹四丈布等

手丸御園五斗

立野名御園新上分五斗口入所光香

境御園九斗

松尾御園五斗

深田御園三斗

平生御厨一石

福末神田上分三石^{但高宮饗料米十二月十七日勤仕之}
^{田數四町三段云々口入人常躬}

位田御園(薙七枚比外先分新一枚)

丹生山內上河原(御園上分水銀五十兩)

岸江御厨內高宮新神田一町六段^{但段別}上分一斗六升
^{一升充}

永用神田一町二段

外宮神領目錄

注進

宮廳御所知諸神領目錄

合

伊勢國

度會郡

高羽江御厨三石内六月^{一石}九月^{一石}十二月^{一石}

牛庭御厨三石内六月^{一石}九月^{一石}十二月^{一石}

丹可御寸(四石内同前)

有瀧御厨(五斗) 寫本此處燒而不見下同 六月 九月 十一月

若田井邊御厨五斗 六月 九月^{五斗}十二月

無漏御厨二石一斗内六月^{七斗}九月^{七斗}十二月^{七斗}

大橋御園六斗六月菓子九月三斗十二月二斗

宮子御園 汁嶋御厨

小栗生御園一斗六月菓子九月

玉丸御園五斗六月菓子九月五斗十二月菓子

中屋御園三斗 九月三斗

笠服御園一斗

飯倉御園

十二月一斗五升

長屋御園内小林村田畠段別五斗

村松御厨上分田廿七町段別七升上分十八石九斗

通諸國

此外麥雜克等在之

土保利御園鹽二斗

新開御園鹽九斗

矢田檜皮尾御園一石五斗口入人前一福宜行能敷云々

小俣御園

八斗

沼木郷

上山幡收納使 口入人行能云々

小中須收納使 積良收納使

宮河々守 濱等使

岩坂御園上分油三升 此外口入料一斗二升在之

葛原御園麥十八斗口入人前一福宜行能小口入賴氏神主

佐田御園二斗菓子三籠 此外口入料三斗在之歟口入人雅繼神主云々

多氣郡

四蘭生御園六斗六月菓子九月三斗十二月三斗

齋宮柑子御園六斗内六月二斗九月二斗十二月二斗

濱田御園六月鹽二斗菓子九月鹽二斗十二月^{米一斗}

有何事一矣僉議雖謂高宮中門一無一言及此
鳥居上世記傍書說不足徵焉

總宮廻大垣一重亡今

儀式帳云總宮廻防往籬貳佰漆拾餘丈福宜內人等戶人
夫捨作二百丈多

氣郡并神戶人夫
捨造七十餘丈

神宮雜例集云延長四年四月十一日神祇官符近四至
去神宮大垣外四方各肆拾丈寬平五年十一月廿七
日司符備有火失事殆及宮內自今以後自宮四
方各四十丈之內居住人宅一切制斷

外御廡一字亡今

儀式帳云馬集廡貳間長各四丈廣各二丈幣帛御馬隱
廡壹間長二丈廣一丈二尺

古老口實傳云外御馬屋邊中堀同云中堀外竝樹

按新任辨官抄云外院此外有隍太神宮年中行事

六月廿三日瀧
原竝宮御祭

云々相傳北御門橋外西北五許丈古中堀外御廡舊

蹟也今爲堀溝其北在家稱竝木

頭工日記云應永九年二月一頭工國貞等注文六十貫
文外御廡

其南地而改_レ名

大同本記云止由居乃神乎度會乃山田原爾令鎮理定理坐其宮之內良角御饌殿乎造立云々其御饌殿乎今號_二伊屋殿_一

按伊屋殿者忌火屋殿也古記多作_二忌屋殿_一

新任辨官抄云忌屋殿在_二廳東調_二備御膳_一所也

中右記云元永二年五月九日軒廊御卜祭主卿申豐受宮御春殿忌屋殿去四月一日不_レ知_レ名虫多出來恠異

類聚大補任云建久三年豐受宮御春殿供用犯_二用之_一

造外宮葺堂員數記云忌屋殿御葺堂分五百圍

忌火屋殿鳥居一基_亡今

元享高宮假殿記云禰宜著_二忌屋殿南例所_一鳥居西

腋西上南向

正中御飭記云別宮金物御裝束等次第_土禰宜參_二例

所_二本宮忌屋殿鳥居西腋

物忌子等宿館

儀式帳云物忌五人宿館屋伍間長各二丈廣各一丈二尺齋火炊屋伍間長各一丈六尺廣各一丈物忌父小內人等宿館屋伍間長各二丈廣各一丈

今子良館長四丈六尺八寸桁行七間各六尺六寸八分

丈二寸梁行六間各六尺七寸西北各有_レ庇按帳所_二載之宿館十

五間然今作_二一字不_レ知_レ何時如_レ斯

新任辨官抄云子娘館在_二忌屋殿北_一

物忌齋館院倉一宇_亡今

儀式帳云倉壹宇長一丈六尺廣一丈四尺納木器

物忌齋館院門一間_亡今

物忌齋館院垣一重_亡今

儀式帳廻防往籬長十五丈

按長下十上當_レ有_二脫字_一

遷宮要須云內召立事終之後被_レ參_二玉串所_一之時於_二

忌火屋殿前木柴垣之南鼻_二太麻御鹽湯有_レ之

按木柴垣今猶在_二忌火屋殿東南_一蓋古齋館院大垣

之遺乎

北御門鳥居一基_{在子等館前}

今鳥居廣一丈五尺

倭姬命世記傍書云多賀宮鳥居立_二北門_一也

按長秋記云長承三年六月廿四日參_二仗議_一土宮鳥

居可_レ在否事_{先是大治三年改社爲宮}下官_{皇后宮權大夫帥時}云於_二高宮荒

祭_一者各立_二中門_一云々令_レ准_二中門_一被_レ立_二鳥居_一

亦稱鹽御倉

台記云久安三年七月二日先日範家下ニ太神宮解狀

豐受太神宮御器御倉鑰折損下レ辨昨日付ニ範家一奏

之八日外記持ニ來太神宮倉鑰折勘文一副二本

安東郡專當記云宮中奉納之時供用御粗等廿四俵御

器御倉五斗粗量レ之號ニ祓粗一

盛殿一字亡今

儀式帳云盛殿長三丈廣一丈六尺

祭大炊屋一字亡今

儀式帳云祭大炊屋長三丈五尺廣一丈六尺

按右二字竝未レ考ニ舊蹟一

禰宜齋殿

儀式帳云禰宜齋殿壹間長三丈廣一丈六尺齋火炊屋

壹間長一丈六尺廣一丈二尺厨屋壹間長三丈廣一丈

六尺

按番文云大宮院長上兼酒殿院神宮雜事記云禰宜

職是連日長番古禰宜一員長番ニ於當院一禰宜員歷

レ代加任齋館地隨レ時遷轉今禰宜齋館在ニ一鳥居

西ニ寬文三年所レ建也

嘉祿山口祭記云造宮使殿隆經ニ一殿乾一廻レ良御ニ著

宿館ニ畢ニ禰宜光高神主宿館也

古老口實傳云宿館事上代葺葺中古葺葺板屋相交云

云近代一向板屋也存ニ車寄一可ニ造構一也齋宮御參宮

之時ニ三所女房在レ寄ニ宿事一事當上代神主等乘レ車

參入之間齋宮御參宮古記云齋宮女房車破損之時

用ニ神主車一云々古人云上代宿館鳥居內大庭也中古

者外御馬屋邊中堀內也近古者中堀外竝樹邊也

御酒殿院御門一間亡今

御酒殿院御垣一重亡今

儀式帳云防往籬壹重廻長卅五丈

○物忌齋館院

忌火屋殿一字本名御饌殿帳云御饌炊屋

儀式帳云御饌炊殿長二丈二尺廣一丈二尺

今忌火屋殿長三丈桁行四間各廣一丈二尺梁行二間中

隔東號ニ春殿一西號ニ炊殿一

同云御井與ニ御炊殿一往還間道百廿丈橋十五丈神宮

雜事記云雄略天皇廿二年依ニ勅託宣一豐受神宮之良

角造ニ立御饌殿一每日朝夕御饌物調備令ニ捧齋一令

レ參ニ向太神宮一

按忌火屋殿本名御饌殿神龜六年更立ニ御饌殿一於

貫文與畫板文矛盾內宮廳舍葺萱見兵範記遷宮要須云案橋以下之物廳舍東庇之程亡自南始氏北方江次第七分置之

按今廳舍東面東庇謂廳前也

調御倉一字今云御政印御倉

儀式帳云倉長一丈六尺廣一丈四尺納神酒并御贊等類

今御政印御倉長二丈桁行三間各六尺六寸六分廣一丈三尺梁行二間各六尺五寸按元納封戶調庸之雜物等類於今納御贊年魚等

新任辨官抄云御倉三字在廳後

按三字當作二字或云酒殿與御政印御倉之交乾隅有傳稱御倉蹟之地辨官抄御倉三字在廳後者其一此歟此說恐非矣帳此院倉二字御倉院倉三字都五字也應永送官符云御倉伍字古老口實傳云一禰宜者雖爲假染酒殿與調御倉以北大楠方江不入者也是一禰宜退出禁忌方也按調御倉者御政印御倉也今酒殿坤廳舍後二字御倉南北相竝東面也其在北近酒殿者御政印御倉也

鎮座傳記與書云文治元年神祇本記上下代代本系等有子細而奉藏調御倉神體假櫃也光晴神主奉行也又御正印銘銅尺一隻別櫃納之也代代儀式本系等同正印櫃內仁加納也

按內宮調御倉仁平以來納政印古記分明也年中行事寬正遷宮記竝稱御政印御倉又神宮雜例集云太神宮司印奉納於離宮廳調御庫當宮亦調御倉納政印與彼宮及離宮院同例
皇字沙汰文云十二月晦夜燈油供奉御倉神祝言云豐受皇太神乃酒殿調御倉龜屋坐留宇賀御魂神等乃廣前爾恐美恐美毛申

按承前之例燈油神事一禰宜入御政印御倉中讀此祝文次到酒殿前復讀同文次參御炊殿御曰殿是亦御政印御倉爲調御倉之證也
造外宮葺萱員數記云調御倉御葺萱分四百五十圍
御器御倉一字
儀式帳云倉長一丈六尺廣一丈四尺納雜器并米鹽等類

今御器御倉長一丈五尺桁行三間各五尺廣一丈二尺梁行二間各六尺按帳納雜器米鹽者御器御倉也內宮御器御倉

饗_ニ故內人憚_レ之不_レ能_下自_ニ御膳殿_ニ直向_ニ御杣_上枉_レ道_ニ偷經_ニ九丈殿東_ニ偷字可_レ付_レ意後世齋王不_レ座御膳殿蹟絕山口祭祀神事亡_ニ只有_下賜_ニ大饗之禮_上同日於_ニ高宮山麓_ニ所_レ祭者入_ニ御杣_ニ操_ニ心柱_ニ木本祭之遺法而已據_レ此則御膳殿當_レ在_ニ直會院北_ニ今十二月晦燈油神事供_ニ一燈於御廐南官道東傍_ニ此地當_ニ直會院北_ニ疑齋王御膳殿之舊蹟乎

造外宮葺萱員數記云廳舍御廐御饌殿

按本宮御饌殿此記別作_ニ御氣殿_ニ知_ニ御饌殿齋王御膳殿_ニ也御廐次注_レ之在_ニ其近_ニ可_ニ以見_ニ又此記之所_レ載皆萱葺也符_ニ合內宮制兵範記文永記_ニ

頭工日記云應永十二年造外宮諸殿舍注文廳舍齋王

御膳屋子良館

齋王御膳院御門一間_{亡今}

齋王御膳院御垣一重_{亡今}

儀式帳云板垣一重長八丈

按長下八上恐脫_ニ十字_ニ

○御酒殿院

御酒殿一字

儀式帳云御酒殿壹間長二丈五尺廣一丈六尺

今酒殿長一丈八尺_{桁行三間各六尺}廣一丈二尺_{梁行二間各六尺}在_ニ

廳舍北_ニ向_レ南

同云正月朔日禰宜內人物忌等御酒殿拜奉然即白散

御酒供奉

神名祕書裏書云以_ニ石神_ニ爲_ニ正體_ニ也仍酒殿造替并

修補之時奉_レ遷_ニ調御倉_ニ也

古老口實傳云酒殿者神居殿也故預出納外雜人輒

無_ニ出入_ニ者也又人用雜物等不_レ納_ニ置之_ニ祭器置方

角在_レ之

貞和御飭記云居_ニ天平賀_ニ酒殿五口

廳舍一字

儀式帳云_{ヱリコトスルナヤウ}務所廳壹間長三丈五尺廣一丈六尺

今廳舍長四丈_{桁行五間各八尺}廣一丈六尺_{梁行二間各八尺}在_ニ酒殿

前_ニ向_レ東

新任辨官抄云廳一字在_レ北

按在_レ北者謂_レ在_ニ正殿北_ニ

神宮雜例集云保安四年八月廿二日洪水八間廳舍一

字件含葺板三分之一破損敷板長押下桁等流損也

按司家記云寬正二年造外宮葺萱要脚注文廳舍廿

直會院御門一間^{亡今}

儀式帳云直會御門長一丈二尺廣一丈

直會院御垣一重^{亡今}

按既有門則有垣可推知帳不^亡垣者缺文也

內宮直會院防往離廻六十丈

二鳥居一基

今二鳥居廣一丈二尺六寸

車宿殿一字^{亡今神事供奉記云外宮河原殿}

類聚大補任云建曆元年豐受太神宮遷宮今度造^亡加

車宿舍壹字^{亡今神事供奉記云外宮河原殿}嘉應以後新立元四間也今度加^亡

一間^亡增^亡高任^亡例募^亡別功^亡造^亡進^亡之^亡

按車宿未^亡知^亡遺蹟^亡十二月燈油神事二鳥居外官

道南傍相社乾供^亡一燈^亡據^亡內宮車宿在^亡二鳥居

外^亡見^亡之則車宿之趾歟

神事供奉記云寬元四年四月御衣神事大司盛房今日

自^亡京下著^亡只今追可^亡供奉^亡之由觸送之間於^亡外宮河

原殿數尅相待西下尅參會即參入祇承二人^亡人物忌

勤^亡之大麻御鹽湯在^亡之

按外宮河原殿無^亡所^亡載^亡諸記^亡疑車宿之別稱以下

內宮河原殿院中有^亡車宿^亡稱^亡之乎恒例於^亡二鳥

居祇承參候捧太麻灑鹽湯詳此文一則此殿在二鳥居外明矣謂供燈油之地當爲此蹟

頭工日記云應永十二年二月十二日造外宮殿合注文

百三十拾貫文車宿

一鳥居一基

今一鳥居廣一丈九尺

齋王御膳院

齋王御膳殿一字^{亡今}

儀式帳云齋內親王御膳殿壹間長二丈廣一丈二尺御

炊殿壹間長一丈八尺廣一丈二尺

嘉祿山口祭祀云三年十月十五日官下祭物并友光

忌^亡奉^亡作祭物色節內人等進^亡向廳館^亡請預持^亡參齋

王御膳殿調^亡備祭物供物^亡申時造宮使隆通朝臣參^亡

著一殿云々於^亡奉^亡取^亡心御柱^亡工國澤地祭友貞等^亡

者早速成^亡事以^亡戊尅許^亡自^亡齋王御膳殿^亡出立偷經^亡

九丈殿東入^亡御杣^亡畢工饗米訖不^亡退出^亡之以前自^亡

御杣退出

按御杣者高宮山歟雜例集云天永元年工入御杣

出^亡心柱高宮山口^亡抑色節內人以^亡忌物等^亡祀^亡山

口神於齋王御膳殿此際造宮使就直會院賜大

外自北戶參入

按主神司殿南戶者此殿北面有南戶一殿南面有北戶二殿南北相向帳以二殿爲一耦共稱三丈殿

同云三頭座者主神司殿前仁向南著座之例也向背一殿之間今度三頭座許主神司殿良方一丈餘許東乃北反引出天立机向西座一頭方小工者主神司殿乃乾角於御輿宿乃良角指天著流二頭方小工者主神司殿乃良角於九丈殿坤角指天著流三頭方小工者九丈殿中間指天著流鍛冶座元者九丈殿西也今度者御輿宿北仁座以南爲上相作其後座也

按主神司殿前向南著座向背一殿者一殿在北而南面主神司殿在南而北面故南面于中庭則一殿在其後也又主神司殿良角於九丈殿坤角指天著流者可見下主神司殿之良近中九丈殿之坤然則主神司殿者在九丈殿之坤復可見焉又主神司殿乾角於御輿宿良角指天著流者御輿宿在主神司殿西其相去不遠者也凡一殿者南面主神司殿者北面九丈殿者西面御輿宿者東面也

九丈殿一字

儀式帳云九丈殿壹間廣二丈

桁行五間各八尺六寸廣一丈八尺梁行三間各六尺

按帳長若干丈字缺不明元長九丈故號九丈殿頭工日記云應永九年二月廿一日頭工國貞等注文貳百三十拾貫文一之殿百六拾貫文主神司殿貳百五十貫文九丈殿帳一殿九丈殿共廣二丈一殿長六丈以其料二百三十貫文分爲六則一丈料三十八貫三百三十三文計九丈殿料二百五十貫文則應永時漸衰微殿長六丈五尺餘歟

新任辨官抄云九丈殿神部以下著也檜皮葺

按內宮例寮神祇神部著主神司殿祭使宮司之從者著九丈殿年中行事文與此稍異

嘉祿山口祭祀云安貞二年七月廿二日造宮使殿隆拜

賀參宮祇承宮掌參向經九丈殿內一向鳥居任例

獻大麻御鹽湯

按九丈殿與二鳥居相近如此今殿東去二鳥

居數十餘步也古九丈殿趾可在今殿東乎

同事始云一殿外巽方九丈殿內指天大宮三所別宮內人

廿餘人著座

按此文九丈殿在二殿巽隅明矣

今一殿元祿四年再興之一殿長六丈桁行七間各八尺五寸廣二

丈梁行三間各六尺七寸按直會一殿中絕故一殿之行事假於三

九丈殿之行之俗誤以三九丈殿爲一殿然而月次

祭饗應三旬司對面等猶依承前著一殿之舊趾一

元祿年偶繼絕禮章稍復舊式

新任辨官抄云一殿一字五箇間四度幣并公卿使中臣

以上居之有酒肴檜皮葺

按兵範記內宮伍間壹面檜皮葺壹殿此記爲五箇

間檜皮葺二宮例昭合又葺萱員數記無載當院

諸殿御輿宿是皆葺檜皮之故也

太神宮式月次云使及宮司以下向多賀宮齋王再拜

兩段拍短手兩段退就解齋殿給酒食

按祭使寮官就一殿宮司主神司就主神司殿祭

使宮司從者候九丈殿給饗解齋殿者總稱此三

殿也祭禮訖脫木綿鬘漸解謝齋戒之謂乎

江家次第公卿勅使云著直會院入自北戶著西殿座南面兼居使以

下酒肴結黑木爲機以檜木葉付機等脚編集數面作小宮盛

菓子肴物一東腋設王以下座更南折設宮司座

西南砌下設禰宜座西上北面經賴記不居饌脫白袍著

按使座禰宜座俱西上以近御所爲上

嘉祿山口祭記云造宮使神祇權大副隆通朝臣束經帶

一殿東外自北戶參入造宮使殿座以西壁中柱

當中心禰宜北座御使座前北座自西第三柱當中心禰宜漸

漸加補殿內座狹之間訪內宮之例依要須申請之

處可爲本宮計之由依總官并造宮使殿仰如此

改座

按使座元南面此時改東面謂西壁中柱當中心則東西梁行各二間也明矣

司家記云一殿司對面事宮司北座西上南向參退北

戶也禰宜南座西上北向自第二柱之本於爲上

廻當殿南廂之南令著也

主神司殿一字亡今

儀式帳云五丈殿長四丈廣一丈六尺

新任辨官抄云神祇官殿忌部下部著之檜皮葺

按倭名鈔云神祇官加美豆主神司以豆岐乃美以訓同

主神司殿作神祇官殿忌部下部上可有宮司中

臣四字神事供奉記云宮司主神司中臣以下著主

神司殿簾中抄云齋宮主神司中臣忌部宮主

嘉祿山口祭記云三年十月十五日禰宜束經帶引率權

任神拜通主神司殿南戶見知工機經一殿東

宿一也

同云長承二年五月廿一日內宮禰宜申請御與宿屋可
被加今一間事元三間也外宮四間也

愚昧記云治承元年九月十五日公卿勅使參宮至御
與宿西砌一列立^{北北西面至北}先^{北北西面至北}是禰宜等列同舍
西庭^{舊記北上也如何南上東面}

按治承元年當御^{第一彥章與予相對也}坐西宮地之時故列御與宿

西與嘉承記一合

康曆遷宮記云應安六年御事始祭主忠直朝臣於例
所^{但北一間顛倒之間見第一間也}有^{但北一間顛倒之間見第一間也}手水祭主者御與宿殿自北第二間仁被立

按江家次第御與宿前北上東面愚昧記西砌北上西
面此記自北第二間立見御與宿東西桁行南北梁
行也內宮御與宿南北桁行東西梁行二宮制互縱
橫

內御廄一字

儀式帳云御廄壹間長三丈五尺廣一丈六尺

今御廄長一丈六尺廣二丈四寸按今御廄者內御廄
也三代實錄云貞觀六年勅加置豐受太神宮御馬
飼內人一人以元御馬二疋充飼內人一人也

中右記云長承四年二月十五日軒廊御卜外宮樞御
馬斃事愚昧記云嘉應元年十二月月次祭左少辨爲
親云外宮御馬斃之由進宮司解狀撰日次追可
被引獻古老口實傳云御馬菟諸鄉符大豆禰宜
巡役口實傳嘉元一禰宜行忠之所記也此時秣樞
馬如^馬此近世雖有廄無養飼居木馬形一徒
存其名耳

遷宮要須云總官御參籠時經營作法本宮御神拜其間
禰宜兼天集會子內御馬屋以西槻木之本總官神拜
之後被著于一殿樞之內

古老口實傳云朝夕御饌供進最中不神拜也供進之
時參會人禰宜子良退出之程者內御馬屋邊候也

按以下御饌殿在其西二殿在其南上見之則今御
廄者內御廄也

造外宮葺壹員數記云廳舍御廄御饌殿

按所載此記者皆葺壹也內宮之例兵範記云肆
間壹葺御廄

直會院

一殿一字^{頭上日記作二之殿帳云五丈殿}儀式帳云五丈殿長六丈廣二丈

御倉

造外宮葺萱員數記云御稻御倉御葺萱分四百五十園鋪設御倉御葺萱分同前懸稅御倉御葺萱分同前

按三字御倉徒觀迹於舊墟無知其制然古葺

萱如_レ此今內宮御稻御倉獨存有葺萱上_レ千木

鯉木上

應永送官符云鑰伍枚_{御倉}伍字

按此院倉三字合酒殿院倉二字都五字

御倉院御門一間_{今亡}

御倉院玉垣一重_{今亡}

儀式帳云玉垣一重廻長卅丈

御輿宿殿一字_{今亡帳云御輿停殿元亨記云玉申殿}

儀式帳云御輿停殿壹間長三丈五尺廣一丈六尺

按太神宮式云齋內親王至板垣門東頭下與據

此則古御輿宿在荒垣東傍分明下與者下葦

輿_御腰輿也

新任辨官抄云御輿宿齋王御輿容也檜皮葺

按儀式帳云齋內親王致板垣御門氏御輿留氏手

輿爾移坐氏參入

江家次第公卿勅使云禰宜等五人束帶袍上著_{白生絹腋}列立

於御輿宿前_{北上面}使使相向列立砌下_{西面}內人昇高机二脚立_{前忌部置御幣等於机上}

按禰宜列立御輿宿前御輿宿東面在玉串所西

是則御座東宮地之例也

勅使部類云承保元年七月三日公卿勅使參宮至御

輿宿前神主五人_{件神主等著白綿腰闕}列立_{北上面}次僕_{大納言經}

卿進手水

按承保元年當御座東宮地之時上

同云嘉承二年二月十六日公卿勅使參宮使等立御

輿宿西砌下_{北上面}禰宜六人向立_{南上面}先是昇立神寶

引立御馬

按上二條列立於御輿宿東此列立於御輿宿西

參差如此嘉承二年當御座西宮地之時上故玉

串所在御輿宿西南上當為北上面

中右記云永久二年二月三日_雨公卿勅使參宮入御

輿宿屋中立先正員禰宜六人束帶列立此屋中太

神宮司并使使皆列立_{雖可列庭前依雨列屋中也}

按司家記云雨儀時玉串供奉御輿宿內也元亨高宮

假殿記云於玉串殿前禰宜與宮司對拜頭工日

記云應永九年注文百五拾貫文玉串所皆謂御輿

御稻御倉一字_亡

儀式帳云倉參字長各一丈六尺廣各一丈四尺一字

納正殿寶殿御鑰

按古納御鑰蓋御稻御倉敷內宮制以御稻御倉

爲首調御倉次之竝立於同地當宮調御倉立

酒殿院中與此御倉異地

新任辨官抄云御稻御倉一字在廳巽角

按今十月初午神事御稻奉下請印訖於東宮地北

御門外北道路大物忌父向北修祓此地當廳舍

巽隅疑御倉院之趾也神宮雜例集云十月端午外

宮神態古老口實傳云十月宮崎御常供田御稻奉納

神宮雜事記云長曆四年七月廿六日豐受太神宮正殿

寶殿等顛倒仍御氣殿乎洗淨天御體乎奉遷鎮同廿

八日御稻御倉乎洗淨奉遷神寶物利鋪設御倉乎洗

淨天御絲絹等乎奉納了外幣殿乎洗淨天御膳乎備

按御稻御倉鋪設御倉共與西宮御饌殿相近如

此長曆四年者當下御座西宮地之時謂初午修

祓之地在東宮地北與西宮御饌殿近

神宮雜例集云保安四年八月御稻御倉板敷之上水二

寸許滿登御糶少々所濕損也景道季連等沙汰安西

郡御神田去年所當御糶不供進之上今又有此事

仍御料殆可及闕意

懸稅御倉一字_亡

儀式帳云倉一字納懸稅并御田荳稻

遷宮要須云御裝束等以宮中下部奉納于調御倉

云々內物忌等以仕丁等令汲水奉洗假殿之

後申事由於長官并禰宜于時著衣冠各列參于

廳舍檐物忌案於廳舍南檐妻東西止一脚昇立之

奉取出御裝束一案之上仁置之禰宜西上蹲踞大

物忌父致解除其後案於內物忌并副物忌等昇氏懸

稅御倉與鋪設御倉之中間於通天北鳥居於入

按神宮雜事記之文見御稻御倉鋪設御倉共近於

御饌殿今謂通懸稅御倉與鋪設御倉中間因

知三字御倉相竝在於廳舍與荒垣北鳥居之際

符合帳謂倉參字之文嚮謂初午修祓之地爲古

御倉院趾明矣

鋪設御倉一字_亡

儀式帳云倉一字納鋪設

嘉祿山口祭祀云山口木本兩祭宮下祭物安置鋪設

荒垣東鳥居一基_{今亡}

荒垣西鳥居一基_{今亡}

康曆遷宮記云永和三年六月一日荒垣西者自正殿

通以南奉立之但東以下鳥居際一間者不奉立

之未立二方鳥居之故也十三日同東鳥居立之

頭工日記荒垣鳥居內間乃廣一丈二尺東西同又云六

十貫文荒垣東鳥居

按內宮今唯西鳥居一基存之當宮曾有西鳥居

可_レ知

荒垣北鳥居一基_{今亡}

康曆遷宮記云永和三年六月一日北鳥居之以東荒垣

奉立之

頭工日記云北鳥居內間乃廣一丈二寸又云六十貫文

荒垣北鳥居

荒垣一重_{今亡亦云板垣}

儀式帳云板垣廻長百十六丈

神宮雜事記云治曆四年二月荒垣外御氣殿良方當天

牛產

神宮雜例集云保安四年八月廿二日大風洪水外宮荒

垣廿三間柱八本流失伴御垣東面八間未申角十三間

西面一間北面一間流損也者神主注文云彼荒垣本自

傾倚破損之上依大風洪水一彌以損失也番直宿衛之

間非無事恐早可被修造

勅使部類云長治二年八月十九日公卿勅使參宮從

御殿東荒垣外鹿走出南入高宮山

康曆遷宮記云永和三年二月廿九日南鳥居西方荒垣

奉立之六月一日新宮南東荒垣大畧奉立之抑新

宮東方荒垣者東宮乃西乃荒垣_{與外仁奉立方內也}

爲先例之處東宮乃荒垣乃本在所_{謂奉立}之條違

失也十月廿七日東方荒垣三尺許寄東立改之以

前東宮荒垣乃在所仁立之間改之也先度之儀希代之

失錯哉

按此時建新宮於西宮地將有遷幸謂今御座

方者東宮地也詳此文則知下西宮東荒垣入於

東宮西荒垣裏其交三許尺_上

頭工日記云荒垣柱長九尺口太九寸五分覆廣一尺五

分緣厚二寸〇四寸

按右文四寸上可有中字內宮荒垣有覆出文

永記請屋日記_{文見于內宮下}可并考

○御倉院

造之由依_レ仰慕_二別功_一造_二進之_一

按此云萱葺辨官抄云荒垣中殿皆萱葺疑宿直舍在_二荒垣中_一乎今下部等番直屋在_二玉串門邊_一

第四御門一間外玉垣南門也承保記云第一門

今第四御門長二丈五尺三寸桁行三間中間一丈二尺三寸左右間各六尺五寸

一丈三尺梁行二間各六尺五寸自_二第三鳥居_一至_レ此三丈七尺

五寸

太神宮式云朝使進入_二外玉垣門_一當_二內玉垣門_一竝皆跪

勅使部類云承保元年七月三日公卿勅使參宮入_二第

三鳥居_一次入_二第一門_一各居_二石壺座_一

按此第三鳥居者荒垣鳥居也始_レ自_二一鳥居_一數_レ之

與_二儀式帳江次第謂_二第三鳥居_一異也第一門者第

四御門也除_二鳥居_一自_レ外初數_レ之則此御門當_二第

一

新任辨官抄云外玉垣御門號_二四御門_一第四也

康曆遷宮記云永和三年正月十三日奉_レ懸_二第四御門

千木_一

頭工日記云第四御門千木長二丈六尺七寸六八廣六

寸七分厚四寸組目上一丈二尺五寸御戶廣三尺一寸

九分二枚合定厚二寸

應永送官符云四御門鐫釘覆金伍枚

外玉垣東御門一間亡今

按承前之例三節祭御遊事訖禰宜自_二中重_一直退出

東不_レ經_二第四御門_一據_レ此推_レ之古外玉垣有_二東

門_一直出_二荒垣東鳥居_一無_レ疑也

外玉垣西御門一間亡今

儀式帳云內人物忌等波西玉垣御門內方_二列_一東方_二

向_レ跪侍

按今時物忌父等列_二禰宜石壺西_一東面詳_二此文_一則

外玉垣有_二西門_一炳焉

外玉垣北御門一間亡今

外玉垣一重亡今

儀式帳云廻長九十六丈

荒垣南鳥居一基亦云板垣門承保記云第三鳥居頭工日記云冠木鳥居

今鳥居廣二丈自_二第四御門_一至_レ此四丈四尺

康曆遷宮記云永和三年十一月十二日荒垣大鳥居立

_レ之

應永送官符云荒垣鳥居壹基鋪拾捌隻徑三寸

頭工日記云冠木鳥居柱長地上二丈九寸五分

在此鳥居西腋_二是自瑞垣門_一初數_レ之爲_二第三_一

院建_二立御饌殿一字瑞垣一重_一

藩垣門不_レ充_二其數_一

今御饌殿瑞垣東西徑三丈九尺南北徑三丈四尺廻

長十四丈六尺

除門八尺八寸殘十三丈七尺二寸

御饌殿北鳥居一基

按揭_二松明於三鳥居_一者以下使石壺在_中此鳥居東

外幣殿一字

或云幣帛殿

御饌殿一字

儀式帳云御饌殿長一丈廣一丈

儀式帳云幣帛殿長一丈廣一丈二尺

今外幣殿長一丈七尺四寸

桁行三間各五尺八寸

廣一丈

今御饌殿_{南北二面}長一丈九尺五寸

桁行三間中間五尺八寸左右間各六尺八寸

誤字

分廣一丈三尺

梁行二間各六尺五寸按帳長廣丈同當有_二闕文_一

新任辨官抄云荒垣之內御食殿如_二寶殿_一有_二千木堅魚木_一每日二度御膳供_レ之屋也朝未明夕秉燭程供

宿直屋三間

今亡

應永送官符云御氣殿南北御戶鐫釘覆金捌枚

徑貳寸花形

御饌殿御門一間

在北面

今門長八尺八寸

御饌殿瑞垣一重

神宮雜事記云神龜六年宮司千上蒙_二宣旨_一豐受宮外

類聚大補任云建曆元年豐受太神宮遷宮今度造加宿

直舍壹宇四間萱葺嘉應始造立建久不_レ造_レ之今度可

名_二附_一神宮司_一無_二其實_一

在三鳥居內_一異_二於內宮之制_一且於_二兩殿中間_一奏

舞見_二年中行事_一詳見手內宮下今內宮齋王候殿在_二鳥居

外_一依_二承前_一奏_二舞於鳥居外_一當宮例奏_二舞於鳥居

內_一凡內宮齋王候殿北面與_二古記_一合當宮齋王候

殿南面見_二新任辨官抄_一二所太神宮之造制向背進

退互_レ例如_レ合_二符節_一

太神宮式云齋內親王參_二入度會宮_一入_二外玉垣門_一

就座於東殿門內東西各有_二一殿_一東殿設_二齋內親

王座_一西殿設_二女孺等坐_一

按門內東西殿者東齋王候殿西舞姬候殿也

中右記云永久二年二月三日公卿勅使參宮使々參進

著_二御子宿屋_一數半帖爲子座是依雨儀也晴時著_二前庭石壺_一

新任辨官抄云外玉垣內御子殿二字南面在東西六月九月十二月御祭齋王參_二候此東殿_一

王參_二候此東殿_一

按御子殿二字其一齋王候殿其一舞姬候殿也兩殿

以_レ爲_二東西一雙_一此書同稱_二御子殿_一

同云荒垣有_二鳥居_一此中號_二內院_一殿皆萱葺千木堅魚

木有_レ之門又同

按齋王候殿舞姬候殿內院之殿也古有_二千木堅魚

木_一可_二推知_一諸書稱_二內外院_一有_二不同_一大概瑞垣

中稱_二內院_一

司家記云雨儀時齋王候殿自_二第三間內敷_一宣命之

半帖_一也

按太神宮年中行事云自_レ西第二間前方半疊敷也

殿四間自_レ西第二間者自_レ東第三間也右文自下第

上可_レ有_二東字_一

康曆遷宮記云永和二年十月廿一日於_二舞姬候殿_一工

等奉_レ作_二御船代_一

造外宮萱葺員數記云齋王候殿御萱葺七百圍已上貳拾貳百

舞姬候殿御萱葺分同前已上貳拾貳百文

按古齋王候殿舞姬候_二字號_一萱葺如_レ此

垣三鳥居一基俗云小鳥居又云四鳥居

今鳥居廣一丈六尺四寸自_二玉串御門_一至_レ此六丈

二尺五寸

江家次第公卿勅使云入_二於第三鳥居_一立_二幣案於第二御

門外_一齋部屈_レ身跪_レ地又云禰宜等候_二第三御門內西

腋庭中石壺座_一

按此玉串御門爲_二第二御門_一儀式帳中右記勅使部

類亦同且外玉垣門號_二第四御門_一此鳥居在_二其中

間_一則爲_二第三御門之名義分明也到_レ今禰宜石壺

串乎受取第二御門奉_置先太神宮司東方太神宮西方

勅使部類云承保元年七月三日公卿勅使參宮把禰

宜等玉串置第三門腋次神人進出串下開御鑰封

之由_{御鑰置居案上}
_{上立第二門外}

按玉串置門腋御鑰居門外皆謂玉串御門也

第三當作第二同書下三作二

同云嘉承二年二月十六日公卿勅使參宮御殿前中門

外昇立神寶引立御馬云々取宮司禰宜等玉串

立中門東腋

中右記云永久二年二月三日公卿勅使參宮取玉串

置三門腋

頭工日記云御門鑠廣四寸厚二寸三分

按此文載瑞垣門下第四門上疑御門上脫玉

串二字_{倭名抄云月抄漢語抄云月乃帖木按蓋兩扉所合之木也}

內玉垣北御門一間

神宮雜例集云外宮伊向神事一禰宜串詔刀從北

御門內玉垣外參入

今門長一丈一尺寬文九年玉垣再興竝建之

內玉垣一重

儀式帳云廻長六十二丈

今玉垣東西徑十四丈九尺南北徑十七丈五尺都廻

長六十四丈八尺_{除南門三丈一尺北門一依寬文七年}

十月廿日大司精長朝臣申請同九年再興之

新任辨官抄云內玉垣之中無屋又東西北三方者相

去六許尺

按今玉垣去瑞垣東西各六尺四寸五分去北九

尺八寸

頭工日記云永享六年八月一頭工近弘註文百四十五

貫文玉垣二重

齋王候殿一字_{帳云齋內親王殿中右記云御子宿屋今亡帳云}

舞姬候殿一字_{女孺侍殿}

儀式帳云齋內親王殿長四丈廣二丈女孺侍殿長四丈

廣二丈

今齋王候殿元祿五年再興之殿長四丈_{桁行五間各八尺}

廣二丈_{梁行三間各六尺六寸六分}

同云齋內親王致中重殿就御座即太神宮司御鬘

木綿并太玉串_平捧持氏第三御門內_{備候}即命婦罷出氏

其御鬘木綿并太玉串乎受取

按內宮之例帳雖有_下司捧鬘木綿等_上而無_下捧_上於

第三門內_上之文_上因知當宮齋王候殿舞姬候殿者

東西寶殿_一奉_二納御調御鞍_一

瑞垣南御門一間

儀式帳云御門肆間長各二丈廣各一丈五尺

今瑞垣御門長二丈二尺

桁行三間中間一丈一尺左右間各五尺五寸

廣一丈

一尺

梁行二間各五尺五寸

按肆間當_二作_二參間_一

瑞垣御門玉串

御門第四御門也今三門長短廣狹稍有_二不同_一太神

宮式云度會宮裝束三門幌三條

新任辨官抄云瑞籬玉垣等有_二御門_一瑞籬御門第六

門也

按始_レ自_二荒垣鳥居_一數_レ之則瑞籬御門當_二第六_一

瑞垣北御門一間

今門長一丈一尺

瑞垣一重

儀式帳云廻長五十丈

今瑞垣東西徑十三丈七尺九寸南北徑十三丈四尺

二寸都廻長五十四丈四尺二寸

餘南門二丈二尺北門一丈一尺殘五十一丈一尺

寸二

康曆遷宮記云應安八年七月十二日二頭代有繼來云

新宮瑞垣御門柱根自_二本宮_一者三尺寄給之間實殿止

相近同北御門_二毛三尺寄_レ北事同前也可_レ爲_二何樣_一哉

作所_二毛不被_一存知_二工毛不_一存知_二任_一東宮之寸法

自_二古穴三尺寄_レ南自_二昨日堀_一之言語道斷仁地堅

候也止申_レ之予_二元尙引_一見記錄_二之處西宮瑞垣御門并

同北御門三尺寄_レ北事祖父長官嘉元記分明之間令_二

指南_二丁

蕃垣御門一間

儀式帳云蕃垣參重長各二丈

今蕃垣御門長一丈一尺參重當_二作_二壹重_一各字衍

文自_二瑞垣門_一至_レ此一丈六尺七寸今見存之外不

聞_二下別有_一遺蹟_二內宮之例亦蕃垣一重也

中右記云天永二年四月九日伊勢豐受宮蕃垣御門依

風顛倒

玉串御門一間

內玉垣南門也帳云第一御門嘉承記云中門

今玉串御門長三丈一尺

梁行二間南間七尺五寸北間六尺五寸

自_二瑞垣門_一至_レ此三丈一尺此門

及第四門近世無_二千木鯉木_一亦無_二門扉_一寬文造宮

再_二興千木鯉木_一九年八月廿一日廳宣云繼_二三百

秋來之絕_二二門千木崇起興_一二百餘年之廢_二玉垣

一重長廻

儀式帳云大物忌父發太神宮司禰宜乃捧持氏留太玉

豐受皇太神宮殿舍考證

豐受皇太神宮權禰宜從四位上度會神主延經撰

大宮院

正殿一區

儀式帳云長三丈廣一丈六尺

今正殿長三丈三尺六寸桁行三間各一丈一尺二寸廣一丈九尺梁行

二間各九尺五寸

東寶殿一字

西寶殿一字

儀式帳云寶殿貳宇長各一丈六尺廣各一丈二尺

今寶殿長一丈九尺五寸桁行三間各六尺五寸廣一丈二尺梁行二間各六尺

尺各六

新任辨官抄云舊神寶取_二納西寶殿_一幣絹絲納_二東寶殿_一

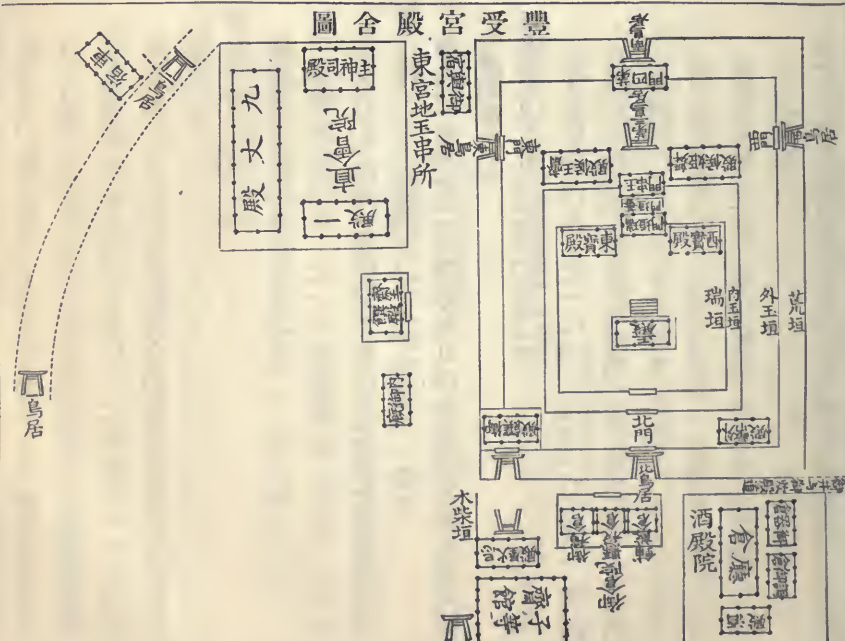
殿

勅使部類云天德四年九月神嘗祭豐受宮御鞍西寶殿

不被_レ開仍奉_二納外幣殿_一

神事供奉記云延應二年九月外宮御祭二五禰宜參_二

豐受宮殿舍圖



請屋日記云應永十五年一頭工兼安等注文外御廐八十貫文

禰宜齋館院門一間

禰宜齋館院垣一重

儀式帳云防往籬一重長廻五十丈

禰宜齋殿

儀式帳云齋殿壹間長二丈弘一丈炊屋貳間齋火炊屋一間大炊屋一間竝長一丈五尺弘一丈厨一間長二丈弘一丈

按延曆時禰宜齋館當_レ在_二今御厩邊_一自_二御厩前_一出_二鳥居內_一之路號_二之中道_一於_レ今隨_二神事之日_一禰宜於_二此道東傍_一齊_レ列進退常經_二中道_一憶是雖_レ歷年久而有_中齋館地遷轉_上猶此一事守_二舊例_一無_二敢變_一焉兵範記云仁安三年燒_二失禰宜內人等宿館伍拾捌宇_一萬治元年聯_二建正員禰宜齋館_一鳥居西同三年有_二洪水_一漂沒寬文元年移_二鳥居東_一是今齋館也

年中行事云交替事維北宿館祇候長官時廳舍參申例也又云從_二鳥居前所_一東荒祭御前西山河行道以南以北堺也自_二件道_一南外院內也自_二道北_一以北也以_レ是各別_二四至堺_一也以南宿館祇候長官時旬日番交替於_二私宿館_一申行例也其次第_上禰_上一禰宜着_二衣冠_一以_二笏_一向_二南候_一三色物忌父等前庭以_レ東爲_レ上各北向蹲踞

高倉殿一字今

儀式帳云禰宜齋館院倉一字長一丈八尺弘一丈五尺

按帳齋館院中載_二倉一字_一厩一間_レ如今御厩北有_レ稱_二高倉殿_一之石壇_上蓋以_レ有_レ神祇官號_上高倉_一見_レ之則所謂倉當_レ爲_二高倉殿_一

寬正遷宮記云御樋代御船代并令_二朽損_一御裝束御神寶等之落散塵芥悉高倉殿奉_レ納高倉殿寶殿令_二退轉_一顯露之間以_二兩所相殿御座板_一覆藏

按高倉殿古以_レ在_二齋館院內_一而垣牆周備_上收_二神寶_一

永正記云古物御樋代御船代等莫_レ及_二顯露_一高倉殿奉_レ納_レ之外宮者藏宿館中所_レ令_二秘藏_一也

按古物御樋代等外宮者藏_二宿館中_一因知納_二古物高倉殿_一者禰宜齋館院倉也

外御厩一字

儀式帳云禰宜齋館院厩一間長二丈弘一丈五尺

今御厩長二丈四尺廣一丈五尺

兵範記云外院肆間板葺櫪御馬勢飼館壹宇

按今御厩在_二外院_一即外御厩也古以下內御厩近_二宮垣_一別置_二此厩_一時勞_二休櫪馬_一中右記長承二年請_上以_二內厩_一移_上禰宜齋館邊_上者舊依_下此厩在_二館中_一上也

御裝束宿殿一字亡今

儀式帳云御裝束宿殿長二丈廣一丈

車宿殿一字亡今亡帳云御與宿殿

儀式帳云御與宿殿長二丈廣一丈

按此院御與宿納齋王輦與及女官副車帳云齋內

親王暫侍坐於外川原殿院即召手輿參入年中

行事云三所曹司乘車迄河原殿也儀式帳雜事

記並爲御與宿而與上載御與宿異也大補任文

永記請屋日記文安記並爲車宿見其同在河原

殿院中蓋一字二名歟

神宮雜事記云承平四年六月十七日齋內親王雅子內親王

依例太神宮仁入御依御與宿院內有穢御與違九丈

殿西砌仁宿置

按御與宿謂之院者以在川原殿院中也齋王

避川原殿穢御直會院雜事記寬平四年康平五

年共有此例寬平條云一殿乃西砌仁御與寄天於

九丈殿西砌御被文見康平條云一殿西砌御被其

被于西砌者因被所在川原殿西也以一殿南

面九丈殿東面見之則蓋川原殿在被所東向

南御與宿在其坤向東歟

類聚大補任云承元三年遷宮今度造加五間一面檜皮
葺車宿舍

按造加言增間數也豐受宮車宿亦建曆造加

文永遷宮記云車宿兩方長押同板敷乾角西北半壁作

之

按謂西北壁似車宿東面也

同云河原殿車宿又云殿舍分配河原殿十車宿二十一人

鳥居宮掌上檜一二兩人在先例賜之

按車宿上載河原殿下載鳥居據次第推

之則知其屬河原殿院在一鳥居之內請屋日

記

文安假殿記並云車宿河原殿

御厠殿一字亡今

儀式帳云御厠殿長一丈廣八尺

川原殿院御門一間亡今

川原殿院御垣一重亡今

儀式帳云防往籬一重長廻四十丈

一鳥居一基

今一鳥居廣一丈八尺四寸

○禰宜齋館院

二、鳥居一基

今二鳥居廣一丈七尺

○齋內親王川原殿院

川原殿正殿一字_{亡今}

日本紀_{仁垂}云倭姬命隨太神教其祠立於伊勢國因

興齋宮于五十鈴川上是謂_{明齊}儀宮同齊云川上此云

箇播羅

倭姬命世記云倭姬命宇治機殿乃儀宮坐給_{利倍}奉日神

祀_止無倦焉同云奉遷於五十鈴川上之後和妙

之機殿乎同興于五十鈴川上側令倭姬命居焉于

時天棚機姬神令織太神和妙御衣給_{利倍}是名號儀

宮矣

按儀宮靈蹟經千載無人知也或謂之神宮之

別名甚非矣川原殿三祭齋王所着御之別館而

在五十鈴川上神衣祭有於此殿西修禊祓_上

似_下機殿所因興之地疑古儀宮者川原殿也乎

儀式帳云齋內親王川原殿一院正殿一區長四丈廣一

丈七尺葺檜皮

按稱正殿似爲南面寬平四年齋王避此院

穢御直會一殿_{詳見}假御南面殿元以此殿向

南之故乎

兵範記云肆間檜皮葺河原殿壹宇

年中行事云齋內親王御參宮次第先御祓件御祓所

自御裳須曾河渡瀬上自瀧祭御前北中間自河

東也御祓畢之後令參御之開始從寮頭次第寮

官等皆御共步行也於三所曹司者乘車迄河原

殿也其後者同步行於寮御火者於一鳥居止畢

齋內親王河原殿與二鳥居中間腰輿移御齋王候殿

御著

按齋宮式云參太神宮禊御裳洗河今祓所在

一鳥居南路傍當瀧祭北下文謂河原殿西祓所

此也祓所東至二鳥居邊此院之舊趾也可見

同_{神衣}祭云神服神麻績兩織殿神部織子人面等於河原

殿之西祓所祓勤仕

同云小朝熊神事往古例所河原殿木陰曳坊領勤

之

文永遷宮記云河原殿板敷西北兩面并北土間長押打

之畢

寬正遷宮記云御裝束御神寶等御著先例河原殿奉

入去永享度_{按永享三年遷宮}件殿不被造進仍一殿奉入

同云從湯貴御倉二下充奉大御饌朝夕大御饌二時之料

兵範記云由貴御饌調備御倉一字

長曆送宮符云中錄拾具別宮料八具由貴殿酒殿二具

按由貴殿在酒殿東依近御所以東爲先乎

年中行事費云於御贊者祝等奉持由貴殿巽方耳迄二十六日夜奉懸例也仍遣替御遷宮之時伴御倉

耳中彼方一枚切殘也

按御贊者荒蠅御贊由貴御饌所供之也

盛殿一字亡今

儀式帳云盛殿長五丈廣一丈七尺說文云盛黍稷在器中

大炊屋一字亡今

儀式帳云大炊屋長二丈廣一丈

按右二字未考舊蹟蓋酒殿院直會院接隣古三

節祭給坏飯群官不可無此二殿

新任辨官抄云內宮蚊屋殿始御與宿在外院

按蚊當作炊御與宿在外院者謂御與宿之在

河原殿院中歟此書參議俊憲卿作載保元二年

事登時有此殿存乎

御酒殿院御門一間亡今

御酒殿院御垣一重亡今

儀式帳云防往籬一重長四十四丈

○物忌齋館院

物忌子等宿館

儀式帳云物忌并小內人宿館五院大物忌齋館一間齋

火炊屋一間厨屋一間宮守物忌齋館屋一間齋火炊屋

一間地祭物忌齋館屋一間齋火炊屋一間荒祭物忌齋

館屋一間齋火炊屋一間已上屋九間各長二丈弘九尺

今子良館長三丈二尺五寸桁行五間各六尺五寸廣同梁行同

按帳所載之宿館九間然今作三間不知何時

如斯

中右記云永久二年公卿勅使一禰宜忠元申子等宿屋

板葺也早可被葺檜皮

兵範記云伍間貳面板葺物忌子等宿館壹宇

文永遷宮記云子良宿館東西搏風張之

物忌齋館院門一間亡今

物忌齋館院垣一重亡今

儀式帳云防往籬一重長廻七十五丈

年中行事云遠江神戶所進種薑用殘子良宿館南垣

內所奉殖也

都記云承曆四年五月八日庚午被_レ行_二軒廊御卜_一伊勢太神宮燒亡之次納_二酒殿_一御鞍鐙燒失是不_レ知_二何用_一可_レ被_二新造_一歟否由被_レト也神祇官卜申可_レ被_二新造_一

年中行事云正月十四日夜水量立事占木_ヲ酒殿前置石北端立月影九丈殿西軒酒殿西軒同通指_二時_一是夜也木影指所_二博士木_ヲ立也_一測月影占三年豐凶名水量

按此文見_二酒殿在_二九丈殿北_一廳舍在_二一殿坤_一而爲_二酒殿在_二九丈殿北_一則同院殿舍異_レ方廳舍在_二西酒殿在_二北畫_一之爲_二一院_一其形中折_二宮諸院未_二曾見_一如_レ此者_一憶是非_二年中行事_一之本文_一當爲_二寬正氏經之所_一加儀式帳云九丈殿長十丈當時九丈殿失_二尺度_一長太不_レ可_二必如_一載帳_一因地空間多_二自有_レ倚_一酒殿於其北_二乎_一以_二水量柱_一爲_二上古事_一欲_レ以_二年中行事_一合_二儀式帳_一齟齬如此神宮雜例集載_二建久元年事_一悉錄_二年中諸祭_一而無_レ立_二水量柱_一也年中行事者建久三年大內人忠仲所_レ記也由_レ此見_レ之水量柱者建久後寬正前其事始起乎不_レ可_レ不_レ察焉

文永遷宮記云酒殿土居奉_レ組_二始之_一又云酒殿四面

板組_二滿之_一又云酒殿立_二宇立_一懸_二角木_一ウタツ スミキ

廳舍一字

儀式帳云務所廳一間長三丈廣一丈七尺
今廳舍長三丈八尺桁行五間各七尺六寸廣一丈八尺梁行三間各六尺

兵範記云伍間壹面壹簀廳舍壹宇

年中行事云正月元日正權神主并玉串大內人廳舍着座自_二東間_一入打板上有_二鋪設_一調宜北東上南面玉串

西東面政所南北面

同云印鑰請取次第自_二鳥居_一參_二廳舍_一自_二西間_一入_二北方打板上_一自_二東第二間_一著座政所南方打板上長官

向祇候

由貴殿一字帳云湯貴御倉兵範記云由貴御饌調備御倉

儀式帳云酒殿院倉二字長各一丈八尺廣一丈五尺

今由貴殿長六尺桁行三間各二尺廣四尺一寸梁行二間各二尺五分小門

一間廻垣一重在_二一殿北_一按今由貴殿之制甚微且別有_二門垣_一不_レ適_レ古凡直會院在_二東酒殿院在_二西

由貴殿是酒殿院之倉也何在_二直會一殿北_一外宮酒殿院倉在_二廳舍後_一由_レ此見_レ之由貴殿當_レ在_二廳舍

良隅_一而九丈殿之北立_二酒殿_一一殿之北立_二由貴殿_一蓋荒廢年久二院垣亡其限不_レ明故乎

按上載直會殿座位皆以_レ西爲_レ下九丈殿爲_二從坊_一則在_レ西可_レ知

文安假殿記云一殿九丈殿主神司殿

按一殿與_二主神司殿_一各橫對_二向南北_一九丈殿傍_レ西向_レ東縱在_二二殿之中間_一此文始_レ北中_レ西終_レ南

直會院御門一間_{亡今}

儀式帳云門長一丈三尺

直會院御垣一重_{亡今}

儀式帳云防往籬一重長廻六十丈_{釋名云籬以柴作之}

按防往籬柴籬也大嘗宮將_レ柴爲_レ垣見_レ式源氏物

語齋王野宮木柴爲_二大垣_一

○齋王御膳院

齋王御膳殿一字_{亡今}

儀式帳云齋內親王御膳屋肆間長各二丈廣一丈

兵範記云肆間葺葺齋王御饌殿壹宇_{有四面玉垣一重}

年中行事_{月次}云齋內親王貢御者請_二預料米_一祝部并

山守相共於_二齋王御膳殿_一所_レ奉_二調備_一也

文永遷宮記云齋王御膳殿土壁敷居入_レ之又勤行文

云齋王御饌殿葺葺遲到之間所_レ不_レ葺也

嘉曆公卿勅使記云荒祭宮神拜所拜如_レ常次禰宜於_二齋王御饌殿後_一被_レ脫_二明衣_一勅使自_二後戶_一被_レ著_二殿_一

按年中行事_{祈祭}云於_二櫻宮北_一脫_二明衣_一同_祭月次云

於_二酒殿後_一脫_二明衣_一未_レ知_二御饌殿後者爲_何地上

舊趾堙滅無_レ所_レ據帳直會院下酒殿院上載_二齋內

親王御膳院_一文永記云一殿齋王御膳殿主神司殿

文安記云忌火屋殿齋王御饌殿荒祭忌火屋殿

齋王御膳院御門一間_{亡今}

齋王御膳院玉垣一重_{亡今}

儀式帳云防往籬一重長廻廿四丈

文永遷宮記云齋王御饌殿四面玉垣奉_レ立_レ之

○御酒殿院

御酒殿一字

儀式帳云酒殿一間長四丈廣一丈七尺庇一面

今酒殿長二丈四尺_{桁行三間各八尺}廣一丈二尺_{梁行二間各六尺}按

古酒殿由貴殿當_レ在_二廳舍北_一外宮酒殿亦在_二廳

北_一以_二廻垣_一亡_二酒殿由貴殿倚_レ東遂與_二廳舍_一相離

似_レ非_二同院_一

兵範記云參間檜皮葺酒殿壹宇

按殿名四丈^二以其長四丈^二也卽主神司殿也兵範記爲肆間^二在一殿南^二三節祭饗^二主神司於此殿^二是故稱^二主神司殿^一

兵範記云肆間檜皮葺主神司殿壹宇

神宮雜事記云大同二年九月荒祭宮牛斃十八日御祭於^二太神宮神司殿^一奉仕

年中行事^{月次}云祭使著^一殿從^二後戶^一東也向^二南在^二

件殿前^一立^二明火^一宮司主神司殿中間以^二東爲^一上著

于^二時寮官等參^二彼殿^一史生等六人燭^一火寮頭一殿南

座向^一祭使^二著^一次助次允等參著又坤方砌史生等向

北祇候寮中臣主神司殿宮司座西方座闕置着次同

忌部次宮主次占部次宮主代著也^{皆東}其次北副向

南寮神祇神部等參著^衣中臣後向^衣北祇承檢非違使

二人著次司中下部等著^衣同向^衣北參著也在^二件殿北

方^一宮司前立^二明火^一

按主神司殿座二列皆東上北面神部北副向^一南與^二

一殿坤史生^一向^一北相互也兩殿對^二向南北^一可^一證

一殿前立^二炬火^一此殿北亦立^二炬火^一

嘉曆公卿勅使記云家子一人其座主神司殿乃北間東

北引^二坊領^一小文高麗端疊二帖諸大夫十三人其座同

殿西間南東上北面紫端但西間江居廻東面

按諸大夫十三人座東上北面主神司殿南北桁行東

西梁行對^二向一殿^一可^二以見^一

氏經日次記云文安六年六月十八日主神司殿顛倒

九丈殿一字^亡

儀式帳云九丈殿一間長十丈廣二丈葺^二檜皮^一

兵範記云玖間檜皮葺九丈殿壹宇

神宮雜事記云寬平四年六月十一日太神宮坤方淵仁

男子一人溺死忽石田山之西腰新道作^天齋內親王

當^作齋王并祭使宮司等參宮但齋宮波一殿乃西砌仁

御與寄^天九丈殿西砌^{仁志}寮司共御被祭使又同前也

按一殿西寄^二王興^一見^二九丈殿在^一一殿西^二年中行

事載^二九丈殿在^一酒殿南^{詳見于}以^二一殿西酒殿

南^一見^一之則古九丈殿在^二一殿坤^一明矣凡二所太神

宮互^一制今外宮九丈殿西面在^二一殿巽^一當宮九丈

殿東面在^二一殿坤^一實符合焉

年中行事云鍛山伊賀利神事雨儀時役人等九丈殿候

田^一慙一殿內也^{按伊功也賀利菰也農功所}

同祭^{月次}云祭使并宮司等之從坊九丈殿也^{坊神宮雜例集}

號^{忘殿}雜事記云^{云離宮院宿坊}

中臣定實離宮宿坊

殿荒垣坤角彼神祭祀^{スル}所ノ石疊ニ持參

按石疊忌火屋殿坤櫻宮石壇是也

文永遷宮記云忌火殿者御饌調備之間屏垣四面內所
奉^レ安^ニ置御竈木^一也而西面四間北面參間不^ニ造進^一

○直會院

一殿一字<sup>横云五丈殿
式云第一殿</sup>

儀式帳云五丈殿一間長五丈四尺廣二丈葺^ニ檜皮^一

今一殿長二丈四尺<sup>桁行三間
各八尺</sup>廣一丈九尺<sup>梁行二間各
九尺五寸</sup>按

殿名^ニ五丈^一以^ニ其長五丈^一也卽一殿也兵範記爲^ニ

伍間^一考^レ古南橫有^ニ主神司殿^一坤縱有^ニ九丈殿^一今

一殿南至^ニ官道砌^一纔三丈七尺五寸何其建^ニ二殿^一

於此狹隘之地^一然則非^ニ古跡^一可^レ以見焉古一殿

當^レ在^下今一殿北去^ニ官道砌^一十許丈^上

太神宮式云禰宜內人神郡祝等恩詔位記付^ニ四度使^一

下^レ之使率^ニ神祇史一人^一就^ニ直會院第一殿^一南面坐

以^ニ二位記^一置^ニ案上^一史喚^レ名給<sup>宜前東向被喚名禰
宜內人北上東面重行</sup>

奉^レ拜^ニ太神^一<sup>拍手
兩段</sup>次北向朝拜

按勅使就^ニ此殿^一正^ニ位南面^一三殿中爲^レ首稱^ニ第一^一

殿^一今畧^ニ第字^一云^ニ一殿^一

兵範記云伍間壹面檜皮葺壹殿壹宇

按今一殿猥小纔三間帳名^ニ五丈殿^一此記爲^ニ伍間^一
外宮一殿五間見^ニ新任辨官抄^一

正應公卿勅使記云勅使被^レ立^レ座之後櫻宮御前^未被^レ
參祇承宮掌依^レ申^ニ子細^一任^ニ先例^一一殿後^{利與}所^レ被^ニ

退出^一也

按古人守^ニ舊式^一如^レ此今一殿以^レ無^レ後戶^一不^レ能

^レ率^ニ由於古禮^一

嘉曆公卿勅使記云勅使御座一殿東間自^ニ第二柱^一西

敷^レ之四姓副使座後戶西間東上南面宮司座西壁副

南上<sup>當作北上年中行
事云以北爲上</sup>東面禰宜座自^レ東第二柱本敷

之東上北面

按東間者自^ニ後戶^一東也第二柱者始^レ自^ニ良柱^一數^レ

之當^ニ第二^一也第二柱之西卽後戶東間也後戶一間

東西各二間都五間也使座禰宜座俱東上皆以^レ近^ニ

御所^一爲^レ上

文永遷宮記云一殿壁板皆以入^レ之又云一殿檜皮東

北方同未^ニ葺滿^一又云一殿未^ニ裴棟^一不^レ立^ニ後戶^一不^レ葺^ニ

妻庇^一又云一殿東庇奉^レ葺^レ之棟裏也後戶者未^レ立

主神司殿一字<sup>今亡帳云
四丈殿</sup>

儀式帳云四丈殿一間長四丈廣一丈六尺葺^ニ檜皮^一

請屋日記云應永十五年十一月十六日一頭工兼安等
注文內御廨八十貫文

古記云文明二年二月神主注進今月廿七日櫪御馬飼
丁等不_レ相隨不_レ開_二御廨戶_一出馳_二廻宮中內中外院

寺_レ之前大庭邊一番直禰宜祠官諸役人等驚騷拜見之
處其粧不_レ尋常急戰如_レ控_レ銜有_レ暫而於_二興玉御

前_一自_レ頸流_レ汗如_レ懸_レ水其後奉_レ入_二御廨_一畢
按興玉荒垣外乾隅也謂_二自_一興玉前_一入_二御廨_上則

此御廨當_レ在_二興玉之前路西傍_一即御稻御倉後荒
垣外也今外宮內御廨在_二東宮地良荒垣之外路東_一

可_二併按_一焉

○御膳宿院

忌火屋殿一字據云御膳宿大同
本紀云御饌殿

儀式帳云御膳宿殿二間長各二丈廣一丈

今忌火屋殿長二丈五尺六寸桁行四間各
六尺四寸廣一丈五尺

梁行二間各
七尺五寸按忌火屋殿帳當宮爲_二御膳宿殿_一外宮

爲_二御饌炊殿_一古於_二彼宮_一炊_レ食齋參此宮處此

殿朝夕隨_レ時供_レ焉故彼爲_二炊殿_一此爲_二宿殿_一歟

年中行事祕抄云每_レ至_二神態_一鑽_レ火炊爨謂_二之忌

火_一玉葉云神宮之習不_レ用火打_一用火切_一

大同本紀云皇太神宮倭姬命戴奉天度會宇治乃五十
鈴宮爾令_二入坐_一鎮理給時爾兄比女乎物忌定給天宮內

爾御饌殿乎造立天其殿爾爲_二天拔穗田稻乎令_一拔穗祓天

大物忌大字禰奈止共爲_レ令_二春炊_一供奉始支

按大同本紀云止由氣宮御饌殿爲_二伊屋殿_一詳見手
外宮下

神宮雜事記亦外宮忌火屋殿爲_二御饌殿_一帳載_二御

膳宿_一不_二別載_一忌火屋殿名異實同也

兵範記云肆間檜皮葺忌屋殿壹宇

年中行事云六月十六日方々御稻等之中一御方者

於_二忌屋殿_一奉_レ春大物忌子良荒木田
氏女先奉仕至_二于二

三荒祭御方_一者主神司殿奉_レ春然後各於_二忌火屋殿_一

奉_レ炊

按物忌子春_二炊_一クヤシキ糲米於此殿權_二與于大字禰奈兄

比女_一帳爲_二御膳宿殿二間_一其一春殿歟外宮忌火

屋殿亦中隔東號_二春殿_一

忌火屋殿鳥居一基_今

文永遷宮記云忌火屋殿鳥居立_レ之

忌火屋殿荒垣一重_今

儀式帳云防往籬_一一重長廻十五丈

年中行事小朝熊
御神態云彼社祝告_二自_一由貴殿_一請預忌火屋

子^{大綱言}以下列立^{西面南上}先^{有石臺}是禰宜等列立其南^去
^{四五六尺許}予向^{西面北}禰宜揖禰宜答揖

按御坐東宮地則玉串行事使禰宜南面御坐西
宮地則西面年中行事西御坐時者使神主西向
也治承元年者當御坐西宮地之時^上

年中行事^{所年}云御鹽湯所石壺列立幣使西其西^{○按本文無其}

西宮司神主東西上各南向于時答拜同時雨儀御與

宿內也官幣禰宜東方砌奉居案御馬其際牽立玉串

大內人并大物忌父兄部官幣南方列立以北爲上但

西御坐時者西方北上列立使神主西向也^{○今按本文省假字且所々多}

略字

按今時玉串行事用南向儀也無知因宮地

今玉串所更^丙南面^{西面甲}

嘉曆公卿勅使記云勅使四姓副使宮司者自南御門

退出禰宜自西御門退出御與宿北答拜如例

按古御與宿在西鳥居南傍是故使司出南門

廻南路北行禰宜出自西門相逢道岐對拜

內御廄一字^{亡今}

儀式帳云御廄一間長四丈廣二丈船一隻長三丈廣三

尺^{按船儀名鈔云槽和名與舟同馬槽也馬寮式云櫓長一丈六尺以一艘充二匹櫓字當作槽}

太神宮式云二所太神宮櫪飼御馬各二疋簡幣馬內
恒令養飼

中右記云長承二年五月廿一日內宮禰宜等申請御廄

屋在內院仍有火事恐外院禰宜館邊可被立

也仍本御廄可壞寄者祭主申云尤可然只隨禰宜

申可作也者予申云隨祭主申可被行^之

按雖有禰宜請朝議仍舊不被改移歟長承

以後之諸記以御與宿內御廄爲中院

兵範記云中院肆間萱葺御廄壹宇

建久假殿記云九年七月六日立假殿柱上棟大司康

定朝臣參宮於內御廄前^{天被拜見之一}

按此時營假殿於西宮地謂於內御廄前^{見其}

立柱上棟則知御廄在西宮近邊

年中行事^{機御}云九月十一日自朝迄十七日夕於

御稻御倉母良并織女所奉織也當番飼丁每朝水

平汲機殿仁進

按謂機殿即御稻御倉也使飼丁汲水運御稻

御倉者御廄與此御倉不遠可證焉

文永遷宮記云內御廄雖搔機依萱之未到不葺

之又云內御廄四面土壁雖搆下地未塗之

三鳥居_二不知_レ爲_レ荒垣鳥居_一

同云荒垣西鳥居八十貫文

荒垣北鳥居一基_亡_今

兵範記云荒垣北鳥居一基

年中行事_{句神}云興玉宮拜北上蹲踞次一座北鳥居前

坪垣_ノ砌蹲踞

按興玉壇古在_二荒垣乾隅_一依_下寬正三年_{ヒコルニ}群_中御垣_上

今在_二玉垣隅_一

文永遷宮記云荒垣北鳥居東柱立_二替之_一

請屋日記云荒垣北鳥居弘一丈一尺

荒垣一重_{今亡帳}_{云板垣}

儀式帳云板垣廻長一百三十八丈六尺

文永遷宮記云造宮所沙汰荒垣御門西_{カハ}脰同北三十二

間立_レ柱上下樋盤同覆搦_二付之_一

請屋日記云荒垣一重百七十七間又云荒神覆廣一尺

一寸五分緣厚三寸中棟厚五寸

年中行事云宮比神御在所興玉後御所乾荒垣角也矢

乃波々木神御在所御所巽方荒垣角也_{按宮比庭津日神}

共大年神子也神名帳云和泉國大鳥美波比神社國帳作_二大鳥爾波比

社_{美與}爾_爾音通神祇官座摩巫祭五神中有_二波比祇神_一舊事紀云

御輿宿殿一字

儀式帳云御輿宿殿一間長三丈廣一丈四尺

今御輿宿長二丈四尺_{桁行三間}廣一丈二尺_{梁行二間}

按齋王於_二河原殿_一停_二輦輿_一御_二腰輿_一此殿納_二腰

輿_二乎_一

中右記云長承二年五月廿一日內宮禰宜等申請御輿

宿屋可_レ被_二加_一今一間事元三間也就_レ中外宮四間

也祭主申云尤可_レ被_二作加_一也

按同記永久二年公卿勅使參宮一禰宜忠元云御輿

字_二宿屋一間可_レ被_二作加_一儀式帳長三丈兵範記爲_二

肆間_一則知_二長承裁下依_レ請諸殿例大抵以_二一丈_一

爲_二一間_一

兵範記云中院肆間檜皮葺御輿宿殿壹宇

江家次第_{公卿}云禰宜等列_二立御輿宿南方_一_{南面相去}

使列_二立其西_一

按古御輿宿在_二官道東_一御_二坐西宮地_一則玉串所

在_二御輿宿之北_一御_二坐東宮地_一則玉串所在_二御輿

宿之南_一今御輿宿在_二官道西_一玉串所遙相隔在_二其

東南_一是故與_二古記文_一齟齬

愚昧_{公卿}勅使云治承元年九月十五日_二至御輿宿北方_一

二丈許內方進向東跪列

按古三玉垣有西門如_レ此今三色物忌父等候八

重櫛西_二北上東面

年中行事_{月次}云一禰宜自玉串御門西脇西御門退

出

按二玉垣屬玉串御門謂西御門者三玉垣西門也

三ノ玉垣北御門一間_{亡今}

三ノ玉垣一重_{亡今}

儀式帳云廻長百二丈

神宮雜事記云長元四年六月御祭齋王_{博子著}齋王

殿俄放音御託宣_略之十八日四御門東妻乃玉垣二間

遠破開天御輿遠寄天內親王遠奉_令退出已_了內親王

齋抑御前仁御輿者有_二制法_一天腰輿遠用之例也自昔

依_レ有_二禁制_一御門_{與利}不_レ寄也

按四御門東玉垣者三玉垣屬四御門齋王候殿傍

在_二門內東_一

文永遷宮記云玉串竝四御門西腋玉垣立_レ之

荒垣南鳥居一基_{今亡帳云板垣御門請屋日記云冠木鳥居}

儀式帳云第五重御門參入進_二第四重_一倭儻仕奉

按第五重門者荒垣南鳥居也在_二第四御門外_一兵範記云荒垣南鳥居一基

按外宮南鳥居今猶存足以徵焉

年中行事云卯杖二筋南荒垣御門外方左右立同_{祈年}

云一座跪玉串四枝奉_レ之進參南鳥居西柱下南向

立二神主以下同前各宮司立向對拜於四御門在_二御鹽湯_一

按今於四御門下宮司東西南櫛宜西北上東面相

秩對拜以此鳥居亡假於此門對立如_レ此

文永遷宮記云南荒垣鳥居東御柱立替之又云南荒

垣鳥居置嶋木打冠木

請屋日記云冠木鳥居弘一丈五尺五寸應永十五年一

頭工兼安等注文冠木鳥居百廿貫文

寬正遷宮記云永享三年遷宮南鳥居不被造進

荒垣東鳥居一基_{亡今}

文永遷宮記云四面荒垣鳥居

請屋日記云荒垣東鳥居八十貫文

荒垣西鳥居一基_{俗云三鳥居}

請屋日記云荒垣西鳥居弘一丈四尺

今鳥居廣一丈七尺祠官常出入自此鳥居俗云

今御器御倉乎當宮鹽御倉亦稱御器御倉二宮同例

鋪設御倉一字_{亡今}

神宮雜事記云永承六年九月十七日御饌供進禰宜等退出之間見古宮鋪設御倉之跡東方馬落胎

兵範記云鋪設御倉所奉納宮中鋪設裝束料筵疊坊領簾等

年中行事_參云一殿鋪設自鋪設御倉出納之手請取勤仕宮司退出之後出納返上之一

按列御倉四字名兵範記文永記符合御稻御倉近外幣殿則此列始北終南也兵範記云內院御

稻御倉調御倉鹽御倉鋪設御倉所載文永遷宮記之分配一禰宜御稻御倉二禰宜調御倉三禰宜

鹽御倉五禰宜鋪設御倉

御倉院御門一間_{亡今}

御倉院玉垣一重_{亡今}

儀式帳云玉垣廻長廿八丈

宿衛屋四間_{亡今}

儀式帳云宿衛屋四間長各二丈

按太神宮式云禰宜_長大內人每旬率物忌父并小

內人戶人等分番宿直又云考文者宮司勘造九月廿五日以前進神祇官宿衛屋廢無遺趾者考績法壤以下祠官失其所職也如今下部番直屋在玉串門邊而已

第四御門一間_{三玉垣南門也}

今第四御門長二丈五尺_{桁行三間中間一丈二尺左右間各六尺五寸}廣一丈三尺_{梁行二間各六尺五寸}自第三鳥居至此三丈五尺按文安

假殿記云永享十一年七月神主注進荒垣內未作所依關木未作猪鹿牛馬亂入如今三玉垣廢此御門無扉考古記有御戶如此年中行事_{月次}云

御遊祭使四御門下御戶東腋宮司西腋請屋日記云

第四御門御戶弘三尺一寸九分厚二寸長八尺三寸

神宮雜事記云雨氣之時於齋王殿奉仕宣命詔刀御玉串至子御遊者四御門_亡奉仕之例也

年中行事云祝部等御衣祭以前參本宮從四御門

之玉垣外南荒垣內掃除也

按四御門之玉垣者謂三玉垣也

三玉垣東御門一間_{亡今}

三玉垣西御門一間_{亡今}

儀式帳云內物忌父四人諸內人物忌父等以西玉垣門

鑰封太神宮司御厨置之

按古納御鑰者疑御稻御倉

長曆送官符云大鑰肆具納御稻等倉四字料

按歲時祭典無一不本於年穀四字御倉以御稻爲首者明以食爲重之意乎

兵範記云御稻御倉所奉納每年三度御祭由貴御饌料御稻

年中行事冬季神態云御常供由當年作稻於廳舍懸之後

御稻御倉奉納例也而近代外幣殿與御稻御倉中間懸來也

文永遷宮記云內院御倉四字內於御稻御倉調御倉鋪設御倉三字者葢遲到之間未葢終

按四字御倉並葢豈如此今御稻御倉獨存猶有

不_レ失_二茅茨之制_一

調御倉一字今亡文永記云庸御倉嘉元記云調庸御倉寬正記云御政印御倉

兵範記云調御倉所奉安置神宮政印也而炎上出

來之間於件御印者僅所出奉也抑件御印元雖

奉安置酒殿去承曆三年外院燒亡之時於彼殿

依燒損被改鑄下之後所奉安置代々執行禰

宜宿館也而猶依有其恐去仁平年中任其時祭

主下知奉安置彼御倉

按調御倉元納神封調庸之雜物等類仁平以後

合納政印

文永遷宮記云調御倉荒祭宮御倉上棟庸御倉張垂木搏風又云河原祓御神寶自外幣殿庸御倉請預之云々今夕可用先陣之神財返納外幣殿調御倉

倉

按庸御倉者即調御倉也請屋日記御倉名調庸字前

後互用古記云嘉元三年正月廿一日伊雜宮御遷宮

官下御裝束自本宮調庸御倉奉出之設分調

庸爲二則御倉五字也儀式帳云御倉四字長曆官

符云納御稻等倉四字文永遷宮記云內院御倉四

字

寬正遷宮記云文安二年十一月廿八日山口祭奉採

心御柱安置御政印御倉

按外宮調御倉亦納政印稱御政印御倉

鹽御倉一字今亡或云御器御倉

兵範記云內院鹽御倉

請屋日記云調御倉御稻御倉御器御倉鋪設御倉

按豐受宮儀式帳云倉一字納雜器并米鹽等類是

外幣殿一字帳云外幣帛殿

儀式帳云幣殿一字長一丈五尺弘一丈二尺

今外幣殿長一丈八尺桁行三間各六尺廣一丈二尺梁行二間各六尺

按外幣殿在正殿乾三玉垣內古記分明近世變亂古法移於正殿坤西鳥居外

同云春宮坊并皇后宮幣帛并東海道驛使之幣帛及國處處之調荷前雜物等納外幣帛殿踰年即禰宜給之

太神宮式云廿年一度造替正殿寶殿及外幣殿皆操新材構造自外諸院新舊通用

兵範記云內院參間萱葺外幣殿壹字件殿所奉納往古御神寶等

長秋記云天永四年八月六日大臣仰頭辨問伯卿云准豐受宮御他殿之例上有可奉度便殿之否親定卿申云准御他殿可遷御候者外幣殿屋有其便

按謂豐受宮御便殿者長曆四年幸御饌殿之例也凡神座頃刻必正位南面也當宮東寶殿忌火屋殿竝向南是故有遷御體之例今有祭主卿議及此則外幣殿爲南面炳焉

年中行事云十月一日司中政所兄部相具荷前御綿外幣殿奉納也

文永遷宮記云河原祓參集新宮御稻倉西玉垣之前其座敷長筵北上東面也于時召立役人氏繼神主立外幣殿巽角召立之神寶取物權任自外幣殿庸御倉請預之

按御稻倉西玉垣者謂三玉垣廻御倉之後上也召立役人立殿巽知外幣殿在御稻倉北而南面上也

幣殿院御門一間今幣殿院玉垣一重亡

儀式帳云玉垣一重廻長十六丈二尺

按外幣殿帳爲幣殿院考他書在三玉垣之間未見下有別有廻垣無所考御倉院垣効之

○御倉院在太宮院中

御稻倉一字九月於此御倉機御衣俗云御機殿

儀式帳云御倉四字長各一丈八尺弘各一丈五尺

今御稻倉長一丈八尺桁行二間各六尺廣一丈二尺梁行二間各六尺稱機殿見年中行事文出于內御殿下

同云正殿寶殿荒祭宮鑰奉置西四御倉即其御倉

右傍據帳則爲第三重御門也明矣三玉垣門

號第四御門此鳥居在其內

齋王候殿一字帳云齋內親王侍殿中右記云御子宿屋年中行事云御子殿

舞姬候殿一字今亡帳云女孺侍殿

儀式帳云齋內親王侍殿長四丈弘一丈六尺女孺侍殿

長四丈弘一丈七尺

今齋王候殿長三丈桁行五間各六尺廣一丈二尺梁行三間各四尺

同云齋內親王到第二重東殿就御座即西殿波女

孺等侍

兵範記云肆間萱葺齋內親王候殿壹字在二肆間萱葺間屏

舞姬候殿壹字

按新任辨官抄云荒垣中殿門皆有千木堅魚木

詳見下二殿有千木堅魚木可推知焉凡造太神

宮寬正以降中絕百餘年舞姬候殿廢而不造所片

存齋王候殿亦不葺萱無有千木堅魚木內院

殿舍且多所廢闕況於外院乎

中右記公卿勅使云永久二年二月三日雨降於御子宿屋取

玉串次第事畢後予右大臣宗忠公目一禰宜忠元進來座

前給宸筆宣命仰云可燒忠元逆取宣命以面

取成裏縵寄與方給內人於座前燒

按帳齋內親王侍殿親王二字訓御子依訓稱御

子殿亦稱御子宿屋

年中行事云風雨難之時於御子殿齊王候殿也被申詔

刀之例也自西第二間前方半疊敷也

同月次云半疊一枚齋王候殿與舞姬候殿中間北方

仁副敷也跪二件半疊有大和舞又云鳥名子所下部

等相具鳥名子等於齋王候殿與舞姬候殿中間

謳歌吹笛

同云六月十八日參著齋王候殿正禰宜南座西上權

任神主并玉串大內人東座南上物忌父等西座南上件

殿前平柱左右赤良曳荷前御調糸結付也

按今齋王候殿北面合右文檢外宮例新任辨官

抄云御子殿南面蓋二宮之制向背表裏相互如此

建久假殿記云舞姬候殿土壁一間修造其外葺萱未勤

嘉曆公卿勅使記云齋王候殿舞姬候殿葺萱破壞

寬正遷宮記云齋王候殿未作之間爲讀合木屋一

字以黑木打之去永享三年御遷宮者造宮使宗直

頭人攝津掃部頭常承中原滿親法名依自專重重玉垣南鳥

居齋王候殿舞姬候殿要須之諸殿舍不被造進

○幣殿院在大宮院中

當宮正殿長太而瑞垣還狹_ニ於外宮_ニ者蓋以下外宮
有_ニ内外玉垣_ニ當宮有_中一二三玉垣_上也重垣奇耦之
數職有_レ由無稽叨變_ニ古制_ニ其弊終至_レ不_レ能_レ知_ニ
門垣之舊趾_ニ可_レ勝_レ歎哉
藩垣御門一間_{式云藩御門}

儀式帳云藩垣一重長三丈同云藩垣御門_{藩玉鸞藩屏也廣韻難也}

今藩垣御門長一丈一尺三寸帳爲_ニ長三丈_ニ未_レ詳
自_ニ瑞垣御門_ニ至_レ此二丈一尺五寸

年中行事_{神衣祭}云內院南面藩垣并玉串及四御門合三
重玉垣御櫛奉_レ差

按一玉垣屬_ニ藩垣御門_ニ二玉垣屬_ニ玉串御門_ニ三玉

垣屬_ニ第四御門_ニ

一玉垣北御門一間_{今亡}

一玉垣一重_{今亡}

儀式帳云玉垣三重一玉垣長十四丈

按十上當_レ有_ニ五字_ニ一玉垣不_ニ五十四丈_ニ則不_レ能

_レ廻_ニ瑞垣外_ニ兵範記云仁安三年炎上注文玉垣參
重西北二方少少燒損一玉垣廻_ニ瑞垣四面_ニ帳脫_ニ

五字_ニ也明矣不_レ然則何以有_ニ二方燒損_ニ

玉串御門一間_{二玉垣南門也帳云內玉垣御門}

今玉串御門長三丈一尺_{桁行三間中間一丈三尺左右間各九尺廣一丈四尺}

_{梁行二間南間七尺五寸北間六尺五寸}自_ニ藩垣御門_ニ至_レ此一丈

年中行事_{御占}云下部等者玉串御門西方玉垣南集會

同云九月十七日懸力稻事玉串御門左右玉垣懸也_{カケテカラフ}

同_{神嘗祭}云爲_ニ申_ニ行寮御玉串_ニ一禰宜參入料造替御遷

宮之時玉串御門西腋御垣自_レ東第一間母木中一枝

一間貫木渡也_{ツヅノキヲス}

二玉垣北御門一間

今門長一丈四尺寬文九年玉垣再興竝建_レ之

二玉垣一重

儀式帳云廻長六十丈

今玉垣東西徑十六丈六尺南北徑十八丈三尺五寸

都廻長六十九丈九尺_{除南門三丈一尺北門一丈四尺殘六十五丈四尺依_ニ寬文七年十月廿日大司精長朝臣申請同九年再_ニ興之}

第三ノ鳥居一基_{帳云第三重御門俗云四鳥居}

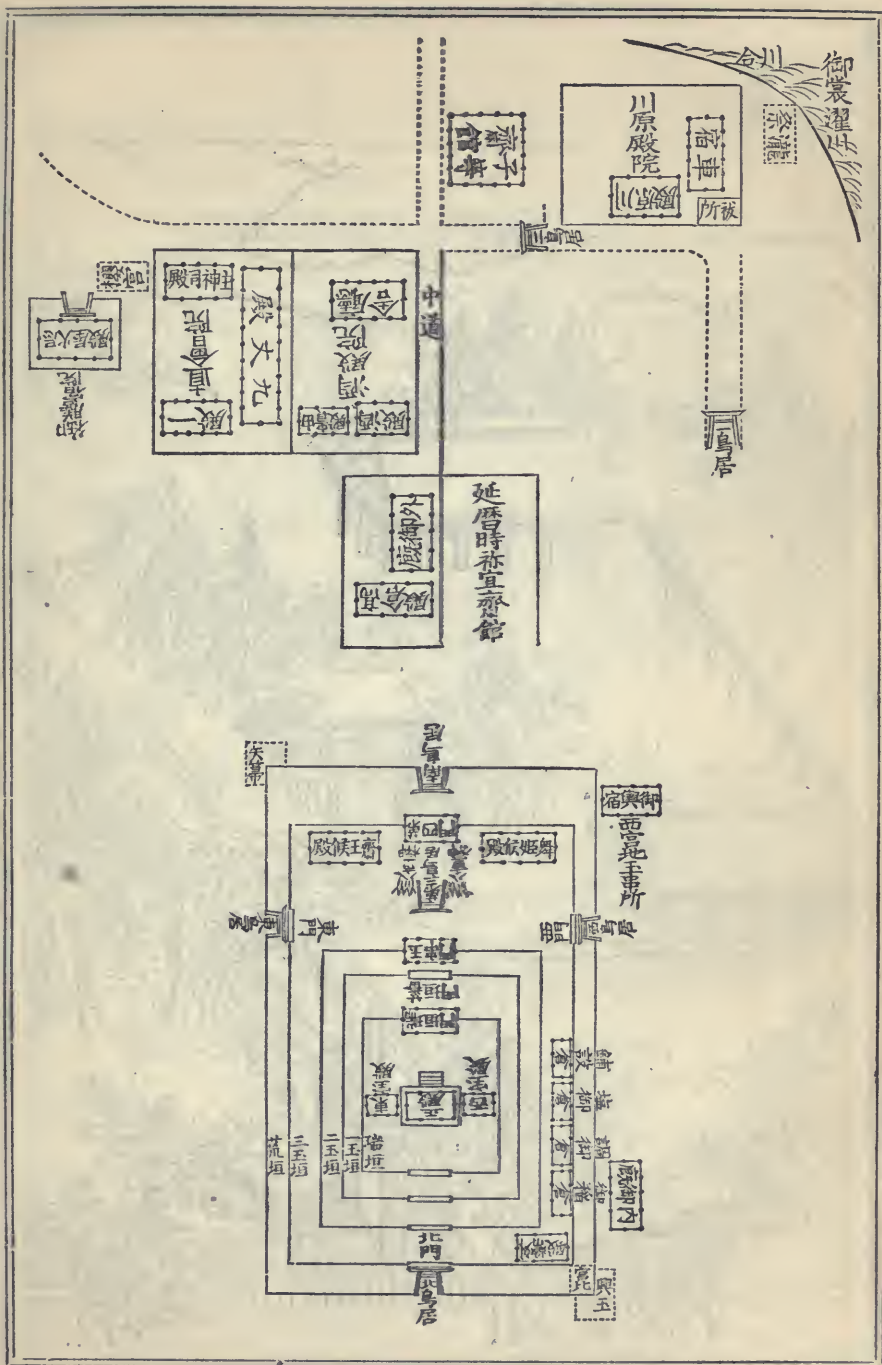
今鳥居廣一丈五尺八寸自_ニ玉串御門_ニ至_レ此四丈

四尺

儀式帳云天八重櫛取備供奉第三重御門東方一列八

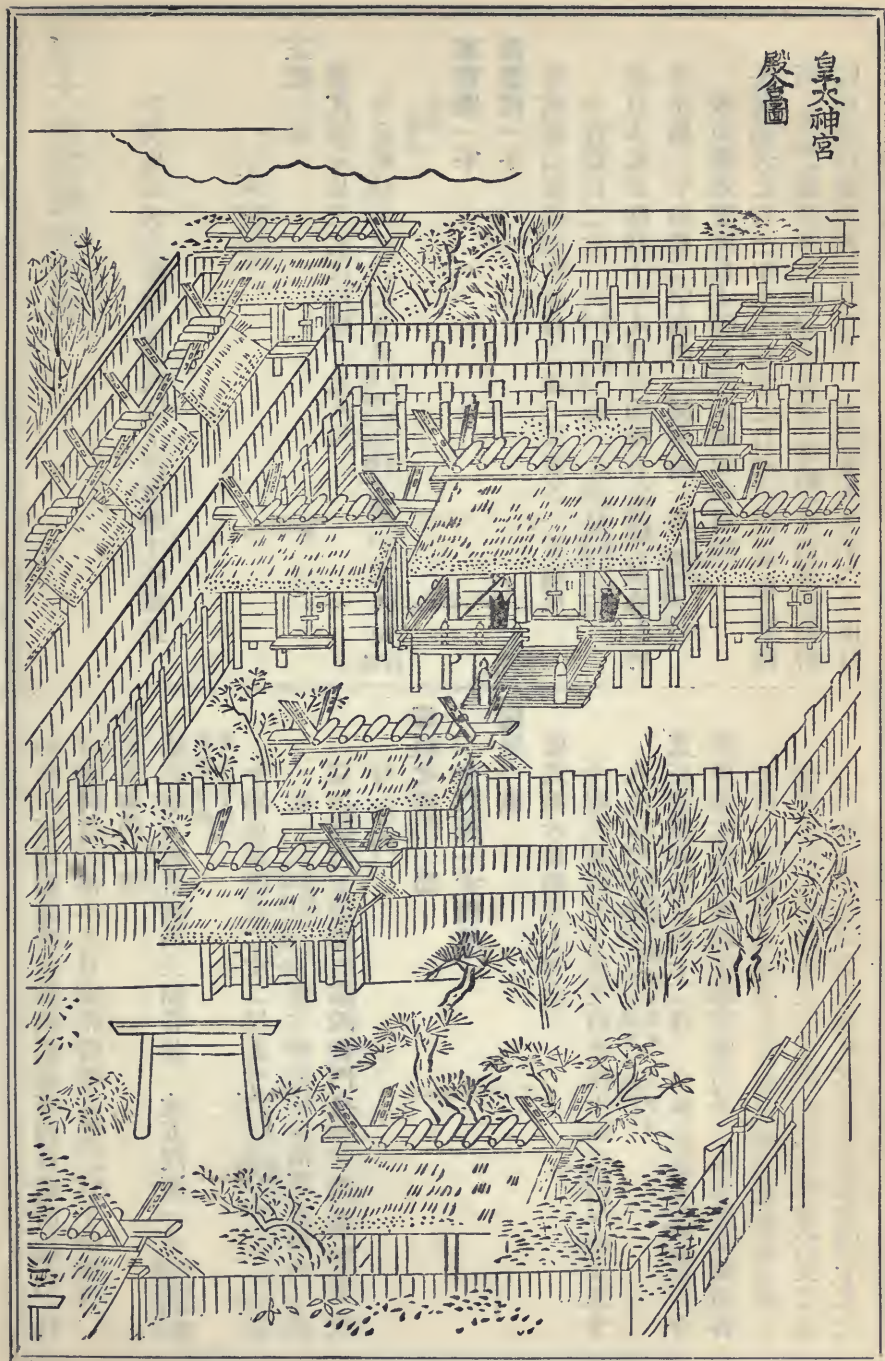
枝八重數六十四本右方亦如_ニ左員_ニ

接近世失_ニ此鳥居之名_ニ至_レ今天八重櫛在_ニ鳥居左





皇太神宮
殿舍圖



皇太神宮殿舍考證

豐受皇太神宮權禰宜從四位上度會神主延經撰

○太宮院

正殿一區

儀式帳云長三丈六尺廣一丈八尺

今正殿長三丈六尺九寸桁行三間各一丈二尺三寸廣一丈八尺梁行

二間各九尺

東寶殿一字

西寶殿一字

儀式帳云寶殿二字長各二丈一尺廣各一丈四尺

今寶殿長二丈一尺桁行三間各七尺廣一丈四尺梁行二間各七尺

續日本紀云延曆十年八月辛卯夜有盜燒伊勢太神

宮正殿一字財殿二字御門三間瑞垣一重類聚國史一重作三重

按財殿者寶殿也太神宮式云瑞垣內財殿

兵範記云仁安三年十二月廿七日神主注進東寶殿

所奉納臨時奉幣使參宮時被進納綾南面縹綱神

服麻績兩機殿神部等勸進二季神御衣每年六九兩月

御祭時宮司勸進荷前御調絹糸等西寶殿所奉納往古御神寶并每年九月御祭時被進納官下御鞍等

瑞垣南御門一間

儀式帳云於葺御門三間各長一丈五尺廣一丈按於字神名帳萬葉集訓三字倍爲上字意

爲上字意

今瑞垣御門長二丈二尺五寸桁行三間中間一丈一尺五寸左右間各五尺五寸廣

一丈一尺梁行二間各五尺五寸按太神宮式云南草葺御門三間

瑞垣御門玉串御門第四御門也今三門長短廣狹

有三不同

瑞垣北御門一間

今門長一丈四尺

瑞垣三重

儀式帳云長廻四十九丈

今瑞垣東西徑十五丈南北徑十四丈四尺廻長五十

八丈八尺除南門二丈二尺五寸北門一丈四尺殘五十五丈一尺五寸

寬正遷宮記云三年十二月一日依正殿之御前狹今

度申沙汰瑞垣蕃垣玉串等御門各一丈充南寄御垣各

一丈廣久因茲坤角地形窄間五尺餘石倉疊地乎築上

按儀式帳正殿外宮長三丈廣一丈六尺當宮長三丈

六尺廣一丈八尺瑞垣廻外宮五十丈當宮四十九丈

和歌兩神記

有_二歌會_一矣

雍州府志曰新住吉社在_二油小路五條北_一傳言藤俊
成卿之所_二勸請_一也凡本朝以_二玉津島明神住吉明
神梯本人丸_一爲_二和歌道守護之_三神_一住吉新玉津
島兩社今現在_二洛中_一人丸社亦須_レ有_レ之今不_レ知
_レ爲_二何處_一街衢處々小社之中思須_レ有_二人丸社_一惜
哉一說人丸社始在_二本國寺地_一移_二斯寺_一時移_二八
坂鄉_一今人丸塚是也

和歌兩神記畢

神_一是允恭天皇之后衣通姬而稚渟毛_二岐皇子第_二之女也詠_三我背子之可來宵也之歌_一自_レ是爲_三倭歌之神_一配_三住吉明神并柿本人丸_一而稱_三和歌之_三神_一爾後等持院尊氏卿依_レ有_三靈夢之告_一而再_レ興之_一則以_三經賢法師_一爲_三別當職_一每年十一月十三日祭祀于_レ今不_レ絕又曰俊成社在_三新玉津島東人家後園_一案自_三新玉津島_一至此處_三悉藤俊成卿之宅地乎又定家社在_三小倉山常寂光寺之中_一相傳古藤原定家卿時雨亭在_三斯處_一爾後建_レ社而祭_レ之

人麿

人麿社者在_三播磨國明石郡大倉谷_一所_レ祭之神一座也諸社一覽曰人丸社祭神柿本人麿拾芥抄曰柿本人丸者官位不_レ見天智御時人也萬多親王姓氏錄曰柿本姓者天足彥押人命之後也○林羅山先生神社考曰柿本人麿者石見國人也或曰未_レ詳_三其何許人_一也善詠_三和歌_一多載_三萬葉集_一焉紀貫之曰先師柿本太夫者高_三振神妙之思_一獨_三步古今之間_一有_三山邊赤人者_一並和歌之仙也藤原敦光作_三柿下朝臣人麻呂畫像贊_一曰大夫姓柿下名人麻呂蓋上世之歌人也仕_三持統文武之聖朝_一遇_三新田高市之王子_一吉野山之春風從_三仙駕_一而獻_レ壽明石浦之秋

霧思_三扁舟_一而綴_レ詞誠是六義之秀逸萬代之美談者歟方今依_レ重_三幽玄之古篇_一聊傳_三後素之新樣_一因有_レ所感乃作_レ讀其辭曰倭歌之仙受_三性于天_一其才卓爾厥鋒森然三十一字詞華露鮮四百餘歲來葉風傳斯道宗匠我朝前賢涅而不_レ緇鑽_三之彌堅鳳毛少_一彙鱗角猶專既謂_三獨步誰敢比_一肩_三讀本_一或曰鴨長明云人丸墓在_三大和國泊瀨傍_一長明嘗往_三泊瀨_一問_三人丸墓_一在_三何所_一乎無_レ知_レ之者_一土俗呼_三其地_一爲_三歌墳_一故也或曰未_レ詳_三其所_一終也和歌三神傳曰謂_三倭歌三神_一則住吉明神玉津島明神柿本人麿也亦謂_三和歌三聖_一乃柿本人麿山邊赤人衣通郎姬也

清輔囊雙紙曰萬葉集第二卷曰柿本朝臣在_三石見國_一臨_レ死時自傷作歌一首鴨山濃岩根志麻計留我於加毛不知登伊茂加俟津都在牟泓昌案自傷歌所_レ載_三乎拾遺集_一少異拾遺集妹山乃岩根爾於計留我於加毛知受豆伊茂加俟津都在牟又善齋脩餘雜錄曰柿本人麻呂生卒未_レ記其詳愚按人麻呂石見國人也天平元年至_三其將_一死發_三和歌_一曰石見乃耶高角山乃古乃麻與利宇岐與乃月於美波氏都流加奈○微書記物語曰三月十八日卽人麿之忌日而昔者和歌所每月十八日

和歌兩神記

玉津嶋

玉津島神社者在_二紀伊國弱浦_一或作_二和歌浦_一後改_二明光浦_一所祭之神二座也諸社一覽曰玉津嶋社衣通姬靈也人皇廿代允恭天皇后也神社啓蒙曰玉津嶋所_レ祭之神二座歟續日本紀云神龜元年十月幸_二紀伊國_一詔曰登_レ山望_レ海此間最好不_レ勞_二遠行_一足以遊覽故改_二弱濱_一名曰_二明光浦_一宜置_二戶守_一勿_レ令_二荒穢_一春秋二時遣_二官人_一奠_二祭玉津島之神明光浦之靈_一度遇延佳神主神宮祕傳問答曰玉津嶋明神者日前神也云有_二祕說_一矣然二所御鎮坐_一不審也以_二伊勢太神荒魂之例_一觀_レ之則玉津嶋明神乃稚日女尊之荒魂也歟猶可_レ考焉衣通姬者和歌之神而弱字之和訓和歌也者因後代從祀有_レ傳矣續古今集藤原隆信卿歌兼豆與利和歌乃浦地仁跡垂豆君於耶俟志玉津嶋姬○林羅山神社考曰玉津島神者衣通姬也案日本紀允恭天皇之后忍坂大中姬之妹容姿絕妙無_レ比其艷色徹_レ衣而晃之是以時人號曰_二衣通郎姬_一

天皇喚_二郎姬_一郎姬畏_二皇后_一而不_レ參天皇強而七喚以來之因_二皇后之嫉_一別構_二殿屋於藤原_一而居八年春二月幸_二于藤原_一密察_二衣通姬之消息_一是夕衣通郎姬戀_二天皇_一而獨居其不_レ知_二天皇之臨_一而歌曰和餓勢故餓句倍枳豫臂奈利佐瑳餓泥能區茂能於虛奈比虛豫比辭流辭毛天皇聆_二是歌_一則有_二感情_一郎姬奏言妾常近_二王宮_一而晝夜相續欲_レ視_二陛下之威儀_一然皇后則妾之姊也恒恨_二陛下_一亦爲_二妾苦_一是以冀離_二王宮_一而欲_二遠居_一天皇更興_二造宮室於河內茅渟_一而令_レ居諸神記曰和歌三神者住吉玉津島人麿

泓昌案鎮坐之年紀不_二分明_一矣所_レ傳衣通姬詠曰立歸復此邦爾跡垂牟昔戀幾和歌乃浦波○神社啓蒙曰或問衣通姬善歌之人而爲_二和歌神_一乎抑以_二其在_二和歌浦_一爲_二和歌神_一乎曰此爲_二一種之祕決_一也世人指_二和歌浦_一專爲_二衣通姬_一而然稱_二其神_一爲_二玉津_一名_二其地_一曰_レ稚者蓋有_二深意_一存焉且續日本紀謂_二玉津島之神明光浦之靈_一則以_二衣通姬_一合_二祭玉津神_一也歟黑川氏雍州府志曰新玉津島在_二五條松原通室町東_一此邊古爲_二藤俊成卿之宅地_一因稱_二五條三位_一家內勸_二請紀州和歌浦玉津島明神_一而號_二新玉津島_一

蓋日域地主明神也雍州府志曰一說本社國常立尊也又言所祭眞一元水之靈而號豐氣太神也畢竟豐受神號而其餘悉攝社也

泓昌案鎮坐之年紀不分明矣○白井自省軒便覽曰抑貴布禰社者累代爲賀茂末社也何者儀同三司二十二社次第云貴布禰者賀茂之攝社也蓋攝者兼也宜哉此末社也又至今賀茂有禰宜等職也於賀茂可尋焉

二十二社略記畢

子也中間菅丞相道真公而西間吉祥女則菅丞相之室也
未詳爲何家女子一說西園寺家之女也住平安城
西南吉祥院里故爲號神社考曰北野天神者右大臣菅
原朝臣之靈也○和爾雅曰北野所祭之神三座今在記
云東坊城和長卿云東源英明中間菅丞相西在良朝臣
也

二十二社註式曰村上天皇天曆元年六月九日遷坐
北野同天皇治十三年天德三年九條右丞相造増屋
舍奉付寶物○明薩天錫夢觀集曰題天滿宮詩
無常說法現神通千里飛梅一夜松萬事夢醒雲吐
月觀音寺裡一聲鐘又明洪序贊天神曰日本嘗聞
北野君愛梅瀟洒又能文謫居西府三千里一夜飛香
度海雲
頭註云神社啓蒙卷三曰間用廿五日者何世也曰人皇七十四代
鳥羽院天仁二年二月廿五日始行北野御忌日之後永爲流例

丹生

丹生神社者在_二大和國吉野郡下市側山中_一所祭之神
一座也延喜式神名帳上曰丹生川上神社神社便覽曰罔
象女神一座○廿二社註式曰當社爲大和之別社事
見延喜格不聞人聲之深山立我宮柱以敬禮者
爲天下降甘雨止霖雨者

廿二社註式曰人皇四十代天武帝白鳳四年乙亥御垂
跡廿二社註疏曰神武天皇以天神敎造嚴瓮陟
于丹生川上用祭天神地祇

貴布禰

貴布禰神社者在山城國愛宕郡所祭之神二座也神
社便覽曰初作木船也後依瑞驗改貴布禰延喜式
神名帳曰貴布禰神社神社便覽曰閭禰神和爾雅曰貴布
禰所祭之神一座祈雨止雨之神今在記云閭罔象女也
神社啓蒙曰所祭之神二座高禰神與御前廿二社註疏
曰城州貴船社船玉命與高禰也諸社一覽曰按船玉命
猿田彥神也雍州府志卷二曰貴布禰社所祭之神二座
第一高禰神第二別雷神也神代卷曰伊弉諾尊斬軻遇
突智爲三段其一段爲高禰水德神也第二別雷神
第三奧御前也是爲守護安穩所祭而地主神也然與
御前社并船守社等社家祕而不言之又曰素戔嗚尊
是天忍穗耳尊之皇親而瓊瓊杵尊之祖神也故尊其所
出奉勸請之今貴布禰社是也依之下上賀茂并貴
布禰三所相比並○羅山先生神社考曰神書鈔云高禰
與閭禰同龍神類也貴布禰明神亦是也今祈雨止雨多
祭此神氏成私記曰與御前爲平安城守護所祭之

不_レ分明也蓋一箇口傳故耳尙待_二博達之師_一可責焉○白井氏神社啓蒙曰今世間刻_二雕_一負_二袋_一之形而配_二蛭_一字_二大黑_一也知大黑與_二大國_一音相同蓋大國者大己貴命之異稱又云予視_二世所_一崇像_二決靡_一他方者_一首所_レ服體所_レ被皆吾國之俗也蓋大國主神而託_二之大黑_一耶黑川氏雍州府志曰案大黑天者軍神也出_二佛祖通載卷二十二卷_一台家說曰傳教大師逢_二大黑天於東坂本_一短身黑面手持_二木槌_一足踏_二米囊_一專掌_二壽福_一一々有_二問答_一自_レ爾世人祭_レ之案本邦所謂大黑者葛刺天而蓋別神也具原氏和爾雅曰大黑神南海寄歸傳第一卷載_レ之最詳號曰_二莫訶歌羅_一求者稱_二情義楚六帖曰大黑神梵天眷屬在_二食厨_一合須_二塑盡供養_一西域諸寺僧食厨無_レ不有也大有_二靈異_一今案大黑神者天竺寺僧食厨所_レ祭之神也或以爲_二倭神_一者無稽之言也

祇園

祇園神社者在_二山城國愛宕郡八坂鄉_一所_レ祭之神三座也神社便覽曰祇園式外祇園天王三座西稻田姬號_二少將井中素盞鳥號_一大政所_二東龍王女號_一今御前_二和爾

雅曰祇園所_レ祭之神三座素盞鳥尊八王子稻田姬諸社一覽曰八王子三女五男也泓昌案三女五男者是天照太神與_二素盞鳥_一誓約之時所_レ生神謂田心姬湍津姬市杵島姬天忍穗耳尊天穗日命天津彥根命活津彥根命熊野櫛樟日命也詳_二于日本書紀_一矣○神社考詳節曰一曰牛頭天王二曰婆利女是稻田姬也或云婆竭羅龍王女也三曰蛇毒氣神是八岐蛇所_レ化乎武塔神者素盞鳥之別號也祇園一名_二感神院_一

神社便覽曰人皇五十六代清和帝貞觀十八年移_二八坂鄉_一雍州府志卷二曰二十二社註式云牛頭天王始垂_二跡於播磨國明石浦_一而移_二廣峯_一其後移_二東山瓜生山_一北白川東光寺其跡也清和天皇貞觀十一年移_二感神院_一昭宣公藤基經公尊_二崇斯社_一新造_二營之其形摸表_一紫宸殿_一故後世雖_二改造_一依_二其樣_一今考_二之其宮殿雖_レ有_二大小之異_一柱數寸尺粗與_二紫宸殿_一相同世以_二昭宣公之殿_一爲_二此神社_一者誤也

北野

北野神社者在_二山城國葛野郡_一所_レ祭之神三座也神社便覽曰北野式外天滿自在天神三座東中將殿中營丞相西吉祥女雍州府志曰三座內東間中將殿而是管神之嫡

九四世曰平九又改姓卜部依之吉田家爲神道長一

廣田

廣田神社者在攝津國武庫郡西宮鄉廣田邑一所祭之神一座也延喜式神名帳曰廣田神社廿二社註式曰廣田者天照太神之荒魂也可謂神宮御同體如式文者一座也現在五社神社便覽曰五座說一殿住吉大明神二殿廣田大明神三殿八幡大神宮四殿南宮五殿八祖神貝原氏和爾雅卷二曰廣田所祭之神一座乃天照太神荒魂也見于日本紀如今爲五座一殿住吉二殿廣田三殿八幡四殿南宮大山五殿八祖神高皇產靈尊以上爲五社一○神社啓蒙曰註進記云人皇百一代後小松院治廿三年應永十三年四月四日甲子伯三位資忠王依招而日本紀第九讀合廣田社事條々有不審雖爲社祕委細演說云々如社官申詞者奉書廣田社者神功皇后也自餘神社意得之勸請歟案以廣田爲皇后難心得歟不合日本書紀等旨

二十二社註式曰垂跡時代無正記日本書紀曰神功皇后征新羅之明年忍熊王起兵屯於住吉皇后聞之還務古水門而卜之於是天照太神誨之云

我之荒魂不可近皇后當居御心廣田國即以山背根子之女葉山媛令祭之

神社考詳節曰蛭兒天照太神弟事八十神大己貴兄在西宮五社之內俗呼蛭兒爲夷三郎神社啓蒙曰西宮者蛭子神也俗號夷三郎非也蛭子天照太神弟也卜部兼熙二十二社註疏曰相殿神二座事八十神大己貴命雍州府志曰凡稱惠美須者是蛭兒命也命住西宮海邊故以釣魚爲樂故斯社多在濱漁人專崇之漁人數日舉網不得魚則必祈斯神若得魚之願成則裁縫衣服使着惠美須像又謂惠美須者福神也凡農工商共祭之商賈特崇之和爾雅卷二曰攝州武庫郡西宮蛭兒及少重神爲夷社乃廣田之末社也一說俗所謂夷殿者事代主命而大己貴命之子也設其垂釣之像者依日本紀所記事代主命遊行在於出雲國三穗之碕以釣魚爲樂之說也蓋此御神者日本最初之地主神也故歲首揭而祭之白井氏神社便覽曰蛭兒夷殿世流布以爲混同也蛭兒者天照太神兄弟載方冊而分明也夷殿說拾遺云口授之一條也又案今人家以大黑而配當于此神之義今古

代幽契一祈一酒解一座神一矣一旦應一感有妊孕一遂以當宮清砂一敷一御座下一居一其上生一兒所謂仁明天皇是也天皇追一神慮一嘉祥年中以一外祖父清友一并一酒解社一以一檀林一并一酒解子神社一又以一瓊々杵火火出見命一配一若子二社一以爲一橘氏祖廟一也至一今尊崇異一他夏冬祭祀無一怠耳

吉田

吉田神社者在山城國愛宕郡神樂岡一所祭之神四座也神社便覽曰吉田式外和爾雅曰吉田所祭之神與一春日大原野一同○神社啓蒙曰御堂關白御書云奈良京時春日社長岡京時大原野平安城今吉田社占一帝都之咫尺有神祠之鎮護一

卜部兼右二十二社註曰清和帝貞觀年中鎮坐中納言山蔭卿始奉一渡一之神社考曰御堂關白道長公造一法成寺一崇一吉田社一以擬一興福寺春日社一云卜部兼俱日本紀抄曰當社藤氏崇敬依一異一他曩祖兼延勸請神系圖傳曰卜部家說云神樂岡明神者雷神也號一裂雷神一是吉田之地主也至一一條院御宇一卜部兼延掌一社務職一時以一藤氏之崇敬一故勸一請春日神一

諸社一覽曰大元殿謂一齋場所一是一卜部家神道勸請

所伊勢内外宮始八百萬神勸請維州府志卷二曰齋場所所在吉田山始在神祇官樓門額有日本最上日高日宮之字一嵯峨天皇之宸翰也鎮魂八神殿亦在神祇官神祇官者古在平安城宮内省一則今二條所司廳之西也自一茲移一東山如意嶽一後土御門院文明十六年移吉田神樂岡一八神所謂高皇產靈尊神皇產靈尊魂留產靈尊生產靈尊足產靈尊大宮姬御膳津神事代主是也此八柱則八州守護驗神八齋靈命八心府神故以爲一皇帝鎮魂之神一吉田卜部家主一裁萬事一凡二十二社之外所一在日本國一之大社小社神職皆自一此家一下令并官位等執一奏之一中臣卜部元同氏而天兒屋根命苗裔也天兒屋根命奉一天照太神勅一輔一佐皇孫一治一豐葦原一於一是以一三種靈寶一傳一皇孫一是爲一王道之元一又以一神籬正印一傳一天兒屋根命一故是爲一神道之祖一天兒屋根命十二世孫大雷臣命仲哀天皇時賜一卜部姓一十八世孫常磐大連改一卜部姓一爲一中臣姓一至二十一世大織冠一改一中臣一爲一藤原氏一大織冠爲一朝家將一誅一入鹿一時思一事有難以一神道一傳一其從弟右大臣清丸一清丸意美九子是爲一中大臣一清

神三女或云惶根尊已上數說見_二耀天記等_一又社家註進曰二十一社之說上七社大宮二宮聖眞子八王子客人十禪師三宮中七社大行事早尾下八王子王子宮聖女氣比小禪師下七社惡王子新行事石瀧劔宮牛御子若宮護因頭註云神社啓蒙卷三曰吉所屬十四座加_二上七座稱_二廿一社_一下八王子宮大御中主尊王子宮建御名方命早尾素戔嗚尊一說云後田彥命大行事高皇產靈尊聖女下照姬新行惠瀧津姬牛尊鎮坐記云此殿底有_二靈石_一尤曰倭小禪師彥火火出見尊惡王子深祕岩瀧踏輪姬命劔宮素戔嗚尊變神氣比仲良天皇大龜漢津彥命龜殿漢津姬

神社便覽曰當社鎮坐年記不_二分明_一或云人皇卅九代天智帝御宇鎮坐神社考詳節曰此社者松尾之同體也或說云山王權現者磯城島金刺宮欽明卽位元年自_レ天降_二于大和國磯城上郡_一現_二大三輪神_一大津宮天主卽位元年現_二老翁形_一曰我是大比叡大明神也又傳教大師以_二天竺金毘羅神_一一名摩多羅神爲_二素戔嗚尊_一號曰_二山王_一以爲_二日吉神體_一日吉鎮座記曰人皇卅九代天智帝御宇白鳳二年三月三日琴御宮奉_レ祭_二山麓_一其後御館乞_レ奉_レ拜_二尊神御形_一于_レ時夜忽光曜如_レ日其中有_二大字_一更無_二異物_一依_レ之奉_二稱_二大宮_一也○又鎮座記曰十者天七地三之數禪讓也師國也言十善天子護_レ國之義雍州府志卷二曰凡自_二天神七代_一傳_二地神五代_一天忍穗耳尊正受_二天照皇太神_一之御禪實爲_二第

二位_一然凶惡神素戔嗚尊之御子也故天忍穗耳尊之御子瓊々杵尊爲_二皇太神之正統_一天子稱_二十禪帝_一亦因_二受_二第十位瓊瓊杵尊之御禪_一也釋氏稱_二十善_一者牽強附會之說而非_レ可_レ取者乎

梅宮

梅宮神社者在_二山城國葛野郡梅津里_一所_レ祭之神四座也延喜式神名帳上曰梅宮坐神四座神社便覽曰酒解神大若子神小若子神酒解子神神社啓蒙曰舊傳云所謂酒解社大山祇大若子社伊勢度遇神主遠祖加夫良居命也小若子社同大若子弟也酒解子神木花開耶姬也和爾雅曰梅宮所_レ祭之神四座酒解神者大山祇大若子神者瓊瓊杵尊小若子神者彥火々出見尊酒解子神者木花開耶姬

二十二社註式曰鎮坐不_二分明_一矣神社啓蒙曰社記并舊傳云件四社以_二孝謙帝天平寶字年中_一祭_二此地_一爲_二帝基守護鎮守_一其後人皇五十二代嵯峨天皇后姓橘氏諱嘉智子父清友少而沉原涉_二獵書記_一眉目如_レ畫爲_二人寬和風容絕異嵯峨天皇初爲_二親王_一納_レ宮寵遇日隆天皇登_レ祚弘仁之始拜爲_二夫人_一後立爲_二皇后_一然常以_レ無_二太子_一而淒淒不_レ樂因_レ玆皇后憑_二神

龍田

龍田神社者在「大和國平群郡立野」所祭之神二座也延喜式神名帳曰龍田坐天御柱國御柱神社二座和爾雅曰龍田所祭之神二座天御柱國御柱神是則風神級長津彥命級長戶邊命也○家行神主類聚神祇本源曰瀧祭神與「廣瀨龍田神」同體異名水氣神也故廣瀨龍田神名號「天御柱國御柱」是天逆戈守護緣也舊記曰廣瀨龍田風水陰陽二神也故名「天國御柱」也

日本書紀曰天武天皇治四年夏四月遣「小紫美濃王小錦下佐伯連廣足」祠「風神于龍田立野」

住吉

住吉堺社者在「攝津國住吉郡堺邑」所祭之神四座也延喜式神名帳曰住吉坐神社四座神社便覽曰底筒男中筒男表筒男神功皇后○神社考曰社家者說云住吉神社四座第一天照太神第二宇佐明神第三底筒表筒中筒爲二座第四神功皇后神祇拾遺曰住吉玉津嶋和歌之兩神也和爾雅曰住吉所祭之神四座凡住吉郡諸社事詳見「新撰神代記」

二十二社記曰神功皇后征「三韓」之時顯「坐攝州」神社啓蒙曰住吉舊記云其荒魂在「筑紫之小戸」和魂者

神功皇后征「三韓」時顯「坐攝州」託「皇后體」而循「行四方」遂到「攝州之地」宣言云眞住吉眞住吉之國也因鎮「坐其地」名云「住吉」○卜部兼方釋日本紀卷第六曰攝津國風土記云所以稱「住吉」者昔息長足比賣天皇世住吉大神現出而巡「行天下」覓「可」住國「時到」於沼名棕之長岡之前前者今神宮南邊是其地乃謂斯實可「住」之國遂讚「稱之」云「眞住吉國」乃是定「神社」今俗畧「之直稱」須美乃叡「具原恥軒八幡本紀曰住江卽住吉也吉江相通故云」住江

日吉

日吉神社者在「近江國滋賀郡坂本村」所祭之神七座也延喜式卷第十神名帳下曰日吉神社廿二社註曰大宮大物主神二宮國常立聖眞子八幡八王子國狹槌客人菊理姬十禪師宇賀姬三宮豐斟淳神社啓蒙曰日吉所祭之神七座大宮大己貴二宮國常立尊神皇魂尊聖眞子正哉吾勝尊八王子國狹立尊客人伊弉冊尊十禪師瓊々杵尊三宮惶根尊一說天照太神三女○和爾雅曰日吉式內一座二宮者大山咋神也式外六座大宮者大己貴命聖眞子者應神天皇八王子者國狹槌尊客人社者伊弉冊尊十禪師者天兒屋禰命三宮者天照太

顯國玉神_一神社考詳節曰日本紀大己貴神之幸魂奇魂此大三輪之神也○又詳節曰二十二社之中大和大神石上日吉下鴨松尾此六社者皆大己貴神也

神社便覽曰兼敦云案神代鎮坐勿論也清輔與儀鈔曰崇神天皇七年倭迹迹日百襲姬命之夢中大物主神告曰我是大物主神也我兒令_三大田田根子_一祭_中於我_上焉然後_{○然後二}大田田根子命者神主君等之遠祖也_{字恐衍歟}

石上

石上神社者在_二大和國山邊郡布留鄉_一所_レ祭之神一座也延喜式神名帳曰石上坐布留御魂神社和爾雅曰石上所_レ祭之神一座石上布都御魂神社宮御鈔曰石上社者素戔嗚尊所_レ持之十握劍也以_三人皇十代崇神天皇御宇_一鎮座也○雍州府志卷二曰近世誤_二石上_一爲_二岩神_一又云一說石上明神者豐石厠奇石窻命也然則太玉命之子也

神社便覽曰第十一代垂仁帝四十九年十月作_二劍一千口_一藏_三石上神宮_二以_三斷蛇劍_一爲_二神體_一今所_レ作劍奉_レ副也神社啓蒙曰舊記云磯城瑞籬御宇遷_二建布都大神社於大和國山邊郡石上邑_一則天祖授_二饒速日尊_一自_レ天受來天璽瑞玉同共藏齋號云_三石上大神_一建

膽心命祭_レ之

大和

大和神社者在_二大和國山邊郡大和里_一所_レ祭之神一座也延喜式神名帳曰大和坐大國魂神社三座神社便覽曰大己貴神御年神大國魂神和爾雅曰大和所_レ祭之神一座大國魂神○神社考詳節曰此亦與_三三輪_一爲_二同神_一今案延喜式大和國城上郡大神大物主神社者謂_三三輪_一也同國山邊郡大和大國魂神社者謂_二大和_一也

神社便覽曰人皇十代崇神帝六年鎮坐日本書紀卷第五曰崇神天皇六年以_二日本大國魂神_一託_二淳名城入姬命_一祭然淳名城入姬髮落體瘦而不_レ能_レ祭

廣瀨

廣瀨神社者在_二大和國廣瀨郡廣瀨里_一所_レ祭之神一座也延喜式神名帳曰廣瀨坐和加宇加賣命神社和爾雅曰廣瀨所_レ祭之神一座倉稻魂命號_二和加宇加賣神社_一亦號_二大忌神_一神名祕書曰伴神伊弉諾伊弉並尊子豐宇賀乃賣神神祇官坐御食神是也_{○頭註云神社啓蒙曰和賀字加乃賣神與勢州外宮神同水德神也}
○松下氏公事根源集釋曰廣瀨社今河合明神是也
日本書紀曰天武天皇四年夏四月遣_二小錦中間人連蓋大山中曾禰連韓犬_一祭_二大忌神於廣瀨河曲_一

三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一日仁垂跡于雍州府志曰昔日當社出現和銅四年二月九日也從_レ斯說以_レ長曆推_レ之則其日偶當_二初午日_一然今不_レ用_二九日而於_二初午日_一諸人參詣俗謂_二初午參_一又稱_二福參_一神祇拾遺曰元正帝御宇當社影向之日偶二月初午日也故至_レ今用_二此日_一慈鎮拾玉集歌稻荷山其二月乃初午爾乘_二耶神波人於導久_一

頭註云神社啓蒙卷二曰問金工專爲_二主神_一何也曰古有_二小鍛冶者造_二鐵鏡_一其利無_二能及_一也一且取_二當山埴土_一以_レ爲_二埴_一埴_二土_一來住且拜_二神矣世不爲_二埴_一埴_二土_一此理_二從爲_二金工守神_一

春日

春日神社者在_二大和國添上郡春日鄉_一所_レ祭之神四座也延喜式神名帳曰春日祭神四座神社使覽曰一殿武雷神二殿齋主神三殿天兒屋命四比咩大神神名祕書曰天照太神相殿之姬神栲幡千姬命於_二春日_一者第四神殿坐也泓昌按舊說春日第四殿姬神爲_二天照太神_一而祕書曰栲幡千姬命未_レ知_二孰是_一也

頭註云日社啓蒙曰武甕槌命鹿島神也齋主命香取神也已上二神天孫降臨日有_二大功_一仍常都必祭_二之大_一兒屋命春日神是

春日註式曰第四十八代稱德天皇神護景雲二年正月九日大和國添上郡三笠山垂跡同年十月九日寅日寅時太_二敷_一立宮柱_二春日祕記曰神護景雲二年十一月

九日戊申三笠山頂宮柱立三所御座四年正月十二日戊寅三笠山下津磐根南向宮柱立御遷宮在_レ之其時第四御殿奉_二祝副_一也長者左大臣正一位藤原朝臣永平御時也

大原野

大原野神社者在_二山城國乙訓郡西岡_一所_レ祭之神四座也神社使覽曰大原_二式外和爾雅曰大原野_一所_レ祭之神與_二春日社_一同

神祇正宗曰人皇五十四代仁明帝御宇嘉祥三年爲_二王城守護_一閑院左府冬祠中_二沙汰_一勸_二請之_一神社考詳節曰文德天皇仁壽元年二月初自_二春日神社_一勸_二請此所_一蓋后妃行啓以_二春日社路遠_一故也雍州府志卷三曰桓武天皇始先遷_二都於長岡鄉_一于_レ時遷_二春日社四座神於斯處_一

大神

大神神社者在_二大和國城上郡三輪鄉_一所_レ祭之神一座也延喜式神名帳曰大神大物主神社具原損軒和爾雅曰大神又云_二三輪社_一所_レ祭之神一座大己貴命日本書紀一書曰大國主神亦名大物主神亦號國作大己貴命亦曰_二葦原醜男_一亦曰_二八千戈神_一亦曰_二大國玉神_一亦曰_二

像衣手一號二七所之本社一也頭註曰神社啓蒙曰松尾二座大山咋神南殿氏成私記曰別雷苗裔也神

雍州府志曰人皇四十二代文武帝大寶元年秦都理承勅始自分土山大杉谷一移神殿于今地一祭之分土山即今松尾山也又奉伊勢宣命紙用縹紙松尾賀茂社用紅梅紙餘社皆用黃色紙伊勢石清水遣中納言爲奉幣使松尾賀茂兩社遣參議餘社皆遣四位五位殿上人是最依朝家御尊崇者也

平野

平野神社者在山城國葛野郡一所祭之神四座也延喜式神名帳曰平野祭神四社神社便覽曰今木神源氏神久度社平氏神古開社高階氏神比咩神大江氏神縣社菅氏神廿二社次第曰平野第一今木神日本武尊源家氏神第二久度神仲哀天皇平家氏神第三古開神仁德天皇高階氏神第四比賣神天照太神大江氏神第五縣神天穗日命四姓氏神中原氏清原氏菅原氏秋篠氏○和爾雅曰平野所祭之神四座第一今木社源氏神日本武尊第二久度社平氏神仲哀天皇第三古開社高階氏神仁德天皇第四比咩神大江氏神木花開耶姬林氏神社考曰平野社者仁德帝之廟也藤原家隆歌曰難波津仁冬籠世之花奈禮也

平野乃松仁降留白雪

延喜格曰桓武天皇延曆年中立二件社

稻荷

稻荷神社者在山城國紀伊郡所祭之神三座也延喜式神名帳曰稻荷神社三座神社便覽曰下社大宮姬中社倉稻魂上社太田命神社啓蒙曰上社土祖神中社倉稻魂下社大山祇女○神祇拾遺曰弘長六年比爲五座神社便覽曰今所傳稱五座田中社大己貴命四大神神功皇后和爾雅曰稻荷所祭之五座諸神記云秦氏之祖神也或云中社保食神田中社稚產靈下社大己貴命上社三神幸魂四大神以上四神爲一社號四大神也雍州府志卷三曰稻荷社是稱上下者非神世之崇卑就社之所而有而稱上下者也今所傳謂五座而中社爲三座所謂伊弉諾尊瓊瓊杵尊倉稻魂也三座之中有瓊瓊杵尊在故此社稱十禪師宮或號客人宮又田中社猿田彥而掌導諸神一者也四大神住吉四所明神也地主神則荷田明神也其地置倉稻魂故號稻荷云頭註云神社啓蒙曰倉稻魂同名異神有三神而司職各異也勿混滋昌按土祖神乃太田命之異名也神社考曰此神社建立權輿未詳社家者流說和銅年中此神始現于伊奈利山豐葦原卜定記曰人皇四十

己貴神也。又一說鷗羽葺不合尊叔母玉依姬爲后而產神武帝是爲人王之始。下賀茂社稱御祖神。奉勸請玉依姬者也。神社啓蒙曰玉依姬非高皇魂并海童女別在一神。○具原氏和爾雅神祇門曰緣起云下社御祖二座健津之身命丹波伊香古耶姬也。西峰先生說云玉依姬河合社也。河合訓加和比。又讀多太須。鳥居西向立。紮森卽此社森也。御祖者在河合之奧。大社也。此下賀茂也。今俗云是紮訛也。又神社啓蒙卷二曰河合社式稱小社宅神是也。上賀茂社官參宮之日先詣此社而後拜御祖。蓋有社例傳習也。

神社考詳節曰欽明天皇時初祭此上下神。雍州府志卷二曰白鳳年中大己貴命來現下賀茂。其後四月西日瓊瓊杵尊自大和國賀茂社來。現上賀茂別雷山麓御生所地。號別雷神。稱大賀茂。故兩社世稱上下賀茂。然則平安城遷都以前之神社也。

齋院

齋院者雍州府志卷二曰齋院古在大宮杜西南云。或言在雲林院村。又云常盤古御所地齋院之舊址也未。知孰是。又卷三曰齋院宮在大秦東南。此處古賀茂齋院而所勸請上賀茂神也。有御手洗河是修

祓處也。延喜式卷第六齋院司式曰凡天皇卽位者定賀茂大神宮齋院。簡內親王末嫁者。卜定若無內親王者依世次簡諸王女。卜定神社。曰平城嵯峨帝爭帝位時嵯峨帝爲祈願以皇女有智子內親王始立齋院。後代々皇女立之。至土御門院元久元年三十四代齋院斷絕矣。

松尾

松尾神社者在山城國葛野郡所祭之神二座也。延喜式神名帳曰松尾神社二座神社便覽曰大山咋神一座胸形中津大神一座舊事本紀曰大己貴神弟大年神之子大山咋神此神者坐近淡海國比叡山亦坐葛野郡松尾鳴鏑神也。和爾雅曰松尾所祭之神二座大山咋神市杵嶋姬命。○神社考詳節曰賀茂玉依姬所取之丹塗矢化爲神松尾大明神是也。號曰大山咋神。是比叡山日吉之同體也。又神書鈔曰丹塗矢者大己貴之所化也。神社啓蒙曰今所傳七座名松尾社月讀社櫟谷社三宮宗像社衣手社四大神雍州府志卷三曰松尾神社在洛西所祭神二座大山咋命瀛津島姬命以此二神爲相殿。稱中本社高皇產靈尊月讀尊二座稱南本社田心姬命湍津姬命櫟谷神三座爲北本社。又加三宮四大神宗

大和乃國葛木仁宿寸彼興利漸山背國岡太乃賀茂仁遷幸山代川仁下坐天葛川止賀茂川止合處仁立坐給比賀茂川平見巡之天宣久狹久少也止云止毛石川乃清流也止天石川瀬見小川止號久川上仁宮所於定給天北山乃麓仁住給利其時此處平賀茂止云也白井氏神社啓蒙卷二曰案健角身者隱語也詳賀茂氏成私記一雍州府志曰一說瓊瓊杵尊爲三天孫而始降臨斯國故是爲地神之始一奉勸請上賀茂是爲山城國一宮風雅集神祇部賀茂遠久歌、久堅乃天濃磐船漕寄志神代乃浦耶今乃御形野又鴨祐光歌、君加爲三國移豆清幾河乃流仁住留賀茂乃瑞籬卜部兼右神祇正宗曰社家深祕無申旨故難露顯○山城風土記曰賀茂健角身命之女玉依姬神道遙于石川瀬見小河邊于時丹塗矢自河上流下玉依姬採其矢夾屋上頃之有身遂生賀茂上社別雷神其丹塗矢今在松尾神社神社考詳節曰玉依姬之子爲雷神號別雷命故號下賀茂爲御祖號別雷爲上賀茂金葉集神祇部賀茂重保歌、君於祈留願於空仁滿給惠別雷乃神奈良波神

神社便覽曰鎮坐年紀更難明也○類聚國史曰八百萬神其餘不量雖無何勝劣已別雷皇大明神爲

帝都鎮守神社啓蒙卷二曰或問賀茂爲別雷神所謂八色雷公是也且舊書所載鴨箭爲雷之說其言揭焉何爲不記焉答曰以賀茂爲雷公神非吾所聞後世好事者爲此也所傳賀茂神詠曰千早振別雷山仁住居之氏天降事神代與利先別雷者賀茂山名也是以爲別雷神耶爲之別雷山神可也爲之雷公神否也今松尾有稱別土者不知何故也又曰然則賀茂社爲宗廟耶爲社稷耶謂祕之不言則近諛矣曰此難言也又曰賀茂者大社也其不載神紀何也曰予聞諸神代兩卷者所以審諦乎伊勢與賀茂之由也不可以輕語焉○皇朝類苑曰日本國專奉神道山城州有賀茂明神託三五歲童子降言禍福事

下賀茂者所祭之神二座也雍州府志下賀茂曰紂宮或作只洲高野川與賀茂川於此社南合流故或稱河合神又稱御祖延喜式神名帳曰賀茂御祖神社二座諸社一覽曰所祭之神二座玉依姬大己貴命清原宣賢神代鈔曰大己貴者下賀茂號御祖神社考曰下賀茂御祖神者號玉依姬賀茂健角身命之女也雍州府志卷二曰下賀茂社或謂所祭丹塗矢然實所祭大

焉卽建_二八尋機殿_一其後景行帝御宇廿年春宇治之齋宮移_二于同國多氣郡_一但先_レ是立_二齋宮_一皇女之初則第十代崇神帝之皇女豐鍬入姬命也初以_二此皇女_一爲_二御杖_一貢_二奉於天照太神_一然後離_二天照太神於豐招入姬命_一託_二于倭姬命_一而後隨_二神誨_一遷_二奉于伊勢國渡邊宮_一因興_二齋宮于五十鈴河上_一矣延喜式卷第五齋宮寮式曰凡天皇卽_レ位者定_二伊勢太神宮齋王_一簡_二內親王未_レ嫁者_一卜定若無_二內親王_一者依_二世次_一簡_二諸王女_一卜定林羅山神社考曰垂仁帝廿六年以_二第二皇女倭姬命_一初立_二齋宮_一後代々皇女立_レ之土御門院承元二年至_二四十一代齋宮後鳥羽院皇女肅子

內親王_一斷絕矣

頭註云員原軒續後漢名數曰垂仁天皇二十六年以_二第二皇女倭姬命_一初立_二齋宮_一其後帝王每_レ卽_レ位世世以_二皇女_一立_レ之至_二土御門院承元二年_一四十一代齋宮後鳥羽院皇女肅子內親王_一而絕矣自_二垂仁帝二十六年_一至_二承元二年_一凡_二千二百一十二年_一說肇_二于崇神天皇御女豐鍬入姬_一至_二於後宇多院皇女嬬子內親王_一而後絕矣凡_二七十五代_一○御鎮座本紀曰倭姬皇女隨_二老翁之告事_一而大喜遂祭_二天照太神_一以立_二宮所于伊勢國宇治川上_一因興_二齋宮于五十鈴川上_一而居焉謂_二之磯宮_一爾後世簡_二內親王未_レ嫁者_一定_二伊勢太神宮之齋宮_一五百野皇女酒人內親王恬子內親王等是也天皇若無_二內親王_一則依_二世次_一簡_二諸王女_一卜定之延喜以後齋宮既絕近世以_二天鈿女命_一之苗裔狹良子代_二之_一

石清水

石清水者在_二山城國久世郡科手鄉鳩峯_一今雍州府志

以_二石清水_一屬_二綴喜郡_一是稱_二雄德山_一或作_二男山_一其山之半腹有_二清泉_一號_二之石清水_一故稱_二之石清水宮_一所祭之神三座也神社便覽曰石清水式外八幡大神宮三座中八幡宮東玉依姬西神功皇后黑川氏雍州府志卷三曰正殿三座中八幡宮則應神天皇也東氣長足姬尊則神功皇后也西比咩大神則玉依姬也

神社考詳節曰人皇第五十六代清和帝貞觀元年八月廿三日武內宿禰之苗裔南都大安寺沙門行教憑_二八幡大神教_一奏聞之從_二豐前國宇佐_一遷_二之於山城國男山鴿峰_一所謂八幡卽應神天皇是也○神社便覽曰案以_二此神宮_一爲_二天下第二宗廟_一分玉依姬置_二東殿_一等蓋有_二深旨_一哉宋史卷四百九十一日本傳曰應神天皇甲辰歲始於_二百濟_一得_二中國文字_一今號_二八蕃菩薩_一

頭註曰神社啓蒙曰按玉依姬海神女豐玉姬之妹神武天皇之母神也具原好古八幡本紀卷四曰八幡宮國々奉_二勸請_一則皆從_二宇佐之例_一田心姬命端津姬命市許島姬命以_二此三女神_一祭_二于相殿_一然雜書說比咩神稱_二玉依姬_一是無稽之妄說也不_レ可_二以證_一焉

賀茂

上賀茂者在_二山城國愛宕郡_一所祭之神一座也延喜式卷第九神名帳上曰賀茂別雷神社亦_レ神社便覽曰賀茂別雷皇大神宮一座廿二社註式曰日向國仁天降坐須神於賀茂建角身命止申須神倭磐吾彥天皇乃御前仁立坐天

奉御饌津神止由居太神乎我坐國欲止誨覺給支云々明
 年戊午秋七月七日以_二大佐佐命_一天從_二丹波國余佐
 郡真井原_一志天奉_レ迎_二止由氣太神度遇山田原_一茨多
 親王神皇正統錄曰垂仁帝御宇皇太神移_二五十鈴宮_一
 而至_二此年_一既四百八十四年自_二神武帝_一殆千餘年矣
 大倭姬命猶在焉內外宮規准_二日少宮摸_一以造_レ之白
 井氏神社便覽曰內宮鎮坐之後四百八十年餘○御鎮
 座本緣曰天地未_レ發陰陽未_レ分五德未_レ行四時未_レ轉
 之前渾沌如_二鳥卵_一溟滓而含_レ牙之神白_二天常立尊_一
 其已發之初大海之中有_二一物_一浮形如_二葦牙_一其中神
 人化生名號_二天御中主尊_一其物便化_二爲國常立尊_一也
 此三名是一神而天地人之三才又備焉神社考詳節曰
 一說云外宮者天祖天御中主神也天孫瓊杵尊在_二
 此宮相殿_一故天兒屋根命天太玉命亦附_二天孫_一而在_二
 相殿_一謂_二之_一二所太神宮_二天御中主者國常立異名也
 泓昌按舊記合_二兩宮_一稱_二二所太神宮_一特謂_二外宮_一
 號_二一所太神宮_一無_二所見_一也此事具辨_二于延佳續祕
 傳問答_一矣然林羅山者國朝宏博之先生也是只別有_二
 祕錄_一識焉歟是當_二尋_一博覽之士矣
 神名祕書曰天照太神與_二豐受太神_一則爲_二無上_一之

宗靈_二而尊無_一二故異_二於天下諸社_一是則天地精明
 之本流也無相無位大祖也故不_レ起_二佛見法見_一以_二
 無相鏡_一假表_二妙體_一也神宮祕記曰凡伊勢二所皇
 太神宮則伊弉諾伊弉冊尊崇子宗廟社稷神惟群神
 宗惟百王祖也尊無_二與_一二自餘諸神者乃子乃臣孰
 能敢抗_二夜止詔玉布太田命傳記曰兩宮者天神地祇
 大宗君臣上下元祖也惟天下大廟也國家社稷也故
 尊_二祖敬_一宗禮教爲_レ先故天子親耕以供_二神明_一王
 后親蠶以供_二祭服_一長寬勘文曰伊勢兩宮更抗禮
 天無_二一日_一地無_二一王_一之義也倭姬命世紀曰天地
 開闢之初神寶日出之時御饌都神天御中主尊與_二
 大日靈貴_一豫結_二幽契_一永治_二天下_一言壽宣故或爲
 日爲_レ月永懸而不_レ落或爲_レ神爲_レ皇常以無_二窮御
 鎮座本紀曰吾祭奉_レ仕之時須_レ祭_二止由氣皇太神_一
 也然後我宮祭事可_二勤仕_一

願註云葛城實山記曰天御中主尊無_二祖無_一
 宗而獨能化故曰天帝神又號_二天宗廟_一

齋宮

齋宮者初在_二伊勢國飯野郡流田鄉_一于_レ今宮跡存倭
 姬命始居_レ焉是齋宮之始也神宮舊記曰垂仁帝廿六
 年興_二齋宮于宇治五十鈴川上_一以降令_二倭姬命_一居_二
 上_一

左天兒屋命右太玉命舊記曰依天照太神御託宣太神第一攝神高宮奉傍止由氣宮也亦天照太神相殿坐神三座奉傍止由氣宮止由氣相殿神皇孫命仁奉陪從故號止由氣宮相殿自爾已降以天手力雄萬幡姬爲天照太神相殿一度遇延佳神主中臣禊瑞穗鈔曰天照太神所鎮座之相殿神即天兒屋命天太玉命也然雄畧天皇御宇外宮御鎮座之時皇孫瓊杵尊爲外宮之東相殿故隨二神亦同侍殿內善爲防護之神勅而相傍皇孫尊天兒屋命天太玉命爲外宮之西相殿也因是御戶開神天手力男神萬幡豐秋津姬命以此二神奉爲內宮左右之相殿也

神宮本緣曰自神武天皇迄開化天皇九帝歷年六百卅餘歲天皇與同殿坐也此時帝與神其際未遠同殿共床以此爲常故神物官物亦未分明矣第十代御間城入彥五十瓊殖天皇崇神天皇漸畏神威同殿不安改更令齋部氏率石凝姥神之裔天目一之裔二氏取天香山白銅黑金更鑄造於鏡劔同六年己丑天皇畏神靈共住不安故秋九月就於倭笠縫邑殊造立於磯城神籬奉遷於天照太神及天彥雲劔舍人親王日本書紀卷第五崇神紀曰六年百姓

流離或有背叛其勢難以德治之是以晨興久惕請罪神祇先是天照太神和大國魂二神並祭於天皇大殿之內然畏其神勢共住不安故以天照太神託豐鍬入姬命祭於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬神籬此云比非呂岐亦以日本大國魂神託淳名城入姬命祭同卷第六垂仁紀曰二十五年三月丁亥朔丙申離天照太神於豐相姬命託于倭姬命爰倭姬命求鎮坐太神之處而詣菟田筱幡發此云佐佐更還之入近江國東廻美濃到伊勢國時天照太神誨倭姬命曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可怡國也欲居是國故隨太神敎其祠立於伊勢國因興齋宮于五十鈴川上是謂磯宮則天照太神始自天降之處也一云天皇以倭姬命爲御杖貢奉於天照太神是以倭姬命以天照太神鎮坐於磯城嚴櫃之本而祠之然後隨神誨取丁巳年冬十月甲子遷于伊勢國度遇宮神宮舊記曰今歲猿田彥神裔宇治土公祖太田命參相乃曰南大峯有美宮處佐古久代宇治之五十鈴河上是日本國中仁殊仁勝靈地也其裏翁八萬歲之間仁未現知有靈物照耀如日輪惟小緣之物仁不在定主出現御坐

二十二社畧記

東武 長 島 泓昌 編纂

延喜式卷第九神名帳上曰天神地祇總三千一百三十二

座大四百九十二座小座二千六百四十座社二千八百六十一處

卜部兼右廿二社註式曰人皇六十二代村上天皇治十九

年康保二乙丑年霖雨經月九天覆雲依之閏八月廿

一日奉幣於十六社止雨伊勢石清水賀茂上松尾平

野稻荷春日大原野大神石上大和廣瀨龍田住吉丹生木

船○案江次第云正曆已前十七社

註式曰第六十六代一條院正曆二年辛卯炎天送日萬

物變色依之六月廿四日祈雨奉幣時加吉田廣田北

野三社被奉官幣爲二十九社○儀同三司廿二社次

第曰吉田廣田北野次第事可爲住吉之次丹生之上

由宣下

註式曰同五年二月十七日祈年穀時加于梅宮被奉

幣爲廿社○次第曰梅宮事可爲住吉之次吉田之

上由宣下

註式曰第六十六代一條院長德二年乙未二月廿五日被奉臨時官幣之日加祇園爲廿一社

又曰第六十九代後朱雀院長曆三年己卯八月十六日被奉官幣之日加日吉爲廿二社○次第曰日吉事

可爲住吉之次梅宮之上由宣下林羅山神社考詳節

曰伊勢石清水稱宗廟皇帝祖神故也賀茂松尾平野春日吉田

等稱社稷又凡勅願尊崇之神社總名社稷又爲其人

之苗裔者爲祖神又曰石清水吉田祇園北野不入

延喜式神名帳號之式外神○白井自省軒神社啓蒙

卷二曰賀茂社爲宗廟耶爲社稷耶謂祕之不言

則近誣矣曰此難言也又神社便覽今宮下曰傳聞神位

各有高下也皇太神宮爲上大神宮次之大明神又次

之明神又其次也

伊勢

內宮者在伊勢國度會郡宇治鄉五十鈴河上所奉崇

祭之神三座也神名祕書曰村上天皇御宇祭主公節之

時皇太神者與座故號內宮度相宮者外坐故曰外宮

始自此時也延喜式卷第四太神宮式曰太神宮三座

天照太神一座相殿神二座神社便覽曰左手力雄神右萬

幡姬命○齋部正通神代口訣曰於渡會之神宮中御鏡

二十二社畧記引據書目

日本書紀	舊事本紀
釋日本紀	倭姬命世紀
鎮座本紀	鎮座傳記
神宮本緣	神祇本源
太田命傳記	神宮御鈔
神名祕書	神祇拾遺
神皇正統錄	新撰姓氏錄
神系圖傳	神祇正宗
延喜式	延喜格
江次第	類聚國史
葦原卜定記	日吉鎮座記
春日祕記	氏成私記
天地麗氣記	和歌三神傳
社家註進	長寬勘文
諸神記	山城風土記
神代口訣	同宣賢鈔

引據書目畢

兼俱日本紀抄	八幡本紀
廿二社註式	同註疏
同次第	同記
神社考	同詳節
神社便覽	神社啓蒙
諸社一覽	和爾雅
中臣瑞穗鈔	公事根源集釋
祕傳問答	續祕傳問答
雍州府志	正徹物語
清輔奧儀抄	同囊雙紙
拾芥抄	拾遺集
金葉集	續古今集
風雅集	拾玉集
宋史	談苑
皇朝類苑	夢觀集
贈餘難錄	葛城寶山記
續倭漢名數	
通計六十五部	

二十二社畧記題辭

夫本朝者神國也。是故邦國郡縣莫不有鎮座之神焉。延喜式所載神名帳之神社凡三千一百三十二座。其外石清水吉田祇園北野號之式外神矣。蓋伊勢石清水者本朝二所之宗廟也。賀茂松尾平野春日等謂之社稷。後朱雀帝長曆三年秋八月定二十二社之數。且每歲勅神祇官以被奉幣帛。然後天下之衆人崇敬之。最越于自餘之神社矣。是以自古爲之記者不爲不。多也。然其鎮座之神名諸傳不同。且爲其說或簡約而不詳。或廣博而不節。故蒙昧之徒病焉。因斯余雖不敏。敢會衆說而廣異聞。題曰二十二社畧記焉。亦和歌者我國之舊風。而其源起于神代。故上智下愚相與無不依焉。無不慕焉。仍今以和歌之兩神并附其後。與衆共之云。

貴元祿十二己卯之祀孟春幾望東武逸民長隔 泓昌謹誌

人亡羊留濃心何月仁賀改哉夫禮石於彫流龜猶海原於思
布何況神明乃種乎植人其本烏忘傳不_レ想者石仁母不_レ似
止自乃意於以豆自能心仁警昨假令小木耻乎顧連波大那留功
志於立爾不_レ暇止云留言烏賴豆予賀短具拙氣志於以天幼稚
童蒙乃爲女覽流仁便阿留小幾記_フ乎綴物南利不足所_ラ乎波後
乃世吾情仁齊木人相續與然者所願仁至留奈良志

于時寬文乃四咩俱理年能序甲辰霜月上茲日

白井自省軒宗因敬書

勅使一以爲祭也世人稱曰御蔭祭一故社名御蔭社一耳祝部社務等乘羽車一神官悉應其位一而或騎馬或扈從奉爲供奉一也誠非輕易之神事一故今及怠倦一者乎尙舊記存下鴨之間於此所可尋焉

小野御靈 山城國葛野郡小野庄東河內村

人皇十五代文德天皇第一子惟喬親王之靈社也天
安年中鎮坐今爲北小野氏神也

案世流布云某何社氏子也殊不知本據之故耳何者兼名說云假令從此境祇園氏子或御靈氏子或稻荷氏子或今宮氏子更無本據也祇園社清和帝御宇貞觀年中之勸請也御靈社朱雀院御宇天慶二年勸請稻荷社元明天皇御宇和銅年中始顯今宮者一條院御宇長保三年始祭也云於其內生者爲產神也氏神氏子之義古來無其沙汰也文盲青女之申事上樣仁聞食天爲本說口惜次第也殊更山城國愛宕郡生者賀茂大明神御氏子勿論也賀茂大明神者山城國惣社也攻年中一度可致社參也每日一度向北方可致祈念也但是山城國之事也於餘國則其國惣社可崇敬也又四姓

氏神者日本武源氏神也仲哀天皇平氏神也天兒八
禍命藤原氏神也仁明帝橘氏神也云々然則此神北
小野產神也非氏神耳
落葉社 同下小野鎮坐

落葉大明神

傳言嵯峨天皇之皇后靈社也

由木社 城北鞍馬山鎮坐

正一位由木大明神

諸人之司罪神也今不載本緣者有深旨者乎
平向神祇博達之士可尋也

城南神 山城國鳥羽鎮坐

鳥羽天皇之靈社也當帝都南方之故世人號城

南神也

也豆加連竊以者當昔天瓊矛乃一滴世利大八洲能國止
成里八十萬邊神廻御量事乎以豆安國登定理奉俊故仁蒼生
賴之深久恩賴鳥蒙利飛鳥昆虫乃族未傳其功塵不預和無之
然似吾國能元乎忘天他乃國濃初於探天不知歸須根國底
國仁吟豆和尚吾性乃安木所止思天不遷怪幾物乃形乎貴美
神脉相傳乃神祇乎不恐遷近爾吾邦乃道乎勤禮波眼於
側指平舉天笑布悲哉天神禁戒乃罪何能歲烏以天贖比諸

稻荷攝社也御神事之砌出_レ炬而奉_レ迎也故名云々
一社祕也故省畧焉

官者殿 京極四條鎮坐

舉_レ世所謂此神習文起請赦免社也云々依_レ此考則
唯一所_レ傳起請返神乎起請返者起請文上書_二靈
印_一以奉_二神供_一一七日祭之誠唯受_二一流大事非_二
其家_一則不_レ傳也故今本緣不_レ載_レ之耳今世所謂武
將之靈者蓋花言哉乎祇園末社有_二此神_一又宜也

鼠禿倉 日枝山鎮坐

案日吉神道密記末社註解下云蓋此神十二支中以
_レ子爲_二使者_一故號_二鼠宮_一也主_レ福神也云々雖_レ有_二
本緣_一今不_レ載焉行_レ世甲子祭者崇_二此神_一也以_二此
社_一而記_二此書_一者羅先醒神社考之說天地雲泥也
予又不_レ知_二是非_一故記以具_二後覽_一矣

田中社 山城國宇治郡石田鎮坐

天照皇太神 日吉山王

當社鎮坐年紀不_二分明_一也傳云當昔天武御宇之比
此里忽然而一夜之間積_レ苗數尺其上有_二白羽矢_一
也老翁來現云此地宜_レ鎮_二坐于天照太神日吉兩
社_一也然則永爲_二帝都南方守護之神明_一耳依_レ此鎮

坐云々其積_レ苗之地于_レ今存也里民號_二苗塚_一也
荒神 大和國笠山鎮坐

興津彦 興津姬 中御神 日決之由

案荒神鎮坐雖_レ多和州笠荒神者諸人深崇_レ之故其
名鳴_二畿內_一也仍記焉人家竈神亦此也蓋祭法別
有_二式文_一耳

高野 山城國愛宕郡鎮坐

高野明神一坐

尋_二夫高野神社_一兩說也一云天照太神一云早良親
王云々早良之事後乎天照太神之義尤附合也今明
不_レ載焉故何者當社事於_レ他不_二分明_一也誠卜部家
從_二天兒八幡命_一以降傳_二三種神物_一而神祇長職之
家也依_レ此神社舊文太多耳今此天神於_二神代_一鎮
坐之事非_二此家_一者雖_レ知又恐可_レ不_レ盡_レ美哉

石座 同岩藏鄉鎮坐

石座大明神

舊記云天神所_レ籠之窟戶也云々尙如_二上記_一於_二神
樂岡_一可_レ尋_レ之

御蔭社 山城國高野鎮坐

當社下鳴影向之宮也昔天子每年四月午日被_レ立_二

古老云此神日吉禰殿也故稱大賢木本四宮大明神也四座神鎮坐依斯號四宮也四座者

大比叡 大己貴 小比叡國常立

氣比 仲哀 小禪師火々出見

健部 延喜式神名帳云近江國栗太郎

健部神社 勢田也近江一國惣社也

一宮記云大己貴命也

櫻谷 神名帳云近江國栗太郎

佐久良谷神社 瀬織津姫

案以中臣祓熟語乎

唐崎 近江國坂本鎮坐

唐崎大明神

案拾遺爲祕說也故不載之今以六月晦日

爲參社又有與旨哉

苗鹿 神名帳云近江國滋賀郡云々

番神記云倉稻魂也

江文 城北大原鎮坐

江文大明神

案神祇拾遺云國狹槌也

大原 丹波國桑田郡鎮坐

大原大明神

伊弉冊尊

流諺云大原者天照太神之御母也然則伊弉冊義分

明也額云天一位大原大神宮云々

淡路多賀 延喜式神名帳云淡路國津名郡

伊佐奈伎神社

栗嶋 紀伊國鎮坐

栗嶋神社 少彥名

溫泉宮 延喜式神名帳云攝津國有馬郡云々

案少彥名傳云或出溫泉爲人治病云々然則此

非分明乎

船玉 延喜式神名帳云攝津國住吉郡

船玉神社 猿田彥

水垂 山城國淀鎮坐

水垂大明神 八幡叔母

向日 案延喜式神名帳云山城國乙訓郡 山崎

向神社 拾遺云素盞烏孫

當社累年有其名不正其本也羅山等又不

載神社考故今記以示童蒙耳

炬火殿 洛内七條鎮坐

正一位彥根大明神 天照太神子

案山門神系註云天照與素盞所誓活津彥根命也

鞭崎八幡 近江國栗太郡矢橋鎮坐

鞭崎八幡宮

案舊記云人皇四十代天武御宇白鳳四年二月十一日依勅願詔大中臣清丸鎮坐云々稱鞭崎者源賴朝上洛時此浦有神社召浦人馬上以鞭指之問此社也浦人云是八幡也賴朝有下馬而拜之依此號鞭崎云々雖有多說摘其要記焉

正八幡 同山田鄉鎮坐

勸請同日也稱鞭崎者矢橋八幡御事也

法華峯八幡 近江國蒲生郡鎮坐

今村號八幡

八幡宮

案社記云人皇六十六代一條帝御宇影向法華峯

云々

篠村八幡 丹波國鎮坐

八幡宮一座

案二十二社註式云人皇七十一代後三條院延久三

年依勅奉勸請兼延奉行之

鶴岡八幡 伊豆相模誤鎮坐

案延久年中源義家勸請云々

朝倉八幡 周防鎮坐

案二十二社註式云人皇五十六代清和帝貞觀元年

立行宮勸請之

正八幡宮 大隅國桑原郡鎮坐

案家記云欽明帝五年顯坐云々

又案舊史五所別宮之一也

奈良八幡 大和國平群郡鎮坐

案舊史云孝謙御宇天平勝寶元年依八幡神託造

宮云々東大寺八幡也

佐女牛八幡 洛内六條鎮坐

今五條橋東號若宮者是也

案人皇七十代後冷泉院治八年天喜元年依勅願

勸請曩祖兼親奉行之

高倉八幡 洛内御池鎮坐

案康永年中等持院勸請兼豐奉行之云々尙詳二

十二社註式等之矣

四宮 近江國大津鎮坐

四宮大明神

神田 武藏鎮坐

神田靈社

羅山云平將門靈也

三保 延喜式神名帳云駿河國盧原郡

御穗神社

案神名帳首書云三穗津姬乎案櫻谷置瀨織津姬類乎依名置神之義往々有之

神祇官八神

神產靈 高皇產靈 玉留產靈 生產靈 足產靈

大宮女 御食津神 事代主

惣社 播劔姫路鎮座 大己貴

軍八頭正一位伊和大明神

案粟郡影向乎一宮案粟郡勿論

高鴨 延喜式神名帳云大和國葛城上郡 三十二

八重事代主神社 大己貴子

平岡 延喜式神名帳云河內國河內郡

枚岡神社

一宮記云天兒根命也

兵主 延喜式神名帳云近江國野洲郡

兵主大神宮 口傳

案神祇正宗云大國玉命也云々此外有祕說今

省畧焉

小津 延喜式神名帳云近江國野洲郡

小津神社今世流布書物有ハナヒ山者其中四月下稱舊祭此也

社家者說云稻荷同體也

額曰玉津正一位小津大明神云々蓋玉津者宇賀之

謂乎

大寶 近江國總郡鎮坐

大寶天王 疫神也

社家說云大寶年中從天上降臨神也其鎮坐老杉

今尙存也

牛頭 近江國栗太郡下笠村鎮坐

正一位牛頭大明神三座

同祇園也

當社雖不載式文今記之一日赴此地之節

奉拜神殿者式法嚴然更非田舍之法也利生

於今又盛也神祇職正春之鎮神靈印並年中神供

調進日記神事出仕瑞驗等記錄于社中存焉

佐々木 延喜式神名帳云近江國蒲生郡

沙々貴神社 少彥名命

彥根 近江蒲生郡鎮坐

案神名帳頭書曰人皇十五代神功皇后御宇武內宿禰勸請之一

長田 延喜式神名帳云攝津國八郡郡

長田神社

案神名帳首書云事代主命也神功皇后祭之

生玉 攝津國大坂鎮座

生玉神社一座

社家者流云當社明神者當昔天孫降臨之時三十二座神被奉供奉也彼中天生玉神此也云々

大荒 播州鎮坐

大荒靈社

案風姿花傳抄云秦川勝靈社也本朝人代申樂祖神也又製三十六番面而爲舞戲等此神始也云々文段審彼書也撮其要領以書之其餘於花傳可求焉

鹽竈

鹽竈明神

或曰猿田彥化神歟

出雲路道祖神 山城鎮坐

傳聞道祖神者幸神也古老語予曰今京極西一條

上有幸神町也此出雲路道祖神鎮坐地也今指上御靈末社之義難心得云々蓋道祖幸神皆猿田彥神也

關明神 近江相坂鎮坐

關大明神

蟬丸靈社也

諸羽 城東山階鎮坐

諸羽大明神

案此神不分明也流諺蟬丸之姉靈社也云々又號四宮者山階十八鄉內有二三宮而當社第四故號四宮也又案古諸羽字作兩羽然則是兒屋爾太玉命乎蓋爲左右扶翼神之故也又案對州上縣郡有諸羽姬神也恐當社此神乎不知博雅君子改之爲示幼童舉數說耳

竹生嶋 案延喜式神名帳近江國淺井郡

都久夫須麻神社

豐葦原本紀云市杵島姬或說云大宇賀姬

河上 延喜式神名帳云肥前國佐嘉郡

與止日女神社

淀姬者八幡叔母也

上者一矣競馬神事累代賀茂務之尙見舊記也
亡智所_レ言敢非_レ可_レ執哉

藤杜 山城國鎮坐

藤杜神社

崇道盡敬天皇之廟也

御香宮 山城國鎮坐

御香宮

神功皇后廟也

志賀 延喜式神名帳云筑前國糟屋郡

志賀海神社三座

底津少童命 中津少童命 表津少童命

御靈 山城國鎮坐

御靈八所

吉備靈 崇道天皇 伊豫親王

藤原大夫人 橘逸勢 文屋宮田丸 藤原廣嗣

火雷天神

案神祇正宗云朱雀院御宇天慶二年勸請

清瀧 山城國醍醐鎮坐

清瀧權現

案神系圖註素盞雄

布刈 長門國赤目關鎮坐

布刈太明神

彦火火出見命也 神社考

戶隱 信濃國鎮坐

戶隱神社

手力雄命也

清水地主

大己貴命也 素盞烏子

右羅氏之說也

岩本

橋本 山城國賀茂鎮坐

案古來流傳云業平實方之靈社也云々誠此兩社賀茂社官祕不_レ明宜哉一條口決也傳聞業平實方二士信_二此社_一而常奉_レ祈_二歌業_一也故爲_二業平實方_一也吁此神社非_二傳授_一則更可_レ難也

籠守 大和國吉野鎮坐

籠守大明神

案一宮記云住吉一體也

高御魂 延喜式神名帳云大和國添上郡

宇奈太理坐高御魂神社

神祇正宗云猿田彥也

三上 延喜式神名帳云近江國野洲郡

三上神社 口傳

正宗云伊弉諾云々

案兼右云尙有_二口決_一也故以_二祕說_一不_レ載焉

富士 延喜式神名帳云駿河國富士郡

淺間神社

舊記云木花開耶姬山祇女

赤山 近江西坂本鎮坐

赤山神社

正宗三十番神註云素盞烏尊爲_二求法_一慈覺建_レ之

云々

新羅 近江鎮坐

新羅神社

五十猛命也 素盞子或曰素盞烏

遠布 延喜式神名帳云若狹國遠敷郡

若狹比古神社二座

一宮記云上社彥火火出見命下社豐玉姬

國玉 延喜式神名帳云尾張國中嶋郡

大國玉神社

一宮記云大己貴命也

足輕 相模鎮坐

足輕靈社

大和本紀云昔狩人也離_二寵妻_一有_二悲傷_一遂死爲

_レ神云々又夫以_二妻鏡_一尙爲_レ憂捨_二足輕山_一也以_二其

鏡_一爲_二足輕神_一云々

今宮 山城國鎮坐

今宮靈社

一條院御宇立_二神社_一于_レ時藤原長能詠_二和歌_一曰

白妙能豐御幣乎取持豆伊波比曾曾武留牟羅佐幾乃

野仁

案頃今宮神輿前仁以_レ錦而包_二數尺札_一書_二其上_一曰

紫野今宮大神宮云々傳聞神位各有_二高下_一也皇太

神宮爲_レ上大神宮次_レ之大明神又次_レ之明神又其

次也然則非_二正統_一又難_レ號哉乎何世何歲有_二勅

許_二而賜_一宮號_二耶更難_一心得_二耳或又語_一不_レ曾云五

月五日競馬今宮神事也別雷社當社之未社也依今

送_二賀茂_一蓋有_二此旨_一乎不_レ曾應曰夫別雷社國史

等所_レ載尤重普天社三千餘座中伊州太神山州賀

茂兩社誠難_レ下_レ手之靈宮也恐於_二吾國_一無_二於_一此

伏消除_二也云々
松浦 肥前鎮坐

神功皇后 神社考

高良 延喜式神名帳云筑後國三井郡

高良玉垂命神社

案舊記云高良大神者武内宿禰也云々此說非也尙

可考古史也不肯非過論耳

玉津島 紀伊國鎮坐

玉津島社

衣通姬也 允恭帝后

蟻通

蟻通社

羅山云昔未詳何時世也唐將擊我國試贈七
曲玉環上下內通且告以繩貫此玉衆人不知所
爲子時有中將某取蟻繫細系其腰以密
塗環口而入蟻蟻聞蜜香遂得通入而出於
是以其系所貫玉環還于唐唐人驚曰日本國
人其賢哉遂不肯攻哉○哉字誤恐其中將進至大臣
位死而爲神云々

橋姬

宇治橋姬社

姬太神居宇治橋下故號橋姬云々

足羽 延喜式神名帳云越前國足羽郡

足羽神社

繼體天皇靈社也

葛城 大和國鎮坐

一言主神社

手力雄命也

金峰 延喜式神名帳云大和國吉野郡

金峯神社 今號藏主權現

安閑天皇靈社也

愛宕 山城鎮坐

愛宕神社

或說云伊弉冊尊也拾遺軼遇突智下云疑愛宕神乎
案爲主火神勿論也軼遇突智神之義符合乎又
稱伊弉冊有故哉倩案愛宕神爲地藏以禁魚
味並忌葷菜更難心得也近來佛法流中華
之後以地藏爲愛宕也吁全志人又以正焉

白鬚 近江鎮坐

白鬚神社

吉備武彥命也 孝靈帝三世

阿蘇 延喜式神名帳云肥後國阿蘇郡

健磐龍神社

此神古來有口傳之旨或人語不肖也決有與旨一哉

熱田 延喜式神名帳云尾張國愛智郡

熱田神社

和國軍記云日本武尊所佩草薙劍是今在尾張年

魚市郡熱田社

白鳥 勢州鎮座

白鳥神社

日本武尊也

案軍記日本武傳云

尊逮于能褒野而痛甚則以所俘蝦夷等獻於神宮因遣吉備武彥奏於天皇曰臣受命天朝遠征東夷被神恩賴皇威而叛者伏罪荒神自調是以卷甲戢矛凱旋還冀曷日曷時復命天朝然天命忽至隙驪難停是以獨臥曠野無誰語豈惜身亡唯愁不面既而崩于能褒野云々于時日本武尊化白鳥從陵出指倭國飛

云々

膽吹 延喜式神名帳云近江國栗太郡

伊布貴神社

八岐蛇所變也 又別有口傳

案軍記作五十葺也

氣比 延喜式神名帳云越前國角鹿郡

氣比神社

一宮記云人皇十四代仲哀帝也云々

香椎 筑前鎮坐

借飯神社

舊記云香椎宮者神功皇后宿禰大臣在此宮謀

伐新羅云々雖有數說又本據未慥也故略焉

宇瀨 筑前鎮坐

宇美神社

譽田天皇產處也 神社考

宮崎 延喜式神名帳云筑前國那珂郡

八幡大菩薩宮崎宮一座

應神天皇也

案二十二社註式云書于新羅國降伏之由而置吾座下石柱乎立天宮殿向新羅造自然可降

案神祇正宗云此神爲三社稷神而爲宗廟之後見一
以守護朝家也云々 又以石作柱者石磨乃際

尙神明在也止神誓見正宗也

香取 延喜式神名帳云下總國香取郡

香取神宮

一宮記云齋主命也齋主者經津主別稱也

三島 延喜式神名帳云伊豆國賀茂郡

伊豆三島神社

大山祇神也

生田 延喜式神名帳云攝津國八部郡

生田神社

稚産靈命也 天照太神妹

諏訪 延喜式神名帳云信濃國諏訪郡

南方刀美神社

健御名方神也 大己貴子

五條天神 西洞院五條松原

少彥名神社 高皇產靈子

社司家有少彥名記錄而詳也於此所可尋焉

案少彥名命者天下經營神宮本朝醫家祖也吾國

業醫術者不可不敬也今來古往醫士崇敬藥

師者何也吾國冠醫者無先於少彥名耳

南宮 延喜式神名帳云美濃國不破郡

仲山金山彥神 伊弉冊子

宗像 延喜式神名帳云筑前國宗像郡

宗像神社

田心姬神 天照太神與素戔所誓子也

宇佐 豐前國宇佐郡

宇佐神社

湍津姬也

二十二社註式云人皇四十五代聖武帝神龜四年庚

申就此山造神宮因名曰廣幡八幡大神宮

云々

嚴島 延喜式神名帳云安藝國佐伯郡

伊都伎島神社

市杵島姬也

比賣語曾 延喜式神名帳云攝津國東生郡

比賣許曾神社

下照姬也

吉備 延喜式神名帳云備中國賀夜郡

吉備津彥神社

和多都美神社

對馬上縣郡

右以「宮記」而書之雖有「異說」又不難焉

雜社

熊野 延喜式神名帳云紀伊國牟婁郡

熊野速玉神社

速玉男 事解男 伊弉冊

多賀 延喜式神名帳云江州犬上郡

多何神社

伊弉諾尊

白山 延喜式神名帳云加賀國石川郡

白山比咩神社

伊弉冊尊 菊理姬

大社 延喜式神名帳云出雲國出雲郡

杵築大社

大己貴命 素盞烏

案舉「世皆云素盞烏就「根國」之故此國無「垂跡」也殊不「知素盞烏神者萬民可「崇敬」第一神也無「此神」則誰敢爲「安堵」之思「乎以下就「根國」之句而「又勿」泥焉

日前 延喜式神名帳云紀伊國名草郡

日前神社

實基本紀云石凝姥神鑄鏡也初度所鑄不「合」神之意「也紀伊國日前之神是也云々」葦原本紀等說如「此」今此外雖有「本緣」口決之條不「註焉

太玉 延喜式神名帳云大和國高市郡

太玉神社

齋部祖神也又天孫降臨時三十二神爲「從神」也太玉神其一也

高市 延喜式神名帳云大和國高市郡

鴨事代主神社

事代主神者素盞烏之孫也

靜社 延喜式神名帳云常陸國久慈郡

靜神社

手力雄神也

思兼神子也天神忠功神尙分「明神書中」也

木幡 延喜式神名帳云山城國宇治郡

許波多神社

天照太神子吾勝尊之降跡也

鹿島 延喜式神名帳云常陸國鹿島郡

鹿島神宮

二荒山神社

下野河內郡

吉備津明神

備中賀夜郡

都都古和氣神社

陸奥白河郡

伊都伎島神社

安藝佐伯郡

大物忌神社

出羽飽海郡

玉祖神社

周防佐波郡

遠敷大明神

若狹遠敷郡

住吉神社

長門豐浦郡

氣比大明神

越前敦賀郡

日前神社

紀伊名艸郡

白山比咩神

加賀石川郡

伊弉諾神社

淡路津名郡

氣多大明神

能登羽咋郡

大瀧彥神社

阿波板野郡

氣多大明神

越中礪波郡

田村社

讃岐香川郡

伊夜日子神社

越後蒲原郡

大山祇神社

伊與越智郡

渡津神社

佐度羽茂郡

都佐神社

土佐土佐郡

出雲神社

丹波桑田郡

宮崎神社

筑前那珂郡

籠守神社

丹後與謝郡

高良玉垂神社

筑後三井郡

出石神社

但馬朝來郡

宇佐宮

豐前宇佐郡

宇倍神社

因幡法美郡

西塞多神社

豐後大分郡

倭文神社

伯耆川村郡

淀比咩神社

肥前佐嘉郡

杵築神社

出雲出雲郡

阿蘇神社

肥後阿蘇郡

物部神社

石見安濃郡

都農神社

日向兒湯郡

由良姬神社

隱伎智夫郡

鹿兒島神社

大隅桑原郡

伊和大明神

播磨安粟郡

和多都美神社

薩摩穎娃郡

中山神社

美作苦田郡

天手長男神社

壹伎石田郡

野本地堂_二也何社官等不_レ正_レ之耶於_レ不_レ正則
潤_二色吾國之耻_一者也

丹生 延喜式神名帳云大和國吉野郡

丹生川上神社

岡象女神一座 伊非諸子

人皇四十代天武帝白鳳四年遷座云々

貴布禰 延喜式神名帳云山城國愛宕郡

貴布禰神社 初作_二木船_一也後依_二瑞驗_一而改_二貴布稱_一

閼麗神 伊非諸子

案 奧御前 船宮等 口傳

抑貴布禰社者累代爲_二賀茂末社_一也何者儀同三司

二十二社次第云貴布禰者賀茂之攝社也蓋攝者兼

也宜哉此末社也又至_レ今賀茂有_二禰宜等職_一也於_二

賀茂_二可_レ尋焉

豐葦原一宮御事

賀茂下上大明神

三輪大明神

平岡大明神

大鳥大明神

住吉大明神

山城愛宕郡

大和城上郡

河內河內郡

和泉大鳥郡

攝州住吉郡

敢國大明神

都波岐大明神

伊射波大明神

大神社

砥鹿大明神

己等乃麻知神社

淺間大明神

三島大明神

淺間大明神

寒川神社

氷川神社

洲崎大明神

玉前神社

香取神社

鹿島神社

建部神社

南宮神社

水無神社

南方刀美神社

拔鋒大明神

伊賀阿拜郡

伊勢河曲郡

志摩答志郡

尾張中島郡

參河寶飯郡

遠江佐野郡

駿河富士郡

伊豆賀茂郡

甲斐八代郡

相模高座郡

武藏足立郡

安房安房郡

上總埴生郡

下總香取郡

常陸鹿島郡

近江栗太郡

美濃不破郡

飛驒大野郡

信濃諏訪郡

上野甘樂郡

公^{人皇十四}元正帝養老元年入唐而其後^{人皇十五}聖武御

宇天平五年癸酉飯朝之日留^{此所也}于^時山中

有^{白和幣}而時々放^{光也}吉備怪以登^{山道遙}

一樹下^{者老翁現而語}吉備云吾是素盞烏命也

爲^{諸人守護}五穀能成^{從出雲來}往此峰^{數年}

汝告^{帝以可下立}祠而崇敬^也吉備驚以下^{山發}

船赴^{京師}速攀^{玉階}拜^{龍顏}而後告^{此旨}

分帝遂以^{綸旨}下^{吉備}云々其翌年甲戌再建^神

殿自^{奉崇敬}以來諸人爲^{群每傾頭}悉蒙^恩

賴^也其白和幣立處號^{白幣峯}而建^{吉備靈社}

于^{今存也}又御本殿後有^{九穴}而一穴經八寸許

傳云九部神各鎮坐^{云々}九部者^{社祕說也}故令^省

略^{焉誠傳}隨一神法^{而遂不陷}月氏教法^者

此吾國神忠不^過之者乎有^思正統^者誰可^{不仰哉}

又天王^{人皇卅七}大化元年逢^{法道}之事今不^{載也}

見^{三元亨釋書第十六}矣

又牛頭號並冠者殿九部神於^{其家}而可^{尋焉}

北野^{式外}山城國葛野郡西京

天滿自在天神三座

東 中將殿

中 菅丞相

西 吉祥女

人皇六十二代村上帝天曆元年六月九日遷坐云々

按天滿自在天神者天穗日命後裔而本朝文道之大

祖也至^{今蒼生誇詩賦}兮^{和歌}之輩無^不

仰^{也靈驗赫赫照}正直之頭^{兮惜哉}宣者忘^其

本^{以務其末了}之故餘光徒埋而遂不^{見誠慨痛}

之甚哉

宮寺說

今寶札上令^蒙宮寺二字^{以爲面目}也恐近來

作意乎獨非^{北野耳}詰^{此意}則皆云借^{某寺地}

也可^{歎可悲哉}夫我國從^{常立御中主}已來神系

正統之神國也然佛何豈先^{國常立}而主^{此國}乎

是却云^侵神國^{則佳也}何有^{于借}佛地^{之理}

耶 又嘗神學^{佛法}者此爲^試自他廣窄優劣

也嘗非^貴佛意^{也何者}於^{筑紫宮}以^{正一位}自

在號^{爲足也}若貴^{佛則何望}大菩薩寺號^{耶蓋}

今以^{學佛法}而爲^{據或爲}普賢^{或爲觀音}也

依^{斯南門外東向觀音堂}爲^{奧院}並守符上書^北

神樂岡神社

當社地主也於此所八色雷神勸請之由古來卜部家流傳也此外瀧澤日降坂如意山等之數條今省略焉蓋於某家以可傳授也不肯非所能及也

廣田延喜式神名帳云攝津國武庫郡廣田神社

天照太神荒魂云々

又五座說

一殿

住吉大明神

二殿

廣田大明神

三殿

八幡大神宮

四殿

南宮

五殿

八祖神

右說中不顯本緣者蓋似未盡美者乎雖然百一代後小松御宇伯三位資忠公深歎本緣之正說而朝求夕尋以雖窮髓腦分尙不出臆中故今亦不_レ明_二註記_一也

蛭兒夷殿

世流布以爲混同也蛭兒者天照太神兄弟載_二方冊_一而分明也夷殿說拾遺云口授之一條也云々又案

今人家以_二大黒_一而配_二當于此神_一之義今古不_二分明_一也蓋一箇口傳故耳尙待博達之師可責焉

二十二社註式云垂跡時代無正記云々又三十番神註云人皇十五代神功皇后二年壬午歲以_二山背根子之女葉山姬_一祭之云々

今存_二兩說_一也覽者可_二研窮_一矣

祇園式外山城國愛宕郡八坂鄉

祇園天王三座

西稻田姬

號_二少將井_一

註見子神祇正宗

中素盞烏

號_二大政所_一

東龍王女

號_二今御前_一

人皇五十六代清和帝貞觀十八年移_二八坂鄉_一云々

今案此神社中美御前惣光社等古來面授云々並感

神院號之事一社之深祕也止愚昧不_レ及之甚也

廣峯天王播州飾東鎮座

三社

二十二社之外也然爲祇園本社之間入此所也

二十二社註式云牛頭初垂跡播州廣峯陽成院御宇移_二北白河東光寺傍_一貞觀年中移_二八坂鄉_一云々山門慈惠大師大延二年記云蓋素盞烏尊在播州號_二廣峰_一當_二陽成御宇_一來_二京師_一云々社家者流云吉備

二十二社記云神功皇后征三韓之時顯坐攝州云々

日吉 延喜式神名帳云近江國滋賀郡

日吉神社

大宮

大物主神

二宮

國常立

聖眞子

八幡

八王子

國狹槌

客人

菊理姬

十禪師

宇賀姬

三宮

豐樹尊

右註解二十二社註出焉此外以天神七代而分

配之說雖行世今不貧之家無博識涉獵之

備也今以遮眼之書而記之撰其是者可

隨矣

二十一社之說

大行事

早尾

下八王子

王子宮

聖女

氣比

小禪師

中七社

惡王子

新行事

石瀧

劔宮

牛御子

若宮

護因

下七社

右社家之註進如_レ此今不_レ記_二本緣者蓋重_二神社_一故也

當社鎮坐年記不_二分明_一兮或云人皇卅九代天智帝御宇鎮坐

梅宮 延喜式神名帳云山城國葛野郡

梅宮坐神四座 口傳

酒解神

大若子神

小若子神

酒解子神

二十二社註式云鎮坐不_二分明_一矣

案此神本緣或爲_二諸兄靈_一或爲_二檀林_一又傍爲_二釋氏_一也未_レ知_二是非_一也尙恐非_二傳授_一則誰敢知_レ之哉

吉田

式外 山城國愛宕郡

四座 同春日

御堂關白御書曰奈良京時春日社長岡京之時大原

野平安城今吉田占_二帝都之咫尺_一有_二神祠之鎮護_一

云々

當社鎮坐不_二分明_一

或云人皇五十六代清和帝貞觀年中鎮坐中納言山陰

卿始勸請云々

此說爲虛誑一則於某社可尋焉獨悲道廢而非舉惡矣

春日 延喜式神名帳云大和國添上郡

春日祭神四座

一殿 武雷神

二殿 齋主神

三殿 天兒屋命

四殿 比咩大神

人皇四十八代稱德帝神護景雲二年正月九日大和國

添上郡三笠山垂跡

大原野 式外 山城國乙訓郡

四座同右

舊記云仁壽元年二月二日依太皇太后御祈山城國

葛野郡大原野仁宮柱廣知立春冬乃御祭如賜

大神 延喜式神名帳云大和國城上郡

大神大物主神社 素盞子

兼敦云案神代鎮坐勿論也

石上 延喜式神名帳云大和國山邊郡

石上坐布留御魂神社 口傳

第十一代垂仁帝四十九年十月作劔一千口藏

石上神宮以斷蛇劔爲神體今所作劔奉副也

大和 延喜式神名帳云大和國山邊郡

大和坐大國魂神社三座

大己貴神

御年神

大國魂神

人皇十代崇神帝六年鎮坐

廣瀨 延喜式神名帳云大和國廣瀨郡

和加宇賀乃賣命神社

龍田 延喜式神名帳云大和國平群郡

龍田坐天御柱國御柱神二座

口傳或云級長戶邊命

住吉 延喜式神名帳云攝津國住吉郡

住吉神社四座

底筒男 中筒男

表筒男 神功皇后

又社家說云

天照太神 宇佐姬

底筒男中筒男 神功皇后

傳授並客人地主等令三省略也

名稻荷之說

案一書曰弘法東寺門前逢稻荷稻老翁大師以爲東寺鎮守以其稻荷稻故名稻荷云々蓋非此意也此地主荷田大明神之地置倉稻魂也依斯稻荷二字爲神號也夫此神者本朝衣食祖神蒼生安逸之靈社也何人不敬之乎何者人我堪寒凍之苦飢餓之患永退者皆此神恩也常雖天子諸侯又以不下筋之前祭字賀姬也古今通例矣嗚乍種神明之餘光却沉夷狄之教法而摘初食號生飯而餉佛祖也此何惑耶夫爲人子厚孝於己父母爲人臣則盡力於吾君則人倫之達道也棄己母而孝他母兮罔己君以忠他君者爲忠孝乎此天下大賊也今世人何異之棄吾國神法以從子夷狄之法也

眞如堂稻荷說

洛北今出川邊有寺而號眞如堂也此寺庭有二一字中安置辨才天跨白狐之像而名稻荷以每歲二月初午日男女尊卑爲群也寺僧皆云紀伊郡稻荷神體數十年已往爲質物送此寺兮故

今此寺守札印尊形又紀伊郡稻荷不印尊形也此豈非分明乎自街檀那之深信而以賣不實者也殊不知夫神者不測之靈號也仰之彌高欲尋之則玄妙幽遠而難到其境也何以現其形耶以有示無示以無示有示依斯萬願千誓一而不虛也喻一輪月雖洪海雖微露亦應大小無不宿也社誓又如此兮嗚神道微而學者稀也以此謾者爲貴耳其本亂而未治者何有之乎倩案眞如堂稻荷來意則往歲此寺住僧深信稻荷也越於餘社而從壯至者每日無怠倦爲社參耳依此彼僧與稻荷上人名增圓者爲飲酒之友也一日語上人云多年詣此所不止今歲漸桑榆景迫難成步行兮願汝與吒祇尼天像乎上人不及固辭以附與之僧大喜還寺名宇賀神而且夕奉神供供酒瓮爲禮法也依此奴隸密語人云我主來往稻荷神社也數年宇賀感僧志而被授尊形也今有此寺晝夜爲勤耳吁昧者不知神理之故且爲尊形而雖語人又以親炙愚夫愚婦之耳遂充不實於天下者乎一人傳虛則天下悉傳虛者蓋此謂哉若以

社領一四時一日無怠令引網奉備日別供祭也此輪旨有近江如レ此之崇敬人不レ知之偏爲二盲者守神一堪二大息一哉

○類聚國史云八百萬神其餘不レ量雖レ無何勝劣已別雷皇太明神爲二帝都鎮守一云々

○上宮太子馬腦記云凡帝都守護神明何雖不レ疎而賀茂明神之守護深重也全文略之

御祖大神宮

山州一宮勿論也天子崇敬尙不レ異上社也尙三家社小鳥比良木二言三言社等別而口決之由社家者流言也竊察古昔天子御崇敬越於餘社也依斯諸人又常敬之惜哉中神道徵學者稀也邈近有學者一則舉手搖頭而嘲之嗚呼古人云入鮑魚肆而久忘其臭之徒乎何疎吾國道而馴入國法耶一日居吾國則可隨其道也若居吾國而却貴月氏教法則是罔君罔父之徒哉

松尾延喜式神名帳云山城國葛野郡

松尾神社二座松尾二字有一社神祕之由

大山咋神一座口傳有之

胷形中津大神一座

人皇四十二代文武帝大寶元年秦都理始建神殿云々

平野延喜式神名帳云山城國葛野郡

平野神四座

今木神

源氏神

久度社

平氏神

古開社

高階氏神

比咩神

大江氏神

縣社

菅氏神

延喜格云桓武帝延曆年中造社

稻荷延喜式神名帳云山城國紀伊郡

稻荷神社三座

山城風土記三座說又別也

下社

大宮姬

中社三座

倉稻魂

上社

大田命

人皇四十三元年明天皇和銅四年鎮座

今所傳稱五座

田中社

但思鳥理今有

大己貴命

四大神

神功皇后

神祇拾遺云弘長六年比爲五座云々此外中社三座

○第六十九代後朱雀院長曆三年卯八月十六日被奉_ニ官幣_ニ之加_ニ日吉_ニ爲_ニ二十二社_ニ日吉社可_レ爲_ニ住吉_ニ之次梅宮上_ニ之由宣下

伊勢 延喜式神名帳云伊勢國度遇郡

太神宮三座

天照太神一座

相殿神二座<sub>左神力雄
右萬幡姬</sub>

第十一代垂仁帝御宇二十六年巳十月遷_ニ度遇宮_ニ豐

受太神宮一座

御食津神

相殿三座<sub>左瓊瓊杵尊
右兒屋命 太玉命</sub>

第二十二代雄略帝二十二年戊午七月從_ニ與佐郡魚井

原_ニ遷_ニ伊勢國度會郡山田原_ニ云_ニ內宮鎮坐之後四百

八十年餘々

竊案_ニ鎮座本紀並神祇百家之書誠伊勢兩太神事

源遠末潜而更一朝一夕難_レ盡也內外二宮之內或

御倉或御舟或多賀宮阿古根等傳授雖_レ有_レ之更

難_ニ註記_ニ也尙於_ニ某所_ニ可_レ求焉

石清水 式外 山城國久世郡

八幡大神宮三座

東 玉依姬

中 八幡宮

西 神功皇后

第五十六代清和帝貞觀元年八月二十三日遷_ニ雄德

山_ニ云

案以_ニ此神宮_ニ爲_ニ天下第二宗廟_ニ分玉依姬置_ニ東

殿_ニ等蓋有_ニ深旨_ニ哉雖_レ然非_ニ不肖_ニ所_レ及也故今省

略焉

賀茂 延喜式神名帳曰山城國愛宕郡

賀茂別雷皇太神宮一座

鎮座年紀更難_レ明也

案本緣難_レ註也自_レ昔終不_レ下_ニ手分何者神祇正宗

云社家深祕無_ニ申旨_ニ故難_ニ露顯_ニ云々寔到_ニ今輕易

不_ニ許宥_ニ也只雖_ニ知者之姪孫_ニ又非_ニ器則撰_ニ他人

俊秀_ニ而附與焉悉非_レ知_ニ之云々就_ニ中八社攝殿並

末社等云々就_ニ中八社攝殿並末社等之義同事也

尋_ニ夫賀茂別雷皇太神宮_ニ者山州之一宮也加之天

下安泰神社蒼生荷恩之靈宮也上自_ニ天子大樹_ニ下

至_ニ陋巷匹夫_ニ何不_レ敬_ニ之乎昔者天子每度奉_ニ幣

並以_ニ皇女_ニ而被_レ置_ニ齋院_ニ又江州安曇河爲_ニ別雷

神社便覽序

夫國神國也道神道也敎神敎也故稟_二生於吾邦_一者無_レ不_レ依焉無_レ不_レ仰焉因_レ斯嘗羅山子博索旁搜而爲_二書三卷_一名_二神社考_一予偶閱_レ之涉_二獵諸氏百家之書_一而無_二不_レ到者_一惜哉徒煩_二其多_一不_レ窮_二其本源_一乎吾友有_二白井氏_一家世業_レ醫而爲_二曲直瀨氏之餘流_一也家業之暇汲_レ汲於此道_一焉故馳_二足於大小神社_一就_二其所_一聞_二某說_一也遂輯_二錄之_一傍附_二私見_一號曰_二神社便覽_一蓋欲_二嘉_二惠後學_一便_レ覽_二乎急務_一也縮_レ冊爲_レ小者則欲_二下至_二凡民之徒_一各令_レ蒙_二其澤_一者乎予於是感_二于觥_一排浮屠_一登_二崇神社_一之志_上而忘_二固陋_一爲_レ之序

時
寛文四年歲在甲辰

稻荷上社祝秦公建

神社便覽

二十二社

人皇六十二代村上天皇治十九年康保二_乙年霖雨經_レ月九天覆_レ雲依_レ之閏八月二十一日奉_二幣於十六社_一止_レ雨

伊勢 石清水 賀茂_上松尾 平野 稻荷 春日
大原野 大神 石上 大和 廣瀨 龍田 住吉
丹生 木船

○第六十六代一條院正曆二年_辛炎天送_レ日萬物變_レ色依_レ之六月二十四日祈雨奉幣時加_二吉田廣田北野三社_一被_レ奉_二官幣_一爲_二十九社_一吉田廣田北野次第可_レ爲_二住吉次丹生之上_一宣_下

○同五年二月十七日祈年穀時加_二于梅宮_一被_二奉幣_一爲_二二十社_一梅宮專可_レ爲_二吉田之上住吉之次_一由宣_下

○第六十六代一條院長德二年_乙二月二十五日被_レ奉_二臨時官幣_一之日加_二祇園_一爲_二二十一社_一

豫內五市縣圖

振古神社之傳記行于世者多偏集大成
而以號本朝諸社一覽惟欲便童蒙庶幾
崇吾日東之神祇且辨吾桑域之國風也
因跋於卷尾云

貞享乙丑初秋

坂内氏直賴謹撰

ラマレテハ見參ニモ參ラヌゾトイフニサキ、サル
 コトナシトテキタリケレバ國司ムヅガリテ國司モコ
 クシニコソヨレ我ニアヒテカウハイフゾトテイヤミ
 思ヒテ知ラン所ドモ點ゼヨナドイフ時ニ人アリテ大
 宮司ニイフ誠ニモ國司ト申スニカ、ル人オハス見參
 ニマイラセ玉ヘトイヒケレバサラバト云テ衣冠ニ絹
 イダシテ供ノ者三十人計グシテ國司ノガリムカヒヌ
 國司出アヒ人ドモヲヨビテキヤツタシカニメシコメ
 テ勸當セヨ神官トイハンカラニ國中ニハラマレテ如
 何ニ奇恠ヲバイタストテメシタテ、ユフ程ニコメテ
 カンダウス其時大宮司心ウキコトニ候御神ハオハシ
 マサヌカ下薦ノ無禮ヲイタスダニ立所ニ罰セサセオ
 ハシマスニ大宮司ヲカクセサセテ御覽ズルハトナ
 ク、クドキテマドロミタル夢ニ熱田ノ仰ラル、ヤ
 ウ此コトニヲキテハ吾チカラ及バヌ也其故ハ僧アリ
 法花經ヲ千部ヨミテ吾ニ法樂セントセシニ百餘部ハ
 ヨミ奉リタリキ國ノ者ドモタウトガリテ此僧ニ歸依
 シアヒタリシヲ汝ムヅカシガリテ其僧ヲオヒハラヒ
 テキシソレニ此僧惡心ヲオコシテ我此國ノ守ニ成テ此
 コタヘヲセントテ生レ來テ今國司ニ成テゲレバ力ヲ

ヨバズ其先生ノ僧ヲ俊綱トイヒシニ此國司モ俊綱ト
 イフ也ト夢ニ仰アリケリ 宇治拾遺
 島明神
 基隆朝臣周防國ヲ知ケル比保安三年十月ニ語ケルハ
 彼國ニ島明神トテオハシマス神主ドモアラソヒノ事
 有テ論ジケル者有トテ神田ヲ蒔トラントシケレバ實
 前ヨリ蛇三百バカリ出タリ其中ニツノアル二ツアリ
 ケリシバシアリテ入ヌ其後猶蒔ントシケレバ鳥數萬
 飛來テ神田ノイネノ穗ヲクヒヌキテ皆神殿ノ上ニフ
 キケリ不思議ノコトナリ 古今著聞集(ノ心)

諸社一覽第八大尾

ナラバ誰カ尊神ヲ仰ギ和光ノチカヒヲタノマンヤト
深クウタガヒテ此事ヲ申止ント思レケル夢ニ大明神
示現シテノ玉ハク方便ノ殺生ハ芥ノ六度ニコエ愛見
ノ大悲ハ達多ガ五逆ニモスギタリ汝イマダ神慮ノ源
底ヲ知ズ涅槃經ヲ見ザルユヘニ此見オコル也トテ經
ヲ取出テミセ玉フ其文ニ我未來魚鳥等禽獸成飢衆生
被レ食以ニ其緣一令得脫一アル趣也意ヲトル夢サタテ
感涙ヲサエガタク卽チハン經ヲ披見ズルニ文分明也

三國傳記
吉野

三輪上人トテ貴人有リ或時吉野勝手明神エ百日參詣
アルニ百日ニミツル日吉野川ノハタニ死人ノアリケ
レバ穢ヲハバカリテ參詣ノ諸人トヲキ道ヲメグリテ
參レリ上人此ヲ見テ彼死ガイヲトリカクシ參詣者ノ
煩ナキヤウニナセリ上人ハ彼ケガレニ依テ參詣ニア
タハズ明神ノ御方ヲ伏拜シテソレヨリ下向アリケレ
バ足ナヘテ行歩叶ハズサラバ明神ノ方エ參テミント
歩ミ玉ヘバヤスク歩マレケリ又下向シ玉ヘバ足ナヘ
ケリサレバ上エ參ラント思ヒ山マデ參玉ケルニ相違
ナシサレドモ恐懼テ瑞籬ノ外ニ畏キ玉ヒケルニ明神
童子ニ託宣アリテ上人ヲ見テアレニ侍ル法師近ク參

レト仰ラレテ此後今一度見參ニ入テヨロコビ申サン
トテ神アガリ玉ヘリ 同上

伊豆三島ノ社ニ鷄多ク有ケル中ニ目ノツブレタル有
イツモ暗ケレバトキナラズ時ヲ作り朝夕ヲモ辨ヘズ
風霜ニ苦シミ食ニトボシ、或修行者此ヲ見テヤセヲ
トロヘ飢渴スルヲアハレミ短冊ヲ書テ鳥ノ頸ニ付ケ
レバ鳥ノ眼忽ニアキケリ皆人アヤシミテコレヲ見レ
バ一首ノ歌ニテゾ有ケル

鷄ノ鳴音ヲ神ノ聞ナカラ心ツヨクモ日ヲ見セス哉

僅ニ三十一字ヲモテ神慮ニ達スルコト新ナリ 同上

熱田

今ハ昔伏見修理大夫ハ宇治殿ノ御子ニテオハスアマ
リ公達多クオハシケレバヤウヲカエテ橘俊遠ト云人
ノ子ニナシ申シテ藏人ニナシテ十五ニテ尾張守ニナ
シ玉ヒケリソレニ尾張ニ下テ國オコナヒケルニ其頃
熱田神イチハヤクオハシマシテ自ら笠ヲモヌガズ馬
ノハナヲムケ不禮ヲイタス者ヲバヤガテタチドコロ
ニ罰セサセオハシマシケレバ大宮司ノ威勢國司ニモ
マサリテ國ノ者ドモオチ恐タリケリソレニ此國司下
テ國ノサタドモアルニ大宮司ワレハトオモヒテキタ
ルヲ國司トガメテ如何ニ大宮司ナランカラニ國ニハ

船ヲエテ上總ノ地エ渡リ女ノ方ニ尋行ヌレバ主出テ如何シテ下リ玉ヒケルト云フ鎌倉ノ方ユカシク修行ニ出テ侍ツルガ近キ程ト承テ參テ侍トイヘバサマザマニモテナシケリ田舎ノヤウヲモ見玉ヘト留ケルマ、本ヨリ望處ニテトバマリケリトカクウカヒテ忍々女ノ方ニ通ヒケリサル程ニ男子一人イデキヌ女ノ親是ヲ聞テイカリケレバユカリ有方ニカクレキテ年月ヲ送ル程ニ唯一人ノ女ナレバツキニ親ユルシツ此僧モ形清ラニヤサシキ者ナレバ今ハ子ニヅナサメトテ許シケリカクテ此二人ノ中ニ子三人イデキヌ此子十三ノ時元服ノ爲鎌倉エ行トテサマノ具ドモ用意シテ船ニ乗テ海ヲワタルニ風ハゲシク波高キニ此子フナバタニ望ケルガアヤマチテ海エヲチケリアレノトイヘドモシヅミテ見エズ胸ヒシゲアハテサハグト思テ夢サメヌ十三年ノ間ノ事ヲツクノト思ヘバ只片時ノユメ也タトヒ本意トゲタリトモ片時ノ夢ナリヨシナシト思テヤガテ歸テ行ヒケリ和光ノ御方便成ベシ 沙石集

住吉
普式部大輔大江匡衡朝臣ノ息式部權大輔舉周重病ヲ受テタノミスクナク見エケレバ母赤染衛門住吉ニ詣

テ七日コモリテ此度タスカリガタクバ速ニ吾命ニメシカヘ玉ヘト祈リテ七日ニ滿ケル日御幣ノシデニ書ケル

カハラント祈ル命ハヲシカラテサテモワカレンコトソ悲キカクヨンデ奉ケルニ神威有ケン舉周ガ病ヨクナリヌ母下向シテ悅ナガラ此ヤウヲカタルニ舉周イミジクナゲキテ我生タリトモ母ヲウシナヒテハ何ノイサミカアラシカツハ不孝ノ身ナリト思テ住吉ニ詣テ母我ニカハリテ命ヲハリ侍テバ速ニ吾命ヲメシテ母ヲタスケ玉ヘト泣々祈申ケレバ神アハレミ玉ヒケン母子トモニコトユヘナク侍リケリ 同

延久二年八月三日上總國一宮ノ御託宣ニ懷妊ノ後スデニ三年ニ及ブ今明王ノ國ヲオサムル時ニノゾミテ若宮ヲタンジャウスト仰ラレケリ是ニ依テ海濱ヲ見ケレバ明珠一顆有ケリ彼御正體ニタガフ事ナシ不思議ノ事ナリ 同

諏訪

信濃國諏訪明神ノ祭禮ニ多クノ鹿ヲ供御ニ備奉ル也隆辨僧正コレヲ見テ神明和光ノ善巧ハ物ヲ利スルヲ以テ元トシ衆生濟度ノ方便ハ慈悲ヲ以テ始トス何ノ有生カ命ヲ惜マザラン且ハ無理ノ禮貪ヲ神納受アル

人モナキ寺ニ成ケリ僧ノ中三人新羅明神ニ參テコモ
リタルユメニ明神御戸ヲ挑ゲ玉テヨニ御心ヨゲニ見
エサセ玉ヒケレバ我寺ノ佛法マボラント御誓アルニ
イカ計御ナゲキ深カラント思フニ其御氣色ナキコト
イカニト申ケレバ誠ニイカデ歎キ思ハザランサレド
モ此コトニヨリテ眞實ノ菩提心ヲ發セル僧一人アル
コトノ悅シキ也堂塔佛經ハ財寶アラバ造ヌベシ菩提
心ヲ發ス人ハ千萬人ノ中ニモ有ガタクコソト仰ラレ
ケル 沙石集

春日

隆覺法印保延五年ニ興福寺別當ニ成タリケルヲ衆徒
用キザリケレバ隆覺怒ヲナシテ數百騎ノ軍兵ヲ發シ
テ十一月九日ニ三方ヨリ興福寺ヲウチカコミテケリ
隆覺ガ方ノ兵寺中ニ亂入ントスル間合戰ニ及テ隆覺
ガ方ノ軍兵多ク命ヲ失ヒケリ隆覺衆徒ノ首ヲ切テ御
寺ヤキウシナフベキ由下知シタリケレバニヤ隆覺ガ
兵ノ中ニ放火ノ具ヲ持タル者有リ寺ノ外ノ小家一二
宇ヤケタリケレドモ雨フリテ消シケリ合戰ノ間ニ不
思議共多カリケリ春日山ニ神光有ケルガ合戰ハテ、
見エズ或人ノ夢ニモ御寺ノ方ノ兵鹿ノ形ナリケリト
見ケリ又神主時盛ガ夢ニハ弓袋シタル兵數百人アリ

時盛問ケレバ春日大明神ノ御合戰御訪ニ藤入道ノ參
セ玉フ兵ナリト云ケル時盛驚ク程ニ隆覺ガ兵入ニケ
リ大明神ノ御ハカラヒニテ衆徒合戰理ニシケル嚴重
也ケル事也古今著聞集(ノ心)

熊野

熊野ニ盲者ノ齋燈ヲタキテ眼ノアキラカナラン事ヲ
祈ル有リケリ此ツトメ三年ニ成ケレドモシルシナカ
リケレバ權現ヲ恨マイラセテ打臥タル夢ニ汝ガ恨ル
所ソノイハレナキニアラネドモ前世ノ報ヲシルベシ
汝ハ日高川ノ魚ニテ有シナリ彼川ノ橋ヲ道者ノワタ
ルトテ南無大悲三所權現ト上下諸人トナヘケル聲ヲ
聞テ其エンニヨリテ魚鱗ノ身ヲ改テ受ガタキ人身ヲ
エタリ此齋燈ノ光ニアタル緣ヲ以テ來世ニ明眼ヲエ
テ次第ニ昇進スベキ也ト仰ケリ後懺悔シテ一期ヲ限
テ此役ヲツトメケルニ眼開ケルナリ 同(ノ心)

熊野

上總高瀧トイフ所ノ地頭熊野ニ年詣シケリ娘ヲイツ
キカシヅキテカツハ彼ガ爲トモ思テ具シテ詣ヌミメ
形ヨカリシヲ熊野ノ師ソ房ニ若僧アリ此女ヲ見テ心
ニカケ忍ガタクナリテアクガレ跡ヲシタヒテ上總エ
下ケル鎌倉スギテムツラト云フ所ニテ便船ヲ待居テ
濱ニウチ臥テヤスミケルニ打マドロミタルニ夢ニ便

幡ニ詣テ七日コモリテ祈念シケルニ或夜ニユ、シゲナル客人ノ參玉ヘリケルニ大并御對面アルヨシナリ客人某ト申僧ヤコモリテ候ト申玉ヒケレバサル事候ト答申サセ玉ヒケリ又客人ノ玉ハク件僧年來吾ヲ賴テ朝夕セメ候ツレドモ今度必出離スベキ者也若タノシミニホコリナバ如何ト思候エバヒカエ侍ル御許アルマジト申玉ヒケリ僧是ヲ聞テ客人ハタレニテ渡セ玉フト人ニ尋ケレバ春日大明神ノ御渡也ト答ケリユメ覺ケレバ今生ノ結緣モウレシク來世ノ得脫モタノモシク本寺ニ歸テ後生ノツトメヲハゲミテツキニ往生ヲ遂ヌ是事山ノ桓舜ガ稻荷ノ利生ヲカウブリシヲ日吉ノサマタゲ玉ケル様ニタガハズ 同

古田

仁安三年四月廿一日吉田祭ニテ侍ケルニ伊與守信隆

朝臣氏人ナガラ神事モセデ仁王講ヲ行ケルニ御明ノ火障子ニモエツキテ其家ヤケニケリ大炊御門室町ナリ其隣ハ民部卿光忠卿ノ家ナリケリ神事ニテ侍ケレバ火ウツラズ恐ルベキ事也 同

山王

叡山東塔南谷ニ勝陽房眞源法橋ト云人アリ或時夢ニアラズ現ニアラズシテ山王權現ノ社ニ參ル大宮ノ樓門ノ前ニテ眞源ガ師範ナリシ嚴箠阿闍梨ニアヘリ公

ハ失セ玉ヒシ人也イヅクニ御座ゾト申ケレバ嚴箠答云吾存生ノ時佛法ノ志深ク多ノ聖教ヲ學シカドモ出離生死ノ志ナク常ニ名聞利養ノ思ニテ五道輪廻業ツキズ忽惡道ニ入タルニ權現和光ノチカヒニテ當社邊ニヲカレテ御扶持アル也一度モ歩ヲ運トモガラハ貴賤ヲ論ゼズ禽獸ニイタルマデ余ノ惡道ニ入ルヲナク此奥ノ山ハ王子谷ノ邊ニ召ヲカレテ晝夜ニ加護シ玉ヒテ利生ヲ施シ佛果菩提ニ至ルマデ見ソナハシ玉フ也不審ニ思ハバ此ヲ見セントテ奥ノ山ノウシロエ伴ヒテ登レリ見レバ昔山上ニテ見馴シ人坂本ニ住セシ人幾トモナク見エタリ修因善惡ニ隨テ居所ノ尊卑アリトミエタリ誠ニ權現ノ慈悲言語道斷ノ方便也 三國傳記

新羅

三井寺ノ鎮守新羅明神ハ梁謁羅龍王ノ子ナリ智證大師渡唐ノ時大師ノ佛法ヲマモラントチカヒ玉ヒテ形ヲアラハシ彼寺ニアトヲタレ玉ヘル也圓滿院僧正明尊始メテ祭禮ヲ行ハレケル明神ヨロコバセ玉ヒテ託宣ノ和哥

古今著聞集

唐舟ニ法守ニトコシカヒハ有ケルモノヲコ、ノ泊ニ昔三井寺山門ノタメニ燒レケレバ寺僧モ山野ニ交リ

シテ還御アリケリ本ノ通成中將ノ亭エハ入セ玉ハデ
御祖母承明門院ノ土御門ノ御所エ入セ玉ヒテ其年モ
クレ同三年正月九日四條天皇十二歲禁中ニシテ崩御
アリ後堀川院ノ御方ニハ御位ニツカセ玉フベキ宮モ
オハシマサズ定テ佐渡院ノ宮タチゾ踐祚アランズラ
ントテキ、ワキタルコトノナケレドモ卿相雲客四辻
修明門院エ參ツドイケレ共天照太神ノ御ハカライニ
ヤ侍ケン同十九日ニ關東ヨリ城ノ介義景早打ニ上リ
テヒソカニ承明門院エマイリテ御位ハ阿波院ノ宮ト
定メ申侍ル也公家ニハイカバ御ハカライ侍ント申テ
ヤガテ法性寺大相國エモ申入テ下リス京中ノ上下ア
ハテサハギ今更ニ土御門女院エ我モノト參ツドフ
三月十八日御年廿三ニテ御即位アリ 同
^{北野}昔中納言道俊卿ノ子ニ世尊寺阿闍梨仁俊トテ顯密智
行ノタツトキ人オハシケル鳥羽院ニサブラヒケル女
房仁俊ハ女心アル者ノソラ聖タツルナド申ケルヲア
ザリ聞テ口惜ク思テ北野ニ參籠シテ此ハデス、ガセ
玉ヘトテ
アハレトモ神カミナラハ思ヒシレ人コン人ノ道ヲタ
ツトモトヨミタリケレバ彼女房亦キ袴バカリヲ着テ

手ニ錫杖ヲ持テ仁俊ニソラゴトイヒツケタル報イヨ
トテ院ノ御前ニ參テ舞クルヒケレバ淺猿トオボシメ
シテ北野ヨリ仁俊ヲ召出テ見セラレケレバ神慮ノア
ラタナル事ニ泪ヲナガシテ一度慈救咒ヲ讀テケレバ
女房モトノ心地ニナリニケリ院イミジク思召シテ薄
墨ト云フ御馬ヲタビテケリ 同

^{稱衛}

延長八年六月廿九日ノ夜貞崇法師勅ヲウケタマハリ
テ清涼殿ニ候シテ念佛シ侍ケルニ夜ヤウノフケテ
東ノ庇ニ大ナル人ノアユム音聞エタリ貞崇籬ヲカキ
アゲテミレバ歩ミ歸ル音シテ見エズ其後又小人ノ歩
ミクル音スヤウノ近ク成テ女ノ聲ニテ何ニヨリテ
候ゾト問ケレバ勅ヲ承テ候由ヲ答フ小人ノ云ヒケル
ハ先度汝大般若ノ御讀經ツカウマツリシニシルシ有
リキ初歩ミ來ツルモノハ邪氣也彼御經ニヨリテ足燒
損ジヌ後ノ度ノ金剛般若ノ御時ハシルシナカリキ此
由ヲ奏聞シテ大般若ノ御讀經ヲツトメヨ吾ハ是稻荷
神ナリトテ失セ玉ヒヌ 同
^{春日}興福寺ノ僧ノイマダ僧綱ナドニハ上ラザリケルガ學
生ニテハ侍レドモ最マヅシカリケレバ春日社ニ參テ
申ケレドモシルシナカリケレバ寺ノ交モ思タエテ八

降テ諸木ノ枝タハムホドナリ未申ノ方ヨリ大ナル電
光シケリ何事ニカアラント思フニ迅雷西南ヨリ東北
ヲサシテ鳴行燈モキエ屏風障子モ顛倒スルバカリ也
前代未聞ノ雷ニテ其後ハ少モナラズ然ルニ翌日ヨリ
七日ノ觸穢也其故ハ山田上久保トイフ所ニ住人アリ
テ九日ノ晩人ヲ殺ケルヲ穿鑿スルトテトカクシツ、
思ハズモ一日一夜死人ヲ家ニトバメタルニ依テノ穢
也折節雷一ツ鳴ヌルモ不思議ナリ神領ニテハ一日一
夜死人ヲ宿ニトバムルトキハ觸穢七日シテ兩太神宮
ノ朝夕ノ御饌ヲ打トメ奉テ諸國參詣人モ宮中マデハ
參ラズサテ彼死人センサクニ行タル人ハ正シク其家
エ雷オチタリト覺タリトイヘド落タル跡モナシ同上
或人物語セシハ伊勢國ノ武家ノ下人太神宮ヲ信ジテ
主人ニイトマヲモ不_レ請シテ參宮シケル間主人大ニ
イカリテ歸ルヲ待テ殺シケリ其尸ヲバ埋ケルニ其後
彼殺サレタル人立歸テ居ルヲ見テ幽靈カトオドロキ
ケレトモサニハアラズ只今太神宮ヨリ下向シタルト
イヘバアマリノ不思議サニカノ尸ヲホリ起シテ見レ
バ祓ノ大麻ニ刀疵ツキテ有ケルトナン同上
二條宰相雅經卿ハ賀茂大明神ノ利生ニテ成アガリタ

ル人也往昔世間アサマシクタエ_レシクテハカ_レシ
シキ家ナドモ持ザリケレバ花山院釣殿ニ宿シテソレ
ヨリ歩ニテフルニモテルニモ唯賀茂エ參ルヲモテツ
トメトシテケリ其比ヨミ侍ケル

世中ニ數ナラヌ身ノ友千鳥鳴コソワタレ鴨ノ川原
ニ此歌ヲ心ノ中計ニ思ツラテ世ニ散シタル事モナ
カリケルニ社司某ガ夢ニ大明神ノワレハ鳴コソワタ
レカモノ川原ニトヨミタル者ノイトヲシキ也尋ヨト
示玉ヒケリソレヨリ普ク尋ケレバ此雅經ノヨミタル
也ケリ此示現ヲキ、テイカバカリ信仰ノ心モ深カリ
ケン次第ニ成上リテ二位宰相マデ登リテ侍リ是併大
明神ノ利生也古今著聞集

八十七代後嵯峨天皇ト申ハ土御門院第三ノ皇子ナリ
父ノ帝寬喜三年ニ遠所ニテ崩御有シ後ハ御メノト大
納言通方卿ノモトニカスカナル御住居ニテワタラセ
玉ヘバ御位ノ事オボシメシモヨラズ大納言サヘ身マ
カリニケレバ仁治二年ノ冬ノ比八幡エ參ラセ玉ヒテ
御出家ノ御イトマ申サセ玉ヒケルニ曉御實殿ノ内ニ
德是北辰椿葉影再改ト鈴ノ聲ノヤウニテマサシク聞
エサセ玉ヒケレバ是コンハ示現ナラメト嬉シク思召

張參河遠江等封戸各拾烟ヲモ御寄附有リ禰宜モ一階ヲ玉ヒキ此等ノ記文分明也神明御尊崇ノ代ニハ國敵ノ冥罰ヲカウブル事疑ナキ也太神宮神異記

後花園天皇ノ御宇嘉吉三年九月廿三日ノ夜凶賊禁裏ニ亂入シテ天子ヲ犯シ奉ラントセシニ其賊足シドロニ成テ顛倒セシカバ逃ノビ玉ヒテ玉體ハ恙ナカリケリ其夜太神宮櫪飼ノ御馬厩ヲヤブリ出テカケマハリケルガ鞍ヲケルアト有テ汗カキツ、元ノ御厩ニ歸リ入ケリ此事イソギ奏聞セシニ其夜京ニハ亂有テ太神宮ノ神異ト符ヲ合セタルガ如ク也此事ハ續神皇正統記ニモ記シタリ偏ニ太神ノ御守アラタナル由也同上
壽永二年癸卯五月ノ比外宮一禰宜度會彥章神主鯉魚ノ鱗ヲ食ヌルガ傍人ニ戲云ケルハ禰宜タレドモ鹿ヲ食ナリト其夜夢中ニ神告玉ヒケルハ一禰宜トシテ禁忌ノ詞ヲワキマヘザル事甚以道ニソムク命ヲトルベシトノ玉フト見テサメテ後人ニ語テ其マ、五月廿四日四十六歳ニシテ死セリ 同上
天正十年壬午御造替遷宮ノ御用木ノタメ太神宮ノ大小工等信濃木曾山エ入ケルニ六月二日ニ河ヲヘダテテ高聲ニ云ケルハ京本能寺ニテ信長公御生害ナリ急

ギ皆々歸國仕レト大小工等ヲドロキテ速ニ歸國シケリ本能寺ニテ薨去ノ日ト木曾山ニテ河越ニ告タルト同日也太神ノ御告ナルベシ 同上

豐臣太閤ノ御時朝鮮人來朝セシニ食用ノタメトテ太神宮ニイクラモアル雞ヲ取寄玉フ事アリテ伊勢ヨリ籠ニ入テアマタ上セケルニ程ナク皆カヘシタマヒケルハ朝鮮人ノ食物ニ毛ヲムシリタル鳥狙ノ上ニテ生テ起アガリ晨ヲツクリケルニヨリ此神異ニヲドロキ玉ヒテ殘ル鳥皆返シ玉フトゾ 同上
同御時ニ太神宮領ヲ悉クオトシ玉ヒテ宮川ヨリ内ヲモ撿地シ玉フベキトテスデニ御使伊勢ノ國マデ來シニ其沙汰モナク宮川ヨリ内ハイロヒナク成スル事ハ高藏主トイフ比丘尼ノ膝ヲ枕トシテ太閤ウタ、チシ玉ヒケル夢中ニ烏帽子ニ白キ裝束着タル人來テ云吾ハ伊勢太神ノ御使也神地ヲ撿地スベキトノ事神ヲモオソレザル所爲也撿地スベクバ命ヲ取ベキトテ劔ヲ持テムチヲサ、ントスト見タリトテ大キニヲドロキ汗水ニ成玉ヒイソギ使ヲモ呼返玉ヒテ撿地ノ沙汰モヤミニケリトゾ 同上
寛永十九年壬午二月十日ノ夜イマダ半ナラザル比雪

汚穢神社 仍成ニ此祟 勅奉ニ封二千戸 三代
實錄

壹岐

陸奥。出羽。佐渡。隱岐。對馬以上四國二島
爲ニ邊要ニ 延喜式

○天手長男社 石田郡ニ在リ

祭神

天思兼神一男也 一宮記

對馬

○和多都美社 上縣郡ニ在リ

祭神

八幡宮也 一宮記

御位 貞觀十二年三月五日丁巳正五位下 國史

○御託宣 益人が直き心にあらんときはおろかな
る事なくかしこき事なくかなしみなく恨なくて春
の日ののどけきにひのひらくるがごとくあらんお
ろかといひかしこきといふはいまだ吾心にこのま
ず 同上

已上諸社畢

靈驗

太神宮相馬ノ將門ハ天慶三年庚子二月十四日下總國
ニテ平貞盛ガ箭ニ中テ馬ヨリ落タリシヲ藤原秀郷其
首ヲ取ケリ去ナガラ是ハ偏ニ伊勢太神宮ノ幽ニ誅伐
シ玉フモノ也其故ハ平將門謀叛ノ御祈ノタメ天慶三
年二月九日二所太神宮ニ種々ノ神寶物等ヲ進セラレ
公卿勅使ニハ參議從三位大伴宿禰保平祭主賴基也ケ
ルニ同月十三日ノ夜太神宮ノ正殿ノ内ニ人ノ名字ヲ
召立ラレ弓箭甲冑等ヲ被下聲シケルヲ宿直ノ番ノ
内人物忌等現ニ聞テ恐レ畏ル處ニ又二見ノ浦人男女
數十人幻ニ見ケルハ甲冑ヲ著タル人アマタ白馬ニ乗
テ海上ヨリ東ヲ指テ行ノ間浦人等云是ハ何ナル人ナ
レバ陸地ノ如ニ海上ヲ馬ニテハ行玉フゾトイヘバ太
神宮ヨリ平將門誅センタメニツカハサル、勢也トイ
フテ其マ、皆消テ見エズ浦人ヲドロキアヤシミカ、
ル奇異アリタルト申ト前夜名字ヲ召立ラレシ神異ト
符合セシカバ必定將門退治アルベシト思フニ後日ニ
キケバ二月十四日將門誅セラレシト也此事ニ依テ同
八月廿七日ニ伊勢國員辨郡ヲ太神宮ニ御寄附アリ尾

向ト云也

○都農社 兒湯郡ニ在リ 祭神 大己貴命 一

宮記

大隅

和銅元年ニ日向國ノ内四郡ヲ分テ是ヲ置ケ

リ本郡ノ名也云々

○鹿兒嶋社 桑原郡ニ在リ 正八幡ト號ス

祭神ニ説 彦火々出見尊一説

○大隅國正八幡火々出見尊也與ニ宇佐八幡ニ不同
神書抄

大隅宮神功皇后乎大御前豐玉姬南面應神帝若宮仁

德帝西向武内臣也 兼右説

欽明天皇五年甲子顯座 社記

○神託 益人が心に誠あれば萬物皆したがふ益人が心に誠なきときは萬物ひとつとして随ふ事なし

誠といふは天也地也神明なるがゆへ也 倭論語

○高千穂社 垂跡神並鎮座記未考

昔豊後國或片山里ニ女有或人ノ獨女也男何方共ナク夜々通フ程ニ年月モ經ケレバ直ナラズ成リヌ母恠テ通フ者ハ何者ゾト問ケレバ來ルヲバミレ共歸

ヲバ不レ知ト云フサヲ歸シ時効ヲ付テ見ヨト云ケレバ朝歸リスル時男ノ狩衣ノ頸髮ニ針ヲサシ賤ノ緒環ト云物ヲ付テ角ト親ニ告タレバ人四五十具シテ糸ノ注ヲ尋行ニ豊後日向ノ境優婆嶽ノ下大ナル岩屋ノ内ニ入タリ女岩屋ノ口ニイテ聞ケバ大ナル聲シテ喚ケル女云ケルハ御姿ヲ見進セン爲ワラハ是マデ參テ侍トイヘバ内ヨリ云ク我ハ人ノ姿ニ非ズ汝我姿ヲ見バ肝魂モ身ニ添マジキゾ胎メル子ハ男子ナルベシ弓矢打物取テハ九州二島ニ肩ヲ雙ル者有マジキゾト云フ女重テ縱如何ナル姿ニテモオハセヨ日比ノ好ミニ互ノ姿ヲ今一度見モシ見エラレント云ケレバサラバトテ臥長五六尺跡枕エハ十四五丈計ナル大蛇ニテ這出ケル彼針ハ大蛇ノ腦咽ニ立タリ是即日向高知尾明神也 平家物語 盛衰記

薩摩

○枚聞社 綿積トモ 額娃郡ニ有リ 祭神

猿田彦命 一宮記

貞觀十六年七月二日太宰府言薩摩國從四位上開聞神山頂有火自燒烟薰滿天灰沙如雨震動之聲聞ニ百餘里 近社百姓震恐失レ精求ニ之著龜神ニ封戸及

新古今集

西の海たつしら波の上にして

何すくすらんかりの此世に

○神託 衆生の心不善なるとき神明を祈りもとむといへども其心にやどる事なしなをき心にして正しき時はいのらざれども我常に其いたゝきにうつりゐて守らん衆生の心は神の舍成が故に其みあらかあしければすむ事なし 倭論語

○宇佐宮 宇佐郡ニ在リ

祭神一座 湍津姫命

素戔嗚命子

傳系上ニ見 社記未考

○賀春社 香春郷ニ在リ

祭神一座 辛國息長大

姫 是神日本之神胤ニ非ズ

○豊前風土記云田川郡鹿春郷昔新羅神自度到來

住此川原即名云鹿春神也案之豊州比咩語曾社不レ見ニ神名帳并風土記也而任那新羅國種也辛國比咩語曾神之垂跡也 神名帳註○釋最澄傳教 弘仁五年春於賀春神宮寺講妙經

是時豊前田河郡吏等錄瑞雲狀寄之澄固封告義

眞云非吾滅後不レ得レ開レ緘寂後門弟子等披閱

其文云今月十八日未時紫雲光耀起賀春嶺覆法

筵之庭村民悉見敬異又是澄泛海時宿田河郡賀

春山下夢梵僧來前袒衣露身左肩似人右肩如

石言レ之云我是賀春明神也和尙慈悲救吾業道之

身我當加助求法晝夜守護欲知我實海中急

難現光爲驗澄明旦レ山右邊崩巖草木不生宛如

夢中半身心異焉又海中風浪果有光曜是以思神

之不浪也而建法華院自創講席乃神宮院也開

レ講之後其右巖之地漸生艸木一年々慈茂鄉邑嘆異釋書一

豊後

○西塞多社 大分郡ニ在リ

祭神三座 神功皇后

應神天皇 武内大臣

○一名杵原大明神垂跡同宮神名帳註

○貞觀十一年三月廿二日無位西塞多神從五位下

國史

○神託 其心のあしかるものゝ吾前に來る時は炎

の中に座して其烟をのむがごとし心の直き者の吾

前に來るときは天月にむかふがごとし 倭論語

日向

是國東ニ望テ直ニ日ノ出ル方ニ向フ故ニ日

五十三凡在位十六年也其後白壁王太子ニ立玉ヘリ
卽光仁天皇是也天智天皇ノ孫施基皇子ノ子也藤原
永手吉備大臣太子ト相談シテ道鏡ヲ下野國藥師寺
ノ別當ニナシテ彼國エ流ス世ヲ篡ントセル惡人ナ
レドモ先帝御恩深キニ依テ死罪ヲ免ストナン年ヲ
ヘテ道鏡病死ス清麻呂ヲ都ニ飯ス

王代一覽

○盛衰記主上女院ヲ始メ進セテ内府以下ノ人々豐
前國宇佐ノ宮エ參詣アリ社頭ハ皇居トナリ廊ハ月
卿雲客ノ居所トナル御祈誓ノ趣ハ主上舊都ノ還幸
也都ハスデニ山河遙ニ隔テ雲ノ餘所ニ成ヌ何ゴト
ニ付テモ心ヅクシノ旅ノ空身ヲウキ船ノ住居シテ
コガレテ物ヲゾ覺シケル七箇日ノ御參トテ大臣殿
財施法施ヲ手向奉リ神寶神馬カクテ七箇日ヲ送り
玉ヘドモ是非ノ夢想ナンドモナカリケレバ第七日
ノ夜半計ニ思ヒツバケ玉ヒケリ
思ヒカネ心ヅクシニ祈レドモウサニハ物モイハ
レザリケリ神殿大ニ鳴動シテ良久クシテユ、シキ
御聲ニテ
世ノ中ノウサニハ神モナキ物ヲ心ヅクシニ何イ
ノルラン

○むかし三井寺の禪徒にて慶祚大阿闍梨といふ人
いまそかりけるが智行ともにそなはりて月輪觀を
こらし給ひけるに彼庵の松の木の上に明淨なる月
のあらはれ出給ひてまのあたりおがまれ給へりけ
るとかやこのあざり道心深くてむかし釋尊の御法
とかせ給へりける鷲の御山祇園精舍なんどゆかし
くおもひ給ひければ日數をへてわたらんするいと
なみのみ侍りける我もともなひ奉らんといふ人五
十人におよべりけるがはりまの國明石のうらにて
は二十餘人に落なり給へり筑紫にては皆落行て只
あざりと心寂と計二人になり給へり宇佐の宮に詣
て船路のほどの哀を照させ給へと祈念し給ひける
に明神の御託宣に中天笠の佛法今は跡もなし祇園
精舍は虎狼のふしどゝなり白鷺池はくさのみしげ
り流沙もはげしく慈嶺もむかしに似ず佛法すべて
形なしたと思ひとまれと御託宣侍ければ佛法のお
とろへにける事をかなしみてそれより歸り給ひけ
り

撰集抄

孝德天皇時

稱徳天皇の御とき和氣清丸を宇佐宮に奉り給
へりける時たくせんし給ひける御歌

坐於豐前國宇佐宮神社考

○傳教大師弘仁五年春詣宇佐八幡神宮講妙法華講竟神託云不_レ受_二法味_一久歷_二歲華_一今聽_二微言_一何以報_レ德我有_二法衣_一願表_二願達_一乃啓_二齋殿_一推出紫衣二領_一神宮巫祝各相謂云我等未_レ嘗見_二如_レ斯靈感_一也釋書

○四十八代孝謙天皇神護景雲元年九月太宰府ノ阿曾麻呂ト云者道鏡ガ威ヲ見テコビヘツラヒテ宇佐八幡ノ託宣ト稱シテ道鏡ヲ帝位ニ卽シメバ天下泰平ナラント云道鏡悅デ天皇ニ申ス天皇道鏡ヲ愛スル事甚シトイヘドモ帝位ノ事ハ私ナラヌ事ナレバ宇佐エ勅使ヲ遣シ神託ニ任セテ決セント宣フ道鏡然ルベシト申ス天皇和氣清麻呂ヲ召テ云ク八幡大神夢ノ告有リ汝ヲ勅使トシテ宇佐ニ遣スベシ能敬テ神託ヲ聞テ飯レト也清麻呂御前ヲ退ク時道鏡人ヲ退ケテサ、ヤキケルハ此度ノ勅使ハ我ニ帝位ヲ讓ラルベキヤ否ト八幡大神ニ問ル、處ナリ其心得ヲ以テ神託ヲ言上スベシ汝ガ返事ニ依テ我即位セバ汝ヲ大臣トナシテ國ノ政ヲ任スベシ若返事惡クハ重キ罪ニ行フベシト眼ヲイカラカシテ威ス清麻

呂宇佐エ參詣シ是ハ國家ノ大事ナリ縱ヒ託宣アリトモ卒爾ニハ信ジ難シ願クハ一ツノ不思議ヲ示シ玉ヘト祈念シケレバ大神忽チ長三丈バカリノ形ヲ現シテ影向アリ其光滿月ノ如シ清麻呂伏拜シテ仰ギミル事アタハズ神託ニ云吾國ノ天日嗣ハ神代ヨリ代々皇胤ノ外臣トシテ伺フベキニアラズ況ヤ無道ノ者ヲヤ汝飯テ有ノマ、ニ申ベシ道鏡ヲオソルル事ナカレト清麻呂神託肝ニメイジテ都ニ飯リ參内ス道鏡御前ニ侍テ椅子ニヨリカ、リ清麻呂ヲ呼デ神託イカニト問フ清麻呂少モ諂ラハズシテアリノ儘ニ奏聞ス天皇モイト興ナク思ヒ玉ヘリ道鏡大ニ怒テ清麻呂己ガ心ヲ以テ神託ヲ詐テ申ナルベシ曲事也死罪ニ處スベシトイフ天皇死罪マデハ如何ニト宥玉ヘバ道鏡怒テ足ノ筋ヲタチテ大隅國ニ流ス道ニテ殺スベシト道鏡謀リケレドモ折節雷雨甚シクテタメラウウチニ勅使來テ死罪スル事ナシ清麻呂行步叶ハザリシガ宇佐八幡エ參詣シケレバ足ノ筋忽チナヲリテ行步本ノ如ク也藤原百川ト云フ者清丸ガ忠節ヲ感ジテ備後國ニ領地アリケルヲ分テ清丸ガ配所エヲクル同四年八月天皇崩御アリ歲

リニケレバサゾヨトアザ笑テ打トヲリケル其後社壇ヲミケレバ二丈計ナル大蛇矢ニ當テ死ニタリケルコソ不思儀ナレ 太平記

○板櫃社 松浦郡ニ在リ 祭神一座

藤廣繼之靈也傳上ニ見リ ○廣嗣到ニ板櫃河ニ與ニ

官軍ニ戰死其靈板櫃明神是 啓蒙

肥後

○阿蘇社 阿蘇郡ニ在リ 祭神三座

武磐龍命本宮 阿蘇姫二殿 國造速甕玉命三殿 已上

社記

右本傳口決相承也

○景行天皇御宇十八年六月十六日到ニ阿蘇國ニ也其

國郊原曠遠不見人居ニ天皇云是國有人居乎時有ニ

二神云阿蘇都彥阿蘇都媛忽化人以遊詣之云吾二

人在何無人居耶故號ニ其國云ニ阿蘇 日本紀

御位 仁壽元年冬十月丙午建岩龍命加階從三位

文德實錄

貞觀十七年十二月從二位 國史

仁壽二年二月戊寅阿蘇姫神加ニ從四位下 實錄

○神託 益人が天地の事をもつておこなへば其身

則天地也その心即神明也臥て思ひいねてなせば思ふ事なすにとをからずおろかに思ひ愚になして至がたきはこのさかひ也 倭論語

和歌

大貳成章肥後守にて侍ける時阿蘇社に御裝束してたてまつりけるに彼國の女の讀侍ける

讀人不知

後拾遺 天下はくゝむ神のみそなれば

ゆたけにそ立みつのひろまへ

豊前

○宇佐宮 宇佐郡ニ在リ 祭神八幡三所

○三所者八幡比咩神大帶姫也豐前國宇佐郡菱形山

廣幡八幡大神坐ニ郡家東馬城峯頂ニ後人皇四十代聖

武御宇神龜四年就此山ニ奉ニ造ニ神宮ニ十二社註式

古老云傳云應神帝玉依姫神功皇后稱ニ之三所ニ如ニ

延喜式一則中男神應神天皇是也女神二體神功皇后

并姫神是也已上平野神主兼前註進ニ之 啓蒙

○欽明天皇三十一年冬肥後國菱形池邊民家兒甫三

歲神託云我是人皇第十六代譽田八幡麻呂也諸州

垂ニ跡于神明ニ今又顯ニ于此ニ其後差ニ勅使ニ移而鎮ニ

モトハ火前ト書タリ其故ハ景行帝ノ十八年五月ニ葦北ヨリ火國ニ到ル日沒シテ夜クラカリシカバ船ヲツケナン岸ヲ知ラズ其時遙ニ火ノ光見エゲレバ此ニヲイテ着岸ヲ得タリ是人間ノ火ニハアラジト量テ其國ヲ火前トイフ也云々

○淀姫社 佐嘉郡ニ有リ 川上大明神ト號ス○肥前風土記云人皇三十代欽明天皇廿五年甲申冬十一月朔日甲子肥前國佐嘉郡與止姫神有鎮座一名豐姫乾元二年紀云淀姫太明神者八幡宗廣之叔母神功皇后之妹也三韓征伐之昔者得三千滿兩顆而沒異賊之凶徒於海底文永弘安之今者施風雨之神變而摧幾多之賊敵於波濤神名帳註 ○御位 貞觀十五年九月十六日正五位下 國史

○松浦社 松浦郡ニ在リ 祭神三座 上松浦下松浦トモニ同ジ鏡宮ト稱ス 祭ル所

○田島神一座 ○仲哀天皇弟稚武王也號上松浦明神神名帳註

○志々伎神一座 ○稚武王弟十城別王也號下松浦明神 同上

○鏡宮 一座 ○昔氣長足姬尊在松浦山遙覽國形而勅祈云天神地祇爲我助福乃用御鏡安置此所其鏡化爲石而在山故名云鏡宮肥前風土記

和歌

新千集載
あひみんと思ふ心は松浦なる

紫式部

鏡の神や空に知るらん

○櫛田社 神碕郡ニ在リ 祭神一座

大若子命 天御中主尊十九世孫上ニ見

○垂仁天皇御宇有北狄退治之功賜大幡主命啓蒙元弘三年三月十三日卯ノ刻ニ肥後國住人菊地入道寂阿僅二百五十騎ニテ筑紫ノ探題北條英時ノ館エヅ押寄ケル菊地入道櫛田ノ宮ノ前ヲ打スギケル時軍ノ凶ヲ示サレケン又乗打ニシタリケルヲトガメ有ケン菊地ガ乗タル馬俄ニスクミテ一足モ前エ進ミエズ入道大ニ腹ヲタテ如何ナル神ニテモ坐セヨ寂阿ガ戰場エ向ハンズル道ニテ乗打ヲ尤メ玉フベキヤウヤ有ル其義ナラバ矢一ツマイラセン受テ御覽ゼヨトテ上差ノ鐮ヲ拔出シ神殿ノ扉ヲ二矢マデゾ射タリケル矢ヲ放ツト均シク馬ノスクミ直

○宰府社 太宰府ニ有リ 祭神

菅家 山城北野天神宮ノ本宮也

傳記云醍醐天皇延喜元年依ニ左僕射時平之讒ニ遷ニ大宰權帥ニ間ニ一歲ニ薨ニ于宰府ニ春秋五十七遂建ニ一字ニ號ニ天滿宮ニ

●太宰府 當國ハ日本西ノ末ニシテ異國ニ近シ若

異國ノ夷軍來ン時ハ其ヲフセガン爲人勢ヲ此所ニヲケリ府ハ其居ル所也東國陸奥ニ鎮守府アルガ如シ猶有職袖中鈔ニ書シ畢

○網場天神 博多ニアリ 祭神 同ノ上

昔菅相公左遷ニオモムキ玉フ時此所ニ憩ヒ玉ヒシニ居奉ラン御座ノナキマヽニ船ノ綱ヲワノゴトクナシソレヲ敷テ其上ニ居奉リシ也此時一夜ノ中ニ白髮ト成ラセ玉フ也

○壹伎社 那珂郡壹伎ニ在リ 祭處 壹伎直眞子

應神天皇臣下也

應神天皇ノ御宇武内大臣勅使トシテ筑紫ニ赴キケル間ニ大臣ノ弟甘美内宿禰讒言シケルハ武内筑紫ニテ三韓ヲカタラヒ謀叛セントスト奏ス天皇怒玉ヒテ使者ヲ以テ武内ヲ殺サシメントシ玉フ壹伎直

眞根子ト云モノ聞テ武内ニ此由ヲ告ワレ御身ノ形

ニ似タリト世上ニ云處ナレバ吾命ニカハランサアラバ討手ノ勅使シリゾキナン其時ハ御身ヒソカニ上洛シテ罪無キ旨ヲ申ヒラカレヨ其後ハ死ストモ愚ナラジト云ステ、自害ス使者武内ガ首ナリト見テヤガテ退ケリ武内ハ竊ニ上洛シテ科ナキ由ヲ申ス天皇聞玉テ甘美内ト武内ト神前ニテ熱湯ヲ探ラシメテ其實否ヲ決ス武内ハ更ニ恙ナカリケレバ官職トモニ元ノ如クナサシメ玉ヘリ湯起請ノ起是也扱甘美内ヲバ武内自ラ害殺セントシケルヲ天皇勅シテ釋サシメタマヒテ其一門ノ者ニ下サレケル也日本紀ノ心

筑後

○高良社 三井郡ニ在リ 祭神 武内宿禰

○人皇四十代天武帝白鳳二年二月八日高良神社託云譽田天皇御宇爲ニ晨昏武畧之健將ニ末世時古敵新羅禍害發哉乎宮崎松原建ニ新宮書ニ新羅降伏之字置ニ吾座下ニ則自然降伏云々件新宮以ニ延長元年ニ遷御畢神名帳註○御位 貞觀十一年三月廿二日正二位國史

肥前

矣 日本紀

○志加清^ニテ讀ム也濁テヨムハ近江ノ名所也

後拾遺

戀しさも忘れやはする中々に

前大納言經輔

心さわかす志賀のうら波

家隆

新古今

しかの浦や遠さかり行波まより

氷て出る有明の月

右は近江の志賀のうら也

讀人不知

新勅撰

しかの蜚のめかり沙やきいとまなみ

くしけのをくし取もみなくに

同

同

しかの海士のけふりやきたてやく沙の

からき戀をも我はする哉

金葉

つれなくたてゐるしかの嶋哉

爲助

弓張の月のいるにも驚かて

國忠

右は筑前なり

○大己貴社

夜須郡ニ在リ

祭神一座

大己貴命 傳系上ニ有リ

氣長足姬命欲^レ伐^ニ新羅^一整^ニ理軍士^一發行之間道中

逃亡占^ニ求其由^一即有^ニ崇神一名云^ニ大三輪神^一所以

樹^ニ此神社^一遂平^ニ新羅^一神名帳註

○宇瀨社 宇瀨ニ有リ 祭神一座

譽田天皇 是即八幡大神也此所生^レ玉^ニ所也

皇后從^ニ新羅^一還之十二月戊戌朔辛亥生^ニ譽田天皇^一

於筑紫^ニ故時人號^ニ其產處^一云^ニ宇瀨^一也 日本紀

○香椎社 糟屋郡ニ有リ 祭神二座

神功皇后東 武內宿禰西

袈裟宮昔者仲哀天皇之后息長足姬神功及大臣武內

宿禰命今在^ニ此行宮^一謀^レ伐^ニ新羅^一從^レ爾已來便爲^ニ

廂室^一后宮在^ニ東臣在^ニ西^一社註

當社ヲヨメル和歌

金葉

ちはや振香椎の宮の杉のはを

二度かさす我君を君

神主膳武忠

新古今

千早振かしゐの宮のあや杉は

讀人不知

神の御祓にたてゐるなりけり

船ノ著所ヲ筑紫ト云フ也筑ハ著之義也云々
風土記ノ心

筑前

○宮碕社 那珂郡ニ在リ 祭神三座 神功皇后

應神天皇 武内臣

人皇六十代醍醐天皇延喜廿一年六年廿一日依ニ託宣ニ建ニ宮柱於宮碕松原ニ書ニ新羅降伏之旨ニ而置ニ御座下ニ立ニ石柱ニ祈ニ神誓不_レ朽 二十二社註式

此社者譽田帝之祠也地近ニ博多ニ

古老云昔此松原理ニ戒定惠三字之箱ニ故號云ニ箱碕ニ

栽ニ松于其處ニ爲_レ標至_レ今猶在焉

緣起云昔白幡四流赤幡四流降下於ニ其處ニ栽_レ松爲

表故有ニ八幡之號ニ已上神社考

續古今

ちはやふる神代に植ゑし箱崎の

松は久しきしるしなりけり

法印行清

顯朝

新拾遺

跡たれて幾代へぬらん箱崎の

しるしの松も神さひにけり

○宗像社 宗像郡ニ有リ 祭神一座

田心姫命 素戔嗚子 傳系上ニ有リ
宗像 一作ニ智肩ニ又作ニ智形ニ

○天照太神與ニ素戔嗚ニ誓乃取ニ其十握劍ニ所生神號云ニ田心姫ニ次湍津姬次市杵嶋姫凡三女矣大神勅云十握劍者素戔嗚尊物也此三女神悉是爾兒便授ニ之素戔嗚ニ此筑紫胸肩君等所祭神是也 日本紀

○神書疏云神名帳筑前國宗像郡宗像神社三座是也田心姫胸肩明神湍津姬字佐明神市杵嶋姫巖島明神已上神社考

○昔貞信公小一條ニ居住アリケリ此所ハ筑前國宗像ノ明神筑紫ヨリウツリ坐所ナレバ貞信公尊敬シテ洞院ノ後路ヨリゾ必車ヨリオリテ出入アリケリ或時此神形ヲ現シ玉ヒテ貞信公ト物語アリケルニ神ノ御位貞信公ヨリ卑キヨシヲノタマヘバ公此由ヲ奏問アリケレバヤガテ神ノ位階ヲ進メ玉ヒケリ

○志賀社 糟屋郡ニ有リ 祭神三座

底津少童命 中津少童命 表津少童命

○伊弉諾尊至ニ筑紫日向小戸橋之檣原ニ而祓除焉沈ニ濯於海底ニ因以生神號云ニ底津少童命ニ又潜ニ濯於潮中ニ因以生神號云ニ中津少童命ニ又浮ニ濯於潮上ニ因以生神號云ニ表津少童命ニ是阿曇連等所祭神

ルアハレ弓矢ノ面目哉ト羨ム人モ有リ又爪彈ヲスル人モ有竹澤ヲバ猶モ謀反與力ノ者共ヲ尋ベシトテ御陣ニ留ヲカル江戸ニハ暇玉テ恩賞ノ地エ下サル江戸遠江守則拜領ノ地エ下向シケル十月廿三日ノ暮程ニ矢口ノ渡ニ下居テ渡ノ舟ヲ待居タルニ兵衛佐殿ヲ渡シ奉シ時江戸ガ語ヒヲ得テノミヲ拔テ舟沈タリシ渡守共江戸ガ恩賞玉テ下ルト聞テ種々ノ酒肴ヲ用意シテ迎舟ヲ漕出ケルニ此舟已ニ河中ヲ過ケル時俄ニ天曇雷鳴水漲テ逆卷浪舟ヲ返ケレバ水手一人モ不_レ殘皆水底ニ沈ケル天ノ忿直事ニ非ズ是ハ義興ノ怨靈也ト遠江守恐テ河端ヨリ引返余所ヲ渡メトテ廿餘丁アル上ノ瀬ニ馬ヲ早メテ打ケルニ電行前ニ閃テ只今雷神ニ蹴殺サレヌト思ケレバ御助候ヘ兵衛佐ト手ヲ合セ虚空ヲ拜シテ逝ケル山ノ麓ナル辻堂ヲ目ニカケアレマデト馬ヲ早メケルニ黒雲一村江戸ガ頭ノ上ニ落サガリ雷電鳴閃ケル後ヲ顧タレバ義興火威ノ鎧ニ龍頭ノ五枚甲ヲ着白栗毛ノ馬ノ角生タルニ乗テ江戸ヲ弓手ノ物ニナシワタリ七寸計ナル雁俣ヲ以テカヒカネヨリ乳ノ下エ射通サル、ト思テ江戸馬ヨリ倒ニ落血ヲ吐ケ

ルヲ與ニ乗テ江戸ガ門エ昇着タルニ七日ガ間ニ足手ヲアガキ水ニ溺タル眞似ヲシテ死ケリ又雷火落テ入間河ノ在家三百餘堂舍佛閣數十ヶ所ヤケ、リ又矢口ノ渡ニハ夜々光物出テ往來ノ人ヲ惱ケレバ近隣ヨリ集テ義興ノ亡靈ヲ一社ノ神ニ祠テ新田大明神ト號シ常磐堅磐ノ祭禮今ニ不_レ絶 太平記猶委シ

土佐

○都佐社 土佐郡ニ在リ 祭神高鴨大明神

○高賀茂大明神味耜託彥根命也 一宮記

○土佐風土記云土佐郡郡家西去ニ四里ニ有ニ土佐高賀茂社ニ其神名爲ニ一言主尊神名帳註

御位 貞觀元年正月廿三日從五位上 神階記

○託宣 諸人のいとけなき時より老の暮に至るまで一善をもなさざるを大惡人とはいふ也神明も生るをぬすむ人としてふかくこれをにくめる也人は人の道正しくて直き心なきをば人とはいはず天のなす處にそむけば必らずわざはひ多かるべし 倭論語

西海道

總云ニ之筑紫也二嶋壹岐對馬也 筑紫ト云事ハ允恭天皇ノ時異國ヨリ紫草ヲ獻ジケル其ニ

德壽丸ト號ス其母賤ニ因テ義貞之ヲ愛セズ嫡子義顯越前ノ金崎ニテ討レシ後義興ノ弟義宗ヲ家督トス延元々々年八月奥州ノ國司顯家鎌倉ヲ攻ル時德壽丸上野ヨリ起リ二萬騎ヲ卒シテ顯家ニ與力シテ鎌倉ヲ攻破ル其後吉野エ參ル後醍醐天皇ノ御前ニテ勅命ヲエテ元服シテ左兵衛佐義興ト號ス其後觀應二年ノ春尊氏鎌倉ニ在リシ時義宗義興并ニ脇屋義治上野國ニテ義兵ヲ起シケレバ東國ノ兵附從フ者數萬也武藏野エ出張シテ尊氏ト合戰ス尊氏打負テ已ニ危カリシガ幸ニ免レタリ爰ニ尊氏ノ一族仁木賴章同義長遊軍ニテ戰ノ勝負ヲ窺ヒケルガ義興義治ガ戰疲レテ居ル所エ夜討シケレバ義興義治自ラ戰ヒ拒武勇ヲ勵ストイヘル力盡テ退ク義宗ハ義興義治ヲ尋カネテ上野エ赴ク其比鎌倉ノ留守ニ尊氏ノ次男基氏在リケレバ義興義治鎌倉エ攻入ル基氏ノ守南遠江守拒ギ戰トイヘドモ義興義治武勇ヲ勵シ攻ケレバ遠江守打負テ基氏諸共ニ落行ケレバ義興義治鎌倉エ入テ暫東八箇國ノ大將ト稱ス其後尊氏鎌倉エ向レケレバ義治義興退テ相模ノ河村ノ城ニ籠リテ尊氏ト合戰日久シ翌年ノ春河村ノ城ヲ退

テ越後エ赴尊氏逝去ノ後義興武藏エ赴キ兵ヲ起サントス義貞ノ舊好アル者附從者多シ此時鎌倉ノ管領基氏ノ執事畠山道誓是ヲ聞テ義興ガ在所ヲ尋聞テ屢討手ヲ遣ス義興大勢ナレバ討レズ道誓如何スベキト晝夜案ジ居タリケルガ或夜潛ニ竹澤右京亮ヲ近付テ御邊ハ先年武藏野ノ合戰ノ時彼義興ノ手ニ屬シテ忠有シカバ定テ其好ミハ忘ジトゾ思ハラン此人ヲ僞討ン事ハ御邊ニ過ジ謀ヲ運シテ討テ左馬殿ノ見參ニ入玉ヘ恩賞ハ請ニ依ベシト語ル竹澤元來欲心深者ニテ曾テ一義ヲモ申サズサ候ハバ某御制法ヲ背テ御勘氣ヲ蒙リ御内ヲ罷出タル體ニテ本國エ下テ後此人ニ取寄候ベシト謀テサマヽノ事ヲナシテ態追出サレ己ガ所領エ飯テ後潛ニ通ジテサマヽ謀ケレバ義興果シテ竹澤ニ欺レテ武藏ヨリ忍テ鎌倉エ赴トテ竹澤ト江戸遠江守ト謀テ矢口渡ノ船ノ底ヲ二所エリ拔ノミヲ差シ水主二人沖ニ出テノミヲ拔ケレバ水船中ニ湧入ヌ竹澤等同意ノ者共河岸ヨリ矢ヲ放ケレバ義興自害シテ失ヌ郎從十三人モ共ニ腹ヲ切テ沒セリ斯アレバ竹澤江戸ガ忠功拔群也トテ則數箇所ノ恩賞ヲ被レ行ケ

ニテ崩ズ歲四十六白峰ニ葬ル 王代一覽

○白鳥社 讚州ニ有 祭神一座 日本武尊

日本武尊移ニ伊勢ニ而崩ニ于能褒野一時年三十仍葬ニ於能褒野陵ニ時日本武尊化ニ白鳥從レ陵出之指ニ倭國ニ而飛之群臣等因以開ニ其棺襪ニ而視レ之明衣空留

而屍骨無レ之於レ是遣ニ使者ニ追ニ尋白鳥ニ則停ニ於倭琴彈原ニ仍於ニ其處ニ作レ陵焉白鳥更飛至ニ河内ニ留ニ

舊市邑ニ亦其處造レ陵故時人號ニ是三陵ニ云ニ白鳥陵ニ然遂高翔上レ天徒葬ニ衣冠ニ日本紀

一說云讚岐國有ニ白鳥明神ニ是倭武尊也自ニ伊勢國ニ差レ西飛去止ニ于此國ニ云 又云日本武尊之靈化為ニ

白鶴ニ西飛止ニ讚州ニ 神社考

伊豫

○大山祇社 越智郡ニ有リ 祭神一座

大山祇神 傳系上ニ有リ

俗稱ニ三島大明神ニ伊與風土記云宇治郡御座神御名大山積神一名和多志大神也此神者難波高津宮御宇

渡座云々 神名帳註

○御位 貞觀十七年三月廿九日正二位國史

○神託 吾神明は法の中には日天子又は大日遍昭

也垂跡を滄海の龍神にあらはれまして三界の衆生のねがひをかなへます法の人もおろかに思ひ奉るべからず天地萬物みな吾神明成事を知るべし 倭論語

○湯宮 溫泉郡道後ニ有リ 祭神二座

大己貴命 少彥名命 傳系上ニ見

○伊與風土記云湯郡大穴持命見ニ悔耻ニ宿奈比古那命欲ニ活而大分速見湯自ニ下樋ニ持度來以ニ宿奈比古

奈命ニ令ニ浴瀆ニ者甕間有ニ活起居ニ然詠云眞甕寢哉踐健跡處今在ニ湯中石上ニ也凡湯之貴奇不ニ神世時

耳ニ於ニ今世ニ染ニ疹痼ニ萬生爲ニ除病存身要藥ニ也 釋日本紀

○新田社 同國在所未レ考 新田義宗義治之靈也 新

田明神ト申ハ去ル應永年中新田武藏少將義宗脇屋右衛門佐義治出羽國ヨリ密ニ當國ニ拔落シ御坐シ

ヌ河野一族土居得能ヲ頼玉テ深隱坐シケルガ時至ラズシテ素懷ニモ達シ玉ハズ彼國ニテ空ク成玉ヒ

シヲ神ニ祭テ新田明神ト號奉ル也 後太平記○因ニ云武藏國矢口渡ニモ新田明神ト號シテ社有リ此所

ハ新田義興ノ靈ヲ祠也義興ハ義貞ノ次男也小名ヲ

惡ニ伺部等黥之氣ニ故自レ是後頓絶以不レ黥ニ伺部ニ而止レ之 日本紀

伊弉諾尊神功既畢靈運當レ遷是以構ニ幽宮於淡路洲ニ寂然長隱者矣 日本紀

○御位 貞觀元年正月廿七日一品神階記

阿波

○大麻彦社 板野郡ニ有リ 祭神 猿田彦命 一宮記

○御位 貞觀九年四月廿三日正五位上 國史

讃岐

○田村社 香川郡ニ有リ 祭神

猿田彦命 一宮記

從四位下 國史

○御位 貞觀九年十月五日

○崇徳社 松山ニ有リ

祭處 崇徳院御靈

人皇七十五代ノ天子ナリ 鳥羽院第一ノ御子也

諱ハ顯仁母ハ中宮藤原璋子待賢門院ト號ス大納

言公實ノ娘元永二年五月天皇誕生保安四年正月

讓ヲ受ケ二月卽位時ニ五歲治世十八年永治元年

三月上皇鳥羽殿ニテ落飾鳥羽法皇ト號ス歲卅九

十二月法皇ノハカライニテ崇徳帝何ノ故モ無ク

位ヲ御弟ノ體仁ニ讓ル後十六年有テ後白川院保元四年年七月二日鳥羽院崩ズ歲五十四天皇卽位ノ

初ヨリ忠通ハ替ラズ關白タリ賴長ハ氏長者元ノ如シトイヘドモ内覽ヲヤメラル是ニヨリテ當今

ニ恨有ケルニヤヨリノ崇徳新院ヲ勸メ申サル、コト有リ新院元ヨリ世ヲ取返サントノ志アリケレ

バ悅玉ヒテ賴長ト密謀アリ法皇ノ崩御ニ折ラエテ近國ノ兵ヲ呼アツム故ニ崩御一七日モ過ザルニ京

洛外騷動ス新院ハ鳥羽ヨリ白川ノ御所ニ御幸也賴長モ同ク參向內裏エハ關白忠通以下參向ス武士ニ

ハ下野守源義朝安藝守平清盛等內裏ヲ守護ス義朝

ガ父爲義ト清盛ガ叔父平右馬助忠正等ハ新院ノ召

ニヨリテ白川殿ニ參ル爲義ガ子共義朝ガ外ハ皆新

院ノ御方ニアリ同キ十一日ノ夜少納言入道信西勅

ヲ奉テ義朝清盛等ヲシテ新院ノ御所ヲ攻シム爲朝

防ギ戰フニ依テ官軍多ク討ル義朝火ヲ放テ白川殿

ヲ燒ハラフ新院ノ軍敗レテ散ズ賴長ハ流矢ニアタ

リテ死ス歲三十六新院ハ出家シ玉ヒシヲ讃岐國エ

流シ奉ル時歲三十八此合戰君臣上下共ニ親類骨肉

ノ爭前代未聞也新院ハ二條院ノ長寛二年八月讃州

○伊曾太祁社 名艸郡ニ有リ 祭神三座

五十猛命 大屋津姬命 抓津姬命

傳上ニ見 ○大寶二年二月己未分遷伊曾太祁大

屋都姬都麻都比賣三神社

續日本紀

御位 貞觀元年正月廿七日伊曾太祁大屋都姬神抓

津姬神並從四位下

神階記

○玉津島社 弱浦ニ有リ 祭神

衣通姬靈也 人皇二十代允恭天皇后也

○玉津嶋神者衣通姬也案日本紀允恭天皇之后忍坂

大中姬之妹容姿絕妙無比其艷色徹衣而晃之是以

時人號云衣通郎姬天皇喚郎姬郎姬畏皇后而不

不參天皇強而七喚以來之因皇后之嫉別構殿屋

於藤原而居八年春二月幸于藤原密察衣通姬之

消息是夕衣通郎姬戀天皇而獨居其不知天皇

之臨而歌云和餓勢故餓句倍積豫臂奈利佐嗟 餓泥

能區茂能於虛奈比虛豫比辭流辭毛天皇聆是歌則

有感情郎姬奏言妾常近王宮而晝夜相續欲視

陛下之威儀然皇后則妾之姉也恒恨陛下亦爲妾

苦是以冀離王居而欲遠居天皇更興造宮室於

河內茅渚而令居已下略 神社考

聖武帝也

○天璽國押開豐櫻彥天皇神龜元年十月幸紀伊國

詔云登山望海此間最好不勞遠行一足以遊覽

故改弱濱名爲明光浦宜置戶守勿令荒穢

春秋二時差遣官人奠祭玉津島之神明光浦之靈

續日本紀

和歌 浦海士 田鶴神 玉津島

古今 若のうらに沙みちくれはかたをなみ

赤人

蘆へをさして田鶴鳴渡る

後京極

續古今 いか計若の浦風みにしみて

宮はじめげん玉津島ひめ

兼てより和歌のうら地に跡たれて 藤原隆信

君をや待し玉津島姫

古今 和田の原寄せくる波のしはくも 讀人不知

みまくのほしき玉津島かも

淡路

伊弉諾伊弉並二神產玉ヲ洲也日本紀ニ見リ

○伊弉諾社 津名郡ニ有リ

履中帝五年秋九月十八日天皇狩于淡路島是日河

內飼部等從駕執轡先是飼部之跡皆未差時居

島伊弉諾神託祝云不堪血臭矣因以卜之兆云

天丹生神 ○先師説云高野山天野大明神者丹生都神也天照太神之妹稚日女神也一説云丹生都姫天照太神也坐三和州丹生川之裔故名三丹生都姫也後又顯三伊勢國神名帳註

○丹生高野の二神は即母子にておはしますと申傳へり或は夫婦とも高野の大明神は大神宮の御弟なり又玉津島の衣通姫を思ひ人にて御馬にて忍びて通ひ給ひけるを丹生明神やすからぬ事に思召けり彼玉津島へ神馬を奉られし時は明神の御前にてくつばみの音をならさぬ事にて侍となん今此所を尋るに牛窟とて玉津島山の江のほとりに有昔は高野明神の神輿此窟へ渡御の事毎年有しかども今絶たり窟の内に小社有委は公任卿家集にみえたりあま人の乗渡しけんしるしにや

公任

岩屋に跡をとめ置けん

兩大明神 北は丹生神殿女體南は高野神殿俗體是を山王院と云也是當山鎮守也弘仁十年五月三日大師勸請也啓白の文あり

○四所明神 御寶殿戊亥の方に向ふ南の方第一は一宮丹生明神次は二宮高野明神三宮氣比明神四宮丹

生明神の子なり高野明神は天照太神の孫王也丹生權現第一の子也氣比は丹生權現の御女也四宮は丹生の子也往古は兩大明神のみ有しを中古行勝上人瑞夢をかんに勸請せられしよりかくの如し此格子の内十二王子の宮有 八王子 土公神 大將軍 皮張明神 皮付明神 八幡 熊野 金峯 白山 住吉 信田 西宮 同百二十伴の宮右十二王子百二十伴勸請諸神は大師御時よりの事とみえたり舊記にみえたり

○七社明神 四社明神と三社の神となり四社の神は前のごとし三社は 天照太神 八幡 春日明神也鳥居の額云正一位勳八等丹生七社大明神廿餘村の守護神とす

嵯峨帝弘法大師に密灌を受給ひしとき此近邊の村を御寄附有しなり其後他の領となりぬ毎年九月晦日神事あり高野の衆徒法事をつとむ寺號は神通寺と申傳へり

○栗島明神 觀音堂の左にあり勸請たれと云事さだかならず

已上高野ニ有リ 假名書之分 高野名所記

底搜看潮人出レ波奏云貝猶在徑三尺許自_三帝修ニ練

此地一苦行者六十人至_レ今不_レ絶

釋書十七

仲算大德熊野へ參給ひけるに那智のたきにて心經

をたうとく讀給ひければたきさかさまにながれて

瀧のうへに正眞の千手觀音のあらはれいまそかり

しをまのあたりおがみ給ひけるとなん

撰集抄

○神託 吾國はしたがへる人日の蝕なる時は心を

つゝしみ身をしづめて蝕にあたるべからず大蝕は

大災也小蝕は小災也

和論語

○御行 御幸始

平城帝 花山院 白河院 三山五度

堀河院 三山一度 鳥羽院 三山八度

後白河院 三十三度

○當社和歌ニ詠ズ

熊野にまうで侍ける時發心門の王子にて

千載集

嬉しくも神のちかひをしるへにて 權中納言經房

心をおこすかたとに入ぬる

同 鹽屋の王子の御前にて 後三條内大臣

思ふ事くみてかなふる神なれば

鹽やに跡をたるゝ也けり

熊野新宮にて讀侍ける 中原師光朝臣

玉葉集

天さかる神や願をみつ汐の

湊に近きちきのかたをき

同

待わひぬいつかは爰にきの國や

むろの郡は遙なれとも

右熊野の權現の御歌

續千載

うろよりもむろに入ぬる道なれば

是を佛のみもと成へき

此歌は後白河院熊野の御幸三十三度になりける

ときみもとゝいふ所にて告させ給ひけるとなん

風雅集

もとよりもちりにまじはる神なれば

月の障も何かくるしき

是は熊野の權現和泉式部にしめさせ給ふとなん

○粟島社 名草郡蚊田地ニ有リ 祭神一座

少彥名命 高皇產靈尊子也

傳系上ニ見 當社鎮座年紀未_レ考

此神者本朝神仙醫藥之祖神也

○丹生社 伊都郡高野山上有リ 祭神一座

津姬命凡三神亦能分_二布木種_一即奉_レ渡_二於紀伊國_一也 同上

系圖上ニ見

○熊野社 牟婁郡ニ有_リ 祭神三座

伊弉並尊

伊弉冊生_二火神_一時被_レ灼而神退矣故葬_二於紀伊國熊野之有馬村_一焉土俗祭_二此神之魂_一者花時亦以_レ花祭又用_二鼓吹幡旗_一歌舞而祭焉 日本紀

事解男神 速玉男神

伊弉諸尊追至_二伊弉冊尊所在處_一便語之云悲_レ汝故來答云族也勿_レ看吾_一矣伊弉諸尊不_レ從猶看_レ之故伊弉冊尊耻恨之云汝已見_二吾情_一我復見_二汝情_一時伊弉諸尊亦慙焉因將_二出返_一于_二時不_レ直默_一飯而盟之云族離又云不_レ負_二於族_一乃所_レ唾之神號曰_二速玉之男_一次掃之神號_二泉津事解之男_一凡二神矣 同上

崇神天皇十六年始建_二熊野本宮_一 景行天皇五十八年建_二同新宮_一 神名帳註

○御位 延喜七年十月二日丙午熊野坐神正二位 天慶三年二月一日丁酉速玉神正二位 國史

○古事記舊事紀等謂伊弉冊尊神去葬_下出雲國與_二伯

耆國_一之界比婆山上不_下與_二此書_一同社家者說熊野權現者自_二天竺_一飛來之神也今見_二此神書_一爲_二伊弉並尊_一者決矣故諸道博士勘文多引_二此書_一爲_レ据

神代纂疏

按神代舊事紀等一說以下葬_二於紀伊國熊野_一之記文上爲_二伊弉並尊_一也若據_二長寬勘文_一則爲_二熊野樟日命_一之明矣蓋伊弉並尊葬_二于出雲國比婆山_一之故也又今紀伊國熊野鄉有馬村無_レ神則彼神紀之一說非_レ無疑乎 啓蒙

○熊野權現證誠殿本地阿彌陀 本宮

兩所權現者樂師觀音 新宮

○若一王子施無畏大士 號云_二日本第一大靈驗_一三處權現

○飛瀧權現 千手觀音 已上習合ノ說

花山法皇入_二那智山_一不_レ出三年其精修勵苦苦行之者皆取_レ法一日神龍降獻_二如意珠一顆水精念珠一串海貝一枚帝置_二寶珠於當屋念珠於千手院_一以爲_二地鎮_一苦行上首傳持祕授至_二如今_一其海貝九穴沉_二瀧下_一俗云食_二九穴貝_一者長年不老蓋帝令_二飲_一瀧水一者得_二延齡_一也承保帝聞_二貝事_一召_二弄潮者_一入_二瀧

白河院

○神託 吾國の人は吾神の子也親の教をうしなひてあらぬ方のをしへにしたがふは吾子にあらねば守るによしなし是天照尊のをしへ也吾思ふ益人よ持たもて和論語

○和布苅社 下關赤目ニ有リ 當社ヲ和布苅社ト云事ハ毎年ノ除夜夜半ニハ必此海ノ汐ヒル也神人炬火ヲ燈シテ海底ニ至ヌレバ和布生出テ有リ是ヲ苅トリテ歸ル也誠不思議神變也明且元朝ニ神前ニ備ユル也是ヲ和布苅神事ト云也

祭神 彥火々出見尊 神社考
傳系上ニ見當社鎮座記未_レ考

○龜山社 龜山ニ有リ 祭神 八幡三座
應神帝中殿 神功皇后左 仲哀帝右

○人皇五十六代清和天皇貞觀元年奉_レ遷ニ男山ニ時行教和尚造ニ行宮ニ勸_ニ請之ニ_二社註式

南海道

紀伊

紀ト讀也故實也 或云昔秦ノ除福ト云フ者不死ノ藥ヲモトメニ出テ此國ニ來里人奇異

也哉トイヒシヨリ紀異國ト云フ云々

○日前社 國懸宮トモ名草宮トモイフナリ 名草郡ニ有

祭神 石凝姥神 天兒屋根命孫一宮記

○太神入ニ天石窟ニ而閉ニ磐戸ニ天下恒闇時思兼神思而白云宜圖ニ造彼神象ニ而奉ニ招禱ニ即以ニ石凝姥ニ爲_ニ治工ニ採_ニ天香山之金ニ以作_ニ日矛ニ又全_ニ剝眞名鹿之皮ニ以作_ニ天羽輻ニ用_レ此奉_レ造之神是即紀伊國所_レ坐日前神也 日本紀

○託神 益人が心太虛のごとくその身大地のごとく其口風のごとく其思ひ天地にひとしくすれば神明其身を社とし日月光を友とす愚につとめいたるべかずとぞ思ふ 和論語

末社

五十猛神社 ○素戔嗚尊帥ニ其子五十猛神ニ降ニ到於新羅國ニ初五十猛神天降之時多將ニ樹種ニ而下然不下殖ニ韓地ニ盡_ニ以持歸遂始自_ニ筑紫ニ凡大八洲國之内莫_レ不_ニ播殖而成_ニ青山ニ焉所以稱_ニ五十猛命ニ爲_ニ有功之神ニ即紀伊國所坐太神是也 日本紀

○大屋津姬社 ○抓津姬社

○素戔嗚尊之子號云ニ五十猛命ニ妹大屋津姬命次狐

たらゐと云御社三所におはします又すこし前の方にひきのきて南北え三十三間東西え二十五間の廻廊侍しほのみつる時は廻廊の板敷のしたまで海にゐる汐のひくときは白砂五十町計也然あれば汐のさしたる時まいれば船にて廻廊まで參る也けたかくいみじき事たとへもなく侍る但いか成御事やらん御簾の上には御正體のかゝみをかけまいらせで御簾より下にかけて參らする也彼御神は女體神にておはしますなればかくはならはせるやらん大かたは御社は山上にあがり廻廊は平地にあり東西南の三方はれわたりてことに心もすみ侍所に鹿を狩ざれば御山には男鹿なき草より露おち野路東なればむしのこえさかりに侍何心なき人も此御社にては心のすむなるとぞ申傳て侍る撰集抄

周防

○玉祖社 佐波郡ニ有リ 祭神 玉屋命

伊弉諾尊男 一宮記

○高峯宮 吉敷郡山口ニ有リ 祭神 伊勢兩宮ニ同

シ ○社家註進云當所内外二宮永正十七年十一月上旬大内多々良朝臣從三位左京大夫義興依夢覺ニ

而從伊勢國度遇郡一奉遷當國高峯一也祭祀末社等准兩太神宮一啓蒙

○山口社 同郡ニアリ祭神 山州祇園ニ同シ 山口祇園ト號ス

○社家註進云永正中疫疾盛行國民斃死者甚多矣仍大内義興祠之遷宮ト部兼右被勤焉

○朝倉宮 朝倉ニ有リ 祭神 八幡宇佐ニ同

人皇五十六代清和天皇貞觀元年立行宮勸請之二十二社註式

長門

元ノ名穴門ト云フ日本紀ニ見ユ仲哀天皇都

シ玉ヘリ穴門豐浦宮トハ是也猶日本紀委シ

○住吉社 豐浦郡ニ有リ 祭神 底筒男 中筒男

表筒男 一宮記

神功皇后十一年垂跡于長門國豐浦云々

又云住吉大神其荒魂在筑紫之小戸和魂神功皇后

征三韓時顯座攝州而託云眞住吉々々之國也

因鎮座地名云住吉豐浦那珂之住吉由攝易地名

而通稱之 神名帳註

○御位 貞觀十七年十二月五日從四位上 國史

網釣恩賀ノ爲島ノ邊ニ經回シケルニ西方ヨリ紅ノ帆アゲタル船見ユ來ル船中ニ瓶アリ瓶ノ内ニ鋒ヲ立テ赤幣ヲ付タリ瓶ノ内ニ三人ノ貴女アリ其形端嚴ニシテ人類ニ同ジカラズ託宣シテ云吾百王守護ノ爲ニ本所ヲハナレテ王城ニ近ツク寶殿并廻廊百八十間造立シテ吾ヲ嚴島大明神ト崇ベシトノ玉ヘバ鞍轡云何ナルシルシ有リテカ官奏ヲ經ベキト申ス明神云ク王城ノ艮ノ天ニ客星異光有リテ出現セシ公家殊ニオドロヒテ怪ヲ成ヘシ時ニ鳥鳥多ク集テ共ニ榊ノ枝ヲ食^クエント宣ヒケリ卽津國難波ノ王城ニ俄ニ千鳥榊ノ枝ヲ食エテ禁裏ニ鳴集ル鞍職奏シテ申是ハ大明神ノ現瑞也ト天皇歡信アリテ御俸田町御修理杣山八千町御寄進ノ宣旨ヲ下サルノ上同年十二月廿八日重テ宣下セラレテ云自今以後拜ニ任當國ニ之吏毎任可^レ捧^上分田ニ可^レ輕^神威^及ニ末代ニ社頭破壞顛倒之時ハ當任ノ國司經ニ官奏ニ國中ノ杣ヲ點シテ修理スベシ其間材木檜皮等不^レ可^レ運^ニ上京都^ニ云々 盛衰記

○弘法大師詣ニ嚴嶋^ニ供^ニ法味^ニ神現云所^レ祈何事答云末世祈^ニ菩提^ニ者願神賜^ニ道心^ニ餘何望哉神諾而隱或

時一僧來詣見^ニ其祭供^ニ海中群鱗不^レ知^ニ其數^ニ心謂和光本地佛并也專^ニ慈悲^ニ戒^ニ殺生^ニ而今此供物亦可以疑^ニ因心祈^ニ之神託云世之不^レ知^ニ因果^ニ恣^ニ殺屠^ニ而有^レ罪者欲^レ供^ニ於我^ニ故讓^ニ罪于我^ニ其罪惟輕其生類報命盡而爲^ニ祭供^ニ以此因緣^ニ爲^ニ佛道方便^ニ是以令^レ取^ニ其報命已盡之鱗類^ニ以祭^ニ我矣於^レ是僧解^ニ其疑^ニ 神社考 沙石集

○神託 吾國の人吾名をむかししらざりし故に今の世に生れて賤きにくるしめり吾天上にしては日の神也中央にはこゑをあらはし大地の内にかくれては萬物を生じ海の中には八大龍王となり四海に其とくをほどこしたとへば貧乏の衆生一度參詣して我に其姿をみせ思ひをのべていはんものをば其人により一七日二七日三七日或は三年七年のうちに願の輕重にしたがひ必心のごとくならしめんされ共直からぬ者のたのめるぞくるしき大悲のちかひすてざればかれも又すつる事なし 倭論語

御位 貞觀九年十月十三日從四位上 國史

○安藝嚴島の社は後は山深くしげり前は海左は野右は松原也東の野の方に清水よく流たりこれを御

聲吉凶也仍誓神士女輻輳如市

○仁壽二年二月備中國吉備津命神列三官社同年七月奉充三封廿戸文德實錄

御位 貞觀元年正月廿七日二品神階記

○神託 天照神のをしへの祓ひとたびはらへば百日のさいなんをのがれ百度の祭文は千日の咎をつる千世萬歳をへても天神のめぐみはつきじと生世々にたつときは天地のおん仰ぎても猶あまり有は神徳にこゆる事なし 倭物語

●真金吹と讀し吉備中山并細谷川等此わたりに近

き名所なり

古今大歌所御歌

まかねふくきひの中山帯にせる

細谷川の音のさやけさ

後拾遺

誰か又年へぬる身をふり捨て

清原元輔

金葉

吉備の中山こえんとすらん

鶯の鳴につけてやまかねふく

顯李

新古今

吉備の中山春を知らん

ときはなる吉備の中山をしなへて

讀人不知

千年を松の深き色哉

新千載

思ひ立吉備中山遠くとも

三善資連

細谷川の音つればせよ

○渡社 沼隅郡鞆ニ有リ 祭神 船玉命

猿田彦神也ト部兼邦説

傳テ云神功皇后三韓御退治發向ノ時此浦ニテ船

楫ヲソロエ玉ヒ兵食ヲツミソナエ玉フ渡ノ地ニ

シテ船ノ鞆ヲ以テ神璽トシ玉ヒ舟玉神ヲ祠玉ヘ

リ是故此ヲ鞆ト云フ ○鞆浦歌ニヨメリ

新勅撰

鞆の浦の磯のむろの木みる毎に

大納言旅人

逢みし妹は忘れんやは

○疫隅社 所同レ上 號ニ鞆祇園

祭神 三座 山城祇園ニ同シ 祭六月十四日是社

傳備後風土記見ユ今彼國ニ有リ疫隅社ト云フ云

々風土記上ニ見エタリ

安藝

○嚴島社 佐伯郡ニ有リ 祭神 市杵島姫

○天照太神與ニ素戔嗚尊ニ誓生ニ三女ニ内市杵島姫也

一宮記 系圖傳上ニ見

天照太神以ニ素戔嗚尊八坂瓊之曲玉ニ化生神號ニ市

杵島姫命ニ是居ニ于遠瀛ニ者也 日本紀 傳系上ニ見

推古天皇五年十一月十二日内舍人佐伯鞍職ト云者

諸社一覽第八

備前

○石上社 赤坂郡岡山傍三里許ニ有リ 祭神 布都

御魂當宮素戔嗚尊斬蛇之劍號韓鋤也祭以爲神
靈神紀所謂其素戔嗚尊斷蛇之劍今在吉備神部
許又云其斷蛇劍號云蛇之龜正此在石上者是
也因功則名龜正據形則號韓鋤所謂異名同
物崇神天皇御宇奉遷大和國山邊郡啓蒙

○酒折社 岡山石關ニ有リ 祭神一座

日本紀日本武尊自日高見國還之西南歷常陸
至甲斐國居于酒折宮時舉燭而進食是夜以
歌之問侍者云珥比磨利菟玖波塢須擬氏異玖用
加禰菟流諸侍者不能答言時有秉燭者續皇
子歌之末而歌云伽餓奈陪氏用珥波虛々能用比珥
波苦塢伽塢卽美秉燭人之聰而敦賞

案酒折神者秉燭之人也惜乎史失其姓名也是
歌世所謂連歌之始也 啓蒙

備中

孝靈天皇第三子雅武彥命以功封于備之中
州其後胤吉備大臣也

○吉備津 賀屋郡ニ有リ 祭神 吉備武彥命

備前備中備後三國一宮也 一宮記

○神名註人皇第七孝靈天皇御子彥五十芹命亦名吉
備津彥命是說非也孝靈三世皇子吉備津命也日本紀
與風土記符合 景行天皇御宇彼御子吉備武彥命
罷吉備國如備中風土記者賀夜郡伊勢御社東
有河名宮瀨川河西者吉備建日子命之宮造此三
世王故之名宮瀨勸請年紀未分明

按神祇正宗云人皇卅四代推古帝御宇元年現座

社家說云

本宮 孝靈帝 去本殿南二町

本殿 吉備武彥 去本殿巽七町餘

岩山 地主神 去本殿巽七町餘

內宮 孝靈帝后 同

新宮 吉備津彥 去本殿南二町許

釜殿 去本殿西一町許

傳聞若人有祈願則來于當宮就神官卜鳴

諸社一覽第八目錄

備前石上酒折

備中吉備

備後 渡 疫 隅

安藝
嚴島

周防 玉祖 高峯 山口 朝倉

長門 住吉 和布 龜山

紀伊 日前 熊野 粟嶋 丹生 四所

七社 五十 玉津

淡路
伊弉

阿波大麻

讚岐 田村 崇德 白鳥

伊豫 大山 湯宮 新田

土佐都佐

筑前 箱崎 宗像 志賀 大己 宇瀨 香椎 宰

府綱場壹伎

筑後 高良

肥前 淀姫 松浦 鏡宮 櫛田 板櫃

肥後
阿蘇

豐前 宇佐入幡 同 賀春 西寒

日向
都農

大隅 鹿兒 高千

薩摩
枚聞

壹岐手長

對馬和多

已上諸國畢

諸神靈驗

良山アリ又二三町ノ東ニ眞鳥スムト詠ゼシ宇那手森アリ

○勅使宮 津山府中ニ有リ 祭神大日靈貴

鳥居額ニ品道晃親王筆也

御位正一位當宮天文中火災宣命燒亡故間ヨ

戸川戸字或作苦又作吉田兼連寛文三年八月又改之在ニ三瀬之名上瀬曰ニ早瀬下瀬

曰ニ弱水ニ中瀬曰ニ廣瀬宮ノ南ニ流ル

○大隅宮 津山城下五町東ニ有リ 祭神大己貴命

相殿神號ニ少宮少彦名命 此神古ヘハ別宮ニテ今

ニ少宮谷ト云所アリ

鎮座年記未ノ考

白神宮 田中郷津山ニ有リ

祭神 月讀尊 又有ニ五座之說未ノ考之

傳聞當社大明神者天神之皇子月讀尊之垂跡也美作

國七郡内西北條郡田中郷清淨之靈地而有ニ古蹟

云月和田有ニ清水其邊堆ニ舊墳號曰ニ潮神厥后

遷壇正開ニ月殿奉仰ニ白神其由來尙矣

日本書紀天文曰伊弉諾尊勅任三子曰天照太神者

可ニ以治高天原也月讀尊者可ニ以治滄海原潮之

八百重也素戔鳴尊者可ニ以治天下也因茲觀之

會ニ合月盈獻潮之滿干然則月和田原之潮神者治ニ滄海原之潮神一體分身無雲月之白神之謂也神物寶形之月影勿開蓋勿視焉

諸社一覽第七終

浦移_ニ廣峰_一者蓋此地也 啓蒙

○人丸社 明石郡明石大倉谷ニ有リ 祭神柿本人丸

○柿本人麻呂者石見國人也或云未詳其何許人也善詠_ニ和歌_一多載_ニ萬葉集_一焉紀貫之云先師柿本大
夫者高_ニ振神妙之思_一獨_ニ步古今之間_一有_ニ山邊赤人
者_一並和歌之仙也藤原敦光作_ニ柿下朝臣人麻呂畫像
讚云大夫姓柿下名人麻呂蓋上世之歌人也仕_ニ持統
文武之聖朝_一遇_ニ新田高市之王子_一吉野山之春風從_ニ
仙駕_一而獻_ニ壽明石浦之秋霧思_一扁舟_ニ而綴_ニ詞誠是
六義之秀逸_一萬代之美談者歟方今依_ニ重_ニ幽玄之古
篇_一聊傳_ニ後素之新樣_一因有_ニ所_一感乃作_ニ讚焉其辭
云倭歌之仙受_ニ性于天_一其才卓爾厥鋒森然三十一字
詞花露鮮四百餘載來葉風傳斯道宗匠我朝前賢涅而
不_ニ緇_一鑽_ニ之彌堅鳳毛少_一彙麟角猶專既謂_ニ獨步_一誰
敢比_ニ肩_一 續本朝文粹

○人丸者官位不_レ見天智御時人也 拾芥抄

○柿本姓天足彥押人命之後也 姓氏錄

○大學頭敦光人丸讚云大夫姓柿本名人丸蓋上世之
歌人也仕_ニ持統文武之聖朝_一遇_ニ新田高市之皇子_一
古今著聞集同云元永六年六月十六日修理大夫顯季朝

臣六條洞院の亭にて柿本の人丸の供を行ひけり件
の人丸の影あたらしく圖繪するところ也左の手に
紙をとり右の手に筆を握て六句ばかりの人也其上
に讚を書く

○如_ニ萬葉集_一人丸始_ニ自_ニ天武_一至_ニ文武_一袋草子萬葉
第二卷云柿本朝臣在_ニ石見國_一臨_ニ死時自傷作歌一
首 鴨山ノ岩根シマケルワレヲカモシラスト妹ガ
マチツ、アラン同上

此歌拾遺集ニ入レリ少キ違アルカ

いも山の岩ねにをける我をかも

しらすて妹か待つゝあらん

○三月十八日は人丸の忌日にてむかしは和歌所に
て毎月十八日に歌の會ありし 徹書記物語

美作

和銅六年四月割_ニ備前國六郡_一始置_ニ之云々

○中山社 苦東郡國府津山北一里ニ有リ

祭神 大己貴命 一宮記

貞觀十七年四月五日正三位 國史

○二宮 津山西半里餘ニ有リ 祭神傳記未_レ考

此所風景無_レ類 前_ニ川アリ名負久米川 久米佐

有_レ綠生_ニ於日域_ニ請爲_レ臣矣時大和州有_ニ洪水之變_ニ初瀬川大漲有_ニ大甕_ニ流來止_ニ于三輪明神廟前_ニ土人開_レ之視則有_ニ一男子_ニ身體如_レ玉土人奏_レ之天皇云所_ニ夢見_ニ者此人也舉養_レ之賜_レ姓云秦氏_ニ其才智與_レ年相長至_ニ十五歲_ニ授_ニ大臣位_ニ而奉_ニ五朝_ニ以至_ニ推古女主之時_ニ豐聰太子監國祭_ニ祀天地神祇_ニ以布_ニ安國利民之政_ニ因作_ニ六十六番之面_ニ命_ニ河勝_ニ弄_レ假貌_ニ真遂於_ニ橘內裏紫宸殿前_ニ令_レ作_ニ此伎_ニ由_レ是四海波穩萬民康樂也太子以_ニ其神樂_ニ折_ニ神字_ニ名_レ之云_ニ申樂_ニ河勝遂入_ニ攝津州難波浦_ニ遊乘_ニ一小舟_ニ任_ニ風之所_ニ行而舟浮_ニ西海_ニ著_ニ播磨岸_ニ土人聚視_ニ其形_ニ非_ニ常之人靈威可_レ畏矣共謀立_ニ神祠_ニ祭_レ之云_ニ大荒明神_ニ 神社考

○大酒社 赤穂郡坂越浦ニ有リ祭ル處 弓削守屋大連

○物部尾與ガ子也三十一代敏達天皇ノ御宇百濟并新羅國ヨリ佛像經論ヲ奉ル天皇ハ文ヲ好テ佛法ヲ信セズ天皇ノ御甥厩戸皇子并馬子大臣甚好テ崇敬ス此時疫病ハヤリケレバ守屋奏聞シケルハ是馬子ガ佛法ヲ信ズルタ、リナリ宜佛法ヲ斷絶スベシト

申ス天皇然ルベシトノ玉ヲ守屋即ミヅカラ寺エ赴キ堂塔ヲ打ヤブリ佛像ヲ燒ステ僧尼ノ衣ヲハギテ追放ツ馬子大臣ハ泪ヲ流シテ悲ム其後馬子病ニオカサレケレバ奏聞シテ己ガ病佛力ニアラズバ愈ガタシト申ス天皇汝獨佛法ヲ行ヘトユルシ玉ヲ馬子此ニヲキテ又佛法ヲ再興ス 天皇崩ジ玉ヲ欽明天皇ノ第四子即位シ玉フ是ヲ用明天皇ト號ス即位ワヅカニ二年ニシテ病ニカ、リ玉ヲ佛ニ祈ト議ス守屋并ニ中臣勝海コレ無益ノ事也ト諫ム馬子タレカ勅定ニ從ハザラントテ豐國法師ト云フ者ヲ内裏エ呼ヨセケレバ守屋睨怒天皇ノ御子厩戸皇子ト馬子ト甚睦システニシテ天皇崩ズ守屋ヒソカニ天皇ノ弟穴穗部皇子ヲ立ントス馬子從ズ穴穗部ヲ殺ス遂ニ厩戸并諸皇子ヲカタラヒ軍ヲ起シテ守屋ヲ攻ム守屋タ、カヒテ三度カツ其後跡見赤檮ト云フ者ノ矢ニアタツテ守屋死ス一族ミナ亡ブ厩戸皇子ハ聖德太子ノ事也 已上王代一覽ノ

○岩屋社 赤石郡中庄ニアリ 祭神三座 疫神里諺云守疫神也

案廿二社註式所謂牛頭天王初垂ニ跡於播磨明石



按陰陽二神如夫婦者謂大己貴命少彥名敷夫

古來相傳有此義即生石村主之哥云大汝少彥名

乃將座志都乃石室者幾代將經 啓蒙

○曾禰社 曾禰村海濱松原中ニ有リ石寶殿ヨリ半里

許坤ニアタレリ 祭神 菅家

里謠云菅家左遷之日於此地折松枝而埋土中

矢云若帝悟讒臣之僞予有飯洛者敢勿枯矣遂

生長而枝葉生也仍作神籬云天神 啓蒙

○佐用社 佐用郡ニ有リ 祭神 佐與媛

肥前國松浦郡有女名松浦佐與媛大伴辰彥女大

伴佐提彥妻也彼彥爲渡唐出松浦川湊于時佐

與媛登松浦山正巔遙望佐提彥船々漸去行不

堪別思拔出領巾而振之仍此山號領巾庵山

或云佐提彥遂不歸而死于唐佐與媛聞以悲歎泣

血之餘來而死此地云故祭以爲神 峯相記

嘉祥二年十一月播磨國佐用郡佐用津姬神預官社

續日本後記

○大荒社 所未考 祭神一座 秦川勝之靈

秦河勝者化生乎人王三十代欽明天皇之御宇者也

天皇一夕夢有神童言云我是秦始皇之後身也以

天平六年甲戌賽_ニ經營之宿禰_一 全文略之

改曆雜事記云聖武天皇天平五年三月十八日吉備歸朝於_ニ播州_一逢_ニ天王_一圓融院御宇天祿三年壬午天王從_ニ西峯_一遷_ニ廣峯_一 已上啓蒙

攝社 井別宮

白幣社 當宮始影向之地也今爲_ニ吉備靈社_一

軍殿 大己貴命卽祇園後見殿本社也

地養社 蘇民 護王所 祇園卷池本社

冠者殿 天祖父社

九部神穴

○惣社 同郡姫路侍町ニ有リ 祭神大己貴命

額云軍八頭正一位惣社伊和大明神

按_ニ鳥居刻彫_一傳聞當社者以_ニ大名持命_一奉_レ崇云々

里謠云七月既望兵士會集爲_ニ軍旅之威儀_一云古老

相傳云欽明帝御宇師安元年六月十一日當社影向

也稱_ニ一國守護_一者天平寶字年中也又按_ニ峯相記_一

云天平寶字八年異賊襲來卽遣_ニ藤原貞國_一追討

云々恐者當社貞國凱旋之日祀焉 已上啓蒙

○荒田社 多珂郡ニ有リ 當國二宮也

祭神 少彥名命

二宮荒田大明神者天平勝寶元年己丑五月七日女體赤裝而來臨卽少彥名命也延曆年中將軍田村麻呂尊_ニ崇此神_一而定_ニ神田_一又以_ニ勅使_一奉_レ授_ニ正一位_一峯相記

○靜窟 姫路鹿兒間山中ニ有リ 稱_ニ生石子大明神_一

祭神二座 大己貴命 少彥名命也 神殿石也故_ニ

號_ニ石寶殿_一是天女ノ造處也御戸ノ口ハ地ニ成口ノ

開ベキ所棟有リ實ニ神變ニアラズシテ如何成ン哉

縱數万人トイフトモ動シ難キ者也神作ノ時斫碎ト

テ傍ノ山ニ碎石充滿セリ予播州名所歷覽ノ時拜見

ス其後不思議ニシテ當社緣起ノ寫ヲ得タリ今此ニ

ハ略ス圖_{左ニ}アリ○峯相記 生石子高御倉者陰陽二神如_ニ

夫婦ニ而顯坐時天女降擬_レ造社既及_ニ黎明_一也不_レ暇_ニ

起立_一遂上夫去耳卽今石寶殿是也生石真人歌所謂

志都石室者蓋謂_レ此也

カリ實朝ノ縁者タルニヨリテ赦サル泰時々房六波羅ノ館ニ居テ賞罰ヲ沙汰ス是兩六波羅ノ初ナリ七月新帝懷成位ヲスベリテ九條院エシリヅカル同月泰時ガ嫡子時氏奉行ニテ後鳥羽院ハ隱岐國エ遷サレ玉フ順德院ヲバ佐渡國エ遷シ奉ル後鳥羽ノ御子雅成親王ハ但馬ノ國エ賴仁親王ハ備前ノ國エ流サル土御門院ハ今度ノ事ヲイサメラレシカバ其マ、ニ都ニヲキ中ベキト沙汰有リシカドモ是モ土佐國エ遷シ奉ル年經テ阿波エ遷幸後鳥羽院遷嶋ノ間廿一年四條院延應元年二月廿二日彼嶋ニテ崩ズ 王代一覽

山陽道

就ニ山南ニ而行西故云ニ山陽ニ成務天皇始分ニ國縣一時山陽云ニ影面ニ也山陽之名始出ニ于此云々

播磨

舊事紀云ニ針間ニ昔景行天皇二年立ニ播磨稻日太郎姬ニ爲ニ皇后ニ生ニ日本武尊ニ播磨名始

出ニ于此云々

○伊和社 完栗郡ニ有リ 祭神

大己貴命御魂 一宮記

欽明帝師安元年甲申二月十一日始現座 當社説○一宮伊和太明神者坐ニ完栗郡伊和郷ニ即素戔嗚尊第一皇子大己貴命是也昔神功皇后三韓進發之日於ニ當社ニ有ニ敵軍伏誅之約ニ而凱旋遂賽禱其後欽明帝治廿五年託ニ伊和恒郷ニ云可レ祭ニ朕於此地ニ蓋有ニ上代之幽契ニ哉翌日忽平森中双鶴刷レ羽佇立于ニ時恒郷奏ニ 上帝ニ營ニ寶基ニ被レ寄ニ神戶ニ併定ニ當國一宮ニ而被レ授ニ正一位 峯相記

○廣峯社 飾磨郡廣峯山ニ有リ 祭神 三座

素戔嗚尊 稻田姬 八王子 山城國祇園本社也 三座傳系上ニ見エタリ

社記云人皇四十四代元正帝養老元年吉備眞備人入唐其後四十五代豐稷彦天皇天平五年癸酉歸朝之日止此地ニ偶佇ニ立船舳望ニ乾維者山後有ニ山峻高支天深谷邊腰穿崖岸之形 今白幣 是也云々公所ニ誘ニ感情ニ而凝ニ眸則有ニ白幣ニ時々放レ光公怪以徐々登臨也老翁現出云吾是素戔嗚命也爲ニ守ニ諸民ニ保ニ百王ニ來ニ臨此峯ニ尙矣雖ニ然與ニ時變衰知者幾少也汝是傑俊人速飯奏ニ帝公驚下ニ山發ニ船赴ニ華京ニ攀ニ玉階ニ拜ニ龍顏ニ後奏ニ此旨ニ帝忝被レ下ニ倫命於吉備ニ而同御宇

高倉院第四ノ子諱ハ尊成母ハ藤原殖子七條修理大夫信隆ガ娘也在位十五年順德院ニ位ヲユヅリ玉フ承久三年四月ニ鎌倉ヲ滅サント思召立事アリ在位ノ時ヨリ常ニ武家權ヲ執テ王威ノ衰ルヲ憤リ位ヲ讓テ後倭歌管絃ノ暇ニハ武藝ヲ專ニナラハセ院中ニ北面ノ外ニ侍ヲ置テ西面ト號シ實朝薨ジテ後義時其家臣トシテ天下ヲホシヒマヽニスルヲ怒リ玉フ處ニ信濃國ノ士仁科盛遠トイフモノ西面ニ召レケレバ義時其領地ヲ沒收ス上皇攝州倉橋庄ヲ白拍子龜菊ニ賜フ其地頭龜菊ヲアナドル義時ニ仰セテ其地頭ヲ改易セシム義時シタガヒ奉ラズ上皇彌逆鱗アリテ此比在京シケル武士三浦胤義ガモトエ北面秀康ヲツカハシ義時追討ノ事ヲ議セラル胤義同心ス是ニヨリテ密ニ軍兵ヲ召アツメラル土御門院ハ此事無用ノ由イサメラル主上ハ同心シ玉フ同月主上位ヲ御子懷成ニ讓ル此時後鳥羽院ヲ一院トモ本院トモ申シ土御門院ヲ中院ト申シ順德院ヲ新院ト申ス本院新院心ヲ一ツニシ玉テ義時追討ノ事ヲ議セラル五月本院高陽院ニ渡御アリテ西園寺右大將公經其子中納言實氏ヲ召テ弓場殿ニオシコ

メラル此父子義時ト親シキニヨリテナリ伊賀判官光季ヲ召ケレトモ參ラズ胤義秀康佐々木廣綱大江親廣等在京ノ武士ヲ遣シ攻ラレケレバ光季防ギ戰ヒテ自害ス此ニ於テ中納言光親ウケ玉ハリテ院宣ヲ書テ五畿七道エ義時ウツベキ旨ヲフレッツカハサル關東ニハ押松ト云フ者御使ナリ胤義私ニ使者ヲ以テ其兄三浦介義村ガ許エ義時討ベキ由ヲ申ツカハス義村同心セズ胤義ガ狀ヲ義時ニ示ス押松モ尋出サレテ捕ラル即チ二位禪尼ノ前ニテ義時并ニ廣元善信評議シ京都エ軍兵ヲ指遣ス武藏守泰時相模守時房并ニ足利義氏三浦義村等十萬騎東海道ヨリ上ル武田小笠原小山結城五萬騎ニテ東山道ヨリ上ル義時ガ次男朝時等四萬騎ニテ北陸道ヨリ上ル六月泰時時房路次ノ官軍ヲ破リ美濃尾張ニ到ル官軍ヲ分テ宇治勢多所々エ遣シ防ガル、トイヘドモ東兵強クシテ泰時ハ宇治ヨリ入洛シ時房ハ勢多ヨリ攻入ケレバ胤義并ニ官軍ニシタガヘル武士佐々木廣綱以下或ハ討レ或ハ自害或ハ生捕レテ殺サル光親并ニ大納言忠信中納言有雅藤原宗行以下近習ノ廷臣トラハレテ關東エ下向路次ニテ殺サル忠信バ

○時長髓彦乃遣行人言於天皇云嘗有天神之子乘天磐船自天降止號云櫛饒速日命是娶

吾妹三炊屋媛遂有兒息一名云可美真手命日本紀

○御位 貞觀十七年十月己未正五位上 國史

○神託

倭論語

諸人の心清くは我も又

かけをうつしてつねにかたらん

隱岐

和名也或云伯耆出雲石見等之沖國也故云

沖國云々

○由良姬社 智夫郡ニ有リ 祭神須勢利姬神 大己

貴命嫡后 一宮記

素戔嗚子大己貴命也 系圖左ノ如シ

大己貴命此ヨリ前ノ系圖上ニ見ユ

攝津姬神

須勢利姬神

五十猛神

大歲神

稻倉魂神

大屋津姬神

事八十神與大己貴神兄弟各有欲婚稻羽八上姬之心八上姬不聞事八十神言而將嫁於大己貴神因斯事八十神急欲殺大己貴神大己貴神

到素戔嗚尊所坐之根國而又以素戔嗚之女須勢利姬命爲妻其八上姬所生之子者名木俣神又

名御井神舊事紀心

○神託 諸人よ二六時中一息の間も神明の心ならぬはなしかくれたる事の外にもるは世界みな天照ところのひとつ成ゆへなりつたなくて益人が自

他のおもひより萬のくるしみは有にこそ倭論語

○離火社 海部郡島前ニ有リ 祭神一座

大日靈貴 天照皇太神也

按内侍所三十神第一也仍内侍所三十神儀式載焉然延喜帝已來制斷之書也故不舉記文也予惟離火神或爲大日靈貴又號午比留尊者於周易離爲中女而陰中之陽也大日靈貴陰神而有顯露之政故呼爲離火神歟啓蒙

○此社ヲ離火ト稱シ奉ル事往還ノ船闇夜ノ比惡風ニアヒ或ハ沙ニ蕩フニ船人身ヲ清メテ此神社ノ方ニ向ヒテ離火ヲ祈念スレバ忽然ト火起テ大ナル炬火ノ如ク也其時東西ヲワキマヘ船ヲ直シテ岸ニ着ク事ヲ得ル也誠ニ奇異ノ神功也

○後鳥羽社 島前ニ有リ 祭神 後鳥羽院

崎者出雲國造神而大己貴命之父也。杵築者天下經營神本朝醫家大祖也。其神功之大者悉載神紀也。佐田者吾國開闢祖而素戔嗚命之母也。蓋稱大者讚其德也。間杵築者大己貴社也。故號大者非也。此外有大庭八重垣等神社皆屬杵築也。今又畧之。已上啓蒙。

○神託 益人等吾神國のおきてを知らで外にころをうつしなば神明のあたなればわがけんぞくの神をつかはし其玉の緒をうばいとらん諸の神をまつらんに吾をさきにせぬ衆生のねがひはよもとげじと思ふ。倭論語。

攝社

氏神社 神殿傍ニ有リ神主ノ祖神也

田中 神殿ヲ去テ二町許深祕ノ社也

幸神 已上三社北殿攝神

惠曇社 五十田狹社 已上二社南殿攝神

神菟社 屬正殿

○手間社 意宇郡筑野村間瀉海中ニ有リ

祭神一座 少彥名ノ命 所ノ俗天神ト濁呼デ菅原天神ニ混ズルハ非也天真ト清デ讀ムベシ

○神代卷云大己貴命行到出雲國五十狹々之小汀而且飲食是時海上忽有三人聲驚而求都無所見頃時有一箇小男以白斂皮爲舟以鶴鷄羽爲衣隨潮水以浮到大己貴神即取置掌中而翫之則跳囓其頰乃怪其物色遣使白於天神于時高皇產靈尊聞之云吾所產兒凡有一千五百座其中一兒最惡不順教養自指間漏墮者必彼矣宜愛而養之此即少彥名命是也。啓蒙。

○土師社 出雲郡土師村ニ有リ 祭神 菅家

舊史所載說天穗日命十有四世孫云野見宿禰居出雲國垂仁御宇與常麻蹶速角力而贏當是時人死者多殉帝甚哀之野見宿禰採埴造像以代殉帝大喜之賜土師姓云蓋菅神者土師之裔也故此邑祀此神歟。啓蒙。

石見

此國有三角山有岩崎山有岩奈仁山皆嶮石之國也故號石見國云々。

○物部社 安濃郡ニ有リ 祭神一座

宇摩志間知命 饒速日命子 一宮記
系圖上ニ見ユ

此所謂伊弉諾伊弉冊也 神皇實錄

南素戔嗚尊 神紀所謂伊弉諾尊伊弉並尊生素戔

島傳系上見

北天津彥火瓊杵尊 社記 傳系上見

或問佐太本宮往々爲伊弉諾何子之言相反耶云
名神記當國之撰書而其語不誣且當宮至今有
神在之祭祀則縱雖不抱記文爲伊弉並尊
明矣

○云神在祭者奈何云社說云伊弉冊尊功既成後
以十月神避矣御子素戔嗚命幼而悲其喪妣遂
來于此地也於是簾川上聞有害人之蛇徒
行制之其言載以明白也是以雖星霜久風曆數
更每歲十月當宮與御崎錦紋小蛇浮海上來
而未失其信也且伊弉並尊依爲群神之尊妣
當月一切神祇會集有神在之名

○問世傳十月稱神無月云諸神會集于出雲大
社而不在于舊地之故也或又云此蓋非正說
也是月出雲無異祭則諸神會集之說不可信云
奈何云夫天下稱神無之月出雲特稱神在之月
蓋稱陽月之類也十月陰極之時而雲州又極陰之

地也所謂諸神會集者蓋陽伏之義耶世俗於十一月
燒薪木於宮社而稱火燒是知迎陽之義
也然則會集于雲州者陽伏之謂也況又雲州有
箇々祭事也

○問每歲四月秋鹿嶋根兩郡輻輳成市神官奠
供醴而稱神代之遺風也是何據乎云社家者說
云表天孫降臨之威儀云初降日向之千穗遂
慕大祖廣而來臨于此所也故至今權神主大
來目命神胤而世以來目爲氏蓋來目部遠祖大
來目命爲神孫之從者今祭祀日有舞名猿田
彥也此皆降臨之遺習

○問雲州諸社造木偶人稱隼人國家將有凶
災則或落廡下或云去他方此何遺風云神紀
云火酢芹命苗裔諸隼人等至今不離天皇宮牆
之傍代吠狗而奉事者也矧佐田社北殿瓊杵
尊也則以隼人爲護衛之義有所據耶其去
宮牆轉落廡下者爵監衛之無賴之兆也本朝
神代之遺俗流風存者出雲伊勢也志神道者不
可忽焉

○案名神記以已上三宮稱大社誠有故哉御

具一夫須_レ噉八十木種皆能播生_{○今按}居_ニ熊成峯_ニ而遂入_ニ根國_ニ者矣_{日本紀}

{社下}大日靈貴{天照大神}當國大日靈貴產生之地而今又有_ニ日神

垂跡_也故名_ニ日御崎_{一名神記}

相殿五座 正哉吾勝尊 天穗日命 天津彥根命

活津彥根命 熊野樟日命

已上神傳系上_ニ見エタリ

○問上社配_ニ女_下社合_ニ五男_{是何據乎云神紀}

所謂天照太神勅云原_ニ其物根則八坂瓊之五百箇

御統者是吾物也故彼五男神悉吾兒乃取子養焉又

勅曰其十握劍者是素戔嗚尊物也故此三女神悉爾

兒便授_ニ之素戔嗚尊_{云是上下三合祭之緣} 啓蒙

○問當宮有_ニ紋石者_{石面有_ニ栢葉_{如_ニ良工雕刻_ニ}}

而雖_レ爲_ニ數片_{其紋猶存也相傳稱_ニ神紋_{是也否}}

云按_ニ名神記_{出雲國日崎山有_ニ栢葉紋形石_{神代}}

昔平_レ國而後登_ニ熊成峯_{爲_ニ栢占_{云吾欲_レ住_ニ於栢}}

葉之所_{止也}遂隨_レ風止_ニ於此地_{故至_レ今示_ニ其幽}

契_{全文}略_之問宮祭宜每歲十二月除夜半雖_ニ甚雨大雪_二

揭_レ裳帶_{劍入_ニ山中_{捧_ニ所_帶之劍於天神_{也及_ニ}}}

黎明_{下_ニ於山_{嘗雨雪不_レ霑_ニ一點_{也是何遺風}}}

耶云傳聞昔八束水命斬_ニ八岐蛇_一及_レ尾而及缺卽

壁而視_レ之有_ニ一神劍_{此不_レ可_ニ以私用_{也乃遣_ニ}}

五世孫天葦根命奉_ニ於天_{蓋當宮祭宜葦根命之神}

脈也仍于_レ今有_ニ天神奉劍之遺習_{乎此外十月神}

無月祭祀并除夕禮奠等姑舍_レ之_{已上啓蒙}

○攝社 天葦根神社 號_ニ波屋鷄明神_{神主祖神也}

在_ニ出雲鄉宇料_一

大歲社 同鄉ニアリ 蛭兒社 在_ニ當所_一

日臺社 此所隱丘神祕也 大土社 粟津鄉ニ有リ

荒魂社 蛇山ニ有リ 宇賀社 園村ニ有リ

○佐陀社 秋鹿郡ニ有リ 祭神四座 正殿二座南北

二殿各一座ナリ

正殿伊弉冊尊 社記

並尊持_ニ天瓊矛_{御_ニ大八嶋_{而有_ニ夫婦之道_{而神功}}}

終之日伊弉諾尊隱_ニ於淡海國日少宮_{伊弉並尊崩_ニ}

當國_{遂葬_ニ足日山麓_{也神紀所謂比婆山者蓋此地}}

哉矣然後垂仁天皇五十四年乙酉四月始合_ニ祭伊弉

諾尊_{爲_ニ二座_{全文略之}} 名神記

從_ニ國常立尊_{至_ニ惶根尊_{天神六代之間則有_ニ名字_一}}

未_レ現_{尊形五位神坐其後合_ニ陰陽_{有_ニ男女形_{云々}}}

小汀問大己貴云皇孫君臨此地汝當須避大己貴對云我子事代主神在於三穗之碕以釣弋爲樂以熊野諸手船載使者稻背脛遣之間之事代主云今天神有此勅問我父當奉避吾亦不違因於海中造八重蒼紫籬蹈船柁而避大己貴云我子既避吾亦當去如吾禦之國內諸神必當同禦今我奉避誰敢不須授所杖廣矛於二神云吾以此矛卒有治功天孫若用此矛治國者必當平安遂隱百不足之八十限啓蒙

神書抄云八十隅天日隅宮者其謂出雲國杵築宮即是大社也又云出雲在乾方日之所入也夏至之日出於寅入於戌故以杵築爲日隅宮一說此宮在天上故云天日隅宮○神祇令註出雲大社者素戔嗚尊也故朝廷及社家此社祭素戔嗚尊矣而日本紀見之大社者天神爲大己貴所造供也素戔嗚尊行於根國故於中國無降迹後世祭大己貴故合祭素戔嗚尊者也○余案素戔嗚尊建出雲清地宮娶稻田姬生大己貴以手摩乳脚摩乳爲其宮首則大社爲素戔嗚尊亦有據歟以清地宮爲杵築宮亦復爲是已上神社考

○神傳系上ニ委シ

○攝社 熊野神宮 在意字郡 仁壽元年九月乙酉加從三位實錄

天穗日神社 在能義郡

三穗社 在島根郡

○日御崎 同郡大社之西北二里許ニ在リ

祭神二座 上社 下社有リ

社八束水神 八握髮尊者素戔嗚尊別稱也蓋八握髻生之緣矣名神記

○相殿神三座 田心姬 湍津姬 嚴島姬

是時素戔嗚尊自天而降到於出雲國簸之川上○今按中略歟

娶稻田姬遂到出雲之清地焉於此建宮乃相與

遵合而生兒大己貴神因勅之云吾兒宮首者即脚摩

乳手摩乳也故賜號於二神云稻田宮主神已而素

戔嗚尊遂就於根國矣又云素戔嗚尊云韓鄉之島是

有金銀若使吾兒所御之國不有浮寶者未是

佳也乃拔鬚髻散之即成杉又拔散胸毛是成

檜尻毛成被眉毛是成櫛樟已而定其當用乃稱

之曰杉及櫛樟此兩樹者可爲浮寶檜可爲

瑞宮之材甲被可爲顯見蒼生與津葉戶將臥之

○神託 諸人の世の人のたすけとならん事をつねにねがひもしまなびもしあらん者をばわれつねに神力をはげまして日本のかんだからとせんと徒に世の人の國の産をついやさんをば必我かれをしてそむけてうしなはん 倭論語

○大山社 伯耆國大山大智明神者稱徳天皇時有三神託一因勅建社山下之砂夕昇山朝下山其前岡有

松枝必指神前云 神社考

○伯耆國に大山といふ所に大智の明神と申神おはします利益のあらたなる事げにあしたの日の山のは出るがごとくに侍り御本地は地藏并にておはしますとぞむかし俊方といひける弓取野に出て鹿を獵けるほどに例よりも鹿おほくて皆おもひの外にゐとゝめにけり扱此しかどもをとらんとすれば吾持佛堂に千體の地藏をすへ奉りつる五寸の尊像に矢をゐ立て鹿とみつるは地藏にぞおはしける其時俊方あさましく悲しくおぼえて地藏にとりつき奉りてなきおめきけれどもさらに甲斐なしやがて手づからもとゝり切て我家を堂につくりてながく殺生をとどまり侍りにき去程に稱徳天皇の御時社に

いはひ奉れといふ託宣侍りてやがて堂を社になして大智明神とぞ申侍る利益あらたなれば彼所の砂たにもゆふべにはさかのぼりてあしたにくだりて參下向の相をしめす彼岡の松は明神の御方にむかひてみなびきける歸依のすがたをあらはし侍るとかや心なき草木砂までも歸依し奉るわざげにありがたくぞ侍る此地藏并の御事は昔廣目女と申侍りし時母戸羅善現のために堅固の大願をおこしおゝくの宿願を立て修しあがりましゝて今等覺無垢の菩薩とは成給へり 下略 撰集抄

出雲

所_レ以名_二出雲_一者八束水臣津野命詔_二八雲立出雲_一之故云_二出雲_一風土記 私八束水津野命ハ素戔嗚尊別名也

○大社 又杵筑 出雲郡ニ有リ

出雲國大社素戔嗚尊也 神祇令註

社家亦隨焉雖_レ然以_二根本_一推_レ之則天祖親以_二日隅

宮_一所_レ附_二與于大己貴命_一者也 當代社家尤以_二大己貴命_一一

之_レ按神紀所_レ載云天津彥々火瓊々杵尊爲_二葦原中

國之主也經津主神武甕槌神到_二出雲國五十田狹之

ヌレバ島子ガ形タチマチ若カリシ粧ヲ引更白髪ノ翁トナリケリツキニ其所ニテミマカリヌ時ハ天長二年ノ事ナリトナン、丹後風土記ノ心是ニ同シ

但馬

○粟鹿社 朝來郡ニ有リ 祭神 上中下三社

上社火々出見尊 中社籠神 下社豐玉姬神 一宮記

伊弉諾伊弉冊相生之兒大日靈貴月讀素戔嗚合三神也和銅元年戊申八月十三日筆取神部八島勘註言上 神名帳註

又說云以ニ出石ニ爲ニ一宮ニ云々

御位 貞觀十六年三月十四日正五位上 國史

神詠 倭論語

雲はれて嵐に松のひひきこそ

顯れ出し神の心よ

○出石社 同國府出石ニ有リ 祭神 古事記ニミエタリ

○應神天皇 御宇多遲摩比多詞娶ニ其姪由良度美ニ

生ニ子葛城高額姫命ニ故其天日矛持來物者玉津寶而珠二顆又振浪比禮切浪比禮振風比禮切風比禮又與

津鏡邊津鏡并八種也 此者伊豆志古事記 八前大神也

祭禮 九月九日

但馬國伊津師宮と云社にてなのりそといふくさ
新給遺物名部
千早振出石の宮の神の駒
人をのりそやたゝりもとする 重之

因幡

○宇陪社 法美郡ニ有リ祭神 武内宿禰也 一宮記

神名帳註云風土記云仁德帝治五十五年春三月御歲三百六十餘歲當國御下向於龜金ニ双履殘御隱所不レ知云々然則以ニ上伴年月日時ニ爲ニ垂跡之始ニ乎 神名帳註

○神託 もろ人の心は神のみあらかなれば直きと
きは神なり慈悲の心ふかければ即佛也神佛一如の
身を思ふべし 倭論語

伯耆

手摩乳足摩乳娘稻田姫八頭之蛇欲レ吞之故遁ニ入山中ニ子レ時母遲來姫云母來云々故號ニ母來國ニ後故爲ニ伯耆ニ

○倭文社 川村郡ニ有リ 祭神一座

下照姫神 大己貴命女 一宮記

傳系上ニ見ユ 鎮座年記未レ考

サシヌ女ノ云君シバラク目ヲフサギ玉ヘトイヒケレバ教ノ如ク目ヲフサギシバラクシテ開ケヨトイフ開テ見レバ在_レ見エザリシ島ニツキタリヤガテ船サシヨセ二人手ヲ取りテアガリヌレバ云フバカリナキ宮殿アリ玉ヲカザリ金ヲチリバメ本草鳥獸ニ至ルマデヨノツネメナレヌ風情更ニ心コトバノ及_レ處ニアラズ内ヨリアマタ出テ龜姫歸リ玉ヘリトテ迎ヘケリナヲ内ニイリヌレバ女ノ父母姉妹イデムカヘリ左右ニ侍ル女モ花ヲアザムク姿イヅレ劣リハナシ父母ノカシヅキ限ナク人間ト仙堺ノ物語ツキヤラズ百味ノ珍物ヲソナエ玉盃左右ニメグレリ仙女カハル_レ出テ思ヒ_レノ歌舞ヲナス其曲感情ニシテ思ヒヲ忘ル、計也カクテ夜ニイリテ夜モイタク更ヌレバ玉床ニ珊瑚ノ枕ヲナラベ海老ノチギリ淺カラズ是ヨリ嶋子蓬萊ニト_バマル事スデニ三年ニナレリ故郷ノ遠クヘタルコトヲナツカシク思ヒ父母ヲ思フ心切也此由女ニ語ケレバ女モコトハリニ至極シケリサレ_レ年月ノムツビヤランカタナク別_レ事ノ悲シサニ許モヤラズ亦ト_バメ_レン事モ叶ヒガタクアリシ契リハ夢現トモ分兼タ_バ

泪ニシヅム計ナリカクテ有ルベキヤウナクテ別モ今ニナリヌル比女一ツノ箱ヲ島子ニアタヘイカナ_ル事アリトモ此蓋ヲアケ玉フ事ナカレサル故ノサフラウヅトテアタヘヌイザ、ラバトテモトノ船ニ乗セテモトノ海ニ出ヌ女此度モ又シバラク目ヲフサギ玉ヘト云フ程ニフサギツ、暫シテヒラキ見レバ古郷水江ノ浦ニツキ彼女ハ_ハンシソレヨリタル_レ住_カコシ家路ニ歸ケレバ更ニ三年ノ昔ニモ似ズ萬更_カハテ見シ人獨モナシ如何ナル事ト思ヒ人ニ問ケルハ此ハ水江浦ソ_ンシヤウ其_ツニハ侍ラズヤ里人如何ニモサ云フ所也トサ侍ラバ水江浦島ガ家ハイヅクニ侍ルゾヤトイヘバ里人聞テソコハイカナル人ゾヤ遙昔ノ事ヲ問玉フゾヤ其浦島ガ子トヤランハ沖ニ出テ釣スルトテツキニ海ヨリ歸ラズト云傳ヘ侍ル今スデニ三百歳ノ昔トコソ聞ツレサル人ノユカリト聞ハ七世孫ニコソアメレトイヒケレバ島子オドロキ悲シム事限ナシ二度蓬萊ニカヘラマホシク思ヘドモ更ニ不叶心ヲサメン方ナシ彼別_レレシ時姫ノアタエタリシ箱ヲ今ハ形見ト詠ル計也此蓋アクル事ナカレト云シ詞ヲワスレテ蓋ヲアケ

國欲止誨覺給支

據此書、則雄畧已前以ニ與佐宮、爲ニ本宮、今以ニ

山田原、可レ爲ニ神在之神地、矣 啓蒙

千載旅
○與謝 海 浦 湊 蟹等歌によめり
思ふことなくてや見ましよさの海の 赤染衛門

新勅撰戀
天の橋立都なりせは

うかりけるよさの浦波かけてのみ 殷富門院大夫

新後拾
松たてゐるよさの湊の夕涼み
思ふにぬるゝ袖をみせはや

後京極

今もふかなん沖つゑほ風

○網野社 竹野郡阿佐茂川東網野村ニ有リ

祭ル處 水江浦嶋子也

雄畧二十二年秋七月丹波國餘謝郡管川人水江浦嶋

子乗レ舟而釣遂得ニ大龜、便化ニ爲女、於是浦嶋子感

以爲レ婦相遂到ニ蓬萊山、歷「觀仙衆」日本紀

●丹後國與謝郡日量里筒川村トイフ所ニ筒川嶋子

トイフ者アリ常ニ釣ヲナンシケリ其人姿タヲヤカ

ニシテ誠ニ止事ナキ美男ナリ或時釣センタメニ獨

小船ニ棹サシテ沖ニ出ケリ釣シアリキケルマ、三

日三夜沖ニタバヨヒケレトモ魚ノ一ツヲモ得ズ本

意ナキワザニ思フ處ニ五色ノ龜ヲ釣エヌ嶋子不思

儀ヲナシテ船ニイレヲキケリ其夜モ歸ラデ船ニ寐

ニケリ夜半バカリナルニサモアテヤカナル女一人

イヅクヨリ來ルトモ知ズ船ニ乗テアリ嶋子目サメ

テオドロキ女ニ問ケルハカク人家ハルカナル海面

ニ何トシテカハ來玉フゾ如何ナル人ゾヤト云ヒケ

レバ女面ハユキ物カラ打エミテイヒケルハ御身獨

此海上ニマシマセバ餘所ニ見ルニ忍ビエズ風雲ニ

乗ジテ來リサブラウトイヘリ嶋子又問フ風雲ニ乗

ジテハ何處ヨリ來リ玉フゾヤ女云我ハ天上仙家ノ

者ナリ君ウタガヒノ心ヲナシ玉ハズ打トケテカタ

ラヒ玉ヘトイヘリ嶋子思フヤウサテハ神女ナリト

コハソモ如何ナル事ゾトオソロシサカギリナシ女

ノ云我心更ニアサハカナル思ニアラズタトヘバ天

地ニ比シ日月ハキハマル所更ル心ニ侍ラズ何ナレ

バ君ハ我ニ心ヲヘダテ玉フゾヤ嶋子云フベキコト

ノ葉ナクテ其儀ニテ侍ラバイカデソムキ侍ラント

イヘリ女イトヨウ懸想ジテ其御心ニテマシマサバ

イザヤワガスム蓬萊山ニ至リ侍ラン船ヲメグラシ

玉ヘトテ沖ノ方ヲ教ケレバ嶋子女ノ教ヘノ儘ニ棹

祭伊勢之末社者號酒殿神以能釀酒之故也移祭大膳職者號御食津神以能植稻之故也共豐宇氣姬神也延喜式

○與謝郡比治山頂有井其名云眞井今既成沼昔天女八人降來此井而浴此里有老夫婦其名云和奈佐老夫和奈佐老婦竊至井畔窺見之而取藏一羽衣天女等見老夫而驚愧著衣皆飛登一女無衣而不能飛行即隱身井水於是老夫謂天女云吾夫婦無兒請天女爲吾娘天女對云妾獨無衣留人間何敢不從老夫之心乎請還許妾衣老夫云天女笑存欺心哉天女云天道無僞以信爲本何多疑心而不許老夫耻云多疑少信率土之常也是以不肯許而已天女之言誠然遂許與其衣而相携歸家共栖十餘年天女能釀酒一飲除百病酒價滿庾又能植五穀土肥稻穗美仍名此處云土形里今云比治老夫家倍潤富而後俄娼疾天女老夫謂天女云汝本天上之產非率土之種暫借住吾家而已宜早去天女仰慟哭俯哀吟謂老夫云妾初非求爲老夫娘唯任老夫之所願妾心無異老夫奚發厭惡之心哉老夫增瞋不聽天女流涕出

門謂里人云妾久淪落人間而今不得升天上率土無親故不知所由妾其爲如奈哉拭淚嗟歎歌云阿麻能波良布理佐兼美禮婆加須美多智伊幣治麻土比天由久幣志良受母遂去而至一村乃謂村人云吾心如荒鹽仍云荒鹽村又至一村據槻木下而哭故云哭木村後到竹野郡船木里謂里人云吾心奈具志久古語事平善者云奈具志竟留居此處因建社祭之所謂竹野郡奈具社坐豐宇氣姬神也丹後風土記

●埴山姬神 稚産靈神

豐宇氣比女神

○伊弉冊尊爲軻遇突智一所焦而終矣其終之間臥生土神埴山姬及水神罔象女神

○與謝社 與佐郡川森有リ 祭神一座

豐受太神 今內宮ヲ祠ハ近代之俗也

○世記云泊瀨朝倉宮大泊瀨稚武天皇卽位廿一年丁巳冬十月倭姬命夢覺給久皇太神吾一所耳不坐波御饌毛安不聞食丹波國與謝之小見比沼之魚井原坐道主子八乎止女乃齋奉御饌都神止由氣太神乎我坐

○輕野社 同郡宮傍村ニ有リ 祭神三座

里諺云輕野三座者菅原天神之御子也祠以爲神云或云輕野大臣也予未_レ知_レ可否_レ所謂輕大臣者舊傳昔日輕大臣爲遣唐使時支那人飲_レ之不言樂身作_レ彩畫頭戴_レ燈臺而燃_レ火即名_レ之爲_レ燈臺鬼其子參議春衡又爲_レ唐使_レ子_レ時齊明天皇二年丙辰歲也追_レ入_レ于支那帝殊貴重焉及_レ于夜_レ秉燭出_レ鬼燈鬼燈遙見_レ春衡而知_レ我子_レ流涕鳴咽噬_レ指頭_レ血書云我元日本華京客汝是一家同姓人爲_レ子爲_レ爺前世契隔_レ山隔_レ海戀情辛經_レ年流_レ涕蓬蒿宿途_レ日馳_レ思蘭菊親形破_レ他鄉作_レ燈鬼爭歸_レ舊里_レ寄_レ斯身_レ又歌曰_レ燈乃影耻_レ敷身奈禮鈍_レ子於思闇乃悲鴈鳧春衡見_レ之以爲_レ我父_レ也遂求_レ燈鬼_レ歸_レ日本_レ之日沒_レ風州硫黃邊_レ名_レ其所_レ葬之地_レ云_レ鬼界_レ 啓蒙

丹後

和銅六年四月ニ丹波國ノ内五郡ヲ分チテ始

テ置_レ之丹波ノ北ニ當_レリ後ハ北ノ意也云々

○籠神社 與謝郡ニ有リ一名籠守 祭神住吉同體也一

宮記

貞觀十三年六月八日從四位下 國史

○神託 益人の身を思へるがごとく神明をうやま

ひすべらみことをあがめ長を長として天の神のをしへをまもりおらば一身をはづかしむる事なかるべし 倭論語

○竹野社 竹野郡竹野村ニ有リ 祭神二座

垂跡同_レ于伊勢兩宮_レ 里民所謂齋宮是也盖有_レ齋宮女子_レ之故也

○里諺所謂若天下凶徒欲_レ蜂起_レ則神殿鳴動而宮中神箭悉飛去入_レ海或超_レ他邦_レ也於_レ是當國刺史捧_レ兵器_レ遣_レ軍卒_レ晝夜警蹕不_レ怠也或五日或三日之後以_レ神殿靜_レ爲_レ期集_レ飛箭_レ納_レ宮中_レ云故里人稱_レ天下治平神又號_レ齋宮者熊野郡市場村有_レ齋宮之人_レ生_レ女子_レ則飛箭必立_レ于屋上_レ也其子四五歲之時奉_レ當_レ宮呼爲_レ齋女_レ也于_レ山中深林之中_レ獨與_レ禽獸_レ同居敢無_レ畏怖_レ若及_レ長天癸至或交接之情生則大蛇出現爬々瞋_レ眼及_レ是時_レ致_レ官還_レ鄉里_レ已上啓蒙

○奈具社 今稱_レ天避社_レ 同郡丹波郷ニ有リ

祭神一座 宇賀乃咩命 伊勢酒殿同體 豐宇氣比女神共同神別名也

丹後國竹野郡奈具神社者豐宇氣比女神也此神移_レ

三穗津姬 高皇產靈尊子 栲幡千千姬命妹 大己貴命之妻 系圖上ニ見エヌ

○高皇產靈尊勅ニ大物主神ニ汝若以ニ國神ニ爲ニ妻吾猶謂ニ汝有ニ疏心ニ故今以ニ吾女ニ穗津姬ニ配ニ汝爲ニ妻宜ニ領ニ八十萬神ニ永爲ニ皇孫ニ奉ニ護乃使ニ還降ニ日本紀

天津彥根命

正哉吾勝々速日天忍穗見尊

天照太神

天穗日命

天津彥根命

含ニ嬰ニ頭之瓊ニ著ニ於左臂中ニ化ニ生天津彥根命ニ日本紀

神託 和歌

倭論語
いむといふけかれを云へる日本の

神の教を知る人々神

○神野社 同郡ニ有リ 祭神一座 伊賀古夜姬命

鴨御祖神母

賀茂健角命婦伊賀古彌日賣命也玉依彥玉依姬母也玉依姬鴨御祖神也玉依彥可茂縣主等遠祖也神名帳註

○大原社 同郡ニ有リ 祭神一座 今爲ニ三座ニ 伊弉

並尊 一座

社家説云當宮者伊勢太神宮母神伊弉冊尊之鎮座也今以ニ伊弉諾天照太神ニ爲ニ三座ニ春秋兩度祭奠者遠近國郡爲ニ群也其祭儀不レ事ニ饗體ニ以ニ桑料ニ爲ニ禮而示ニ謙道於天下ニ章乎 啓蒙

○篠村社 同郡篠村ニ有リ 祭神 八幡 垂跡同ニ石清水ニ

人皇七十一代後三條院延久三辛亥年依ニ勅定ニ奉ニ勸請ニ曩祖兼延奉ニ行之ニ 二十二社註式

○水雄社 同郡愛宕山ノ傍ニ有リ 祭神 清和天皇

文德天皇ノ太子御諱ハ惟仁母ハ染殿后藤原明子太政大臣良房ノ女也 生レテ九月ニシテ太子ニ立ツ

天安二年八月文德崩ズ十一月太子九歲ニテ即位シ玉フ幼少ニシテ帝位ニ卽事是天皇ヲ始トス貞觀六

年正月元日天皇元服シ玉フ御歲十五同十八年十一月天皇位ヲ第一ノ皇子貞明親王ニ讓ル十二月清和

ニ太上天皇ノ尊號ヲ奉ル後ニ水尾山ニ入玉フニ依テ水尾帝トモ申ス御子陽成院ノ元慶四年三月天皇

山城大和攝津ノ名山佛閣ヲ見巡テ丹波水尾寺ニ入玉フ意ヲ佛法ニカタブケテ頭陀ノ行ヲシ玉フ同十

二月崩ズ歲三十一 王代一覽

御位 貞觀元年正月廿七日從一位 神階記

越中

○氣多社 或高瀬 礪浪郡ニ有リ 祭神 同上

大己貴命也 一宮記 天活玉命也神名帳註 延喜八年

八月十六日乙卯以ニ越中國氣多大神ニ預ニ官幣按

據此說ニ則能州氣多神爲ニ天活玉命ニ必也 啓蒙

御位 延曆三年三月三日丁亥氣多神正三位 國史

越後

○伊夜彥社 蒲原郡ニ有リ 祭神 天香山命也

饒速日命子 一宮記

承和十年六月○按可作天長十年七月越後國蒲原郡伊夜彥神預ニ

之名神以下彼郡每有旱疫致雨救病也續日本後記

佐渡

○渡津社 羽茂郡ニ有リ 祭神 五十猛神 大己貴命

兄 一宮記

欽明帝五年十二月越國言於ニ左度島北御名部之碕

岸有ニ肅慎人乘ニ一船舶ニ而淹留春夏捕魚充食彼

嶋人言非レ人也亦謂ニ鬼魅ニ不ニ敢近レ之嶋東禹武邑

人拾ニ椎子ニ爲ニ欲ニ熟喫ニ著ニ灰上ニ炮ニ其皮甲ニ化成ニ

二人ニ飛ニ騰火上ニ一尺餘許經レ時相鬪邑人深以爲レ

異取置ニ於庭ニ亦如レ前相鬪不レ已有レ人占云是邑人必爲ニ魅鬼所ニ迷惑不レ久如レ言被ニ抄掠於レ是肅慎人移ニ就瀬河浦ニ々神嚴忌人不ニ敢近ニ渴飲ニ其水ニ死者且半日本紀素戔嗚尊帥ニ其子五十猛神降ニ到於新羅國ニ初五十猛神天降之時多將ニ樹種ニ而下然不ニ殖ニ韓地ニ盡以持歸遂始自ニ筑紫ニ凡大八洲國之内莫不ニ播殖而成ニ青山ニ焉所以稱ニ五十猛命ニ爲ニ有功之神 同上

系圖上ニ見エタリ

山陰道

陰ハ北也北山ニツイテ西北ニ行國也故ニ山陰

ト云フ也成務天皇ノ御宇始テ國縣ヲ分テ邑里

ヲ定メ玉フ時山陰ヲ背面ト云ヘリ山陰ノ名此

ニ始ル云々

丹波

○出雲社 桑田郡ニ有リ 祭神 兩記 三穗津姬

一宮記 天津彥根命也 坐ニ丹波ニ出毛神天津彥根

命也日吉樹下神系圖

元明帝和銅四年辛亥始出現 改曆雜事

御位 貞觀十四年十一月廿九日從四位上 國史

十九萬一千四百七十六歳上ハ上皇ヲ守下ハ下民ヲ撫吾本地ノ眞身ハ在ニ山頂往テ可レ禮ト云テ化女卽隱玉ヒヌ和尚靈感ヲ仰デ白山ノ絶頂ニ攀登池ノ邊ニ居テ三密印觀ヲ凝シ五相身心ヲ調テ祈念加持シ玉ヒケレバ池中ヨリ九頭龍ノ身ヲ現ズ和尚責テ云此ハ是方便示現ノ形全ク本地ノ眞身ニ非ジトテ咒遍功ヲ増ケレバ十一面觀音自在尊慈悲ノ玉體ヲ顯シ玉ヘリ妙相遮眼光明身ヲカバヤカセリ和尚悲喜胸ニ滿テ感涙面ヲ洗フ歸命頂禮シ奉テ願ハ大聖本地垂跡哀ヲ垂テ像末ノ衆生ヲ利益シ玉ヘト被レ申ケレバ爾時ニ觀世音金冠ヲ動シ慈眼ヲ瞬シ玉テ妙體速ニ隱レ玉フ又和尚左ノ峯ニ登玉ヘバ一宰官人ニ逢リ手ニ金ノ箭ヲ把リ肩ニ錄ノ弓ヲ懸タリ咲テ含デ語テ云我ハ是妙理大芥ノ神務輔佐ノ貫首名ハ小白山別山大行事ト云當レ知聖觀世音ノ化身也ト云テ隱レヌ又和尚右ノ峯ニ登玉ヘバ一老翁アリ語テ云我ハ是妙理大芥ノ神務ノ輔弼也名ハ大己貴ト云フ蓋又西刹ノ敎主阿彌陀也ト云テカクレ玉ヒヌ是ヲ白山三所權現ト申ナリ峻嶺高々トシテ忉利ノ雲モ手ニトルベシ幽谷深々トシテ風際ノ底モ足ニ

蹈ツベシ効驗一天ニキコエ利益四海ニ普シ 盛衰記
○神託 益人よたしかにたもて天地の間に偽まがれるものゝ入べき所なし天より地をやしなひ地よりは心なくてうくるぞなす事あればなす事おこる也それ吾國は三界の中にすぐれたる所也かるがゆへに諸の神明もろゝの清き人等の魂をさる事なしあしかる事をしてねの國におち入事なかれ
倭論語

白山和歌に讀り

後撰冬 白山に雪降ぬれば跡絶て 讀人不知

今は越路へ人も通はす

新千載神祇 わきて猶たのむ心も深き哉 前大僧正道玄

跡垂初し雪のしら山

新拾遺同 千早振雪の白山わきて猶 讀人不知

ふかき頼は神を知るらん

能登

能等養老二年割ニ越前國四郡ニ置レ之能等郡

名也舊事紀

○氣多社 羽咋郡ニ有リ 祭神 兩説 大己貴命也

一宮記 天活玉命也ト部衆

舊記

ト云フ其子ヲ彥主人王ト云フ是繼體ノ父也ト云々
年久ク越前ニ住玉フ武烈崩ジテ仁德ノ王孫タエケ
レバ大伴金村大連物部麿鹿火大連巨勢男人大臣等
繼體ヲ迎エ奉ル繼體五度マデ辭シ玉ヘ元金村シキ
リニス、メ申ニヨリテ即位シ玉フ時ニ歲五十八都
ヲ山城筒城ニ遷シ後又同乙訓ニ遷ス後又大和磐余
玉穗宮ニ遷シ玉フ在位二十五年ニシテ崩ズ歲八十
二或ハ在位二十八年トモイヘリ 王代一覽
○天皇壯大愛レ土禮賢意豁如小泊瀬天皇崩而無ニ
繼嗣ニ元年正月辛酉朔甲子大伴金村大連更議云男
大迹王性慈仁孝順可承天緒 日本紀
○二十五年二月崩冬葬藍野陵越前國足羽明神是
也 曆年史

加賀

嵯峨天皇弘仁十年三月日割ニ越前國三郡ニ
爲ニ加賀國ニ加賀郡名也云々

○白山社 石川郡ニ有リ 祭神

伊奘並尊 上社ハ菊理姫 一宮記 此姫ハ伊奘諾

伊奘冊ノ子也 日本紀ニ有リ畧ス

○靈龜二年丙辰顯レ形云我當山地主伊奘冊垂跡也

又左峯老翁現云吾白山輔佐也稱ニ小白山又右峯老
翁現云吾白山弼也即大己貴垂跡也 改曆記

余案神書鈔以ニ菊理媛爲ニ加賀白山權現ニ雖然

其顯ニ子神融時自名ニ伊奘諾則世人遂從ニ其義

今見ニ延喜式神名帳載ニ加賀國石川郡白山比咩神

社則又爲ニ菊理媛ニ歟並書以傳疑云 神社考

御位 貞觀元年正月廿七日正三位神階

○傳記云白山妙理權現者觀音菩薩之垂迹自在吉祥

之化現也小白山大行事者妙理菩薩之輔而觀音之化

也大己貴者妙理菩薩之弼而西剎教主阿彌陀也號ニ

之白山三所權現ニ佐羅早松大明神本地不動明王也

白山七社之中中宮權現者國常立尊也 金劔明神者本地俱

梨伽羅不動也此妙理權現第一王子也弘仁十四年

立ニ此宮 神社考

○抑白山妙理權現ト申ハ昔越前國麻生津ニ三神ノ

安角ガ二男越大德神融禪師ト云人マシノキ久修

練行年ツモリ難行精進日ニ新也キ元正天皇ノ御宇

養老元年ニ和尚當國大野郡伊野原ニ遊止シ玉ヒケ

ルニ一人ノ貴女化現シテ云日本秋津島ハ本是神國

也我天神最初ノ國常立尊ヨリ跡ヲ降シテ以來百七

諸社一覽第七

北陸道

北方ノ陸ニ就テ行國ナル故北陸道ト云フ也景
行天皇二十五年七月ニ武内宿禰ヲツカハシテ
北陸及東方ノ諸國ノ地形ヲ見セシメ玉フ云々

若狹

昔此國有ニ夫婦ニ共長生人不レ知其年數容
貌若而如ニ少年ニ後爲レ神今一宮神是也因レ茲
有ニ若狹之名風土記抄

○遠敷社 遠敷郡ニ有リ

祭神 彥火々出見尊 上社

豐玉社下社 一宮記

○社記云人皇四十五代元

正天皇御宇靈龜元年乙卯九月十日當國遠敷郡西鄉

內靈河之源白石上始垂跡神名帳註

按豐玉姬ハ海神ノ女火々出見尊妻也日本紀ニ見

エタリ

○彥火々出見尊因レ娶ニ海神女豐玉姬 仍畱ニ住海

宮ニ已經ニ三年ニ彼處雖ニ復安樂ニ猶有ニ憶レ郷之情ニ

已下略之 日本紀

○神詠

皆人の直きこゝろぞ其まゝに神の神にて神の神なり
此神詠は宇多帝の御子敦實親王に夢中の御つ
げなり 若狹彥大明神 倭論語

越前

越國ハ越前、加賀、能登、越中、越後也和歌

ニ越路トヨメリ

○氣比社

或箇飯

敦賀郡ニ有リ

祭神 仲哀天皇也

一宮記

○氣比神宮者宇佐同體也、八幡者應神天皇

之垂跡氣比明神仲哀天皇之鎮座也 風土記

○御位 貞觀元年正月廿七日從一位 神階記

啓蒙

○神託 益人よ一念のおこらぬかたにあゆみをは

こび常にたのしめばはるかに遠しといひし天の心
によく叶ひ吾神明はつねに友とせる也思ふ事なか
れ 倭論語

○足羽社 足羽郡ニ有リ

祭神一座

繼體天皇也 應神天皇五世ノ孫ナリ應神ノ御子ヲ

二派皇子ト云フ其子ヲ太郎子ト云其子ヲ彥主人王

トイフ是繼體ノ父也或說ニハ應神ノ御子ヲ私斐王

諸社一覽第七目錄

出雲	伯耆	因播	但馬	丹後	丹波	佐渡	越後	越中	能登	加賀	越前	若狹
土師	大社	倭文	宇陪	粟鹿	出雲	渡津	伊夜	氣多	氣多	白山	氣比	遠敷
	日崎	大山		出石	神野	輕野	神野				足羽	
	佐陀				大原		篠村					
	手間											

石見	物部
隱岐	由良
播磨	伊和
佐與	大荒
中山	二宮
已上	勅使宮
	大隅宮
	白神宮
	離火
	後鳥羽
	惣社
	荒田
	靜窟
	曾禰
	岩屋
	大酒
	美作

命也 一宮記 傳系上ニミエタリ 鎮座年記未レ考

此外當國 伊達明神 鹽釜明神

笠嶋道祖神等社有リ追而可レ考

出羽

和銅五年始割ニ陸奥二郡一置レ之上古此地貢ニ

鷲鷹羽ニ故云ニ出羽一云々

○大物忌社 飽海郡ニ有リ 祭神倉稻魂神也 一宮記

傳上ニ有リ

續日本後紀云出羽國飽海郡正五位下勳五等大物忌神從四位下餘如故兼充ニ神封二戸一詔云天皇我詔旨爾坐大物忌大神爾申賜波久須皇朝爾緣レ有ニ物怪一_{天卜}詢爾大神爲レ祟賜倍利加之遣唐使第二船人等廻來申久去年八月爾南賊境爾漂落_氏相戰時彼衆我寡_氏力甚不レ敵奈利儻而克_レ敵留波依_レ有ニ神助一止申今依_ニ此事一_氏臆量爾去年出羽國言上太留大神乃於_ニ雲裏一_氏十日聞_レ作_ニ戰聲一後爾兵石零利止申世利之月日與_ニ彼南海戰日一正是符契世利大神乃威稜令_ニ遠被一太留事乎且奉_ニ驚異一且奉_ニ歡喜一故以_ニ從四位爵一奉_レ授兩戸之封奉_レ充_レ久止申云々

○御位 貞觀十五年四月五日從三位勳五等大物忌

神正三位 國史 已上啓蒙

○神託 世の人のたつときとなくいやしきとなく思ひをつくすは有物のたから也天の神のたからをねがひて直きにまざるたからは三界のうちにはなき事をしるべしもとむるにもあらずねがへるにもあらずして其心に有ぬる事を思ひしるべし 倭論語

已上東山道畢

諸社一覽第六終

當國一良材多出也駄負_レ木行_二大津_一如_レ飛也
號_二飛駄_一風土記

○水無社 大野郡ニ有リ 祭神大己貴命兒御歲神也

一宮記 ○大己貴命女高照光姬命母高降姬大和國

葛上郡御歲之神社同_レ之 神名帳註

○御位 貞觀十五年四月五日從四位上 國史

信濃

○諏訪社 諏訪郡ニ有リ南方刀美社トモ 祭神 健

南方命 大己貴命一男也又健御名刀神トモ傳系前

ニ見ユ

○天孫降臨時健御名方命逆_レ命不_レ順於_レ是經津主

神使_下岐神逐_上之健御名方命逃至_二信濃諏訪郡_一請

降云_レ乞以_二諏訪郡_一爲_二大己貴之讓_一以爲_二我有然

則不_レ逆_二天孫之命_一經津主神告_二天孫_一而許與焉是

今諏訪大明神也 舊事紀

○戸隱社 同國ニ有リ 祭神 手力雄神

○日神入_二天石窟_一時手力雄神立_二磐戸之側_一日神

以_二御手_一細_二開磐戸_一窺之時手力雄神則奉_二承御手_一

引而奉出 日本紀○神書抄云伊勢內宮相殿左脇祭_二

此神_二々々者思兼神之子也戸隱明神是也_一或說云

多力雄命取_二岩戸_一抛_レ空落在_二信州戸隱_一故云爾
已上神社考同之

上野

上毛野下毛野者兩國中間有_二野_一云_二佐野

笠懸野_一其野中有_二一河_一號_二渡瀬_一又有_レ川

云_二佐野中川_一以_二渡瀬_一爲_二兩國境_一川西云_二

上毛野_一東云_二下毛野_一 風土記抄

○拔鉢社 甘樂郡ニ有リ祭神經津主命也 一宮記傳系

上ニ有リ 鎮坐年記未_レ考

下野

○二荒山社 河内郡ニ有リ 祭神 事代主神 一宮記

傳系上ニ有リ 鎮坐年記未_レ考

御位 貞觀十一年二月廿八日丙辰從二位勳四等二

荒山神加_二正二位_一 國史

○神託 我人の吾をたのまんにその事のしるしな

しとてうらむるわざなかるべし一稱一禮むなしか

らずみさはをくだしくなす事なかるべし時成

べし 倭論語

陸奥

○都々古和介社 白河郡ニ有リ 祭神 味耜託彥根

王法亦衰語已形隱珍歸_ニ叡山_ニ至_ニ山王院_ニ時山王明神現形云傳來經書宜_レ藏_ニ此所_ニ新羅明神又出云此地來世必有_ニ喧爭_ニ不_レ可_レ置也南行數里是爲_ニ勝處_ニ珍乃與_ニ新羅山王_ニ神及_ニ二比丘_ニ到_ニ滋賀郡園城寺_ニ寺僧教待說_ニ寺事_ニ既而山王廻_ニ叡阜_ニ新羅明神語_レ珍云我ト_コ居寺之北野_ニ時百千眷屬來圍繞唯珍獨見已下略之 元亨釋書文

案卜部兼邦說新羅明神ハ素戔鳥ノ化現也ト 說

左ニ記ス

ことのはもいかにと通ふそしもりにやとりをか
りし程の衰さいふ心は此神地獄えおひやられて其
御玉新羅國に至りてそしもりといふ者に宿をかり
給ふ其時の出立みのかさをきて雨風にあひて淺ま
しき御姿成し事也此神の御魂うかれさせ給ひ智證
大師入唐の次新羅國に至給ふ時翁のすがたにてあ
らはれ給ひ大師にむかひて我佛法應護の神也汝が
佛法行せん所え至りて守らんとて同御船にめして
御かへりあり 兼邦和歌自注

○神託 なべての人こゝろ直く正しき其身には鬼神もこれをかたぶけず水火もおかしえず金石もこ

れがためにしたがりときやいばもきるゝ事なしおもふべし諸人よなをきこゝろのみさをかたぶくる事なかれ 倭論語

已上近江終

美濃

三野或云此國有_ニ大野_ニ三故云_ニ三野_ニ後改_ニ美濃_ニ 舊事紀

○南宮 不破郡ニ有リ 祭神 金山彦命 一宮記

○社家註記云南宮者金山彦命而火神非_ニ金神_ニ司_ニ離火南方_ニ故名_ニ南宮_ニ抑南宮者陽神而居_ニ南方_ニ文武兼備故國家崇貴敍_ニ正一位勳一等_ニ就_ニ中天武朱雀朝施_ニ功於我邦_ニ云々按一社相承如_ニ此乎然奉_ニ備_ニ天覽_ニ國史皆爲_ニ金山彦_ニ且風土記金山彦神云々 蒙啓

○神託 世の人よ心に知る事なふしてあやまてる事のあらんには神明にむかひ身をなきがごとくにして我なき所にいたらん時其あやまち霜のてる日にあへるがごとく成べし 倭論語

○攝社 十禪師社 南大神 高山社 隼人社

飛驒

飛驒本美濃國內也然建_ニ近江大津宮_ニ時自_ニ

古今
君か代にあふ坂山の石清水

忠岑

こかくれたりと思ひける哉

詞花
引駒

にかけをならへてあふ坂の

朝隆

關路よりこそ月は出けれ

逢坂の關明神と申はむかしの蟬丸の彼わらやの跡
うしなはずしてそこに神と成て住給ふ成べし今も
打過る便にみれば昔深草のみかどの御使にて和琴
ならひに良峯の宗貞とてかよひけんほどの事迄俤
にうかびていみじくこそ侍れ 無明抄

蟬丸は敦實親王の雜色也盲目にて琵琶をひきたる
が逢坂のほとりに庵を結びてゐたり博雅三位これ
に流泉啄木の曲を傳たり敦實のみこ管絃の道に達
し給へり蟬丸が琵琶は是を聞とりて彈じける也そ
れよりして盲目のびはひく事ははじまれり東齋隨筆
蟬丸を世人盲目といふはあやまれり後撰の詞書に
相坂の關にてゆきゝの人をみてと云々 盲目ならば
みる事不可有 愚案抄

延喜の皇子といふ事甚不可然古今に此人の歌い
れり延喜の帝は十三歳にて即位有延喜五年のころ
は廿二歳にておはしますこれにて知へし 玄旨抄

○赤山 ○赤山者支那山名山有神世稱太山府君
神也 神社考

社西坂本ニ有リ

慈覺大師在唐習清凉山引聲念佛一時神現形與
覺約來于日本覺歸朝海波惡將漂羅刹國赤山
明神着蓑笠持弓矢而護覺或現不動形或爲
毘舍門姿故其舟無難相傳云此本地々藏并也釋書文
○神託 世々のためしの吳竹も手にしえらねば妙
なるこそもなし神明もきよく清かるこゝろをして
日に月をまし時をうつして身にし口にしねらざれ
ばあらはれたるしるしなしなをざりならず思ひお
もひていのらばなどかしのしなかるべけんや
倭論語

新羅社 園城寺北院ニ有リ

新羅明神者天安二年圓珍師泛舶自唐歸洋中忽
有老翁現船舷云我是新羅國之神也誓護持師
教法一至慈氏下生託已不見珍入京將傳來教
籍藏尚書省時海上翁來云此所不堪置經書
是日域中有勝地我已先相攸師聞官建院宇
度此典籍我鎮加護又佛法是王法之治具也佛法若

○田村麻呂者從三位左京大夫兼右衛士督荊田麻呂子正四位上犬養之孫身長五尺八寸胸厚一尺二寸目如蒼鷹鬚編金絲有_レ事而重身則三百一斤欲_レ輕則六十四斤隨_二心所_一欲怒_レ目轉視則禽獸懼伏平居談笑則老少馴親 日本後紀 ○嵯峨天皇弘仁二年五月逝去五十七天皇甚_ラシミ玉ヘリ宇治郡栗栖村ニ葬_ル勅ニ依テ甲冑劍鉾弓矢ヲ棺ノ内エ入テ王城ノ方エ東向ニ立テ土葬ス 王代一覽ノ心

○黑主社 志賀郡辛崎ノ邊ニアリ祭神 一座
大伴黑主之靈也

○志賀黑主者與多孫也與多者大友皇子之子而創_二造園城寺_一曾賜_二大友姓_一其都塔矣麻呂而後大友字改作_二大伴_一也黑主之在_二園城寺_一亦自_二與多_一而連綿至此 本朝通史

○秀郷社 栗太郡勢多郷大橋傍ニ有リ 祭神倭藤太秀郷ガ靈也相並一座 水府神云々 諺傳秀郷爲_二龍宮_一射_二三上之巨蛭_一殺云仍祠_二其靈于勢多_一歟 啓蒙
倭藤太秀郷者出_レ自_二房前公_一々々子魚名々々子藤成々々子豐澤々々子村雄々々子乃秀郷也仕至_二武藏守_一平將門誅伐之日詔_二秀郷_一爲_二鎮守將軍_一賜_二采地

于東州 神社考

○關明神 志賀郡會坂ニアリ 祭神一座

蟬丸之靈也 ○相坂關明神者蟬丸也有_二草屋之跡_一深草天皇時良岑宗貞爲_二勅使_一來習_二和琴_一○遯史曰式部卿敦實親王之雜色也善彈_二琵琶_一結_二草庵于相坂_一隱栖焉二位源博雅往訪之遂得_二流泉啄木之調_一

按世俗以_二蟬丸_一爲_二醍醐帝皇子_一其說云帝貶_二菅右丞相於宰府_一其冤枉之憤令_二帝子喪_一明即蟬丸也帝棄_二置之于王坂_一蟬丸善彈_二琵琶_一云々蟬丸之爲_二皇子_一未_レ考或云彈_二琵琶_一之人非_二蟬丸_一云予謂當時有德之士屏_二迹於逢坂_一寓_二懷於和歌_一自晦_二其光_一者也彼信_二皇子之說_一者以四宮川原也帝王第四之宮所_二流離_一之地也仍以_二逢坂_一爲_二王坂_一與_二蟬丸_一相附說不可_レ信_レ之甚也 已上 啓蒙

逢坂 關山 清水 駒迎等歌により

古今 音羽山をとに聞つゝあふ坂の 元方

關のこなたに年をふる哉

金葉 わさも子にあふ坂山の時鳥 源定信

明れは歸る空に鳴也

以ニト部兼藤二奉レ再ニ興社壇ニ同四年八月十五日有ニ遷宮一 二十二社註式

○兵主社 野洲郡ニ有リ祭神一座 今所レ傳七座也所レ謂表ニ當宮七名ニ歟

大國玉命 大己貴命別名也傳系上ニ見エタリ

○大國玉命也人皇三十代欽明帝御宇鎮坐祕說曰天照太神也 神祇正宗

○貞觀十六年八月從三位 國史

按當社者大己貴命之鎮坐勿論歟祭祀之日以ニ干戈弓箭ニ乘ニ于七社神輿ニ而從者又表ニ軍旅之威儀一也 啓蒙

○小津社 同郡ニ有リ祭神三座 大宮二宮三宮是也玉津正一位小津社

神名帳註 宇賀魂也按社家註進大宮本緣同上二宮素戔烏 三宮大市姬也

按祭尊必用ニ午日ニ又稱ニ稻荷同體神ニ則玉津之二字蓋有レ據乎 啓蒙

○大寶社 栗太郡緒村ニ有リ 祭神一座

素戔烏尊 ○疫神也大寶年中降見之神故稱ニ大寶天王ニ其影向之老杉于レ今存社家註進狀 啓蒙

○牛頭社 同郡下笠村ニ有リ 祭神三座 牛頭天王素戔烏 后ノ宮稻田姬 八王子 五男三女 已上同ニ祇園ニ中 右

正一位牛頭天王ト號ス

○社記云當所栗太郡下笠村明神者真宗豐祖父帝御宇慶雲元年三月四日影向同四月現ニ平森大杉本ニ而宣爲ニ一郡東西守護神ニ矣百六代後奈良院御宇神患奮發萬民流浪也仍享祿三年庚子五月十七日再造ニ修神殿ニ而奉レ慰ニ神慮ニ同御宇天文九年御怒不レ靜而鄉民同日著レ席也里人喚ニ神樂岡神主正春者ニ乞ニ鎮神ニ也正春齋戒入ニ神殿ニ令ニ神璽正座ニ密仰ニ帝意ニ奉レ授ニ正一位ニ也爾來號ニ正一位牛頭大明神ニ致ニ如在之禮奠ニ 全文略今摘要 啓蒙

○水尾社 高島郡水尾村ニ有リ 祭神二座

猿田彦命 天鈿女命也 水尾大明神ト號ス神傳上ニアリ

○彼郡內有ニ大河ニ件河南水尾猿田彦命名ニ河內社ニ河北天鈿女命也兩社分ニ水尾川ニ勸請也 神名帳註 啓蒙

○田村社 甲賀郡土山驛之邊ニ有リ 祭神正一位田村大明神 田村九ノ靈神也東夷征伐之功アルニ依

テ此地ニ祀歟鎮座之年紀未レ考 啓蒙同

鎮坐年紀未考

釋法勢叡山義眞之徒也承和八年過近州比良山下和邇村一宿民家々々婦俄病狂言云師讀觀音普門

品我欲聽之勢素持普門品然思狂病之言不足聞便云我無經本故不能也婦人云師臂囊見經在焉勢不得已出經讀之婦人合掌云我比良

明神也勢云我聞神者皆有通又長壽昔釋迦文出世西天未審見知不婦人云我不住西印度然千數

百年前諸天多西飛去豈迦文出世時乎元亨釋書

○立木社 草津驛札辻ニ有リ 祭神 與春日社同 正一位立木神

社家者流曰當社垂跡與春日一體神也于今以藤蔓爲神愛草

鎮座年紀未分明已上啓蒙 筑摩社 坂田郡筑摩ニ有リ 祭神御食津神 傳註

上ニミエタリ

仁壽二年三月甲戌近江國筑摩神授從五位下文德實錄

按筑摩大膳職御厨之地也運送色目載在延喜式等故以當職所祭之神祠此地歟蓋此神依

掌稻食而里女爲婚則祭祀必戴金鍋奉神矣不幸於少壯之間爲婦則改嫁焉再嫁者二枚

三嫁者用三枚啓蒙

拾遺 筑摩江神沼野和歌に讀り

いつしかもつくまの祭はやせなん 讀人不知

難面人のなへの數みん

○法華峯社 蒲生郡八幡村ニアリ 祭神 八幡

同石清水

社記云人皇六十六代一條院御宇影向法花峯同御

宇長德三年行放生會啓蒙

○矢橋八幡 附山田八幡 栗太郡矢橋浦町末之東一

町許ニ有リ 祭神三座 中ハ神功皇后左ハ住吉右

ハ高良鞭崎八幡ト號ス

○人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥二月十一日

依勅願詔大中臣清麻呂於近江國栗太郡矢橋

浦奉勸請聖母太神住吉高良三所正八幡宮一座

在山田鄉同日鎮座第八十二代後鳥羽院建元元年

十月二日源朝臣賴朝上洛之時於矢橋浦有神社

召浦人在馬上以鞭指之間浦人答云八幡宮也

賴朝下馬拜之依此有鞭崎之名同三年賴朝

竹生嶋にまうで侍れるときもみちのかげの水

拾遺集
にうつりて侍ければ

水海に秋の山へをうつしては

法橋觀教

はたはり廣き錦とそみる

○むかし宇多御門の御比都良香といふいみじき博士侍りけり卯月の頃江州竹生嶋へ人々友なひつれて參けるはるかに山のいたゞきに上りて御社へ至りぬ四方みえわたりて實面白き所也されば都良香三千世界眼前盡と作て詠せりけるに神殿おびたしくゆるぎて殊に大にけ高き御聲にて十二因縁心裏空といふ御句の人の耳にあざやかに聞え侍りける忝も侍る實高き御山のはれたる所なれば三千界は眼前につきぬといふもことほりに侍るそれに十二因縁は心のうちにむなしく侍らんかへすいみじく侍る實も神ならずは誰かかゝる句をばつけ給はんとぞおぼえ侍るに小野篁は人皇の御意をよろこばしめて相公にいたり都良香は明神の感歎にあづかる能藝は實かたじけなくぞ侍る扱も都良香は十二因縁は心のうちにむなしといふ御詩を日に三度となへて後世のつとめにむかひけるにはた

して此心をさとりておほりをとりにけるもありがたくたつとくぞ侍る 撰集抄

都良香雖仕官心慕神仙一旦棄簪纓入山修鍊不知所終後百餘歲或人見良香大峯山窟中其顔色不衰矣 神社考

平經正此嶋ニワタリ神明法樂ノ御タメニ一曲ヲ彈ゼン仙童ノ琵琶トリ出シナンヤトノ玉ヘバ安キ御事也トテ僧琵琶ヲイダキ經正ノ前ニ閣ク經正カキヨセ玉ヒテ樂ニツ三ツ彈ジテ後ニ上玄石上ト云フ祕曲ヲ彈ジ玉フ諸僧耳ヲ欽テ感涙袖ヲシボリケリ天女納受シ玉ヒテ社壇ノ上ヨリ白キ狐イデ來庭上ニアソビテ經正ノ方ヲ守リケルコソ不思議ナレ經正ハビハヲ閣テ神明ノ化現ト忝ク思ヒ玉ヒケレバ所願成就疑ナシ和光利物ノ夏衣思ヒ立ケルウレシサヨ

千早振神ニ祈ノ叶ヘハヤ白クモ色ノアラハレニケリトゾ詠ジ玉ヘリ 下畧 源平盛衰記

○白鬚社 比良明神同ジ志賀郡境打下ニ在リ祭神一座猿田彦神 傳上ニ見エダリ

○打嵐白鬚大明神者猿田彦命也 神祇正宗

〇二宮

句ひをよするしかのうら風

慈圓

^{新古今} 日吉の社に奉りける中に二宮を
やはらくる影そふもとに曇なき

〇聖眞子宮

聖眞子宮に讀て奉りける

權少僧都良仙

^{續古今} やはらくる光はへたてあらしかし
西の雲ゐの秋の夜の月

〇客人宮

客人宮に奉りける

後京極

^同 爰に又光をわけてやとす哉

こしの白根や雪のふる里

〇十禪師社

^{續後拾} 木の本に浮世をてらす光こそ
くらき道にも有明の月

同

〇伊吹社 栗太郎伊吹里ニアリ 膽吹 五十葺 伊

^{新古今} 服岐 いぶき 山峯等歌に讀り
今日も又かくやいぶきのさしもくさ 和泉式部

さらは我のみもえや渡らん

祭神一座 八岐蛇所變日本武尊還_レ自_二東征_一到_二

於尾張_一聞_二近江膽吹山有_二荒神_一即徒行之山神化_二

大蛇_一當_レ道尊不_レ知_二主神化_一蛇之謂是必荒神之使

也既得_レ殺_二主神_一其使者豈足_レ求乎因跨_レ蛇猶行時

山道雲霧大起尊迷而失_レ路遂痛_レ身如_レ醉偶得_レ泉而

醒因號_二其處_一云_二醒井_一^{日本紀}ノ心 ○神社考 云素盞烏尊

在_二出雲國_一斬_二八岐蛇_一尾中有_二神劍_一所謂天村雲劍

也尊獻_二之于天照太神_一々々云是入_二天岩戶_一時隕_二於

近江國伊布貴山_一予惟日本武尊所_レ佩之劍乃素盞烏

尊所_レ獲_二于蛇尾_一者也故八岐蛇靈爲_レ求_二其舊物_一而

當_二于尊之行道_一也是以言_二膽吹神八岐所變_一也 ^{啓蒙}

貞觀元年正月廿七日從五位上 ^{神階記}

〇竹生嶋社 淺井郡ニ有リ 祭神一座

宇賀御魂命 素盞烏子也 上ニ見ユ

改曆雜事云景行天皇治十五年淡海國湖中竹生島出

聖武帝天平三辛未末竹生島神顯形 ^{啓蒙}

竹生嶋者在_二江州湖中_一其巖石多_二水精寶珠_一本朝五

奇異之其一也傳言孝靈天皇四年江州地折湖水始湛

駿州富士山忽出焉

景行天皇十年湖中竹生嶋初涌出云 ^{神社考}

ント思フ程ニ相知人稻荷ニコモリケレバソレト友
ナヒ七日詣ツ、又事ヲ二心ナク祈申スカクテ七日
ニ滿ズル夜ノ夢ニ御戸ヲ押開テ衾裝束シ玉ヘル女
房氣高クメデタキ様ニテ出玉テ法師ノ胸ヲ引開二
寸バカリナル紙ノ切ヲ押付テ歸玉ヘリコレヲ見レ
バ千石ト云フ文字有リイミジキ神德ヲ蒙リヌト思
ヒ居ル程ニ鳥居ノ方ヨリ目出度ゲナル人ノ多ク仕
人ニ圍繞セラレテ入玉フアヤシク誰カハカバカリ
ノ粧ナラント見ル程ニ宮殿ヨリ有ツル女房イソギ
出玉ヒテ何事ニワタラセ玉ヘルニカ最思ヒカゲズ
ト申玉フ客人ノ玉フヤウ若桓舜ト申法師望申ス事
ヤ侍ルト問玉ヘリ爾事ニ侍ル七日ノ間法施ヲナシ
念比ニ祈申ツレバ只今望申ツル事ハ叶侍ズトノ玉
フ客人ノ玉フハ努々有ザル事也我ニモ年來ナゲキ
申侍リキ其ツトメ淺カラズ侍レバ玉ハラセンニハ
何事ヲモ與フベケレドモワザト聞入侍ラズ既ニ玉
ハラバ速ニ召返サセ玉ヘトアリ女房驚キ玉テ故侍
ケルヲモ知ラズ誤仕ヌ但其僧ハイマダ此ニ侍ル召
返ナントテ立ヨリノ玉テ胸ノ紙切ヲトリテ歸玉ヒ
ヌ僧思フヤウ此客人ハ疑ナク山王ニコソオハシマ

スメレ年來功ヲ入レ奉レリ我モトメタビ玉ハン事
コソ難カラメ適外德ヲカウブルヲサヘ妨玉フ事ウ
ラメシクテ泪ヲオサヘ居ケル程ニ女房サテモ如何
ナル故ニテワザトワタリ玉ヒテカク妨玉フゾト問
玉ヘリ客人ノ玉フヤウ此僧ハ順次ニ生死ヲイトフ
ベキ者ニテ侍ルヲ若豐ニシテ世ニ侍ラバ必餘執フ
カク成穢土ニ留ルベキ也コレニ依テミヅカラヨキ
様ナル事ヲバトカクシテ違エ往生ヲトゲサセント
構侍ル也トノ玉フト覺テ夢サメケリアハレニ忝覺
テ山ニ歸リヌ其後此望ヲタヤシテ偏ニ後世ヲツト
メツキニ往生セリ月藏房僧都トハ是也下略百因緣集
日吉の社和歌に讀り
我頼む日吉のかけはおく山の
千載

柴の戸迄もさゝさらめやば

法印慈圓

日吉の社に御幸の時讀せ給ひける
續拾遺
道あれと我世を神に契るとて

後嵯峨院

けふふみ初るしかの山越

○大宮

日吉の社に讀て奉りける歌の中に大宮を
續後撰
いにしへの鶴の林にちる花の

後京極

八王子 千手觀音 客人宮 十一面觀音

十禪師 地藏 三宮 普賢

中七社牛御子 大威德 大行事 毘沙門

早尾 不動 氣比 聖觀音

下八王子 虛空藏 王子宮 文珠

聖女 如意輪 下七社小禪師 彌勒龍樹

惡王子 愛染明王 新行事 吉祥天女

岩瀧 辨才天 山末 摩利支天

劔宮 不動 大宮竈殿 大日

聖眞子竈殿 金剛界大日 二宮竈殿 日光月光

已上習合神
道之說

○日吉社與三松尾神爲一體也後朱雀院長久四年
六月八日初備三十二社之數後三條院延久四年四
月二十三日初祭之後白河院永暦元年十月十六日
移日吉神體於東山今熊野新宮號云新日吉應保
二年四月三十日初祭之 公事根源

○昔一條院の御時上總守時重といふもの有千部の
法花經讀誦の願心中にふかゝりけれども身まづし
くして僧一人かたらふべきはからいなし思ひかね
て日吉の社にまうでて二心なく祈申たるに神感あ

りてはからざるに上總守になりにけり任國の最前
の得分をもて千部の經をはじめてけり其夜の夢に
貴僧枕にきたりてのたまはく善哉汝一乗の讀
誦をくはたつる事とてかんないをながしておはし
けり時重かく仰らるゝはたれ人にてわたらせ給ふ
と申しければ吾は一乗守護の十禪師なりとのたま
ひて歌をなん詠じ給ひけり

一乗のみのりをたもつ人のみそみ世の佛の師と
は成ぬる時重たつとく覺えて生死をばいかではな
れ候べきと申ければ

極樂の道のしるへはみをさらぬ心ひとつのなを
き也けりさてかへらせ給ひけるが立かへり給ひ
て

朝ゆふの人のうへをもみ聞らんむなしき空のけ
ふりとそなる無常を悟べきよしを示て去給ひけり

古今著
聞集

○中比ノ事ナルニ貧ナル山法師有り世路ノ不叶
事ヲ憂テ年來山王エ詣ツ、泣々祈申ケレドモ更ニ
其驗ナシイト口惜覺テ宿業限アラバ不叶トモ示
玉ヘカシ不通ニ聞入玉ハズト怨メシク成テ如何セ

者琴御館以_二大賢木_一奏_二神幸之祝詞_一於_二唐崎_一如_二先盟_一恒世裔奉_二粟御料_一也出_二神輿_一而祭者桓武帝延曆十年又御舟祭始延文年中洪水已後例也

○七十一代後三條院延久四年四月廿三日記云今日比叡祭也自_二今年_一初被_レ立_二官幣_一註式二十二社○或云

六十四代圓融院貞元二年四月廿六日始被_レ遣_二上卿辨外記史諸司等_一

○臨時祭 圓融院治十三年天元五年七月五日依_二叡願_一被_レ遂行_二之_一使侍從藤原朝臣粟田 ○第六

十六代一條院長德元年八月廿一日被_レ行之使左少將源朝臣_{理方}

○或說八十二代後鳥羽院建久三年二月十三日丙辰後白川法皇依_二御不豫_一急御願被_レ行之使正三位

行左近衛權中將藤原朝臣忠經 此已後絕 ○行幸始 七十一代後三條院延久三年十月廿九日

始已上數說啓蒙 ○日吉神社一座注云比叡神同 延喜式ノ心

○傳記云山王權現者磯城島金刺宮欽明卽位元年自天降_二于大和國磯城上郡_一而現_二大三輪神_一其後大

津宮天智卽位元年現_二老翁形_一告云我是大比叡大明

神也地主權現者天照太神開_二天岩戶_一以_レ錄搜_二海中_一時有_二神當_一其鋒_二是開闢之初國常立尊降而爲_二神_一以主_二豐葦原_一者也此時滋賀浦三津川見_二五色波_一所謂大比叡小比叡大宮二宮是也神社考

○釋行圓姓源氏通議大夫國舉之子也初圓已冠爲_二進士_一名_二國輔_一隨_二父赴_一州有_二嬖妾_一留在_二都下_一國輔

繫戀央々一日潛歸問_レ女或云近聞其人病無_二看養_一不_レ知已終不國輔尋求往_レ野其屍脹爛不_レ可_レ見也國

輔不_レ還家卽入_二園城寺_一剃落遊_二智靜心譽之_一二門以_レ故精_二修學_一修_二如意輪觀自在供_一大悲尊現_レ身放

光常與_二山王明神_一清談明神云我名_二山王_一公委_レ之乎表_二三諦卽一_一也山字豎三畫者空假中也橫一畫是

卽一也王字橫三畫者三諦也豎一畫又一也二字三畫而有_二一貫之象_一故我立爲_レ號也一心三觀一念三千

亦復如_レ是是以我護_二持台教_一鎮_二覆國家_一我身外無_レ名名外無_レ身卽_レ身而名卽_レ名而身名外無_レ法法外

無_レ名卽_レ名而法卽_レ法而名身與_二名法_一無_レ二無_レ三

是名_二一乘_一我名義也 元享釋書 山王 本地藥師 大宮權現 釋迦

○早尾 素戔嗚尊 又說猿田彥命傳上ニ ○馬場頂上

鎮坐也諸人加護深重神之故坂口祭レ之鎮坐組

○大行事 高皇產靈尊也 傳上ニミエヌ

昔日神入ニ磐戸一閑居之時以ニ此神之謀ニ而集ニ八百

萬神一奏ニ神樂ニ日神再御怒解同上

○聖女 下照姬也 傳如上

延喜年中祭レ之 同上

○新行事 瀛津姬也 ○天照太神與ニ素戔嗚尊一盟而所

生三女神之一也 同上

○牛尊 ○八王子右祭レ之此殿底有ニ靈石一尤口傳同上

○小禪師 彥火々出見尊 傳上ニミエタリ 地神第

四尊也同上

○惡王子 深祕 ○童子形ニテ出現同上

○岩瀧 蹈鞰姬命 淺井郡竹生嶋神同體也神武帝后

也同上 ○蹈鞰姬命事代主命子也大己貴之孫ナリ

●事代主神 — 天日方奇日方命

— 蹈鞰五十鈴姬命

— 五十鈴依姬命

○劔宮 素戔嗚尊變神也

童形出現也容嶺凶事退散神也 同上

○氣比 仲哀天皇也 ○從ニ越前國角鹿郡一影向也桓

武帝御宇勸ニ請之同上

○大竈 澳津彥命也 ○此即大歲神子也大歲者杵築

大神御孫也諸家竈神是也同上神傳系上ニミエタリ

○竈殿 澳津姬神也 ○註同レ上 鎮坐組

○所攝社

○若宮殿 在ニ和田町比容辻一

國常立尊也 同上

○護因 在ニ王子宮邊一

二條院勅附也 同上

○女別當社 在ニ唐崎一唐崎社是也

大宮初顯之地口傳社也 同上

今按此外神社靈社所レ載之數七十座然摘ニ其要一

而記レ焉

○位記

●大宮 五十七代陽成院元慶四年正一位

●二宮 八十一代安德帝壽永二年正一位

●聖眞子 ●八王子 ●客人 ●十禪師 ●三宮已上五社

八十八代後深草院建長二年正一位

○祭 四月中申日 日吉鎮座諸祭儀式云卯月祭禮

宮 已上七社

大宮 大己貴命 傳上ニミエタリ

○人皇卅九代天智帝御宇白鳳二年三月三日琴御館奉_レ祭ニ山麓ニ其後御館乞_レ奉_ニ尊神御形ニ于_レ時夜忽光耀如_レ日其中有_ニ大字ニ更無_ニ異物ニ依_レ之奉_レ稱_ニ大宮_ニ也 日吉鎮坐記

○二宮 國常立尊 神皇魂尊 傳上ニミエタリ

○此卽天地二義主神天地始其中出現之故名ニ二宮ニ二字此天字畧也天地陰陽兩義加護神者是也垂跡始自_ニ神代_ニ已來波母山降現也 日吉鎮坐記

天地初判始有_ニ俱生之神_ニ號_ニ國常立尊_ニ次國狹立尊又云高天原所生神名云_ニ天御中主尊_ニ次高皇產靈尊次神皇產靈尊 日本紀

○聖眞子 正哉吾勝尊 傳系上ニ見ユ聖者神也言於_ニ兩神眞心中_ニ出生故名_レ焉 鎮坐紀

○八王子 國狹立尊 ○天地之中生ニ一物ニ狀如_ニ葦牙_ニ便化爲_レ神號_ニ國常立尊_ニ次國狹槌尊 日本紀 ○八十萬神大祖元氣神也尤有_ニ口傳_ニ 鎮坐紀

○客人 伊弉冊尊 ○次有_レ神伊弉諾尊伊弉冊尊 日本紀

○十禪師 瓊々杵尊 ○天照太神之子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶_ニ高皇產靈尊之女栲幡千千姬_ニ生_ニ天津彥火瓊々杵尊_ニ日本紀 ○十者天七地三之數禪讓也師國也言十善天子讓_レ國之義 鎮坐紀

○三宮 惶根尊 一說 天照太神三女 ○三女影向故名_ニ三宮_ニ 鎮坐紀 ○天神第六惶根尊是也 日大記

○所屬十四座 加_ニ已上七坐_ニ稱_ニ二十一社_ニ

○下八王子宮 天御中主尊

祭禮七社外當社有_ニ神馬_ニ也東有_レ石名_ニ石船_ニ明神初降之地 鎮坐紀

天地初發之時大海中有_ニ一物_ニ浮形如_ニ葦牙_ニ其中神人化生名云_ニ天御中主神_ニ故號_ニ豐葦原中國_ニ又因以云豐受皇太神 鎮坐本紀 ○天地初發之時於_ニ高天原_ニ成神名_ニ天之御中主神_ニ古事記

以_ニ國常立尊_ニ爲_ニ元始_ニ蓋同體異名也 日本紀

○王子宮 建御名方命 又御名刀命共 白_ニ信州諏訪郡_ニ鎮坐 鎮坐紀

大物主神娶_ニ高志河沼姬_ニ生_ニ一男建御名刀神_ニ舊事紀 ○信濃諏訪神是也

類聚國史云貞觀十七年三月廿九日三上神從三位

或問當宮齋官食_ニ于陶器_ニ炊_ニ于瓦釜_ニ又忌_ニ革服

火奴之類_ニ稱_ニ天下第二之忌火_ニ也奈何云皆疾_ニ機

巧之智欲_ニ早計_ニ之故也蓋神貴_ニ乎淳朴_ニ賤_ニ機巧_ニ

且古人祭服多以_レ革造_ニ之本朝疾_ニ皮革之屬竊惟

古人用_レ之不_レ忘_ニ其本_ニ也朝人疾_レ之避_ニ其流_ニ已

上啓蒙

○神託 常に天下の諸人に正しく直き心をしらし

めんと思ふものは神これをよろこびて其名を天下

にあらはしますさいはいは子孫にあまるたとへば

まがれるものゝ一旦人のよかる人有とも神明かれ

をうばひてつぎなかるべし 倭論語

○石部社 甲賀郡石部村ニ有リ 祭神二座

上社ハ吉姫大明神 町尻北二町許ニアリ

下社ハ正一位吉彦大明神 笥町頭折ノ南三町ニア

リ ●案倭姫世紀云而後倭姫命度坐時爾阿佐加瀉

爾多氣連等祖宇加乃彦之子吉志比女次吉彦二人參

相支云々爾吉姫地口御田并麻園進蓋此神歟古老諺

言上下二神有_ニ伊州兩宮緣_ニ 啓蒙

○苗鹿社 志賀郡坂本郷苗鹿村ニ有リ

祭神一座 苗鹿明神 式所謂那波加社は也○天太

玉命化_ニ老翁_ニ鹿負_レ稻導_レ之故名兼齋番神記 ○天智

帝七年營_レ社 神祇正宗 啓蒙

○櫻谷社 栗太郡去_ニ于勢多之南_ニ二里許有

祭神一座 瀬織津姫命 式所謂佐久奈止社は也天

照太神荒魂也

○伊弉諾尊洗_ニ左眼_ニ因以生神云_ニ天照荒魂_ニ亦名_ニ

瀬織津比咩神_ニ阿波良波命傳

○仁壽元年六月丙子詔以_ニ近江國散久難度神_ニ列_ニ

明神_ニ文德實錄

鎮坐年紀不_ニ分明_ニ 已上啓蒙

○四宮 志賀郡大津之驛ニアリ 祭神四座

大日叡 小日叡 氣比 小禪師

○大日叡 大己貴命 日吉社記

○小日叡 國常立尊 同上

○氣比 仲哀天皇 同上

○小禪師 彦火々出見尊 同上

當社日吉禰殿也

○日吉 同郡坂本村ニ有リ 祭神七座

大宮 二宮 聖眞子 八王子 客人 十禪師 三

於日之少宮日本紀 ○神書抄曰日之少宮者近江國犬上郡多賀大明神是也近江在良方日之所初出也故曰日少宮

按神記云伊弉諾尊構幽宮于淡路之洲寂然長隱者矣故舊事紀亦載伊弉諾坐淡路之多賀神名帳亦云淡路津名郡伊弉諾神社蓋伊弉諾在於彼亦在於此也

或云以近江國爲良方自今山城王宮視之則然往日伊弉諾尊都於山城國乎不若未都于此則以近江國爲良方則似未可信云關國之初自有王幾之兆在山城洲其數遷都乎四方者時使然也 啓蒙

○別宮并攝社

山田社去本宮乾一里許

兒宮 去本宮坤半里土人稱奧御前

荒神社 有本宮東掖

蛭子社 有本宮西掖

伊勢神宮 有本宮西

日向社 伊勢宮西 錦取社二座也、有、町口南

已上共啓蒙

○神託 心あればつみあり心なければ罪なし有無の心は我このますたいありのまゝなるもろゝの人の心をもて玉の緒はゆたかにひろき心よりいつまでもつきし物をや 倭論語

○彦根社 蒲生郡ニ有リ一云犬上郡共

祭神一座 活津彥根命

素戔嗚尊自右臂中化生活津彥根命日本紀

○樹下山門神系圖云天照太神與素戔嗚尊所誓

生之活津彥根命者近江國彦根明神也 啓蒙

天照太神 正哉吾勝々速日天忍骨尊

天穗日命

天津彥根命

活津彥根命

○三上社 益須郡ニ有リ 祭神一座 天御影命

社記云伊弉諾之別稱也

○古事記云近淡海國之御上祝以伊都玖天之御影神

云々兼右神祇正宗曰今多賀大明神本地伊弉諾尊也

人皇七代孝靈帝六年出現○社家相承所謂伊弉諾尊

與天照太神之兩座也仍稱天御影日御影社

鼓うちて思惟佛道のするを猶きかばやと託宣侍て
 さまぐの事なんど侍りしにこそ實に神もおはし
 ましけるとは覺えし其中に我去ぬる神護慶雲に法
 相をまもらんとて三笠山にうつりぬれど此所をも
 すてず常々守るとぞ御託宣侍りし扱も汐のみつる
 ときはおほくの鱗波にしたがひて御殿迄寄汐のひ
 くときは遙に歸れば日に二度參下向に似たりされ
 ば結縁むなしからで定て巨益にあづからんとあは
 れに侍る又はるかに御社にむきのきて御社有率川
 と申眷屬の御神におはします也天下をもらさずは
 ごくまんとちかひ給へり鶴千里にとぶ猶地をはな
 れず鷺雲へかけるいまだ天の外にあらざれば何の
 鳥獸か利益にもるゝ事侍らん如此に覺えて我等を
 すくはんかれをたすけんと思しける佛神多くまし
 ませ共我等妄染の雲厚く心のはれぬ程に候神も利
 益に所のましまさぬにて侍り 撰集抄

○洗磯前社 鹿島郡ニ有リ 神祭

少彦名命 文德實錄云齊衡三年十二月戊戌常陸國
 上言鹿島郡大洗磯前有神新降初郡民有_ニ煮_レ海爲
_レ鹽者一夜半望_レ海光耀屬_レ天明日有_ニ兩怪石_一見_レ在_ニ

水次高各尺許體_ニ於神造_一非_ニ人間石_一鹽翁私怪_レ之
 去後日亦有_ニ二十餘小石_一在_ニ向石左右_一似_レ若_ニ侍
 坐_一彩色非_ニ常或形_ニ沙門_一唯無_ニ耳目_一時神憑_レ人云
 我是大奈母知少比古奈命也昔造_ニ此國_一訖去往_ニ東
 海_一今爲_レ濟_レ民更亦來歸

○志津社 久慈郡ニ有リ 祭神一座

手力雄命 思兼命子也 傳系有_レ上神紀所_レ載太神
 入_レ窟之時有_レ功信州戶隱神同垂跡也 啓蒙已上東
 海道畢

東山道

就_ニ東方山中_一行道也

近江

昔云_ニ淡海_一後代改_ニ近江_一風土記

○建部社 栗太郡ニ有リ 祭神 大己貴命一宮記

○兼熙番神註云天明玉命也云々未_レ知_ニ是非_一仍存_ニ
 兩說_一啓蒙 天武帝白鳳四年勸請神祇正宗

○貞觀九月七日十一日授_ニ從四位下_一國史

○多賀社 犬上郡ニ有リ 祭神一座

伊弉諾尊 額云多賀大社

伊弉諾尊功既至德亦大矣於_レ是登_レ天報命仍留_ニ宅

日神熯速日神之子武甕槌神 同上 ○高皇產靈尊遣

經津主神於葦原中國一時此神進云豈唯經津主神獨

爲丈夫而吾非丈夫者哉其辭氣慷慨故卽配經

津主神令平葦原中國 同上

○相傳曰神誓以石爲柱者石腐之際神明在也云々

啓蒙

○神託われつねに此葦原の中國の衆生をめぐみ天神のみことのりをうけ異朝の凶徒をしりぞけ天魔地魔の鋒さをくだく此國の者一人も我神徳をかうぶらずといふ事なし神明につかへまつるもの國におゝき時は我力をえて魔軍日の下の雪の如くにさえ失ぬ國に神明につかゆるものすくなき時は我力おとろえて毎度に心を苦しむ魔力はやゝもすればつよく神力はやゝもすればよはし是只諸の人の心或時は月氏國の教にうつり或時は西天の教にはしりて神道を思ふ者なきゆへに我つねにくるしむ天國の教も我神道の潤色ならば用てもよし一向に本を捨てするに近づきもとの心をうしなふべきぞくるしき 倭論語

鹿嶋和歌によめり

拾遺

鹿島なる筑まの神のつく／＼と

我み一つに戀をつみつる

讀人不知

新續古今

なそもかく別初けんひたちなる

俊成

鹿島の帶のうらめしのよや

治承の比常陸國かしまの明神に參侍れば御社は南むかひに侍り前は海後は山にて社いらかをならべ廻廊軒をきしれり沙だにさせば御前の打板まで海になり沙だにもひけば眞砂にて二三里に及べり南は海にてきはもなく侍れば晝はみなれざほさす船をみ夜は波に宿る月をみき北は山にて侍れば杉村も落なく時鳥のはつねいちはやく聞え草むらに露をそゆるよるの鹿あかつきさけぶ猿のこゑ深山おろし松の風よに物あはれに心すごく侍り東西のべなれば色々の花は錦をおほへるに似たり扱も何よりおもしろく侍りしは御殿の上の櫻の七日を限る別れを告て庭をさかりと移て侍りし折ふし汐みちて花のあそこひとむらこゝにひとむらなぎさ／＼入江／＼にゆられありき侍りし兼て廻廊のうちにて入於深山思惟佛道とたつとき聲にて讀侍りしがやがて讀さして末床じく思ひしにかんなぎの

○玉前社 埴生郡ニ有リ 祭神 高皇魂尊弟生產靈

一男前玉命也 一宮記

按ルニ系圖傳相違アル歟

高皇產靈尊

神皇產靈尊

津速魂命

武乳速命

振魂命 前玉命

貞觀九年七月廿七日從五位上勳五等玉崎神從四

位下 國史

○神託 もろ人よ理にさかふ事なかれ理にさかへ

ば天神の心にながふぞ理といふは天也地なり神也

思ふべし 倭論語

下總

○香取社 香取郡ニ有リ 祭神 齋主命也 一宮記

○天神遣ニ經津主神武甕槌神ニ使レ平コ定葦原中國ニ

是時齋主神號ニ齋之大人一此神今在ニ東國楯取之地一

也 日本紀

○神書抄曰齋主祭神之主也經津主神之別稱

已下畧之 神社考

○經津主神者天之鎮神也其先出自ニ諸尊ニ初諸尊

斬ニ遇突ニ血成ニ赤霧ニ天下陰闇直達ニ天漢ニ化爲ニ三

百六十五度七百八十三磐石ニ是謂ニ星度之精ニ也氣

化爲ノ神號云ニ磐裂ニ是謂ニ歲星之精ニ磐裂生ニ根裂ニ

是謂ニ熒惑之精ニ根裂生ニ磐筒男ニ是謂ニ太白之精ニ筒

男生ニ磐筒女ニ是謂ニ辰星之精ニ筒筒女生ニ經津主ニ是謂ニ

鎮星之精ニ故云ニ天安河磐石ニ則經津主神之祖也

天書

○神託 それ神明のいむ事のけがれは衆生の穢惡

の心をいましむ也直きものにはけがるといはすな

べての人の心のたゞしく直からんがため也

いさぎよき人の心の底すまば清き神明のかげを

うつさん 倭論語

常陸

此國之邊常沙滿民家多有ノ煩故宣云此國干

立成ノ陸則百姓安故云ニ飛多智ニ也 風土記

○鹿嶋社 鹿島郡ニ有リ 祭神 武甕槌神也 一宮記

○伊弉諾尊拔ニ所帶十握劔ニ斬ニ軻遇突智ニ其劔鐔垂

血激越爲ノ神號云ニ甕速日神ニ次熯速日神其甕速日

神是武甕槌神之祖也 日本紀 ○甕速日神之子熯速

本朝文粹一 神社考

桓武天皇—葛原親王—高見王—高望王—

良將—將門 相馬小次郎 自號平親王—

○湯島社 江府湯島ニ有リ 祭神 菅家 ○太田道

灌持資在江戶城時文明十年六月五日於城官之

中一建菅丞相祠同年秋道灌宴坐一室夢中見

接菅丞相其翌朝或人卒然來獻菅丞相所親筆

之畫像可謂靈夢也遂於城外之北畔建菅丞

相祠堂一寄數十頃之美田栽梅花數百株

○鷺宮 武藏大田庄ニ有リ 祭神未考

建久四年十一月武藏大田庄鷺宮實前血流卜筮云兵

革之兆也因奉神馬鹿毛源賴朝使榛谷四郎重朝

莊嚴社壇上 神社考

安房

養老二年五月日割上總國四郡置之天平

十三年復田其後又置景行天皇五十三年冬

十月至上總國從海路渡淡水門云々淡水

水門今安房國也

○天比理乃咩社 同安房郡ニ有リ 一名洲崎社

祭神 太玉命 一宮記 仁壽二年七月丙辰加從三

位一 文德實錄 ○神傳系上見

源賴朝石橋山ノ合戰ニウチマケタマヒテ後治承四

年八月廿六日ノアケボノニ伊豆國眞鶴崎ヨリ船ニ

乘三浦ヲコ、ロザシテヲシイダス折節風ハゲシク

テ水崎ニ船ヲヨセカネテ廿八日ノ夕暮ニ安房國洲

崎トイフ所ニ船ヲハセアゲテ其夜ハ即大明神ニ御

通夜アリテ夜ト、モニ祈念ヲゾ申サレケル夢ニ明

神ノシメシ玉フトオボシクテ御寶殿ノ御戸ヲイッ

クシキ御手ニテヲシヒラキ玉ヒテ一首ノ歌ヲゾア

ソバシケル

源ハ同シ流ヲ石清水只セキアゲヨ雲ノ上マテ賴

朝ユメウチ覺テ明神ヲ三度拜シタテマツリ玉ヒテ

源ハ同シ流ヲ石清水セキアケテタヘ雲ノ上マデ

上總

上總下總々謂木枝也昔此國生大楠長

及數百丈時帝恠之卜占之大史奏云天

下大凶事也因茲斬捨彼木倒南方也上

枝云上總下枝云下總也 風土記

○足輕社 同國足柄ニアリ 山 關 和歌あり

續古今

あしからの山路はみねと別れなは

躬恒

心のみこそ行て歸らめ

新勅撰

足柄の關路こえ行くしのゝめに

後京極

一村霞む浮島か原

○大和本紀云足柄明神者昔狩獵人一日離寵妻而悲傷無止期也其及將死授一鏡云若有追慕之情則視此鏡焉仍如教者相其亡妻之模猶如生平也以其鏡祭爲神々所_レ在國名相模 啓蒙

武藏

秩父嵩者其勢如勇者怒立日本武美此山奉爲東征祈以兵具納埋岩藏故云武藏

藏一風土記

○氷川社 足立郡ニ有リ 祭神 素戔島尊也 日本

武尊東征之時勸請也兼俱神名帳註○貞觀十一年十一月十

九日壬申正四位下 國史

○山王社 武藏江戸ニ有リ永田山ト號ス

祭神 江州日吉ニ同ジ神傳ハ日吉ノ下ニ有リ○長祿三年に太田道灌江府の城に住ける時文明年中に始て此御神を星野山の城内に勸請せり承應三年に

回祿の後今の溜池の築山にうつせり祭六月十五日隔年に有元始慈覺大師勸請也 江戸名所記

○神明 芝日比谷ニ有リ 祭神 天照太神 祭九月

十六日○一條院寛弘二年乙巳九月十六日に幣并大牙壹ツ此所に降りくだれり然所に童子壹人來て狂出て口ばしりけるは我は是伊勢の神明也此所に跡をといめんため二種のしるしをあらはすと云々あるに依て此所に勸請し奉る云々 名所記ノ心

○愛宕社 同江府ニアリ 勸請年記未考 所祭山城之愛宕ニ同ジ

○氷川社 江府四谷ニ有リ 額云氷川大明神 祭神

未考此所入間郡也足立郡氷川神ニ同キ歟後君子仰_レ考耳

○神田社 江府神田ニ有リ 所祭 平將門ガ靈也○

神田明神者世傳平將門屍埋于此者也朱雀院御宇承平二年平將門在總州相馬郡招集東關士民等

叛攻破伯父常陸大承國香振威於東關于一時天慶三年正月國香子平貞盛依藤太秀郷藤原忠文等蒙

勅命爲征伐使而赴將門居城屢戰遂誅伐將門秀郷得其首傳言將門首飛留于此云々見子續

門秀郷得其首傳言將門首飛留于此云々見子續

たらず職掌におほせて八月の放生會をおこなはる
崇神のいつくしみ本社にかはらずときこゆ 同上

東鑑文治五年九月賴朝於_ニ奥州伊澤郡鎮守府_一奉_ニ

幣八幡宮瑞籬_二殿_一是田村丸將軍征_ニ東夷_一時此處

奉_ニ勸請_一之靈廟也彼卿所_レ帶弓矢及鞭等納_ニ置之_一

于_レ今在_ニ寶藏_一 神社考

○景政社 鎌倉極樂寺切通エカ、ル在所ノ北ノ山ノ

間ニアリ松榎三カイ程ナルガ兩ノ脇ニ有リ 名所記

○祭處 權五郎景政ガ靈也 ○景政嘗從_ニ源義家_一

赴_ニ奥州之役_一矢中_ニ景政左眼_一不_レ拔_レ矢七日遂射_ニ

殺其寇_一今世患_ニ目疾_一者祈_ニ此社_一有效云 神社考

○號_{御靈} 東鑑元曆二年八月廿七日御靈宮鳴動依て

兵衛佐殿御參詣有て御神樂神拜有又云御所の女房

の夢に景政と名乗り老翁夢に告て云崇徳院の御

た_レり世にみつ依て今鎌倉中人おほく死す我是を

ふせがんとす然共大きにか_レはりを得ずといへり

鎌倉殿つたへき_レ給ひて諸寺諸社にて御祈をはじ

めらるゝ 名所記

○杜戸明神 同所鷺浦ヲ行海中ニ五十間程サシ出タ
ル所也松榎ノ古木シゲリ浦ノ景江島金澤ニモヲト

リマサリハ分難シ 同上 祭神未_レ考 ○明神の寶物
あこ小鞍どう駒の角 運慶作の獅子 綸子一通其

文はしれず年號は嘉元元年守殿明神刑部介物部恒

光とあり并二位尼御前の御教事あり年號は曆應二

年十二月十四日 同上

○下若宮八幡 東鑑一卷に本社は後冷泉院御宇伊豫

守源賴義勅定をうけ安部貞任を征伐せしむ其時丹

祈のむねありて康平六年秋八月にひそかに石清水

のみづるぎを當國由井郷に移し奉る今是を下若宮

と申

永保元年二月に陸奥守源義家しゆふくをくはゆ又

兵衛佐小林郷にうつさる 名所記

○荏柄天神 祭神菅家 賴朝やしきより東にあり東

鑑に御所より東_ニがらの前焼亡とあり 名所記 後

土御門院長享元年二月廿五日建立太田道灌本願也

○鎌足明神 祭處大織冠鎌足公ト云々大職冠鹿島に

まうで給ひ歸京の時由井郷に宿し給ふ其夜の夢の

御告により多年たしなみ給ふ所の鎌を大倉松岡に

うづめ給ふに依て鎌倉と號す 名所記
○瀬戸明神 傳無_ニ所見_一 己上鎌倉

○箱根 同國 社家者語レ余云伊豆箱根者其本社彦

火々出見尊也又有駒形權現 白和龍王 右鵠王

左鵠王及客人宮神社考

千載
ともしゝて箱根の山に明にけり

俊綱

二より三より逢とせしに

甲斐

○淺間社 八代郡ニ有リ 祭神

神體同富士一宮記

相模

足輕明神者狩人也或時離寵妻ニ有悲傷故
常見亡妻之鏡思之相模如レ見亡妻相
見也模形也 風土記

○寒川社 高座郡ニ有リ神體同八幡一宮記 貞觀

十一年十一月十九日從四位上 國史

○鶴岡宮

鎌倉鶴岡ニ有リ 祭神 垂跡同山州石清水○

廿二社註式云本社者人皇七十代後冷泉院御宇伊與
守源朝臣賴義奉勅定征伐安倍貞任之時有丹祈
之旨康平六年八月潛勸請石清水建瑞籬於當國
由比郷今號下人皇七十二代白河院治八年永保元

年二月陸奥守源朝臣義家加修復今又奉遷小林
郷

後冷泉院天喜六癸卯年鎮座 改曆雜事記

已上同啓蒙

鶴岡和歌によめり

新拾遺

鶴岡木高き松を吹風の

左兵衛督基氏

雲ゐにひゝく萬代のこゑ

●東鏡大概右兵衛佐賴朝義兵をおこし給ひて漸威
東國におよぶのさざみ心願有により先鎌倉に入給
ひ小林郷の北山をてんじ宮廟をかまえ下若宮を此
ところに勸請し給ひ先假初の宮居也治承五年に武
藏國淺草より木道のたくみをめして七月八日事始
有之八月十五日に遷宮有奉行は梶原景時土肥眞平
大庭景義也建久二年若宮の上の地に別て正八幡宮
勸請し給ふ上の若宮是なり 鎌倉名所記
東鑑若宮のかたはらに熱田大明神を勸請し給ふと
有今左右に三輪熱田諏訪三島住吉の社有山の上八
幡の右の方に武内神社賴朝の靈社有 同上
○鴨長明道記鶴岡若宮は松柏みどりしげく蘋蘩の
そなへかくる事なし陪從を定て四季の御神樂おこ

○三穗社 有度郡三穗ニ有リ

昔神女飛來懸羽衣於松枝、漁人取之、神女失衣不能飛、屢求之、不卑焉、遂相約授衣、神女悅而飛去、其後又來於是、土人立祠奉之。

○神名帳註三穗津姬乎云々

按俗人家有東遊者、相傳云安閑帝御宇於駿河國有度濱、天女降現而爲歌舞、道守氏翁者傳此曲矣、予聞諸元宵云三穗神社與羽衣社不同、今現二社在焉、三穗社在平林中、羽衣社去平林數十步在沙陵之下、云下畧之。啓蒙

○三保松原者在駿河國有度郡、有度濱北有富士山、南有大洋海、久能山嶮於西、清見關、田子浦在其前、松林蒼翠、不知其幾千萬株也、殆非凡境、誠天女海童之所遊息也、案風土記古老傳言昔有神女、自天降來、曝羽衣於松枝、漁人拾得而見之、其輕軟不可言也、所謂六銖衣乎、織女機中物乎、神女乞之、漁人不與、神女欲上天而無羽衣、於是遂與漁人爲夫婦、蓋不得已也、其後一旦女取羽衣、乘雲而去、其漁人亦登仙云。神社考

伊豆

伊豆和名也、東相模西駿河出、其中間之國故伊豆、則出之義也、日本武東征時無伊豆名、後代立當國乎。

○三嶋社 賀茂郡ニ有リ 祭神一座

大山祇命 一宮記

○崇峻帝御宇庚戌年出現 改曆雜事記

○抄云伊豆國賀茂郡三嶋神社攝津國嶋下郡三嶋社伊與州越智郡大山祇神社此三所共一神也。神社考

伊豆三島明神者移伊與三島以祭之、伊與守實綱患旱祈之、令能因法師詠和歌俄大雨禾不枯。同上

太宰大貳佐理任罷自鎮西還至伊與國泊風浪惡而不出、船其夜夢三嶋明神告云、請書社額翌日佐理書以懸之、風乃順而發、船佐理本朝無双之能書也、其額云日本總鎮守三嶋大明神。同上

貞觀九年七月廿七日 從三位 國史

○神託 益人よ天にならひ地にうけし心をうしなはで天照神の教を教として人の國に操をよせてわか人をして人の人たらんは我つねにこのます氣はあしかるに移り安く能に移りにくき事を辨へをりて其操をくだく敷する事なかれ。倭論語

此地一矣又每歲有御葦神事者ト國中疫疾變異等一啓蒙

三河

此國有三河一云男川二云豐川三云矢作川男川者河上有山神白鬚明神也豐川者此河上有長者民屋豐饒故云豐川矢作川者日本武尊東征時於河邊多作矢故云矢作川一風土記抄

砥鹿社

寶飲郡ニ有リ 祭神 大己貴命 一宮記

貞觀十二年八月廿八日正五位下砥鹿神正五位上同十八年六月八日從四位上 國史

遠江

近江始書淡海有大江自帝都近故改近江又遠江始書遠淡海此國有大江自帝都遙遠故名遠江一風土記

○事任社

周智郡ニ有リ 祭神 大己貴命也 一宮記

社記云一名小國神社也遠州周智郡大己貴命者欽明天皇御宇十六年乙亥春二月十八日出現于這所爾來奉崇小國一宮無不欽仰奉仕也若遠可社頭造修達天聽則勅使奉行之畢厥功一

攝社

奥石戸 王子宮 八幡 內宮 外宮 八王子

眞佐子社 飯王子 荒神

○文德實錄云嘉祥三年七月丙戌遠江國事任神授後五位下一

○橫須賀社

同郡橫須加村ニ有リ 祭神三座

高松社一座 小笠社同 橫須賀社同

社家註進云人皇四十二代文武天皇大寶元年秋九月奉遷此所也高松社者大市姬命也素戔嗚尊也橫須賀社者即熊野樟日命也素戔嗚尊也

鳥子 啓蒙

駿河

珠流河舊事記 舊事紀 一昔書洲流河也

郡有駿河一因爲國名 風土記

○淺間社 不盡郡ニ有リ 號富士權現是也大山祇女木花開耶姬命也 一宮記

○貞觀元年正月廿七日從三位 神階記

○神託 我人よ心なかれ心なければ能神明の位にのぼる也わづかに念慮にわたれば人心をさる也人心もさればちくるいとなるぞ人をしてかくあらんぞ我たへがたくりたみ我つねになげくのみ 倭論語

日本武尊留_二其形影天村雲_一爲_二御神體_一可_レ謂_二日本武尊垂跡_一者 啓蒙

○景行天皇廿八年冬十月日本武尊征_二東夷_一發路之枉_レ道拜_二伊勢神宮_一仍辭_二于倭姬命_一云今被_二天皇之命_一而東征將_レ誅_二諸叛者_一故辭之於_レ是倭姬命取_二草薙劍_一授_二日本武尊_一云慎之莫_レ怠也是歲日本武尊初至_二駿河_一其處賊陽從_レ之欺云是野也麋鹿甚多氣如_二朝霧足如_二茂林_一臨而應_レ狩日本武尊信_二其言_一入_二野中_一而覓_レ獸賊有_レ殺_二皇子_一之情_レ放_レ火燒_二其野_一皇子知_レ被_レ欺則以_二所佩劍_一自抽薙攘皇子之傍草_一因_レ是得_レ免故號_二其劍_一曰_二草薙_一也 日本紀

景行天皇の御宇東夷を御退治のとき相模國にて高かやにひをつけ打手の大將日本武尊をやきころさんとす尊劍をぬき祈念して打はらひ給へば方壹里のくさこことぐくなぎふせ給ひぬ尊も官軍もつゝがなしそれより此つるぎの名を改めてくさなぎの劍との給へり還御の時奇瑞あるによりて尾張國に大社をつくらしめ給ふ今の熱田明神是也八劍の宮是也其時太神宮え御いもうと大和姫の皇女奏問ありしに陳のはらひと此劍天のひわかしのひうち三種

を給ふ也其以後新羅國の僧日羅といふ者此劍をはしがり彼宮に參籠日久し可_レ然びんぎをもつて御殿をやぶりすでにぬすみ取にげ行と思へば宮中を一夜の程めくる計也夜の明たれば不_レ叶して劍を返しすてゝにげぬ是によりて同し寸尺に太刀を七振うたせて同殿にをき給ふ以上八振也又げん大夫どのといふ小社有是手摩乳也神宮にてはをき玉の神といふ是皆猿田彦の化現也 卜部兼邪記ノ心

○神託 天下の諸人よつねに神明の直きみことを身にうけて天を父とし地を母とし万物を兄弟として恨なくかなしみなき此神國の三界にまされるをたのしまん天照神の教にたがはですべらみことをうやまひませをむくかたあらば我神前に來て其名をあげよ必てきをくだきて心のまゝならん 倭論語 玉葉集神祇部 櫻花散なん後のかたみには 松にかゝれる藤をたのまん

是は熱田の大明神の御歌となん

○津嶋社 海部郡津嶋 祭神山州之祇園ニ同ジ

素戔鳥尊中殿 稻田姫東 八王子西

社家註進狀云 人皇卅代欽明天皇元年己未來ニ臨于

諸社一覽第六

東海道

伊賀 就ニ東方海邊ニ行道也東海道名始ニ于景行時ニ分ニ畿内七道ニ者始ニ于文武時ニ分ニ諸國東西南北ニ者始ニ于成務時ニ

伊賀

四郡内有ニ伊賀郡以ニ郡名ニ爲ニ國名ニ

○敢國社 阿拜郡 祭神一座 金山彦神也 一宮記

當國之一宮也○伊弉冊尊且生ニ火神軻遇突智ニ之時悶熱懊惱因爲吐此化ニ爲神ニ名云ニ金山彦ニ日本紀貞觀九年十月五日從五位下敢國神 國史

志摩

志摩和名也爲ニ伊勢嶋之意ニ也放レ地出ニ海

中ニ之嶋也後成ニ國名ニ 風土記

○伊射波大明神 答志郡ニ有リ伊雜宮是也 祭神伊勢内宮之下ニミエタリ

尾張

日本武征ニ東夷ニ而還ニ於尾張ニ所レ帶之劔在ニ熱田ニ熱田明神是也此劔本自ニ大蛇之尾ニ張出劔也此劔留ニ此國ニ故曰ニ尾張ニ

○眞清田社 中嶋郡ニ有リ 祭神 大己貴命也

一宮記 當國一宮也一宮記ニノスル所以下同事也

○熱田社 年魚市郡ニ有リ 祭神一座今爲ニ六座ニ

天村雲劔也 傳祇園素戔嗚尊之下ニ見エタリ ○

素戔嗚尊勅蛇云汝是可畏之神也敢不響乎乃以ニ八

甕酒ニ每レ口沃入其蛇飲レ酒而睡素戔嗚尊拔レ劔斬

之至ニ斬レ尾時ニ劔乃少缺割而視之則劔在ニ尾中ニ是

號ニ草薙劔ニ此今在ニ尾張國吾湯市村ニ即熱田祝部所

レ掌之神是也日本紀

神名帳註云人皇十二代景行帝十四男小碓尊後名ニ

日本武ニ此神垂跡也大宮 日本武東素戔嗚尊南宮寶姬

西伊弉並北倉稻魂中央天照太神也尾張風土記云熱

田社者昔日本武命巡ニ歷東國ニ還時娶ニ尾張連等遠

祖宮寶姬命ニ宿ニ於其家ニ夜頃向レ厠以ニ隨身劔掛ニ

於桑木ニ遺之入レ殿乃驚更往取レ之劔有レ光如レ神不

レ把得之即謂ニ宮寶姬ニ云此劔神氣宜奉レ齋レ之爲ニ

吾形影ニ因立ニ社熱田郷ニ爲レ名 先師說曰熱田社者

諸社一覽第六目錄

伊賀	志摩	尾張	參河	遠江	駿河	伊豆	甲斐	相模	武藏	安房	上總
敢國	伊雜	眞清	砥鹿	事任	淺間	三嶋	淺間	寒川	瀨戸	氷川	氷川
		熱田		横須	三保	箱根		鶴岡	足輕	山王	神田
		津嶋						景政		神明	湯嶋
								杜戸		愛宕	

下總	常陸	近江	鹿嶋	建部	石部	日吉	立木	兵主	水尾	明神	南宮	飛驒	信濃	上野	下野	陸奥	出羽	已上
香取	洗磯	多賀	苗賀	伊吹	筑摩	小津	田村	赤山	新羅	秀郷	牛頭	矢橋	白鬚	四宮	三上	彦根	志津	物忌

媛^一令^レ祭 啓蒙

○茨住吉 茨原郡ニ有リ長田生田ノ双ビ同海道ニア

リ 祭神三座

表筒男 中筒男 底筒男

○神功皇后伐ニ新羅^一之明年二月表筒男中筒男底筒男三神誨之云吾和魂宜^レ居ニ大津渚中倉之長峽^一便因看^ニ往來船^一於^レ是隨^ニ神教^一以鎮坐焉

○比咩語曾社 東生郡ニ有リ 祭神一座

下照姬命 大己貴命子也 此神與^ニ出雲御碕神^一和

歌祖神也 古今集註

○高皇產靈尊賜^ニ天稚彥天鹿兒弓及天羽羽矢^一以遣^レ之此神亦不^ニ忠誠^一也來到即娶^ニ顯國玉之女子^一下照姬^一又名高姬又名稚國玉

又曰天稚彥中^レ矢立死天稚彥之妻下照姬哭泣悲哀聲達^ニ于天^一 已上日本紀

田心姬命生^ニ妹下照姬命^一 舊事紀

攝州東生郡比賣許曾神社下照姬也今按比賣許曾在^ニ日本紀第六^一與^レ此不^レ同

已上神代系圖傳

○大己貴命

都味齒八重事代主神

味鉏高彥根命

下照姬命

高照光姬命

○上宮天神 高槻ニ有リ 祭神一座

菅家 里諺曰村上天皇天曆年中奉^ニ于北野^一之日先祀^ニ于此地^一也鳥居銘云攝津國上宮者菅神歸洛寓居之名區也

諸社一覽第五終

四殿南宮 五殿八祖神 已上五社也

南宮ハ大山咋 八祖神ハ高皇產靈尊神名 案以ニ廣

田爲ニ皇后難ニ心得ニ歟不レ合ニ日本書紀等旨啓蒙

○御位 貞觀元年正月廿七日從三位勳八等廣田神

正三位 神階記

貞觀十二年十月六日從一位 神名帳註

當社をよめる歌 六條入道前太政大臣

新續古今 けふ迄はかくてくらしつ行末を

めくみひろ田の神にまかせん

○西宮 西宮町ノ西ニアリ 祭神一座 蛭子 世所

謂西宮夷是也

相殿神二座 事八十神 大己貴命

蛭兒尊 此神雖ニ已ニ三歲脚猶不レ立故載ニ之於天磐櫓

樟船ニ而順レ風放棄 日本紀

初伊弉諾尊伊弉冊尊巡レ柱之時陰神先發ニ嘉言ニ既

達ニ陰陽之理ニ所以今生ニ蛭兒ニ同上

相殿神 事八十右 大己貴命兄也 大己貴命左

蛭兒 事八十傳系圖上ニ見エタリ

右相殿二座之說ト部兼熙廿二社註說也

攝社 名次社 鰺津社 岡田社

須川御前 興夷社 西宮辰巳田中ニ有リ

○生田社 八部郡生田ニ有リ 祭神一座

稚日女尊 稱ニ天照太神妹ニ有レ習乎 啓蒙 是後稚日

女尊坐ニ于齋服殿ニ而織ニ神之御衣ニ也日本紀 神功

皇后紀云伐ニ新羅之明年二月稚日女尊誨之云吾欲

レ居ニ活田長峽國ニ因以ニ海上五十狹茅ニ令レ祭

○御位 貞觀九年十二月十六日從三位國史生田歌

に讀リ

後撰戀 幾度か生田のうらに立かへる

讀人不知

波に我みを打ぬらすらん

同かへし

立歸りぬれてはひぬる沙なれば

同

生田のうらのさかところみれ

生田杜 川 池歌によめり

○長田 攝津郡ニ有リ生田ノ双也 額云長田大明神

祭神一座 事代主尊

大己貴命子傳系上ニ見エタリ

○皇后伐ニ新羅之明年二月皇后之船廻ニ於海中ニ以

不レ能レ進更還ニ務古水門ニ而トレ之於レ是事代主尊

誨ニ之云祠ニ吾子御心長田國ニ則以ニ葉山媛之弟長

也數日後起ニ寢床ニ遂奉遷ニ替神殿其後信長兵燹之日殿閣悉爲ニ灰燼ニ纔以ニ神璽遷ニ別所ニ耳慶長年中秀吉築ニ城郭ニ之序遷ニ今神地ニ云々○御位 貞觀元年正月廿七日從五位下此後未レ考 已上啓案

○高津社 高津ニ有リ 祭神 仁德帝云々 いにし

へは境内六町四方にて仁德帝の皇居の地也といへり 名所記 此所西生郡也

金葉

いにしへの難波の事を思ひ出て

師頼

高津の宮に月のすむらん

新勅撰

春のよの月に昔や思ひ出る

覺延法師

高津の宮に匂ふ梅かえ

○逆櫓神

東成郡大坂ニ有リ 祭神

天照皇太神

號ニ朝日宮 舊記云後鳥羽院文治元年二月十八日義經與ニ梶原景時ニ爲ニ逆櫓之論此日爲ニ利運ニ義經於ニ此所ニ勸ニ請神明 啓蒙

○松や町

北裏町 名所記

○神明 大坂蠟燭町ニ有リ 所祭 天照太神 八幡

太神

後陽成院御宇勸請云々

○曾根崎社 曾根崎ニアリ 祭神 菅家 傳未レ考

○北野天神 大融寺ノ邊ニ有リ 祭神同前 京師ノ北野ヲ摸スルト云々 京北野の宮より四十餘歳後の造營と也昔此所に一夜に七本の松生出たり希代の事なればとて大融寺の僧奏聞をとげ寛正四年の偷旨等有と也名所記

○天滿宮 難波津天滿ニ有リ祭神京師北野宮ニ同シ村上天皇御宇天曆年中ニ詔ニヨツテ勸請云々社記未レ考 祭 六月廿五日 九月廿五日

○廣田社 武庫郡西宮郷廣田村ニ有リ 祭神一座 廣田大神 又云五座說アリ

○神功皇后征ニ新羅ニ之明年忍熊王起兵屯於住吉皇后聞レ之還ニ務古水門ニ而トレ之於レ是天照太神誨レ之云我之荒魂不レ可近ニ皇后ニ當居ニ御心廣田國ニ即以ニ山背根子之女葉山媛ニ令レ祭之 日本紀

廣田者天照太神之荒魂也可レ謂神宮御同體註式

註進記云人皇百一代後小松院治廿三年應永十三年四月四日甲子伯三位資忠王依レ招也日本紀第九讀合廣田社事條々有ニ不審ニ雖レ爲ニ社祕ニ委細演說云々如ニ社官申詞ニ者奉レ書ニ廣田社ニ者神功皇后也自餘神社意得レ之勸請歟一殿住吉 二殿廣田 三殿八幡

何モ住吉ノ名所和歌ニ詠ゼリ 和歌略之

○安倍社 安倍王子ト號ス 住吉邊安倍野ニ有リ祭神熊野山第二王子云々

社記未_レ考 新勅撰 新續古今ニヨメル 安倍島或人此所ト云々後ノ君子可_レ有_レ考

○今宮惠比須 安倍野ノ北ニアリ 祭神蛭子 天照

太神 素戔島 又北ノ社ハ廣田神ヲ勸請云々 傳未

考 正月十日此社に詣俗に十日ゑびすと云々九月

十八日此社におゐて伶人の舞ありて神輿を天王寺

の西門まで遷幸し奉る也 難波名所記

○安居天神社 天王寺ノ西ニアリ 祭神一座

菅家 社記不_レ得_レ考 祭 八月廿日

○新御靈 世權御靈ト稱ス

祭神未_レ考俗ニ鎌倉權五郎景正ガ靈也ト云フ事非

也云々 祭 九月廿七日

○座摩社 當社昔ハ八軒屋ノ邊ニ有シガ中比淡路町

一丁目ニ移シ其後今ノ渡邊ニ勸請シケルト也名所記

祭神一座 神功皇后也 宮中所_レ祭之坐座摩神又別

也

○神名帳註云神功皇后也凱旋之日於此所ニ飲食也

仍名 譽田天皇三年十一月百濟辰斯王叛遣ニ紀角

宿禰羽田矢代宿禰ニ令_レ伐_レ之即日於ニ難波海中ニ祀

之仍爲ニ住吉第一攝神_{啓蒙} 神功皇后三韓御退治

ありて御歸帆の時始て御鎮座有石上に御休し給ふ

今に八軒屋の上に舊石あり其後賤女來りて醬を奉

けるその式によりて今に六月廿二日御祭禮の神供

に醬を奉りけるはかゝる故なりとぞ 名所記

○玉造稻荷 玉造ニアリ 祭神 稻荷明神ヲ勸請云々

傳未_レ考

住吉の名越の岡の玉造

好忠

數ならぬみは秋を悲しき

○森明神 祭神 用明天皇云々予未_レ考

○生玉社 東生郡天王寺邊ニアリ 祭神一座

天生玉神 天孫降臨時陪從神也

○活玉命新田部直遠祖也 舊事紀 ○社家註進云天孫

瓊々杵尊降臨之時陪從三十二神之中天活玉命是也

神武天皇戊午年春二月到ニ難波之倚一日祠ニ此神云

爰去明應年中本願寺僧來ニ此所ニ而創ニ寺院ニ以ニ神

地ニ接ニ境內ニ矣依_レ斯神惡ニ不潔ニ罰_レ彼僧ニ也子_レ時

懷ニ神殿造替之宿禰ニ而令ニ神主藤原吉勝ニ告_中願辭上

口而入、蟻々聞ニ蜜香ニ、遂得ニ通入而出、於是以其系所、貫玉環、還ニ于唐、唐人驚云、日本國人其賢哉、遂不肯攻、我其中將進至、大臣位、死而爲、神有、人詣、其社、夜告云、那々和多余麻、我戾留他麻、乃於々奴幾氏、阿里通登波、我波志良須哉、

紀貫之集貫之歸、自、紀伊國、時馬病將、斃、路人僉云、此所、坐之神爲、祟貫之思、此所無、社又無、誌而欲、祈亦無、幣帛、因濯、手跪而問、名答云、蟻通明神乃詠、和歌云、加枳句毛利、阿夜梅毛志羅奴、於保曾羅爾、阿里登保志鳥波、於毛布倍志耶波、於、是馬遂能行古事、談云、貫之還、自、和泉國、時也、已上神社考

攝津

攝字彙云、靜謐也、漢書攝然、天下安此國難波堀江、天下著船之津、以、天下靜謐之義、名、攝津、云々、

○住吉社

攝津國住吉郡ニ有リ 祭神四座

底筒男 中筒男 表筒男 神功皇后

○伊弉諾尊往至、筑紫日向小戸橋之檍原、而被除焉、沉、濯於海底、因以生神號云、底筒男命、又潜、濯於潮中、因以生神號云、中筒男命、又浮、濯於潮上、因以

生神號云、表筒男命、是即住吉之大神也、日本紀

●神功皇后 前ニ傳アリ

皇后伐、新羅、之明年二月、又表筒男中筒男底筒男三神、誨、之云、吾和魂宜、居、大津、淳中倉之長峽、便因看、往來船、於、是隨、神教、以鎮座焉、日本紀

住吉舊記云、其荒魂在、筑紫之小戸、和魂者神功皇后征、三韓、時顯、坐攝州、託、皇后體、而循、行四方、遂到、攝州之地、宣言云、眞住吉眞住吉之國也、因鎮、坐其地、名云、住吉、啓蒙

攝社

祓戸社 磯御前 津守氏ノ祖也

○御位未ノ考

○住吉御祓 六月晦日 御田植トイフ事アリ五月廿八日也 九月十三夜神前ニシテ市ヲナス寶市ト云フトカヤ其外年中ノ神事等多シ
住吉拾遺
住江の松を秋風吹からに 躬恒

聲打をふる沖津白波

和歌多し 岸 松 姫松 忘草などよめり

名所岸野 忘水 那古海 名越 粉濱 淺香浦

浦初嶋 長居浦 佐比江 津守 細江 淺澤小野

此近わたりに恩智左近將監正遠が城の跡并左近が塚あり名所記

○水分社 石川郡ニ有リ傳未_レ考 天水分神ト號スルハ速秋津彥神十柱子第五也若シ此神歟後君子ノ待_レ考耳

左は日神月神右は吳子孫子也鳥居額は楠正行が筆也此おくに南木神といふ社有なり是は楠正成をまつれる也名所記

○道明寺天神 志紀郡同寺ノ内ニ有リ

三町の森の一町左右に梅を植中に社あり此所は往昔菅相公の御伯母の御在所とかや御神體は鏡後宇多院勅符也

靈寶數多あり後宇多院震筆天神名號天神御筆松梅繪 同御所持之笏 石帶 御鏡 御硯 御櫛箱 櫛あり 濃紫本結二筋 香箱一合ニ今に香有云々
已上名所記ノ心

○當宗社 同郡ニ有リ ○仁和五年四月初祭_レ之宇

多帝外祖父姓當宗氏神社考

○佐田天神 澁川郡佐田ニ有リ 傳未_レ考名寄 駒なへていさみにゆかん佐太川に

枝さしかはす大和なてしこ

俊成

○鏡社 若江郡 ○降幡社 石川郡

○岩船社 石川郡 右傳未_レ考

已上河内國畢

和泉

河内國靈龜元年割置吉野監改爲國舊事紀

元正天皇靈龜二年四月割ニ河内國大鳥日根

和泉三郡ニ始置ニ和泉監類聚國史

○大鳥社大鳥郡ニ有リ一宮記云日本武尊也卜部兼

照云昔有ニ白鳳飛來止ニ是處ニ天照太神所_レ化也故

名ニ大鳥啓蒙

貞觀元年正月廿七日從四位下

神階記

○神託諸の人の心をはなれて外さらに神もなし又佛もなき事を知て神佛に偽なくまがらずしてつねに觀喜すべしたとへば諸の人邪路に入て無量のくるしみ其身をせむるなるべし能まもるべし

倭論語

○蟻通 和泉ニ有リ祭神一座

昔未_レ詳ニ何時世ニ也唐將_レ擊ニ我邦ニ試贈ニ七曲玉環上下内通ニ且告云以_レ繩貫ニ此玉ニ衆人不_レ知_レ所爲手_レ時中有中將某取_レ蟻繫ニ細糸其腰以_レ蜜塗ニ環孔

平ニ中洲伐凶徒ニ天下一統矣然後開都於畝傍山東南樞原命有司經始帝宅庚申九月納后辛酉正月卽帝位也故歷代皇帝無不尊崇食國武將無不仰全文畧之啓蒙 ○神別記云高皇產靈四世孫許々止魂尊子河內國平岡社也 啓蒙

○攝社 青柳社 岩本社 一言主社 大山彥社

戸隱社 右見社記 啓蒙

○御位 仁明帝承和三年五月從三位勳三等天兒屋命正三位 續日本紀

貞觀元年正月廿七日正一位 神階記

○祭 春二月冬十一月上申日 延喜式

○社記云正月十五日卜田祭 當日於神供所燒

小豆粥々々上五寸掛竹管中納百穀署依蒸氣強弱占年穀之吉凶也蓋當社第一神事水速氏

神主之外無有相承

同十六日踏歌祭二月朔日平國祭及暮而入山採木

叩拜殿樓閣各趨歸也水速氏申祝詞拜而退有社

流口決 啓

○神託 從へる人一神を禮拜するとも諸の神の心にかはんとへば千々の鏡をかけて人あり是

にむかはんにいづれの鏡か其影をうつさずといふ事なしふたつ心のおこるよりくだしき心にはくだりてまよひのうみにしづむなるべし 倭論語

○譽田八幡 古市郡ニ有リ祭神 應神天皇緣起云應

神天皇葬子河內國田市郡長野欽明帝始改造廟而有行幸 啓蒙

○譽田八幡宮は應神天皇の御廟也陵は長野山と號す三十代欽明帝廿年に始て三所の社をたてらるゝ中は八幡右神功皇后左仲哀天皇緣起は普光院義教の筆繪有卯月八日若宮の神事車樂二乗渡る又能と兒の舞と隔年にあり八月十五日御輿出御俗人の舞有正月十四日曲物に水を入月影を浮め板に目をもりて年穀の水はかり何合と知る事有又此所に矢坂といふ有神功皇后矢を收給ふ所也 名所記

○恩智社 高安郡恩智村ニ有リ祭神一座大御食津命

天兒屋命之來孫也

河內國恩智大明神中臣朝臣藤原朝臣之遠祖也

樹下神系圖

貞觀元年正月廿七日正三位勳六等恩智大御食津彥

神從二位 神階記

○武津身命爲_二八咫鳥_一神武帝軍先導正統記 ○慶雲二年祭_二八咫鳥社大和國宇多郡_一

○笹幡社 同郡山邊笹幡_二有_レ祭神 天照太神

崇神天皇六十年御鎮坐云々此後勢州度會ニ移玉フト云々世記心同此所ノ傍ニ山邊赤人が石塔あり名所記

○丹生社 吉野郡下市傍山中ニ有_レ祭神一座

罔象女神 祈雨止雨神也

伊弉並尊爲_二軻遇槌_一所_レ焦而終矣其且_レ終之間臥

生_二土神埴山姬及水神罔象女_一日本紀

○神武天皇以_二天神教_一造_二嚴饒_一涉_二于丹生川上_一用

祭_二天神地祇_一二十二社註

○當社爲_二大和之別社_一事見_二延喜格_一不_レ聞_二人聲

之_二深山立_一我宮柱_二以敬禮者爲_レ天下_一降_二甘雨_一止_二

霖雨_一者 同註式

○又云人皇四十代天武帝白鳳四年乙亥御垂跡

○攝社 御食持社

○御位 貞觀元年正月廿七日從_二三位_一此後未考 啓蒙

○祭 廿二社註式無_二祭禮_一

已上

大和國畢

河内

柏原朝御世以_二彥己曾保理命_一爲_二凡河内國

造_一舊事紀

○平岡社 河内郡ニ有_レ祭神四座

第一殿天子屋命 二彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊

三大國主命 四天照太神

葺不合尊 彥火々出見尊子母豐玉姬

天津彥々火瓊々杵尊

彥火々出見尊 彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊

外神傳系前ミエマ

●當社鎮座人皇第一神武天皇御宇戊午年春三月十

日入_二當國草香村_一去平岡一里許四月九日皇師勒_レ兵步

趣_二龍田_一而其路狹嶮人不_レ得_二並行_一號_二此所_一云_二行

難山_一社北十町許乃還欲_二東臨_一伊駒山_一而入_二中洲_一時長

足彥聞_レ之云天神子等所_二以來_一者將_レ奪_二我國_一則盡

起_二屬兵_一於_二孔舍衛坂_一會戰有_二流矢_一中_二五瀬命_一肱_一

皇師不_レ能_二進戰_一天皇憂_レ之乃運_二神策_一於_二冲衿_一云我

是日神子孫而向_レ日征_二虜此逆_一天道_一也不_レ若退還

示_レ弱禮_二祭神祇_一者即當社也天神者所謂天照太神

也地祇者葺不合大國主天兒屋等是也遂因_二此神熊_一

○狹井社 城上郡ニ有リ 狹井神。大己貴之荒魂也 世所謂鎮花之神者是也

○疫神也神祇令云花散之時疫神分散爲病故有鎮花祭 舊記云鎮花祭祀大神狹井也宇多帝寬平九年三月七日勅享神名帳註

○鏡作社 城下郡ニ有リ 祭神二座

石凝姥命 天糠戶命

稚日女尊坐于齋服殿而織神之御衣也素戔嗚尊見之則逆剝斑駒投入於殿內稚日女尊乃驚而墮機以所持梭傷體而神退矣故天照太神謂素戔嗚尊云汝猶有黑心不欲與汝相見乃入于天石窟而閉著石戶焉於是天下恒闇無復晝夜之殊故會八十萬神於天高市而問之時有高皇產靈之思思兼神云者有思慮之智乃思而自云宜圖造彼神之象而奉招禱也故即以石凝姥爲治工探天香山之金以作日矛又云使鏡作部遠祖天糠戶者造鏡已上日本紀

按本朝鏡工大祖神也其神功併如上矣式中稱鏡作之神二座一云鏡作麻氣神社二云鏡作伊多神社也兼俱神名帳註記垂跡云麻氣神社天糠戶命。

伊多神社石凝姥命也共坐城下郡啓蒙荒神社 笠山ニアリ郡未考 祭神三座

土祖神 澳津彥命 澳津姬神

大年神娶天和迦流美豆姬爲妻生兒澳津彥神澳津姬命此二神者諸人拜祠竈神者也 先代舊事本紀

○高市社 高市郡高市ニ有リ 祭神一座

事代主命 大己貴命子 系圖前ニミエタリ

○大己貴神娶于坐邊津宮高降姬神生二男都味齒八重事代主神坐倭國高市郡高市社亦云甘南備飛鳥社舊事本紀

○太玉社 同郡ニ有リ 祭神一座 太玉命 高皇產

靈尊子 齋部氏祖也 系圖傳有前

○八咫鳥社 宇多郡ニ有リ 祭神一座

賀茂武津身命 神武天皇々師欲趣中洲而山中嶮絕無復可行之路乃棲遑不知其所跋涉時夜夢天照太神訓于天皇云朕今遣八咫鳥宜以爲鄉導者果有頭八咫鳥自空翔降天皇云此鳥之來自叶祥夢大哉赫矣我皇祖天照太神欲以助成基業乎是時大伴氏之遠祖日臣命帥大來目督將元戎蹈山啓行乃尋鳥所向仰視而追之 日本紀

ざりしと也 奥儀抄 清輔作

若宮 祭神 未_レ考

三輪山神岡山 神山何モ同ジ卷向山卷向川三輪川

三輪崎 佐野渡共ニ歌ニヨメリ

○御位 清和帝貞觀元年二月 正一位

○祭 四月十二月上卯 但有_二三則中_一也

○石上 山邊郡布留郷ニアリ 祭神一座

石上師御魂神 祭處十握劔云々古語拾遺ノ心○十握劔其名

不_レ一 天羽斬古語拾遺天尾羽張 又伊都之尾羽張

古事記 師靈劔 布都主神魂刀 佐士布都 建布都

豐布都 已上舊事紀龜正 韓鋤劔 瓊布都神 釋日本紀

○石上社者素戔嗚尊所_レ持之十握劔也以_二人皇十代

崇神天皇御宇_一鎮座也 神宮御鈔

○舊記云磯城瑞籬御宇遷_二建布都大神社於大和國

山邊郡石上邑_一則天祖授_二饒速日尊_一自_レ天受來天璽

瑞玉同共藏齋號云_二石上大神_一建膽心命祭_レ之啓蒙

○天足彥國押人命裔木事命市川朝臣大鷦鷯天皇御

世達_レ倭賀_二布都斯神社_一於_二石上御布留村高庭之地_一

以_二市川臣_一爲_二神主_一 新撰姓氏錄

○攝社 布留社 傳未_レ考

○御位 清和帝貞觀九年三月十日正一位

○祭 今世六月晦日也

○神庫に靈寶有當世わづかに造りて社殿にならびて有此神庫の事日本紀に有畧也す方五尺の櫃有神符なれば開く事なし名劔おさまれりとかや六月晦日祭に神殿にこめたる布留の劔を袋に納ながら鳥居の外迄出し奉る也又七月七日神前にして護摩を修し寶藏におさまりし笈三つを僧のかたにかけておこなひあり是を笈わたしといふ也○此社歌に讀

り石上振の神杉等數多也

戀をも我はさらにするかも

堀川百首

石上ふるの社に春くれは

霞たなびく高圓の山

此つゝきに 石上池 石上溝 布留山 布留野

古柄小野 忘水 布留川 布留高橋あり いづれ

も名所和歌に讀り已上大和名所記

○高皇產靈社 添上郡ニ有リ 祭神一座

●宇奈太理坐高御魂尊 神名註曰人皇十五代神功皇后御宇武内宿禰勸_二請_一之啓蒙

○坐宗像興津嶋神田心姬命生一男一女兒味鉏高彦根神坐倭國葛上郡高鴨託云捨篠社先代舊事本紀

○穴師社 城上郡穴師ニアリ 鳥居 遙海道ニ有リ 社ハ遙東ニアリ

天照太神天降玉フ時護齋鏡ハ三面子鈴一合ヲ御身ニツエサセ玉フ其一ツノ鏡ハ大神ノ御靈トシテ天懸神ト御名ヲアガメ又一ツノ鏡ハ同前御靈トシテ國懸神ト御名ヲ申奉ル今紀伊國名草宮ニ崇ウヤマヒ申大神也ヘツノ鏡并子鈴ハ天皇御食津神アシタエフベノ御食夜護日護ト奉レ齋卷向穴師社ニイマヌ大神也釋日本紀ノ心新勅撰

まきもくのあなしのひ原春くれば

好忠

花か雪かとみゆるゆふして

此あたり十町計の程に 崇神天皇 景行天皇

舒明天皇ノ陵アリ

○三輪社 城上郡三輪ニ有リ 一鳥居二鳥居樓門拜殿寶藏ナンドハアレドモ神殿ハ無シ

祭神一座 大己貴神

于時神光照レ海忽然有ニ浮來者ニ云如吾不レ在者汝何能平ニ此國ニ乎由ニ吾在ニ故汝得レ建ニ其大造之續一矣

是時大己貴神問云然則汝是誰耶對云吾是汝之幸魂奇魂也大己貴神云唯然廼知汝是吾之幸魂奇魂今欲何處住一耶對云吾欲住於日本國之三諸山一故即營宮彼處使就而居此大三輪之神也日本紀

○大己貴神駕天羽車大鷲飛於虛空徧覓妻妾時下ニ行於茅渟縣潛通大陶祇之女活玉依姬其往來非人之所レ知其女初孕父母怪問云誰人來乎女答云有三人自屋上來共双枕於是欲顯見之著針于苧卷懸于神人裳認其絲見之明旦從絲往尋覓出自鑰孔經茅渟山入吉野山留於三諸山其所結之絲三九猶遺故號云三輪山舊事本紀ノ心

○崇神天皇七年倭迹々日百襲姬命に大物主神著給ひて告有御夢に我は是大物主神也我兒太田々根子をして我をまつらしめよとかく有しより太田々根子命は神主君等が遠祖也くはしくは日本紀に有さて祭の日は茅のはをみつくりて岩はのうへに置てそれをまつる也云々やしろのおはせぬあやしとて里人ども造りたりければ鳥百千きたりてつゝきやぶりふみこぼちてその木どもををのくくはへて行さりにけり神のちかひとしりて其のちはつくら

幸時其大神滿山末於長谷山口送奉故是一言主之大神者彼時所顯也古事記

○役小角者賀茂役公氏今之高賀茂者也。和州葛木上郡茆原村人。少敏悟。博學兼。鄉佛乘。年三十二。棄家入葛木山。居巖窟者三十餘歲。藤葛爲衣。松果充食。持孔雀明王咒。駕五色雲。優遊仙府。驅逐鬼神。以爲使令。日域靈區。修歷殆徧。一日告山神云。自葛木嶺蹊金峯山。其間危險。雖苦行者。猶或艱汝。等架石橋。通行路。衆神受命。夜々運崑石。督營構小角呵神云。何不早成。對云。葛城峯一言主神。其形甚醜。難畫。役待夜出。以故遲耳。小角促一言主。一言主不肯。小角怒。咒縛繫之深谷。下略之釋書因云。此をよめる和歌

拾遺
石橋のよめるの契も絶ぬへし

藏人左近

明るわひしきかつらきの神

按諺云。役小角集衆神於葛木金峯間。架石橋。其以不早成。而小角怒。咒一言主。縛繫之深谷。云云。予嘗疑小角者。葛城里民。而一言主者。天神裔胤也。神而所縛于人。則何以爲神也。傳謂小角能役使鬼神。又云小角所屏于荒地。云小角靈于

鬼愚于人。固可恠之事。吾神者。習聞其說樂其誕。而遂至不辨焉。又可痛哉。啓蒙之辨

○四十七代廢帝天皇。天平寶字八年。從五位上高賀茂朝臣等奏シテ。葛城山ノ東下高宮岡上ニ迎ヘテ。鎮奉ル。續日本紀ノ心

○御位 貞觀元年正月廿七日。葛城一言神ヲ從二位ニ叙セラル。三代實錄ノ心

○葛城山。金剛山。同山異名也。此山。大和河内のさかひ也。半腹のみねを高天山といへり。新古

高まの山の岑の白雪

高天寺には。彼初陽毎朝來とさへつりし。鶯の宿せし梅朽ながら有也。かつらきの岑には。岩はしの跡あり。大和名所記

○神託 諸の人の心の鏡。ちりつもれば。神明すがたのかげをうつさず。祈る心のつよからん。程人の心のただしき道を。みがゝばいのらずと。ても心のまゝならん。倭論語

○高賀茂 同郡所祭一座 味耜託彥根命大己貴命子下照姬兄也

此所の寶藏に文治元年靜法樂のまひをまひし裝束義經のよろひあり

右にそぼだちたるは御影山左は袖振山也

清御原天皇吉野の宮にましゝて琴をしらべ給ひしに雲おこりて神女のあらはれ曲に應じて舞羽衣の袖を振けるより袖振山云々

○籠守社 同吉野山ニ有リ

大宮三座住吉同體也一宮記 神傳ハ住吉ノ下ニ見エ

タリ
草根集

吹はらへ山は吉野の秋霧に

こもり勝手もみえぬ神風

○金峯社 同吉野山ニ有リ

祭所 號藏王權現一人皇廿八代安閑天皇也繼體天皇ノ長子也

○勾大兄廣國押武金日天皇男大迹天皇長子母云

日子媛日本紀

治二年十二月崩葬河内舊市高屋丘陵金峯山權現

是也曆年史

昔役行者在吉野山一時神現釋迦像行者云此形難度衆生次彌勒形現行者尙云未也次藏王權現出

甚可怖貌也行者云此我邦之能化也神社考

○金生明神 此社吉野山ニアリ 金峯之金ヲ護神ト云々 傳未考金峯山ト號スルハ彌勒佛出世ノ時地

ニ敷ベキ金此山ニ有故也云々

○與喜山天神 初瀬ニアリ三燈嵩ト云々傳未考

○葛城社 葛城上郡葛城山ニ有リ 祭神一座 一言

主命 一云爲事代主神所變也 又云高彥根命分身也系圖傳 素戔嗚子 啓蒙

○幼武天皇登幸葛城山之時百官人等悉給著紅紐之青摺衣服彼時有自其所向之山尾登山上人既等天皇之鹵簿亦其裝束之狀及人衆相似

不傾爾天皇望令問云於茲倭國除吾亦無王今誰人如此而行即答云之狀亦如天皇之命於是天皇大怒而矢刺百官人等悉矢刺爾其人等亦皆矢刺故

天皇亦問云然告其名爾各告名而彈矢於是答云吾先見問故吾先爲名告吾者雖惡事而一言雖善言而一言々離之神葛城之一言主之大神者也天

皇於是惶畏而白恐我大神有宇都志意美者不覺白而大御刀及弓矢始而脫百官人等所服之衣服以拜獻爾其一言主大神手打受其捧物故天皇之還

甚可怖貌也行者云此我邦之能化也

甚可怖貌也行者云此我邦之能化也

四日釋日本紀西宮鈔ニアリ日本紀ニハ四月朔日
○廣瀬川歌に詠す

大宮殿 小折社 火神社

廣瀬川によめり

續古今集戀部
ひろせ川袖つくはかり淺きせに

讀人不知

心ふかめて我はおもはん

○若宮 宇智郡御山村ニアリ吉野ヨリ半里許南也

此處井上内親王ノ子ノ靈社也

若宮は雷神なり是井上内親王の御子なり親王御著
帶ながらながされおはしまして後に御産有おのこ
御子なれば御名を雷神と名付奉りき此名故有べし
御産所は大岡小山といふ所也それより爰を産屋峯
といふ也雷神人となり給ひて御母の皇后兄の他戸
親王ながされ給ひし由來をしらしめて御門をふ
かく恨給ひてつゐにみまかり給ひし其君の御門に
御惱をかけ給ひ又は人民をなやまし給ふ故若宮の
神號をなして神國祠給ふ也大和靈安寺緣起の心 井上
皇后は聖武帝の姫宮也同郡に皇后の陵あり
寶龜元年ニ光仁帝ノ后ニ立玉ヘリ此御腹ニテマシ
マス他戸親王ヲ皇太子ニスエ玉ヒシガ第一ノ皇子

山部親王ヲ太子トナサント參木百川ハカラヒケレ
バ井上皇后ト天皇ト中アシク成テ潜ニ天皇ヲノロ

ヒ他戸太子ヲ早く即位セシメントハカル事アラハ
レケレバ皇后及ビ他戸太子ヲオヒヲロス年ヲヘテ
井上皇后モ他戸太子モ皆卒ス井上ノ怨靈龍ト成タ
リトイヒ傳タリ。已上王代一覽

○御靈社 同靈安寺ノ内ニ有リ 祭所

井上皇后東向 早良親王 北ノ脇南向

他戸親王北向 已上三座

延暦十九年井上内親王ニ皇后ノ位ヲ贈御墓ヲ陵ト
號スベキノ宣下有リテ勅使ハ從五位下葛井王ナリ
類聚國史ノ心

○勝手社 吉野郡吉野山 祭神一座 愛鬘命 傳未

レ考

○天孫臨降之時三十二神相添而奉ニ天降一也次爲ニ
護國後見一被レ下之三十二神云々愛鬘命勝手大明神
也六十四神式

吉野山和歌に詠す畧之

師兼千首
三芳野や勝手の宮の山鳥

神につかふるみもふりぬめり

連廣足ニ祠ニ風神于龍田立野同上

○瀧祭神與ニ廣瀨龍田神ニ同體異名水氣神也故廣瀨

龍田神號ニ天御柱國御柱ニ是天逆戈守護緣神祇本源

○神託 ナベテノ貴賤天ヲ祈リ地ヲマツリテ諸神

ヲ祈ランヨリ汝ガ父母ニ能ツカエヨ則兩親ハ内外

ノ神明ナレバ内アキラカナラデ外ノミヲネガフベ

カラズ倭論語

攝社

三太神 若宮 瀧祭社

御位 清和天皇貞觀元年正月廿七日廣瀨龍田正一

位 二十二社註式

祭 天武天皇治五年夏四月朔日祭ニ龍田風神廣瀨

大忌神日本紀

日本紀 續日本紀 簾中鈔 年中行事等ニハ四月

七月四日トアリ今ハ九月十三日也立田和歌多シ龍

田ト號スル事むかし此所田にてありし時雷神お

ちてあがる事をえず童子と化したたりそこをつくり

ける農夫やしなひて子とせり比しも夏なるに隣村

には雨ふらざりしに此農夫が田の上には夕立折々

そゝぎて秋の納思ふまゝにしてけり其後此童子い

とまこひて小龍と成て天にのぼるかれがつくる田

を龍田とぞいひけるやがて所の名とせり云々龍田

は正字立田は半假名也 詞林採葉

拾遺愚草 龍田山神のみけしにたむくとや

くれば行秋のにしきををらん

みむろの山の紅葉をそみる

壬二集

行まゝに立のゝへの霞哉 わくとやよその人のみるらん

此ついき 神南備森 神南備川あり

○廣瀨社 高瀨郡河合村ニアリ 祭神一座

和賀宇加乃賣神

伊勢外宮神ト同ジ水德神也

廣瀨坐和加宇加賣命神社延喜式

又御名大忌神日本紀○又御膳持若宇加賣命令義解

天武天皇四年四月遣ニ小錦中間人連蓋大江山中曾

福連韓犬祭ニ大忌神於廣瀨河曲日本紀○伴神伊弉

諾伊弉並尊子豐宇賀乃賣神神祇官坐御食神也神祇

祕書

御位 祭 同上 祭立田廣瀨トモニ四月四日七月

此歌は朱雀院の行幸のとき御供にての歌也
^{壬二集}手向山紅葉のにしきぬさはあれと

猶月かけのかゝるしらゆふ

此ついきに浮雲のといふあれども鎮座出所しれ
ず飛火野 野守池など名所有

○櫟本社 同和爾南ニ有リ 祭神一座

牛頭天王 山城祇園同神也 兼俱遷宮記

此鳥居の内に柿本寺有其東に人丸の塚有或書云人丸の塚は大和國添上郡治道柿本寺にあり清輔集に大和のいそのかみ柿本寺といふ所の前に彼塚有と聞て卒都婆に柿本人丸墓としるし付てかたはらに歌をかき付たる

世をへてもあふへかりつる契りとして苦の下にも朽せさりけり清輔集にいそのかみと有はたがひたるやうなれとも和名類聚云添上郡に石上郷有此所は添上郡のはづれ石上の境也云々長明無名抄に人丸のつかははせへ參道也所の者は歌塚といへり云云されば清輔長明の兩説此所になふとみえたり已上名所記

○辰市社 同郡大安寺村南ニ有リ 祭神二座春日

明神鹿島ヨリ三笠山ニ移リ玉ヒシ時供奉セシ時風秀行が靈社也春日記俗に鴻宮といふ也辰市名所也
^{壬二集}名におひて風もけふより辰市や

たつ商人の袖ぞ涼しき

此邊に和歌に讀る 賣間清水アリ同上

○新龍田 平群郡法隆寺六七町坤民屋間有此所ハ本龍田社ヲ聖德太子勸請シ玉フ也推古天皇十四年二月十五日ニ聖德太子法隆寺ヲ建立アラントテ其地景ヲ求ニ巡行マシケルニ立田明神老人ニ化シ玉ヒテ伽藍ノ地ヲシメシ玉ヒ吾又守護ノ神トナルベシト誓約アリシ也依テ立野本社ヲ此所ニ勸請シ玉フ也是法隆寺ノ鎮守也云々

○龍田社 同郡立野ニアリ法隆寺ヨリ一里餘アリ 祭神二座

天御柱國御柱神ト號ス則級長戸邊神 級長津彥神也 風神也

伊弉諾尊云我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉乃吹撥之氣化爲神ニ號云ニ級長戸邊命ニ亦云ニ級長彥命ニ是風神也日本紀

天武天皇治四年夏四月遣ニ小紫美濃王小錦下佐伯

後深草御願也

○若宮祭 保延二年丙辰九月十七日始

○行幸 六十六代一條院永祿元年三月廿三日始
○三笠山春日山に御笠山としてひきくだりてちいさき山に春日の社おはしますかすが山は惣名也三笠山は別名也顯注密勤

春日神託 諸人等神明ノタスケヲ受ント思ハ常ニ慢心ヲシリゾケヨタトヘバ一毛ノ慢心ノ神明ヲヘタツル事大雲ノ如シ和論語

○水屋社 祭神三座 素戔烏尊 稻田姬

南海神女云々祭ハ四月五日ニテ能アリ 伏見院御宇

始云々 水屋川アリ

水屋川夫木するせきかけてかすかのゝ

爲家

野田のさなへはけふそ取なる

○八幡宮 添上郡東大寺境内ニ在リ

祭神 宇佐ニ同シ○北畠准后説云孝謙天皇御宇天平勝寶元年依ニ八幡神託ニ造レ宮

○改曆雜事記云孝謙帝天平勝寶二年宇佐八幡東大寺入御啓蒙

中ハ八幡太神 右ハ姫太神玉依姫 左ハ神功皇后

宇佐縁起 ○天平勝寶元年十一月十九日内裏にして

年七つの童子に神うつらせ給ひて我都にうつりなましと也 宇佐縁起 同廿四日甲寅石川朝臣年足藤

原朝臣魚名等を宇佐八幡大神を向へ奉る勅使として道すがらのけがれを清めさせたり續日本紀ノ心神御乗物なきよし神勅ありしによりて御門の玉輿を

たてまつらせ給ふ詞林探葉禰宜左右朝臣社女神輿をたてまつらせ給ぬれば圓麻呂神驛にのりたり 宇佐縁起 十二月十九日五位六衛府舍人など神を平

群郡にむかへて此日戊寅都に入奉り宮南の梨原宮に新殿をつくり僧四十口にして七日行ひき同十二月丁亥日御門行幸なり給ひ左大臣橘宿禰諸兄公み

ことのりを申さるゝ也其宣命のことは續日本紀にみえたり梨原宮より大佛殿のほとりにうつし奉るなりそのゝち鎌倉西明寺の仰によりて三月堂の南

に移し奉る也寛永十九年十一月廿七日に炎焼して黒木の神殿に移し奉りて後造營なし

此上の山を手向山といふなり

此度はぬさも取あへす手向山

紅葉の錦神のまにまに

菅家

命御子乎將又別神而所祕邪云是唯難言是以不
言矣決非兒屋命子啓蒙

同攝社 ○兵主神社 懸稅神社稅一作橋 紀御

社 種樹神也所祭三座

一言主神社 同啓蒙

○若宮外院小社一童子社は三輪明神次南宮社は
金山彦神次の東兵主社は諏訪明神○同若宮付り内
院小社若宮は神職一家の神祕にて他に知る事なし
と春日記に書り内院に小社二座有南は太力雄神北
は通合神此神は中臣祐房朝臣の靈社也祐房若宮を
移し奉りて後仁平二年十二月廿四日に卒して廿七
年をへて治承二年に神託ありて通合神とあかめ申
春日記 又此社に春日曼陀羅有壽永年中普賢寺基通
公御夢惣の圖なり

○若宮外院小社 廣瀨神社 俗鬼子母神といふ次

の南懸橋神社は葛城神其南に卅八所明神社其南に

佐良氣神社は蛭兒神しばらく南に紀伊御社四座日

前五十猛 大屋姫 狐津姫 春日記

間社内六道者何云神祇拾遺云明神影向時以櫛爲

鞭駕鹿來臨三笠山下也其所經歷號謂鹿

道二六與鹿音相似而今聚石洒水以呼亡魄又可
歎哉乎 啓蒙

○本宮位記 人皇五十四代仁明天皇治十七年嘉祥
三年九月正一位勅使參議藤原助向

祭 五十六代清和帝貞觀元年十一月九日始或五十

五代文武帝仁壽三年始 同御宇天安二年十一月三

日庚申停平野春日等祭 啓蒙 ○春日祭といふは大

宮の神事也二月十一日の申日一年に兩度あり勅使

立也仁明天皇嘉祥三年九月に中臣秀基はしめて奏

聞をへて後に清和天皇貞觀十一年十月九日庚申の

夜はじめて祭有 已上舊記 此祭をよめる和歌

拾遺愚草 けふ祭るしるしにとてやそのかみは

三笠と共に天くたりけん

霜月の祭は若宮の神事也此祭は保延二年九月十七

日にはしまれり注進狀にみえたり其後寛正年中に

十一月廿七日に日をかえられたり春日記

右假名がきの分大和名所記にみえたり

清和天皇貞觀十八年二月丙申春日祭如常云々如

此等文者天安已後被始行之條顯然歟 啓蒙

○臨時祭 九十一代伏見院正應三年二月九日始

○回廊に三つの門有北は内侍門中は僧正門南は慶賀門といへり内侍門を入て北部の社は伊弉諾尊其東椿本社は三見宿禰命其南の社は立田明神みづがきをこえて杉本社は大山咋神其東の社は田心姫つぎの栗辛社は火酢芹尊其南海本の社ハ大物主命其東西にむかふ社は八雷神也已上春日記

四所神三笠山に御垂跡の事春日社家傳には兒屋根尊ハ人王三十七代孝德天皇四年十一月戊申日御鎮座也三神にさき立給ふ事王代十一代年曆二百二十一年也人皇四十五代聖武天皇天平十二年大中臣清九三笠山の春日の社より攝津國嶋下郡壽久山に移し奉りて本座の山の名にしたがひて三笠山と名付たり三神にさき立て春日山に御鎮座あきらかなるよしみえたり春日記

門院小社付中院小社○内院の小社二座西にむかふ南の一座は手力雄神北の一座は天御中主尊中殿の坤岩本社は住吉明神又東部に神護寺の社次の南の青柳の社は青和幣次の南の辛柳社は白和幣次の南穴栗社は穴次神次の南井栗社は高魂尊くはしくは春日社に有名所記の心○當社八講の始は人皇六十二

代村上天皇天曆元年より始て時の長者は貞信公別當は平源大僧正也又の説六十八代後一條院寛仁元年二月廿日にはじむとも其後七十年代後冷泉院康平八年より四月九日九月四日に行るゝ也舊記それより中絶て年へたりけるを寛文十二年十二月五日より九日迄行れし也八講殿のつゞきに舞殿有貞觀元年の造立陪從の神樂は爰にして奏せされしと也此前に林檎木有春日祭奉幣の所也二つのはし有北を一位橋南を二位橋といへり同上

○啓蒙云所攝社任舊式如レ此

祓戸神社 榎本神社 太力雄社 青柳社
右本宮攝社也

○若宮 本宮ヨリ一町許平森ノ中ニアリ
祭神三座内二座輔佐神也

○若宮垂跡四所相同乎否兼滿云四所共以二同日一影嚮也若宮遷座神代也廿二社註式

○若宮輔佐兩神説

舊記云文永七年七月十三日秀氏狀云太力雄太玉兩神也祕説 已上啓蒙

○問上所レ述中欠ニ若宮本縁ニ若依ニ字儀ニ則天兒屋

に造立也此所は祭の日勅使役人等を著到して神殿にまうでらるゝ所也地嶽谷はむかし解脫上人の弟子璋圓僧都とてたつとき人有遷化の後いかなればにや或女人につきてさまゝ口走中に我大明神の御方便よりいみじきはなしかりにも値遇すべしとひ深重の惡人なり其他方の地ごくへはつかはすまじかすがのゝ下に地ごくをかまへそれにあつめ入洒水をそゝぎ經陀羅尼をかかしめたすけ給ひなんと也我も魔道にしづみつれども慈悲方便の洒水口に入て三ねつのくるしみをはなれ和光垂跡の説法を耳にふれて九泉のたのしみをきはめん事ありがたくはあらずやと錠ければ聞人みなかんたんせり沙石集東に榎本社有猿田彦神也春日記此社の前に青瀧といふ有青瀧の橋有是より若宮に行中間道とて細道有ちいさき橋有かたらしいの橋といふ也前にいふ左道に祓戸社東に藤の鳥居有昔は藤有て立よらはつかさゝも心せよ

後醍醐天皇

藤の鳥居の花の下かけ

已上大和名所記ノ心 本殿祭神四座

武甕槌命 齋主命 天津兒屋命 姬太神

○伊弉諾尊拔_ニ所帶十握劍_一斬_ニ軻遇突智_一其劍鐔垂血激越爲_レ神號云_ニ甕速日神_一次_ニ煤速日神_一是武甕槌神之祖也日本紀○甕速日神之子煤速日神々々々々子武甕槌神同上

●甕速日神——煤速日神——武甕槌神

齋主命 又經津主命_元

伊弉諾尊斬_ニ軻遇突智_一其劍及垂血是爲_ニ天安河邊所在五百箇盤石_一也即此經津主神祖矣日本紀○高皇產靈尊更會_ニ諸神_一選_下當_レ遣_ニ於葦原中國_一者_上僉云磐裂根裂神之子磐筒男磐筒女所生之子經津主神同上

磐裂神

磐筒男神

經津主神

根裂神

磐筒女神

天津兒屋命 春日神是也 傳外宮下ニ見エヌ

姬太神 傳內宮下ニ見ユ

春日註式云春日垂跡事第四十八代稱德天皇神護景雲元年十二月七日大和國城上郡安部山御坐 同二年正月九日大和國添上郡三笠山垂跡 同年十月九日寅日寅時太敷立宮柱同本宮廻廊始治承三年_{己二}月廿六日也註進狀 啓蒙

諸社一覽第五

大和

以^ニ大和^一日本ノ總名トスルハ此國人皇帝都之始也故總名トスル也唐土ニモ周ヨリ起テ世ヲ周ト名ヅケ高祖漢ヨリ起テ世ヲ漢ト云フガ如シ

○春日社 添上郡春日郷ニ有リ

鳥居より本社の間はるかなり道すからに名所有鳥居に青柳を壹本たてそえたり此内左は三笠山ふもとびやうくたる野也春日野是也和歌により拾遺愚草に

朝日さす春日のをのゝをのつから

先あらはるゝ雪の下くさ

鳥居の纔東に有橋を馬出橋といふ春日のゝけしき二本の塔のありさま馬出橋を足もといろにふみけん若紫のゆかりあればすみれつむなるをざゝ原玉ざゝの上には玉あられつもりひろはん事も片岡の松のみどりは君がため千代の色をやふくむらん

撰集鈔此間に若宮の御旅所有霜月の祭禮に黒木の柱青松葉の軒かた計成御殿を立る也猶東え行南え分入る細道に雪消澤あり
堀川太郎百首
春日のゝ雪消の澤に袖ふれて

君か爲にそ小芹をそつむ

道の東に細きなかれ有率川是也

はねかつらいまする妹をうらわかみ

いさ率川の音のさやけさ

爰を鹿道といふ事は春日明神鹿にめしてうつり給

ふ道なれば也西行法師は六道とかけりこゝに板と

石との橋二つ有板橋をば古郷の橋といひ石橋を善

趣橋といふ六の道わかれたる六道のちまたに是を

擬せりまさしき道や是ならんと善趣橋を過ぬれば

御社もやうく近づきぬ撰集鈔それより東の橋を

五位橋といへり二の鳥居有其東の北づらに神垣森

の跡あり

風雅集神垣の森のくさはゝ散しきて

尾花を殘る春日のゝはら

院兵衛督

森のほとりに左右の道有右の道を行に著到殿といふ所有其南に地嶽谷といふ谷有著到殿延喜十六年

諸社一覽第五目錄

大和

春日 水屋 八幡 櫟本 辰市 新龍 龍田 廣

瀬 若宮 御靈 勝手 籠守 金峯 金生 葛城

高鴨 穴師 三輪 石上 高皇 狹井 鏡作

荒神 高市 太玉 八咫 笹幡 丹生 已上

河内

平岡 譽田 恩智 水分 道明寺 天神 當宗 佐田 鏡

社 降幡 岩船 已上

和泉

大鳥 蟻通 已上

攝津

住吉 安倍 今宮 御靈 座摩 稻荷 森社 生

玉 高津 逆櫓 神明 曾提 北野 天滿 廣田

西宮 生田 長田 茨住吉 比咩語曾 上宮

已上

玉吟集

石神の森の下水ゆふかけて

家隆

大宮人のすゝむ比哉

○俊成社 松原通鳥丸東人家裏ニ有リ

祭處 俊成卿 此地即彼卿家ノ跡也五條三位ト稱

スルハ此謂也云々祭年記未レ考

○新玉津島 松原通鳥丸西人家裏ニ有リ

祭神 紀州玉津島ニ同ジ 神傳玉津嶋ノ下ニ見エ

タリ此地勸請ノ年記未レ考和歌神タル故ニ俊成卿

ノ勸請也云々

新續古今集・應永四年新玉津嶋のやしろつくりか

えの比權大僧都堯孝讀せ侍りける百首の歌の中に

社頭祝言といふ事を

今こゝに移すも高き宮居哉

權中納言

雅緣

もとの渚の玉つ嶋姫

○天神社 眞トスンデ可レ讀

松原通西洞院川之邊ニ有リ 祭神一座

●少彦名命 ○神代卷大己貴命與ニ少彦名命ニ經ニ

營天下ニ復爲ニ蒼生及畜産ニ定ニ其療病之方ニ又爲

攘ニ鳥獸昆虫災異定ニ其禁厭之法ニ百姓咸蒙ニ恩賴ニ

案少彦名命者高皇產靈尊之子也即是五條天神也今

毎年節分人皆詣ニ此社取ニ餅及白米ニ爲レ除ニ疾病ニ也

蓋神代之遺風耶 天子不豫或世間騷動時五條天神

宮被レ懸レ靱矣鞍馬山有ニ靱負明神ニ是亦被レ懸レ靱之

神也靱者看督長之所レ負者也神社考

○當社鎮坐之記未考

○六宮 八條西朱雀大通寺内ニ有リ

祭處 六孫王經基云々 記文未レ考

○炬火殿 七條東ニ有リ

稻荷攝社也御神事之時出レ炬而奉レ迎也故名云々一

社祕也故省畧焉便覽

○吉祥院社 東寺ヨリ未方吉祥院村平林中有リ

祭神 菅承公

此所菅家の離亭之跡也緣起略之

右之外洛内洛外二十一所神明宮稻荷山王ト稱スル

所計ルニ不レ違傳記不レ得レ考故略レ之後見君子考ア

ラハ幸甚耳

諸社一覽第四終

したゝめてよさりなど思ひて有程に夕つかたみる程に此ひつのふたほそめにあきたりけりいみじくおそろしくすぢなけれどしたしき人々近くてよくみんとてよりてみればひつきより出て又つまどぐちにふしたるいとあさましきわざかなとて又かさいれんとてさまぐにすれどゆるがすつちよりおいたる大木などをひきゆるがさんやうなればすべきかたなくてたい爰にあらんとおぼすかさらば爰にをき奉らんかくてはいとみぐるしかりなんとて妻戸口のいたじきをこぼちてそこにおろさんとしければいとかわらかにおろされればすべなくて其つまどぐちひとまをいたじきなど取のけてそこに着みて高くと塚にて有家の人々もさてあひ給ひてあらん物むつかしく覺てみなほかへわたりにけりさてとし月へにければしんでんも皆こぼれうせにけりいか成事にか此つかのかたはら近くはげすなどもえいつかすむづかしき事ありといひつたへておほかた人もえいつかねばそこにはたいつかひとつぞ有高辻よりは北室町よりは西高辻おもてに六七けんがほどは家もなく其塚高々とし

て有けるいかにしたることにや塚のうへに社をいはひすえてあなる此ごろもいまに有となん宇治拾遺

祭 九月廿日

○新住吉 高辻通堀川東ニ有リ

祭神 攝州住吉ニ同ジ和歌神ナルニ依テ三位俊成卿ノ勸請云々年記未ノ考

○菅大臣社 五條坊門西洞院ニ有リ

祭神 菅家 古老云昔菅家之館也一夜飛梅之天神者是子コ今飛梅之跡存ニ此地ニ菅蒙左遷時詠梅歌云古知布加波余保比於古世與梅乃花阿留志那之登底波留那和須禮楚テハルナワスレツ

○中山社 石神ト稱スル是也 三條猪隈邊ニ有リ

祭神 二座

豐石瀨命 奇石窓命

○天照大神入ニ于天石竈ニ時群神歌樂令ニ天手力雄神引啓其扉遷ニ座新殿ニ令ニ豐磐間戸命櫛磐間戸命二神守ニ衛殿門ニ是並太玉命之子也古語拾遺

○後冷泉院永承五年六月十六日建ニ神社ニ同六年十一月授ニ從三位ニ天喜元年四月始奉ニ官幣ニ神社考祭ハ四月中申日

○蛭子社 建仁寺前ニ有リ鎮坐傳未_レ考

祭 九月廿日

○若宮八幡 五條橋東四町ニ有リ往昔ハ佐女牛ノ六條ニ有リ

祭神 石清水ニ同シ 人皇七十代後冷泉院天喜元年依ニ勅願ニ勸請兼親奉ニ行之伊豫守賴義御沙汰也二十二社註式

○玉葉集ニ後深草院御灌頂長講堂にて侍けるに寅時の水くませ給はんとて六條若宮の井に臨幸のとき讀る

石清水なかれは深き契りとも 前大僧正公什

こよひや君かくみて知るらん

○五條八幡 五條橋西ノ傍ニ有リ傳未_レ考

○市姫社 五條寺町市屋道場金光寺内アリ

祭神傳云宇賀姫ト未_レ考 市姫とは市場にいはひたる神の事也

藻鹽草 市姫の神のいかきのいかなれは

あきなひ物に千代をつむらん

○ハンジャウノ社 高辻通室町西ニ有リ

額云 繁昌社 祭神未_レ考有云此社ハ靈社傳宇治

拾遺ニ有リト依_レ之コレヲ記ス後人考アルベシ

今は昔長門前司といひける人のむすめ二人有けるが姉は人の妻にて有ける妹はいと若くてみやづかひしける後には家にいたりけりわざと有つきたる男となくて只時々かよふ人などぞ有ける高辻室町わたりにぞ家は有ける父母もなくなりておくのかたには姉ぞゐたりける南面の西のかた成妻戸口にぞつね／＼人にあひ物いふところ也廿七八なりけるとしいみじく煩て失にけりおくは所せしとて其つまど口にぞふしたりける扱有べきことならねば姉などしたでゝとも人のみいでいぬさてれいのさほうにとかくせんとてくるまよりとりおろす櫃かる／＼としてふたいさゝかあきたり怪しくてあけてみるに露物なかりけり道などにて落などすべき事にもあらぬにか成事にかと心えずあさましすべきかたもなくてさりとてあらんやはとて人々はせかへりて道をみれども有べきならねば家にかへりぬもしやとみれば此妻戸口にもとのやうにて打ふしたりいとあさましくもおそろしくてしたしき人々あつまりていかゞすべきとさわぐ程に夜もいたくふけぬ夜あけて又ひつきに入て此度はよく

之西一條大路之北ニ祠也今幸神町ト號ス此出雲路
道祖神鎮坐地也朱雀院天慶二年奉遷ニ出雲路京
極啓蒙便覽ノ心

○神傳前ニ記ス

○晴明社 堀川西一條大路北ニアリ即晴明町ト號ス

今人家ノ中ニ社アリ

祭神一座 安部晴明

安倍晴明者仲麻呂之後也就賀茂安憲學天文窮其蘊奧至ニ於曆算推步之術無ニ不兼習花山院寬和二年六月二十二日夜帝與式部丞藤原道兼沙門嚴久潛出宮路過晴明宅晴明適避暑于庭仰見驚云天象呈異天子避位何其怪哉帝聞而笑走入花山寺薙髮晴明急入宮奏事帝不在焉神社考●術家白藤道長言其日家內有怪至期相國閉門謝客肺時有叩者問之對云和州之瓜使也開門納之于時大史安部晴明大醫重雅僧勸修在座相國顧安大史云家裡有齋戒不知此瓜可嘗不晴明云瓜中有毒不可輒啖也相國語修云許多瓜子何爲毒乎修誦咒加持忽一瓜宛轉騰躍一座驚怪重雅乃袖出一針針瓜其動便止割見中有毒蛇一

針中其眼蓋術家之言是也都下嘆三子之精其術矣同上

●晴明役使十二神將妻長職神形因咒以置十二神于一條橋下有事時喚而使之自是世人占吉凶于橋邊則神必託人以告云

三善清行死子淨藏祈之于一條橋而清行蘇生故世人號云反橋同上

○櫻葉宮 洛陽朱雀東近衛西ニ有リ今出水通千本東是也 祭神一座

天照太神 此神宮者上古在右近馬場五月荒手番之時太陽光花降下馬場之頭也故世人稱云日降神明啓蒙

○白山社 白山通二條下人家裏ニ有リ

祭神 賀州石川郡白山權現 遷座紀文未考 此宮有ル故ニ通白山ト號ス狹屋町是

○高倉八幡 三條坊門高倉万里小路間ニ有リ此宮有ル故ニ此坊門八幡町ト號ス

祭神 應神天皇 人皇九十七代光明院御宇康永三年等持院勸請也云々等持院尊氏之院號也又ハ等持寺八幡ト號ス

テ大野東人ヲ大將軍トシ紀飯麻呂ヲ副將軍トシ諸國ノ軍勢一万七千人ヲ添又佐伯常人阿倍虫麻呂ニ四千人ヲ添テ相共ニ廣嗣ヲウタシム伊勢太神宮ニ勅使ヲ立奉幣祈請セラル所々ノ關所ニ兵ヲツカハシ守シム廣嗣ハ肥前ノ國遠珂ノ郡ニ城ヲカマエ板櫃ト云所ニ出張ス十月大將軍大野東人板櫃川ニテ廣嗣ガ万騎ノ兵ト合戦ス廣嗣ガ前手ノ兵木ヲアミテ船トシ河ヲワタラントス東人虫丸大弓ヲ放テ射ケレバ敵ス、ム事アタハズ東人等六千餘人ヲヒキヒテ進ミ廣嗣ニ言ヲカケテ呼ケレバ廣嗣馬ニ乗テ進出テ勅使ハ何人ゾト問フ東人某々ト答ケレバ廣嗣馬ヨリ下テ我本ヨリ朝廷ニ叛カズ只眞備ト玄防トニ怨アリト云東人然ラバ何トテ大軍ヲ起シ官軍ニ向テ戦ヤト云フ廣嗣コタユル事アタハズシテ退ク廣嗣自五千人ヲ帥ヒ其弟綱手ニ五千人ヲ添又多胡古丸ニ兵ヲ添テ三手ニ分レテス、ム廣嗣ガ一手先進テ二手ハイマダ到ザル内ニ官軍急ニ攻ケレバ廣嗣戰マケテ船ニ乗テ異國ユニゲントスル處ヲ肥前國松浦郡長野村ニテ官軍ノ内安倍黒丸ト云者廣嗣ヲ生捕テ是ヲ斬ル綱手モ同ク殺サル或說ニ廣嗣

馬ニ騎テ海エトビイリテ其靈タ、リヲナスニヨリテ松浦ニ社ヲ建テ神トアガムトイヘリ廣嗣ハ宇合子也同上

吉備 始ノ名ハ下道眞備ト號ス

元正帝靈龜二年多治比縣守ヲ遣唐使トス藤原宇合ヲ副使トス吉備大臣此時ハイマダ下道眞備ト云テ二十三歲也阿倍仲麻呂十六歲二人共ニ學問ノ爲ニ縣守ニ從テ入唐ス 聖武帝天平七年多治比廣成大唐ヨリ歸ル下道眞備モ飯朝ス在唐ノ間廿年 稱德帝天平神護二年十月吉備眞備ヲ右大臣トス此人再入唐シ博學ノホマレ有ニ依テ微賤ヨリ登庸シテ大臣ニ至ル世ニ所謂吉備大臣是也 光仁帝寶龜二年三月右大臣吉備致仕ス 同六年十月吉備薨ス歲八十二同上

吉備靈八所ニ祭ル傳記未レ考

火雷神 菅丞相御靈也 神社考同

祭 八月十八日

○京極八幡 上御靈西二町ニ有リ 不考

○出雲路幸神社 帝城左京京極之西ニ有リ

祭神一座 猿田彦神 道祖神也幸神ト號昔ハ京極

繼ヲ殺ント奏ス天皇從ハズ是ヨリ政ヲ太子ニ任セ
ズ太子甚恨ム此時天皇ノ奈良エ行幸スルヲヨキ折
節ト思ヒ大伴繼人大伴竹良ヲ日暮方ニ種繼ガ家エ
遣シネラハシム此時都遷ノ砌ニテ家造モマバラニ
テ種繼燭ノ下ニ有ケルヲ窺テ矢ヲ放ツアヤマタズ
射通シテ死ス天皇ヲドロキ玉テ奈良ヨリ長岡エカ
ヘリテ繼人竹良ヲ捕テセンギアルニ太子ノ所爲紛
ナカリケレバ太子ヲ淡路エ流ス太子斷食シテ路ニ
テ死ス淡路ニテ葬禮ヲ行フ繼人竹良ハ斬罪シ其外
太子方ニ侍ル者流罪セラル種繼ニハ正一位左大臣
ヲ贈ラル甚ラシミ玉フ故也其後早良ノ靈タ、リヲ
ナス由テ崇道天皇ト諡ス已上王代一覽

伊與親王

崇道天皇子也拾芥抄

伊與親王此年十月藤原宗成ガス、メニヨリ謀叛ノ
志アリ右大臣内麻呂是ヲ知テ奏聞シ宗成ヲ捕エ白
狀シケレバ左中辨安倍是雄左兵衛督巨勢野足ニ官
兵ヲサシソエ親王及其母藤原夫人吉子ヲ捕エテ川
原寺ニ押コメ飲食ヲトドメケレバ親王モ吉子モ藥
ヲ吞テ死ス宗成流罪セラル大納言雄友ハ親王外舅
ニ依テ伊與エ流サル其外解官者多シ同上

橘逸勢

左中辨從四位下入居之子三代實錄能書也嵯

峨帝弘仁九年四月内裏殿開門ノ額ヲ改ム北面ハ宸
筆也東面ハ逸勢書レ之又入唐シテ平城帝大同元年
八月歸朝ス承和七年七月嵯峨太上天皇崩ズ此折節
春宮帶刀伴健岑但馬守橘逸勢等謀叛ノクハダテア
リ太子恒貞ヲトリタテ申サントノ事也恒貞ハ淳和
ノ子ニテ天皇ノイトコナルニヨリテ淳和崩シテ後
互ニヘダツル心有ケルニヤ嵯峨崩御ノマギレニ健
岑逸勢カクハカルナルベシ阿保親王ヒソカニ此ヲ
知テ天皇ノ御母嵯峨ノ皇太后ニ申ス皇太后此ヲ藤
原良房ニ告テ奏聞ス即官兵ヲツカハシ二人ノ家ヲ
圍テ是ヲ捕エ糺明ス逸勢ハ伊豆エ流シ健岑ハ隱岐
エ流ス太子ハ後ニ僧ト成テ恒寂ト號ス同上

文大夫 宮田丸ト號ス

右同承和十年十二月文屋宮田丸トイフ者謀叛ノ企
アリ事アラハレテトラエテ伊豆エ流ス同上

廣嗣

聖武帝天平十二年八月大宰少貳藤原廣嗣上表シテ
時ノ政ノ得失ヲ申シ下道眞備ト僧正玄昉世ヲ亂ル
間此ヲ除ント言上シ九月筑紫ニテ謀叛ス是ニヨリ

○福大明神 洛陽堀川西猪隈東一條大路南ニ有リ
祭神 紀貫之也

神地本在ニ高倉東勘解由小路一寛永比筑ニ九條殿下
居ニ之時接ニ神地ニ也依レ是被レ遷ニ神殿於堀川西一下略
之啓蒙 或此神稻荷明神也云々

○水火天神 上京天神圖子ニ有リ

祭神 北野ニ同シ傳未レ考

○五所八幡 上京極北田中ニ有リ

祭神五所 筑前國大分宮

肥前千栗宮 肥後藤崎宮

薩摩新田宮 大隅正八幡

已上是謂ニ五所別宮ニ也

件五座在ニ外國ニ不レ便ニ參詣ニ也仍後桓原大永年中
奉レ移ニ山城國小山庄ニ神祇拾遺

○御靈社 上下 上ハ京極上ニ有リ下ハ同ク春日通

ト大炊御門ノ間ニアリ古ハ町尻一條ノ下ニ有慶長
年中ニ此所ニ移ス云々

●御靈八所 早良親王 伊與親王

藤原夫人 文大夫 橘逸勢

藤原廣嗣 吉備公 火雷神

●有云上御靈社ハ 早良親王 吉備公
下御靈社ハ 伊與親王 藤原夫人云々

○文大夫 綴喜御靈是也神祇拾遺

橘逸勢 下桂御靈是也同

火雷神 上桂御靈是也同

三代實錄云清和天皇貞觀五年五月廿日於ニ神泉苑ニ

修御靈會ニ云々所謂御靈者崇道天皇伊與親王藤原夫

人及觀察使橘逸勢文屋宮田丸等是也並坐レ事被レ誅

冤魂成レ厲近代以來疫病死亡甚衆天下以爲此灾御

靈之所レ生也今茲春初咳逆疫百姓多斃朝廷爲レ祈至

レ是修ニ此會ニ以賽ニ宿禰ニ啓蒙

朱雀院天慶二年勸請也神祇正宗

早良親王 光仁帝子 桓武天應元年御弟早良親王ヲ

太子トス四年八月天皇奈良エ行幸早良太子右大臣

是公中納言種繼長岡ノ留守タリ天皇常ニ遊獵ヲ好

テ政ヲ太子ニ任ゼラル種繼ハ天皇ノ近臣ニテ内外

ノコトヲ執行フ長岡エ都ウツシノコトモ種繼ガ進

メ申トコロ也或時太子奏シテ佐伯今毛人ヲ參議ト

ス種繼佐伯氏は參議ニ昇ル家ニアラズト申テコレ

ヲオサヘトドメントス太子憤リ怨テ事ニフレテ種

傳記未ニ分明 高野神社兩説也一云天照太神亦

早良親王云々 便覽ノ心

○御蔭社 同所

當社下鴨影向之宮也昔天子每年四月午日被レ立ニ勅使以爲祭也世人稱云ニ御蔭祭ニ故名ニ社耳祝部社務等乘ニ羽車ニ神宮悉應レ位而騎馬扈從奉ニ供奉ニ也誠非ニ輕易之神事ニ故今及ニ怠倦ニ者乎 同上

○石藏社 愛宕石藏ニ有リ

和歌新勅撰

足引の石藏山のひかけくさ

賴資

かさすや神のみこと成らん

祭神 石座大明神 傳未レ考

舊記云天神所レ籠之窟也 便覽

○大宮 葛野郡紫野ノ北ニ有洛陽大宮通頭也平林ノ

内ニ有リ大宮ト號ス

神傳未レ考

○大將軍社 紫野大德寺ノ門前町中ニアリ

祭神 大將軍也 此神女神。磐長姫

●日吉神道密記云大將軍神大山祇女木花開耶姫之姉也其代昔以ニ其顔貌醜而遂不レ幸焉云故此神守ニ

夫婦之配匹ニ啓

軻遇突智

雷神

大山祇一磐長神

○七社 同紫野大德寺ノ南ニ有リ

伊勢 春日 石清水 稻荷 賀茂 松尾 平野

此七所ヲ勸請ス故ニ七社ト號云々

亦ハ此邊ニ七野アリ其神ヲ勸請ストモ七野ハ内野蓮臺野 紫野 舟岡野 柏野 北野 平野云々 社

記未レ考

○惟喬社 雲林院ノ南道ノ傍ノ社は也云々紀文未レ考

後ノ君子ノ考ヲ待ノミ

○惟仁社 同所ノ西藪ノ内小庵ノ中ノ小社は也云々

如レ前

○大將軍社 洛陽一條之西紙屋川之東ニ有リ 祭神

一座 大將軍 記未レ考

○文子天神 同大將軍ノ邊ニ有リ

祭神 菅公公

緣起云天曆元年欲レ遷ニ北野ニ之前遷ニ文子之傍ニ云

是啓蒙

○鳴瀧社 鳴瀧川ノ東ニ有リ 神未レ考

祭九月廿八日

有常皆詠レ歌既而惟喬彌厭ニ俗塵一隱于小野一時人號ニ小野宮ニ云々貞觀十五年二月薨二十六啓

○世ニ惟仁ノ兄惟喬トアラソヒ有リテ相撲ノ勝負ニヨリテ位ヲ定ラルト云ハ誤也其上惟喬ノ方ヨリ相撲ニ出タリト云ヘル紀名虎ハ四年以前仁明ノ承和十四年ニ病死セリ然レバ彌虛説也王代一覽

○むかしみなせに通ひ給ひしこれたかのみこれいのかりしにおはしますもに右馬頭なるおきなつかうまつれりひごろへて宮に歸給ふけりみをくりしてとくいなんと思ふにおほみき給ひろくたまはんとてつかはさざりけりこの右馬頭心もとながりて

枕とてくさひき結ふこともせし秋のよとたにたのまれなくにと讀けりときはやよひの晦日也けりみこおほとのごもらであかし給ふてけりかくしつゝまうでつかうまつりけるを思ひの外に御ぐしおろし給ふてけりむ月におがみ奉らんとてをのにまうでたるにひえの山のふもとなれば雪いと高ししゐてみむろにまうでておがみ奉るにつれといと物悲しくておはしましければやゝひさし

くさふらひていにしへの事などおもひいで聞なりけりさてもさふらひてしがなと思へどおほやけごとゝも有ければえさふらはで夕ぐれに歸るとて忘れては夢かとそ思ふ思ひきや雪ふみわけて君をみるとはとてなんなくゝきにける伊勢物語

○小野 山里 篠原 山田 雪 炭竈 歌ニ詠ス
○落葉社 同下小野ニ有リ

傳言嵯峨天皇之皇后靈社也便覽

○江文社 愛宕郡大原ニ有リ 祭神一座

●倉稻魂命 伊弉諾子 傳前ニ見ユ

内裏三十番神篇云江文大明神倉稻魂命也神祇正宗

○大原 音無瀧 臈清水

此所之名所也歌畧之

○靱社 同郡鞍馬寺門内ニ有リ 祭神一座 大己貴命 傳前ニ有リ

○此社天子不豫世上騷動之時懸ニ靱於此神前故

號ニ由木ニ也 正一位由木大明神云々

祭九月九日

祭九月九日

○高野社 同郡高野ニ有リ 祭神一座

神院新宮ト號ス

祭 九月十五日

○地主 同郡清水寺ノ内ニ有リ 號ニ地主權現ニ 祭

神一座 大己貴命 記文未_レ考 祭四月九日

○新熊野 同郡大佛殿南二丁ニ有リ

祭神 紀州熊野同 額云新熊大權現 永曆年中後

白川院御勸請也鳥居銘ノ心

神傳熊野之下ニ見エタリ

○若王子 同郡東山黒谷東有リ 勸請ノ神熊野那智

山若王子也

●後白川法皇勸ニ請熊野那智大權現於此地ニ號ニ若

王子ニ者也中世尊氏將軍崇ニ敬此社鳥居銘○祭有脱文歟

○有云法皇熊野權現ヲ信仰マシマス故ニ御參詣ノ

便安カラシ爲ニ三所ノ宮ヲ三所ニ移玉フ今一所ハ

聖護院杜ノ社是也

○岡崎社 黒谷山南ニアリ 祭神一座 正一位天王

云々同ニ祇園ニ 祭九月

○小野篁社 葛野郡小野庄杉坂村ニ有リ

祭神 小野篁靈也

○篁 參議左大辨小野朝臣參木正四位下岑守長

子也身長六尺二寸云々續日本後記又文德實錄ニ見

敏達一春日皇子一妹子一毛人一毛野

「永見一岑守」葛絃道風

篁保衡好古

篁仁壽元年十月卒五十一歲

○瀧社 同杉坂村ニ有リ

祭神 小野道風靈也

○道風從四位上木工頭寛平五年生村上帝康保三年

十一月卒七十一歲

○小野御靈 同小野庄東河内村ニ有リ

祭神 惟喬親王靈也

○人皇五十五代文德天皇第一子也

●本朝遷史云惟高者文德天皇第一皇子也皇嗣固其

所也然而第四皇子惟仁以下忠仁公爲中其外祖故立

爲皇太子清和天皇是也於下是惟喬閣中居于洛外山

崎水無瀬宮一吟詩詠歌以自遣每歲賞櫻花一日

遊河州交野之奈疑佐院以翫櫻花在原業平從

同
山城のこはたの里に馬はあれと
なき名すゝかん瀧つせもなし

人丸

千首
春ははや木幡の關の朝ほらけ
かちよりそ行君を思へは

爲尹

都のたつみやゝかすみぬる

夫木
木幡山花のにしきは折てけり

堀川

柳櫻をたてぬきにして

月清
待わひぬ今宵も扱は山城の

後京極

こはたのみねの遠の白雲

祭神一座 正哉吾勝々速日天忍骨尊地神第二代神

也素戔烏尊子 天照太神取爲子也啓傳前ニアリ

○蓋吾勝尊不降下土故無山陵而祀其靈一名

木幡神社神社考 ○祭九月廿四日

○清瀧社 同郡醍醐ニ有リ 祭神 清瀧權現云々

傳云空海法師入唐到青龍寺詣神祠祈佛法東

漸而歸朝時勸請云々

祭九月九日

○小栗栖八幡 同郡小栗栖ニ有リ傳記未考祭有脱之歟

○四宮 宇治郡山階里ニ有リ 四宮ト號ハ山階十八

郷内有二三宮而當社第四故號四宮也云々此
所和歌ニ詠ズ

古今

山科の音羽の山のをとにたに

讀人不知

後撰

はかなくて世にふるよりは山科の 三條右大臣

宮の草木とならまし物を

同返

山科の宮の草木と君ならは

兼輔

我は雲にぬる計なり

祭神二座 號諸羽明神

●天兒屋根命 天太玉命 傳上ニ有リ

按二神以高皇產靈尊詔而爲天孫左右羽翼之臣

也故名兩羽耳右者作兩羽今改爲諸字啓蒙

○祭ハ四月上巳日

○四宮川原此所ニ近シ長明道記ニ延喜第四宮此所

ニマシマス故ニ此關ノアタリヲ 四宮川原ト云フ云

云但此儀說多シ追可書

夫木

明わたり四宮川原霧はれて

順徳院

遠方人の數をみえ行

○栗田口神社 栗田口ニ有リ

祭神二座 祇園ニ同シ 素戔烏命 八王子也 感

ケレバ藤右丞相刑ノウタガハシキヲバ不_レ行賞ノ
ウタガハシキヲバ行ヘトコソ候エト申サレケレド
モ終ニ忠文ニハ其沙汰ナカリシカバ忠文本意ナキ
事ニ思ヒテ手ヲ握テ立タリケルガ十ノ指ノ爪手甲
マデ通リテ思ヒ死ニシケリ其マ、惡靈トナレリ其
故ニヤ清慎公子孫スエナク成テ小野宮モ他家エツ
タハリ又村上院第一廣平親王ハ忠文ガ女ノ腹也御
弟冷泉院ハ后ノ腹ナルニ依テ一御子ヲサシヲキテ
春宮ニ立チ玉フ忠文是ヲモ本意ナク思シガ死シテ
後冷泉院ノ御物狂ハシクナラセ玉テ御子花山院ハ
俄ニ御位ヲステ、御ダシヲオロシ玉ヒ三條院ハ御
目ミエサセ玉ハズ又三條院ノ御子敦明親王ナド申
セシハ御位ノ望ナシトノ玉テ俄ニ院號カウブラセ
玉テ小一條院ト申キカヤウニ冷泉院ノ御末イヅレ
モスルトワタラセ玉ハヌハ彼靈ノナスワザト
見エ侍シサテ三條院ハ御女禰子内親王其後々朱萑
院ノ御代ニ入内有テ後三條院ヲ產玉テ後ニ陽明門
院ト申キ其スエノミコソ今ノ世マデツタヘサセ玉
ヘ三條院ノ御末男方ハ絶サセ玉テ女方ヨリ御子孫
ヲ殘シ玉フ也云々○後冷泉院治曆三年十月七日正

三位ヲ授玉フ云々 祭ハ五月八日

○橋姫社 同宇治橋本ニ有リ

祭神 未_レ考 ○世傳昔有_ニ妬婦_一祈_ニ于貴布禰神_一

求_ニ生爲_レ鬼既而改_レ形頂被_ニ鐵輪_一口含_ニ炬火_一每_ニ深

更_ニ詣_ニ貴布禰社_一遂生爲_ニ厲鬼_一也此爲_ニ宇治橋姫_一

云又言羅生門鬼與_ニ此同_一啓蒙

古今 さむしろに衣かたしきこよひもや 讀人不知

新古今 さむしろや待夜の秋の風更て 我を待らんうちのはし姫

定家 月をかた敷うちのはし姫

○田中社 同宇治郡石田ニ有リ 祭神二座

●天照太神 日吉山王

當社鎮坐年紀不_ニ分明_一也傳云當昔天武御宇之比此

里忽然而一夜之間積_ニ苗數尺_一其上有_ニ白羽矢_一也老

翁來現云此地宜_ニ鎮_一坐于天照大神日吉兩社也然

則永爲_ニ帝都南方守護之神明_一耳依_ニ此鎮坐_一云々其積

苗之地于_ニ今存號_ニ苗塚_一也便覽

○木幡社 宇治郡木幡ニ有リ此所 川里 關山

吟 歌ニ讀リ

拾遺 こはた川こは誰いひしことのはそ 讀人しらす

月詠集

民の戸も神の恵にうかふらし

後京極

都の南宮ゐせしより

續後撰

雪のとふ鴈のは風に月さえて

後鳥羽院

鳥羽田の里に衣うつ也

○岡田鴨神社 相樂郡木津川ノ渡一里許東ニ有リ

祭神

帝城北賀茂神ニ同ジ

夫木集

山城の此都をは守けん

行家

岡田のかもに跡たれしより

○可茂社稱_三可茂_一者日向會高千穗之峯天降坐神賀

茂建角身命也神倭磐余比古之御前立坐而宿坐倭葛

木山之峯自_レ彼漸遷至_ニ山代國岡田賀茂_一隨_ニ山代河_ニ下_ニ坐葛河與_ニ賀茂河_一所_ニ會立坐下略 風土記

○田原社 宇治郡田原村ニ有リ 祭神一座

田原皇子 天智帝第二皇子也施基皇子ト號光仁天

皇ノ御親也光仁帝寶龜元年十一月田原皇子ト諡ス

王代一覽

○宇治離宮 宇治郡宇治橋傍ニ有リ 祭神藤原忠文

靈也 忠文參議修理大夫右衛門督也 或書云人皇

六十一代朱雀院承平三年三月平將門征討ノ時秀郷

貞盛忠文等走向_フ忠文_ヲ征夷將軍トシ弟忠舒并源

經基等ヲ副將軍トス小野好古藤原慶幸大藏春實等
 ヲ將軍トシテ兵船二百餘艘ヲ率テ伊豫國へ發向ス
 又東海東山兩道エハ官符ヲ賜リ軍功アラバ賞ヲ行
 ルベキヨシ相觸ラルル二月朔日下野押領藤原秀郷常
 陸掾平貞盛陸奥下野ノ勢ヲ催シ一萬九千人ヲ率テ
 下野ノ國ニオイテ將門ト合戰ス將門ガ兵數百人討
 レテ引退ク貞盛秀郷ヲツカケテ十三日下總國ニ到
 ル將門嶋廣山ニ籠ル貞盛火ヲ放テ將門并其從類ノ
 家ヲヤク十四日將門自辛嶋ト云フ所ニ出テ戰フ貞
 盛ガ放矢將門ニアタリテ馬ヨリオツ秀郷將門ガ頸
 ヲ切ル將門兄弟并同類玄茂興世王等所々ニテ討ル
 貞盛ハ國香ガ子也父ノ仇ナレバ殊ニ戰功ヲ勵ス秀
 郷ハ始ハ將門ニ從ントテ彼館ニ赴ク將門悅テ出迎
 フ秀郷其器量輕クシテ本意トゲマジキ事ヲ見知テ
 遂ニ貞盛ト力ヲ合セテ功ヲ立タリ坂東治リケレバ
 三月九日秀郷ニ從四位下ヲ授ラル其後秀郷貞盛鎮
 守府將軍タリ貞盛ヲバ從五位上ニ叙シ右馬助ニ任
 ズ同二十五日將門ガ頸京都ニ到ル四月忠文等駿河
 國清見關ヨリ歸京ス其後勅賞ノサダメ有ケルニ小
 野宮左府清慎公ウタガハシキヲバ不行ト申サレ

觀元年己卯八月廿三日從_ニ宇佐_ニ移_ニ山崎_ニ改曆雜事記

○水垂大明神 山城郡淀_ニ有_リ 或書_ニ釋千觀肥前

國佐賀郡川上淀姫大明神勸請云々

○水垂大明神 八幡叔母 神社便覽

○此所大荒木杜也和歌多シ又浮田ト云フモ此所也

共_ニ讀_メリ

大あらきの杜の下くさ茂りあひて

忠岑

深くも夏の成にける哉

續古今

かくしつゝさてやゝみな大あらきの

人丸

浮田の杜のしめならなくに

○伊勢向 同淀驛小橋東河中ニアリ

祭ル神一座 天逆向津姫命

天照太神也寶基文圖

○石清水社家説云依_ニ八幡遷幸之縁_ニ號_ニ伊勢向_ニ而

祠_ニ于此_ニ云啓蒙

○神功元年三月壬申朔皇后選_ニ吉日_ニ入_ニ齋宮_ニ親

爲_ニ神主_ニ則命_ニ武内宿禰_ニ令_レ撫_レ琴喚_ニ中臣鳥賊津

使主_ニ爲_ニ審神_ニ者因以_ニ千繪高繪_ニ置_ニ琴頭尾_ニ而請

曰先日教_ニ天皇_ニ者誰神也願欲_レ知_ニ其名_ニ逮_ニ于七日

七夜_ニ乃答曰神風伊勢之國百傳度遇之縣之折鈴五

十鈴宮所_レ居神名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉
日本紀

○御香宮 伏見京町東_ニ有_リ 祭神 一座 神功皇

后傳前_ニ有_リ

○鎮座年紀未_ニ分明_ニ從_ニ昔垂_ニ跡此地_ニ也秀吉築_ニ城

柵_ニ之日雖_レ奉_レ遷_ニ神籬於東岳_ニ今古御香

依_レ是又奉_レ還_ニ舊地_ニ云即今神地是啓蒙●祭九月九

日

○藤森杜 紀伊郡深草山南_ニ在_リ 祭神一座 舍人

親王 天武帝子廢帝父

○舍人 讀ヤウ一ナラズ。トネリシンワウ。イエビ

トシンワウ ヤドノシンワウハ伊勢神宮古來ノ讀

カタナリ ○元正天皇養老四年四月先_レ是一品舍

人親王奉_レ勅修_ニ日本紀_ニ至_ニ是功成奏上紀卅卷系圖

一卷 廢帝天平寶字三年六月追_ニ尊舍人親王_ニ稱_ニ

崇道盡敬皇帝_ニ續日本紀 祭五月五日

○城南神 乙訓郡鳥羽里_ニ有_リ 祭ル神

鳥羽天皇 諱宗仁堀河第一子母贈皇太后藤原茨子

治世十六年保元々年七月二日崩○祭禮 九月廿日

○和歌

氣布利奈利氣利。隔山見煙早知是火之意也惠學告齊安國師以_二此和歌之事_一安聞而許可云東域染解之人誠婦人而大丈夫者也后容貌甚麗及_レ崩云不_レ用_二葬儀_一以棄_二中野_一耽_二色欲_一者見_二我爛穢_一有_二少驚悟_一也遂從_二遺詔_一奉_レ捐_二其屍于西郊_一其後拾_二其拳_一以收埋因號_二其處_一云_二一拳_一又云_二拳宮_一神社考

○木嶋神社 葛野郡太秦東ニ有リ 和歌

木嶋ノミヤシロ

新勅撰集物名部
あなしには木の嶋のみや白妙の

雪にまかへる波は立らん

俊頼

祭神一座 天照坐御魂神

○遊仙窟文章生英房跋云嵯峨天皇書卷之中撰_二得遊仙窟_一召_二紀傳儒者_一欲_二傳授_一也諸家皆無_レ傳學士伊時深愁歎于_レ時木嶋社頭林木鬱々之所撓_レ木結_二草有_一老翁_二閉_二雨眼_一常誦之間讀_二遊仙窟_一云也伊時聞及潔齋七日整理衣冠_二慎引_一陪從_二參_二詣翁所_一誰來答曰唯々跪申爲_レ得_二遊仙窟_一所_二參也翁云我幼少自吝_レ授_二此書_一年闌倦_レ事僅所_二學誦_一而已重申願_二教_一此書_二僕苟候_一王家_二居_二學士之職_一少幼略_レ文無_レ讀垂_二哀矜_一翁誦讀之伊時付_二假名_一讀_二一帙_一畢還

飯之後送_二種々珍寶_一菴跡異香郁々無_二其跡_一其後感

書幾_二乎大明神爲_一化現_二耳文保三年四月十四日

○向日神社 乙訓郡西岡ニアリ 和歌ニ詠ス

拾遺愚草
夕つく日むかひの山のうす紅葉

またき淋しき秋の色哉

祭ル神一座 向日神素戔嗚尊孫

●額云正一位向日大明神 道風筆云々

○素盞烏孫大歳子也母須治比女神名帳註

○羽束師社 同郡久我繩手ニ有リ 和歌

續拾遺
もらしても袖やしほれの數ならぬ

俊成

身をはつかしの森の雫は

祭ル神一座 高皇產靈尊傳有前

○羽束師坐高御產日神神名帳

○山崎神社 同郡山崎ニアリ 祭ル神一座

●大山祇神 傳前ニアリ ○山崎神者大山祇命也卽

離宮左殿祠焉神祇拾遺

○離宮 山崎ニ有リ 八幡離宮也祭ル神石清水ニ同

行慶法師豐前之字佐ヨリ下向ノ時此所ニテ八幡ノ

靈夢ヲカウブリ覺テ後瑞光ヲ拜見ス卽此所山崎鳩

峯也云々其後今ノ男山ニ御影向云々 ○清和天皇貞

○戌亥仁當天。王都守護神明坐守即天神第七陰神也
火災於永久退平爲也止天若宮仁和火產靈於置玉奈利偏
仁帝都靜謐乃基也蘆原卜定記

○當社久代平安城北鷹峯東隣也光仁天皇御宇天應
元年釋慶俊奉遷今之靈地矣仍神人等ト居於北
山麓神祇拾遺按當社者昔愛宕郡鎮坐之故有此名
今北山大門村蓋當官神門之舊跡也故今所祠之地
雖屬於丹州溫其故號愛宕歟延喜式又以當
宮接桑田郡無山州鎮坐之記文啓蒙

○慶俊法師當山ニ移テ將軍地藏ノ法ヲ行ヒ地藏
ヲ安置シテ神ノ本地トナシ朝日嶺白雲寺ト號シ
愛宕山權現ト號スル也

○神位 清和天皇貞觀十四年十一月廿九日從五位
下阿當護神從五位上國史

○神託 衆生常ニ世界ノ火ヲケガシ己一人ノ思ヒ
ヲ含ミ天ニサカヒ地ニソムカン者ハ吾常ニ火亂神
ヲツカハシテ其不淨ヲ燒亡サン上ハユタカニ下ク
ルシマン時ハ火ノ雨ヲ殿舎ニ降シ上ノ寶ヲチラシ
テ苦ミノ者ニアタエン倭論語

○野宮 葛野郡嵯峨ニアリ龜山ノ麓平林ノ中ニ有リ

黒木ノ鳥居名高シ伊勢ノ齋宮此所ニ籠玉フ由源氏
物語ノ抄物ニアリ畧之

野宮に齋宮の庚申し侍けるに松風入夜琴と

いふ題を讀ける

拾遺集

ことのねに岑の松風通ふらし

いつれのをよりしらへそめけん

○裏柳明神 嵯峨中院ニ有リ○長明神 同所二尊院
ノ門前ノ小宮也○日靈明神 同所小倉ノ麓ノ小宮
也○拳社 野宮ノ左龜山ノ麓ニ有リ

右何モ嵯峨帝后檀林皇后ヲ祭ル所也薨ジ玉フ時遺
命ニヨツテ葬ノ儀ヲ不レ用嵯峨ニステヲキケルヲ
野犬ノ食チラシ捨ラキケル所々也云々名所記

○世云皇后問密法于空海海稱揚之又云唐有佛
心宗達磨之所傳來也海雖少聞未遑窮之皇
后於是詔惠萼赴唐求其法萼到于杭州靈池
院謁鹽官齊安禪師通皇后之金幣安甚美之因
令其上首義空充其請空與萼來于本朝天皇賞
賜又厚皇后立檀林寺居空而時々問法故號檀
林皇后其寺迹今天龍寺是也一說皇后和歌云毛呂
古志乃耶麻乃阿奈多余多豆劬毛波許々余他劬比乃

●軻遇突智

雷神

大山祇

高麗

○神書鈔云高麗與_二閻_一同龍神類也今祈_レ雨止_レ雨多祭_二此神_一 神社考

○弘仁九年五月爲_二大社_一 日本後紀

奥御前 ○爲_二平安城守護_一所_レ祭之蓋日域地守神明也 氏成私記

○城州貴舟社船玉命與_二高麗_一也 二十二社

按船玉命ハ猿田彥神也

○人皇百六代後奈良院御宇小兒咳逆疫而死亡甚衆仍令_二相者_一ト_レ焉即貴船神之所_レ崇也於_レ是乃同御宇弘治二年重九日令_レ逐_レ疫 改曆雜事記今落中ノ童子九月九日貴船與ト稱シテ小神與ヲ振アリク事ハ此遺風也云々

○攝社

奥深社 吸葛社 私部社

○御位 七十五代崇徳院保延六年七月十日正一位
○祭 未考 二十二社註式云無_二祭禮_一

男に忘られて侍ける比きふねに參てみたらし

川に螢のとび侍けるをみて
後拾遺神祇
物思へは澤の螢も我身より

和泉式部

あらはれ出る玉かとそみる

返し明神の御歌となん

おく山にたきりて落る瀧つせの

玉散るはかり物な思ひそ

○今宮 葛野郡紫野ニ有 祭神 一座

是社疫癘神也一條院正暦五年長保二年世間不_レ靜立_二神社於船岡山北_一行_二御靈會_一號_二今宮_一被_レ奉_二神馬_一藤原長能詠_二和歌_一曰白妙乃豐幣於取持天祠會始留紫乃野爾神社考

○神今者比_二祇園_一爲_二三社_一 啓蒙 祭五月十五

○愛宕神社 帝城ヨリ二里餘西山ノ絶頂ニ有リ四月中亥日嵯峨祭ト云フハ即此神ノ祭也是故ニ山城之部ニ入畢此所實ハ丹波國桑田郡也

拾遺集
なき名のみ高雄の山といひ立る

八條王

君はあたこの峯にや有らん

祭ル神 二座 伊弉並尊 火産靈尊啓蒙 ○松尾神書云軻遇突智者火神也故此神掌_二火災_一祭_二之平安城乾隅愛宕山_一而除_二火災_一者也 系圖傳

○北野神託 諸人吾前ニ來テ願ヲトゲントナラバ其心僞ナク内外清クシテ鏡ニ向フ如クシテ祈ベシ我罪ナラヌツミヲウケン者吾ヲタノマンニ一七日ノ内ニ其願心ノ如クナラズハ吾神ト不謂倭論

○北野參詣男女當社北門ヲ小石ヲ以敲又敷居ニ石ヲ積事アリ 改曆雜事記云人皇八十一代後深草院建長四年八月十八日北野社邊火起社家走而鎮之飯宅時各向ニ北門一以ニ小石一兩叩云火鎮收也從是已降無止期啓蒙

○服ニアタル者五十日オハリヌレバ南門ノ鳥居ノ外ニアル石塔婆ノ五輪ニ詣ル事アリ此事ハ昔ハ社司之輩除服ノ日ハ必神谷川ニ至リテ禊スル也其時忌中ニ用タリシ具ヲ此所ニ納シナリ今ハ此事ナシトイヘドモ其遺風ニテ世人除服ノ日詣ル也云々神社啓蒙ノ說同ジ愚按ニ此說アタラズ如何トナレバ必除服ノ用物ヲ石塔ニオサムルト云フ事如何又是ヲ納ントテ石塔ヲ可レ立ヤウナシ夫石塔婆ハ佛說ヨリ出タル事也然ルヲ啓蒙ノ說唯一神道ニシテ佛說ヲ破スルニ何ゾ此說ヲ信用スルゾヤ其儀ナラバ今ニ至リテ當社司ノ除服ニ其儀アルベシ社家ニハ

其說ナキヲ俗家ニ其風ヲツタユル事如何 除服ニ參詣スル事別ニ子細有リト云々 由緒シルシ難シ後人考可レ有先年地震ノ時此塔クヅル、事有シニ臺ノ下ヨリ金佛ヲ、ク出ヌ宮司ノメンノ思ヒノニ彼佛ヲ取テ持佛堂ニオサメシ也其夜サマノ不思議アリシカバ又モトノゴトク納ヲキシト也此事アル宮司ノ物語也現ニ誰モ知侍事也然バ此塔ニ一靈アレバコソ其不思議ハ有ルナレ猶以由縁考シルベキ事ニヤ

○貴布禰 愛宕郡鞍馬ノ傍ニ有リ

社司共木船に參て雨ごひしけるついでによめる
大御田のうるほふ計せきかけて 賀茂幸平

新古今
新後拾遺
わせきに落せ川上の神

きふね河末せき入るゝ苗代に 源義將朝臣

神のみしめをひきやそへまし

祭ル神二座

高麗神タカラカミ 水徳神也別雷神宮第二攝社也

伊弉諾尊斬ニ軻遇突智ニ爲ニ三段ニ其一段爲ニ高麗ニ日本紀

菅家系圖

天穗日命——宇庭 古人 清公——是善菅家

中將殿 傳未考

吉祥女 未考ニ何家女ニ云西園寺家也稱ニ吉祥女ニ住ニ都西南吉祥院里ニ之故名焉今神官等稱ニ吉祥天女ニ者可笑之甚也啓蒙

○鎮坐之事 村上天皇天曆元年六月九日遷ニ坐北

野ニ二十二社註式 同天皇治十三年天德三年九條右丞

相造ニ増屋舍ニ奉レ付ニ寶物ニ

○本殿之傍ニ有ル宮ヲ北野天神ト號ス

此所根源地主神也云々傳社記未考

○攝社

宰相殿 菅相公四世孫菅原輔正云々○正三位菅原輔

正壽永三年三月廿七日贈ニ正二位ニ二十二社註式

和泉殿 菅原定義也 ○從四位下菅原定義同時贈ニ

正二位ニ同

福部社 世人云ニ奏者神ニ是也

老松社 在ニ本宮東可ニ二町ニ

右兩社菅三品眷屬神也 未考

白大夫 在ニ本殿巽中門内ニ ○福宜外從五位下神

主春彥在任十六年又云渡遇春彥天御中主卅六世孫也即神主二門大内人高主六男也延喜十八年戊寅六

月廿日任同廿年十二月廿五日叙ニ外從五位下ニ承平

三年十一月廿日辭ニ職讓ニ男晨晴ニ天慶七年正月九

日卒蓋菅三品在世之時有ニ幽契睦ニ故爲ニ第一攝社ニ

也然今畧不ニ記焉社官謂ニ於太宰饗ニ酒醴ニ之翁ニ者

非也 福宜補任

夜松 號ニ船宮ニ 經藏之前ニ有傳祕也云々 已上啓蒙

○御位 ○六十二代醍醐天皇治廿八年延喜三年二

月廿五日從二位同三年四月贈正二位六十六代一條

院正曆四年五月廿日贈左大臣正一位 同年閏十月

廿日贈太政大臣二十二社註式

○祭 一條院永延元年八月五日始祭預ニ官幣ニ○七

十代後冷泉院永承元年八月四日被ニ定五日依ニ母后

國忌ニ也

○臨時祭 一條院寬弘二年八月四日始奉ニ神寶ニ

○行幸始 一條院寬弘元年十月廿一日始 或云六

十八代後一條院萬壽元年十一月廿二日始 使菅家

五位一人 幣一前同

之仁和中任南海道讚岐守。寬平五年二月進爲參議。六年九月門徒於吉祥院。修五十賀。九年六月經中納言。升大納言。兼大將。昌泰二年二月累進至右大臣。右大將如故。是時與左大臣左大將藤原時平共受上皇勅。輔佐天子。攝行萬機。初帝年十四卽位。寬平九年至此聰明一日行幸朱雀院。上皇謂帝云。右大臣年高才賢。舉國之所望也。專宜任用。乃召右大臣宣其旨。右大臣固辭而止。已而左大臣聞而大恨於。是左大臣與光卿朝臣菅根朝臣等相謀。遂謂之帝疑之。左大臣妹爲皇后。帝及左大臣年相富而內外讒行。昌泰四年正月廿日。左遷大宰權帥。延喜三年二月廿五日。右大臣薨。子配所葬。安樂寺。年五十九。此年夏未嘗落清涼殿延喜八年藤原朝臣菅根卒。九年時平薨。十四年京災。延長元年三月太子保明親王薨。人僉云菅靈爲災。京都大懼。因焚捨菅丞相左遷宣旨。復本官。贈正二位。又改年號。延長八年六月霽。釐于清涼殿。藤清貫平希世震死。天子不豫。承平五年延曆寺災。天慶三年七月菅靈託右京七條坊婢文子者。欲棲右近馬場。天曆元年移立祠于北野。九年三月託近江國比良社禰宜良種云。大内北野一

夜生松千本。其所建社以可崇。天滿天神於是朝日寺僧是珍與右京文子勸力爲造靈社。天德三年右大臣藤原師輔改造大廈。甚敬神威。四年九月二十三日庚申夜內裏回祿。及圓融院時改營數度。工匠運斤新斲。一夜之間虫食天井裏板。爲文字云。都勾留登茂末多毛耶氣南武須鵜波羅耶牟禰能伊太摩乃阿波牟加幾里波依。茲畏神怒猶在。而營北野宮。其後神祟遂止。至于一條院。正曆四年五月遣勅使於宰府安樂寺。詔贈太政大臣正一位時神託詩云。昔爲北闕被悲士。今作西都雪耻屍。生恨死歡其我奈從。今望足護皇基。神社考延長八年六月民部卿藤原清貫右中辨平希世二人於清涼殿逢雷震。死。皇帝惶怖玉體不豫。乃移常寧殿。召尊意宿禁中。持念初意在叡山。一日菅丞相化來語云。我已得梵釋許與。欲儻鳳懟。願師道力勿拒。我也意云。然々率土者皆王民也。我若承皇詔。何辟乎。菅作色適薦柘榴。菅吐哺而起。化作燭坊戶煙騰。意結瀉水印。擬之其火。卽滅。燒痕尙在焉。已而雷雨決旬。鴨河大漲。人馬不通。於是乎詔意赴宮。意車到河濱。激浪止。流水不濕輪。已下略之。

諸社一覽第四

山城

北野宮 王城之西ニ有北野ヲ讀ル和歌

續後撰集 北野の宮に讀て奉ける
曇るへき浮世の末を照してや 前大僧正慈圓

同 千早振神の北野に跡たれて
あら人神は天降にけん

定家

祭ル神 三座

菅丞相中殿 中將殿 東間 菅三品嫡子

吉祥女西間 北御方

○北野天神者右大臣菅原朝臣之靈也其先出自天穗日命十四世孫云野見宿禰居出雲國纏向珠城宮御宇宿禰奉詔到大和與當麻蹶速角力而贏當是之時死者多殉葬帝甚哀之宿禰率土師三百人採埴造像以代殉帝大喜之賜土師姓逮天宗高紹御宇天應元年宿禰之後遠江介土師宿禰古光仁天皇

人散位土師宿禰道長奏請依其所居地名改土師爲菅原姓詔許之桓武帝延暦元年少內記正八位上土師宿禰安人改土師賜秋篠姓四年冬十二月勅以菅原宿禰古人侍讀之勞賜古人男四人衣糧令勤學業九年冬十二月勅菅原真仲土師菅磨改其姓爲大枝朝臣一作枝是月詔菅原宿禰道長秋篠宿禰安人並賜姓朝臣又土師宿禰諸士賜大枝朝臣古人之子云清公博學多聞弘仁天長之際與丞相清原真人及諸博士斟酌律令而作義解清公之子云是善能繼家業侍讀清和帝以講孝經論語經史及群書治要等帝甚善遇時與大枝氏齊名世稱云菅江先是大學寮每年春秋釋奠先聖先儒此寮有東西曹司菅氏江氏爲其曹主敎授諸生是善仕至參議正四位下勘解由長官兼式部大夫播磨權守是善之子者乃右大臣也名道真字三幼而穎悟才過公祖及壯文采日進屬文章作詩賦初貞觀四年五月補文章生九年爲得業生十二年三月廿三日對策及第十八年進爲侍從元慶六年渤海國使者來諸儒往鴻臚館見之使者一日見右大臣所作詩藁稱云風情似白樂天大臣聞而悅

諸社一覽第四目錄

北野	貴船	今宮	愛宕	野宮	木嶋	向日
羽束師	山崎	離宮	水垂	伊勢向	御香	藤杜
城南	岡田鴨	田原	宇離宮	橋姬	田中	木幡
清瀧	小栗栖	四宮	栗田口	地主	新熊野	
若王子	岡倚	小野	瀧宮	野小御靈	落葉	江文
山木	高野	御蔭	石藏	大宮	大將軍	七社
惟喬	惟仁	大將軍	子文天神	鳴瀧	貫之	
水天 ^火 神	五八幡 ^所	御靈	極京八幡	幸神	晴明	
櫻葉	白山	高八幡 ^倉	蛭子 ^{ヒル}	若八幡 ^宮	五八幡 ^條	市姬
繁昌	新住吉	菅大臣	中山	俊成	新	玉津嶋
條天神	六宮	炬火殿	吉祥院宮			

地主大己貴神所化也

大宮賣 專女神 御膳津神豐受神

事代主 大己貴尊子 已上

右八柱則八洲守護驗神八齋靈命八心府神坐故式爲_二皇帝之鎮魂神_一矣謂夫水氣清淨海水即大祖元神性也陽氣者濁世生類不清實執也故清淨神氣祭則人魂陰氣鎮也故有_二鎮魂氣_一也神皇系圖

諸社一覽第三終

福寺春日社云神社考

○當社藤氏崇敬依レ異他曩祖兼延勸請卜部兼俱說

○清和帝貞觀年中鎮坐中納言山蔭卿始奉渡之同

兼右二十二社註

○攝社 八十四代順德院建保三年四月十三日入

夜自伯大納言殿被レ仰レ之吉田内小神員數御名等可ニ註進一者以ニ折紙ニ註ニ申之ニ二十二社註式

神樂岡社 當社地主雷火神

一言主社 今宮 率川社 水屋社

氷室社 榎本社 已上

○火雷神 火雷即丹塗矢之化神松尾明神是也延喜式

卜部家說云神樂岡明神者雷神也號ニ裂雷神ニ是吉田

之地主也至ニ一條院御宇卜部兼延掌社務職時以ニ

藤氏之崇敬故勸ニ請春日神上古日神居ニ于天石窟ニ

諸神奏ニ神樂ニ其處降爲ニ一山一雷神壁開爲ニ二高野

山如意嶽是也其後事勝神鳴御祖神集會于此奏ニ

神代之樂故云ニ神樂岡此岡有八雷神之垂跡八方

堆土以祭レ之延喜式載ニ霹靂神坐ニ山城國愛宕郡神

樂岡西北者是也又此地有ニ日降坂以日神降臨故

名レ之有池云龍澤造ニ齋場所大元宮一安ニ神代之

靈寶ニ修ニ宗源之神道ニ其東南有レ井其水自龍澤通

一旦沙落水涸兼俱自以レ鋤浚レ之白龍出現真靈區也

云爾神系圖傳

○霹靂神祭三座坐ニ山城國愛宕郡神樂岡西北二四月

令ニ卜部一人一吉日祭之十一月亦同延喜式

○位記 九十九代後光嚴院延文五年六月卅日正一

位 使藤氏五位一人 幣四前

○祭 六十六代一條院永延元年十一月廿五日甲

申今年始祭禮依ニ誓願ニ爲ニ公家沙汰一已上廿二社註式

五月下子日十一月中申日吉田祭廢中抄

○大元殿 齋場所 是卜部家神道勸請所

額 日本軍上日高日宮 伊勢内外宮ヲ始八百萬神

勸請云々

○鎮魂八神社 同所ニ有 往昔ハ帝都之宮内省ニ有

秀吉公之時吉田山奉レ遷云々

按宮内省ハ太政官東大炊寮西ニアリ云拾芥抄

八神

高皇產靈尊 天御中主尊子神皇產靈尊高皇產靈尊子魂留

產靈尊神皇實錄曰

元氣精靈

生產魂尊或云神皇產靈子足產靈尊道反魂神 ○神皇實錄云天

舊記云人皇五十五代文德帝仁壽元年二月二日乙卯依_ニ太皇太后御祈_ニ山城國葛野郡大原野仁宮柱廣知立春秋御祭如_レ賜

卜部兼右神祇正宗云人皇五十四代仁明帝御宇嘉祥三年爲_ニ王城守護_ニ閑院左府冬嗣申_ニ沙汰_ニ勸請之

今存_ニ兩說_ニ宜_レ隨_ニ佳說_ニ啓蒙

○春日社遠_ニ於帝闕_ニ故移_ニ于大原野_ニ其山曰_ニ小鹽_ニ蓋后妃夫人有_ニ參詣之便_ニ故也 神社考

○攝社

海童神社 瀬和井水神

瀬和井 瀬加井同 歌_ニ讀_リ

夜を寒みせかるの水は氷るとも 夫木集

庭火は春の心地こそすれ

六帖 大原やせかるの水を手に汲みて

家持

鳥は鳴共あそひてゆかん

○御位 正一位 使藤原五位一人 幣四前 宣命

黄紙

○祭 二月上卯日

人皇五十五代文德天皇仁壽元年辛未二月二日乙卯別制_ニ大原野祭儀_ニ一准_ニ梅宮祭_ニ國史 ○近衛使同_ニ

于春日祭_ニ上卿辨内侍參向神社考

○行幸始 六十六代一條院正暦四年十一月二十七日

○后宮行啓之始

大原野行啓起_ニ五條后順子_ニ以_ニ藤氏勸學院衆_ニ爲_ニ車副_ニ二條后高子_ニ以_ニ姪乘_ニ車後_ニ在五中將書_ニ和歌_ニ與_ニ

二條后_ニ大原也小鹽之山毛今日等已曾神代之事緒思出良目江次第

按_ニ此歌伊勢物語_ニニハけふこそは神代のことと思ひ出つらめト直シテ書_リ

○吉田 愛宕郡 王城之東半里許_ニ有

拾遺 名にたてる吉田のさとの杖なれば

兼盛

つくともつきし君か萬代

玉葉 すへらきもたのむ宮ゐと成にけり 從三位爲實

たゝ山陰の名残はかりに

祭ル神 大原野ニ同 四座

○御堂關白御書云奈良京時春日社長岡京時大原野平安城之今吉田社占_ニ帝都之咫尺_ニ有_ニ神祠之鎮護_ニ啓蒙

○御堂關白道長公造_ニ法成寺_ニ崇_ニ吉田社_ニ以擬_ニ與

云汝是誰之子耶對云妾大山祇神之子名吾田鹿蘆津
姬亦名木花開耶姬下略之
日本紀

瓊々杵尊 傳伊勢外宮ノ下ニ見リ

火々出見尊 瓊々杵尊子母大山祇神女吾田鹿蘆

津姬

○攝社

三石 能野三所影向所

市杵島社 幸神 護王社 愛宕社 天王社

○御位 仁明天皇承和三年十一月被授酒解神從

五位上大若子小若子神並從五位下續日本紀

清和天皇貞觀十七年五月十四日乙未梅宮正四位上

若子神小若子神酒解神酒解子神並從三位類聚國史

人皇八十代高倉院治十二年治承四年十二月正一位

使橘氏五位一人 幣四前

○祭 梅宮神四座夏冬祭料同平野祭人皇五十六

代清和帝貞觀元年十一月十日梅宮祭如恒二十二社
註式

陽成院御宇元慶三年四月三日停梅宮祭三代實錄

橘氏頃年間停祭今勅始而祭

第五十八代光孝天皇仁和元年四月七日又始祭

第六十六代一條院永延以後祭不絕

同御宇治十九年寛弘二年十一月新依御願如舊
例令勤任祭自明年可用式日一條院以來
相續四月十一月上酉

○被定南方鎮守之始 七十四代鳥羽院治十年永
久五年丁酉六月炎干御卜入云々

已上神社啓蒙

○神託 世人ノ無嗣シテ悲ミ又嗣生ントキ其母
心安カラント思ハバ常ニ我前ニシテ砂ヲ奉レ必其
心ノ如ク成ベシ是ソガヨクスル處也倭論語

○大原野 乙訓郡 王城ヲ去テ三里計ニ有申西ノ方
按ニ當國ニ同字之名所有愛宕郡ニシテ王城北ニア
ルヲモ大原トイヘリ但多クハ大原ト唱ル也歌炭竈

雪ヲ詠ス後撰

大原やをしほの山の小松原 貫之

續千載 はやこ高かれ千代のかけみん

大原やをしほの櫻咲ぬらし 爲實

續千載 神代の松にかゝるしら雪

右之歌大原野 小鹽山此所ニアリ

祭ル神四座 奈良之春日社ニ同ジ

神春日之下ニ見エタリ

○臨時祭 六十五代花山院寛和元年四月十日始
以_レ殿上五位_ニ爲_レ使以_ニ近衛府官人_一爲_ニ舞人陪從_一
有_ニ御拜_一尤大臣已下參仕座自_ニ今年_一始平野祭被_レ奉
遣_レ使臨時舞人走馬左衛門權佐藤原惟成爲_レ使有_ニ
宣命_一 啓蒙

○御幸始

六十四代圓融院天元四年十二月二十日同

○神託 諸人心清ク清カレバ神明其心ニ移リテ思
ヒトシテ心ノマヽナラザルハ無シ縦バ水ノ清ニ
天ノ月ノ浮ブガ如シ 倭論語

○梅宮 葛野郡梅津里ニ有 王城二里許西也 里川

和歌ニ詠ズ

新後拾遺
更にいま

花咲梅の宮柱

權少僧都慶有

たてゝそ千代の盛をもみん

拾遺

名のみしてなれるもみえず梅津河 讀人不知

井せきの水ももれはなりけり

祭ル神四座 相殿神四座

酒解神 大若子神 小若子神 酒解子神

社記並舊傳云件四社以_ニ孝謙帝天平寶字年中_一祭_ニ
此地_一爲_ニ帝基守護鎮守_一所謂酒解社大山祇大若子社

伊勢度遇神主遠祖加夫良居命也小若子社同大若子
弟也酒解子神木花開耶姬也其後人皇五十二代嵯峨
天皇后姬橘氏諱嘉智子父清友少而沉原涉_ニ獵書記_一
眉目如_ニ畫爲_レ人寛和風容絶異嵯峨天皇初爲_ニ親王_一
納_レ后寵遇日隆天王登祚弘仁之始拜爲_ニ夫人_一後立
爲_ニ皇后_一然常以_ニ無_ニ太子_一而淒淒不_レ樂因_ニ玆皇后
憑_ニ神代幽契_一祈_ニ酒解二座神_一矣一旦應_ニ感有_ニ妊
孕_一遂以_ニ當宮清砂_一敷_ニ御座下_一居_ニ其上_一生_ニ兒所謂
仁明天皇是也天皇追_ニ神惠_一嘉祥年中以_ニ外祖父清
友_一并_ニ酒解社_一以_ニ檀林_一并_ニ酒解子神社_一又以_ニ瓊々
杵火々出見命_一配_ニ若子二社_一以爲_ニ橘氏祖廟_一也至
今尊崇異_ニ他夏冬祭祀無_レ怠耳世人望_ニ產月_一則必
取_ニ當社砂_一佩_ニ帶襟_一此遺風也啓蒙

○檀林皇后即嘉智子別名也清友贈太政大臣正一位
也諸兄孫奈良麻呂之子也

○神系

大山祇 伊弉諾尊拔_レ劔斬_ニ軻遇突智_一爲_ニ三段_一

其一段是爲_ニ大山祇_一日本紀

大若子小若子 註三一卷一

木花開耶姬 皇孫遊_ニ幸海濱_一見_ニ一美人_一皇孫聞

拾遺

千早振平野の松の枝しけみ

能宣

千代も八千代も色はかはらし

同

おひしけれ平野の原のあや杉は

元輔

こき紫にたちかかぬへく

祭ル神四座

今木社 久度社 古開社 比咩社

第一御殿源氏第二平氏第三高階氏第四大江氏都八

姓祖神在焉 公事根源

今木社 日本武尊也

大足彦忍代別天皇立三稻日大郎姫爲三皇后一生三二

男第一曰大碓皇子第二曰小碓尊一日同胞而双

生天皇異レ之則詔於碓故因號三其二王曰大碓小

碓也是小碓尊亦名日本童男亦曰日本武尊(日本紀心)

久度社 仲哀天皇也

日本武尊第二子也母皇后云三兩道入姫命三天皇容姿

端正身長十尺稚足彦天皇成務無レ男故立爲三嗣 同上

古開社 仁德帝也 大鷦鷯天皇同

譽田天皇第四子也母曰三仲姫命三五百城入彦皇子之

孫也譽田天皇崩時太子菟道稚郎子讓三位于大鷦鷯

尊未レ即三帝位三愛皇位空之經三三載三太子自死焉二

十四歲遂即レ位在位八十七年崩時年一百十同上

系圖

大足彦忍代別天皇

日本武尊

稚足彦天皇

足仲彦天皇 譽田天皇 大鷦鷯天皇

比咩神 天照太神也但依所 傳註上

縣社 天穗日命也 中原 清原 菅原 秋篠 四

姓神也

素戔嗚尊囓三右瓊三置之右掌三而生三兒天穗日命三此

武藏國造土師連等遠祖也日本紀

○桓武天皇延曆年中立三件社三延喜式

○攝社

春日社 任部社 啓蒙

○御位 五十六代清和帝貞觀六年七月十日正一位

幣四前二十二社註式

○祭 四月十一月上申日

貞觀元年十一月九日始祭 或桓武帝延曆被三始行

之又云嵯峨帝弘仁始之又云文德帝仁壽元年十月

始レ之

スルニヤ夫神者不測之靈號也仰之彌高欲尋之則玄妙幽遠也何以現其形耶以有示無號以無示有喻一輪月雖洪海雖微露亦應大小無不宿也神誓又如此號鳴神道微而學者稀也以此謾者爲貴耳遂充不實於天下者乎一人傳虛則天下悉傳虛者蓋此謂哉神社便覽之心

○當社鍛冶ヲ始メ一切ノ金物師信仰シテ十一月八日輔囊祭トテ此神ヲ祭奉ル事ハ當山御垂跡ノ時天上ヨリ輔囊ト云フ物ヲ持下リ玉フ故也トイヘリ是俗説ノ誤也云々昔三條小鍛冶ト云フ者當山ノ埴土ヲ以テ及ノ土ニ用ケレバ比類無キ劔ヲウチ出ケル故其後ハ偏ニ當社ヲ信敬シ奉テ猶土ヲ用ルトテ數當山ニ往來シケル也是理ヲ不知シテ金工ノ守護神ナル故小鍛冶ハ信仰シケルト流布シケルト也

○稻荷明神ノ託宣 諸人ヨ鬼神天魔ヲ嫌ヒニクム事ナカレ大悲ノ心ヲオコシテ經多羅尼ヲヨミサヅケヨ假初ニモ是ヲ降伏スル思ヒヲ成ベカラズ濁レル世ノ衆生ハ惡キトテ祈シリゾクル故ニ終ニチガヒヲミツル日ナシ 倭論語

稻荷明神御歌

續古今神祇部

我たのむ人のねかひを照すとて

憂き世に残るみつの灯

親の處分をゆるなく人にをしとられけるを此事
ことわり給へと稻荷に籠りて祈申ける法師の夢
に社のうちよりいひ出し給ひたる歌

詞花集
なかき世のくるしき事を思へかし

何なけくらんかりのやとりを

○高博ト云シ人ノ母重病ヲウケテ存命不定ナリシガ逝テ不還ハ盛年ヲカレテ會ガタキハ悲ノ親也イカバセントテサマザマイタハリケレドモ終ニ療藥ノ効ナカリケレバ稻荷ノ社ニ七ケ日參籠シテ母ヲ病ヲ祈申ケリ第七日ノ夜深更ニ及テ心ヲスマシテ琵琶ヲ抱テ上玄石象ノ曲ヲ彈ゼシニ折節御前ノ燈爐ノ火キユナントシケルヲ御寶殿ノウチヨリ玉簾ヲ卷上テ艸童一人出現シ灯ヲカ、ゲ、ル高博ヲガミ奉リテ神慮ノ御納受タノモシク覺テ下向シタリケルニ母ノ重病タチドコロニ平愈シテ更ニ恙ナカリケル下略盛衰記十二

◎平野 葛野郡 王城ヨリ一里計西也

四大神 四柱兒神也

已上之加三一座爲五座焉○弘長三年有告文永年
中奉併也已上神祇拾遺啓蒙

○神殿 延喜八年故贈太政大臣藤原朝臣時平修
造件三箇社者也二二三社註式

○別宮并攝社

御倉上社 三座 本宮之後丘有

白狐社 同所左二有

明日荷田社 地主神上社傍二有

鴨社 本宮之乾二有

御田社 非三太田一 大鳥居之内南二有 已上啓蒙

○御位 人皇六十一代朱雀院天慶三年庚子八月廿

八日從一位 使四位一人幣三前 宣命黃紙 同上

○祭 四月初卯日 天曆勘文云禰宜祝供ニ仕春秋

祭一云々 同上

○行幸 七十二代後三條院延久四年三月廿六日同

上

○二月初午日當宮ニ參事 元正帝御宇當社影向之

日偶二月初午日也故至今用ニ此日一神祇拾遺

○號ヲ稻荷ト申事 空海師東寺ノ傍ニシテ稻ヲ荷

老人ニアヘリ是神ナル事ヲ悟テ即祭納テ東寺之鎮
守トス此故ニ今祭ノ日御旅所ヨリ本宮ニ還リ玉フ
トキ神興ヲ東寺ニ成シ奉レバ東寺ノ境内ヨリ役當
アリテ神供ヲソナヘ寺僧出テ眞言密乘ノ行ヲナシ
事オハレバ神與本山ニ還玉フ也是東寺ノ鎮守ナル
ユヘ也老人ト化シ玉フ時稻ヲ荷ヘルニヨツテ此號
有ト云々

又卜部兼邦說云稻荷之事一說弘法大師入唐之時御
供被レ申共有和銅年中ニ稻荷山ニ勸請也云々右兩說
ハ兩部習合歟唯一神道說云當山之地主神荷田明神
ノ地ニ倉稻魂ヲ鎮坐シ奉ル故ニ倉稻ノ稻ノ字ト荷
田ノ荷ノ字ヲ取テ號トス

夫此神者本朝衣食祖神倉生安逸靈社也何人不敬云
云 ○京極ノ上極樂寺眞如堂ニ稻荷ノ神體ト稱シ
テ初午日開帳シケレバ男女群詣ス其像ハ辨財天ニ
シテ白狐ニ乘レリ傳云數十年前此神體當寺エ質物
トシテ來玉フ也ト此日札守ヲ出ニモ其像ヲ印ス也
予按ルニ兩部習合ハ神體ヲ立ツル故ニ辨財天ヲ號
スル事サモアラシ但質物トシテ當寺ニ來レル
事ハ信用シ難シ別ニ子細アレドモ本縁ノ筆記紛失

御幣等使^二左少將藤原理兼^一左右御馬有^二五疋^一右近
官人供奉 東遊歌略之此後中絶第七十五代崇徳院天
治以後毎年相續同上

已上啓蒙

○崇徳院天治元年六月始焉御禊儀式同^二平野^一勅使
殿上五位奉^二東遊^一有^二宣命^一今日又有^二走馬勅樂^一
○行幸始ハ七十一代後三條院延久四年三月二十六

日

祇園之神詠

玉葉集神祇部

我やとに千もとの櫻花さかは

植をく人のみもさかえなん

○稻荷

紀伊郡 帝城之東南二里バカリニ有

昔ハ今ノ宮地ヨリ十餘丁山中ニ有坂アリテ諸人參

詣ノ便アシケレバ今ノ地ニ引奉ルト也舊宮ノ跡今

猶アリ

玉葉

いなり山越てやきつる時鳥

源賴實

ゆふかけてのみ聲の聞ゆる

風雅

やはらくる光をみつの玉垣に

前左大臣

外よりもすむ秋のよの月

舊宮ノ道スガラ坂有リ坂ヲ讀ル和歌

堀川百首

おそくとも宿を出つゝ稻荷坂

忠房

のほれはくたる都人哉

清少納言初午ニ詣シニ坂ヲ登シガクルシカリシ由

枕双紙ニ書リ

瀧有

瀧の水かへりてすまはいなり山

讀人不知

七日のほりししるしと思はん

祭レル神三座

大山祇女

下社 非ニ木花開耶姬

倉稻魂

中社 同名異神有三神

土祖神

上社

豐葦原卜定記云辰巳乃方仁當天倉稻魂乃垂跡阿利夫

此神波百穀於播玉故仁名奉神代乃昔與利此峯仁向玉

母不知只三峯仁顯玉之波人皇十三代元明天皇和銅四

年辛亥二月十一日仁垂跡寸誠仁諸人哀憐乃御心深久

蒼生作牟物波草乃片葉未天百乃災於攘玉全文略之啓蒙今

傳五座説

田中社

今ハ本宮ニ奉^レ移云々東福寺ト稻荷ノ間南側人

家ノ中ニ有其所ヲ田中町ト云也

彦根命次熊野椽日命凡五男矣是時天照太神勅云
原其物根則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也故彼

五男神悉是吾兒乃取而子養焉已上日本紀

○牛頭天王初垂跡於播磨明石浦移廣峰其後
移北白河東光寺其後移感神院社註式
二十二年

○貞觀十一年始天王從播州遷坐改曆雜
事記

○播磨國峰相記云吉備公歸朝日於當山奉崇牛
頭天皇也歷年數後爲平安城東方守護奉勸請

祇園荒町啓蒙

○人皇五十六代清和帝貞觀十八年移八坊鄉云々
便覽

○第六十四代圓融院天祿三年以祇園爲日吉末
社慈惠大師記

○攝社

後見殿 本殿ノ丑寅ニ有神大己貴命傳系
前在
蘇民將來社 南門ノ内左ノ社

今世傳竝簞内傳有蘇民惠素戔烏之辨也不信
不可執之

與官受福社 拜殿ノ傍ニ有

美御前 本殿ノ東ニ有

社家流云素戔烏尊所生之三女神也啓蒙

護王地社 在二下川原一

於當社 尤有習王城守護神也啓蒙

官者殿四條京極祇園御旅所ノ傍ニ有

舉世所謂此神誓文起請赦免社也云々依此考則唯
一所傳起請返神乎起請反者起請文上書靈印以奉
神供一七日祭之誠唯受一流大事非其家則不傳
也祇園末社有此神又宜也 啓蒙○世ニ土佐正尊
ヲ祭ルト云フハ非也商人渡世ノ諺トシテ請文ヲ云
フ事限ナシ然共十月二十日此神ヲ祭バ神其答ヲユ
ルシ禍來ラズトイヘリ此故ニ其日群參スル事限リ
無シ神ハ正直ノカウベヲテラシ玉フト云事タレカ
辨ヘザラン僞言ヲモテ人ヲ誑セシヲ神何ゾ是ニク
ミシ玉ハン幣帛ヲエテ其答ヲ許玉ヘバ惡ヲス、ム
ル神也辨フベキ事也神ノ御事神祕ト云々其家ニ入
テ可尋事也

○祇園祭之事

圓融院天祿元年六月十四日始御靈會自今歲行ノ之
二十二社註式

臨時祭 同三年六月十五日始被奉走馬勅樂東遊

國風土記

吾耶對曰隨_レ勅奉矣故素_二羹_一立化_二奇稻田姬_一爲_二湯津爪櫛_一而挿_二於御警_一乃使_二脚摩乳手摩乳_一釀_二八醞酒_一并作_二假殿八間_一各置_二一口槽_一而盛_二酒_一以待之也至_二期果有_二大蛇_一頭尾各有_二八岐_一眼如_二赤酸醬_一松栢生_二於背上_一而蔓_二延於八丘八谷之間_一及_二至得_一酒頭各_二一槽_一飲醉而睡時素_二羹_一乃拔_二所帶十握劍_一寸_二斬其蛇_一至_二尾劍_一乃少缺故割_二其尾視_一之中有_二一劍_一此所謂草薙劍也(又曰本名天素雲劍蓋大蛇所居之上常有_二雲氣_一故以名歟至_二日本武尊_一改曰_二草薙劍_一素_二羹_一鳥尊曰是神劍也吾何敢以私安平乃上_二獻於天神_一也然後行_二覓_一將婚之處_二遂到_一出雲之清地焉

乃言曰吾心清清之於彼處建_レ宮時素_二羹_一鳥尊歌之曰

夜句茂多菟伊都毛夜霸餓岐菟磨語味爾夜霸餓枳菟俱廬贈迺夜霸餓岐迺相與_二遶合而生_一兒大己貴神

○昔北海武塔天神_{素羹鳥尊}通_二南海龍女_{奇稻田姬}暮借_二宿路傍_一有_二二人_一兄曰_二蘇民將來_一弟曰_二巨旦將來_一兄

貧弟富天神借_二宿巨旦_一不_レ借又求_二蘇民_一許_レ之以_二粟柄_一爲_レ座以_二粟飯_一爲_レ饗後天神殺_二巨旦_一喪_二其

家_一以_二茅輪_一與_二蘇民_一曰吾是速進雄神也後世有_レ疫

則汝蘇民將來子孫以_二茅輪_一應_レ著_二之腰_一將_レ免備後

一說云進雄借_二宿諸神_一皆不_レ許_レ之時有_二蘇民巨旦_一者_二兄弟也兄貧而仁弟富而吝進雄借_二宿巨旦_一固拒_レ之不_レ容蘇民出迎而勞_レ之則餽以_二粟飯_一尊大喜欲_レ報_レ之其夕命_二蘇民_一渾_二家帶_一茅輪_一卽有_二大疫_一除_二蘇民家_一皆遭_二殃亡_一神亦敎_レ之云後世疫氣流_二行天下_一一小簡書云吾是蘇民將來之子孫并爲_二茅輪_一此二物係_二之衣袂_一則必免矣按備後風土記以_レ是爲_二北海民塔神通_一南海神女_二時事_一武塔神乃進雄之別號其祠見今在_二彼國_一云_二疫隅社_一今六月御靈會於_二四條京極_一供_二粟飯_一蓋起_二于蘇民緣_一云

八王子 三女五男也天照太神乃索_二取素羹鳥尊十握劍_一

打折爲_二三段_一濯_二於天真名井_一齧然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號云_二田心姬_一次湍津島姬次市杵島姬

凡三女矣勅曰其十握劍者是素羹鳥尊物也故此三女神悉是爾兒便授_二之素羹鳥尊_一此則筑紫胸肩君等所祭神是也

已上素羹鳥尊昇_二天之時_一乞_二取天照太神_一鬻鬻及脫所纏八坂瓊之五百箇御統濯_二於天真名井_一齧然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號云_二正哉吾勝々

速日天忍穗耳命次天穗日命次天津彥根命次活津

人_レ以_レ是爲_レ信言已不_レ見朗謂_レ徒曰二鳥來馴子等
莫_レ恠果如_レ神言_一其石今尙在焉爾來二鳥外餘羽不_レ
入朗安元二年移_三松尾山南_一塚福寺_心元亨釋書
○祇園 感神院ト號ス愛宕郡八坂郷和歌ニ祇園トヨ
メリ

後三條院の御時祇園に行幸侍けるに東遊にうた

ふべき歌めしければ讀る
後拾遺神祇之部

千早振神のそのなる姫小松

藤原經衡

万代ふへきはしめ也けり

祭ル神三座 素戔嗚尊中 八王子東 稻田姫西

牛頭天王 感神天王トモ 素戔嗚尊也

此神有_二勇悍以安忍_一且常以_二哭泣爲_レ行故令_二國內
人民多以天折_一復使_二青山變枯_一故其父母二神勅_二素
戔嗚尊_一汝甚無道不_レ可_三以君_一臨宇宙_一固當_二遠適_一
之於根國_一矣遂逐之日本紀又云於是素戔嗚尊請曰吾
今奉_レ教將_レ就_二根國_一故欲_下暫向_上高天原_一與_レ姉相
見而後永退_上矣勅許之乃昇_レ詣之於天_一也素戔嗚
尊昇_レ天之時溟渤以之鼓盪山岳爲_レ之鳴响此則神性
雄健使_二之然_一也天照太神素知_二其神暴惡_一至_レ聞_二
來詣之狀_一乃勃然而驚曰吾弟來豈以_二善意_一乎謂當_レ

有_二奪_レ國之志_一歟夫父母既任_二諸子_一各有_二其境_一如
何棄_レ置當_レ就之國_一而敢窺_二竊此處_一乎_三舊_一稜威之雄
誥_一發_二稜威之噴議_一而徑詰問焉素戔嗚尊對曰吾元
無_二黑心_一但父母已有_二嚴勅_一將_二永就_一乎根國_一如不_レ
與_レ姉相見_一吾何能敢去是以跋_二涉雲霧_一遠自來參不_レ
意阿姉翻起嚴顔于時天照太神復問曰若然者將何
以明_二爾之赤心_一也對曰請與_レ姉共誓天誓約之中必
當_レ生_レ子

○系圖

伊弉諾尊 大日靈貴 天照太神之系圖太神ヨリ前
伊弉冊尊 月夜見尊 略

蛭兒尊
素戔嗚尊

少將井 稻田姫也 ○素戔嗚尊自天而降_二到於出雲_一

國簸之川上_一有_二一老公與_一老婆_一中間置_二一少女_一撫
而哭之素戔嗚尊問曰汝等誰也何爲哭之如_レ此耶對
曰吾是國神號脚摩乳我妻號手摩乳此童女是吾兒也
號奇稻田姫所以哭_レ者往時吾兒有_二八箇少女_一每_レ年
爲_二八岐大蛇_一所_レ吞今此小童且臨_二被_レ吞時_一無_レ由_二
脱免_一故以哀傷素戔嗚尊勅曰若然者汝當_二以_レ女奉_レ

祭_レ之隨_二神誨_一遷_二宮于彼地_一以祭_レ之自_レ是以來天下每_レ有_二咆瘡之疫_一人無_二貴賤_一詣_二此社_一以祈_二神之佑_一云三代實錄ノ心
神社考

○今所_レ傳七座名

松尾社 月讀社 櫟谷社 三宮 宗像社 衣手社

四大神 啓蒙

○祭ハ四月上申日十一月上酉日人皇五十四代仁明帝承和四年ニ始也 祭ノ日賀茂下上ノ宮ニ同ク内藏使山城使等當宮ニモ立ツ也賀茂ニ同ク帝城守護ノ神也 按ルニ山城使内藏使ノ事職原鈔ニ見ユ

四月八日松尾祭使に立て侍けるに内侍は誰ぞと上卿の尋侍ける折しも郭公の鳴ければ讀

玉葉集
る

時鳥しめのあたりに鳴聲を 深草院少將内侍

開我さへに名乗せよとや

○御位 三十六代清和帝貞觀八年十一月廿日正一位使同賀茂幣二前廿二社註式

○預大社事 始六十六代一條院寛弘元年甲辰十一月十四日

○初以秦氏爲神官事 松尾鎮座記云元明帝和

銅二年四月十一日秦良兼同正光荒子山松尾爲_二守護_一留 已上啓蒙

○松尾神託 諸人ノ一心ニ一禮ヲナスモ無量ノタスケアリマシテ一念正直ノ大道ニイランモノ也倭

論語

○釋空也在雲林院一日入_二帝城_一有_二老翁_一倚_二城垣_一其貌甚寒齒牙相戰也曰尊老凜寒何立_二此乎_一對曰

我是松尾明神也頃受_二般若法味_一未_レ上_二白牛纒_一之車以_レ故貪癡之風逼我膚師善_二法花_一願有_レ意乎也

脫_レ衣度與曰我着_二此衣_一讀_二法華_一者四十年其妙香薰皆染_二是衣_一今獻_レ之可乎神悅受_レ之便被身相溫如

無復寒氣元亨釋書心 ○建久七年七月雷折_二松尾祠後大杉_一其木覆_二神殿_一欲_レ斬_レ之其材大難_二制恐_レ壓_二神殿_一若不伐異時小風雨又自壓倒神官與_二僧延朗_一議

朗曰莫慮早伐又杉中有_二奇事_一耳已而加_レ斧其杉如_二相避_一仆_二殿側_一於是自_二杉中_一忽迸_二出一漆塔_一

其內又有_二銅塔_一盛_二舍利_一神官見_レ之益信_二朗言_一便於_二祠之南_一建_二三層塔_一安之池側有_二大石_一白髮老人

常坐_二其上_一朗問何屢來_レ此對曰松尾明神也擁_二護師法_一又聽_二師誦_一法華故數來耳又我奉_二師給使者二

法又聽_二師誦_一法華故數來耳又我奉_二師給使者二

續拾遺

行てみるとや夏祓する

御祓する麻のゆふして波かけて

入道内大臣

涼しく成ぬかもの川かせ

風雅集
世中に物思ふ人の有といふは

我をたのまぬ人にぞ有ける

是は賀茂の御祖神の御歌となん

○松尾 葛野郡 都ノ西南 二里餘ニ有

萬代を松の尾山のかけ茂み
新古今
康資王母

君をそ祈るときはかきはに

一條院の御ときはじめて松尾行幸侍けるにこ

たふへき歌つかふまつりけるに 源兼澄

後拾遺
千早振松の尾山のかけみれば

けふそ千年の始也ける

祭る神二座

大山咋神 大己貴神弟大年神之子大山咋神此神者

坐淡海之比叡山又坐葛野郡松尾鳴鏑神也舊事紀

遠古世丹丹波國皆湖也其水赤故云丹波大山咋神

決其湖丹波水涸成土矣以鋤爲神體此神者即

松尾大神也系圖傳

○大歲神

大國御魂神

韓神

御年神

曾富理神

奥津彦神

白日神

奥津姫神

聖神

大山咋神

夫香山戸神

已上

南殿 神垂跡神祕也云々

別雷苗裔神也氏成私記 ○市杵島姫也廿二註式

○大中臣定好松尾鎮座記云元明帝和銅二年四月十

一日山城國山田庄荒子山於賀茂初奉傳云々

○造神殿文武帝大寶元年始於秦都理廿二社註式

已上啓蒙

月讀 松尾已前之鎮座歟顯宗帝三年依神託被奉

歌荒巢田押見宿禰侍祠云日本紀○顯宗帝獻山背

國葛野郡歌荒巢田十五町以爲月讀神地歌荒

巢田在大堰河之西南即今松尾之東南地是也○

文德帝仁壽三年春夏之間痘疹流行病之時神現形

曰我是大堰河濱所居神名爲月讀神我居近河頗

有泛濫之患今欲移居於松尾之南山若能敬祭

我者災害當自消矣帝得神語大悅乃會廷臣

糸の杜を行歸鳴

夫木
河合や清き川原に麻のはの

爲家

ぬさ取りして、いさ御祓せん

此河に御祖原と云名所有又糸別名也

山家集
月のすむみおやか原に霜冴て

西行

千鳥群立聲聞ゆなり

祭レル神二座 玉依姫 大己貴命

玉依姫 前ニ記ス則別雷神ノ尊母 御祖神ト申ス是

也 夫木集三條入道左大臣ノ歌

けふはみな折にあふひをかさす哉

頼む御祖の神のしるしに

大己貴命 素戔嗚尊子也系圖上ニ見

素戔嗚尊降ニ到於出雲國ニ娶ニ奇稻田姫ニ遂到ニ出雲

之清地ニ焉乃言曰吾心清清之於ニ彼處ニ建ニ宮相與違

合而生ニ兒大己貴神ニ

大己貴命與ニ少彦名神ニ戮レ力一ニ心經ニ營天下ニ復

爲ニ顯見蒼生及畜産ニ則定ニ其療病之方ニ又爲レ攘ニ

鳥獸昆蟲災害ニ則定ニ禁厭之法ニ是以百姓至レ今咸

蒙ニ恩頼ニ已上日本紀

○攝社

比良木社 當所地主神也

河合社 式稱ニ小社宅神ニ是也上賀茂社官參宮之日先

詣ニ此社ニ而後拜ニ御祖 蓋有ニ社例傳習ニ也已上啓蒙

小鳥社 河合之東ニアリ

三井社 或三身社トモ三座有

久我社 未刀社 共ニ本宮之北ニ有

靈輦社 本緣神祕也云々○下上トモニ行幸之始ハ六

十一代朱雀院天慶五年四月二十九日也同上祭之事

上賀茂ニ同ジ 六月洗手水會十八日ヨリ晦日ニ至

リテ諸人群參ス上賀茂ニハ廿九日晦日ニ神事能有

此事往昔ヨリ三伏ノ祓也是ヲ夏越祓ト云フ也昔ハ

神官悉川邊ニ集會シテ夏越ノ儀式アリ貴賤川頭ニ

ノゾミテ祓ヲシケリ今ハヲトロエテ其遺風バカリ

也云々○邪神ヲ祓ナゴムル故ニナゴシノ祓ト云フ

也ハ雲鈔ノ心夏祓夏越和饑トモ○天照太神皇孫命ヲ

葦原中國ノ王トセントス彼國ニハ螢火ノ神及蠅聲

邪神多シトイヘリ是ヲ祓和ルトテ六月祓ハスル也

團太曆

六月祓ヲヨメル和歌

後撰
かも川のみな底清く照る月を

讀人 不知

○賀茂祭四月中酉日也未日先上卿着陣召ニ六府課警固一朝廷被_レ獻_ニ走馬一其日勅使近衛中少將勤_ニ之昔有_ニ神夢_ニ人々懸_ニ葵蔓花鬘_ニ先一日賀茂松尾社司獻_ニ葵花鬘_ニ此祭始_ニ于欽明帝之時_{花鳥餘情河海等ノ心神社考}又賀茂國祭者四月中申日也欽明帝撰_ニ吉日_ニ行_ニ之

和銅年中詔_ニ山城國司_ニ令_ニ檢_ニ察_ニ之

○賀茂臨時祭者十一月下酉日也 寬平御記載字

多帝潛龍時_{號王}放_ニ鷹狩_ニ于賀茂邊一俄天陰霧降東

西迷_ニ路帝臥_ニ藪中_ニ憂恐之甚有_ニ一翁_ニ來告曰吾此

邊之老翁也春既有_ニ祭冬未_ニ有_ニ祭願賜_ニ冬祭_ニ帝心

爲_ニ賀茂明神_ニ也因答曰吾力非_ニ所_ニ及宜_ニ被_ニ奏_ニ請

于內翁曰吾知_ニ其力之所_ニ可_ニ及願自重而勿_ニ輕矣

言已不_ニ見帝大怪_ニ之未_ニ幾仁和三年八月二十六日

立爲_ニ皇太子即日即_ニ天皇位_ニ於是信_ニ神言_ニ而寬平

元年十一月二十一日始行_ニ賀茂臨時祭_ニ左近中將時

平朝臣爲_ニ勅使_ニ藤原敏行詠_ニ東遊歌_{外記内記云東遊男從等皆著_ニ已上神社考}

青摺

臨時祭 五十九代宇多帝寬平三年十一月廿四日庚

午日於賀茂明神有_ニ走馬事_ニ勅使右兵衛督藤原高經

率_ニ男二十人_ニ參_ニ上下社歌舞云々○臨時祭ヲ讀ル歌

新勅撰

いかなれはかさしの花は春なから 法性寺入道

山あるもてすれる衣のあかひもの 貫之

長くそ我は神につかふる

○五月五日之走馬社家第一ノ神事ナリ

○式部大輔實重ハ賀茂ニ參事ナラビ無キ者也前生

ノ運オロソカニシテ身ニスギタル利生ニアヅカラ

ズ人ノ夢ニ大明神又實重來リイフヤウハトテナゲ

カセオハシマス由ミケリ實重御本地ヲ見奉ルベキ

由祈申ニ或夜下ノ御社ニ通夜シタル夜上エ參間流

木ノ邊ニテ行幸ニアヒ奉ル百官供奉常ノ如シ實重

片數ノ中ニカクレテミケレバ鳳輦ノ中ニ金泥ノ經

一卷オハシマシタリ其外題ニ一稱南無佛皆已成佛

道トアリトオボエテ夢則サメストゾ 宇治拾遺卷四

○下賀茂 王城ヨリ五六町子丑ノ間也平林ノ中ニ

宮アリ此所ヲ糺トモイヘリ又糺ハサシ入ニ有ル南

向ノ宮ヲ云フ也河合トモ

新古 君を祈る心の宮を人とは、 慈圓

玉葉 糺の宮のあけの玉かき

川千鳥なれもや物はうれはしき 俊成

乙女子かゆふかみ山の玉かつら

家隆

けふは葵をかけやそふらん

又日陰葛トモイヘリ

蘿日本紀

神山の日かけのかつらかさすてふ

正三位成次

豊の明そわきてくまなき

葵祭ノ前ノ日ヲミアレノ日ト云フ也云々

玉依姫ノ別雷神ヲ産玉ヒシ所也御形トモ御生トモ

書祭ノ前ノ日ヲミアレノ日ト云フ也御生所ハ神館

ニアリ祭ノ時ノ御旅所也花鳥餘情見

思ふ事みあれのしめにひくすゝの

西行

かなはすはよもならしとそ思ふ

御形野 御形山歌ニ詠ゼリ是ハ下鴨ト云フ説有後

人之考ヲ待者也又上鴨ノ乾高野ノ邊ニ御形山有云

云實説未レ考

久堅の天の磐船漕よせし

賀茂遠久

神代の浦や今のみあれ野

みあれ山幾世の雲は嶺こめて

賀茂季保

しらぬ昔のけふにあふらん

夫木 見あれ川かものみとしろ引うへて

好忠

今はた年の神をいのらん

○因云鴨川鴨羽川トモ瀬見小川トモ

我たのむかもの川波立歸り

顯輔

嬉しきせゝにあふよしも哉

さかのほる鴨のは川のかみを 前太政大臣

思へは久し代々のみつかき

賀茂社歌合に月

石川やせみの小河の清ければ

月も流を尋てそとふ

判云此川さだかにしらずかゝる川や有とてま

けになりたるに又改て顯昭法師に判をさせ侍し

とき此歌を判じていはく石川せみの小川いとも

聞及侍らず但おかしくつゞけたりかゝる河など

侍にや所のものに尋て定むべしとてことをきら

ず後に顯昭にあひたりし時此事かたり出てこれ

はかも川の實名也當社の縁起に侍と申せしかば

おどろきて下略之無名抄

○御手洗川歌ニヨメリ略ス ○御手洗川神山ヨリ

流出テ賀茂ノ社貴舟片岡杜ノ中ヨリ折レル小川也

河海抄

賀茂齋院卜定アリテ後東川ニ望玉ヒテ御祓ノ事アリテ直ニ初齋院エ入玉フ初齋院トハ大内ノ中大膳職或左近府ナンドヲ點ジテソレニテ三年潔齋ノ事アリ其年ノ四月ニ御社エ參玉ハントテ祭ノ前ニ吉日ヲユラミテ又御禊ノ事アリ則紫野ノ野宮ニ入玉フ是ヲ二度ノハラヘト云フ扱中西日ニ賀茂社エ參玉ヒテ祭ノ事ニ隨玉フ也已上花鳥餘情按ズルニ野宮ニ所ニアルカ嵯峨之野宮ハ伊勢ノ齋宮ノコモリ玉フ所也是ニモサマノ儀式アリ源氏物語ノ鈔物等ニ記セリ又此所近ワタリニ川有有栖川ト云フ也是モ同名二所ニ有〇有栖川ハ齋院ノオハシマス本院ノカタハラニ侍ル小川也袖中抄

千載

ちはや振いつきの宮の有栖河

後京極

松とゝもにやかけは澄へき

夫木

音に聞く齋の宮の有栖河

躬恒

たゝ舟岡のわたり也けり

右紫野の野の宮近き有栖川なり

一葉抄にさがの有栖川といへり〇今出川のおほるとのさがにおはしけるに有栖河のわたりに水の流れたる所にて下略徒然草

右さがの有栖川也又有栖山ともよめり
夫木
夕されは空もをくらの時鳥

經信

有栖の山に聲なしのひそ

太神宮ノ齋宮ニ同ク忌ノ詞等有テ佛法ノ息ヲノゾカル、也詞花集ノ詞書ニ

賀茂のいつきと聞えける時西に向ひてよめる

思へ共いむとていはぬことなれば 選子内親王

そなたに向て音をのみそなく

〇祭之事凡ッ祭トバカリ云フ時ハ當社葵祭ノ事也トカヤ縦バ山ト計云フ時ハ比叡山ノ事寺ト計云フハ三井寺ノ事成方如シ

四月中酉日也人皇卅代欽明帝之御宇ニ始レリ葵ヲ

モテ神宮ニカケ用ル事神祕ノ子細有リトカヤ

堀川百首

めつらしく年に一度あふひをや

顯仲朝臣歌

神も嬉しくみそなはすらん

此日社家 天子將軍其外諸家エモ葵ヲ獻ズル也

天子ノ玉垂ニモ葵ヲカケラル、ト也

けふといへはすたれのみかは葵草

榮雄

古きふみにも巻添てけり

今日女ノ髪ニモカケ、ルト也

かしこまる四手に泪をかゝりける

西行

又いつかはと思ふあはれなれば

賀茂社中有「一言主神」賀茂氏久歌曰

君を祈るたゝひとことの神の宮

二心なき程をしるらん

神社考

○賀茂皇太神御託宣

一度吾前ニ來リテ一禮ヲ成ス者ハ其思ヲシタガヒ
テ神力ヲ加テ思ヲトゲンマシテ日重テタノマン人
ニオヒテヲヤ倭論語

むかし横川に恵心僧都とてならびなき智者いまそ
かりけり行徳たけ薰修年積りて法のしるしどもを
ほどこし給へる人也或年の神無月の比かもの社に
まうでゝおはしける程にいかにも心すみて覺給へ
ければ御前につやし給ひけるに時雨にはかにさえ
とをり嵐はげしくて月の光も雲まなくしかあれど
も晴行空のすゑのさと人は月を猶待らん物とみえ
侍り枯のゝくさの露のやどりしげからんと覺えて
何となく哀なるにつけても世のさだめなき事の思
はれてかなしみ給ひけるに御戸の内より誠にけた
かき御聲にて

つねなき世にはこゝろとむなよ

と聞えければ僧都とりあへず

月花のなさけもはてはあらばこそ と付申され

ければ御聲おどろくしくうごきてあら面白との

御こゑをまのあたり内記入道は聞給へりと傳へ承

る忝侍り下略之 撰集鈔

片岡社

千載集
さりとともと頼みそかくるゆふ禰

賀茂政平

わかた岡の神と思へは

大田澤 社ノ前東ノ方ニアリ

神山や大田の澤の杜若

俊成

ふかきたのみは色にみゆらん

○齋院

凡天皇即位者定ニ賀茂大神宮齋王一簡ニ内親王未
嫁者ト定若無ニ内親王者依ニ世次ニ簡ニ諸王女ト

定神社延喜●私曰諸王ノ事職
考式原鈔ニ見エタリ

平城帝嵯峨帝位ヲアラソヒ玉フ時嵯峨帝御祈願ノ

事アリテ皇女有智内親王ヲ以テ始テ齋院ニタテ玉

ベリ其例相續テ立玉ヒシヲ土御門院元久元年三十

四代之齋院ニ至リテ斷絶シ玉フ也 諸書ニ記ス
神社考ノ心

是也其槻歳久假仆世貴爲靈木不厄樵材故至
於今也子乞神官刻菩薩像圓喜而詣神主告
事神主不斬不日而成像長八尺營行願寺安之
釋書私曰一條革堂是也三十三所願禮所也
ニ雷神ト詠ス
君を祈るねかひを空にみて給へ

別雷の神ならは神

○當社鎮座之年紀祕シテ不語況神之御事哉井八所
之攝社末社等モ同ジ云々○社家祕無申旨故難露
顯神祕○凡帝都守護神明何不疎別而賀茂明神之
守護深重也太子馬○公家悉以當社祭祀爲日本第一
一神事一日供即爲寛治勅願豈非朝家無双之禮
奠哉貞永元年六月卅日之宣旨

○攝社

若宮本宮東傍

新宮著宮東

土師尾社御札屋前

藤尾社

新宮南

鎮守社本宮東片岡山麓

太田社自本宮五

白

鬚社太田社

福徳社

鎮守社共太田社南神宮寺川尾社

同郡丑寅玉

片岡社

諏訪社共本宮樓門外川東南側ニ有但

垣ノソト

岩本社

奈良社鳥居有梶田社

ナ澤田社諏訪

流木社梶田社

奈良社鳥居有梶田社

杉尾社本宮傍未申

棚尾社四足門段橋

橋本社樓門同郡西

山森三間社本宮

民神社外未申

岩本

橋本社 神祇拾遺云住吉和歌之兩神也業平

實方常拜二社二祈和歌之秀矣遂家風成譽溢

海内之故世人稱爲兩神化現云々徒然草ノ説ハ賀

茂の岩本橋本は業平實方也人のつねにいひまがへ

侍れば一年参たりしに老たる宮司の過しをよびと

どめて尋侍しに實方はみたらしに影のうつりける

所と侍れば橋本や猶水の近ければと覺え侍る吉水

の和尙

月をめて花を詠し古へのやさしき人はこゝに在

原と讀給ひけるは岩本の社とこそ承をき侍れ以下文

棚尾社 撰集鈔そのかみつかうまつりなれけるなら

ひに世をのがれて後も賀茂の社に参けるを年たか

くなりて四國の方え修行しけるが又歸参らぬ事も

やとて仁安三年十月十日夜参て幣まいらすとてた

なをの社のもとにてしづかに法施奉けるほどこの

まの月ほのくにて常よりも神さびあはれにおも

はえ侍ければ

山城國風土記云賀茂建角身命娶丹波國神野伊可
古夜姬生子名玉依子次曰玉依姬玉依姬遊
於石川瀨見小川今賀茂川時丹塗矢自川上流下乃取
來置之床邊忽成麗夫遂孕生子至成人祖父
建角身命欲知其父造八尋屋堅八戸扉釀八
醞酒而神集七日夜遊樂謂其子曰汝飲此酒
將杯與汝父其子即舉杯置矢前向天穿屋
覺而升於天乃因外祖父之名號賀茂別雷神
神代系圖

○雷神 伊弉諾尊拔劔斬軻遇突智爲三段其
二段是爲雷神日本紀

神系圖

神皇產靈尊

天御食持命日本紀
保食神
天道根命
天神魂命

賀茂武津之身命

玉依子
玉依姬下賀茂御祖
別雷命上賀茂

正統記云武津之身命爲八咫鳥爲神武帝軍先導

已上系圖傳
元享釋書行圓傳云此神之傳アリ少異大同也左二記ス

釋行圓鎮西人寬弘二年遊帝城頭戴寶冠身被
革服都下呼爲革上人圓持千手大悲陀羅尼又
欲得好材刻其像一夕夢沙門來告曰明日送爾
異材翌朝果一僧至語云賀茂神祠側有二槻木莓苔
纏封不知幾千百歲其外似朽內甚堅實每至六
齋日槻畔有誦千手神咒音近見無物遠聞有
聲自古名爲異木是子之所求材也古老傳言昔
城北出雲路有少女臨鴨河洗衣一箭沿流而來
女取見之鴨羽加筈女携還家插簪牙自此女娘
已而生男兒父母問其夫女曰無父母以爲匿
也兒三歲父母議曰世豈無父而有兒乎思此里人乎
宜具酒膳大宴里夫令此兒持杯試告言以
此杯置汝父所其得杯之人便兒之父議已多會
鄉人數爵之後令兒送杯時兒取杯穿衆人出
堂而置簪上鴨箭所父母及諸胥怪之相議曰是
箭屬鴨羽宜姓此兒爲賀茂氏於是兒化成
雷上天母又同時登天而去今之賀茂中祠昔爲田
中時田主已播秧數畝其苗俄變成槻樹母氏降
樹下爲神今賀茂中宮是也兒又降爲神賀茂上宮

新拾遺同祭を

九重の櫻かさしてけふは又

後醍醐院

神につかふるくものうへ人

放生會年中行事歌合

年中行事歌合

世にかくてつなかるゝ身も救はなん

新中納言

生るを放つ神のめくみに

○賀茂 鴨之訓也 鴨トモ書リ

愛宕郡也王城之北半里バカリニ有リ 宮ハ鴨山ノ

下ニ有 山名 神山 二葉山 日蔭山 御影山ト

モ和歌ニヨメリ

後撰

かくてのみやむへきものか千早振 三條右大臣

鴨の社のよろつ代をみん

新勅撰

神山の榊も松も茂りつゝ

賀茂重政

ときはかきはの宮そひさしき

夫木

神垣にかくる葵の二は山

季經

幾とせ袖の露はらふらん

同

日かけ山けふのかさしの諸草は

師光

万代かけて我や頼まん

同

そのかみのみかけの山の諸はくさ

師光

長き代かけて我や頼まん

祭ル神 別雷皇太神

廿二社註式曰日向國仁天降坐須神於賀茂建角身命止申須神倭磐吾彥天皇乃御前仁坐天大和乃國葛木仁宿寸彼與利漸山背國岡本乃賀茂仁遷幸山代川仁下坐天葛川止賀茂川止合處仁立坐給比賀茂川平見巡之天宣久狹久少也止云止毛石川乃清流也止天石川瀬見小川止號久川上仁宮所於定給天北山乃麓仁住給利其時此所乎賀茂止云也止 ○豐葦原卜定記云古仁八十萬乃神達乎高天原仁集給比神議仁議給天可遣神於尋出之奉利此國陪鹿島仁坐寸武雷神香取仁坐寸齋主神止於下之千早振惡神於悉皆伏世順陪奉天遂報申寸此後建角身命國々於見巡之御座寸於是天細女命磐樟船乎漕奉利尊於神代乃浦乃浪靜奈留磯末天送利御座仍天天神與利賜之神寶乎以天此國乃固止成世玉波率止天北山之麓仁應化之百王於守利玉布經津主武雷神母同此所仁垂跡之玉陪利

○別雷者賀茂山名也是以爲別雷神一耶爲之別雷山神二可也爲之雷公神三否也以鴨箭爲賀茂氏一之說賀茂固地名而人以爲民也爲取義於鴨箭之說吾未聞焉已上ノ說啓蒙ニ載リ

忍信命^一是武內宿禰之祖父也景行天皇三年屋主忍
武雄心命詣^ニ紀伊國^一居^ニ阿備柏原^一娶^ニ紀直遠祖菟
道彥之女影媛^一生^ニ武內宿禰^一由^レ是見^レ之孝元子彥
太忍信其子武內也事^ニ六君^一景行 成務 仲哀 神功 應神 仁德壽三百
十餘歲^一日本紀○高良神記 吾是武略之健將也末世
大將タラン者常^ニ吾名ヲ唱言セバ必神力ヲ加テ天
下ノ武將爲^ニ倭論^一

下高良 外院南^ニ有 師時記云江帥曰高良太明神者
武內大臣也非也高良者藤大臣連保也神號云^ニ高良
玉垂命^一以^ニ干滿兩顆^一令^ニ奉行^一之故奉^レ號^ニ玉垂^一
云々廿二社註式肩書云石清水別當清澄曰上高良武
內也下高良玉垂也已上啓蒙

狩尾 本殿西半里計山中^ニ有 舊記云件神石清水地
主社也即大國玉命啓蒙大國玉命傳前^ニ記ス

下院 役神社也 社記云貞觀二年六月十五日行教
造^ニ神殿^一云々○延喜式所謂山城國與^ニ攝津^一之堺所
祭之疫神者是也啓蒙厄年ノ者正月十八九日此社^ニ
群詣スル也

○八月十五日放生會之事 社記云扶桑記云養老四
年九月在^ニ征夷事^一大隅日向兩國亂逆公家祈^ニ請於
宇佐宮其禰宜辛島勝波豆米相^ニ率神軍^一征彼國討^ニ

其敵^一太神託曰合戰之間多致^ニ殺生^一宜^ニ修^一放生會^一
者諸國放生會始^レ自^ニ此時^一矣啓蒙每年八月一日ヨリ
十五日^ニ至テ諸所ノ魚ヲカヒ集テ十五日山麓ノ小
川^ニ放也放生川是也早朝其供養ノ爲^ニ神輿山下^一
下玉フ也祠官祠僧衣服ヲヨソヒ伶人樂ヲ奏シテ供
奉ス神輿下玉ヒテ法會アリ法會オハリヌレバ神輿
山上^ニ歸玉フ也此度ハ祠官等初ノ禮服ヲヌギテ淨
衣ヲ著シ白杖ヲツキ草鞋ヲハク也是葬ノ儀ヲ形取
ルトカヤ是日勅使アリ上卿宰相辨衛府參向內藏寮
使受^ニ宣命^一自^ニ延久二年^一准^ニ行幸儀式^一六府已下供
奉セリ已上公事 根源ノ心第六十四代圓融院大延二年八月十五
日放生會仰^ニ雅樂^一准^ニ諸節會^一 第七十一代後三條
院延久二年八月十五日自^ニ今年^一上鄉以^ニ六府馬寮^一
准^ニ行幸^一扈從御輿○行幸始ハ簾中抄圓融院御宇
有^ニ八幡御幸^一啓蒙○三月中旬月有^ニ石清水臨時祭^一
天慶五年四月廿七日始焉神社考

朱雀院の御時石清水の臨時祭を初てお
こなはせ給ふとてめされけるとき歌
續古今神祇
松もおの又も苦むす石清水

行末遠くつかへまつらん

紀貫之

皇后從_ニ新羅_ニ還之生_ニ譽田天皇於筑紫_ニ立_ニ譽田別皇子_ニ爲_ニ太子_ニ在位六十九年夏四月崩_ニ於若櫻宮_ニ時年一百歲冬十月戊午朔壬申葬_ニ於狹城盾列陵_ニ

玉依姬 海神女豐玉姬之妹神武天皇之母神也 啓蒙彦

波瀲武鸕鷀草葺不合尊以_ニ其姨玉依姬_ニ爲_ニ妃生_ニ神日本磐吾彥尊_ニ日本紀心磐吾彥尊神武天皇也

○八幡ト申事譽田八幡丸也トノ託宣ニヨツテ也 緣

起○八幡ト申奉ル事應神天皇ノ御廟河內國譽田ニテマシマスナリ宇佐ニ勸請アリテ和氣清丸ニ託シ

玉ヒテ我レハ譽田ノ八幡丸ト御名乘有シニ依テ也兼邦ノ說筑前宮前有_ニ八幡宮_ニ昔白幡四赤幡四降_ニ于此_ニ故名_ニ八幡_ニ植_ニ松而爲_ニ標至_ニ今猶在_ニ宇佐緣起ノ心○八

幡以_ニ古者赤白之幡各四流天降_ニ爲_ニ號予惟不_ニ然特地名也耳矣幡者非_ニ自天降之物_ニ非_ニ雨雹霜露之類_ニ待_ニ人工_ニ而後成者也天何爲者哉降_ニ此異物_ニ也

決非_ニ是矣_ニ一書ノ心啓蒙之辨也

當山御鎮座ノ事和州大安寺之沙門行教ニ御告アリシユヘ也云々豐前宇佐ヨリ此ニウツリ玉フ也○清

和帝御宇有_ニ行教者_ニ姓紀氏武內宿禰之後也昔武內宿禰爲_ニ景行帝之臣_ニ成務帝時爲_ニ大臣_ニ而又爲_ニ仲

哀神功應神仁德之輔佐_ニ是故行教尤崇_ニ宇佐神_ニ神憑_ニ教欲_ニ棲_ニ帝都邊_ニ遂移_ニ于山城男山_ニ神社考○釋

行教武內大臣之裔也居_ニ大安寺_ニ貞觀元年詣_ニ豐之宇佐八幡神祠_ニ夏九旬晝讀_ニ諸大乘經_ニ夜誦_ニ密咒_ニ法藏已滿夢大神曰久受_ニ法施_ニ不_ニ欲_ニ離_ニ師師廻_ニ王

城_ニ我又隨行居_ニ王城側_ニ當_ニ護_ニ皇祚_ニ耳教漸著_ニ山崎_ニ其夜又夢大神曰師見_ニ我所_ニ居俄覺便起見_ニ東

南_ニ男山鳩峯上現_ニ大光_ニ凌晨至_ニ光處_ニ實靈區也教便錄_ニ一事_ニ表奏帝詔_ニ橘工部_ニ准_ニ宇佐祠規_ニ建_ニ新宮_ニ

世言教祈_ニ見_ニ大神本身_ニ於_ニ是_ニ彌陀觀音勢至_ニ三像現_ニ袈裟上_ニ因_ニ是_ニ殿內安_ニ三像_ニ元亨釋書外殿_ニ安置_ニ奉

ル本像ハ敦實親王ノ刻彫シ玉フトコロ也諸神記

○攝宮

若宮 本殿ノ良ニ有 舊記仁德帝也啓蒙

姬若宮 若宮ノ傍ニ有 二十二社註式云宇禮姬姉吳

姊妹 同

水若宮 姬若宮ノ傍ニ有 舊記宇治皇子也仁德帝之

御弟也 同上仁德井宇治皇子ノ事平野ノ下ニ見ユ

上高良 祭ル神武內臣也

按_ニ日本紀之說_ニ孝元天皇妃伊香我色謎命生_ニ彥太

諸社一覽第三

山城國 上山背 山代上古此字ニ作ル

天照太神天上ニシテ齋服殿ニ入セ玉ヒテ神衣ヲ織玉フ此服殿ノ下ニアタル國ヲ機内五ヶ國トイフ山背國トイフハ神衣ヲ織玉フ御背中ノトヲリ也中古ヨリ城ト書リト部兼延曆十三年七月改ニ山背一爲ニ山城云々拾芥抄見山城國久世郡 一名男山 雄徳山 石清水

○八幡 トモ 此水山ノ半ニ有リ
新續古今 八幡山跡たれ初ししめのうちに

後鳥羽院

なほ万代と松風を吹く

續千載 世のためもあふくとをしれ男山

後二條院

昔は神の國ならすやは

新拾遺 石清水流の末をうけつきて

伏見院

絶すそすまん万代迄に

祭レル神三座

譽田天皇中殿 玉依姬東 神功皇后西

譽田天皇 胎中天皇トモ應神天皇トモ申也人皇十六代ノ帝也大和國輕島豐明宮ニ都シ玉ヘリ二十二年三月幸ニ難波一居ニ大隅宮四十一年二月崩ニ明宮ニ玉フ一云大隅宮ニ崩ジ玉フ神社考 ○日本紀第

○譽田天皇足仲彥天皇仲哀第四子也母目ニ息長足姬

尊神功天皇以下皇后討ニ新羅ニ之年歲次庚辰冬十二月上生ニ於筑紫之蚊田一幼而聰達玄監深遠動容進止

聖表有異焉皇太后攝政之三年立爲皇太子時三初天皇在孕而天神地祇授ニ三韓一既產之宋生腕

上其形如輶是肖皇太后爲雄裝之負輶故稱其

名謂譽田天皇四歲立爲太子七十一即位立仲姬爲皇后在位四十一年崩時年百十一歲日本

紀心

○日本武尊 足仲彥天皇 譽田天皇

神功皇后 氣長足姬尊トモ ○稚日本根子彥大日々天

皇開化天皇之曾孫氣長宿禰之女也母曰高額媛足仲彥

天皇二年立爲皇后幼而聰明睿智貌容壯麗傷天皇

皇不從神教而早崩上征新羅々々王自服高麗百

濟知不可勝永稱西蕃不絶朝貢所謂三韓也

諸社一覽第三目錄

山城 上

○八幡井攝社 若宮 姬若宮 水若宮 上高良

下高良 狩尾 役神

○賀茂同上 若宮 新宮 土師尾社 藤尾社 鎮守社

大田社 白鬚社 福德社 鎮守社 川尾社

片岡社 諏訪社 澤田社 岩本社 奈良社

梶田社 流木社 杉尾社 棚尾社 橋本社

山森三間社 氏神社

○下賀茂同上 比良本社 河合社 小鳥社 三井社

久我社 靈龜社 末刀社

○松尾 攝社不見

○祇園 後見殿 蘇民社 與官受福社 美御前

護王地社 末社官者社

○稻荷 御倉上社 白狐社 明日荷田社 鴨社

御田社 末社田中社

○平野 春日社 任部社

○梅宮 三石社 市杵島社 天王社 幸神護王社
愛宕社

○大原 海童神社 瀬和井社

○吉田 神樂岡社 一言主社 今宮 率川社

水屋社 氷室社 榎本社

○鎮魂八神

已上

リテ彼黍離々タル有様空ク竹都ノ名ノミトバマリテ
昔ヲシタフアハレヲ催シ又離宮院神服機殿麻績機殿
ナドモトク立ル人ナケレバ其印バカリ也又末社ノ遙
拜所ハ寛永年中ニ御再興アレド其社ノ在所ハ他領ト
成シヨリ改ル事モナク慥ニ知ル人モ稀也又二月九日
祈年ノ奉幣使モ參向ナケレバ兩宮トモニ御祭モタエ
テナク春秋ノ祈年穀ノ奉幣使モタエテ六月ノ御祭十
二月ノ御祭奉幣モタエテ今ハ御祭ヲ禰宜等ツトムル
マデ也是皆必ナクテ叶ヌ事ナレドモ中絶シヌ許多ノ
神領無ナリシヨリ便ナケレバ神事トテモ形計執行モ
侍リ已上陽復記ノ心

以上伊勢國畢

諸社一覽第二終

家集

こえて齋の度會のしめ
ことのはにつけても何か思ひ出る

長明

齋の宮のもりの下草

凡天皇即位者定_ニ伊勢太神宮齋王_ニ簡_ニ内親王未_レ嫁者_一ト定若無_ニ内親王_一者依_ニ世次_一簡_ニ諸王女_一ト定延喜式

寶龜三年十一月以_ニ酒人内親王_一爲_ニ伊勢齋_一權居_ニ

春日齋宮_一續日本紀

貞觀元年十二月廿五日丙午伊勢齋宮恬子内親王

於_ニ鴨水邊六條坊門末_一修_レ禊賀茂齋儀子内親王於_ニ

同水邊待賢門末_一修_レ禊並入_ニ初齋院_一三代實錄

貞觀二年八月廿五日伊勢齋恬子内親王臨_ニ鴨水_一大

修_ニ禊事_一即日入_ニ野宮_一同上

垂仁天皇廿六年以_ニ第二皇女倭姫命_一初立_ニ齋宮_一後

代々皇女立_レ之土御門院承元二年至_ニ四十一代齋

宮後鳥羽院皇女肅子内親王_一斷絶矣已上神社考

椿社_一河曲郡ニ有リ 當國一宮也 祭_レル神 猿田

彦命也傳前ニ見_ニ當社註記無_ニ所見_一啓蒙

太神宮祭禮

祈年 四十代天武御宇白鳳四年乙亥月始

月次 五十二代嵯峨帝弘仁年中始

神今食 四十四代元正帝靈龜二年六月始

新嘗 廿三代清寧二年辛酉十一月始

神衣 神代已來例也 四月九月十四日

例幣 四十代元正帝養老五年九月十一日始奉_ニ官幣_一

天曆勘文曰於_ニ濫觴_一垂仁御宇也云々

行幸者 四十四代聖武帝天平十二年十月始已上神社啓蒙

問云兩宮ノ榮モ昔ヨリ今ハ遙ニマサリタリトイフ人

有如何 答云人毎ニカク云フ事ナレド今ヲ知テ古ヲ

知ラスハ夏虫ノ氷ヲ疑フニ似タリ夫兩太神宮モ尊氏

ノ御時ヨリ秀吉ノ御時マデ年月ニソヒテ衰微セシヲ

今ノ御時ニ二見郷ト前山ヲ返シ玉ハリ又末社ノ遙拜

所御再興アリ殊ニ聖武天皇ノ御宇ヨリ始リテ嘉曆年

中マデ百十餘度有シ公卿勅使ノ中絶セシヲモ御興シ

有其後ハタエズ九月ノ御祭ノ例幣アリ又近代ハ廿一

年ニ造替御遷宮モアレバ尤兩太神宮ノ古ニ立カヘリ

玉フベキハシナレトモ中々往昔ノ十ガニニモ及ビガ

タシ三百年來ハ宮中ニテ神事行フ殿舎又重々ノ御垣

等モイツトナク絶テ名ノミナルモアリ齋宮ノ跡ハ少

森ノ内ニ黒木ノ鳥井立タレドモアタリハ民ノ栖トナ

又云大物主神大國玉神亦曰顯國玉神其子凡有一百八十一神日本紀心素戔嗚尊子也系圖傳末卷ニ見ユ佐々々姫命傳未レ考

大間社 度會宮川邊町口ニ有 祭神二座 東大間社

西國生社 社記云所謂大若子乙若子命也神宜轉大

若子命者天御中主尊十九世之孫也父彥久良伊命

垂仁天皇御宇北狄退治之賞賜大幡主命天照太神

御鎮座之時爲大神主令供奉給同上乙若子者大若

子命弟也景行成務仲哀三代仕奉神宜轉補

小俣社 度會小俣村ニ有 祭ル神一座

宇賀神 社記云坐湯田郷小俣村宇賀神一名專大明

神啓蒙○宇賀神同名有三神故當社之傳不レ考不

能レ記矣

櫛田社 多氣郡櫛田川邊有 祭ル神一座

大若子命 傳前ニ記ス

星川社 員辨郡額田村ノ川向ヒ也延喜式神名帳員辨

郡星川社云々○神未レ考

名寄かきりあれは橋とそなしぬ鵲の

立るしるしの星川の水

長明

鈴鹿社 鈴鹿郡坂下ニアリ 祭ル神一座

大比古命 倭姬世記云川俣縣造祖大彥命參相支汝

國名何間賜白味酒鈴鹿國奈具波志忍山白支然神宮

造奉令辛行又神田并神戶進支

新後撰す、か川ふりさけみれば神路山 僧正行意

新千載す、か川今關越て思ふ事 榊は分て出る月かけ

なりもならずも神に祈らん 藤原朝村

新續古今す、か川うつりしせゝを過しきて 從三位雅家

住世そ神のめくみ也ける

尾上社 度會郡 阿比乃山常明寺傍乎森中ニ有 祭

ル神一座

倭姬命 垂仁天皇第二女也

齋宮 多氣郡也森アリ

齋內親王住タマヒシ舊跡也此所宮川ヨリ一里計西

今齋宮村ト稱ス景行天皇廿年春宇治ノ齋宮ヲ多氣

郡ニ移シテ五百野皇女久須姬ヲ皇太神ノ御杖代ト

シ玉ヒ倭姬皇女ハ猶宇治ノ機殿ニ坐シケルト世記

ニ見エタリ名所

夫木集なかき世のためしにひかんす、か川

家隆

外宮神主宮崎氏度會氏之祖神也已 社記云天御中
主尊十世孫也飛鳥本紀云天村雲命天二登命後小橋
命止三名負給支已上啓蒙

神皇產靈尊

天御食持命
天道根命
天神魂命
多久豆玉命
生魂命
櫛真乳魂命

天曾多智命 天副杵命 天鈴杵命

天御雲命 天牟良雲命

國御神社 伊勢外宮之末社有國御神社 天日別命子

彥國見賀岐建與見命 倭姬世祖

天日別命

建日別命

○如系圖之者建日別命子
也世紀有相違者矣

玉柱屋姬命

彥國見加岐建與束命

姬前羽命

彥前羽命

高神客神社 山田土橋郷ニアリ 祭神二座

高神 客神 社記并神系圖等云神魂命之八世孫建日

別命也客神社者大己貴命子健御名方命也 建日別

命ノ傳前ニ見エタリ 健御方命 健御名方神トモ

○大物主神娶高志河沼姬一生一男健御名方神

舊事紀○大物主神子健御名方力美神者事代主之弟

也今諏訪明神是也神皇正統記

大己貴命

都味齒八重事代主神
味鉏高彥根命
下照姬命
高照光姬命
御井神
建御名方神

大國玉姬社 右同所高神山ノ尾崎ニアリ

祭神二座 案世記云大己貴命一座佐々良姬命一座

又云于時大國玉神出使奉迎支日別命因令造其

橋不堪造畢于時到令下以櫓弓爲橋而渡焉

爰大國玉神資美豆佐々良姬命參來迎土橋郷岡

本村前後文啓蒙略之 ○愚按大國玉ハ則大己貴命ノ別名也

○啓蒙

天兒屋命 父神興登魂命娶玉主命之女許登能床遲

媛命所生也○天御中主尊十世孫卜部中臣藤原諸

氏之祖也天孫降臨之時八百萬神之中棟梁五臣之第

一也奉天照太神勅輔佐天孫治豐葦原已上系圖

傳天照太神天石窟ニコモリ玉ヒシトキ御出アレト

祈禱サレシ神也太神磐戸ヲ出玉ヘバ太玉命ト端出

ノ繩ヲヒキワタシ二度イハ屋ニ太神ヲ入奉ザリシ

神也日本紀ニ見ユ

津速魂命 天御中主第七世卜部大中臣藤原等之上祖

市千魂命

興登魂命

天兒屋根命

日本紀作興登產
靈命舊事紀曰中
村連等上祖也

太玉命 高皇產靈尊勅云汝太玉命宜持天津神離

降於葦原中國亦爲吾孫奉齋焉日本紀高皇產靈尊

勅曰以吾高天原所御齋庭之穗稻種亦當御於吾

兒矣宜天太玉命率諸部神供奉其職一如天上

儀舊事紀

高皇產靈尊

天思兼命
天太玉命

四所別宮

多賀宮 神宮ヲ去テ六十丈ニアリ

伴神伊弉諾尊洗右眼因以生神號云豐受荒魂亦

名伊吹戶主神是也神名秘書

土宮 三座 大歲神 上ニ見エタリ 宇賀魂命素戔

烏尊子也上ニ見エヌ但丹名異神三有

土御祖神 大年神之子也大年神者大己貴命之弟也

土御祖神母天知迦流美豆姬也已上神代系圖傳 大治三年六

月官符改社號爲宮凡太神宮ノ祭禮新年月次神嘗

等之祭此宮ニモ奉幣ノ事アル也宮川ノ堤ヲ守ル神

也

月讀宮 山田宮後ノ所ノ北ニ有リ 內宮月讀同神也

傳前ニ見エタリ

風宮 高宮ノ下左ノ方ニ立玉フ也名所記

社記云正應六年三月廿九日官符改社號奉授宮

號預官幣依異國降伏之御祈也啓蒙

以上四所畢餘宮左ニ見ユ

宮崎氏神社 度會郡宮崎ニアリ祭ル神一座但六座卜

習事アリ彌宜相傳ノ儀云々

天村雲命 一座 倭姬世紀伊勢外宮之末社有宮崎氏

社一祭天牟良雲命此神者天御中主尊十二世孫也

ヲ國常立尊トイフ事如何答云此事深祕ノ其一ナ
レドモ祠官互ニ其神ノ德ヲアラソヒ世人モ又マヨ
フ事ナレバ子細ヲイフベシ尊神御出生ノ次第ヲイ
ヘバ外宮ハ先ニシテ國常立尊内宮ハ後ニシテ天照
太神ナリ又御鎮座ヲイヘバ内宮ハ先ニシテ外宮ハ
内宮ノ御告ニヨリテ後ニ御鎮座ナリ對スル時ハ内
宮ヲ日神ト號シ外宮ヲ月神トモ號ス月神ト申奉ル
トテ月讀尊ノ御事ニテハナシ國常立尊ハ一水ノ德
ノ神ニテマシマスユヘニ内宮火德ノ日神ニタイシ
テ外宮水德ノ月神ト習フ事也月讀尊内外宮トモニ
別宮ニマシマセバマドフベキ事ニアラズ然ニ内外
二宮ヲ偏頗シテ思ヒ奉ル族モアリ天照者二宮之通
稱太神者太廟之本號トモ侍レバ偏頗スベカラズ
陽復記ノ心○魚井之事與謝郡比治山頂有井其名曰眞
井今既成沼昔天女八人降コ來此井ニ而浴下畧之丹後
風土記ニア
リ神代
系圖傳○神託皇太神豐受太神託ニ倭姬命宣言人者
天下神物也勿レ破ニ心神神垂以ニ祈禱爲レ先冥加以ニ
正直爲レ本又日月雖レ照ニ六合ニ而照ニ正直之頂ニ
已上神
社考相殿神 四座

○瓊々杵尊 二座 天兒屋命 太玉命已上

瓊々杵尊 天照太神之子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊
娶ニ高皇產靈尊之女栲幡千千姬ニ生ニ天津彦々火瓊
瓊杵尊一故皇祖高皇產靈尊特鍾ニ憐愛ニ以崇養焉遂
欲下立ニ皇孫天津彦々火瓊々杵尊以爲ニ葦原中國之
王上○天照太神以ニ思兼神妹萬幡豐秋津媛命一配ニ正
哉吾勝々速日天忍穗耳尊爲レ妃降ニ之於葦原中國一
且將レ降間皇孫已生號曰天津彦々火瓊々杵尊一時
有奏曰欲下以此皇孫一代降ニ故天照太神乃賜ニ天津
彦々火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡艸薙劍三種寶
物一又以ニ中臣上祖天兒屋命忌部上祖太玉命猿女上
祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五
部神一配侍焉因勅ニ皇孫一曰葦原千五百秋之瑞穗國
是吾子孫可レ王之地也宜爾皇孫就而治一焉行矣寶
祚之隆當下與ニ天壤一無窮矣已上日本紀

系圖

天照國照彥火明櫛玉饒速日尊
正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

天津彦々火瓊々杵尊

○饒速日尊亦名贍杵瓊丹杵穗尊舊事紀

名也古事

○形質未顯棄三元氣而爲神國常立尊是

也元氣

所化形質已具水德變而爲神天御中主神是

也隱顯雖殊其實一也元々集

○國常立尊無名無狀之神

也在天則元氣之元神在地則一靈之元神在人則

性命之元神故號大元尊神神皇實錄

又云一無形虛而

有靈天地始而神常存形體消而神不毀性命既而神

不終一氣開闢以降今日亦在故號國常立尊○昔ハ

丹波國與佐郡魚井原ニシヅマリ玉フ也今此地ニ御

鎮座ハ八皇廿二代雄略帝廿二年也內宮御鎮座ノ後

ナル事四百八十四年也啓蒙ノ心

○昔豐鋤入姬命載天照

太神ニ到ニ丹波與佐宮一時此神自天降同坐一所

經四年天照太神獨還大和而此神留於丹波道

主命奉祭之古時調御膳于此宮每日送內宮

而神龜年中建御膳殿于外宮又同獻內宮是以

雖有曰御膳神之說而有御食御氣之二義食

與氣和訓相近陰陽元初之御氣而又有天狹霧國狹

霧之名則宜以前說爲正天孫尙在相殿何得

言御膳神哉神社考

泊瀬朝倉宮大泊瀬稚武天皇卽位廿一年丁巳冬十月
倭姬命夢教覺給久皇太神吾一所不坐波御饌毛安

不聞食丹波與佐之小見比沼之魚井原坐道主子八

乎止女乃齋奉御饌津神止由居太神乎我坐國欲止誨

覺給支爾時大若子命乎差使朝廷令參上天御夢

乃狀令申給支即天皇勅汝大若子使罷往天布理

奉宣支故率手置帆負彥狹狹二神裔以齋斧齋鉏

等始採山材構立寶殿而明年戊午秋七月七日

以大佐佐命天從丹波國余佐部真井原志天奉

迎止由氣太神度遇山田原

已上倭
姬世記

垂仁帝御宇皇

太神移五十鈴宮而至此年既四百八十四年自

神武帝殆千餘年矣大倭姬命猶在焉內外宮規准

日少宮模以造之神皇正統錄

天御中主者國常立之弟也而有同體異名之義矣

舊事天照太神與豐受太神則爲無上之宗靈而尊

無二故異於天下諸社是則天地精明之本源也無

相無爲大祖也故不起佛見法見以無相鏡假表

妙體也神名
秘書

○天照太神ノ御オシヘニ吾祭ニ仕ヘ

タテマツル時先止由氣皇太神ヲ祭り奉ルベシ然シ

テ後ニ吾宮ノ祭ヲナスベシ御鎮座紀ノ心

問云一說ニ內宮ハ日神外宮ハ月神ニテマシマスト
イヘリ然ハ外宮ハ月讀尊ニテマシマスナランニ其

稻倉魂神 素戔鳴尊後娶三 大山祇神女名神大市姫

生三神二兄大年神次稻倉魂神舊事 伊勢内宮之末社

有御倉神社二大田命傳云素戔鳴尊子宇賀之御魂神

神代系圖系圖大年神ノ下ニ見エタリ

○岩戸 諺天照太神入座天岩屋也是非也伊勢津彦住

窟也 岩屋本縁云高倉岩屋天日別命大己貴命也

啓蒙ノ心

外宮 度會郡沼木郷山田原ニ立玉ヘリ

山田原外宮御鎮座之所也名所 豐受宮トモ

新古今 すすか川ふるき木のはに日數ヘテ

山田の原の時雨をぞ聞く

同 神風や山田の原の榊はに

心をしめをかけぬ日そなき

續千載

すへらきの大津みおやのみことのり

續後拾遺

かけまくもかしこき豐の宮柱

とよけの宮にて

變語物語

何事のおはしますとはしらねども

西行

かたしげなさに泪こほれて

五百枝杉 外宮ノ神木也二鳥居ノ外僧尼ノ拜所ノ

邊ニ有トイヘリ外宮ニシテハ山田原ノ杉ノ村立千

枝ノ杉五百枝杉アヤ杉ナンド皆讀ナラハス内宮ハ

百枝松ヲヨメリ

神祇百首

神風や五百枝の雪の春にきて

杉の印のはこしみえつゝ

太神宮に詣ける時千枝の杉を讀侍ける已上名所記

新續古今

世を守る神のしるしは今も猶 勝定院太政大臣

祭ル神 豐受皇太神 相殿神 三座 東天津彦々

火瓊々杵尊 西天兒屋根命 天太玉命 已上四神

マシマスヲ五座ト申説アリ神祕相傳ト云々

豐受皇太神

古天地未割陰陽不分渾沌如ニ鷄子ニ溟滓而含牙及ニ

其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合

搏易重濁之凝場難故天先成地後定然後神聖生ニ其

中ニ焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬猶ニ游魚之浮ニ水上ニ

也于時天地之中生ニ一物狀如ニ葦牙ニ便化ニ爲神號ニ

國常立尊日本 紀 ○以ニ天御中主神ニ爲ニ元始ニ蓋一神ニ

ノ始是也但齋宮ハ後ニ同國多氣郡ニ遷セリ事齋宮
 ノ下ニ見ユ内宮ノ際ニ倭姫命ノ居玉ヒシ齋宮ヲ磯
 トイフ又宇治ノ機殿ト申モ此宮ノ御事也名所宮垂
 仁帝廿六年興ニ齋宮于宇治五十鈴川上ニ以降令ニ倭
 姫命ノ居上焉即建ニ八尋機殿ニ伊勢國飯野郡也啓蒙
續古今神風や五十鈴の川の磯の宮 皇后宮大夫師繼

常世の波の音を長閑けき

大歳神社

素戔鳴尊後娶ニ大山祇神女名神大市姫ニ
 生ニ一神ニ兒大年神次稻倉魂神已上舊事紀伊勢内宮之

別宮有ニ大歳神社此神化ニ白鶴飛止ニ於志摩國答志

郡伊雜葦原ニ啄ニ稻穗ニ因立ニ社於此所ニ伊佐波登美

之神宮是也倭姫命移ニ之伊勢度會郡ニ號ニ大年神社ニ

事見倭姫命世紀此神天上ニアル天ノ狹田長田ハ天

照太神ノツクラセ玉フ御田ナリ其稻穗ヲクハエテ

下界エ下セ玉フ也南膳浮州ニアル米ノ種是也神宮

ノ社司鶴ヲ喰ザルハ此謂也已上兼邦記ノ心

瀛津島姫命

湍津島姫命

市杵島姫命

事八十神

素戔鳴尊

大己貴命
 五十猛神
 大屋津姫神
 抓津姫神
 須勢利姫神

大歳神

系圖傳

與玉社 祭神猿田彦大神也傳前ニ見エタリ○衢神猿

田彦大神又號ニ與玉命ニ猿田彦之苗裔大田命逢ニ大

倭姫ニ云吾八萬歲間守ニ此靈寶ニ有ニ天逆矛五十鈴

天上圖像ニ倭姫大喜遂定ニ宮所于此ニ其猿田彦大神

今無祠祭ニ大神宮之西北隅ニ倭姫世記

件神無寶殿ニ以ニ賢木ニ爲ニ神殿ニ也五十鈴宮處之地

主神也石坐也神名秘書

猿田彦ノ事神宮ニテハ與玉神山王ニテハ早尾熱田

ニテハゲン太夫道祖神トモ幸神トモ舟ニテハ船魂

又サキ玉出雲ニテハ手ナヅチトモイヘリシヤウゲ

神トモウガ神トモナレリ善惡トモニ二六時中人

人ニオコル所ノ一念ヲ氣ニ乗テ形ヲ現ジシヤウゲ

ヲ成ス事アリ蹴鞠ノ坪ニオキテハ鞠ノ明神トモア

ラハル已上ト部兼邦ノ抄ノ心

名寄
此春は花をおしまてよそならん

西 行

心を風の宮に任せて

伊雜宮

志摩國答志郡伊雜村ニアリ

儀式帳

祭レル神倭

姬命世記云伊勢內宮之別宮有伊雜宮天牟羅雲命

裔天日別命子玉柱屋姬命是也又伊佐波登美之神

トモ

天日別命

○天牟羅雲命—天波與命—

建日別命—玉柱屋姬命

以上七所別宮畢餘宮左ニ見ユ

鏡宮

朝熊宮トモ櫻宮トモイヘリ

名所記

俗ニ阿佐未

ト云フ是也長明伊勢記云朝熊川ヲヘダテ、晝河ノ

横根トイフ山アリ其山ノ西ノハナニ鏡宮ヲハシマ

ス云々 祭レル神六座 櫛玉命 保於止志神 櫻大

刀神 苦虫神

大山祇

朝熊水神已上名所記

櫻大

案世紀云櫛玉命靈石坐 保於止志神石座櫻大刀神

花木坐 苦虫神石坐大山祇神石座朝熊水神石座 寶

鏡二面日月所化白銅鏡コレナリ儀式帳云又大山罪

命子朝熊水神形石坐倭姬內親王御世定祝

社記云朝熊水神倭姬命以三石凝姥神之裔一所鑄造

之寶鏡座已上啓蒙

神代より光をとめて朝熊の

前大僧正隆辨

鏡の宮に澄める月かけ

神さひてあはれ幾世に成ぬらん 嘉陽門院越前

浪になれたる朝熊の宮

右之内傳不_レ得_レ考神依_レ有_レ之餘神傳系共略_レ之

瀧宮 瀧祭宮トモ祭ル神一座御裳濯川ノ落合トイフ

所ノ岸ニ石クミノ宮ニテオハシマス澤女神トモ美

都波神トモ水神ニテマシマス此宮ハ殿モナクテ下

津底ニオハシマス常世ノ郷トモ仙宮トモ龍宮城ト

モ申ス天逆戈ヲ納玉ヒシ所也名所記

美都波女神 罔象女トモ書リ○伊弉冊尊爲ニ軻遇

突智_レ所_レ焦而終矣其且_レ終之間臥生ニ土神垣山姬及

水神罔象女_二紀_一日本

罔象女在_二下津底_一水神也_二名_二澤女神_一亦名_二美都

波女_一元々集

浪とみる花のしつえの岩枕

西 行

磯宮 山來前ニ見エタリ倭姬命此ニ居シ玉ヘリ齋宮

○伊弉諾尊ノ玉ハク月讀ノ尊ハ滄海ノシホノ八百重ヲ治スベシ同心

此神ハ男神也月弓尊三日ヨリ八日マデヲ月弓尊トイフ上絃ノ月是也廿三日ヨリ廿九日マデヲ下絃ノ月トイフ十五日圓滿ハ月ヲ月夜見尊ト云フ晦日ノ月ヲ月讀尊ト申ス晦日ニ滅シテ光ナシ然バ日數ヲヨミテ用ユレバ月讀尊ト申晦日ニ天地會シテ朔日ニ月ヲ生出ス也ト部兼邦ノ記

萬
月讀の光にきませ足引の
湯原王

山をへたてゝ遠からなくに

風雅
常闇をてらすみかけのかはらぬや
後宇多院

今もかしこき月讀の神

新古今
さやかなる鷺の高ねの雲ぬより
西園寺入道

影やはらくる月讀の杜

啓蒙
貞觀九年八月丁亥社號ヲ改テ稱レ宮舊記裏書

瀧原宮 太神宮ノ遙宮也伊勢ト志摩トノ兩國ノ堺山

中ニアリ延喜式同祭レル神速秋津彥神 伊弉諾尊

伊弉冊尊生ニ水門神等ニ號ニ速秋津日命日本紀

夫木
白いとの絶えす落くる瀧の原 荒木田延季

跡たれ初て幾代へぬらん

并宮 右同所 祭レル神 速秋津姫秋津彥神之妹也

○速秋津彥神妹速秋津姫神此二神因ニ河海ニ特別生

神十柱舊事紀 十柱之神 沫那藝神 沫那美神 類

那藝神 天之水分神 國之水分神 天之久比奢母

道神 國之久比奢母道神 大山止津美神 鹿屋姬

神已上系圖傳

瀧の原ならひの宮の神たから 爲家朝臣

猶すゑつゝく沖津白波

風宮 當宮ト月夜見宮ハ内外兩宮ニアリ内宮ハ子良

館ノ前ヨリ橋ヲ渡テ行是ヲ風宮ノ橋トイフ也名

記祭レル神一座志那加都彥神也神名○伊弉諾尊曰

我所生之國唯有ニ朝霧ニ而薰滿之哉乃吹撥之氣化ニ

爲神號曰ニ級長戸邊命ニ亦曰ニ級長彥命是風神也日本紀

此宮ニテ柏流シノ神事ト云フコトアリ度會郡土

貢島ヨリ大神宮ニ柏ヲサ、グル由也昔ノ儀ナリ

今ハ當宮ニテアル也内宮年中行事云柏流神事七月

四日也神名祕書云山谷水變成ニ甘水ニ浸ニ潤苗稼ニ

得ニ其全稔ニ故有ニ風神祭ニ名云ニ柏流ニ也豐年則浮流

通凶年則沉覆損四月七月祭レ之云々風日折神事トイ

フ是也已上名所記

七所別宮 想宮ト稱スルハ尊崇ノ義也

荒祭宮 內宮七所別宮第一ノ御神也太神宮ヨリ北エ二十四丈ニ立玉ヘリ伊勢名所記

此神ハ伊弉諾尊左ノ眼ヲ洗玉フテ生ル神ヲ天照荒魂トイフ亦荒祭宮ト名ク亦瀬織津姬神ト名ク是也
神名祕書

伊弉諾宮 祭ル神伊弉諾尊 伊弉冊尊二座也月讀宮

ノ西ニ立玉ヘリ宇治郷中村ノ里ノ北ニ森有是ヲ月讀森ト云フ其内ニ東ハ月讀西ハ伊弉諾伊弉冊ノ宮也太神宮ヲ去ルコト三里也各南向ニ座ス名所記

伴神ハ天神地祇ノ大祖國家萬物ノ性靈也光仁天皇ノ御宇寶龜三年八月官社ニ入玉フ清和天皇御宇貞觀九年八月丁亥朔伊勢國伊弉諾伊弉冊ノ神社、社ヲ改テ宮ト稱ス神名祕書此二神伊弉諾尊陽神伊弉冊尊陰神○陽神乾タリ陰神坤タリ萬物ニアツテ

ハ父母也人ニアツテハ男女ノ形ナリ一代二神二萬三千四十歳也コレヲ變化ノ神代ト云フ也神皇實錄ノ心○

天祖伊弉諾伊弉冊二ノ尊ニ詔シテ曰豐原千五百秋瑞穂之地アリ汝ユキテ備スベシトテ天瓊戈ヲ玉舊事本○伊弉諾尊伊弉冊尊天ノ浮橋ノ上ニ立テト紀ノ心

モニ計テ曰底下國ナケンヤトノ玉ヒテ天瓊矛ヲ以テサシ下テ探玉フニ是ニ滄溟ヲユ玉ヘリ其矛ノ先ヨリシタル潮凝テ島トナル二神コ、ニアマクダリ玉ヒテ共ニ爲夫婦イハレヒシテ洲國ヲウマント島ヲ以テ國ノ中ノ柱トシテ陽神左ヨリ旋リ陰神右ヨリ旋ル同ク一面ニ會ヒキ時ニ陰神先唱テ曰熹哉可美小男ニアヒヌ陽神ヨロコビズシテ曰ワレハ是男子ナリ先唱ベシ何ゾ婦人反テコトバ先ダツヤ事スデニ不祥改メグルベシト二神マタ相遇玉ヒヌ陽神唱テ曰熹哉可美少女ニアヒヌ陰神ニトヒテ曰汝ガ身ニ何ノ成レルトコロアルヤ對テ曰吾身ニ一ツノ雌ノハジメトイフ處アリ陽神ノ曰吾身ニモ雄ノ元トイフ處アリ吾身ノ元ノ處ヲモツテ汝ガ身ノ元ノ處ニ合セント思フコ、ニ陰陽始テミトノマダハヒシテ夫婦トナル産時ニ及テ先淡路洲ヲ以テ胞トス意ニ快バザル所也故ニ名テ淡路洲ト云フスナハチ大日本豐秋津洲ヲ生日本紀

月讀宮 祭ル神二座 左月讀命 右荒魂命 月讀。

月夜見。月弓トモ○此神光ウルハシキコト日ニツダリ以テ日ニ配テ治スベシ天ニ送リマツル日本紀ノ心

坐本紀開化天皇箱中化女ヲ倭姫命トイフ又按スルニ日本紀崇神天皇ノ姑倭迹々日百襲姫命聡明叡知ニシテヨク未然ヲシル又云倭迹々日百襲姫命ヲ大物主ノ神ノ妻トス云々倭迹々姫ハ崇神ノ姑。倭迹迹日百襲姫ハ亦崇神之從祖姑也而大物主神之妻則二人非ルニ似タリ有文ナラン又云天照太神ヲ倭姫命ニ託ルハ垂仁ノ女也開化箱ノ中ノ神女ト異說アルカ已上神社考ノ心

神託

天照太神宮寶勅ニ吾諸ノアヲヒトグサ僞リハカリテタトヘバヨシト思フトモ必天ノ詔ヲウケテ根ノ國ニオモムカンタバシキ心ヲ持テハ將ニアシクトモ必天ノ神ノメグミアラン「モロ」ノ幾人等天ニ逆フ時ハ道ナク地ニサカヘハ其幸無ラン其元ニハナレ根國ニ入オチンゾ重テ心ヲ天地ニ等シテ思ヲ風雲ニノセテ道ニ隨ヲ元トシ神ヲ守ルノ要トセヨ万ノクダ」敷コトヲ拂ステ、一心ノ定法ヲ尋テ天神ノミコトニ叶テ神ノ心ニカナヘ已上倭論語

○相殿神

天手力雄命 天照太神入ニ于天石窟一閉ニ磐戸一而幽居焉故六合之内常闇而不_レ知ニ晝夜之相代ニ于時八十

萬神計ニ其可_レ禱之方一以_ニ手力雄神_一立_ニ磐戸_一之側一
天照太神乃以_ニ御手_一細開_ニ磐戸_一一窺之時手力雄神則奉_ニ承天照太神之手_一引而奉_レ出日本紀

月夜見尊——手力雄尊

神代系圖

八百萬神ノ中ヨリ撰出サレタル大力ナリ思兼尊ノ御子也兼邦神道唱歌ノ抄

萬幡姫尊 栲幡千千姫命トモ

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶_ニ高皇產靈尊之女栲幡千千姫_一生_ニ天津彦々火瓊々杵尊_一日本紀

天思兼命

天太玉命

天忍日命 舊事紀ノ神狹日命同シ

高皇產靈尊——天穗津命

天神立命 山代久我直等祖也

少彥名命

栲幡千千姫命

始ハ天兒屋根命太玉命相殿ノ神ニテマシマスヲ外宮御鎮座以後ユヘアリテ外宮エウツシ奉ルナリ陽

復記

乙未淡海甲可日雲ノ宮ニウツリ玉ヒテ四年八年
巳亥同國坂田宮ニウツリ玉ヒテ二年十年辛丑美濃
國伊久良河ノ宮ニウツリ玉ヒテ四年次ニ尾張國中
島ノ宮ニウツリ玉フ十四年乙巳伊勢國桑名野代宮
ニウツリ玉ヒテ四年時ニ大若子命弟若子命仕へ奉
ル十八年己酉阿佐賀藤方片樋ノ宮ニウツリ玉ヒテ
四年廿二年癸巳飯野高宮ニウツリ玉ヒテ四年廿五
年丙辰三月伊蘇宮ニウツリ玉フ時ニ倭姫ノ玉ハク
南ノ山イマダ見玉ハズ吉宮處ヲモトメ幸玉フ此時
狹田社坂年社御船社御瀬社瀧原神久求社園相社水
饗社二見浦堅田社江社荒崎社秘神朝熊ノ社等國々
處々ニアガメ祭玉フ今歲猿田彦神ノ裔宇治土公祖
大田命參相ヒ乃曰南ノ大峰ニヨキ宮處アリ佐古久
代宇治之五十鈴川上ハコレ日本國中ニ殊ニスグレ
タルヨキトコロ也其裏翁八万歳ノ間ニモイマダミ
シラザル靈物アリ照カ、ヤクコト日ノ如シコレ小
縁ノ者ニアラジ定メテアルジ出現ヲハサンヤ倭姫
命對曰斷ハリ實灼然コレ久代天祖チカヒチガイ玉
ヒテ豐葦原瑞穗國ノウチニ伊勢加佐波夜之國ハヨ
キ宮處有ト見定メ玉ヒテ天ヨリシテ投ゲ降居天ノ

サカ太刀逆鉾銅鈴等コレ也トテ倭姫命天ノ平手ヲ
拍テヨロコビ玉ヘリ此處ニ於テ大宮柱ヲ下津岩根
ニ太シキ立テ高天原ニ峻崎搏風ニテ廿六年丁巳冬
十月甲子ニ天照太神ヲ渡會ノ宇治ノ五十鈴川上ニ
鎮坐也已上神社啓蒙
心日本紀前ニ云フガゴトク神鏡ハ人皇十
代崇神天皇大和磯城ニ神籬ヲ立テ齊奉玉ヒヌレバ
內裏ニハ又神鏡神劍ノ御影ヲウツシテトバメ玉フ
內侍所寶劍ト申奉是也陽復○倭姫命垂仁天皇ノ皇
女也太常國史云鎮坐本紀ニ載開化天皇ノ手箱ノ中
ニ物アリ小虫ノウゴメクガゴトシコレヲ見ルニ人
ノ貌也帝アヤシミ玉ヒテコレヲ養ハセシメ玉フニ
長ルニ及テ姜女也所謂倭姫命是也帝其來レル所ヲ
問玉フニ答テ我將レ事神ヨツテ三種ノ神器ヲ祭ラ
シム帝神ノ威ニ恐玉ヒテ殿ヲ同シク玉ハズ宮處ヲ
求シム崇神天皇ノ時ニヲヨンデ倭姫皇女三神器ヲ
以テ內裏ヲ出玉フ時ニ劍鏡ヲ改テ內裏ニオサメラ
ル神璽ハ同ク留テ三種ノ器トス已上神社
考ノ心
案ルニ倭姫同名異人多シ日本紀ヲミルニ倭迹々日
百襲姫命孝靈女倭迹々稚屋姫命同倭迹々姫命孝元
女
千々衝倭姫命崇神
女倭姫命垂仁
女共ニ日本紀ニ載セリ鎮

問之天鈿女乃露其胸乳抑裳帶於臍下一而笑噤
向立是時衢神問曰天鈿女汝爲之何故耶對曰天照太
神之子所幸道路有如此居一之者誰也敢問之衢神
對曰聞天照大神之子今當降行一故奉迎相待吾名
是猿田彥大神時天鈿女復問云汝將先我行乎抑我
先汝行乎對曰吾先啓行天鈿女復問云汝何處到耶
皇孫何處到耶對云天神之子則當到筑紫日向高千
穗穗觸之峯吾則應到伊勢狹長田五十鈴川上因
云發顯我者汝也故汝可以送我而致之矣天鈿女
還詣報狀皇孫於是脫離天磐座排分天八重雲棧
威道別々々而天降之也果如先期皇孫則到筑紫日
向高千穗穗觸之峯其猿田彥神者則到伊勢之狹長
田五十鈴川上即天鈿女命隨猿田彥神所乞遂以
侍送焉○太神御正體御鏡ニテマシマスナリ天照太
神寶鏡ヲ持玉ヒテ授テノ玉ハク吾兒此鏡ヲミマサ
ンコト吾ヲミルガゴトクスベシトモニ床ヲ同クシ
殿ヲヒトツニシ以テ齋ノ鏡トスベシ○又日ノ神天
磐戸ヲイデマス此時鏡ヲモツテ其石窟イレシカバ
戸ニ觸テ小瑕ツケリ此即伊勢ニ崇秘ノ太神也
此鏡ハ鏡作部遠祖天糠戸之造レリ已上神代
卷ノ心是鏡內

宮ノ御體也神書抄
神社考

右太神ノ勅ニヨツテ御正體八咫ノカガミヲ代々ノ
天子大殿ノ内ニ床ヲ同ジク安置シ玉ヘリ然ルニ崇
神天皇ノ御時太神トモニ住玉ハンコトヲハバカリ
玉ヒテ皇女豐鋤入姬命ヲンヘ草薙ノ御劍トトモニ
大和國笠縫邑ニ祭玉ヘリ其後又太神ノヲシヘアル
ニヨツテ國々處々ニ宮處ヲモトメ玉フナリ卅九年
壬戌ニ丹波ノ吉佐宮ニウツリ玉ヒテ此所ニ四年齋
奉レリ又四十三年丙寅ニ大和國伊豆加志本ノ宮ニ
ウツリ玉ヒテ八年又五十一年甲戌木國名草ノ宮ニ
ウツリ玉ヒテ三年五十四年丁丑吉備國名方ノ濱宮
ニウツリ玉ヒテ四年五十八年辛巳倭彌和三室峯ノ
宮ニウツリ玉ヒテ二年倭姬世記曰是時豐鋤入姬命
云吾日足ト白シキ從此倭姬命戴天照太神而行幸
六十年癸未倭國宇多秋志野宮ニウツリ玉ヒテ四年
爾時天兒通命孫八佐支刀部一名伊己
呂比命宇多大采奈仕ヘ
奉ル亦弟大荒命モ同ク仕ヘ奉ル六十四年丁亥伊賀
國隱市守ノ宮ニウツリ玉ヒテ二年六十六年己丑同
國穴穗ノ宮ニウツリ玉ヒテ四年垂仁天皇即位二年
癸巳伊勢國敢都美惠ノ宮ニウツリ玉ヒテ二年四年

命大田命ニアヒ玉ヒテ是ヲ教ヘ奉ルトモ

已上太常
國史ノ心

五十鈴川千五十鈴川同内宮大宮ト風宮トノアヒヨ
リ流レ出ル河也

○内宮ト申ス事村上天皇ノ御宇祭主公節ノ時ニ皇太
神者奥座ナルユヘニ内宮ト號シ度相ノ宮ハ外座ナ
ル故ニ外宮ト申此時ヨリ始ル也已上神名秘書ノ心又
内宮ヲ朝日宮アソビ申也

玉葉集伊勢遷宮のとしよみ侍りける歌 鎌倉右大臣
神風や朝日の宮の宮うつし

影長閑なる世にこそ有けれ

内宮ノ御山ヲ神路山トイヘリ

神道山

後九條内大臣

新後拾遺世の爲にたてし内外の宮柱

高き神路の山はうこかし

五十鈴川

匡房

新古今君か代は久しかるへし度會や

いすゝの川の流絶せて

みもすそ川

中院入道右大臣

同立歸り又もみまくのほしき哉

みもすそ川のせゝの白波

祭レル御三座 天照皇太神 相殿ノ神 左天手力
雄神 右萬幡姬神

天照皇太神 大日靈貴アヒ申奉ル也

日本紀曰伊弉諾尊伊弉册尊共生ニ日神ニ號シ大日靈
貴ニ此子光華明彩照ニ徹於六合之内ニ故ニ神喜曰吾
息雖ニ多未レ有ニ若レ此靈異之兒ニ不レ宜ニ久留ニ此國ニ
自當ニ早送ニ于天ニ而授以天上之事ニ是時天地相去
未レ遠故以ニ天柱ニ舉ニ於天上ニ也○又云伊弉諾尊曰
吾欲ニ生ニ御ノ宙之珍子ニ乃以ニ左手ニ持ニ白銅鏡ニ則
有ニ化出神ニ是謂ニ大日靈尊ニ○又云伊弉諾尊至ニ筑
紫日向小戸橋之櫛原ニ而祓除焉然後洗ニ左眼ニ因以
生神號曰ニ天照太神ニ已而伊弉諾尊勅任曰天照太
神者可ニ以治ニ高天原ニ也

又云天照太神皇孫曰片原千五百秋之瑞穗國是吾子
孫可レ王之地也宜ニ爾皇孫就而治ニ焉行矣寶祚之隆
當ニ與ニ天壤ニ無窮者矣已而且降之間先驅者還白
有ニ一神ニ居ニ天八達之衢ニ其鼻長七咫背長七尺餘當
レ言ニ七尋ニ且口尻明耀眼如ニ八咫鏡ニ而絶然似ニ赤酸
醬ニ也即遣ニ從神ニ往問時有ニ八十万神ニ皆不レ得ニ目
勝相問ニ故特勅ニ天鈿女ニ曰汝是日勝ニ於人ニ者宜ニ往

諸社一覽第二

○伊勢

昔伊勢津彦ノ神オハシテ此國ヲ領シ玉フ其名ニ

ヨリテ國ノ號トス伊勢名所記

天日別命天照太神ノ勅ヲ奉テ東ノ方ニ入ルコト
數百里其邑ニ神アリ名ニ伊勢津彦ト天日別命間
云汝ガ國ヲ天孫ニ獻ランヤ答云吾レ此國ヲモト
メテ居ル事日久シトイヒテ敢テ命ヲ聞ズ天日別
命兵ヲ發テ其神ヲ戮サントオボス其時ヲソレ伏
テモウシテ云吾國ヲ悉ニ天孫ニタマツリテ吾
敢テオラジト命云汝ガサラン時ハ何ヲ以カ驗ト
スルヤモウシテ云今夜八風ヲオコシテ海水ヲフ
ガセテ浪ニ乗テ東ニサラントス此レ吾却ヨシ也
ト日別命兵ヲ止テコレヲウカバハスルニ中夜ニ
及ブ比風吹キ浪ヲコリテ光曜コト日ノ如シ陸モ
海モアキラカニミユ遂ニ波ニ乗シテ東ニサリ
ヌ此故ニ神風伊勢常世波寄國トイフハ蓋コレヲ

云フナラン已上風土記ノ心

内宮 伊勢度會郡宇治郷五十鈴川上ニ有天照太神倭

姫命ニ誨テノ玉ハク是神風ノ伊勢ノ國ハ常世ノ浪

ノ重浪ヨスル國也傍國ノ可憐國也是國ニオラント

オモフ故ニ太神ノヲシヘノ隨ニ其祠ヲ伊勢ノ國ニ

立ツ因テ齋宮ヲ千五十鈴川上ニタツコレヲ磯宮ト

イフ則太神ノ天ヨリ降之處ナリ

已上日本紀
第六ノ心

倭姫命太

神ノ宮所ヲモトメ玉ハントテ諸國ヲメグリ玉ヘリ

垂仁天皇ノ御宇ニ伊勢ノ國ニテ一リノ老翁ニアヒ

玉ヘリ命クダンノ事ヲ語リ玉フ翁ノ云宇治ノ川上

ニ光アリ我二百八万歳コレヲ守リ居也又彼川上ニ

五十鈴天上圖像天逆戈アリ吾コ、ニ有ルコト八

萬歳マモリテコレヲ崇メ奉ル也ト皇女大ニ悦玉ヒ

テ彼翁ヲトモナヒ玉ヒテ行テ見玉フニ此寶ハ昔天

照太神天ヨリ投クダシ玉ヒシ天逆矛五十鈴トイフ

モノ也トノ玉ヘリ此時皇女船ニノリテ此ニ至リ玉

ヘルニ御裳ノヨゴレタルヲ洗玉ヘリ此故ニ御裳濯

河ト名ツケ又五十鈴ノアル所ヨリ流れ出ル河ナル

故ニ五十鈴河ト名ツク遂ニ其川上ニ宮ヲ建玉フ今

ノ内宮コレ也翁ハ猿田彥又ハ興玉命トモ一云倭姫

諸社一覽第二目錄

內宮 名所記并倭歌 神系圖 傳記

太神并相殿神 神託

七所別宮 荒祭宮 伊弉諾伊弉冊宮 月讀宮 瀧

原宮 風宮 伊雜宮 已上 鏡宮 瀧宮 礪宮

大歲宮 興玉 稻倉魂 已上 別宮 岩戸

外宮 同上

太神 内外之御事問答 託宣

相殿神

四所別宮 多賀宮 土宮 月讀宮 風宮 已上 宮

崎氏神 國御神 高神客神 大國玉姬 大間 小

俣 櫛田 星川 鈴鹿 尾上 齋宮 椿杜

太神宮祭禮并問答

裔^一已上神社考
三十四

一國一宮之御事

賀茂^上大明神 山城

平岡大明神 河内

住吉大明神 攝津

都波岐大明神 伊勢

大神社 尾張

已等乃麻知神社 遠江

三島大明神 伊豆

寒川神社 相模

洲崎大明神 安房

香取神社 下總

建部神社 近江

水無神社 飛騨

拔鋒大明神 上野

都々古和氣神社 陸奥

遠敷大明神 若狹

白山比咩神 加賀

氣多大明神 越中

渡津神社 佐渡

三輪大明神 大和

大島大明神 和泉

敢國大明神 伊賀

伊射波大明神 志摩

砥鹿大明神 三河

淺間大明神 駿河

淺間大明神 甲斐

氷川神社 武藏

玉前神社 上總

鹿島神社 常陸

南宮神社 美濃

南方刀美神社 信濃

二荒山神社 下野

大物忌神社 出羽

氣比大明神 越前

氣多大明神 能登

伊夜日子神社 越後

出雲神社 丹波

籠守神社 丹後

宇倍神社 因幡

杵築神社 出雲

由良姫神社 隱岐

中山神社 美作

伊都具島神社 安藝

住吉神社 長門

伊弉諾神社 淡路

田村社 讃岐

都佐神社 土佐

高良玉垂神社 筑後

西塞多神社 豐後

阿蘇神社 肥後

鹿兒島神社 大隅

天手長男神社 壹岐

以上

右以ニ一宮記一而書レ之但有ニ異說ニ焉猶末卷國々
之下而可ニ見合一也

出石神社 但馬又說粟鹿神社^{アハカ}

倭文神社 伯耆

物部神社 石見

伊和神社 播磨

吉備津明神^{ヒビツ} 備中備前備後同

玉祖神社 周防

日前神社 紀伊

大麻彦神社 阿波

大山祇神社 伊與

宮崎神社 筑前

宇佐宮 豐前

淀姫神社 肥前

都農神社 日向

和多都美神社 薩摩

和多都美神社 對馬

三十

問明神ト云フコト如何 答尊稱ノ詞ナリ明ノ字ハ日

月也日月ヲイタバキ申サル、神トイフ心也兼邦ノ記

日ノ神月ノ神ニモ威光ノヲトリ玉ハヌトノ尊稱也

問和幣ハ如何 答是幣ノ事幣トモ幣ヲ竹ニハサム事

ハ上古イマダ是ヲノスベキ具ナキニヨツテ竹ニハサ

ミケル也今其風ヲアラタメズトカヤ又云幣何ニテモ

神ニ奉ル物ヲ幣トモイヘリ○手向ノ幣トハ海路ニモ

陸路ヲ行ニモ其國ニイリ其里ニ入ニ在所々々浦々ニ

イタルニハ其所ノ大小ノ神祇ニ幣袋ヨリ手向ノ小幣

ヲ取出シテ奉テトアル也ヌサ袋ハ錦ノ袋也白米ト白

紙ヲ細ニキル又櫛櫛ノ葉是モ細ニ切カキマゼテ奉ル

也切ルヤウニ口傳アリ兼邦抄ノ心幣帛同

問神ニ櫛ヲ奉ルハ如何 答日本紀ニ木ノ親句句迺馳

ト有櫛ノ事也此木ハ風フケドモ葉ヲヒルガヘサズ正

直ナルニヨツテ木ノ最上トスル也一説ニハ楸ヲイフ

トモアリ

然後生ニ木神句句迺馳ニ日本紀

所定ニ二十二座ニ由

二十二社註式云人皇六十二代村上天皇治十九年康保

二乙丑年霖雨經月九天覆雲依レ之聞八月二十一日

奉ニ幣於十六社止雨

奉ニ幣於十六社止雨

案江次第云正曆已前

伊勢 石清水 賀茂上 松尾 平野 春日

大原野 大神 石上 大和 廣瀬 龍田 住吉

丹生 木船

第六十六代一條院正曆二年辛卯炎天送日萬物變色

依レ之六月廿四日祈雨奉幣時加ニ吉田廣田北野三社

被レ奉ニ官幣ニ爲ニ十九社同五年二月十七日祈年穀時

加ニ于梅宮ニ被レ奉ニ幣爲ニ二十社云々

第六十六代一條院長德二年乙未二月廿五日被レ奉ニ臨

時官幣ニ之日加ニ祇園ニ爲ニ二十一社云々

第六十九代後朱雀院長曆三年已卯八月十六日被レ奉ニ

官幣ニ之日加ニ吉ニ爲ニ廿二社云々

延喜式所載神名帳日本國中大小神社三千一百三

十二座其外石清水吉田祇園北野號ニ式外之神ニ後朱雀

院長曆三年秋八月定ニ二十二社之數ニ每歲勅ニ神祇官

以奉ニ幣帛ニ祈ニ年穀ニ除ニ禍災ニ名レ之曰ニ祭先ニ是每歲

仲春四月遣ニ幣使干群國ニ至ニ是其國司奉レ詔各祭ニ其

國之神ニ伊勢太神宮八幡宮謂ニ之宗廟ニ賀茂松尾平野

春日吉田大和龍田等謂ニ之社稷ニ又祖神之祠謂ニ之苗

ヲ寶前ト云ヒケル等ノ事ハ遙後世ニ出來タルコト也
皆佛者ノ佛前ニシテ行道スル體ヲウツシタル誤也本
說ナシ云々

二十七

問氏神氏子ナンド云フハ俗說ニカハリナキヤ 答此

事本說ナキト云々二條ノ南側ヨリ五條ノ北ガハマデ
此ニ生ル、者ヲ祇園ノ氏子トイヒ二條ノ北ガハヨリ
大原口迄御靈ノ氏子トイヒ一條ノ堀川ヨリ西ノ方ヲ
今宮ノ氏子トイヒ五條ノ南ガハヨリ九條マデ此内ニ
生ル、者ヲ稻荷ノ氏子ト號スル事更ニ本說ナキ事也
所ノ神トコソ云フベケレ山城國ノ惣社賀茂大明神ノ
御拜領也八幡ノ神人源家ノ氏神イマシマスユヘニ山
城國ハ八幡大井ノ御ハカラヒナド申事アトカタモナ
キ事也只物ヲシラザルユヘ也殊更愛宕郡ニオキテハ
賀茂大明神ノ御拜領也祇園ハ清和天皇ノ御宇貞觀年
中八幡同ク貞觀年中御垂迹賀茂ノ御事ハ上古ヨリノ
事也只皆文盲ニシテカ、ルコトヲ申アヘリアサマシ
キ事也アリヤウ大内ノ四町ノ御所ノ内ニモ鎮主トテ
ヲハシマス也其内ニテ生レタラン人ハ此所ノ神トコ
ソ崇ムベキ事ナレワケモ知ラヌ生女ナンドノ申アヘ
ルヲ上マザノ人聞召テソレヲ本說ト思召事ハアサマ

シキコト也然ハ山城國コトサラ愛宕郡ニ生ル人ハ賀
茂大明神ノ御氏子也セメテハ年ニ一度參詣ヲモ申日
三度ハ北ニ向ヒツ、祈念ヲ致スベキ事ニヤ
和歌
ノ註
已上卜部兼
邦ノ說神道

二十八

問湯立ハ如何 答云湯立庭火等ハ神ヲ祭ノ事也陽ニ

ハ陽ヲ以テス同氣相寄ルノ儀也ト思フニタガウ事ナ
シ太神岩戸ニカクレマシマシケレバ天下クラカリシ
時神ヲナグサメ出シ奉ントテ諸ノ神神樂ヲソウシ玉
フニ天鈿女ノ神篠ノ葉ヲカザシ踊ハチテ舞玉ヒシ今
ノ世ニ巫子ノ湯タデナンド沙汰スル神樂ノオコリ也
兼邦百首鈔ノ心

二十九

問注連ハ如何 答神代ニ有シ事也一五三 七五三ト

云フ事アリ是ハワラノナヒサゲ様也清淨ハ一五三穢
レタルニハ七五三ナリ左繩ノ注連ヲシルクベ繩トイ
フ也兼邦記心

天照太神聞之而曰吾比閉ニ居石窟ニ謂當ニ豐葦原中國
必爲ニ長夜ニ云何天鈿女命噓ニ樂如此ニ者乎乃以ニ御手
細開ニ磐戸ニ窺レ之時手力雄神則奉ニ承天照太神之手
引而奉レ出於ニ是中臣神忌部神界以ニ端出之繩ニ乃請曰
勿ニ復還幸ニ日本紀

神ナルガ神ノ管領ノ所ヲメグルルナリ我ハ前ヲハラ

フ神也若出ザルトキハサマノ過意ヲカウブルト

イヘリ已上略已上元亨
釋書九ノ卷ノ心

問云コマイヌハ何ノ義ゾ 答高麗犬也然ルヲ獅子ノ

形ニツクルハ非也ト云々亦上可茂ノ社コマイヌノ後

ノ板ニ同犬ヲ繪書テアリ是余社マレナリ是ヲカケノ

犬ト云フ也子細神祕也ト一年白井氏宗因ガ談也

問牛王ハイカバ 答是ハヨク一切ノ不祥ヲ除ク表爾

ト也神德ニ比スル也云々猶可レ尋

問鳥居ハ如何 答説々アリ西ノ方ニ立ツルヲ鳥居ト

鳥酉同訓也實基本紀ノ心云々神社啓蒙又居ノ字井ニ

書ク天真井ヲ表シタルトモ同心在家ノ鴨井トイフモ

横ニワタシタル木也井モ鴨モ共ニ水ヲカタドル也火

災ヲ拂フノ表爾也鳥井又此義也或ハ天ノ字ヲカタド

ルナリ所詮上古ノ神門也 啓蒙同一説云凡鳥井ハ陰陽

ノ二ツヲアラハセリ上ノカサ木ハ遙ニ以後ニヲカレ

ケルニヤ岩戸ノ昔ニハ鳥ヲヤドサン爲ニヲカレケル

カト也唐土ニモ天地壇トテツカル、事有其前ニ華表

トテ立ラレタリソレモ柱二本バカリ立テ笠木ハナシ

是陰陽ノカタチ也已上吉田兼邦和歌註ノ心

問社頭ノ千木鯉木ハ如何 答千木棟風ト書リ千木ト

訓ズルハ違木トイフ義也カツホ木モ加棟木也上古ニ

ハ皆屋ヲ茅茨ニテ葺タルユヘニ棟ヲシムル具也 啓蒙

ノ心私ニ曰左右エヤリチガヘタルヲ千木横ニアルヲ

加棟木ト云フ也千木ノ先ヲソギタルニ陰神陽神ノカ

ハリ有トカヤ子細アダノシクハ云ヒ難キカソギタ

ルユヘニ片ソギノ千木ナンド歌ニヨメリ度會ノ神主

朝棟ガ歌ニ

風雅集
カタソギノ千木内外ニカハレトモ

チカヒハ同ジ伊勢ノ神垣

又恐ナガラ住吉ノ神詠ニモ

夜ヤ寒キ衣ヤウスキカタソキノ

ユキアヒノ間ヨリ霜ヤヲクラン

問闌神ハ何ノ義ゾヤ 答門守也凡千木加棟木闌神等

ハ其神ニ應ジテ立ベキ事也中國ノ俗ノ是ヲ門客人ト

云ヘリ衣冠ノ體黒赤ノ色五位上ノ裝束ニシテ緩ヲシ

矢籠ヲ負弓矢ヲ持セタリ是誤也ト云々仇々シク難レ云

問參詣ノ者社ヲメグルハ如何 答曰一説ニ陰陽ノ二

神天浮橋ニシテ彼柱ヲメグリ玉フ遺風也トイヘドモ

此説アタラズ凡神社ニ鰐口ヲカケ宮廻リナドシ神前

人廣太之神德委見攝儒釋二教一

桓武天皇ハ人皇五十代ノ天子^{四十九代光仁帝ノ第一ノ御子}

高岳親王ハ平城天皇第四ノ皇子貞觀四年ニ入唐シ

玉ヘリ

舍人親王ハ四十代天武帝第四ノ皇子神道再興之大

祖日本紀之作者也號崇道盡敬天皇^{已上倭論語}

問根本神ノ御正體ハ何ヲスルゾヤ 答鏡也前ニイフ

ガ如ク神トハ鏡ノ畧言也明鏡ハ萬像ヲウツシテ一物

ヲタクハエズシカモ正直ノ德ヲソナエ又清クイサギ

ヨキ事神ノ御心ニヒトシ故ニ爾イフナリ又上ト云フ

意也 タツトブノ儀也神代講卷述抄ノ心

問繪馬ハ如何 答馬ハ陽獸也此故ニ春ノハジメニ血

ヲトル也^{馬經大}神又陽性ニテマシマスユヘニ奉ルニ

由アル也神馬トテ社ニツナグモ此謂也然トモ馬ヲ献

ズルニ力タラザル者ハ繪ニ書テ奉ル也又歌仙ナンド

ヲ奉ハ和歌ハ是神國ノ風儀ナレバ道理有也然ルヲ當

世サマノ異様ナル繪ヲ書テ奉ルハ更ニ敬ノ儀ニア

ラズイカデ納受アラシヤ又佛前ニ繪馬ヲカクルハ是

ヲウラヤミタルモノ也因ニ云今繪馬等ノ書付ニ施主

某トスル事誤成ベシ施主ハ佛法施行ノ義也願主ト有

タキ事也又因ニ云フ昔天王寺ニ道公ト云フ僧アリ或
時熊野ノ社ニ一夏コモリケルガ夏ヲハリヌレバカヘ
ル折節暮ニ及テ或一村ヲ通リケルニ更ニ人家モナケ
レバ其所ノ杜ノ下ニテ夜ヲ明サント思ヒソコニ臥ケ
リ夜半ノ比騎馬ノ者三十人余來レリ杜ニ向ヒテ翁ア
リヤト云フ翁ノ聲ニテイカニモアリトイヘリ彼者何
トテ進ザルゾトイヘリ翁云馬ノ足損ジ候ユヘ乗侍事
不^レ叶我又年老候ヘバ歩ニテ行事叶ヒ難候トイヘリ
此ヲ聞テ皆々トヨリケリ夜明ケレバ道公不思議ニテ
杜ノ下ヲ見メクリケルニチイサキ社アリ其中ヲミレ
バフルキ像有所々クチソンジタリ前ニチイサキ繪馬
アリケルガ前足ノ所板ワレテアリ道公不思議シテ糸
ヲ以テネンゴロニトデツナギテ懸ケリイカナル事ニ
ヤアルラン試ント思ヒ又其夜モ其ニヤドリケルニ又
夜半ノ比騎馬ノ者大勢來レリ又翁ヲ呼ビケレバ翁此
度ハ馬ニ乘リテ出人々ノ前ニス、ンデイツクトモナ
ク行ケリ曉方ニ彼翁カヘレリ道公ニ向テ云フヤウ馬
ノ足ソンジタリシヲ治シ玉ハルユヘニイトハヤク乗
出テ候トテサマノ^ノ響ヲナシケリ公問ケルハアノ
騎馬ノ大勢ハイカナル人ゾヤ翁ノ云フヤウアレハ疫

テ件ノ御願寺ヲ企テ玉フ也東大寺是也此後七十年ノ後眞言密教日本ニワタレリ去ル天平年中ノ御示現ニカナヘリ金胎兩部ノ大日盧舍那佛ハ一切諸佛并ノ惣體也舍那ノ生身ハ日月ノ兩神也尊形スデニ明鏡也故ニ顯密ノ二義ヲマフケ本跡ノ二門ヲタテ、宮社ノ縁ニシタガヒテ相應ノ諸尊ヲモツテ本地垂迹ノ差別ヲ稱スル也顯密ノ二義トハ一ツニハ顯露ノ顯佛ヲモツテ本地トシ佛ヲ以テ垂迹トス一ツニハ隱幽ノ密神ヲ以テ本地トシ佛ヲ以テ垂迹トス顯露ノ顯トハ淺畧ノ義也隱幽ノ密トハ深祕ノ義也今佛ヲ以テ本地トスルハコレ淺畧之一儀也

十四

問顯密ノ二義ハ敎家ノ名目ニヨルカ元來道ニ是アリヤ 答顯密ノ分別ハ敎家ノ心ニ同名目ノ言ハ神書ノ文ニヨレリ日本紀神代卷ノ下曰吾所治顯露事者皇孫當レ治吾將ニ退治ニ幽事即躬被ニ瑞之八坂瓊而長隱矣已上 是則大已貴尊ノ神語三輪ノ大明神是也顯露ノ事ハ密ヲ具シ隱幽ノ事モ亦顯ヲ具ス

問密位ノ名目ハ幾クノ品有ヤ 答云相祕決義云眞言

ハ祕密也神道ハ隱密也祕密超過之重位アリ故ニ隱密トイフ已上 所謂神道ハ四重四位ノ密意ヲ設ケ機ノ淺

深ヲマモリコ、ロザシノ同異ヲハカリ其人ヲ得テ此法ヲサヅク其器ニアラザル者ハ淺畧ノ分際タリトイヘドモタヤスク授與スベカラズ已上略已上神道妙法要集ノ心

十六

○桓武天皇勅ニ西天ノ法ヲ吾國ニヲキテ第一ノ臣下トシ震旦ノ儒道ヲ吾國ニヲキテ第二ノ臣下トシ神明ノ左右ヲハカラセ神道ノ潤色トスルモノ也故ニ此國ハ日輪ノ國ニシテ震旦ヲ月輪ノ國トシ天竺ヲ星ノ國トス良由アル哉倭論語

十七

高岳親王曰異朝ノ法ヲ見テ吾神國ノ掟ヲヨクマモルモノハ是吾國ノ寶也外國ノ法ヲ見テ吾神國ノ掟ヲオロソカニミン者ハ國賊也同上

十八

舍人親王云今ノ世ノ貴トナク賤トナク吾神明ノ詔ヲステ、外ノ敎ヲ專ニス親ヲステ、他人ノ親ヲアヒスルガゴトシ天ナシ是ヲヨシトセンヤ地何ゾ是好マン親ヲ親トシテ後子ヲ思ヒ子ヲ思ヒテ後外ノ親ヲ親トセンアハレナル哉ナレタルハナレデ捨テメヅラシキニ隨フ事也ユヘニ世ノ人ノナキ事ヲ天ノミオヤノ掟ヲ守ベシナベテノ人ノ思ヒト思ヒコ、ロヨカラストイフ事有ベカラズ同上

右兼俱ハ吉田兼延十七世兼名男從三位神祇大副此

是ヲ前後ノ散齋トイフ則外清淨ノ行儀也致齋トハ神事正當ノ日格式ノゴトク六色ノ禁法ヲマモリ一心不亂ニシテ神事ニシタガフヲイフ也則内清淨ノ行儀是ナリ齋場齋庭トハ内清淨ノ道場齋庭ハ外清淨ノ道場也

十二

問神國ニオキテ佛法ヲアガムルハ何レノ時ゾヤ 答吾神國開闢以來萬々歳ノ後釋尊天竺ニイヅイハンヤ佛法日本ニキタルハ猶末代ノコト也人皇三十代欽明ノ御時佛法來レリ佛ノ滅後千五百歳也漢土ニツタヘテ後四百餘年ヲヘテ日本ニ來レリサレドモ信ズル者ナシ三十四代推古帝ノ御守聖德太子奏聞シ玉フヤウ吾日本ハ種子ヲ生ジ震旦ハ枝葉ヲ現ジ天竺ハ花實ヲヒラクカルガユヘニ佛教ハ萬法ノ花實タリ儒教ハ萬法ノ枝葉タリ神道ハ萬法ノ根本タリ彼二教ハミナコレ神道ノ分化也枝葉花實ヲモツテ其根元ヲアラハスハ花ヲヂテ根ニカヘルガゴトシ故ニ今此佛法東漸ス吾國三國ノ根本タルコトヲアカサン爲ニ尠シヨリ佛法コ、ニ流布セリ云々神武帝ヨリ此方千二百余歳ヲヘテ其中間ニ二法ナシ唯神國ノ根本ヲ守リ神明ノ本誓ヲアガム故ニ神事ノトキ佛經念誦等ヲ去ル此義

也

十三

問神明ノ本誓ヲモツハラニシ神事ケツサイニシテ佛經等ヲ忌トイハバ何ゾ諸神エ佛并等ヲモツテ本地トスルヤ 答聖武天皇ノ御宇伽藍建立ノ御子ガヒ有リサレドモ神國ノ遺法ヲオソレ玉ヒテ行基并ニ仰セテ其効驗ヲウカバヒ玉ヘリ行基則太神宮ニ參籠申テコレヲ祈念セリ神告テノ玉ハク實相眞如ノ日輪ハ生死長夜ノヤミヲテラシ本有常住ノ月輪ハ無明ボンノフノ雲ヲハラフ文已上此文句面ノコトバ、佛法ニ似タリトイヘドモ句中ノ心ハ神代ノムカシ天ノ岩戸ヲ開テ長夜ノヤミヲテラシ玉ヒ月神八重ノ雲ヲワケテ此蘆原中國ニクダリ玉フコレ則無明煩惱ノ雲ヲハラフニアラズヤ然ルニ佛像伽藍建立ノゼヒ其御ツゲマダ分明ナラズ故ニ天平十四年十一月右大臣橘諸兄公ニオホセテ勅使トシテ御願寺建立ノ事祈請アル也諸兄公歸參ノ後同月十五日ノ夜御示現アリ天皇ノ御前ニ玉女アツテ光ヲハナシテノ玉フヤウ當朝神國尤神明ヲ仰奉玉フベシソレ日輪ハ大日如來也本地盧舍那佛也衆生ハ此コトハリヲサトリテマサニ佛法ニ歸依スベシトノ玉ヘリ夢サメ玉ヒテ後彌堅ク道心シ玉ヒヌ依

繪ニ書テ參詣人ノ散錢ヲムサブルモミグルシ、是ハ
イカバ 答是ハ亂世ノ比世ヲワタルベキタヨリナキ

マ、ニ何ノ社カノ社ナド、云ヒテ不案内ノ參詣者ニ
イヒキカセタル不作法今モクセトナリテ泰平ノ御代
ニテイヨ／＼有也皆ナゲ、ドモ改ムベキ人ノトカク
沙汰セヌ上ハ傍人は非ナクテ年月ノビ行也サテ又末
社ヲ四十末社八十末社ナンドイフモ山伏ナドノ祭文
トヤランニアラス事ヲイフヨリ興タリ神書古記ヲ考
ルニ外宮ノ末社ハ内宮ヨリ員數モ多キ也已上神道
或問ノ心

間然レドモ今ノ宮ノメグリ外宮四十末社内宮八十末
社トタテタルハ何タル社ゾヤ 答是モ世間流布ノ説
ヲ御キ、及アリテ御再興有ベキトノ時御問ニソムキ
ガタキ故ニ深キカンガエモナクテ其比ノ者申上タル
事也諸末社ノ社地ヲアラタメテ御再興マデニ及パサ
ルモヲシキ事也外宮ニモ宮ノメグリノ神スベテ貳百
余前ト儀式帳ニモ侍リ但其神名ハ何トモナケレバ末
社ノ事ヤラン何レノ所ニ鎮坐ヤランハ知リ侍ラズ古
記神書等考ルニ八十末社四十末社ナド、ハ更ニ不勘
ノ義也其上末社ハ大方宮中ニハ社地ナクテ他領ニア
マタ有今ノ廻ノ社二百余前ノ神力然レドモ末社ノ名

ヲ一々ニ付タレバ諸末社ノ遙拜所トイフベキカ但遙
拜所ニハ寶殿無事ト承及タリ同上

以上唯一神道ノ心

十
○ト部兼俱曰夫吾神明ハ上ハ非想非々想下界金輪ニ
至リテ御身ヲ分テモロ／＼ヲミチビキ玉ヲ天竺國ニ
シテハ獨尊ト化生シ三世ノ業ヲ説テ一切ノ衆生ニ因
果アル事ヲシラシメ慈悲ノ門ヲヒラケリ震旦ニシテ
ハ儒道ヲヒロメテ仁義ノ五ヲシラシメ四州ノ内イタ
リ玉ハザル所ナシ御鎮坐ハ此國也故ニ四方ノ國ニシ
テヒロメヲシエ玉ヘル其法皆々モトニカヘルノ理ニ
シテ今日本ニワタレリ神道佛道儒道是一神ノミノリ
也然ドモ御鎮坐ノ此國ニオキテハタバチニ實正ノ言
ヲタガヘスレバ出家儒家ノモノ神前ニハバカルハ元
ハ元ノ心ナルユヘ也今世ノ神道ヲ學ブモノ此コトハ
リニウトクシテ一向ニ佛道ノ教ヲ嫌ヘリ是吾神明
廣大無邊ナル事ヲクハシク知ラザル所ヨリヲコレ

リ倭論語

十一
問内清淨外清淨ハイカナル事ゾヤ 答此義ニツイテ
二ツ有一ニハ散齋致齋二ツニハ齋場齋庭兩壇アリ散
齋トハ神事ノ當日ヲ定テ伴ノ前後ノ間精進潔齋スル

ク日本ニ生ラウケタル事ヲワスレ儒書佛書ニシミ入タルモノ也心ヲ虛ニシテ明鏡止水ノゴトクニシテ讀書ハスベシ日本紀ナドニハ一言モ吾國ヲオトシメタル詞ナシ古ノ學者ハ唐土ヲ中花トモイハズ日本國ヲバ豐蘆原中國トイフ也 天照太神ハ日本ノ神聖ニテマシマセバ孔子ノ道トテモ釋迦ノ道トテモ聖人ノ道ナルヲイカデ嫌玉フベキナレトモ佛家ヨリハ兩部習合トテ伊勢兩宮ハ兩部ノ大日ニテマシマシ彌陀也釋迦也ナド、云フ神道ヲタツトプヤウニテ神道ヲ盜ム也儒者ハ太神宮ハ泰伯ニテ内宮ニ三讓ト云フ額アリタルナド、附會ノ說ヲイヒチラスハ淺マシキ事ナリ佛道ハ佛道儒道ハ儒道ニテ少モ吾國ノ神道ニ混雜セズ然モ日本ノ神道ヲ根本トシテ行フトキハ佛道モ儒道モ萬民ノ心ヲヤハラゲテ道理ヲ知リヨキ神道ノ羽翼也 已上神道或問ノ心

六 問倭姬命ノ屏ニ佛法息_一ヨトノ託宣ヲ知ナガラ佛經モ神書ノ羽翼トハイカ_レ 答倭姬命ノ御託宣ハ佛法ヲ根本ト思テ神道ノ害ヲナシテ吾國風ヲ變ズルユヘナルベシ御託宣以後ニ按ノゴトク兩部習合ノ神道オコリテ太神宮ハ大日ニテマシマスナド、附會ノ說ヲ

申ヲ未然ニ御託宣有難コトナリ此御託宣無クハ兩太神宮ハ今佛家ノハカラヒナルベキコト必定也然ルトテ佛法ヲ邪法トハイヒガタシ神道ノ本意ヲ知りタル時ハ佛經ノミナラズ雜書迄モ神道ノ羽翼ト成事也故ニ僧尼ノ參詣モヒタスラニ禁ゼズシテ外院迄ハユルス也是ハ如法ノ比丘ノ事ニテ兩部習合ノ神道者ノ事ニハアラズ習合ハ混雜シテ神道ヲ盜ミタル說也此故ニ神道者ナガラ以ノ外吾國ノ神道ノ害トナレバ倭姬ノ遺命ニ任セテ重クキンゼイスベキ事ナリ同上

七 問外宮ニハ尤僧尼ハ外院ヨリ内エ入ザレトモ内宮ニテ御供ヲ上ル僧尼ハ却テ凡人ノ拜所ヨリ奥ノ瑞籬ノ御門ノ外玉串御門ノ内迄入ル、ハ何タル事ゾヤ内外宮ハ同事ナルベギニ外宮バカリニテ堅ク僧尼ヲイミ玉フモ如何 答内宮ニモ僧尼ノ拜所ハ定リテ五十鈴川ノ外ニ有然ルヲ瑞籬ノ御門ノホトリマデ入ル、ハ無作法ノ義ナレドモ末代ニテ法式モヤブレタル也斷髮ノ人モ此御門ノホトリ迄入事モ近代ノ例也是神役人ノワタクシヨリナスコトナレドモ誰アラタムル事モナキユヘニ如レ此也同上

八 問云兩太神宮ノメグリニ辨才天大黑三寶荒神ナドヲ

タルトミエタレバ漢土ニ佛法ノワタラヌ前日本ト漢土ト通ゼシコト明也其後後漢明帝ノトキ漢土ニ佛法ヲタリタレバ日本エコソ渡ネ共其名キコエタル事モアラン已上陽復記

問云佛法ヲイミ玉フハ惡キ法ナルカ答釋迦ハ天竺ノ聖人ニテマシマスト聞ケバ尊キ法成ベシ但命ハ其法ノ源ヲ忌玉フヤラン其流ヲ忌玉フヤラン知ガタシ中世ヨリ神道ノ名ヲ借テ兩部習合ナド、シ神明ヲカスメテ吾佛トスル事ハ佛法ノ流ノツイヘナレバ其ヲ未然ニ考ミ玉フ事モ有ベシ僧尼ハ佛法ヲ行ジテ有テヨカシ神社エサヘ入交テ社僧ナドニナレヨト佛教ニモ侍ルニヤイトアヤシ同上

五
問今神社ノ祝等神道護摩神道加持ト云フ事ヲスル也カヤウノ事神道ニ有ル事ニヤ答是ト部家ヨリ云ヒ出シタル事也先護摩ト云フハ梵語加持トイフモ佛言也亂世ノミギリヨリ神祇官モ有力無カノヤウニナリ吉田ノ上ノ山エ八神殿ヲカマエケルヨリ中臣モ齋部モ神祇官ナガラ各別ノヤウニ成行マ、ト部氏一家ヲ立テ天台眞言ノ中ニテシタシキ出家ヲカタラヒ吾神道ヲ傳受スルナド、テ彼家ノ護摩加持ノ修シ様ヲ

カタハシ傳聞テト部家ニ一流ヲ立テ神道護摩神道加持ト云フ事アリトノ、シルマ、ニ諸國神社ノ祝等傳受シテ世ニ流布スカヤウノ僞ナラズトモ上一人ヨリ下萬民マデ行ヒ玉ヘトノ事ニテハナシ神ヲ祭ル法ナドハ禰宜神主ノスル事ニテ神道ト云フハ上一人ヨリ下萬民迄行フ旦暮ノ道也天神地祇ヨリ相傳ノ中極ノ道ヲ根トシテ行フトキハ日用ノ間神道ナラズト云フ事ナシサシテ是ハ神道也ト一々指南ニ及ベキ道ニハアラズ心ヲ虛ニシテ自得シ玉フベシ神道ハ吾國ノ道也シカルヲ釋迦ノ法ヲ聞タルハ天竺ヲ尊ビ孔子ノ道ヲマナフハ震旦ヲタツトビテ和國ヲバ粟散國ゾ夷狄ゾトテイヤシム事今時ノ佛者儒者ノ心也佛者トテモ儒者トテモ日本ニ生ラウケタル輩ハ日本ノ道ヲ根本トシテ絶ハテタル神道ヲモ與シ天竺ヨリモ震旦ヨリモ吾國ノタツトキ事ヲ心根トシテ釋迦ノ教ニテモ孔子ノ教ニテモ學ブハ日本ノ益有事ナレド儒者ハ震旦ヲ中華トイフテ日本國ヲバ夷狄トテイヤシム中華ト云フ事ハ震旦ノ人ノ詞ニハ似合タリ和國ノ人ヨリハ云フマジキ詞也佛家ヨリハ日本ヲ粟散國也トイヒ天竺ヲ佛國ト尊フ也是等ハ神道ヲ知ズ忠厚ノ心ナ

ヲ伊弉諾尊伊弉冊尊ト申ス是ハマサシク陰陽ト二ツ
ニ分レテ造化ノ元ト成玉フト云々

國常立尊ハ明理本源ノ神也國ハ天地ノ儀常ハ不易ノ

理立ハ卓然タルノ儀也神代講
述抄又云人代末世マデモ此

尊ハヲハシマス也スベテ天地山海草木人物器財マデ

モ一物モ此尊ノ乗ウツリオハシマサズトイフ事ナシ

此理ヲモツテ常立尊ト申也トコシナヘニ立玉フ故ニ

末世人代迄モ日月モ地ニ落ス四時モ時ヲタガエズ人

物モ斷絶セヌハ此神德ニアラズヤトコシナヘニ立ト

云フ事はゾ神道ノ根本ナル直指抄
ノ心又伊勢神宮本記ニ

ハ形如ニ葦牙ニ其中神人化生名號ニ天御中主神トイヘ

リ國常立同体異名ノ習ヒアリ中常ノ道ヲ神道ト云フ

也云々天御中主尊ト申奉ルハ虛而有靈一而無形

神主飛
鳥記是神ノ理ヲ述ル言也一而無形ハ何レノモノニ

カ應ゼズト云フ事ノアランヤ一心虛ニシテ靈々タル

モノ其ナカニ照ストキハ心鏡ノゴトシ夫神ト云フハ

鏡トイフ畧言神明ノ理ヲ鏡ニタトヘタル也其ゴトク

明了ナル時ハ吾心則御中主尊天照太神ニ同カラン此

ヲ以テ心ハ神明ノ舍也トイヘリ心正直ナルトキハ神

我一體ニシテ心ニ神アリ邪曲ニシテ人欲ニオモムク

トキハ舍ニ神ナクシテ巳ト神トヘダ、ル事天地ト黒
白トニ等シ一致ナル時ハ諸願圓滿シヘダ、ルトキハ

禍災現ズル也サレバ此天御中主ノ中極ノ道ヲ神道ト

イヘハ中道ヲ修行シ正直ノ御教ヲ信シ任ニ本心又從

レ正以爲清淨隨惡以爲不淨トノ神託ヲ信ジテ起

居動靜ニ心ノチリヲサリ理ノ本元ニタガハズ行事也

是真ノ神道ナリ兩部習合トイフモノハシキテ佛法ト

合セタル者也日本ニ佛法渡ヌ前ニ兩太神宮ハ御鎮座

也是ヲ以テ知ベシ神ノ本地佛也トハ沙汰モナキ事也

末世ニ成テ所々ノ社ノ風皆習合トナレリ然レトモ伊

勢ニノミ元本ノ神道也是ニサヘ今ハ替リタル事アル

也倭姫命ノ屏ニ佛法息ニ再ニ拜神祇セヨトノ玉フ遺命

ヲ守テ二所太神宮ニハ今ニ佛語ヲ禁ジテ塔ヲモアラ

ハギナンドイヒ僧尼ヲ外院ノ外エハ入ザル也已上神
道或問

陽復記
ノ心

問云倭姫命ノ詔ニ任セテ佛法ノ息ライムト有是ハ雄

畧帝ノ御宇也欽明帝ノ御時ワタリシ佛法ヲ數十年前

ニイメヨトノ禁令信シガタシ答曰日本紀ニハ神功

皇后應神天皇ノ御宇ニ三韓ト始テ通ジタルトミユコ

トサラ神宮ノ古記ニハ開化天皇ノ御宇ニ異國ト通ジ

諸社一覽第一

神道大意問答

一 問云神國ニ生レタル者神道ヲバ不レ知シテ叶ハズサ
レドモサマ^ハノ流儀アリテ一樣ナラズソモ如何バ
カリノ流儀有リヤ 答云サレバ此流儀トイフ事末世
ノマヨヒ邪路ニ落入根元是也夫神道ハ二モ無ク三モ
ナク唯一大虛ノ中ヨリ發起シタル道ナレバ何ヨリテ
品分カルベキ子細ナキモノヲ皆是後世神道衰微ニ乘
テコトヲタクムシワザ也先其分レタル品ヲイヘバ兩
部習合ノ神道ナリ此中ニ凡四ツ有リ聖德太子ノ流吉
田卜部ノ流弘法流三輪流是ハ鏡圓法師元祖也已上是
也此等ノ神道トイフハ其理ヲノブルニ神ノ垂跡ハ神
ナレトモ本地ハ佛ナリト立ル也縱ハ京祇園ノ本社ハ
素盞島尊本地ハ藥師トイフガ如シ末世トシテ萬變モ
テユク中ニ第一ノスイビ悲ノ至リテ深キハ神道ノ兩
部習合タル事也根元ノ神道ハ唯一ト號シテ獨立不合
ノ神道也元初一理ノ神道ニ唯一トイフベキ名モ有ベ
キ事ナラ子トモ兩部習合出來テ世ニモテケウズルニ

對シテ暫ク立タル名也

二 問唯一ニシテ神ノ本地ヲ立ザル神道ハ如何ニ 答フ
是ヲコトハルニハ先吾豐葦原國ノオコリヲ云フベシ
伏シテ尋ルニ大虛ノ中ニ一ツノモノ有化シテ神トナ
ル國常立尊ト申奉ル也是神國神ノ始也神皇正統記云
夫天地未^レ分シトキ渾沌トシテ圓カレル事雞子ノ如
シクハモリテ牙ヲ含リ是陰陽ノ元初未分ノ一氣也其
氣初テ分レテ清クアキラカナルハタナビイテ天トナ
リ重ク濁レルハツバイテ地トナル其中ニ一物ナリ出
タル形葦牙ノ如シ即化シテ神トナリヌ國常立尊ト申
ス又天御中主神トモ號シ奉ル此神ニ水火木金土ノ五
行ノ德マシマス先水德ノ神ニアラハレ玉フヲ國狹槌
尊ト云フ次ニ火德ノ神ヲ豐斟^{フチ}淳尊ト云フ天ノ道獨ナ
スユヘニ純男ニテマス次ニ木德ノ神ヲ湍土煮尊沙土
煮尊ト云フ次ニ金德ノ神ヲ大戸之道尊大苦邊尊ト云
フ次ニ土德ノ神ヲ面足尊惶根尊ト云フ天地ノ道相交
リテ各陰陽ノ形アリ然トモ其フルマヒナシトイヘリ
此諸神實ハ國常立ノ一神ニテマシマス成ヘシ五行ノ
德アラハレ玉フ是ヲ六代トモカゾフル也二世三世ノ
次第ヲ立ベキニハアラザルニヤ次ニ化生シ玉ヘル神

諸社一覽第一

神道大意問答

目錄

神道流儀

倭姫命詔

神道護摩並加持ハ根本神道ニ無事

神道ニテ佛道ヲ列事 伊勢兩宮ニ僧尼ヲ忌事

兩大神宮ノ廻ニ佛像ヲ置誤

同四十末社八十末社ノ事以上唯一神道

吉田兼俱神道之辨 内外清淨之事

日本ニ佛法ヲ崇始 諸神之本地佛用不審

神道顯密之事 同密位

桓武天皇勅定 高岳親王辨

舍人親王辨 根本神體ノ事

繪馬ヲ献ズル縁付リ天王寺道公ガ事

コマイヌノ事 牛王ノ事

鳥居ノ事 千木鯉木ノ事

關神之事 參詣者廻レ社事

氏神氏子

注連

和幣

二十二社式内式外之神

諸國一宮神無月并十一月火燒ノ事出雲國佐隨ノ社ノシタニミエタリ

以上一之卷目錄終

凡例

○這書ノ述ル所以童蒙族ニ神道ノ大意ヲ知ラセ淺キヨリ深キニ入ン爲也

○凡神道ニ唯一神道ト兩部習合トイフ者ト大槩兩説アリ今此書ニモ始ニ唯一ノ説次ニ習合ノ説ヲ双記ス者也

湯立

明神

神

本朝諸社一覽叙

夫我秋津洲者神國也六十州裏無一州而不神之有而生其土者其諸社垂迹之事不可不知焉而雖有舊記其事之廣大豈容易得知焉於是乎近代便其事之書記播世者不少焉尤憾其書或太繁或太簡而無折衷也比屬坂內直賴氏考索舊記抄出衆書錄爲若干卷名曰本朝諸社一覽其意欲便幼學之輩授而鋟梓功成之後介于書肆某索序於余余讀之則其繁簡最得宜匪是沈思研求之勤曷能至此余與直賴雖無半識之舊其功不可不以不嘉之率叙數言而不辭也唯懼余非其人貞享乙丑端正之夕若耶溪後學桑村孚休涉毫于洛陽客舍

本書脫漏之語考之附于後

○神祇本源曰天口事書曰二所大神宮左右東西寶殿前後不_レ同儀一內宮者陰神外宮陽神坐也是春夏象陽長_二萬物於前_一秋冬陰藏_二萬物於後_一所謂天地之位聖人之法在_レ前在_レ後象_二四時_一治_二天下_一以_二事理_一此其儀式也

○千木片揆者陰陽之表也

○堅魚木者星象坐其數十九者大日靈尊照_二十方_一撰也九者五大成貞尊光濟_二八洲_一群生光明表也八者八心德明表也七者七星頂坐守護願也六者六根明也五者中也四者四德表三者天地人三才表也

○一說云十者十地之位表也九者極上之位表也天四德地五行爲_レ九也九者五方羅_二九洲_一因_レ九之故爲_二九々八十一_一數極也

○同九曰天口事書曰八坂瓊戈形天地開闢始同躰坐也以_二一基_一分_二天地_一而爲_二內外_一心御柱也故大人者與_二天地_一合_二其德_一而利_二萬物_一者也

○同八曰天口事書曰凡經緯法者君臣上下天地父母大宗乃成_レ之神近悟諸不_レ遠也天照珍圖者心神華臺之中天地尊圖鏡坐_二豐受珍圖_一者天地父母二儀之中五

大尊光照金鏡坐_二俗常_一以_二金鏡_一喻_二明道_一也

天神皇珍圖狀者天之位象_二四時之行_一治_二天下_一四時之行者寒有_レ星聖人之法故有_レ文有_レ武天地之位有_レ前有_レ後有_レ左有_レ右聖人之法以建_二經緯_一春主_二於左_一秋殺_二於右_一夏表_二於前_一冬藏_二於後_一生長之事文也收藏之事武也故文事在_レ左武事在_レ右元々集八同之

○元々集五曰天口事書曰皇天盟宣久天皇如_二□□□

利_二萬民_一止言壽比皇天之受命也不_レ可_二以_一智爭不_レ可_二以_一力競_二焉_一印度支那王種不_レ常至_レ膺_二瓊錄_一者皆承_二於天_一況於_下繼_二日神之體_一居_中天皇之尊哉傳_二三種寶器_一守_二八洲_一之神靈此非_二少緣_一也

享保庚戌十有一月八日 備郡謹書寫之

寬保癸亥閏四月廿三日 伊橋藤七郎謹寫之

明和三丙戌夏卯月十有五日 宮內兵庫謹寫之

皇御宇之撰也以相殿

之畢

寶龜三年壬子四月七日

度會神主五月麻呂

承平二年壬辰八月五日書寫之畢

大神宮禰宜荒木田行眞

文治四年戊申正月十七日書寫之

高 倫 判

弘安三年六月廿日書寫之

度會神主行忠 判

石凝姥神所鑄造之御鏡也

活目入彥五十狹茅天皇御宇二十五年丙辰春三月丁亥

朔戊申爰倭姫命天皇第四皇女母皇后日葉酢媛命也丹波道主貴女或云稚日本根子太日々天皇手箱中有物如小蟲蠶見之則人貌也天皇怪令養之己而美女也能知未然所謂倭姫命也帝其所從問答曰我將事神令祭三種神器壽蓋五百歲餘倭姫命奏曰

所謂齋宮此其緣也

求鎮坐太神之處訪神風之地

尋三重浪之地天隨大神之教天其祠立伊勢國度會

宇治五十鈴之河上始天降地以天逆矛爲宮處之

璽一也

夫天御中主尊無上而獨能化故曰天帝之神亦

號三天宗廟到天下則以即一無相之寶鏡崇神

體一是天鏡尊居月殿所鑄造三面之內第一之御鏡

祭止由氣宮祭也大泊瀨稚武天皇御宇二十一年丁巳

冬十月天照大神乃依御託宣以止由氣皇大神於從

丹波國比沼之眞名井原志天奉迎度會之山田原止

由氣宮是也

凡祭神之禮者散齋致齋內外清淨是也其致齋

前後兼爲散齋其心無汚念爲內清淨以二六色之

禁法爲外清淨亦其品非一以二正直爲二清淨或以

一心定準爲二清淨或以二起生出死爲二清淨專

致其精明之德須不分三一法共食二水一軌二匡其

心令至神國之道若亦神人心外好二別諸一而從二不

淨實報則不得踐神地○按胡連集引用此文下有上字不許飲二神

地水而五千大鬼常二大賊一

夫大日本者大日本訓之曰於保耶麻止是我朝之總名也神日本伊波禮比古天皇自筑紫而東征之後建都於橿原經三

於帝宅故以日本爲二幾內一國一大八洲也神語磯馭廬島自滴瀝之

潮凝結二神名也一古語波津國亦千五百秋瑞穗國此國之

述國目以爲二神名也一亦食國食國猶言毛國五穀是國上之毛也故曰毛

也俗曰葦原中國是皆自然之名也

凡伊勢兩宮則爲二無上之宗靈而貴無二故其造一宮

之制者則柱高太板則廣厚禮是皇天之昌運國家之洪啓

古止波當依二神器之大造一奈利即移二日之少宮一寶基

造伊勢兩宮焉

心御柱一名忌柱一名天御量柱是則伊弉諾伊弉冊尊御

量事化原陰陽變通本基諸神化生心臺也

棟梁形皇大神者日天圖形神代祕書十二卷之內最極祕

書也

廣糠天皇御宇四年壬辰三月十八日 度會大神主調書寫之

此書一卷者相傳 屋姬天皇御宇之撰也以相傳一見

天口事書

天地未開闢陰陽未分五德未行四時未定之前混沌如鳥卵溟滓而含牙之神白三日常立尊其已發之始大海之中有二物浮形如葦牙一其中神人化生此時未備故用神號三天御中主神

神語曰天讓日國讓月皇神也高天原初出之故天御義理舉之八重雲

以天於其物便化為國常立尊三名是一神而天地人坐神也

三才又備焉無名無狀天地開闢始含精氣而應化之元神故高天原爾居之天視天下二式時候授諸天子

照臨天地之間而以一水之德利萬品之命故亦名曰御饌津神也神語曰御義理也古語曰天津御氣國津

御氣亦曰狹霧是水德易形因以天氣下降地氣上騰天地和合草木萌動惟水德矣當神寶日出之時御饌津神

天御中主尊與天照大日靈貴皇親神漏岐天照大神天神神漏美天御中主尊之長靈男命於以皇御孫之命乎天津高御

座爾坐天天天津璽乃劍鏡乎捧持賜天言壽宜古語曰天神字珍像圖之御子皇御孫之尊若天津瓊玉戈久曲妙爾天

津日嗣乎萬千秋乃長秋神嘗其此緣也大八洲乃豐葦原瑞穗國古

豐穗者安國止古語曰浦平久知食止言壽寄奉利賜岐亦皇

天盟宣久天皇如八坂瓊之曲玉久以二曲妙一天治御

宇之政且如真經津鏡久仁以二分明天看二行山川海

原支即提此靈劍天平天下天利二萬民止言壽比

於茲皇孫之命天磐座押放天之八重雲乎伊豆之知別爾

知別天築紫日向高千穗穗觸之峰爾天降坐支奴是猿田彥

神奉導索利吾當到伊勢乃狹長田五十鈴之河上止

以三天逆矛一且天逆矛訓之云為宮處乃璽天逆矛名八

坂瓊乃戈或云皇親尊天降居之時平鬼神治天下靈異之物有

天衣白銅鏡之類也三百六十種之神寶所謂天之八坂瓊之曲玉玉裳比禮戈

瓊玉戈為最長而立國御量柱也

是天地開闢之始浮高

天海原之神寶也神語曰破者古語天逆矛天逆太刀俗

曰魔返鉞麻返鉞訓之云亦名三天乃登保古此名天御

璽又曰天御量柱者天瓊矛同體坐也天照大神天降坐

以前從上天志天投三降給比志天之逆太刀逆鉞金鈴等五

十鈴河上以來常建五色之雲有金玉之聲幾照輝如日月仍大田命惟小緣之物爾波不坐止天崇祭之天照大皇神家德倭三天地則稱之義也皇日本國大廟坐是皇帝之宗祖萬姓之大元也以三天地八尊鏡假模御靈是

有_二恩旨_一開_二文軌_一爲_二一慮_一跪_二二宮之砂廷_一答
祈_二百王之地_一久照_二本根之子葉_一扇_二孫枝之遺風_一
而已

一本

正平二十四年八月十三日內宮參籠之時書寫畢

元祿十二年己卯春以_二竹下松立青山翁之本_一書_二
寫之_一焉青山翁者出雲地信直丈之門人也青山翁
曰此書意甚好恨間有_二附會_一予熟讀加_二批點_一青山
翁觀以爲_レ是

光源翁源良顯

寶永己丑春 伴部重垣翁寫之

享保二十乙卯九月上旬謹書_二寫之_一

近藤員郡

鑑^ニ與^ニ天御量柱於金石^一以治^ニ國家焉天地神祇頓首
再拜天下幸甚矣珍圖像者張^ニ經緯^一而理^ニ代齋^一上下^一
而濟^レ人故形五位爲^ニ大傳^一也五十鈴宮御靈形者天
瓊杵象表也是天地發初萬像根本火珠所成靈坐白銅
鏡形八面是大八洲神靈居坐部類三十二神社列也
山田原宮御靈形者五神位圓形坐也是卽五常圖滿智
光表理也一輪之中含^ニ萬像^一五常百行悉皆一圓常住
應元神坐也金鏡形十四面坐也部類神五十四坐列也
謂伊勢兩宮恭現^ニ美麗之威儀^一顯^ニ御形之珍圖^一給是
大元靈明^{イキトシイケルモノ}是京氣^{イキ}之靈大智光明身神語百千尊
號天津御量之功名也故聖神日内外不^レ二常一體天
神地祇皆一露矣
履中天皇御宇神鏡日命六世孫大水神獻^ニ櫻樹於天
照大神^一御形靈以來宮人等齋祭也從^レ此而若櫻姓始
賜矣
件大水神朝熊小刀子姬神靈以^ニ大刀子二十枚小刀
子十二枚^一櫻樹木祭藏焉^{今世稱^ニ櫻社^一也}
天皇御宇隨^ニ天神高皇產靈神之訓^一土師物忌取^ニ宇
仁之波邇^一造^ニ天平瓮^一敬^ニ祭諸神^一是則天下泰平吉
瑞諸天納受寶器

臣聞陰陽定位裁萬物以先^ニ人倫^一淑聖正名卽^ニ五
音^一而甄^ニ姓氏^一是以因^レ生之本自^レ遠胙^ニ土之基^一增崇
治^ニ帝道^一而汗隆襲^ニ王風^一而興替者也伏惟國家降
降^ニ天孫^一而創^ニ業橫^一地軸^一以開^ニ邦一統^一架^ニ宗環^一八
洲^一以御辨^ニ五連^一無^レ代^一跨^ニ億載^一而期^ニ圖高門^一接軫
甲姓聯^ニ衡扶葉^一寔繁派流彌衆既而德廣所^レ覃者雲靡
輟^レ情願^ニ編戶^一星^ニ口相尋^一或撰^ニ丘陵^一而挺^ニ峻或飛^ニ
斬蓋^一以騰^ニ華^一又有^レ僞^ニ會冒^一祖妄認^ニ膏腴^一證^ニ神引^一
^レ皇虛託^ニ黻冕^一先朝鑒^ニ其假濫^一留^ニ盧根源^一味且臨
^レ軒仄景忘^ニ膳^一今臣等謹奉^ニ綸言^一追^ニ遂前旨^一云云開^ニ
書府之秘藏^一尋^ニ諸氏之苑丘^一至明繼^レ明至聖承^ニ聖
集爲^ニ姓氏錄^一別卷是神光祕府也是萬姓至尸也令然
示^レ掌而已于^レ時弘仁乙未右大臣從^ニ二位兼行皇太弟
傳勳五等臣藤原朝臣園人<sup>コハニテ表ト序
省略シテスル</sup>
別錄新撰姓氏錄目錄合三十一卷弘仁六年七月二十
日萬多親王撰定奏聞已畢今此實錄并姓氏錄目臣等
齊持而藏^ニ之祕府^一矣

弘仁十四年八月三日以^ニ宮内卿藤原諸嗣祕本^一祭
主神祇大副淵魚書^ニ寫^一之
長和六年四月廿日神祇大中臣朝臣輔親優^ニ祭官^一

件二神同殿坐陪從故稱相殿神也亦曰右相殿神

栲幡豐秋津姬命云云本說不合也

豐受宮二座在二度遇郡沼木鄉山田原一大二座前二座稱相殿

天御中主皇神一座

高天原初出之故天御氣理舉之八重雲以天坐成神

天讓日國禪月乃皇神名亦曰天御中主尊故天地俱

生神坐也致皇帝之大宗也諸天子孫保任此事而

尊崇敦孝故崇祭天孫於天照大神天照大神則

尊貴天御中主皇神焉

御間城入彥五十瓊殖天皇三十九歲壬戌天照大神

遷于但波吉佐宮今歲止由氣皇大神結幽契天降

坐矣

泊瀬朝倉宮御宇天皇二十一年丁巳冬十月一日倭姬

命夢教覺給皇大神如天之少宮坐爾天下仁志一所耳

不坐爪御饌毛安不聞食爪丹波國興佐乃小見比沼

乃魚井乃原坐道主子八乎止女齋奉御饌都神止由氣

皇大神乎我坐國欲度誨覺給爾時大若子命差使使皇

朝廷爾御夢之狀乎令言給岐即天皇勅汝大若子使

罷往天布理奉宣岐故率手置帆員彥狹知二神之

裔以齋斧齋鉏等始採山材構立寶殿翌明年戊

千秋七月七日以大佐々命率諸神等從丹波國

余社郡真井原奉迎止由氣大神度遇山田原之下

都磐根大宮柱廣敷立高天原仁千木高知豆鎮理定理

坐稱辭竟奉仕天照大神託宣諸祭事以止由氣宮

爲先也

天津彥彥火瓊瓊杵尊一座爲東相殿神坐也

天照大神與天御中主神則是天孫尊之大祖也以

高皇產靈神爲皇親神漏岐也謂親者祖也故屬二

祖尊號名曰皇孫尊也故豐受者天御中主皇神皇孫

尊二柱之總名也豐者天御中主皇神本號因以名大八洲

而稱也豐葦原中國其此緣也大日本大日靈尊所化坐

國本名也

天兒屋命 天太玉命二座

詔二神同侍殿內善爲防護矣故名皇孫尊之

前神坐也名西相殿是也

右天照大神悉治天原事耀天統皇孫尊專就豐

葦原中國受日嗣是聖明所覃莫不底屬宗廟

社稷之靈得一無二之盟百王之鎮護孔昭焉

倭姬皇女承皇天嚴命移高天原之宮而造神風伊

勢內外兩宮社顯御形珍圖於棟梁用作王化之龜

主水司坐神是也水饗神子也

御門神玉女神變
化分產

櫛石窻神 豐石窻神

四面門各座十二月祭

造酒司坐神黑御酒白御酒饗
作滿奉饗也

酒彌豆男神黑御酒彌豆女神白御酒
作神

伴二神根倉神子也
大年神苗裔大土祖孫也

大膳職神

御食津神 火雷神 高倍神勳持神化

伴三柱神者素戔鳴尊苗裔稻倉魂名字賀能賣神亦

稱御食津神也亦大年神子奧津比賣命大戶比賣命

也是竈神坐也君子合諸天道春禘秋嘗凡祭有四

時春祭曰禘夏祭曰禘秋祭曰嘗冬祭曰禘禘禘禘

陽義也嘗烝陰義也夫祭天神於圓丘祭地神於方

澤乃后土也魂氣歸于夫形魄氣歸于地形故求

諸陰陽之義也

日本國大廟水火二靈坐也謂宗廟者先祖之尊貌也皇者大也顯明也
也祖始也名先人以君明始者所以尊本之意也

伊勢太神宮日本國太廟坐此皇帝宗祖萬世大元也尊崇異于諸祖

太神宮三座在度會郡宇治郡五十鈴河上也大一座前一座稱相殿神

天照大神一座亦曰大日靈尊天照皇神

天照大神天地大冥之時現日月星辰像照虛空之

代神足履地而興于天瓊戈於豐葦原中國上去下

來而鑒六合治天原耀天統皇孫尊筑紫日向高

千穗穗觸之峰天降坐以降迄于彥波瀲武鸕草葺

不合尊終年癸丑三主治百七十九萬二千四百七十

六歲

伴葺不合尊第四子逮于神武天皇元年甲寅發向

日本國八年辛酉即建都橿原經營帝宅皇孫尊乃

美豆之御殿造奉仕天照大神與同殿御坐也崇神天

皇即位六年己丑漸畏神威同殿不安更就於笠

縫邑殊立磯城神籬奉遷天照大神以豐鋤入

姬命齋焉從神武天皇元年寅至崇神天皇即位

五年戊子帝十一代歷五百七十六歲神與帝同

坐明年丁巳冬十月甲子奉遷于天照大神於度遇五

十鈴河上也詔曰常世思金神手力雄命天石戶別神

此鏡者專爲天照大神御魂如拜吾前奉齋矣

天手力雄神一座

栲幡千千姬妹思金神一座

耳命神淳名川耳尊^{フルコトニホノフシテウサク}故古語稱之曰於^{ウサク}三畝傍之樞原^{ウサク}也太^ニ敷立宮柱於^ニ底磐之根^ニ天御柱^ニ時搏^ニ風於^ニ高天之原^ニ風雲^ニ而始^ニ馭^ニ天下之天皇號曰^ニ神日本磐余彥火火出見天皇^ニ草創^ニ天基之日也凡^ニ德合^ニ天地^ニ智合^ニ神靈^ニ稱^ニ皇帝^ニ上則答^ニ乾靈授^ニ國之德^ニ下則弘^ニ皇孫養^ニ正之心^ニ也焉甲子四年春二月壬戌朔甲申詔曰我皇祖之靈自^ニ天降鑒光^ニ助朕躬^ニ今諸虜已平海內無事可^ニ以郊祭於天神用申^ニ大孝^ニ者也乃立^ニ靈時於鳥見山中^ニ其地號曰^ニ上小野榛原下小野榛原^ニ用祭^ニ皇祖天神^ニ焉任^ニ皇天^ニ乃嚴命^ニ齋^ニ八柱靈神^ニ而式爲^ニ鎮魂神^ニ爲^ニ天皇^ニ乃玉體^ニ春秋二季齋祭也惟魂元氣也清氣上升爲^ニ天濁氣沉下爲^ニ地清濁之氣通而爲^ニ陰陽五行^ニ陰陽共生^ニ於萬物之形^ニ是水精陽氣生因以名^ニ魂爲^ニ心故以^ニ安靜^ニ爲^ニ命是道大也神語大者人靈也^ニ志備^ニ名^ニ之號^ニ魂^ニ顯露^ニ形也總以^ニ八洲八齋八心^ニ因以爲^ニ大象^ニ者也古語陽氣爲^ニ心爲^ニ神故名^ニ魂也陰氣爲^ニ意爲^ニ性故名^ニ精魄^ニ也因^ニ茲祭^ニ八齋神靈^ニ則^ニ按^ニ瑞連集所引之文^ニ此下有世苦樂之三字皆是自在天神之作用廣大慈悲之八心即續生之相真實而无^ニ畏鎮^ニ坐大元神地一如^ニ湯津石村^ニ長生不死之神慮謹請再拜國家幸

甚々々

高皇產靈尊^{神武天皇以高皇產靈朕親作}神皇產靈尊^{八咫鳥靈坐亦伊勢朝臣上祖神日本磐余彥天皇欲^ニ向^ニ中州^ニ之時山中嶮絕路失^ニ路於^ニ是神魂命鴨武津命化^ニ如^ニ大鳥^ニ翔飛^ニ奉^ニ導^ニ遂達^ニ中州^ニ天皇喜^ニ其功特^ニ厚褒賞^ニ天八咫鳥^ニ之號^ニ從此始也故政道能靈坐}魂留產靈尊^{元氣精靈坐}生座靈尊^{生氣化現精魂靈坐}足座靈尊^{大地主大已貴神}大宮賣神^{天狐辰王亦名^ニ專女^ニ是從諸宮是太玉命食神如今世內侍}御膳神^{粟國祖神大御食津姬神名世間保食神是也神語供^ニ神物^ニ名^ニ由賀神^ニ加^ニ其此緣也}

事代主神大已貴子

件八神則八洲守護驗神入齋靈命八心府神因以合^ニ八心^ニ因以爲^ニ大象^ニ是生化靈明也國家福田也故式爲^ニ皇帝^ニ鎮^ニ御魂^ニ崇祭^ニ矣依^ニ神祇官請奏^ニ諸司輸^ニ祭料^ニ宮主御巫供^ニ奉御食料^ニ稻二束其日御巫於^ニ神祇官齋院^ニ春稻籾炊以^ニ朝竈^ニ拏^ニ即盛^ニ蘭筍^ニ納積居^ニ案神部二人執^ニ向祭所^ニ供^ニ之^ニ于^ニ時加^ニ大直日神一座^ニ也天種子命招^ニ魂續^ニ魄^ニ除^ニ不祥^ニ也御井神^{五星變易八龍神同居作井名也}生井神^{福井神}

網長井神

水神

鳴香神

舉ニ於天上ニ矣

地神五代播ノ地五行降神位坐道德極而生化德表也

天照大神奉ニ舉ニ天上ニ故曰大日靈尊也

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊素戔鳴神欲ニ奉ニ辭日神

昇ノ天之時櫛明玉命奉ニ迎獻以ニ瑞八坂瓊之曲玉素

戔鳴神受之轉奉ニ日神仍共約誓而感ニ其玉生ニ天祖

吾勝尊ニ是以天照大神育ニ吾勝尊特甚鐘愛常懷ニ腋

下稱曰腋子今俗號ニ稚子謂ニ和子哥子是其轉語也

天津彥々火瓊々杵尊大八洲主尊也

天照大神之太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶ニ皇

天御中主尊長男高皇產靈尊之女栲幡豐秋津姬命

生ニ天津彥々火瓊々杵尊故皇祖高皇產靈尊特鍾

憐愛一以崇養焉因以受ニ皇天尊號一稱ニ皇御孫尊一也

遂欲下立ニ皇孫尊一以爲ニ大葦原中國之主ニ矣高天原

神留坐天御中主神天照太神正哉吾勝尊高皇產靈尊神皇產靈尊津速產靈尊皇親天御中主神

漏岐高皇產靈神神漏美命津幡豐秋津姬命以八百萬神等神集

集賜而神議議賜焉我天皇御孫豐葦原水穗之國

安國度平久所知食度事依奉岐如此依之奉之國中仁荒

振神等鹿島大明神語問之盤根樹立草乃垣葉毛語止而天

照大神手持ニ寶鏡一授ニ天皇孫尊而祝之曰視ニ此寶

鏡一當レ猶視レ吾可ニ與同ニ牀共ニ殿以爲ニ齋鏡一寶

祚之隆當下與ニ天壤一无窮矣則授ニ八坂瓊曲玉八咫

鏡草薙劔三種寶物一永爲ニ天璽一牙玉自從矣惟皇天

御中主神與ニ大日靈尊一盟宣又天皇孫尊如ニ八坂瓊

之勾一以ニ曲妙一治ニ天下一旦如ニ白銅鏡一以分明

看ニ行山川海原乃提是靈劍平ニ天下矣詔ニ天兒

屋命天太玉命一曰惟爾二神亦同侍ニ殿内一善爲ニ

防護一焉亦詔天鈿賣命同使ニ配侍一焉皇孫尊天之盤

座押放天之八重雲伊豆千別而千別矣築紫日向之高

千穗穗觸之峰天降居奉ニ導儀田大神也吾將ニ顯ニ伊勢狹長川

五十鈴河上ニ也以ニ天逆戈一爲ニ宮處一聖一宣旨

矣天津彥彦火瓊々杵尊第二子也

彦火火出見尊母木花開耶姬大山祇神女也

彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊彦火火出見尊太子也母曰豐玉姬海童二女也月神變易坐

人皇首躡歷登レ皇乘一圖稱ニ帝於ニ德義一者也

神日本磐余彦天皇彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊四子也母曰玉依姬海童二女也

日本人皇始天照大神五代孫庚午歲誕生年十五爲ニ

太子辛酉正月庚辰朔天皇即ニ帝位於橿原宮是歲爲ニ天皇元年五十尊ニ正妃ニ爲ニ皇后一生ニ皇子神八井

利^{カスノモノ}萬品之命^ヲ故亦名曰^ニ御氣津神^一也神語曰御義理也古語天津御氣國津御氣亦曰天狹霧國狹霧是水氣易形因以^デ天氣下降地氣上騰天地和同草木萌動惟水道^{ノイガ}德^ヲ矣

天八下靈神^{府中五魂坐五靈五常名}五大神也作^ス萬生質也

天三降靈神

天合靈神

天八百日靈神

天八十萬魂神

件五柱神則受^ニ天地之精氣^一而形質具而未^ニ相離^一名稱^ニ五大魂^一是中府藏坐神也故謂神者生之本形生之具也古語謂稱^ニ獨化神^一也

高皇產靈神^{皇祖神故亦名高貴神}天御中主神長男也

「栲幡豐秋津姬命^{皇孫尊母也}高貴女神

思兼神^{智性靈}天手力雄神^{石戸開神}坐相殿神

神皇產靈神^{八咫鳥垂伊勢}朝臣祖神也

津速產靈神^{中臣朝臣上祖}

件三柱靈神者天御中主神所化神名爲^ニ子父子道^一今

時露現矣

天鏡尊^{獨化神天津水鏡神三坐是神}鏡始元三光面日明白此時也

天萬尊^{獨化神天鏡次生}也伊弉諾靈明坐

沫蕩尊^{獨化神天萬次生}也伊弉冊靈明坐

件三柱神者天御中主神出現之時三魂荒^{ミタマニ}魂坐續命

神坐云云亦名稱^ニ三諦明神^一也

裸坐^{天降陽神名}天神一代^{天降陽神名}定^ニ位萬物形也

伊弉諾尊^{天降陽神名}日子也

妹伊弉冊尊^{天降陰神名}日子也

從^ニ國常立尊^一至^ニ惶根尊^一天神六代之間則有^ニ名字^一未

現^ニ尊形^一五位神坐其後轉變而合^ニ陰陽^一有^ニ男女形^一

應化相坐而專心珠神以^ニ清淨^一爲^ニ先神態與焉伊弉諾

伊弉冊二尊承^ニ天御中主神詔^一即以^ニ天瓊戈^一指^ニ立於

磯取慮島之上以爲^ニ國中之天柱^一則化^ニ豎八尋殿^一共住

生^ニ大八洲次大小島合拾四箇島^一其後處々小島皆是水

沫潮凝而成者也伊弉諾伊弉冊二尊共議曰吾已生^ニ大

八洲及山川草木^一何不^ニ生^一天下之主者^ニ歟先生^一日神

號曰^ニ大日靈貴^一亦云^ニ天照大神^一亦云^ニ大日靈尊^一此

子光華明彩照徹於六合之內故^ニ二神喜曰吾息雖^一多未

有^ニ若^一此靈異之兒^一不^ニ宜^一久留^ニ此國^一自當^ニ早送^一子

天^一而授以^ニ天上之事^一是時天地相去未^ニ遠^一故以^ニ天柱^一

神皇實錄

姓氏錄別卷書紀神皇實錄一卷
姓氏錄抄一卷

以代元氣渾渾天地未剖猶雞卵子溟滓含牙其後清氣漸登薄靡爲天渾濁重沉淹滯爲地所謂壤浮漂開關判剖是也譬猶遊魚之浮水上于時天先成而地後定然後於高天原一化生一神號曰天讓日陽神國讓月陰神

神坐是諸天降靈之本致一切國王之大宗也德被百王惠濟四海歷代帝王崇一尊祖萬方人夫敬神祇故世質時素無爲而治不肅而化云爾古語曰主以天壤戈授伊弉諾尊伊弉冉尊故讓天地於之尊故謂之稱天讓日國讓月皇神也

大元謂無名之名無狀之狀呈稱氣神萬物靈臺也日月一本日月之下有星氣是天之四宇是大地大人亦大故大象人形坐也元者元至也國常立尊無名無狀神此倉精之君本官之臣自古以來著德立功名也所化神名曰天御中主神也

謂大易者虛無也因動爲有之初故曰大初有氣爲形之始故曰大始氣形相分生天地人也大方道德者虛無之神天地沒而道常在矣原性命受化於心

受之意意受之精精受之神形體消而神不毀性命既而神不終形體易而神不變性命化而神常然因以名國常立尊以初爲常義者也

天地耦生神謂耦生天地對耦萬物生故八大五行佐天地生物五行自水始火次之金次之土爲從木生數三成數入俱實八者擊其成數矣是天地象四時王相神坐也配用有德故於明堂以祭吾神而已

國狹槌尊

水藏戶

豐斟淳尊

火藏戶

渥土煮尊

木藏戶

大戶之道尊

金藏戶

面足尊

土藏戶

沙土煮尊耦生荒魂
大苦邊之尊耦生荒魂
惶根尊對耦荒魂

件五代八柱天神光胤坐也雖有名稱未現形體五大府中坐故名天地耦生神也應化神名曰天御中主神未顯露一名國常立尊亦稱國底立尊天地之間稟氣之靈蒙一大五種之神力受天地父母

之生氣以言語授世人依之得一切智心利萬物生化也

天神首名稱天地俱生神一代謂天文地理日月星辰狀此時明現神聖出世天口成事

天御中主神

天地開闢之始含精氣而應化之元神視天下而式時候授諸天子照臨天地之間以水之德

而爲_二帝宅_一詔給矣、神日本磐余彥天皇賴以_二皇天
之威、甲子歲春二月甲申詔曰、我皇祖之靈也自
天降靈光助朕躬、令_二諸虜已平海內無事_一、可下以
郊祭祀天神、用申_二大孝_一者也、乃立_二靈時於鳥見
山中_一、用祭_二皇祖天神_一矣、亦天富命率_二諸忌部_一
捧_二天璽鏡劔_一奉_二於正安殿_一、天種子命奏_二天神壽
詞、此神世古事而已

天皇鎮魂八神

高皇產靈神此尊者極天之祖皇帝也

神皇產靈神八咫鳥

魂留產靈神玉作

生產靈神生魂

足產靈神生島足魂道反魂

大宮賣神傳女

御膳神保食神

事代主神素盞鳴尊子大己貴神長子也

右八柱神則八洲守護驗神、八齋靈命、八心府神
坐、故式爲_二皇帝之鎮魂神_一矣、謂夫水氣者清淨、
海水即本祖元神性也、湯氣者濁世生類不清實執
也、故清淨神氣祭即人魂湯氣鎮也、故有_二鎮魂_一

也、湯者氣也、亦光明也、故名曰_レ魂也、凡一氣化
現名號_二神靈_一是生化魂也、故湯氣散亡即爲_二死即
佛_一本居_二善哉善哉_一、皇天壽_二曰、而布瑠都由
良都止布瑠都云々、惟是皇天无極大神咒也

神皇系圖一卷

豐御食炊屋姬天皇庚辰歲攝政上宮廐戶豐聰耳聖
德太子尊奉_レ勅撰定而已

神皇系圖一卷以眞福寺本爲底本以_二本校_一了

明治丙午三月

佐伯有義

右從^ニ國常立尊^ニ迄^ニ至伊弉諾伊弉冉尊^ニ謂^ニ天神七代^ニ矣、爰蒙^ニ天祖天御中主高皇產靈尊^ニ之宣命^ニ、天以授^ニ天獨矛^ニ、而諸尊立^ニ於天浮橋之上^ニ、二神共計曰、底下豈无^レ國歟、廼以^ニ天獨矛^ニ指下而探^レ之、摧^ニ獲滄溟^ニ、其矛鋒滴瀝之潮凝成^ニ一島^ニ、名^ニ之磯取盧島^ニ、二神於^レ是降^ニ居彼島^ニ、興^ニ八尋殿^ニ、社記曰、大日本日高見國神祇寶山今此處也云々因欲共爲^ニ夫婦^ニ、產^ニ生州國及山川草木神等^ニ、後生^ニ一女^ニ、日神三男素戔鳴尊或爲^レ日爲^レ月、永懸而不^レ落、或爲^レ神爲^レ皇、常存以无^レ窮矣

盖聞伊弉諾尊則東方善持藏愛護善通由賀神^ニ、梵所名之伊舍那天也、伊弉冊尊則南方妙法藏愛暨行識神、亦名^ニ之伊舍那后^ニ也、凡從^ニ自性淨妙藏^ニ、乃至邪蚺地爲^レ下化^ニ衆生^ニ、隨^ニ順方便^ニ、故假所^レ化^ニ、義具^ニ生滅形^ニ、依^ニ无爲行滿^ニ、即得^ニ正果^ニ、是大慈悲神慮也、オホムカカリコトナリ

地神五代

大日靈貴天照皇神 神風伊勢國玉掇五十鈴川上座、ノミコト諾尊持^ニ左手金鏡^ニ、陰生、持^ニ右手銀鏡^ニ、陽生、因以日神月神所^ニ化生^ニ也、謂火珠水珠二果曲玉變成、

三昧世界建立日月是座、凡上座時名^ニ之尸棄大梵光明大梵、下座時名^ニ之尸棄光天女天照太神遍照智光^ニ、法陰法陽南部不二平等一心同殿同床、三神即一所座矣、尸棄大梵、尸棄光、天女、杵獨大王

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊^ニ、天照大神太子天津彦々火瓊々杵尊^ニ、正哉吾勝尊太子亦名皇孫杵獨王也彦火々出見尊^ニ、天津彦々火瓊々杵尊第二子彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊^ニ、彥火々出見尊太子

右天津尊率^ニ諸部神^ニ降^ニ到於筑紫日向穗日高千穗之峯^ニ、治^ニ天下^ニ、以來迄^ニ至葺不合尊^ニ三主^ニ、治合一百七十九萬二千四百七十六歲也

人王

神日本磐余彥天皇葺不合尊第四御子

天照皇神誓曰、吾日太子如^ニ八尺瓊之句^ニ、ヒロメルヲタケミタル妙^ニ御^ニ、ヒサケ且如^ニ白銅鏡^ニ以^ニ二分^ニ、ハクニ明^ニ看^ニ行^ニ、カルタヘニ

山川海原、乃提^ニ神劍^ニ、イハシ平^ニ天下^ニ焉、肆^ニ以^ニ名^ニ之三^ニ種神靈^ニ也、汝敬^ニ二承^ニ吾壽^ニ、サケビヘマロカコトギコトラテ手抱^ニ流鈴^ニ、カサノムシルシト以^ニ御^ニ无窮^ニ、コトナシ無^ニ念^ニ爾^ニ祖^ニ、ナチオホヤツカレフククトハ吾在^ニ鏡中^ニ矣、イマシマセ式臨^ニ寶位^ニ、シツマレ以^ニ鎮^ニ元元^ニ、上則答^ニ乾靈授^ニ國之德^ニ、下則弘^ニ皇孫養正之心^ニ、然後兼^ニ六合^ニ、以^ニ開^ニ都掩^ニ八紘^ニ、

神皇系圖

天神七代

國常立尊

古天地未_レ剖、陰陽不分、渾沌如_ニ鷄子_一、溟
滓而合_レ牙、及_ニ其清陽者_一、薄靡而爲_レ天、
重濁者淹滯而爲_レ地、精妙之合、搏易、
重濁之凝、竭難、故天先成而地後定、然
後神聖生_ニ其中_一焉、號_ニ國常立尊_一矣、亦名
无上極尊、亦名曰_ニ常住毗尊_一、謂惟三世常
住妙心法界體相大智也、故天神地祇本妙
大千世界大導師是尊也、所_レ形名曰_ニ天御
中主神_一、亦戶棄大梵天王、故則爲_ニ大千世
界主_一矣

天御中主尊

神風伊勢百船度會山田原大神座、元氣所
化水德變成、爲_レ因爲_レ果而所_レ露名_ニ天御
水雲神_一、任_ニ水德_一、亦名御氣都神、是水珠所
成卽月珠是也、亦號_ニ大葦原中津國主豐

受皇神_一也、凡以_ニ一心一分_一大千、形_レ體顯
言爲_レ陰爲_レ陽矣、蓋從_ニ虛无_一到_ニ化變_一天
月地水感應道交、故在_ニ名字相_一云々

天天下靈神

天三降靈神

天合靈神

天八百日靈神

天八十萬魂神

前五柱神者是生化五大尊座也

高皇產靈神皇祖神座

神皇產靈神大神主祖神也

津速產靈神天兒屋命祖神也

都八柱神者、天御中主神寶座之内獨化神也、明_ニ

百億須彌百億日月百億四天下、而爲_ニ天地人民化

生元祖_一者也云々

國狹槌尊

豐樹津尊

泥土煮尊

沙土煮尊

大戸之道尊

大苦邊尊

面足尊

惶根尊

右八柱神者俱生之神、陰陽與耦生之神也、故乾坤

之道相參而化、所以成_ニ此男女形_一矣

伊弉諾尊

伊弉冊尊

來利香山社仁詣奉留仁何物乎捧奉爾也右手仁物乎捧豆
彼社仁參良世手後手乎開奈利四五日乃後伊勢太神仁飯
止加也何乎持止云事昔與利不識誠仁不思儀乃事也鏡
宮者伊勢仁御座岩乃上仁徑八寸計乃鏡仁天繞和缺豆今
母在止風社止天又有之天磐戶乃靈霧乎吹開之神奈利此
宮乃神官菊田乃無實乎得太利之時敵人申狀乎得豆訴陳
鳥書止天一首歌計乎書鳥

吹干止風乃宮爾也祈梟秋乃菊田乃露乃濕衣止計仁天沙
汰之梟仁其沙汰爾母勝豆誠貴鷹梟心鳥直仁之天賴事有
葉何其利生乃可無哉乎

正本云此書中過半以大江匡房康和年中記而爲
レ本並以ニ卜部好真註紀等秘說爲ニ一書釋香山揖
天正拾七年卯月六日於和州書寫 延春自書
記云全篇中往々以本地經文等附ニ一段之中ニ
親ニ矣神佛略同之理也予見レ之誠陽明之行陸
用ニ車馬ニ諫言徹ニ寸心ニ矣依レ斯法ニ外國邪道ニ
而令レ飯ニ元々微源之心ニ者乎

○天之曆三年小野氏與志布留安樂寺仁詣天之爾御託
宣詩仁

家門一閉幾風煙

筆硯拋來五十年

我仰蒼天一懷古事

朝々暮々淚連々

止告玉陪利此由乎奏聞申臯仁臯同四年仁從一位左大

臣宣命於送奉留八月廿日再拜奉誦上留仁詩首

忽驚朝使排荆棘官品高加拜感成

雖悅仁恩覃遠窟但着存沒左遷名

神慮不穩止天同五年正一位太政大臣宣命乎奉留仁

虛空仁聲之天

昨爲北闕蒙悲士今作西都雪耻尸

生恨死喜其我奈今望足須護皇基

止響母不絕爾道風乃筆樣之天書太留於吹下之臯內乃寶

止之天內藏寮乃御藏仁納留凡此詩乎每日誦輩乎波守給

半止誓玉布正曆五年仁至末天九十六年仁天神止顯玉布

延喜三年與里今應安二年末天四百六十七年奈利

天磐戶事

天照太神天津橋乃上與利葦原瑞穗乃秋津島山仁渡玉

時八入天津乙女子乎從比玉陪利其外四人名婦人介侍

留八人乙女者一仁女豆羅乙女二仁奈加豆良姬三仁歌

姬四爾舞姬五仁加宇波志姬六仁花姬七仁明姬八仁兼
姬奈利四人者一仁未奈伎姬二仁結姬三仁豆良奴姬四

仁鈴姬是奈利八人八乙女止母又十二人乃幾稱止母云布

五人神樂男者五龍奈利昔素戔爲命此中咩豆良乙女

乎引連天上陪登玉幾時仁天照神弟尊乃惡行乎宥玉

仁尙不止波瑞穗乃里人穩仁母無事乎恨仁思食天天磐

戶仁閉籠玉布八十萬神愁玉豆神樂乎奏之庭燎乎設介

神議仁議玉陪波磐戶乎少開玉天阿奈面白止宣時手力

雄神引出奉木其時御影乎遷奈利第一鏡和不叶神慮止即

其時持玉之和鏡明神是奈利第一鏡和不叶神慮止即

紀伊國仁崇奉留日前宮奈利第二和今內侍所也第三和

用意仁鑄玉奈利是和和大和國多布峯仁有止次天照太神

乃御冠和大和國西大寺仁朱乃唐櫃仁深久納天崇奉止

瓊鉢和大和國秋山社乃傍仁有留二本乃木仁打掛天置

利覆母無天阿良波仁有利二本木止和一和花杜一和賢

木奈利去葉何人母秋山乃香久詣止天仕也其時鉢乎母拜

止奈牟又神樂岡止天諸神等神樂乎奏世之岡有利其所仁

竹筒仁酒乎入豆藁仁天口乎指天岡乃上仁置介利誠仁昔與

利今乃代末天絕事無之其數乎不_レ知下和皆朽天上仁和

頃乃新木筒有止奈牟又每年猿一足伊勢乃神與里香山仁

世玉奈利四仁十禪師權現者桓武御宇延曆二年癸亥正月十六日仁降臨止五仁八王子權現者天神第二國狹立尊仁天人皇十代崇神天皇乃九年仁淡海國志賀郡比

睿東乃大嵩仁天降玉布諏訪御射山乃明神是也六爾客

人權現者桓武御宇延曆元年壬戌八王子山乃麓仁顯

玉布延曆寺二十七代座主慶命大僧正時仁宮作有止

是白山妙現權現仁天御座寸七爾三宮權現者桓武帝延

曆六年丁亥貴女形仁天濃色乃衣裳之天顯玉陪利諏訪下

御射山明神仁天候仁曾次仁新日吉社者人皇七十八代

二條帝永曆元年庚辰御建立奈利同御宇應保二年四月

三十日始天當社乃祭奈止被_レ行天目出度御座寸奈利凡

七社影向皆山王權現止申也竹_○伊智古乃葉一本松

八柳木于今有利止凡山門和昔青海原乃時探書鉢乃滴

成處止母申幾

山王御歌止天萬葉集爾

大伴乃美豆乃濱邊乎打去其辭寄來留浪乃行衛不識母

地主權現御歌止天

波母山也小比睿乃相乃獨居和_○風雅集作_{みやまの}嵐母寒之間人

母無之

聖眞子御歌止天

何事賀御座覽瑞垣乃久具成奴見奉真天

此三神誓約御歌止天_○今按後撰集_{均子內親王之爲}

我母思人母忘奈阿里曾海乃浦吹風乃止時母奈之

北野天神緣起

太政威德天滿大自在天神者從三位參議刑部卿朝臣

是善卿養子也叙_三正二位_三補_三右大臣兼右近衛大將

內覽乃宣旨乎蒙天宮中乃政乎奉行玉陪利人皇六十代

醍醐帝御宇昌泰四年辛酉正月廿五日太宰權帥仁天

御歲五十八仁天左遷之延喜三年癸亥六十仁天薨給陪利

六十一代朱雀院御宇天曆五年壬寅七月十二日西七

條大傳蜚賀娘文子仁託曰右近馬場仁向時曾愁暫忘留

留神社乎造見世興又延喜三年興利天慶五年仁至末天四

十年乎經陀利同九年丙午淡海國比良禰宜神良胤仁託

曰比良峯仁太刀笏乃埋有是老松仁和笏福部仁和太刀

乎授與可_レ居所仁和松數千于生乎止奈理御詠止天二

離家三四月落淚百千行萬事皆如_レ夢時々仰_二彼蒼_一

鴈足粘將疑繫帛鳥頭點着憶飯家止云詩共乎詠

世襲何爾興有_二乎止奈利_一天慶九年秋九月比一夜中仁數

千乃松生多利人皇六十二代村上天皇天慶九年六月

九日北野仁宮遷玉陪利良胤此所仁來天問波如_レ託止延

天崩御同年同國秋篠山陵仁納奉留神龜元年甲子人皇四十五代帝聖武御宇仁筑前國若槻山乃香椎宮聖母大明神止顯玉布當昔神功應神御懷胎乃時御鑑乃不合之乎香良神御鑑乃草摺乎切豆御脇仁宛中是此後奧利鑑乃脇立始歟止次仁昔家持卿越前國仁知留由之天下向世之爾氣比神仁詣天月夜爾聞波海中仁鐘乃聲聞覺不思議仁思天常宮仁祈申禮計連葉夢乃中爾

浮止天魚乎角鹿乃入海仁鯨乃鐘乎浪瀾打覽

八幡大神宮緣起

仲哀帝九年十二月十四日應神天皇筑前國宇佐宮爾天誕生四歲爾之天春宮仁立七十一即位治天四拾年也此時文字始互繩爾替留百濟國奧利母五經博士來利又絹綾錦等織物乃上手始天來利奴御齒百十一爾天二月十五日仁大和國高市郡輕島豐明乃宮仁天岩隱有利陵和河內國譽田陵也神成玉事和人皇卅代磯城島金刺宮欽明帝卅一年辛卯正月十一日豐前國長田池乃邊仁天三歲小兒乃形爾天竹葉上仁立玉天云吾是人皇十六代帝應神帝乃靈也我名和護國靈驗威力神通大自在王止云奈利宣之奈理人皇四十五聖武天皇御宇四年壬申東大寺仁影向孝謙帝御宇宮造寸止人皇五十代桓武

帝延曆廿三年甲申日枝山仁影向其後五十五代文德帝御宇齊衡二年乙亥大安寺仁遷玉布又五十六代水尾帝御宇貞觀元年己卯八月十五日男山石清水錫峯仁遷座其時廣濱卿三男行教和尚貞觀聖主乃勅使止志天宮遷玉天今年應安元年未天五百年男山利生是新奈利

山王權現緣起

山王大神權現垂跡和是廿一座爾天御座寸先上七社者一爾大宮權現人皇卅代磯城嶋金刺宮欽明帝即位元年庚申大和國三輪大明神臨降之玉比其後卅九代天智即位元年壬申即大比睿大明神止顯玉布本社爾天和正一位大神大明神童一棟大物主止申天天照太神乃甥乃神爾天座寸乎今和日吉大宮殿仁天崇奉後昔大津八柳邊仁顯出玉天神人天乃晴光田中恒世此二人仁勅曰餉乎與陪用止應天恒世黃楊中仁天粟飯乎炊之奉利伊智古乃葉仁入天奉留唐崎孤松仁召乃御舟乎引掛介繫玉利其時只人仁非寸神明止知奉天琴御館宇志丸仁詔之天御跡乎慕奉天大宮乃社壇乎始玉陪利二爾地主權現者天地開闢乃最初天神第一國常立尊也高嶺乃若槻仁天降玉止三爾聖眞子者輕嶋宮應神天皇人皇四十二代文武帝御宇九年近江國志賀郡仁顯玉布即八幡宮仁天渡

梗本神詠止天

補陀洛乃南能岸仁堂立且今會榮幸北乃藤浪

賀茂大明神緣起

秦氏女子葛野河仁衣平濯仁水上與利鴨羽仁傳短留矢一流來留取飯天戶上仁挾置太利梟其後懷妊志天男子平生父母響應之天賀茂里人乎疑天此中仁汝父太留仁仁社孟乎差勢奈登止云仁戶上乃矢仁指迎梟留仁曾日比乃不審母晴太利上賀茂和別雷神止申奈利下鴨和母奈利中鴨和御子奈利挾社賀茂氏秦氏乃婿仁成止又祭日和桂并仁葵乎賀佐素父母芳契乃心也止凡賀茂御事打安留樣奈利申母憚安利

筥飯大明神緣起

人皇十四帝仲哀天皇御靈也本和武內大臣乃宮奈利之塵輪襲來時安陪高九同分九二二人仁守門弓矢乎執留二月六日仁崩御成玉陪利御劍和命乃角鹿宮浦仁寄利本和筑紫乃香椎宮仁神止顯玉乎顯豆宮作乎崇奉留凡人王第九開化帝四拾捌年仁異國與利廿萬三千人寄來留仲哀帝御宇仁廿萬三千人神功皇后時三萬八千五百人應神帝御宇仁廿萬人欽明帝時卅四萬餘人敏達帝御宇播磨國明石浦末天三萬人天智帝時二萬三千人

桓武帝延曆六年仁四十萬人龜山院文永五年二月一日寄來奈利後宇多天皇大覺寺殿御時弘安四年末天已上十箇度日本乎攻然仁一度母我國不三打負弘安四年爾和蒙古舟八十萬七千八百艘高麗舟五百艘也云々

常宮權現緣起

人皇十五代神功皇后靈神仲哀天皇乃勅乎受介塵輪乎討豆麤豆三韓乃堺仁向玉布人皇五代乃時化顯住吉神止高良神止乎以天神功仁副奉豆云我年閑陀利爲三守護仁高良大神乎大將止之天異國乃三韓仁到玉陪又申云龍宮仁目出度御坐寸干滿兩顯乎敵仁施掛給和波止申仁麤高良河上大明神安曇磯良乎賴奉豆神望乎達寸彼磯良海底仁多年有梟仁也面仁石花奈止云物付天醜計連葉絹乎御貌仁掛天神功乃御舟仁管絃之給時清曇止云舞乎奏天出玉陪利伶人等子今傳天祕曲止寸高良明神二乃玉乎預給故仁高良玉垂命止申侍幾敵舟來葉干珠乎投天陸止成之陸與利來波滿珠乎以天溺寸遂仁日本仁降乎乞奉留故仁神功以三弓弭天高麗王和日本犬奈利止書付給利今仁不失止奈率抑神功御父和息長足彥御母和葛姬奈利開化五世孫卅二歲即位治天六十九年御歲一百歲四月十七日大和國十市郡磐余稚櫻宮仁

土御門宰相歌止天

神路山百枝乃松母更爾又幾千代君爾契利太留覽

一條關白謙德公詠爾

鈴鹿山伊勢於乃蟹乃奴連來侶裳鹽垂多利止人夜見留

覽

金葉集云

神無月鍾禮乃雨乃降儘仁色々仁成留鈴鹿山哉

內大臣歌止天

降儘仁路絕奴連葉鈴鹿山雪社關乃鎖成見

白山妙理權現緣起

但大鏡第二
御堂三男權大納言能信撰

伊奘諾伊奘冊尊八百萬神等乎神議仁集天豐葦原水穗乃

國仁御社處乎高天原仁卜玉布人皇四十一代持統天皇

御宇大化三年乙未越智嶺金洞頭仁顯玉比同四十三帝

元明天皇和銅元年爾白山乃嶺仁鎮坐云々於白山有

七名^利一爾蓬萊仙二爾高天原三爾未牟漏四爾白山

五爾千本嶺六仁千倉嶺七置倉嶺其神乎甘呂伎甘呂

美命止或伊奘諾伊奘冊止申奈利最此神仁飯天擁護乎

憑陪之凡吉野藏王權現止白山妙理權現止深久諸人乎

憐玉利然波白山仁藥草生比廿七所仙窟乃名有利一仁

長生神洞二爾不老仙宮三爾不老神仙洞四仁光明神

仙洞五仁紫微宮六爾三光神仙七爾神驗仙洞八爾賢聖
神洞九爾龍神仙洞十仁並光神仙洞十一仁護法洞十
二仁天女神洞十三仁異香仙窟十四爾輪堂神仙洞十
五爾月神窟十六爾水精洞十七爾蓬萊宮十八仁禪證洞
十九仁音樂仙洞二十仁最勝仙洞廿一仁明墨仙洞廿
二爾垂神仙洞廿三爾天人洞廿四仁司命洞廿五仁天
神洞廿六仁常住神仙洞廿七仁棲神仙洞止于時神護
景雲年中也

春日大明神緣起

春日里三笠山麓仁宮居玉布春日四所止和第一鹿島第
二櫓取第三平岡第四姬神奈利人皇四拾二代文武天
皇慶雲四年甲辰常陸國興利移玉陪利第三平岡明神
和正久天子八禰命止申傳春日神也昔天上仁天高木尊
神議乃日天照太神御孫乎葦原國陪降之給時仁三乃神
寶乎被授奈利一爾葉八咫鏡二爾和八坂瓊曲玉^{印箱}三
爾和寶劍也天津兒屋禰命乎副奉且日向國高千穗峯仁
天降玉之時諸神達譽云其形和日乃如久其心和如海之
其惠和如天之其德和地乃如久此故仁天照堅久誓申佐
久我子孫和此國乃可爲主之汝乃子孫和代之仁柄乎
取天奉扶禮止神約有利君乎輔佐之中事是興利始利支

曩祖紀伊國先生椎葉仁粟乃餉乎盛奉其後椎木仁二面鏡止成化天顯玉布止云々傳教弘法智證慈惠等詣介留仁一度母正木御顯形和無之止那智飛瀧權現母當社別神也神感威光乃事不_レ違_二羅繼_一奈利

住吉大明神緣起

人皇第五帝孝昭天皇仁靈現乃神也御座垂迹松木七本檜木七本共仁天降止住吉森和何母靈木仁天人間乃種仁非寸住吉乃神詠止天

夜彌寒木衣也薄幾片損乃行合乃間與利霜藥置_{也力}良年

天照太神垂迹緣起

人皇十一代垂仁天皇御宇伊勢國五十鈴河乃水上仁顯玉布守_レ帝利惠國美人乃心直奈留事乎悅給布柱垂木仁至迄何母直奈利世中乃費乎思食天供米母三杵計精介神代乃昔青海原仁仕介留萱葺柱和賢木也又法師仍不_レ詣和佛法乃此國仁弘事乎深久忌玉豆乃事也然波瑞籬與利近久不_レ詣奈利又大中臣社司乃申世之和伊勢爾和王氏中臣忌部卜部止天四姓官人有利大中臣和三笠乃森春日乃宮與利參留今乃伊勢宮和第廿六度目乃遷宮仁天渡世玉布三五度目和大和秋山乃社與利移玉陪利千早振神代久幾日本乃秋山與利屋渡遇乃宮

御神詠止天

阿留麻肆木昆登遠和懽爾頓因能流羅武古止波隣鳥今楚訶民輪宇玖良畔

近和宗近乃歌止天

陪馱傳辭屋幾萬代乎守利古肆内外乃宮乃八重乃瑞籬止聞之乎尤肆幾和歌乃仙人也止雖母無下仁神道乃事乎波知玉和佐利梟止難之申寸社司有利行應若之時藤原大納言爲定卿仁古今集乎讀奉之時此事乎問申勢葉內宮計仁社八重垣和阿連止外宮爾母可_レ有樣仁聞太留不_レ可_レ然止柴垣荒垣玉垣水垣奈止登天內宮計八重垣和御座止口傳寸日本乎磯島共云比何母天神地神知食梟留國乃名也去葉中務卿宗尊親王乃御歌爾母

大伴乃美豆乃濱松賀素武奈利早日本仁春彌來奴覽定家卿歌止天

敷島乃道爾我名和龍市今將不知大和言葉

伊勢御事乎波神路山止母申侍利續古今太上天皇乃御製止天

小車乃錦手向留神路山又巡利會年母來仁梟

後伏見院御製止天風雅集中爾

神路山内外乃宮乃宮柱身和朽奴止母末乎波多傳與

神祇靈應記

天神七代緣起

- 第一代神 國常立尊陽神漢朝天皇氏也
第二代神 國狹立尊陽神漢朝地皇氏也
第三代神 豐斟淳尊陽神漢朝人皇氏也
第四代神 渥煮之尊陽神立國時五龍氏也
第五代神 大戶道尊陽神同 五龍氏也
第六代神 面足之尊陽神伏羲氏也
第七代神 伊弉諾尊陽神農氏也
此神妹伊弉冊尊止和合之天嫁義始未留此神白山權現也右和大已貴垂跡奈利左和稱三別山一天天津子八禰命奈利此三所權現奈利

地神五代緣起事

- 第一代神 天照太神^{日神}豐岡姬^{大日靈貴}照日尊^{太神}
爰人皇十一代帝卷纏向珠城宮御宇垂仁天皇拾漆年仁伊勢國御裳濯河乃水上仁五十鈴降利懸留吳竹乃一夜乃中仁顯玉布自三垂仁天皇卽位拾漆年^{甲辰}今年應安

元年仁至末天一千五百拾捌年奈利宮川與利渡會乃神止天昔與利廿一年仁一度乃御遷宮大和國秋山與利內宮仁遷利玉布天逆鉾廳天秋山仁今母有神樂岡天磐戶奈登母有此所利外宮和人皇二十一代泊瀬朝倉宮乃御宇雄畧天皇十三年^{戊申}丹後國朝日宮與利遷玉布內宮與利五百餘年後也

第二代神 正哉吾勝尊也

第三代神 天津彥々火瓊々杵尊忍骨尊太子也治世卅

一萬八千五百四十二年也忍骨尊末天和一月三十日乃員數母無於此尊乃時始定止

第四代神 彥火々出見尊也瓊々杵尊天子也治世六拾

三萬七千八百九拾叁年也

第五代神 葦不合尊也火々出見尊太子也治世八拾叁

萬陸千四拾貳年也

人皇代出現神明事

熊野權現緣起

人皇第一代樞原宮神武天皇卽位肆拾壹年

大奈留熊爾天現形玉布神武天皇和日向國宮崎乃神止成玉陪利其後崇神天皇六年垂跡止又繼體天皇善紀元年壬寅三尺水精盤止化天今乃瀧宮乃邊仁顯寸氏人

私云件三種神寶皇孫火々出見鷄鵲草葺不合尊三代相續人皇始神武天皇相傳天至崇神天皇此御代神物官物相分之時於一種神寶者被副神了於大和國宇多神戶新鑄造神鏡神劍爲帝王御護也內侍所者乃改鑄之御鏡也改造之寶劍者安德天皇御時入海中終不出現寶玉者浮海上之時奉取之還座稱璽宮是也抑太神宮寶劍草薙劍者景行天皇御宇日本武命爲平東夷奉勅東征彼命參太神宮祈請之時大和姬命被授神劍今在尾張國熱田社子細見日本書紀矣

珊瑚集下終

丁丑之歲九月下旬於勢州旅館以_二外宮禰宜家行神主自筆草本_一書_二寫之_一彼本五卷也今分爲_二天地兩卷_一耳

閏茂之歲臘月下旬於灌頂寺阿彌陀院賜_二中院准后之眞筆御本_一書_二寫之_一彼爲_二卷物_一而上下白界在_レ之依_レ便披覽今改如是矣

于_レ時

弘和第三之曆仲呂下旬之候終功畢此書以_二和州宇多郡福西灌頂寺阿彌陀院嚴祐律師本_一書_二寫之_一不_レ可_レ及_二外見_一者也

于_レ時

應永第二之曆仲呂初七之天勢州弘正寺寶光院之閑窓書_二寫上下兩卷之秘典_一奉_レ貢_二內外二宮之法樂_一矣
桑門惠觀

于_レ時

應永卅三年丙午三月三日一按手汝綱道祥生年七十九歲二月廿三日於志州答志郡伊雜神戶福嚴坊客殿南面雖爲_二惡筆_一如_レ形書寫了

右筆金剛佛子春瑜生年廿六歲

夫神皇珍圖形者天地之位象_二四時之行_一治_二天下_一四時之行有_レ寒有_レ暑聖人之法有_レ文有_レ武天地之行有_レ前有_レ後有_レ左有_レ右聖人之法以建_二經緯_一春生_二於左_一秋殺_二於右_一夏長_二於前_一冬藏_二於後_一生長之事文也收藏之事武也故文事在_レ左武事在_レ右

御鎮座本紀曰寶宮棟梁天表御形文

天照太神宮御形象日天尊位座也

止由氣太神宮御形象月天尊位座也

惟天神地祇明元_二八洲_一利_二物形體_一故皇天之坐而配_二日月_一照_二宇內之昏衢_一國家合_二天地_一而寶曆長久

天真之明道鬼神變通人民咸幸甚

仙宮秘文等載_レ右

一十種神寶事

舊事本紀曰天神御祖詔授_二天璽瑞寶十種_一羸都鏡一

邊津鏡一八握劍一生玉一死玉一足玉一道反玉一蛭

比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神天祖詔曰若有

痛者令_二玆十寶_一謂_二一二三四五六七八九十_一而布

瑠部由良由良止布瑠部如_レ此爲_レ之者死人反生矣是

則所謂布瑠之言本矣

羸都鏡

弘法大尺
天字表

麗氣府錄曰
五輪形

邊都鏡

地字表

圓形內輪表
外輪八咫形

八握劍

五貼形
耐不蓄義
向上寶珠

私云八幅輪欸

生玉

水珠
向下寶珠

死玉

火珠
上字表文

足玉

下字表母

道反玉

蛭比禮

水字表白明衣本緣是
清淨義也木綿織也

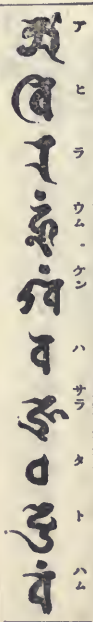
蜂比禮

火字表亦
女懸帶也

品物比禮

寶冠也帝王御即位之時被着之
兩宮御形文在_二彼寶冠_一

而布瑠部由良由良止布瑠者



一三種神寶事

日本書紀曰以_二此皇孫_一代降故天照太神乃賜_二天津

彥火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶

物因勅_二皇孫_一曰葦原千五百秋之瑞穗國吾子孫可

王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當_二與_一

天壤無窮者矣

寶也神語曰破者古語天逆杵天逆太刀俗云天乃魔反杵亦名天乃登保古此名天璽也天御量柱者天瓊戈異名也以二基分天地而爲內外心御柱也故口人者與天地合其德而利萬物者也

大宗祕府曰天瓊玉戈名金剛寶劍惟是天地開闢之圖形天御中主之神寶獨胎變形座也諸佛菩薩一切群靈心識之根本一切國王父母也

形文深釋曰心御柱者天瓊戈表物也是獨古形三部五部一體不二妙體萬法所生心體也故本覺常住之心蓮臺之上觀一大三千界妙理也惣八葉蓮華上有不審

輪是蓮華理也理即智也智即大圓鏡智平等性智妙觀察智成所作智柱者獨一法身妙一切衆生根源也居磐石而磐者示長遠之不朽者也是不動所表也

故所現八大龍王十二神王常住守護座也

亦曰心御柱者一氣始一心妙法萬化種子也

寶山記曰惟是天地開闢之圓形天御中主神寶獨古變形神佛神通群靈心識正覺正智金剛座也亦名心蓮也

亦曰凡八百萬神下座南閻浮提釋迦尊爲父爲母爲君爲臣生々世々无不從之世人无孝順心

犯輕垢罪墮地獄故曰神慮舍那佛等說大乘心地而已

一御形文圖事

寶基御靈形文圖曰太和姬皇女承皇天嚴命移高天原之梵宮而造神風伊勢內外兩宮社顯御形於棟梁用作生化之龜鑑興心柱於金石以治國家之福壽天神地祇頓首再拜天下幸甚

五十鈴宮御靈形者天瓊玉杵表也是天地發初萬像根本也惟能摧破諸災患而神心不亂三神一體靈智神財是也故亦名稱金剛正杵亦名天逆戈逆太刀也白銅鏡八面者大八洲靈神居也部類三十二神居也山田原宮御靈形者五位圓形座也是則五常圓滿智光表理也一輪中含萬象五常百行悉皆一圓常住應化元神座也金鏡十四面座部類神五十二座

天口事書曰凡經緯法者君臣上下天地父母大宗形表也於是現大傳珍圖以通神明之德以照萬物之情乃成之神近悟諸不遠也

天照珍圖心神華臺之中天地八尊圓鏡座

豐受珍圖者天地父母二儀之中五大尊光照金鏡座俗常以金鏡喻明道也

天皇勅大若子使罷往大布理奉宣支故率手置帆負彥狹知二神之裔以齋斧齋鉏等始探山材搆立寶殿明年戊午秋七月七日以大佐々命從丹波國余佐郡眞井原之奉迎止由氣皇太神度遇之山田原乃下都磐根大宮柱廣敷立天高天原爾千木高知天鎮理定理座止稱辭竟奉支

豐受太神丹波國與佐宮御出時地主明神詠曰奈具身爾奈具我宮伊豆間今波照出御明給一說安賀奴美爾阿賀奴小宮乎伊豆流萬爾今者外爾出々照覽悟也

亦山田原迎接時天照太神拍手忍手御詠曰增鏡雲位合御覽與千代千年世重々

ソノカミノ ウカリシコトモ ワスラシテ アフウレシサチ ミナマリヌル
一心我頂禮 久住舍那尊 本來我心 衆生而加護返禮文云
モトヨリノ ヒカリニサケル ハチスハ、 コノミヨリコソ ミナナリケル

天宮誓願 久遠正覺 法性如々 同在一所
歸命金剛祕密神 令持令法久住者
世出世間利群生 引導化緣及法界

皇太神重託宣吾祭奉仕之時先須祭止由氣太神宮也然後我宮祭事可勤仕也故諸祭事以止由氣宮爲先也

御鎮座本紀曰明年戊午秋七月七日以大佐々命奉布理留共從神大御食津命、小和志理命、事代命佐部支命、御倉命、屋和古命、野古命、乙乃古命、河上命、建御倉命、與魂命、各前後左右爾相從奉仕大佐々命小和志理命奉戴正體與魂命道主貴奉戴相殿神一驅仙躍比錦蓋覆日繩曳天御翳日御翳屏奉行幸爾時若雷神天乎八重雲四方爾薄靡天爲御垣天從但波國吉佐宮遷幸

一心御柱事

御鎮座本紀曰心御柱一名天御柱亦名曰忌柱亦天御量柱

謂應天四德地五行徑四寸長五尺御柱坐以五色繩奉纏之以八葉神奉飭之是則伊弉諾伊弉冊尊鎮府陰陽變通之本基諸神化生之心臺也都合天心而與木德歸皇化而助國家故皇帝之曆數天下之國土常磐堅磐無動三十六禽十二神王八大龍神常住守護坐依損失有天下危天口事書曰八坂瓊戈是天地開闢之始浮高天原神

靈物_イ照耀如_ニ日月_一奈_イ惟少緣之物不_レ在志定主出現

御座_イ尔時可_レ進止_イ念_ニ彼處_一爾禮祭止申_イ勢_ニ即彼處_一爾往

到給_ニ天御覽_一介禮_ニ惟昔太神誓願給_ニ天豐葦原瑞穗之國_一仁

伊勢加佐波夜之國_ニ波有_ニ美宮處_一止_ニ見定給_ニ比從_ニ天

上_ニ志_一投降坐_ニ比_一天之逆太刀逆鉾金鈴等是也甚喜_ニ於

懷_ニ比_一言上給_ニ比_一岐

神記曰天之逆太刀天之逆梓大小之金鈴五十口日之

小宮圖形文形等是也

一外宮御遷座事

麗氣曰豐受皇太神于_レ時大日本國天_ニ降淡路三上

嶽_ニ率_ニ三十二大眷屬_一從_ニ庚申年_一送_ニ春秋_一止_ニ五十

五万五千五百五十五年

遷_ニ布倉宮_一自_ニ丙申_一送_ニ年月_一五十六万六千六百六

十六年

八輪島宮遷戊申年積_ニ年五十七万七千七百七十七

年八國嶽遷庚申歲五十八万八千八百八十八年

丹波國與謝郡北治山頂麻那井原遷壬申歲五十九万

九千九百九十九年

私勘已上六箇所御遷坐都盧二百九十万六千七百七

年歟

上代本紀曰御間城入彦五十瓊殖天皇卅九歲壬戌天

照太神但波乃吉佐宮今歲止由氣之皇太神結_ニ幽契_一

天降居大部倉津臣命速御食命屋船命宇須乃女神須

摩留賣命宇賀乃大土御祖神若雷神彦國見賀岐建與

奉命天日起神振魂命相從以戾止矣

尔時天照皇太神與_ニ止由氣皇太神_一令_ニ明齋_一德居焉

如_ニ天上之儀_一一處雙座焉率_ニ四九三十六龍_一而朝

大御氣夕大御氣於炊備_ニ天奉_一御饗_ニ留丹波道主貴_一爲_ニ

御杖代_ニ志_一天品物備_ニ貯之百机_一而奉_ニ神嘗_一焉

天照太神伊勢國爾向幸給

止由氣太神復昇_ニ高天原_一天日之小宮座于_レ時以_ニ吾

天津水鏡乃寶鏡_ニ留_ニ居吉佐宮_一給于_レ時高貴大神勅

宣以_ニ皇孫命靈_一宜_ニ崇_一大祖止由氣太神乃前社_ニ云々

仍爲_ニ相殿神_一座_ニ往云靈形鏡坐也皇孫命金鏡也

大田命傳曰泊瀨朝倉宮御宇天皇廿一年丁巳冬十月

一日倭姬命夢教覺給久皇太神吾_ニ如_ニ天之小宮坐_一爾

天下_ニ仁志_一一所耳坐_ニ爪御饗_一毛安不_レ聞_ニ一本此下_一爪丹波國

與佐之小見比治之魚井之原坐道主子八乎止女乃齋

奉御饗都神止由氣皇太神乎我坐國欲度誨覺給_ニ支_一尔

時大若子命差_レ使_ニ朝廷_一爾御夢之狀乎令_ニ言給_一支即

宮於社中圓輪鏡坐二年奉齋

倭姬世記曰是時豐鋤入姬命吾日足止白支爾時姪倭比賣命事依奉利御杖代止定耳從此倭姬命奉戴天照太神而行幸同注云相殿神天兒屋命太玉命御戸開關神天手力男神栲幡姬命御門神豐石窓櫛石窓命並五部伴神相副奉仕矣

見上

崇神天皇三十九年遷幸但波乃吉佐宮

同四十二年九月九日遷倭國伊豆加志本宮

五十一年四月八日遷木乃國奈久佐濱宮

五十四年遷吉備國名方濱宮

見上

五十八年遷倭彌和乃御室嶺上宮

六十年二月十五日遷大和宇多秋志野宮

六十四年十一月廿八日遷伊賀國隱市守宮

六十六年十二月一日遷同國穴穗宮

垂仁天皇即位元○世記年夏四月四日遷伊賀敢都美

惠宮四年夏六月晦遷淡海甲可日雲宮

八年秋七月七日遷同國坂田宮

十年秋八月一日遷美濃國伊久良河宮

次遷尾張國中島宮二ヶ月奉齋云々

十四年秋九月一日遷伊勢國桑名野代宮

次遷鈴鹿奈具波志忍山宮六ヶ月奉齋云々

十八年夏四月十六日遷阿佐加藤方片樋宮

二十二年冬十二月廿八日遷飯野高宮

二十五年三月遷伊蘇宮

日本書紀曰廿五年三月丁亥朔丙申離天照太神

於豐粗姬命託于倭姬命爰倭姬命求鎮坐太

神之處而詣楚田篠幡更還之入近江國東廻

美濃到伊勢國時天照太神誨倭姬命曰神風

伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可伶國也○今按中

畝興齋宮于五十鈴川上是謂儀宮則天照太神

始自天降之處也

一云倭姬命以天照太神鎮坐於磯城嚴櫛之本

而祠之然後隨神誨取丁巳年冬十月甲子遷

于伊勢國度遇宮

二十六年丁巳冬十月甲子遷度遇五十鈴川上宮倭姬

世紀曰于時獲田彥神裔宇治土公祖大田命參相支

汝國名何問給爾佐古久志呂宇遲之國止○今按本

姬命問給久有吉○本書以下有宮之字處哉答自久佐古久志呂

宇遲之五十鈴之河上者是大日本國之中仁殊勝靈地

侍○奈其中翁世二百○本書八万歲之間○仁末現知○留有

鋤入姬奉_レ齋焉其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌舞
然後隨_二太神之教_一國々處々爾大宮處乎求給倍利

麗氣曰三十九年_{壬戌}三月三日遷_二幸但波乃吉佐宮_一雲

聳現_二榎下_一坐秋八月十八日作_二瑞籬_一四年奉_レ齋矣

大田命傳記曰今歲止由氣之皇神天降坐_二天合_一明齋

德給如_二天小宮之儀_一_志一處雙座須于_レ時和久產巢日

神子豐宇氣姬命_{稻靈}奉_レ御神酒_{至今世謂丹後國竹}

能賣神_{是也亦元是日天}紫微宮天降坐_二天女_一是也

亦丹波道主貴_{素戔嗚尊孫襲}奉_レ備_二朝大御饗夕大御氣_一

奉仕矣其功已辭竟天止由氣太神復上_二高天原_一支此

處_{仁志}以_二白銅寶鏡_一豆道主貴八小男童天日別命崇

祭奉焉

丹後國風土記曰比治山頂有_レ井其名云_二麻奈井_一今

既成_レ沼此井天女八人降來浴_レ水于_レ時有_二老夫婦_一

其名曰_二和奈佐老夫和佐老婦_一此老等至此井_二而竊

取_二藏天女一人衣裳_一即有_二衣裳_一者皆天飛上但無_二

衣裳_二女娘一人即身隱_一水而獨懷_レ愧居爰老夫謂_二天

女曰吾無_レ兒請天女娘汝爲_レ兒天女答曰妾獨留_二人

間_二何敢不_レ從請許_一衣裳_二老夫曰天女娘何存_一欺心_二

天女云凡夫人之志以_レ信爲_レ本何多_二疑心_一不_レ許_二衣

裳_二老夫答曰多_レ疑無_レ信率土之常故以_二此心_一爲不

許耳遂許即相副而往_レ宅相住十余歲爰天女善爲_二

釀酒_一飲_二一盃_一吉萬病除之其一坏之直財積_レ車送于

時其家豐土形富故云_二土形里_一此自_二中間_一至于今

時_二便云_一比治里_二後老夫婦等謂_一天女曰汝非_二吾

兒_一暫借住耳宜_二早出去_一於是天女仰_レ天哭慟俯_レ地

哀吟即謂_二老夫等_一曰妾非_二以_一私意_二來_一老夫等所

願何發_二厭惡之心_一忽存_二出去之病_一老夫增發_レ慟願

去_二天女流_一淚微退_二門外_一謂_二鄉人_一曰久沉_二人間_一不

得_レ還_二天復無_レ親故不_レ知_二由所_一吾々何々哉拭_レ淚

嗟歎仰_レ天歌曰

阿麻能波良布理佐兼美禮婆加須美太智伊幣治麻土

比天由久幣志良受母

遂退去而至_二荒鹽村_一即謂_二村人等_一云思_二老夫老婦

之意_一我心無_レ異荒鹽者仍云_二比治里荒鹽村_一亦至_二

丹波里哭木村_一據_二槻木_一而哭故云_二哭木村_一復至_二竹

野郡船木里奈具村_一即謂_二村人等_一云此處我心奈具

志久_{古事不善者}乃留_二居此村_一斯所謂竹野郡奈具社坐

豐宇加能賣命也
麗氣曰崇神天皇五十八年_{辛遷}倭彌和乃御室嶺上

天湯津彥命
々々牙

天神魂命
々々拳

天三降命
々々喜

天日神命
々々鬘

天乳速命
々々哥

天八坂彥命
々々舞

天活玉命
火天

天小彥根命
水天

天湯彥命
風天

天表春命
地天

天下春命
金剛燒香井

天月神命
々々花

天伊佐布魂命
々々燈

天伊岐志邇保命
々々塗香

豐受皇太神御降臨三十二神

天潛尾命
水潛尾命

地潛尾命
水潛尾命

火潛尾命
土潛尾命

石潛尾命
金潛尾命

天日尾命
天月尾命

天子尾命
地子尾命

天破塔命
天破法命

天破仁命
天破神命

國加利命
國加富命

國加國命

國加賀命

愛鬘尾命

愛護尾命

解法尾命

學甘尾命

上法神尊

下法神尊

中言神尊

天鏡神尊

地鏡神尊

百々神尊

千々神尊

萬々神尊

已上三十二神

一 內宮御遷座事

倭姬命世記曰凡神倭伊波禮彥天皇已下稚日本根子

彥大日々天皇以往九帝歷年六百廿余歲當此時

帝與神其際不遠同殿共床以爲常故神物官物

亦未分別焉

麗氣曰御間城入彥五十瓊殖天皇大倭國磯城瑞籬宮即位六年

秋九月倭國笠縫邑立磯城神籬奉遷天照太神及

草薙劍令皇女豐鍬入姬奉齋以往雖同殿共床

漸畏三神靈共住不安志別興神籬天復石凝姥神裔

天目一箇裔二氏更鑄造鏡劍以爲護身軀焉錢所

倭姬命世記曰奉遷天照太神及草薙劍令皇女豐

大苦邊尊阿彌陀佛次第記
勾那含牟尼如來

龍尊王佛

面足尊毘波尸佛

惶根尊毘葉羅如來
毘波尸佛

伊弉諾尊天鼓音雷佛

伊弉冊尊開敷花王佛

一相殿神事

外宮

大左皇孫尊
天上玉杵命彌勒菩薩

私記左天上玉杵命輒不及外聞之間世無知

之

右天兒屋命
文殊師利菩薩
太玉命普賢菩薩

社記曰伴相殿神之內於天兒屋命太玉命者元者

內宮相殿神也而外宮御鎮座以後依內宮御託宣

奉傍外宮者也外宮高宮元者內宮荒祭宮相並

天御座也而外宮御鎮座之後依內宮御託宣同奉

傍外宮者也此等之次第御鎮座本紀分明也

內宮當時相殿神

左天手力男神
開天磐戶神也
如意輪觀自在菩薩

右栴檀豐秋津姬命

皇御孫時
彌勒菩薩

一三十二神降臨事

舊事本紀曰高皇產靈尊勅曰若有葦原中國之敵拒
神人而待戰者能為方便誘欺抗拒而令治平三
十二人並為防衛天降供奉矣

麗氣府錄
注付三十二菩薩云

天香鼻山命金剛鉤弁上首
天鈿賣語命金剛薩埵

天太玉命
天兒屋命々々愛

天櫛玉命
天道根命々々索上首

天神玉命
天樞野命々々光

天糠戶命
天明玉命々々咲

天村雲命々々鑣上首
天背男命々々法

天御蔭命
天造日女命々々因

天世手命
天斗麻彌命々々鈴上首

天皆斗女命
天玉櫛彥命々々護

鬼神所惡也

大宗祕府曰居無爲無事大達之場超生出死名之清淨

亦曰副神光發其蘊直守清虛安閑之處向長生路上祭神敬祖卽與神同祖同牀同作同證無別名之爲神一妙心而已

亦曰一心不亂萬法無咎

亦曰欲示無相觀解令忌有相權教

亦曰神一道無多慮無多智多智多事不如息意多慮多失不如守一慮多志散智多心亂心亂生惱志散妨道嗚呼不死妙藥一道虛寂萬物齊平也

亦曰神人教令潔清三惑而畢身不汚語其定也恬思慮正神明而終日不亂語其慧也崇德辨惑而必然以此備之慧群生以正法神而通之大地不能揜密而行之鬼神不能測其演法也惟是以道德謝天子諸侯歸神明祈國家太平是本來大人耳亦曰天宮與靈山分一線之道共爲佛神之賓至形文深釋曰皇則大空本元清淨之妙理是無相法身義也故一氣玄々之元神名也稱皇神故萬物化大通

大通變成神名大道一々歸自位故真如界裏湛然常位也已師在一心矣心乃神之至心傷則神散則身喪故以無心爲主此謂歸真如界

神皇實錄曰神語大者人靈也云云久名之號魂顯露也以八洲八齋八心志備因爲大象者也古語陽氣爲

心爲神故名魂也陰氣爲意爲性故名精魄也因茲祭八齋神靈則世苦樂皆是自在天神之作用廣大慈悲之八心卽續生之相真實而无畏鎮坐大元

神地如湯津石村長生不死之神慮謹請再拜天口事書曰神人心外好別請而從不淨實執則不

得踐神地上不許飲神地水而五千大鬼常罵大賊

一天神七代名號事

府錄曰

國常立尊漢言大畏慮遮那如來國狹槌尊畏慮舍那佛

豐樹淳尊慮舍那佛

已上三身卽一法神也

泥土煮尊勾留尊佛

沙土煮尊寶藏摩尼佛

大戸之道尊拘那含佛 亦龍尊王佛

子以虛空爲正體焉故曰天照太神亦止由氣皇神則月天子也故曰金剛神亦名天御中主神以水德利萬品故名曰御饌都神惟諸佛福田生化壽命也汝等受天地之靈氣而種神明之光胤誰撓其神心誰干其慮耶

亦曰天照太神則主火氣而和光同塵止由氣太神則主水氣而萬物長養也故兩宮者天神地祇太宗君臣上下元祖也惟天下大庖也國家社稷也故尊祖敬宗禮教爲先故天子親耕以供神明王后親蠶以供祭服而化陰化陽有四時祭德合神明乃與天地通也德與天地通則君道明而萬民豐

亦曰人乃天下之神物也莫傷心神神垂以祈禱爲先冥加以正直爲本任其本心皆令得大道故神人守混沌之始屏佛法之息崇神祇散齋致齋內外潔齋之日弔喪問疾食安不判刑殺不決罰罪人不作音樂不預穢惡事不散失其正致其精明之德左物不移右兵器不用鞞音不聞口不言穢惡目不見不淨鎮專謹慎之誠宜致如在之禮矣

御鎮座本紀曰齊情於天地乘想於風雲者爲從

道之本爲守神之要將除萬言之雜說而舉一心之定準配天命而嘗神氣理實灼然故祭神清淨爲先我鎮以得一爲念也神主部物忌等諸祭齋日不觸諸穢惡事不行佛法言不食六亦迄至神嘗會日不食新飯常謚心慎攝掌敬拜齋仕矣亦曰天地未割陰陽不分以前是名混沌萬物靈是封名曰虛空神亦曰大元神亦名國常立神亦名俱生神希夷視聽之外氤氲氣象之中虛而有靈一而無體故發廣大慈悲於自在神力現種種形隨種種心行爲方便利益所表名曰大日靈貴亦曰天照太神爲萬物本體度萬品世間人兒如宿母胎也亦止由氣皇太神月天尊天地之間氣形質未相離是名渾淪所顯尊形是名金剛神生化本性萬物惣體也金剛水不朽火不燒本性精明故亦名曰神明亦名大神也任大慈本誓每人隨思雨寶如龍王寶殊利萬品如水德故亦名御氣都神金玉則衆物中功用甚勝不朽不燒不壞不黑故爲名無內外表裏故爲本性謂人乃受金神之性須守混沌之始故則敬神態以清淨爲先謂從正式爲清淨隨惡以爲不淨惡者不淨之物

怜小汀於_レ是棄_レ籠遊行忽至海神之宮其宮也雉堞
整頓臺宇玲瓏門前有_二井_一井上有_二湯津杜樹_一枝葉
扶疏時彥火々出見曾就_二其樹下_一徒倚彷徨良久有_二
一美人_一排_レ闥而出遂以_二玉鏡_一來當汲_レ水因舉_レ目視
之乃驚而還入白_二其父母_一曰有_二一希客者_一在_二門前
樹下_一海神於_レ是鋪_二設八重席薦_一以延內_レ之座定
是間脫文獻彥火々出見因娶_二海神女豐玉姬_一仍留住已
經_二三年_一彼處雖_二復安樂_一猶有_二憶_レ鄉之情_一故時復太
息豐玉姬聞之謂_二其父_一曰天孫悽然屢歎蓋懷_レ土之
憂乎海神乃延_二彥火火出見_一尊從容語曰天孫若欲還
_レ鄉者當_レ奉_レ送便授_二所得釣鈎_一因誨之曰以此鈎
與_二汝兄_一時陰呼_二此鈎_一曰貧鈎然後與_レ之復授_二潮
滿瓊及潮涸瓊_一而誨之曰漬_二潮滿瓊_一者則潮忽滿以
_レ此沒_二溺汝兄_一若兄悔而祈者還漬_二潮涸瓊_一則潮自
涸以_レ此救_レ之如此逼惱則汝兄自伏及_レ將_二歸去_一豐
玉姬謂_二天孫_一曰妾已娠矣當產不_レ久妾必以_二風濤急
峻之日_一出_二到海濱_一請爲_レ我作_二產室_一相待矣彥火々
出見已還_レ宮_{○今按是}豐玉姬果如_二前期_一將_二其女弟玉
依姬_一直冒_二風波_一來_二到海邊_一逮_二臨產時_一請曰妾產
時幸勿_二以看_一之天孫猶不_レ能_二忍竊往窺之_一豐玉姬方

產化_二爲龍_一而甚慙之曰如有_レ不_レ辱_レ我者則使_二海陸
相通_一永無_二隔絕_一今既辱之將何以結_二親昵之情_一乎
乃以_レ草襲_レ兒棄_二之海邊_一閉_二海途_一而徑去矣故因以
名_レ兒曰彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊_一
治_二天下_一八十三萬六千四百十三年

已上地神五代

地神三代之間治_二天下_一都虛一百七十九萬二千四
百七十六歲也

一神宣等事

倭姬命世紀曰雄略天皇卽位廿三年己未二月倭姬命
召_二集於宮人及物部八十氏等_一宣_二久神主部物忌等諸
聞吾久代太神託宣_{○摩志萬志本}心神則天地之本基身體則
五行之化生_{○索肆元々入元初本々任本心}與神
垂以_二祈禱_一爲_レ先冥加以_二正直_一爲_レ本利夫尊_二天事
_レ地崇_二神敬_一祖則不_レ絕_二宗廟_一經_二綸天業_一又屏_二佛
法息_一奉_二再拜神祇_一禮日月廻_二四洲_一雖_二照_二六合_一須
照_二正直頂_一止詔命明矣亦曰夫悉地則生_二心爪意則顯_一
信心_{○留蒙}留蒙_二神明利益_一事波依_{○信力厚薄}信力厚薄_{○利奈}天下四
方國乃人夫等仁_{○天萬奉}至_二齋敬_一矣
太田命傳紀曰天照坐皇太神則大日靈貴故號_二日天

古語拾遺曰于時天照太神高皇產靈尊仍相語曰夫
 葦原瑞穗國者吾子孫可王之地也皇孫就而治焉寶
 祚之隆當與天壤無窮矣即以八咫鏡及草薙劍
 二種神寶授賜皇孫永爲天璽所謂神璽鏡劍是也予玉自從
 卽勅曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共
 殿以爲齋鏡仍以天兒屋命太玉命天鈿女命使
 配侍焉因又勅曰吾則起樹天津神籬及天津磐境
 當爲吾孫奉齋矣汝天兒屋命太玉命二神宜持
 天津神籬降於葦原中國亦爲吾孫奉齋焉惟爾
 二神共侍殿內能爲防護○今按自是以下本書無率三十二神
 筑紫日向高千穗穗觸峯天降座

天孫御降臨之時天兒屋命雲驛咒文云

諸神等各念 此時清淨偈 諸法如形像 清

淨無瑕穢 取說不可得 皆從因業生

治天下卅一萬八千五百卅三年

彥火々出見尊

天津彥々火瓊々杵尊第二子也母木花開耶姬大山祇
 神女也曰鹿葦津姬亦曰神吾田津姬

日本書紀曰皇孫問此美人曰汝誰之女耶對曰妾是
 天神娶大祇神所生兒也皇孫因而幸之卽一夜而

有娠皇孫未之信曰雖復天神何能一夜之間令
 人有娠乎汝所懷者必非我子歟故鹿葦津姬忿恨
 乃作無戶室入居其內而誓之曰妾所娠若非天
 孫之胤必當襲滅如實天孫之胤火不害即放
 火燒室始起烟末生出之兒名火闌降命次避熱
 而居生出之兒號彥火々出見尊次生出之兒號火
 明命凡三子矣

治天下六十三萬七千八百九十二年

彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊

彥火々出見尊子也母豐玉姬海神二女也

日本書紀曰兄火闌降命自有海幸弟彥火々出見尊
 自有山幸始兄弟二人相謂曰試欲易幸遂相易之
 各不得其利兄悔之乃還弟弓箭而乞已釣鈎弟
 時既共兄鈎無由訪覓故別作新鈎與兄兄
 不肯受而責其故鈎弟患之卽以其橫刀鍛作
 新鈎盛一箕而與之兄忿曰非我故鈎雖多不
 取益復急責故彥火々出見尊憂苦甚深行吟海畔時
 逢鹽土老翁老翁問曰何故在此愁乎對以事之本
 末老翁曰勿復憂吾當爲汝計之乃作無目籠
 內彥火々出見尊於籠中沉之于海卽自然有可

竊此處_二乎素戔嗚尊對曰吾元無_二黑心_一但父母已有_二嚴勅_一將_二永就_二乎根國_一如不與_レ姉相見吾何能敢去是以跋_二涉雲霧_一遠自來參不_レ意阿姉翻起嚴顏于_レ時天照太神復問曰若然者將_二何以明_二余之赤心_一也對曰請與_レ姉共誓夫誓約之中必當_レ生_二子如吾所生是女者則可_レ以_二爲_二有濁心_一若是男者則可以_二爲有_二清心_一於是天照太神乃索_二取素戔嗚尊十握劍_一打折爲_二三段_一濯_二於天真名井_一齧然咀嚼而吹弃氣噴之狹霧所_レ生神號曰_二田心姬_一次湍津姬次市杵島姬凡三女矣既而素戔嗚尊乞_二取天照太神鬢髮及腕所_レ纏八坂瓊之五百箇御統_一濯_二於天真名井_一齧然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所_レ生神號曰_二正哉吾勝々速日天忍穗耳尊_一次天穗日命是出雲臣土師連等祖也次天津彥根命是凡河內直山代直等祖也次活津彥根命次熊野櫛樟日命凡五男矣是時天照太神勅曰原_二其物根則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也故彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉又勅曰其十握劍者是素戔嗚尊物也故彼三女神悉是爾兒便授_二之素戔嗚尊_一此則筑紫胸像君等所祭神是也

古語拾遺曰於_レ是素戔嗚神欲_レ奉_二辭日神_一昇_レ天之

時節明玉命奉_レ迎獻以_二瑞八坂瓊曲玉_一素戔嗚神受_レ之轉奉_二日神_一仍共約誓即感_二其玉_一生_二天祖吾勝尊_一是以天照太神育_二吾勝尊_一特甚鍾愛常懷_二掖下_一稱曰_二掖子_一今俗號稚子謂_二和可子_一是其轉語也

天津彥々火瓊々杵尊大八洲座也按有落字歟

天照太神之太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶_二皇天御中主尊長男高皇產靈尊之女栲幡豐秋津姬命_一生_二天津彥々火瓊々杵尊_一故皇祖高皇產靈尊特鍾_二憐愛_一以崇養焉因以受_二皇天尊號_一稱_二皇御孫尊_一也遂欲_二立_二皇孫尊_一以爲_中大葦原中國之主_上矣

日本書紀一書曰武甕槌神及經津主神乃昇_レ天復命而告之曰葦原中國皆已平竟時天照太神勅曰若然者方當_レ降_二吾兒_一矣且將_レ降間皇孫已生號曰_二天津彥々火瓊々杵尊_一時有_レ奏曰欲_二以_二此皇孫_一代降_レ故天照太神乃賜_二天津彥々火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物_一又以_二中臣上祖天兒屋命忌部上祖太玉命媛女上祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五部神_一使_二配侍_一焉因勅_二皇孫_一曰葦原千五百秋之瑞穗國是_二吾子孫可_一王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當_レ與_二天壤_一無窮_上者矣

古語拾遺曰於是從思兼神議令石凝姥神鑄

像之鏡初度所鑄少不合意是紀伊國日次度所鑄

其狀美麗是伊勢太儲備既畢具如所謀余乃太玉命

以廣厚稱詞啓曰吾之所捧寶鏡明麗恰如汝命

乞開戶而御覽焉由如此歌樂聊開戶而窺之當

此之時上天初晴衆俱相見面皆明白伸手歌舞相與

稱曰阿波禮言天阿那於茂志呂古語事之甚切皆稱

多能志謂之手而舞今指樂事阿那佐夜憩聲也俱請曰勿

復還幸仍歸罪過於素戔鳴神科之日本紀之文也

是時素戔鳴尊自天而降到於出雲國簸之川上時

聞川上有啼哭之聲故尋聲竟往者有一老公與

老婆中間置一少女撫而哭之素戔鳴尊問曰汝等

誰也何爲哭之如此耶對曰吾是國神號脚摩乳我妻

號手摩乳此童女是吾兒也號奇稻田姬所以哭

者往時吾兒有八箇少女每年爲八岐大蛇所吞

今此少童且臨被吞無由脫免故以哀傷素戔鳴尊

勅曰若然者汝當以女奉吾耶對曰隨勅奉矣故素

戔鳴尊立化爲稻田姬爲湯津栴櫛而插於御髻

乃使脚摩乳手摩乳釀八醞酒並作假辰八間各

置一口槽而盛酒以待之也至期果有三大蛇頭尾

各有八岐眼如赤酸醬松栢生於背上而蔓延

於八丘八谷之間及至得酒頭各一槽飲醉而睡時

素戔鳥尊乃拔所帶十握劍一寸斬其蛇至尾劍及

少缺故割裂其尾視之中有一劍此所謂草薙劍也

本名天叢雲大蛇所居之上常有雲氣故以名素戔鳥尊曰是神劍也吾何敢私以

安乎乃上獻於天神也

古語拾遺曰纏向日代朝令日本武命征討東夷仍

枉道詣伊勢太神宮辭見倭姬命以草薙劍授

日本武命而教曰慎莫怠也日本武命既平東夷

還至尾張國納宮寶媛淹留踰月解劍置宅徒

行登膽吹山中毒而薨其草薙劍今在尾張國熱田

社

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

日本書紀曰素戔鳥尊請曰吾今奉教將就根國故

欲下覽向高天原與姊相見而後永退矣勅許之乃

昇詣之於天也素戔鳥尊昇天之時溟渤以之鼓盪

山丘爲之鳴响此則神性雄健使之然也天照太神素

知其神暴惡至聞來詣之狀乃勃然而驚曰吾弟

之來豈以善意乎謂當有奪國之志歟夫父母既

任諸子各有其境如何棄置當就之國而敢窺

瑚璉集下

第三

地神五代事

第四

神宣事

天神名號事

相殿神事

三十二神事

第五

內宮御遷座事

外宮御遷座事

心御柱

事

御形文圖事

十種神寶事

三

種神寶事

一地神五代事

番地 五行傳神位座
道德極而生化德表也

天照太神

御出化次第見伊弉諾伊弉冊尊之段也

日本書紀曰

生五男三女後也

是後素戔嗚尊爲行之甚無狀何

則天照太神以天狹田長田爲御田時素戔嗚尊春

則重播種子且毀其畔秋則放天斑駒使伏田

中復見天照太神當新嘗時則陰放屎於新宮

又見天照太神方織神衣居齋服殿則剝天班駒穿殿薨而投納是時天照太神驚動以梭傷身由此發慍乃入于天石窟閉磐戶而幽居焉故六合之內常闇而不知晝夜之相代于時八十萬神會於天安河邊計其可禱之方攷思兼神深謀遠慮遂聚常世長鳴鳥使互長鳴亦以手力雄神立磐戶側而中臣連遠祖天兒屋命忌部遠祖太玉命掘天香山之五百箇眞坂樹而上枝懸八坂瓊之五百箇御統中枝懸八咫鏡一云眞經津鏡下枝懸青和幣白和幣相與致其祈禱焉又媛女君遠祖天鈿女命則手持茅纏之稍立於天窟戶之前巧作俳優亦以天香山之眞板樹爲臺以羅爲手櫛而火處燒覆槽置覆以下三字據本書補顯神明之馮談是時天照太神聞之而曰吾比閉居石窟謂當豐葦原中國必爲長夜云何天鈿女命噓樂如是者乎乃以御手細開磐戶窺之時手力雄神則奉承天照太神之手引而奉出於是中臣神忌部神則界以端出之繩乃請曰勿復還幸然後諸神飯罪過於素戔嗚尊而科之以千座置戶遂促微矣至使拔髮以贖其罪亦曰拔其手足之爪贖之已而竟遂降焉

不參神則諸佛魂佛則諸神性也人則神主神則人魂如
實知_二自心_一是名_二真如_一是名_二萬法生_一是名_二大悲方
便_一是名_二眞實覺王_一是名_二眞如海_一是名_二般若波羅密
王宮_一是名_二心柱_一是名_二三界建立主_一

天地靈覺書曰故天照太神則不起_二佛見法見_一萬慮
降伏與_二無心_一相應無着想故以_二無相鏡顯_一妙體是
表_二大空之德萬法蔭歷顯_一也

寶基本紀曰蓋百千萬號_二天津御量之功名_一也故神聖
曰內外不二常一體天神地神皆一露

大宗秘府曰惟是天地開闢之圖形天御中主神寶獨鉗
變座也諸佛菩薩一切群靈心識之根本一切國王之父
母也瓊玉亦名_二辟鬼珠_一亦名_二如意珠_一亦名_二護國珠_一
是置_二七寶案上_一作_二大利益_一

私勘仁王經受持品曰是般若波羅密是諸佛菩薩一
切衆生心識之神本也一切國王之父母也亦名_二神
府_一亦名_二辟鬼珠_一亦名_二如意珠_一亦名_二護國珠_一亦
名_二天地鏡_一亦名_二龍寶神王_一文可_レ思_レ之矣

瑚璉集上卷畢

于時

應永二乙亥卯月三日於弘正寺書寫之畢

惠 觀 云々

于時

同三十三年_{丙午}二月十七日於志州答志郡伊羅神

戶上村花表亭以_二宇治鄉興光寺當住之御本_一爲_二

末代興隆_一所_レ令_二書寫_一也本來云_二惡筆_一今又云_二

老眼_一筆跡狼籍後見轉千萬 執筆沙彌

道祥生年七十九歲

瑚璉云事

論語三卷公冶長第五云

子貢問曰賜何如子曰汝器也_{孔安國曰言汝是器用之人也}曰何器也曰瑚

璉也矣_{包氏曰瑚璉者黍稷之器也夏曰瑚殷曰璉周曰簠簋宗廟器貴者也}

簠



簠



瑚璉 上音胡下力展反禮記曰夏曰璉殷曰瑚云々與_レ今相違說者皆言

今誤也瑚璉之形不可_レ測至_レ周簠音_レ蓋音_レ軌則簠外方內圓也以

盛_二稻粱_一口徑六寸足高二寸也簠內方外圓也以盛_二黍稷_一其量與

一教經喪親章第廿二云

陳_二其簠簋_一而哀戚久_{簠簋祭器盛_二黍稷_一者也祭器陳外不_レ御}

也

開之後萬物已備而莫_レ昭_二於混沌之前_一因_レ茲萬物之化若存若已而下々來々_{天志}自不_レ尊于_二時國常立尊所_一化神以_二天津御量事_一地輪之精金白銅撰集地大水大火大風大神變通和合給_天三才相應之三面眞經津寶鏡乎鑄造表給_{利倍}故此鑄顯神名_二天鏡尊_一神明之道明現天文地理以存矣

同傳曰崇神天皇御宇止由氣皇太神天降坐_二天照皇太神與一處雙坐于_レ時從_二天上_一御隨身之寶鏡是也神代天御中主神所_レ授白銅鏡也是國常立尊所_レ化神天鏡尊月殿居所_二鑄造_一鏡也三才三面之內一面是也今二面者天鏡尊子天萬尊持之次沫蕩尊次伊弉諾伊弉冊尊傳持天神賀告詞白賜日神月神所化乃眞經津鏡是也天地開闢之明鏡也三才所_レ顯之寶鏡也當_下受_レ之以_二清淨_一求_レ之以_二神心_一視_レ之以_二無相無住_一因以爲_二神明之正體_一也今崇祭一面荒祭宮御靈一面多賀宮御靈坐也已上三面辭竟奉_支

豐受宮御鎮座本紀曰止由氣太神復昇_二高天原_一天日之小宮座于_レ時以_二吾天津水影乃寶鏡_一留_二居吉佐宮_一

又曰國常立尊所化神況_二形於天津水影_一以_二天津御

量事 眞經津寶鏡三面鑄表

仙宮秘文曰神鏡謂_二諸佛併移清鏡_一故且_二三世_一遍

十方_一以不_二改變_一凡鏡是三身具足見_二其形_一者應身

之體也窺_二其影_一者化身之相也觀_二其空_一者法身理也

與_二虛空_一等於_二一切世間中_一而現不_レ出不_レ入不_レ失

不_レ壞常住一心妙體故又一切得法一切不能染智體

也不動具足無漏動心衆生故以_二清鏡_一奉_二崇_一神體

而遍_二衆生之心_一以令_レ歸_二大道_一故圓鏡聲_二意光明遍

照故離_二無明_一是名_二大日_一生死長夜此時永曉自相不

可得妙解無_レ過_二斯矣_一眞如妙定空無有邊內不_レ遺照

外不_二步緣_一如_二月映_一水如_二日麗_一天眼見耳聞如密會

圓焉正法性遠離一切言語道也故以無爲反清淨是道

德也故覺王之心珠靈神之知杵天神寶鏡龍王智劍稻

倉魂五種子日頭月頭照處是神一無_二貳思_一也頓首再

拜々々幸甚々々

豐受太神宮繼文曰本有_二金剛界普賢如來月輪無相

無爲本形三密鏡_一是爲_二神體_一是名_二法身如來摧一切

衆生八萬四千塵勞門明無盡無餘煩惱惡業是名_二大

梵天王宮_一是名_二金剛法界宮_一豐受皇太神繼文開海

雲造玄脉知兩宮神祇本緣如予信兩宮人者堺內堺外

兩宮降臨次第記曰色界頂色究竟天二天王大梵天王曲形大空無相妙體是曰常住慈悲神王亦名本有常住神亦名無上極尊已上三神名本覺真如神

伊勢太神宮秘文曰天狹霧國狹霧變成神名名天御中主至尊國常立尊高天原之日小宮居此天人者無有欲性但有色變故名色界天也

天王神變深釋曰無上極尊者國常立尊又言心須彌頂

寶山記曰初初在神聖一名常住慈悲神王法語曰尸

棄大梵天王神語名天御中主神

又曰伊弉諾伊弉冊尊者第六天宮主大自在天王

坐或又謂伊舍那天伊舍那天后

地大 天八下靈神府中五魂座五靈五常名五大神也作萬生賢也

水大 天三下靈神靈力

火大 天合靈神

風大 天八百日靈神

空大 天八十萬靈魂神

件五種神則受天地之精氣而氣形質具而未

相離一名稱五大魂是中府藏坐神也故謂神者生之本形者生之具也古語謂獨化神也又云前五柱神者是生化五大尊座也

高皇產靈神皇祖神座

神皇產靈神大神主祖神也

津速產靈神天兒屋命祖神也

私云寶座事見上八柱神者所謂八心八子是也云々

都八柱神者天御中主神寶座之內獨化神也明

百億須彌百億日月百億四天下而為天地人

民化生元祖者

天鏡尊獨化神天津水鏡神三座是神鏡始元三光面目明白此時也

天萬尊獨化神天鏡尊次生也伊弉諾尊靈明座

沫蕩尊獨化神天萬尊次生也伊弉冊尊靈明坐

件三柱神者天御中主神出現之時三魂荒魂坐續

命神坐亦名稱三詔明神也

雄略天皇即位二十二年戊午外宮御鎮座也于時大

田命傳曰倭姬命儀宮坐冬十一月新嘗祭之夜深天

難人等退出之後神主部物忌等宣久吾今夜承皇

太神并止田氣皇太神勅所託宣也汝正明間給

倍凡神代神靈物之義獲田彥神謹啓白久夫天地開

名無上極尊亦曰常住毗尊謂惟三世常住妙心法界體相大智也故天神地祇本妙大千世界大導師是尊也所形名曰天御中主尊亦尸棄大梵天王故則爲大千世界主一矣

亦曰天御中主尊元氣所化水德變成爲因爲果而所露名天水雲神寶鏡名也天水雲神一任水德一名御氣都神一是水珠所成卽月珠是也亦號大葦原中津國主豐受皇太神也凡以一心分大千形體顯言爲陰爲陽蓋從虛無到化變天月地水感應道交故有名字相

麗氣府錄曰國常立尊亦名常住毗尊也惟是三世常住妙法身天神地祇元神也以一身分三七代形體顯言爲陰爲陽化生日神月神說法利生不可思議々々々

亦曰大元祖神離言說教如々自受法樂

亦曰自性法身名無邊法界元神此號虛無神一常住妙義本無象爲天讓日天狹霧地禪日地狹霧一運烈有形有念有言名元神不生不滅不垢不淨不增不減是故空中大空无相善哉亦曰神者天然不動之理卽法性身也通者是元壑

不思議慧卽報身也力者幹用自在卽應身也夫神一之妙孕氣含精至虛至一應群變而常寂生萬物而無心

豐受太神宮繼文曰天照豐受太神者無色界天宮非々想天能斷智體下々來々於欲界他化自在天王宮中爲大毗盧遮那佛爲除魔醯首羅難轉法輪化爲尸棄大梵天王爲娑婆世界主於光明飯世界是名大毗盧遮那如來於極樂世界是名天王如來於師子國是名大牟尼尊於大日本國是名大日靈貴豐受皇太神是也不來不去神本覺不生生神本覺歟神也一切衆生慈父常住不變妙理也堅越方便門橫成正覺智文天王神變深釋曰色究竟天三界法王主也主者法身也法身者遍照光明也下々在於欲界他化自在天王宮中時名號天王如來亦名大毗盧舍那如來名尸棄大梵天王事一切天類上首名父下下名母亦御氣都神與尸棄光天女天王如來上化下化名也但在時大梵天王功德無上下在時尸棄光天女功德無等々已上三重神號深義如是文

興言曰上瀨是太疾下瀨是太弱使濯之於中瀨也因

以生神號曰八十柱津日神次大柱津日神次將矯

其枉而生神號曰神直日神次大直日神以下略之

又曰然後洗左眼因以生神號曰天照太神復洗

右眼因以生神號曰月讀尊復洗鼻因以生神號

曰素戔鳴尊

倭姬命世紀曰荒祭宮一座皇太神荒魂

伊弉那伎神所生神名八十柱津日神御形鏡坐

神祇譜天圖曰多賀宮

伴神天下四方國人夫等諸事漏落事悉神直日命大直

日命聞直見直給安久平久所知食也

雄略天皇即位廿二年

大田命傳曰荒祭宮一座皇太神荒魂神也

伊弉諾尊到筑紫日向小戶橋之檣原而被除之時

洗左眼因以生日天子大日靈貴也天下化生名

曰天照太神荒魂荒祭神也

多賀宮一座止由氣皇太神荒魂也

伊弉諾尊到筑紫日向小戶橋之檣原被除之時洗

左眼因以生日天子天御中主靈貴也天下化而名

止由氣太神之荒魂多賀神是也

○天神首名稱天地俱生神一代謂天文地理日月星辰狀此時明現神聖出世天口成事

天御中主神

實錄曰天地開闢之始含精氣而應化之元神

視天下而式時候授諸天子照臨天地之

間而以一水之德利萬品之命故亦名曰御

氣津神也神語曰御義利也古語天津御氣國津

御氣亦天狹霧國狹霧是水氣易形天氣下降地

氣上騰天地和同草木萌動惟水道德矣

水字事

元命苞曰水之爲言準也陰化淖流施潛行也故

立字兩人交一以中出者爲水一者數之始

兩人譬男女始陰陽交以起一也水者五行始

焉元氣湊液也

○寶山記曰天御中主尊無宗無上而能化故曰天帝之神身即一無相寶鏡崇神體祭伊勢止由氣宮也

實錄曰於高天原化生神號曰天讓日陽神神國禪

日陰神皇神亦名天御中主尊也天地俱生神是

諸天降靈之本致一切國王之大宗也德被百王

惠濟四海歷代帝王崇尊祖萬方人夫敬神

祇故世質時素無爲而治不肅而化

神皇系圖曰神聖生其中焉號國常立尊矣亦

建立日月是也于_レ時以_二羸都鏡邊都鏡_一爲_二國集尊

靈_一而日神月神自匿_レ于天宮_一而照_二六合_一給矣亦曰

御餘寶十種神財者羸都鏡一面_一天字五輪形邊都鏡一面

地字圓形外緣八豐受皇太神_一照形天照皇太神此外神財載_二神寶之段_一

灌頂天女傳曰羸都鏡邊都鏡二面奉_レ授天孫天降居

余時一面淡路地八大龍神奉_レ鎮一面日向宮奉崇也

伊弉册尊神退事日本書紀一書曰伊弉册尊生_二火神_一國遇所_レ焦而神退

矣故葬_二於紀伊國熊野有馬村_一土俗祭_二此神之魂_一者

花時亦以_レ花祭又用_二鼓吹幡旗_一歌舞而祭矣

又曰伊弉諾尊拔_二所_レ帶十握劍_一斬_二軻遇突智_一爲_二三

段_一其三段各爲_レ神然後伊弉諾尊追_二伊弉册尊入_二於黃泉_一而

及_レ之共話時伊弉册尊曰吾夫君尊何來之晚也吾已

陰泉之竈矣雖然吾當寢息請勿視之伊弉諾尊不_レ聽

陰取_二湯津抓櫛_一牽_二折其雄柱_一以爲_二乘炬而見_一之者

則膿沸虫流時伊弉諾尊大驚之曰吾不_レ意到_二於不須

也凶目汚穢之國_一矣乃急走廻歸于_レ時伊弉册尊恨曰

何不_レ用_二要言_一令_二吾耻辱_一乃遣_二泉津醜女八人_一名略

○按此間中略追來伊弉册尊又追來伊弉諾尊已至_二泉津平

坂_一故便以_二千人引磐石_一塞_二其坂路_一與_二伊弉册尊_一

相向而立遂建_二絕妻之誓_一時伊弉册尊曰愛也吾夫君

言_二如此_一者吾則當殺_二殺汝所_レ治國民日將千頭伊弉

諾尊乃報之曰愛也吾妹言_二如此_一者吾則當_二產_一日將

千五百頭因曰自_レ此莫_レ過即投_二其杖_一是謂_二岐神_一也

○此間有脫文所謂泉津平坂者不_レ復別有_二處所_一但臨_二死氣

絕之際是之謂歟所_レ塞磐石是謂_二泉門塞大神_一也亦

名_二道返大神_一矣

舊事本紀曰伊弉册尊者葬_二出雲國與_二伯耆國_一堺比

波山上也

保食神事日本書紀曰天照太神在_二於天上_一曰聞_二葦原中國有_一

保食神_一宜余月夜見尊就候之月夜見尊受_レ勅而降

已到_二行保食神許_一保食神乃廻_二首嚮_一國則自_レ口出

飯又嚮_二海則鰭廣鰭狹亦自_レ口出又嚮_二山則毛龜毛

柔亦自_レ口出夫品物悉備貯_二之百机_一而饗_二之是時月

夜見尊忿然作_レ色曰穢哉鄙哉寧可_レ下_二口吐之物_一敢

饗_二我乎廻拔_一劍擊殺然後復命具言_二其事_一時天照太

神怒甚之曰汝是惡神不_レ須_二相見_一與_二月夜見尊_一一

日一夜隔離而住

又曰伊弉諾尊既還乃追悔之曰吾前到_二於不須也凶

目汚穢之處_一故當_二滌_一去吾身之濁穢_一則往至_二筑紫日

向小戶桶之檣原_一而被陰焉遂將_二盪_一滌身之所_一汚乃

御中主神一未顯露一名國常立尊亦稱國底立尊天地之間稟氣之靈蒙一大五種之神力受天地父母之生身以言語授世人依之得一切智心利萬物生化也

伊弉諾尊天降陽神名日子伊弉冊尊天降陰神名日子

從國常立尊至惶根尊天神六代之間有名字

未現尊形五位神坐其後轉變而合陰陽有男女形應化相生而專心珠神以清淨爲先神態

興焉伊弉諾伊弉冊二尊承天御中主神詔即以天瓊戈一指立於磯敷廬島之上以爲國中之天

柱則化豎八尋殿共住生大八洲次大小島合拾四箇島其後處々小島皆是水沫潮凝而成者也伊

弉諾伊弉冊二尊俱議曰吾已生大八洲及山川草木何不生天下之主者歟先生日神號曰大

日靈貴亦云天照太神亦大日靈尊此子光華明彩照徹於六合之內故二神喜曰吾息雖多未

有若此異靈之兒不宜久留此國自當早送于天而授以天上之事是時天地相去未遠

故以天柱舉於天上矣次生月神號月讀尊亦云月夜見亦月弓其光彩亞日可以配日而

治故亦送于天矣次生素戔嗚尊次生蛭子日本書紀等同之

聖德太子神皇系圖曰蓋聞伊弉諾尊則東方善持藏愛護善通由

賀神梵所名之伊舍那天也伊弉冊尊則南方妙法藏

愛慢行識神亦名之伊舍那后也凡從自性淨妙藏

乃至邪蛇地爲下化衆生隨順方便故假化義興

生滅形依無爲行滿即得正果是大慈大悲神慮

也

神皇實錄曰伊弉諾伊弉冊尊此二柱尊者第六天宮主

大自在天王座

寶山記曰任皇天宣受天瓊戈以呪術力加持

山川草木能種々未曾有事

日本書紀一書曰伊弉諾尊曰吾欲生御寓之珍子

乃以左手持白銅鏡則有化出之神是謂大

日靈尊右手持白銅鏡則有化出之神是謂月

弓尊又回首顧眄之間則有化神是謂素戔嗚

尊

天地麗氣曰伊弉諾伊弉冊二神尊持左手金鏡日ノ神陰生

持右手銀鏡陽生名曰日子月天子是一切衆

生眼目坐故一切火氣變成日一切水氣變成月三界

自神武天皇即位元年辛酉至崇神天皇代十六十八年

辛酉歷年六百廿七年至垂仁天皇廿四年乙卯六百五十

年自垂仁天皇即位二十五年丙辰至雄略天皇廿一

年丁巳中間四百八十四年

自雄略天皇即位廿一年至元德元年八百九十六

年至今年延元二年丁丑九百四年神武即位元年以

來二千三十年

一天祖神事

天讓日天狹霧國禪日國狹霧尊

以天於坐而成神號天讓日國禪日皇太神イハラハシマシテ亦名天

御中主尊也天地與俱生神也惟是諸天降靈之本致

一切國王之元宗也

伊勢太神宮秘文曰夫以天地之起在水氣之用其清

陽爲天其重濁爲地故從上高天海至下根底而

同時成立也余時水氣高天海初出之故謂之名天讓

日國禪日天狹霧國狹霧尊亦曰元氣諸神性是元有身

形但有心性故曰無色界高天原最上也

一天神七代事天有七星故曰七代

弘仁六年萬多親王奉勅
神皇實錄曰

大元謂無名之名無狀之狀皇稱氣神万物靈臺日月星氣是天

國常立尊無名無狀神此著精之君木本官之臣自昔以來

謂大易者虛無也因動爲有之初故曰大初有

氣爲形之始故曰大始氣形相分生天地人

也大方道德者虛無之神天地沒而道常有矣原性

命受化於心々受於意々受之精々受之神

形體消而神不毀性命既而神不終形體易而

神不變性命化而神常然因以名國常立尊以初

爲常義者也

○天地耦生神

謂耦生天地對耦萬物生故八天五行佐天地

爲從水生數三成數八俱言八舉其成數矣

明堂以祭五神而已

水國狹槌尊

火豐斟淳尊

木泥土煮尊

金大戸之道尊

土面足尊

件五代八柱天神光胤也雖有三名相未現形體
五大府中坐故名天地耦生神也應化神名曰天

土

面^五足
惶根

此五柱者國常立
具德也

伊弉册

自鏡生
大日靈尊

天照太神

一
天鏡尊

二
天萬尊

三
沫蕩尊

素戔嗚尊
姪子

合治一百七十九萬二千四百七十
六年也

吾勝尊

男子

自玉生

吾勝尊與豐
秋津姬始有
夫婦之禮

神武

綏靖
治廿二年

安寧
治卅八年

懿德
治卅四年

孝昭
治八十六年

孝安
治百二年

孝靈
治七十六年

孝元

開化
治六十年

崇神
治六十八年

垂仁
治九十九年

景行
治六十年

成務
治六十年

仲哀
治九年

神功

應神
治卅一年

仁德
治八十七年

履中
治六年

反正
治六年

允恭
治四十二年

安康
治三年

雄略
治廿三年
略外宮御鎮座

釋天讓日國禪
月天狹霧國狹
霧尊

過去七佛以
前神也

水 火 木 金
一國狹植
二豐鬱淳
三泥土煮
四沙土煮
五土煮
六土煮
七土煮
八土煮
九土煮
十土煮
十一土煮
十二土煮
十三土煮
十四土煮
十五土煮
十六土煮
十七土煮
十八土煮
十九土煮
二十土煮
二十一土煮
二十二土煮
二十三土煮
二十四土煮
二十五土煮
二十六土煮
二十七土煮
二十八土煮
二十九土煮
三十土煮
三十一土煮
三十二土煮
三十三土煮
三十四土煮
三十五土煮
三十六土煮
三十七土煮
三十八土煮
三十九土煮
四十土煮
四十一土煮
四十二土煮
四十三土煮
四十四土煮
四十五土煮
四十六土煮
四十七土煮
四十八土煮
四十九土煮
五十土煮
五十一土煮
五十二土煮
五十三土煮
五十四土煮
五十五土煮
五十六土煮
五十七土煮
五十八土煮
五十九土煮
六十土煮
六十一土煮
六十二土煮
六十三土煮
六十四土煮
六十五土煮
六十六土煮
六十七土煮
六十八土煮
六十九土煮
七十土煮
七十一土煮
七十二土煮
七十三土煮
七十四土煮
七十五土煮
七十六土煮
七十七土煮
七十八土煮
七十九土煮
八十土煮
八十一土煮
八十二土煮
八十三土煮
八十四土煮
八十五土煮
八十六土煮
八十七土煮
八十八土煮
八十九土煮
九十土煮
九十一土煮
九十二土煮
九十三土煮
九十四土煮
九十五土煮
九十六土煮
九十七土煮
九十八土煮
九十九土煮
一百土煮

地 水 火 風 空

此五柱者天御中
主具德也
一主具德也
二主具德也
三主具德也
四主具德也
五主具德也
六主具德也
七主具德也
八主具德也
九主具德也
十主具德也
十一主具德也
十二主具德也
十三主具德也
十四主具德也
十五主具德也
十六主具德也
十七主具德也
十八主具德也
十九主具德也
二十主具德也
二十一主具德也
二十二主具德也
二十三主具德也
二十四主具德也
二十五主具德也
二十六主具德也
二十七主具德也
二十八主具德也
二十九主具德也
三十主具德也
三十一主具德也
三十二主具德也
三十三主具德也
三十四主具德也
三十五主具德也
三十六主具德也
三十七主具德也
三十八主具德也
三十九主具德也
四十主具德也
四十一主具德也
四十二主具德也
四十三主具德也
四十四主具德也
四十五主具德也
四十六主具德也
四十七主具德也
四十八主具德也
四十九主具德也
五十主具德也
五十一主具德也
五十二主具德也
五十三主具德也
五十四主具德也
五十五主具德也
五十六主具德也
五十七主具德也
五十八主具德也
五十九主具德也
六十主具德也
六十一主具德也
六十二主具德也
六十三主具德也
六十四主具德也
六十五主具德也
六十六主具德也
六十七主具德也
六十八主具德也
六十九主具德也
七十主具德也
七十一主具德也
七十二主具德也
七十三主具德也
七十四主具德也
七十五主具德也
七十六主具德也
七十七主具德也
七十八主具德也
七十九主具德也
八十主具德也
八十一主具德也
八十二主具德也
八十三主具德也
八十四主具德也
八十五主具德也
八十六主具德也
八十七主具德也
八十八主具德也
八十九主具德也
九十主具德也
九十一主具德也
九十二主具德也
九十三主具德也
九十四主具德也
九十五主具德也
九十六主具德也
九十七主具德也
九十八主具德也
九十九主具德也
一百主具德也



天御中主
大神元立
國常立

秋津洲及
山川草木
海河風神
等并日月
素戔嗚
蛭子加持
出現

伊弉諾

日神
大日靈貴

月神
月夜見
月弓尊
月讀尊
月夜見
月弓尊
月讀尊

津速產靈神
神皇產靈尊
高皇產靈尊
亦名高貴神

豐秋津姬
女子

皇御孫

治卅一萬八千
五百卅三年

大八洲生

彥火々出見

治六十三萬七千
八百九十二年

行龍宮

鷦鷯葺不合

治八十三萬六千
四十二年

母海神女

近_二日所_レ出故曰_二日本_一也仍又號_二扶桑國_一切韻曰和者東海中國也

日本書紀曰神武天皇卅有一年夏四月乙酉朔皇輿巡幸因登_二腋上_一噉間丘_二而廻_一望國狀_一曰妍哉國之獲矣雖_二內木綿之眞_一遂國_一猶_二下有如字_一蜻蛉之聲_一焉由_レ是始有_二秋津洲之號_一也

神祇譜天圖曰一云日本者浦安國亦曰細戈千足亦曰磯輪上秀眞國亦曰玉垣內國

私云秋津洲者獨鉈形是也

天地麗氣府錄曰于_レ時爲_二下化衆生_一天王如來天御中主尊詔_二伊弉諾伊弉冊_一宜_二汝往修_一之賜_二天瓊戈_一而詔寄賜也天柱尊奉_レ詔立_二於浮雲之上_一共計謂有_二一物_一若_二浮膏_一其圓中有_レ國乎廼以_二天瓊戈_一天獨探_レ之獲_二八葉滄海圖形_一則投_二下其戈_一而因書_二滄溟_一而引上之時自_二矛末_一落垂滴瀝之潮凝結爲_レ島_一印明名曰_二礪馭廬島_一矣_{婆娑}世界則以_二天瓊矛_一指_二下於礪馭廬島_一之上以爲_二國中之天柱_一也天瓊杵謂_二眞如界變成_一金剛寶杵_一々變成_二風氣_一風氣轉成_レ神々變成_レ生々轉成_二魂魄_一魂魄轉成_二人體_一故八葉蓮臺自在安樂也是

如意赤玉德也元神用化也伊弉諾伊弉冊_二尊天_一降其島_一化_二豎八尋殿_一共住_二同宮_一矣號曰_二大日本高

見國_一大日本者三

仙宮祕文曰自_レ戈落滴瀝之潮_一如意寶凝結爲_レ島名_一礪

馭廬島_一矣_神明降跡國萬寶聚所_一珠表形_一凝結爲_レ島名_一礪馭廬島_一矣_歸之地也_一因爲_二名也_一則以_二天之瓊戈_一亦名_一天御

也_一指_二立礪馭廬島上_一爲_二國中之天之柱_一國之柱_一也此云_二心御柱_一是起也是諸尊能生之本源萬法所

歸惣體也

天地靈覺祕書曰大日本國者大八洲也惟大日靈貴治國也亦八葉花也即金剛胎藏諸會大日宮世界國土也凡世界自_レ本々覺也自_レ本无明也本又法界也本是衆生本是佛也本者法然道理也

或曰礪馭廬島_一唵呼嚕々々神明招請之國也

豐受皇太神繼文曰

南閭浮提

サハバツ

葦原

一神代略系圖

從彼沒生初禪梵世中爲大梵王而唯獨一位而懷不悅卽作是念時第二禪天壽盡故生初禪中如是展轉六天宮殿及四大洲悉生也論云劫盡燒壞時一切皆空故生福德因緣力故十方風至相觸能持大水々々上有二千頭人二千手足名曰華網是人齊中出千葉金色妙寶蓮華其光大明如萬日俱照華中有八結跏趺坐此人復有無量光明名曰梵天王此梵天王心生八子八子生天地人民也

法化城喻品

余時上方五百萬億國土諸大梵王此悉自觀所止宮殿光明威曜普所未有歡喜踊躍生希有心卽各相詣共議此事以何因緣我等宮殿有斯光明而彼衆中有大梵天王名曰尸棄是一大三世界主一切諸神大祖也亦曰常住毗尊一須彌建立其厚十六萬踰膳那々觀想九山與八海中有大威神宮々柱廣敷立亦持藏山與大宮殿亘三世有大威神无上極尊世界大導師爲神通自在如水珠如火珠顯萬德施萬用

朱雀二年乙酉

寶基形文圖曰天地開闢基在大光明其中有精氣一名曰神亦名心余時爲萬物應化神假名號廣大

慈悲大御神也掛畏以天津神策用抱一而天地與陰陽同節同和合敬合愛顯五常文圖悟八子給修應化身照神道可也

一日本國造化事

先代舊事本紀曰天祖詔伊弉諾伊弉冊二尊曰有豐葦原千五百秋瑞穗之地宜汝往修之則賜天瓊戈而詔寄賜也伊弉諾伊弉冊二尊奉詔立於天浮橋之上共計謂有物若浮膏其中蓋有國乎廼以天瓊矛而探之獲是滄海則投下其矛而因畫滄溟而引上之時自矛末落垂滴瀝之潮凝結爲島名曰礪馭廬島矣則以天瓊矛立於礪馭廬島之上以爲國中之天柱也伊弉諾伊弉冊二尊天降其島則化豎八尋殿共住同宮矣
史記夏本紀正義曰括地志云和國武皇后改曰日本國在百濟南隔海依島而居
日本私記曰日本國從大唐東方萬餘里日出東方昇于扶桑故云日本
或書曰日本國者自大唐而新名也斯國者自大唐東方萬餘里居于東極日出東方昇于扶桑已

母道育養萬物精氣吾不知其名二字之曰道我不見

如如母之養子也不知當何名之見萬物皆強爲之名曰大不知其名強

從道之所生故字之曰道也無上羅而無外無不不范容故曰大

日本書紀曰古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟

滓而含牙及下其清陽者薄靡爲天重濁者淹滯而

爲地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而地後

定然後神聖生其中焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬

猶游魚之浮水上也于時天地之中生一物狀

如葦牙一便化爲神號國常立尊至尊曰尊

亦曰天地初判一物在於虛中狀貌難言其中自有

化生之神號國常立尊亦曰國底立尊

亦曰古國稚地稚之時譬猶浮膏而漂蕩于時國中

生一物如葦牙之抽出也因此有化生之神號可

美葦牙彥舅尊

又曰高天原所生神名曰天御中主尊

又曰天地初判有物若葦牙生於空中因此化

神號天常立尊

古語拾遺曰天地剖判之初天中所生神名曰天御中

主神其子有三男長男高皇產靈神次津速產靈神

次神皇產靈神其高皇產靈神所生之女子名曰栲

幡千千姬天祖天津彥尊之母也

雄略天皇即位廿二年戊午大佐々命訓傳云々

神記曰豐受皇太神一座天地開闢初於高天原成神

也一記曰伊弉諾伊弉冊尊古語伊舍那天先生八大洲

次生海神次生河神次生風神等以降雖經一

万余歲水德未露天下飢餓于時二柱神天之御

量事平以天瑞八坂瓊之曲玉捧九宮所化神名

號止由氣皇太神久千變萬化受一水之德生續

命之術故名曰御饌都神也古語曰大海之中有二

物之浮形如葦牙其中神人化生號天御中主神

故號豐葦原中國亦因以曰止由氣皇神也故天地

開闢之初神寶日出之時御饌都神天御中主尊與大

日靈貴天照太神二柱御大神豫結幽契永治天

下免或爲日爲月永懸不落或爲神爲皇常以

無窮光華明彩照徹於六合之內矣

府錄曰蓋聞壞劫後過廿空劫已一切有情業增上力

故空中漸有微細風是世間將成前相也是風漸增成

世界最初第三禪器世界成次第第二禪及初禪六欲天

四大洲次第皆成也凡成劫之時雖無有一有情第四

禪天人壽業盡故從彼沒已生第三禪如是次第三

禪天沒生第二禪中第二禪中有二有情壽業盡故

瑚璉集上

第一

天地開闢事 本朝造化事

第二

神祇系圖事 天祖神事 天神七代事

一 天地開闢事

古今帝王年代曆曰昔者天地未分謂之太易元氣始萌謂之太初形氣始端謂之太始形變有質謂之太素質形已具謂之太極五氣運通爲天地之二靈清以陽發升而爲天濁以陰凝降而爲地天地形別謂之二儀人生其間謂之三才

周子通書曰無極而太極動而生陽動極而靜而生陰靜極復動一動一靜互爲其根分陰分陽兩儀立焉陽變陰合而生水火木金土五氣順布四時行爲五行一陰陽也陰陽一大極也太極本無極也五行之生各一其性無極之真二五精妙合而凝乾道成男坤道成女二氣交感化生萬物萬物生々變化無窮焉

周易係辭曰易有大極是生兩儀孔穎達疏云太極謂天地未分之前元氣混而爲一氣既分之後陽氣居上爲天陰氣居下爲地居上者輕清居下者重濁列子曰清輕者上爲天濁重者下爲地冲和者爲人謂之三才

易曰有天地然後有萬物有萬物然後有男女有男女然後有夫婦有夫婦然後有父子有父子然後有君臣有君臣然後有上下三五曆紀曰未有天地之時混沌狀如雞子溟滓

始牙濛鴻滋萌又曰清輕者上爲天濁重者下爲地冲和氣者爲人故天地含精萬物化生

五行大義曰凡萬物之始莫不始於無復有是故易有太極是生兩儀兩儀生四序四序生之所生也有萬物孳繁然後萬物生成也皆由陰陽二氣鼓儗陶鑄互相交感故孤陽不能獨生單陰不能獨成必須配合鑪冶余乃萬物化通

老子經曰有物混成先天地生謂道无形謁沌而成萬寂兮寥兮獨立而不改者無音聲寥兮無形獨立而

不改者無正變不改者化有常也周行而

不殆道通行天地無所不入在陽不殆可爲天下

(井上翁藏本奥書)

玄義端書

いにし世のことからよ慈遍となん云し白うるりの法師の侍けるが幸有家になり出けん若かりし頃いともかしこき三種の道の面影をそこはかとなく聞ぬれど菊理媛のめぐみもなくて法師の身と成ける浦山しからぬさまにはあらねどふりにし道をしたふまゝに三種の道の理りをもて十種の道をときけるぞいといみじ脱歟かりけるしかはあれど其ことの葉おのがもる法にて吾もる神路を尋し文なれば香山に至ることづてともおもほえてたゞにやみなんもかいなくまたやごとなき文と思ふ人は如何に侍らん儒釋道の三教ミツツにてときぬゆへ其さま身におはずむかし人の言る書ことを○ことごとく歟信せば書なきにしかじとは是なめり一品藤の白玉翁のたまふ玄義は沙門の編なれども三種の傳を得たりと見ゆ然れ共金銀砂石錯綜紛雜せるゆへ具眼人ならでは吹分難きを吾鹽土翁是を拔萃して風水草に載せられぬと今奴吾此文を寫ぬは尊き文とも思ほえねど道を尋るよすがともならめと思ふまに／＼筆を染る事實破鼓の皮までたくわへたるのたぐひな

らんかも

神京六條川原潮汲

寶曆六年 丙子十月八日 岸大路八垣橘長之謹書

三結成者一人是也神寶卽主都无別體天祖所授繼
德未變其文義則如前辨耳

略料簡者問神寶傳來其相如何答於彼天神且置不
論於地神者皇孫是也何者此尊從天化生所以神寶
同現色質

問上天神何傳欲體耶答靈性周遍未隔一塵天
神化生何障此體例如妙音從莊嚴國不起于
座而令各來況得機緣有佛任身神力難思凡智
爭計故於天宮雖端嚴身至此葦原而化色身
煩妄情莫疑天授和光無邊靈應如件

舊事本紀玄義卷第九終

本云

此書十卷內四五九以上三卷殊秘藏甚深云々

名天之香子弓地之羽々矢也。自彼天上令投降給天之逆太刀天之逆鉞大小之金鈴五十口云々乃至謂男弓弭之物大刀小刀弓矢楯梓鹿皮角猪皮忌鐵忌鋤類是也。女手末之物麻桶綿柱天機具荒妙衣和妙衣荷前御調類是也云々。總諸雜寶其類無量如彼送文召立記等。

用料簡者問諸寶等是何意耶。答天地開闢之後

以天津御量事令示靈物如明彼鎮座記何者諸行悉育群生故知萬物無非神財所以如言治生產業皆順正法不相違背何者迷則三道流轉悟則果中勝用疏文也。世間名字出自佛經明說業即解脫可解也。

問神寶如何表佛法耶。答雖表議未細判歟。故雖

難計試存解者十種自當十波夢密所以佛神度生不異天潤萬物檀波羅密地調千品戒波夢密

顯刀用若非大智何弁品物十種言葉示生死根八識含藏號御倉神例如止觀明理即云一念心

即如來藏理乃至嘆理而舉譬曰明月神珠在九重淵內驪龍領下有志有德方乃致之豈如下世人龜淺浮

虛競執瓦石草木謂爲寶云々龍表陰陽即在御頸

玉之含緒思之可知。天地兩神顯密二法已知如前卷

今約神寶謂天鏡則本佛一圓如地境者迹佛八相若

論不二一本迹理一天圓妙法地八蓮花於宗相承有二

鏡譬深旨分明法理必然又天鏡則金五佛位如地鏡

者胎八葉尊亦寶珠胎如來藏理衣內珍寶玉順明珠本

在己心兼蘇悉地以劍爲金自掌利惠蠅表器

界顯金剛劍從八海底化八握相令因理珠

現順輪果須彌半腹盤于中央日月兩輪耀于及

光元天逆矛即文殊劍八坂瓊者八字德也。更問十種中

則劍及後三多少同體如上通釋云々若論元理藥

師木德十中四王普賢延命各如鏡則日天觀音蓮葉二重

五股八葉千手更問

問若論三種相望如何。答類通三種文義无窮細論

不遑得意可解且如仙宮秘文中明三種神寶各表

德曰玉者皇天之心珠矛者覺王之獨鉗鏡是三身具足

見其形者應身體也寫其影者化身之相也觀其空

者法身理也云々

劍玉各三可准三才又珠劍鏡此三如現即法報應

其義如云境名法身智名報身鏡智相應能起化

用名爲應身釋意可知

矣

亦此外有神代三面謂國常立尊所化神天鏡尊居二月殿以天津御量事撰集地輪精金白銅奉鑄顯此三面鏡也爾時神明之道明現今天文地理以存矣天地開闢之明鏡也三才顯現之寶鏡也然天鏡尊傳天萬尊次沫蕩尊及傳二尊云々其一面者豐受御靈圓中五輪天含五行一面多賀宮御靈也一面荒祭宮御靈也云々三面三才互具互顯亦於一鏡而含三種

用料簡者問云何含三答玉劍二種皆具三義於內侍所亦備三種謂圓天珠八葉地鏡明光人劍照徹天下三稱三才各具各論已如前卷當令合解謂天瓊玉曲妙御宇以諸寶如兩白銅鏡以分明看山川海原乃提靈劍平天下焉問三面鏡何答如彼三種雖掌三才尙象地德繼皇孫位此三面亦雖表三才殊掌天寶如實錄曰天鏡尊獨化神天津水鏡神三坐是神鏡始元三光面目明白此時云々彼天此地神寶靈同故如麗氣府錄注曰大日本國者三光殿本名也云々豎照三才橫化八洲神靈即玉靈德可_實知問橫豎表何答劍豎鏡橫玉表橫豎三種三面互用可解問此三種者在何處耶答以往九帝同殿同

床然至崇神天皇御宇漸畏神威使石凝姥天目一箇二氏孫奉鑄造鏡劍以爲護身將改奉齋于時倭姬頂戴二種廣求諸處遂奉鎮座勢州度會故寶鏡則內宮御體也其寶珠則外宮相殿但寶劍者日本武尊平東夷時奉止熱田_{如倭姬世紀等}問鏡劍奉寫而珠如何答寶珠所現不同餘財故造不造未詳其相_{見一紀具口傳}因尋云不啻合尊自龍宮所傳二顆珠者在何所耶答未見文也且如風聞乾珠滿珠被埋箱崎云々

三攝部類者亦用二意先類寶部次用料簡其寶部者豐受相殿皇孫御靈是金鏡坐天兒屋命御靈笏坐天太玉命寶珠圓宮坐天照太神相殿手力男命御靈弓坐萬栲幡豐秋津姬命御靈劍坐又朝熊神葦不合金鏡是也如社記曰朝熊六坐倭姬命奉鑄白銅日月兩鏡坐云但月讀命元是鏡坐也今則男形乘木馬云々凡厥瀧並伊雜大歲如是宮社不能枚舉其神體則或鏡或書廣如社記可見可尋其外雜寶不能勝計大畧如明御鎮座記夫神代靈物之義者獲田彥神之啓也玉者日之靈光月之精明也笏者天之四德地之五行也又劍者龍神所造土精之金也弓箭輪王所造陰陽之義也故

實致併以此玉而爲其璽元氣現形故曰水珠陽氣芽物故云寶珠陰陽所化是稱一尊氣形所施恒遍始終指此玉即天御中主豐受變化已如前判故九宮者如下常明之天有三台地有九野然今文云捧九宮者從天應地故稱宮天地開闢之時起形總圖天下之御量事即八坂瓊之曲玉也神璽所化之寶珠也故號神璽亦稱圖形各有謂也以可以知也唐令云璽者以白玉爲印也事始云春秋運斗樞曰舜爲天黃龍負圖出中有璽章文曰文黃符璽說文曰璽玉即世璽譜曰傳國璽秦始皇刻世記曰曾公作弁帝王世曆云秦制傳曰璽是風俗名別號同寶珠耳隋書志曰皇帝八璽有神璽有傳國璽而不傳國璽明受之於天運皇帝負辰則置神璽於筵前之右置傳國璽於筵之左又有六璽一皇帝竹璽封命諸侯及三公用之

陰潤爲玉陽牙爲劍故稱云天瓊玉牙一秘府精光照徹自是明鏡是故名曰瀛都邊都如秘府如云天御中主之神璽也惟是天地開闢之圖形也亦名瓊玉亦名逆予或天地鏡或國家固即心御柱及天御量柱各々異名一々如文仍於是德並開三種從性現相准上可也知二寶劍義此寶亦同可云神璽神祇令曰璽謂信也猶云神明之徵信此即以鏡劍稱璽也突然寶劍者草薙是也素蓋鳴尊得自蛇尾謂濁氣下雖成地蚺其靈施德終顯寶劍故論下則爲蛇々地而論德則爲明明天彼素蓋鳴昇天之時天明玉神奉迎令進瑞八坂瓊之曲玉矣亦素蓋鳴降地之後得此靈劍以五世神還奉天矣陰玉常降普生萬物陽劍常昇鎮諸惡善惡二神互取劍玉各生男女其意可知如彼逆矛下海底亦以瓊玉而捧九宮故論一劍堅兼三種其鋒天珠八握地鏡劍體一人總提天下三寶鏡義亦是神璽於岩戶前所奉鑄之鏡如云名曰像八咫鏡八頭花崎八葉形也故名八咫也中臺圓形座也圓外日天八座謂表八州也卽在于內侍所神鏡是也云紀云詔曰當世思兼神手力雄命天石門別神云此鏡者專爲我御魂一如拜吾前奉齋

兼始終亦開具德以爲衆寶生死二玉天地光胤足與道反陰陽變化道異足住生滅四相前後互交表天四德蛇比禮象地八握蜂比禮者瀛都五行故令此德而昇彼天稱蜂比禮以成二品物故云一二乃至九十而布瑠部謂言本矣

問所言布瑠部等之言如何答天神御祖敕詔曰若有痛處者令茲十寶謂一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ

九ツ而布瑠部由良由良止布瑠部如此爲之者死人反生矣是則所謂布瑠之言本矣已上紀文謂勦品物俱掌一人其餘皆並陰陽二德亦於十種惣爲二儀前九

則陰第十則陽天地元靈是曰布留振靈受生任本曰舊生類調氣必振其身續命德用尤有其謂惣尋緣起不_レ出動靜靜陰津音動陽雄音其津塞口塞

則歸死其雄開口開則續氣然前九津津音靜極而出十音即生元始前謂一津二津三津四津五津六津七津八津九津

十雄而天布留惠由羅由羅登布留惠々元氣之動陰陽之振由良由良思之々々如書曰無極而太極動

而生陽動極而靜靜而生陰靜極復動一動一靜互爲其根分陰分陽兩儀立焉已上書文伊弉諾尊得三貴

子召其頸玉之緒母由良爾取由良迦斯而賜詔其

頸珠名謂御倉板舉神云々頭天陽也體地陰也以兩

際稱曰御頸陰陽動中而芽萬物以此含靈名爲御倉但傳言而布羅而布羅波羅而布羅之真言也云々

於義雖然於語未便字音既異豈用辭讀況於真言未渡之前有誰令傳佛法之語故論其義可云云

真言所以稱曰本佛真言三十七尊惣是也亦熾盛光心咒也

抑津雄二音阿吽兩聲不能細判具如悉曇仍正紐傍紐正雙傍雙十二反音其義可尋

問此十種者在何處耶答十種三種同異如上若余其體簡別不輒且如此紀

第五卷明至于崇神天皇御宇建布都社奉納齋矣在大倭國山邊郡也

釋三種者亦用二意先釋其義次用料簡三種義者一寶珠義稱爲八坂瓊之曲玉如云二尊即捧九

宮而所化名豐受皇神水德之術續命之化故名曰御饌都神也云々故此玉者二尊所化或紀亦云天御中

主所化之玉或稱天地開闢之圖異說不定云々雖似異途敢非相違各出具德未盡多含千萬雖說不可知實且順現文宜辨大概謂天地元詠示

意寶珠火德所成如諸文記

已上如麗氣等

仍如神紀以

兩鏡而爲多賀荒祭御靈是由本末兩儀同體故名荒魂舊文可見又如灌頂天女傳曰瀛都鏡邊都鏡二面奉授天孫天降日向宮居爾時一面淡路八大龍神奉鎮一面日向宮奉崇也云々

三八握劍即叢雲劍亦名草薙明珠寶劍圖車輪形八州

八葉掌天地上一二鏡者天地一劍者是人此三寶描以

兼始終亦開具德以爲衆寶圖五腹形

已上取

但八

握者未辨其數如十握者圖五葉形若准之者取

中間歟所以空色即當天地云々

四生玉者府錄曰如意寶珠謂火珠是也云々准上邊都

鏡義而已

五死玉者府錄曰如意寶珠謂水珠是也云々准上瀛都

鏡義而已

六足玉者府錄曰表父體形也示上字也云々圖形如

舊即在別紙可准生玉義是陽魂也

七道反玉府錄曰表母體形也示下字也云々圖形如

舊即在別紙可友死道是陰魄也

八蛇比禮府錄曰陽明衣纏表也水字本也故白色也云々

是清淨義圖形如舊即在別紙可准道反

九蜂比禮府錄曰陰懸帶纏表也火字本也故赤色也云々は正直義圖形如舊即在別紙可准足玉云々

十品物比禮府錄曰寶冠是也圖形在別紙云々謂品物者意甚廣哉堅掌三才橫領四海冠天啓地笏直即人若領四海必化八州惣以此一而攝上九各論其義以令統收

用料簡者問云何終一而攝餘耶答終一寶者

是一人也故十種通无非品物御即位嚴皆此天寶衆德

具足方成地玉謂攝十種不出三才初二種則惣舉

天地如彼元祖讓日禪月次八握劍授八州地中

玉四種授天四德從二比禮及終品物還會初鏡

授一人位於初二鏡即有品物其瀛都天其邊都地

於三次一劍亦有品物其及則天其握則地兩德互兼即

是一人各具橫豎皆掌天地堅則三才橫則八州八葉

八握一手一掌萬民預利如意寶珠三種互用如前卷耳

問三才授德一兩是足何舉同儀用十種耶答三

才成萬物不出兩儀雖然論德非無次第今此

十種從天降地亦至比禮從地昇天還合上寶而

列水火逆次授之意可見也故以品物通會前九

開合自備橫豎宛然二鏡天地一劍是人此三即橫以

雖爲地鏡。再尋造緣。亦非全同。何者十種先奉捧彼饒速日尊。此尊去後傳美真千命以相承之。而神日本磐余彥命令平此國之時則以奉之云々三種神器別爲皇孫奉授之後次第傳之畢具見其中寶鏡稱爲邊津太有相違如何會之寶鏡可准天紀文明玉所造珠。彼此雖別依八當知天地互含天地即以德同令後名前故論天鏡其體難思難測隨而異說區而不定或云神代三面鏡者生自天鏡尊心月輪是也或云三面自國常立傳天鏡尊及至一尊或云於月宮殿而鑄之或云三面不知鑄冶其實現色而論造者石凝姥神同奉鑄歟既爲同人豈爲別鏡料簡如上比量可知故論色造皆是地鏡若論理造皆是天鏡寶鏡如此劍玉准知縱爲蛇尾何混性相就中玉則專掌天寶故諸記多未云造也問造體在地何煩約天但皆共可云同現耶答天地精明空色常遍古今畢竟冥顯不別雖爲如是尙迷靈性況示偏義誰知神應問若爾可云同一寶耶答偏一非一偏二非二是故當知如神聖曰內外不二常一體天神地神皆一露云々

三會多少者亦爲二意先會多少次用料簡其多

少者十種三種其會異者開合無得謂初兩都俱一寶鏡四五六七俱一寶珠三及八九俱一寶劍俱第十寶合上九寶何者十種雖開三種各掌陰陽皆並天地故於第十表一人位三種三才已如前判一用料簡者問多少神財會異未審是異名歟亦別體歟答有體有用體則同一用則各別雖爲各別其體歸一亦雖爲一其用各別故論十種不出三種三種亦一況亦十種問若爾此中何爲體耶答俱體俱用非一非異若執一體是非實體或從天胤而降地寶或以地德而顯天性雖天非天雖地非地恒順天地俱解開合問開合如何答清天如開濁地如合亦互論德准義可解二別釋者分論十種三種寶義亦用三釋所言三者一釋十種二釋三種三攝部類釋十種者亦用二意先釋其義次用料簡十種義者一瀛都鏡豐受御靈圖形如舊文即象五輪謂表天字而顯五行故雖掌天而含地德已上取府錄文元氣所變如意寶珠水德所成如諸文記已上如麗氣等二邊都鏡天照御靈圖形如舊文謂表天字圓形八葉而顯八洲故雖掌地而含天道已上取府錄文陽氣所變如

靈鏡此神同鑄故知寶鏡同時出現云々惣而衆寶皆掌二
兩儀一兩儀成二三成三萬物二萬物品物各有象此象
表德具期二別釋一

問十種三種名數不同何約二一類論三出現時又鏡既造
劍玉可同若爾可云誰所造耶 答文義俱備何爲疑
乎一類化現敢不難也謂十種者則先授二天孫二饒速日尊又三
種者後授二皇孫二瓊杵尊前後雖別其名體則同若爾類通有
何咎矣瀛都邊都同人同鑄故論三出時一亦非異時一劍
玉現世其起如前自然靈寶何尋造人蜂持利針釐
放玉光誰所造也安相承乎應知陰陽精明分焉況
人靈寶莫疑造作但得有始乃釐有造鏡亦如此
本有金耳強論其始且非無由各有其人假稱造
祖如寶鏡者石凝姥神如寶珠者櫛明玉神如寶劍
者則天目一箇神造焉強尋其元者如神紀曰劍者土
精金龍神之所造也玉者日天天之光精也云々又曰
鏡則一面者天御中主所授白銅鏡圓形中五月輪崇於止由氣
宮是也一面者多賀宮御靈也一面者荒祭宮御靈也已
上三面者國常立尊所化神天鏡尊居月宮所鑄造之
三才相應是也一面者八百万神等以石凝姥神奉鑄
之寶鏡日像形八葉花崇祭伊勢太神宮是也一面者石凝姥神

初度所鑄方形形地不合一諸神意矣紀伊國日前神是也
已上取要

問造元非一其時各別云何和會而通義耶 答神靈雖
遍隨緣而現從性出相從天趣地義開次第理
在同時卽色邊空無妨而已天寶非色造體卽地
使後會前准上可解

神寶義者亦爲二意一先釋寶義次用料簡其寶義者
三種十種俱含天地德而亦互象何者同雖出天孫
篇且如十種而象天道如彼天孫饒速日尊受天
祖詔賜十種寶降河內國令神去畢謂天掌生
降地爲死如云陽氣散已卽死故如十種雖並
陰陽多名生死其意在斯又比禮者飛羽德也因道
反玉而學生天卽一二三乃至九十九而布瑠部言
具期別釋云々三種義者亦如十種雖掌三才而
象地德何者三種授皇孫尊皇名豐受各如前辨
應知百王連在天命亦知三種共稱神靈十種三種
雖開合異而兩儀一儀施天地德
用料簡者問三種十種有造不造皆可同耶亦不
同耶 答隨天與地施造不造何者天空地造故云
如十種未聞論造何者造色必成地故但如邊津

乎以天瑞八坂瓊之曲玉乎捧九宮所化神名號止由
 氣皇太神支千變萬化受一水之德生續命之術故
 名曰御饌都神也云々故指元氣一名曰寶珠亦稱
 神體天御中主即施豐德號豐受神通堅遍橫始
 終同等謂尋天地開闢時者天御中主即寶珠也陰陽
 分後自稱二尊備續命靈遍生萬物故現色質而
 秀其中真氣所感而成一人於是正論下地現體
 之色寶者應知此玉與皇孫尊一體同時相共相化例
 如輪法共與輪王自然具德不可思議請尋讀者
 當得文意且如彼神皇系圖曰元氣所化水德變成
 爲因爲果而所露名天御水雲神任水德亦名御
 氣都神是水珠所成卽月珠是也亦號大葦原中津國
 主豐受皇神也凡以一心分大千形體顯言爲陰爲
 陽矣蓋從虛無到化變天地地水感應道交故有
 字相云々應知此玉水德所成而具火德何者万物陰
 陽所共而不孤立故稱生玉陽魂亦成足玉及曰
 死玉陰魄亦成道反皆同陰陽元氣所化瓊玉分作
 云々

二寶劍者卽八握劍府錄曰八握劍一柄註天叢雲劍亦
 名草薙劍也五胎形也云々素盞烏尊赴根國一時於出

雲國所令感得卽在蛇尾其尾尖卽劍也及蛇比禮
水鏡蜂針火鏡
 陰靈蜂針陽靈皆共靈劍之所變也悉是陰陽之德用也故
 八握及九握十握同劍分作都無別體兩儀互具万物
 不孤其義必然可令准解從性現相從天現地
 亦與皇孫同化如上云々

三寶鏡者天地靈明是名瀛都及邊都鏡伊弉諾尊於
 小戸河欲令滌身所投玉纏各化爲神自是始名
 瀛都邊都乃至同稱瀛都邊都彼左右手持白銅鏡
 所化神號日神月神府錄云一書曰伊弉諾伊弉冊二
 神尊左手持金鏡陰生右手持銀鏡陽生名曰日天
 子月天子是一切衆生眼目坐故一切火氣變成日一切
 水氣變成月三界天地建立日月是也子時以瀛都鏡邊都
 鏡爲國璽尊靈爲日神月神自迄于天宮而照六合
 給矣又曰瀛都鏡一面是天表字也五輪形也天王如
 來寶鏡豐受皇太神御靈鏡坐邊都鏡一面天表字內圓形
 輪表也外輪八咫形天照皇太神御靈鏡坐云々陰陽互兼
 亦可准上故云二尊似違本紀彼限陽神此並
 陰神或一或不而同亦出現時令准上義若解
 一鏡須通諸鏡神紀釋豐受靈鏡曰天御中主高皇
 產神勅石凝姥神取天香山銅奉鑄云々天照太神

舊事本紀立義卷第九 深祕卷也

沙門慈遍撰

第四明神寶出現者大詮略可_レ用_二三意_一也所謂通釋別釋結成各約_二義類_一當_二用_二料簡_一初通釋者惣舉_二十種神寶_一宜_レ設_二三釋_一其三釋者一出現時二神寶義三會_二多少_一一出現時者可_レ約_二二意_一先粗引_レ文次用_二料簡_一粗引_レ文者此紀三云天照太神詔曰豐葦原之千穗秋長五百秋長之瑞穗國者吾御子正哉吾勝々速日天押穗耳尊可_レ知之國言寄詔賜天降之時高皇產靈尊兒思兼神妹萬幡豐秋津師栲幡千千姬尊爲_レ妃誕_二生天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊_一之時正哉吾勝々速日天押穗耳尊奏曰僕欲_レ降將_二裝束_一之間所_レ生之兒以此可_レ降矣詔而許_レ之天神御祖詔授_二天璽瑞寶十種_一瀛都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉一死反玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一是也同卷又曰天照太神手持_二寶鏡_一授_二天忍穗耳尊_一而祝_レ之曰吾兒視_二此寶鏡_一當猶_レ視_レ吾可_二與同_一床共_レ殿以爲_二齋鏡_一寶祚之隆當_レ與_二天地_一無_レ窮矣授_二八坂瓊曲

玉及八咫鏡草薙劍三種寶物永爲_二天璽_一矛玉自從矣詔_二天兒屋尊天太玉尊_一曰惟爾二神亦同侍_二殿內_一善爲_二防護_一焉日本書紀曰天照太神勅曰若然者方當_レ降_二吾兒_一矣且將_レ降之間皇孫已生號曰_二天津彥火瓊杵尊_一時有_レ奏曰欲_レ以_二此皇孫_一代降_レ故天照太神乃賜_二天津彥火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物_一勅_二皇孫_一曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可_レ王_二之地也_一宜_レ爾皇孫就而治_二焉寶祚之隆當_レ與_二天壤_一无_レ窮者矣大田命傳曰天地初發之時大海中有_二一物_一浮形如_二葦牙_一其中神人化生名_二天御中主神_一故號_二豐葦原中津國_一亦因以曰_二豐受皇太神_一也與_二天照大日靈尊_一舉_レ此以_二八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍三種之神財_一而授_二賜天孫_一爲_二天璽_一云々諸文雖_レ繁大綱在_レ斯各隨_二其義_一綱目可_レ尋用_二料簡_一者問此等神寶何時現耶答天性緣_レ生誰盡_二根源_一且屬_二所授_一始知_二出現_一謂_二十種財稱曰_一布留部_二討_一其本初_二尤爲_レ難_一思試以_二三種_一宜_レ論_二十種_一一瓊玉者如_二神紀曰_一伊弉諾伊弉冊二尊先生_二大八洲_一次生_二海神_一次生_二河神_一次生_二風神等_一以來雖_二經_一廻_二一萬餘歲_一水德未_レ露_二天下_一飢餓于_レ時二柱神天之御量事

其名曰神此所掌此國爲體故天御量獨在_ニ本朝_一是德所_レ秀是義如_レ前當_レ知自餘百千世界皆爲_ニ吾朝_一廣施_ニ大用_一如_レ云_ニ尊降_ニ天瓊矛_一而探_ニ滄海_一引上滴瀝凝結成_ニ島名_一磯取盧嶋_ニ或記云磯取盧嶋_一者通指_ニ三界_一也_ニ神於_レ是造_ニ八尋殿_一或記曰八尋殿者指_ニ指_ニ立瓊矛_一或記曰瓊矛者神祇寶山今此所也_ニ共住_ニ同殿_一其意如_レ斯_ニ已上請_レ記_一

料簡通別者 問物有_ニ通別_一其義如何 答既論_ニ體

用_ニ者當_レ有_ニ通別_一々則神體通則神用其用廣遍_ニ一切諸國_一其體獨在_ニ此朝_一神地應_レ知餘州通雖_レ曰_ニ神若論_ニ靈地_一別在_ニ日本_一如_ニ日本宗祕府曰_一諸梵王諸天子諸群生即受_ニ皇天敎勅_一到_ニ實證之地_一領_ニ知衆物之天所化_一百億須彌百億日月_ニ々々須彌有_ニ四天下_一其南閻浮提有_ニ圓陀々之地_一謂_ニ之大日靈地_一亦號_ニ神國_一也

已上
祕府

料簡結前者 問結前如何 答上來玄文乃爲_ニ五卷_一義

分_ニ次第_一各有_ニ其意_一第一卷明_ニ一成_一二也第二卷明_ニ二成_一三也第三卷明_ニ三成_一萬物_ニ第四於_レ中明_ニ一人德_一此卷於_レ後料_ニ簡上意_一仍得_ニ來由詮義_一而已

料簡生後者 問生後如何 答此本紀者偏論_ニ神道_一故就_ニ其文_一未_レ交_ニ佛敎_一以_ニ下卷_一附_ニ神皇系圖_一畧談_ニ佛

惠_ニ還顯_一祈誓_ニ六七卷_一乃明_ニ神佛同體_一第八卷以明_ニ本誓同異_一第九卷正明_ニ神寶出現_一第十卷爰明_ニ記事靈應_一云々

舊事本紀玄義卷第五終

凡舊事本紀者聖德太子御作本書十卷也依_レ爲_ニ無點_一可_レ加_レ點之旨雖_レ被_レ下_ニ勅於神宮_一上古書今更難_レ加_レ點之間奉_レ祈_ニ請_一尊神_ニ之處當作者慈遍爲_ニ法華法樂_一來迎之刻于_レ時官廳常良三品等奉_レ屈_レ之作_ニ廿卷書_一備_ニ微覽_一所謂玄義文句是也仍此十卷之內以_ニ四五九_一爲_ニ祕卷_一然問運_ニ多年之功_一剩以_ニ此志_一企_ニ上洛_一所_ニ令_一傳授_ニ者也努勞不_レ可_レ出_ニ窓中_一頓首再拜々々敬白

大中臣朝臣判

觀應二年正月五日

桃同法燈書寫了

應永十一年五月六日
弘正寺住沙門惠觀

非彼說我朝才明恐鵬花國神通治世是何見耶 答
神靈化生滅々々顯神應俱遍性相事理無礙若
不遍者此神有限未免無常計遍者既無盡際何
妨生滅陰水陽火自有昇沉天道地德無非常儀即
事而真彼談所紀遍色而空此神所絕是以二尊受
天祖詔生國及山海及草木等皆化爲神雖現生死
神應常恒故移漢土是亦神道之義神德彼雖隔此
不厭彼々此一德未得爲他遠近万事無漏神惠
巨海尚不厭細流泰山亦無讓土壤取百姓業
爲一人德惣使異域悉令歸本朝抑和國者三界
之根尋余州者此國之未謂日本則如種子芽故依
正和人心幼似春草木未得成就論其功用本
在神國唐掌枝葉梵得菓實花落歸根菓謂受流
故當初則皆用託宣而治天下梵漢文傳神態轉隱先
談已竟 問漢家粗爾又梵如何 答根莖斷簡略如
上辨故佛法渡還添威光是以神宣指西天佛以爲
應迹細期下章如彼孔老密佛爲師佛若歸神本
末誰爭雖文寫漢書理良背若令佛教大同小異惣
明因果示已三世仍任一靈廣教生死云々

料簡廟社者 問宗廟社稷其義如何 答廟社名字出

自漢土遂論義者意頗別也如弘決云宗謂尊也
廟謂良也謂尊良之所居也 社謂后土吐也土所
生之如口吐物即地神也引國語云平九土故祀
以爲神戴皇天而履后土地廣不可盡敬故封爲
社稷謂五穀惣名也即五穀之神也故天子所居左
宗廟右社稷布列四時五行故以國亡爲失社
稷既入怨國及淫女房故社稷壤也又禮記云天
子立七廟一考也二王考也三皇考也四顯考也五祖
考也始祖已上五皆月祭也六遠廟有二祀一祀即廟之別名也即
也諸侯五廟一考二王考三皇考四顯考五祖考
卿大夫三廟一考二王考三皇考士人立二廟一
考二王考四時庶人無廟已上
謂始自天子至於士人家國相傳皆立宗廟雖
五考之用則別而百行源不殊云々宗廟社稷在文可
見王臣民庶次第如斯然此兩宮名曰宗廟異彼所
立細尋可辨 問若爾彼此同異如何 答宗名尊義且
不異也但彼人廟再不同也今崇兩宮即名天地恐
是可謂六合宗廟故此宗廟義當日本所以別在神
國而已

料簡體用者 問物有體用其相如何 答万物有精

自在神力現種種形隨種種心行為方便利益所
 表名曰大日靈貴亦曰天照太神爲萬物本體度
 萬品世間人兒如宿母胎也亦止由氣皇太神月天尊
 天地之間氣形質未相離是名渾沌所顯尊形是名
 金剛神生化本性萬物惣體也金則水不朽火不燒本
 性精明故亦名曰神明亦名大元神也任大慈本誓
 每人隨思雨寶如龍王寶珠利萬品如水德故
 亦名御氣都神也金玉則衆物中功用甚勝不朽不燒
 不黑故爲名無內外表裏故爲本性謂人乃受金
 神之性須守混沌之始故則敬神態以清淨爲先
 謂從正式爲清淨隨惡以爲不淨惡者不淨之物鬼
 神所惡也已上一文如斯萬義可尋

料簡伏難者問如易等談神妙義者凡超乾坤

離陰陽也而以兩儀爲兩神者未及神意可云

劣耶答和漢意別也寧令此類乎但談神妙何限

一說始自經論無不稱讚神宣亦多爾令守混

沌之初以如之耳是卽心之要路也機之證入也所以若

契此心者必通彼神也彼此畢竟雖無二別此神應

者非彼神也神國之儀宛異之哉問心神既應用

豈別若爾神國何異彼耶答神妙本有而自遍依正

靈應尤新也何但性常乎凡諸有情皆順妄心此妄若息
 必通眞神此眞神者天性理也此天性者成日神也若
 非顯現何得蒙益此應體名天照太神其惠普照
 六合之內其德永繼百王之位不同彼偏以妙稱
 神亦異正取德崇祖問答如言者天神無益又
 如此者地神勝天抑彼雖不曰天照神但稱日天
 德輝自同若爾別號日本神國更無異途然有何神
 祕耶答天地一神陰陽不孤於上辨者爲此義也
 今論異途成偏不偏謂彼執偏此顯不偏其偏神
 者離天地也故非陰陽亦非性相故嫌變化徒
 覆靈德還迷天地冥通之道故談神妙雖蕩妄
 慮未知神應利物之相仍雖體無二而有知不
 知於機見不同敢無妨別執其不偏者宛異彼
 義何者眞神雖似無形從性出相漸現色質天而
 成地下亦遍上從空趣色從色歸空天地同冥上
 下俱時故於天地唯在一靈且分上下互兼兩
 神謂其上則天地狹霧論其下則皇孫得讓百王利
 物皆是天神三才分別並成地德天地俱生良有以也
 惣指變化卽神而已問變化雖易靈妙不改以生
 滅事何稱神明況所記文悉用漢字惣所談義無

天地兩神宜合可_レ知 問天地兩神各有_二陰陽_一 又天與地宜合如何 答二途雖_レ分不_レ出_二陰陽_一 卽於_二

此義_一當有_二橫堅_一 其橫天地各論_二陰陽_一 其堅天地以分_二陰陽_一 其橫卽豎其堅卽橫應_レ知天地同體俱生雖_レ云_二兩義_一實是一神雖_レ云_二一神_一必具_二兩儀_一故非_二孤陽_一亦非_二孤陰_一凡論_二萬化_一皆在_二同體_一故初天祖含_二狹霧_一亦後地神女而掌_レ陽於_二此中間_一二神合_レ明謂豐受與_二大日靈_一耳其神同體全非_二始終_一其德俱時都非_二前後_一天神無_レ形出_レ相爲_二地神_一地神耀_レ天々性現_レ德 問清天濁地此理必然日神現昇天地降歟 答盡

理如_レ上重說無_レ由試舉_二一喻_一宜_レ會_二萬疑_一謂用_二厚物_一而襲_二明珠_一若有_二環門_一頗見_二現光_一珠如_二天神_一光如_二地神_一依_レ珠有_レ光尋_レ光飯_レ珠々光雖_二常裏_一德則在_レ地矣地不_レ離_二空隱顯可_レ知漏_二陰陽之影_一而顯_二精明_一出_二天地之間_一而現_二靈光_一空色々空々有無_レ礙_二天地_一地天々性不_レ變在_レ色爲_レ靈在_レ心爲_レ神也心體惟一神靈不_二離_一在_二一念_一各迷_二其理_一知日卽知字義可_レ了 問神靈在_レ心未_レ有_レ他者何憑_二外護_一而祈_二益耶_一 答天神之性遍_レ地々神在_レ心々靈常通自有_二聖賢通者_一而已不_レ通而祈_二一尊_一生_レ日稱_二天下主_一皇孫繼_レ光爲_二

葦原王_一其形雖_レ消神明不_レ毀前神後神同飯_二冥道_一其靈無_レ形隨_レ物而現若賢若愚名在_二己心_一若_二他神_一則雖_レ祈不_レ應若_二心外_一則雖_レ應不_レ感真神如_二月信心如_一水月而不_レ下水而不_レ上濁則不_レ宿清則得_二宿一月萬光未_一惜影哉一水萬滴未_レ爲_レ疑哉如_二彼易云_一夫唯知_二天之所_一爲者窮_レ理體_レ化坐忘遺照至虛而善應則以_レ道爲_レ稱不_レ思而玄賢則以_レ神爲_レ名蓋資_二道而同_一乎道_一由_二神而冥_一於神_一者也卽如_二大田命傳記曰_一德合_二神明_一則乃與_二天地_一通也德與_二天地_一通則君道明而萬民豐也云々 問聖賢雖_レ通愚凡無_レ據如何飯_レ神如何祈耶 答賢愚雖_レ別心神不_レ隔若有_二信德_一何異_二聖賢_一如_二世記曰_一夫悉地則生_二心_一爪意則顯_二信心_一而蒙_二神明_一利益_二事波依_一信力厚薄_一也云々神體各崇感應可_レ祈心天色地同體無_レ疑金則陰陽之靈玉則水火之精金是神也全是冥也劍鏡寶珠卽神無_レ別天地非_レ遙遠近在_レ心依_レ心有_レ信依_レ信有_レ益天父地母大慈大悲陽男陰女常度_二本作_一惡_二常化卽如_一御鎮座本紀云_二天地未_一割陰陽不_レ分以前是名_二混沌_一萬物靈是封名曰_二虛空神_一亦曰_二大元神_一亦名_二國常立尊_一亦名_二俱生神_一希夷視聽之外氣氣象之中虛而有_二靈_一而無_レ體故發_二廣大慈悲_一於_二

施陽道此道無窮不可偏執且取其要以論之者
 天狹霧之含德是也國常立尊以天讓日即天鏡胤孕
 天萬靈然至一尊既生靈兒此靈兒者其尊光也其
 光用則必遍空也故曰送天不可留也論色體者漸
 成地也故云生國及惡兒也其靈光則陰陽之精明也
 故日月者天地之神光也當初者未分晝夜即指明
 光自爲日月故曰是時天地相去不遠思之神祇寶
 山記曰伊弉諾伊弉冊往昔大悲願故而作日神月神云
 云故知二尊即日月也問今論地神何天神耶答空

天現色是曰生地此地顯靈是稱地神況天地始終
 神○始終神本作殺而道常存即國常立爲天狹霧若爾何限天神
 致疑應知地神但指靈性此靈性者還皈陽也如云
 內外不二常一體天神地祇皆一露又曰天地之間稟氣之
 靈蒙大イ種イ二神五行之神力受天地父母之生身云々は故
 天地雖分其靈無變陰陽雖化其神一露故一尊雖
 受色質之龜身還生心珠之靈兒其兒則勝分其親
 則劣也天地之昇沈是陰陽之明闇而已問何以勝
 劣爲親子耶答神歸本有也隱而在一性光用燦
 盛也現而爲二尊其光照者此神之所生故云兒勝
 其色體者兩儀之龜相故曰親劣惣而言之万物之靈

明也別而論之一精之真極也故稱國主授以天事
 普蒙惠光誰不敬仰凡一尊始自令生國主通
 稱天子如行基曰照皇天子應現出來故號天子云
 云其光無私而恒照万像若心正直而自契一神天
 地雖分心神不殊仍隨名義須知靈德問曰神
 名義有幾種耶答於此紀文日月各有三重名字
 初則大日靈貴與月讀也謂靈性無形陰陽難測故強
 云貴指功稱讀也中則天照太神月夜見也謂拂闇而
 出嘆其光用以云天照及月夜見也終則大日靈尊
 與月弓也謂其形顯現於天而耀指其嚴良以稱
 靈尊初月寄弓也俱如或紀俱以中名而爲終也是
 令芽初立尊號歟故以照用爲第三義名據一
 意亦無相違云々若繼上與下地者須有五重令
 料簡四歟前擬四德今表五行其理明也不繁筆耳
 料簡互用者問天地兩神互用如何答大神常降々
 而非降地神恒昇々而非昇何者於空中盡邊際神
 性量等而國常立唯有名字無有形體其靈周遍無
 非万物即大日靈而無邊量百千日月一靈分遍同
 無中邊何論前後都無上下豈滯昇降應知天地
 一神俱生但隨陰陽互用同體孤陽不起單陰不立

不測千變幾乎水德常施万化惟大也皇胤能降是以初則天御中主天神御祖凡地禪月是其豐之義也中則水珠月神爲伊弉諾還爲所生而冥日神也終則皇御孫尊正現欲體直受神寶令傳永代故豐受者名兼本末論其意者卽示同體何者天神唯有靈明其體皇孫卽顯國主故皇孫者掌三才也天而人地橫而爲堅高皇非始皇孫非終讓中主於百王施豐受於万物神皇圖曰天御中主尊神風伊勢百船度會山田原大神座元氣所化水德變成爲因爲果而所露名天御水雲神住水德亦名御氣都神是水珠所成卽月珠是也亦號大葦原中津國主豐受皇神也凡以一心分大千形體顯言爲陰爲陽矣蓋從虛無到化變天月地水感應道交故在名字相云々又神記曰豐受皇太神一座天地開闢初於高天原成神也一記曰伊弉諾伊弉冊尊古語曰伊舍那天伊舍那天姬先生大八洲次生海神次生河神次生風神等以降雖經廻一萬餘歲水德未露志天下飢餓于時二柱神天之御量事乎以豆瑞八坂瓊之曲玉乎捧九宮所化神名號止由氣皇太神支千變萬化受一水之德生續命之術故名曰御饌都神也古語曰大海之中有一物浮形如葦牙其中神人化生號天御中主神故號

豐葦原中國亦因以曰止由氣皇神也故天開闢之初神寶日出之時御饌都神天御中主神與大日靈貴天照太神二柱御大神豫結幽契永治天下或爲日爲月永懸不落或爲神爲皇常以無窮矣光華明彩照徹於六合之內矣已上變化始終諸文明也神應前後可得意也問變化難弁須示位耶答略有四重其文如上所謂初則天御中主中則多賀自天移地故稱二柱其大直日如云伊弉諾之所生亦云豐受荒魂神耳終則月讀是成然男器界於此器界而掌晝夜一頭兩目故稱三柱名爲荒魂在文可見第四重則皇孫以來亦是豐受已如上弁故或寄本或亦約未皆曰豐受隨處可解問異名亦多其意如何答名有惣別謂別稱者悉隨其德々○按此間或有異則之二字歟號異也天地之間兼名御中主其胤芽之稱云皇產或云水雲及御氣津或亦月神各如諸文爰豐受者是惣名也並名本末如實錄文問豐受義亦人臣耶答豐者大也如彼字書云々大亦皇也如前斷簡云故論所攝雖亘君臣而論能攝獨帝祖若約天皇論王臣者兩祖各分已前弁畢三料簡地昇者問地神昇天其相如何答地神則陰而

天下_レ手捧_レ寶鏡_ニ詔_ニ皇孫_一曰視_レ此寶鏡_ニ當_レ猶視_レ吾同_レ床與_レ殿以爲_ニ齋鏡_一寶祚之隆當與_ニ天壤_一無_レ窮宣矣具如_ニ前引_一思_レ之可_レ知 問德倅_ニ天地_一是名曰

皇何以_ニ天地_一而稱_レ皇耶 答天地一神未_レ論_ニ兩儀_一三才起後三皇現_レ前何者益大稱_レ顯_ニ皇德_一如_レ云_ニ天地大人_一故指_ニ天地靈明之本_一而非_レ令_レ稱_ニ皇神之名_一故兩皇者即名_レ德也天陽地陰受_レ德嘆_レ恩應_レ知皇則天地分後伊弉諾尊除_レ穢之時再令_レ出_ニ生日月兩神_一是其天地之荒魂也此本紀曰伊弉諾尊詔上瀨者速下瀨者弱而初於_ニ中瀨_一滌之時所生之神二柱神名_ニ八十枉津日神_一次大枉津日神_ニ後爲_レ直_ニ其枉_一而所生之神二柱神名_ニ神直日神次大直日神_一倭姬命世記曰荒祭宮一座註曰皇太神宮荒魂伊弉那伎大神所生神名_ニ八十枉津日神_一也御形鏡坐神祇譜天圖曰多賀宮一座註曰仲神天下四方國人夫等諸事漏落事悉神直日命大直日命聞直見直給安久平久所_ニ知食_一也又本紀曰伊弉諾尊滌_ニ御身_一之時所生之神三柱洗_ニ左御目_一時所生之神名_ニ天照太神_一洗_ニ右御目_一時所_レ成名_ニ月讀命_一並坐_ニ五十鈴川上_一謂_ニ伊勢齋大神_一洗_ニ御鼻_一之時所_レ生之神名_ニ建速素盞烏尊_一坐_ニ出雲國杵築神宮_一大田命傳曰荒祭宮一座註

曰皇太神荒魂神也伊弉諾尊到_ニ筑紫日向小戸橘之櫛原_一而被除之時洗_ニ左眼目_一以生_ニ日天子_一大日靈貴也天下化生名曰_ニ天照太神_一荒魂荒祭神也謂被_レ戸神瀨織津比咩神是也同傳又曰多賀宮一座止由氣皇太神荒魂也伊弉諾尊到_ニ筑紫日向小戸之橘之櫛原_一而被除之時_{○按本書}洗_ニ右眼_一因以生_ニ月天子_一天御中主靈貴也天下化而名曰_ニ止由氣太神之荒魂_一多賀宮是也亦洗_レ鼻因以生神號速佐須良比賣神土藏靈貴也素盞烏尊與合_レ力座給也云々故天地之用陰陽之化嘆_レ之大也謂_ニ之皇_一也但從_ニ本致_一而云天地論_ニ其繼德_一即皇孫耳 問天皇繼德俱受_ニ兩神_一何故多云_ニ皇孫尊_一耶 答如_レ云天孫亦曰_ニ皇孫_一各如_ニ第五六兩卷篇第五天孫專饒速日尊第六皇孫瓊々杵尊_一若從_ニ天上_一必爲_ニ天孫_一今從_ニ地下_一故曰_ニ皇孫_一況論_ニ皇德_一雙兼_ニ天地_一故高皇產靈通表而已

料簡天降者 問天神降_ニ地其相如何_一 答天神則陽而施_ニ陰德_一此德幽玄而非_レ可_レ述且約_ニ大途_一畧論_ニ之者_一地狹霧之含_レ德是也天御中主普_ニ地禪月_一即皇產靈乃至皇孫故豐葦原漸得_レ爲_ニ造是豐受耳_一 問若爾者豐受似_ニ地神_一耶 答始終豐受何但限_レ地天地俱生陰陽

舊事本紀玄義卷第五 深祕卷也

沙門慈遍撰

六料簡詮義者夫聖智幽遠神道難達尙繁筆者還述津
歟略詮義宜加料簡再論多端且約二十意

一料簡神皇

二料簡天降

三料簡地昇

四料簡互用

五料簡伏難

六料簡廟社

七料簡體用

八料簡通別

九料簡結前

十料簡生後

料簡神皇者 問於上科段雖明天皇未辨來由是義如何 答皇其源者高皇是也尋來由者氣質元也此氣累而成葦原惣爲天神地祇本祖所以皇者含靈之地胤也當知德則曆代之國王也彼高皇者即天神也天兼地者本一故也天地讓皇陰陽阪神兼稱天狹霧地狹霧天地雖分神道未變陰陽隨化皇德施惠神皇一人通被百王德伴天地是名曰皇々必通神神定施皇天神地皇靈用無窮爲日爲月陰陽之惠爲神爲皇天地之德陰德合皇天御中主陽道顯神大日靈尊合此天地而爲一皇使彼道德而授三種

是故應知如神宣云天御中主與大日靈預結幽契永治天下或爲日月或爲神皇授三種繼百王位具如上引諸文可見天無兩日土無二王稱之特尊謂之一皇問天地一皇而無二主何故兩宮雙稱皇耶 答開闢以來歷代繼皇其數幾世何限二乎今稱特尊者唯坂當帝也而兩宮則天地是一切國王之父母也彼親讓子則此子亦掌耳何以兩宮之神號而押皇孫之德乎 問若如讓則前可無歟三皇雙者彌不可乎 答世間官司尙異財寶雖有前司豈妨當官況三皇者各論元也即此三者天地人也謂太元神無名無狀即虛無靈非前非後然元氣成天地之時順陰陽立皇神之名天則天皇地則地皇兩皇讓德一人得皇例如漢土於盤古王立三皇氏得立可解高皇產等三皇如次人臣三皇俱合地德又天鏡等三神如次帝祖三皇俱合天德伴此天地而現人皇即皇孫尊始降臨耳故兩宮則天地之本皇也而一皇者受德之末皇也通被百王其皇亦幾乎各每當代皆是特尊也天無兩日天照皇神土無二主豐受皇神繼德皇孫々々領國之主一皇々々無窮所以如云天照豐受預結幽契永治

此書者十卷中殊以三四五九爲最祕仍於初學
仁不被免之經年序運懇志剩爲當道
企上洛之時被免之於五條富小路久木尾宿
所書寫之于時慈遍御宿所六角油小路法華堂
宰相律師御房也連々往還及數日相傳云々末代
明證神道奧旨而已

觀應二年正月日

(井上賴因翁藏本奥書)

承應二年八月日書寫了權神主延良 刊

右一編者雖爲慈遍法師之祕卷不非釋神道
之正書其旨記九卷之奥書焉

八垣岸慎之謹書

寶曆六年丙子十月五日

是以貧民則不知_レ所_レ由臣道亦於焉闕矣書曰國將_レ興聽_二於民_一將_レ亡聽_二於神_一々々聰明正直而壹者也人而行_二非德_一民不_レ和神不_レ享矣神所_レ憑依_一將_レ在_二德矣_一又曰令_二施_一民之取_レ好禁_二於民之所_一惡民之所_レ欲天必從_二之民之所_一惡天必讓_二之云々

法能治_二世者_一夫法者禮也各親_二其親_一各子_二其子_一君臣樽節若無_レ禮者非_レ法也書云足寒者傷_二心人怨者傷_一國註曰足下貪而無_レ禮也心乃神之主心傷則神散神散則身喪禮者國之本無_レ禮則國亡矣憲法云群卿百寮以_レ禮爲_二本其治_一民之本要在_二于_一禮上無_レ禮下不_レ齊下無_レ禮必有_レ罪是以群臣有_レ禮位次不_レ亂百姓有_レ禮國家自治神宣云背_レ法而不_レ行則日月照見坐違_二文而不_一判則神明記識給人受_二天地之靈氣_一不_レ貴_二靈氣之所_一化乍_レ種_二神明之光胤_一不_レ信_二神明之禁令_一云々但古者無_二文字_一故以_二漢才_一令_二助歟_一今則彼道盛而還壞_二神教_一者也仍再興_二本誓_一宜_二直_一人心_二靈訓分明如_一神懷論_一云々政必禁_二費者_一夫國家衰起_二自_一民之煩_一故明王政不_レ如_二禁_一費諸典各驗不_レ能_二具判_一萬事_二廻_一心宜_二辨_一損益_二爲_一公爲_二私_一唯有_二民憂_一付_二俗付_一眞偏行_二國費_一民叛則神不_レ受_二祀冥怒則人必違背學_一上而下奢天何應耶忘

他而自欲豈順_二冥乎所_一詮宗廟本誓在_二之取_一要爲_二國如_一神宣云_二都合天下之土毛_一或備_二宗廟之祭_一惟仁恩之忠孝以_レ信爲_二德故神明饗_二德與_一信不_レ受_二備物_一焉故自_二宮作_一及_二諸神態_一皆禁_二國費_一況其餘乎例如_二彼書明_一極極不_レ削茅茨不_レ剪等_二而已_一

奉_二齋持_一國者凡朝家固者尊神鎮座宗廟安則天下亦穩兩宮之威光者百王之德暉也頻繁之祀何怠_二之耶神宣曰神垂以_二祈禱_一爲_二先冥加以_二正直_一爲_二本任_二其本誓_一皆令_レ得_二大道_一者天下和順日月精明風雨以_レ時國豐民安惣崇_二祭神祇_一住_二無_一二之心_二奉_二祈_一朝廷_二則天地與_一龍圖_二運長日月與_一鳳曆_二德遙海內泰平民間殷富各念祭_二神禮以_一清淨_二爲_一先以_二信心_一爲_二宗_一云々神態守_二元者_一凡禁法雖_二多不_一如_二守_一一是元始々即清淨每_レ物有_二始終_一每_レ事有_二淨穢_一若_二其淨_一則自以_二守_一之若_二其穢_一則改而用_二之淨者空也穢者有也隨_二有而有_一心隨_二心而用_一穢所以者何天神之未_レ至_二地之時頓見_一二法_二還歸_一一元_二惣厭_一生死之妄見_二令_一勸_二陰陽之正理_一故頗許_二上之空儀_一而強忌_二下之觸事_一如下神宣曰元々入_二元初_一本々住_二本心_一云々

坂津_ニ矣此邑有_レ神忽生_ニ毒氣_一故人滅瘁由_ニ是皇軍不
進也_一已上_レ不得_ニ時節_一而已皇孫凝念祈_ニ天子_一時彼處有人號曰_ニ熊
野高倉_一下命_ニ乃夢天照太神_一示_ニ武雷_一曰葦原中國猶聞_ニ
喧聲_一汝往而治武雷對曰雖_ニ自不_レ行_一下昔_ニ乎平_一國劍將
平_ニ國矣_一天照太神詔_ニ高倉下命_一曰此劍名_ニ御靈命_一置_ニ
汝庫裏_一宜_ニ獻_ニ天孫_一忽寤視_ニ庫內_一果有_ニ劍_一倒立即取
進_ニ之天孫大悅而尋_ニ毒士_一悉醒矣故赴_ニ中州_一其山中嶮
不_レ知_ニ其路_一又夢天照太神訓_ニ皇孫_一曰遣_ニ八咫鳥_一宜_ニ
爲_ニ導者_一寤有_ニ此鳥_一任_ニ飛_一遂至_ニ于菟田下縣_一矣又夢
造_ニ天平賀_一可_レ祭_ニ神祇_一乃如_ニ夢使_一下椎根津彥弟猾之
二人取_ニ天香語山土_一造_ニ八十口_一以祭_ニ天神地祇_一遂而
於_ニ國見丘_一振_ニ軍_一於是取_ニ勝_一不_レ輒_ニ于_一時忽然天陰而
雨_ニ氷亦有_ニ金色靈鵲_一飛來止_ニ于皇弓_一弭_ニ其光_一如_ニ流
電_一由_ニ是長髓彥軍皆迷眩失_ニ意_一宇摩志麻治命本知_ニ
天神加_ニ而順_一天孫_ニ乃謀_一殺_ニ舅師_一以歸順_ニ焉復天神御
祖所_ニ授_一饒速日尊_ニ天璽瑞寶十種_一皆奉_ニ天孫_一焉天皇甚
以寵異矣_一已上_レ說_ニ時_一至則遠被_ニ末代_一冥鑒可_レ慎愍於_ニ天
命_一達順如_ニ斯神代_一在今莫_ニ謂_一往昔_ニ皇孫_一不_レ改何編_ニ
冥應_一如_ニ三略_一者專舉_ニ政道_一至_ニ兵法_一者多勘_ニ陰陽_一
如_ニ一卷_一者未_ニ曾_一下_ニ兵始舉_一大數_ニ終約_一十二_ニ各論_一

相和_ニ具在_一口傳_ニ但六韜中廣教_一軍法_ニ若非_一武者_ニ巧
無_一要也故光珠教_ニ文師_一盈虛國務大亂等意如_ニ斯如_一
書曰_ニ夫武禁_一暴戾_ニ兵保_一大定_ニ功安_一民和_ニ泉豐_一財者
也_一典_ニ方_一舊曲事繁不_レ能_ニ細引_一神宣云提_ニ是靈劍_一平_ニ天
下_一惡事者表_ニ武威_一必治_ニ天下_一也天授_ニ人與_一其德_ニ稱
武所詮無_ニ私_一如_ニ前而已_一
四 群民順_ニ惠者夫無_一守_ニ文者草創無_一由其守_ニ文者仁慈
是也縱免_ニ萬死_一其身難_ニ持縱值_一一生_ニ其命易_一留神宣
云人乃天下之神物須_ニ掌_一靜謐_ニ心_一乃神明之本主莫
傷_ニ心神_一故書曰宗廟之本在_ニ於民_一之治亂在_ニ於
司_一云々其司是政其政是惠一慈普則萬民順耳當_ニ知群
機譬如_ニ人兒_一自_ニ非_一慈者_ニ何昵_一親乎即如_ニ書云_一王者
以_ニ四海_一爲_ニ家_一以_ニ萬姓_一爲_ニ子_一故神宣曰度_ニ萬品_一如_ニ
世間人兒宿母胎_一也云々天地非外開闢在_ニ已_一王民互轉
何守_ニ一也色無_一定體_ニ隨_一心所變雖_ニ世下賤_一莫_ニ忘_一本
願_ニ憲法云背_一私向_ニ公_一是臣之道矣凡人有_ニ私_一必有_ニ恨
有_一憾必不_レ同非同即_ニ以_一私妨_ニ公_一憾起則達_ニ制憲法_一初
章云上和_ニ下諧_一其是謂歟又曰其百姓之訟一日千事一日
尙爾況累歲乎今治_ニ訟者得_一利爲_ニ常見_一賄聽_ニ讞會_一饗
忘_ニ僻故有_一財者之訟如_ニ石投_一水乏者之訴似_ニ水投_一石

葦原中國受_三日嗣_二聖明所_レ覃莫_二不_レ砥礪_一云々故地神則昇_レ天彼天神則降_レ地其顯主則曆代皇孫即日嗣者三種神器今坐_三伊勢_二神靈并尾州_一寶鏡_二熱田_一也其冥主則地祇靈道仍神者第一舉_三天神之初_一是皇胤之祖也第八舉_三地祇之終_一即定國之初也其中間者各如_二本紀_一而於_三軍戰_一隨現神也惣所_レ鎮者天神_{已上}地祇_{以下}今齋_三神祇官_一而已

特尊伏_レ敵者夫真氣大和自感_レ帝報_二妄業_一群士何達_三天命_一皇產降_レ靈國無_二主_一神胤秀發是稱_三特尊_一所以輪王出_レ世則輪法摧_レ怨明君在_レ位則明德照_レ闇雖_レ然爲_レ正有_レ邪不_レ可_レ不_レ伏爲_レ善有_レ惡不_レ可_レ不_レ斷是以天神未_レ洗_二穢惡於小戸之流_一地神始競_二邪正於高天之原_一加_レ之皇御孫尊遣_二神_一伏_二大己貴_一磐余天王_三率_一萬軍_二誅_一長髓彥_二神之爭且置_一之耳人世之軍粗論_レ之者正哉吾勝尊以_二栲幡姬_一爲_レ妃令_レ生_二三兩太子_一也謂櫛玉饒速日尊與_二彥火瓊々杵尊_一是也兄饒速日尊於_二彼天上_一以_二天道日女_一爲_レ妃令_レ生_二天香語山命_一亦云午栗彥命亦號_二高倉下命_一與_二此太子_一相共先令_レ降_二臨河內國_一之時娶_二長髓彥妹御炊屋姬_一令_レ懷_二妊宇摩志摩治命_一亦名味間見命_二亦稱_一未_二誕生_一而神去_二皇然兄香語山命則屬_三神_一可美真千命

武天皇_二而爲_レ臣矣弟可美真千命者舅長髓彥命奉_二養有_一爲_二葦原主_一故對_二天皇_一令_レ諍而已

神武天皇者皇孫第四代也謂不_レ葺合尊第四皇子也母曰_二玉依姬命_一海童神之少女也天孫生而明達意雄如矣年十五立爲_二太子_一長而日向國吾田_二邑_一吾平津媛爲_レ妃誕_二生手研命次研耳命_一及_二年卅五歲_一謂_二兄及皇_一皇一本子等_二曰昔我天神高皇產靈尊大日靈尊舉_二此葦原國_一而授_二我天祖皇御孫尊_一皇祖皇考乃神乃聖積慶重_二暉多歷_一年序_二自_一天祖降跡_二以迄_一于今_二即百七十九萬二千四百七十餘歲也亦聞鹽土翁曰東有_二美地_一青山四周蓋是_二六合之中歟何不_レ都_レ之諸皇子曰理實灼然恒以爲_レ念乃越_レ山渡_レ嶮_二三年入_一中州_二子_一時長髓彥遣_レ人言昔有_レ天神乘_二天磐船_一自_レ天降_二焉饒速日尊是也娶_二吾妹炊屋姬_一而遂有_二兒息_一名曰_二宇摩志麻治命_一今次_二饒速日尊_一以爲_レ君矣於_二一國土_一豈有_二兩主_一所_二以來者必奪_一我國_二乃起_一軍兵_二以戰_一產五瀨命中_二矢而薨_一天孫憂曰我等爲_二日神子孫_一向_レ日而逆故也乃引_レ軍退移_二海中_一卒遇_二暴風_一於是稻飯命恨_二海神_一乃拔_レ劍入_レ海化爲_二鋤持神_一復_二三毛野命_一蹈_二浪秀_一而行_二常世鄉_一矣天孫獨與_二皇子手研耳命_一纔引_レ軍方至_二熊野荒

國已知_レ向辨_二是爲_二繼帝_一即三種實此三種者兩宮即
 王彼八神者八洲擁護兩宮一王即成_二三才_一令_二此三才
 伴掌_二一德_一故神寶即同_レ床共_レ殿故每王則同_レ體共_レ帝
 謂兩宮者天地之初彼三種者繼德之君能々可_レ辨返々
 可_レ了其意散則其事妄哉仍玉則天也_{太玉}神寶劍地也_{持幡}
 是爲_二父母_一天_神以得_二天子_一天孫其胤寶鏡_{兩宮和明}其鏡
 即王_{百王繼德}又鏡則天_{天孫}地德_{萬物}以_レ劍爲_レ人_勢
 治國_{如_二已上_一}而掌_三三才_一又劍則天_{天孫}地德_{萬物}以_レ劍爲_レ人_勢
 冥顯_{而_二掌_三三才_一}又劍則天_{天孫}地德_{萬物}以_レ劍爲_レ人_勢
 才_一以備_二一人_一即是高皇產靈尊之所_二定置_一之顯國主
 也然世下後漸畏_二神威_一奉_レ移_三其實於_二今伊勢_一耳
 天皇鎮魂八神者日域守護諸神也是亦高皇產靈尊之
 所_二定置_一之冥國主也但冥國則地祇神也高皇產靈則天
 神祖也雖然皇產必成_二地德_一故於_レ取初奉_レ齋_二此神何
 者太元也論_二其神化_一天御中主國常立尊令_レ稱_二天狹霧
 地狹霧_一同體空神不可_レ前後然於_二一空_一而現_二三才_一即
 於_二其天中_一所_レ芽元氣是號_二高皇其產_一_{有誤}漸降而造_二
 葦原_一如_二神皇系圖_一曰_二元氣所_一化水德變成爲_レ因爲_レ果
 而所_レ露名_二天御水雲神_一任_二水德_一亦名_二御氣都神_一是水
 珠所_レ成即月珠是也亦號_二大葦原中津國主豐受皇神_一也

云々豐則豐葦中則中主皇則皇產受則繼皇故豐受者即
 名_二本末_一何以得_レ知如實錄云天照太神之太子正哉吾
 勝々速日天忍穗耳尊娶_二皇天御中主尊長男高皇產靈
 尊之女橘幡豐秋津姬命_一生_二天津彥々火瓊々杵尊_一故皇
 祖高皇產靈尊特鐘愛以崇養焉因以受_二皇天尊號_一稱_二
 皇御孫尊_一也遂欲_二皇孫尊_一以爲_二大葦原中國之主_一矣高
 天原神留坐_{天御中主神天照太神正哉吾勝尊}天御中主神
 漏伎_{高皇產靈神}神漏美命_{津幡豐秋}以_二八百萬神等_一神集々
 賜而神議々賜焉我天皇御孫尊豐葦原水穗之國_乎安國
 度平久所知食度事依奉_二支乃_一至亦曰天照太神與天御中
 主則是天孫之大祖也以_二高皇產靈神_一爲_二皇親神漏岐_一
 也謂親者祖也故屬_二二祖尊號_一名曰_二皇孫_一也故豐受者天
 御中主神皇御孫尊二柱惣名也_{豐者天御中主尊本號受}因以
 名_二大八洲_一而稱_二豐葦原中國_一其此緣也云々亦如_二御鎮
 座本紀_一曰_二高貴大神勅宣_一久以_二皇孫命靈_一宜_二崇_一大祖
 止由氣皇太神之前社_一仍爲_二相殿神座_一云々天性含_二地
 其元祖也皇產詔命良有_二由也_一又神紀曰皇天倭姬內親
 王託宣久各念天地大冥之時日月星神像現_二於虛空_一之
 代神足履_二地而興_一于天御量柱於_二中津國_一而上去下來
 見_二六合_一天照太神悉治_二天原_一耀_二天紘_一皇孫尊專治_二

正有_レ之也。惣應_二帝德_一。各現_二威用_一。同_レ床共_二殿良有_一。以也。於是倭姬命世紀曰：崇神天皇以往九帝同_二殿共_一床。然漸畏_二其神勢_一。共住不_レ安。故令_下齋部氏率_二石凝姥神裔天目一箇裔二氏_一。更鑄_中造鏡_上。以爲_二護身御璽_一。焉是今踐祚之日。所_レ獻神璽鏡劍是也。云々。然於_二寫本中_一。其內侍所者。代々之靈驗度々之火佐云々。其實劍則沉_二西海底_一。其神璽則于_レ今御座云々。抑正本中。內侍所者。內宮御體神璽太玉外宮相殿。但實劍者。古語拾遺曰：纏向日代朝令_下日本武命_上。征_中討東夷_上。仍枉_レ道詣伊勢大神宮辭_二見倭姬命_一。以_二草薙劍_一授_二日本武尊_一。而敎曰：慎莫_レ怠也。日本武尊既平_二東夷_一。還至_二尾張國_一。納宮實姬。淹留_レ月解_レ劍置_レ宅。徒行登_二膽吹山_一。中_レ毒而薨。其草薙劍今在_二尾張國熱田社_一。倭姬世紀亦同此歟三種神璽各崇_二于靈宮_一。百王繼德專足_二于冥鑒_一。況心御柱別雖_レ有_二鎮地_一。凡皇道惠通如_レ令_二上判_一。云々。仍下_二七箇_一。准_二此趣_一。不_レ繁_二筆墨_一。得_レ意而已。

人王崇_二神者_一。夫於_二神代_一者。皆是神也。水不_レ濕。水誰以爲_二靈德_一。乎至_二人世_一者。悉是人也。水能濕。物何不_レ崇_二祖神_一哉。所以衆生假和_二陰陽之精_一。分從_二冥到_一。顯當_レ知有形必受_二天地之胤_一。分從_二神得_一。人是以神武天皇始祭_二

神靈_一。奉_レ崇_二皇祖_一。是人王首耳。神皇系圖云：天照皇神誓曰：吾日太子如_二八咫瓊之勾_一。以_二曲妙御宇_一。且如_二白銅鏡_一。以分明看_二行山川海原_一。乃提_二神劍_一。平_二天下_一。肆以名_二之三種神璽_一也。汝敬承_二吾壽_一。手拘_二流鈴_一。以御_二無窮_一。無_レ念_二今祖_一。吾在_二鏡中_一矣。或臨_二寶位_一。以鎮_二元々_一。上則答乾靈授_二國之德_一。下則弘_二皇孫養_一。正之心_一。然後兼_二六合_一。以開_二都掩_一。八紘_一。而爲_二帝宅_一。詔給矣。神日本磐余彥天皇賴_二以皇天之威_一。甲子歲春二月朔甲申。詔曰：我皇祖之靈也。自_レ天降靈光_一。助朕躬_一。今諸虜已平。海內無事。可_レ以郊祭_二祀天神_一。用_中大考_上者也。乃立_二靈時_一於鳥見山中。用祭_二皇祖天祖_一矣。亦天富命率_二諸忌部_一。捧_二大璽鏡劍_一。奉_二於正安殿_一。天種子命奏_二天神壽詞_一。此神世事而已。天皇鎮魂八神。

一高皇產靈神_一此尊者極天此尊者極天之皇祖帝也

三魂留產靈神_一玉作

五足產靈神_一生魂足魂道反魂

七御膳神_一保食神

右八柱神則八洲守護驗神八齋靈命八心府神座故式爲_二皇帝之鎮魂神_一矣。以下略之本紀勘之

問伊勢兩宮天地宗靈何故此中不_二奉齋_一。耶答天皇傾

云謂海寶者陰所極也彼天寶者陽所極也今此珠者陰陽一極論其德者天地一心所以天御中主豐受外宮大日靈尊天照內宮相和奉授皇孫而已當知天地神皇並護一人其神璽者百王心也各隨帝德應現無窮但契元心須知珠心其無心者非如木石也即名無自他親疎等若取要者無私之心也微有執心不知餘心其自他心是名民心既有隔心非圓實心謂一人心敢非常心以百姓心爲心故也是心理心萬寶無礙別心事心不自在也無心之心無私之心各隨萬事而斷其妄是名寶劍即天御量正直清淨即天下本如秘府曰用天瓊玉戈而降伏從前妄想到穩密清淨本地故一心不亂萬法無咎只切忌不淨猛利人耶云々其心可解理珠事劍事理無礙邪正分明是名寶鏡所謂寸鏡而浮萬像於無心心治無相相寶基本紀曰鏡者靈明心鏡也萬物精明德也故照混沌之前歸元始之要斯天地人之三才當下受之以靜求之以神視之以無形而顯實形上故則以無相鏡爲神明御正體也云々文意可知所詮三種德在一空一空珠現事事空爲劍空事歸理空鏡化物曰一治世一如神懷論今且專辨天皇寶祚即位印明亦如別紙

理珠天王智劍地臣天地明鏡人民歸惠故鎮心柱而收三才即興木德而立中主天則寶珠以上爲正其口四寸掌四德也地則寶劍以下爲正其口五寸掌五行也天地圓口俱表空鏡其體人形卽爲五尺內外心柱本是一氣而分陰陽以爲兩基如彼御鎮座本紀曰伊弉諾伊弉冉尊鎮府陰陽變通之本基諸神化生之心臺都合天心而興木德歸皇化而助國家云々木則掌空元氣化用五行之始萬物之起柱則正神靈以木歸元以主表帝當知三種即一心柱稱天御量鎮一朝靈元々分德被百王本本分惠齊四海瓊々杵尊亦杵獨王唯依領此御量柱耳如彼倭姬命世紀曰心神則天地之本基身體則五行之化生肆元元入元初本本任本心日月廻四洲雖照六合須照正直頂詔命明矣問三種一空何興木德況鎮色體違心理歟答曰大空非空元氣累氣清陽爲天濁陰爲地有緣則有迷故神態自然而有病則有藥故大悲任運而發是以自天神之終及地神以來忘穢勸淨捨邪歸正雖然地神二代未降下界唯至皇孫化生於葦原聊現欲體施惠於群萌故傳三種之神財以繼百王之踐祚卽色爲空卽地而天國家靈命

或云_二天孫_一或稱_二皇孫_一未_レ互_二人臣_一俱被_二帝德_一同領_二天下_一即由_二○即由_二二字_一天照太神與_二高皇產靈_一共所_二以_一所

以二字異
本無

約_二天神_一

則天讓_二日故受_二天孫之名_一地禪_二月

故受_二皇孫之稱_一次亦約_二地神_一則受_二天照_一故得_二天孫

之號_二受_二皇產_一故得_二皇孫之姓_一此紀第五云天照太神

高皇產靈尊相共所生故謂_二天孫_一亦稱_二皇孫_一然同第七

卷曰上則答_二乾靈授_二國之德_一下則弘_二皇孫養_二正之心_一

云々如何是答_二乾靈_一如_二天之無心而降_一一雨_一如何是

弘_二皇孫_一如_二地之無念而養_一萬物_一上冥_二神天_一今大慈

與_レ樂授_二國之德_一下契_二皇地_一今大慈拔_レ苦養_レ正之心如

云皇有_二至德_一之定名也又曰德侔_二天地_一故名曰_二皇所

以皇者即名_二大義_一如_二實錄云_一天大地大人亦大故大

象_二人形_一坐也老子經曰報_二大象天下_一註曰執守也象道

也云々當_レ知無心即大心也若微有_レ私是民心也既有_二民

心_一何爲_二天子_一若背_二天心_一何稱_二神孫_一寶山記云天子

則天地位故德侔_二天地_一則稱_二天子_一也天者父也地者母

也因_レ之以_レ男爲_レ父以_レ女爲_レ母大慈大悲天地孝也如_二

唐明曰_二上帝者天也天帝者天也天子天位天祚德侔_二天

地者稱_二皇帝_一天祐_二子之號稱_二天子_一黃帝以_レ靈紀故

爲_二靈師_一云々故以_二天地_一而爲_二父母_一受_二一人德_一被_二百

王惠_二應_二知天地即是一人天神地皇並授_二一位_一故繼_二

帝位_一必有_二神璽_一也所謂劍鏡寶珠三種是也世紀曰御

饌都神與_二大日靈貴_一豫結_二幽契_一永治_二天下_一言壽宣布

大葦原千五百秋瑞穗國吾子孫可_レ王之地安國止平久我

皇御孫之尊天降所知食止事依奉_二○按中_一于_二時以_二八坂

瓊曲玉八咫鏡及草薙劍三種之神財_一授_二賜皇孫_一永爲_二

天璽_一豆視_二此寶鏡_一古當_二猶視_一吾可_レ與同_二床共_一殿以

爲_二齋鏡_一寶祚之隆當_二與_二天壤_一無_二窮矣_一神記曰天地初

發之時大海中有_二一物_一浮形如_二葦牙_一其中神人化生名_二

天御中主神_一故號_二豐葦原中津國_一亦因以曰_二豐受皇太

神_一也與_二天照大日靈尊_一奉_レ此以_二八坂瓊之曲玉八咫鏡

及草薙劍三種之神財_一而授_二賜皇孫_一爲_二天璽_一云々三種雖

異_二一空爲_一體所謂寶珠其內無邊故雨_二萬寶_一無_二有_一窮

盡_二苟順_一凡情_一莫_レ生_二寸想_一於_二彼仙壺_一尙見_二世界_一況神

璽中豈殘_二天下_一如_二止觀曰_一如意寶珠天上勝寶狀如_二芥

粟_一降_二無量寶_一蓋色法尙能如_二此況心神靈寧不_レ具_二一

切法_一耶云々如_二大論曰_一古佛舍利變成_二如意寶珠_一寶珠

變成_二米云々然此珠者元神意也抑亦應_二知萬物靈也色

法而非_二色法_一即備_二妙心_一此意亦非_二常心_一何比_二凡慮_一

又如_二書曰_一如意寶珠龍王重寶在_二九重淵_一曬龍領下_一

舊事本紀玄義卷第四深秘卷也

沙門慈遍撰

天皇領國者天御量德也天含三才一禪德一人一凡被三
百王惠齊四海故應天地普利天下是名御量
以鎮御柱上天下地乃瓊玉矛其體人形三才如_{上云々}
神皇系圖云從國常立尊迄至伊弉諾伊弉冊謂天
神七代矣爰蒙天祖天御中主高皇產靈尊之宣命天
以授天獨矛而諾尊立於天浮橋之上二神共計曰底
下豈無國歟廼以天獨矛指下而探之獲滄溟其矛
鋒滴瀝之潮凝成一嶋名之磯敷嶋二神於是降居
彼嶋與三八尋殿_{神祇寶山今此處也}因欲共爲夫婦產生洲國
及山川草木等_{上後生}二女_{天照神}二男_{素戔嗚尊}或爲日爲
月永懸而不落或爲神爲皇常存以無窮矣倭姬世
紀曰天地開闢之初神寶日出之時御饌都神與大日靈
貴豫結幽契永治天下言壽宣肆_{カガユニ}或爲月爲日永
懸而不落或爲神爲皇常以無窮光華明彩徹於六合
之內以降高天之原神留座之皇親神漏岐神漏美命以

天八百萬神等乎天之高市爾神集々給比大葦原千五百秋
瑞穗國波吾子孫可王之地利奈安國止平久我皇御孫之尊
天降所知食登事依奉岐云云天皇兩孫領國如斯將
明此德宜用八意

一皇位繼德 二人王崇神 三特尊伏敵
四群民順惠 五法能治世 六政必禁費

七奉齋持國 八神能任元

一皇位繼德者夫陰陽作形精魂續命源受于天性流
分于群生如書云天地之間有真氣大和之氣是也
有五氣陰陽之氣是也又曰皇是無爲者也王是有爲者
也皇則天地之首以靜謐爲用也云々是以一尊既受
天地之性百王皆得神胤之德謂天祖內含精明未
露顯號國常立尊即帝王祖是天讓日天狹霧也外呈
地德氣形乃現稱天御中主尊即人臣祖是地禪月地狹
霧也共天地德自得王臣其次第義如第一卷云云
夫國常立尊與天御中主分爲王臣雖爲三元祖天御
中主雙兼兩祖何者天御中主之長男號曰高皇產靈
尊即名靈魂命_{ミタマノミコト}有二尊受其詔命此是應知定
續陰陽又高皇產靈之女栲幡千千姬者正哉吾勝之皇
妃也吾勝尊者天照太神之太子也故此神孫必具兩性

也人繼_二日胤_一和_レ之是也正直任_レ本清淨歸_レ元神態與_レ世聖化在_レ之故隨_二國穢_一彌用_二清淨_一況心正直自拜_二淨神_一其初天神伊弉諾尊尋_二伊弉冊_一追_二至黃泉_一如_下見_二汗穢_一還令_レ祓除_上然出_二生地神_一而已又地神首諸神達集各令_下萬罪歸_上素盞烏_上以_二千座淨祓_一除_二穢惡_一以_二無相鏡_一奉_レ顯_二神體_一後皇孫尊傳_二此神寶_一令_レ降之時天兒屋根命先捧_二幣帛_一亦用_レ之耳所_レ除之穢即諸惡也所_レ用之淨即萬善也御鎮座本紀云人乃受_二金神之性_一須_レ守_二混沌之始_一故則敬神態以_二清淨_一爲_レ先謂從_二正式_一爲_二清淨_一隨_レ惡以爲_二不淨_一惡者不淨之物鬼神所_レ惡也倭姬命世紀曰心神則天地之本基身體則五行之化生_{利肆}奈_{カルカユヘニハシメツ}元_レ々入_二元初_一本_レ々任_二本心_一與神垂以_二祈禱_一爲_レ先冥加以_二正直_一爲_レ本利夫尊_レ天事_レ地崇_レ神敬_レ祖則不_レ絕_二宗廟_一經_二綸天業_一又屏_二佛法息_一奉_レ再_二拜神祇_一禮_二日月廻_二四洲_一雖_レ照_二六合_一須_レ照_二正直頂_一止詔命明矣_{已上}神態非_レ外正直在_レ心須_下因_二淨元_一知_中皇道_上也

舊事本紀玄義卷第三終

女下照姬便留其國至子八年久亦不復奏追遣無名雉天稚彥乃射之此箭還立胸而死矣天照虛實冥鑒善惡業感表之甚可恐也云々其後遣經津主神武甕槌神于時大己貴等奉避此國云々天神地祇各領冥顯其文可見如前已辨焉如是等相敢非天儀應知遠表穢地而已天神之終則如現生死之穢地神之未終顯海陸之別遠鑒末代示不信之咎廣經中間舉無盡之誤稍去清天漸趣濁地將歸真寂悉導妄亂雖化濁亂神靈何變須因表穢知通淨也

四、本未通淨者陰陽源流也泡流尋源者神靈大用也其神大神人亦大人天大地大兩大德一故大字則以一人也若大頂一則成天字也所以天者二持人也應知天亦天地人也德侔天地而爲一人惠被民人而作百王三才乘心○乘心一本作心來上下道通四海領掌君臣德收一人惟明則民人直也善神施威惡鬼何競如莊子云古之人在混芒之中與素世而得澹漠焉當是時也陰陽和靜鬼神不擾四時得節萬物不傷群生不夭人雖有知無所用之此之謂至一任其自然而已故神書曰崇德辨惑而必然以此備之惠群生以正

法神而通之天地不能揜密而行之鬼神不能測其演法惟是以道德謝天子諸侯歸神明祈國家太平是本來大人耳云々原夫一通之道其源開乎天性百王之惠其流受于神孫元々通神明本々施靈德云何元々莫分二流云何本々可歸一源一源清淨一本正直物悉正直故立心御柱爲百王固與天御量調萬民業其初二尊立天瓊矛爲國柱者卽此元也鎮座本紀云伊弉諾伊弉冊尊鎮府陰陽變通之本基諸神化生之心臺也都合天心而與木德歸皇化而助國家故皇帝之曆數天下之固常磐無動三十六禽十二神王八大龍神常住守護坐依損失有天下一寶基本紀曰心御柱一名忌柱一名天御量柱是則一氣之起天地之形陰陽之源萬物之體也故皇帝之命國家之固富物代千秋萬歲無動下都磐根大宮柱廣敷立稱辭定奉焉已上書文天下之本國家之固示之正直施之清淨云何正直爲化不曲云何清淨爲自不用夫天無私而覆千品清淨心神地無心而調萬像正直色靈天下爲天下之天下非一人之天下萬民非一人之萬民爲一人之萬民其身直而無影曲其心清而色顯外影字隨日色字人也意日昇空神光照色日照天地呈之直

體冥遍四生若達靈性同異無妨自非神力何
通海陸無目籠者入冥界也例如仙壹見乾坤外
鹽土翁者自心魂也即如神紀明彼語曰願爾諸聞給倍
吾是天下之土君也故號國底立神也吾是應時從機
比化生出現之故號氣神吾亦根國底國利備疎徠物仁
相率守護之故名鬼神吾復爲生氣授與福壽之
故名大田命吾能反魂魄之故號與玉神悉皆自然
之名也物皆有効驗我將辭訖遂隱去矣與玉神言壽竟
于時倭姬命皇太神坐正宮之西北角大地輪之中臺
祝祭也紀文所舉變作悉此鹽土効驗順物靈德如斯
夫以天去地來顯外有冥兩儀雖和萬物難持是以神
性不變而靈光異影應用無窮而機見隔域其域多中
既通海陸其通變內殆融冥顯正其所現故云神
人亦其所治故曰神代鶺鴒草葺不合未論通德神
武以降人王而已神源雖淨人流而穢須因冥海知中
顯表也

三、始終表穢者陰陽變化也於變化中且出海陸海
則陰用陸則陽用兩儀和三々成萬物聞香討根者
淨穢本一也元氣雖淨陰陽現穢是以二尊始顯男女
之形示穢相是元氣化用也然立瓊茅爲中柱者

天御中主國常立耳開闢以來清天濁地所_レ以天神地
神也又伊弉諾尊追伊弉冊尊而到黃泉乃見穢國
是即示天神下_レ於地祇各領冥顯之義者也天照太
神詔曰豐葦原瑞穗國者吾子孫可_レ知〇知王之地也云々
是以太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊奉勅天降之時
高皇產靈尊御女豐秋津栲幡千千姬命爲妃誕_レ生天照
國照彥天火明櫛玉饒速日尊奏曰同所生之兒以此可
降矣詔而許之天神御祖詔授天璽瑞寶十種乃率供
奉三十二神乘天磐船而降河內國河上峰峰爰娶
長髓彥妹御炊屋姬爲妃令妊胎宇摩志麻治命未
及產生而神去矣天性雖常而下現生死之相云々
高皇產靈神則詔速飄神曰吾神御子饒速日尊使葦
原國而有疑恠汝往而察之奉勅而降乃復命焉于時
天祖於彼天上處其屍骸日七夜七而哀泣矣老少不
定未上_レ天之義前後相違示下地之相云々亦天照太
神謂葦原中津國者御子正哉吾勝可_レ爲王之地也詔賜
而於天浮橋臨照之一曰於乎聞喧擾之響彼地未
平具以陳不降之狀矣於是高皇產靈尊召集八百萬
神相議以遣天穗日命然媚附於大己貴神雖及三
三年尙未復命矣重遣天稚彥命此神娶大國玉神

牟羅雲命取_二太玉串_一天三十二神前仁相副從_天比各開_二天戶_一岐披_二雲路_一分駐仙蹕比天之八重雲伊頭之千別爾千別天降_二臨于筑紫日向高千穗穗觸之峯_一而到吾田笠狹之倚_二矣其地美女號_二鹿葦津姬_一是大山祇神之兒也皇孫請_二之山神奉_一之一夜而娠遂生_二三兒皇孫不_レ信非_二吾子_一歟故女忿恨作_二無戶室_一入_二居其內_一而誓之曰若非_二天孫之胤_一必當_レ儻若實天孫之胤火不_レ能_レ害即放_レ火燒_二室其火初明而誥出兒名火明命次火盛時而誥出兒名火進命次火衰退而誥出兒名火折尊亦稱_二彥火々_一出見尊_二此尊有_レ德特爲_二國主_一_{地神}第四何者兄火進命自有_二山幸_一弟火折尊自有_二海幸_一爰兄弟相議而試易_レ幸兄取_二弓矢_一入_二山弟亦取_レ鉤到_二海然互不_レ幸兄火進命遂還_二弓矢_一弟火折尊爲_レ魚被_レ喰而失_二其釣_一兄强責_レ之弟不_レ能_レ覓即以_二橫刀_一鍛作_二新鉤一器_一返_レ之兄尙忿曰何依_二多少_一非_二吾故鉤_一不_レ可_レ取矣火々出見憂_二吟海畔_一時鹽土翁來而問_レ之火々出見具以答_レ之故彼翁惑_二此憂苦_一作_二無目籠_一即納_二此尊_一沉_二于海底_一忽至_二龍宮_一於_二其門前_一而有_二一井_一於_二其井上_一有_二一桂樹_一火々出見彷彿_二徨樹下_一有_二美女_一來欲_レ汲_二水乃仰視而驚白_二父母爰請尋_レ之具以答_レ之於是海神乃集_二大少魚_一以逼問

僉_ナ曰不_レ識_{ヒトリ}唯有_二赤女_一疾_{マフ}口不_レ來_二因召探_一口果得_二失鉤_一因娶_二海神之女豐玉姬_一已經_二三年_一欲_レ還之時海神語曰與_二鉤於兄_一之時呼曰_二貧鉤_一然後與_レ之復授_二潮滿玉及潮涸玉_一而誨_二曰清_一潮滿珠_二潮忽滿若兄悔者漬_二潮涸玉_一則潮自涸如_レ此逼惱兄自伏_二將_レ去之時妻豐玉姬謂_二天孫_一曰吾方娘子產生不_レ必久_一當作_二產室_一以相待矣乃還_二葦原_一方如_二彼教_一云々故兄_二火進命_一既被_二厄困_一自伏罪曰從_レ今以後吾將爲_二汝俳優之民_一請施_二息活_一於是隨_二其所_一乞_二遂救_一之矣云々天孫依豐玉姬之語_二早以_二鶉羽_一而葺_二產屋_一既如_二約束_一遂來到矣以下其未_二葺合_一而產生之故_二其名曰_一彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊_二地神第五將_二產生_一時告曰請勿_レ視_二之天孫猶不_レ能_レ忍竊往觀_レ之然女化_レ龍以甚慙曰若不_レ辱者則海陸相近無_レ隔今既顯_レ之何以爲_レ呢乃草裹_レ兒棄_二之海邊_一永閉_二海途_一而徑去矣尙憐_二其兒_一故後遣_二女弟_一之玉依姬_二養_一之者也然此鶉草葺不合尊以_二其姨玉依姬_一爲_レ妃而生_二四兒_一初彥五瀨命次稻飯命次三毛野命次磐余彥命此第四命即號_二神武天皇_一是乃人王之首坐也凡厥閉_二海途_一來神代既訖靈德方隱隔_二冥故也龍神威用自在諸趣爲_二火折命_一且現_二二道_一當_レ知變化由_二同類_一矣見性具_二異

顯_レ兩儀從_レ天降_レ地各化_二萬物_一以_レ妄爲_レ酒以_レ迷爲_レ醉取_レ覺云_レ斬取_レ洲云_レ八古婆老翁本理陰陽也尊男姬女始知_レ陰陽歸_レ一是稱爲_レ娶雖_レ死又生是名爲_レ子故大己貴而幽主也故此神現而父尊不_レ見也但又於_二此尊_一須_レ有_レ體用粗明_二文義_一也已如_二前辨_一其體通_二攝一切惡性_一故諸妄業無_レ非_二此尊_一故云人民山河悉憂_二其用_一別指_二素蓋鳥尊_一誰疑_レ有_レ異方現_二此事_一蛇劍既存何無_二其尊_一今舉_二一例_一諸分用可_レ解見_レ裏識_レ表以_レ邪顯_レ正善惡兩神共可_レ比_レ知_二天照太神雖_一無_二降臨_一其象坐_レ鏡素蓋鳥尊亦不_レ顯現_二其體在_一劍況於_二天神_一尙論_二璽珠_一靈性乘_レ物神應有_レ據然同授_二皇孫_一遠傳_二百王_一冥顯各化_二人倫_一無_レ違其顯覆_二冥譬如_一懸簾其冥照_レ顯如_レ居_二簾內_一仍水清月宿感應明也_○感應明也一本作_レ理當然矣依_レ罪有_レ罰甚可_レ恐也千品雖_レ異皆是受_二天地之光嵐_一萬物雖_レ逼_○逼一本作_レ區悉無_レ出_二陰陽之變化_一若寒若熱增減不_レ定作_レ男作_レ女生死無_レ窮遊水之鱗住岡之獸已限_二冥顯_一他界爲_レ冥々極而顯々遍冥々顯極而冥々遍顯々也能達_二靈性_一必通_二神德_一須_レ因_二冥顯_一知_二海陸_一上矣

二、海陸閉途者卽冥顯堺也海則冥陰陸則顯陽雖_レ海而陸_○陸一本作_レ岡故冥遍_レ顯雖_レ陸而海故顯遍_レ冥然迷_二冥顯_一而

隔_二海陸_一々々若通_二冥顯_一無_レ礙當_レ知陰陽廣化_二萬物_一所以天地唯在_二一心_一々々能明白契_レ神矣若乘_二妄情_一則妨_レ事業障可_レ恐傳聞古者欲念未_レ起其心互通_レ身帶_二光明_一無_レ假_二佗映_一是故天地清淨壽命無量飛行自在如_二魚遊_一水然而妄心漸起淨身失_レ光天下轉_レ闇神明照_二國神皇實錄曰從_二國常立尊_一至_二惶根尊_一天神六代之間則有_二名字_一未_レ現_二尊形_一五位神坐其後轉變而合_二陰陽_一有_二男女形_一應化相生而專_二心神_一珠以_二清淨_一爲_レ先神態與焉寶基本紀曰倭姬皇女託_二宣神主部物忌等_一愼無_レ懈正明聞焉愼而神代者人心聖而常也直而正也然自_二地神之末_一天下四國人夫等其心神黑焉分_二有無異名_一而心走使_レ無_レ有_二安時_一云々精知_二神力未_一廢謂_二之神代_一義當_二聖人_一也靈德已隱謂_二之人世_一卽稱_二凡夫_一也是以至_二地神_一終無_レ得_二自在_一永閉_二海途_一不_レ通而已天照太神_○地神第一詔曰葦原中津國者吾子孫可_レ爲_レ主之地也正哉吾勝尊_○地神第二之太子皇孫爾就而治之云々皇御孫尊_○地神第三天降之時伴神天兒屋根命掌_レ解除_二而宣謹請再拜諸神等各念_レ倍此時天地未_レ遠乃以_二天柱_一舉_レ於天_○謂諸法如_二影像_一清淨無_レ假穢志取訖不_レ可得須止諄辭倍利太玉命捧_二青和幣帛白和幣_一介天

啼素盞烏尊答曰欲從母之根國而已彼母尊者稱黃泉大神故根國者指黃泉也卽是冥道謂爲異界一感覺雖隔何有別處然迷恐生死妄隔冥顯故自分神祇各度含識天神領顯皇孫治世地祇領冥素盞烏尊流若論生死冥顯互轉陰陽變化卽離可了且具冥界彼素盞烏尊故趣黃泉就母根國謂其道間行出雲國見箸流至簸之河上于爰老翁老婆置小女於其中間而啼哭矣尊尋其由于時報曰我有八女每一年一度八頭蛇來吞之今也當之然素盞烏尊乃聞廻謀令蛇醉酒拔十握劍斬爲八段視尾有劍稱草薙劍何以爲私遣五世孫奉天神矣遂娶彼女所生之神名大己貴此等命亦爲幽國之主皆領冥界何者天照太神爲令皇孫奉降葦原先遣二神經津主及武甕槌神此二神降に出雲國五十田狹之小汀則拔十握劍倒植於地踞其鋒端而問大己貴神曰天祖欲降皇孫先遣二神汝當避否答曰當詢吾子事代主此神則三穗之碕釣魚爲樂遊鳥爲樂遣稻背脛問之時命對使曰父宜奉避吾亦不違于時大己貴神白於二神曰僕子既避吾亦當避若吾防禦者則國中諸神同禦今我奉避誰敢不順乃以平國時

所杖之廣矛還授二神曰吾以此矛平有治功天孫若用此矛治國者則必當平安今我當於百不足之八十限將隱去言訖遂隱於是二神誅諸不順鬼神等既訖云々惡以滅用善以相資明來闇去誰爲疑矣違順雖爭遂歸正路重競輕傾何爲惟焉良哉天孫伏地々祇歸天々地冥合以化顯界冥顯同體得以可辨地理冥智有脫授劍而隱天智鑒地移鏡而現云々大己貴命事代主神等各奉避此處矣二神昇天而奏于時高皇產靈尊復遣二神曰顯露之事者吾孫宜治汝則可治幽冥之事矣復汝之應住天之日隅宮者今當供造卽以千尋梯繩結爲百八十紐矣大己貴神報曰乃如敎詔而長隱矣各領冥顯在文可見故素盞烏尊其流則皆地祇神化冥界地則雖顯其神掌冥天則無形其孫治顯天神哀下地神仰上陰陽昇沉冥顯救護天或陰或陽互絕違順若天若地俱度昇沉所謂陰陽性一故不違也天地若二別故不順也天照太神素盞烏尊卽掌陰陽而表違順皇御孫尊大己貴命亦以如此其意可知又謂天照太神雖女而陽故上天也素盞烏尊雖男而陰故下地也陽卽陰蛇爲劍而死陰卽陽劍爲蛇而現住地奉天互

色心色心不二又云有情中有凡聖依元初一念如實錄云原性命受化於心々受之意々受之精々受之神形體消而神不毀性命既而神不終又曰神者生之本形者生之具也云々故受形者必有生死論變化一則皆陰陽也生陽死陰其體無二心神色靈其性歸一起滅自然隱顯無勞神靈法爾色心不苦變化易遷迷悲生死陰陽互轉妄謂自他因之皇天起大慈徧憐群靈神態與世間一切忌穢惡神皇系圖云凡從自性淨妙藏乃至邪蛇地爲下化衆生隨順方便故假所化義與生滅形依無爲行滿卽得正果是大慈大悲神慮也實基本紀云心藏傷而神散去神散去則身喪人受天地靈氣不貴靈氣之所化乍種神明光胤不信神明禁令故沉生死長夜闇吟根國底國云々若從生則冥而化顯若從死則顯而化冥自生至死無不遊冥自死出生無不住顯於此雖顯爲彼是冥爲彼雖顯於此是冥神應王民報感貴賤天地變化昇沉可知麗氣符錄云人者神主神者人神卽生時始天乳死時終地乳故迷悟在心云々太宗祕符曰居無爲無事大達之場超生出死名之清淨是大悲化用也云々元々超生本々出死其元

一氣彼本此心念々有元事々歸本是稱大達卽曰清淨無爲無事不可不守故忌二法以爲穢惡惣經萬物而用除穢謹尋其元由一者伊弉冊尊生火神而神去卽表陰沒陽浮者也陰陽本一故伊弉諾尊尋黃泉而行到卽謂妹曰國未作造竟故可還矣伊弉冊尊曰與黃泉神相論宜還勿視吾矣伊弉諾尊不聽所請舉一片火而見之處肥滿大高膿沸虫流故大驚曰不須也穢國也乃急走歸矣伊弉冊尊恨曰何不我用要言令吾耻辱汝已見我情我復見汝情而追來于泉津平坂于時伊弉諾尊以大磐石塞其後路遂爲絕妻誓卽無別處氣絕之際也應知見異但由己心若達冥顯誰怖生死兩儀相待互見情執神忌物字義可知是故伊弉諾尊乃追悔之時急滌身之穢速洗二見之異頓歸一神之本先洗左右御目及鼻以生日月素盞烏尊卽表顯界陽天之相也空自受陽昇天上故也次重左右持白銅鏡而生日月廻頭卽生素盞烏尊是表冥界陰地之性也其體金故受陰沉下萬物雖化一靈未沒故日月者住天宮矣一靈雖常萬物未存故素盞烏尊遂往根國矣如云素盞烏尊年已長常啼泣矣伊弉諾尊問曰何故常

舊事本紀玄義卷第三

沙門慈遍撰

四分辨變化源流者易云子曰知變化之道者其知神之所爲乎注曰王曰能盡變化者體神者也故知變化則知神之所爲也神皇系圖曰元氣所化水德變成爲因爲果而所露名天御水雲神任水德亦名御氣都神是水珠所成卽月珠是也亦號大葦原中津國主豐受皇神也凡以一心分三千一體顯言爲陰爲陽矣蓋從虛無到變化天月地水感應通交故在名字相云々

神皇實錄曰於高天原化生○本書此下有一之字神號曰天讓ヲル日

陽神ヲ國讓ヲ月ニ姬ニ皇神ニ亦名天御中主尊也天地俱生

神坐是諸天降靈之本致一切國王之大宗也德被百王

惠齊四海歷代帝王崇尊祖萬方人夫○人夫一本敬

神祇故世質時素無爲而治不肅而化太田命傳曰天照

太神則主火氣而和光同塵止由氣太神則主水氣而萬物長養也故兩宮者天神地祇大宗君臣上下元祖也上巳

諸文變化如斯在文可見夫元氣成天地陰陽顯男女以來尊卑之不同王民之種異者也於是拘流有清濁必歸其流聞香有蘭菊須尋其根當述此義略用六意

一冥顯限堺 二海陸閉途 三始終表穢

四本末通淨 五天皇領國 六料簡詮義

一冥顯限堺者卽隱現異也因上神祇論此冥顯夫神祇之源雖分自上代冥顯流通示於末世何者神代如天地未遠雖論神祇亦冥顯非遙所下以人世天地永去清濁宛異冥顯各別謂陰陽本々氣變物天地既分々有冥顯冥則死也變陽歸陰顯則生也化陰現陽神皇系圖云陽者氣也亦光也故名曰現也凡一氣化現名號神靈是生化魂也陽氣散亡卽爲死鎮座本紀云天地之間氣形質未相離是名渾淪所顯尊形是名金剛神一生化本性萬物惣體也云々故於陰陽不孤立中而論變化尋源流者且以陽化爲生爲顯此陽變陰歸死歸冥元是一氣分成兩儀其陽爲天其陰爲地上下漸去昇沉遙隔其天陽魂卽掌心神其地陰魄卽掌色靈如府錄云凡一切有情有心有形形是爲陰心是爲陽雖爲兩陰陽一身

必罰_レ過恐_レ天則八百萬餘神護_レ國恥_レ地則卅六禽
助_レ家從_レ飯_二依_二寶_二不_レ如_レ行_二憲法_二自_レ欽_二仰諸神_一
不_レ勝_レ辨_二道理_二知_二僞知_二而僞知者正而失_レ正歟_一
知_レ僞以下舊典如_レ鏡焉新學可_レ瑩矣、廣略二門利鈍互用
十二字若得_二大旨_二不_レ俟_二下文_一

舊事本紀玄義卷第一終

德利_レ物例如下止觀々々不思議一起慈悲心一安_中自他上故
神宣曰住_二其本心_一皆得_二大道_一行基言無漏靈智當_レ飯_三
大道_一雖_二道一理_一迷悟不_レ同須_二簡十非_一終顯_中無疑_上
所以經說不_レ如_二三界見_一於_二三界_一隨而釋判_二三千果成_一
成稱_二常樂_一云々

伏廻_二聞短之思_一仰伺_二明祖之言_一微從_二妄心_一必損_二衆
善_一然如_二淺學_一多貴_二至理_一而不_レ治_二己之心_一但徒誇_二
徒法暫聞_一才智以可_レ耻_二我之私_一不_レ離_レ私者妄心談
法以_レ何可_レ升甚傷_{○其傷一本}作_二傷說_一々々神未_レ發則佛亦覆
德誰奢_二直尊_一能思々々願顯_二理德_一宜_レ通_二心神_一如來
既爲_二皇天垂跡_一諸賢聖悉無_レ非_一應作_二寔住_一本心是
則本誓無漏神也云々

凡始自_二一尊還生_中靈日_上永令_レ被_二歷代_一遙崇_二神光_一日
嗣寶祚無_レ窮下津岩根無_レ動天御量源起_二乎_一本朝_二焉
國宗廟遍照_二乎餘州_一耳若非_二清淨之志_一爭契_二正直之
道_一百姓皆迷一人可_レ憐夫天潤_二千草_一未_レ分_二親疎_一地
養_二萬物_一豈存_二惡愛_一德侔_二天地_一是稱爲_二皇故云_一天
子不_レ言_二人子_一如_二經說云_一何人王復名_二天子_一生在_二人
中_一處_二王宮殿_一正法治_レ世而名_二天子_一又云_二三十三天各
以_二己德_一分與_二是人_一稱_二天子_一神力所_レ加故得_二自在_一

神宣曰惠_二群生_一以_二正法_一神而通_レ之故天地不_レ能_レ揜
密而行_レ之又云德合_二神明_一則通_二天地_一而四時穩也惠
通_二天地_一則君道明而萬民豐也料知佛說_二王法_一無_レ過_二
慈悲_一尊神冥誓直示_二正直清淨_一是以內外經書於他無_レ
私以名_二正直之道_一顯密教釋爲_レ自不_レ作以號_二清淨之
行_一故衆典中學_二此德_一分明_二世無_一一佛之報_二乃諸論同
受_二彼意_一分宣_二國無_一二王之業_一因_二茲衆散國王能施_一
正法_二諸天擁護好_レ名善_一譽不_レ以_二正教_一不_レ問_二罪過_一
三十三天各生_二嗔恨_一災難多起怨賊競來衆人違背不_レ
從_二其主_一聖人去_レ處善神捨_レ國復爲_二隣國_一恒得_二其
怖_一仁王金光大集等經誠說分明披_二卷可_一見又書云神
怒民叛何以能久神怒不_レ散_二其祀_一民叛不_レ即_二其事_一神
宣曰背_二法而不_一行則日月照見坐違_二文而不_一判則神明
記識給蓋聞人命非_レ命皆與_二天命_一仁惠非_レ惠悉蒙_二神
惠_一七星在_レ頂更不_レ可_二以行_一無道_二五行備_一身敢莫
致_二非法_一政途濫則四海不_レ治法意廢則萬邦無_レ寧世
者非_二人之治_一憲法之治也法者非_二衆之持_一道理之持也
公爲_二公之時其所_一一也代不_レ代之日其理_二也甚違_一神
一之道_二旁背_一無_二一之盟_一國主尤可_レ恐_二民口_一文士何不
慎_二人謗_一況乎天道無_レ隱神常嗔_レ罪抑亦地德無_レ覆冥

舊事本紀立義卷第一 ○一本作二

沙門慈遍撰

神性不_レ動而動乘_二一天_一靈體無_レ形而形垂_二萬物_一聖賢應_レ之兮自然施_レ德庸愚順_レ之分法爾得_二益夫佛之通化也月氏皆聞_二梵音_一神之造_レ地也日域普貴_二秘光_一是以踐祚往聖忝記_二靈驗_一以爲_二代々龜鏡_一傳法諸祖亦註_二神妙_一以備_二人々之寶_一或撮_二綱維_一畧詮_二玄要_一或振_二細綱_一廣講_二奇異_一官文社記不_レ知_二其數_一勅書私錄是亦幾何所以日光遍智者雖_レ辨_二無際之理_一螢火短識者還覆_二無碍之德_一若述_二同致_一則妄取_二神攝_一佛若論_二異途_一則苟指_二佛屬_一神同異難_レ測不_レ辨_二邪正_一佛神易迷須_レ識_二虛實_一方今有_二宗廟之貴首_一爲_二神道之明燭_一天機秀發才名普聞爰予在_二夢中_一聊受_二冥聖之告_一因_二面謁_一悌_二戴_一縑_二細_一故不_レ顧_二少量_一將_下決_上大分_二乃爲_二後蒙_一試釋_上先摸_上但章條森々卷舒之望良疲文旨幽々鑽仰之功何覃仍慙不_二默止_一忝事_二編集_一留遺_二博達_一冀加_二刊修_一玄々亦玄義々何義佛未_レ出無_二能說_一無_二所說_一

法未_レ說無_二能迷_一無_二所迷_一惣是心識不生而言語自絕矣本來無_二一物_一元神是如何但元_二元莫_一見_二二法_一偏本_二本令_一忌_二諸妄_一二法以來不_二神道_一諸妄紛然以_二佛化_一彼妄分_二異忌_一異爲_二穢々_一若除則自飯_二得一_一此一見佛迷_レ佛爲_レ妄若轉則佛神不_レ二如_一彼大圓覺經序明_二四相潛心_一仁王般若中說_上是心識神本等_上誠哉經文神則諸佛靈佛則諸神性人則神主神則人魂也妙哉冥鑒兼指_二西天_一告_レ有_二神應_一永止_二託宣_一追讓_上佛教_上應_レ知經言我滅度後現_二大明神_一廣度_二衆生_一雖_レ然末世名字僧尼以_二不_レ如_一今而可_レ費_二國故屏_一佛法令_レ拜_二神祇_一饗_二德與_一信不_レ受_二備物_一仍同非_レ同猶_二異非_一異未_レ捨_二凡情_一那開_二我執_一兩致有_レ據互爭_二有念_一一妙無_レ隔不_レ如_レ無心古人云道無心而合_二人々無心而合_一道是無爲無事履踐諦當之處神宣曰慮多則志散智多則心亂々々生惱志散妨_二道嗚呼不死妙藥_一一道虛寂萬物齊等所謂神一道者陰陽不_レ測無_二二之盟者變化无_レ窮會_一之則心虛而頓超_二乾坤之表_一證_レ之則智明而直達_二遠近之事_一是故無念之念慮即平等之器無差之心是慈愍之基淨影師云至人非_レ無_レ心但無_レ心之耳真行子曰聖人無_二常心_一以_二百姓心_一爲_レ心謂無_レ妄無_レ私天道在_レ心是心是起地

神道書紀緣起序

夫神之爲神者先天地之神也道之爲道者超乾坤之道也非識所識非言所言但協正直清淨自拜國常立尊矣一氣始顯二儀漸判以來明暗有異正邪不同蓋是大日靈貴素盞烏尊而已凡事々物々皆俱生神去々來々悉備靈性然而究源之彙稀於鱗角迷流之輩鬱鬱一作稠於鱗鱗鬱一作本於是有秦詣禪客ト瑞籬之緣邊爲宮法樂講法華之圓意通達萬句兮智光不昧總括千章兮樂說無窮就中因佛惠之玄極述神乘之幽致閑聞所言之旨趣專同累祖之傳來愚老感寸腸不堪忍進臨法筵諮問稟承之大傳賢師唯微咲不言強尋元由但謂靈夢之雅訓倩測聖智匪直也人誠被神加妙通此道仍非祕府之可祕者而披神道之茂典非密意之可密者談我家之奧願故舉畜懷偷請和尚願擇髓骨以挑末代之法燈須鈔腦膽以瑩後學之智鏡所以勒玄與疏各成十卷殊詮大宗別爲六軸加之類

要集五十卷并元要圖一卷惣而神道樞機聖化至德在斯于時元弘第二之曆仲秋上旬之天大廟官長錄青光祿大夫常良序序一本作謹書

神道書紀緣起目次

第壹卷

第三卷

第四卷

第五卷

第九卷

私云已上約十段粗舉一圖大綱在斯納目可
尋云々

此和記者左大史小槻季連宿禰所持本也類冊依有
之附屬正時畢未練之人令書寫一歟文字不正仍
借請賀茂季榮縣主本令比校以暇日可清書
者也

元祿十三年庚辰二月十五日

享保四年臘月

同十五庚戌七月十七日一校了

谷川昇卯

一本奥書

右上中下三冊者以度會朝雄自筆之本令書寫焉遂校合
畢件本累世傳寫之誤多雖數本互見之寧以愚意推而可
正之乎故從舊本而書寫之但如舊本十段要文者在卷末
之一處今以私意分而列于諸段之末蓋欲使見者有便而
已

寬永甲申歲冬十月
丙辰朔甲辰始筆終功

豐葦原神風和記卷下終

掌神水宜存自正是長生術不死之藥也

私云中人皆貴託宣因茲神明無力而託齋
內親王於長曆年中重止託宣御坐畢于時
各疑申末代靈驗事於是有神約以夢可
示云々可見社記而已

佛神同異要文

寶基本記曰神道則出混沌之堺守混沌之始佛法則
破有無之見佛實相之地神則罰穢惡導正源佛
亦立教令破有相而目不妄視耳不妄聽鼻不
妄香口不妄言手不妄持足不妄行情不妄施
其非也及是也云々

六波羅密經云或人素頭即與頭乃素矣即與矣是
爲布施眼不隨色意不亂念是名持戒耳聞
惡聲心不瞋恚是爲忍辱鼻知息出入常守不離
是爲精進口不罵詈不兩舌是爲寂然心意不
攻道亦不_レ生以除垢濁内外清淨是爲知惠文

私云_忌根不淨顯六根清淨
仍六色禁法即六度等耳

形文深釋曰實降神地不受一座佛事門前不捨一
法性海無風金波自踊神明應化釋尊成道神事併此
道理一文

又曰皇則大空本元清淨妙理是無相法身之義也文仙宮
祕文_覺曰欲示無相之觀解令忌有相之權教大
祕府行_基曰宜起方便之門遙居_中意像之表上
私云一法不生不隨二法故屏佛法
息即如下文云々

佛神誓別要文

倭姬命世紀曰夫尊天事地崇神敬祖則不絕宗
廟經綸天業又屏佛法息奉再拜神祇云々
神祇普傳圖曰夫天照太神與豐受太神則無上宗神而
尊無與二故異天下諸社是則天地精明之本源也無
相無爲之大祖也故不起佛見法見以無相鏡假
表妙體也

天口事書曰未代僧尼者教機相乖人法不合也由
此制非制者是制判也敬神祭禮其致齋前後兼爲散
齋專致其精明德也須下不分二法共食一水軌
匠其心令至神國道矣
弘仁格文曰太政官符禁斷京職議内諸國私作伽藍
事

右奉勅定額時其數有限私自營作先既立制比來所
司寬縱曾不糾察如經年代無地不寺

私云_{委如}格文_其
條依繁畧之

天手力雄尊石戸ヲ開キ給フ神ニテ坐相殿也

神皇產靈神八咫鳥并伊勢朝臣祖神也津速產靈神中臣朝臣祖神也件三柱靈神

者天御中主神所化神名爲子父子道今明露現矣

神態忌物要文

舊事本紀曰伊弉諾尊親見泉國此既不祥也還乃追悔之曰吾前到於不須也凶目汚穢之處故當滌去濯除吾身之濁穢則往見粟門及速吸名門然此二門潮太急故還向於日向橋之小戸櫛原而被除焉

神皇系圖曰夫水氣者清淨海水卽本祖之元性也陽氣者濁世生類不淨實執也故清淨神祭則人竟陽氣鎮也故有鎮魂也陽者氣也亦光明也故名曰竟凡一氣化現名號神靈是生化竟也故陽氣散已卽爲死卽佛本居善哉々々

太宗祕府曰令盡天地人人居無爲無事大達之場超生出死名之清淨是大悲用也文

御鎮座本紀曰人乃受金神之性須守混沌之始故則敬神態以清淨爲先謂從正式爲清淨隨惡以爲不淨惡者不淨之物鬼神之所惡也文

天口事書曰神人心外好別請而從不淨實報則不得踐神地不許飲神地水而五千大鬼常罵大賊文

神祇式云六色禁法弔喪問病謂有重親喪病者不亦不判刑殺不決罰罪人不作音樂謂不作系竹歌舞之類也不預穢惡之事謂穢惡不淨之物鬼神所惡等是也

內七言謂佛稱曰經染紙塔稱曰阿寺稱曰僧髮長尼稱女長長齋稱曰外七言謂死保留病須哭稱曰血打髮稱曰宋齒稱曰又有忌詞堂稱曰香優婆塞稱曰佛弟子出世行者也

神驗尊靈要文

寶基本紀曰垂仁天皇卽位二十六年丁巳冬十月新嘗會祭夜神主部物忌八十氏等詔曰吾今夜承大神威命所託宣也神主部物忌等慎無懈正明聞焉總而神代仁人心正而常也直而正也然地神之末天下四國人夫等其心黑焉分有無之異名以心走使無有安時故心藏傷而神散去神散則身喪人受天地之靈氣不貴靈氣之所化乍種神明之光胤不信神明之禁令故沉注死長夜闇吟根國底國因茲奉代皇天而西天真人以苦心誨諭教令修善隨器授法彼語將來自爾以來大神歸本居止託宣給利若應節自在告示則開大明戸無形顯音或小童女昇立芽菜上須在驗言矣猥莫信狂言類從天地宮陰陽

五十鈴河上_レ留天照太神并_二荒魂宮和魂宮止奉_二鎮坐_一

又曰泊瀨朝倉宮大泊瀨稚武天皇卽位二十一年丁巳冬

十月倭姬命夢教覺給久皇太神宮吾如_二天之小宮坐_一爾

天下_{仁志}毛一所耳坐波御饌毛安不_二聞食_一丹後國與佐郡比

沼之魚非原坐道主子八乎止女乃齋奉御饌都止由居

太神乎我坐國坐止欲止誨覺給支爾時大若子尊乎差_二使

朝廷_{仁令}參上天御夢狀令_レ申給支_レ卽天皇勅汝大若

子使罷往天布理奉止宣支故率_二手置帆負彥狹知_一二神之

裔_二以_二齋斧齋鉏等_一始採_二山材_一搆_二立寶殿_一而明年_戊

秋七月七日以_二大佐々命_一天從_二丹後國余佐郡眞并原_一

志奉_レ迎止由氣皇太神_一度會山田原乃下都磐根爾大宮

柱廣敷立豆高天原爾千木高知豆鎮定座止稱辭定奉_{利奉}

利奉_レ饗利神賀吉詞白賜倍云々

御鎮座本紀曰依_二天照太神御託宣_一太神第一攝神多賀

宮奉_レ傍止由氣宮_一也亦天照太神相殿二前止由氣宮

相殿皇孫命爾奉_二陪從_一留故號止由氣宮相殿而東西

座_{已上}外宮又曰心御柱_{一名曰忌柱}謂伊弉諾伊弉冊尊二尊

鎮座陰陽變通之本基諸神化生之心臺也都合_二天心_一而

與_二木德_一飯_二皇化_一而助_二國家_一故皇帝曆數天下之固常

磐根無_レ動三十六禽十二神王八大龍神常住守護坐依_二

損失有_二天下危_一云々大田命傳記曰兩宮者天神地祇

太宗君臣上下元祖也惟天下大庙也國家社稷也故尊

祖敬_二宗禮教爲_一先故天子親耕以供_二神明_一王后親蠶

以供_二祭服_一而化_二陰陽_一有_二四時祭_一德合_二神明_一乃與_二

天地一通也德與_二天地一通則君道明而萬民豐也_{已上}

祖神大分要文

神皇系圖曰國常立尊國狹槌尊_{乃至天地}

天御中主尊_{以下并}前五柱神者是生化五大尊坐也

私云除_二天御中主以下_一爲_二五柱_一也

高皇產靈神_{皇祖}神皇產靈神_{大神主}津速產靈神_{天兒屋根}

八柱神者天御中主神寶座之內獨化神也明_二百億須彌

百億日月百億四天下_一而爲_二天地人民化生之祖_一者

也云々

神皇寶錄曰天御中主神_{天地開闢之始精氣之神卽以}天八下

靈神_{府中五魂座五靈五常}天三降靈神天合靈神天八百日

靈神_{名五大神也萬生質也}天八十萬魂神件五柱神則受_二天地之精氣_一而氣形

質具而未_二相離_一名稱_二五大魂_一是中府藏坐神也故謂神

者生之本形者生之具也古語謂稱_二獨化神_一也

高皇產靈神_{皇祖神故亦}栲幡豐秋津姬尊_{皇孫尊母也}

思兼尊知性靈坐相殿神也

神皇實錄曰地神五代番地五行傳神位天照太神奉舉天上

故曰大正哉吾勝々速日天忍穗耳尊天祖詔曰吾勝尊也是以天照太神育吾勝尊今謂號稚子謂和特甚鐘愛常懷腋下一稱曰

腋子可子是其轉語也天津彦々火瓊々杵尊正哉吾勝々速

太子可子是其轉語也天照太神於度遇

私曰畧云曰皇御孫尊

彦火々出見尊天津彦々火瓊々杵尊第二子也鸕羽葺不合尊火彦

豐玉姬海童二女也

私曰以上天神地神次第畢

神皇圖曰人王神日本磐余彥天皇鸕羽葺不合尊第四御子也天照太神

誓曰吾日太子如八咫瓊之勾曲妙御宇且如白銅鏡

以分明看行山川海原乃提神劍平天下肆以名之三種神器也汝敬承吾壽乎犯流鈴以御無窮無念

爾祖吾鏡中矣

兩宮鎮座要文

倭姬尊世紀曰神倭磐余彥天皇已下稚日本根子彥大日

日之天皇以往九代歷年六百二十餘歲當此時帝與

神其際未遠同殿共牀以此爲常故神物官物亦

未分別焉御間城入彥五十瓊殖天皇即位六年己丑秋九月就於倭登縫邑殊立磯城神籬奉遷天照太神

及草薙劍令皇女豐鋤入姬命奉齋焉其遷祭之夕宮

人皆參終夜宴樂歌舞然後隨大神之教國々處々仁大

宮所乎求給利倍天皇以往九帝同殿共牀然畏其神勢

共住不安改令齋部氏率石凝姥神裔天目一箇裔二

氏更鑄造鏡劍以爲護神御璽焉是踐祚之日所獻

神璽鏡劍是也謂名內侍所也同三十九年壬戌遷幸但波乃吉

佐宮積四年奉齋從此更倭國求給此歲豐宇介神

天降坐奉饗處云以下如此等求活目入彥五十狹茅天皇

纏向珠城天皇即位二十五年丙辰春三月從飯野高

宮遷幸伊蘇宮令坐于時猿田彥神裔宇治土公祖

大田彥命參相支汝國名何問給爾佐古久志呂宇遲之國

止白互御止代神田進倭姬尊問給久有吉宮處哉答

曰久佐古久志呂宇遲之五十鈴河上者是大日本國之中

仁殊勝靈地待利奈其中翁世八萬歲之間毛未現知留有

靈物照耀如日月利奈惟小緣之物不有志定主出現御

座爾時可獻止念比豐葦原瑞穗國之內仁伊勢加

御覽波禮惟昔太神誓願給天豐葦原瑞穗國之內仁伊勢加

佐波夜之國波有美宮處利見定給比從上天志投降降

坐比天之逆太力逆錡金鈴等是也甚喜於懷比言上給

支同二十六年丁巳十月甲子奉遷于天照太神於度遇

下一南閣浮提有圓陀之地謂之大日靈地亦號神國也文

寶基文圖曰天地開闢基在光明其中有精氣名曰神亦曰心其時爲萬物應化神假名廣大慈悲大御神也掛忝以天津神神策用一而天地與陰陽同節同和合敬合愛顯五常之圖語八子給終應化神力照道可也文

天神七代要文

神皇系圖曰天御中主尊神風伊勢百舟度會山田原大神御座也元氣所化水德變成爲因爲果而所露名天水雲神任水德亦名御氣都神是水珠所成卽月珠是也亦號大葦原中津國主豐受皇神也

國常立尊謂惟三世常住妙心所形名曰天御中主乃至二尊如常略之即如下文右從國

常立尊迄至伊弉諾伊弉冊尊謂天神七代矣

神皇實錄曰國常立尊無名無狀神此蒼生之君水官之臣自古以來實德立功名者也國狹槌

尊水藏豐掛淳尊火藏泥土瓊尊水藏沙土瓊尊對耦大戶之

道尊金藏大苦邊尊耦生面足尊土藏惶根尊荒魂件五代之

八柱天神光胤也雖有兩名相未現形體五大府中坐

故名天地耦生神也云々伊弉諾尊天降陽神名日子也伊弉冊尊天降陰神名日子也

亦稱大自在天女也

從國常立至惶根尊天神六代之間則有名字未現尊形五位神坐轉變而合陰陽有男女形應化相生專心珠神モトノ以清淨爲先神態與焉

神皇系圖曰二尊蒙天祖天御中主高皇產靈尊之宣命天以授天瓊矛而伊弉諾尊立於天浮橋之上二神共計曰底下豈無國歟廼以天瓊矛而指下而探之獲滄溟其矛滴瀝之潮凝成一嶋名之敷馭廬嶋二神於是降居彼嶋與八尋殿社記曰大日本日高見國神祇寶山今此處也云々因欲共爲夫婦產生洲國及山川草木神等後生一女日神天照大神三男素戔嗚尊或爲日爲月永懸而不落或爲神爲皇帝存以無窮矣

地神五代要文

神皇系圖曰大日靈貴天照皇太神神風伊勢國玉璽五

伊弉諾尊持左手金鏡生陰持右手金鏡陽生因以

日神月神所化生也謂火珠水珠之二顯玉變成三

昧世界建立日月是也正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

天照太神之太子劍霧之化生私云杵獨玉皇御孫尊火々出見尊其不合尊其號同下文

右天津尊率諸神部降臨於筑紫日向國穗日高千穗

之峯以來至鵜羽葺不合尊三主治合一百七十九萬

二千四百七十六歲也

御鎮座本紀曰皇天倭姬內親王託宣久各念一天地大冥之時日月星辰像現於虛空之代神足履地而興于天

明也矣已專如在禮奉祈朝廷波天下泰平志四海

御量柱於中國而上去下來而以來見六合天照太神

又曰夫悉地則生心須意則顯信心留蒙神明利益事

悉治三原耀天統皇御孫尊專治葦原受日嗣聖

波依信心厚薄利天下四方國乃人等七至天奉齋敬

明所覃莫不昭厲宗廟社稷之靈得一無二之盟百王

焉

鎮護孔昭是以從人本天地續命祀皇祖標德深

天地開闢要文

其根源恭崇祖神令朝四方之國以觀天位之貴

舊事本紀曰古者元氣渾沌天地未割猶雞子溟滓含

弘大業明天下夫逆天則無道逆地則無德而外

牙其後清氣漸登薄靡爲天浮濁重沉淹滯爲地所謂

走本居沒落根國故齊情於天地乘想於風雲者

州壤浮漂開闢別割是也譬猶游魚之浮水上于時天

爲從道之本爲守神之要將除萬言之難說而

先成而地後定然後於高天原化生一神號曰天讓日

舉一心之定準即配天命而嘗神氣理實灼然故祭

天狹霧國禪月國狹霧尊文

神清淨爲先鎮以得一爲念也

神皇實錄曰天地開闢之始含精氣而應化之元神也故

又曰都合天地生長土毛或備宗廟之祭惟仁恩

初禪梵宮居焉視天下而式時候授諸天子照臨

之忠孝以信爲德故神明饗德與信不受備物焉

天地之間而以一水之德利萬品之命故亦曰御氣

倭姬尊世紀曰心神則天地之本基身體則五行之化生

津神也神語曰御義理也古語天津御氣國津御氣亦

利肆元々入元初本々任本心與神垂以祈禱爲

曰天狹霧地狹霧是水氣易形因以天氣下降地氣上騰天

先冥加以正直爲本利夫尊天事地崇神敬祖則

地和同草木萌動惟水道德矣

不絕宗廟經綸天日嗣又屏佛法息奉再拜神

大宗祕府曰憶者昔高天原初出之故天御義利舉之八重

祇日月回四州雖照六合須照正直頂上止詔命

雲以天於坐而成神號天讓日國禪月皇太神亦名御

中主尊也所化百億須彌百億日月々々須彌有四天

リヌ今又忝クモ國母ノ詔ヲ承テ此和記ヲ三卷シルシ上ル所也扱モ吾國ノ人トシテハ高キモ賤キモ必ズ神風ノ教ヲバ知リ奉ルベキ者也方ニ今勅ニチナミテ同シクハ徧ネク見ヤスカラン爲ニ加様ニ撰ビ上ゲ侍リヌ但文字ヲ和グル心ハアラザレドモ正言ナラ覺束ナカラン人モアルベシ所以ニ撰ム處十段ニヲキテ彼段段ゴトニ要文ヲ出スコト如ノ左然則一々ニ上ノ趣ヲ知テ下ノ文ヲ心得ベキ者也

神道大意要文

舊事本紀曰夫大人之立制義必隨時苟有レ利レ民何妨ニ聖造一且當ト披ニ拂山林一經ニ營宮室一而恭臨ニ寶位一以鎮ニ元々一上則答ニ乾靈授レ國之德一下則弘ニ皇孫養レ正之心上然後兼ニ六合一以開レ都掩ニ八紘一而爲レ宇不亦可一乎

神皇實錄曰於ニ高天原ニ化ニ生ニ神ニ號曰ニ天讓日陽神國禪陰神皇神一亦名天御中主尊也天地俱生神也是諸天降靈之本致ニ一切國王之大宗一也德被ニ百王一惠齊ニ四海一歷代帝王崇ニ尊祖一萬方人夫敬ニ神祇一故世質時素無爲而治不レ肅而化

又曰大易者虛無也因レ動爲ニ有之始一故曰ニ太初一有レ氣

爲ニ形之始一故曰ニ大始一氣形相分生ニ天地人一也大方道德者虛無之神也天地沒而道常存矣性命旣而神不レ終焉形體易而神不レ變性命化而神常然因以名ニ國常立尊一以レ初爲ニ常美一者也文

又曰應化神名曰ニ天御中主神一未ニ顯露一名ニ國常立尊一亦稱ニ國底立一天地之間稟氣之靈蒙ニ一大五種之神力一受ニ天地父母之生身一以ニ言語一授ニ世人一依レ之得ニ一切智心一利ニ萬品生化一也文

實基本記曰人乃天下之神物利須掌ニ常靜謐心乃神明之本主利他莫傷ニ心神一々垂以ニ祈禱一爲レ先冥加以ニ正直一爲レ本須任ニ其本誓一皆令得ニ大道一者天下和順日月精明風雨以レ時國豐民安故神人守ニ混沌之初一屏ニ佛法之息一置ニ高臺之上一崇ニ祭神祇住ニ無ニ之心奉レ祈ニ朝廷一則天地與ニ龍圖一運長日月與ニ鳳曆一德遙海內泰

平民間殷富各念祭レ神禮以ニ清淨一爲レ先以ニ眞信一爲レ宗散齋致齋內外潔齋之日不レ樂不レ弔不レ散失其正致ニ其精明之德一左物不レ移右兵戈無レ用不レ聞輶音一口不レ言穢惡一目不レ見三不淨一鎮專ニ謹慎之誠一宜致ニ如在之禮一背レ法而不レ行則日月照見坐違レ文而不レ判

神明記識給云々

々異ニ殊ニ人モ君ニ從ガハズ故ニ人ト法ト不合トハ云也又格ノ文ニハ末代ノ僧尼共事ヲ佛法ニ亂テ實ハナクシテ國土ヲ費スベキカ故ニ私ニ伽藍ヲ立田地ヲヨスベカラズ若如此シテ年ヲヘバ地トシテ寺ナラザルコトナカラント禁メ置レタリ委クハカノ文ニアリ具ニ尋テミルベシ凡ソ此事ハ宗廟尊神ノ御誓ノミニアラズ佛末代ヲ鑑ミテ經ノ中ニ廣ク戒メ置レタリ其說事シゲシ且涅槃經ニ如來滅後ノ國王大臣四部ノ弟子トモ古寺ヲバ修治セズシテ名利ノ爲ニ新シク寺ヲ立誠ナクシテ三寶ヲ輕シムベキ故ニ一切人木ヲ引堂ヲ造リ塔ヲ建テ或ハ野中山ノ上或ハ道ノ辻ケガレタル處ニ滿ミテラン此故ニ國土ヲ費シ諸ノ災難起ルベシトナン亦仁王經ニ滅後ノ比丘比丘尼僞テシカモ誠ニヨセテ佛法ヲ破リ國土ヲ損セン因緣ヲ企テバ國王大臣其故ヲ知ラズシテ是ヲ許スベシ故ニ我法ヲモ亡サンハ外道ニハ非ズ皆我弟子共ナルベシ譬ヘバ獅子ノ中ノ虫ノ獅子ヲクラヒテ自死スベキガ如シト云ヘリ是則天魔ノ佛弟子ノ身ニ入テ佛法ヲ亡スガ故也廣ク大乘經ノ中ニ見ヘタリ法華經ニ說ガ如シ惡世之中諸無智ノ比丘名ヲ寺ニカリ衣ヲツバリ或ハ閑ナル處

ニ有テ我ハ眞ノ行ヲスト云テ未得ヲ得タリト思ヒ我慢ノ心ミチノテ人間ノ物ヲバ輕メ賤ミシカモ利養ヲムサボルガ故ニ僞テ法ヲトカン此人ハ惡心ヲ抱キテ常ニ世俗ノ事ヲノミ思ヘシは皆惡鬼其身ニ入テ誠ノ佛法ヲバ罵リ謗ルベシト云ヘリ心アラン人能々可ニ耻思ノ子ノ時與國元年七月八日始テ筆ヲ下シ同九月六日はヲ誌シ終ヌ神道ノ大意詮ヲ取テアラノ載侍リ委ハ古キ記文ニ見ヘタリ又如ニ私書集ニ

抑慈遍聊神道ニ趣キコトニ靈驗ヲ憑ミ奉ル起リハ去ル元德ノ年夢ノ中ニ神勅ヲ承ルニ依テ先神懷論三卷ヲ撰ミ佛神ノ冥顯ヲ理リ眞俗ノ興廢ヲ明ラム然ヲ故官長常昌三品奏聞シ奉リシカハ勸覽アリ已ニ綸言ヲ下サレ御祈申ベシトナン其次ノ日叡山ノ行幸ト聞ヘ侍リ其後兎角有テ思外ニ隱岐ヘ渡ラセ玉ヒシ間且ハ皇道ノ廢レン事ヲ歎ヒテ常昌卿頻リニ神宣ノ趣ヲ委ク尋シムベキ由ス、メ侍リシカバ御願ヲ祈リ申サンガ爲ニ取分テ神道ヲ撰ビ奉ル謂ル舊事本紀ニツキテ其玄義文句各十卷又太宗祕府ニツキテ其要文六卷ヲシルス并ニ神祇玄要圖三卷神皇畧文圖一卷古語類要集五十卷又其外一卷已上八十一卷既ニ上覽ニ備ヘ奉

ダクシテ託宣ニモ及ビガタシ故ニ太神ハ佛教ニユヅ
リテ託宣ヲ留メ玉ヘリ爰ニ知ヌ佛神内證同一ニシテ
而モ化儀各別也所謂ル神道ハ一法未ダ起ラザル所ヲ
守テ起ル心ノ萬ノ物ヲバ皆穢惡ナリト是ヲイメリ佛
法ハ二途既ニワカレテ後諸ノ迷アリ此迷ヲオサヘテ
實相ナリト是ヲオシフ然レドモ佛法ニモ本初ヲ悟リ
不生ト談ジ神道ニ又和光同塵ノ利生アマチシ然ルニ
三互ニカハルコトナケレドモ且ラクカタドリテ面々
トスル計ナリ夫神ハ必ズ本ヲ守テ末ヲイミタマフ處
ハ其末ヲ導ンタメ也佛ハ亦末ヲ導テ本ヲ示シタマフ
意ハ其本ヲサトラシメンガ爲也本末究竟ニシテヒト
シク説ク法華經ノ文此心ナルベシ凡宗廟ノ御本誓正
直清淨ヲ先トストナン其故ハ唯獨一ニシテ二法ヲ見
ザレバ左ノ物ヲ右ニウツサズ是則正直也唯一ヲ守テ
二ニムカハザレバ元ヲ本トシ本ヲ元トス是則清淨也
實ニ正ニシタガウヲ清淨ト名ケ邪ニ隨フヲ穢惡トス
上ニシルスガ如シ此ヲ教ヘ玉フトイヘドモ人ノ心ハ
イヨ／＼猥リナルワザ益サカンナレバ力ナクシテ佛
大慈悲ヲ垂レ穢惡ノ中ニハ責入當體即是ノ法ヲ示シ
玉ヘリ然レバ諸ノ化ニ勝劣アルニハ非ズ各時ノ宜シ

キヲ守テ機ノ異ナルニ住スル者也譬ヘバ如ニ隨レ病
施レ藥ヲ仍儒道乃佛神利益炳然也委可ニ尋問一

佛神誓別事

神宣曰神人ハ守ニ混沌之始一屏ニ佛法之息云々混沌ト
云ハ天地ノコト也サレバ天地ノ未ワカレザル其先ヲ
守テ起ル所ノ諸ノ穢惡ヲ忌ムベシト示シ玉フ其故ハ
彼天地本無之源ヲワスレタルヨリ猥ナル萬ノ心ハ起
リ初ル處ニ佛教ト云ヘルハ眞俗ノ二ヲ立迷悟ノ別ヲ
論ジ剩ヘ佛見法見ヲ起シテ我相憍慢ヲ本トスル故ニ
コトサラ僧尼ヲイミタマフ者也其文ニ曰ク天照太神
與ニ豐受太神一則無上之宗神無爲之大祖也故不レ起ニ佛
見法見一以ニ無相鏡一假表ニ妙體云々其心尤深シ能々
可レ思加之又神道トイヘルハ先天下ヲスナヲニシ萬
民ヲ樂ムベキ處ニ佛法ト云ヘルハ出世ノ道ト號シテ
併世間ヲ忘レ國土ヲナイガシロニスベキガ故ニ僧尼
ヲ忌玉フ也又或説云未代名字ノ僧尼ハ教ト機ト相背
テ人ト法ト不合也故ニ文ニ專吞ニ一水一不レ分ニ一流一
云々所以濁世末代ノ此比ハ機根拙シテ佛法ハ誠ヲオ
シユレドモ僧尼ハ教ト機ト相背ケリト云リ加樣ニ誠
ナキ輩シカモ我ハ佛弟子出世ノ人也ト名乗テ法モ世

豐葦原神風和記卷下

佛神同異事

佛法ノ未ダ渡ラザリシ其昔垂仁天皇御宇ニ御託宣トシテ神道ヲ佛法ニユヅリタマヘリサレバ佛神ノ惠全ク同ジクシテ眞俗ノ道更ニ異ナルコトナシ然ルニ御託宣ニ於テ西天ニ真人アリト告給ハ釋迦如來ノ御事也然ルヲ如來ハ神明ニ替リテ世ニ出坐ス神明ハ如來ニ讓リ託宣ヲトマメ玉ヘリ然則佛ノ脱玉ヘル御經ハ悉ク尊神ノ御託宣ナルベシ抑佛ニユヅリ坐ス故ハ御託宣ニコトハリ玉フ如ク總テ神代ハ人ノ心淳ニマシマシテ猥ナルコトナシ故ニ人種少モ惡キ心アルヲ見テハ神始ヲシメセバ自ラ先ヲ本トシテナリ安キ故ニ人猶シ通力アリ是ヲ神代トハ申也ヒトシメテ心得ハソノカミ輪王物ヲコシラヘ黃帝人ヲ導キ乃至聖人道ヲ得テ政ヲ格セシハ皆神靈ノ德ヲアラハシテ自在ナルワザヲ施ス者也然ルヲ彼ノ用モ漸ク廢シガ如シ地神ノ末ヨリ人ノ心キタナクシテ惡シキ思ニ順ヒ來

レルガ故ニ通力スデニ失ヌ此萌ヲ取テ人ノ世トハ申也故ニ佛ハ地神ノ末人ノ始ニハ成道ヲトナヘ廣ク機ニ隨テ普ク物ヲサトシ給フ也サレバ佛法未ダワタラザリシ程ハ莊老等ノ訓吾朝ノ神道ノ如シ但清淨法行經ノ文ニ佛三聖ヲ兼テ震旦ニ遣シ禮儀ヲ先ヅ開キ然而後ニ大小乘ノ經ヲワタスベシト云ヘリ三聖ト云ハ月光菩薩是ハ顏回ナリ光淨菩薩ハ是仲尼也迦葉菩薩ハ是老子也ト云々故ニ老子ハヒツカニ西方ヲサシテ彼ニ聖人アリ又我師タリト云ヘル誠ニ其道通ジテ其教同キ也又此神ノ託宣ニハ化導ヲ西教ニユヅリ彼佛ノ經文ニハ利益ヲ明神ニ著ハス悲華經ニ我滅度後濁惡世中現大明神廣度衆生ト云ガ如シ然レバ託宣ヲ留メテ本居ニ歸玉フ其本居ト云ヘルハ是本有眞性大日靈ノ冥界也法華經ニ神通力如レ是於ニ阿僧祇劫常在ニ靈鷲山及餘諸住處ト云ヘルハ此心也行基釋ニ曰天宮與ニ靈山分ニ一線道互爲ニ佛神賓主ト云ヘル可レ思レ之眞性徧ニ法界ニ神靈具ニ衆生ニ託宣物ヲサトス事實ニ深キ心アルベシ況ンヤ日本ハ神國ナレバ佛法未ダ渡ザリシ前ニハ天下ノ善惡ヲバ神明ノ御託宣ニ依テ悉クハカレリト云ヘリ餘リ人ノ心僞アシキコト茂

ノ本ヲ隱シテ萬ノ神トアラハレ玉フ是也三ニハ實迷
 ノ神謂ル一切ノ邪神ノ習トシテ眞ノ益ナク愚ナル物
 ヲ惱シ僞レル託宣ノミ多キ類是也サレバ此邪神共僞
 テ大神ノ託宣ト云ヒテ人ヲタブラカシ猥リニ惡道ヘ
 引入ベキガ故ニ宗廟末ヲ鑑テ託宣ヲ止メ玉フ也此誓
 約ヲ忘テ中比又託宣ヲ頼ミテ用ユルコトナカリシ時
 カラ○用ユル以下一本作用ル事アリシ時力無ク
 シテ神明重テ齋内親王ニ託宣シマシマシ祭主ト御問答
 アリテ長曆年中ニ重テ託宣ヲ止メ玉ヘリ其時ニ人々
 末代ニハ如何ニシテ御託宣ナラズシテハ眞ノ靈驗ヲ
 知リ奉ラント疑テ申シカバ夢ヲ以テ示スベシトナン
 カカル御誓アルスラ猶當世ノ人ハ皆嚴重成鬼神天魔
 ノワザヲ信ジテ誠ノ神道ヲ知ラザル故ニ天下ノ兵亂
 國土ノ災難モ出來ヲヤ其故ハ仁三經ニ國土ヲ亂レン
 トテハ先ヅ鬼神亂ト尤可レ慎ニ此心一也ト云々

豐葦原神風和記卷中終

直爲本謂從正以爲清淨隨惡以爲不淨惡者不淨之物鬼神之所惡也云々文ノ意分明也然ルヲ當世ニ萬ノ惡ヲ好テシカモ物忌ト云フスベテ神ノ御誓ニカナワズ甚ヲカシキコト也サレバ神ノ御誓六識ノ禁忌ト云ヘルハ萬ノ惡ヲ恐レテ六根ヲ清メンガ爲ニ目

ニ諸ノ不淨ヲ不レ見耳ニ諸ノ不淨ヲ不レ聞鼻ニ諸ノ不淨ヲ不レ臭口ニ諸ノ不淨ヲ不レ食身ニ諸ノ不淨ヲ不レズ意ニ諸ノ不淨ヲ思ハザレト誓ヒ玉ヘルハ此意也加之内外潔齋トハ爽ヲ不レ見病ヲ不レ聞穴ヲ不レ喰心不レ亂刑殺不レ斷罪人ヲ不レ刑音樂不レ奏穢惡ニ不レ預兵器ヲ不レ用輶ノ音ヲ不レ聞都テ口ニ惡シキ事ヲ云ハズ目ニ不淨ヲ不レ見鎖專ニ謹慎之誠宜致如左之禮矣所詮者肝要者正直清淨是則此神ノ本誓也仍タ獨一ニシテ諸ノ惡ニシタガハズ是ヲ清淨ト名付タリ只獨一ナル故ニ左物ヲ右ニウツサズ是ヲ心ノ正直トスル也御託宣曰心神ハ則天地ノ本基身體ハ則五行之化生肆元々入ニ元始ニ本任ニ本心ニ敬神能以清淨爲先祈冥加以正直爲本日月廻ニ四州雖照六合須照正直頂詔命明矣又曰人乃天下之神物須掌靜謐心則神明之本主莫傷心神夫神垂以祈

禱爲先冥加以正直爲本也須任其本誓皆令得大道也天下和順日月モ精明ニシテ風雨以時國豐民安云々

尊神靈驗事

垂仁天皇卽位廿六年丁巳冬十一月新嘗會ノ祭夜倭姫皇女詔ニ神主部物忌等曰吾今承大神之威命所託宣也汝等慎無懈怠正ク明ニ聞ケ焉スベテ神代ニハ人ノ心皆清淨ニシテ悉ク正直也故ニ諸ノツミト云咎ト云事更ニナシ然ヲ地神ノ末ヨリハ四方ノ民其心貳クシテ根ノ國底ニ踰躋是ニヨリテ西天ニ真人アリ皇天ニカハリ奉リ機ニ隨テ法ヲ說カノ言ハマサニ來リナントナス故ニ神明ハ託宣ヲトメ本居ニカヘルベシタトヒ形ナクソラニ大明ノ戸ヲ開キ三歲ノ小兒輩ノ葉ノ上ニ立テ神變ヲ現ストモ狂言ノ類ヲ信ズルコトナカレ聊不審アラバ宜ク奏聞ヲイタシ其左右ニ可レ隨ト云ヘリ然則尊神ノ御本誓トシテ託宣ヲ止メ玉ヘルコト勝タル御惠也其故ハ凡ソ冥衆ニ於テ大ニ三ノ道アリ一ニハ法性神謂ル法身如來ト同體今ノ宗廟ノ内證是也故ニ此神ニハ本地垂跡トテ二ツヲ立ル事ナキ也二ニハ有覺ノ神謂ル諸ノ權現ニテ佛菩薩

トノトヲ司トリ玉ヒシ大中臣氏ノ祖神也故ニ神代ヨリ以來諸之神事ヲツカサトリシニ依テ宗席ノ勅使ニ定メヲカル今ノ祭主是也第二神皇產靈尊ハ神主度會氏ノ本祖也シタシク神ニ仕ヘ奉リ來レリソノカミノ事ハ暫ラク内宮ノ鎮座セシ時大若子命ヲ以テ大神主ト定メラレシヨリ大佐々尊マテ九代ニ至レリ其時外宮シヅマリマシマセシカハ彼ノ大佐々尊ヨリ御氣ニ至マテ十九代ノ間ハ兩宮共ニ兼行フ大神主一人ナリシヲ天武天皇御代ニ御氣カ子兄虫ヲモテハ外宮ノ禰宜トシ御氣ガ弟志已夫ヲモテハ内宮ノ禰宜トス然レハ則カノ天武天皇ノ御代ニ大神主ハ止メラレヌ然ルニ王位モ靜カナラザリシカハ萬ヨロシカラザル事ナリ又始テ内宮ノ禰宜ニ補セラレシ志已夫其子ナクシテ荒城田氏ニ移レリ但兩宮ニ一人有テハ奉幣ニ事カケヌベキ故ニ二人三人ト加ヘラルハホドニ次第ニオホクナリ今ノ様コレ也此禰宜ノ加ハルコト多クハ惡シキ事アリト見エタル也抑兩宮ノ奉幣ハ皇帝ノ一人ニ限テ其外ハ式文トシテ禁メ置キ玉ヘリ然ルヲ近代ハ神主ヨリ始而諸ノ職掌ノ人共ニ至ルマデ賤キ民ノ幣ヲサ、ゲテ僅ニソノフル物ヲ貪ル故ニ神德モウ

スク王威モカロシ淺増トモ云計ナシ此等ノ事モ委クハ社記ニ載ルカ如シ第一高皇產靈尊椅幡千々姬尊ノ御父也千々姬尊ハ皇御孫尊ノ御母也則皇帝ノ祖神ニテ坐マセリ此事既ニ上ニシルスカ如シアラノ大分如レ此其外ツブサナル本祖ハ姓氏錄ニ見ヘタリ

神態忌物事

伊弉諾尊始テ伊弉冊尊ノ死セルヲ見テ我シコメノケガラハシキ所ヘ致レリトテ小戸ノ川原ニシテ御被シ給シヨリ以來物ヲ忌ムテ起レリ一念起テ二法ヲ分ツヨリ萬ノ穢ハ出來ルモノ也其ケガレ多シトイヘ厩カノ生死ノ二法ノワカレヲ忌タル神ワザ也此故ニ伊弉冊尊起キアカリ玉ヒテ伊弉諾尊ヲオヒタマヒシ詞ニハ必我ヲ見ベカラズト云其詞ヲタガヘリ故ニ汝ハ我心ヲ見ツ我汝ガ心ヲ見ントノ玉ヘルハ此理也此故ニ死ヲ見サレハ生ヲ知ラズ生ヲ知ラサレハ死ヲ恐ルベカラス只二法ノ別ヲ見ルヲケガレト云生死ヲ見ザル處ヲ清シトスル也故ニ行基菩薩釋ニ曰居ニ無爲無事大達之場ニ超レ生出レ死名ニ之清淨ニ宜起ニ方便之門ニ遙居ニ想像之表ニ況御託宣ノ文ニ曰人乃受ニ金神之性ニ須レ守ニ混沌之始ニ故敬神態ニ以清淨ニ爲レ先祈冥加以正

神ノ威命ヲウケ玉ハリテ託宣スル處也汝等共慎テ明
カニ聞ベシ我御ヲヤ丹後國與謝ノ宮ニ坐也天ノ宮ニ
アリシカ如ク一所ニ並ヒ奉リテハ如何カウレシカラ
ントナリ此由ヲ表シ奉リシカバイソギ勅有テ大佐々
尊ヲ始トシテ彼處ヨリ伊勢國ヘウツシ奉ル今ノ外宮
是也聖德太子ノ御釋曰天御中主尊ハ神風ノ伊勢國百
舟之度會山田ノ原ノ太神ニ坐ス又ハ大葦原中津國主
豐受皇神ト號スル也云々又神記曰高皇產靈神詔シテ
宣ク皇御孫尊ハ豐受皇太神ノ御前ニ仕ヘ相殿ノ神タ
ルベキ也如レ此外宮鎮座ノ後內宮ニワタラセ玉ヒシ
高宮荒祭ノ兩神ヲワカチ奉テ荒祭ノ神ヲハ內宮ニ止
メ參ラセ高宮ヲバ外宮ニ移シ奉ル是則伊弉諾尊日向
ノ小戸河原ニシテ御祓シ給シ時玉レ生フ大曲津大直
日兩神也其大曲津ト申スハ荒祭ノ宮天照太神ノ荒タ
マノ神也其大直日ト申スハ多賀宮豐受太神アラタマ
ノ神也ト云ヘリ又相殿ノ御中ニ岩根多力雄尊其御體
ハ弓ニテ坐也栲幡千千姬尊ハ劔ニテ坐也此兩神ヲバ
內宮ノ相殿ニ止メマイラス太玉尊ノ御體ハ則神璽ニ
テ御坐ス天津兒屋根尊其御體ハ矢^{〇一本}ニテ御坐ス
譬ヘハ如レ履此神達ヲバ皆分テ外宮ヘ移シ奉ル其外

又相殿マシマセトモ云ヒアラハシ奉ルコト深キ禁メ
也又兩宮及攝社ノ方角并御殿ヲ作リ奉ル有様皆深キ
御事共アリトイヘドモ是ヲ申アラハスニ旁深キ恐レ
多シ委クハ別ニシルシ侍ベリ倭姬皇女又神主物忌等
ニ告テノ玉ハク汝ヲ諦ニ聽ケ天照太神重テ託宣シ御
坐ス我ヲ祭奉ラントキハ先豐受太神宮ヲ祭奉ルベシ
而後吾宮ヲバ祭ルベキ也トナン故ニ諸ノ祭事ハ皆豐
受宮ヲ先トスル也夫ヨリ皇御孫尊ハ天照太神ヲアガ
メ給天照太神ハ天御中主尊ヲアガメ玉フ德ヲツタヘ
元ヲタツトミ玉フ故也ト云ヘリ仍倭姬皇女加様ノ事
共ハカライ置キ坐テ奏シ玉ハク我ハ久カラズメ去ヌ
ベシ姬宮一人下シ奉リ玉ヒテ我ゴトク尊神ニ仕ヘ奉
ラセントテ下シマイラセ自ハ終ニ岩隠レシ玉ヘリ其
レヨリ以來齋宮ト申奉ルハ是也

祖神大分神

天御中主尊ニ三ノ御子アリ一ハ高皇產靈尊第二神皇
產靈尊第三津速產靈尊其兒ニ市千魂尊其子ニ與居登
玉尊其子ニ天津兒屋根尊即人臣ノ太祖也爰ニ大職冠
淡海公ヨリシテ藤原ノ氏ヲ給リ天下ノ政ヲ主リマシ
マセリ抑天津兒屋根尊ハ皇御尊ノ下ラセ玉ヒシ時フ

ン爲ニ來レリトナンカ、ル程ニ三種ノ神器ニツカヘ其德ヲ崇メ奉リ玉ヘリ猶モ同宮ノ中ニ神ヲザ恐アリシカバ宮所ヲ求メンガ爲ニ崇神天皇ノ御宇ニ倭姫皇女三種ノ神器ヲイタバキ奉リ大内ヲ出給ハントセシ時護身ノ御爲ニ石凝姥ノ神天目一箇神二氏ノ者ニ仰セテ劔ト鏡トヲ鑄替奉ル地祇^ニンナヘマシマセシ神璽相共ニ大内ニ止メ置參ラセ本ノ三種ノ神器ヲバ皇女自ライタバキ奉リ處々ニ宮所ヲ尋マシテ垂仁天皇ノ御代ニ遂ニ伊勢國ヘ入ラセタマヒシトキ猿田彦ノ翁ト申者ニ行合テイツクニヨキ宮所アルト問玉ヘハ答テ申サク宇治ノサクシヲヨリ流タル河上ニアヤシキモノ光リテ侍リ定メテ主アルラント思ヒテ翁八萬歲ノ間守テ今マテアリトナン皇女聞召シ喜テ彼翁ヲサキトシテ尋入マシ^ノテ御覽シテノ玉ハク此寶ハ天照太神天ノ宮ヨリツキノ宮所ノ爲ニトテ遙カニ投給ヒシ天ノ逆戈五百鈴實是也トナンソノ時御舟ニバサレテカノ所ヘアガラセ玉ヒシ時御裳ノスソヨゴレタリシヲス、ガセ玉ヒシ川ヲバ御裳濯川ト申ス也カノ五十鈴ノ所ヨリ流レタル川ヲハ五十鈴川ト申ス也サレバ終ニ此川上ニ祝ヒ奉ル今ノ風宮ノ御鎮座是

也聖德太子ノ御釋ニ曰大日靈貴天照皇太神ハ神風伊勢國玉掇五十鈴川上ニ坐ス凡上ニ坐ス時ハ掇トヒロクル是ヲ尸垂^{○一本}光天女ト名付奉ル也云々又神記曰劔鏡寶珠三種ノ神器ヲ以テ伊勢國五十鈴川ノ宮ニ鎮座シ奉也此三種ノ神器ノ中寶鏡ト申スハ八百萬ノ神達岩戸ノ前ニテ鑄奉リシ鏡也則今ノ内宮天照太神ノ御正體也寶劔ト申ハ素盞烏尊蛇ノ尾ヨリ取出玉ヒテ天照太神ニマイラセ玉ヒシ劔是也然ルニ景行天皇ノ御宇日本武尊東夷ヲ平ラケントシ給ヒシ時太神ニ詣テ御暇申サセ給ヒシ時倭姫皇女此寶劔ヲ以テ日本武尊ニ授ケマイラセ念比ニ教ヘ奉リ玉ヒシ故ニ彼東ニテ夷ニヲソハレ遁レカタカリシ處ニ草ヲナギ火ヲカケ夷ヲヤキ殺シテ遁レ玉ヒシヨリ以來草薙劔トハ名付タリ此尊歸リ坐ストテ尾張國ニテ惡シキ風ニアタリテ失セ玉ヒシ時此劔ハカレニトバマリ今ニ熱田ノ宮ト申ス也神璽ノ玉ハ天御中主尊水德也此尊サ、ゲテ豐葦原ヲ作り玉ヒシ是也外宮御鎮座ノ後五十鈴ノ宮ヨリ山田ノ原ニ奉^レ移今相殿ニテ坐ス太玉尊是也謂ル内宮御鎮座ノ後數百歲ヲ經テ雄略天皇ノ御代ニ倭姫皇女神主部ノ物忌等ニ向テ宣ク我ハ是天照太

シマシ海ト陸トハ常ニ通ナマシ今ヨリ後ハ永ク知ル
ベカラズトテ產玉ヒタル御子ヲ百草ニツ、ミテ浪ノ
ホトリニ打捨テカヘル後ハ永ク和田津海ノ戸ヲ閉ス
サレハ海ト陸ト今ニ不_レ通コトハ是其事ノ本也故ニ
火々出見尊餘ノ女ノ乳アルヲ持テ此御子ヲ養ソダテ
タマフサレバ今ニ至ルマデ乳女人ヲ取コトハ此イハ
レナリ其後母ノ豐玉姬ナヲ我子ノ事ヲ哀ミ思ケレハ
妹ノ玉依姬ヲヅカハシテソダテ奉リシ御子也是則地
神五代ノ終也然ルニ此鵜羽不_レ葺合尊御伯母ノ玉依姬
ヲ后トシテ四ノ御子ヲ生マシメ玉ヘリ第一ハ彥五瀨
尊第二稻飯尊第三三毛入野尊第四ハ磐余彥尊是第四
ノ尊則神武天皇ト申テ御代ヲ繼玉フ則人王ノ始是也
委ハ日本紀ノ文ノ如シ夫レ神ノ代人ノ世異也トイヘ
ドモ皇御孫尊ヨリ以來天津日嗣ヲ受ケ三種ノ神器ヲ
傳ヘ代々ニ至ルマデ天皇ノ御名ヲ得玉ヘリ天ト皇ト
二ノ德一人ノイワレ前ニシルスガ如シ謂ル地ノ靈光
ハ顯レテ天ニ上ル是ヲ天照太神ト申シ奉ル其天ノ源
ハ天御中主神是也此天ノ顯レ下ル其德ヲ高皇產靈神
ト名付奉ル此德ニヨリ終ニ國ノ主ト成玉ヘルヲ皇御
孫尊ト申奉ル也故ニ此皇御孫尊ハ天神外宮ノ相殿ト

シテ德ヲ同ク本ト末トヲ一ツニシテ豐受大神トハ申
シ奉ル也其文ニ曰豐受トハ天御中主尊皇御孫尊二柱
ノ神ノ惣名也豐トハ豐葦原ノ主天御中主尊ノ德也受
トハ此德ヲ皇御孫尊ノ讓リ受玉ヘル名也サレバ聖德
太子ノ御釋ニ曰伊勢國度會山田原ニ坐スハ豐葦原中
津國ノ主豐受皇神是也トシルシ玉ヘリ天先定テ地ノ
靈光天ニ顯レ地既ニ定テ後天ノ德下テ地ヲ主ル也サ
レハ此理ニヨリテ自視奉ル時地神先シヅマリ玉ヒテ
天德ヲ顯シ天神後ニシヅマリ玉ヒテ地ノ德ヲアラハ
ス此道ヲ一人ニユヅリ百王ニ蒙ラシムル故ニ天地ノ
兩宮ヲ崇奉リテ皇帝ノ宗廟トハ申マイラスル也

兩宮鎮座事

神ノ御代ヨリ以來三種ノ神器ヲ傳ヘ上九代ノ帝開化
天皇ニ至ルマデ床ヲ同シ御座ヲ共ニシ奉リシカドモ
代スデニ下ルマ、ニ漸ク神威ヲ恐レ奉リテ別ノ御殿
ニイハヒ奉ル靈鏡殿今ノ内侍所是也然ルニ開化天皇
ノ御宇ニ箱ノ中ニ虫ノ如クシテハタラク物アリ奇ミ
テ御覽ズレバ人ノ形ナリイタハシト思食テ聞セ玉ヒ
テ坐スホドニ漸ク人トナリイツシキ姬宮是也ヲ倭姬
皇女ト申奉ル事ノ心ヲ尋レハ我ハ神ニ宮ツカヒ奉ラ

多キニヨルベカラズ慥ニモトノ針ヲ返セトセメケレ
 パ思ノ餘リニ海ノ端ヘ行テサマヨヒケレハ鹽土翁ト
 云神出來レリ此事ヲ尋聞テ慙レミヲナシ大目ノ荒
 籠ヲ作テ火々出見尊ヲ中ニ籠メ海底ヘ入タマヘリ
 又翁ノ教ニ隨テ八尋ノ鰐ニ乗テ龍宮ヘ至リ彼宮ノ
 門ノ井ノ上ニ湯津桂ノ木アリ其木ノ本ニ良久御座處
 ニ和田津海ノ神ノ娘豐玉姬内ヨリ嚴シキ姫立アマタ
 ツレテ玉ノツルベヲ持井ノ水ヲ汲玉フニ井ノ底ニ彼
 ノ尊ノ影ウツリテ嚴シキ男アリイザヤ汲ントテ汲共
 汲トラレズ自空ヲ見上玉ヒケル程ニ男アリ驚テ内ヘ
 入り父ノ王ニ申サク我父獨嚴シキト思タレトモ井ノ
 上ノ桂ノ木ノ本ニ海神ニ勝レタル男アリト云父ノ
 王聞テカレハ天神ノ御子也トテ内ヘ入レ奉リテ様々
 ニモテナシ申テ後ニ此龍宮ヘ來リ玉ヘル事ノ由ヲ問
 奉ルニ釣針ヲ失タルヲコリヲ委答タマフ其時海神萬
 ノ魚共ヲ召集テ尋タルニ皆々不知ト云但口女ト云魚
 此程口ノ勞アリトテ參ラズアヤシトテイソギ召シテ
 其口ヲ探ルニ果シテ失タル所ノ釣針ヲトリ出セリ其
 時海神禁メテ今ヨリ後餌ヲ吞ベカラズト云又此魚天
 神ノ御ソナヘニ奉ラザルコト是ヨリ起レリ口女トハ

赤鯛ノ事ナリ○一本以口女云々爲注爰ニ於テ火々出見尊此玉姬ニ
 幸シテ三年ヲ送り玉ヒヌカ、ル處ニ猶古郷ノ戀シキ
 色ミヘケレハ玉姬父ニ此由ヲ申海神此尊ヲ呼奉テヤ
 スク歸タマヘ送り奉ルベシトテ鹽滿珠滿珠ノ玉是也干珠干珠玉
 是也二一ノ寶玉ヲ授ケテ申サク尊國ヘ還リ給ヒテ釣
 針ヲ兄ニ返サントキマヅシキモトカツエノハシメト
 云テツバキカケテ後様ニ投ケ返セ又兄怒テシタガハ
 ズバ鹽滿珠ヲ持テ溺セカナシマントキハ鹽干珠ヲ以
 テウカベタマヘヨ如レ此シ玉ハ必民トナリ玉ン其
 ヨリ民來リ順ベシトナン如此シテツイニ葦原ノ主ト
 ナラセ玉ヒヌ抑火々出見尊カノ龍宮ヲ出サセ玉フ時
 豐玉姬語リテ申サク我御子ヲ孕メリ久シカラズシテ
 生ムベシ必產屋ヲ作テ待給ベシトナン此故ニ產屋ヲ
 作ルニ鶉羽ヲ持テ葺ルニ未ダ葺モアヘザルニ來テ產
 奉ル御子成ガ故ニ其御名ヲバ鶉羽不葺合尊ト申セリ
 扱產ントセシ時玉姬尊ニ逢奉テ我產屋ヲバ必ノゾキ
 タマフベカラズト約束ヲシタマフ火々出見尊此語ヲ
 用タマハズヒソカニノゾキ玉フ時八尋ノ蛇鰐ノ形ニ
 テ腹ハヒ臥タリ目ヲ見合セ見付テ恨テ曰ク我詞ヲ不
 用シテ恥ヲ見セ玉ヘリ若シノゾキ玉ハズバ○一本作云
 用シテ恥ヲ見セ玉ヘリ若シノゾキ玉ハズバフガ如クマ

ハ我子孫立ノ王タルベキ國也汝行テ治メヨ此三種ノ神器ヲ持テ永ク天津驗シトセヨ寶ノ鏡ヲ見ン事我ヲ見ルガ如クスベシ床ヲ同シフシ御座ヲ共ニシテイマハリ奉ラバ天津日嗣ノ榮ヘン^一天地ト共ニ窮マリナカラント事ヨセサセ給ヘリ又神記ニ曰天地開シ時生レマセル神ヲ天御中主尊ト名付クウカベル形葦牙ノ如クシテ次第ニ此國出アラハレリ故ニ豐葦原中津國ト云フ是ニヨリテ天御中主尊ノ名ヲハ又豐受皇太神ト申也此豐受皇太神ト天照太神ト相共ニ三種ノ神器ヲ皇御孫尊ニ授ケ奉リ天璽トシ玉ヘリ其故ハ天照太神ハ父方ノ御祖母也此御名ヲ傳ヘ玉フトキハ天御中主尊ト申ス高皇產靈尊ハ母方ノ祖父也此御名ヲ傳ヘ玉フトキハ皇御孫尊ト申セリ是則父方ハ天ノ道母方ハ地ノ德二ノ靈明ヲ受テ天皇ノ兩名ヲ得タマヘリ故ニ此天地ヲ父母トシテ一人ノ御身トナリ三種ノ神器ヲ傳テ百王ニ令^レ象タマヘリ

天照太神 正哉吾勝々速日天忍穗耳尊 父天

天狹霧地狹霧尊一人 皇御孫尊^{亦名曰}

天御孫^一

高皇產靈尊 拷 幡 千 々 姬 命 母地

舊事本紀曰天照太神ト高皇產靈尊ト相共ニ生マシ奉

ル御子也故ニ天御中主尊^{○一本作天御孫尊}ト名ケ又ハ皇御孫尊ト申ストイヘルハ此心也此皇御孫尊日向國ヘ下リ玉ヒシ時其處ニ國津神アリ其名ヲバ事勝國勝ト申セリ彼娘ニ木花開耶姫ト云ヘルヲ妻取タマヘバ只一夜ニ御子ヲ孕ミタマヘリ皇御孫尊勅シテノタマハクタトヒ天神ノ子成共何ソ一夜ニ孕ンヤ定テ國津神ノ子ナルベシトナンノ玉ヲ開耶姫恨奉リテ戸モナキ家ヲ作リ中ニ入テ誓テ曰ク若天神ノ御子ニ非ハ燒死スベシ又天神ノ御子ナラバ燒ヘカラズトテカノ家ニ火ヲ付給ヘリ先火ノ盛ナリシ時出來給フヲバ火進尊ト云ヒ次ニ火消ザリシサキニ出來給フヲバ火折尊ト云也後ニ火ノ消テ跡ノホ、トスル時出來給フヲバ火々出見尊ト云地神第四ノ尊也此尊御代ヲツギ給其故ハ兄ノ火進尊ハ海ノワザヲナス弟ノ火々出見尊ハ山ノワザヲナス或時互ニワザヲカヘ兄ノ火進尊ハ弟ノ弓矢ヲ乞取テ山ニ行キ弟ノ火々出見尊ハ兄ノ釣針ヲ乞取テ海ヘ行ク然ルニ共ニ皆其ワザキカズシテ歸ルニ兄火進尊ハ弟ノ弓矢ヲ慥ニ返シヌ弟ノ火々出見尊ハ釣針ヲ魚ニ喰切ラレテ是ヲ返サズ餘リニセメラレテ腰ノ刀ヲタヲシテ針ヲ一箕作テ返シケレハ殊ニ腹ヲ立テ針ノ

豐葦原神風和記卷中

地神五代事

二尊 天神之最後也
如前分別

天照太神一本有註云又云大日靈貴又云大日靈尊

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊已上天宮ニ御座也

皇御孫尊

火々出見尊

鵜羽不耒合尊

以上五代者皇帝之祖神也

津速產靈尊天神也

市千魂尊如前

與居登魂尊

天津兒屋根尊

天押雲尊

天種子尊

已上五代者人臣之祖神也

此五代モ天神ト同ク五行德ヲ顯シ給ヘリ謂ル天照太

神ハ地神ノ御形ニテ坐セハ土ノ德ヲ主リ給ヘリ正哉
吾勝々速日天忍穗耳ハ金ヲ主リ皇御孫尊ハ木ヲ主リ
火々出見尊ハ火ヲ緣トシ鵜羽不耒合尊ハ水ヲ緣トシ
テ各德ヲ施シタマフ委クハ別ノ記ニ見ヘタリ但於ニ
五代ノ中ニ前ノ二代者天宮ニ坐シテ葦原ニハ下リ給
ハズ第三ノ皇御孫尊始テ此國ヘ天降リ給ヘリ其故ハ
地神第一ノ尊天照太神ノ御子地神第二ノ神正哉吾勝
々速日天忍穗耳ニ向ヒマシノテ勅シテ宣ク葦原中
津國ハ我御子孫ノ主タルベキ處也汝下テ治メ給フベ
シトコトヨサシ坐ス時正哉吾勝々速日天忍穗耳尊答
奉リテ宣ク自ハ天上ニサフラヒテ御親ニ副奉ルベシ
吾子皇御孫尊ヲ下サブラフベシトノ玉ヘハ天照太神
是ヲ一本此下有聞召ヤ
ガテソレヲノ八字ユルシ玉ヘリ其時先ツ經津主武
甕槌ノ二人ノ神ヲ遣シテ大己貴ノ神ヲ始メテ及ビ諸
ノ惡キ國津神ヲシタガヘ天ノ宮ニ上テ此由ヲ奏シ奉
リキ其後第三代皇御孫尊ハ三十二神ヲ前後ニ引ツレ
天兒屋根尊ヲ御前ニ立テ幣帛ヲ捧ケテ天ノ太ノトコ
トヲ奉リ筑紫日向國高千穗ノ櫛不留峯ニ始メテ天降
リ給ヒシ也加樣ニ下シ奉リ給ヒシ時天照太神此皇御
孫尊ニ一本此下有向ヒマシマシ
テ御寶ノ鏡ヲ捧テ之ノ十四字御勅シテノ玉ハク葦原

十握ノ劔ヲ持テ寸々○一本作ハキダニ截リ玉フ至レ尾劔ノ及少折レテ切レズ尊怪デ劔ヲ取直シ尾ヲ立ニ割テ見玉ヘバ尾ノ中ニ一ノ劔アリ此所謂天叢雲劔也尊是ヲ取テ私ニスベカラズトテ五世ノ神ヲ以テ天照太神ニ奉リ給フ是ハ初當我高天原ヨリ落シタリシ劔ナリト悦給彼蛇ノ臥タル所ヨリ常ニ村雲ノ立シカバ是ニ隨テ村雲ノ劔ト名ヅク其後素盞烏尊出雲ノ國ニ宮作リシタマヒテ稻田姬ヲ妻室トシタマフ其時尊歌ヲ讀給フ

八雲立出雲八重垣妻籠ニ八重垣造ル其八重垣ヲ是三十一字ノ歌ノ始也日本武尊ヨリハ草薙ノ劔ト名付今ハ尾張熱田ノ宮ニ御座也卽是天地ノ定レル事ノ由ヲ云又素盞烏尊ハ遂ニ根國ヘ下リ給トモ云ヘリ天照太神ハ必天原ヘ上リタマヘリサレバ加様ノ光ノ照スコトハ世界已ニ出來タルニ依レルガ故ニ天照太神ヨリ地神トハ申シ奉ル也然ドモ其御子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊マデハ天宮ニ御座シテ葦原ヘハ降り玉ハズ第三ノ皇御孫尊ヨリ正シク御形ヲ顯ハシ此國ヘハ天降り御座者也仍天照太神ヨリ以來皇帝ノ祖神ト人臣ノ祖神ト相隨ヘテ地神ノ次第ヲ得レ可レ意者也

豐葦原神風和記卷上終

ミテグラヲカケ岩戸ノ前ニ立置キ樅丸木ノ橋ニカケ
 ヲキ庭火ヲ燒テワザヲキアヘリ其中ニ天佐久目尊乳
 プサヲ顯ハシ御裳ヲ、シサケ小竹ノ葉ヲ手草ニ持テ
 橋ヲ登リ舞ヲドルヲ八百萬ノ神達ニ見テ咲サワダ
 リ時ニ天照太神獨思タマハク我ハ加樣ニ隱レ居タリ
 定テ天下クヲカルベシ何トシテ神達笑ラント思タマ
 ヒテ岩戸ヲホソク開テノゾキタマフ其時岩根多力雄
 尊御手ヲ取テ引出シ奉ル天兒屋根尊太玉尊四手ノ御
 繩ヲ持テ御ウシロニ引マハシヌ其時天原ト葦原ト始
 テ明ラカニ人ノ面白ク顯レタリ是ヲ見テ神達アナサ
 ヤケアナ面白ト云リ其言ノ葉今ニ至テ云ナラハシタ
 リサレバ天ノ下夜晝ヲキマヘソメシ其事ノ本則是也
 抑如レ此ヲコリヲ尋ルニ天地未レ開ケザル其前ハ皆ム
 ナシキ空ノミニシテ更ニ物アルコトナシ纔カニ葦牙
 ノ如クナリトイヘドモ實ニアラキ姿ハ見エザリキニ
 尊ナンドノ時ハ男女ノ姿アリシカトモ身ニ光アリテ
 日月ノ光ニカラズ飛アリキ思ノ儘ナリシヲ其後漸ク
 ミダリノ心盛ニ成ル儘ニ隨テ汚レタル國トナリアラ
 ユル人光モ失セ又世間モ闇ク成リシ事アリ是則天照
 太神岩戸ニ入給トハ云也然トモ萬物ノ靈性ハ不レ留

シテ清登リ光ヲ顯スヲ天ノ岩戸ヲ出給トハ云也サレ
 バ諸ノ惡シキ物ハ次第ニ重ク沈ムヲ素盞鳥尊ト申ガ
 故ニ八百萬ノ神達萬ノ罪ヲ素盞鳥尊ニヲホセテ根國
 ヘ追奉ル是ニヨリテ素盞鳥尊根國へ行給トテ出雲國
 清地郷ノ奥籬ノ川上ヨリ物喰タル箸ノ流ル、ヲ見テ
 尋ネ登リ給ヘバ祖母ト祖父トアリ二人ノ中ニ姫ヲ置
 テ泣悲ム素盞鳥尊此泣悲故委シク問タマヘバ我ハ此
 所ノ國神ナリ祖母ヲバ手摩乳ト申祖父ヲバ足摩乳ト
 云中ニ置タルハ我娘也名ヲバ稻田姫ト申也泣悲ムコ
 トハ我ニ八人ノ娘アリシヲ毎年ニ八岐ノ大蛇來テ吞
 喰フ此姫獨ニ成リヌ今年來テ又此姫ヲ吞喰ンコトノ
 悲也其蛇ヲ見レバ一ツノ身ニ八ノ頭八ノ尾有テ其長
 ハ八ノ峯八ノ谷ニ渡レリ背ニハ松杉茂リ生タリ眼ハ
 日月○一本作赤キホウツキノ如シ腹ハ血ヲツ、ミタルニ似タリ扱
 間タマフ人者誰ニテ坐ヅト申ハ素盞鳥尊答テノ玉ハ
 ク我ハ是天照太神ノ弟也汝ガ娘我ニ得サセバ彼蛇ヲ
 タバカリテ可レ殺トノ玉ヲ手摩乳足摩乳喜テ受ケ答
 エ奉ル其時素盞鳥尊八ノ舟ニ八醞ノ酒ヲ湛ヘテ其上
 ニ棚ヲ搔テ稻田姫ヲ高ク置キ奉リ影ヲウツセリ大蛇
 來テ酒ヲ吞醉テ惘然トシテ居眠臥タリシヲ素盞鳥尊

ン爲メ也又君ト我ト相共ニ子ヲナサント思フ也トアレハ天照太神何ニシテ其心ヲバ知ラントノタマヘハ素盞鳥尊答テノ玉ク若我女子ヲナシタラバ賊心ナルベシ若男子ナラハ清心成ベシトテ天照太神ト素盞鳥尊ト互ニ約束ラシテ素盞鳥尊ノ腰ニ帶玉ヘル三劔ヲハ天照太神取座シテ此劔ヨリ三ノ女神ヲ成給ヘリ天照太神ノ御手ニマトヒタマヘル五百箇ノ玉ヲ素盞鳥尊取座シテ此玉ヨリ六ノ男神ヲ成給ヘリ爰ニ天照太神勅シテノタマハク尋ニ事本ニ玉ハ是我物也故所生六ノ男子ヲハ我取養テ天原ヲ治メシムベシ此始ノ御子ハ正哉吾勝々速日忍穗耳尊是也扱劔ハ汝カ物也故所生三ノ女神ヲハ素盞鳥尊ニ授テ葦原ヲ治メシム則筑紫宇佐宮ナンドニ御座ス神達是也アラノ如レ此委クハ本紀ニ見エタリ又天照太神御弟月讀尊ニ勅シテ宣ク葦原中津國ニ保食神ト云者アリ汝相共ニ萬ハラフベシトテ下サレタリ保食神月讀尊ヲ見奉リ走廻リテ饗シ奉ル山海ノ珍物ヲ口ノ内ヨリ取出シテ百机ニ備フ月讀尊怒テケガレタルモノヲ我ニアタフトテ帶給ヘル劔ヲ拔テ保食神ヲキリ殺シ玉フ天ニ昇リテ此由ヲ申給ヘハ天照太神怒給ヒテ汝惡キ神也不

レ可ニ相見トテ一日一夜ヘダテキタマフ夜晝ノワカレシ因縁是也其後天照太神三熊之大人ヲツカワシ葦原ヲ見セシメタマフニキリ殺サレタル保食神ノ頭其目胸腹ナンドヨリ蠶養及ビ五穀ヲ出セリ是ヲ以テ天ニ昇リテ參ラスルニ天照太神見玉ヒテ悦デ宣ク是ハ萬ノ人クサノ食ヒテ生ベキ物也トテ水田岡田ノ田ナツ物トシタマヘリ五穀蠶養ノ事本是ナリ又日本紀ニ委カルベシ其後素盞鳥尊人トナリ神ヲザタケカリケレバ天照太神ニサマノ仇ヲナシ奉ル是ニヨリテ汝ハ惡キ神也不レ可ニ相見トテ天ノ岩屋ニ隠レ入岩戸ヲタテ、見エ給ハズ故ニ天原天下常闇ト成テ手足ノ置處ナシ萬ノ愁音カマビスシクシテサハヘノ鳴ガ如シ其時八百萬ノ神達神集ニ集リテ神議ニ議リ岩戸ノ前ニシテサマノノヲコタリヲ申シ玉シ中ニ天香久山ノ土ヲ取テ石凝姥神ヲ以日神ノ御形ヲ奉レ鑄始ノ鏡伊國目前是ハ神達心ニ不レ合後ノ鏡伊勢國五十鈴宮奉祀是ハ神達心ニ不レ合後ノ鏡伊勢國五十鈴宮奉祀是則御形ニ似奉レリトナン櫛明玉神ヲ以テ八坂瓊ノ五百箇ノ玉ヲ作ラシム又カタヘノタダイノ神ヲ集メテ天ノミテグラヲ作ラシメ天ノ眞神ヲネコジニシテ上ツ枝ニハ鏡ヲ掛ケ中ツ枝ニハ玉ヲカケ下ツ枝ニハ

ハキカケテ飯リ玉フ時伊弉册尊腹ヲ立テ起キアガリ
 玉ヒテ必ズ見ルベカラズト云ツル言バラ違ヘ我ニ耻
 ヲカ、セツルコト汝我心ヲミル我モヤツコカ心ヲ見
 ントテ八ノ鳴神ヲツカハシテ追出シテ後ニハ自立走
 テ追來ル伊弉諾尊兎角シテ逃去リヨモツ平坂ニ至リ
 テ千引ノ石ヲ立互ニコトハルニ伊弉册尊曰我言葉ヲ
 タガヘズハ黃泉ト此葦原ト^{○此下一本云ヒカヨハス}
 有常ニノ字
 ベカリツルニ約束ヲ違ツレバ長ク隔タリヌ我ハ一日
 ニ千人ヲ可^レ殺トノ玉フ伊弉諾尊サラバ我ハ一日ニ
 千五百人ヲ生ズベシトノ玉フ其ヨリシテコソ泉津ト
 葦原ノ道モ塞リテ生死ノ別モ始タリ事ノ本是也其後
 伊弉諾尊悔テノ玉ハク我思ノ外ニ穢ラハシキコトヲ
 見ツレハ御祓セントテ筑紫日向國橘小戸河原ニ往タ
 マヒテ先御頭ヨリ始メテ御冠御衣ナンド祓給フ皆神
 トナレ^ル扱流ル、河ニ向テ宣ク上瀬ハハヤシ下瀬ハ
 遅トテ中瀬ニテ御身ヲス、ギ御座スサレバ穢ハシキ
 ヲ清クナシ萬物ヲ忌ムハ是其因縁也彼祓ノ時先ツ大
 曲津神ヲ生給ヒ此マカレルコトヲナヲサントテ次ニ
 大直日神ヲ生シ給ヘリ而シテ後八柱ノ小神ヲ化生シ
 又三柱ノ太神ヲ濯ギ顯シ奉ル左ノ御目ヲス、ギテハ

天照太神ヲナシ右ノ御目ヲス、ギテハ月讀ヲナシ御
 鼻ヲス、ギテハ素盞鳥尊ヲナシ又重ネテ勅シ給我天
 ノ内ニ珍敷キ御子ヲ成サントテ左ノ御手ニ白銅鏡ヲ
 持大日靈ヲ化生シ右ノ御手ニ白銅鏡ヲ持テ月讀尊ヲ
 化生シ御頭ヲメクラシテ顧リミタマフ時素盞鳥尊ヲ
 化生ス如此シタマヒテ後伊弉諾尊諸ノ御子達ニ勅シテ
 曰ク天照太神ハ天原ヲ知食セ月讀尊ハ夜ノ國ヲ知食
 セ素盞鳥尊ハ海ヲ知食セト事ヨセサシ給ヘリ然ルニ
 素盞鳥尊ハ己カ國ヲハ不^レ知シテ只是泣ヨリ外ノ事
 ギナキ時ニ父ノ伊弉諾尊何故ニ如此ナクゾト問タマ
 ヘハ答ヘテ宣ハク母ノ根ノ國ヘ行ント思也トアレハ
 父ノ尊ハヤノトク行ケトノタマヘバ素盞鳥尊申タ
 マハク且ク高天原ニ登リテ天照太神ヲ相見テ後ニ根
 國ヘ可^レ行トアレハ父尊是ヲ許シ玉ヘリ素盞鳥尊父
 ノ勅ヲ受ケ天ニ登リ給シ時羽明玉神下リ向テ八坂瓊
 曲玉ヲ奉ル其玉ニヨリテ天上ニアガリ御坐ス天佐久
 目尊是ヲ見テ天照太神ニ告奉ル本ヨリ素盞鳥尊ノ惡
 キ心ヲシリ給ヘル故ニ定テ我天原ヲ奪ハントニコソ
 トテサワギ玉ヒ様々ニヨロヒテ立向タマヘバ素盞鳥
 尊申タマハク我ニキタナキ心ナシ只珍敷寶玉ヲ奉ラ

元氣所^レ生水徳ノ和氣ナル故ニ天水雲神ト云^玉卽水主ノ形又ハ月珠ニテ御座也萬ノ因果ト顯レテ此葦原中津國ヲ造リタマヘリト也又或説^記ニハ天地開^レテ後天下尙危カリキ其時^{時ニイ}二尊八坂瓊曲玉ヲ御手ニ捧ゲテ豐葦原中津國ヲ造^レリトナリ卽神璽ノ玉ノ起是也加樣ノ文ドモハ皆々同心ナルベシ其故ハ二尊此國ヲ作リ給事ハ先天御中主尊ノ勅ヲ受テ天瓊矛ヲ給リ天ノ浮橋ノ上ニ立テ相理リテ曰此下ニ定テ國アラントテ天ノ逆矛ヲ指下シテサグリ引上給シ時矛ノシタ、リ凝テ一ノ嶋トナル是ヲ磯取盧嶋ト名付去レハスベテ萬ノ國嶋ハ皆潮ノ泡ノ凝々テ成^レル物也扱二尊始テ此磯取盧嶋ニ下テ矛ヲ指立テ八尋ノ殿ヲ作リテ住タマフ日本高見國トハ申也二尊男女ノ形ハ御坐トモ陰陽ノワザヲナスコトナシ爰ニ鵝鴿ト云鳥來テ尾首ヲ土ニ敲キテ動スヲ見給ヒテ嫁クコトヲ習テ後陰陽和合ヲ成シ萬ノ物ヲ產出タマヘリ先淡路嶋ヲ產給是則エナノ心ナル故ニ我カハヂナリト云ヘリ此後大八嶋六ノ小嶋處々ノ國及山川草木ヲ生給ヒテノ玉ハク我既ニ國ヲ生メリ何ゾ亦國ノ主ヲ生ザランヤトテ一女三男ヲ生給ヘリ一女ト申スハ天照太神三男ト申スハ月

讀尊^{內宮ノ}北ノ方^{西宮}素盞鳥尊^{出雲}然ルニ日神月神ヲバ久シク此國ニ不^レ可^レ留^トテ共ニ並テ天ノ宮ヘ奉^レ送^テ蛭子生テ三歲マデ足ナヘテ不^レ立故ニ葦ノ舟ニ乘テ流シ遣リ給フ又素盞鳥尊ハ神ワザケケシテ只常ニ泣ヲ以テワザトスト云リ其故ハ天地ノ分レントシテ輕キハ上テ天トナリ重キハ下テ地トナル此地ノ人トナリテ陰陽精光^{○一本ヲ備タリ日月ト顯レテ照リ}登ヲ不^レ可^レ留^トハ云也然彼重物ハ皆下テ形トナルヲ流シ遣スヲ蛭子ト云也又素盞鳥尊ハ惡キ爲作也去レハ山川ノ立シカバ^{○立シカハ一本青山モ枯山トナリ人}種命定ナキ煩ハ悉ク此素盞鳥尊ノ爲作也トイヘリ是則陰陽互ニ相尅シテ始アル者ハ必終アルヲヲ顯シ給ヘリ其後女神伊弉册尊ハ火神軻丘突智尊^{賀茂大明神是也}ヲ生時ヤカレテ神去御座テ黃泉國ヘ行給ヌ男神伊弉諾尊跡ヲ追尋行キ呼出シテノ玉ハク我作ル處ノ國未終飯玉ヘトノ玉ヘバ伊弉册尊答テノ玉ハク且ク相持ベシヨミヅノ神ニ理リテ飯ベシ其程我ヲ不^レ可^レ見給^トトノ玉フ然ルニ餘ニ遲シ見^トト思玉フ折節空クラガリケレバ湯津ノ爪櫛ヲ引カキ一火ヲアゲテ見給ニクサレ臥シテ蟲ドモ湧出タリキタナシト云テツハキヲ

天萬尊

神皇產靈命神主祖神一本

天鏡尊

高皇產靈命帝王祖神也

國常立尊

天御中主尊

國狹槌尊水

地天天下靈命

豐斟淳尊火

水天天下靈命

已上三代ハ獨化神ニテ男神ニテ女神ナシ五行ノ次第

帝祖ニハカハリタリ可ニ見合

泥土瓊尊木

火

天合靈命

沙土瓊尊

風

天八百日靈命

大戸間邊尊

空

天八十萬靈命

大苦邊尊金

土

天八十萬靈命

面足尊

土

天八十萬靈命

惺根尊

五

津速產靈命

伊弉諾尊

五

津速產靈命

伊弉冊尊

五

津速產靈命

已上天神七代ハ皇帝ノ祖神其數十一柱也

已上七代ハ人臣ノ祖神皆是獨化神也

此天神七代ノ内始ノ國常立尊ヲ虛無神ト申也只名ノ

ミアリテ實ノ姿ナシ然ルニ天地ハ終レドモ其神ハ不

レ終物ノ形ハカワレドモ其道ハ不レ替常ニ起リテ常ニ

國ヲ成セルガ故ニ國常立トハ申也如^形レ此其理ノミニ
シテ未^レ顯ヲバ國常立尊ト名付ケ其氣姿ノ顯初ムル
ヨリ天御中主尊トハ申也スベテ天地ニ先立テ天地
トトモニ成レル神也カ、ル故ニ此神ヲバ五行ニハ配
定ラレザル者也後ノ五代ヨリ次第ニ五行顯レタル也
謂ル國狹槌尊ハ水德ノ始豐斟淳尊ハ火德ノ始泥土瓊
尊ハ沙土瓊尊ト同ク木德ノ始大戸間邊尊大苦邊尊ハ
金德ノ始面足尊惺根尊ハ土德ノ始仍此五行ヲ堅樣
ニ開イテ中ノ五柱ノ神代トハ申也ト次第スレドモ横
ニソナフレバスベテ前後ノナキ故ニ或次第モ不^レ同
或ハ互ニ異名トモ成レリ加樣ニ心得スレバ文字ニ相
違アレドモ更ニ相違ニハアラズ次ニ人臣ノ祖モ同五
行也天御中主尊ハ除^レ之天八下ヨリ天八十萬魂マデ
次第ニ地水火風空ノ五大アリ此五大ハ五行ト同物也
空ハ顯レテハ木トナル風ハ顯レテ金トナリ其外ノ地
水火ノ三ツハ其名同シケレバ可^レ知也伊弉諾伊弉冊
ノ二尊ト津速產靈尊ヨリハ五行已ニ備リ六根共ニ顯
レリ端嚴美麗ノ姿ニテ飛行自在ノ神達ナリ是只上界
ノ天人ニテ御座也然レバ二尊ヨリ男女ノ形顯レ陰陽
ノ道アラハレリト也又一ノ釋ニハ天御中主尊ト云ハ

從道之本守神之爲要ト云ヘリ然則神道之行義ハミ

ダリガハシキ萬言雜說指置テ一心ノ本無ヲ知リ定メ

能ク其心地ニナリヘテミダリニ道ニ不レ迷ヲロカニ

德ヲ忘レタル諸ノ民ヲ化スベキ也是ヲ天命ニ叶フト

名付ケ是ヲ神氣ヲナムト云ヘリ誠ニ是ノ理實ニ尤灼

然也故除ニ萬言之雜說一舉ニ一心之定準一即配ニ天命

而嘗ニ神氣理實灼然ナリトハ宣ヘリ抑一心ノ本無ニ

カナフベシト云ヘルハ非レ如ニ木石只ミダリナル民

ノ心ヲロカナル私ノ思ヒナクシテ其道ヲ知其德ヲ

施スベキ事也○一本作事如ニ本文云一經○一本

以ニ百姓心一爲レ心ト又天下ノ天下タルハ一人ノ天下

ニハ非ズト云也○也一皆此心也所詮其德此道ハ天

地ノ授ケタマヘル故ニ人モクミシテ從ヒ奉ル者也○

本此下有サレハ之字天地人ノ三才ヲ一心ニツカサドルヲ以テ王

ト名付ケ奉ル故ニ三ツヲ一ツニヌキテ王ノ字トモス

ル也此故ニ天地一人ノ皇德ヲ君ノ道ト名付ク抑我國

ニハ是ヲ神道ト申セリ故ニ神宣テ曰德合ニ神明一則必

作心一與ニ天地一通○一本此下有德與天地通則君道明民豐也云々肝要

只是ニアリ天地開闢ノ始ヨリ濁世末代ノ今ニ至ルマ

古ヘ天地未開ケザリシトキ一ノ氣起リテ大空ニミチ
ハリシ其中ニマロカレルコト譬ヘバ雞卵ノ如シ漸ク
凝ルニ隨テ重キハ下リテ地ト成リ自然ニ輕キハ清ク
上リテ天ト成ル又其中ヨリ葦牙ノ如クシテ成リ出シ
モノアリ譬ヘバ浮ル魚ノ水上ニ遊ブガ如シ空ニカ、
リテ顯シヲ神ノ始トスル也其名ヲバ天ヲ讓レ日天ノ
狹霧國ヲ禪レ月國狹霧尊ト云ヘリ是則聖德太子ノ舊
事本紀ノ心也日本紀ニハ始テ顯ルル神ヲバ國常立尊
ト云也又一記ニハ未レ顯靈性ノサカイヲバ國常立尊
ト名付ケ已ニ其姿ノ顯レ始タルヲ天御中主尊ト云或
文ニハ國常立尊ト天御中主尊ト二ノ德ヲ合セテ天狹
霧地狹霧尊トモ云ヘリ所詮同體ノ神ニテ御坐ス故ニ
何モ無ニ相違一者也但又聖德太子ノ御釋ニ且分ニ一神一
國常立尊ヲバ一向ニ帝王ノ元祖トシ天御中主尊ヲバ
君臣ノ兩祖トシタマヘリ

天地開闢事

最初天祖神

天讓日天狹霧地禪月地ノ狹霧尊

天神七代之事

沫蕩尊面足尊ノ異名也

津速產靈命人臣ノ祖神

豐葦原神風和記卷上

神道大意

神宣曰天地大冥之時日月星辰現_レ像於虛空_二之代神足履_レ地而興_三天御量柱於_二中津國_一上去下來而見_三六合_一爰天照太神悉治_二天原_一耀_レ天絨皇御孫尊專治_二葦原_一受_二日嗣_一聖明所_レ覃莫_レ不_二碓厲_一宗廟社稷之靈得一無_二之盟百王之鎮護大業之禮昭也_一是以本_二天地_一以續_レ命祀_二皇祖_一以標_レ德夫齊_二情於天地_一乘_二想於風雲_一爲_二從_レ道之本_一爲_二守神要_一將_レ除_二萬言之難說_一而舉_二一心之定準_一卽配_二天命_一而嘗_二神氣_一理實灼然_{已上}神說言意ハ謂天地未_レ開大冥時日月及諸氣星始_レテ空ニアラハ_レシ代ニ神ノ靈忽動テ上ヲ頂キ下ヲ蹈ミ普ク六合ヲワキマヘ知事出來_レリ其初_レル古ヘ地ノ靈明自_レラ天ニアガリテ彼光物ヲ照ス是ヲ大日靈貴天照太神ト申也正シク形ヲ顯ハシ此國ヘ下_レリ坐マシテ葦原ヲ治メ給シ神ヲバ皇御孫尊ト申セリ是則四海ノ本主百王ノ皇祖ニテ坐マセリ然此皇御孫尊彼天照太神ヨリ親天

日嗣ヲ受ケ三種ノ神璽ヲ傳奉リ日本葦原ノ主トナリ御坐シヨリ以來人王ノ代々ニ至ルマデ威光ノ所_レ及四方ノ人民隨奉ラズト云事ナシ故天照太神ハ悉ク治_二天原_一耀_二天絨_一皇御尊專治_二葦原_一受_二日嗣_一聖明所_レ覃莫_レ不_二碓厲_一云々其故ハ德倅_二天地_一是ヲ名ケテ爲_レ皇_{已上}書文ト云ヘリ其意ハ謂ル天ノ意ナクシテ千草ヲ潤ホシ地ノ思ナクシテ萬物ヲ保チ又風ノ分別ナケレトモ一切ヲ人トナシ雲ノ差別モナクシテ衆像ニヲホフガ如ク民ヲ化スルニ惡愛スル_一ナク治_レ世偏頗ナク道ヲ知リテ德ヲ施シ玉フヲ皇祖トハ申ス也皇ノ字ハ大ノ義也大ノ字ハ一人也天モ一大也地モ大也此天地ニ叶ナフ人又同大也天地一大ノ人ナルガ故ニ一人トハ申ス也少モ他ヲ忘_レテ私ヲ顧ヘリミレバ更ニ一人ニ非ズ是皆民ノ心ナルベシ只是_レ天地一人ノ德ニシテ又二ノ道不_レ可_レ有故ニ宗廟社稷之靈得一無二ノ盟ト云ヘルハ則此意也サレバ一人トシテハ能々神ノ心ヲ知食シ此道ヲ得玉フベキモノ也尤百王ノ鎮護也實ニ大業ノ禮照タル也故ニ本_二天地_一續_レ命祀_二皇祖_一標_レ德トハ云也若然者齊_二天地_一德少モナクバ皇トモ王_レ不_レ可_レ云故齊_二情於天地_一乘_二想於風雲_一是爲_二

豐葦原神風和記目錄

上卷

神道大意

天地開闢

天神七代

中卷

地神五代

兩宮鎮座

祖神大分

神態忌物

尊神靈驗

下卷

佛神同異

神佛誓別并十段要文

○一本作佛神誓別而無十段要文之四字

正平八年癸巳七月廿六日於三繼橋鄉河原村吹上之住宅
書寫了
實相

類聚神祇本源畢

也水者畧語也故古語謂「水通」而如「卜氏」勘草者以「奈具社神豐宇賀能賣命大膳職御食津神」以下十八社神「爲」外宮分座「之旨載」之敢以無「正當」也豐宇賀能賣命者豐受宮之酒殿神也御食津神保食神也卽爲「月夜見尊」被「傷害」神也全非「當宮之分座」古語拾遺曰「天照太神者惟祖惟宗尊無」二自餘諸神乃子乃臣孰能敢抗「文天照太神者」二宮通稱也祖卽外宮宗卽內宮也故皇御孫尊者奉「敬」天照太神「內宮天照太神者奉」敬「豐受宮」外宮「仍祭」吾之時先可「奉」祭「豐受宮」旨內宮神勅祭然也自「爾以來諸祭所」先「外宮」也是則豐受宮者天神始天照太神者地神始也以「當宮」豈可「類」素戔鳴尊苗裔保食神等「哉勘決次第本末錯亂不可」然者也「問御食津神事指南雖」分明「愚昧身猶非」無「不審」云爲「月讀尊」被「傷害」之篇云御食津神各別之段見「何書」乎「答於」傷害之篇「見」舊事本紀第三卷「也此故天照太神怒甚之日汝是惡神不須相見」乃與「月夜見尊」一日一夜隔離而住文自「爾以來晝夜永隔次御氣津神各別之段祕府實錄曰御膳神粟國祖神大御食都姬神世間保食神是也神語供神物名曰「由加物」也亦雜器贊同爲「由加物」也故神語名「御食津」稱「由賀神」其此大緣也

膳職坐神御食津神火雷神高倍神勸持神也件三神者素戔鳴尊苗裔稻倉魂名字賀能賣命亦稱「御食津神」也亦大年神子與津比賣命大戶比賣命是電神坐也文仍彼御食津神與「宇賀能賣命」同體也卽坐「于當宮酒殿」也如「載」右御氣津者古語水也水者御氣津之略語也御食津者御饗津也非「水之儀」出化之時代與「文義之道理」最可「令」分別「若以」御氣津「雖」有「書」御食津「是說者之謬也不足」于「爲」本也

神道之奧願古典之旨歸大底雖「一致」依「見有」異端「或就」定惠陰陽之二道「卽配」胎金兩部「或依」戶葉光明之梵號「偏」類色界天衆「是不」得「口次」無「相傳」之故也同名異體異體同名俗物有「之神道亦然」佛家面「智具」定故廻「右爲」巡神道面「定具」智故廻「左爲」巡有「形位」分爲「佛神」混「形位」性相惟「隨」文執「義」不能「見」性迷倒非「它」心陳擇「一陰一陽」圓融寂然照斯神道風光自己本分也凡神祇祕符不「居」其職「妄不」授「之不」至「其齡」強不「聽」之仍取「至要」抽「眼目」千萬載「本文」不「違」于「委注」一卷數不「列」都序「祕卷依」憚「外見」莫「處」聊爾「冥慮難」測頓首幸甚々々

神陽神外現持陰神內藏持是名稱_二金剛_一爲_レ引_二導衆生界_一分_二化現身_一與_二國柱_一是國境注也夫心柱者元初皇帝御靈也與_レ于_二阿字心地_一成_二鑲字正覺_一不_レ亂_二定惠_一一心儀常住不變妙法座自性清淨妙蓮段間不生理方寸神珠是也文是卽加持門標示也

問天照太神問_二天磐戶_一爲_二天下常闇_一義如何 答其說有多趣或書曰天地開闢時以_レ清定_二天以_レ濁定_一地以_レ淨爲_レ上以_レ穢爲_レ下以降有_二迷悟_一有_二差別_一立_二有無見_一亡_二法性法爾道_一文依_レ發_二情欲_一失_二自性光明_一以_レ彼時節_一問_二天磐戶_一之由所載_二本紀_一也然後以_二三光星_一出現之時_一開_二磐戶_一之旨勒_レ之又明無明有相立之儀又有_レ如_二常途_一之儀兼可_レ存_レ之以_レ開_二磐戶_一時鑄造御鏡上所奉_レ祕_二崇內宮御體_一也

問開_二天磐戶_一之時有_二呪文_一歟如何 答呪文非_レ一祕訓惟多且依_二一儀_一者諸神等各念此時清淨偈諸法如_二影像_一清淨無_二瑕穢執_レ說不_レ可得皆從_二因業生文_一又云而布瑠部由良々々止布瑠部文此外呪文依_レ爲_二祕說_一不_レ及_二悉勒_一謂_二天神壽詞天津宮事_一者皆天上神呪也問何故以_二解除詞_一稱_二中臣祓_一哉天祝太祝詞者祓之外可有_二別文_一歟如何 答以_二解除詞_一稱_二中臣祓_一者中

臣氏人行幸每_レ度奉_二獻_一御麻_一之間有_二中臣祓之號_一云此外猶在_二祕說_一歟凡謂_二濫觴_一天兒屋命者_上祿原中臣_{度會}掌_二神事之宗源_一云云奏_二天神壽詞_一天村雲命者_上祖神_{度會}捧_二賢者_一懸_二木綿_一抽_二精誠_一祈_二志地_一就_二中天孫御降臨之時_一天祖太神授_二祕呪於天兒屋命_一天兒屋命貽_二神術於奉仕累葉_一因_二茲我君嗣_一萬乘寶祚_一受_二一朝皇圖_一之時執柄臣者授_二天神受記於皇帝_一祭主官者獻_二天壽詞_一奏_二於上禁_一加之中臣者讀_二宣命_一從_二神事_一禰宜者持_二寶木_一儼_二祭祀_一是皆神代古風行來禮奠也其上一禰宜者口訣三種神器印_二定萬機尊位_一受_二倭姬之聖跡_一戴_二宗廟之神體_一次座之仁面受_二祕訓_一莫_レ傳_二外人_一由緣異_レ他相承嚴明也復次天祝太祝詞是又有_二多說_一此故聖德太子奉_レ詔撰定伊弉諾尊小戸橘之檀原解除天兒屋命解_二素戔鳴惡事_一神呪皇孫尊降臨靈驛咒文倭姬皇女下樋小河太祓彼此明々也共以可_レ尋歟問以_二豐受皇太神_一稱_二御氣津神_一條其義如何 答謂_二御氣津_一者水德號也祕府實錄曰天御中主視_二天下_一而或時候授諸天子照_二臨天地之間_一而以_二一水之德_一利_二萬品之命_一故亦名曰_二御氣津神_一也神語曰_二御義理_一也古語天津御氣國津御氣文或又御饌都書_レ之御氣津古語

問以三高宮荒祭配于世界日月之理如何 答彼兩神從左右眼一出之簫戟右畢以三摩陀二字當三兩眼配日月然問以下洗左右眼所生之神當于日月之位之條其理不可疑矣

問如日本書紀舊事本紀者伊弉諾尊曰吾欲生御寓之珍子及以左手持白銅鏡則有化生之神是謂大日靈貴尊右手持白銅鏡則有化生之神是謂月弓尊文出化非一其義如何 答神號雖同尊崇惟異出化次第又以各別也神記曰天照皇太神一座_{在伊勢國度會郡宇治鄉五十鈴川}伊弉諾尊曰欲生御寓之珍子乃以左手持鏡_{天鏡尊所作三面寶鏡也}則有化之神是謂大日靈貴亦號天照大日靈貴也此御子光華明彩照徹於六合之內文神祇譜傳圖記曰伊弉諾伊弉冊尊以天鏡捧九空所化神名號天御中主神是止由氣太神靈鏡也文依此等文者自天鏡所化之大日靈尊天御中主神者非差今之內外宮御靈哉彼日月同名之三柱者此性淨圓明之三轉也

問神代三面鏡其起如何 答祕符實錄曰天鏡尊_{獨化神天三座是神鏡始元三光面日明白此時也}日本書紀曰一書曰國常立尊生天鏡尊一天鏡尊生天萬尊一天萬尊生沫蕩尊沫蕩尊生伊

弉諾文神記曰國常立尊所化神天鏡尊月殿居所鑄造鏡也三才三面是也一面者崇祭止由氣宮今二面者天鏡尊于天萬尊傳持之次沫蕩尊次伊弉諾伊弉冊二尊傳持天神賀吉詞白賜互日神月神所化乃真經津鏡是也天地開闢之明鏡也三才所顯之寶鏡也當受之以清淨而求之以神心視之以無相無住因以爲神明正體也今崇祭一面荒祭宮御靈一面多賀宮御靈已上三面辭竟奉支亦曰國常立尊所化神以天津御量事地輪之精金白銅撰集地大水大火大神變通和合給天三才相應之三面真經津寶鏡鑄造表_利故此鑄顯神名曰天津鏡尊爾時神明之道明現天文地理以存文萬鏡靈器曰三面天鏡尊心月輪鏡文然者此鏡者天地靈明之智性諸神本源之妙體也日月未現心鏡照物故謂天鏡尊心鏡亦天鏡尊居月殿鑄造文以真心稱宮以心月號殿宮殿無外一心之名號靈鏡非他無相之自性也

問伊弉諾伊弉冊尊夫婦如日本書紀等者如世間事其義如何 答於物有淺畧有深祕其旨載右畢疑問次第存外了見也麗氣記曰世界建立後相分凡聖時二梵王天地壤物授與天浮下子尊與地出上子尊陽

除_ニ諸闇_一焉大方神是天然不動之理卽法性身也謂_ニ之名實相_一也未來世一切衆生發_ニ淨業正因_一爲_レ歸_ニ大乘_一故顯_ニ本妙之象_一曉_レ了卽心是佛或欲_レ示_ニ無相觀解_一令_レ忘_ニ有相之權教_一慧日照_ニ世間_一除_ニ生死雲_一是威神之恩德也方便之利益也不可思議_{々々}正念生化之本妙則在_ニ皇天_一也皇則大空無相之名號天地清淨之妙理也文又一氣_{々々}之元神名_ニ之號_一皇神也故萬物之化大道變成以_レ用爲_ニ心意_一二歸_ニ自位_一故真如界裏湛然常住也當_レ知伊勢內外兩宮則大千世界本主八百萬神乃最貴也文太宗祕府曰天宮與_ニ靈山_一分_ニ一線路_一互爲_ニ佛神之賓主_一令_レ盡_ニ天地人_一居_ニ無爲無事大達之場_一超_レ生出_レ死名_ニ之清淨_一是大悲用也文神記曰天照坐皇太神則大日靈貴故號_ニ日天子_一以_ニ虛空_一爲_ニ正體_一文最可_レ思者歟

問如_ニ日本書紀舊事本紀等_一者伊弉諾尊既還乃追_ニ悔之曰吾前到_ニ於不須也凶目汚穢之處_一故當_ニ滌_一去吾身之濁穢則至_ニ筑紫日向小戸橘橿原_一而被除焉遂將_レ盪_ニ滌身之所汚_一乃興言曰上瀨是太疾下瀨是太弱便濯_ニ之於中瀨_一也因以生神號曰_ニ八十柱津日神_一次將_レ矯_ニ其枉_一而生神曰_ニ神直日神_一次大直日神然後洗_ニ左眼_一因

以生神曰_ニ天照太神_一復洗_ニ右眼_一因以生神曰_ニ天照太神_一復洗_ニ右眼_一因以生神號_ニ月讀尊_一文天照太神已可_レ謂_ニ兩體_一哉彼八十柱津日神并神直日神大直日神崇_ニ何處_一乎 答洗_ニ左御眼_一所_レ生之天照太神者內宮荒祭宮御事也所謂八十柱津日神是也洗_ニ右御眼_一所_レ生之月讀尊者外宮高宮御事也所謂神直日神大直日神是也問或稱_ニ內宮荒祭_一或號_ニ外宮高宮_一文證如何 答神記曰伊弉諾尊到_ニ筑紫日向小戸橘之橿原_一而被除之時洗_ニ左眼_一因以生_ニ日天子_一是大日靈貴也天下化名曰_ニ天照太神_一之荒魂荒祭神復洗_ニ右眼_一因以生_ニ月天子_一天御中主靈貴也天下化而名曰_ニ豐氣太神_一之荒魂多賀宮是也多賀宮則伊吹戶主神祓戶神天照太神第一攝神也依_ニ神誨_一奉_レ傍_ニ止由氣宮_一也文明文龜鏡也問如_ニ舊事本紀_一者以洗_ニ左右眼_一所生之神並坐_ニ五十鈴川上_一謂_ニ伊勢齋太神_一文而今稱_ニ荒祭多賀宮_一分座如何答天照皇太神御_ニ鎮_一坐于五十鈴河上之時多賀宮荒祭宮_{號_ニ荒魂_一和魂}同時一所御鎮坐也仍並坐_ニ五十鈴河上_一之由載_レ之然後外宮御_ニ鎮_一坐于山田之原時依_ニ神御誨_一以_ニ彼多賀宮_一奉_レ遷_ニ渡會外宮_一畢自_レ爾以來所_ニ分座_一也前後次第具可_レ辨者哉

也故謂神者生之本形者生之具也古語稱獨化神也

文寶山記曰高產靈皇帝此名上帝是萬皇產靈尊者極天也思兼

神智性始有文字之號次國常立尊與天御中主尊

同位之篇如日本書紀等者天地之中生一物一狀如

葦牙便化爲神號國常立尊文如神記等者大海

之中有一物一浮形如葦牙其中神人化生號天御中

主神故號豐葦原中國亦因以曰止由氣皇神也文

兩神共自一物之中出化也以浮形字作浮經然則

國狹槌尊以下五代水火山金土者國常立尊之具德也天

八下靈神以下五代地水火風空者天御中主尊之具德也

彼此一體含納而未露顯或及伊弉諾伊弉冊尊或

至高皇產靈神始現尊形初中後如此是神代祕要

也不可知不知矣

問國常立尊以前有天讓日天狹霧國禪月國狹霧尊

云云其位如何答神祇與源古典秘訣也神中之神靈中

之靈也故不立階梯員外置之群靈之大祖萬物本緣

也麗氣曰常住妙義本無象混爲天讓日天狹霧地禪月

地狹霧連烈有形有念有言名元神不生不滅不垢

不淨不增不減是故空中大無相善哉摩訶衍是也文亦曰

是萬象萬緣根本故曰本地風光文豈記筆傳之談言

得之哉

問彼神員外置之云云見何書哉答可見舊事本紀

第一卷凡神道重々位言外令透得者盡達大道哉

問如寶山記者伊弉諾伊弉冊二尊任皇天宣受天

瓊戈以咒術力加持山川草木現種種未曾有事

文如舊事本紀并日本紀等者伊弉諾伊弉冊二尊俱議

曰吾已生大八洲及山川草木何不生天下之主者

歟先生曰神曰大日靈貴亦云天照太神亦云大

日靈尊此子光華明彩明微六合之內故二神喜曰吾

息雖多未若有若此異靈之兒不宜久留此國自

當早送于天而授以天上之事是時天地相去未遠

故以天柱舉於天上次生月神號曰月讀尊亦

云月夜見亦月弓其光彩亞日可以配日而治故亦

送于天文彼天上者何處乎答謂天上者無色界也凡

依神位天上之所居區也不可存一偏歟

問於無色界差何乎答於此神者無色界中差飛

空自在天也或書云不來不去神本覺不生元神也一切

衆生慈父常住不變妙理也堅超方便門橫成正覺智

文深釋曰自在天者天宮第一文仙宮祕文曰授以天上

事日神留宅於日小宮遍照十方而令利衆生能

其名爾時靈物乃中四理志出神聖化生名之曰天神亦曰逮于天帝代名靈物稱天瓊才一文天地麗氣曰本國漂蕩狀貌如鷄子漸々万々時一十々々時有三化生之神一乘浮經一浮經者葦葉今獨股金剛也阿字原者阿字一點也文麗氣曰半月浮經者葦葉形表也法中云阿字此分異本有阿字本有波月也月形波三日月也三日月與圓滿月一水本性云々水體者月也心水也心水者鑒字云云月圓滿月合宿際也文寶山記曰月與水本性心水也文證如此最可存者哉

問天神七代有廣略義哉如何答就之有二義一七代者羅列義也一代含納義也以含納爲祕說所以者何國常立尊與天御中主尊名號異而眞理一也而有名無形中五代者水火木金土五行神地水火風空五大神也各又府中之有也面目圓備名曰伊弉諾伊弉冊尊是則非一體之變作一哉

問今所言一文證如何答祕府實錄曰國常立尊無名無狀著德立功名者也原性命受化於心心受之意意受之精一精之受之神形體易而神不毀性命既而神不終形體易而神不變性命化而神常然因以名國常立尊以初

爲常儀者也文神皇系圖曰天先成而地後定然後神聖生其中焉號國常立尊矣亦名無上極尊亦名曰常住毗尊謂惟三世常住妙心法界體相大智也故天神地祇本妙大千世界大導師是尊也文祕府實錄曰國狹槌尊水藏戶豐斟淳尊火藏戶涅土煮尊木藏戶沙土煮尊對耕荒魂大戶之道尊金藏戶大苦邊尊荒魂面足尊土藏戶惶根尊對耕荒魂件五代八柱天神光胤也雖有二名相未現形體五大府中坐故名天地耦生神也文亦曰從國常立尊一至惶根尊天神六代之間則有名字未現尊形五位神坐其後轉變而合陰陽有男女形文麗氣曰國常立尊亦名常住毗尊也惟是三世常住妙法身天神地祇本妙元神也以一身分七代形體顯言爲陰爲陽化生日神月神文復舊事本紀曰天八下尊獨化天神第一世之神也天三降尊獨化天神第二世之神也天合尊亦云天鏡尊獨化天神第三世之神也天八百日尊獨化天神第四世之神也天八十萬魂尊獨化天神第五世之神也高皇產靈尊亦名高魂尊亦名高木命獨化天神第六世之神也文祕府實錄曰天八下靈神府中五魂坐五多五常天三降靈神天火天合靈神天八百日尊天八十萬魂尊件五柱神則受天地之精氣而氣形質具而未相離名稱五大魂是中府藏坐神

神以清淨爲先我鎮以得爲一爲念也神主部物忌等諸祭齋日不觸諸穢事不行佛法言不食六迄至神嘗會日不食新飯常謚心慎攝掌敬拜齋奉仕矣文亦曰希哉視聽之外氤氣之中虛而有靈一而無體故發廣大慈悲於自在神力現種種形隨種種心行爲方便利益所表名曰大日靈貴亦曰天照太神爲萬物本體度萬品世間人兒如宿母胎也亦止由氣皇太神月天尊天地之間氣形質未相離是名金剛神一生化本性萬物惣體也金剛水不朽火不燒本性精明故亦曰神明亦名太神也任大慈本誓每人隨思雨寶如龍王寶珠利萬品如水德故亦名御氣都神也人乃受金神之性須守混沌之始故則敬神態以清淨爲先文亦曰心神則天地之本基身體五行之化生奈肆元々入元始本々任本心日月廻四列雖照三六合須照正直頂文然則明元々任本心以之爲神道之風俗應神主之名號從他不_レ可得之以言不可傳之

問天地開闢之後虛空中有二物形如葦牙化爲神云云彼形何物乎 答天地開闢義汝存知如何 問如古典者天地未形謂之太易元氣始萌謂之太初形

氣始端謂之太始形變有質謂之太素質形已具謂之太極五氣運通爲天地之二靈清以陽發昇而爲天濁以陰凝降而爲地地形別謂之二儀人生其間謂之三才如日本書紀等者天地未割陰陽不分渾沌如鷄子溟滓而含牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯爲地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而地後定然後神聖生其中焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也文本文如_レ此何有別釋乎答見_レ文勿論也誰不知_レ之所謂書不盡言言不盡意有淺有深有相之篇有無相之篇僅就淺畧不辨與儀者每事可迷惑須訪先達哉且可述一隅謂神聖生其中者不可得之天心言語道斷之妙義也葦者阿字也牙者獨一表也神聖尊體也出化之次第如_レ此遍一切處之元神機與則生是名有相緣謝卽滅是名無相生本無生之生者生相卽無相也滅又無滅之滅者滅相卽有相也有相無相之名言唯是具德之表裏也相望得名都無定量雖無文證有道理者不可捨之況於有無兩義詳存哉問今所言義明文有之乎 答無明文者爭吐胸臆詞哉寶山記曰大海原在獨化物其形如葦牙不_レ知

類聚神祇本源卷十五

神道玄義篇

問神祇古典以天地開闢爲最歟其上無子細乎
答於餘卷者載本文雖不及釋義至此卷者
就問答專可決旨歸也編作更無私曲冥鑒定垂
證知神祇書典之中多以天地開闢雖爲最神道門
風以之不爲極歟所志者以機前爲法所行者
以清淨爲先

問何謂清淨乎 答其品非一或以正直爲清淨
或以一心不亂爲清淨或以超生出死爲清淨
或以六色之禁法爲潔齋之初門者也

問何謂六色哉 答神宣曰散齋致齋內外潔齋之日不
得弔喪問疾食肉不判刑殺不決罰罪人不
作音樂不預穢惡之事不散失其正致精明之
德文神宣勸語具載禁誡篇畢

問何故名六色哉 答用名言之相通爲和漢之習
俗所謂六色者六境也又第六意識也以識爲色惣言之者一

心不亂之義則謂之者六根清淨之義也鎮座本記曰從
正以爲清淨隨惡以爲不淨文大宗教府云居無
爲無事大達之場超生出死名之清淨文潔齋之法
不可不知神不享非禮最可存謹慎歟

問以機前爲法兼機後含德之證如何 答尊神遺勅
中備天地開闢之後雖万物已備莫照於混沌之前因
茲萬物之化若存若亡而下々々々志自不尊文亦曰
汝正明聞給倍人乃天下神物也莫傷心神々々垂以祈
禱爲先冥加以正直爲本任其本心皆令得大道
道人守混沌之始屏佛法之息文亦曰各念天地
大冥之時日月星神像現虛空之代神是履地而興
于天御量於中國而上去下來而來見六合天照太神
悉治天原輝天統皇孫尊專治葦原中國受日嗣
聖朝所覃莫不祗屬宗廟社稷之靈得一無二之盟百
王鎮護孔照是以從人本天地續命祀皇祖標德深
其源根恭宗祖神廟令朝四方之國以觀天位之貴
弘大業明天下夫逆天則無道逆地則無德而
外走本居沒落根國齊情於天地乘想於風雲者
爲從道之本爲守神之要將除萬言之雜說而
舉一心之定準配天命而掌神氣理實炳然故祭

一覽了

一品判 私記北畠殿

此卷依北畠一品入道家之召借進之處御書寫可
レ點進彼書寫御本之由被仰下之間披見之處
被貽此與書畢

彼詞云

丁丑秋九月於勢州宿館以外宮三禰宜家行神
主本手書之此鈔十五卷先以寫畢於當卷者
依祕中祕爲別卷奏覽之時猶留之適經廻
常國之間爲結縁聽一見之由所相談也因
密密寫留更不可他見矣云

貞和四年戊子十二月書寫畢

權禰宜度會神主實相五十二

校點了

正保四年丁亥十二月九日書寫畢正本有誤字後正焉

同十日校合畢

禰宜度會朝和判

寛文十一辛亥年秋八月一日書寫之

權禰宜度會

理也與_二虛空_一等於_二一切世間中_一而現不_レ出不_レ入不

失不_レ壞常住一心妙體故一切得法一切不能染智體也

不動具_二足無漏動心衆生_一故以_二清鏡_一奉_レ崇_二神體_一而

遍_二衆生之心_一以令_レ歸_二大道_一故圓鏡_二瑩_一意光明遍照故

心離_二無明_一是名_二大日_一生死長夜此時永曉自相不可得

妙解无_レ過_レ斯焉真如妙定空無_レ有_レ邊內不_二遺照_一外

不_二步緣_一如_二月映_一水如_二日麗_一天眼見耳聞如_二密會圓_一

焉花嚴經曰正法性_二遠離_一一切言語道_一也文故以無爲

反_二清淨_一是道德也故覺王之心珠靈神之智杵天神寶鏡

龍王智劍稻倉魂五種子日頭月頭照落處是神一無貳恩

也頓首再拜々々幸甚々々

同記
大和寶山記曰 天御中主尊

無宗無上而獨能化故曰_二天帝之神_一亦號_二天宗廟_一天下

則以_二三身_一即一無相寶鏡_一崇_二神體_一祭_二伊勢止由氣宮_一

也

南山大師御記

豐受皇太神繼文曰 本有金剛界普賢如來月輪無相無

爲本形_二三密鏡_一是爲_二神體_一是名_二法身如來_一催_二一切衆

生八萬四千塵勞門_一明_二無盡無餘煩惱惡業_一是名_二大梵

天王宮_一是名_二金剛法界宮_一豐受皇太神繼文開_二海雲造

玄血脉_一知_二兩宮神祇本緣_一如_レ予信_二兩宮_一人者堺内外

不參

神則諸佛魂佛則諸神性也人則神主神則人魂如_レ實知_二

自心_一是名_二真如_一是名_二萬法生_一是名_二大悲方便_一是名_二

真覺_一覺王是名_二真如海_一是名_二般若波羅密王宮_一是名_二

心柱_一是名_二三界建立主_一

類聚神祇本源

止由氣皇太神荒魂也

伊弉諾尊到_三于筑紫日向小戸橘之櫛原而祓除之時
洗_三左眼_一以生_三日天子_一是大日靈貴也天下現名曰_三
天照太神之荒魂荒祭神_一是也 復洗_三右眼_一因以生_三
月天子_一天御中主靈貴也天下降居而名_三止由氣太神_一
之荒魂多賀宮_一是也亦曰_三伊吹戸主神_一也御靈形鏡
坐也是天鏡尊所_三造_三面寶鏡伊弉諾尊右手仁令_三奉
持_三天月神所化乃真經津鏡是也

天地麗氣曰 伊弉諾伊弉冊二柱尊持_三左手金鏡_一陰生_{月神}
持_三右手銀鏡_一陽生名曰_三日天子月天子_一是一切衆生眼
目坐故一切火氣變成_三日一切水氣變成_三月三界建立日
月是也于_三時以_三羸都鏡邊都鏡_一爲_三國璽尊靈_一而日神
月神自匿_三于天宮_一而照_三六合_一給矣
亦曰御餘寶十種神財者

羸都鏡一面 天字五輪表
豐受皇太神
邊都鏡一面 地字圓形外緣八咫形
天照皇太神

此外神財載_三神宣篇_一畢

或云
灌頂天女傳曰 羸都鏡 邊都鏡二面奉_三授_三天孫_一天
降居爾時一面淡路地八大龍神奉_三鎮_三一面日向宮奉_三崇
也

二所太神宮正殿觀曰阿津鏡 オキツ 鏡津鏡云云
亦曰內宮則八葉開花御靈鏡上上諸佛出入九輪下下諸
神通化天女像

外官則圓滿御靈鏡上上如來祕密五輪下下諸天惣體男
天像

都二面御正體徑九寸三分芭蕉葉厚思惟二尺八寸坐
日生摩尼與_三月生摩尼_一照_三天地_一無上徹_三內外_一無陽無
隔無_三四方缺_一無_三上下餘_一微塵中座轉法輪示_三究竟窮
極乘_三無窮無念手取_三流鈴_一口說_三甚深般若_一心觀_三不生
妙理_一足踏_三菩提妙蓮_一談_三畢竟空寂旨_一是諸佛萬德深
行是諸神降化所爲

亦曰 二所內外兩宮界內界外諸別宮各五大八大廿天
內海外海龍王衆觀_三其御形_一大梵天其形摩訶毗盧舍那
本地御正殿內座大覺大悲阿字床御舟形御槌代會_三交
光明妙朱_一奉_三鎮_三座_一以下金輪聖王玉體安穩寶祚延
長國泰人畜平等之惠也生生者日月赫杰和光爲爲是是
阿耨多羅三_三狼三_一菩提神達佛達阿日大鑊也
慈覺大師御記

瑞拍仙宮秘文 神鏡謂諸法併移清鏡故亘_三三世_一而
遍_三十方_一以_三不_三改變_一云云 凡鏡是三身具足見_三其形_一
者應身理也與_三虛空_一等者化身之相也觀_三其空_一者法身

神意一紀伊國日前神是也

已上神代寶鏡是也

倭姬命隨_{神誨}更鑄造日月所化神鏡藏_置朝熊山神

社也亦此處_爾種々神財鑄造已竟製造之鏡八十三面

亦劔大刀子小刀子五十二枚矛大小一百二十柄御弓御

箭御楯各四十四種式備_二所皇大神之大幣_一焉

天照太神各二十四種也止由氣太神各二十種分置者

也

阿波良波命傳神記曰天照坐皇太神一座

天御中主高貴高皇神勅曰令_三石凝姥神取_二天

香山銅以鑄_中日像之鏡上其形美麗今崇_三祭伊勢太神

宮御靈是也

相殿神二座

左天手力男命_{元是御戶開神坐靈御形弓坐也是神代輪王所造也}

右萬幡豐秋津姬命_{靈御形劍坐是神代龍神所造也}

荒祭宮一座_{天照大日靈貴荒魂靈御形鏡坐}

伊弉諾尊洗_{左眼}因以生號曰_三天照荒魂亦瀨織津

比咩神也記曰天鏡尊月殿居焉所_三鑄造之寶鏡三

面之內二面者伊弉諾伊弉冊尊傳持天神賀告詞白賜

且日神所化乃真經津鏡一面座也因_レ玆爲_三御靈也

天照坐止由氣皇太神一座

御靈形鏡坐也國常立所化神以_三天津御量事_一天三面

乃真經津乃寶鏡鑄顯給_倍利彼三面寶鏡內第一御鏡是

也圓形坐奉_レ藏_三黃金槌代_一焉

相殿三座

左一座皇御孫尊御靈形金鏡坐二面大西小東以_レ西

爲_レ上同御船代內坐是神代靈異物也_{以三面爲一座居}道主

貴奉_レ齋神是也大物忌內人奉_レ仕其緣也

右二座天兒屋命靈形笏坐牙緣也珠玉一雙寶木二枝

坐

天石戶開之時天兒屋命捧持祝詞敬拜鎮祭笏寶木是

也

太玉命靈形瑞八坂瓊之曲玉奉_レ藏_三圓宮_一也是天祖

吾勝尊所化寶玉是也亦五百箇御統玉奉_レ懸_三眞寶

木枝也寶玉內納_三珍室_一也是天地人福田也奉_レ納_三

曲玉圓宮一合靈異物觸_レ事有_レ効亦五百箇乃有_二金

玉飭寶珠等_一天戶開之時太玉命捧持寶玉是也圓宮

則混沌形也故藏_三萬物種子_一是也亦號_三玉串內人_一奉

_レ仕眞寶木五百箇御統玉之其緣也

多賀宮一座

火珠所成玉 本有法身妙理也 亦名邊都鏡 亦

名經津鏡 亦名白銅鏡

相殿坐神

左天手力男命 亦名靡開神ミトヒラキ

神體八葉靈鏡下八葉形二重 神寶弓座太刀座

右栲幡豐秋津姬命 亦名慈悲心王是群品母儀破賀尊座也
神體前並也

攝政別宮荒祭宮

亦名隨荒天子 閻羅王所化神

天照荒魂神名瀨織津比咩神

神代三面內神體鏡坐三天鏡尊寶鏡是也

麗氣曰

神鏡三十二面篋二合御代物勿摩正手以三上衣

攝社朝熊神社

是佛眼佛母日月應化遍照寶鏡昔不合尊金鏡是也

朝熊神六座倭姬命崇祭之寶鏡二面日天月天兩眼精

倭姬命寶鏡云

太田命傳神記曰 國常立尊所化神以天津御量事地

輪之精金白銅撰集地大水大火大風大神變通和合給天

三才相應之三面眞經津寶鏡平鑄造表給利故此鑄顯神

名曰三天鏡尊爾時神明之道明現天文地理以存矣亦劍

者大刀子 土精金龍神所造也弓箭者輪王所造陰陽義故

名三天之香子弓地之羽々箭也玉者日天月天之光精也

笏者天之四德地之五行自然德也物皆爲神靈敢誰無

私耶焉

一面者從日天顯現之明鏡

外宮圓形坐三光天衆五飛龍 守護神五座 是天鏡尊之鑄

造白銅寶鏡也月天所作三面之內也崇祭止由氣宮是

也從天上御隨身之寶鏡是也神代天御中主神所受

白銅鏡也是國常立尊所化神天鏡尊月殿居所鑄造鏡

也三才三面之內一面是也今二面者天鏡尊子天萬尊

傳持之次沫蕩尊次伊弉諾伊弉冊尊傳持天神賀告詞

白賜耳日神月神所化乃眞經津鏡是也天地開闢之明鏡

也三才所顯之寶鏡也當受之以清淨求之以神心

視之以無相無住因以爲神明之正體也今崇祭一

面荒祭宮御靈一面多賀宮御靈坐已上三面辭竟奉支

內宮一面者八百萬神等以石凝姥神奉鑄寶鏡是則崇伊

勢太神宮也

一名日像八咫鏡是也八咫古語八鏡也 八頭花崎八

葉形也故名八咫也中臺圓形座也圓外日天八座

日前宮一面日前宮坐也石凝姥神鑄造也初度所鑄不合金諸

神體飛空自在天說法談義精氣也

水珠所生玉常住法身妙理也

正體輪中有三輪一中輪長六寸 餘四輪各長四寸也

是名御正體輪二尺四寸徑八寸也

相殿座神

左皇孫尊 天上玉杵尊 二柱一座

神體八葉形靈鏡 无緣圓輪御靈鏡也

右天兒屋命 亦名八重雲劍神 亦名左右上下有神

天兒屋命 亦名八重雲劍神 亦名左右上下有神

亦名頭振女神 亦名百大龍玉神

神體切金方笏御靈鏡

太玉命 亦名大日荒神 亦名月絃神 亦名月讀尊

神體二輪御靈鏡

右二柱靈鏡者梵篋中藏之以一百卅六兩朱各埋

藏之赤色敬愛表也此神不染着善惡唯外相法身

姿現內心慈悲至極也

麗氣府錄曰 亦靈鏡外寶珠 劍杵牙笏賢耆神寶奉

飭之崇祭之一

攝政別宮多賀御前神 亦名泰山府君也 止由氣皇太

神荒魂也 亦名伊吹戶主神也 御靈天鏡坐云云

神寶鏡廿二面藏之內一面天鏡以朱藏文形也

左右各一合 都四十四鏡表也

麗氣府錄曰 神寶鏡廿二面竹目木藏之內一面天鏡

以朱藏文形也

瑞器記曰

攝社大土祖神 亦名五道大神 雙五處大明神座也

山田原地主神 亦號鎮護神 大年神子大因玉神子

宇賀神一座 大土御祖一座 御體瑠璃壺一口靈鏡二

面華形座云有_二神寶名石一面日象扇一枚_一書之

降臨次第麗記曰

豐受皇太神 神璽本靈

外宮 五智圓形御寶鏡 是云如意靈珠

水火風空四智御靈鏡

水圓形 土宮

火三角形 角宮

風半月形 風宮

空團圓形 多賀宮

五智圓滿御靈鏡中形其品已上相殿

天照太神宮御鎮座麗記曰

神體八咫鏡坐也

類聚神祇本源卷十四

神鏡篇

萬鏡本緣神靈瑞器麗氣記曰

大梵天宮天體靈光

外宮

一面大自在天王心肝靈鏡

靈鏡變成精光々々中有五輪各々移五色

成五智々々變坐平等天照一名豐受皇太神是

曰天御中主尊也

一輪中有五輪是天御中主尊寶鏡

麗氣府錄曰一面飛空自在天同聽發言精氣所化靈鏡也

一輪中有五輪是天御中主尊寶鏡

私日本書雖異靈鏡同也

瑞器記曰

神代三面鏡是也

三面天鏡尊心月輪鏡

一面戶棄大梵天王寶鏡私云以朱埋文形已見在也

一面光明大梵天王寶鏡

一面世界建立金剛日輪鏡

內宮

一面八咫鏡八葉中有方圓五位象是天照皇太神御靈

鏡坐也

日前宮

一面紀伊國那草日前宮神靈內侍所前神坐也

件二面者八百萬神達執天金山精金奉鑄日像

鏡也

左外相殿皇御孫

二面無緣圓輪靈鏡

鳳龍

右外宮同相殿天兒屋根

二面切金方笏靈鏡

件鏡四面以天香山金葺不合尊制作也謂攝津國

與幡磨國合堺乃世附志奉鑄之云

東大寺

二面聖武天皇寶鏡是大梵天王兩眼化為明鏡故佛父

佛母兩眼大日頂輪大佛開眼明鏡是也

南山大師靈三面化現金鏡豐受皇太神別宮多賀宮坂下底津岩根爾

藏置也

小朝熊

二面大和姬命朝熊海水上附志奉鑄白銅鏡也

禁裏御座內侍所神鏡崇神天皇御宇奉鑄也以爲神璽也

豐受皇太神鎮座麗氣曰

外宮豐受皇太神

五大月輪

五智圓滿寶鏡

實相真如五輪中臺常住三世淨妙法身

大毗盧遮那佛亦名法性自覺尊亦名熾盛大日輪也

日皆同此例一

被_レ行_二神事_一之內裏猶以不_レ被_レ入_二僧尼_一何況伊勢太神宮者宗廟中之太廟也神宣勅語不_レ可_レ不

忌爭僧尼致_二內院參入_一哉僧尼則着_二釋尊服_一之

故也云々此外猶有_二深義_一哉

神祇式第四曰禰宜大內人雜色物忌父小內人遭_二親喪_一

不_二敢觸穢_一及著_二素服_一卅九日之後祓清復任其服闋之

間侍_二候外院_一不_レ預_レ供_二祭物_一亦不_レ參_二入內院_一傍親服中亦同

但物忌父死者其子解任子死者父亦解任並非_二復任之

限一

或人難云及_二人皇卅代欽明天皇御宇_一百濟國始獻_二

佛像經論_一歟然者夫以往忌_二佛法_一神宮記如何頗可

_レ謂_二未來記_一哉

答曰佛西天入滅之後經_二一千四百八十年_一後漢明帝

永平七年乙丑夢見_二金人_一佛法傳來以降至_二于本朝

欽明壬申_二四百六十年_一歟漢土典籍者人皇十六代應

神天皇御宇_レ令_レ渡之上者佛法僧之名字豈不聞及哉

神宮記者雄略_二天皇御宇_一神宣也縱雖_レ爲_二未來記_一非

_レ無_二先蹤_一和漢例多就_レ中彼忌詞等非_二神主之私記_一

三世了達之尊神御詔宣也或倭姬命或衢神等正蒙_二

神宣傳神主部嚴重異_レ他誰成_二不信_一哉

類聚神祇本源

(井上翁藏本與書)

貞治六年丁未四月十三日書之

通俊證改

思其笑語_二思其志意_二思其所樂_二思其所嗜_二齋三日乃見其所爲_レ齋者_二致齋思_三此五者_一散齋七日不御不樂不弔_レ欲飲食_二春秋傳曰_一屈到嗜_レ羹

禮記曰齋者不樂不弔_レ爲其哀樂則失_レ正散其思_レ

今案六色禁忌者淨_二六根之內_一外_二精進也_一所以者何

不弔_レ喪問_二病_一制意_二不食_一害_二精進_一不判_二刑殺_一禪定_二制口

不決_レ罰罪人_二制身_一不_レ作_二音樂_一忍辱_二不預_一穢惡

事_二持戒_一潔齋人如_レ知而不知_二神不享_一非禮_二專可_一愼

者歟依_二釋門_一者布施持戒忍辱精進禪定般若若是也

內七言外七言事

大田命傳神記曰雄略天皇廿一年秋九月種々事忌定給

內七言佛稱_二中子_一經稱_二染紙_一塔稱_二阿良々伎_一寺稱_二

瓦葺_二僧稱_二髮長_一尼稱_二女髮長_一長齋稱_二片膳_一外七言

死稱_二奈保留_一病稱_二夜須美_一哭稱_二鹽垂_一血稱_二阿世_一打

稱_二撫穴稱_一菌墓稱_二壤亦優婆塞稱_一角婆須_二

神祇式第五曰齋宮 凡忌詞內七言佛稱_二中子_一經

稱_二染紙_一塔稱_二阿良々伎_一寺稱_二瓦葺_一僧稱_二髮長_一尼

稱_二女髮長_一齋稱_二片膳_一外七言死稱_二奈保留_一病稱_二夜

須美_二哭稱_一鹽垂_二血稱_一阿世_二打稱_一撫穴稱_二菌墓稱_一壤

亦別忌詞堂稱_二香燃_一優婆塞稱_二角管_一

禮記曰凡祭宗廟之禮牛曰一元太武豕曰剛鬣

豚曰脬肥羊曰菜毛雞曰輪音犬曰羹獻雉曰

䟽趾兔曰明視脯曰尹祭鰓魚曰商祭鮮魚曰脰

祭水曰清滌酒曰清酌黍曰蕝合梁曰薶

其稷曰明粢稻曰嘉蔬韭曰豐本鹽曰

鹹鹺玉曰嘉玉幣曰量幣_{今河東云}

祭宗廟之時改_二常言_一漢家日域其例如_レ斯熊野

山參詣之時亦改_二常言_一者歟

忌佛法事

御鎮座傳記曰高貴神託宣久又詔布神主部物忌職掌

人等諸祭齋日爾不_レ觸_二諸穢事_一不_レ見不_レ聞不_レ弔不

言佛法言忌亦不_レ食_二害迄_一神嘗會日爾不_レ食_二新飯_一

齊_二身諱_一心慎攝_二掌以敬拜祭矣_一

亦曰神人守_二混沌之始_一屏_二佛法之忌_一_{氣イ 委見六色禁忌篇又倭姬命世記同之}

豐受皇太神御鎮座本紀曰諸祭齋日不_レ觸_二諸穢惡_一不

行_二佛法言_一

尼僧忌事

神祇式第三曰祈年賀茂月次神嘗新嘗等祭前後散齋

之日僧尼及重服奪_二情從_一公事_二之輩不_レ得_二參入_一內

裏_二雖輕服人_一致齋並散齋之日不_レ得_二參入_一自餘諸祭

類聚神祇本源卷十三

禁誡篇

六色禁忌事

御鎮座傳記曰雄略天皇卽位廿二年倭姬命磯宮坐冬十一月新嘗祭之夜深天難人等退出之後神主部物忌等宣久吾今夜承皇太神並止由氣皇太神勅所託宣汝正明聞給倍人乃天下之神物也莫傷心神神垂以祈禱爲先冥加以正直爲本任其本心皆令得大道故神人守混沌之始屏佛法之息崇神祇散齋致齋內外潔齋之日不得弔喪問疾食宐不判刑殺不決罰罪人不作音樂不預穢惡事不散失其正致其精明之德左物不移右兵器無用不聞輶音口不言穢惡目不見不淨鎮專謹慎之誠宜致如左之禮矣

神祇令第三曰凡散齋之內諸司理事如舊不得弔喪問病謂有重親喪病者食宐亦不判刑殺不決罰罪人不作音樂謂不作絲竹歌舞之類也不預穢惡之事謂穢惡者

不淨之物鬼神所惡

致齋唯祭祀事得行自餘悉斷其致齋前後兼

爲散齋

上卷

格第一曰裏書云兼日後精神改仰齋日事右據令條凡祭祀所司預申官散齋日平旦願告諸司其散齋之內不得弔喪問疾食宐不判刑殺不決罰罪人不作音樂不預穢惡之事今被右大臣宣仰奉勅散齋之日願告諸司諸司未承事之前或有犯禁忌之徒宜改令條散齋之前一日願告諸司自今以後永爲恒例

下卷

亦曰定准犯科祓例事

一大祓料物廿八種事色目略之

右闕忌大嘗祭事及同祭齋日內弔喪問疾判署刑殺文書決罰食宐預穢惡之事者宜科大祓所輸雜物具如前官人有犯兼解見任

一上祓料物廿六種色目略之

右闕忌新嘗祭鎮魂祭神嘗祭祈年祭月次祭神衣祭等事毆伊勢太神宮禰宜內人及穢御膳物并新嘗等諸祭齋日犯弔喪問疾等六色禁忌者宜科上祓輸物如右

禮記註疏曰致齋於內散齋於外齋之日思其居處

而布瑠之言本也故杵獨王受_ニ之言_ニ大八洲傳_レ之持_ニ明鏡_ニ照_ニ心月_ニ是妙法寂頂梵王真言也无爲事不言教是人真心也

神語而布瑠部由良由良止布瑠部

皇天大神咒

明聞諸法性

自空無所依

非實亦非虛

皆從因緣生

今崇祭神體

是天地精靈

廣利諸衆生

天下應護座

神代屬_ニ五常無心_ニ以_ニ陰陽_ニ治_レ事別無_ニ佛法_ニ但神明

以_ニ威光_ニ攝政仁聖廣用_レ德道通威勢化成_ニ大神_ニ變成_ニ

大道契_ニ引_ニ神世現_レ神佛世爲_ニ成佛_ニ也陰神曰無_ニ天

不_ニ降種子_ニ无_ニ地不_ニ戲孕_ニ天地和合有_レ體有_レ心身體

有_レ言有_レ語契_ニ始_レ分_レ終_レ慈悲先後河也无_ニ生死_ニ无_ニ

常涯_ニ無終一切无始万物都不_レ可_レ測_ニ涯際_ニ權_ニ初起_ニ

虛无_ニ幻化跡_ニ四相_ニ幻野尋一度是非迷一度是非願神

明加護諸佛擁護天皇寶位無_レ動久如_ニ湯津磐邑_ニ久常磐

堅磐爾_ニ三世常住四海无爲再拜々々

神勅雖_レ多抽_レ要鈔_レ之

類聚神祇本源

蓋聞天地未割陰陽不分以前是名混沌萬物靈是封名虛空神亦曰大元神亦名國常立神亦名俱生神希夷視聽之外氤氲氣象之中虛而有靈一而無體故發廣大慈悲於自在神力現種種形隨種種心行爲方便利益所表名曰大日靈貴亦曰天照太神爲萬物本體度萬品世間人兒如宿母胎也亦止由氣皇太神月天尊天地之間氣形質未相離是名混沌所顯尊形是名金剛神生化本性萬物惣體也金剛水不朽火不燒本性精明故亦名曰神明亦名大神也任大慈本誓每人隨思雨寶如龍王寶珠利萬品如水德故亦名御氣都神也金玉則衆物中功用甚勝不朽不燒不壞不黑故爲名無內外表裏故爲本性謂人乃受金神之性須守混沌之始故則敬神態以清淨爲先從正式爲清淨隨惡以爲不淨惡者不淨之物鬼神所惡也

太田命傳神記曰秋九月雄略天皇即位二十二年種々事忌定給內七言

佛稱中子經稱染紙塔稱阿良々岐寺稱瓦葺僧稱髮長尼稱女髮長齋稱片膳外七言死稱奈保留病稱夜須美哭稱鹽垂血稱阿世打稱撫安稱菌墓稱壤亦優婆塞稱角波須秘法定給

亦曰泊瀨朝倉宮雄略天皇大泊瀨稚武天皇即位廿三年乙未二月倭姬命召集於宮人及物部八十氏等宣久神主部物忌等諸聞吾久代太神託宣摩志志木心神則天地之本基身體則五行之化生奈利肆元元入三月初一本本任本心與又屏佛法息奉再拜神祇日月廻四洲雖照六合須照正直頂止詔命明矣

天地麗氣府錄曰誓曰手抱流鈴以御無窮無念爾祖吾在鏡中其貌如日其心如海其慧如天其穗如地修善道攝心爲先精進爲行正念爲本夫一切法自性空依遍照如來相當知空體爲體无相爲相无性爲性无得爲得爲利益衆生如來作異相是故諸佛應化菩薩万行五通行相十界差別皆是如來方便其實歸空一理不着諸相爲不可得々々々即如來正覺般若修行之要道其至極既以如是故天女曰伊勢兩宮無始无終大元宗神亦一念不生神羅烈万法心故絞結万像體嗚呼爲法无因利爲神无緣守无無窮妙體邊際无利生力用休息屏佛法息諸神影无邊法界心量故捧兩部合掌藥備法性隨緣机薰一切无作香燒平等无際鹽不供供不受受給矣天王如來曰亦曰一字含千理即身證法如是

ノ掌以敬拜祭矣

大田命白久二面者天鏡尊子天萬尊傳持之次沫蕩尊次伊弉諾伊弉冊尊傳持天神賀吉詞白賜_ミ日神月神所化乃真經津鏡是也天地開闢之明鏡也三才所顯之寶鏡也當_下受_レ之以_三清淨_二而求_レ之以_三神心_一視_レ之以_中无相無住_上因以爲_三神明之正體_一也

興玉神託宣久天照坐皇太神則大日靈貴故號_二日天子_一以_三虛空_二爲_三正體_一焉故曰_三天照太神_一亦止由氣皇神則月天子也故曰_三金剛神_一亦名_二天御中主神_一以_三水德_一利_三萬器_一故亦名_二御饌都神_一惟諸神福田生化壽命也汝等受_二天地之麗氣_一而種_{ヅキ}神明之光胤_一誰_モ撓_二其神心_一誰干_三其慮_一耶謹請再拜言壽竟

倭姬命儀宮坐冬十一月_{雄略天皇即位廿二年}新嘗祭之夜深天難人等退出之後神主部物忌等宣久吾今夜承_二皇太神井止由氣皇太神勅所_一託宣_二汝正明聞給信人乃天下之神物也莫_レ傷_二心神_一神垂以_三祈禱_一爲_レ先冥加以_三正直_一爲_レ本任_二其本心_一皆令_レ得_二大道_一故神人守_二混沌之始_一屏_二佛法之氣_一崇_二神祇_一散齋致齋內外潔齋之日不_レ得_二弔_レ喪問_レ疾食_レ食不_レ判_二刑殺_一不_レ決_二罰罪人_一不_レ作_二音樂_一不_レ預_二穢惡事_一不_レ散_二失其正_一致_二其精明之德_一

左物不_レ移_二右兵器无_レ用不_レ聞_二鞞音_一口不_レ言_二穢惡_一

目不_レ見_二不_レ淨_一鎮專_二謹慎之誠_一宜_レ致_二如在之禮_一矣于

時大神主阿波良波命承_レ宣記_レ之_{○今按本書}此處中略歟神主部物

忌等承_二神宣_一以爲_二訓傳_一各齋持不_レ顯露_二深藏以神祕

焉

豐受皇太神御鎮座本紀曰皇天倭姬內親王託宣久各念

天地大_{○天}冥_{○地}之時日月星神像現_二於虛空_一之代神足履

地而興_二于天御量於中國_一而上去下來而來見_二六合_一

天照大神悉治_二天原_一耀_二天紘_一皇孫尊專治_二葦原中國_一

受_二日嗣_一聖朝之所_レ覃莫_レ不_レ祗屬_二宗廟社稷之靈得_一

无貳之盟百王之鎮護孔照是以從人本_二天地_一續_レ命祀_二

皇祖_{○標}德深_二其源根_一_{○一本}作根源恭_二宗祖神_一令_二朝_一四方之

國_一以觀_二天位之貴_一弘_二大業_一明_二天下_一夫逆_レ天則無

道逆_レ地則無_レ德而外走_二本居_一沒_二落根國_一齊_二情於天_一

地_一乘_二想於風雲_一者爲_二從_一道之本_一爲_二守_一神之要_一將_レ

除_二萬言之雜說_一而舉_二一心之定準_一即配_二天命_一而嘗_二

神氣_一理實_{○然}故祭_二神清淨爲_一先我鎮以_二得_一爲_レ念

也神主部物忌等諸祭齊日不_レ觸_二諸惡事_一不_レ行_二佛法

言_一不_レ食_二食迄_一至_二神嘗會日_一不_レ食_二新飯_一常謐_二心慎

攝_レ掌敬拜齋仕矣

賜^利無^二黑心^一天^志以^二丹心^一天清潔久齋慎美左物於不^レ移^志
 右須右物於不^レ移^志左志^志左左右左返廻事^志萬事違^志
 事^志奈久大神奉仕元元本本故也

伊勢二所皇大神御鎮座傳記曰狹長田之猿田彥大神齋

內親王神主部物忌等訓悟白久凡天地開闢之事聖人所

述也爰伊勢天照皇大神五十鈴乃河上爾御鎮坐之制作

未^レ露紙墨^一故元始綿邈其理難言志願爾諸聞給倍吾

是天下之士君也故號^二國底立神^一也吾是應^レ時從^レ機比

化生出現之故號^二氣神^一吾亦根國底國利^與龜備疎備來物

仁相率守護之故名^二鬼神^一吾復爲^二生氣^一仁授^二與壽福^一

之故名^二大田命^一吾能反^二魂魄^一之故號^二與玉神^一悉皆自

然之名也物皆有^二効驗^一我將^二辭訖^一遂隱去矣

今歲^{五年春三月}猿田彥大神參乃言壽覺白久南大峯有^二

美宮處^一佐古久志呂宇遲之五十鈴之河上者大八洲之

內珍圖之靈地也隨^二翁之出現^一三百八萬餘歲之前^爾

未^レ現知^一留在^二靈物^一利照耀如^二大日輪^一也惟小緣之物

爾不^レ在須定主出現御座耶念木倭姬命曰理實灼然惟久

代天地之大祖^{天照皇太神}并神魯岐神魯美命誓宣^{豐葦}

原瑞穗國之內乎伊勢加佐波夜之國波有^二美宮處^一利^見

定給^{天比}自^二天上^一志^天投降居給布天之逆太刀天之逆鋒大

小之金鈴五十口日之小宮之圖形文形等是也^度天之平
 手乎拍給甚喜^{コロコシラマフホトカキナシ}於懷^ニ給此處仁遷^ニ造日小宮^一給大宮柱
 太^ニ敷立於下津磐根^一^{大田命以^ニ地輪精金^一岐^ニ崎博^一風於高}
 天之原^一

亦曰^{（維曆天皇）}皇太神重訖宣吾祭奉仕之時先須^レ祭^ニ止

由氣太神宮^一也然後我宮事可^ニ勤仕^一也故則諸祭事以^ニ

止由氣宮^一爲^レ先也

亦曰凡神代靈物之義^{ヨツホヒ}猿田彥神謹啓白久夫天地開闢之

後雖^二萬物已備^一而莫照^{スルカツ}於混沌之前因^レ茲萬物之化若

存若^レ亡而下來來^志自^二不^レ算^一尊^一本^一于^レ時國常立尊

所化神以^二天津御量事^一地輪之精金白銅撰集地大水大

火大風大神變通和合給^{天比}三才相應之三面真經津寶鏡

乎鑄造表給^倍故此鑄顯神名曰^二天鏡^一爾時神明之道

明現天文地理以存矣亦劍者^{小刀千}土精金龍神所^レ造也

弓箭者輪王所^レ造陰陽義故名^二天之香子弓地之羽羽

矢^一也玉者日天天之光精也笏者天之四德地之五行

自然德也物皆爲^二神靈^一敢誰無^二私邪^一焉

高貴神託宣久又詔布神主部物忌職掌人等諸祭齋日仁

不^レ觸^二諸穢惡事^一不^レ見不^レ聞不^レ弔不^レ言佛法言忌亦

不^レ食^二穴迄^一神嘗會日爾不^レ食^二新飯^一齋^レ身^レ諡^レ心^レ慎攝

類聚神祇本源卷十二

神宣篇

付神寶十種三種事

先代舊事本紀曰天神御祖詔授_二天璽瑞寶十種_一謂羸都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉一死反玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神御祖敎詔曰若有_二痛處者令_二茲十寶_一謂_二一二三四五六七八九十_一而布瑠部由良由良止布瑠部如_レ此爲之者死人反生矣是則所謂布瑠之言本矣高皇產靈尊勅曰若有_レ葦原中國之敵拒_二神人_一而待戰者_レ能爲_二方便_一誘欺抗拒而令_二治平_一令_二三十二人_一並爲_二防衛_一天降供奉矣

天照太神手持_二寶鏡_一授_二天忍穗耳尊_一而祝之曰吾兒視_二此寶鏡_一當_レ猶視_レ吾可_二與同_一床共_レ殿以爲_二齋鏡_一寶祚之隆當_レ與_二天壤_一无_レ窮矣則授_二八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物_一永爲_二天璽_一予玉自從矣詔_二天兒屋命天太玉命_一曰惟爾二神亦同侍_二殿內_一善爲_二防護_一焉詔_二常世思金神手力雄命天石門別命_一云此鏡者專爲_二我御魂_一如_レ拜_二吾前_一奉_レ齋矣

日本書紀曰於_レ是二神誅_一諸不順鬼神等果以復命于_レ時高產靈尊以_二眞床追衾_一覆_二於皇孫天津彥火瓊杵尊_一使_レ降之皇孫乃離_二天磐座_一且排_二分天八重雲_一稜威之道別道別而天_二降於日向襲之高千穗峯_一矣

天照太神勅曰若然者方當_レ降_二吾兒_一矣且將_レ降間皇孫已生號曰_二天津彥火瓊々杵尊_一時有_レ奏曰欲_レ以_二此皇孫代降_一故天照太神乃賜_二天津彥火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物_一勅_二皇孫_一曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可_レ王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當_レ與_二天壤_一无_レ窮者矣

神皇系圖曰天照皇神誓曰吾日太子如_二八尺瓊之勾_一

須彌山

以_二曲妙御宇_一且如_二白銅鏡_一以_二分明看_一行山川海原乃提_二神劍_一平_二天下_一焉肆以名_二之三神神璽_一也汝敬承_二吾壽_一手抱_二流鈴_一以御_二无窮无念_一爾祖吾在_二鏡中_一矣式臨_二寶位_一以鎮_二元元_一上則答_二乾靈授_一國之德_二下則弘_二皇孫養_一正之心然後兼_二六合_一以開_二都掩_一八紘而爲_二帝宅_一詔給矣

亦曰皇天壽曰而布瑠部由良由良止布瑠部云々惟是皇天无極大神咒也

倭姬命世記曰件童女於大物忌止定給比豆天磐戶乃鑰領

二大夫賴元

度會大國玉比賣社

御饗社

佐奈社

三大夫賴房

草奈岐社

須波漏女社

河原大社

四大夫康政

田上大水社

度會國見社御神イ

河原淵社河原イ

五大夫廣雅

大間國生社

志土見社

宇須野社

六大夫雅行

小俣社

清野井庭社

大河内社

延久四年十二月十一日

七大夫 保延元年六月八日加任

以三伊賀戶神社爲三勞社一歟

康房承久三年三月廿六日任

八員跡九十員無三勞社已上是マテ官進交可レ止之

一宮崎氏神社坐三度會郡宮崎一
度會主神氏社

右度會神主氏遠祖天牟羅雲命一名天二上命
一名後小橋命

天御中主尊十二世孫也天照皇太神天孫二柱神天降

坐時御前立天奉レ仕

類聚神祇本源内宮別宮篇
外宮別宮篇

應令社司修造無其勤者科大祓解却見任
官宜承知依宣行之符到奉行

正四位上行大辨兼右兵衛督藤原朝臣河百
右大史外正六位上阿倍志斐連東人

寶龜二年二月十三日

一志止見打懸大河內社增位事

件三箇社爲防河堤守護可被增進位階之由

次第上奏之所被進勅書

勅正五位下志止見名神

今奉授從四位下

大治三年六月十日

勅正五位下打懸名神

今奉授從四位下

大治三年六月十日

勅正五位下大河內名神

今奉授從四位下

大治三年六月十日

官進文可止之

一諸社勞事

廳定置 諸社記

月讀社祝得松
社三大夫

大河內社祝未永
社二大夫

草奈岐社祝有清
社二大夫

河原大社祝有清
社一大夫

淵社祝得吉
社三大夫

大國玉社祝福安
社六大夫

山末社祝正武
社四大夫

宇治野社祝重枝
社一大夫

小俣社祝則安
社一大夫

右依例以每年二月之內爲令勤仕於神態所

定置如件諸社祝等宜承知致所攝神田者勞主并

祝等可進退也於恒例之勤者不可懈怠之狀

如件

天喜三年三月廿一日

禰宜度會神主常親 禰宜度會神主通雅

禰宜度會神主康雄 禰宜度會神主常季

禰宜度會神主連賴 禰宜度會神主賴元

禰宜勞社等

一大夫常季

高河原社 山末社 櫛田社

大間社祝安眞
社一大夫

田上社祝有常
社五大夫

水饗社祝今世
社六大夫

高河原社祝則並
社四大夫

國生社祝伊蘇近
社五大夫

伊蘇社祝伊蘇近
社一大夫

清野社祝弘忠
社一大夫

雷社祝春末
社一大夫

志止見社祝春末
社二大夫

月讀 草奈岐 大間 佐奈 櫛田 須麻留賣

但月讀社宮號之後者加三高河原社德治元年造宮
使造替之

御竈木帳四十七前神社元者四十九前月讀風宮
宮號之間兩社除之

宇須野社 草奈岐社 大間國生社 國見社 大國

玉社 田上大水社 大河內社 志土見社 清野井

庭社高河原社 河原淵社 河原社 小俣社 水饗

社 宮崎氏社 北御門社 上御井社 下御井社

伊蘇社 御田口社 根倉社 佐奈社 須麻留賣社

伊賀利社 野依河田社 赤崎社 撫懸社 櫛田社

雷社 伊賀戶社 箕曲氏社 山末社 鹽屋社 水

取社 高神社 客神社 蘭社 宇須野女社 野依

中社 寶答社 尾上社 落合社 別雷社 大水社

河田社 槐本社 高向社 各有祝預請物

一 大中少社差別事

大政官符神祇官并五畿七道諸國司

應皇定置天下諸社大中少神殿雜舍瑞垣珠垣鳥居

并四至內地町數一事

正一位正三位以上爲大社

從三位從四位以上爲中社

正五位從五位以上爲少社

一大社四至限九町三間檜皮葺正殿一字高一丈二尺
在三板數戶

一堅魚木八丸長五尺
徑九寸千木四支長一丈
三三瑞垣一重方二
丈高

七珠垣二重方各五丈六
尺高八尺內外鳥居二基內一本高九尺口徑
八寸外一本高一丈

口徑三間檜皮葺幣殿一字高一丈一尺
在三板數戶一本三間草葺拜

殿一字高八尺
徑一丈五間板葺舞殿一字高八尺
徑一丈五間板葺直會

屋二字高八尺
徑一丈萱葺板倉二字 三間草葺盛屋二字在
三板數戶

二左右板葺廊二字各高
七尺五間外舍二字高八
尺五間馬

屋二字

一中社四至限八町三間檜皮葺正殿一字高一丈
一尺在二

一板數戶一堅魚木六丸長四尺
徑七寸千木四支長一丈
五瑞垣一重方二
丈高

七尺玉垣一重方三丈五
尺高八尺內外鳥居二基高八尺
徑七寸三間板葺

幣殿一字高七尺
徑一丈三間板葺拜殿一字高七尺
徑一丈五間同舞殿

一字同三板數戶三間同直會屋二字高七尺
徑一丈五間外舍二字

一少社四至限四町三間板葺正殿一字高七尺在三板
數戶一本

一堅魚木四丸長四尺
徑七寸千木四支長一丈
五瑞垣一重方二丈
高五尺鳥

居一基高六尺
徑六寸三間草葺拜殿一字高七尺
徑一丈三間板葺舞殿

一字高七尺
徑一丈五間雜舍二字同
三板數戶

右被左大臣宣備奉勅諸國神社正殿雜舍并

四至町數所定如件宜仰在國司以正稅物

數令造進自今以後不可違失若有破損者

儀式帳曰雜例云式云右諸社並預「新年神寶神嘗祭」

度會郡神社二十肆處 載官帳名社十六所
未載官帳名社八所

月讀神社 草奈支神社 大間國生神社

右三所神社造宮使造奉

度會之國都御神社 度會大國玉姬神社 田上神社

菰野井庭社 大河內社 清野井庭社 高河原社

河原社 河原淵社此社原本ニナシ儀
式帳ニ依テ補フ 山末社 宇須野

乃社 水戸御食郡神社 小俣社

右十六社官幣帛宛奉但十三社者國宛料令「造奉」

伊我理神社 縣神社 井中社 打懸社 志等美社

毛理社 大津社 土賣屋社

右八社未「載」官帳勘付式云右八社未「載」官帳但社先「料
祝造奉但年中三度祭者禰宜內人等率「祝
等供

長德三年八月田社三十三所外宮

宮號
土御祖社在大國玉比
宮前 伊加利社在實社南邊 御田口社在北

從「道」
風社在高宮
道捧本 高神社在政所禰
宜前山

諏訪明神
客神社在同禰
宜前山 石根社在上宇治
大沼東 若雷社在宮北
御門

從四位下立石大明神

打懸社在山樺大
河內社東

法道社在箕曲物部近
未居住乾方 神計社在高向
園社

箕曲氏社在箕曲郷和
泉條居住西 東御門社在沼木
乃社邊 縣社在高神
向

村社 高向神主氏社在鹽
屋 上御井社在即
御井 下御井

社在高
宮後 林社在繼橋
郷森田村 河原饗社 杜社在三
社副 赤崎

社在智久
和島 鶺鴒神戶大歲社 中津山田饗社在國生
社南

槌柄神戶社 湯田宇羽西津社在宇羽
御館西 拍木社在大
歲社

中松 神落萱社在尾上
寺前 阿佐賀社 蘭行嶋社 尾上

社在泉
寺西 湯田清階社在三
村橋 大水社坐三乃々
中島島

長德檢錄田社三十三前外式外社

水取社坐內宮月
讀宮北 鹽屋社坐箕曲郷
大湊以西 野依河田社 河

田社 伊賀戶社坐內宮月
讀宮北 野依中社 別雷社坐離宮
地方 宇

槐本御社坐高向村加
毛淵異方 根倉御社 礪神社 雷社 宇

須野女社坐高
向村 落合社 蘭御社

已上十四前御竈木帳四十九前神社內也

物忌御社 中松原御社 野依片嶋社

小部御社但神宮御竈木帳之
內尾上社同名歟 三津橋河原社

右件五社云○今按云
字衍歟 長德檢錄文云御竈木帳未「載

之宮

司盛房諸神社等修理沙汰之時未「詳歟

私記

造宮使造替六社者所謂

二所太神乃朝大御氣夕大御氣度八盛移居每_レ日二時供進矣凡此御井水者專不_レ干恒出異恠之事不_レ過_二於是社_一亦他用更不_レ可_レ用_レ之亦道主裔大物忌父御井掃淨奉亦御井與_二御炊殿_一往還間道一百二十丈橋一十五丈_{黒木丸橋}此月每修理掃淨雜人等不_レ通_志慎敬仕奉

二所太神宮御鎮座本紀曰天忍水止云天食國乃水爾灌和天獻物亦御伴爾天降奉_レ仕五伴神三十二神八十支乃諸人_{爾令}飲詔天下奉支

大同本紀曰皇御孫命詔久何道_{與利}參上_止間給申久大

橋波皇太神井皇御孫命乃天降坐乎恐美後乃小橋_{與利奈母}參

上_止申時爾皇御孫命詔久後_爾恐奉_レ仕事勇止詔天

村雲命二登命後小橋命止云三名負給支彼朝夕供奉

御膳乃御井止由氣宮坤方岡片類爾御井堀天汲供奉

其水大旱魃年母不_レ涸其下二丈許下_天底仁有_二水田_一

其田波旱魃損_{須禮止母}此御井乃水波專不_レ干恒出異恠之事不_レ過_二於是_一又他用更不_レ用_レ之

神祇式曰度會宮所攝十六座

月夜見社 草名伎社 大間國生社 度會國御神社

度會大國玉比賣社 田上大水社 志等美社 大河

內社 清野井庭社 高河原社 河原大社 河原淵社 山末社 宇須乃野社 小俣社 御饗社

右諸社竝預_二祈年神嘗祭_一

社記注付在所

月夜見社坐_二沼木郷山田村_一承元宮號_{本ノ}

草名伎社坐_二同村大間社西_一標銀伏

大間國生社坐_二大間東同玉垣之内_一坐大若子乙若子命

度會國御神社坐_二沼木郷山田村_一天日別命子彥國見賀岐建與來_其

度會大國玉比賣社坐_二繼橋郷字宮崎高神山南尾崎_一大已貴命_{佐々其比賣命}

田上大水社坐_二同郷字宮崎同玉垣之内_一也在_二前社_一大神主小事

志等美社坐_二沼木郷山田村_一東大河内中志等美西打懸同玉垣也

大河內社坐_二同村_一大山祇神大山罪乃神

清野井庭社坐_二同郷山田村_一大間社東野草野姬命裏書屋船命

高河原社坐_二同郷山田村_一月讀宮東同玉垣內神名式云西川原坐

河原大社坐_二箕曲郷勾村字三津_一社也河神水神

河原淵社坐_二箕曲郷勾村_一河原社南字鹽坪向也澤姬神

山末社坐_二繼橋郷字宮山_一御田口社南也小梨谷山祇大山津姬命

宇須乃野社坐_二高向郷高向村_一五穀靈神二社同玉垣內

小俣社坐_二湯田郷小俣村_一宇賀神一名稻女大明神

御饗社坐_二箕曲郷大口村_一一名水戶神御饗部速秋津日子神

心爲不許耳遂許卽相副而往宅相住十餘歲爰天女善爲釀酒飲一盃吉萬病除也其一盃之直千金財積車送之于時其家豐土形富故云土形里此自中間至于今時便云比沼里後老夫婦等謂天女曰汝非吾兒暫借住耳宜早出去於是天女仰天哭慟俯地哀吟卽謂老夫婦等曰妾非以私意來是老夫等所願何發厭惡之心忽存出去之痛老夫增發願願去天女流淚微退門外謂鄉人曰久沉人間不得還天復無親故不知由所吾々何々哉々拭淚嗟歎仰天歌曰阿麻能波良布理佐兼美禮婆賀須美太智伊幣治麻土比天由久幣志良受母

遂退去而至荒鹽村卽謂村人等云思老夫老婦之意我心無異荒鹽者仍云比治里荒鹽村亦至丹波里哭木村據槻木而哭故云哭木村復至竹野郡船木里奈具村卽謂村人等云此所我心奈久志久古事不善者乃留居此村斯所謂竹野郡奈具社坐豐宇賀能賣命也

二所太神宮御鎮座本紀曰亦名短娥昇女稻靈電光所變也五穀種所化神保食神分身善釀酒靈形石坐

號名賀多普器軍陀利夜叉神所化也亦以大土祖宇賀魂神爲根倉甕星神供神酒今號根倉甕是也

御井社

大田命傳記曰神御井水天孫降臨以來天村雲命理

治于虎珀之鉢金剛夜叉神所化也徑一尺八寸天降居留也爲守護七星

光明如明星坐也皇太神皇孫之命天降坐時爾天村雲命乎御前

立天降仕奉于時皇孫之命天村雲命乎召詔久食國

之水波末熟荒水爾在利故御祖天御中主神之御許爾

參上此由言天來止詔卽天村雲命參登天孫之御祖

之天照太神天御中主神之御前爾皇御孫之中止宣事

乎子細申上時爾御祖天照皇太神天御中主皇太神正

哉吾勝尊神魯岐神魯美尊神議詔久難爾奉政者行奉

下豆在度水取政道遺天下復飢餓久在利何神加奉

度思問爾勇志參登來度詔天天忍石乃長井乃水平

取八盛天誨給久此水持下天皇太神乃御饌爾八盛獻天

遺水波天忍石乃長井乃水止術云天食國乃水爾灌和天朝

夕御饌爾奉獻禮卽時日向高千穗宮乃御井定崇居焉

奉仕矣自爾以降但波真井原爾鎮移居水戶神奉

仕岐其後從真井原遷于止由氣宮乃御井居上焉

已上三所別宮是也但風宮々號之後四所別宮也

風宮在神宮南土宮東但南向坐裏書廣龍田同體神風日神

御靈八咫鏡坐

降臨次第 麗氣記曰水火風空四智御靈鏡水圓滿土宮

火三角形角風半月形風空團圓形高宮一本

社記曰正應六年三月二十日官符改社號奉授宮

號預官幣依異國降伏之御祈也

嘉元正遷宮之時被増作寶殿畢

北御門社裏書賀茂若雷神金剛界辨財天女毘沙門天形刻也

倭姬命世記曰一名曰若雷神賀茂社同神也形題坐

調御倉神

大田命傳記曰宇賀能美多麻神座是伊弉諾伊弉冊尊

二柱尊所生神也亦號大宜都比賣神亦名保食神神祇

官社內坐御膳神是也亦神服機殿祝祭三狐神同座神

也故亦名ニ專女神也齋王專女此緣也亦稻靈宇賀能

美多麻神坐也乾方敬拜祭也尊形○按倭姬世記尊作樽坐各一座

也

二所太神宮御鎮座本紀曰稻靈豐宇賀能賣命宇賀能

美多麻神保食神尊形一床座以ニ白龍爲守護神也

凡王子八柱同座給也

酒殿神裏書台藏界辨才天女形

大田命傳記曰神謂伊弉諾伊弉冊所生和久產巢日神兒

豐宇賀能賣神亦名姁娥亦名昇女從ニ月天降坐善釀

酒飲ニ一盃吉除萬病也其一坏之直千金財積車

送之今號ニ神酒驛家使及齋宮節會賜酒立女布

此之緣也

亦曰丹波國與謝郡比治山頂有其井其名號ニ麻那井

此所居神則竹野郡奈具神是也故豐宇賀能賣神靈石

坐也亦酒造天之噫一口大神靈器也以敬拜祭也古語

吉祥甕腹滿ニ甘露酒名號神酒獻三節祭也

丹後國風土記曰丹後國丹波郡那家西北隅方有比

治里此里古事記裏書比沼山頂有井其名云ニ麻奈井今既

成沼此井天女八人降來浴水于時有ニ老夫婦其

名曰ニ和奈佐老夫和奈佐老婦此老等至此井而竊

取ニ藏天女一人衣裳即有衣裳者皆天飛上但無

衣裳ニ女娘一人留即身隱水而獨懷愧居爰老夫謂ニ

天女曰吾無兒請天女娘汝爲兒天女答曰妾獨留

人間何敢不從請許ニ衣裳老夫曰天女娘可存欺

心天女云凡天人之志以信爲本何多疑心不

許ニ衣裳老夫答曰多疑無信率土之常故以此

類聚神祇本源卷十一

外宮別宮篇

神祇式曰多賀宮一座 豐受太神荒魂去
神宮南六十丈

祈年月次神嘗等祭供之

凡二所太神宮禰宜大小內人物忌諸別宮內人物忌
等並任 度會郡人 但伊雜宮內人二人物忌
父等任志摩國神月人

大田命傳 神曰伊吹戶主神 祓戶神 天照太神第一攝

社也依 神誨 奉 傍 止由氣宮也

神祇譜天圖曰伴神天下四方國人夫等諸事漏落事悉神

直日命大直日命聞直見直給安久平久所知食也

私記元者荒祭宮一所並坐 東方多賀宮
西方荒祭宮 此故至 于今 荒

祭宮東西遷宮違 本宮遷座例 也

御靈形事見 他卷 也神直日大直日神事見 于荒祭宮

段也

土宮 在神宮與高宮中東向座

大田命傳 神曰山田原地主大土御祖神二座大歲神子大

國魂神子宇賀之御魂神一座素盞鳥尊子土乃御祖神

一座亦衢神大田命神寶石寶形一面座是神財也

倭姬命世記曰宇賀之御魂神土乃御祖神形鏡坐寶瓶坐

二所大神宮御鎮座本紀曰素盞鳥尊孫大土祖一座衢神

大田命一座宇賀御魂大歲神一座 山田原地護神定

祝祭也

注曰 大土祖靈鏡坐 大田命靈銘石坐 宇賀魂靈

瑠璃臺坐也

豐受皇太神宮御鎮座次第 麗氣曰攝社大土祖神 亦名
五道

大神 雙五所大明神坐也
山田原地主神也 亦號鎮護神

大歲神子大國玉神子宇賀神一座大土御祖一座 御

體瑠璃壺一口 靈鏡二面華形坐云々 在 神寶 名石

一面日象扇一枚

社記曰大治三年六月五日宮號宣下爲 度會河堤守護

也長承二年仰 造宮使 被 增 作實殿畢預 祈年神

嘗月次等祭幣 神宮始祭

月讀宮 在神宮北四面堀百二十二丈四
至去瑞垣東西南北二十二丈 御靈形鏡坐

准 土宮嘉例 依 申 子細承元四年五月二十二日

被 下 依 請宣旨 被 授 宮號 丁

建曆元年 辛未 造宮使增 作神殿 准 內宮 加 作小殿

以下 同 十二月十八日奉 成 遷宮畢

以上十七箇所神國津社

未入官帳田社事鴨下社大水上兒石已
呂居鴨比古賣命形無

右神社太神宮造奉使造奉而定祝

津布良神社 大水上神兒津布良比古津布良比賣命

形無

葭原神社 大歲神兒佐々津比古命形石坐又宇賀乃

御玉御祖命形無又伊加利比女形無

小杜神社 大水上兒高水上命形石坐

許母利神社 粟嶋神御玉形無

新河神社 大水上神兒新川比賣命形石坐

宇治乃奴鬼神社 大水上神兒高水上形石坐

加奴彌社 大歲神兒稻依比女命形石坐

河相社 大水神御子兒細河水神形石坐

熊淵社 大水神御子多支大刀自形無

荒前社 國生神兒荒前比賣命形石坐

那自賣社 大水上御祖命形石坐又同御玉御裳乃須

蘇比賣命形石坐

葦立互社 宇治都比女命兒玉移良比女命形石坐

牟彌乃社 大水上兒寒河比古寒河比女命形石坐

右神社倭比賣乃御時仁祝并御刀代田宛奉也

田邊氏社 荒木田氏神社天御中主尊二十世孫天見

通命是也

內宮相殿神二座

外宮相殿神三座

延喜十一年正月二十八日官府預四度案上幣畢

類聚神祇本源內宮別宮篇

正平七壬辰二月廿日書寫畢

權禰宜度會神主實相五十
六

田邊社 稱_二太神御滄浪河神_一形鏡坐大長谷天皇御
宇定祝

蚊野社 稱_二大神御蔭河神_一形鏡座大長谷天皇御宇
定祝

湯田社 稱_二鳴震電_一又大歲御祖命形無同御宇定祝
已上六箇所社造神宮使造作奉也

大土社 稱_二國生神兒大國玉命_一次水佐々良彥命次
佐々良比賣命形石坐倭姬內親王定祝

國津御祖社 稱_二國生神兒宇治比賣命_一形石坐又村
田比賣命形無倭姬內親王御世定祝

宇治山田社 稱_二大水神兒山田姬命_一形無 同御世
定祝

津長大水社 稱_二大水上兒栖比女命_一形石座 同御
世定祝

堅田社 稱_二東方堅田社_一形石座 倭姬內親王御世
定祝

大水社 稱_二大山罪乃御祖命_一形無 倭姬內親王御
世定祝

江神社 稱_二天須婆留女命兒長口命_一形在水又大
歲御祖命形無又宇賀乃御玉倭姬內親王御世定祝

神前神社 稱_二國生神兒筑前比賣命_一形石坐同御世
定祝

粟御子社 稱_二須佐分手_一○分手一本命御玉道主命_一形
石坐 同御世定祝

河原社 稱_二月讀神御玉_一形無 同御世定祝
久具社 稱_二大水上神御子久々都比女命_一又久々都
比古命

形石坐同御世定祝
檜原社 稱_二大水上兒那良原比賣命_一形石坐 同御
世定祝

榛原社 稱_二天須婆留女命御玉_一形無奈良朝廷御代
定祝

御船社 稱_二大神御蔭河神_一形無 倭姬內親王代定
祝

坂手社 稱_二大水上兒高水上_一形石坐 倭姬內親王
御代定祝

狹田社 稱_二須麻留女神兒速川比古速川比女山末
御玉三柱_一形無 倭姬內親王御代定祝

久麻良比社 稱_二大歲神兒千依比賣命_一形石坐 同
御代定祝

瀧原社 稱_二麻奈胡神_一形石坐 同御代定祝

朝熊水神社一座寶鏡鑄造功神也
靈石坐也

件神社之寶鏡二面是則日天月天之所化白銅神鏡

依三神託倭姬命御制作也凡天照太神御入座之時

大年神大山津見山祇朝熊水神等奉饗此之所

故神社定給也

倭姬命世記曰酒殿一座天逆大刀逆鉾金鈴藏納也

大田命傳記曰神靈器座御倉神專女也

同記曰素盞烏尊子宇賀之御魂神亦專女三狐神

御戸開關神天手力男神左
栲幡千千姬命右

御門神 豐石窓神 櫛石窓神

四至神三十〇三十一
本作冊四前宮中祭之

大田命傳記曰夜叉神大將石座也

社記曰但與神祇式符合式文不付在所
此七字イニ大文字也

諸社三十座 太神宮所攝二十四座式內

朝熊社在宇治郡

鴨社前社在城田鄉山上村
前社在同所待田村

蚊野社前社在田邊鄉蚊野村

大土御祖社在楠部村

朽羅社在田邊鄉原村

津長社在宇治鄉

大國玉比賣社長寬檢錄文云
無寶殿敷地

神前社在宇治鄉下松下

久具都比賣社在城田鄉久
具村前社

榛原社在田邊鄉前社

坂手國生社在田邊鄉氏社
北岡

多伎原社在瀨村

度會宮所攝十六座者外宮別宮篇載之

儀式帳二十五所內

瀧祭神社無寶殿久麻良比社宇治山田社

堅田社

儀式帳曰雜例云朽羅社伊佐奈爾社
已上件二社雖載于延喜式不載于儀式帳也

度會郡社合四十所之中官帳社二十五所
未官帳社十五所

瀧祭社在太神宮北

小朝熊社稱神櫛玉命兒大歲兒櫻大刀自
無御殿

又苔虫神形石坐又大山罪命子朝熊水神形石坐倭

姬內親王御世定祝

藺相社稱大水上兒曾奈比々古命
形石坐倭姬命

內親王定祝

鴨社稱大水上兒石己呂和居命
形石坐倭姬內親

王定祝

是應時從機比化生出現之故號氣神吾亦根國底
國與龜備踈備來物爾相率守護神之故名鬼神吾復
爲生氣仁授與壽福之故名大田神吾能反魂
魄之故號與玉神悉皆自然之名也物皆有効驗我
將辭訖遂隱去矣

又曰與玉神言壽竟于時倭姬命皇太神座正宮之西北
角大地輪之中臺祝祭也

倭姬命世記曰瀧祭神無寶殿在下津底水神也
一名澤女神亦名美都波神

天地麗氣府錄曰天瓊矛者獨古變成也天逆戈者大梵天

王矛也天逆太刀者大梵王天矛也

件神寶藏瀧祭仙宮者也是亦號常世鄉
是龍宮也

神祇寶山記曰夫水則爲道源流萬物父母故長養森

羅萬像當知天地開闢骨水變爲天地以降高天海

原在獨化靈物其形如葦牙不知其名爾時靈

物乃中四理志出神聖化生名之曰天神亦名大梵

天王亦稱戶葉大梵天王逮于天帝代一名靈物

稱天瓊玉戈亦名金剛寶杵爲神人之財至于

地神代謂之天御量柱國御量柱因興于大日本洲

中央名爲常住慈悲心王柱此則正覺正智寶坐也

故名心柱也天地人民東西南北日月星辰山川草木

惟是天瓊玉戈乃應變不二平等妙體也法起王宣久
心柱是獨古三昧耶形金剛寶杵所謂獨一法身智劍也
故大悲德海水氣變化獨古形獨古變化栗柄一栗柄
現明王明王化八大龍神而心柱守護十二時將常
住不退是不動本尊緣也故龍神所化八咫鳥者諸天三
寶爲三前荒振神使也

亦曰此寶杵則常世宮殿內奉納俗云五百鈴河瀧祭
靈地底津寶宮是也是名龍宮城也亦號仙宮也

二所太神宮麗氣曰金剛寶柱長一丈六尺徑八寸廻二尺

四寸亦曰心柱五尺五寸或曰瀧祭神與廣瀨龍田神

則同神異名水氣神也故廣瀨龍田神名號天御柱國

御柱是天逆戈守護緣也彼神名神祇式祝詞具也云々

大田傳記曰

朝熊神社六座倭姬命崇祭
之神社是也

櫛玉命一座倭姬命御代瑞玉奉造
之亦曰櫛尻御靈石坐

穗落
保於止志神一座倭姬命御代崇祭之神社也
真名鶴所化御靈石坐也懸稅靈神

櫻大刀神二座靈花木座也大八洲櫻樹始從天上降居也
因爲華開姬命一座大山祇坐也

苔虫神一座櫻大刀神與合力大刀子小刀
子鈴類等造進之靈石坐也

大山祇一座寶鏡鑄造功神也
樓神與並坐也

彼神小朝熊山嶺社造奉祝定令坐大歲神稱是也
已上內宮六所別宮是也但加風宮七所別宮也

風宮

神祇譜天圖曰風宮一座謂志那都比古神
廣瀨龍田同神

神代上曰一書曰伊弉諾尊與伊弉冊尊共生大八
洲國然後伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薰
滿之哉乃吹撥之氣化為神號曰級長戶邊命亦曰
級長津彥命是風神也

社記正應六年三月廿日官府改社號奉授宮號預
官幣二宮同前也依異國降伏之御祈禱也

嘉元正遷宮之時被增作寶殿畢

倭姬命世記曰與玉神無神殿衛神猿
田彥大神是也

一書曰衛神孫大田命是土公
氏遠祖神五十鈴原地主神也

古語拾遺曰私云天孫御
臨降之時也先驅還白有三神居三八咫鏡即

遣從神借問其名八十萬神皆不能相見於是

天鈿女命奉勅而往乃露其胸乳抑下裳帶於臍下

而向立咲囁是時衛神問曰汝何故爲然耶天鈿女命

反問曰天孫所幸之路居之者誰也衛神對曰聞天孫

應降故奉迎相待吾名是猿田彥大神時天鈿女命復

問曰汝應先行將吾應先行耶對曰吾先啓行天鈿
女命復問曰汝應到何處將天孫應到何處耶對
曰天孫當到筑紫日向高千穗穗觸之峯吾應到
伊勢之狹長田五十鈴河上因曰發顯吾者汝也可
送吾而致之矣天鈿女命還報天孫降臨果皆如期
天鈿女命隨乞侍送焉

大田命傳記曰今歲猿田彥大神參乃言壽覺白久南大峯
有美宮處佐古久志呂宇遲之五十鈴之河上者大八
洲之內珍圖之靈地也隨翁之出現二百八萬餘歲之前
爾未現知留在靈物一利照耀如大日輪也惟小緣之
物爾不在須定主出現御座耶念木

亦曰天之逆大刀天之逆鋒大小之金鈴五十口日之小
宮之圖形文形等是也

大田傳記曰纏向珠城宮皇女倭姬命伊勢國渡遇之宇遲

乃五十鈴河上之邊立儀宮御坐之時爾狹長田之猿

田彥大神宇遲土公氏
人遠祖神齋內親王神主部天村雲命之孫大若
子弟若子命等也物

忌等天見通命之尊孫宇多大
宇爾奈大阿禮命等也訓悟白久凡天地開闢之事聖

人所述也爰伊勢天皇皇太神五十鈴乃河上爾御鎮坐

之製マテ作未露紙墨故元始綿邈其理難言志願
爾諸聞給倍吾是天下之土君也故號國底立神也吾

從御大神寶殿遷宮次奉渡于月夜見宮也于時
禰宜德雄奉遷行事宮司有範供奉

瀧原宮事

神祇式曰瀧原宮一座太神宮遙宮在伊勢與志摩境山中去太神宮西九十里瀧原並宮

一座太神宮遙宮在瀧原宮地內並宮同宮

儀式帳曰瀧原宮伊勢志摩兩國界大山中在太神宮以西相去九十二里稱天照太神遙

宮御形鏡坐

並宮

倭姬命世記曰廿五年丙辰春三月從飯野高宮遷幸

于伊蘇宮真奈胡神爾國名何間給支大河乃瀧原乃國

止白支其所乎宇太之太字禰奈乎爲天荒草令刈掃天

宮造令坐支此地波皇太神之欲給地爾波不有悟給支其

時自大河南道宮所覓爾幸行

倭姬命世記曰瀧原宮一座靈御形鏡坐水戶神名速秋津日子神是也

大田傳記曰伊弉諾伊弉冊尊所生河神名水戶神

倭姬世記曰並宮一座靈形鏡坐速秋津日子神妹速秋津比賣神此二神因河海持別而生神八柱

神寶日出祕府曰瀧原神鏡倭姬命御宇龍奉獻寶鏡坐猿田彥所生乃靈石爲正妹也三尊坐也

是龍神應變也朱注曰白龍上石是也云々

伊雜宮事

神祇式曰伊雜宮一座太神宮遙宮在志摩國答志郡去太神宮南八十三里右諸別宮祈

年月光神嘗等祭供之就中瀧原並宮伊雜宮不預
月次其宮別宮各內人二人其一人用八位已上并陵子孫內人一人物忌父各
一人但月讀宮加御巫內人一人御形鏡坐

儀式帳曰伊雜宮在志摩國答志郡伊雜村太神宮相去八十三里稱天照太神遙

宮一座國津神子御形石坐

倭姬命世記曰伊雜宮一座天牟羅雲命裔天日別命子玉柱屋姬命是也御形鏡坐大歲神

同世記曰廿七年戊午秋九月鳥鳴聲高聞且晝夜不止

囂此異止宣豆大幡主命舍人紀麻良止差使遣令見

彼鳥鳴處罷行見波嶋國伊雜方上葦原中在稻一基

生本波一基爾爲豆末千穗茂也彼稻白真名鶴咋持廻

乍鳴支此見顯其鳥鳴聲止支返事申支爾時倭姬命宜久

恐志事不問奴鳥須良田作皇太神奉物乎止詔且物忌

始給豆彼稻伊佐波登美神乎爲豆拔穗爾令拔且皇太

神御前懸人眞爾懸奉始支則其稻大幡主女子乙姬爾

清酒令作御饌奉始支千稅奉始事因茲也彼稻生地

千田號支在島國伊雜方上其所伊佐波登美之神宮

造奉皇太神爲攝宮伊雜宮此也彼鶴眞鳥乎號稱

大歲神同所祝定奉也

又其神皇太神之坐朝熊河後之葦原中石志豆坐

伊弉奈岐宮事

神祇式曰伊弉奈岐宮二座

去太神宮三里中村郷在

伊弉諾尊一座伊

弉冊尊一座

倭姬命世記曰伊弉諾尊靈御形鏡坐左方

伊弉冊尊靈御形鏡坐右方

社記曰伊佐奈岐宮二座

去本宮北三里

伊弉諾尊一座伊弉冊尊

一座貞觀九年八月丁亥朔二日戊辰勅伊勢國伊佐奈岐神伊佐奈彌神改社稱宮預月次祭并置內人

一員貞觀十年造替遷宮仁壽二年八月廿八日依洪水神殿流損同十月一日任官司伊度人注申造立彼宮

齊衡二年九月廿日奉遷伊佐奈岐宮月讀宮同前

云々凡月夜見伊佐奈岐兩社正殿顛倒之間色々御裝束種々御神寶重々御垣御門鳥居雜舍等皆悉流失已

畢仍宮司伊度人本宮禰宜相共急造假殿奉鎮兩宮御體一畢

兩宮御體奉戴事神主私兩氏內人供奉之例也而私

氏內人依不參會以大內人神主正見所令奉

頂御體也仍私氏內人蒙不忠之咎永被罷職

掌一畢

月讀宮事

神祇式曰月讀宮二座

去太神宮北三里

月夜見命一座荒御魂命一座

倭姬命世記曰月夜見命二座

形馬乘男形也

一書曰御形白馬乘男形紫御裝束金作太刀佩也

荒御魂命

左方形鏡坐飛鳥宮御宇丙寅十一月十一日遷魚見神社也

太神宮禰宜最世社記曰月讀宮一座荒御魂命一座

寶龜三年八月甲寅幸難波內親王第是日異常風雨

拔樹發屋也卜之伊勢月讀神爲祟於是每年九

月准荒祭神奉馬亦荒御玉命伊佐奈岐命伊佐奈

彌命入於宮社

貞觀九年八月丁亥改社號稱宮預月次祭并置

內人一員同十年廿年一度造替遷宮次被增作寶

殿奉遷於神靈也卷向宮御代豐玉姬命承神託

而刻木馬顯天童形奉獻太神財是也

各一匹左右坐

飛鳥宮御代丙寅歲十一月十一日月讀命亦荒御魂命

靈奉遷于魚見社是神託也云々

荒魂命靈元是鏡坐依神宣奉遷魚見社以後宮

號之時以木馬爲神靈者也月夜見命靈豐玉姬命

所作木馬天童荒魂命靈豐玉姬命所作木馬座也

類聚神祇本源卷十

內宮別宮篇

荒祭宮事

神祇式曰荒祭宮一座

太神荒魂去太神宮北二十四丈
祈年月次神衣等祭供之

儀式帳曰荒祭宮稱太神荒御魂鏡形鏡坐

舊事本紀曰伊弉諾尊日向橘小戸櫛原祓除時所成神

名八十枉津日神次大禍津日神後直其禍所成

神名神直日神次大直日神

日本書紀曰伊弉諾尊滌去吾身之濁穢則往至筑紫日

向小戸橘櫛原祓除時所成神號曰八十枉津日神

次將矯其枉而生神號曰神直日神次大直日神

倭姬命世記曰荒祭宮一座

皇太神荒魂

伊弉那岐神所生神名

八十禍津日神御性形鏡坐

舊事本紀曰伊弉諾尊滌去其身之時所生神三柱洗

左御目一時所生之神名天照太御神洗右御眼一所

生之神名月讀命並坐五十鈴河上謂伊勢濟太

神素戔嗚尊事畧之

日本書紀曰然後洗左目因以生神號天照太神洗右眼因以生神號曰月讀尊

大田命傳神記曰荒祭宮一座皇太神荒御魂神也

伊弉諾尊到筑紫日向小戸橘櫛之原而祓除之時

洗左目因以生日天子大日靈貴也天下化生名

曰天照太神荒魂荒祭宮也

多賀宮一座

止由氣太神荒御魂也

伊弉諾尊到筑紫日向小戸之

橘櫛原而祓除時洗右眼因以生月天子天御中

主靈貴也天下化而名止由氣皇太神之荒魂多賀宮

是也

阿波良波命傳神記曰荒祭宮一座

天照大日靈貴荒魂靈御形鏡坐

伊弉諾

尊洗左目因以生號曰天照荒魂亦名瀬織比咩神

今案橘小戸祓除之時洗左目以所生神稱荒祭宮

濯右眼以所生神稱多賀宮之條分明也荒祭宮者

八十枉津日神大禍津日神多賀宮者神直日神大直日

神也

天照皇太神五十鈴河上御鎮坐之時荒祭宮多賀宮

爲攝社同時御鎮坐也依之以洗左御目一時所生

神濯右御眼所生神並坐五十鈴河上之由舊事本

紀載之歟不可成疑惑者哉

群靈心識正覺正智金剛坐也亦名心蓮也

亦曰凡八百萬神下座南閻浮提釋迦尊爲父爲母爲
君爲臣生々世々無不從之世人無孝順心犯輕
垢罪墮地獄故曰神盧舍那佛等說大乘心地而已
慙惑守心祕要右筆記之耳于時己卯沙門行基奉

勅撰鈔之一

天平十一年己卯伊勢太神宮政印一面始鑄造之瑞柏

一百枚奉_レ上_二所太神宮_一矣

天地麗氣府錄曰夫心柱者元初皇帝御靈也興于阿字
心地_一上_二鑲字正覺_一定惠不二一心不亂常住不_レ去不

來妙法坐伊弉諾伊弉冊二尊天降其嶋則化_二豎八尋

殿共住同宮_一矣號曰大日本日高見國_{大日本者三}亦

曰此杵者我身三昧形故二所皇太神宮者以_二伐折羅_一爲

宗伐折羅者獨貼々々者心肝玉玉者神々者正覺理也

理者法界一如々々者真正覺々々々者心柱々々者心王

々々者大日々々今兩宮是也

神者心御柱柱則衆生成佛因緣法界緣起是也伐折羅卽

是金剛杵陀羅執持義也

所顯露來也稱獨古是形也故名號心御柱即是三千界大惣相妙體也所謂心性不生不滅一切諸法唯是一心故現心相一名神至也

心王大日遍照尊也心數恒沙諸佛如來常住妙法心蓮

臺還我頂禮心諸佛迷八識衆生也悟五智五佛也

天八坂瓊曲玉者皇天之心珠覺王之寶珠也天瓊戈者

亦名天逆戈天神降靈之本致也

大日覺王之獨胎變成也所謂獨古者一切

諸法果德一切諸法之父母也故法界率都婆是五輪之妙

體也依ること此五字者大空無相智性也出外用方便

之理門度隨類萬差之化變不可得妙也

大和寶山記曰夫水則爲道源流萬物父母故長養森

羅萬像當知天地開闢嘗水變爲天地以降高天海原

在獨化靈物其形如葦牙不知其名當時靈物乃

中四理志出神聖化生名之曰天神亦曰大梵天王

亦稱戶葉大梵天王逮于天帝代一名靈物稱天瓊

玉戈亦名金剛寶杵爲神人之財至于地神代謂

之天御量柱國御量柱因興于大日本洲中央一名爲

常住慈悲心王柱此則正覺正智寶坐也故名心柱也

天地人民東西南北日月星辰山川艸木惟是天瓊玉戈乃

應變不二平等妙體也法起王宣久心柱是獨古三昧耶形

金剛寶杵所謂獨一法身智劍也故大悲德海水氣變化獨古形獨古變化栗柄々々現明王明王化八大龍神而心柱守護十二時將常住不退是不動本尊緣也故龍神所化八咫鳥者諸天三寶爲三前荒振神使也

亦云以昔日子伊弉諾尊月子伊弉册尊從皇天勅宣久

受天瓊玉戈立山跡中央爲國家心柱造八尋

殿

神祇掌是也

二柱神捧持真經津鏡一化生日神月神以

來治天下以無相鏡崇神象磯城嚴樞之本祠之

名金剛峯亦日神所化之故稱大日本高見國也天帝

耀慧日除癡闇象清淨心爲世福田不假權

教唯樂正道之故號大葦原千五百秋瑞穗中國矣

故聖曰智柱立留瑞穗安國此常住不二心柱義也々々法

起菩薩曰大千世界常住一心

亦曰獨古變形神術

此寶符則常世宮殿內奉納俗云五百鈴川龍祭靈地底津宮是也是名龍宮城也亦號仙宮

也神語神寶形大八洲入法性海中用天瓊玉戈而

降伏從前妄想到穩密清淨本地故一心不亂萬法

無咎只切忌不淨猛利人耶夫天瓊玉戈亦天逆矛亦魔

返戈亦名金剛寶劍亦名天御量柱國御量柱亦名常住心

柱亦名忌柱也

惟是天地開闢之圖形天御中主神寶獨胎變形神佛神通

類聚神祇本源卷九

心御柱篇

豐受皇太神御鎮座本紀曰

心御柱

一名天御柱亦名曰忌柱亦天御量柱

謂應天四德地五行徑四寸長五尺御柱坐以五色
繩奉纏之以三重櫛奉飭之是則伊弉諾伊弉册
尊鎮府陰陽變通之本基諸神化生之心臺也都合天
心而與木德歸皇化而助國家故皇帝之曆數天
下之固常磐堅磐無動三十六禽十二神王八大龍神
常住守護坐依損失有天下危
天口事書曰八坂瓊戈形

天地開闢初浮高天海原神寶是也神語破者古語云
天逆梓天逆大刀俗云天乃魔返之梓亦名天乃登保
言此名天璽也

天御量柱者天瓊戈異名同體坐也以一基分天地
而爲內外心御柱也故大人者與天地合其德而
利万物者也

太宗祕府曰夫天瓊玉戈亦名天逆矛亦名金剛寶劍
亦名天御量柱亦心御柱也惟是天地開闢之圖形
天御中主神寶獨胎變形座也

諸佛菩薩一切群靈心識之根本一切國王之父母也心御
柱咒字明々上則金星慧星輪星鬼星火星水星風星南斗
北斗五鎮大星一切國王三星三公星百官星如_レ是謂星名
應坐變成形勝與義是也

亦名白水堅魚木也爲正

形文深釋云心御柱者天瓊戈表物也獨古形三部五部一
體不二妙體萬法所生心體也故本覺常住之心蓮臺之
上觀一大三千界妙理也惣八葉蓮華上有日輪是蓮花
理也理則智也智則大圓鏡智平等性智妙觀察智成所作
智柱者獨一法身妙體一切衆生根源也居磐石而盟者
示長遠之不祥者也是不動之所表也故所現八大龍
王十二神王常住守護坐也

亦曰心御柱者一氣始一心妙法萬化種子也

仙宮祕文曰吾聞以代承皇天天御中主詔命天皇孫尊
天降居之時平鬼神治天下靈異物有三百六十種
之神寶所謂天之八坂瓊曲玉戈玉裳比禮天衣白銅鏡
神劍類是三百六十種之中用以天瓊玉戈爲最長而
立國御量柱也惟是初禪梵王應化之種法界體性智

御形文圖五行中火輪卽獨貼形坐也豐受皇太神則金剛
界天髻茶羅御形文圖五行中水輪五智位故有五月輪
也

天皇御宇大和姬皇女承_二皇天嚴命_一移_二大梵王宮_一而造
伊勢內外兩宮焉顯_二御形於棟梁之上_一而示_二本妙_一與_二
心柱於金剛座_一而治_二國家_一焉

寶基本紀曰皇太神宮者日天圖形六合之心體獨存任_二
天真_一故明白也五行中火性五色中白色故以_二白銅_一奉
飾之

豐受宮者月天形八州之中平等圓滿之心體緣五行中水
性五色中赤色故以_二金銅_一奉_二飭_一之

黃金種智
圓明義也

類聚神祇本源卷八

形文篇

寶基御靈形文圖曰大和姬皇女承_二皇天嚴命_一移_二高天原之梵宮_一而造_二神風伊勢內外兩宮社_一顯_二御形於棟梁_一用作_二生化之龜鏡_一興_二心柱於金石_一以治_二國家之福壽_一天神地祇頓首再拜天下幸甚

五十鈴宮御靈形者天瓊玉杵象表也是天地初發萬象根本也所謂玉卷須賀利大刀子小刀子此其緣形也惟能摧_二破諸災患_一而神心不_レ亂三神一體靈智神財是也故亦名稱_二金剛正杵_一亦名_二天逆戈逆太刀_一也白銅鏡八面者大八州靈神居座也部類三十二神居也

山田原宮御靈形者五位圓形座也是則五常圓滿智光表理也一輪中含_二萬象_一五常百行悉皆一圓常住應化元神座也金鏡十四面座部類神五十二座

伊勢兩宮忝現_二美麗之威儀_一顯_二御形之珍圖_一給是大元之靈明也是稟氣之靈大智也蓋百千尊號天津御量之功名也故

聖神曰內外不二常一體天神地神皆一露矣天口事書曰凡經緯法者君臣上下天地父母大宗形表也於_レ是現_二大傳珍圖_一以通_二明神之德_一以照_二萬物之情_一乃成_レ之神近_レ悟諸不_レ遠也

天照珍圖者心神華臺之中天地八尊圓鏡坐豐受珍圖者天地父母二儀之中五大尊光照金鏡坐俗常以_二金鏡_一喻_二明道_一也

天神皇珍圖狀者天之位象_二四時之行_一治_二天下_一四時之行有_レ寒有_レ暑聖人之法故有_レ文有_レ武天地之位有_レ前有_レ後有_レ左有_レ右聖人之法以建_二經緯_一春生_二於左_一秋殺_二於右_一夏表_二於前_一冬藏_二於後_一生長之事文也收藏之事武也故文事在_レ左武事在_レ右

豐受太神御鎮座本紀曰

寶宮棟梁天表御形文

天照太神宮御形象_二日天尊位_一坐也

止由氣太神宮御形象_二月天尊位_一坐也

唯天神地祇明元_二八州利_一物形體故皇天久坐而配_二日月_一照_二宇內之昏衢_一國家合_二天地_一而寶曆長久天真之

明道鬼神之變通人民式以幸甚々々

瑞柏鎮守仙宮祕文曰天照坐皇太神則胎藏界地曼荼羅

亦內十牀廿天外九牀六十二天也五風表德勝相應義亦正殿板敷下內宮者八輻金輪外宮者羯磨轉輪是一葉一世界表德

亦御殿皆一面扉開高欄梓木正直事

正殿正理表義也

扉開亦越十八界空表成菩提義

亦一方一面扉開四方建門東西日月行途南北南斗

北斗涉入

亦廿年遷宮東西宮造兩部甲乙曼陀羅牙岳表示也

寶基本紀曰千木者智義也搏風也義者則仁也如天智

則靈也如神風者氣也夫天地之間非風則不行不動

故神聖乘風雲而往行冷然善乍有風竅是則虛空之

中無聲而獨能聞知焉無形之中能露心矣實有之所

歸衆之所集至德一大道之竅也

千木片揆者水火之起天地之象也故則曰天之智義也片

揆者仰天以天開口久斯受三月天之一水利萬品緣也

任水德豐受皇太神乎波號御氣都神也向上天神開口也向地下地神合

也是陰陽化德也

堅魚木者衆星形也奄守天下比於列星也人氣昇

天爲星善氣則爲善星惡氣則爲客星能善元客非

惡起也

鞭懸者天神地祇之風光衆人之壽命國之權衡民之轡策

者也故式爲名矣

御門鳥居八洲中四方中以西方爲智門也故以西方

一號鳥住也大智清淨心緣也謂陰陽之始乃遂於

大明之上出入於窈冥之門而君臣上下令道遙清

淨之宮殿焉

瑞垣玉垣荒垣者天四德地五行萬象大位五官皆備矣惣

而天地與人形人體與寶舍雖異其名而其源一

也

天地麗氣府錄曰令開敷八葉蓮華故大空無相月輪座

其中有實相眞如日輪是爲如々安樂地亦名花藏

世界密嚴淨土是名大光明心殿亦名法性心殿亦名

伊勢二所兩宮正殿也自性大三昧形大梵宮殿表也

類聚神祇本源卷七

寶基篇

日本書紀曰神代上素戔鳴尊曰韓鄉之嶋是有金銀若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也乃拔鬚髯散之卽成杉又拔散胸毛是成檜尻毛是成桧眉毛成檣樟已而定其當用乃稱之曰杉及檣樟此兩樹者可爲浮寶檣可爲瑞宮之材桧可爲顯見蒼生與津棄戶將臥之具夫須噉八十木種皆能播生日本書紀曰神代下高皇產靈尊乃遣二神勅大己貴神曰今者聞汝所言深有其理故更條々而勅之夫汝所治顯露之事宜是吾孫治之汝則可以治神事又汝應住天日隅宮者今當供造卽以千尋栲繩結爲百八十紐其造宮之制者柱則高太板則廣厚倭姬命世記曰爰皇神託宣久其造宮之制者柱則高太板則高厚禮是皇天之昌運國家之洪啓古止宜助神器之大造奈利卽承皇天之嚴命天移日小宮之寶基造伊勢兩宮焉

府錄亦曰造宮義則大梵天女大和姬命承皇天之教移飛宮天寶基而與神籬於神風伊勢五十鈴原矣天照皇太神鎮座麗氣曰

內鳥居金剛時春天金剛時雨天外鳥居金剛時秋天金剛時冬天

內者授祕密灑水神表沐浴懺悔也

外者解捨祓神除穢惡不淨也

天口事書曰二所太神宮在右東西寶殿前後不同儀內宮者陰神外宮陽神坐也是春夏象陽長萬物於前秋冬象陰藏萬物於後所謂天地之位聖人之法在前在後象四時治天下以事理此其儀式也

千木片揆者陰陽之表也

堅魚木者星象坐其數十者大日靈尊照十方撰也九者五大成身尊光濟八洲郡生光明表也八者八心德明表也七者七星頂坐守護願也六者六根明也五者中府五魂齊也四者四德表三者天地人三才表也一說云十者十地之位表也九者極上之位表也天四德地五行爲九也九者五方羅九州因九之故爲九々八十一數極也

兩宮形文深釋曰智義者五智成道開白阿字本覺理也亦鑲門生身振舞卽證大覺位智

亦鯉木者陰陽重如月輪十八界々々

(井上翁祇本奥書)

正平八年癸巳正月十一日

於繼橋郷吹上村書寫畢

于時寛文十二年壬子四月廿九日書寫之

數返令校合畢 權神主度會

類聚神祇本源

嚴香來雷水戸神嚴罔象女薪神嚴山雷一而御飯炊滿供

奉今號御炊物忌父子其緣也春女炊女是也

亦度相河邊有二人漁人名號天忍海人今謂之掃守氏取年

魚蓄神膳食一矣

天照皇太神重託宣久吾祭奉仕之時先須祭止由氣

皇太神宮也然後我宮祭事可勤仕也故則諸祭事以

止由氣宮爲先也

亦止由氣太神一處御鎮坐乃今卜筮事天皇勅曰宜本

已宗神之績以高皇產靈神苗裔大佐々命兼行二所

皇太神之大神主職奉仕矣

神寶日出祕府曰古語曰天戸開義八百萬神等顯清淨

妙音歟解太神乃怒爾時人長者猿女君祖天鈿女命

也依高貴尊勅命負沖天氣宇即時八百萬神等集會

坐故手持物名之沖也古語婆娑羅沖者道法也故沖中也匿

名藏譽其用在中也表空圓象也御笛神天細女命大祖善龍王

探天香山金竹其空節間雕風孔融通和氣抗安樂

聲一矣天籟地籟人籟三才三籟德用一氣始也名笛也御歌神本聲曲天兒屋根命未

音曲太玉命金玉聲各明也御琴神金鵝命長白羽命用

天香弓六張叩絃供五音即高幡上金鵝居因以象也

故名之之鵝琴也今世名和琴是也亦號倭琴八百萬神等或

歌詠或遊舞故名之神樂也次天孫杵獨王日向宮天

基之治馭天天位乃日宴樂如天上乃儀也人長神天鈿

女命御笛神善龍王分身大己貴命御歌神天兒屋命太玉

命御琴神鵝命裔孫長白羽命也大宮賣命大來目命等

歌舞天上緣也亦金色靈鵝飛來止于弓弭其鵝睨狀

如流電由是作其尾形也乃有手置大小及音聲巨

細妙音古之遺式乃天表也亦今世號鳥名子則金鵝

長鳴緣也金鵝者无名鳥明一道化鳥也故亦名天鳥也

倭姬命世記曰爰皇神託宣久其造宮之制者柱則高太

板則廣厚禮是皇天之昌運國家之洪啓古止波宜助神器

之大造奈利即承皇天之嚴命天移日小宮之寶基

造伊勢兩宮焉

麗氣記曰山田原造宮之間沼木高河原離宮木丸殿御座

天衆降居奏妙音樂

與佐宮御出時地主明神詠曰

奈具身爾奈具我宮伊豆間今波照出御明給

一說云安賀奴美爾阿賀奴小宮乎伊豆流萬爾今者外爾

出々照覽悟也

亦山田原迎接時天照太神拍手忍手御詠曰增鏡雲位合

御覽尊千代千年重重重

戊午秋九月望從_二離宮_一遷_二幸山田原之新殿_一奉_レ鎮_二御船代御槌代之內_一以_二天衣_一奉_レ飭之如_二日小宮儀也_一

注云槌代則天之小宮之日座儀也故謂_二天御蔭日御薩登隱坐_一祝言緣也船代則謂_二天材木屋船之靈_一故

瑞舍名號_二屋船_一緣也天御翳日御翳隱坐古語也

中臣祖大食津臣命稱辭竟神善奉_二祝詞_一言_二佐度遇乃山

田乃原乃下都盤根爾大宮柱廣敷立_二高天原爾千木高知

皇御麻乃命乃稱辭定奉_二天照坐須止由居乃皇太神乃

廣前爾恐美_二恐美_一申給_二波久_一天照皇太神神魯岐神魯美命

爾言寄任天天之小宮之寶殿於此靈處爾奉_二移造_一利以_二

今日_一奉_二移鎮_一利御坐須狀於平久安久令_二知食_一度申給登

言壽鎮居白久宮人皆參終夜宴樂

猿女祖天鈿女裔歌女舞姬來目命裔屯倉小男童笛生琴

生簫生篳篥諸命等一時起歌舞其絲竹音鏗鏘而滿_二六

合_一天神地祇受_二和氣_一而隨_二實用_一天上榮樂海內太平

焉

凡神樂起在昔素盞鳴神奉_二爲日神_一行甚無狀種々陵侮

于_レ時天照太神赫怒入_二天石窟閑_一磐戶而幽居焉爾乃

六合常闇晝夜不分群神愁迷手足罔厝凡厥庶事燈_二燭

而式辨天御中主神止_二由氣皇_一太神是也太子高皇產靈神命宣_二天會_一八

十萬神於天八湍河原_二雲淡_一是也深思遠慮於_二天石窟戶前_一舉_二

庭火_一畢作_二俳優_一猿女君祖天鈿女命探_二天香山竹_一其

節間雕_二風孔通和氣_一類是也亦天香弓興並叩_二絃_一今

其緣也_二木木合合而備_一安樂之聲_二移_一和風_二顯_一八音_一

卽猿女神伸手抗聲或歌或舞顯_二清淨之妙音_一供_二神樂

曲調當_二此時歛解_一神怒妖氣既明无_二復有_一風塵以來

風雨時若日月全_レ度_二一陰一陽萬物之始也_一一音一聲萬

聲之基也神道之奧顧天地之靈粹絲竹之要八音之曲已

以爲_二貴故依_一舊氏之權_二猿女氏奉_一來目命孫屯倉男

女_一轉_二神代之遺迹_一而今供_二三節祭_一永爲_二後例_一也天

皇倭姬命詔宣久男弓弭之物大刀小刀弓矢楯梓鹿皮角

猪皮忌鍬忌鋤類是女手末之物麻桶綿柱天機具荒妙衣

和妙衣荷前御調類是都_二合天地生長之士毛_一式備_二宗

廟之祭_一惟仁恩之忠孝以_レ信爲_二德故神明饗_一德與_二信

不求_二備物_一焉仍檢_二納神寶_一卜_二兵器_一爲_二神財_一亦更

定_二神地神戶_一二所太神宮乃朝大御氣夕大御氣乎日別爾

齋敬供奉亦隨_二天神之訓_一以_二土師氏_一爲_二物忌職_一造_二

天平瓮諸土器類_一天供進

亦開化天皇孫子丹波道主貴苗裔八小童女寶殿御輪賜

天奉_二開_一寶殿亦素盞鳴尊子冰沼道主率_二御竈神火神

土神各一座
廣敷立天高天原爾千木高知豆鎮理定理座止稱

辭竟奉支亦檢納神寶卜兵器爲神幣矣更定神

地神戶二所皇太神宮乃朝大御氣夕大御氣平日別爾齋

敬供進之亦隨天神之訓以土師之物忌造平瓮平

丹波道主命今物忌職奉仕御飯炊供進之

皇太神重託宣吾祭奉仕之時先須祭止由氣太神宮

也然後我宮祭事可勤仕也故則諸祭事以止由氣宮

爲先也

御鎮座本紀曰泊瀬朝倉宮御宇天皇廿一年丁巳十月朔

倭姬命夢教覺給久皇太神吾如天之小宮座爾天下

一所耳坐波御饌毛安不聞丹波國與佐之小見比沼之

魚井之原坐道主子八乎止女乃奉齋御饌都神

註曰是止由氣太神者水氣元神坐千變萬化受一水

之德一生續命之術故名御饌都神也亦古語水道

曰御饌都神也亦天照太神與止由氣太神一所雙

御座之時陪從諸神等奉御饗其緣也

止由氣皇太神乎我坐國欲度誨覺給爾時大若子命乎

一名大幡主命御間神社是也差使皇朝廷爾御夢之狀乎令言給支即天皇

祥御夢則天皇今日相夢矣汝大若子使罷往天布理奉

宣支今歲物部八十氏之人等率手置帆負彥狹知二神

之裔以齋斧齋鉏等始採山材天隨神教一度相山

田原乃地形廣大亦麗於是地大田命以金石天下津

底根爾敷立天構立寶殿互

明年戊午秋七月七日以大佐々命奉布理留共從神

中臣祖大御食津命座度相郡小和志理命事代命佐部支

命御倉命屋和古命野古命乙乃古命河上命建御倉命與

魂命各前後左右爾相副從奉仕大佐々命小和志理命

奉戴正體與魂命道主貴奉戴相殿神駟仙躍比錦蓋

覆日繩曳天御翳日御翳屏奉行幸爾時若雷神天之八

重雲乎四方爾薄靡天爲御垣天從但波國吉佐宮遷

幸倭國宇太乃宮御一宿坐

次伊賀國穴穗宮御二宿坐于時朝夕御饌箕造竹原并

箕藤黑葛生所三百六十町亦年魚取淵梁作瀬一處亦御

栗栖三町國造等貢進仍二所皇太神之朝大御氣夕大御

氣之料所爾定給支

次伊勢國鈴鹿神戶御一宿

次山邊行宮御一宿今號壹志郡新家村是也

次遷幸渡相沼木平尾興子行宮天三箇月坐焉號

今處天名離宮也夜々天人降臨而供神樂今世號豐

明其緣也來自命裔屯倉神男女小男童神宴焉

以白銅寶鏡^二豆道主貴八小男童天日別命崇祭奉焉

上代本紀曰御間城入彥五十瓊殖天皇卅九歲壬戌天照

太神遷^二幸但波乃吉佐宮^一

今歲止由氣之皇太神結^二幽契^一天降居大御食津臣命速

御食命^{中臣}屋船命^{草木靈今爲度相郡}宇賀之御魂稻女神^今

小保神^{座清野井庭神社也}宇須乃女命^{五穀靈子字}須摩留賣命^{今號須麻留}宇賀

乃大土御祖神^{素盞烏尊子也度}若雷神^{今世號北御門}彥國見

賀岐建與來命^{號度相國}天日起命^{伊勢太神}振魂命^{玉串大內}

相從以戾止矣爾時天照皇太神與^{止由氣皇太神}合

明齊德居焉如^{天上之儀}一處雙座焉和久產巢日賣

神子豐宇可能賣命^{屋船稻生}五穀^{而善}釀酒^奉御

饗^{御炊神}永沼道主^{素盞烏尊孫也名栗御子}率^{四九三十}

六竈神而朝大御氣夕大御氣於炊備天奉^{御饗留丹波道}

主貴^{大日々天皇之子彥座王子}爲^{御杖代}志品物備^{貯之百}

机^{而奉}神嘗^{焉諸神所}作祭^{神之物五穀既成百姓}

饒矣其功已辭竟^{天照太神伊勢國爾}向幸給止由氣太

神復昇^{高天原}天日之小宮座于^{時以}吾天津水影乃

寶鏡^留居吉佐宮^給

註云天地開闢之降雖^{萬物已備}而莫^照於混沌之

元^因茲萬物之化若^{存若亡而下々來々自不}尊于

時國常立尊所化神況^{形於天津水影}以^{天御量}
事^{真經津寶鏡二面鑄表寔是自然之靈物天地感應}
當^{此時}神明之道明而天文地理以^{自存者也故鏡}
作神名號^{天鏡神}其緣也

即起^{樹天津神離於魚井原}祕^{藏黃金極代}天道主貴
八小童天日起命豐宇賀能賣命備^{御饗}奉^{齋焉于}時
高貴太神勅宣以^{皇孫命靈}宜^崇大祖止由氣皇太神
乃前社^{云々仍爲}相殿神^{一座}

註云靈形鏡坐也皇孫命金鏡也

神記曰泊瀨朝倉宮御宇天皇廿一年丁丑冬十月一日倭
姬命夢教覺給久皇太神吾如^天之小宮坐^{仁天下}仁志^一

所雙坐爪御饗毛安不^{聞爪}丹波國與佐之小見比沼之魚

井之原坐道主子八乎止女乃齋奉御饗都神止由氣皇太

神乎我坐國欲度誨覺給^{支爾時}大若子^使罷往^{天布}

御夢之狀^乎令^{言給}支即天皇勅^{大若子}使^{罷往}天布

理奉宣^{支故率}手置帆負彥狹知^{二神之裔}以^{齋斧齋}

鉏等^{始採}山材^一構^{立寶殿}豆明年戊午秋七月七日

以^{大佐佐命}弟乙若子命子爾佐布命子^從丹波國余佐那魚

井原^之豆奉^迎止由氣皇太神^{一度遇之}山田原乃下都磐

根^{如五十鈴宮地}大宮柱^號亦名^{御量柱}亦曰^{心御柱}是
太田命奉^{數之}大宮柱^{則皇帝之命國家之固神明之德也故龍神}

類聚神祇本源卷六

外宮遷座篇

麗氣記曰聖受皇太神于時大日本國天降淡路三上嶽_巒三十二大眷屬從_二庚申年_一送_二春秋_一止五十五

萬五千五百五十五年

亦曰

天潛尾命

水潛尾命

地潛尾命

木潛尾命

火潛尾命

土潛尾命

石潛尾命

金潛尾命

天日尾命

天月尾命

天子尾命

地子尾命

天破塔命

天破法命

天破仁命

天破神命

國加利命

國加富命

國加國命

國加賀命

愛髮尾命

愛護尾命

解法尾命

學耳尾命

上法神尊

下法神尊

中言神尊

天鏡神尊

地鏡神尊

百百神尊

千千神尊

萬萬神尊

已上三十二神也

遷_二布倉宮_一自_二丙申_一送_二年月_一五十六萬六千六百六十六年

八輪島宮遷戊申年積年五十七萬七千七百七十七年

八國嶽遷庚申歲五十八萬八千八百八十八年

丹波乃國與謝之郡比沼山頂麻井原遷壬申歲五十九萬

九千九百九十九年

與佐宮遷庚申六十一萬千八百十年

私勘已上六箇所御遷坐都廬二百九十萬六千七百七季

歟

神記曰御間城入彥五十瓊殖天皇卅九歲壬戌天照太神

遷幸但波乃吉佐宮積四年奉_レ齋

今歲止由氣之皇神天降坐_二天合_一明齊_レ德給如_二天小宮_一之

義_志一處雙座須于_レ時和久產巢日神子豐宇氣姬命_{稻靈神也}

奉_レ備_二御神酒_一

注云今世謂丹後國竹野郡奈具社座豐宇賀能賣神是

也亦元是天昇女姁娥謂從_二日天之紫微宮_一天降坐天

女是也

亦丹波道主貴_{素戔嗚尊孫粟御子神是也}奉_レ備朝大御饗夕大御氣奉

仕矣其功已辭竟天止由氣太神復上_二高天原_一此處_{仁志}

爾時天皇聞食豆即大鹿島命祭官定給支大幡主命神
國造兼大神主定賜支神館造立物部八十友諸人等
雜神事取心捧天太玉串供奉因興齋宮于宇治縣五
十鈴河上大宮際令倭姬命居焉即建八尋機屋
令天棚機姬神孫八千千姬命令織太神御衣一
猶在天下之儀焉

類聚神祇本源

(井上翁藏本奥書)

正平八年癸巳正月六日書寫畢

校點了

并其子大歲神子櫻大刀自命山神大山罪命子朝熊
 水神等五十鈴川後江爾天奉御饗支于時猿田彥神
 裔宇治土公祖大田命參相支汝國名何問給爾佐古久
 志呂宇遲之國止白豆御止代神田進支倭姬命問給久
 有吉宮處哉答白久佐古久志呂宇遲之五十鈴之河
 上者是大日本國之中爾殊勝靈地待奈利其中翁卅八
 萬歲之間仁毛未視知留有靈物照耀如日月奈利
 惟少緣之物不_{オホロケ}在志定主出現御座爾時可進止念比
 且彼處爾禮祭止申勢利即彼處仁往到給天御覽_{介禮}惟昔
 天神誓願給比天豐葦原瑞穗國之內仁伊勢加佐波夜
 之國波有美宮處利止見定給比從天上志天投降坐
 比志天之逆太刀逆鉾金鈴等是也甚喜於懷比豆言上
 給比支

神記曰天之逆太刀天逆鉾大小之金鈴五十口日之小
 宮之圖形文形等是也

廿六年丁巳冬十月甲子奉遷于天照太神於度遇五十鈴
 川上留今年倭姬命詔大幡主命物部八十友緒人
 等五十鈴原乃荒草木根荊掃比大石小石造平互遠山
 近山乃大峽小峽爾立並木平齋部之齋斧乎以天伐採
 天本末乎波山祇爾奉祭豆中間乎持出來天齋鉏乎以天

齋柱立一名天御柱高天原爾千木高知利下都磐根爾大
 宮柱廣敷立天天照太神并荒魂宮和魂宮止奉鎮坐
 于時美船神朝熊水神等御船仁乘奉利天五十鈴之河
 上仁遷幸于時河際_{仁志}倭姬命御裳裔計加禮侍介留
 於洗給倍利從其以降號御裳須曾河也采女忍比賣
 造天平賀八十枚令天富命孫作神寶鏡大刀小刀
 矛楯弓箭木綿等備神寶大幣上矣
 爾時皇太神倭姬命乃御夢喻給久我高天原爾坐踞戶
 押張原如見々志真伎志國宮處波是也鎮理定理給止覺
 給支于時倭姬命並御送驛使安部武渟河別命和珥
 彥國薨命中臣國摩大鹿島命物部十千根命天伴武日
 命并度會大幡主命等仁御夢狀具令教知給支于時
 大幡主命悅白久神風伊勢國百船度會縣佐古久志呂
 宇治五十鈴河上鎮理定理坐皇太神止國保伎奉支終夜
 宴樂舞歌如日小宮之儀志爰倭姬命朝日來向國夕
 日來向國浪音不聞國風音不聞國弓矢鞞音不聞
 國打摩伎志賣留國敷浪七保國之吉國神風伊勢國之
 百傳度會縣之佐許久志呂五十鈴宮仁鎮理定理給止國
 保伎給支于時送驛使朝廷還詣止倭姬命御夢狀細返
 事白支

地到給奴真奈胡神爾國名何問給支大河之瀧原之國止
白支其處乎宇太之大宇禰奈乎爲天荒草令_二刈掃_一天宮
造令_レ坐_支此地波皇太神之欲給地爾波不_レ有悟給支其
時自_二大河南道_一宮處竟爾幸行爾美野爾到給旦宮處竟
佗賜_比其處乎和比野止號支從_二其處_一幸行爾久求都彥
參相_支汝國名何問給支白久久求小野白_支倭姬命詔久
御宮處乎久求小野止號給_支其處爾久求社定賜于_レ時
久求都彥白久吉大宮處有白_支其處幸行志天園作神
參相天園地進_支其處悅給園相社定給_支從_二其處_一幸
行爾美小野有_支倭姬命目互給天即其處乎目互野止號
支又其處爾圓奈留有_二小山_一支其處乎都不良止號支從_二
此處_一幸行澤道野有_支其處乎澤道小野號_支
其時大若子命從_二大河_一御船率御向奈相支于時倭姬
命大悅給天大若子問給久吉宮處在哉白久佐古久志
呂宇遲之五十鈴川上爾吉御宮處在白_支亦悅給天問
給久此國名何白久御船向田國白_支從_二其處_一御船乘給
幸行_支其忌楯梓種々神寶物留置所名波忌楯小野號
支從_二其處_一幸行波有_二小濱_一其處取_レ鷺老在_支于_レ時
倭姬命御水飲止詔久爾老爾何處吉水在問給_支其老
以_二寒御水_一御饗奉_支于_レ時讀給水門爾水饗神社定賜

支其濱名鷺取小濱號_支然而二見濱御船坐于_レ時大若
子命仁國名何問給白久速爾_二見國止_一白_支爾時其濱
御船留給天坐時佐見都日女參相_支汝國名何問給_支
御詔不_レ聞御答毛不_レ白_支以_二堅鹽_一多御饗奉_支倭姬
命慈給堅多社定給_支于_レ時大若子命其濱乎御鹽并御
鹽山定奉_支從_二其處_一幸行豆五十鈴河後之江入坐_支
時佐美留日子參相_支問給此河名何白久五十鈴河後
白_支其處爾江社定給_支又荒崎姬參相國名問給白久
皇太神御前荒崎白_支恐志止詔神前社定給此其江上
幸行御船泊志處名號_二御津浦_一支從_二其上_一幸行小島
在_支其島坐豆山末河內見廻給_支如_二大屋門前_一在_レ地
支其處上坐天其處名號_二大屋門_一支從_二其處_一幸行神淵
河原坐波苗草戴耆女參相_支問給汝何爲耆女白久我
取_二苗草_一女名宇遲都日女止白_支又問給久奈止加加
久爲耆女白久此國波鹿乃見哉毛爲止白_支其處乎鹿乃
見止號_支何是問給爾止可賣白_支其處乎止鹿乃淵號_支
從_二其矢田宮_一幸行_支次家田田上宮遷幸_支其宮坐時度
會大幡主命皇太神乃朝御氣夕御氣處乃御田定奉_支
宇遲田田上爾在名_二拔穗田_一是也從_二其幸_一行奈尾之
根宮一座給于_レ時出雲神子吉雲建子命

一名伊勢郡產
神一名櫛玉命

其處爾佐々牟江社定給支從_三其處_二幸行間爾無_一風浪_志海鹽大與度爾與度美豆御船令_三幸行_二其時倭姬命悅給_一其濱爾大與社定給支

廿五年_{丙辰}春三月從_二飯野高宮_一遷_三幸于伊蘇宮_二令_一坐支

于_二時倭姬命南山未_一見給_止御宮處寬爾奉_天戴天照太神_天宇久留土_{仁志}御船爾乘奉_天過_二狹田坂手_一天寒河

爾御船留_天過_二相鹿瀨瀧原和比野久求園相目豆野積良山澤路_一天向田_{仁志}奉_二于御船_一天小濱_{仁志}御水御饗

奉_二天_一二見濱見津爾御船留_天山末河內見廻給_二鹿乃見與_一家田田上宮_仁遷_三幸支爾時大田命參_二豆_一五十鈴之川

上宮處仁禮祭_{倍志}申_{利勢}即彼處爾往給_天甚喜給

日本書紀曰活目入彥五十狹茅天皇_{垂仁}廿五年三月

亥朔丙申離_三天照太神於豐稻姬命_一託_三于倭姬命_二爰

倭姬命求_二鎮_一坐太神_二之處_一而詣_三菟田筱幡_二佐佐_一

更還之入_二近江國_一東廻_三美濃_二到_一伊勢國_二時天照太

神誨_三倭姬命_二曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國

也傍國可_レ怜國也欲_レ居_二是國_一故隨_三大神教_二其祠立_一

於伊勢國_二因興_三齋宮于五十鈴川上_一是謂_三磯宮_二則

天照太神始自_レ天降之處也_二云天皇以_一倭姬命_一

爲_二御杖_一貢_三奉於天照太神_一是以倭姬命以_二天照太

神_二鎮_一坐於磯城嚴櫃之本_一而祠之然後隨_三神誨_二取_一丁巳年冬十月甲子_二遷_三于伊勢國渡遇宮_一

世記曰從_二飯野高宮_一遷_三幸于伊蘇宮_二令_一坐支_二時

大若子命問給_二久汝此國名何白_一久百船度會國玉掇伊

蘇國止_二天御鹽濱并林定奉_一此宮坐_二天供奉御水在所

波御井國止_二號_一于_二時倭姬命詔_一久南山未_二見給_一波吉宮

處可_レ有見_止詔_二天御宮處寬爾大若子命_一遣_二倭姬命_一波

皇太神_平奉_二戴_一天小船乘給_二御船_一仁難神財并忌楯梓等

乎留置_天從_二小河_一幸行_支從_二其河_一天御船後立_支爾時驛

使等御船宇久留_止白_支其處_平宇久留_止號_支從_二其處_一

幸行速河彥詣相_支汝國名何問給_二白_一久畔廣之狹田國

止_二白豆佐々上神田進_一其處速河狹田社定給_支從_二其

處_二幸行高水神參相_一支汝國名何問給_二白_一久岳高田深坂

手國止_二白豆田上御田進_一其處坂手社定給_支從_二其處_一

幸行河盡_支其河之水寒有_支則寒河止_號支其處御船留

給_二豆_一即其處仁御船神社定給_支從_二其處_一幸行時御笠服

給_支其處_平加佐伎止_號支御河瀨渡給_止爲_二爾鹿完流相

支是惡詔_天不_二度坐_一其瀨_平相鹿瀨號_支從_二其處_一指_二河

上_一豆幸行波砂流速瀨有_支爾時真奈胡神參相度奉_支

其瀨真奈胡御瀨號_二豆御瀨社定給_一支從_二其處_一幸行美

詔遣下給支于_レ時其神乎阿射加乃山嶺社作定而其神
乎夜波志志都米上奉天勞祀支余時宇禮志止詔天其處
名天宇禮志止號然度坐時爾阿佐加加多爾多氣連等
祖宇加乃日子之子吉志比女次吉彥二人參相支此間
給久汝等我阿佐留物者奈余曾止問給支答白久皇太神
之御贊之林奉上伎佐宇阿佐留止白支于_レ時白事恐止
詔而其伎佐乎令_レ進_二太神御贊_一而佐々牟乃木枝乎割
取而生比伎宇氣比伎良世給時爾其火伎理出而采女
忍比賣我作之天平瓮八十枚持而伊波比戶爾仕奉支
爾時吉志比女地口御田并御麻園進

註曰一書曰天照太神自_二美濃國_一廻到_二安濃藤方片
樋宮_一坐于_レ時安佐賀山有_二荒神_一百往人者亡_二五十
人_一卅往者亡_二廿人_一因_レ茲倭姬命不_レ入_二坐度會郡宇
遲村五十鈴川上之宮_一奉_レ齋_二藤方片樋宮_一于_レ時安
佐賀荒惡神爲行乎倭姬命遣_二中臣大鹿島命伊勢大
若子命忌部玉櫛命_一奏_二聞天皇_一天皇詔其國者大若
子命先祖天日別命所_レ平山也大若子命祭_二平其神_一
令_二倭姬命奉_中入五十鈴宮_上即賜_二種々幣_一而返_二遣大
若子命_一祭_二其神_一已保平立_此即社_二於安佐駕_一以祭者
矣而後_復倭姬命即得_二入坐_一但於_二其渡物_一者敢不_二

返取_一

二十二年_{癸丑}冬十二月廿八日遷_二飯野高宮_一奉_レ齋編_二懸
障院形屋_一四箇年

世記曰于_レ時飯高縣造祖乙加豆知命爾汝國名何問
賜白久意須比飯高國止白而進_二神田并神戶_一倭姬命
飯高_止白事貴止悅賜支次佐奈縣造祖彌志呂宿禰命
爾汝國名何問賜白久許母理國志多備之國真久佐牟
毛久佐向國白豆進_二神田神戶_一又大若子命爾汝國名
何問賜白久百張蘇我乃國千五百枝刺竹田之國止白支
其處爾御櫛落給支其處乎櫛田止號給櫛田社定賜支
從_二其處_一豆御船乘給豆幸行其河後江爾到坐于_レ時魚
自然集出天御船參乘支爾時倭姬命見悅給豆其處爾魚
見社定給支從_レ其幸行奈留御饗奉神參相支汝國名何
問給白久白濱真名胡國中其所真名胡神社定賜支又
乙若子命以_二麻神菟靈等_一進_二倭姬命_一而令_二祓解_一及_二
陪從之人_一留_二弓劍兵_一共入_二座飯野高丘宮_一遂得_二
向_二五十鈴宮_一自爾以來天皇之太子齋宮如及_二驛使
國司人等_一到_二此等川_一爲_二解除_一止_二鈴聲_一之此其儀
也從_レ其幸行豆佐々牟江御船泊給比其處爾佐々牟江
宮造令_二坐給支_一大若子命白鳥之真野國止國保伎白支

世記曰于_レ時坂田君等進_二地口御田_一

十年_{辛丑}秋八月一日遷_二幸于美濃國伊久良河宮_一御船形

上案_二樓臺_一神靈坐四年奉_レ齋

次遷_二于尾張國中嶋宮_一聳_レ雲垂_二錦蓋_一現_二神靈_一坐

兩鹿守護_二香島香取兩社也_一三箇月奉_レ齋

世記曰倭姬命國保伎給于_レ時美濃國造等進_二舍人市

主地口御田_一并御船一隻進_二同美濃縣主角鐸之作

而進_二御船二隻_一捧船者天之曾已立抱船者天之御都

張止白而進支采女忍比賣又進_二地口御田_一故忍比賣

之子繼天平瓮八十枚作進

十四_{乙巳}年秋九月一日遷_二幸于伊勢國桑名野代宮_一棕樹

三株中現_二神靈_一坐四年奉_レ齋

伊勢國風土記曰天日別命奉_レ勅入_二東數百里其邑有

神名_二伊勢津彥_一天日別命問曰汝國獻_二於天孫_一哉

答曰吾覓_二此國_一居住日久不敢聞_二命矣_一天日別命發

兵欲_レ戮_二其神_一于_レ時畏伏啓云吾國悉獻_二天孫_一吾

不敢居_二矣_一天日別命令_レ問曰汝之去時何以爲_レ驗啓

云以_二今夜_一起_二八風_一吹_二海水_一乘_二波浪_一將_二東入_一此

則吾之却由也天日別命整_二兵窺_一之比_二及_一中夜_一大

風四起扇_二舉波瀾_一光曜如_レ日陸海共朗遂乘_二海而去

東焉故古語曰_二神風伊勢常世浪寄國_一者蓋此謂之

也次鈴鹿奈具波志忍山爾神宮造奉_二天遷_一神靈_一給六箇

月奉_レ齋

世記曰于_レ時國造大若子命一名大幡主命參相御共仕奉

國內風俗令_レ白_二支又國造建日方命參相_一支汝國名何問

給白_二久神風伊勢國止_一白進_二舍人弟伊爾方命又地口

御田并神戶_一又大若子命進_二舍人弟乙若子命_一次川

俣縣造祖大比古命參相_二支汝國名何問_一賜白_二久味酒鈴

鹿國奈具波志忍山_{今志也}白_二支然神宮奉_一造奉_二令_一幸行_二又神

田并神戶進_二支次阿野縣造祖真桑枝大命_一爾汝國名何

問賜白_二久草陰阿野國白_一豆進_二神田并神戶_一次市師縣

造祖建些古命_爾汝國名何問賜白_二久矣_一往阿佐賀國白

進_二神戶并御田_一

十八年_{己酉}夏四月十六日遷_二坐于阿佐加藤方片樋宮_一葛

藤卷纏中舛形上現_二神靈_一坐四年奉_レ齋

世記曰是時爾阿佐加乃彌子爾坐而伊豆速布留神百

往人者五十人取死冊往人廿人取死如_レ此伊豆速布

留時爾倭比賣命於_二朝廷_一大若子乎進上而彼神事乎

申之者種々大御手津物彼神進屋波志志豆目平奉_レ止

五十八年^{辛巳}遷^二倭彌和乃御室嶺上宮^一留^二於杜中圓輪

鏡^一坐二年奉^レ齋

世記曰是時豐鋤入姬命吾日足止白支爾時姪倭比賣

命事依奉利御杖代止定豆從^レ此倭姬命奉^レ戴^二天照太

神^一而行幸^レ相殿神天兒屋命太玉命御戸開闢神天手力男神^二檮

儀命御門神豐石靈櫛石靈命等五部伴神相副奉^レ仕矣

儀式帳曰內宮美和乃御諸原^二齋宮^一出奉^二天齋始奉

支爾時倭姬內親王太神乎頂奉^二願給國求奉時^一爾從^二

美和乃御諸宮發豆令^レ出坐支令時御送驛使阿倍武淳

川別命和珥彥國菴命中臣大鹿嶋命十千根命大伴武

日命合五柱命等爲^レ使豆令^レ入坐支彼時宇太乃阿貴宮

坐

六十一年^{癸未}二月十五日遷^二于大和宇多秋志野宮^一白座

上居^二靈鏡^一四年奉^レ齋

世記曰于時倭國造進^二采女香刀比賣地口御田^一倭姬

命乃御夢爾高天之原坐而吾見之國仁吾乎坐奉^レ止悟教

給^レ岐從^レ此東向乞宇氣比豆給久我思刺豆往處吉有奈

良波未^レ嫁^レ夫童女相止祈禱幸行爾時佐々波多我門

爾童女參相則問給久汝誰答曰奴吾波^二天見通命孫爾

八佐加支刀部^二一名伊已^一我兒宇太乃大采禰奈止白支亦

詔曰御共從仕奉哉答曰仕奉即御共從奉^レ仕伴童女於

大物忌止定給比豆天磐戶乃鑰預賜利豆無^二黑心^一志豆

以^二丹心^一天清潔久齋慎美在物於不^レ移^レ右須右物於不

移^レ左志豆左^レ左右^レ右左返右廻事^二毛萬事違事^一奈久太

神爾奉^レ仕元^レ元本^レ本故也又弟大荒命同奉^レ仕從^二

宇多秋宮^一幸行而佐々波多宮坐焉

六十四年^{丁亥}霜月廿八日遷^二幸伊賀國隱市守宮^一雲霞中

靈鏡坐二年奉^レ齋

六十六年^{己丑}冬十二月一日遷^二幸于同國穴穗宮^一稻倉上

居^二靈鏡^一四年奉^レ齋

世記曰爾時伊賀國造進^二竈山葛山戶并地口御田細

鱗魚取淵梁作瀬等^二朝御氣夕御氣供進矣^一

麗氣曰崇神天皇治^二天下^一六十八年^{丁未}山邊^二大和國城上郡

活目入彥五十狹茅天皇^二繼向珠城宮^一

即位元年^{癸巳}夏四月四日遷^二于伊賀敢都美惠宮^一八重

雲登圓滿靈鏡坐二年奉^レ齋

四年^{乙未}夏六月晦遷^二淡海甲可日雲宮^一雲成^二屏風^一其上

亦雲帶^二靈鏡^一坐四年奉^レ齋

世記曰淡海國造進^二地口御田^一

八年^{癸亥}秋七月七日遷^二于同國坂田宮^一千木高廣敷板上

現^二靈鏡^一坐二年奉^レ齋

治天下三十一萬八千五百四十二歲陵在日向國愛山也
彥火々出見尊女

治天下六十三萬七千八百九十二歲陵在日向國高屋山也

彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊男

治天下八十三萬六千四十二歲陵在日向國

此三柱尊共天八重雲皆吉里中坐也

神日本磐余彥天皇大倭國橿原宮號神武天皇始

元年甲寅歲冬十月發日向日本國也東征是也

即位八年建都橿原經營帝宅四方國乎安國止

平久知食須天津瓊乃瓊鏡乎捧持賜天稱辭竟治天下

七十六年

倭姬命世記曰凡神倭伊波禮彥天皇已下稚日本根子彥

大日々天皇以往九帝歷年六百卅餘歲當此時帝與

神其際未遠同殿共床以此爲常故神物官物亦

未分別焉

麗氣記曰故神物官物未分別然靈應冥感稍滂流仍

奉崇三種神光神璽者本有常住佛種也大空三昧

表文法界躰身量也

御間城入彥五十瓊殖天皇大倭國磯城瑞籬宮

即位六年己秋九月倭國笠縫邑立磯城神籬奉遷天

照太神及草薙劍令皇女豐鋤入姬奉齋以往雖同

殿共床漸畏神靈共住不安志天則與神籬天後石

凝姥神裔天目一箇裔二氏更鑄造鏡劍以爲護身璽焉

踐祚日所獻之神璽鏡劍也

世記曰奉遷天照太神及草薙劍令皇女豐鋤入姬

命奉齋焉其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌舞然後隨

大神之教國々處々爾大宮處乎求給倍利

三十九年壬戌三月三日遷幸但波之吉佐宮雲從現榎

下坐秋八月十八日作瑞籬積四年奉齋矣

私記今歲神天降合明齊德一所雙坐事委

旨見于外宮御遷座篇也

四十三年丙寅九月九日倭國伊豆加志本宮現劍坐

八年奉齋

五十一年甲戌四月八日遷木乃國奈久佐濱宮河底岩上

余瑠璃鉢坐三年奉齋

世記曰于時紀伊國造進舍人紀麻呂良地口御田

五十四年丁丑遷吉備國名方濱宮神崎岩上殘水御壺坐

四年奉齋

世記曰于時吉備國造進采女吉備都比賣又地口御

田

立於浮渚在之平地

麗氣曰凡天照太神天地大冥之時現日月星辰像照虛空之代神足履地而興于天瓊戈於豐葦原中國上去下來而鑒六合治天原耀天絨皇孫杵獨天人壽八萬歲時筑紫日向高千穗之峯天降坐以降迄至彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊終年治百七十九萬二千四百七十六歲也

御鎮座本紀曰天地初發之時大海之中有一物浮形如葦牙其中神人化生名號天御中主神故號豐葦原中國亦因以曰豐受皇太神也與天照大日靈尊舉此以八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍三種之神財而授賜皇孫爲天璽視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡寶祚之隆當與天壤無窮宜焉皇孫天津彥火瓊杵尊伴神天兒屋命以天津諄辭之太祝詞令掌解除太玉命捧大幣天村雲命取太玉串奉仕天神地祇前後爾相從互關天關岐披雲路介駟仙躡比天之八重雲乎伊頭之千別爾千別天筑紫日向高千穗穗觸之峯爾天降到居焉經營宮室而恢弘大業光臨六合司牧人神能世闡玄功時流至德以鎮元々上則答乾靈授國之德下則崇神祇

養正之心撥災反正德俾覆燾道協造化是以普天人民稟氣懷靈何非得處故與天地而無窮將金石而不朽焉實人民自然之德合古便今也

倭姬命世記曰子時以八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍三種之神財互授賜皇孫永爲天璽視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡寶祚之隆當與天壤無窮宣比即天津彥火瓊杵尊止伴神天兒屋命掌解除宜久謹請再拜諸神等各念倍此時天地清淨止諸法如影形象利奈清淨無假穢志取說不可得須皆從因生業勢利諄辭勢利太玉命捧青和幣白和幣天牟羅雲命取太玉串天三十二神前後仁相副從天各關天關岐披露路介駟仙躡比天之八重雲乎伊頭之千別爾千別天筑紫日向高千穗穗觸之峯爾天降到給比皇治天下卅一萬八千五百卅三年是時天地未遠故以天柱舉於天上矣
神天上地下麗氣記曰
天照皇太神女
正哉吾勝々速日天忍穗耳尊男
此二神一向主地底無二無別也
天津彥火瓊杵尊男

孫杵獨王也尊以爲然曰中國初定萬物有靈所以草樹稱宮魔神競扇今以杵就之爲中國王賜玄龍車追眞床之緣錦衾八尺流火鏡赤玉寶鈴薙草八握劍而壽之曰嗟呼汝杵敬承吾壽乎抱流鈴以御无窮无念爾祖吾在鏡中矣

爾時御祖天王如來天御中主神極天高皇產靈皇神詔授天璽寶十種於杵獨大王給矣

羸都鏡一面邊都鏡一面八握劍一柄生玉一死玉一足玉一道反玉一蛇比禮一枚蜂比禮一枚品物比禮一枚

天祖敕詔曰若有痛處者令茲十寶謂一二三四五六七八九十而布瑠部由良々々止布瑠部如此之者死人反生是則所謂布瑠之言本也

天照皇太神持寶鏡而祝之宣久吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡寶祚之隆當

與天壤无窮矣則授八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物永爲天璽矛玉自從矣盟言如八咫瓊之勾以曲妙治天下且如白銅鏡以照兩眼者看行山川海原乃提是靈劍平天下惡事矣以兒屋命爲掌禱大將軍神王太玉命爲掌幣神天鈿女爲納侏神石凝姥爲納鏡神玉屋爲納玉神乃使陪

皇孫而降之是大己貴歸化上天皇帝以禮還之是寶上天之祖含靈之本故追上尊號曰高皇產靈无上極天太祖尊皇帝矣

日本書紀曰于時高皇產靈尊以眞床追衾覆於皇孫天津彥々火瓊々杵尊使降之皇孫乃離天磐座天磐座此以鐵矩羅且排分天八重雲稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穗峯矣既而皇孫遊行之狀者

一書曰天照太神乃賜天津彥々火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物又以中臣上祖天兒屋命忌部上祖太玉命猿女上祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五部神使配侍焉因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤无窮者矣

一書曰高皇產靈尊以眞床覆衾累天津彥國光彥火瓊々杵尊則引開天磐戶排分天八重雲以奉降之子時大伴連遠祖天忍日命帥來日部遠祖天穗津大來目背負天磐鞞臂著稜威高鞞手捉天梶弓天羽々矢及副持八目鳴鏑又帶頭槌劍而立天孫之前遊行降來到於日向襲之高千穗穗日一上峯天浮橋而

類聚神祇本源卷五

三十二神事

內宮遷座篇

舊事本紀曰天照太神詔曰豐葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國者吾御子正哉吾勝々速日天押穗耳尊可_レ知之國言寄詔賜而天降之時高皇產靈尊兒思兼神妹萬幡豐秋津師姬栲幡千千姬命爲_レ妃誕_二生天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊_一之時正哉吾勝々速日天押穗耳尊奏曰僕欲_二將降_一裝束之間所生之兒以_レ此可_レ降矣詔而許之天神御祖詔授_二天璽瑞寶十種_一謂羸都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉一死返玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神御祖教詔曰若有_二痛處_一者令_二茲十寶_一謂_二一二三四五六七八九十_一而布瑠部由良由良止布瑠部如_レ是爲_レ之者死人反生矣是則所謂布瑠之言本矣高皇產靈尊勅曰若有_二葦原中國之敵拒_一神人而待戰者能爲_二方便_一誘欺抗拒而合_二治平_一令_二三十二人_一並爲_二防衛_一天降供奉矣麗氣曰

天香鼻山命	天鈿賣語命	天太玉命
天兒屋命	天櫛玉命	天道根命
天神玉命	天樁野命	天糠戶命
天明玉命	天村雲命	天皆男命
天御蔭命	天造日女命	天世手命
天斗麻彌命	天背斗女命	天玉櫛彥命
天湯津彥命	天神魂命	天三降命
天日神命	天乳速命	天八板彥命
天活玉命	天小彥根命	天湯彥命
天表春命	天下春命	天月神命
天伊佐布魂命	天伊岐志邇保命	

神皇系圖曰夫水氣者清淨海水即本祖元神性也陽氣者濁世生類不清實執也故清淨神氣祭則人魂陽氣鎮也故有_二鎮魂_一也陽者氣也亦光明也故名曰_レ魂凡一氣化現名號_二神靈_一是生化魂也故陽氣散亡爲_レ死即佛本居也善哉々々皇天壽曰而布留部由良由良止布留部云々惟是皇天无極大神咒也

府錄曰爾時八十諸神達曰中國初業天下無_レ主非_レ應_レ命者不_レ能_レ治_レ之能王_レ之者其在_二誰神_一乎諸神議曰皇

伊勢太神宮祕文曰^{第二}天狹霧國狹變成名^神天御中主尊

國常立尊^{高天原之日小宮居此天人者無有欲性}但有

三色欲^{○欲一本}故名^{作愛}三色界天也次天御中主尊^{開大元宗}國

常立尊^{實法常住靈神表}化^{也故名俱生神}八子^{生天地人民而下}來

々名^{之號}大日靈貴止由氣皇神^{是也我國宗廟}

無色界非々想天飛空自在天

豐受皇太神繼文曰天照豐受皇太神者非々想天能斷智

體下々來々於^{欲界}他化自在天王宮中爲^{大毘盧遮}

那佛^{於大日本國}是名^{大日靈貴豐受皇太神}是也

不來不去神本覺不生元神也一切衆生慈父常住不變妙

理也堅越^{方便門}橫成^{覺智}

伊勢太神宮祕文曰夫以天地之起在^{水氣之用}其清陽

爲^{天其重濁爲地}從^{上高天海}至^{下根底}而同時成

立也爾^{時水氣高天海初出}之故謂^{之名}天讓日國禪

月天狹霧國狹霧尊^{亦元氣諸神利性亦稟氣靈氣也}是無^有身形^{但有}

心性^{故曰無色界}最上也

太宗祕府曰威音大通智勝日月燈明等過去七佛以前之

往過去之佛從前神名^{之天讓日國禪月皇太神}故或

爲^{大千界主}一切衆生靈父也

神皇系圖曰天御中主尊所^露名^{天御水雲神}任^水

德^{亦名御氣都神是水珠所成卽月珠是也亦號大葦}

原中津國主豐受皇神也凡以^{一心二分大千}

瑞相仙宮祕文曰授以^{天上事}日神留^{宅於日小宮}遍

照^{十方}而令^利衆生能除^{諸闇}焉大方神是天然

不動之理卽法性身也謂^{之名}實相也未來世一切衆

生發^{淨業}正因爲^{歸大乘}故顯^{本妙之象}曉了卽心

是佛或欲^{示無相之觀解}令^{忘有相之權教}也慧日

照^{世間}除^{生死雲}是威神之恩德也方便之利益也不

可思議々々々正念生化之本妙則在^{皇天}也皇則大

空無相之名號天地清淨之妙理是法身之儀也故一氣玄

玄之元神名^{之號}皇神也故萬物之化大道變成以^用

爲^{心意}一一歸^{自位}也故真如界裏堪然常住也當^{知伊勢內外兩宮則大千世界本主八百萬神之最貴也}

太宗祕府曰天宮與^{靈山}分^{一線路}互爲^{佛神之賓}

主^{令盡天地人}居^{無爲無事大閑之場}起^{生出}死

名^{之清淨}是大悲用也

類聚神祇本源

(和學諸讀所本奧書)

正平八年^{癸巳}正月三日書寫畢

類聚神祇本源卷四

天宮篇

欲界

第六天 他化自在天

大和寶山記曰伊弉諾伊弉冊尊此二柱尊者第六天大自在天王坐爾時任皇天宣受天瓊牙以咒術力加持山川草木能現種種未曾有事往昔大悲願故而作日神月神照四天下矣

神皇實錄曰

伊弉諾尊天降陽神名日子也亦稱大自在天子

妹伊弉冊尊天降陰神名日子也亦稱大自在天子

太田命傳曰神記

伊弉諾尊亦名伊舍那天

伊弉冊尊亦名伊舍那天妃

或曰伊弉那天者智摩醯首羅化身

神皇系圖曰

伊弉諾尊則東方善持藏愛護善通由賀神梵所名之伊

舍那天也

伊弉冊則南方妙法藏愛鬘行識神亦名之伊舍那后也續別祕文曰天照皇太神者爲鎮第六天魔王在於欲界他化自在天宮說種種色心不二法超越諸天善神色界

初禪梵衆天 梵輔天 大梵天

神皇實錄曰天之御中主尊天地開闢之始含精氣而應化之元神故初禪梵宮居

中臣稜訓解曰高天原色界初禪 梵衆天也 亦三光天南嶺浮樹下高庫藏是也

東仙宮祕文曰爰地神五代未豐受太神從初禪飛空而下々來々以現種種形度衆生與日神一所雙坐也蓋如涅槃經所說思之思之

二禪少光天 無量光天 極光天 亦光誓天

伊勢太神宮祕文曰伊勢二所兩宮則周遍法界之妙理本覺本初之元神也所狀奉名大日遍照尊故名照皇天起樹于寶基於天津磐境謂三光天居處也

四禪或入无色界中 色究竟天 亦名有頂天

兩宮降臨次第記曰色界頂色究竟天二天王大梵天王曲形大空無相妙體是曰常住慈悲神王亦名本有常住神亦名無上極尊已上名本覺真如神

津國王也

於所載于右之天地麗氣同府錄等者雖爲
官書內與所述于釋門其義相同之間以次一
所鈔之

大日靈貴

神寶日出祕府曰日翻曰毗盧云云大者摩訶也所
謂摩訶毗盧靈貴歟

遮那

（此奥書井上翁藏本）
寬文十二壬子

年三月廿日藤光吉以本而書寫之畢

權禰宜度會神主

（元教部省藏本奥書）

于時應安第五曆三春下旬候雇門第他手一校隱士
自力而已雖學梵文寧捨和子設信佛說盡
仰神語矣
沙門 信 瑜

類聚神祇本源卷三

府錄曰國常立尊亦名常住毘尊無上尊所化神惟是三世常住妙法身天神地祇本妙元神也以一身二分七代一形體顯言爲陰爲陽化生日神月神

吾聞神是天然不動之理卽法性身也通是元壅不思議慧卽報身也力是幹用自在卽應身也夫神一之妙孕氣含精至虛至一應群變而常寂生萬物而無心不爲事

凡一切有情有形有心爲形陰爲心陽雖爲兩陰陽身色心色心不二故從色法濯心法從心法濯識法陰陽一故化有形有心心宿骨骨人主亦木木大圓鏡智三昧耶形亦大圓鏡智

能斷智體亦毗盧本身亦法身三昧耶形亦獨古獨卽心御柱心御柱卽一切衆生心量也亦大日本國異名亦國璽境柱亦名國心柱亦國主主卽人人神主故以心爲主神人神神卽生生卽凡夫凡夫卽五穀性五穀性卽心上妙法蓮華是開時如覺大無主時始天乳死時終地乳故迷悟在心云

釋曰一心有二轉一者向上隨順二者向下隨順向上隨順者從信乃至金剛能爲善提果隨順方便故始覺成道成佛外向非真正覺一

能爲邪邪地隨順方便故實無覺無成者本覺本初元神也元神者自而本分無心作也

天照皇太神天轉神變向下隨順迴照尊天珠向津媛命續栽穗出神是也

御氣都神與戶棄光天女天王如來上化下化名但上在時大梵天王功德無上下一化時戶棄光天女功德無等八洲降化現大日靈貴天照皇太神一念力熾盛端嚴美麗形也

下化有想文義云伊弉諾伊弉冊尊持左手金鏡陰生持右手銀鏡陽生名曰日天子月天子是一切衆生俱生眼目坐也故一切火氣變成日一切水氣變成月二界建立日月是也于時以羸都鏡邊都鏡爲國璽靈而日神月神自送于天宮而照六合給矣正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

天照太神捧八坂瓊曲玉於九宮化生神也是名火珠所成神也常懷腋下化生故名腋子也

天津彥々火瓊々杵尊亦名杵獨王亦名示法神亦名相殿神亦名愛護神亦名左右神亦名皇孫尊

天照太神太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶天皇天御中主神太子高皇產靈皇帝女栲幡豐秋津姬命

生天津彥彦火瓊々杵尊

謂高皇產靈尊者極天之祖皇帝也能令造化表於無形元尊自謀立天津彥々火瓊々杵尊爲葦原中

火珠者日珠日珠者玉玉者玆字玆字者如意寶珠寶珠者蓮華理々者胎藏界毗盧舍那遍照如來玆字本不生不可得義萬法皆空無自性門是也過去花開王佛是也三十三天中皆是名大梵天王是名光明大梵天王名天御中主尊亦名天照皇大神他化自在天化跡大毗盧舍那如來是名摩醯首羅天王亦名大自在天王昔爲威光菩薩住日宮殿阿修羅王難今居日域成天照太神增金輪聖王福三千大千世界所有有情初於善男善女醜陋頑愚盲聾瘡痍四重八重七逆越誓謗方等經一閻提等无量重罪現在生中頻斷無明皆是神誓大乘善根成就形相有頂天上及無間極亡塵浮塵性相常住無邊異相皆是神跡皆是本覺皆是佛身永離生死常利衆生无有間斷十方如來同入三昧三世諸佛皆與授記自受法樂自在神力兩宮修行功德深甚本來自性本妙形像念念不動卽入阿字若觀一念定勝三世入无量定修習妙觀若有衆聞此功德不至信者當知是人定墮无間能摧佛種諸佛无救何況餘人

官書天地麗氣曰天神七葉者過去七佛轉星天七星地神五葉者現在四佛加增舍那爲五佛化生地五行神供奉

十六葉大神大小尊神賢劫十六尊也云云
官書天地麗氣府錄曰

國常立尊亦名常住毗尊也無上極尊所化神云云

惟是三世常住妙法身天神地祇本妙元神也以一身分七代一體顯言爲陰爲陽化生日神月神說法利生不可思議不可思議

國狹立尊毗盧舍那 國狹尊

豐斟尊盧舍那佛 豐香節野尊

朱注云已上三身卽一妙神也

泥土煮尊是名勾留尊也 沙土煮尊名寶藏摩尼尊也

大戸之道尊名勾那舍也 大苦邊尊名勾那舍牟尼如來

面足尊名毗婆尸佛也 惶根尊名毗棄羅如來

朱注云已上天地分三陰陽化生死迷悟祖元也

伊弉諾尊亦名天鼓音電佛 伊弉冊尊亦名開敷花王佛

伊弉諾尊是東方善持藏愛護善通本地阿閼過去五十三佛音王是尊也

三佛音王是尊也

伊弉冊尊是南方妙法藏愛鬻行織神五十三佛內神

○神一本氣佛是也

大日靈神 元祖大毗盧遮那如來常住三昧修行三界建

立尊座也

此名日神也日則大毗盧遮那如來智惠日光之應變也
梵音毗盧遮那是日之別名即除暗遍照之義也

日者天子常住之日光與世間之日光於法性體
有相似義故名大日靈貴天照太神也以二八尺流
大鏡祕崇伊勢太神之正體是也

傳曰劫初在三神聖一名常住慈悲神主法語曰尸棄大梵天王
神語名天御中主尊

大梵天宮居焉為衆生等以廣大慈悲誠心故作百
億日月及百億梵天而度無量群品故為諸子天之
大宗三千大千世界之本主也亦曰五星者經津主磐筒男
神等應變也云

伊勢太神宮瑞柏鎮守仙宮祕文曰圓仁慈覺
大師撰大八洲中

神風伊勢國天照座二所乃皇太神者是天地開闢之元神

故一大三千界主座也

尸棄大梵天皇此云天御中主神亦名曰伊勢
國天照座豐受皇太神宮是也

光朋大梵天皇此云大日靈貴亦名號伊勢
勢國天照座皇太神宮是也

天地初發之時於高天原成神名天御中主神也記曰大
海初出之故天御義利舉之八重雲以天於坐而成神天御
中主神亦名天讓日國禪月天狹霧國狹霧尊也故天地與
俱生神是也

亦曰星者日氣所生故其字日與生為星也五星者經

津主磐筒男神等應變也

降臨次第記曰

國常立尊漢言大毗盧遮那如來

國狹槌尊漢言毗盧舍那佛

國豐斟尊漢言虛舍那佛

泥土煮尊漢言勾留尊佛

大戸之道尊漢言勾那舍牟尼如來

吾屋惶根尊漢言毗婆尸佛

伊弉諾尊漢言天鼓音電佛

尸棄大梵天王漢言水珠所成王

水珠者月珠月珠者玉玉者久字久字者金剛界大日根

本大毗盧遮那如來是也天大梵天王虛空無垢大光

明遍照如來過去威音王佛是也三十三天中皆是大梵

天王是名尸棄大梵天王是名天御中主尊亦名豐受皇

太神

泥土瓊本尊漢言寶藏摩尼佛

大苦邊尊漢言龍尊王佛

吾屋惶根本尊漢言毗婆羅如來

伊弉冊尊漢言開敷花王佛

光明大梵天王漢言火珠所成王

光同其塵現五濁國隨順群生扶持萬物使

終其性命誰撓其神豈子其慮乎

日神謂大日靈貴此云於保比屢能武智靈貴
神力丁反亦曰天照太神亦號天照大日靈貴

伊弉諾尊曰吾欲生御宙之珍子乃以左手持

白銅鏡則有化出之神是謂大日靈貴神代上

曰伊弉諾尊伊弉冊尊共議曰吾已生大八洲國及

山川草木何不_レ生天下之主者歟於是共生曰

神號大日靈貴此子光華明彩照徹於六合之內

故二神喜曰吾息雖多未_レ有若此靈異之兒不

宜久留此國自當早送子天而授以天上之

事是時天地相去未遠故以天柱舉於天上也

豐受皇太神御鎮坐本紀曰天地初發之時大海之中有

一物浮形如葦牙其中神人化生名號天御中主神

故號豐葦原中國亦因以曰豐受皇太神也與天照

大日靈貴尊與此以八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍三

種之神財而授賜皇孫命為天璽

神風伊勢寶基珍圖天口事書曰天地開闢以降神寶日出

之代高天原神留坐天御中主神語曰天護日國禪月皇神也天照
天神語曰大日靈貴照皇天也是水火二靈也皇

親神魯伎天照太神
天御中主神魯美命天御中主神長男高
貴高皇產靈神也以皇御孫之

命乎天津高御座爾座豆天津璽乃鈿鏡乎捧持賜豆言壽宜

古語天神
壽解之詞皇我宇都珍圖御子皇御孫之尊若天津瓊玉戈
大像御子皇御孫之尊若天津瓊玉戈

曲妙爾天津高御座坐天津日嗣乎萬千秋乃長秋神嘗此
其緣也

大八洲乃豐葦原瑞穗之國古語云瑞穗
者豐穗也安國古語浦安平久所知

食言寄奉賜此以天津御量神語曰久須志
伊知比古登事問志磐根本

立草乃垣葉乎言止豆天降賜

釋家

大和葛城寶山記曰

天神上首

天御中主尊無宗無上而獨能化故曰天帝之神亦號天宗廟到天
下則以三身即一無相寶鏡崇神體祭伊勢止由氣
也

宮

極天祖神

高皇產靈皇帝此名上常是高皇產靈尊者極天
之祖皇帝坐也故為皇王祖神也

大日本洲造化神

伊弉諾尊 伊弉冊尊

此二柱尊者第六天宮主大自在天王坐爾時任皇天

宣受天瓊戈以咒術力加持山川草木能現三種

種未曾有事往昔大悲願故而作日神月神照四天

下矣昔於中天一度衆生今所謂字落
タルカ日本金剛山

地神六合大索

大日靈貴尊

大御神也掛畏以天津神策一用一抱一而天地與陰陽同節同和合敬合愛顯五常文圖悟八子給修應化身照神道可也

大田命傳曰豐受皇太神一座

天地開闢初於高天原成神也一記曰伊弉諾伊弉冊尊

古語曰伊舍那天伊舍那天姬先生大八洲次生海神次生河神次

生風神等以降雖經一萬餘歲時代相隨義也水德未顯天

天下飢餓于時二柱神天之御量事平以天瑞八坂瓊之曲

玉乎捧九宮所化神名號止由氣皇太神支千變萬化

受一水之德生續命之術故名曰御饌都神也古語

曰大海之中有一物浮形如葦牙其中神人化生號

天御中主神故號豐葦原中國亦因以曰止由氣皇

神也故天地開闢之初神寶日出之時御饌都神天御中

主尊與大日靈貴天照太神二柱御太神豫結幽契永

治天下免或爲日爲月永懸而不落或爲神爲皇

常以無窮矣光華明彩照徹於六合之內矣

神祇譜傳圖記曰

伊弉諾尊 伊弉冊尊

大日本豐秋津洲

海神

水戶神

速秋津比賣神

風神

山神

野神

木神

豐受皇太神亦名倉稻魂神亦天御中主神亦曰御饌都神

天下飢餓于時伊弉諾伊弉冊二柱尊以瑞八坂瓊

曲玉捧九宮所化神名號御饌都神亦名豐宇

介皇太神也是質性明麗故照臨天地利萬物天

文地利是時明千變萬化此時存乃依清淨之願力

垂愛愍慈悲現化加之誤歟護之姿同和光之塵天

機普張與天地齊德元氣流行而與陰陽合明

鬼神同吉凶或現三光天子耀德用於万方

或示八大龍王灑恩波於四海有請必致有所

必應而快一期之榮樂而施二世之利益耳或書曰伊弉諾

伊弉冊以天鏡捧九宮所化神名號夫天照太神與豐受

天御中主神是止由氣大神靈鏡也太神則無上之宗神而尊無與二故異於天下諸

社是則天地精明之本源也無相無爲之大祖也故

不起佛見法見以無相鏡假表妙體也和其

栲幡豐秋津姬命皇孫尊也
高貴女神

思金命智性靈坐
相殿姫神天手力雄神石戸開神
坐相殿神

神皇產靈神八咫鳥并伊勢朝臣祖神也

津速產靈神中臣朝臣上祖

件三柱靈神者天御中主所化神名爲子父子道今時露現矣

天鏡尊獨化神天鏡神三坐是神
鏡始元三光面目明白此時也
（私記神代三面御鏡是也）

天萬尊獨化神天鏡尊次生也
伊弉諾靈明座

沫蕩尊獨化神天萬尊次生也
伊弉冊靈明座

件三柱神者天御中主神出現之時三魂鬼荒魂坐續命神坐云亦名稱三諦明神也

耦生天神一代天神第七代陰陽
定位萬物形也

伊弉諾尊天降陽神名日子也
亦稱大自在天子

妹伊弉冊尊天降陰神名日子也
亦稱大自在天子

從國常立尊至惶根尊天神六代之間則有名字

未現尊形五位神座其後轉變而合陰陽有男女

形一應化相生而專心珠神以清淨爲先神熊興

焉伊弉諾伊弉冊二尊承天御中主神詔即以天瓊

戈指立於磯取盧島之上以爲國中之天柱則化

豎八尋殿共住生大八洲次大小島合拾四箇島其

後處々小島皆是水沫潮凝而成者也伊弉諾伊弉冊二尊俱議曰吾已生大八洲及山川草木何不生下天下之主者一歟

先生日神號曰大日靈貴亦云天照太神亦曰

大日靈尊此子光華明彩明徹於六合之內故二神

喜曰吾息雖多未有如此異靈之兒不宜久留

此國自當下早送于天而授以天上之事是時天地

相去未遠故以天柱舉於天上矣

地神五代番（番一本作播）地五行傳神位坐道德極而生化德表也

天照太神奉舉天上故曰大日靈尊也

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

私云自八坂瓊曲玉出化神也曲玉者火珠也

天津彦火瓊杵尊大八洲主坐也
（治天下廿一萬八千五百廿二年）

私云皇御孫以或十種神財或三種天璽率三十二神降坐

彦火々出見尊天津彦火瓊杵尊第二子也
（治天下六十五萬七千八百九十二年）

彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊彦火々出見尊太子也
（治天下八十三萬六千三年）

社家

寶基本紀曰天地開闢基在大光明其中有精氣一名

曰神亦曰心爾時爲萬物應化神假名號廣大慈悲

坐是諸天降靈之本致一切國王之大宗也德被百王惠齊四海歷代帝王崇尊祖萬方人夫敬神祇故世質時素無爲而治不肅而化云爾

大元謂無名之名無狀之狀呈稱氣神萬物靈臺日月星氣是天地大人亦大故大象入形座也無者元至也

天神一國常立尊德立功名者所化神名曰天御中主神也

謂大易者虛无也因動爲有之始故曰大初有氣爲三形之始故曰太始氣形相分生天地人也大方道德者虛无之神天地沒而道常在矣原性命受化於心々受之意々受之精々受之神形體消而神不毀性命既而神不終形體易而神不變性命化而神常然因以名國常立尊以初爲常義者也

天地耦生神

謂耦生天地對耕萬物生故八天五行佐天地生物五行自水始火次之木次之金次之土爲從木本生數三成數八但言八者舉其成數矣是天地象四時王相神座也配用有德故於明堂以祭五神而已

天神二國狹梶尊水藏戶

同四泥土煮尊木藏戶

同五天戶之道尊金藏戶

同六面足尊土藏戶

惶根尊對耕荒魂

沙土煮尊耦生荒魂

大苦邊尊耦生荒魂

件五代八柱天神光胤坐也雖有_レ三名相未_レ現形體五大府中坐故名_二天地耦生神_一也應化神名曰_二天御中主神_一未_レ顯露名_二國常立尊_一亦稱_二國底立尊_一天

地之間稟氣之靈蒙一大五種之神力受_二天地父母之生氣_一○氣一本以言語授_二世人_一也依_レ之得_二一切智心_一利益萬物生化也

天神首名稱天地俱生神一代謂天文地理日月星辰狀此時明現神聖出世天口成事

天御中主神

天地開闢之始含精氣而應化之元神故初禪梵宮居焉視_二天下_一而式時候授_二諸天子_一照臨天地之間而以_二一水之德_一利_二三萬品之命_一故亦名曰_二御氣津神_一也神語曰御義理也古語天津御氣國津御氣亦天狹霧國狹霧是水氣易形因以天氣下降地氣上騰天地和同草木萌動惟水道德矣

地大天天下靈神府中五魂座五靈五常名五大神也作萬生實也

水大天三降靈神

火大天合靈神

風大天八百日靈神

空大天八十萬魂神

件五柱神則受_二天地之精氣_一而氣形質具而未_レ相離名稱_二五大魂_一是中府藏坐神也故謂神者生之本形者生之具也古語謂稱_二獨化神_一也高皇產靈神皇祖神故亦名高貴神天御中主神長男也

土面足尊 惶根尊

右八柱神者俱生之神陰陽與耦生之神也故乾坤之道相參而化所以成此男女形一矣

伊弉諾尊 伊弉冊尊

右從國常立尊迄生伊弉諾伊弉冊尊謂天神七代矣粵蒙天祖天御中主高皇產靈尊之宣命天以天獨矛而諾尊立於天浮橋之上二神共議曰底下豈無國歟廼以天獨矛指下而探之獲滄溟其矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋名之磯馭廬島二神於是降居彼島與八尋殿社記曰大日本日高見國神祇寶山今此所也云々因欲共爲夫婦產生洲國及山川草木神等後生一女神曰三男月神姪子或爲日爲月永懸而不落或爲神爲皇帝存而以無窮矣

蓋聞伊弉諾尊則東方善持藏受護善通由賀神梵所名之伊舍那天也伊弉冊尊則南方妙法藏愛鬚行藏神亦名之伊舍那后也凡從自性淨妙藏乃至邪蛇地爲下化衆生隨順方便故假所化義興生滅形依無爲行滿即得正果是大慈大悲神慮也

大日靈貴天照皇神神風伊勢國玉振五十鈴川上座

諸尊持左手金鏡天部鏡陰生持右手銀鏡海部鏡陽生因以日神月神所化生也謂火珠水珠二果曲玉變成三昧世界建立日月是座凡上座時名之尸棄大梵光明大梵下座時名之尸棄光天女天照太神遍照智光法陰法陽兩部不二平等一心同殿同床二神卽一所座矣

尸棄大梵 尸棄光天女

杵獨大王

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊天照太神太子正哉吾勝尊太子亦名皇孫杵獨王也

天津彦々火瓊々杵尊名皇孫杵獨王也

彥火々出見尊天津彦々火瓊々杵尊第二子

彥波瀲鷗鷯草葺不合尊彥火々出見尊太子

右天津彥尊率諸部神降到於筑紫日向穗日高千穗之峯治天下以來迄至葺不合尊三主治合一

百七十九萬二千四百七十六歲也

神皇實錄曰以代元氣渾沌天地未割猶鷄卵溟滓含牙其後清氣漸登薄靡爲天浮濁重沉淹滯爲地所謂

洲壤浮漂開闢判割是也譬猶游魚之浮水上于時天先成而地後定然後於高天原一化生一神號曰天讓日

陽神國禪月陰神皇神亦名天御中主尊也天地俱生神

上件五柱神者別天神

次成神名國之常立神訓常立次豐雲野神此二柱神

亦獨成坐而隱身也次成神名字比地邇上神次妹須比

智邇去神此二神次角杙神次妹活杙神此二神次意富斗能地

神次妹大斗乃辨神此二神次於母陀琉神次妹阿夜上

詞志古泥神此二神次伊邪那岐神次妹伊邪那美神此二神

亦以音

上件自國之常立神以下伊邪那美神以前并稱神

世七代上二柱獨神各云一代次變
十神各合二神云一代也

古語拾遺曰又地剖判之初天中所生神名曰天御中主

神其子有三男一長男高皇產靈神次津速產靈神次神

皇產靈神其高皇產靈神所生之女子名曰栲幡千千姬

命天祖天津彥尊之母也

神皇系圖曰天先成而地後定然後神聖生其中焉號

國常立尊矣亦名無上極尊亦名曰常住毗尊謂惟

三世常住妙心法界體相大智也故天神地祇本妙大千

世界大導師是尊也所形名曰天御中主神名曰尸棄

大梵天王故則爲大千世界主矣

天御中主尊神風伊勢百船度會
山田原之大神座

元氣所化水德變成爲因爲果而所露名天御水雲

神住水德亦名御氣都神是水珠所成卽月珠是

也亦號大葦原中津國主豐受皇神也凡以一心

分大千形體顯言爲陰爲陽矣蓋從虛無則到

化變天月地水感應道交故在名字相云

地大天八下靈神

水大天三下靈神

火大天合靈神

風大天八百日靈神

空大天八十萬魂神

前五柱神者生化五大尊座也

高皇產靈神皇祖神座

神皇產靈神大神主祖神也

津速產靈神天兒屋命祖神也

都八柱神者天御中主神變座之內獨化神也明百億

須彌百億日月百億四天下而爲天地人民化生元

祖者也

水國狹槌尊

火豐斟淳尊

木泥土煮尊沙土煮尊

金大戸之道尊大苦邊尊

復使_二鏡作祖天糠戶神_一命之子也探_二天香山之銅使_一圖_二造日像之鏡_一其狀美麗矣而觸_二窟戶_一有_二小瑕_一其瑕於_レ今猶存卽是伊勢崇祕太神所謂八咫鏡亦名_二眞經津鏡_一是也

已上就舊事本紀抄之

日本書紀曰開闢之初洲壤浮漂譬猶_二游魚之浮_一水上_一也于_レ時天地之中生_二一物_一狀如_二葦牙_一便化_二爲神_一號_二國常立尊_一次國狹槌尊 次豐斟淳尊凡三神矣乾道獨化所以成_二此純男_一 次有神渥土煮尊 沙土煮尊 次有神大戶之道尊 大苦邊尊 次有神面足尊 惶根尊 次有神伊弉諾尊 伊弉冊尊 凡八神矣乾坤之道相交而化所以成_二此男女_一自_二國常立尊_一迄_二伊弉諾尊伊弉冊尊_一是謂_二神世七代_一矣

一書曰天地初判一物在於虛中一狀貌難言其中自有_二化生之神_一號_二國常立尊_一

國常立尊 亦國底立尊 亦可美葦牙彥尊

次國狹槌尊 亦國狹立尊

次豐斟淳尊 亦豐斟野尊 亦豐香節野尊 亦浮經野豐實尊 亦豐國野尊 亦豐器野尊 亦葉木國野尊 亦見野尊

凡三神乾道獨化所以成_二此純男_一

次渥土煮尊 渥土此云_二乎毗尼_一

沙土煮 沙土此云_二須毗尼_一 亦曰_二渥土根尊_一

次大戶之道尊 一云大戶之邊

大苦邊尊 亦曰_二大戶摩彥尊_一 大戶摩姬尊 大富邊尊

次面足尊 亦曰_二吾屋惶根尊_一

惶根尊 亦曰_二忌櫃城尊_一 亦曰_二青櫃城根尊_一 亦曰_二吾屋櫃城尊_一

次伊弉諾 伊弉冊尊 一書曰此二神青櫃城根尊之子也 一書曰國常立尊生_二天鏡尊_一 天鏡尊生_二伊弉諾伊弉冊_一 沫瀉此云_二阿和那伎_一

一書曰男女耦生之神先有_二泥土煮尊沙土煮尊_一 次有_二角織尊活織尊_一 次有_二面足尊惶根尊_一

次有_二伊弉諾尊伊弉冊尊_一

亦曰高天原所_レ成神名天御中主尊 次高皇產靈尊

次神皇產靈尊 皇產靈此云_二美武須毗_一

已上神號異說等就_二日本書紀_一抄之

古事記曰天地初發之時於_二高天原_一成神名天之御中主神_一 訓高下天云_二次高御產巢日神次神產巢日神此三杜神阿麻下效此

並者獨神成坐而隱_二身也_一次國稚如_二浮脂_一而久羅下

那洲多陀用幣流之時_一 流字以上十如_二葦牙_一因_二萌騰之物_一

而成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神_一 此神名云_二次天之常立

神_一 訓常云_二登許_一 立云_二多知_一 此二柱神亦獨神成坐而隱_二身也

神_一 訓立云_二多知_一 此二柱神亦獨神成坐而隱_二身也

洗_二右御目_一時所_レ成之神名_二月讀命_一

並座_二五十鈴川上_一謂_二伊勢齋大神_一

洗_二御鼻_一之時所_レ成之神名_二速素戔烏尊_一

座_二出雲國熊野杵築神宮_一矣

伊弉諾尊大歡喜詔曰吾生之子而於_二生終時_一得_二三貴子_一

召_二其御頸珠之玉緒_一母由良爾取由良迦斯而賜詔其御頸珠名謂_二御倉板_一神_二

伊弉諾尊詔_二天照太神_一云汝命者所_レ知高天原_二矣詔寄賜矣

次詔_二月讀命_一汝命者所_レ知夜之食國_二矣詔寄賜矣次詔_二素戔烏尊_一云汝命者所_レ知海原_二矣詔寄賜矣

亦曰伊弉諾尊詔曰吾欲_レ生_二御宙之珍子_一即化出之神

三柱矣左手持_二白銅鏡_一則有_二化出之神_一是謂_二大日靈尊_一右手持_二白銅鏡_一則有_二化出之神_一是謂_二月弓尊_一

廻首顧盼之間則有_二化出之神_一是謂_二素戔烏尊_一即大日

靈尊及月弓尊並是質性明麗故使_レ照_二臨天地_一素戔烏尊是性好_二殘害_一故令_二下治_一根國_二矣

伊弉諾尊勅_二任_二三子_一曰

天照太神者可_レ以御_二治高天之原_一也月讀尊者可_レ以

治_二滄海原之潮八百重_一也後配_レ日而知_二天事_一所_レ知夜之食國_一也素戔烏尊者可_レ以治_二天下復滄海之原_一也素戔烏尊年已長矣復生_二八握鬚_一雖_レ然不_レ治_二所寄天下_一常以啼泣恚恨

伊弉諾尊功既至矣德亦大矣神功既畢當_レ登_二于天_一報命_二留_二宅於日之少宮_一復靈運當遷是以構_二幽宮於淡路之洲_一寂然長隱亦坐_二淡海之多賀_一者矣

亦曰天照太神詔_二素戔烏尊_一曰汝猶有_二黑心_一不_レ欲_二與汝相見_一乃入_二于天窟_一閉_二磐戶_一而幽居焉故高天原皆闇亦葦原中國六合之內常闇不_レ知_二晝夜之殊_一故萬神之聲如_二狹蠅_一鳴萬妖悉發往_二常世國_一故群神憂迷手足

罔_レ厝凡厥庶事燎_レ燭而辨矣于_レ時八百萬神於_二天八湍河原_一神會集而議_二計其可_レ奉_二祈謝_一之方_二矣高皇產靈尊兒思兼神有_二思慮之智_一深謀遠慮議曰聚_二常世長鳴之鳥_一遞使_二長鳴_一遂聚令_レ鳴矣復宜_二圖_一造_二日神御像_一

奉_二招祈禱_一矣復鏡作祖石凝姥命爲_二治工_一則探_二天八湍河之川上之堅石_一

復全_二剝真名鹿皮_一以作_二天之羽韃_一矣

復探_二天香山之銅_一令_レ鑄_二造日矛_一此鏡少不_レ合_レ意則紀伊國所_レ坐日前神是也

大苦彥尊

亦云大戸之道亦云大富道亦云大戸摩彥

妹大苦邊尊

亦云大戸之邊亦云大富邊亦云大戸摩姬

別天八百日尊

獨化天神第四世之神也

土五風四

六代耦生天神

青樞城根尊

亦云沫蕩尊亦云面足尊

妹吾屋樞城根尊

亦云榿根尊亦云蚊雁姬尊

空五

別天八十萬魂尊

獨化天神第五世之神也

七代耦生天神

伊弉諾尊

天降陽神

伊弉冊尊

天降陰神

別高皇彥靈尊

亦名高魂尊亦名高木命獨化天神第六世之神也

亦曰伊弉諾伊弉冊二尊俱議曰吾已生大八州及山川

草木何不_レ生天下之主者歟先生日神曰大日靈

貴亦云天照太神亦云大日靈尊此子光華明彩照

徹於六合之內故二神喜曰吾息雖多未_レ有若此異

靈之兒不_レ宜久留此國自當早送于天而授以

天上之事是時天地相去未_レ遠故以天柱舉於天上

矣

次生月神號曰月讀尊亦云月夜見亦月弓其光彩

亞日可以配日而治故亦奉送于天矣

次生素戔鳴尊此尊可治天下而此神勇悍以忍安且常以哭泣爲行以下異之

次生蛭兒雖已三歲而脚尙不立初二神巡柱之時

陰神先發喜言既達陰陽之理所以初終生此兒矣

次生鳥磐櫟樟船即以_レ此船乃載蛭兒流放棄矣

伊弉冊尊者葬於出雲國與伯耆國堺比婆之山上也伊

弉冊尊者葬於紀伊國熊野之有馬村焉土俗祭此神

之魂者花時以_レ花祭復用鼓吹幡旗歌舞而祭矣

亦曰伊弉諾尊親見泉國此既不祥也還乃追悔之曰

吾前到於不須也凶目汚穢處故當去濯除吾身

之觸穢則往見粟門及速吸名門然此二門潮既太急故

還向於日向橋之小戸櫛原而被除焉遂將盪滌身之

所汚乃興言詔曰陽神爲禊泉穢到日向橋之小門櫛

原而被禊御身之時所成神十二柱神號伊弉諾尊詔上

瀨者速下瀨者弱而初於中瀨潛滌之時所成之神二

柱神名八十禍津日神次大禍津日神復爲直其禍而

所成神三柱神名神直日神次大直日神次伊豆能賣神

此外神號略之

伊弉諾尊滌御身之時所生之神三柱

洗左御目一時所成之神名天照太御神

類聚神祇本源卷二

天神所化篇

官家

天地麗氣府錄只論云劫盡燒壞時一切皆空故生三福德
 因緣力故十方三風至相對相觸能持三大水三水上有一千
 頭人二千手足一名爲三葦網是人臍中出三千葉金色妙法
 蓮華其光大明如三萬日俱照有三人結跏趺坐此人復有
 無量光明各曰三梵天王此梵天王心生三八子三子生
 天地人民也爾時上方五百萬億國土諸天梵王皆悉自
 觀所止宮殿光明威曜昔所未有歡喜踊躍生希有心
 即各相詣共議此事以何因緣我等宮殿有斯光明
 而彼衆中有三一大梵天王名曰尸棄是一大三千世界
 主一切諸神大祖也

亦曰常住毗尊一須彌建立其厚十六萬瓊膳那云觀相
 九山與三八海中有三大神一无上極尊世界大導師爲
 神通自在一如三水球一如三火珠一萬德施三萬用
 先代舊事本記曰于時天先成而地後定然後於高天

原一化生一神號曰三天讓日天狹霧國禪月國狹霧尊自
 厥以降獨化外俱生二代耦生五代所謂神世七代是也
 神代系紀

天祖天讓日天狹霧國禪月國狹霧尊

一代俱生天神

天御中主尊亦云天常立尊

可美葦牙彥舅尊

水二代俱生天神

國常立尊亦云國狹立尊亦云國狹立尊亦云國狹立尊

豐國主尊亦云豐國主尊亦云豐國主尊亦云豐國主尊

別天八下尊亦云別天八下尊亦云別天八下尊亦云別天八下尊

火三代耦生天神

角楯尊亦云角龍魂尊

妹活楯尊

別天三降尊獨化天神第二世之神也

水四代耦生天神

泥土羹尊亦云泥土根尊

妹妙土羹尊亦云妹妙土羹尊亦云妹妙土羹尊

別天合尊亦云天鏡尊獨化天神第三世之神也

金五代耦生天神

氣々々轉_二成神_一神變_二成生_一々々轉_二成魂魄_一々々轉_二成人體_一故八葉蓮臺座自在安樂也是如意亦玉德也元神用化也伊弉諾伊弉冊_二尊天_一降其島_一則化_二豎八尋殿_一共住_二同宮_一矣號曰_二大日本高見國_一大日本者三光殿本名

瑞柏鎮守仙宮祕文曰天神天御中主神詔_二伊弉諾伊弉冊_一本名伊舍那天伊舍天妃亦名自在天是也有_二葦原千五百秋瑞穗之地_一宜_二汝往修_一之賜_二天之瓊矛_一而詔寄賜也爾時_二二柱尊奉_一詔

命_二立_一於天浮橋之上_一共計謂有_二物若_一浮膏_一其中盖有_二國乎_一廼以_二天之瓊矛_一而探_二之獲_一是滄海_一投_二下其矛_一

而因畫_二滄海_一而引上時自_二戈落垂滴瀝之_一如意寶珠表形潮凝結爲_二島名曰_一礮馭盧島_一矣神明降跡國萬寶聚取歸之地也因以爲格也則以_二天之

瓊戈_一金剛智劍亦名天御量柱是也指_二立礮馭盧嶋上_一以爲_二國中之天之柱國之柱_一也此云心御柱是起也是諸尊能生之本源萬法所歸之體體也

天地靈覺祕書曰大日本國者大八洲也惟大日靈貴治國也亦八葉花臺也卽金剛胎藏諸會大日宮世界國土也凡

世界自本本覺也自本无明也本又法界也本是衆生本佛也本者法然道理也

或云礮馭盧嶋 唵呼嚧呼嚧神明召請之國也

豐受皇太神繼文曰南閭浮提_{シハラ}也_{シハラ}葦原

日本書紀曰神武天皇卅有一年夏四月乙酉朔皇興巡幸

因登_二腋上嘽間丘_一而廻_二望國狀_一曰妍哉乎國之獲矣雖_二內木綿之真走國_一猶_二蜻蛉之醫帖_一焉由_二是始有_一秋津之號_一也

一云日本者浦安國亦曰細矛千足國亦曰礮輪上秀真國亦曰玉墻內國

又曰舊說云古者今謂_二之倭國_一倭義取_二稱_一我之音_一漢人取名之字也此國之人昔到_二彼國_一而彼國問云汝國之

名稱_二如何_一答曰和奴國耶和奴猶_二言_一吾也自後謂_二之倭奴國_一也通云_二山跡_一山謂_二之耶麻_一跡謂_二之土_一音登

戶反夫天地割判涅溫未_レ燦是以栖_二山往來國多_一蹤故曰_二耶麻土_一又古語居住爲_レ土言_二止住_一據於山_一也

類聚神祇本源

不_レ入_二子之例_一於_レ是_二柱神議云今吾所_レ生之子不_レ良
猶宜_レ白_二天神之御所即共參上請_二天神之命爾天神之
命以布登麻邇爾_{上此五}卜相而詔之因_二女先言_一而不
良亦還降改言故爾返降更往_二廻其天之御柱_一如_レ先於
是伊耶那岐命先言阿那邇夜志愛袁登賣袁後妹伊耶
那美命言阿那邇夜志愛袁登古袁如_レ此言竟而御合生_二
子淡道之穗之使_{作狹}古訓本_{氣下效此}次生_二伊豫之二
名嶋_一此島者身一而面有_二四每_一面有_二名故伊豫國謂_二
愛上比賣_{此三字以音讀岐國謂飯依比古粟國謂大宜}
都比賣_{此四字}土佐國謂_二建依別_一次生_二隱岐之三子島_一
亦名天之忍許呂別_{訓許呂二字以音}次生_二筑紫嶋_一此嶋亦身
一而有_二三面四_一每_レ面有_二名故筑紫國謂_二白日別_一豐國
謂_二豐日別_一肥國謂_二建日向豐久士比泥別_{自久至}
熊曾國謂_二建日別_一曾字_{以音}次生_二伊岐嶋_一亦名謂_二天比
登都柱_{自比至都天以音}次生_二津嶋_一亦名謂_二天之狹手依
比賣_{音訓天知天}次生_二大倭豐秋津嶋_一亦名謂_二天
御虛空豐秋津根別_一故因_二此八嶋先所_レ生_一謂_二大八嶋
國_一然後還坐之時生_二吉備兒嶋_一亦名謂_二建日方命_一
次生_二小豆島_一亦名謂_二大野手上比賣_一次生_二大嶋_一亦名
謂_二大多麻上流別_{自多至}次生_二女島_一亦名謂_二天一根_一

訓_二天次生_一知訶嶋_一亦名謂_二天之忍男_一次生_二兩兒島_一亦
如_二天次生_一知訶嶋_一亦名謂_二天之忍男_一次生_二兩兒島_一亦
名謂_二天兩屋_{自古備兒島至}天兩屋島_{并六島}
和漢春秋曰日本國

史記夏本紀正義云括地志云和國武皇后政曰日本國
在_二百濟南_一隔_二海依_一嶋而居

日本私記曰日本國從_二大唐_一東方萬餘里日出_二東方_一
昇_二于扶桑_一故云_二日本_一

或書曰日本國者自_二大唐_一而新名也斯國自_二大唐_一東方
萬餘里居_二于東極_一日出_二東方_一昇_二于扶桑_一已近_二日所

出故曰_二日本_一也仍又號_二扶桑國_一也
切韻曰和者東海中國也

天地麗氣府錄曰于_レ時爲_二下_一化衆生_二天王如來天御
中主尊詔_二伊弉諾伊弉冊_一尊_二曰有_一豐葦原千五百秋

瑞穗中津地_一宜_二汝往修_一之賜_二天瓊矛_一而詔寄賜也二
柱尊奉_レ詔立_二於天浮雲之上_一共計謂有_二一物_一若_二浮

膏_一其圓中有_二國乎_一廼以_二天瓊矛_一探_二之獲_一八葉滄
海圖形_一則投_二下其矛_一而因畫_二滄溟_一而引上之時自_二矛

末_一落垂滴瀝之潮凝爲_二島_一本元_二名曰_一毘叻廬島_一矣_{婆娑}
則以_二天瓊矛_一指_二下於毘叻廬島之上_一以爲_二國中之天

柱_一也天瓊梓謂_二真如界_一變_二成金剛寶杵_一々々變_二成風

得國乃以天瓊矛指垂而探之得礮馭盧嶋則拔矛而喜之曰善乎國之在矣

一書曰伊弉諾伊弉冊二神坐于高天原曰當有國耶乃以天瓊矛畫成礮馭盧嶋

一書曰伊弉諾伊弉冊二神相語曰有物若浮膏其中盖有國乎乃以天瓊矛探成一嶋名曰礮馭盧嶋

一書曰陰神先唱曰美哉善少男時以陰神先言故為不祥更復改巡則陽神先唱曰美哉善少女遂將合交而不

知其術時有鵲鴿飛來搖其首尾二神見而學之即得交道

一書曰二神合為夫婦先以淡路洲淡洲為胞生大日本豐秋津洲次伊豫洲次筑紫洲次雙生億岐洲與佐渡洲次越洲次大洲次子洲

一書曰先生淡路洲次大日本豐秋津洲次伊豫二名洲次億岐洲次佐渡洲次筑紫洲次壹岐洲次對馬洲

一書曰以礮馭盧嶋為胞生淡路洲次大日本豐秋津洲次伊豫二名洲次筑紫洲次吉備子洲次雙生億岐洲與佐渡洲次越洲

一書曰以淡路洲為胞生大日本豐秋津洲次淡洲次伊豫二名洲次億岐三子洲次佐渡洲次筑紫洲次吉備子

洲次大洲

一書曰陰神先唱曰妍哉可愛少男乎便握陽神之手遂為夫婦生淡路洲次蛭兒

古事記曰於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神修理理固成是多陀用幣流之國賜天沼矛而言依賜也故二柱神立訓立云天浮橋而投下其沼

矛以畫者鹽許々袁々呂々邇此七字書鳴訓鳴云而引上時自其矛末垂落鹽之累積成島是淡能基呂嶋

殿於於是問其妹伊邪那美命曰汝身者如何成答曰吾身者成々不合成一處在爾伊邪那岐命詔我身者成

々而成餘處一處在故以此吾身成餘處刺下塞汝身不成合成一處而以焉古訓本成國土奈何訓生云此伊邪

那美命答曰然喜爾伊邪那岐命詔然者吾與汝行此七字廻逢是天之御柱而為美斗能麻具波比此十字以

之此期乃汝者自右廻逢我者自左廻逢竟以廻時伊邪那美命先言阿那邇夜志愛上袁登賣古袁此十字以

後伊邪那岐命言阿那邇夜志愛上袁登賣袁各言竟之後告其妹因女人先言不良雖然久美度邇此四字

而生子水蛭子此子者入葦船而流去次生淡嶋是亦

水沫潮凝而成者也

日本書紀曰伊弉諾尊伊弉冊尊立於天浮橋之上共計

曰底下豈无國歟廼以天之瓊瓊玉也此矛一指下而探之

是獲滄溟其矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋名之曰磯取

盧嶋二神於是降居彼嶋因欲共爲夫婦產生洲

國上便以磯取盧嶋爲國中之柱柱此云美而陽神左旋

陰神右旋分巡國柱同會一面時陰神先唱曰意哉遇

可美少男焉少女此云陽神不悅曰吾是男子理當先唱

如何婦人反先言乎事既不祥宜以改旋於是二神却

更相遇是行也陽神先唱曰意哉遇可美少女焉少女此云

等因問陰神曰汝身有何成耶對曰吾身有一雌元

之處陽神曰吾身亦有雄元之處思欲以吾身元處

合汝身元處於是陰陽始遘合爲夫婦及至產

時先以淡路洲爲胞意所不快故名之曰淡路

洲遇生大日本日本此云耶麻豐秋津洲次生伊豫二名

洲次生筑紫洲次雙生隱岐洲與佐度洲世人或

有雙生者象此也次生越洲次生大洲次生吉備

子洲由是始起大八洲國之號焉對馬島壹岐島及

處々小島皆是潮沫凝成者矣亦曰水沫凝而成也

一書曰天神謂伊弉諾尊伊弉冊尊曰有豐葦原千五

百秋瑞穗之地宜汝往脩之廼賜天瓊戈於是二神

立於天上浮橋投戈求地自畫滄海而引舉之卽戈

鋒垂落之潮結而爲島名曰磯取盧嶋二神降居彼

嶋化作八尋之殿又化堅天柱陽神問陰神曰汝

身有何成耶對曰吾身具成而有稱陰元者一處陽

神曰吾身亦具成而有稱陽元者一處思欲以吾身

陽元合汝身之陰元上云爾即將巡天柱約束曰妹自

左巡吾當右巡既而分巡相遇陰神乃先唱曰妍哉可

愛少男歟陽神後和之曰妍哉可愛少女歟遂爲夫婦先

生蛭兒便載葦船而流之次生淡洲此亦不以充

兒數故還復上詣於天具奏其狀時天神以太占

而卜定之乃教曰婦人之辭其已先揚乎宜更還去乃

卜定時日而降之故二神改復巡柱陽神自左陰神自

右既遇之時陽神先唱曰妍哉可愛少女歟陰神後和之

曰妍哉可愛少男歟然後同宮共住而生兒號大日本

豐秋津洲次淡路洲次伊豫二名洲次筑紫洲次隱岐三

子洲次佐度洲次越洲次吉備子嶋由此謂之大八洲

國矣瑞此云彌圖妍哉此云阿那而惠夜可愛此云

哀太占此云布刀磨爾

一書曰伊弉諾尊伊弉冊尊二神立于天霧之中曰吾欲

於是雌雄初會欲_レ將交合產_二生於國土_一而不_レ知其術_二子_レ時鵲鶴鴿來搖_二其首尾_一二神見而學_レ之而得_二交通之術_一矣

先產_二生淡路洲_一爲_レ胞意所_レ不_レ快故曰_二淡道洲_一卽謂_二吾恥_一也

次生_二伊豫二名洲_一

次生_二筑紫洲_一

次生_二壹岐洲_一

次生_二對馬洲_一

次生_二隱岐洲_一

次生_二佐渡洲_一

次生_二大日本豐秋津洲_一

因_レ斯以_二先所_レ生謂_二大八洲_一

然後還坐之時生_二吉備兒島_一

次生_二小豆島_一

次生_二大島_一

次生_二姬島_一

次生_二血鹿島_一

次生_二兩兒島_一合六嶋矣

凡產_二生十四嶋_一其處々小嶋皆是水沫潮凝而成者也

先生_二大八洲_一

兄生_二淡路洲_一謂_二淡道之穗之狹別嶋_一也

次伊豫二名島謂此島者身一而有_二面四_一每_レ面有_レ名

伊豫國謂_二愛上比賣_一

西南角

讚岐國謂_二飯依比賣_一

西北角

阿波國謂_二大宜都比賣_一

東北角

土佐國謂_二速依別_一

南東角

次隱岐之三子島謂_二天之忍許呂別_一

次筑紫島身一而有_二面四_一每_レ面有_レ名

筑紫國謂_二白日別_一

豐國謂_二豐日別_一

肥國謂_二建日別_一

日向國謂_二豐久士比泥別_一

次熊襲國謂_二建日別_一云佐渡島

次伊岐嶋謂_二天比登都柱_一

次津嶋謂_二天之狹手依比賣_一

次大倭豐秋津嶋謂_二天御虛空豐秋津根別_一

次生_二六小島_一

兄吉備兒嶋謂_二建日方別_一

次小豆嶋謂_二大野手上比賣_一

次大嶋謂_二天多麻上流別_一

次女嶋謂_二天一根_一

次血鹿嶋謂_二天之忍男_一

次兩兒島謂_二天兩屋_一

惣產_二生大八洲次六小嶋合十四箇嶋_一其處々小嶋皆是

類聚神祇本源卷二

本朝造化篇

先代舊事本紀曰天祖詔伊弉諾伊弉冊二柱尊曰有豐葦原千五百秋瑞穗之地宜汝往修之則賜天瓊戈而詔寄賜也伊弉諾伊弉冊二尊奉詔立天浮橋之上共計謂有物若浮膏其中蓋有國乎廼以天瓊矛而探之獲是滄海則投下其矛而因畫滄溟而引上之時自矛末落垂滴瀝之潮凝結而爲嶋名曰礪馭盧嶋矣則以天瓊矛指立於礪馭盧嶋之上以爲國中之天柱也伊弉諾伊弉冊二尊天降其嶋則化豎八尋殿共住同宮矣伊弉諾尊問伊弉冊尊曰汝身有何成耶伊弉冊尊對曰吾身成成而有不成成處一處耶伊弉諾尊詔曰吾身成成而有不成成處一處耶故以我身成餘處刺塞汝身不成成處以爲產國土如何伊弉冊尊對曰然善矣伊弉諾尊詔曰吾與汝矣廼天御柱而行逢遯合如此約束曰汝者自左吾者自右廼逢約竟分巡天柱同

會二面一矣伊弉冊尊先唱曰憲哉遇可美少男焉伊弉諾尊次對曰憲哉遇可美少女焉

伊弉諾尊告伊弉冊尊曰吾是男子理當先唱而婦人先唱事既不祥雖然共爲夫婦而生子因陰陽始遯合爲夫婦產生之兒卽是水蛭子此子入葦船而流也次生淡州亦是不入子例也伊弉諾伊弉冊二尊議曰今吾所生之子不良宜還復上詣於天具奏聞此狀則其還復上詣於天而奏聞也天祖詔以太占而定時日而降矣伊弉諾尊詔曰吾與汝矣改往巡柱吾矣自左汝矣自右巡柱相逢而爲御戶婚配如此約束竟矣

伊弉諾尊先唱妍哉可愛少女歟

伊弉冊尊復和曰妍哉可愛少女歟

伊弉諾尊問伊弉冊尊曰汝身有何成耶

伊弉諾尊詔曰吾身成成而有不成成處雄元之處耶

伊弉冊尊對曰吾身成成而有不成成處雌元之處耶

伊弉諾尊詔曰思欲以吾身成餘處雄元處刺塞汝身

不成成處雌元之處以爲產生國土如何

伊弉冊尊對曰宣然善矣

物其狀如_レ葦牙_レ不知_二其名_一爾時靈物乃中四理志出神聖化生名_レ之曰天神亦曰大梵天王亦稱尸棄大梵天王逮_二于天帝代_一名靈物稱天瓊玉戈亦名金剛寶杵爲_二神人之財_一至地神代謂之天御量柱國御量柱因茲興_二于大日本洲中央_一名爲常住慈悲心王柱此則正覺正智寶坐也故名心柱也

天地靈覺書曰古天地未分萬物未形代漠然凝寂本莫有_一物於_二虛空之中_一生大意之象虛微靈通是爲萬物之本源謂之諸佛之本地本是非有非無杳冥恍惚莫測涯際本是无_二所住無相貌而有_一物混成先天地生名元氣一化陰化陽爲魂爲魄名曰精靈有陽不焦託陰不腐天法道而精氣自成焉地法天而萬物生長矣惣道始無_二形狀而能爲_一萬物設_二形象者也故曰道生陰陽陰陽生_二和清濁_一三氣分爲_二天地人_一天地人生_二萬物_一若道散爲神明流爲日月分爲五行萬物之撲散則爲_二器用上也_一夫無名天地之始有名萬物之母故常無欲以_二觀其妙_一常有欲以_二觀其徵_一以_二大道制情欲_一不_レ害_二精神_一治_二身正時形_一一神明千萬共湊_二己身_一也能不_レ知_二道之所_一常行_二妄作_一巧詐_二精散已故發狂失神明_一故凶者也君臣上下能守_二五性_一去_二

六情一節滋味清五藏則天降神明往來於_レ己大道也天大地亦大也布氣天地自歸_レ己乎

長阿含經曰水變爲_二天地_一

祕藏寶鑰曰夫虛寥廓含_二萬像_一越_二大氣_一大氣巨穀泳澄孕_二千品_一受_二一水_一誠知一爲_二百千母_一

圓悟心要曰天地未形生佛未分漠然凝寂爲_二萬物之本_一

圓覺經序曰元亨利貞乾之德也始於_二一氣_一常樂我佛之德也本_二乎一心_一專_二一氣_一致_二柔修_一一心而成_二道或曰雙圓性海談四事相重如月殿述_二三密自樂_一但可有_二口訣_一也

類聚神祇本源

奏覽本懸_二朱勾_一所々略之

後宇多院御代以_二中御門中納言之奉書_一被_レ仰_二祭主隆實卿_一被_レ召_二之先皇御代以_一六條中納言_一被_レ召_二之仍勾當內侍以_一假字御教書_一歡感之趣被_レ仰_二下六條施行_一

是次第三禪天沒生第二禪第二禪有一有情壽業盡故從彼沒生初禪梵世中爲大梵王而唯獨一位壤不悅卽作是念時第二禪天壽盡故生初禪中如是展轉六天宮殿及四大洲悉生也

論云劫盡燒壤時一切皆空故生福德因緣力故十方風至相觸能持大水水上有一千頭人二千手足名爲革網是人齊中出千葉金色妙法蓮華其光大明如日俱照花中有入結跏趺坐此人復有無量光明名曰梵天王此梵天王心生八子八子生天地人民也

今案稱八子者天八下靈神天三下靈神天合靈

神天八百日靈神天八十萬魂神已上五種者五大魂已下三代有父子之道

高皇產靈神神皇產靈神津速產靈神八柱也

神皇系圖曰

都八柱神者天御中主神寶座之內獨化神也明百億須彌而億日月百億四天下而爲天地人民化生元祖者也云々以革網曰天御中主之條滄然者也

社家

豐受皇太神御鎮座本紀曰天地初發之時大海之中有一物浮形如葦牙其中神人化生名號天御中主神故號豐葦原中國亦因以曰豐受皇太神也與天照

大日靈尊舉此以八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍三種之神財而授賜皇孫爲天璽視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡寶祚之隆當與天壤無窮宣焉

實基御靈形文圖曰天地開闢基在大光明其中有精氣名曰神亦名心爾時爲萬物應化神假名號廣大慈悲大御神也掛畏以天津神策用抱一而天地與陰陽同節同和合敬合愛顯五常文圖悟八子給修應化身照神道可也

釋家

大和葛寶山記行基菩薩奉詔撰

蓋聞天地成意水氣變而爲天地十方風至相對相觸能持大水水上神聖化生有千頭二千手足一名常住慈悲神王爲革網是人神齊中出千葉金色妙寶蓮華其光大明如萬日俱照華中有入神結跏趺坐此人神復有無量光明名曰梵天王此梵天王心生八子八子生天地人民也此名曰天神亦稱天帝之祖神也

亦曰夫水則爲道源流萬物父母故長養森羅萬象當知天地開闢嘗水變爲天地以降高天海原在獨化靈

易序卦曰有天地然後有萬物有萬物然後有男女有男女然後有夫婦有夫婦然後有父子有父子然後有君臣

莊子曰不_レ明_二於道_一者悲夫何謂_レ道有_二天道_一有_二人道_一無爲而尊者天道也有爲而累者人道也主者天道也臣者人道也天道之與_二人道_一也相去遠矣不_レ可_レ不_レ察也又曰萬物各復_二其根_一各復_二其根_一而不_レ知_二復_一耳_レ乃_レ真_レ渾々沌々終_レ身不_レ離_二渾沌_一無知任_二其自復_一乃_レ又曰純素之道唯神是守守而勿_レ失與_レ神爲_レ一_レ常以_二純素_一守_二至寂_一一之精通合_二于天倫_一精者物之真者也野語有_レ之曰衆人重_レ利廉士重_レ名賢士尚_レ志聖人貴_レ精故素也者謂_二其無_レ所_一與_レ難_一也純也者謂_二其不_レ顧_二其神_一也能體_二純素_一謂_二之真人_一又曰古之人在_二混苞之中_一與_二壹世_一而得_二澹漠_一爲_レ當_二是時_一也陰陽和靜鬼神不_レ擾四時得_レ節萬物不_レ傷群生不_レ夭人雖_レ有_レ知無_レ所_レ用_レ之_二然_一而已此之謂_二至一_一

本朝

官家

府祕神皇實錄曰謂太易者虛無也因_レ動爲_二有之初_一故曰_二太初_一有_レ氣爲_二形之始_一故曰_二太始_一氣形相分生_二天地人_一也

先代舊事本紀曰古者元氣渾沌天地未_レ剖猶_二雞卵子溟滓含_一牙其後清氣漸登薄靡爲_レ天濁氣重_レ沉淹滯爲_レ地所謂_二洲壤浮漂開闢判割是也_一譬猶_二游魚之浮_一水上_一于_レ時天先成而地後定

日本書紀曰古天地未_レ剖陰陽不_レ分渾沌如_二鷄子_一溟滓而含_レ牙及_レ其清陽者薄靡而爲_レ天重濁者淹滯而爲_レ地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而地後定然後神聖生_二其中_一焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬猶_二游魚之浮_一水上_一也

亦曰古國稚地稚之時譬猶_二浮膏_一而漂蕩

亦曰天地未_レ生之時譬猶_二海上浮雲無_レ所_一根係_一

國史者同_二于日本書紀_一仍不_レ注_レ之

神皇系圖曰古天地未_レ割陰陽不_レ分渾沌如_二雞子_一溟滓而含_レ牙及_レ清陽者薄靡而爲_レ天重濁者淹滯而爲_レ地後定_二天地_一

天地麗氣府錄曰蓋聞壤劫後過_二廿空劫_一已一切有情業增上_レ力故空中漸有_二微細風_一是世間將_レ成前相也是風漸增成_二世界_一最初第三禪器世界成次第第二禪及初禪六欲天四大洲次第皆成也凡成劫之時雖_レ無_レ有_二一有情_一第四禪天人壽業盡故從_レ彼沒已生_二第三禪_一如

生五始於中央土又云天始生一者因一而生天非
 生一故云一生二生三三萬物地生二者亦
 因二而生地因三生人因四生時五行皆由一而
 生數至於五土最在後得五而生五行也五行同出
 而異時者出離其親有所配偶譬如人生亦同元
 氣而生各出一家配爲夫妻化生子息故五行皆
 相須而成也五行同胎而異居有前後耳夫五行皆資
 陰陽氣而生故云濡氣生水溫氣生火強氣生木剛氣
 生金和氣生土故知五行同時而起託義相生傳曰五行
 並起各以名別然五行既以名別而更互用事

元命苞曰水之爲言準也陰化淖流旋潛行也故立字兩
 人交一以中出者爲水一者數之始兩人譬男女陰陽交
 以起一也水者五行始焉元氣之湊液也

上繫辭曰神無方而易無體一陰一陽之謂道繼之者
 善也成之者性也者見之謂之仁智者見之謂之
 之智百姓日用而不知也故君子之道鮮矣

注曰韓曰方體者皆係於器一者神則陰陽不測易則唯
 變所適不可以一一方一體明也謝曰言神道之
 不係於一方不滯於陰陽也韓曰道者何无之稱也
 無不通也无不由也況之曰道寂然無體不可爲

象必有之用極而无之功顯故至乎神無方而易無體
 而道可見矣故窮變以盡神因神以明道也陰陽雖
 殊无一以待之在陰爲無陰陰以之生在陽爲無
 陽々以之成故曰一陰一陽也王曰一陰一陽者或謂之
 陰或謂之陽不可定名也夫爲陰則不能爲陽
 爲柔則不能爲剛唯不陰不陽者然後爲陰陽之宗
 不柔不剛然後爲剛柔之主是故上言神無方易無體
 下言一陰一陽之謂道更互相明無方無體非陰非陽
 故謂之神故謂之道也繼猶繫也性者自然之所體
 也能繼神道成變化者是體善與性者也神道無體
 不可爲名故仁智各是見其所感通而名之焉而
 不知其所由故曰仁者見之謂之仁智者見之謂之
 之知百姓日用而不知也然則無者有之宗少者多之元
 故體無者苞衆有者也執一者通万事者也故曰君子
 之道尠矣也少猶可以濟多而況於無乎此寄少以
 明道神者也謝曰斯言易之爲道無幽而不備也仁
 者得仁智者得智百姓日用而不知其由也故知其
 由者得不鮮乎韓曰君子體道以爲用者也仁智則
 滯於所見百姓則日用而不知體斯道者不亦鮮乎
 故常无欲以觀其妙始可以語至而言極者也

物孳繁然復萬物生成也皆由陰陽二氣鼓舞陶鑄互相交感孤陽不能獨生單陰不能獨成必須配合一

三五歷紀曰未有天地之時混沌狀如雞子溟滓始牙濛鴻滋萌

又曰清輕者上爲天濁重者下爲地冲和氣者爲人故天地含精萬物化生

老子道經曰無名天地之始無名謂道無形故不可名也始者道吐氣布化出於虛無爲天地之本有名萬物之母有名謂天地天地有形位有陰陽有柔剛始也又曰玄牝之門是謂天地之根是其名也萬物母者天地含氣生萬物長大成也乃天地之元氣所從往來也

老子述義曰有太易有太初有太始有太素氣形質具曰渾淪清爲天濁爲地和爲人天地含精萬物化生又曰易緯及列子曰太易者未見氣太初者氣之始太始者形之始太素者質之始氣形質具而未相離曰渾淪渾淪者言萬物相渾淪而未相離也言虛則精氣氣則有形々則有質者也

又曰視之不見聽之不聞脩之不得此言氣形實具至妙至微者也

老子德經曰道生一道始所生者一也一生二一生陰二生陽也二生三二生陽

生和清濁三氣三生萬物天地人共生分爲天地人也

又曰昔之得一者昔在也一元氣也道清明地得一以寧言地得一故能神明也天得一以清言天得一故能垂象也地得一以寧言地得一故能安靜不動搖也神得一以靈言神得一故能變化無形也

述義曰經曰道生一道則經太易也一即渾淪也一生一陰陽也二生三天地人也然後三生萬物

又曰萬物本於三三本於二二本於一一生於道故經曰天下之物生於有有天下也又曰有生於無無道也一在有無之間對道爲有對天地爲無即德也惟道德之寥廓人物之有待形雖生滅神固常在故列子等說混沌未離即稱萬物已備則萬物之性照於混沌之前不可萬物之生始於開闢之後理必然矣又曰一形道之應道爲一之本一矣

淮南子曰天地之襲精爲陰陽陰陽之轉精爲四時四時散精爲萬物積陰之寒氣反者爲水積陽之熱氣反者爲火水雖陰物陽在其內故水體內明火雖陽物陰在其內故火體內暗木爲少陽其體亦含陰氣故內空虛外有花葉敷榮可觀金爲少陰其體剛利敬性在外內亦光明可照土苞四德故其體能兼虛實五行大義曰天生一始於北方水地生二始於南方火人生三始於東方木時生四始於西方金五行

洛書



四正

東南
方方
北西
方方
卦音風節相配圖



八卦

八音

八風

八節

東方	震	竹	明庶	春分
東南	巽	木	清明	立夏
南方	離	絲	景風	夏至
西南	坤	土	涼風	立秋
西方	兌	金	閭闔	秋分
西北	乾	石	不周	立冬
北方	坎	革	廣莫	冬至
東北	艮	匏	條	立春

四維

東南
西北
西南
西北
左傳隱公五年疏八節之風亦與八卦八音相配

五行大義曰凡萬物之始莫不始於无而復有是故易有「太極」是生「兩儀」兩儀生「四象」四象生之所生也有



列子曰清輕者上爲天濁重者下爲地仲和者爲人謂之三才一易曰有天地然後有萬物一有萬物然後有男女一有男女然後有夫婦一有夫婦然後有父子一有父子然後有君臣一有君臣

臣然後有上下一律曆志曰太極元氣函三爲一孟康曰元氣始起地人混合爲一故子數獨極中也元始也

周易曰闔戶謂之坤韓曰坤道闔戶謂之乾韓曰乾道壹闔壹闢謂之變王曰乾坤交合往來不窮謂之道見

乃謂之象王曰謂在天成象也萬物運動於下而懸象見形

乃謂之器王曰在地成形者爲器用也制而用之

謂之法王曰取天之象一昏明之理取地之宜利用出入民咸

用之謂之神王曰物莫不由無以通神也者萬物之所由故曰

往來無窮故神道之功通焉能爲是故易有太極王曰太極是生

兩儀王曰兩儀天地也韓曰有夫必始無故太極生兩儀也太極

生四象王曰四象四象生八卦八卦定吉凶韓曰

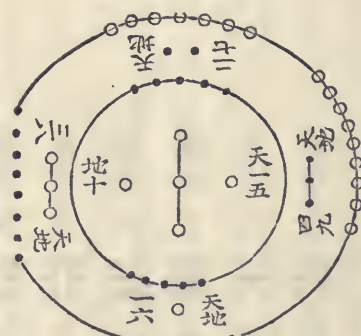
既立則吉凶王曰物有動用而吉凶先生吉凶既生而

可定也是非乃定是然後聖人立道教以定大

業也謝曰太極易之極也論兩儀則入於窮矣是故謂之太極四象四時之象也徒也從二儀至乎大業則天下之能事畢矣萬物之情見矣老子經曰報三大象一天下往報守也象道也

河圖

易大傳曰河出圖洛出書聖人則之孔安國云河圖者伏羲王天下龍馬出河遂則其文以畫八卦洛書者禹治水時神龜負文而列於背禹遂因而第之以成九類關子明云河圖之文七前六後八左九右洛書之文九前一後三左七右四前左二前右八後左六右後御子曰圓者星也歷紀之數其肇



於此乎方者土也畫州井池之法其倣於此乎蓋圓者河圖之數方者洛書之文易繫辭曰天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十天數五地數五二位相得而各有合天數二十有五地數三十凡天地之數五十有五此所以成變化而行鬼神也注曰此夫子所以發明河圖之數至於洛書雖夫子之所未言焉

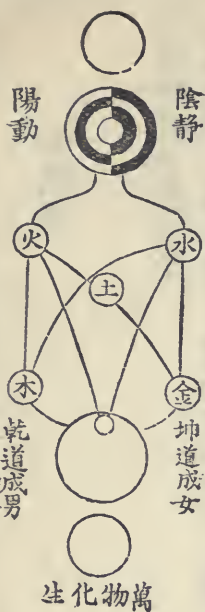
類聚神祇本源卷一

天地開闢篇

漢家

古今帝王年代曆曰昔者天地未形謂之太易元氣始萌謂之太初形氣始端謂之太始形變有質謂之太素質形已具謂之太極五氣運通而天地之靈清以陽發升而爲天濁以陰凝降而爲地地形別謂之二儀人生其間謂之三才

新端分門纂圖博聞錄曰



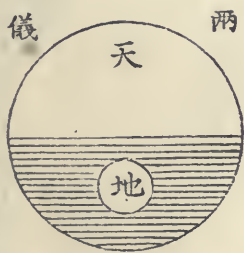
周子通書曰○極而太極太極動而生陽動極而靜々而

生陰靜復動一動一靜互爲其根二分陰分陽兩儀立

焉陽變陰合而生水火木金土五氣順布四時行焉五行一陰陽也陰陽一太極也太極本無極也五行之生各一其性无極之真二五精妙合而凝乾道成男坤道成女二氣交感化生萬物萬物生々變化無窮焉

老子道經曰有物混成先天地生謂道无有形混沌而成寂兮寥兮獨立而不改寂者無音聲寥者空無形獨立周而不殆道通天地无所不入在陽可爲天下母始不焦訖陰不腐无不貫穿不危道育養萬物精氣以名見萬物皆從道之所生故字之曰道也吾不知其名字之曰道不知其名強曰大者高而无上難而故曰大

博聞錄曰



係辭曰有太極一是生兩儀孔穎達疏云太極謂天地未分之前元氣混而爲一氣既分之後陽氣居上爲天陰氣居下爲地居上者輕清居下者重濁如止水於是天地位焉乃謂兩儀

續々群書類從卷一

二年初陽中旬陪瑞籬之神館述管見之畜懷而已

神祇部

類聚神祇本源並序

天照豐受皇太神宮禰宜正四位上度會神主家行撰

神祇之起邈哉遠矣杳冥恍惚混沌未形堪然凝寂陰陽莫測出於物外超於意表煒々煒々虛徹靈通彼天之狹霧國之狹霧卽是本地風光也天御中主國常立尊寧非大元至妙哉至如下以一心分三界以二質配七代化陰化陽風雲之感不窮爲魂爲魄變通之理無盡者歟爰澆薄之世魯鈍之士披文不通義着相不辨性僅趁降迹之一轍偏暗威音之玄妙謬起邪見還成狐疑若明乎天真靈知一本乎海滴卽定於神道盍透得仍爲備後昆之規矩略抽本書之樞要名曰類聚神祇本源矣抑歷代之官文傳來之社記意言同者採一而捨餘義趣異者相並以共勒此外古典不廣尋新編有遺漏後之見者羨加裨補于時元應

續々群書類從第一神祇部目錄終

宇佐八幡宮緣起	一名字佐大神宮緣起	七二三
三社託宣略抄		七三三
陽復記		七四七
土德編		七七一
未生土之傳		七七三
神學承傳記		七七七
土津靈神正學記		七八五
會津神社之訓詞		七八七
神道生死之說		七八九
病後手習		七九三
八重垣大明神由祝詞 同碑銘		八〇三
神道辨草		八〇七

二十二社略記……………四三五

和歌兩神記……………四五五

皇太神宮殿舍考證……………四五九

豐受皇太神宮殿舍考證……………四八一

外宮神領目錄……………四九九

內宮氏經日次記……………五一

神宮祕傳問答……………五七一

賀茂注進雜記……………五八五

元祿七年賀茂祭祀一名賀茂祭再興記……………六六一

石上神宮御事抄……………六七三

月能桂……………六七七

東照宮大權現緣起……………六九一

出雲大社記……………七〇五

續々群書類從第一神祇部

目錄

類聚神祇本源	一
豐葦原神風和記	九七
舊事本紀玄義	一二七
瑚璉集	一六九
神祇靈應記	一九九
神皇系圖	二〇七
神皇實錄	二一一
天口事書	二一九
本朝諸社一覽	二二三
神社便覽	四一一

るべく、土津靈神正學記と會津神社之訓詞とは土津靈神即ち保科正之の神學に志深かりしを知るに足べく、病後手習・八重垣大明神由祝詞・同碑銘・神道辨草は跡部光海・伴部安崇等の學識の一斑と閱歷の大要とを知るに足るを以て何れも之を收むることとせり。

一本書は其大部寫本なるを以て、誤字脫字等多く、讀下し難き所少からずと雖、是を校正するに當り務めて原形保存に意を用ひ、其一見誤寫に出づる者なること判然たるものゝ外は漫に改めず、或は横傍を施して疑を存し、或は傍注若しくは割注によりて今按を加へ置くことゝせり。

二本書は文學博士井上賴圀及び佐伯有義兩氏の監修に成り、特に後者は親しく材料選擇の勞を執られたり。茲に一言其勞を謝す。

文は今括弧を以て區別せり。又賀茂注進雜記は後に至り黒川氏所藏の本を得て是を對校するに所々頗る文に異同あり、又彼に詳しくて是に略せる點を發見せるも、時既に發行の機に迫り爲めに悉く是を注する能はず。然れども猶是によりて所々事實誤謬の廉を發見し、是を訂正するを得たり。

一陽復記は流布本を以て底本とす。この書は度會延佳の著にて、以てその本領を窺ふに足る。土德編・未生土之傳・神學承傳記・土津靈神正學記・會津神社之訓詞・病後手習・八重垣大明神由祝詞・同碑銘・神道辨草は何れも佐伯氏所藏の本を以て底本とす。所謂俗神道家の著書は頗る多く、現に佐伯氏所藏に係る者のみにても百部以上に上れる由なるも、悉く之を收載し難きを以て本書には僅にその一二を收むることゝなしぬ。土德編と未生土之傳とは吉川惟足學說の一斑を、神學承傳記はその閱歷の大要を知るに足

一 神祇靈應記はもと鈴木眞年氏藏本にて今佐伯氏の所藏に歸せる古寫本を以て底本とし、本朝諸社一覽・神社便覽は流布本を以て底本とす。この二書は板本なれども出版以後歲月を経ること久しく、世間に流布の書極めて稀なるを以て、特に之を收載す。十二社略記は黒川氏藏本を以て底本とす。

一 皇太神宮殿舎考證・豐受皇太神宮殿舎考證・外宮神領目錄・石上神宮御事抄は黒川氏藏本を以て、賀茂注進雜記・賀茂祭再興記は、内閣の藏本を以て、月能桂は平田家藏本を以て、氏經日次記・神宮祕傳問答・東照大權現緣起・出雲大社記は佐伯氏の藏本を以て底本とし、宇佐八幡宮緣起は黒川氏本を以て、東照宮大權現緣起は故内藤聡叟氏藏本を以て、出雲大社記は佐伯氏所藏の一本を以て校正す。右のうち外宮神領目錄は元所々闕文ありしを伴信友翁是を外宮神領給人引付により對校して補ひたるものにて、其補

ために制限せられて省かれたりと思考せらるゝものは勉めて之を収載し、以てその缺點を補ふことを期せり。

一類聚神祇本源及び神風和記は文學博士井上頼圀氏の藏本を以て底本とし、圖書寮本・黒川眞道氏本を以て校正し、舊事本紀・玄義は佐伯氏の藏本を以て底本とし、井上氏の藏本を以て校正す。瑚璉集は井上氏の藏本なるが、類本なきを以て、引用の文句は各其原據の書に溯りて校正せり。以下類本なきもの皆同じ。

一神皇系圖・神皇實錄・天口事書の三部は疑はしき書なれど、御鎮座傳記・御鎮座次第記・御鎮座本紀・倭姬命世記・寶基本紀の五部書は既に續群書類從に收めたるにより、その例に倣ひてこゝに收む。この三書を合せて神宮八部の書と稱すればなり。神皇系圖は眞福寺本を以て底本とし、井上氏校本を以て校正す。神皇實錄・天口事書は佐伯氏藏本を以て底本とし、井上氏本を以て校正す。

例言

一神祇の書群書類從正編に收めたるもの七十種、續編に收めたるもの百六十六種に及べり。本編に於ては其の遺れるを拾ひ漏れたるを補ひ、左の三十二種を收めて此の部を構成す。抑我が國は古來神國と稱し神祇の事蹟極めて多く隨ひて之に關する著書頗る多しと雖も、本編出版に際し各部の權衡上紙數に制限あるを以て、正續の二編と對照比較して神祇及び神社の全體に亘るもの十一部、伊勢以下諸國の大社に關するもの十三部、其の他度會延佳吉川惟足等神道家の著書十部を收むることゝなしぬ。正編及び續編に於ては主として三卷以下のものを收め、四卷以上に渉るものは必要缺ぐべからざるものと雖も悉く之を除けるが如し。故に本編に於ては、正編及び續編に收むべくして卷數の

國朝三才學堂具

圖書肝骨會

清江先生集

清江先生集卷之五
國朝三才學堂具
圖書肝骨會
清江先生集卷之五
國朝三才學堂具
圖書肝骨會

一
國朝三才學堂具
圖書肝骨會
清江先生集卷之五
國朝三才學堂具
圖書肝骨會

一正續編は一部三卷以下の書に限り、其以上に渉る者は概ね之を採らざりき、本編は必しも此例に拘泥せず、ほゞ十卷内外に及ぼせる者あり。

一本編每部門の編輯選擇は各専門の大家に依託せり。故に其類從の範圍時代等に就ては各部門或は小異なきを保せず。然りと雖其大綱は諸門を通じて一貫し、二十の大冊首尾連絡して案るゝ所なきを信ず。

明治三十九年五月

國書刊行會

詩文

筆

歌文

和連物日

歌歌語記

產業

雜

絃

雜

管蹴鷹遊飲

絃鞠戲食

雜

宗

教

釋

教

教

育

雜

消

息

地

理

雜

紀

行

記

錄

雜

帝

王

武

家

裝

束

法

制

公

事

律

令

官

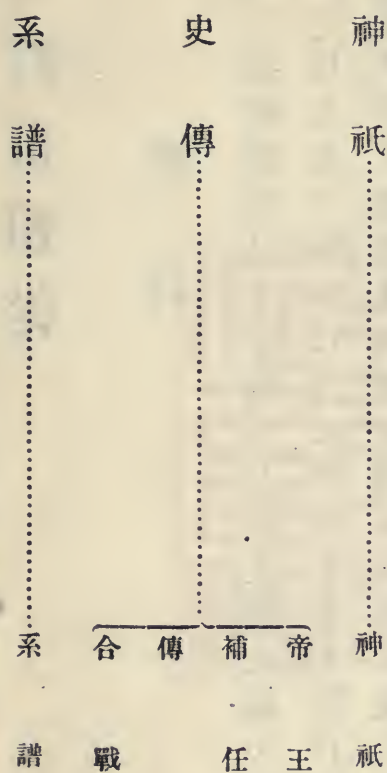
職

得ざるもの又甚多し。そは將に三續四續に俟ちて之を補はんとす。

一本編の類從部門は正續のそれと頗異同あり。是れ其採集の書に古代近世の變遷あると、今日文運の需要如何に省慮して改補を加へたる爲めなり。今異同を對照すること左の如し。

新部門、十二

舊部門、二十五



續々群書類從

緒言

一本編は塙檢校保己一の輯めたる正續二編の後を承けて其遺漏を拾ひ、且其未だ取るに及ばざりし近世(江戸幕府時代)の典冊を收む。されば正續既收の書は固より此に採らずといへども、彼に收めたるは零本にして後に完本の世に出でたる類は、重複を避けずして收載せるもあり。

一本編の編輯に就ては、前輯二篇の外なほ正續史籍集覽・存採叢書・帝國文庫等に入りて刊行を経たる者も、概ね之を避けたリ。

一本編は本會第一期の刊行に於て、合二十冊約二萬頁の目算を以て之を集めたり。しかも古今の奇籍寶典紙數の制限の爲に收め



AC
145
G85 7
v. 1



續六群書類從
第一



AC
145
G857
v.1

gunsho ruiju

9

Es

AC

145

G857

v.1-16

SUBSTITUTE 'R' CARD

E.A.S.

es

